八千代市北海道遺跡

—萱田地区埋蔵文化財調査報告書II—

1985

住宅・都市整備公団　首都圏都市開発本部
財団法人　千葉県文化財センター

八千代市北海道遺跡

—萱田地区埋蔵文化財調査報告書II—

本　文　編

1985

住宅・都市整備公団　首都圏都市開発本部
財団法人　千葉県文化財センター

序　　文

八千代市内の河川は、新川をはじめ大・小の河川が支谷を形成して市の北部に位置する印旛沼に注いでおり、河川流域は恵まれた自然環境をなし、旧石器時代をはじめ歴史時代に至る多くの遺跡が所在しています。

千葉県の北西部に位置するこの地域は、縦横に通過する鉄道や国道などの交通網の整備が進んでおり、首都30 km圏に位置することなどから工業団地や住宅団地の建設が近年盛んに行われています。

住宅・都市整備公団では、このような首都圏における急激な人口増加に対応する施策の一環として、萱田地区において約100ヘクタールに及ぶ土地区画整理事業を計画しました。

このため、千葉県教育委員会では、用地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、住宅・都市整備公団をはじめ関係諸機関と協議を重ねた結果、できるだけ公園、緑地に取り込んで現状保存を図る一方、現状保持が困難な遺跡については十分な記録保存の措置を講じることになりました。記録保存に当たっては、財団法人千葉県文化財センターが調査機関の指定を受け、昭和52年度から調査を実施しているところです。

このたび、昭和54年度から55年度にかけて調査を実施した「北海道遺跡」の発掘成果を報告書として刊行する運びとなりました。

本書には、旧石器時代から歴史時代に至るまでの遺構、遺物を多数収録していますが、中でも平安時代の坏形土器に人名や人面と紀年銘が墨書された土器の出土は、古代における呪術を解明するうえで貴重な資料を提供することになると言えましょう。

本書が学術資料としてはもとより教育資料として広く活用されるとともに、文化財保護思想の普及に貢献できればと、願ってやみません。

終りに当たり、発掘調査から報告書刊行までいろいろご指導をいただいた千葉県教育委員会をはじめ、住宅・都市整備公団、地元関係諸機関各位のご協力にお礼申しあげるとともに、調査に協力された調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

昭和60年3月

財団法人　千葉県文化財センター

理事長　　今　井　　正

凡　　例

1．本書は、八千代都市計画事業萱田特定土地区画整理事業の実施に伴い事前調査した八千代市北海道遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、昭和54年6月5日から昭和55年3月5日の間において二次にわたり実施した。

3．発掘調査の実施は、住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部の依頼により、文化庁および千葉県教育委員会の指導を受けて、財団法人千葉県文化財センターが行った。

4．北海道遺跡の遺跡コードは、行政管理庁指定統計コード八千代市（221)、千葉県文化財センター遺跡コード（002）を使用し、221—002とした。

5．整理作業は、昭和55年4月1日から昭和58年3月31日の間において三次にわたり実施した。

6．本書は、昭和59年刊行の『八千代市権現後遺跡』に続く萱田地区埋蔵文化財調査報告書の第2冊にあたるものである。

7．本書の作成および執筆は、調査部長白石竹雄、部長補佐根本弘の助言のもとに、序章第1・3節1・3項、第II部、第III部、第IV部、終章第2～5節を阪田正一、序章第2・3節2・3項、第I部、終章第1節を橋本勝雄、第II部第2章第2節、第III部第2章第1～7節、第3章第2～4節、第IV部第2章第2～9節を藤岡孝司がそれぞれ分担し、阪田が全体をまとめた。

8．本書に使用した空中写真は、森昭写真事務所に委託したものである（図版1、2)。

9．墨書土器の判読については、国立歴史民俗博物館平川南氏にご教示をいただいた。

10．発掘調査から報告書刊行にいたるまでご指導いただいた千葉県教育委員会をはじめ、住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部、同千葉北部開発事務所、八千代市教育委員会、地元関係諸機関各位にご協力をいただいた。

本 文 目 次

序　文

凡　例

序　章…… i

第１節　発掘調査に至る経過…… i

第２節　遺跡の位置と環境…… ii

第３節　調査の経過…… v

第Ⅰ部　旧石器時代…… 1

第１章　層位と文化層…… 3

第１節　自然層…… 3

第２節　文化層…… 7

第２章　遺構と出土遺物…… 7

第１節　はじめに…… 7

第２節　第１文化層…… 9

第３節　第２文化層……10

第４節　第３文化層……136

第５節　表面採集遺物……228

第３章　まとめ……230

第１節　石器群の変遷……230

第２節　ブロックの性格……236

第３節　礫群……238

第４節　搬入石材……239

第Ⅱ部　弥生時代……241

第１章　弥生時代の概観……243

第２章　遺構と出土遺物……243

第１節　はじめに……243

第２節　遺構と遺物……244

第III部　古墳時代……245
第１章　古墳時代の概観……247
第２章　中期の遺構と出土遺物……247
第１節　はじめに……247
第２節　第Ⅰ群の遺構と遺物……248
第３節　第II群の遺構と遺物……249
第４節　第III群の遺構と遺物……253
第５節　第IV群の遺構と遺物……330
第６節　第Ⅴ群の遺構と遺物……340
第７節　第VI群の遺構と遺物……346
第３章　後期の遺構と出土遺物……353
第１節　はじめに……353
第２節　第Ⅰ群の遺構と遺物……354
第３節　第II群の遺構と遺物……373
第４節　第III群の遺構と遺物……377
第４章　まとめ……381
第１節　古墳時代中期の様相……381
第２節　古墳時代後期の様相……385

第IV部　歴史時代……389
第１章　歴史時代の概観……391
第２章　遺構と出土遺物……391
第１節　はじめに……391
第２節　第Ⅰ群の遺構と遺物……392
第３節　第II群の遺構と遺物……406
第４節　第III群の遺構と遺物……409
第５節　第IV群の遺構と遺物……557
第６節　第Ⅴ群の遺構と遺物……607
第７節　第VI群の遺構と遺物……622
第８節　第VII群の遺構と遺物……625
第９節　第VIII群の遺構と遺物……670
第10節　その他の遺構と遺物……687

第3章　まとめ……693
第1節　遺構について……693
第2節　遺物について……700

終　章
第1節　旧石器時代の総括……i
第2節　弥生時代の総括……i
第3節　古墳時代の総括……ii
第4節　歴史時代の総括……iii
第5節　結言……iv

挿 図 目 次

図 1　北海道遺跡の位置と周辺地形図 …… iii
図 2　昭和53年度確認調査状況図 …… v
図 3　昭和54・55年度本調査範囲 …… vi
図 4　小グリッド配置図 …… xi
図 5　遺跡土層断面図(1) …… 4
図 6　遺跡土層断面図(2) …… 5
図 7　遺跡土層断面図(3) …… 6
図 8　ブロック配置図 …… 8
図 9　第 1 文化層出土遺物実測図 …… 9
図10　第 1 ブロック遺物出土状況図 …… 10
図11　第 1 ブロック出土遺物実測図(1) …… 11
図12　第 1 ブロック出土遺物実測図(2) …… 12
図13　第 2 ブロック遺物出土状況図 …… 14
図14　第 2 ブロック出土遺物実測図 …… 15
図15　第 3 ブロック遺物出土状況図 …… 18
図16　第 3 ブロック出土遺物実測図(1) …… 19
図17　第 3 ブロック出土遺物実測図(2) …… 20
図18　第 4 ブロック遺物出土状況図 …… 22
図19　第 4 ブロック出土遺物実測図 …… 23
図20　第 5 ブロック遺物出土状況図 …… 24
図21　第 5 ブロック出土遺物実測図 …… 26
図22　第 6 ブロック遺物出土状況図 …… 27
図23　第 6 ブロック出土遺物実測図 …… 28
図24　第 7 ブロック遺物出土状況図 …… 29
図25　第 7 ブロック出土遺物実測図 …… 30
図26　第 8 ブロック遺物出土状況図 …… 31
図27　第 8 ブロック出土遺物実測図 …… 32
図28　第 9 ブロック遺物出土状況図 …… 33
図29　第10ブロック遺物出土状況図 …… 35
図30　第10ブロック出土遺物実測図 …… 36

図31　第11ブロック遺物出土状況図 ……38
図32　第11ブロック出土遺物実測図(1) ……39
図33　第11ブロック出土遺物実測図(2) ……40
図34　第11ブロック出土遺物実測図(3) ……45
図35　第12ブロック遺物出土状況図 ……45
図36　第12ブロック出土遺物実測図(1) ……46
図37　第12ブロック出土遺物実測図(2) ……47
図38　第12ブロック出土遺物実測図(3) ……48
図39　第13ブロック遺物出土状況図 ……49
図40　第13ブロック出土遺物実測図(1) ……52
図41　第13ブロック出土遺物実測図(2) ……53
図42　第13ブロック出土遺物実測図(3) ……54
図43　第13ブロック出土遺物実測図(4) ……56
図44　第14ブロック遺物出土状況図 ……57
図45　第14ブロック出土遺物実測図(1) ……58
図46　第14ブロック出土遺物実測図(2) ……59
図47　第15ブロック遺物出土状況図 ……60
図48　第15ブロック出土遺物実測図 ……61
図49　第16ブロック遺物出土状況図 ……63
図50　第16ブロック出土遺物実測図 ……64
図51　第17ブロック遺物出土状況図 ……65
図52　第18ブロック遺物出土状況図 ……68
図53　第18ブロック出土遺物実測図(1) ……69
図54　第18ブロック出土遺物実測図(2) ……70
図55　第19ブロック遺物出土状況図 ……73
図56　第19ブロック出土遺物実測図(1) ……75
図57　第19ブロック出土遺物実測図(2) ……76
図58　第20ブロック遺物出土状況図 ……77
図59　第20ブロック出土遺物実測図 ……80
図60　第21ブロック遺物出土状況図 ……83
図61　第21ブロック出土遺物実測図 ……85
図62　第22ブロック遺物出土状況図 ……87
図63　第22ブロック出土遺物実測図 ……88

図64　第23ブロック遺物出土状況図 ……89
図65　第23ブロック出土遺物実測図 ……91
図66　第24ブロック遺物出土状況図 ……93
図67　第24ブロック出土遺物実測図 ……94
図68　第25ブロック遺物出土状況図 ……95
図69　第25ブロック出土遺物実測図(1) ……96
図70　第25ブロック出土遺物実測図(2) ……97
図71　第25ブロック出土遺物実測図(3) ……98
図72　第25ブロック出土遺物実測図(4) ……99
図73　第26ブロック遺物出土状況図 ……101
図74　第27ブロック遺物出土状況図 ……104
図75　第27ブロック出土遺物実測図 ……105
図76　第28ブロック遺物出土状況図 ……106
図77　第28ブロック出土遺物実測図 ……107
図78　第29ブロック遺物出土状況図 ……109
図79　第29ブロック出土遺物実測図 ……110
図80　第38ブロック遺物出土状況図 ……111
図81　第38ブロック出土遺物実測図 ……112
図82　第39ブロック遺物出土状況図 ……114
図83　第39ブロック出土遺物実測図 ……115
図84　第43ブロック遺物出土状況図 ……117
図85　第43ブロック出土遺物実測図 ……119
図86　第45ブロック遺物出土状況図 ……121
図87　第45ブロック出土遺物実測図 ……122
図88　第51ブロック遺物出土状況図 ……123
図89　第51ブロック出土遺物実測図 ……124
図90　第55ブロック遺物出土状況図 ……126
図91　第55ブロック出土遺物実測図 ……127
図92　第62ブロック遺物出土状況図 ……129
図93　第62ブロック出土遺物実測図 ……131
図94　第２文化層ブロック外出土遺物実測図(1) ……132
図95　第２文化層ブロック外出土遺物実測図(2) ……133
図96　第２文化層ブロック外出土遺物実測図(3) ……134

図97　第30ブロック遺物出土状況図 ……136
図98　第30ブロック出土遺物実測図 ……137
図99　第31、32ブロック遺物出土状況図 ……139
図100　第31ブロック出土遺物実測図 ……141
図101　第32ブロック出土遺物実測図 ……144
図102　第33ブロック遺物出土状況図 ……145
図103　第33ブロック出土遺物実測図 ……147
図104　第34ブロック遺物出土状況図 ……148
図105　第34ブロック出土遺物実測図 ……149
図106　第35ブロック遺物出土状況図 ……150
図107　第35ブロック出土遺物実測図 ……151
図108　第36ブロック遺物出土状況図 ……153
図109　第36ブロック出土遺物実測図 ……156
図110　第37ブロック遺物出土状況図 ……158
図111　第37ブロック出土遺物実測図 ……159
図112　第40、41ブロック遺物出土状況図 ……161
図113　第40ブロック出土遺物実測図(1) ……163
図114　第40ブロック出土遺物実測図(2) ……164
図115　第41ブロック出土遺物実測図(1) ……166
図116　第41ブロック出土遺物実測図(2) ……167
図117　第42ブロック遺物出土状況図 ……169
図118　第42ブロック出土遺物実測図(1) ……171
図119　第42ブロック出土遺物実測図(2) ……172
図120　第44ブロック遺物出土状況図 ……175
図121　第44ブロック出土遺物実測図(1) ……177
図122　第44ブロック出土遺物実測図(2) ……178
図123　第46ブロック遺物出土状況図 ……180
図124　第46ブロック出土遺物実測図 ……181
図125　第47、48ブロック遺物出土状況図 ……183
図126　第47ブロック出土遺物実測図(1) ……185
図127　第47ブロック出土遺物実測図(2) ……186
図128　第47ブロック出土遺物実測図(3) ……186
図129　第48ブロック出土遺物実測図 ……188

図130　第49ブロック遺物出土状況図 ……190
図131　第49ブロック出土遺物実測図 ……191
図132　第50ブロック遺物出土状況図 ……193
図133　第50ブロック出土遺物実測図 ……194
図134　第52ブロック遺物出土状況図 ……196
図135　第52ブロック出土遺物実測図(1) ……196
図136　第52ブロック出土遺物実測図(2) ……198
図137　第53ブロック遺物出土状況図 ……199
図138　第53ブロック出土遺物実測図 ……203
図139　第54ブロック遺物出土状況図 ……205
図140　第54ブロック出土遺物実測図(1) ……207
図141　第54ブロック出土遺物実測図(2) ……208
図142　第56ブロック遺物出土状況図 ……210
図143　第56ブロック出土遺物実測図 ……210
図144　第57ブロック遺物出土状況図 ……212
図145　第57ブロック出土遺物実測図 ……213
図146　第58ブロック遺物出土状況図 ……214
図147　第58ブロック出土遺物実測図 ……215
図148　第59ブロック遺物出土状況図 ……217
図149　第59ブロック出土遺物実測図 ……218
図150　第60ブロック遺物出土状況図 ……219
図151　第60ブロック出土遺物実測図 ……222
図152　第61ブロック遺物出土状況図 ……223
図153　第61ブロック出土遺物実測図 ……226
図154　表面採集遺物実測図 ……229
図155　北海道遺跡の旧石器時代石器群の変遷(1)　第Ⅰ期1 ……231
図156　北海道遺跡の旧石器時代石器群の変遷(2)　第Ⅰ期2 ……232
図157　北海道遺跡の旧石器時代石器群の変遷(3)　第Ⅱ期1 ……233
図158　北海道遺跡の旧石器時代石器群の変遷(4)　第Ⅱ期2 ……234
図159　北海道遺跡の旧石器時代石器群の変遷(5)　第Ⅱ期3、第Ⅲ期 ……235
図160　D049号遺構実測図……244
図161　D131号遺構実測図……249
図162　古墳時代中期第Ⅱ群遺構分布状況図 ……249

図163　D104号遺構実測図……250
図164　D104号遺構炉跡実測図……251
図165　D104号遺構出土遺物実測図……251
図166　D105号遺構実測図……252
図167　D105号遺構炉跡実測図……252
図168　D105号遺構出土遺物実測図……252
図169　古墳時代中期第III群遺構分布状況図 ……253
図170　D010号遺構実測図……254
図171　D010号遺構石製遺物平面分布模式図……255
図172　D010号遺構石製遺物層位別分布図(1)……256
図173　D010号遺構石製遺物層位別分布図(2)……257
図174　D010号遺構石製遺物層位別分布図(3)……258
図175　D010号遺構出土遺物実測図(1)……259
図176　D010号遺構出土遺物実測図(2)……260
図177　D011号遺構実測図……262
図178　D011号遺構炉跡実測図……262
図179　D011号遺構石製遺物平面分布模式図……263
図180　D011号遺構石製遺物層位別分布図(1)……264
図181　D011号遺構石製遺物層位別分布図(2)……265
図182　D011号遺構出土遺物実測図……266
図183　D011号遺構石製遺物層位別分布図(3)……267
図184　D012号遺構実測図……268
図185　D012号遺構炉跡実測図……268
図186　D012号遺構石製遺物層位別分布図(1)……269
図187　D012号遺構石製遺物層位別分布図(2)……270
図188　D012号遺構石製遺物層位別分布図(3)……271
図189　D012号遺構石製遺物層位別分布図(4)……272
図190　D012号遺構石製遺物平面分布模式図……272
図191　D012号遺構出土遺物実測図……273
図192　D013号遺構実測図……275
図193　D013号遺構炉跡実測図……275
図194　D013号遺構石製遺物平面分布模式図……276
図195　D013号遺構石製遺物層位別分布図(1)……277

図196　D013号遺構出土遺物実測図……278
図197　D013号遺構石製遺物層位別分布図(2)……279
図198　D014号遺構実測図……280
図199　D014号遺構炉跡実測図……280
図200　D014号遺構石製遺物平面分布模式図……281
図201　D014号遺構石製遺物層位別分布図(1)……282
図202　D014号遺構石製遺物層位別分布図(2)……283
図203　D014号遺構石製遺物層位別分布図(3)……284
図204　D014号遺構出土遺物実測図……285
図205　D016号遺構実測図……287
図206　D016号遺構炉跡実測図……288
図207　D016号遺構石製遺物平面分布模式図……288
図208　D016号遺構石製遺物層位別分布図(1)……289
図209　D016号遺構石製遺物層位別分布図(2)……290
図210　D016号遺構石製遺物層位別分布図(3)……291
図211　D016号遺構石製遺物層位別分布図(4)……292
図212　D016号遺構石製遺物層位別分布図(5)……293
図213　D016号遺構出土遺物実測図……294
図214　D022号遺構実測図……295
図215　D022号遺構石製遺物平面分布模式図……296
図216　D022号遺構石製遺物層位別分布図(1)……297
図217　D022号遺構石製遺物層位別分布図(2)……298
図218　D022号遺構石製遺物層位別分布図(3)……299
図219　D022号遺構石製遺物層位別分布図(4)……300
図220　D022号遺構石製遺物層位別分布図(5)……301
図221　D022号遺構出土遺物実測図……302
図222　D055号遺構実測図……304
図223　D055号遺構炉跡実測図……305
図224　D055号遺構出土遺物実測図(1)……305
図225　D055号遺構出土遺物実測図(2)……306
図226　D056号遺構実測図……307
図227　D056号遺構炉跡実測図……308
図228　D056号遺構出土遺物実測図……308

図229　D057号遺構実測図……309
図230　D057号遺構炉跡実測図……310
図231　D057号遺構出土遺物実測図……310
図232　D058号遺構実測図……311
図233　D058号遺構石製遺物平面分布模式図……312
図234　D058号遺構石製遺物層位別分布図(1)……313
図235　D058号遺構出土遺物実測図……314
図236　D058号遺構石製遺物層位別分布図(2)……315
図237　D059号遺構実測図……316
図238　D059遺構炉跡実測図……317
図239　D059号遺構石製遺物平面分布模式図……317
図240　D059号遺構石製遺物層位別分布図(1)……318
図241　D059号遺構石製遺物層位別分布図(2)……319
図242　D059号遺構石製遺物層位別分布図(3)……320
図243　D059号遺構石製遺物層位別分布図(4)……321
図244　D059号遺構出土遺物実測図……322
図245　D059号遺構石製遺物層位別分布図(5)……323
図246　D080号遺構実測図……324
図247　D080号遺構石製遺物平面分布模式図……325
図248　D080号遺構石製遺物層位別分布図(1)……326
図249　D080号遺構石製遺物層位別分布図(2)……327
図250　D080号遺構石製遺物層位別分布図(3)……328
図251　D080号遺構出土遺物実測図……329
図252　古墳時代中期第IV群遺構分布状況図 ……330
図253　D036号遺構実測図……331
図254　D036号遺構炉跡実測図……331
図255　D036号遺構出土遺物実測図……332
図256　D039号遺構実測図……333
図257　D039号遺構炉跡実測図……333
図258　D039号遺構石製遺物平面分布模式図……334
図259　D039号遺構石製遺物層位別分布図(1)……335
図260　D039号遺構石製遺物層位別分布図(2)……336
図261　D039号遺構出土遺物実測図(1)……337

図262　D039号遺構出土遺物実測図(2)……338
図263　古墳時代中期第Ⅴ群遺構分布状況図 ……340
図264　D002号遺構実測図……341
図265　D002号遺構炉跡実測図……341
図266　D022遺構炭化物出土状況図……342
図267　D022号遺構出土遺物実測図……343
図268　D077号遺構実測図……344
図269　D077号遺構炉跡実測図……344
図270　D077号遺構出土遺物実測図……345
図271　古墳時代中期第Ⅵ群遺構分布状況図 ……346
図272　D021号遺構実測図……347
図273　D021号遺構炉跡実測図……347
図274　D021号遺構石製遺物平面分布模式図……348
図275　D021号遺構石製遺物層位別分布図(1)……349
図276　D021号遺構石製遺物層位別分布図(2)……350
図277　D021号遺構石製遺物層位別分布図(3)……351
図278　D021号遺構出土遺物実測図……351
図279　D026号遺構実測図……352
図280　D026号遺構炉跡実測図……353
図281　D026号遺構出土遺物実測図……353
図282　古墳時代後期第Ⅰ群遺構分布状況図 ……354
図283　D001号遺構実測図……355
図284　D001号遺構カマド実測図……355
図285　D001号遺構出土遺物実測図……356
図286　D005号遺構実測図……358
図287　D005号遺構カマド実測図……358
図288　D005号遺構出土遺物実測図(1)……359
図289　D005号遺構出土遺物実測図(2)……360
図290　D006号遺構実測図……361
図291　D006号遺構カマド実測図……362
図292　D006号遺構出土遺物実測図……362
図293　D037号遺構実測図……364
図294　D037号遺構カマド実測図……365

図295　D037号遺構石製遺物平面分布模式図……366
図296　D037号遺構石製遺物層位別分布図(1)……367
図297　D037号遺構石製遺物層位別分布図(2)……368
図298　D037号遺構石製遺物層位別分布図(3)……369
図299　D037号遺構石製遺物層位別分布図(4)……370
図300　D037号遺構石製遺物層位別分布図(5)……371
図301　D037号遺構出土遺物実測図……372
図302　D037号遺構石製遺物層位別分布図(6)……373
図303　古墳時代後期第II群遺構分布状況図 ……373
図304　D040号遺構実測図……374
図305　D040号遺構カマド実測図……375
図306　D040号遺構出土遺物実測図……375
図307　D041号遺構実測図……376
図308　D041号遺構カマド実測図……377
図309　D041号遺構出土遺物実測図……377
図310　D020号遺構実測図……379
図311　D020号遺構カマド実測図……379
図312　D020号遺構出土遺物実測図……380
図313　古墳時代中期の臼玉計測値分布図 ……383
図314　古墳時代後期の臼玉計測値分布図 ……388
図315　歴史時代第I群遺構分布状況図 ……392
図316　D117号遺構実測図……393
図317　D117号遺構カマド実測図……393
図318　D117号遺構出土遺物実測図……393
図319　D118号遺構実測図……394
図320　D118号遺構カマド実測図……395
図321　D118号遺構出土遺物実測図(1)……396
図322　D118号遺構出土遺物実測図(2)……397
図323　D119号遺構実測図……397
図324　D119号遺構カマド実測図……398
図325　D119号遺構出土遺物実測図……398
図326　D120号遺構実測図……399
図327　D120号遺構カマド実測図……399

図328　D120号遺構出土遺物実測図……399
図329　D121号遺構実測図……400
図330　D121号遺構カマド実測図……401
図331　D121号遺構出土遺物実測図……401
図332　D136号遺構実測図……402
図333　D136号遺構カマド実測図……403
図334　D136号遺構出土遺物実測図……403
図335　D139号遺構実測図……404
図336　D139号遺構カマド実測図……404
図337　D139号遺構出土遺物実測図……404
図338　D140号遺構実測図……405
図339　D140号遺構カマド実測図……405
図340　D140号遺構出土遺物実測図……406
図341　D130号遺構実測図……407
図342　D130号遺構カマド実測図……408
図343　D130号遺構出土遺物実測図……408
図344　歴史時代第III群遺構分布状況図 ……410
図345　D061号遺構実測図……411
図346　D061号遺構カマド実測図……411
図347　D061号遺構出土遺物実測図(1)……412
図348　D061号遺構出土遺物実測図(2)……413
図349　D061号遺構出土遺物実測図(3)……414
図350　D062号遺構実測図……416
図351　D062号遺構カマド実測図……416
図352　D062号遺構出土遺物実測図……417
図353　D063号遺構実測図……418
図354　D063号遺構カマド実測図……419
図355　D063号遺構出土遺物実測図……420
図356　D064号遺構実測図……421
図357　D064号遺構カマド実測図……421
図358　D064号遺構出土遺物実測図……422
図359　D065号遺構実測図……423
図360　D065号遺構カマド実測図……424

図361　D065号遺構出土遺物実測図……424
図362　D066号遺構実測図……425
図363　D067号遺構実測図……426
図364　D067号遺構カマド実測図……426
図365　D067号遺構出土遺物実測図……426
図366　D069号遺構実測図……427
図367　D069号遺構カマドA実測図……428
図368　D069号遺構カマドB実測図……428
図369　D069号遺構炭化物出土状況図……428
図370　D069号遺構出土遺物実測図(1)……429
図371　D069号遺構出土遺物実測図(2)……430
図372　D069号遺構出土遺物実測図(3)……431
図373　D070号遺構実測図……433
図374　D070号遺構カマド実測図……434
図375　D070号遺構出土遺物実測図……435
図376　D076号遺構実測図……436
図377　D076号遺構カマド実測図……436
図378　D076号遺構出土遺物実測図……437
図379　D088号遺構実測図……438
図380　D088号遺構カマド実測図……438
図381　D088号遺構出土遺物実測図……439
図382　D089号遺構実測図……440
図383　D089号遺構カマド実測図……440
図384　D089号遺構出土遺物実測図……441
図385　D090号遺構実測図……442
図386　D090号遺構カマド実測図……443
図387　D090号遺構出土遺物実測図……443
図388　D091号遺構実測図……444
図389　D091号遺構カマド実測図……445
図390　D091号遺構出土遺物実測図……446
図391　D092号遺構実測図……447
図392　D092号遺構カマド実測図……448
図393　D092号遺構出土遺物実測図……449

図394　D093号遺構実測図……450
図395　D093号遺構カマド実測図……451
図396　D095号遺構実測図……452
図397　D095号遺構カマド実測図……452
図398　D095号遺構出土遺物実測図……453
図399　D096号遺構実測図……455
図400　D096号遺構カマド実測図……455
図401　D096号遺構出土遺物実測図……456
図402　D097号遺構実測図……457
図403　D097号遺構カマド実測図……457
図404　D097号遺構出土遺物実測図……458
図405　D098号遺構実測図……459
図406　D098号遺構カマド実測図……460
図407　D098号遺構出土遺物実測図……461
図408　D099号遺構実測図……462
図409　D099号遺構カマド実測図……462
図410　D099号遺構出土遺物実測図……463
図411　D100号遺構実測図……464
図412　D100号遺構出土遺物実測図……465
図413　D101号遺構実測図……466
図414　D101号遺構カマド実測図……466
図415　D101号遺構出土遺物実測図……467
図416　D102号遺構実測図……468
図417　D102号遺構カマド実測図……469
図418　D102号遺構出土遺物実測図……469
図419　D103号遺構実測図……470
図420　D103号遺構カマド実測図……471
図421　D103号遺構出土遺物実測図(1)……472
図422　D103号遺構出土遺物実測図(2)……473
図423　D106号遺構実測図……475
図424　D106号遺構カマド実測図……476
図425　D106号遺構出土遺物実測図……477
図426　D107号遺構実測図……479

図427　D107号遺構カマド実測図……479
図428　D107号遺構炉跡実測図……480
図429　D107号遺構出土遺物実測図……480
図430　D108号遺構実測図……480
図431　D108号遺構カマド実測図……481
図432　D108号遺構出土遺物実測図……482
図433　D109号遺構実測図……483
図434　D109号遺構カマド実測図……484
図435　D109号遺構出土遺物実測図……485
図436　D110号遺構実測図……486
図437　D110号遺構カマド実測図……486
図438　D111号遺構実測図……487
図439　D111号遺構カマド実測図……487
図440　D111号遺構出土遺物実測図……488
図441　D112号遺構実測図……489
図442　D112号遺構カマド実測図……489
図443　D112号遺構出土遺物実測図(1)……490
図444　D112号遺構出土遺物実測図(2)……491
図445　D113号遺構実測図……493
図446　D113号遺構カマド実測図……493
図447　D113号遺構出土遺物実測図……494
図448　D114号遺構実測図……496
図449　D114号遺構カマド実測図……496
図450　D114号遺構出土遺物実測図……497
図451　D115号遺構実測図……498
図452　D115号遺構カマドA実測図……498
図453　D115号遺構カマドB実測図……499
図454　D115号遺構出土遺物実測図……499
図455　D116号遺構実測図……500
図456　D116号遺構カマド実測図……500
図457　D116号遺構出土遺物実測図……501
図458　D123号遺構実測図……502
図459　D123号遺構カマド実測図……503

図460　D123号遺構出土遺物実測図……503
図461　D124号遺構実測図……504
図462　D124号遺構カマド実測図……504
図463　D124号遺構出土遺物実測図……505
図464　D125号遺構実測図……506
図465　D125号遺構カマド実測図……507
図466　D125号遺構出土遺物実測図……508
図467　D126号遺構実測図……509
図468　D126号遺構カマド実測図……510
図469　D126号遺構出土遺物実測図……510
図470　D127号遺構実測図……511
図471　D127号遺構カマド実測図……511
図472　D127号遺構出土遺物実測図……511
図473　D128号遺構実測図……512
図474　D128号遺構カマド実測図……513
図475　D128号遺構出土遺物実測図……513
図476　D129号遺構実測図……514
図477　D129号遺構カマドA実測図……515
図478　D129号遺構カマドB実測図……515
図479　D129号遺構出土遺物実測図……516
図480　D132号遺構実測図……518
図481　D132号遺構カマド実測図……518
図482　D132号遺構出土遺物実測図……519
図483　D133号遺構実測図……520
図484　D133号遺構カマド実測図……520
図485　D133号遺構出土遺物実測図……521
図486　D134号遺構実測図……523
図487　D134号遺構カマド実測図……523
図488　D134号遺構出土遺物実測図……524
図489　D135号遺構実測図……525
図490　D135号遺構カマドA実測図……525
図491　D135号遺構カマドB実測図……526
図492　D135号遺構カマドC実測図……526

図493　D135号遺構出土遺物実測図……527
図494　D137号遺構実測図……528
図495　D137号遺構カマド実測図……528
図496　D137号遺構出土遺物実測図……528
図497　D138号遺構実測図……529
図498　D138号遺構カマド実測図……530
図499　D138号遺構出土遺物実測図……531
図500　D141号遺構実測図……532
図501　D141号遺構カマド実測図……532
図502　D141号遺構出土遺物実測図……533
図503　D143号遺構実測図……534
図504　D143号遺構カマド実測図……535
図505　D143号遺構出土遺物実測図(1)……536
図506　D143号遺構出土遺物実測図(2)……537
図507　D144号遺構実測図……537
図508　D144号遺構カマド実測図……538
図509　D144号遺構出土遺物実測図……538
図510　D145号遺構実測図……540
図511　D145号遺構カマドA実測図……540
図512　D145号遺構カマドB実測図……541
図513　D145号遺構出土遺物実測図(1)……542
図514　D145号遺構出土遺物実測図(2)……543
図515　D146号遺構実測図……544
図516　D146号遺構カマド実測図……544
図517　D146号遺構出土遺物実測図……545
図518　D147号遺構実測図……546
図519　D147号遺構カマド実測図……547
図520　D147号遺構出土遺物実測図……547
図521　D148号遺構実測図……549
図522　D148号遺構カマド実測図……549
図523　D148号遺構出土遺物実測図……550
図524　H010号遺構実測図……551
図525　P001号遺構実測図……552

図526　P001号遺構出土遺物実測図……552
図527　P002号遺構実測図……553
図528　P004号遺構実測図……553
図529　P011号遺構実測図……553
図530　P011号遺構出土遺物実測図……554
図531　P013号遺構実測図……555
図532　P013号遺構出土遺物実測図……555
図533　P014号遺構実測図……555
図534　P014号遺構出土遺物実測図……556
図535　P015号遺構実測図……556
図536　P015号遺構出土遺物実測図……556
図537　P022号遺構実測図……557
図538　歴史時代第IV群遺構分布状況図……558
図539　D048号遺構実測図……559
図540　D048号遺構カマド実測図……559
図541　D048号遺構出土遺物実測図……560
図542　D071号遺構実測図……561
図543　D071号遺構カマド実測図……562
図544　D071号遺構出土遺物実測図……562
図545　D072号遺構実測図……563
図546　D072号遺構カマド実測図……564
図547　D072号遺構出土遺物実測図(1)……565
図548　D072号遺構出土遺物実測図(2)……566
図549　D073号遺構実測図……567
図550　D073号遺構カマド実測図……568
図551　D073号遺構出土遺物実測図……569
図552　D074号遺構実測図……570
図553　D074号遺構カマド実測図……571
図554　D074号遺構炭化物出土状況図……571
図555　D074号遺構出土遺物実測図(1)……572
図556　D074号遺構出土遺物実測図(2)……573
図557　D075号遺構実測図……575
図558　D075号遺構カマド実測図……576

図559　D075号遺構出土遺物実測図……577
図560　D081号遺構実測図……578
図561　D081号遺構カマド実測図……579
図562　D081号遺構出土遺物実測図(1)……580
図563　D081号遺構出土遺物実測図(2)……581
図564　D082号遺構実測図……582
図565　D082号遺構カマド実測図……583
図566　D082号遺構出土遺物実測図(1)……584
図567　D082号遺構出土遺物実測図(2)……585
図568　D083号遺構実測図……586
図569　D083号遺構カマド実測図……587
図570　D083号遺構出土遺物実測図……588
図571　D084号遺構実測図……589
図572　D084号遺構カマド実測図……590
図573　D084号遺構出土遺物実測図……591
図574　D085号遺構実測図……592
図575　D085号遺構カマド実測図……592
図576　D085号遺構出土遺物実測図……593
図577　D086号遺構実測図……594
図578　D086号遺構カマド実測図……595
図579　D086号遺構出土遺物実測図……595
図580　D087号遺構実測図……596
図581　D087号遺構カマド実測図……596
図582　D087号遺構出土遺物実測図……597
図583　H001号遺構実測図……599
図584　H002号遺構実測図……600
図585　H003号遺構実測図……601
図586　H004号遺構実測図……602
図587　H005号遺構実測図……602
図588　H006号遺構実測図……603
図589　H006号遺構出土遺物実測図……603
図590　H007号遺構実測図……604
図591　H008号遺構実測図……604

図592　H009号遺構実測図……605
図593　P007号遺構実測図……605
図594　P008号遺構実測図……606
図595　P009号遺構実測図……606
図596　歴史時代第Ⅴ群遺構分布状況図 ……607
図597　D009号遺構実測図……608
図598　D009号遺構カマドA実測図……608
図599　D009号遺構カマドB実測図……608
図600　D009号遺構出土遺物実測図……609
図601　D015号遺構実測図……610
図602　D015号遺構カマド実測図……610
図603　D015号遺構出土遺物実測図(1)……611
図604　D015号遺構出土遺物実測図(2)……612
図605　D017号遺構実測図……613
図606　D017号遺構カマド実測図……613
図607　D017号遺構出土遺物実測図……614
図608　D018号遺構実測図……614
図609　D018号遺構カマドA実測図……615
図610　D018号遺構カマドB実測図……615
図611　D018号遺構出土遺物実測図……616
図612　D019号遺構実測図……617
図613　D019号遺構カマド実測図……618
図614　D019号遺構出土遺物実測図……618
図615　D078号遺構実測図……620
図616　D078号遺構カマド実測図……620
図617　D078号遺構出土遺物実測図……621
図618　歴史時代第Ⅵ群遺構分布状況図 ……622
図619　D032号遺構実測図……623
図620　D032号遺構カマド実測図……623
図621　D032号遺構出土遺物実測図……624
図622　D033号遺構実測図……624
図623　D033号遺構出土遺物実測図……625
図624　P003号遺構実測図……625

図625　歴史時代第Ⅶ群遺構分布状況図 ……625
図626　D023号遺構実測図……626
図627　D023号遺構カマド実測図……627
図628　D023号遺構出土遺物実測図……628
図629　D024号遺構実測図……628
図630　D024号遺構カマド実測図……629
図631　D024号遺構出土遺物実測図……629
図632　D025号遺構実測図……630
図633　D025号遺構カマド実測図……631
図634　D025号遺構出土遺物実測図……632
図635　D027号遺構実測図……634
図636　D027号遺構カマド実測図……634
図637　D027号遺構出土遺物実測図……635
図638　D028号遺構実測図……636
図639　D028号遺構カマド実測図……637
図640　D028号遺構出土遺物実測図……637
図641　D029号遺構実測図……637
図642　D029号遺構カマド実測図……638
図643　D029号遺構出土遺物実測図……638
図644　D030号遺構実測図……639
図645　D030号遺構カマド実測図……639
図646　D030号遺構出土遺物実測図……640
図647　D031号遺構実測図……640
図648　D031号遺構カマド実測図……641
図649　D031号遺構出土遺物実測図……641
図650　D034号遺構実測図……642
図651　D034号遺構カマド実測図……643
図652　D034号遺構出土遺物実測図……643
図653　D042号遺構実測図……644
図654　D042号遺構カマド実測図……645
図655　D042号遺構出土遺物実測図……646
図656　D043号遺構実測図……647
図657　D043号遺構カマドA実測図……648

図658　D043号遺構カマドB実測図……648
図659　D043号遺構出土遺物実測図……648
図660　D044号遺構実測図……649
図661　D044号遺構カマド実測図……649
図662　D044号遺構出土遺物実測図……650
図663　D045号遺構実測図……651
図664　D045号遺構カマド実測図……652
図665　D045号遺構出土遺物実測図……652
図666　D046号遺構実測図……653
図667　D046号遺構カマドA実測図……654
図668　D046号遺構カマドB実測図……654
図669　D046号遺構出土遺物実測図……655
図670　D050A号遺構実測図……656
図671　D050A号遺構カマド実測図……657
図672　D050A号遺構出土遺物実測図(1)……658
図673　D050A号遺構出土遺物実測図(2)……659
図674　D050B号遺構実測図……660
図675　D051号遺構実測図……661
図676　D051号遺構カマド実測図……661
図677　D051号遺構出土遺物実測図……662
図678　D052号遺構実測図……663
図679　D053号遺構実測図……664
図680　D053号遺構カマド実測図……664
図681　D053号遺構出土遺物実測図……665
図682　D054号遺構実測図……665
図683　D054号遺構カマド実測図……666
図684　D054号遺構出土遺物実測図……666
図685　D079号遺構実測図……667
図686　D079号遺構カマド実測図……667
図687　P005号遺構実測図……668
図688　P006号遺構実測図……668
図689　P023号遺構実測図……668
図690　P024号遺構実測図……669

図691　P025号遺構実測図……669
図692　P026号遺構実測図……669
図693　歴史時代第Ⅷ群遺構分布状況図 ……670
図694　D003号遺構実測図……671
図695　D003号遺構カマド実測図……672
図696　D003号遺構出土遺物実測図……672
図697　D004号遺構実測図……673
図698　D004号遺構カマド実測図……674
図699　D004号遺構出土遺物実測図……674
図700　D007号遺構実測図……676
図701　D007号遺構出土遺物実測図……676
図702　D008号遺構実測図……677
図703　D008号遺構カマド実測図……678
図704　D008号遺構出土遺物実測図……678
図705　D035号遺構実測図……679
図706　D035号遺構カマド実測図……679
図707　D035号遺構出土遺物実測図……680
図708　D038号遺構実測図……681
図709　D038号遺構カマド実測図……681
図710　D038号遺構出土遺物実測図……682
図711　D142号遺構実測図……683
図712　D142号遺構カマド実測図……683
図713　D142号遺構出土遺物実測図……684
図714　D149号遺構実測図……685
図715　D149号遺構カマドA実測図……685
図716　D149号遺構カマドB実測図……686
図717　D149号遺構出土遺物実測図……687
図718　水田部分調査状況図 ……688
図719　水田部分土層断面図(1) ……690
図720　水田部分土層断面図(2) ……691
図721　水田部分出土遺物実測図 ……691
図722　遺跡表面採集遺物実測図 ……692
図723　北海道遺跡出土の坏形土器計測値分布図 ……706

図724　権現後遺跡出土の坏形土器計測値分布図 ……707
図A　遺構配置図 ……付図

表　目　次

表1　第1文化層石器組成表 …… 9
表2　第1文化層出土石器計測表 …… 9
表3　第1ブロック出土石器組成表 ……11
表4　第1ブロック母岩別資料石器組成表 ……11
表5　第1ブロック接合資料一覧表 ……12
表6　第1ブロック出土石器計測表 ……12
表7　第2ブロック出土石器組成表 ……13
表8　第2ブロック母岩別資料石器組成表 ……13
表9　第2ブロック接合資料一覧表 ……16
表10　第2ブロック出土石器計測表 ……16
表11　第3ブロック出土石器組成表 ……17
表12　第3ブロック母岩別資料石器組成表 ……17
表13　第3ブロック接合資料一覧表 ……19
表14　第3ブロック出土石器計測表 ……19
表15　第4ブロック出土石器組成表 ……21
表16　第4ブロック母岩別資料石器組成表 ……21
表17　第4ブロック接合資料一覧表 ……21
表18　第4ブロック出土石器計測表 ……23
表19　第5ブロック出土石器組成表 ……25
表20　第5ブロック接合資料一覧表 ……25
表21　第5ブロック出土石器計測表 ……25
表22　第5ブロック母岩別資料石器組成表 ……26
表23　第6ブロック出土石器組成表 ……28
表24　第6ブロック母岩別資料石器組成表 ……28
表25　第6ブロック接合資料一覧表 ……28
表26　第6ブロック出土石器計測表 ……29
表27　第7ブロック出土石器組成表 ……30
表28　第7ブロック母岩別資料石器組成表 ……30
表29　第7ブロック出土石器計測表 ……30
表30　第8ブロック出土石器組成表 ……32

表31　第８ブロック母岩別資料石器組成表 ……32
表32　第８ブロック出土石器計測表 ……32
表33　第９ブロック母岩別資料石器組成表 ……33
表34　第９ブロック出土石器組成表 ……34
表35　第９ブロック接合資料一覧表 ……34
表36　第９ブロック出土石器計測表 ……34
表37　第10ブロック出土石器組成表 ……36
表38　第10ブロック母岩別資料石器組成表 ……37
表39　第10ブロック接合資料一覧表 ……37
表40　第10ブロック出土石器計測表 ……37
表41　第11ブロック出土石器組成表 ……41
表42　第11ブロック母岩別資料石器組成表 ……41
表43　第11ブロック接合資料一覧表 ……42
表44　第11ブロック出土石器計測表 ……42
表45　第12ブロック出土石器組成表 ……45
表46　第12ブロック母岩別資料石器組成表 ……46
表47　第12ブロック接合資料一覧表 ……48
表48　第12ブロック出土石器計測表 ……48
表49　第13ブロック出土石器組成表 ……51
表50　第13ブロック母岩別資料石器組成表 ……51
表51　第13ブロック接合資料一覧表 ……55
表52　第13ブロック出土石器計測表 ……55
表53　第14ブロック出土石器組成表 ……56
表54　第14ブロック母岩別資料石器組成表 ……57
表55　第14ブロック接合資料一覧表 ……58
表56　第14ブロック出土石器計測表 ……58
表57　第15ブロック母岩別資料石器組成表 ……60
表58　第15ブロック出土石器組成表 ……61
表59　第15ブロック出土石器計測表 ……61
表60　第16ブロック出土石器組成表 ……62
表61　第16ブロック接合資料一覧表 ……62
表62　第16ブロック出土石器計測表 ……62
表63　第16ブロック母岩別資料石器組成表 ……63

表64　第17ブロック母岩別資料石器組成表 …… 64
表65　第17ブロック接合資料一覧表 …… 65
表66　第17ブロック出土石器組成表 …… 66
表67　第18ブロック出土石器計測表 …… 66
表68　第18ブロック出土石器組成表 …… 67
表69　第18ブロック接合資料一覧表 …… 67
表70　第18ブロック母岩別資料石器組成表 …… 70
表71　第19ブロック出土石器組成表 …… 71
表72　第19ブロック母岩別資料石器組成表 …… 72
表73　第19ブロック接合資料一覧表 …… 72
表74　第19ブロック出土石器計測表 …… 76
表75　第20ブロック出土石器組成表 …… 79
表76　第20ブロック母岩別資料石器組成表 …… 79
表77　第20ブロック接合資料一覧表 …… 80
表78　第20ブロック出土石器計測表 …… 80
表79　第21ブロック出土石器組成表 …… 81
表80　第21ブロック母岩別資料石器組成表 …… 82
表81　第21ブロック接合資料一覧表 …… 82
表82　第21ブロック出土石器計測表 …… 82
表83　第22ブロック出土石器組成表 …… 86
表84　第22ブロック母岩別資料石器組成表 …… 86
表85　第22ブロック出土石器計測表 …… 88
表86　第23ブロック出土石器組成表 …… 90
表87　第23ブロック母岩別資料石器組成表 …… 90
表88　第23ブロック出土石器計測表 …… 91
表89　第24ブロック出土石器組成表 …… 92
表90　第24ブロック母岩別資料石器組成表 …… 92
表91　第24ブロック接合資料一覧表 …… 92
表92　第24ブロック出土石器計測表 …… 93
表93　第25ブロック出土石器組成表 …… 96
表94　第25ブロック接合資料一覧表 …… 97
表95　第25ブロック出土石器計測表 …… 99
表96　第25ブロック母岩別資料石器組成表 …… 100

表97　第26ブロック母岩別資料石器組成表 ……100
表98　第26ブロック出土石器組成表 ……103
表99　第27ブロック母岩別資料石器組成表 ……103
表100　第27ブロック出土石器計測表 ……103
表101　第27ブロック出土石器組成表 ……105
表102　第28ブロック母岩別資料石器組成表 ……105
表103　第28ブロック出土石器組成表 ……107
表104　第28ブロック出土石器計測表 ……108
表105　第29ブロック出土石器組成表 ……108
表106　第29ブロック母岩別資料石器組成表 ……108
表107　第29ブロック接合資料一覧表 ……109
表108　第29ブロック出土石器計測表 ……110
表109　第38ブロック出土石器組成表 ……110
表110　第38ブロック母岩別資料石器組成表 ……112
表111　第38ブロック出土石器組成表 ……112
表112　第39ブロック出土石器組成表 ……113
表113　第39ブロック母岩別資料石器組成表 ……113
表114　第39ブロック出土石器計測表 ……115
表115　第43ブロック出土石器組成表 ……116
表116　第43ブロック母岩別資料石器組成表 ……116
表117　第43ブロック接合資料一覧表 ……120
表118　第43ブロック出土石器計測表 ……120
表119　第45ブロック母岩別資料石器組成表 ……120
表120　第45ブロック出土石器組成表 ……121
表121　第45ブロック出土石器計測表 ……121
表122　第51ブロック母岩別資料石器組成表 ……123
表123　第51ブロック出土石器計測表 ……123
表124　第51ブロック出土石器組成表 ……124
表125　第55ブロック出土石器組成表 ……125
表126　第55ブロック母岩別資料石器組成表 ……125
表127　第55ブロック接合資料一覧表 ……125
表128　第55ブロック出土石器計測表 ……125
表129　第62ブロック母岩別資料石器組成表 ……127

表130　第62ブロック接合資料一覧表 ……127
表131　第62ブロック出土石器組成表 ……128
表132　第62ブロック出土石器計測表 ……128
表133　第２文化層ブロック外出土石器組成表 ……134
表134　第２文化層ブロック外出土石器計測表 ……135
表135　第30ブロック出土石器組成表 ……137
表136　第30ブロック母岩別資料石器組成表 ……137
表137　第30ブロック接合資料一覧表 ……137
表138　第30ブロック出土石器計測表 ……138
表139　第31ブロック出土石器組成表 ……138
表140　第31ブロック母岩別資料石器組成表 ……142
表141　第31ブロック接合資料一覧表 ……142
表142　第31ブロック出土石器計測表 ……142
表143　第32ブロック出土石器組成表 ……143
表144　第32ブロック母岩別資料石器組成表 ……143
表145　第32ブロック接合資料一覧表 ……144
表146　第32ブロック出土石器計測表 ……144
表147　第33ブロック出土石器組成表 ……146
表148　第33ブロック母岩別資料石器組成表 ……146
表149　第33ブロック接合資料一覧表 ……147
表150　第33ブロック出土石器計測表 ……147
表151　第34ブロック母岩別資料石器組成表 ……147
表152　第34ブロック出土石器計測表 ……147
表153　第34ブロック出土石器組成表 ……149
表154　第35ブロック出土石器組成表 ……151
表155　第35ブロック母岩別資料石器組成表 ……152
表156　第35ブロック出土石器計測表 ……152
表157　第36ブロック母岩別資料石器組成表 ……152
表158　第36ブロック出土石器組成表 ……155
表159　第36ブロック接合資料一覧表 ……155
表160　第36ブロック出土石器計測表 ……155
表161　第37ブロック出土石器計測表 ……156
表162　第37ブロック出土石器組成表 ……157

表163　第37ブロック母岩別資料石器組成表 ……157
表164　第40ブロック出土石器組成表 ……159
表165　第40ブロック母岩別資料石器組成表 ……160
表166　第40ブロック接合資料一覧表 ……160
表167　第40ブロック出土石器計測表 ……160
表168　第41ブロック出土石器組成表 ……165
表169　第41ブロック母岩別資料石器組成表 ……167
表170　第41ブロック接合資料一覧表 ……168
表171　第41ブロック出土石器計測表 ……168
表172　第42ブロック出土石器組成表 ……170
表173　第42ブロック母岩別資料石器組成表 ……170
表174　第42ブロック接合資料一覧表 ……172
表175　第42ブロック出土石器計測表 ……173
表176　第44ブロック出土石器組成表 ……173
表177　第44ブロック母岩別資料石器組成表 ……174
表178　第44ブロック接合資料一覧表 ……174
表179　第44ブロック出土石器計測表 ……174
表180　第46ブロック出土石器組成表 ……179
表181　第46ブロック母岩別資料石器組成表 ……179
表182　第46ブロック接合資料一覧表 ……179
表183　第46ブロック出土石器計測表 ……180
表184　第47ブロック出土石器組成表 ……181
表185　第47ブロック母岩別資料石器組成表 ……182
表186　第47ブロック接合資料一覧表 ……182
表187　第47ブロック出土石器計測表 ……185
表188　第48ブロック出土石器組成表 ……187
表189　第48ブロック母岩別資料石器組成表 ……187
表190　第48ブロック出土石器計測表 ……188
表191　第49ブロック出土石器組成表 ……189
表192　第49ブロック母岩別資料石器組成表 ……189
表193　第49ブロック出土石器計測表 ……189
表194　第49ブロック接合資料一覧表 ……191
表195　第50ブロック出土石器組成表 ……192

表196　第50ブロック母岩別資料石器組成表 ……192
表197　第50ブロック接合資料一覧表 ……195
表198　第50ブロック出土石器計測表 ……195
表199　第52ブロック出土石器組成表 ……197
表200　第52ブロック母岩別資料石器組成表 ……197
表201　第52ブロック接合資料一覧表 ……198
表202　第52ブロック出土石器計測表 ……198
表203　第53ブロック母岩別資料石器組成表 ……201
表204　第53ブロック接合資料一覧表 ……201
表205　第53ブロック出土石器組成表 ……202
表206　第53ブロック出土石器計測表 ……202
表207　第54ブロック母岩別資料石器組成表 ……203
表208　第54ブロック出土石器組成表 ……204
表209　第54ブロック接合資料一覧表 ……204
表210　第54ブロック出土石器計測表 ……208
表211　第56ブロック出土石器組成表 ……209
表212　第56ブロック母岩別資料石器組成表 ……209
表213　第56ブロック接合資料一覧表 ……209
表214　第56ブロック出土石器計測表 ……211
表215　第57ブロック出土石器組成表 ……211
表216　第57ブロック母岩別資料石器組成表 ……211
表217　第57ブロック接合資料一覧表 ……213
表218　第57ブロック出土石器計測表 ……213
表219　第58ブロック出土石器組成表 ……215
表220　第58ブロック母岩別資料石器組成表 ……215
表221　第58ブロック出土石器計測表 ……215
表222　第59ブロック出土石器組成表 ……216
表223　第59ブロック母岩別資料石器組成表 ……216
表224　第59ブロック接合資料一覧表 ……218
表225　第59ブロック出土石器計測表 ……218
表226　第60ブロック出土石器組成表 ……221
表227　第60ブロック母岩別資料石器組成表 ……221
表228　第60ブロック接合資料一覧表 ……222

表229　第60ブロック出土石器計測表 ……222
表230　第61ブロック出土石器組成表 ……225
表231　第61ブロック接合資料一覧表 ……225
表232　第61ブロック母岩別資料石器組成表 ……226
表233　第61ブロック出土石器計測表 ……227
表234　表面採集石器組成表 ……228
表235　表面採集石器計測表 ……228
表236　各文化層ごとの石材の変遷 ……239

図 版 目 次

図版１　遺跡
北海道遺跡と周辺の空中写真
図版２　遺跡
北海道遺跡全景（北東より）
図版３　遺跡
１．北海道遺跡南側地域
２．北海道遺跡北側地域
図版４　旧石器時代　第１文化層遺物、第２文化層遺構
１．第１文化層出土石器
２．第２文化層第２、６ブロック石器出土状況
３．第２文化層第12ブロック石器出土状況
図版５　旧石器時代　第２文化層遺構
１．第２文化層第13、18ブロック石器出土状況
２．第２文化層第15ブロック石器出土状況
３．第２文化層第16ブロック石器出土状況
図版６　旧石器時代　第２文化層遺構
１．第２文化層第12～16、18ブロック石器出土状況
２．第２文化層第17ブロック石器出土状況
３．第２文化層第17ブロック石器出土状況
図版７　旧石器時代　第２文化層遺構
１．第２文化層第18ブロック石器出土状況
２．第２文化層第18ブロック石器出土状況
３．第２文化層第25ブロック石器出土状況
図版８　旧石器時代　第２文化層遺構
１．第２文化層第26ブロック石器出土状況
２．第２文化層第27ブロック石器出土状況
３．第２文化層第29ブロック石器出土状況
図版９　旧石器時代　第２文化層遺構
１．第２文化層第38ブロック石器出土状況
２．第２文化層第43ブロック石器出土状況

3．第２文化層第45ブロック石器出土状況
図版10　旧石器時代　第２文化層遺構
1．第２文化層第55ブロック石器出土状況
2．第２文化層第62ブロック石器出土状況
3．第２文化層ブロック外石器出土状況
図版11　旧石器時代　第２文化層遺物
第１～８ブロック出土石器
図版12　旧石器時代　第２文化層遺物
第10～12ブロック出土石器
図版13　旧石器時代　第２文化層遺物
第13～16、18ブロック出土石器
図版14　旧石器時代　第２文化層遺物
第18～23ブロック出土石器
図版15　旧石器時代　第２文化層遺物
第23～25、27～29、38、39ブロック出土石器
図版16　旧石器時代　第２文化層遺物
第43、45、51、55、62、ブロック外出土石器
図版17　旧石器時代　第２文化層遺物、第３文化層遺構
ブロック外出土石器
1．第３文化層第30ブロック石器出土状況
2．第３文化層第31ブロック石器出土状況
図版18　旧石器時代　第３文化層遺構
1．第３文化層第31ブロック石器出土状況
2．第３文化層第32ブロック石器出土状況
3．第３文化層第35ブロック石器出土状況
図版19　旧石器時代　第３文化層遺構
1．第３文化層第36ブロック石器出土状況
2．第３文化層第37ブロック石器出土状況
3．第３文化層第37ブロック石器出土状況
図版20　旧石器時代　第３文化層遺構
1．第３文化層第37ブロック石器出土状況
2．第３文化層第40ブロック石器出土状況
3．第３文化層第41ブロック石器出土状況

図版21　旧石器時代　第３文化層遺構
１．第３文化層第42ブロック石器出土状況
２．第３文化層第44ブロック石器出土状況
３．第３文化層第47ブロック石器出土状況
図版22　旧石器時代　第３文化層遺構
１．第３文化層第49ブロック石器出土状況
２．第３文化層第50ブロック石器出土状況
３．第３文化層第53ブロック石器出土状況
図版23　旧石器時代　第３文化層遺構
１．第３文化層第53ブロック石器出土状況
２．第３文化層第54ブロック石器出土状況
３．第３文化層第56ブロック石器出土状況
図版24　旧石器時代　第３文化層遺構
１．第３文化層第57ブロック石器出土状況
２．第３文化層第58ブロック石器出土状況
３．第３文化層第59ブロック石器出土状況
図版25　旧石器時代　第３文化層遺物
第30～37、40ブロック出土石器
図版26　旧石器時代　第３文化層遺物
第41、42、44ブロック出土石器
図版27　旧石器時代　第３文化層遺物
第46～50ブロック出土石器
図版28　旧石器時代　第３文化層遺物
第50、52～54、57、58ブロック出土石器
図版29　旧石器時代　第３文化層遺物
第58～61ブロック出土、表面採集石器
図版30　弥生時代、古墳時代中期第Ｉ群
１．D049号遺構全景
２．D049号号遺構炉検出状況
３．D131号遺構全景
図版31　古墳時代　中期第II群遺構
１．D104号遺構全景
２．D105号遺構全景

3．D105号遺構炉検出状況
図版32　古墳時代　中期第III群遺構
1．D010号遺構全景
2．D011号遺構全景
3．D012号遺構全景
図版33　古墳時代　中期第III群遺構
1．D013号遺構全景
2．D013号遺構ピット検出状況
3．D014号遺構全景
図版34　古墳時代　中期第III群遺構
1．D014号遺構遺物出土状況
2．D014号遺構遺物出土状況
3．D014号遺構遺物出土状況
図版35　古墳時代　中期第III群遺構
1．D016号遺構全景
2．D016号遺構遺物出土状況
3．D022号遺構全景
図版36　古墳時代　中期第III群遺構
1．D055号遺構全景
2．D055号号遺構炉検出状況
3．D056号遺構全景
図版37　古墳時代　中期第III群遺構
1．D057号遺構全景
2．D057号遺構炉検出状況
3．D058号遺構全景
図版38　古墳時代　中期第III群遺構
1．D059号遺構全景
2．D059号遺構炉検出状況
3．D080号遺構全景
図版39　古墳時代　中期第III群遺物
D010～D013号遺構出土遺物
図版40　古墳時代　中期第III群遺物
D013、D014、D016号遺構出土遺物

図版41　古墳時代　中期第III群遺物
D022、D055号遺構出土遺物
図版42　古墳時代　中期第III群遺物
D055～D059号遺構出土遺物
図版43　古墳時代　中期第III群遺物、第IV群遺構
D059、D080号遺構出土遺物
1．D036号遺構全景
図版44　古墳時代　中期第IV群遺構、遺物
1．D039号遺構全景
2．D039号遺構遺物出土状況
D036、D039号遺構出土遺物
図版45　古墳時代　中期第IV群遺物、第Ｖ群遺構
D039号遺構出土遺物
1．D002号遺構全景
図版46　古墳時代　中期第Ｖ群遺構
1．D002号遺構遺物出土状況
2．D002号遺構遺物出土状況
3．D077号遺構全景
図版47　古墳時代　中期第Ｖ群遺構、遺物
1．D077号遺構遺物出土状況
D002、D077号遺構出土遺物
図版48　古墳時代　中期第VI群遺構、遺物
1．D021号遺構全景
2．D026号遺構全景
D021号遺構出土遺物
図版49　古墳時代　後期第Ⅰ群遺構
1．D001号遺構全景
2．D005号遺構全景
3．D005号遺構遺物出土状況
図版50　古墳時代　後期第Ⅰ群遺構
1．D005号遺構カマド検出状況
2．D006号遺構全景
3．D006号遺構カマド検出状況

図版51　古墳時代　後期第Ⅰ群遺構、遺物
1．D037号遺構全景
2．D037号遺構カマド検出状況
D001号遺構出土遺物
図版52　古墳時代　後期第Ⅰ群遺物
D001、D005号遺構出土遺物
図版53　古墳時代　後期第Ⅰ群遺物
D005、D006、D037号遺構出土遺物
図版54　古墳時代　後期第Ⅰ群遺物、第II群遺構
D037号遺構出土遺物
1．D040号遺構全景
2．D040号遺構カマド検出状況
図版55　古墳時代　後期第II群遺構、遺物
1．D041号遺構全景
D040号遺構出土遺物
図版56　古墳時代　後期第III群遺構、遺物
1．D020号遺構全景
2．D202号遺構カマド検出状況
D020号遺構出土遺物
図版57　歴史時代　第Ⅰ群遺構
1．D117号遺構全景
2．D117号遺構カマド検出状況
3．D118号遺構全景
図版58　歴史時代　第Ⅰ群遺構
1．D118号遺構遺物出土状況
2．D118号遺構カマド検出状況
3．D119号遺構全景
図版59　歴史時代　第Ⅰ群遺構
1．D119号遺構カマド掘りかた
2．D120号遺構全景
3．D120号遺構カマド検出状況
図版60　歴史時代　第Ⅰ群遺構
1．D121号遺構全景

2．D121号遺構カマド検出状況
3．D136号遺構全景
図版61　歴史時代　第Ⅰ群遺構
1．D139号遺構全景
2．D139号遺構カマド検出状況
3．D140号遺構遺物出土状況
図版62　歴史時代　第Ⅰ群遺構
1．0140号遺構全景
2．D014号遺構遺物出土状況
3．D140号遺構カマド掘りかた
図版63　歴史時代　第Ⅰ群遺物
D117、D118号遺構出土遺物
図版64　歴史時代　第Ⅰ群遺物
D118、D120、D121号遺構出土遺物
図版65　歴史時代　第Ⅰ群遺物
D120、D121、D139、D140号遺構出土遺物
図版66　歴史時代　第Ⅱ群遺構
1．D130号遺構全景
2．D130号遺構カマド検出状況
3．D130号遺構カマド掘りかた
図版67　歴史時代　第Ⅱ群遺物、第Ⅲ群遺構
D130号遺構出土遺物
1．D061号遺構全景
2．D061号遺構遺物出土状況
図版68　歴史時代　第Ⅲ群遺構
1．D061号遺構遺物出土状況
2．D061号遺構遺物出土状況
3．D061号遺構カマド検出状況
図版69　歴史時代　第Ⅲ群遺構
1．D062号遺構全景
2．D062号遺構カマド検出状況
3．D063号遺構全景
図版70　歴史時代　第Ⅲ群遺構

1．D064号遺構全景
2．D064号遺構カマド検出状況
3．D065号遺構全景
図版71　歴史時代　第III群遺構
1．D065号遺構カマド検出状況
2．D066号遺構全景
3．D067号遺構全景
図版72　歴史時代　第III群遺構
1．D069号遺構全景
2．D069号遺構カマド検出状況
3．D070号遺構全景
図版73　歴史時代　第III群遺構
1．D070号遺構カマド検出状況
2．D076号遺構全景
3．D076号遺構カマド掘りかた
図版74　歴史時代　第III群遺構
1．D088号遺構全景
2．D088号遺構カマド検出状況
3．D089号遺構全景
図版75　歴史時代　第III群遺構
1．D089号遺構カマド検出状況
2．D090号遺構全景
3．D090号遺構カマド検出状況
図版76　歴史時代　第III群遺構
1．D091号遺構全景
2．D091号遺構カマド検出状況
3．D091、D135号遺構検出状況
図版77　歴史時代　第III群遺構
1．D092号遺構全景
2．D092号遺構カマド検出状況
3．D093号遺構全景
図版78　歴史時代　第III群遺構
1．D093号遺構カマド検出状況

2．D095号遺構全景
3．D095号遺構カマド検出状況
図版79　歴史時代　第III群遺構
1．D096号遺構全景
2．D096号遺構カマド検出状況
3．D097号遺構全景
図版80　歴史時代　第III群遺構
1．D097号遺構カマド検出状況
2．D098号遺構全景
3．D098号遺構カマド検出状況
図版81　歴史時代　第III群遺構
1．D099号遺構全景
2．D099号遺構カマド検出状況
3．D100号遺構全景
図版82　歴史時代　第III群遺構
1．D101号遺構全景
2．D101号遺構カマド検出状況
3．D102号遺構全景
図版83　歴史時代　第III群遺構
1．D102号遺構カマド検出状況
2．D103号遺構全景
3．D103、D104号遺構全景
図版84　歴史時代　第III群遺構
1．D106号遺構全景
2．D106号遺構カマド検出状況
3．D107号遺構全景
図版85　歴史時代　第III群遺構
1．D108号遺構全景
2．D108号遺構カマド掘りかた
3．D102、D108号遺構重複関係全景
図版86　歴史時代　第III群遺構
1．D109号遺構全景
2．D109号遺構カマド検出状況

3．D110号遺構全景
図版87　歴史時代　第III群遺構
1．D110号遺構カマド検出状況
2．D111号遺構全景
3．D111号遺構カマド検出状況
図版88　歴史時代　第III群遺構
1．D112号遺構全景
2．D112号遺構カマド掘りかた
3．D113号遺構全景
図版89　歴史時代　第III群遺構
1．D113号遺構カマド検出状況
2．D114号遺構全景
3．D114号遺構カマド検出状況
図版90　歴史時代　第III群遺構
1．D115号遺構全景
2．D115号遺構カマド掘りかた
3．D116号遺構全景
図版91　歴史時代　第III群遺構
1．D116号遺構カマド検出状況
2．D123号遺構全景
3．D123号遺構カマド検出状況
図版92　歴史時代　第III群遺構
1．D124号遺構全景
2．D124号遺構カマド検出状況
3．D125号遺構全景
図版93　歴史時代　第III群遺構
1．D125号遺構カマド検出状況
2．D126号遺構全景
3．D126号遺構カマド検出状況
図版94　歴史時代　第III群遺構
1．D127号遺構全景
2．D127号遺構カマド検出状況
3．D128号遺構全景

図版95　歴史時代　第III群遺構
1．D128号遺構カマド検出状況
2．D129号遺構全景
3．D129号遺構カマド検出状況
図版96　歴史時代　第III群遺構
1．D132号遺構全景
2．D132号遺構カマド検出状況
3．D133号遺構全景
図版97　歴史時代　第III群遺構
1．D133号遺構遺物出土状況
2．D133号遺構遺物出土状況
3．D133号遺構カマド検出状況
図版98　歴史時代　第III群遺構
1．D134号遺構全景
2．D135号遺構全景
3．D135号遺構カマド検出状況
図版99　歴史時代　第III群遺構
1．D137号遺構全景
2．D137号遺構カマド検出状況
3．D138号遺構全景
図版100　歴史時代　第III群遺構
1．D138号遺構カマド検出状況
2．D141号遺構全景
3．D141号遺構カマド検出状況
図版101　歴史時代　第III群遺構
1．D143号遺構全景
2．D143号遺構遺物出土状況
3．D143号遺構カマド検出状況
図版102　歴史時代　第III群遺構
1．D144号遺構全景
2．D144号遺構カマド検出状況
3．D145号遺構全景
図版103　歴史時代　第III群遺構

1．D145号遺構カマド検出状況
2．D146号遺構全景
3．D146号遺構カマド検出状況
図版104　歴史時代　第Ⅲ群遺構
2．D147号遺構全景
2．D145号遺構カマド検出状況
3．D147号遺構カマド掘りかた
図版105　歴史時代　第Ⅲ群遺構
1．D148号遺構カマド検出状況
2．D148号遺構カマド掘りかた
3．D147、D148号遺構重複関係全景
図版106　歴史時代　第Ⅲ群遺構
1．H010号遺構全景
2．P001号遺構全景
3．P002号遺構全景
図版107　歴史時代　第Ⅲ群遺構
1．P004号遺構全景
2．P011号遺構全景
3．P013号遺構全景
図版108　歴史時代　第Ⅲ群遺構
1．P014号遺構全景
2．P015号遺構全景
3．P022号遺構全景
図版109　歴史時代　第Ⅲ群遺物
D061号遺構出土遺物
図版110　歴史時代　第Ⅲ群遺物
D061号遺構出土遺物
図版111　歴史時代　第Ⅲ群遺物
D063、D065、D067、D069号遺構出土遺物
図版112　歴史時代　第Ⅲ群遺物
D069号遺構出土遺物
図版113　歴史時代　第Ⅲ群遺物
D069、D070、D076号遺構遺物

図版114　歴史時代　第III群遺物
D088～D091号遺構出土遺物
図版115　歴史時代　第III群遺物
D091、D092、D095号遺構出土遺物
図版116　歴史時代　第III群遺物
D095～D101号遺構出土遺物
図版117　歴史時代　第III群遺物
D102～104、D106号遺構出土遺物
図版118　歴史時代　第III群遺物
D106、D108、D109号遺構出土遺物
図版119　歴史時代　等III群遺物
D109、D111、D112号遺構出土遺物
図版120　歴史時代　第III群遺物
D112～D114号遺構出土遺物
図版121　歴史時代　第III群遺物
D115、D116、D123～D125、D128号遺構出土遺物
図版122　歴史時代　第III群遺物
D125、D128、D129、D133、D134号遺構出土遺物
図版123　歴史時代　第IV群遺物
D133、D134、D137、D138、D143号遺構出土遺物
図版124　歴史時代　第III群遺物
D143～D145号遺構出土遺物
図版125　歴史時代　第III群遺物
D145、D146号遺構出土遺物
図版126　歴史時代　第III群遺物
D146～D148、D103、D145号遺構出土遺物
図版127　歴史時代　第III群遺物
D095、D103、D108、D129、D134、D143、D145号遺構出土遺物
図版128　歴史時代　第III群遺物
第III群出土墨書土器
図版129　歴史時代　第III群遺物
第III群出土墨書土器
図版130　歴史時代　第III群遺物

第Ⅲ群出土墨書土器
図版131　歴史時代　第Ⅲ群遺物
第Ⅲ群出土墨書土器
図版132　歴史時代　第Ⅳ群遺構
1．D048号遺構全景
2．D048号遺構カマド検出状況
3．D071号遺構全景
図版133　歴史時代　第Ⅳ群遺構
1．D071号遺構カマド検出状況
2．D072号遺構全景
3．D073号遺構全景
図版134　歴史時代　第Ⅳ群遺構
1．D073号遺構遺物出土状況
2．D073号遺構カマド検出状況
3．D074号遺構全景
図版135　歴史時代　第Ⅳ群遺構
1．D074号遺構遺物出土状況
2．D074号遺構カマド検出状況
3．D075号遺構全景
図版136　歴史時代　第Ⅳ群遺構
1．D075号遺構全景
2．D075号遺構カマド検出状況
3．D081号遺構全景
図版137　歴史時代　第Ⅳ群遺構
1．D081号遺構カマド検出状況
2．D082号遺構全景
3．D083号遺構全景
図版138　歴史時代　第Ⅳ群遺構
1．D083号遺構カマド検出状況
2．D084号遺構全景
3．D084号遺構カマド検出状況
図版139　歴史時代　第Ⅳ群遺構
1．D085号遺構全景

２．D085号遺構カマド検出状況
３．D086号遺構全景
図版140　歴史時代　第Ⅳ群遺構
１．D087号遺構全景
２．D089、D071号遺構重複関係全景
３．D087号遺構カマド検出状況
図版141　歴史時代　第Ⅳ群遺構
１．H001号遺構全景
２．H002号遺構全景
３．H003号遺構全景
図版142　歴史時代　第Ⅳ群遺構
１．H004号遺構全景
２．H005号遺構全景
３．H006号遺構全景
図版143　歴史時代　第Ⅳ群遺構
１．H007号遺構全景
２．H008号遺構全景
３．H009号遺構全景
図版144　歴史時代　第Ⅳ群遺物
D048、D072～D073号遺構出土遺物
図版145　歴史時代　第Ⅳ群遺物
D074、D075、D081号遺構出土遺物
図版146　歴史時代　第Ⅳ群遺物
D082～D085号遺構出土遺物
図版147　歴史時代　第Ⅳ群遺物
D085～D087号遺構出土遺物
図版148　歴史時代　第Ⅳ群遺物
D072、D074、D075、D082、D085、H006号遺構出土遺物
図版149　歴史時代　第Ⅳ群遺物
第Ⅳ群出土墨書土器
図版150　歴史時代　第Ⅳ群遺物、第Ⅴ群遺構
第Ⅳ群出土墨書土器
１．D009号遺構全景

図版151　歴史時代　第Ⅴ群遺構

1．D009号遺構カマド検出状況

2．D015号遺構全景

3．D015号遺構カマド検出状況

図版152　歴史時代　第Ⅴ群遺構

1．D017号遺構全景

2．D017号遺構カマド掘りかた

3．D018号遺構全景

図版153　歴史時代　第Ⅴ群遺構

1．D018号遺構カマドA検出状況

2．D018号遺構カマドB検出状況

3．D019号遺構全景

図版154　歴史時代　第Ⅴ群遺構

1．D078号遺構全景

2．D078号遺構カマド検出状況

3．D015、D078号遺構重複関係全景

図版155　歴史時代　第Ⅴ群遺物

D009、D015、D071、D019、D078号遺構出土遺物

図版156　歴史時代　第Ⅵ群遺構

1．D032号遺構全景

2．D033号遺構全景

3．P003号遺構全景

図版157　歴史時代　第Ⅶ群遺構

1．D023号遺構全景

2．D023号遺構カマド検出状況

3．D024号遺構全景

図版158　歴史時代　第Ⅶ群遺構

1．D024号遺構カマド検出状況

2．D025号遺構全景

3．D027号遺構全景

図版159　歴史時代　第Ⅶ群遺構

1．D027号遺構カマド検出状況

2．D028号遺構全景

3．D028号遺構カマド検出状況
図版160　歴史時代　第Ⅶ群遺構
1．D029号遺構全景
2．D030号遺構全景
3．D030号遺構カマド検出状況
図版161　歴史時代　第Ⅶ群遺構
1．D031号遺構全景
2．D031号遺構カマド検出状況
3．D034号遺構全景
図版162　歴史時代　第Ⅶ群遺構
1．D042号遺構全景
2．D042号遺構カマド検出状況
3．D043号遺構全景
図版163　歴史時代　第Ⅶ群遺構
1．D043号遺構カマドB検出状況
2．D044号遺構全景
3．D045号遺構全景
図版164　歴史時代　第Ⅶ群遺構
1．D046号遺構全景
2．D046号遺構カマドA・B検出状況
3．D050号遺構全景
図版165　歴史時代　第Ⅶ群遺構
1．D050号遺構遺物出土状況
2．D051号遺構全景
3．D051号遺構カマド検出状況
図版166　歴史時代　第Ⅶ群遺構
1．D052号遺構全景
2．D053号遺構全景
3．D053号遺構カマド検出状況
図版167　歴史時代　第Ⅶ群遺構
1．D054号遺構全景
2．D079号遺構全景
3．D079号遺構カマド検出状況

図版168　歴史時代　第Ⅶ群遺構

1．P006号遺構全景

2．P023号遺構全景

3．P025号遺構全景

図版169　歴史時代　第Ⅶ群遺物

D025、D027、D030、D031、D042号遺構出土遺物

図版170　歴史時代　第Ⅶ群遺物

D044～D046号遺構出土遺物

図版171　歴史時代　第Ⅶ群遺物

D050、D051、D054号遺構出土遺物

図版172　歴史時代　第Ⅶ群遺物

D023、D025、D029、D042、D050、D051、D054号遺構出土遺物

図版173　歴史時代　第Ⅶ群遺物、第Ⅷ群遺構

第Ⅶ群出土墨書土器

1．D003号遺構全景

2．D003号遺構カマド検出状況

図版174　歴史時代　第Ⅷ群遺構

1．D004号遺構全景

2．D004号遺構カマド検出状況

3．D007号遺構全景

図版175　歴史時代　第Ⅷ群遺構

1．D008号遺構全景

2．D008号遺構カマド検出状況

3．D035号遺構全景

図版176　歴史時代　第Ⅷ群遺構

1．D038号遺構全景

2．D038号遺構カマド検出状況

3．D142号遺構全景

図版177　歴史時代　第Ⅷ群遺構

1．D149号遺構全景

2．D149号遺構カマド検出状況

3．D149号遺構カマド掘りかた

図版178　歴史時代　第Ⅷ群遺物

D003、D007、D038、D142、D149号遺構出土遺物

図版179　歴史時代　その他の遺構

1．水田部調査状況（北より）

2．水田部土層断面

3．水田部遺物出土状況

序　　章

第1節　発掘調査に至る経過

萱田地区における埋蔵文化財の発掘調査は、昭和52年度の権現後遺跡に始まり、一部用地上の問題があるため調査が未着手となっている部分があるものの、順調な進渉を呈している。

昭和53年度後半期に至って、用地上の問題も解決する方向に向い、当初において計画された萱田地区の全体的な遺構確認調査も広範囲にわたり実施できる運びとなった。

北海道遺跡についても、昭和53年度後半期の11月6日から翌昭和54年3月31日にわたり実施した約 20 ha におよぶ面的な遺構確認調査で坊山・井戸向遺跡などと共に遺構が確認されており、この成果を基に、千葉県教育委員会、住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部、財団法人千葉県文化財センターの三者による現地踏査、ならびに協議が行われた。

その結果、北海道地区の 7 ha について、昭和54年度に発掘調査を実施する計画が策定された。実施計画は、54年4月2日より翌55年3月31日までの間に集落遺跡の発掘調査と、首都圏都市開発本部の要望で、造成工事に先行して沈砂池部分を工事するために、 7 ha の内 0.9 ha について旧石器時代まで終了させるというものであった。

この実施計画に基づき昭和54年度の委託契約が締結され、54年4月2日より本格的な発掘調査を実施することとなった。しかし、権現後遺跡等、他の計画の関係で実際の発掘調査は6月5日より開始することとなり、これに先だって 7 ha にわたる調査範囲の表土層除去作業を実施した。

発掘調査は、全体的な計画の中で一部見直しが必要となり、県教育委員会、首都圏都市開発本部、千葉県文化財センターの三者により協議が持たれ、北海道遺跡については旧石器時代の本調査 0.9 ha （沈砂池部分）の他に、残る 6.1 ha の範囲について旧石器時代の確認調査を遺構調査終了後実施することとなり、翌昭和55年3月31日をもって終了させることとなった。

第2節　遺跡の位置と環境

関東地方南東部に広く横たわる下総台地は、後新世に形成された標高20m～30mの低平な洪積台地である。台地周辺は、長期間の浸食によってできあがった樹枝状の谷が奥深くまで入り込んでおり、低湿な谷津田は多くは水田として、高燥な台地上は、畑地、住宅地、工場地帯として活用に供されている。

台地上は形成過程や土層の堆積様式の違いにより、さらに数段の地形面にわかれ、古いものより下総上位面、下総下位面、千葉第1段丘、千葉第2段丘と呼ばれており、下総上位面より高度が漸減していく[註1]。

八千代市は、千葉県北部のほぼ中央部の下総台地上にあり、北東部に印旛沼が横たわる。周辺は、北に印旛沼水系の一つである神崎川が流れ、南西側に千葉市より習志野市、船橋市、鎌ケ谷市を通って松戸付近に至る分水界、東は、印旛沼より南にのびる樹枝状谷によって区画されている。ほぼ中央部を印旛沼より新川（旧平戸川）が南方に流れ花見川と接続している。八千代市の地形は、印旛水系と洪積台地が複雑に入り組んだ開析谷によって構成されている。

北海道遺跡は、八千代市のほぼ中央部に位置しており、八千代市萱田字北海道699番地他に所在する。現在の東京湾より直線距離にして約 10 km 離れている。

標高は10mから20mにあり、北東に向って緩やかに傾斜し、新川に突出する舌状台地西半部に位置する。

調査前には台地全域は畑地となっていたが、周囲は南西方向に入り込む須久茂谷津と、東側は竹林、住宅地、畑地などによってかこまれている。遺跡の北側は、須久茂谷津を挟み権現後遺跡と対峙し、南側から西側は坊山遺跡、井戸向遺跡が接続している。

遺跡の範囲は南北400m、東西約300mにおよぶ広大な面積を有している。遺跡は二つの段丘面に区分される。一つは標高10mから15mに位置し、須久茂谷津に向って緩やかに傾斜し、ほぼ平坦な地域。いま一つは標高15mから20mの急斜面上、および標高約20m内外の台地縁辺部である。

遺跡の名称は、字名を使用するものであるが、実際の字名には北海道の他に熊野、それに大和田新田字坊山、また、北海道と熊野に挟まれて、萱田町字北海道が位置しており、かなり入り組んだ状況を呈しているが、これら小字中で北海道を代表させ、命名した。

北海道の地名の由来については明らかに把握することはできないが、北海道遺跡の東側、新川の河道近く飛地状に9か所にわたり北海道の字名を認めることができ、その地域の南側には、南海道の字名が対称的に位置している。因に東海道の字名は、勝田川右岸に位置し、西海道の字名は高津地区に位置しており、何らかの関係のうえで成立した地名であることが窺えるところである。

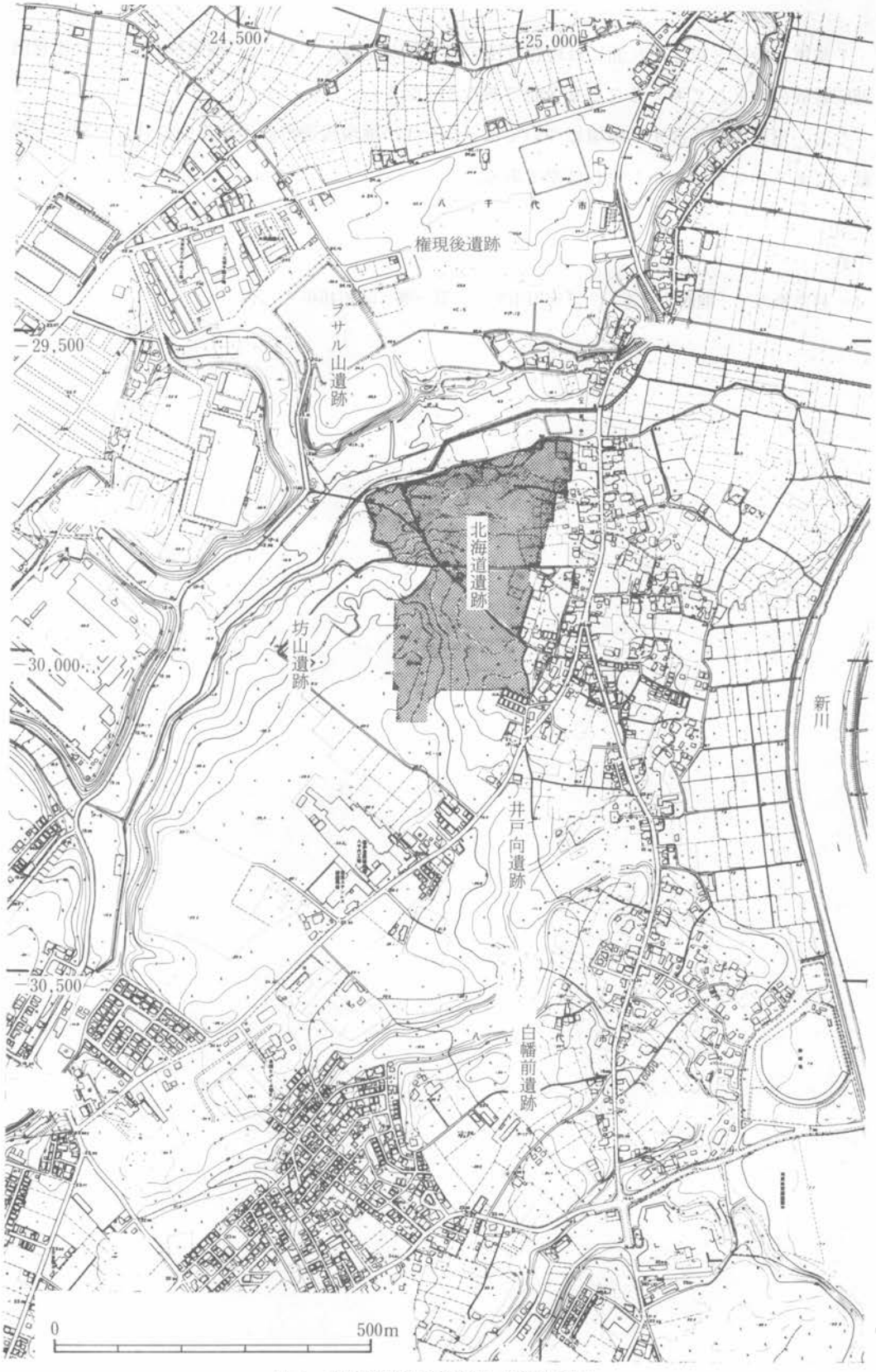


図1　北海道遺跡の位置と周辺地形図

千葉第１段丘と第２段丘面には現在萱田の町並みが位置しており、『神鳳抄』に見られる萱田御厨縁故の地として考えることも可能であろう（図１）。

なお、自然環境、歴史的環境については『八千代市権現後遺跡』の報告中に詳しい記述を掲載してあるので参照いただければ幸である。

註

1　杉原重夫　「地形の発達」　『市川市史』　第一巻　昭和46年

第3節　調　査　の　経　過

1．調査経過の概略（図2、3）

(1)　昭和53年度事業

昭和53年度における北海道遺跡の調査は、萱田字北海道、字井戸向、大和田新田字坊山の地域約 20 ha におよぶ遺構確認調査に包括して、昭和53年11月 6 日から開始し、翌昭和54年 3 月31日にわたり実施したところである。

約 20 ha の広範囲な調査区内には、土盛した部分や山林、それに削平されている部分などが点在しており、用地上の問題ですべてにわたり確認調査が実施できたわけではない。

確認調査の結果、北海道地区においては18軒の住居跡の落ち込みを検出することができた。住居跡の確認率は面積に比較して低いが、分布状況からは地区南側、すなわち井戸向地区と接する部分に住居跡等が認められないものの、18軒の住居跡は全面に広がりを有する状況を呈しており、大形な集落遺跡であることが推測できた。また、住居跡の他にピット、溝なども確認できた。

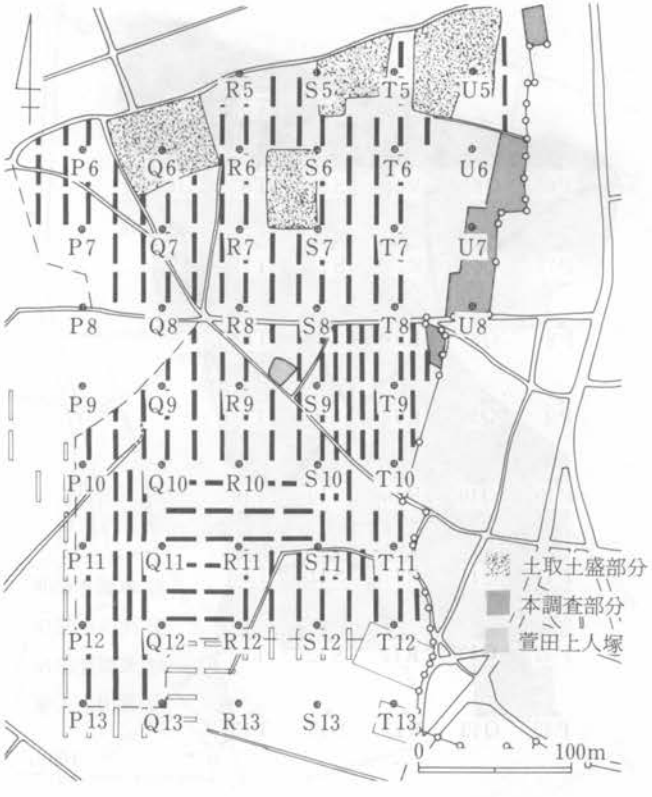


図 2　昭和53年度確認調査状況図

昭和53年度の担当職員は下記のとおりである。なお○印は直接現場担当者、◎印は直接整理担当者である。

調査部長	西野　元	(54．3．31まで)
班長	沼沢　豊	
主任調査研究員	堀部昭夫	(53．8．1から54．3．31まで)
調査研究員	阪田正一	(54．3．31まで)
調査研究員	大原正義	(54．3．31まで)
調査研究員	○瀬戸久夫	(54．1．1から3．31まで)
調査研究員	高田　博	(53．7．31まで)
調査研究員	○加藤修司	
調査研究員	関口達彦	

(2)　昭和54年度事業

昭和54年度におけ北海道遺跡の発掘調査は、昭和53年度に実施した遺構確認調査の成果に基づき、7haの範囲を設定した遺構の本調査と、首都圏都市開発本部からの要望で7haの内、

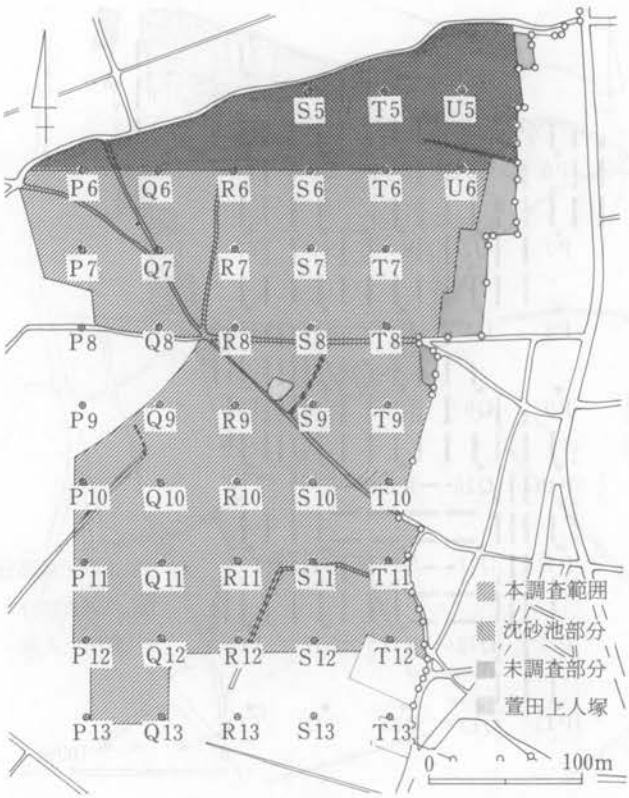


図3　昭和54・55年度本調査範囲

造成工事に先だって工事を実施する沈砂池 0.9 ha の範囲について遺構調査後旧石器時代の本調査を実施する計画のもとに調査を開始した。

実際の発掘調査は、権現後遺跡の旧石器時代の継続調査が 4 月当初に計画されている関係で、6 月 5 日より本格的な発掘調査を実施することとし、本調査に先だって表土層の除去作業を実施した。

しかし、萱田地区の全体的な計画の中で一部見直しが必要となり、三者協義をした結果、旧石器時代の調査、沈砂池部分 0.9 ha の他に、 6.1 ha についても旧石器時代の確認調査を実施することになり、昭和55年 3 月31日をもってすべての調査工程が終了した。

発掘調査範囲のほぼ中央に位置する萱田上人塚が現状保存されることになった。上人塚は 1 辺11m角で高さ 3 mを有する塚で、正中二年 (1325年) 銘のある阿弥陀如来一尊種子の板碑と、紀年銘不明な断碑で阿弥陀如来一尊種子のものが発見されている。その他、天保三年、明治十二年、大正九年、昭和四三年銘の出羽三山碑が合計 8 基と石仏供養塔が位置している。

昭和54年度の担当職員は下記のとおりである。

調査部長	白石竹雄	
班長(部長補佐)	山田友治	(55. 3. 31まで)
班長	沼沢豊	
調査研究員	○萩野谷悟	
調査研究員	○加藤修司	
調査研究員	関口達彦	(55. 3. 31まで)
調査研究員	橋本勝雄	
調査研究員	○鳴田浩司 (旧姓 丸山)	

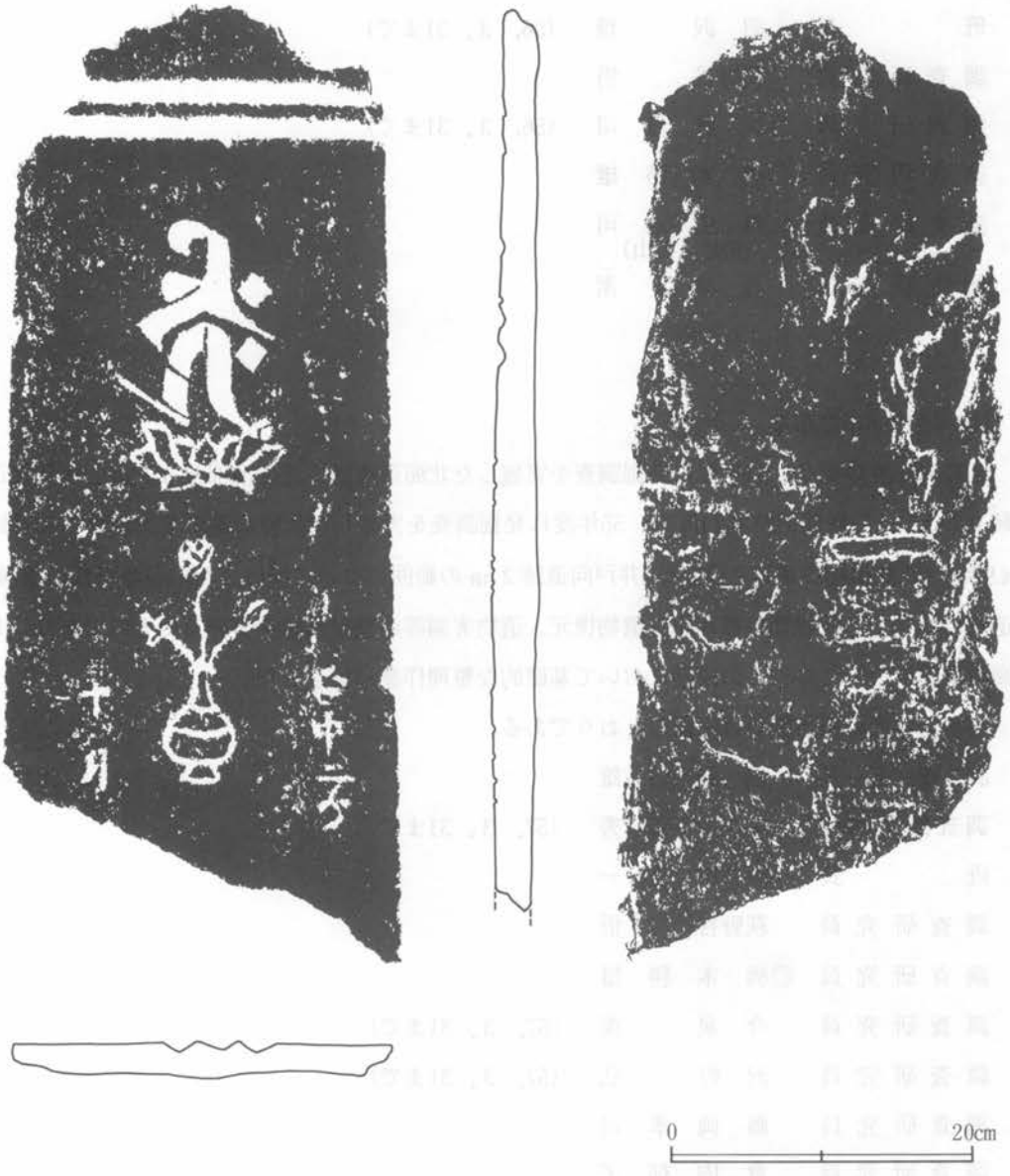
(3) 昭和55年度事業

昭和55年度事業は、54年度に所在確認済みの旧石器時代の遺構について本調査を実施した。この調査は、北海道坊山遺跡として 11 ha について実施したものであるが、混乱を期たす可能性を有するため、上層遺構の発掘調査が終了している 7 ha の範囲内で確認できた旧石器時代の遺構群については整理、報告書作成の段階で坊山遺跡から分離して取扱うこととした。したがって、北海道遺跡における旧石器時代の遺構群の調査は、54年度に沈砂池として調査が終了している 0.9 ha を除いた 6.1 ha が55年度の調査範囲となり、残る 4.9 ha が坊山遺跡の調査範囲となる。

発掘調査と併行して54年度に発掘調査を実施した内、旧石器時代を除く集落遺跡について、記録類の分類と整理、出土遺物の復元作業から遺物実測作業まで実施した。

1．萱田上人塚遠景（東より）

2．萱田上人塚三山碑



萱田上人塚出土板碑（八千代市教育委員会蔵）

昭和55年度の担当職員は下記のとおりである。

調査部長	白石竹雄	
調査部長補佐	栗本佳弘	(56. 3. 31まで)
班長	沼沢豊	(56. 3. 31まで)
調査研究員	萩野谷悟	
調査研究員	◎加藤修司	(56. 3. 31まで)
調査研究員	○橋本勝雄	
調査研究員	鳴田浩司 (旧姓 丸山)	
調査研究員	今泉潔	

(4) 昭和56年度事業

昭和56年度事業は、54年度に発掘調査を実施した北海道遺跡の沈砂池部分 0.9 ha 、権現後遺跡 0.75 ha 、白幡前遺跡 0.2 ha と、55年度に発掘調査を実施した北海道遺跡 6.1 ha 、坊山遺跡 4.9 ha (北海道坊山遺跡 11 ha)、井戸向遺跡 2 ha の範囲において検出した旧石器時代の遺構、遺物について、記録類の整理から遺物復元、遺物実測等の整理作業を実施したものであり、北海道遺跡については、この段階において基礎的な整理作業が終了した。

昭和56年度の担当職員は下記のとおりである。

調査部長	白石竹雄	
調査部長補佐	中山吉秀	(57. 3. 31まで)
班長	阪田正一	
調査研究員	萩野谷悟	
調査研究員	◎橋本勝雄	
調査研究員	今泉潔	(57. 3. 31まで)
調査研究員	沢野弘	(57. 3. 31まで)
調査研究員	藤岡孝司	
調査研究員	倉内郁子 (旧姓 水野)	

(5) 昭和58年度事業

北海道遺跡については、昭和56年度をもって基礎的な整理作業は終了しており、報告書刊行に向けた作業を余すところになっていたが、57年度は権現後遺跡の原稿執筆作業を計画した関係で、58年度に実施する計画を立てた。

58年度における北海道遺跡に関する作業は、55、56年度の過年度において実施した基礎的な整理作業を進展させ、北海道遺跡の発掘成果を整理、分析し、原稿執筆まで実施した。

実際の整理作業にあたっては、権現後遺跡において用いた方法を踏襲し、共通の資料提示ができるように努めたが、発掘調査方法において権現後遺跡の場合と相違する面があるため必ずしも同様に整理ができたわけではない。

昭和58年度の担当職員は下記のとおりである。

調査部長　白石竹雄　(59．3．31まで)
調査部長補佐　根本　弘
班長　◎阪田正一
調査研究員　◎橋本勝雄　(59．3．31まで)
調査研究員　金丸　誠　(59．9．30まで)
調査研究員　◎藤岡孝司

以上、調査の経過について概略を記したが、発掘調査及び整理作業については別項にも記載しているので併せて参考にしていただければ幸である。

2．調査の方法（図4）

遺跡全体の絶対的な平面的位置づけと、開発によって後世に地形的な変動があった場合の遺跡、および遺跡内の遺構の位置の復元、さらに将来隣接地における埋蔵文化財調査時の関連的位置づけを目的として公共座標（IX系）をもって発掘調査区全域にわたり方眼杭（点）を設定した。

方眼杭の設定にあたっては、座標X＝−29,500と、座標Y＝24,000の交点を基点にX軸、Y軸をそれぞれ50m間隔で区切り、X軸にアルファベット、Y軸に数字を用い、両者の組み合わせによって方眼割りを表示することとした。因に基点はA−1となる。

こうしてできた50m×50mのアルファベットと数字の組み合わせを大グリッドとし、大グリッドはさらに5m×5mの小グリッド100個に分割した。

小グリッドの名称は北西隅の杭を基準にして付すこととし、大グリッドでA−1地区の場合、

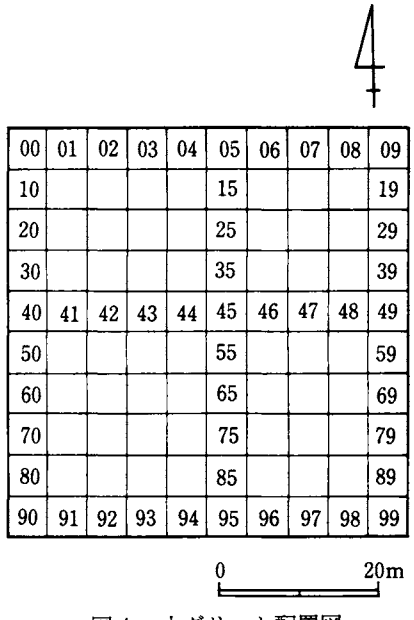


図4　小グリット配置図

小グリッドではA－1－00～99と言う表示となる。すなわち大グリッドの北西隅は、A－1－00、南西隅は、A－1－90、北東隅は、A－1－09、南東隅はA－1－99となる。

なお、大、小グリッドの区割および整数値での座標については、既に報告している権限後遺跡におけるものと異なっている。詳細については報告書に掲載している方眼杭成果一覧を対比していただければ幸である。

さて、実際の遺構調査については下記のとおり実施した。

(1) 遺構関係

遺構は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、ピット、溝等があり、調査方法はいずれも竪穴住居跡を基準とした方法をとった。

竪穴住居跡は四分割法に基づき、十字に土層観察用のベルトを設け、土層の堆積状況を把握し、各分割部分を層位的に掘り下げた。調査途中で出土した遺物はすべて図面上に記録し、併せて出土層位、出土レベルを遺物台帳に記載した。

床面、壁面が検出できた段階で十字に残した土層を実測(1/20)し、その後ベルトを除去し、内部施設の精査を実施した。精査終了後、遺構平面図（1/20）およびエレベーション図（1/20）を作成し、遺構全体の俯瞰写真撮影を実施した。カマド等についてはこれら一連の作業が終了した段階で調査を実施し、焚き口部分から煙出し部分に至る長軸方向と、左右両袖を通過する短軸方向の土層断面とカマド本体および掘りかたについて平面図10分の1の縮尺で実測した。

写真撮影は、遺構の全景、遺物出土状況、カマド等の検出状況を中心に、その他必要に応じて撮影を実施した。撮影に使用したフィルムはモノクロ4×5判、35㎜判のネガフィルムと35㎜判カラースライドフィルムである。

なお、遺構調査にあたっては、竪穴住居跡はD、掘立柱建物跡はH、ピットはP、溝等の遺構はMの略号を用い、記録類に記載した。

(2) 旧石器関係

遺跡全体にグリッドを設定し、立川ローム層から武蔵野ローム層上面にわたり遺物の包含層を確認した。確認グリッドは2m×2mを基準としたが、中にはこれより規模の小さいグリッドで確認した部分もある。

本調査は確認調査の成果に基づき石器が出土したグリッドを中心に出土層位を重点的に調査を展開させてブロックの検出にあたった。ブロックは標高11mから15mの範囲の千葉第1段丘面に多く検出することができ、P－6、Q－5・6、R－5～7、S－4～9、T－4～9の地域に広範囲に認められた。P－9・10、Q－10・12、R－10の地域は、下総下位面から千葉

第1段丘面に向かって斜面を形成している地形を呈している関係であろうか、先に比較して少ない傾向を呈している。

検出した遺物包含層は順次掘り下げ、ブロック全体を検出した。出土遺物は、出土地点、出土層位、出土レベルを図面上（1/20）に記録し、状況に応じて全景写真の撮影を実施した。また、遺跡全体の土層断面図もこれらの作業と併行して実施した。

なお、整理の方法については、旧石器関係、遺構関係のいずれも権現後遺跡の方法に準拠したので詳細については報告書を参照いただければ幸である。

3．日誌抄

昭和53年度の発掘調査

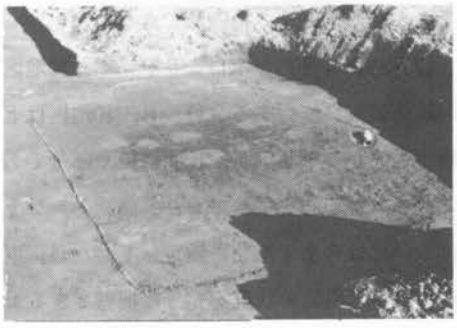
昭和53年度の発掘調査は、用地の確保が可能になった萱田字北海道、宇井戸向、大和田新田字坊山の地域約20haについて遺構の確認調査を11月6日から実施した。北海道遺跡についても、この20ha内に包括して実施したところである。

11月6日（月）　確認調査に先行して本日より調査区設定のため杭打ち作業をR～U－5地区より順次南に向って開始する。また、この作業と併行して設杭のための草刈作業も実施する。

11月15日（水）　本日より確認調査をT、U－5地域から開始する。この地域には土盛部分等があるため思うようにトレンチを入ることができない。

11月24日（金）　S－5地区において2か所に遺構の落ち込みを確認する。住居跡であるかを判断するために一部拡張作業を実施した。その結果、歴史時代の住居跡（D023）を検出した。

11月28日（火）　本日よりR－5地区において確認調査を開始し、Q－5地区に近く、落ち込みを確認できたため拡張作業を実施し、平面形の確認をした。その結果、方形を呈する歴史時代の住居跡であることが判明した



1．遺構検出状況

2．遺物出土状況

（D009）。拡張作業中、住居跡の覆土上層部より完形の長頸瓶が出土した（写真）。

P－5、6、Q－5、6地区には土盛部分があり、確認調査が実施できないため、P～T－7地区に移行する。

11月29日（水）　本日よりP～T－7地区の確認調査を開始する。

12月12日（火）　本日をもってP～T－7

地区およびその北方における確認調査が終了し、P～T－8地区の確認調査に移行する。Q－8地区において2か所で住居跡の落ち込みを確認した。

12月18日（月） 本日よりQ、R－9地区の確認調査を開始する。R－9地区で溝2条を確認した。

12月22日（金） 本日よりS－9地区の確認調査を開始する。この地区は他の地区と比較して表土層が厚く約50cmを計る。遺構と考えられる落ち込みは確認できない。

12月25日（月） 本日よりP－T－10地区の確認調査に移行する。Q、R－10地区は下総下位面から千葉第1段丘面に続く部分であるため。緩斜面を呈しており、確認トレンチについては今まで南北に設定していたが、東西に設定し斜面の状況を充分に把握できるようにした。

12月27日（水） 本日をもって昭和53年の調査を閉鎖すべく、調査区域沿の安全柵等の設置検点作業を実施し終了した。

昭和54年1月8日（月） 本日より現場作業を再開する。P－9地区について実施したが、遺構、遺物は検出できなかった。

1月17日（水） P－9地区に引き続き台地部分のP－11地区について確認調査を開始する。中央トレンチで小形な歴史時代の住居跡を確認したため、このような小形な住居を見逃さないように中央トレンチの中間にトレンチを追加設定し実施した。

1月18日（木） 追加設定したトレンチの確認調査も本日で終了したが、意に反して台地上部分では小形な歴史時代の住居跡1軒の確認にとどまったが、他に遺構がまったく存在しないと言うことでなく、トレンチ調査によって充分に遺構を捕捉できなかった点にあると思われる。

1月25日（木） 本日をもって北海道地区における遺構確認調査を終了する。確認調査の結果、歴史時代の住居跡と考えられる落ち込み18か所とピット、それに溝を確認した。住居跡の補捉率は面積に対比して少ないが、分布状況は5ラインより11ラインまでの南北範囲と、PラインよりTラインまでの東西範囲約7haに認めることができ、権現後遺跡での状況より察すれば、確認した18か所の住居跡は群構成上の一部と考えて良いであろう。

台地上に1か所確認した住居はかなり孤立した状況を呈しており、いわゆる離れ国分的な印象を受けるが、台地下に広がる住居跡から見ればこの部分も1軒単独ということはあり得ないであろう。

昭和54年度の調査

昭和54年度の調査は、53年度の確認調査の成果に基づいて 7ha を対象面積として遺構の本調査と 7ha の内 0.9ha について、首都圏都市開発本部からの要望で、遺構調査後旧石器時代の調査を実施することになった。

本調査に先行して 7ha の表土層除去作業を実施し、本格的な遺構調査は6月5日から開始することとなった。

6月5日（火） 本日よりD021を手始めに遺構調査を開始する。また、遺構調査と併行して調査補助員の休憩所設置等の作業を実施する。さらに遺構確認面の精査作業も実施する。

6月7日（木） D021の調査が進展するに従って、カマドをもたない住居であることが判明し、古墳時代中期（和泉）の住居跡も存在することが明らかになった。

6月9日（土） 遺構確認面の精査も順調

に進捗し、本日までのところ北部で65軒を検出した。53年度に実施した確認調査の予測より多い遺構の検出になると思われる。

6月18日（月）　D021の調査が終了し明日より北東部に所在するD001から順次調査を実施することとした。

6月22日（金）　19日から昨日まで強風のため遺構調査が実施できずにいたが、天候にも恵まれたため、本日よりD001～D008、D035、D036について調査を開始する。

7月2日（月）　D029、D034の調査を開始する。強風のため予定していた遺構の写真撮影を中止する。

7月16日（月）　発掘調査を継続しているD014から滑石製模造品等が床面から出土している。工房跡と考えて良いであろう。

7月26日（木）　本日からD015、D023の発掘調査を開始する。遺構調査と併行してカマドの調査を開始する。

8月1日（水）　D014からは相変わらず滑石製模造品等が出土している。既に調査を実施しているD010、D011、D024、D057が本日をもって終了する。

8月8日（水）　本日からD053、D074、D075の調査を開始する。8月11日から8月16日まで盆休みとなるため新たに着手することを差し控えた。

8月31日（金）　本日よりD080～D082の調査を開始する。

9月18日（火）　本日までのところ竪穴住居跡77軒について調査が終了した。ただし、カマドの調査については内10軒が未了となっており、カマド調査を集中的に実施することとした。

10月1日（月）　先週一週間は雨天のため発掘作業ができず、作業の進捗が心配される。本日は住居の継続調査の他に溝について一部実施した。

10月12日（金）　調査対象地域のほぼ中央部は、段丘面へ移行する斜面を形成している地形的な特徴を示しているが、この斜面部において黒色土層中に構築している住居が確認できたため、他にこのような住居が存在するか否か確認する必要が生じた。

D090、D092、D093、D102の調査が終了する。

10月22日（月）　D118～D121、D136の5軒について住居跡の土層断面図を実測し完掘に向ける。

11月12日（月）　遺構調査はすべて終了していないが、空中写真撮影の都合で本日より調査区全面にわたり清掃作業を実施する。

11月30日（金）　本日空中写真撮影を実施する。天候にも恵まれて良好な写真を得ることができた。

12月3日（月）　遺構調査は部分的に残るものの 0.9 ha について旧石器時代の確認調査を開始する。T－5－40より頁岩製の剝片が出土した。

12月6日（木）　T－5－20、T－5－40のⅣ層下部より頁岩製の石器類8点が出土した。ブロックに相当する可能性がある。

12月13日（木）　本日をもって沈砂池部分 0.9 ha の旧石器時代の確認調査を終了する。7か所において遺物を検出し、この部分について本調査を実施することとなった。

12月27日（木）　本日をもって昭和54年の調査を閉鎖すべく、発掘器材の点検、安全柵等の点検を実施した。

昭和55年1月7日（月）　本日より現場作業を再会する。旧石器時代の本調査、集落遺跡の補足調査を実施する。

2月8日（金）　本日をもって沈砂池部分の旧石器時代本調査を終了する。調査の結果IV層からVII層にかけて12か所にブロックを検出し、併せて炭化物の集中箇所2か所を検出した。

遺構関係の調査も実測、写真撮影をのこすのみとなった。

2月21日（木）　本日をもって北海道遺跡の遺構調査を終了する。旧石器時代の確認調査を実施すべく調査区の設定作業を実施する。

3月31日（月）　旧石器時代の確認調査は20か所で確認でき、本日をもって北海道遺跡の昭和54年度全調査を終了する。

昭和55年度の調査

昭和55年度の調査は、旧石器時代の本調査を中心に実施した。実際の調査は、北海道坊山遺跡として11 haにおよぶが、この内北海道遺跡については6.1 haが対象となる。調査は4月2日から翌年の3月5日まで実施した。

4月2日（月）　本日より北海道遺跡の旧石器時代の本調査を開始する。

5月2日（金）　S－1～S－5の調査が本日をもって終了した。また、拡張区より新たにS－54、55の両ブロックを検出した。

5月24日（土）　S－6～S－11の調査が本日をもって終了した。調査は引き続き南へ移動させ、S－12～14の調査を開始することとした。

6月6日（金）　本日をもって、ほぼ8ライン以北における本調査を終了する。

6月24日(木)　10ライン以南のS－19～S－25の調査が本日で終了した。新たに拡張区よりS－56、57を検出したため、引き続き南へ調査を移動させる。

7月1日（火）　本日をもってS－26、27の調査を終了する。

7月5日（土）　本日をもってS－29の調査を終了する。

7月14日（月）　S－34の調査終了に伴って、本日をもって北海道遺跡の調査を一時中止し、11月5日まで坊山遺跡の調査にとりかかる。

11月6日（木）　前日、坊山遺跡の調査が終了したため、本日より北海道遺跡の調査を再開する。

12月17日（水）　S－82～84の調査が本日をもって終了した。

1月29日（木）　S－80の調査が本日をもって終了した。

2月5日（木）　本日をもってS－81の調査が終了した。

2月13日（木）　本日をもってS－79、86、88、89、91～94、102の調査が終了した。

2月19日（水）　S－90の調査が本日をもって終了した。

3月5日（木）　S－90、100の調査が終了したので、本日をもって北海道遺跡全域における旧石器時代の調査を終了する。

昭和55年度の整理作業

昭和55年度の整理作業は、54年度に実施した集落遺跡の基礎整理として、図面、写真整理から遺物実測作業まで実施した。弥生時代、古墳時代、そして歴史時代にわたる集落遺跡で、145軒を数える。

4月1日（火）　本日より水洗、註記作業と図面修正作業を開始した。また、膨大な資料を円滑に処理できるよう年間の作業工程を計画した。

5月14日（水）　本日より現場において撮影した、遺構、遺物出土状況等の写真整理を開

始する。

5月30日（金）　写真整理は本日をもって終了する。ファイリングキャビネットを使用し、保管、活用をはかる。

6月2日（月）　既に水洗、註記が終了している遺構の遺物復元作業を開始する。

7月9日（水）　本日をもって水洗、註記作業を終了する。図面整理が終了した分から順次第2原図の作成に取り掛かった。

7月16日（水）　復元作業によって復元できた遺物について、その接合状況を遺物カードに記入する作業を開始した。

8月14日（木）　遺物カードの記入が終了した遺構について、平面、垂直の遺物出土状況図にマークする作業を開始する。

10月9日（木）　本日より復元作業が終了した遺構から順次実測作業を開始する。採拓が必要な遺物については図面上でその旨指示し、円滑に採拓できるようにした。

12月26日（金）　本日をもって遺物復元作業を終了する。

1月7日（水）　本日より採拓作業を開始する。採拓は坏形土器底部、甕形土器等胴部に叩きじめ痕が認められる土器について実施する。

1月17日（土）　遺物実測作業の関係で、第1段階の採拓作業を終了する。

3月26日（木）　本日をもって遺物実測作業を終了する。実測終了に伴って採拓作業を再開する。

3月30日（月）　すべての整理作業が終了したため、最終的な台帳類の整理作業を実施し、3月31日をもって終了する。

昭和56年度の整理作業

昭和56年度の整理作業は、過年度に発掘調査して出土した旧石器時代の資料を整理するものとして、北海道遺跡、坊山遺跡をはじめ権現後遺跡等について実施した。

4月1日（水）　本日より整理作業を開始する。水洗、註記および図面整理、台帳整理を始める。

5月11日（月）　本日をもって水洗、註記作業および台帳整理を終了する。

5月12日（火）　母岩別資料の分類および遺物の接合作業を開始する。

6月1日（日）　本日より遺物実測作業を開始する。

8月1日（土）　本日をもって遺物実測作業を終了する。

8月18日（火）　写真関係の整理作業を開始する。

9月1日（火）　遺物台帳の作成を開始する。

9月8日（火）　本日をもって写真関係の整理作業を終了する。

10月5日（月）　遺物台帳の作成が本日で終了する。

11月2日（月）　遺物分布図のトレース原稿の作製を終了する。

12月2日（水）　遺物トレースを本日より開始する。

1月30日（土）　遺物トレース作業が本日をもって終了し、北海道遺跡の整理作業を終了する。

昭和58年度の整理作業

昭和58年度の整理作業は、昭和54、55年度に調査した成果について、整理し、分析し原稿執筆までの作業を実施することとなった。即ち、北海道遺跡の発掘調査報告書刊行に向けて作業を実施した。

4月1日（金）　本日よりトレース原稿の作成を開始する。

7月22日（金）　各種の表の作成作業を開始する。

7月25日（月）　一部復元作業の必要が生じたため、接合、復元作業を実施する。

8月23日（火）　本日よりトレース作業を開始する。

9月5日（月）　拓本の不備が生じたため採拓作業を実施する。

12月13日（水）　挿図作成作業、計測表等作成作業を実施する。

1月10日（火）　本日より遺物写真撮影を開始する。また原稿執筆を開始する。

2月28日（火）　本日で遺物写真撮影を終了する。

3月31日（土）　本日をもってすべての整理作業を終了する。

第Ⅰ部　旧石器時代

第1章　層位と文化層

第1節　自　　然　　層

1．層序区分（図5～7）

自然層は、表土より立川ローム層最下部に至るまで11枚に分層し得た。層厚は表土層が約50cm、立川ローム層が約2mとなっている。

ソフトロームの直下は、場所によってIV、V、VI層の場合があったが、多くはV層以下の場合がほとんどであった。

自然層はIII層～VI層に至るまでは、下総台地に隣接する武蔵野台地と共通であるが、VII層を三分してVII a、VII b、VII cとそれぞれ命名した。したがって、VII a層は武蔵野台地のVII層、VII b層、VII c層は、IX層にそれぞれ対比されることになる。

2．層位の解説

I層　表土（耕作土）暗褐色土層、厚さ約50cm、軟質で空隙が大きい。

II層　暗褐色土層、ソフトロームに至る漸移層である。上層に比べ粘性が大きい。

III層　黄褐色軟質ローム層、いわゆるソフトローム層である。土壌生成作用により、軟質化し、空隙が大きく、層厚は約50cmである。

IV層以下はいわゆるハードロームである。

IV層　黄褐色硬質ローム層、本遺跡内では、局地的に存在する。

V層　淡暗褐色硬質ローム層、後述する第2黒色帯（VII a～VII c層）に比べ、粘性が低く、色調も淡い。本遺跡内では多くの地域でみられる。

VI層　明黄褐色硬質ローム層、姶良Tn火山灰層を含み、火山ガラスを大量に含有する土層である。厚さ約20～30cm。

VI′層　淡暗褐色硬質ローム層、VI層とVII a層の中間にあって、VII a層に移行する漸移層。武蔵野台地のVII層上半部に相当する。厚さ約30cm。

VII a層　暗褐色粘土質ローム層、第2黒色帯上半部、厚さ約20～30cm。粘性が強い。

VII b層　褐色粘土質ローム層、第2黒色帯の間層帯。

VII c層　暗褐色粘土質ローム層、第2黒色帯下半部、厚さ約30～40cm。VII a層に比べ、色調が濃く、粘性が強い。

VIII層　黄褐色硬質ローム層、立川ローム層最下層。厚さ約30cm。

IX層　褐色硬質ローム層、粘性があり密度が高い、厚さ約30cm。武蔵野ローム層上面。

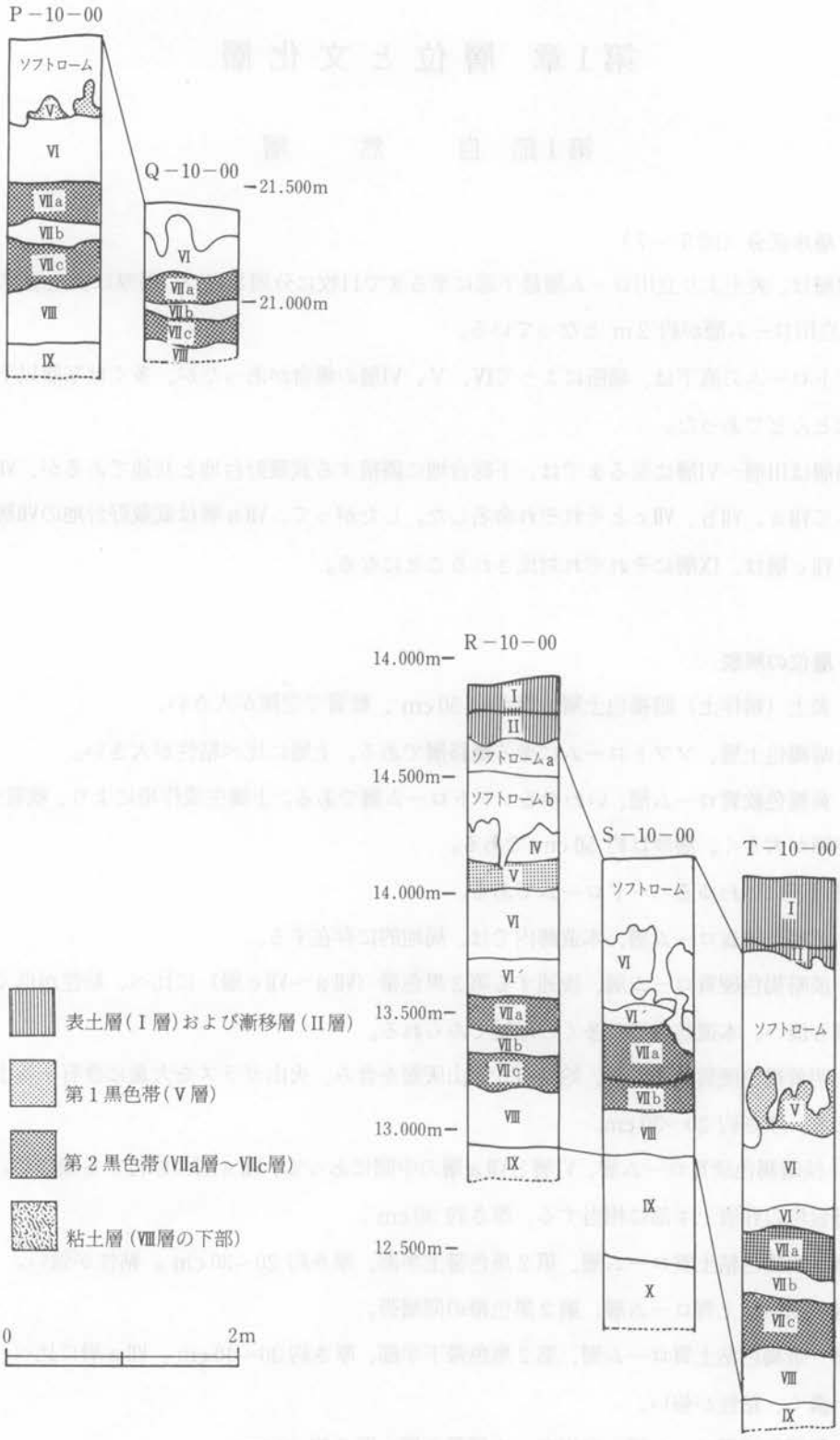

P－10－00
ソフトローム
V
VI
VIIa
VIIb
VIIc
VIII
IX
Q－10－00
－21.500m
－21.000m
R－10－00
14.000m－
14.500m－
13.500m－
13.000m－
12.500m－
I
II
ソフトロームa
ソフトロームb
IV
V
VI
VI´
VIIa
VIIb
VIIc
VIII
IX
S－10－00
ソフトローム
VI
VI´
VIIa
VIIb
VIII
IX
X
T－10－00
I
ソフトローム
V
VI
VI´
VIIa
VIIb
VIIc
VIII
IX
表土層（Ⅰ層）および漸移層（Ⅱ層）
第１黒色帯（Ⅴ層）
第２黒色帯（VIIa層～VIIc層）
粘土層（VIII層の下部）
0
2m

図５　遺跡土層断面図(1)

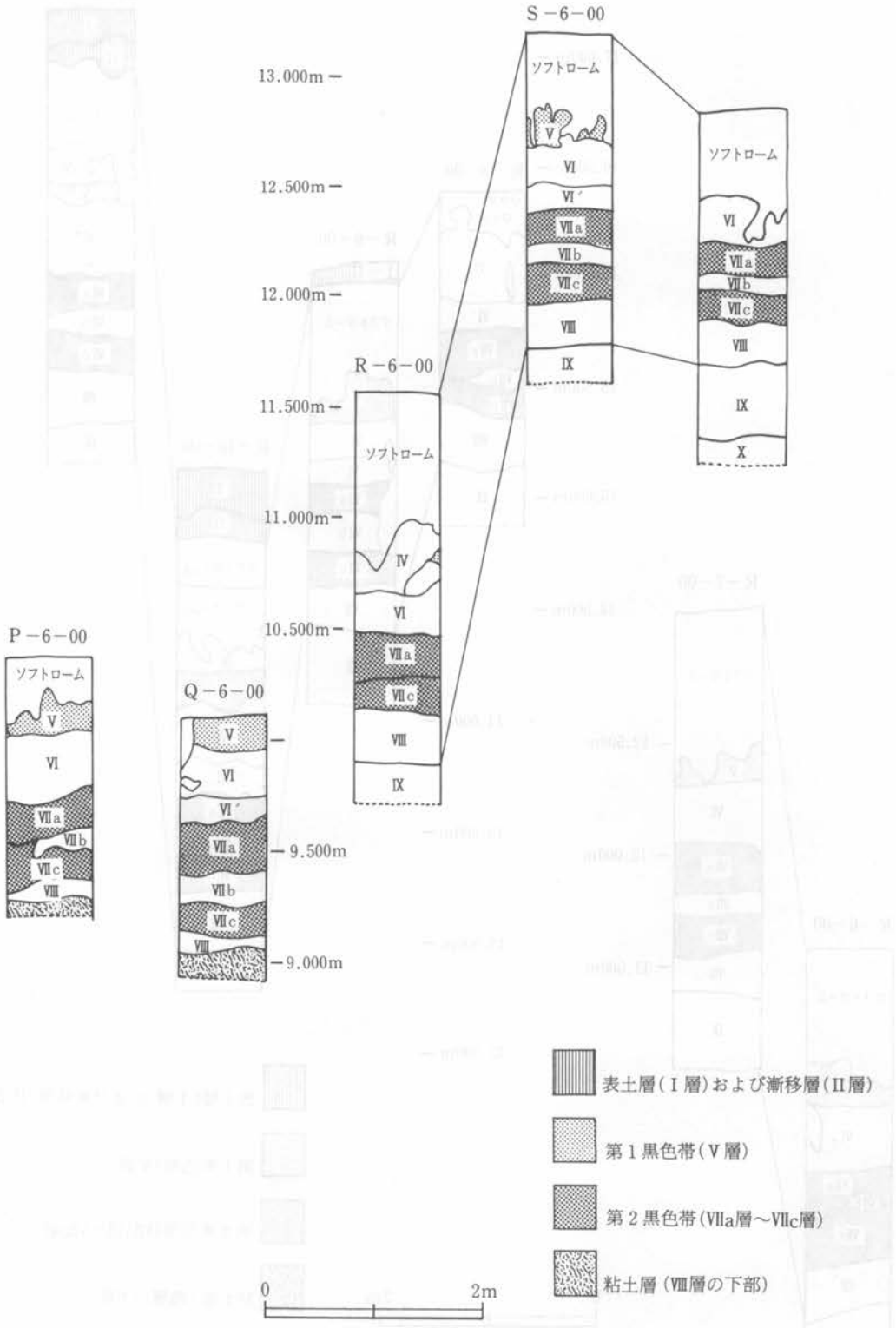

S－6－00
R－6－00
P－6－00
Q－6－00
13.000m
12.500m
12.000m
11.500m
11.000m
10.500m
9.500m
9.000m
ソフトローム
V
VI
VI′
VIIa
VIIb
VIIc
VIII
IX
X
IV
0
2m
表土層（Ⅰ層）および漸移層（Ⅱ層）
第１黒色帯（Ⅴ層）
第２黒色帯（VIIa層～VIIc層）
粘土層（VIII層の下部）

図６　遺跡土層断面図(2)

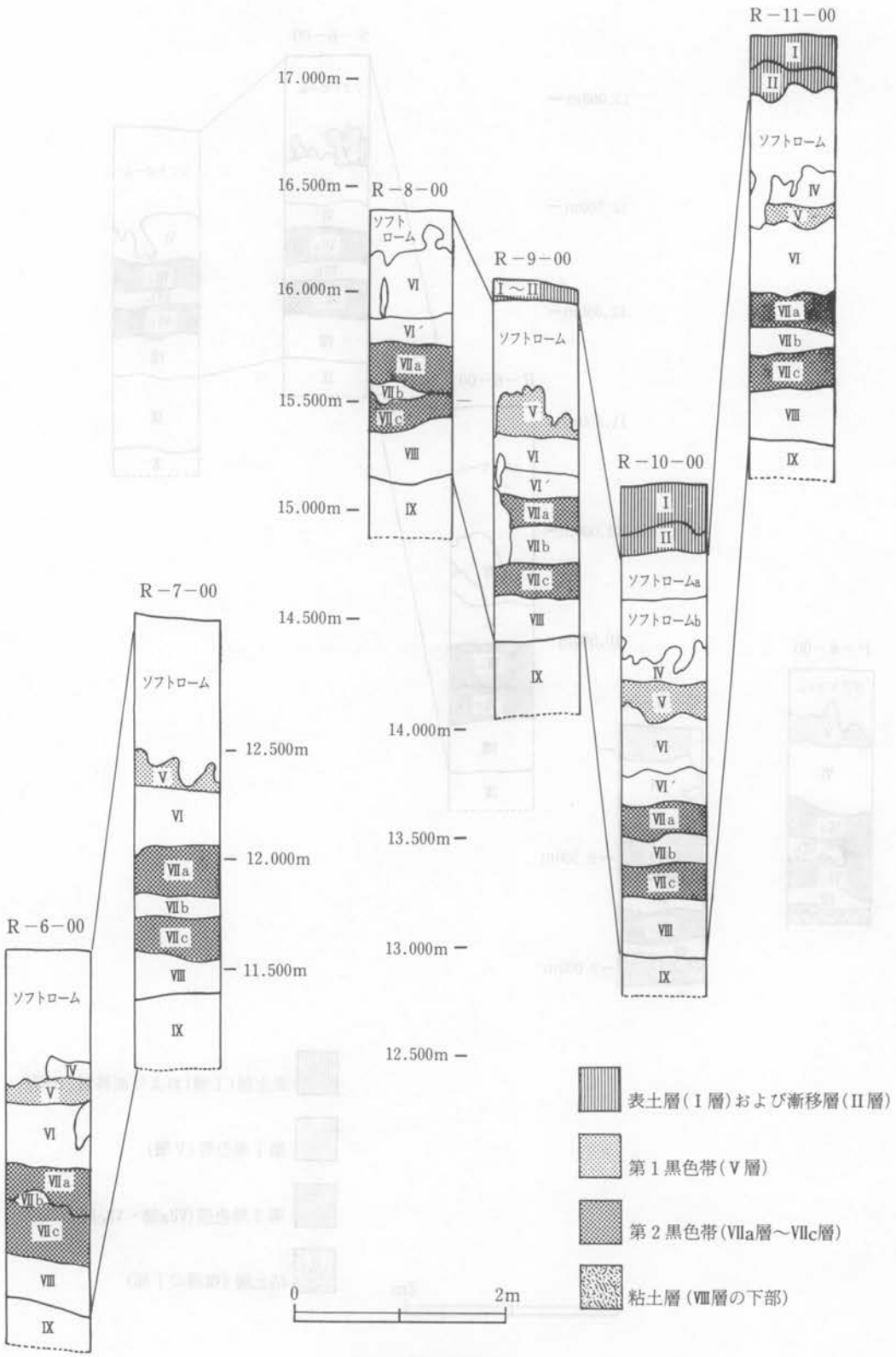

R－11－00
R－8－00
R－9－00
R－10－00
R－7－00
R－6－00
17.000m
16.500m
16.000m
15.500m
15.000m
14.500m
14.000m
13.500m
13.000m
12.500m
12.500m
12.000m
11.500m
ソフトローム
ソフトローム a
ソフトローム b
I～II
I
II
IV
V
VI
VI´
VII a
VII b
VII c
VIII
IX
0
2m
表土層（I層）および漸移層（II層）
第1黒色帯（V層）
第2黒色帯（VIIa層～VIIc層）
粘土層（VIII層の下部）

図7　遺跡土層断面図(3)

第2節　文　　化　　層

北海道遺跡では3つの文化層に区分される。

第1文化層（III層上部）　ブロックは形成せず、遺物は単独出土である。

第2文化層（IV～V層段階）　第1～29、38、39、43、45、51、55、62ブロックの計36ブロック。

第3文化層（VIIa層段階）　第30～37、40～42、44、46～50、52～54、56～61ブロックの計26ブロック。

以上の文化層より、ナイフ形石器、尖頭器、石錐、掻器、削器、ピエス・エスキーユ、彫刻刀形石器、2次加工のある剝片、使用痕のある剝片、剝片、砕片、石核、台石、敲石、礫器等の石器群が出土した。

各文化層ごとの全般的な出土傾向は、第1文化層の石器群が点在、第2文化層の石器群が標高13.5m以下の台地北半部、第3文化層の石器群がより高位の台地南半部より出土する傾向にある。

各文化層はレベル差30～50cm程度のレベル差をもって石器群が出土しているが、隣接する武蔵野台地に比べ、ローム層が薄いため文化層の対比が困難であった。したがって、ソフトロームとハードロームの境界付近より出土した第2文化層の石器群については主として、型式学的所見に依拠した。

第2章　遺構と出土遺物

第1節　は　じ　め　に

本遺跡では62ブロックとその周辺より都合2,241点の石器群と185点の礫片を検出した。

自然層としては、III層上面、IV～VI層、VIIa層より断続的に出土し、3つの文化層がとらえられた。各文化層の遺物の数量は、第1文化層2点、第2文化層1,244点(うち礫片169点)、第3文化層1,158点（うち礫片15点)、表面採集12点（うち礫片1点）となっている。

さて、以上の石器群を報告するにあたって、その手順としては、まず、各文化層ごとに、分類し、次に個々のブロックについて解説することにした。

各ブロックについては、出土状況、石器組成、石器製作技術、母岩別資料・接合資料の検討を行った（図8)。

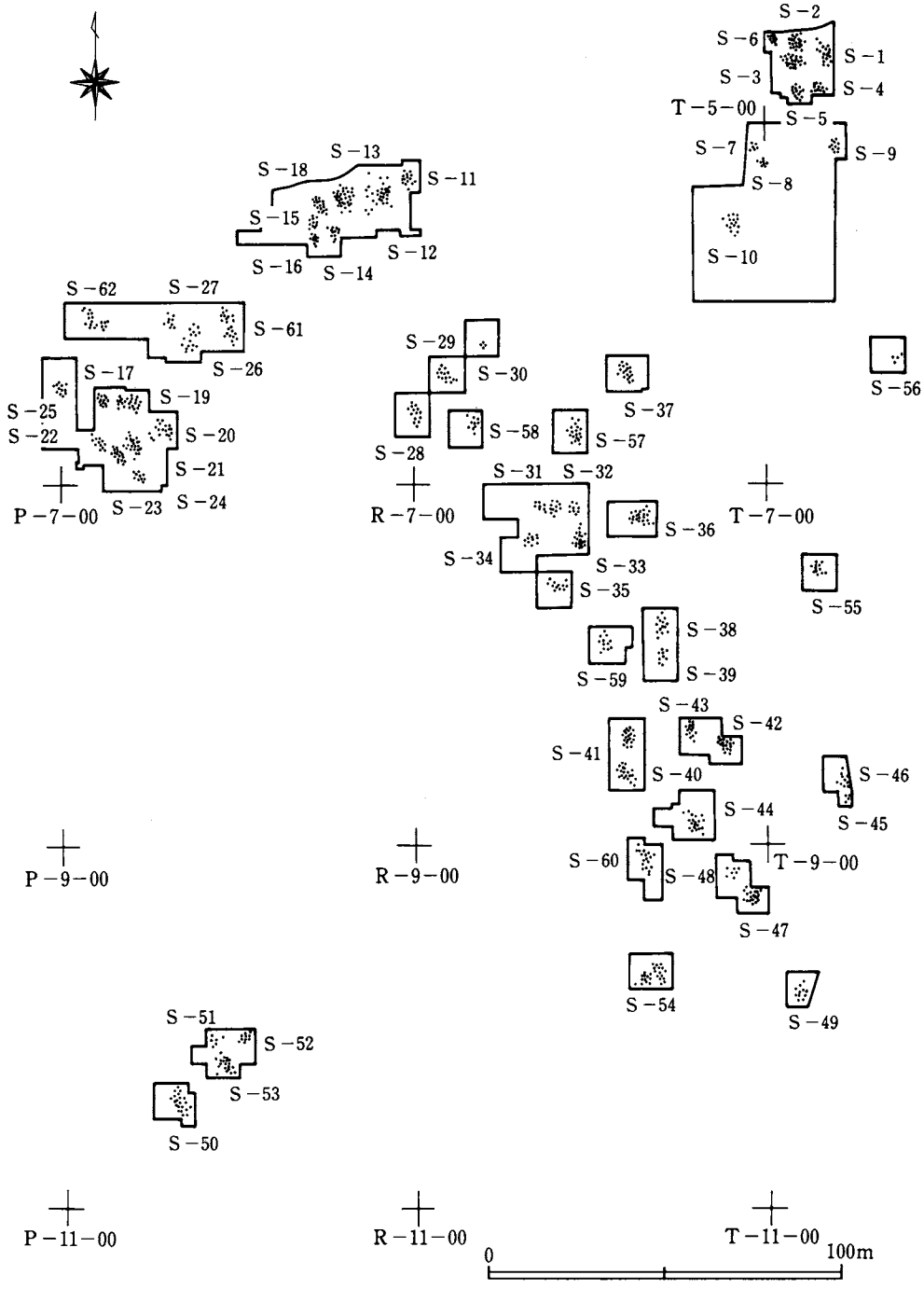

S－2
S－6
S－1
S－3
S－4
T－5－00
S－5
S－7
S－9
S－8
S－10
S－13
S－18
S－11
S－15
S－12
S－16
S－14
S－62
S－27
S－61
S－17
S－26
S－25
S－19
S－22
S－20
S－21
P－7－00
S－23
S－24
S－29
S－30
S－37
S－56
S－58
S－57
S－28
S－31
S－32
R－7－00
T－7－00
S－36
S－34
S－33
S－35
S－55
S－38
S－59
S－39
S－43
S－42
S－41
S－40
S－46
S－44
S－45
P－9－00
R－9－00
S－60
S－48
T－9－00
S－47
S－54
S－49
S－51
S－52
S－53
S－50
P－11－00
R－11－00
T－11－00
0
100m

図８　ブロック配置図

第2節　第　1　文　化　層

1．第1文化層出土資料（図9、図版4、表1、2）

ソフトローム（III層）上面に生活面を持つ文化層である。遺物は単独出土であり、ブロックは形成しない。木葉形尖頭器が2点出土しており、数量的には少ない。いずれも表面採集資料である。

出土遺物　1、2は共に木葉形尖頭器である。1は半両面加工、2は、両面加工の木葉形尖頭器である。いずれも表裏が平坦な剝離面によっておおわれている。

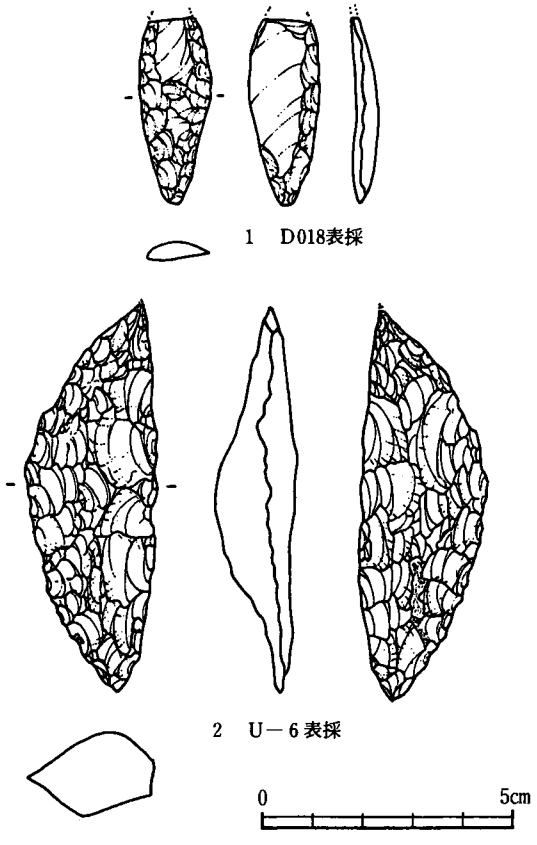


図9　第1文化層出土遺物実測図

表1　第1文化層出土石器組成表

石材 / 器種	珪質頁岩 数量	%	安山岩 数量	%	計 数量	%
ナイフ形石器	－	－	－	－	－	－
角錐状石器	－	－	－	－	－	－
木葉形尖頭器	1	100	1	100	2	100
削片	－	－	－	－	－	－
石錐	－	－	－	－	－	－
掻器	－	－	－	－	－	－
削器	－	－	－	－	－	－
ピエス・エスキーユ	－	－	－	－	－	－
彫刻刀形石器	－	－	－	－	－	－
二次加工ある剝片	－	－	－	－	－	－
使用痕ある剝片	－	－	－	－	－	－
石斧	－	－	－	－	－	－
剝片	－	－	－	－	－	－
砕片	－	－	－	－	－	－
石核	－	－	－	－	－	－
台石	－	－	－	－	－	－
敲石	－	－	－	－	－	－
計	1	50	1	50	2	100
礫片	－	－	－	－	－	－

表2　第1文化層出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材
1	U-6表採	尖頭器	7.5	2.6	1.4	—	21.2	2	両面加工	—	無	無	—	無	珪質頁岩
2	D-18表彩	尖頭器	3.6	1.3	0.4	—	2.7	1	半両面加工	有	無	有	先端	無	安山岩

第3節　第　2　文　化　層

1．第1ブロック（図10～12、図版11、表3～6）

出土状況　Ⅳ層下部に分布しており、最大レベル差約 25 m で、分布密度は平面分布、垂直分布とも希薄である。平面分布は最大径約 7.4 m、最大径約 3.2 m となっており、器種ごとの分布の違いは見いだせなかった。

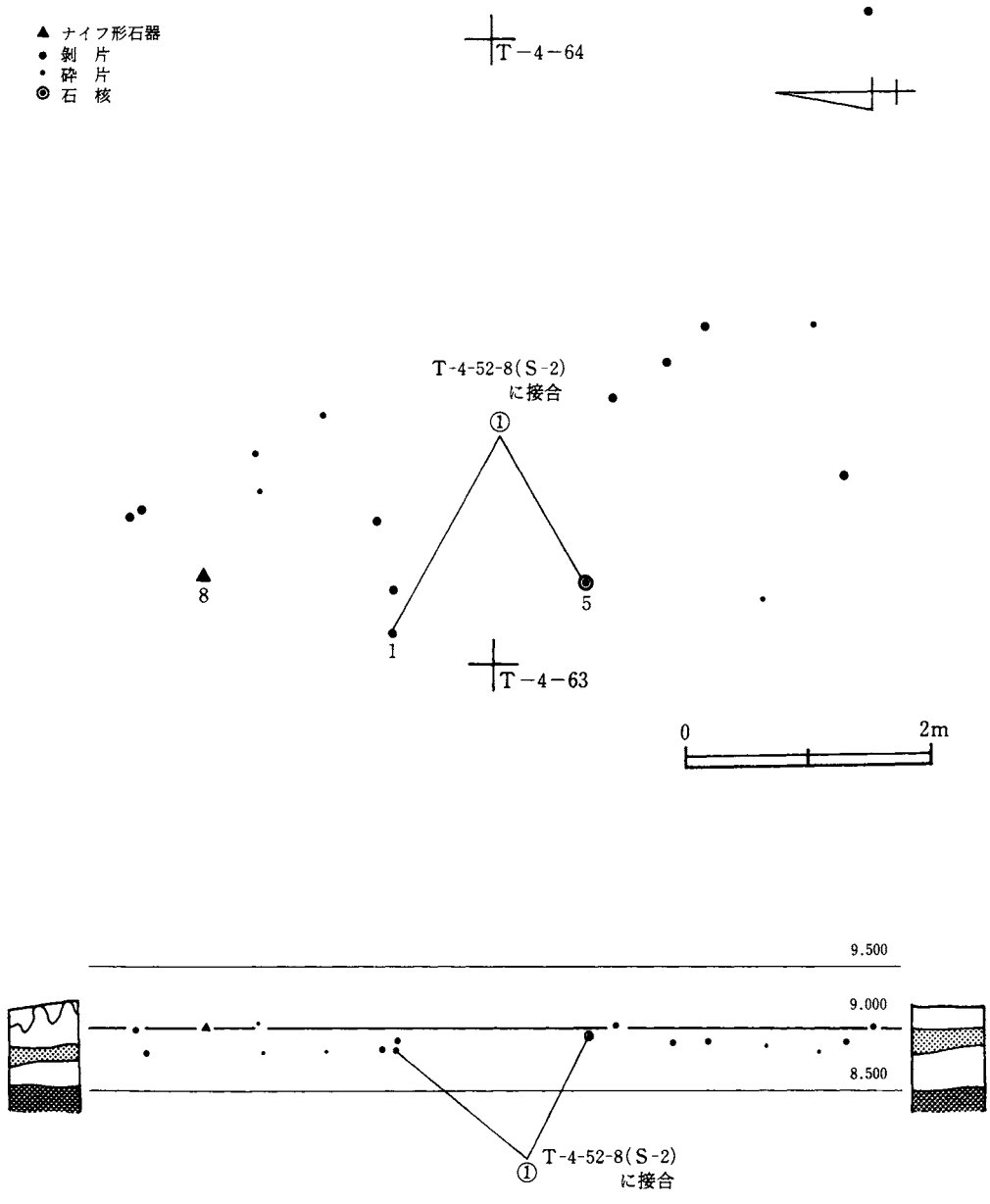


図10　第1ブロック遺物出土状況図

出土遺物　総計15点出土している石器組成はナイフ形石器１点、剥片11点、砕片２点、石核１点となっており、剥片生産の痕跡が著しい。

１はナイフ形石器である。縦長の石刃に近い素材を斜めに整形し、側面形を紡錘形に形づくっている。右側面の刃つぶし加工は背面側および、主要剥離面側より加撃され、主要剥離面に対してほぼ90度に近い加工面となっている。一方左側辺の下方の刃つぶし加工は、抉り込むように調整され、内彎している。２ｃは石核であり、

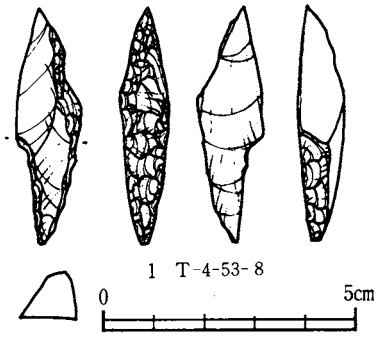


図11　第１ブロック出土遺物実測図(1)

表３　第１ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	頁岩		チャート		黒曜石		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	1	100	−	−	−	−	1	6.7
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−	−	−
削片	−	−	−	−	−	−	−	−
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−	−	−
削器	−	−	−	−	−	−	−	−
ピエス・エスキーユ	−	−	−	−	−	−	−	−
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剥片	−	−	−	−	−	−	−	−
使用痕ある剥片	−	−	−	−	−	−	−	−
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−
剥片	−	−	9	75.0	2	100	11	73.3
砕片	−	−	2	16.7	−	−	2	13.3
石核	−	−	1	8.3	−	−	1	6.7
台石	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	−	−	−	−
計	1	6.7	12	80	2	13.3	15	100
礫片	−	−	−	−	−	−	−	−

板状のチャート角礫を原材として、表裏を求心的に加撃することによって形成され、いわゆる円盤状石核となっている。

母岩別資料・接合資料　石材は３種、母岩別資料は４母岩を識別し得た。うちチャートが２母岩、９点を数え、優勢である。接合資料は、先述の円盤状石核と横長剥片２点の接合例が唯一存在する。接合剥片の中では、２ａが第２ブロックに属し、第２ブロックとの相関関係を追

表４　第１ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 / 器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	敲石	計
頁岩　1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
黒曜石　1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1
黒曜石　2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1
チャート　1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	5	−	1	−	6
チャート　2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	3	−	−	−	3
計	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	10	−	1	−	12

究する上で興味深い事例となっている。

まとめ　利器として、ナイフ形石器が１点のみ出土した。本ブロックは剥片生産の色彩が強い。接合資料１では円盤状石核と横長剥片との接合例であるが、剥片２点のみであり、良好な剥片はブロック外へ搬出したものと考えられる。

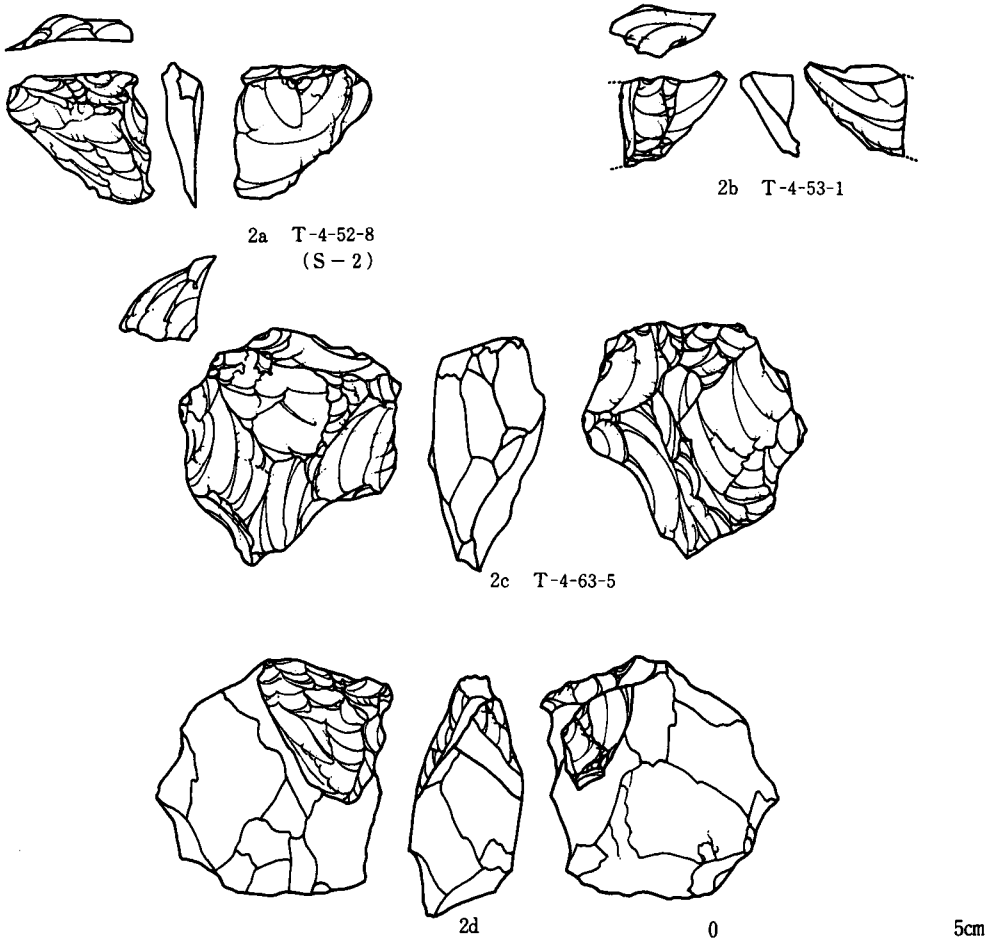


図12　第１ブロック出土遺物実測図(2)

表５　第１ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内　訳	内　容	数量
1	チャート１	剥片２ 石核１	F-4-52-8(剥片)→T-4-53-1(剥片)→T-4-63-5(石核) (S-2)	3

表６　第１文化層出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器　種	大きさ cm			刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石　材
			長さ	幅	厚										
1	T-4-53-8	ナイフ形石器	4.6	1.4	0.9	50°	4.4	1	二側辺加工	無	無	無	—	有	頁　岩
2	T-4-63-5	石　核	4.7	4.6	2.2	—	44.0	2c	—	—	—	無	—	—	チャート

2．第2ブロック（図13、14、図版4－2、11、表7～10）

出土状況　IV層よりV層上部にかけて出土したが、特にV層上部に集中している。最大レベル差50cmである。平面分布は、長径約8.0m、短径約5.3mとなっており、ほぼ楕円形の平面形を呈する。西半分に特に密集しており、その中で接合資料が多くみられる。外縁部に利器、東半部に石核が3点集中して出土していることなどが看取される。

出土遺物　総計148点出土した。石器組成は、ナイフ形石器3点、使用痕のある剝片6点、剝片93点、破片43点、石核3点となっている。1～3はナイフ形石器である。平

表7　第2ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	珪質頁岩		チャート		黒曜石		頁岩		安山岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	－	－	3	3.2	－	－	－	－	－	－	3	2.0
角錐状石器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
木葉形尖頭器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
削片	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
石錐	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
掻器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
削器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
ピエス・エスキーユ	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
彫刻刀形石器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
二次加工ある剝片	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
使用痕ある剝片	2	100	3	3.2	1	2.0	－	－	－	－	6	4.1
石斧	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
剝片	－	－	59	63.4	32	62.7	1	100	1	100	93	62.8
砕片	－	－	26	28.0	17	33.3	－	－	－	－	43	29.1
石核	－	－	2	2.2	1	2.0	－	－	－	－	3	2.0
台石	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
敲石	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
計	2	1.4	93	62.8	51	34.4	1	0.7	1	0.7	148	100
礫片	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－

表8　第2ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 \ 器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	敲石	計
珪質頁岩　1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1
珪質頁岩　2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	1
珪質頁岩　3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1
頁岩　1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	1
安山岩　1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	1
黒曜石　1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	1	－	2
黒曜石　2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	2
黒曜石　3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	2
黒曜石　4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	2
黒曜石その他	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	24	19	－	－	44
チャート　1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	1
チャート　2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	2
チャートその他	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3	－	51	25	2	－	84
計	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	6	－	87	45	3	－	144

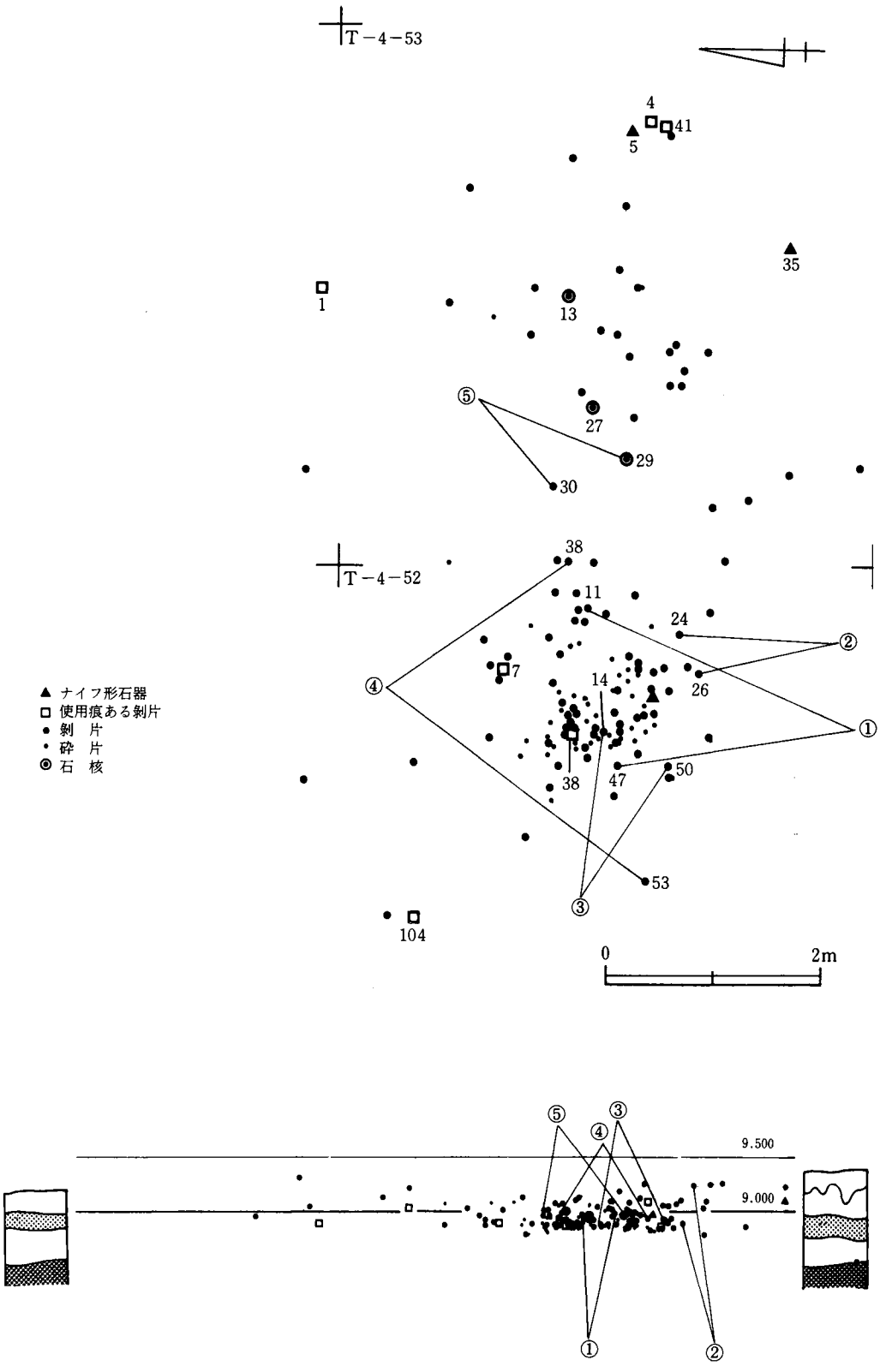


図13　第２ブロック遺物出土状況図

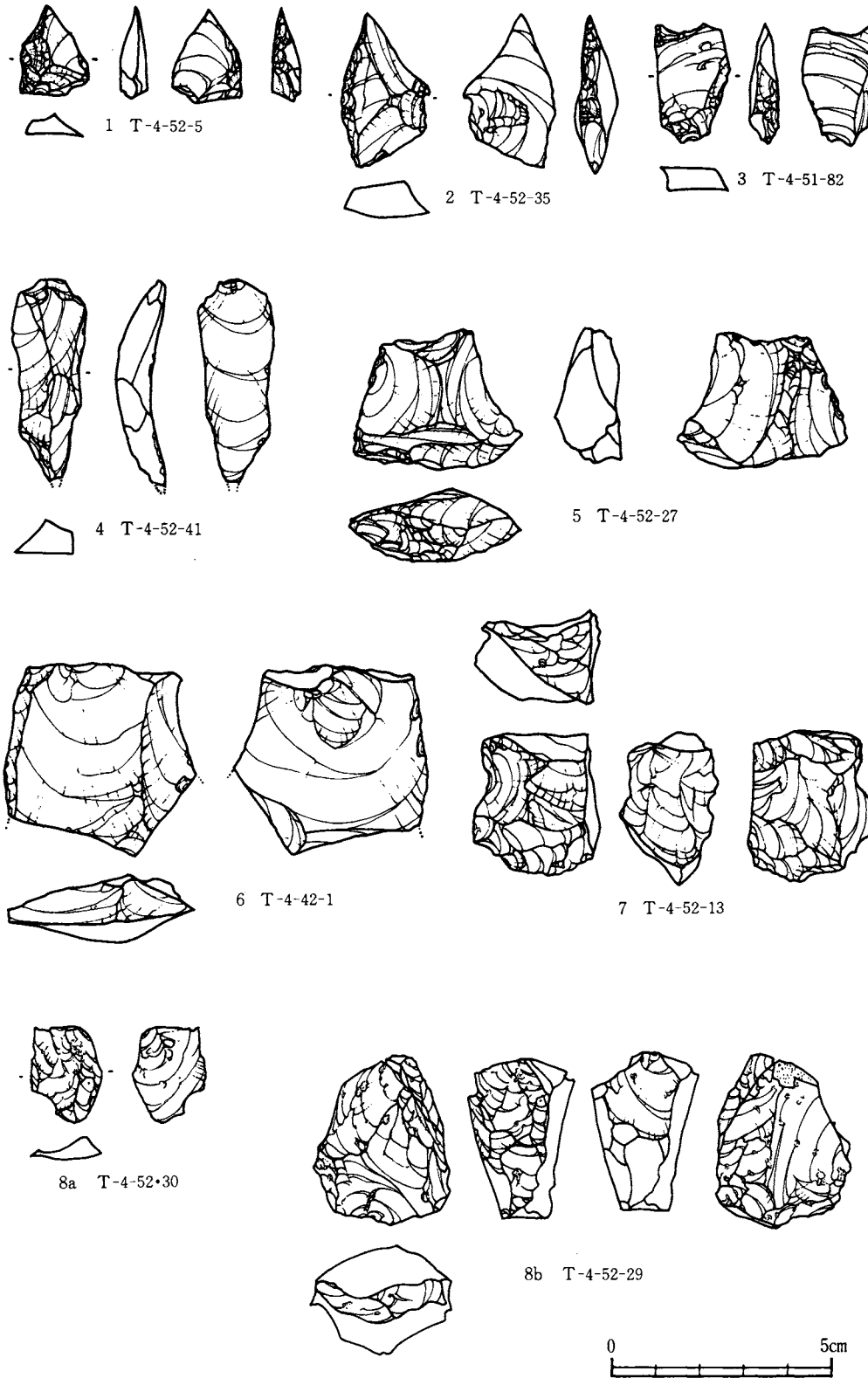


図14　第2ブロック出土遺物実測図

坦な打面を有する横長剝片を素材として、いずれも1側辺加工となっており、3については1側辺が折断面である。4、6は使用痕のある剝片である。ただし、6については2次加工に近い剝離面が部分的に観察される。5、7、86は石核である。いずれも複数の方向に交差する剝離面がみられ、横長剝片を生産した痕跡が窺える。

母岩別資料・接合資料　石材は5種、母岩は11種識別し得たが、中でもチャートが圧倒的な数量を誇る。母岩別石器組成表によると、剝片生産技術を窺える。母岩は黒曜石、チャートである。接合資料は、5つ存在したが、内訳は剝片の欠損例3例、剝片どうしの接合例1例、剝片と石核の接合例1例となっている。剝片生産技術を反映した資料として接合資料5が注目されるが、工程を追う上では部分的な資料である。第1ブロックの石核、剝片と接合する剝片が1点あり、第1ブロックとの同時性が窺われる。

まとめ　石核、剝片、砕片など、剝片生産技術を窺わせる資料が大量に出土しており、その技術基盤としては、円盤形石核より目的剝片が生産されたことが捉えられる。ナイフ形石器は切り出し形を呈し、形態的なまとまりをみせている。第1ブロックとの接合関係がみられ、同時性が指摘し得る。

表9　第2ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内　訳	内　容	数量
1	チャート2	剝片2	T-4-51-47(剝片)＋T-4-51-11(剝片)	2
2	黒曜石4	剝片2	T-4-51-24（剝片）→T-4-51-26(剝片)	2
3	黒曜石3	剝片2	T-4-51-64(剝片)＋T4-51-50(剝片)	2
4	黒曜石2	剝片2	T-4-51-53(剝片)＋T-4-52-38(剝片)	2
5	黒曜石1	剝片1、石核1	T-4-52-30(剝片)→T-4-52-29(石核)	2

表10　第2ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器　種	大きさ cm			刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石　材
			長さ	幅	厚										
1	T-4-51-82	ナイフ形石器	2.7	1.7	0.7	30°	3.1	3	一側辺加工	無	無	無	—	有	チャート
2	T-4-52-5	ナイフ形石器	2.1	1.6	0.6	35°	1.7	1	一側辺加工	有	無	無	—	無	チャート
3	T-4-52-35	ナイフ形石器	3.6	2.1	0.9	60°	3.1	2	一側辺加工	無	有	無	—	有	チャート
4	T-4-42-1	使用痕ある剝片	4.3	4.4	1.2	60°	24.5	6	—	無	有	有	先端	一側辺	珪質頁岩
5	T-4-51-7	使用痕ある剝片	4.8	2.0	0.7	45°	6.8	—	—	無	有	無	—	一側辺	チャート
6	T-4-51-38	使用痕ある剝片	1.2	1.5	0.5	50°	0.6	—	—	無	無	有	基部	一側辺	黒曜石
7	T-4-51-104	使用痕ある剝片	4.5	2.0	0.7	45°	8.0	—	—	無	無	有	基部	一側辺	珪質頁岩
8	T-4-52-4	使用痕ある剝片	3.5	2.5	1.3	65°	7.6	—	—	無	無	有	基部	一側辺	チャート
9	T-4-52-41	使用痕ある剝片	4.5	1.7	0.8	65° 55°	5.2	4	—	無	有	無	—	二側辺	チャート
10	T-4-52-13	石　核	2.9	3.3	1.9	—	18.3	7	—	—	有	無	—	—	チャート
11	T-4-52-27	石　核	3.0	3.8	1.3	—	14.4	5	—	—	有	無	—	—	チャート
12	T-4-52-29	石　核	3.6	3.1	2.3	—	19.6	8b	—	—	有	無	—	—	黒曜石

3．第3ブロック（図15～17、図版11、表11～14）

出土状況　IV層からV層にかけてまんべんなく分布しており、最大レベル差約 50 cm で、平面形は約 8.3 m×6.2 m となっている。石器群の分布に大きな偏りはない。

出土遺物　総計87点出土した。石器組成は削器1点、2次加工のある剝片1点、使用痕のある剝片1点、剝片56点、砕片26点、石核2点となっている。1は2次加工のある剝片である。右側辺の一部に部分的な2次加工が観察される。2は石核である。ぶ厚い剝片を素材として周辺より求心的に剝離されている。3dもまた石核である。表裏ともくまなく求心的に加撃されており、素材は主要剝離面の存在より2と同様にぶ厚い剝片と思われる。

母岩別資料・接合資料　石材は3種あり、母岩別資料は5種類存在する。数量的には黒曜石が最も多く、次いでチャートとなっており、珪質頁岩は削器1点のみである。母岩別の石器組成では、剝片生産技術を反映した資料の抽出ができたにとどまった。黒曜石1がこれに該当するが、いずれもいわゆる円盤形石核より、横長剝片を生産したことは疑いない。接合資料は3例存在するが、その内訳は剝片どうしの接合例2例、剝片と石核の接合例1例となっている。

表11　第3ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		チャート		珪質頁岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	−	−	−	−	−	−	−	−
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−	−	−
削片	−	−	−	−	−	−	−	−
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−	−	−
削器	−	−	−	−	1	100	1	1.1
ピエス・エスキーユ	−	−	−	−	−	−	−	−
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剝片	−	−	1	3.6	−	−	1	1.1
使用痕ある剝片	−	−	1	3.6	−	−	1	1.1
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−
剝片	32	55.2	24	85.6	−	−	56	65.0
砕片	25	43.1	1	3.6	−	−	26	29.9
石核	1	1.7	1	3.6	−	−	2	2.3
台石	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	−	−	−	−
計	58	66.7	28	32.2	1	1.1	87	100
礫片	−	−	−	−	−	−	−	−

表12　第3ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 \ 器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	敲石	計
珪質頁岩　1	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
黒曜石　1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	19	6	1	−	26
黒曜石　2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	14	9	−	−	23
黒曜石その他	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1
チャート　1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	2
チャート　2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	2
チャートその他	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−	22	−	1	−	25
計	−	−	−	−	−	−	1	−	−	1	1	−	60	15	2	−	80

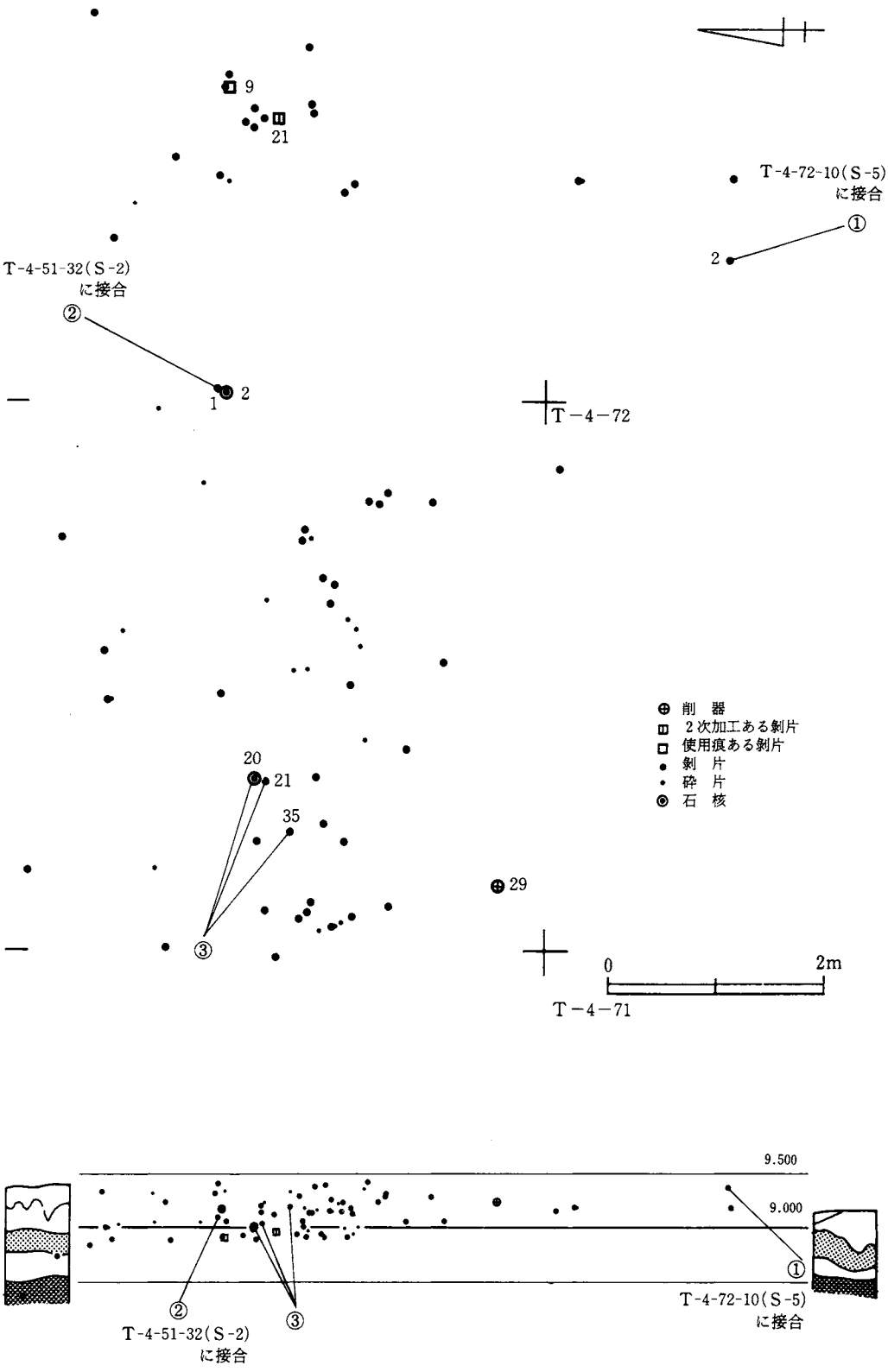


図15　第3ブロック遺物出土状況図

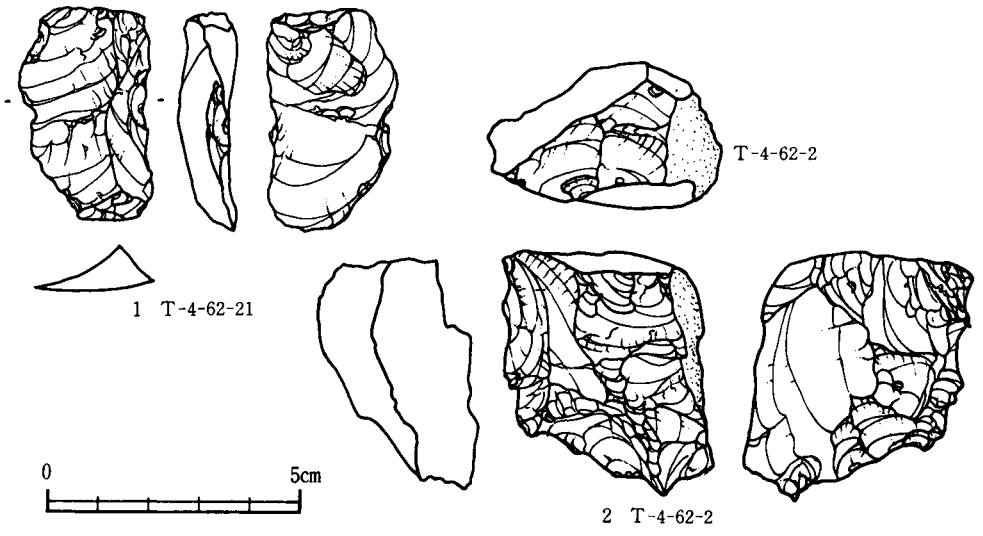


図16　第3ブロック出土遺物実測図(1)

その中で注目すべき資料としては接合資料3がある。先述のとおり剥片を円盤形石核より生産したことを示す資料である。他のブロックとの接合例として第5ブロックの剥片および第2ブロックの剥片と、本ブロックの剥片がそれぞれに接合した資料があり、ブロック間の同時性を考える上で、好例となっている。

まとめ　本ブロックは該期の剥片生産技術を探る上で良好な資料が出土した。端的に言えば円盤形石核より横長剥片を生産している点である。第2、5ブロックとの接合関係があり、こ

表13　第3ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内　訳	内　容	数量
1	チャート1	剥片2	T-4-72-10(剥片)→T-4-72-2(剥片) (S-5)	2
2	チャート2	剥片2	T-4-62-1(剥片)→T-4-51-32(剥片) (S-2)	2
3	黒曜石1	剥片3 石核1	T-4-61-35(剥片)→T-4-61-21(剥片)→番号不明(剥片) T-4-61-20(石核)	4

表14　第3ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器　種	大きさ cm			刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石　材
			長さ	幅	厚										
1	T-4-61-29	削　器	4.3	3.9	2.1	65°	32.5	—	一側辺加工	無	有	無	—	無	珪質頁岩
2	T-4-62-21	二次加工ある剥片	4.3	2.5	0.9	55°	10.4	1	二側辺加工(部分的)	—	有	無	—	二側辺	チャート
3	T-4-62-9	使用痕ある剥片	2.2	1.8	1.1	60°	3.7	—	—	無	有	無	—	二側辺	チャート
4	T-4-61-20	石　核	3.8	4.0	2.0	—	22.0	3c	—	—	有	無	—	—	黒曜石
5	T-4-62-2	石　核	4.4	4.3	2.5	—	55.0	2	—	—	有	無	—	—	チャート

れらのブロックでは同時性、同一の技術基盤が存在したことが知れる。

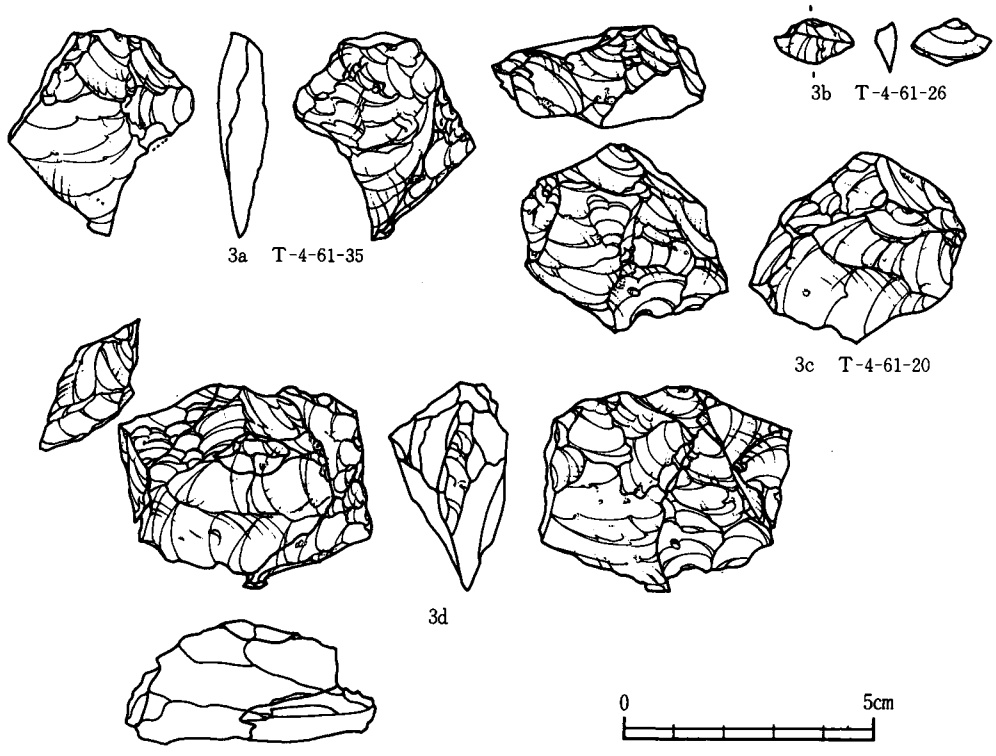


図17　第3ブロック出土遺物実測図(2)

4．第4ブロック（図18、19、図版11、表15～18）

出土状況　IV層からV層上部にかけて出土している。最大レベル差約 1m で特に集中している部分は約 70 cm のレベル差となっている。他のブロックに比べ相対的に大きい。平面形は 4 m×3.2 m となっており、ほぼ均一な密度となっている。器種と剥片砕片との分布に特に偏りはみられない。

出土遺物　総計28点出土した。石器組成はナイフ形石器1点、石錐1点、掻器1点、敲石1点、剥片18点、砕片5点、石核1点となっている。1はナイフ形石器である。平坦な打面を有する幅広な剥片を素材として1側辺加工であるが、先端部は欠損している。2は石錐で先端部付近のみに細かな2次加工が施され、尖頭部となっている。3は掻器で縦長剥片を素材として下端に急角度な2次加工が施されている。4は上半部が欠損した敲石である。

母岩別資料・接合資料　石材としては5種、母岩別資料は6種識別し得る。このうち黒曜石、頁岩、花崗岩、安山岩はいずれも単独資料であり、チャートを石材とした石器群が中心となっている。接合資料は1例のみ存在する。剥片生産技術を反映した資料の公算が高いが大形の剥片が一撃によって同時に破砕されたものと思われ、本ブロックの剥片、砕片等の本来的な生産

技術であり、偶発的な所産と考えられる。そのため特に図示しなかった。

まとめ　本ブロックは器種として石錐、掻器が新たに加わり、この点で他のブロックと異なる。全体としては剝片生産技術を反映したブロックと言える。なお、第5ブロックとの接合関係があり、互いの類縁関係が知れる。

表15　第4ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	チャート		花崗岩		頁岩		安山岩		黒曜石		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	1	4.3	−	−	−	−	−	−	−	−	1	3.6
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石錐	1	4.3	−	−	−	−	−	−	−	−	1	3.6
掻器	1	4.3	−	−	−	−	−	−	−	−	1	3.6
削器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ピエス・エスキーユ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
使用痕ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
剝片	14	61.0	−	−	1	100	1	100	2	100	18	64.2
砕片	5	21.8	−	−	−	−	−	−	−	−	5	17.8
石核	1	4.3	−	−	−	−	−	−	−	−	1	3.6
台石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	1	100	−	−	−	−	−	−	1	3.6
計	23	82.1	1	3.6	1	3.6	1	3.6	2	7.1	28	100
礫片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−

第16　第4ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 \ 器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	敲石	計
黒曜石　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	2
頁岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
チャート　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	—	1	—	7
チャート　2	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
チャートその他	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	10	5	—	—	17
花崗岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
安山岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
計	1	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	20	5	1	1	30

表17　第4ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	チャート1	剝片6 石核1	T-4-72-8（剝片）、T-4-72-7(剝片)、T-4-73-6(石核) T-4-72-13(剝片)、番号不明2点、T-4-82-1(剝片) （S-5）	7

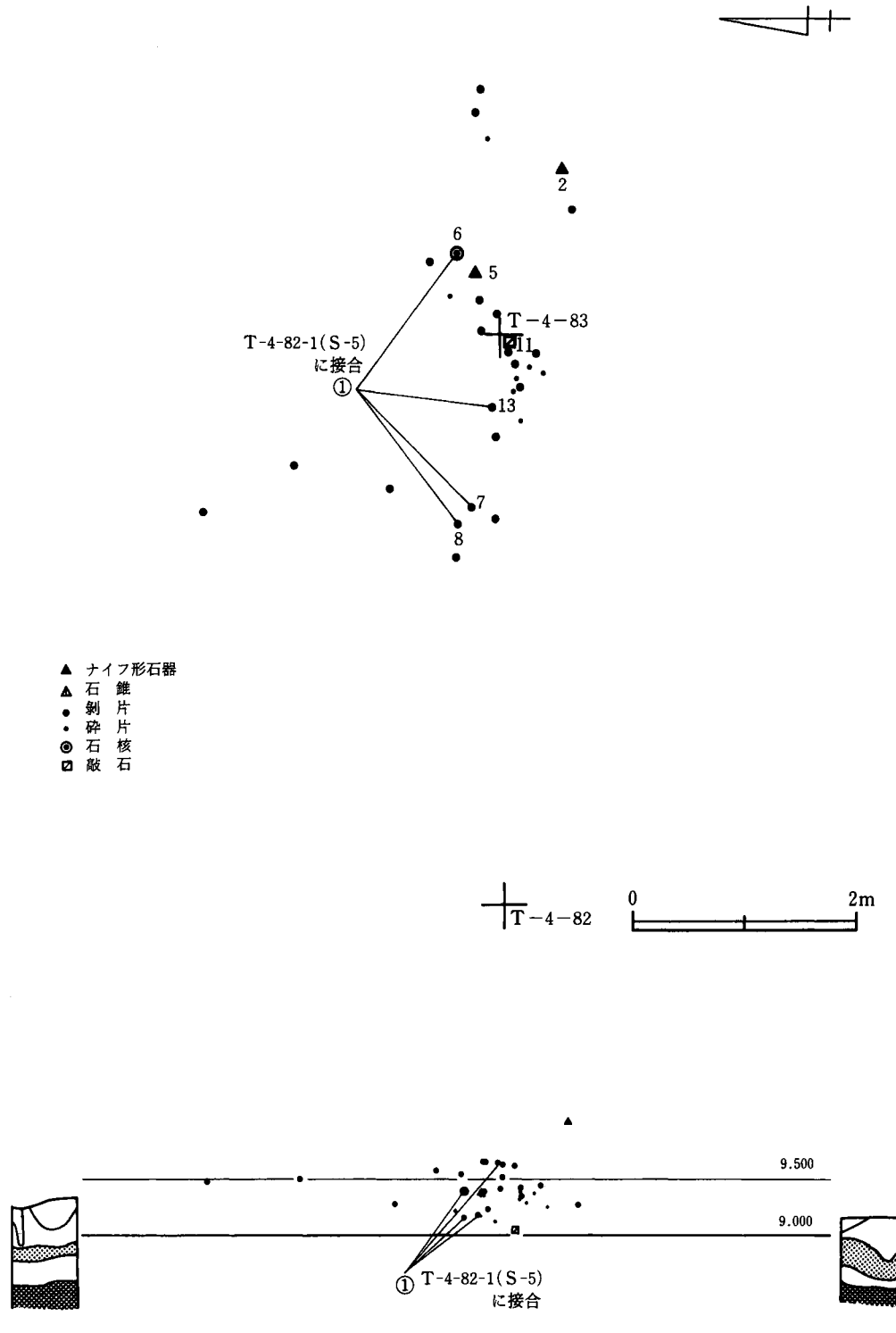


図18　第4ブロック遺物出土状況図

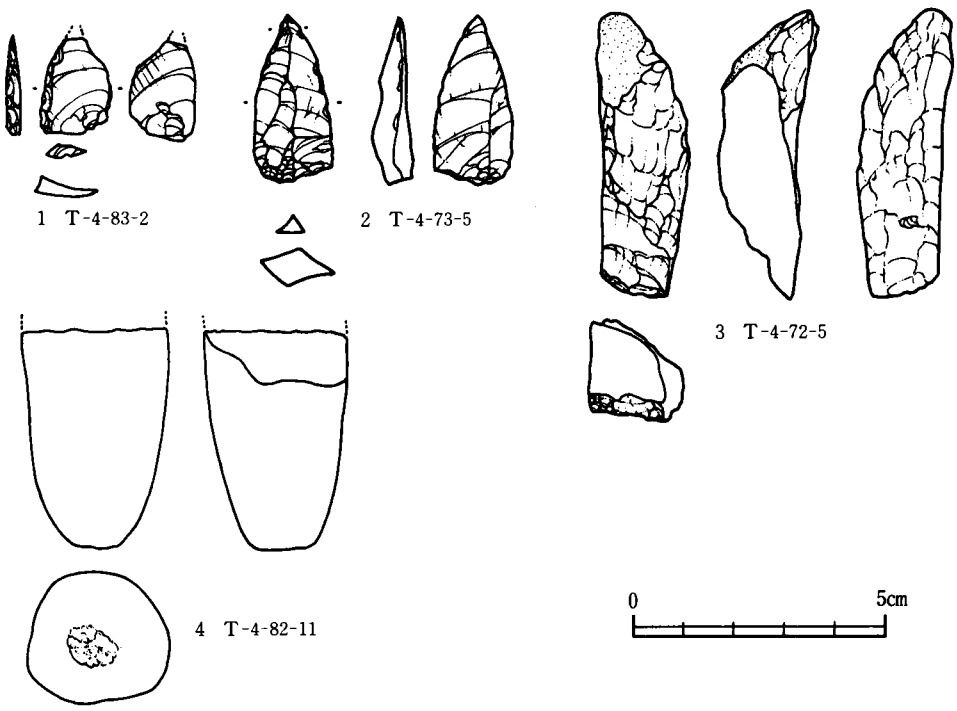


図19　第4ブロック出土遺物実測図

表18　第4ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材
1	T-4-83-2	ナイフ形石器	2.0	1.3	0.3	20°	0.9	1	一側辺加工	無	有	有	先端	無	チャート
2	T-4-73-5	石錐	3.4	1.6	0.7	刃先角 60°	3.2	2	先端	無	有	無	—	無	チャート
3	T-4-72-5	掻器	5.7	1.7	1.5	70°	18.0	3	先端	無	有	無	—	無	チャート
4	T-4-82-11	敲石	4.3	2.9	2.8	—	45.0	4	—	—	—	有	半割	先端	花崗岩
5	T-4-73-6	石核	2.2	1.5	1.2	—	5.9	—	—	—	有	有	分割	—	チャート

5．第5ブロック（図20、21、図版11、表19～22）

出土状況　Ⅳ層下部よりⅤ層上面にかけて出土しており、最大レベル差約 30 cm である。平面形は、約 5.3m×約 3.9m となっている。礫群の中に石器群が点在している。

出土遺物　総計44点出土した。内訳は礫片23点、ナイフ形石器 1 点、削器 2 点、剝片 2 点、砕片 1 点となっている。礫片はいずれも加熱によって破砕されており、礫群の構成礫の可能性が高い。また、本ブロックは全体として石器群に対して礫片数が多いことが知られる。1 はナイフ形石器である。横長剝片を素材として、2 側辺加工であり、全体として刃部が直線的で台形に近い。2～4 は削器である。いずれも幅広な剝片を素材としている。ただし、3 は形態的

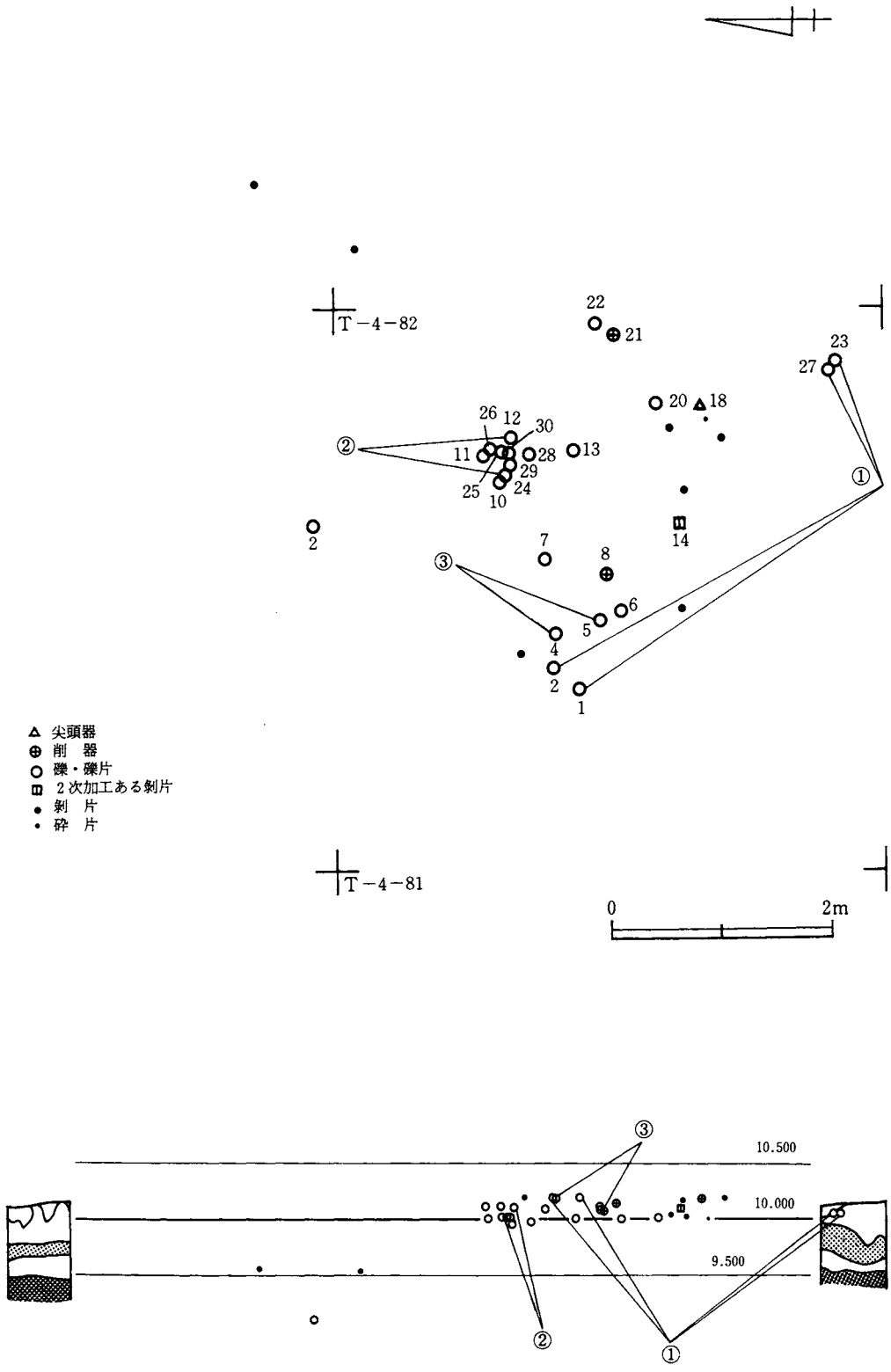


図20　第5ブロック遺物出土状況図

には木葉形尖頭器に近い。

母岩別資料・接合資料

石材は6種以上で母岩別資料は12種類識別し得た。石材は不明のものが多いが、これはいずれも加熱によって表面が変化し、あるいは細かく破砕されたものが多いためである。母岩別石器組成表によれば、石器群は石材としては安山岩を主体としている例が多く、母岩が多岐にわたることが理解される。しかしながら、それでも数量的には少なく、検討に堪えない。接合資料は3例あるが、いずれも礫片どうしの接合資料であり、接合の結果、

表19　第5ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	安山岩		チャート		頁岩		砂岩		流紋岩		不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	−	−	1	33.3	−	−	−	−	−	−	−	−	1	8.3
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削器	2	25.0	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	25.0
ピエス・エスキーユ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
使用痕ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
剝片	4	50.0	2	66.7	−	−	−	−	1	100	−	−	7	58.4
砕片	1	12.5	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	8.3
石核	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
台石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
計	7	63.6	3	27.3	−	−	−	−	1	9.1	−	−	11	100
礫片	−	−	−	−	1	−	3	−	−	−	19	−	23	−

表20　第5ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	不明　2	礫片4	T-4-81-2(礫片)＋T-4-81-1(礫片)＋T-4-81-23(礫片)＋T-4-81-27(礫片)	4
2	不明　1	礫片2	T-4-81-12(礫片)＋T-4-81-24(礫片)	2
3	砂岩　1	礫片2	T-4-81-5(礫片)＋T-4-81-4(礫片)	2

表21　第5ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材	その他
1	T-4-81-8	削器	4.3	2.3	1.1	70°	11.6	4	一側辺加工	無	有	有	一側辺	無	安山岩	
2	T-4-81-18	ナイフ形石器	3.6	1.8	0.5	65° 65°	3.1	1	二側辺加工	無	無	無	−	有	チャート	ナイフ形石器？
3	T-4-81-21	削器	4.6	2.3	1.2	65° 80°	12.9	3	全周	有	有	有	先端	無	安山岩	
4	T-4-81-14	二次加工ある剝片	3.7	2.2	1.1	80°	8.1	2	一側辺加工(部分的)	無	有	無	-	無	頁岩	

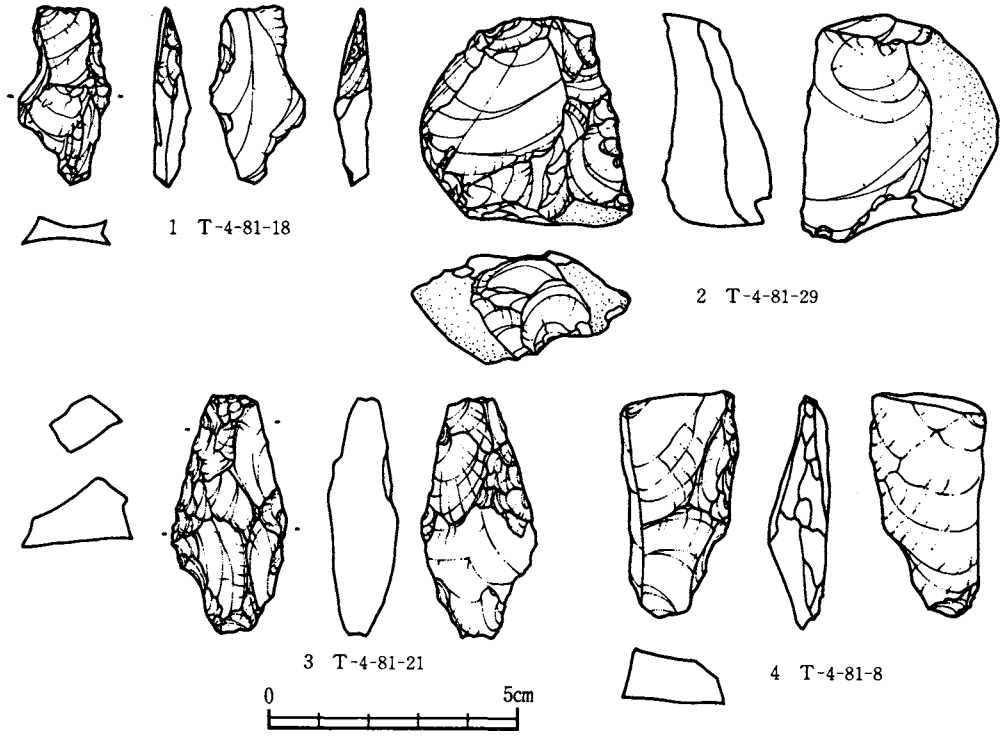


図21　第5ブロック出土遺物実測図

表22　第5ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	礫片	計
チャート 1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
流紋岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
安山岩 1	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1	—	—	—	—	—	—	2
安山岩 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	2
安山岩 3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
安山岩その他	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	1	—	—	3
頁岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
砂岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	3
不明 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	5
不明 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	4
不明 3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	3
不明 4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
不明 5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
不明その他	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	5
計	1	—	—	—	—	—	2	—	—	1	—	—	5	1	—	23	33

完形礫に復元し得た例はない。

まとめ　本ブロックの基本的性格は礫群である。構成礫はいずれもブロック内で良く接合している。一方、石器群は第3、第4ブロックとの接合関係があり、これらのブロックとの同時併存の可能性が高い。

6．第6ブロック　(図22、23、図版4－2、11、表23～26)

出土状況　Ⅳ層よりⅤ層に至るまで出土しており、最大レベル差約 50 m で散漫な出土状況を呈する。一方、平面形は長径約 4 m、短径約 4 m となっている。特に密集した部分はない。

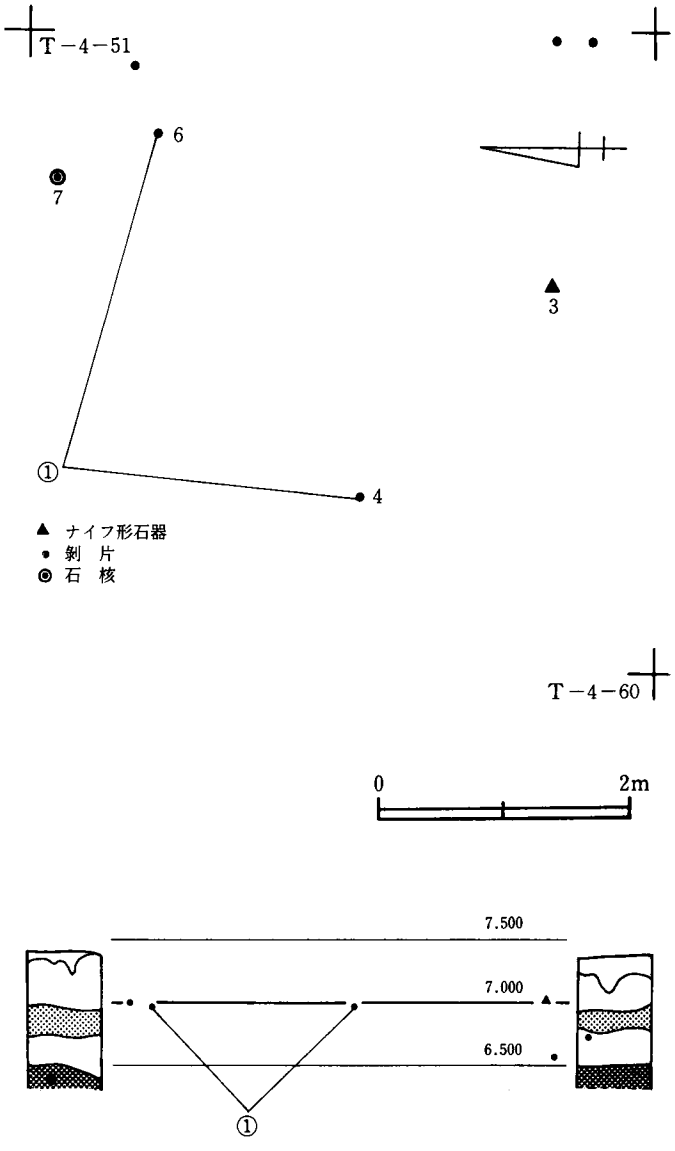


図22　第6ブロック遺物出土状況図

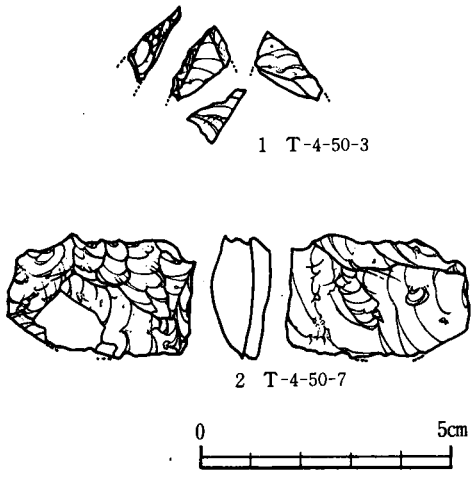


図23 第6ブロック出土遺物実測図

表23 第6ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	チャート 数量	%	黒曜石 数量	%	計 数量	%
ナイフ形石器	−	−	1	20.0	1	14.3
角錐状石器	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−
削片	−	−	−	−	−	−
石錐	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−
削器	−	−	−	−	−	−
ピエス・エスキーユ	−	−	−	−	−	−
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剝片	−	−	−	−	−	−
使用痕ある剝片	−	−	−	−	−	−
石斧	−	−	−	−	−	−
剝片	2	100	3	60.0	5	71.4
砕片	−	−	−	−	−	−
石核	−	−	1	20.0	1	14.3
台石	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	−	−
計	2	28.6	5	71.4	7	100
礫片	−	−	−	−	−	−

出土遺物 総計7点出土した。石器組成はナイフ形石器1点、剝片5点、石核1点となっている。1はナイフ形石器の先端部である。部分的であるため素材の形状については不明である。

母岩別資料・接合資料 石材は黒曜石とチャートの2種に限定される。一方、母岩は2種以上存在するが、黒曜石の多くは識別不能であった。接合資料は剝片どうしの接合資料が1例のみ存する。数量的に少ないため技術的な検討はできなかった。

まとめ ナイフ形石器の断片が1点出土した。全体として数量が少なく、性格を捉えるには至らない。

表24 第6ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 / 器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	敲石	計
黒曜石 1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	2
黒曜石その他	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1	−	3
チャート 1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	2
計	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	5	−	1	−	7

表25 第6ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	黒曜石 1	剝片2	T-4-50-4(剝片)+T-4-50-6(剝片)	2

表26　第6ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm			刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材
			長さ	幅	厚										
1	T-4-50-3	ナイフ形石器	1.6	1.2	0.5	(45°)	0.5	1	一側辺加工?	—	—	有	断片	無	黒曜石
2	T-4-50-7	石核	2.7	3.7	1.2	—	10.3	2	—	—	有	無	—	—	黒曜石

7．第7ブロック（図24、25、図版11、表27～29）

出土状況　ソフトロームとハードロームの境界付近より出土しており、レベル差は約 20 cm とあまりない。平面分布は約 2 m×約 1 m の範囲にあり、小規模なブロックである。

出土遺物　総計 4 点出土した。石器組成はナイフ形石器 1 点、剝片 3 点となっている。1 は

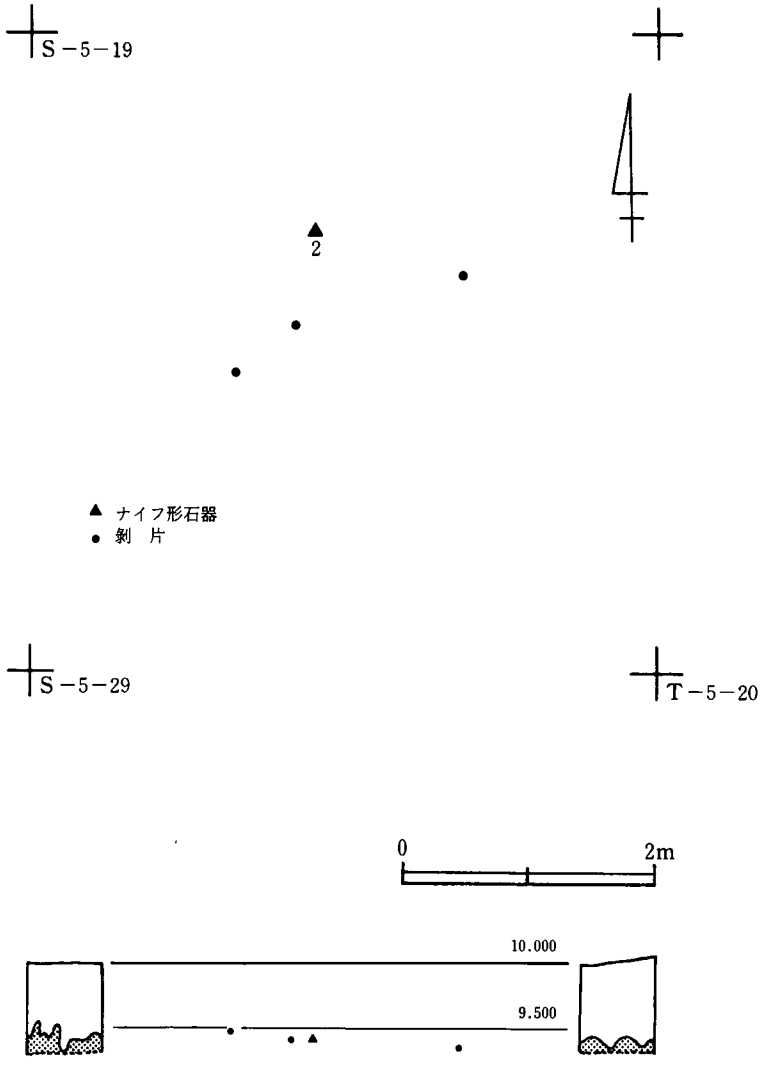


図24　第7ブロック遺物出土状況図

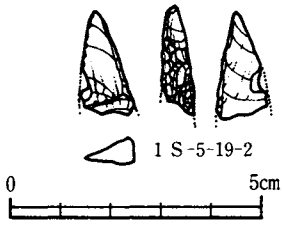


図25　第７ブロック出土遺物実測図

ナイフ形石器である。先端部の破片であり、全形を知るよしもないが、残存部の１側辺にほぼ直角に近い刃つぶし加工が施されている。

母岩別資料・接合資料　石材は２種あり、母岩は２種以上存在する。全般的に数量が少なく、検討に堪えないが、ナイフ形石器のみ他と母岩を異にすることが注目される。接合資料は存在しない。

まとめ　全般的に数量が乏しく、内容は検討の対象外である。

表27　第7ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	安山岩 数量	安山岩 %	玄武岩 数量	玄武岩 %	計 数量	計 %
ナイフ形石器	－	－	1	100	1	25.0
角錐状石器	－	－	－	－	－	－
木葉形尖頭器	－	－	－	－	－	－
削片	－	－	－	－	－	－
石錐	－	－	－	－	－	－
掻器	－	－	－	－	－	－
削器	－	－	－	－	－	－
ピエス・エスキーユ	－	－	－	－	－	－
彫刻刀形石器	－	－	－	－	－	－
二次加工ある剝片	－	－	－	－	－	－
使用痕ある剝片	－	－	－	－	－	－
石斧	－	－	－	－	－	－
剝片	3	100	－	－	3	75.0
砕片	－	－	－	－	－	－
石核	－	－	－	－	－	－
台石	－	－	－	－	－	－
敲石	－	－	－	－	－	－
計	3	75	1	25	4	100
礫片	－	－	－	－	－	－

表28　第７ブロック母岩別資料石器組成表

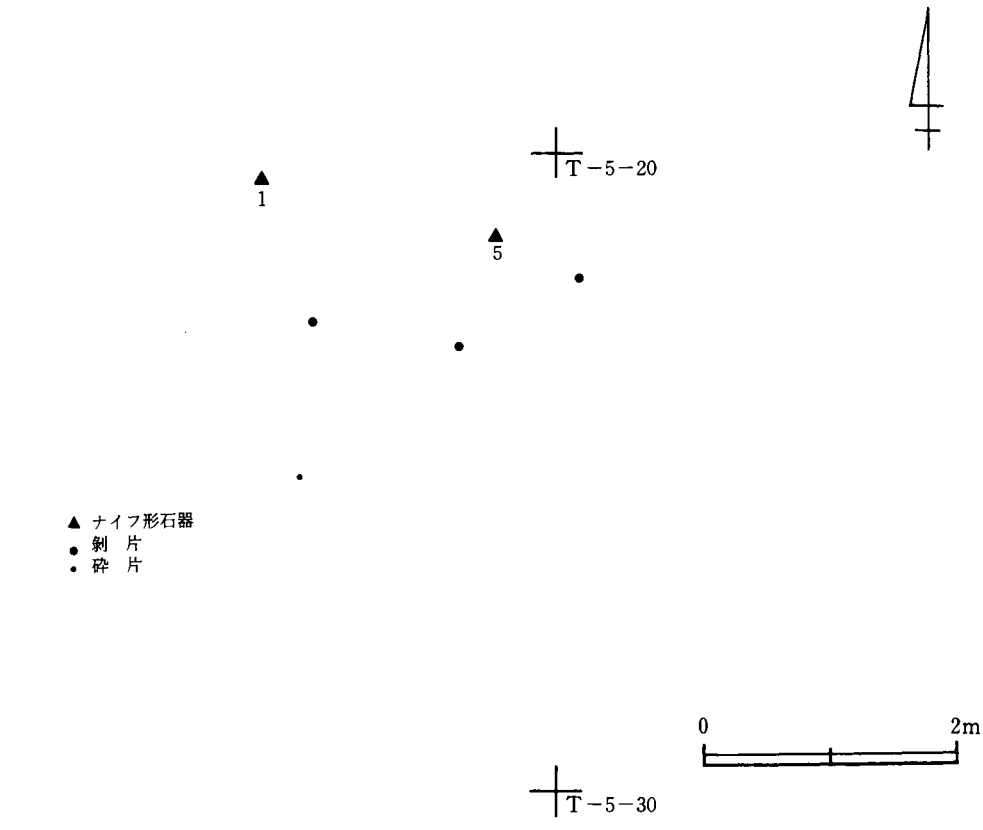
母岩 \ 器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	敲石	計
玄武岩　1	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1
安山岩　1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	1
安山岩その他	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	2
計	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3	－	－	－	4

表29　第７ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面(ノ)存否	欠損(ノ)有無	欠損部位	使用痕	石材
1	S-5-19-2	ナイフ形石器	2.1	1.0	0.6	45°	1.0	1	一側辺加工？	－	－	有	基部	無	玄武岩

8．第８ブロック（図26、27、図版11、表30～32）

出土状況　ソフトロームとハードローム（Ⅴ層）との境界付近より出土しており、レベル差約 30 cm で平面形も約 2.7 m×約 2.2 m と小さく、全体に密度が低く、小規模である。



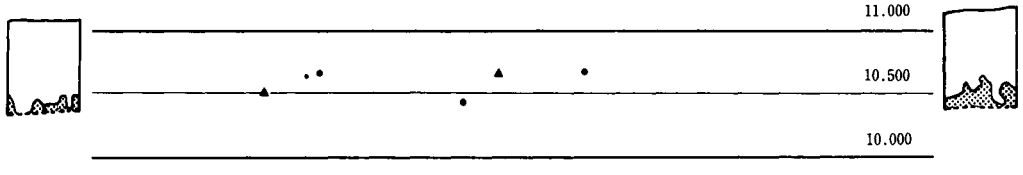


図26　第８ブロック遺物出土状況図

出土遺物　総計５点出土した。石器組成は、ナイフ形石器２点、剝片３点となっている。１、２はナイフ形石器である。１は先端部と基部が欠損している。２は２側辺加工のナイフ形石器であり、刃つぶし加工は約80度とかなり急角度であり、右側辺は抉りこむように加工が施される。

母岩別資料・接合資料　石材は不明のものを含め３種あり、母岩も同様に３種識別し得た。全般的に数量にとぼしく、検討をなし得ない。接合資料はない。

まとめ　第７ブロックと同一形態のナイフ形石器が存在する点（２）が注目される他、貧弱な内容のブロックである。

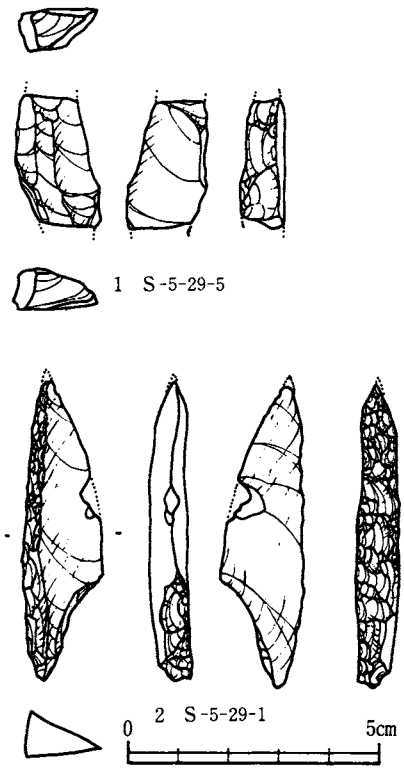


図27 第8ブロック出土遺物実測図

表30 第8ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	安山岩 数量	安山岩 %	珪質頁岩 数量	珪質頁岩 %	不明 数量	不明 %	計 数量	計 %
ナイフ形石器	−	−	1	100	1	100	2	40.0
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−	−	−
削片	−	−	−	−	−	−	−	−
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−	−	−
削器	−	−	−	−	−	−	−	−
ピエス・エスキーユ	−	−	−	−	−	−	−	−
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−
使用痕ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−
剝片	3	100	−	−	−	−	3	60.0
砕片	−	−	−	−	−	−	−	−
石核	−	−	−	−	−	−	−	−
台石	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	−	−	−	−
計	3	60	1	20	1	20	5	100
礫片	−	−	−	−	−	−	−	−

表31 第8ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 \ 器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	敲石	計
珪質頁岩 1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
不明 1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
安山岩 1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	3	−	−	−	3
計	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	3	−	−	−	5

表32 第8ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材
1	S-5-29-1	ナイフ形石器	5.9	1.5	0.8	30°	5.3	2	二側辺加工	無	無	無	−	有	不明
2	S-5-29-5	ナイフ形石器	2.7	1.5	0.8	45°	3.7	1	一側辺加工	無	無	有	基部先端	有	珪質頁岩

9．第9ブロック（図28、表33～36）

出土状況 ソフトローム層とハードローム層（V層）との境界付近より出土しており、レベ

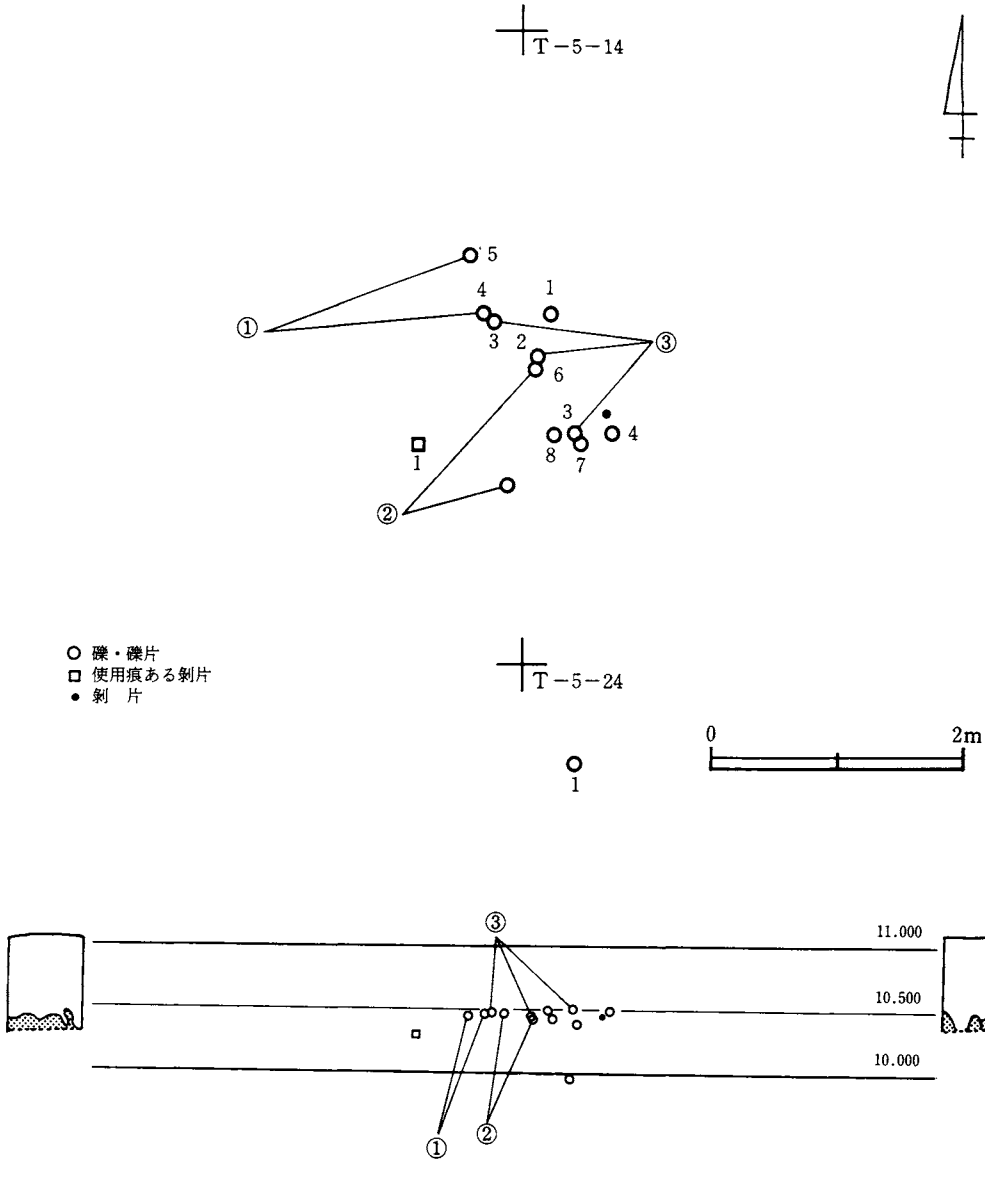


図28　第9ブロック遺物出土状況図

表33　第9ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	礫片	計
珪質頁岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
黒曜石　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1
砂　岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	4
砂　岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
不　明　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	7
不　明　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1	—	—	13	15

ル差は約20cmと小さく、また、集中部分がみられる。平面形も2.0m×1.7mと小さく、ブロック内は集中度が高く、接合資料もブロック内で完結している。

出土遺物　全体で15点出土した内訳は礫片13点、使用痕のある剥片1点、剥片1点となっており、礫片を主体としている。礫片はいずれも加熱によって破砕されており、表面は部分的に赤化している。一方、石器群は礫片に比べ数量的に貧弱であり詳細は不明である。

母岩別資料・接合資料　石材は不明2種を含め5種、母岩は5種識別し得た。接合資料は3例あるが、いずれも礫片どうしの接合例である。全体の約半分の7点が接合した。

まとめ　加熱された礫片を主体とした礫群である。礫群としては小規模であり、しかもいずれも破砕された状態で出土している。2次的な移動（廃棄）が考えられる。

表34　第9ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		珪質頁岩		砂岩		不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ピエス・エスキーユ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剥片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
使用痕ある剥片	1	100	−	−	−	−	−	−	1	50.0
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
剥片	−	−	1	100	−	−	−	−	1	50.0
砕片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石核	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
台石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
計	1	50	1	50	−	−	−	−	2	100
礫片	−	−	−	−	5	−	8	−	13	−

表35　第9ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	不明 1	礫片2	T-5-13-4(礫片)＋T-5-13-5(礫片)	2
2	不明 1	礫片2	T-5-14-6(礫片)＋T-5-13-2(礫片)	2
3	不明 1	礫片3	T-5-14-3(礫片)＋T-5-14-2(礫片)＋T-5-14-3(礫片)	3

表36　第9ブロック石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm			刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材
			長さ	幅	厚										
1	T-5-13-1	使用痕ある剥片	4.9	3.1	0.9	60°	6.7	−	−	−	無	有	断片	一側辺	黒曜石

10. 第10ブロック（図29、30、図版12、表37～40）

出土状況　Ⅳ層中に遺物が含まれており約50cmの幅を持って出土している。平面分布は、

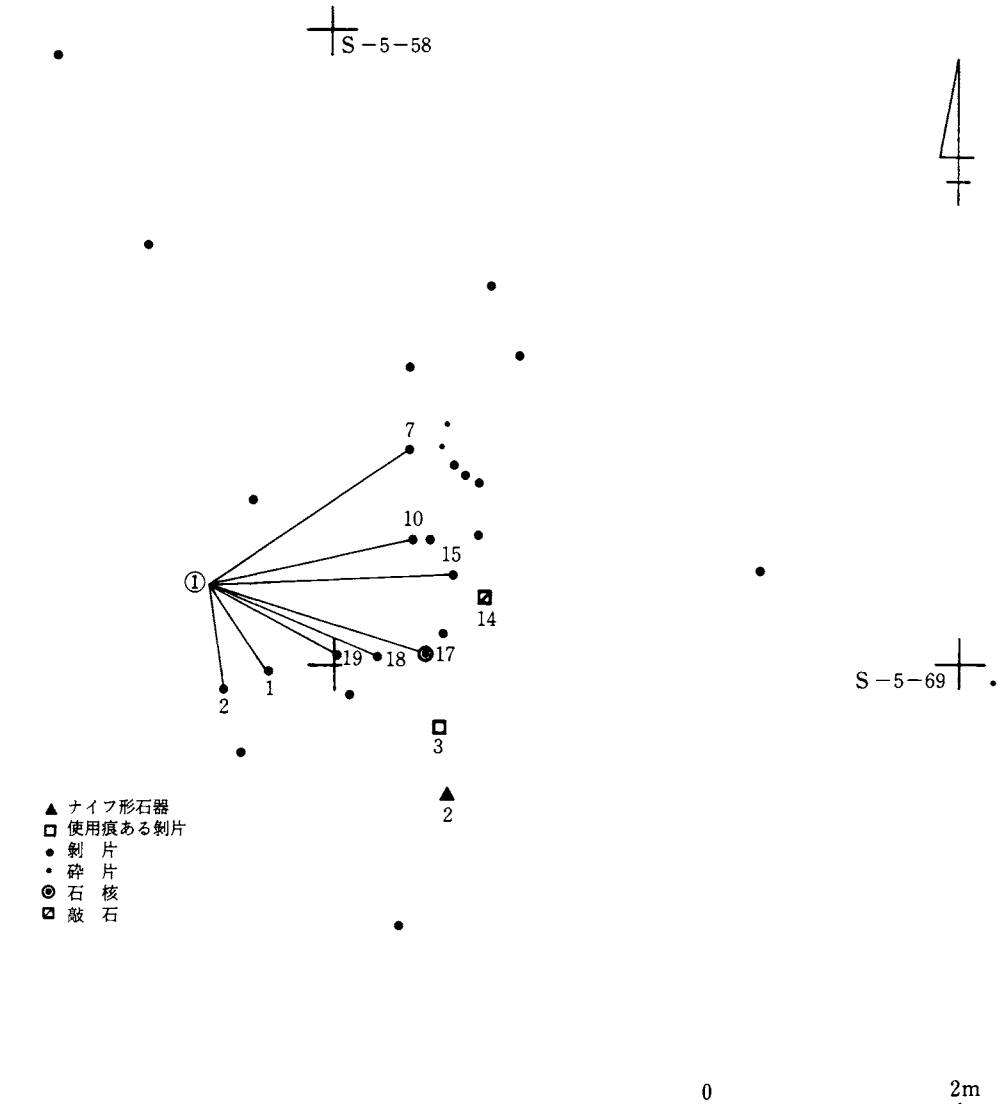


図29　第10ブロック遺物出土状況図

約 5.5 m×約 5 m の範囲にあり、南東側に利器が集中していることが看取される。石核と剝片との接合資料が集中部分にみられ、垂直分布では約 50 cm の幅をもって接合している。

出土遺物　総計29点出土した。石器組成は、ナイフ形石器 1 点、使用痕のある剝片 1 点、剝片23点、砕片 2 点、石核 1 点、敲石 1 点となっている。1 はナイフ形石器である。横長剝片を素材として左側辺および基部に刃つぶし加工が観察される。2 は、上下両端に敲打痕を有する敲石である。扁平な円礫を使用している。

母岩別資料・接合資料　石材は 3 種、母岩は 3 種以上識別し得た。チャートが24点と主体をなしている。接合資料は 1 例存在し、石核と剝片の接合例であるが、節理面に沿ってバラバラに破砕されており、接合状況から剝片生産技術を窺うことはできなかった。

まとめ　本ブロックはチャートを石材とした剝片生産技術が見られる。平面分布に見るべきものがあり、石核と隣接して敲石が出土してお

表37　第10ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	チャート		黒曜石		閃緑岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	1	3.8	−	−	−	−	1	3.4
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−	−	−
削片	−	−	−	−	−	−	−	−
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−	−	−
削器	−	−	−	−	−	−	−	−
ピエス・エスキーユ	−	−	−	−	−	−	−	−
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−
使用痕ある剝片	1	3.8	−	−	−	−	1	3.4
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−
剝片	21	80.9	2	100	−	−	23	79.4
砕片	2	7.7	−	−	−	−	2	7.0
石核	1	3.8	−	−	−	−	1	3.4
台石	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	1	100	1	3.4
計	26	89.7	2	6.9	1	3.4	29	100
礫片	−	−	−	−	−	−	−	−

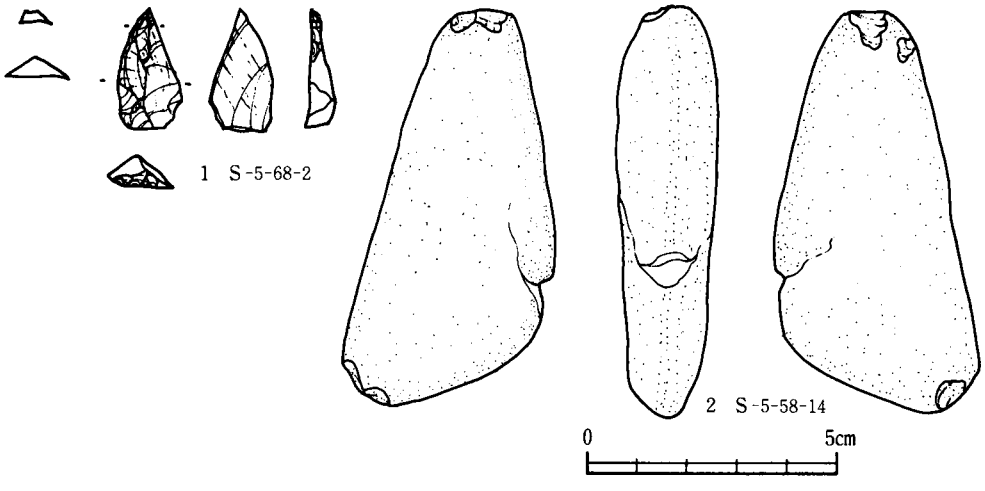


図30　第10ブロック出土遺物実測図

り、石核より生産された剥片が放射状に飛散している状況が接合資料より看取される。剥片生産時の状況を反映しているものと推定される。

表38　第10ブロック母岩別資料石器組成表

器種 / 母岩	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	礫片	計
チャート 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	—	1	—	6
チャートその他	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	14	2	—	—	18
黒曜石 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	2
閃緑岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
計	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	21	2	1	1	27

表39　第10ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	チャート 1	剥片 8 石核 1	S-5-58-10(剥片)、S-5-58-17(石核)、S-5-58-19(剥片)、S-5-58-18(剥片)、S-5-58-9(剥片)、S-5-67-2(剥片)、S-5-67-1(剥片)、S-5-58-15(剥片)(番号不明1点)	9

表40　第10ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材
1	S-5-68-2	ナイフ形石器	1.7	1.5	0.6	25°	1.1	1	基部一側辺加工	無	無	無	—	無	チャート
2	S-5-68-3	使用痕ある剥片	2.4	1.2	0.5	65°	1.6	—	—	—	有	有	先端	二側辺	チャート
3	S-5-58-17	石核	2.5	3.1	1.7	—	12.2	—	—	—	有	無	—	—	チャート
4	S-5-58-14	敲石	7.8	3.8	2.2	—	86.3	2	—	—	—	無	—	上下両端	閃緑岩

11. 第11ブロック（図31～34、図版12、表41～44）

出土状況　IV層下部よりVI層上部に至るまで出土している。最大レベル差約30cmで、平面形は約6m×約6.2mの範囲にあり、全体に均質な分布密度を呈している。また器種ごとの分布に偏在性はみられない。

出土遺物　総計49点出土した。石器組成はナイフ形石器2点、削器4点、2次加工のある剥片3点、使用痕のある剥片2点、剥片24点、砕片8点、石核6点となっている。1、2は2次加工のある剥片である。いずれも横長剥片を素材としており、1側辺に部分的に2次加工がみられる。ただし、2については2次加工が急角度な欠損資料であるため、ナイフ形石器の可能性が高い。3、7、8、10は削器である。いずれも1側辺に2次加工が連続的にみられる。また、横長剥片を素材としている点に共通性がある。なお、8はピエス・エスキーユの転用例の可能性が考えられる。4、5はナイフ形石器である。4については幅広な剥片で、5について

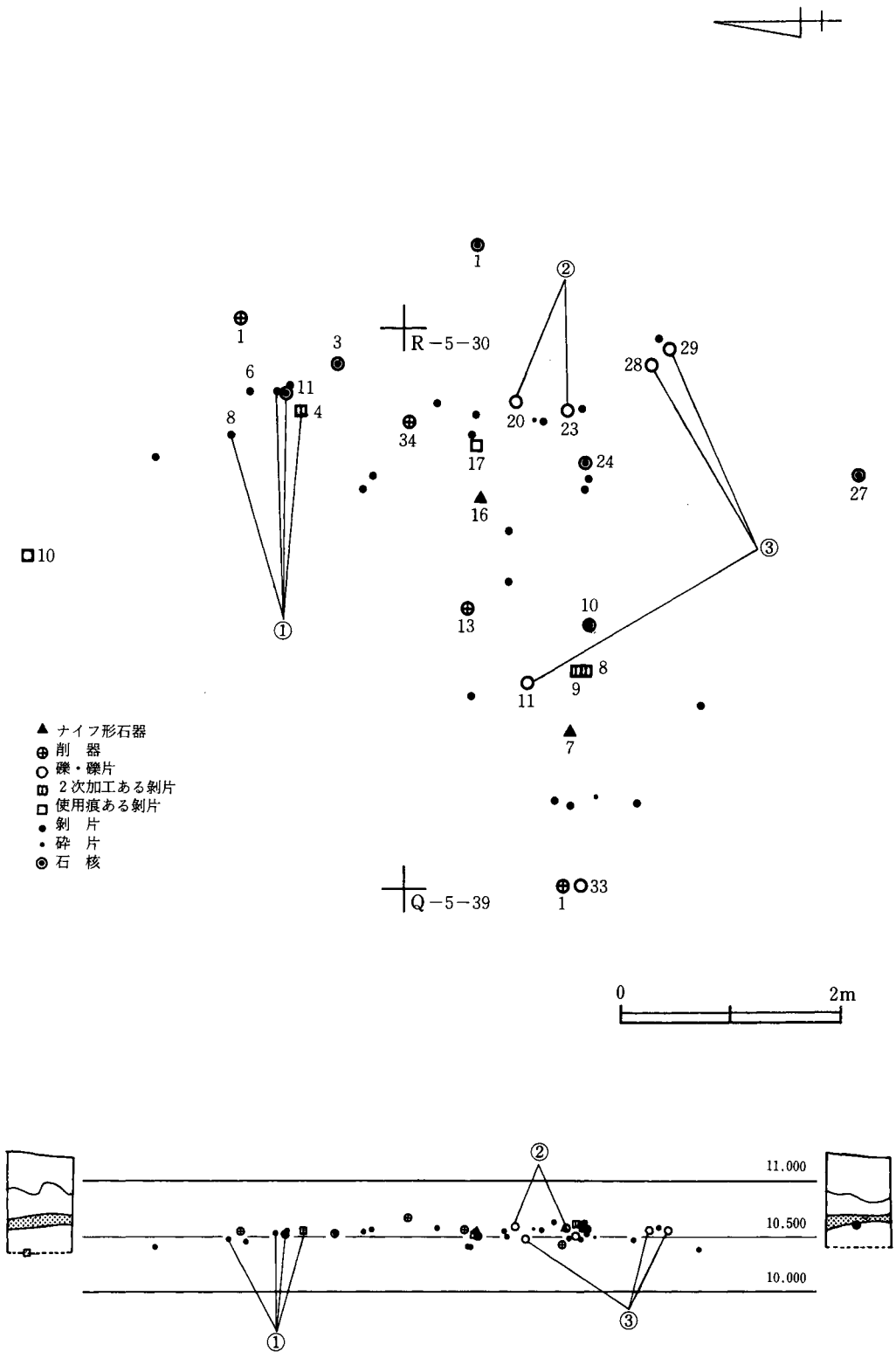


図31　第11ブロック遺物出土状況図

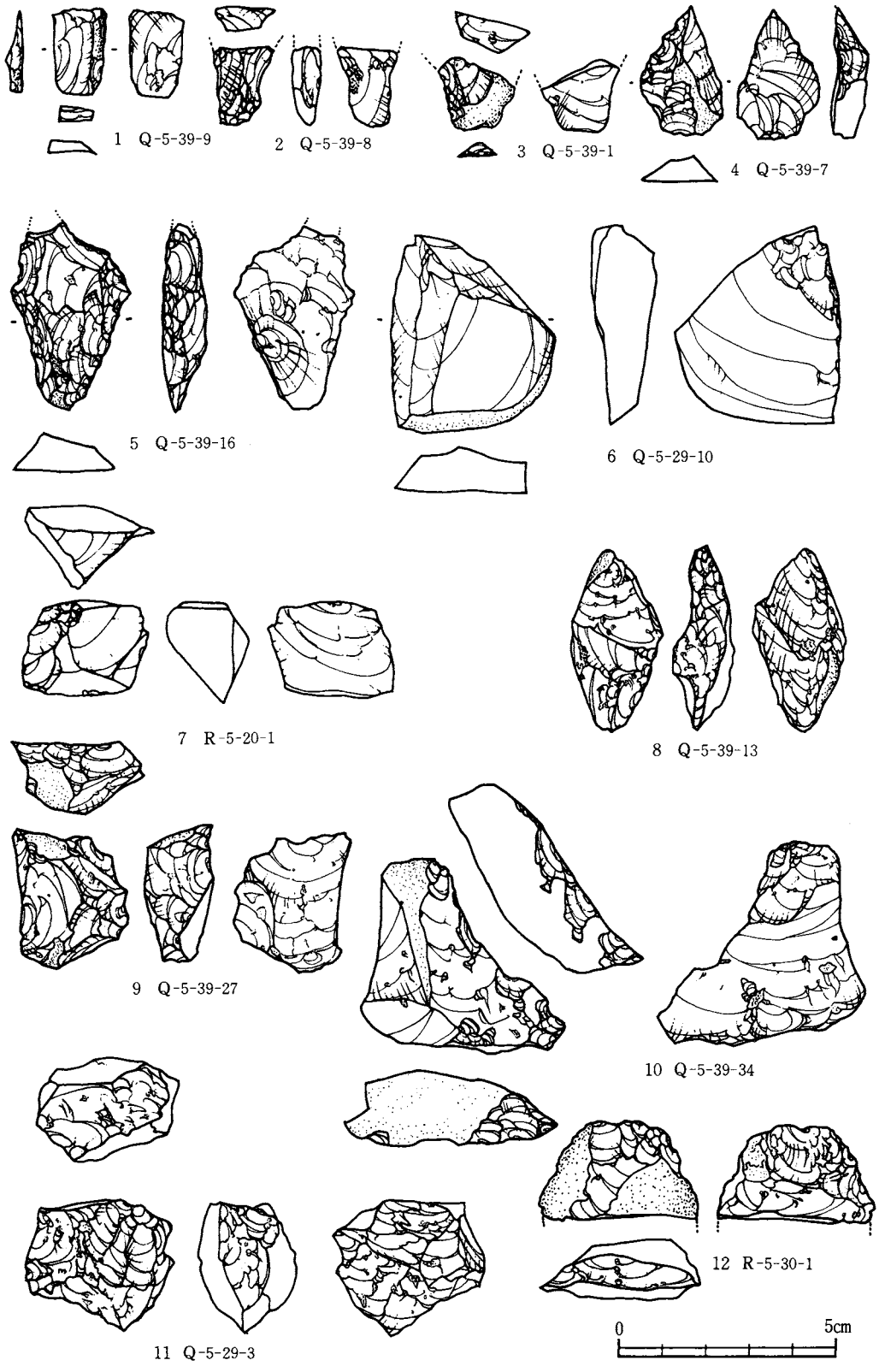


図32　第11ブロック出土遺物実測図(1)

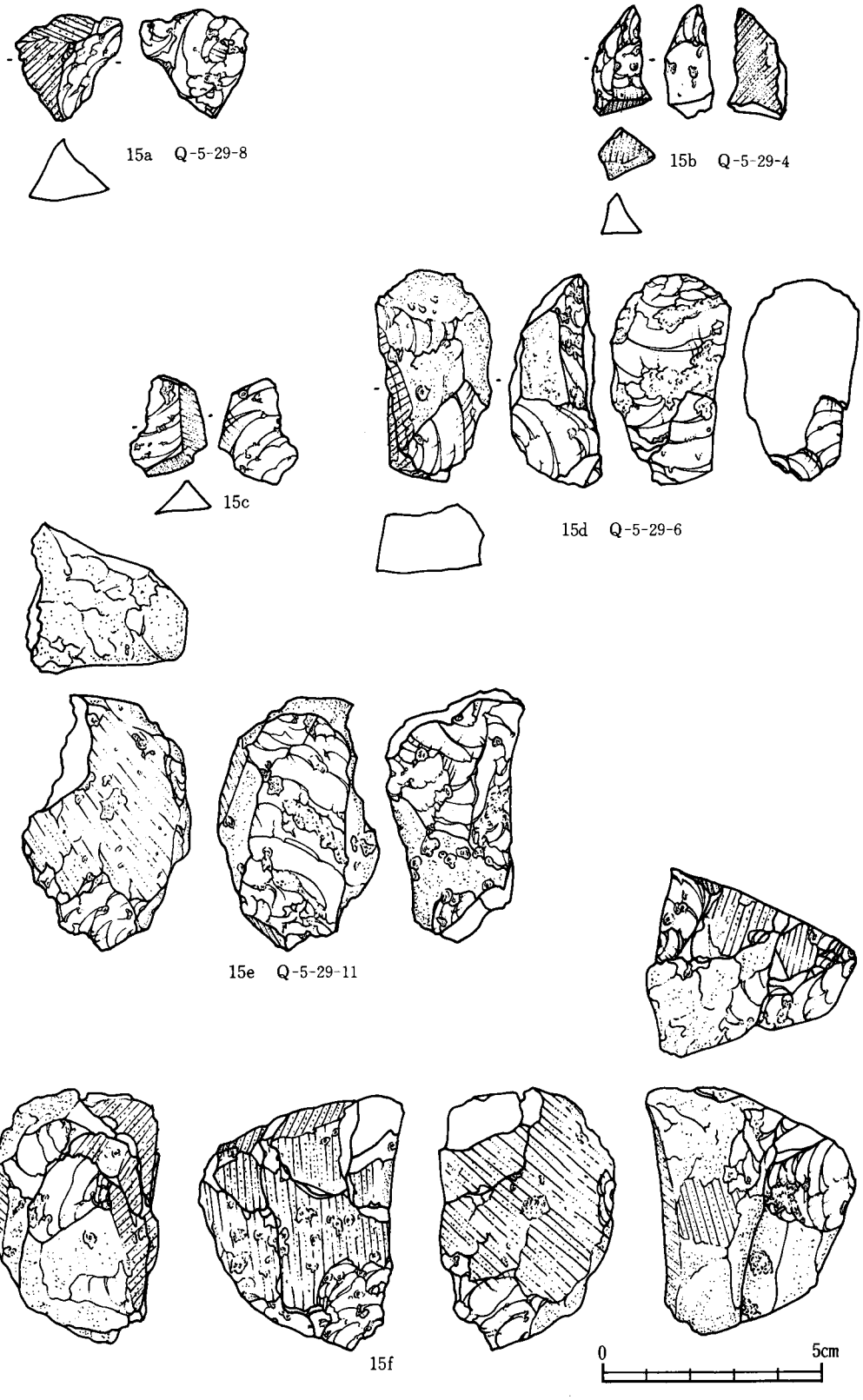


図33　第11ブロック出土遺物実測図(2)

は横長剝片を素材としており、それぞれ1側辺加工、2側辺加工となっている。5の刃部には連続的な刃こぼれが存在する。6は使用痕のある剝片である。圧倒的に連続的な刃こぼれが観察される。9～14は石核である。いずれも横長剝片を生産した痕跡を有する資料で、面構成は加撃面転移が頻繁にあったことを窺わせる。

表41　第11ブロック出土石器組成表

器種＼石材	黒曜石		珪質頁岩		砂岩		不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	2	5.3	−	−	−	−	−	−	2	4.1
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削器	3	7.9	1	20.0	−	−	−	−	4	8.2
ピエス・エスキーユ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剝片	3	7.9	−	−	−	−	−	−	3	6.1
使用痕ある剝片	−	−	2	40.0	−	−	−	−	2	4.1
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
剝片	22	57.8	2	40.0	−	−	−	−	24	49.0
砕片	2	5.3	−	−	2	100	4	100	8	16.3
石核	6	15.8	−	−	−	−	−	−	6	12.2
台石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
計	38	77.5	5	10.2	2	4.1	4	8.2	49	100
礫片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−

母岩別資料・接合資料　石材は不明2種を含め総計6種、母岩は10種識別し得た。主体的な石材は黒曜石であるが、5種以上の母岩に細分され、この中には利器（完成品）も含まれているが、剝片生産技術を反映した資料が多く、角礫状の原石の稜上を加撃し次々と加撃面転移を行い、その結果、横長剝片を生産していることが看取され、完成品からもそのような生産基盤が窺われる。接合資料は4例あり、内訳は剝片欠損資料1例、剝片どうしの接合例1例、剝片と石核の接合例2例となっている。注目す

表42　第11ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	礫片	計
珪質頁岩 1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	1
珪質頁岩 2	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1	−	1	−	−	−	3
黒曜石 1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	3	−	1	−	5
黒曜石 2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1	−	2
黒曜石 3	1	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2
黒曜石 4	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	2	−	3
黒曜石その他	1	−	−	−	−	−	2	−	−	2	−	−	16	2	2	−	25
砂岩 1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	2
不明 1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	3	3
不明 2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1
計	2	−	−	−	−	−	4	−	−	3	2	−	22	2	6	6	47

べき資料は接合資料2、接合資料4である。接合資料2は、角礫状の黒曜石を原材として自然面を打面として、長軸方向に数回および、短軸方向に1回加撃することによって剥片を得ている。生産された剥片のうち15bは、1側辺に部分的に2次加工が施されている。接合資料2は原材の形状にほぼ完全に復元した例であるが、爽雑物を大量に含みきわめて品質が悪く、生産された剥片は、不規則な折れ方、あるいは割れ方をしている。このように石器の目的剥片としての条件が備わっていなかったためこの地点にまとめて廃棄されたものと考えられる。接合資料4は、第12ブロックの石核と接合しており、詳細は第12ブロックで触れるがぶ厚い剥片を素材として求心的に加撃することによって剥片を生産したことを窺わせる資料である。

まとめ　石材としては爽雑物を多量に含んだ漆黒色の黒曜石を主体としているが、剥片生産

表43　第11ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内　訳	内　容	数量
1	黒曜石 1	剥片2 二次加工のある剥片1 石核1	Q-5-29-8(剥片)＋Q-5-29-4(二次加工ある剥片)→Q-5-29-6(剥片) →Q-5-29-11(石核)	4
2	砂　岩 1	礫片2	Q-5-39-23(礫片)＋Q-5-39-20(礫片)	2
3	不　明 1	礫片3	Q-5-39-28(礫片)＋Q-5-39-29(礫片)＋Q-5-39-11(礫片)	3

表44　第11ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器　種	大きさ cm			刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石　材
			長さ	幅	厚										
1	Q-5-39-7	ナイフ形石器	3.0	1.9	0.7	55°	2.8	4	一側辺加工	無	有	無	—	無	黒曜石
2	Q-5-39-16	ナイフ形石器	4.2	2.7	1.0	50°	8.8	5	一側辺加工	無	有	有	先端	有	黒曜石
3	Q-5-39-1	削　器	1.5	1.9	0.7	75°	1.8	3	一側辺加工	無	無	有	先端基部	無	黒曜石
4	Q-5-39-13	削　器	4.2	2.1	1.2	80°	9.1	8	一側辺加工	無	有	無	—	無	黒曜石
5	Q-5-39-34	削　器	4.2	4.8	1.5	50°	20.2	10	一側辺加工	無	有	無	—	無	黒曜石
6	R-5-20-1	削　器	2.2	2.9	1.9	65°	8.8	7	一側辺加工(部分的)	—	有	無	—	無	珪質頁岩
7	Q-5-29-4	二次加工ある剥片	2.4	1.2	1.0	60°	2.7	15b	一側辺加工(部分的)	無	有	有	断片	無	黒曜石
8	Q-5-39-8	二次加工ある剥片	1.8	1.4	0.7	75°	1.5	2	一側辺加工	無	無	有	基部	無	黒曜石
9	Q-5-39-9	二次加工ある剥片	2.0	1.3	0.5	55°	1.2	1	一側辺加工	無	無	有	基部	無	黒曜石
10	Q-5-29-10	使用痕ある剥片	4.4	3.9	1.4	60°	19.6	6	—	—	有	無	—	一側辺	珪質頁岩
11	Q-5-39-17	使用痕ある剥片	2.0	2.1	0.5	35°	1.7	—	—	—	有	無	—	一側辺	珪質頁岩
12	Q-5-29-3	石　核	2.8	3.4	2.3	—	20.9	11	—	—	有	無	—	—	黒曜石
13	Q-5-29-11	石　核	5.7	3.9	3.0	—	56.5	15e	—	—	無	無	—	—	黒曜石
14	Q-5-39-10	石　核	2.5	2.8	1.5	—	8.7	13	—	—	有	無	—	—	黒曜石
15	Q-5-39-24	石　核	2.5	3.0	1.0	—	6.2	14	—	—	有	無	—	—	黒曜石
16	Q-5-39-27	石　核	3.2	2.6	1.5	—	10.4	9	—	—	有	無	—	—	黒曜石
17	R-5-30-1	石　核	2.2	3.6	1.4	—	10.4	12	—	無	有	有	先端	—	黒曜石

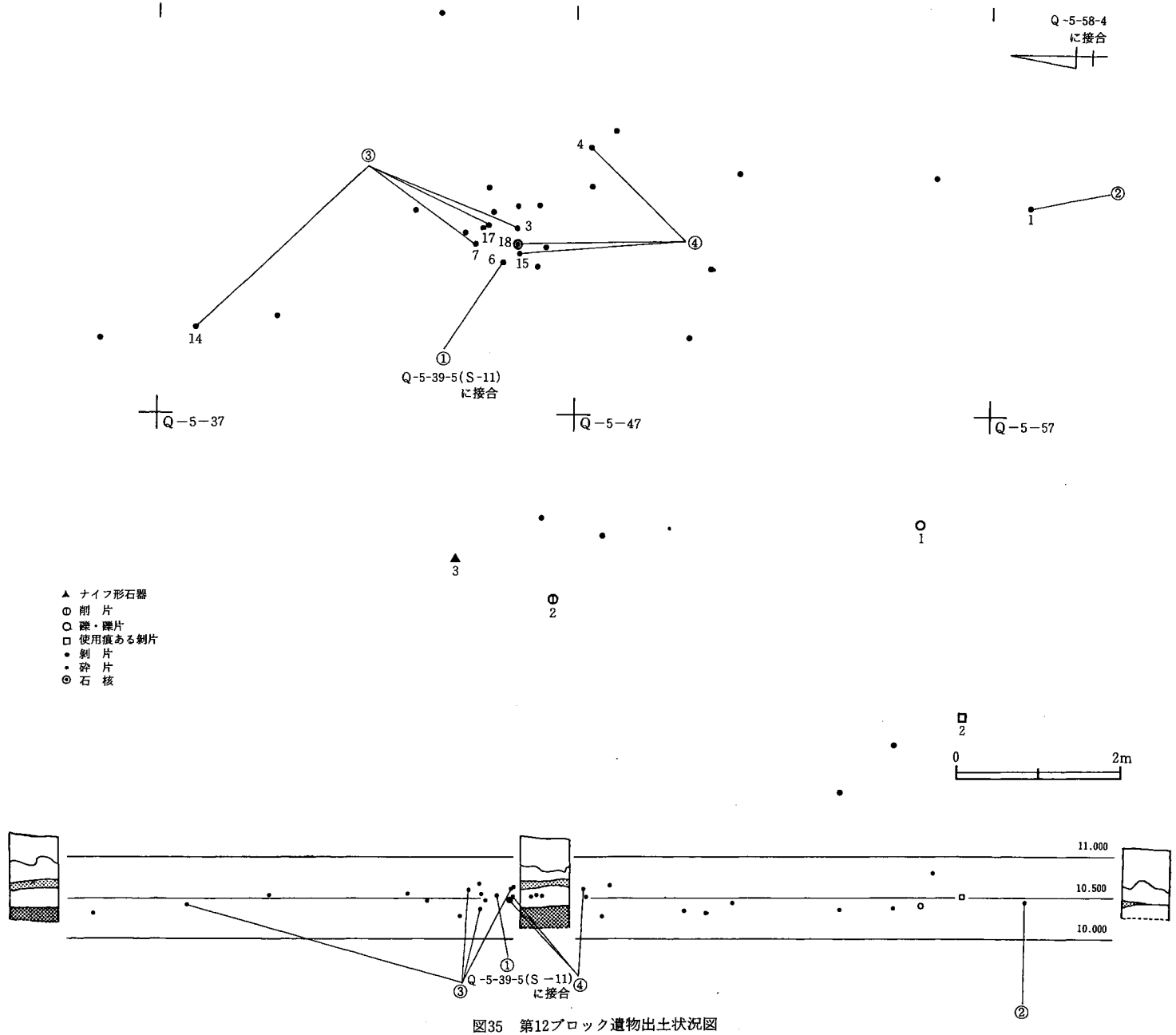


図35　第12ブロック遺物出土状況図

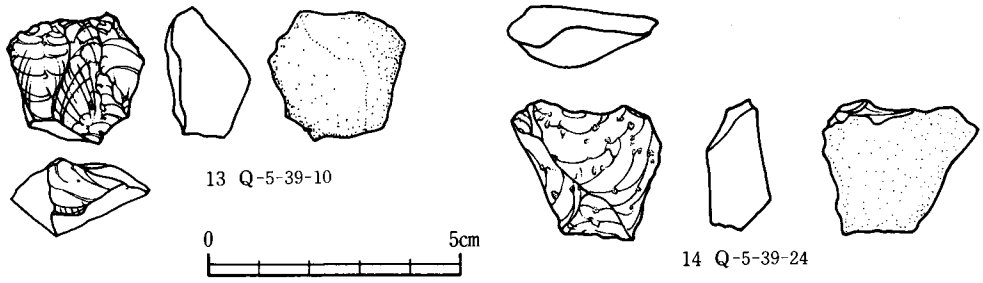


図34　第11ブロック出土遺物実測図(3)

の技術基盤は石材を問わず共通している。また、第12ブロックとの接合資料が存在することから、関連性が窺われる。

12. 第12ブロック（図35～38、図版4－3、12、表45～48）

出土状況　IV層下部よりVIIa層上部にかけて出土し，V層～VI層において最も集中している。平面形約10.6m×約7.0mと広範囲であるが，中に疎密の差があり、石核を中心とした集中部分がみられる。利器はすべて西半部にみられることを特徴としている。

出土遺物　総計48点出土した。内訳は礫片4点、ナイフ形石器3点、削器1点、2次加工のある剝片36点、砕片1点、石核2点となっている。1は2次加工のある剝片としたが、ナイフ形石器の可能性もある。2、4、5はナイフ形石器である。いずれも横長剝片を素材としており、5については切り出し形を呈する。3は削器である。1

表45　第12ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		珪質頁岩		安山岩		チャート		不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	2	5.4	－	－	1	100	－	－	－	－	3	6.8
角錐状石器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
木葉形尖頭器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
削片	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
石錐	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
掻器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
削器	1	2.7	－	－	－	－	－	－	－	－	1	2.3
ピエス・エスキーユ	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
彫刻刀形石器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
二次加工ある剝片	1	2.7	－	－	－	－	－	－	－	－	1	2.3
使用痕ある剝片	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
石斧	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
剝片	31	83.8	5	83.3	－	－	－	－	－	－	36	81.8
砕片	1	2.7	－	－	－	－	－	－	－	－	1	2.3
石核	1	2.7	1	16.7	－	－	－	－	－	－	2	4.5
台石	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
敲石	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
計	37	84.1	6	13.6	1	2.3	－	－	－	－	44	100
礫片	－	－	－	－	2	－	1	－	1	－	4	－

側辺に2次加工が存在する。

母岩別資料・接合資料　石材は不明2種を含め6種、母岩は9種以上識別し得た。特に、技術的な背景を窺わせる母岩別資料はない。石材として黒曜石を主体としている点があることのみ付記しておく。接合資料は4例存在するが、内訳は、剥片の欠損資料1例、剥片どうしの接合資料1例、剥片と石核との接合例2例となっている。特筆すべき資料は、接合資料2、接合資料4がある。接合資料2は、横長剥片と石核の接合資料である。大形剥片の主要剥離面を打

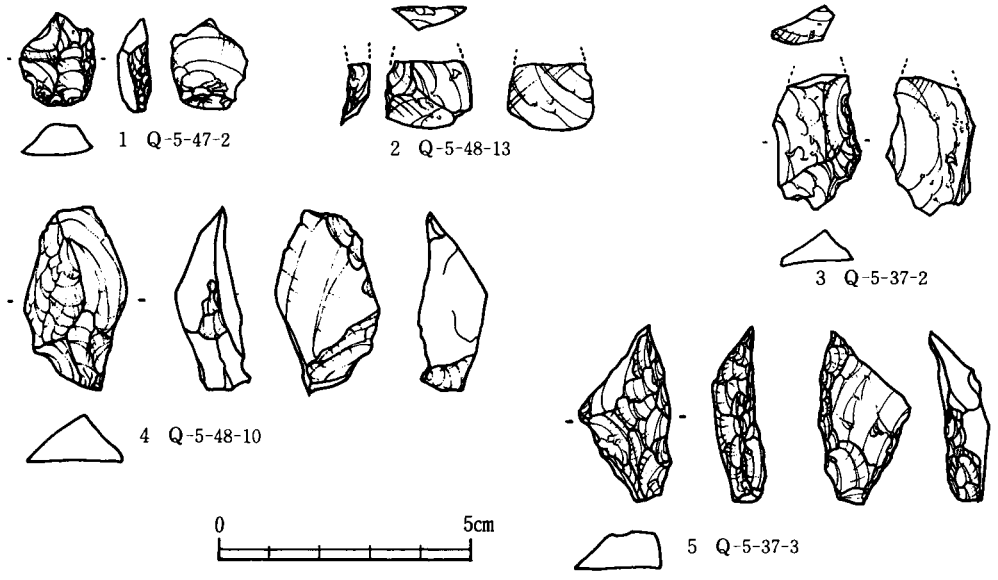


図36　第12ブロック出土遺物実測図(1)

表46　第12ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	礫片	計
珪質頁岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	—	1	—	6
安山岩　1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
黒曜石　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	2
黒曜石　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1	—	2
黒曜石　3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	—	—	—	4
黒曜石　4	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
黒曜石　5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	2
黒曜石その他	1	—	—	—	—	—	1	—	—	1	—	—	8	1	—	—	12
チャート　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
不　明　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2
不　明　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
計	3	—	—	—	—	—	1	—	—	1	—	—	22	1	2	4	34

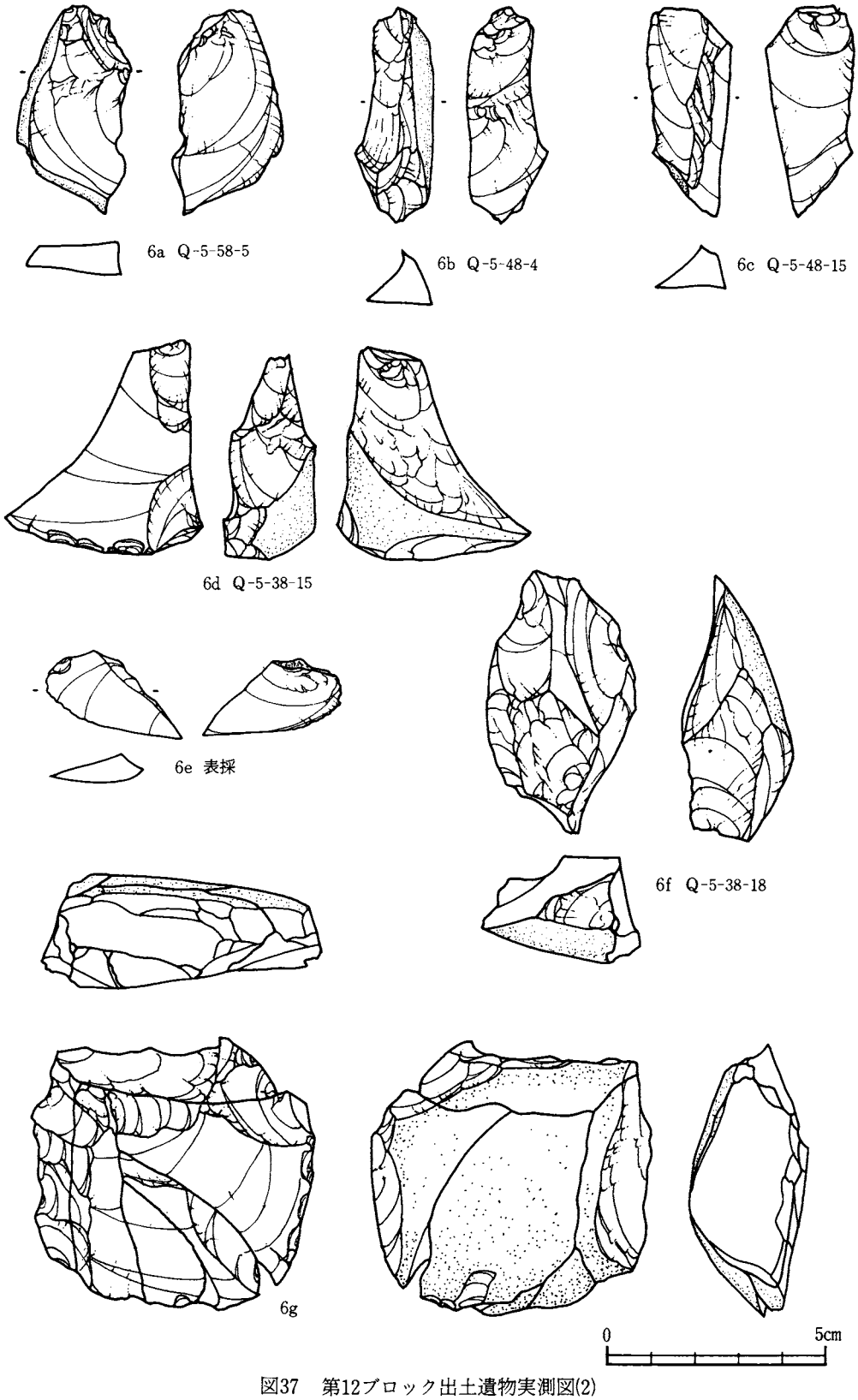


図37　第12ブロック出土遺物実測図(2)

れ、互いの時間的同時性あるいは、技術基盤の類似性が窺われる。

面として横長剝片を生産している状況が看取し得る。接合資料4は、大形で盤状の剝片を素材として、複数の方向に加撃し、縦長剝片、あるいは横長剝片を生産している。打面はいずれも平坦打面であり、生産された剝片の形状に一定の規則性が見られない。

まとめ　技術基盤は平坦な打面より横長剝片を生産していることが窺われ、その結果、生産された剝片を素材として利器を生産している。接合資料第11ブロックの剝片との接合例がみら

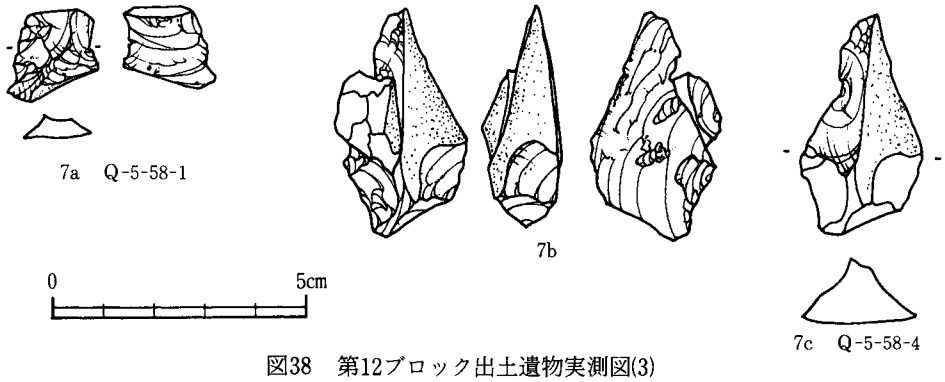


図38　第12ブロック出土遺物実測図(3)

表47　第12ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内　訳	内　容	数量
1	黒曜石1	剝片2	Q-5-39-5(剝片)＋Q-5-38-6(剝片) (S-11)	2
2	黒曜石2	剝片1 石核1	Q-5-58-1(剝片)→Q-5-58-4(石核)	2
3	黒曜石3	剝片4	Q-5-38-17(剝片)＋Q-5-48-7(剝片)→Q-5-48-14(剝片)→Q-5-58-3(剝片)	4
4	珪質頁岩1	剝片5 石核1	Q-5-58-5(剝片)→Q-5-48-4(剝片)→Q-5-48-15(剝片)→ {Q-5-38-15(剝片) 表／採}→Q-5-38-18(石核)	6

表48　第12ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材	その他
1	Q-5-37-3	ナイフ形石器	3.4	1.8	0.8	55°	4.0	5	二側辺加工	有	無	無	—	無	黒曜石	
2	Q-5-48-10	ナイフ形石器	3.6	1.9	1.1	50°	7.1	4	基部二側辺加工	有	有	無	—	無	安山岩	
3	Q-5-48-13	ナイフ形石器	1.3	1.7	0.5	30°	1.1	2	一側辺加工	無	無	有	基部	無	不明	
4	Q-5-37-2	削器	2.6	1.7	0.8	55°	2.7	3	一側辺加工	無	無	有	先端	無	黒曜石	
5	Q-5-47-2	二次加工ある剝片	1.6	1.5	0.7	45°	1.4	1	一側辺加工	無	有	無	—	有	黒曜石	ナイフ形石器？
6	Q-5-38-18	石核	6.1	3.5	2.4	—	37.1	6f	—	—	有	無	—	—	珪質頁岩	
7	Q-5-58-4	石核	4.4	2.4	1.3	—	7.6	7c	—	—	有	無	—	—	黒曜石	

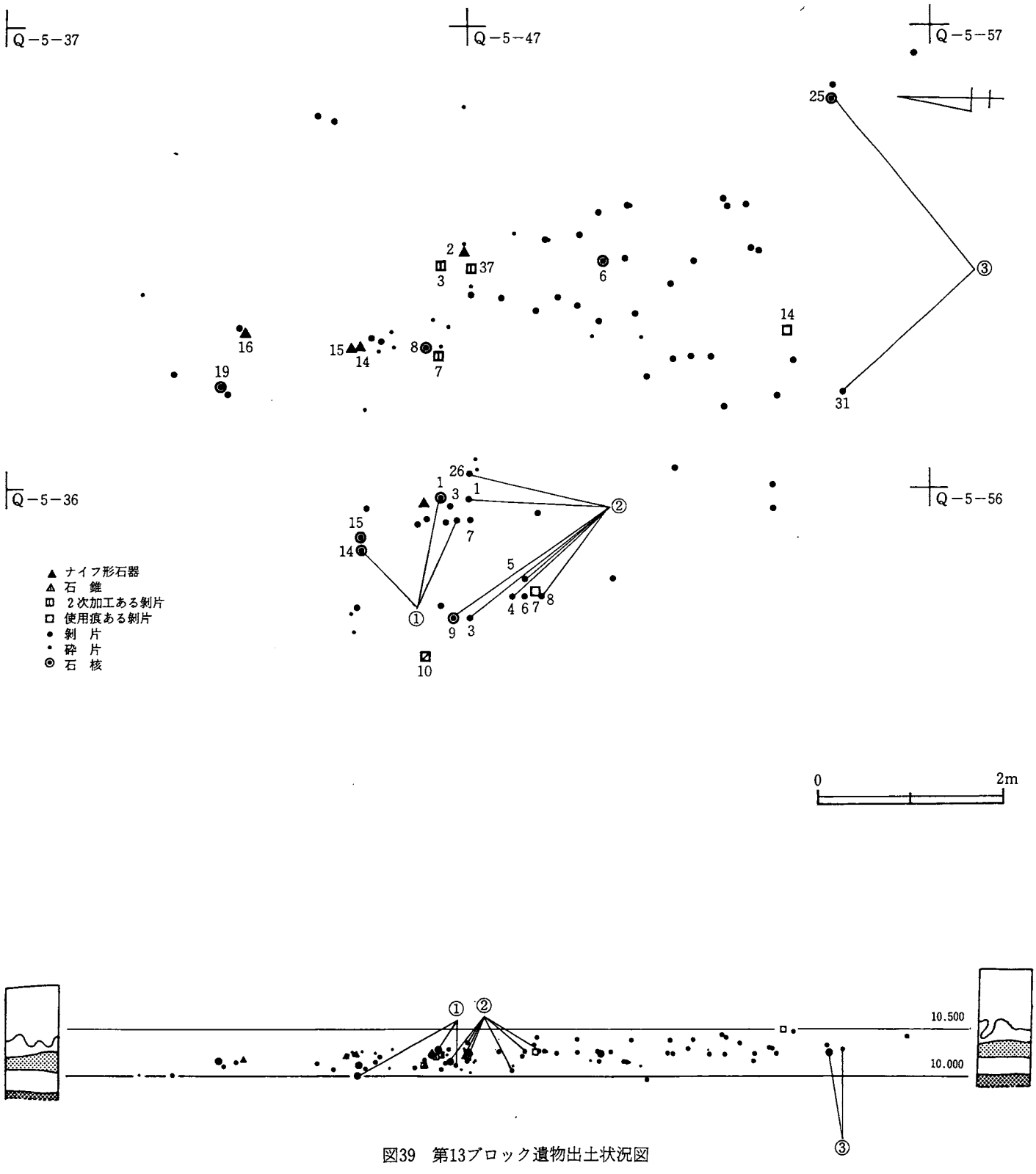


図39　第13ブロック遺物出土状況図

13. 第13ブロック（図39～43、図版５－１、表13、49～52）

出土状況　Ⅳ層下部よりⅥ層に至るまで出土しているが、Ⅴ層において集中度が高い。最大レベル差約40cmで平面分布の規模は約7.7m×約7.0mとなっており、疎密差がなく全体に均一である。南半部に剥片、北半部に利器が偏在する傾向にある。

出土遺物　総計97点出土した。石器組成はナイフ形石器4点、石錐1点、2次加工のある剥片3点、使用痕のある剥片2点、剥片58点、砕片20点、石核8点、敲石1点となっており、多岐にわたる。1～4はナイフ形石器である。いずれも幅広で、横長に近い剥片、あるいは横長剥片を素材としており、3を除いて1側辺加工となっている。

表49　第13ブロック出土石器組成表

器種＼石材	珪質頁岩		黒曜石		安山岩		頁岩		不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	－	－	4	5.5	－	－	－	－	－	－	4	4.1
角錐状石器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
木葉形尖頭器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
削片	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
石錐	－	－	1	1.4	－	－	－	－	－	－	1	1.0
掻器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
削器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
ピエス・エスキーユ	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
彫刻刀形石器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
二次加工ある剥片	－	－	3	4.1	－	－	－	－	－	－	3	3.1
使用痕ある剥片	1	7.7	1	1.4	－	－	－	－	－	－	2	2.1
石斧	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
剥片	8	61.5	42	57.4	6	75.0	2	100	－	－	58	59.9
砕片	1	7.7	18	24.7	1	12.5	－	－	－	－	20	20.6
石核	3	23.1	4	5.5	1	12.5	－	－	－	－	8	8.2
台石	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
敲石	－	－	－	－	－	－	－	－	1	100	1	1.0
計	13	13.4	73	75.3	8	8.2	2	2.1	1	1.0	97	100
礫片	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－

表50　第13ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	礫片	計
珪質頁岩　1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	2	－	2	－	5
珪質頁岩　2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	5	1	1	－	7
珪質頁岩　3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	1
頁岩　1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	2
安山岩　1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	6	－	1	－	7
安山岩その他	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	1	－	－	2
黒曜石　1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	1	－	－	－	2
黒曜石　2	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	16	－	－	－	18
黒曜石その他	4	－	－	－	1	－	－	－	－	3	－	－	26	17	5	－	56
不明　1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	1
計	4	－	－	－	－	－	－	－	－	3	2	－	47	19	9	1	101

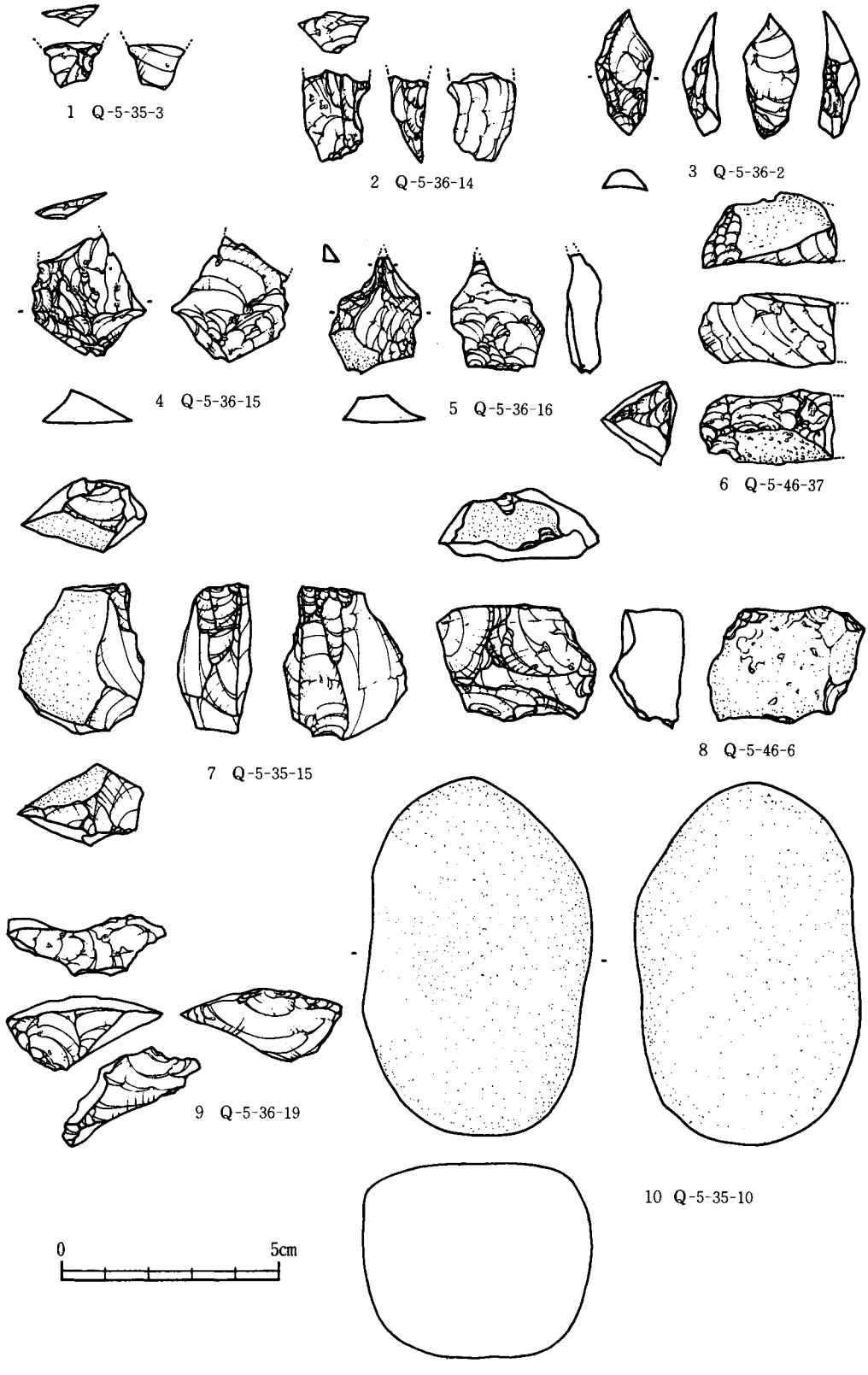


図40　第13ブロック出土遺物実測図(1)

5は石錐である。1側辺に2次加工が施され、剥片の先端部に尖頭部が作り出されている。6は2次加工のある剥片で細長く、ぶ厚い剥片の一端に急角度な2次加工を部分的に施している。そのため全体の形状は舟底状を呈する掻器の可能性も考えられる資料である。7～9は石核である。いずれもぶ厚い剥片を素材としている。7は、剥片の上下両端に平坦な剥離面を設定し、細長い剥片を連続的に生産している。8は剥片の主要剥離面側を求心的に加撃し、横長剥片を生産したことが看取される。9は加撃面転移が頻繁なことが窺われる。10は敲石の可能性が考えられる資料である。原材の表面が本来凹凸が激しく、敲打痕は明確に特定できなかった。

母岩別資料・接合資料　石材は不明1種を含めれば5種、母岩別資料は8種以上確認できた。石材としては黒曜石が主体を占める。特に記すべき傾向は窺われず、黒曜石の中に利器が存在することのみを記しておく。接合資料は3例あるが、いずれも石核と剥片の接合例であり、本

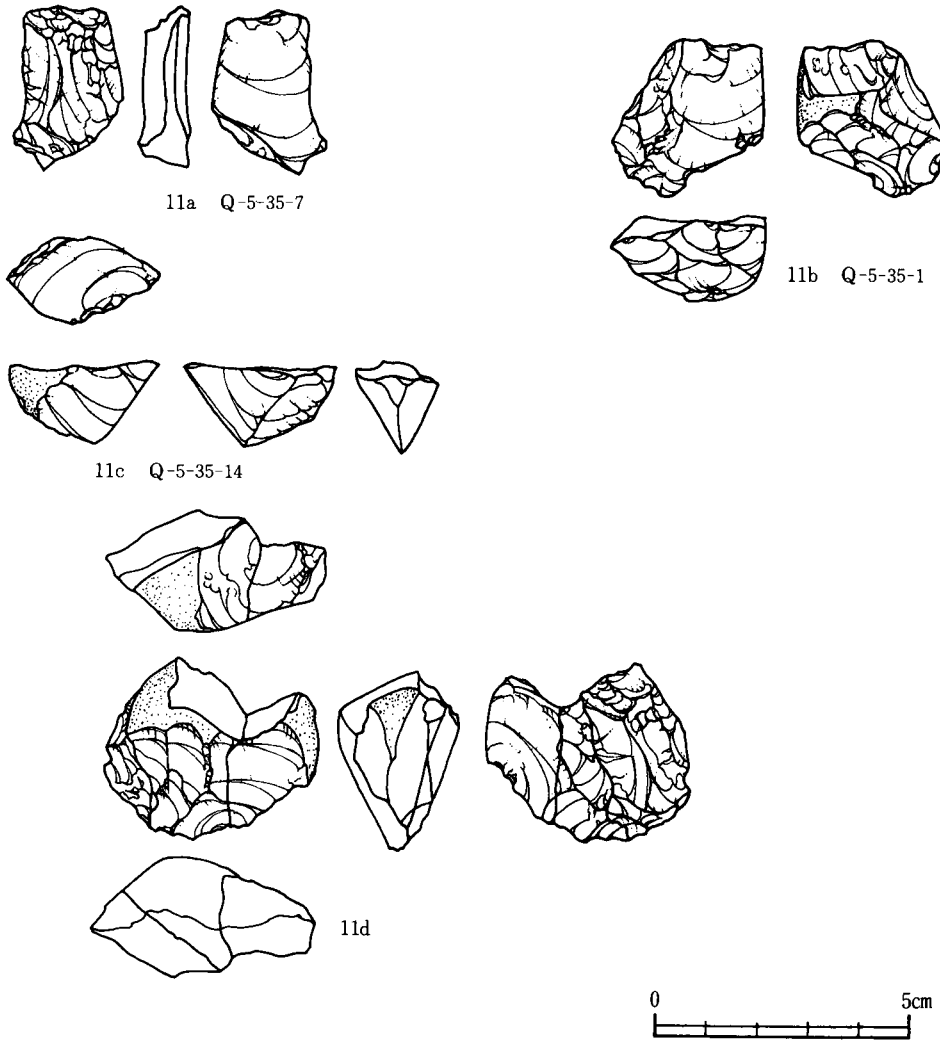


図41　第13ブロック出土遺物実測図(2)

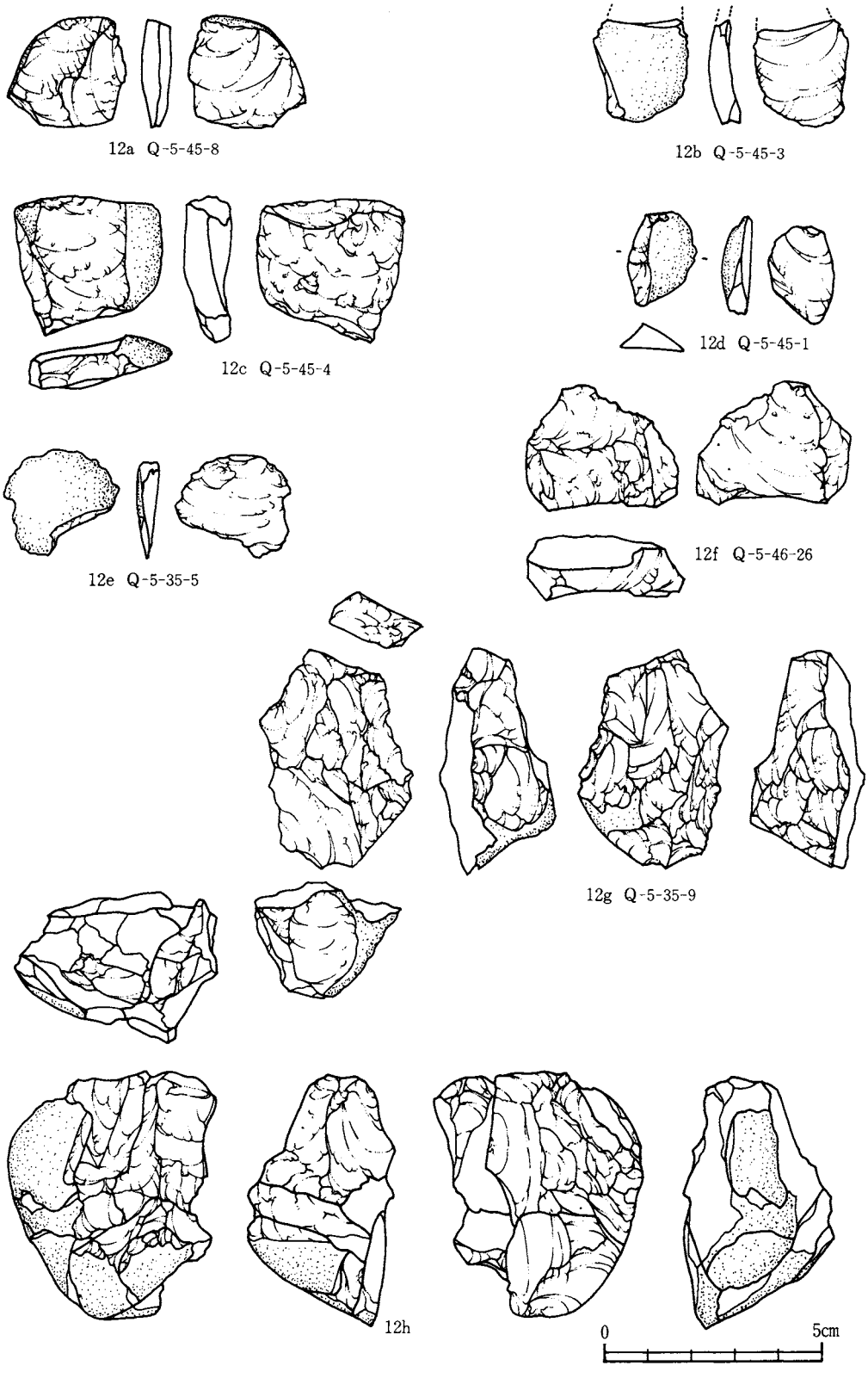


図42　第13ブロック出土遺物実測図(3)

ブロックの技術基盤を知るうえで好例となっている。このうち接合資料1、2は石材の違いはあるものの、共に表裏に求心的な加撃面によっておおわれている。このような技術基盤によって生産された剝片は結果として、バルブの発達した横長剝片である。しかしながら本ブロック内では、これらの接合資料と関連性のある利器は出土していない。接合資料3は、石核と剝片の接合資料としたが、石核の欠損例の可能性も否めない。なぜならば、剝片と石核の接合面は剝離面というよりもむしろ、折断面に近いからである。いずれにしろ、この石核は平坦な打面

表51　第13ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内　訳	内　容	数量
1	珪質頁岩1	剝片1 石核2	Q-5-35-7(剝片)→Q-5-35-1(石核)＋Q-5-35-14(石核)	3
2	安山岩1	剝片6 石核1	Q-5-45-8(剝片)→Q-5-45-3(剝片)→Q-5-45-4(剝片)→Q-5-45-1(剝片)→Q-5-35-5(剝片)→Q-5-46-26(剝片)→Q-5-35-9(石核)	7
3	黒曜石 その他	剝片1 石核1	Q-5-46-31(剝片)＋Q-5-46-25(石核)	2

表52　第13ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材	その他
1	Q-5-35-3	ナイフ形石器	1.0	1.3	0.4	25°	0.4	1	一側辺加工?	無	無	有	基部	無	黒曜石	
2	Q-5-36-2	ナイフ形石器	2.9	1.3	0.7	35°	2.2	3	二側辺加工	無	無	無	—	有	黒曜石	
3	Q-5-36-14	ナイフ形石器	2.0	1.6	0.9	50°	2.1	2	一側辺加工	無	無	有	基部	無	黒曜石	
4	Q-5-36-15	ナイフ形石器	2.6	2.5	0.9	40°	4.9	4	一側辺加工	無	有	有	先端	無	黒曜石	
5	Q-5-36-16	石錐	2.4	2.2	0.8	刃先角 40°	3.4	5	先端	無	有	無	—	無	黒曜石	
6	Q-5-36-3	二次加工ある剝片	1.8	0.8	0.6	60°	0.8	—	不明	無	無	有	断片	無	黒曜石	
7	Q-5-36-7	二次加工ある剝片	2.7	3.5	0.8	—	6.2	—	不規則	有	無	無	—	無	黒曜石	
8	Q-5-46-37	二次加工ある剝片	3.1	1.7	1.6	65°	7.5	6	先端	無	無	有	基部	無	黒曜石	スクレーパー(?)
9	Q-5-45-7	使用痕ある剝片	3.2	2.3	1.0	45°	5.6	—	—	—	無	有	先端部基部	二側辺	珪質頁岩	
10	Q-5-46-14	使用痕ある剝片	1.4	1.8	0.5	35°	0.9	—	—	—	無	有	断片	一側辺?	黒曜石	
11	Q-5-35-1	石核	3.2	3.0	1.6	—	12.8	11b	—	—	有	無	—	—	珪質頁岩	
12	Q-5-35-9	石核	5.0	3.4	2.6	—	36.6	12g	—	—	有	無	—	—	安山岩	
13	Q-5-35-14	石核	3.0	1.8	1.5	—	5.5	11c	—	—	有	有	半括		珪質頁岩	Q-5-35-1と接合
14	Q-5-35-15	石核	3.4	2.7	1.7	—	16.3	7	—	—	有	無	—	—	珪質頁岩	
15	Q-5-36-8	石核	1.9	2.4	2.0	—	8.6	—	—	—	有	無	—	—	黒曜石	
16	Q-5-36-19	石核	1.8	3.6	1.2	—	5.5	9	—	—	有	無	—	—	黒曜石	
17	Q-5-46-6	石核	2.2	3.4	1.5	—	14.8	8	—	—	有	無	—	—	黒曜石	
18	Q-5-46-25	石核	2.8	2.8	2.8	—	30.1	13	—	—	有	有	半割	—	黒曜石	
19	Q-5-35-10	敲石	8.3	5.2	4.4	—	292.0	10	—	—	—	無	—	長軸一端	不明	

より下端にむかって幅広な剥片を生産した痕跡をとどめている。

まとめ　本ブロックでは接合資料、あるいは剥片、利器より、横長剥片を生産する技術基盤が看取される。また、石器組成としては石錐が加わり他のブロックに比べヴァラエティに富む。

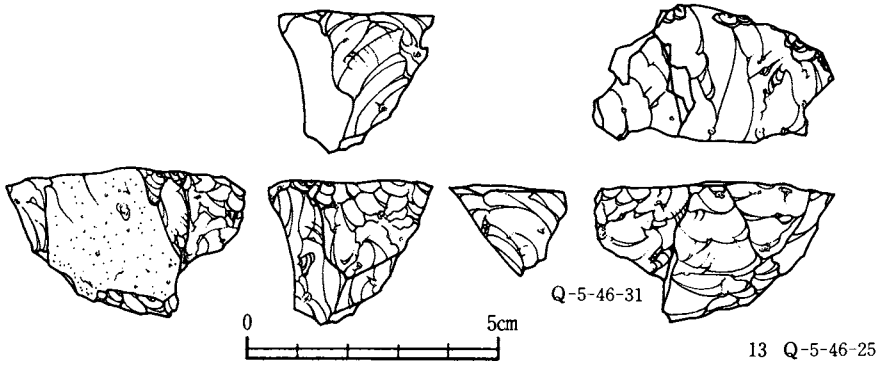


図43　第13ブロック出土遺物実測図(4)

14. 第14ブロック（図44～46、図版13、表53～56）

出土状況　ソフトローム下部よりV層上部にかけて分布しており、レベル差は約40cmで平面分布は約3.2m×約2.5mとなる小範囲である。平面分布では器種ごとの偏在性、集中部分は特にない。

出土遺物　総計11点出土した。内訳は礫片2点、削器2点、使用痕のある剥片1点、剥片7点、石核1点となっている。1、3は削器である。共に横長剥片を素材として、連続的に2次加工が施されているが、1はやや急角度であり、ナイフ形石器の刃つぶし加工に近い。2は使用痕のある剥片である。右側辺に刃こぼれが部分的に観察される。

母岩別資料・接合資料　石材は3種あり、母岩は7種識別し得た。数量に比して母岩の種類は多い。石材では黒曜石が相対的に多いことのみ理解でき、母岩別資料石器組成表でも器種による石材の使いわけや、工程上の偏りなどは窺われない。接合資料は1例あり、石核と剥片と

表53　第14ブロック出土石器組成表

器種＼石材	黒曜石		安山岩		珪質頁岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	−	−	−	−	−	−	−	−
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−	−	−
削片	−	−	−	−	−	−	−	−
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−	−	−
削器	2	20.0	−	−	−	−	2	18.2
ピエス・エスキーユ	−	−	−	−	−	−	−	−
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剥片	−	−	−	−	−	−	−	−
使用痕ある剥片	−	−	−	−	1	100	1	9.1
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−
剥片	7	70.0	−	−	−	−	7	63.6
砕片	−	−	−	−	−	−	−	−
石核	1	10.0	−	−	−	−	1	9.1
台石	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	−	−	−	−
計	10	90.9	−	−	1	9.1	11	100
礫片	1	−	1	−	−	−	2	−

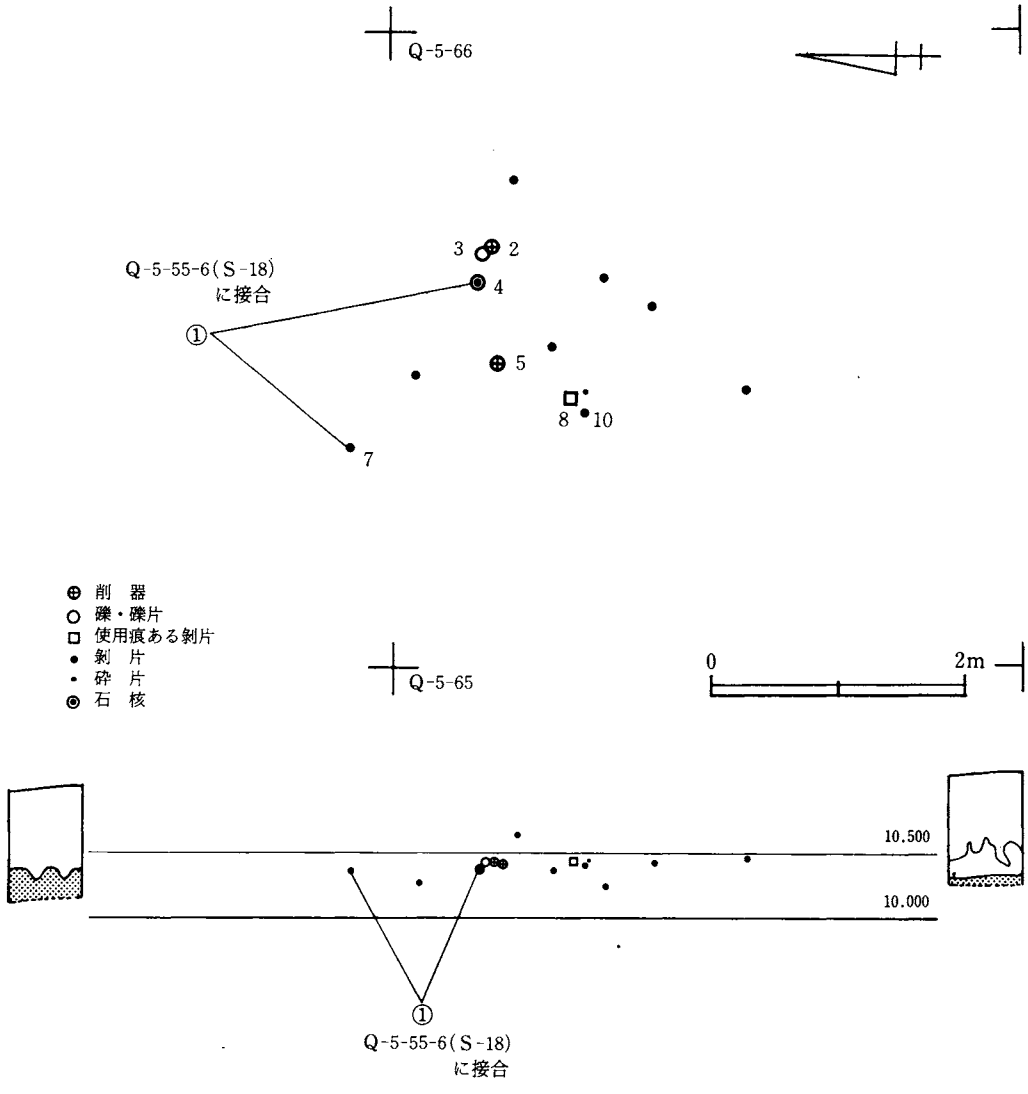


図44　第14ブロック遺物出土状況図

表54　第14ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	礫片	計
珪質頁岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1
黒曜石　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	1	—	4
黒曜石　2	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	3	—	—	—	4
黒曜石　3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
安山岩　1	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
安山岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
安山岩　3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
計	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	1	—	8	—	1	1	13

の接合例である。円礫を呈する黒曜石を原材として互いに異なった複数の方向に加撃し、横長剥片を生産したことを反映した資料である。接合した剥片のうち１点が第18ブロックに帰属し、第17ブロックとの関連性を窺わせる。

まとめ　全体として数量が乏しく、性格を把握するに至らない。利器や、剥片の多くは横長剥片によって占められている点や、第18ブロックとの接合関係があることを記しておく。

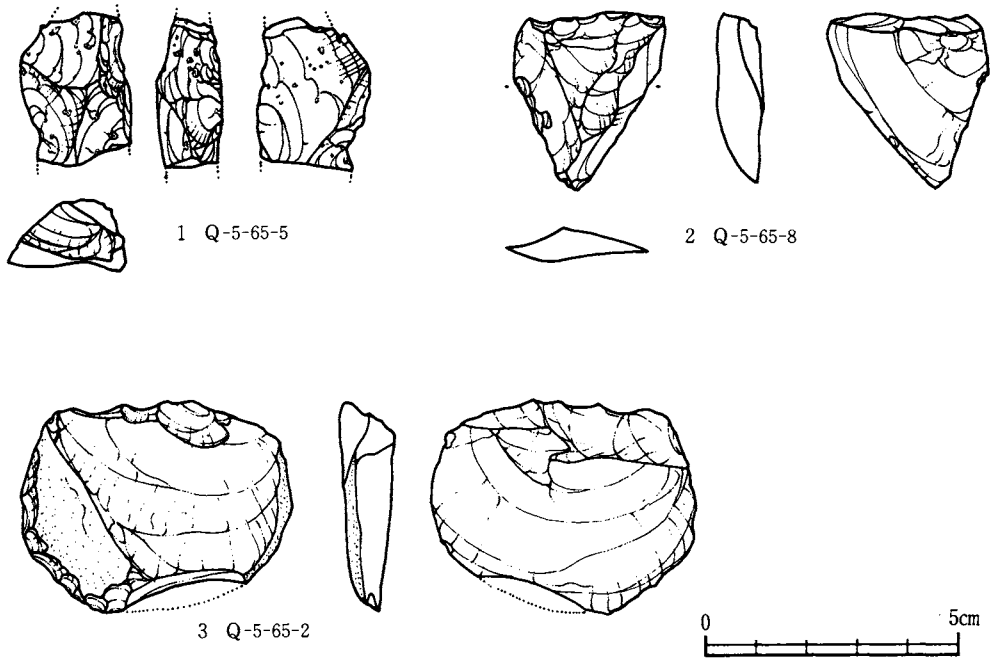


図45　第14ブロック出土遺物実測図(1)

表55　第14ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内　訳	内　容	数量
1	黒曜石 1	剥片 2 石核 1	Q-5-55-6(剥片) (S-17) Q-5-55-7(剥片) →Q-5-65-4(石核)	13

表56　第14ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器　種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石　材
1	Q-5-65-2	削　器	4.0	5.4	0.9	55°	22.1	3	部分的	有	無	有	先端	無	安山岩
2	Q-5-65-5	削　器	2.8	2.3	1.2	70° 60°	7.4	1	二側辺加工	有	無	有	基部 先端部	無	黒曜石
3	Q-5-65-8	使用痕ある剥片	3.1	3.1	0.8	50° 45°	6.4	2	—	有	無	無	—	二側辺	珪質頁岩
4	Q-5-65-4	石　核	2.8	2.9	2.1	—	20.1	4c	—	—	有	無	—	—	黒曜石

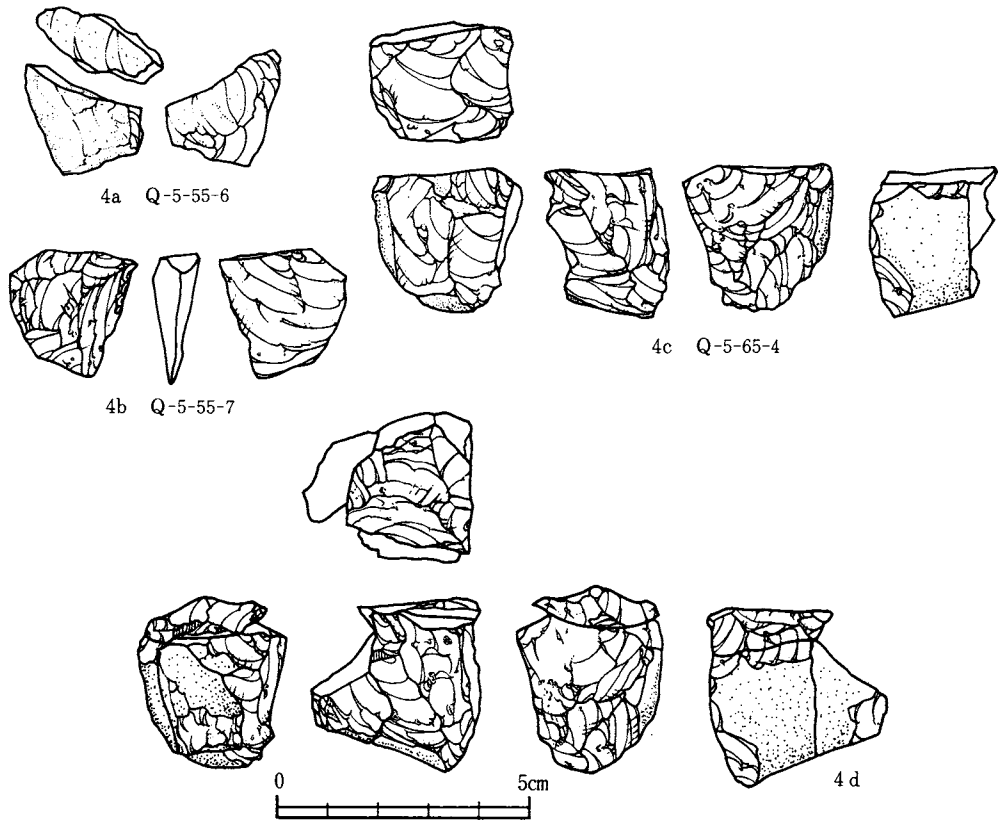


図46　第14ブロック出土遺物実測図(2)

15. **第15ブロック**（図47、48、図版5－2、13、表57～59）

出土状況　IV層よりV層にかけて出土している。最大レベル差約 30 cm で平面分布は約2.4 m×約1.1mとなっており、極めて集中の高いブロックである。

出土遺物　総計70点出土した。石器組成はナイフ形石器1点、剥片25点、砕片43点、石核1点と他のブロックに比して全体の中で占める利器の割合が低い。1はナイフ形石器である。横長剥片を素材とした1側辺加工で全体として切り出し形を呈する。

2は石核である。メノウの円礫を原材としており、上端部と側辺の平坦な剥離面より加撃された痕跡をとどめる。

母岩別資料・接合資料　石材は3種、母岩は4母岩以上を識別し得た。このうち、石材としては黒曜石が大勢を占める。全体として利器が少なく剥片生産を反映した資料が多いが、石核はメノウ製1点であり、黒曜石の母岩別資料は剥片、砕片によって占められ、石核が存在せず、剥片生産技術の一連の工程はたどれない。また、接合資料はない。

まとめ　利器が少なく、技術基盤として横長剥片を生産したことを反映する資料である。しかしながら、石核と剥片、砕片とは互いに母岩を異にしており、全貌を把握するに至らない。

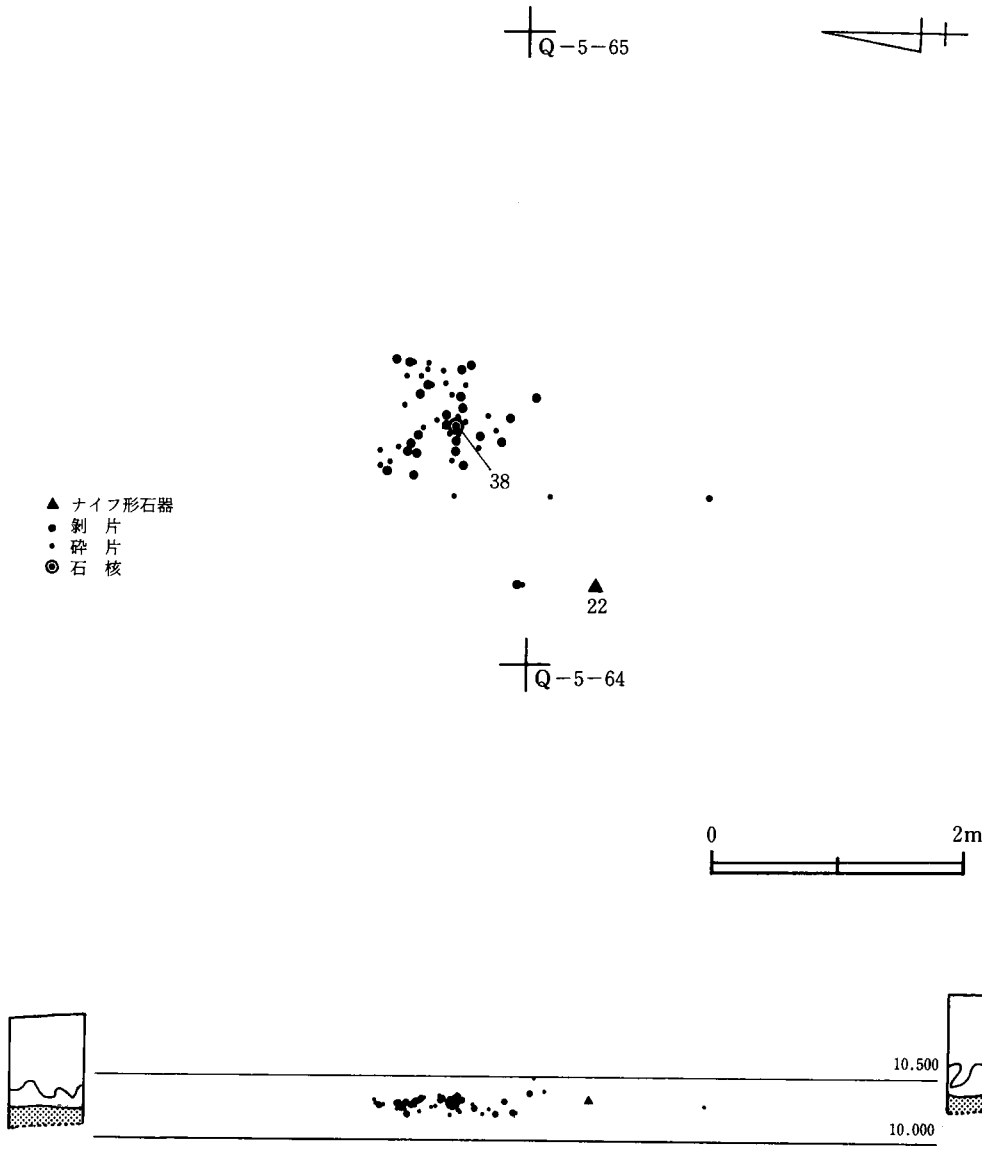


図47　第15ブロック遺物出土状況図

表57　第15ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	敵石	計
珪質頁岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2	—	—	4
珪質頁岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
メノウ　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1
黒曜石　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	2
黒曜石その他	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	23	29	—	—	53
計	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	26	33	1	—	61

平面分布に特色がみられ、極めて集中度の高い部分に剥片、砕片、石核が廃棄された形跡がみられる。

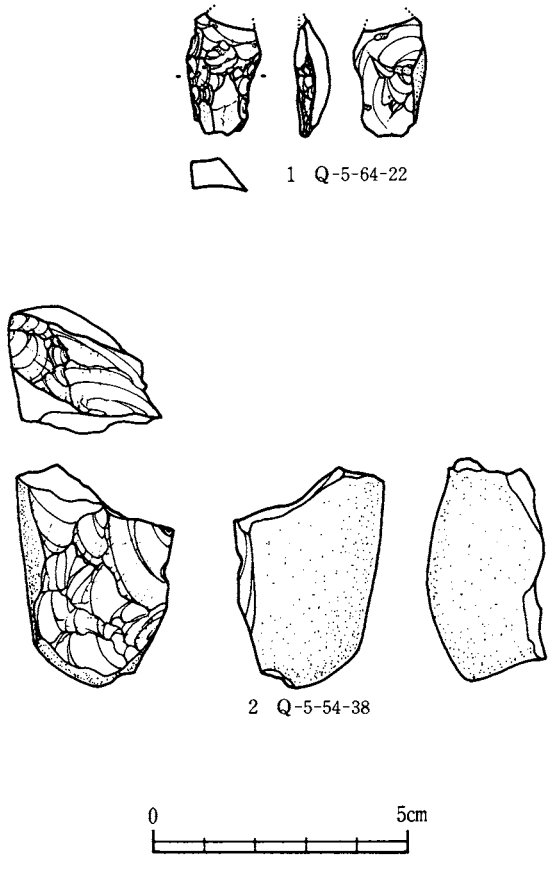


図48　第15ブロック出土遺物実測図

表58　第15ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		珪質頁岩		メノウ		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	1	1.6	−	−	−	−	1	1.4
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−	−	−
削片	−	−	−	−	−	−	−	−
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−	−	−
削器	−	−	−	−	−	−	−	−
ピエス・エスキーユ	−	−	−	−	−	−	−	−
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剥片	−	−	−	−	−	−	−	−
使用痕ある剥片	−	−	−	−	−	−	−	−
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−
剥片	22	34.4	3	60.0	−	−	25	35.7
砕片	41	64.0	2	40.0	−	−	43	61.5
石核	−	−	−	−	1	100	1	1.4
台石	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	−	−	−	−
計	64	91.5	5	7.2	1	1.4	70	100
礫片	−	−	−	−	−	−	−	−

表59　第15ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材
1	Q-5-64-22	ナイフ形石器	2.4	1.4	0.6	不明	1.8	1	一側辺加工	無	有	有	先端	不明	黒曜石
2	Q-5-54-38	石核	4.2	2.7	2.3	−	32.1	2	−	−	有	無	−	−	メノウ

16. 第16ブロック（図49、50、図版5－6、13、表60～63）

出土状況　IV層より第1黒色帯にかけて分布しており、最大レベル差約40cmで礫片と石器群のレベル差に隔りはない。平面分布は3.5m×2.2mとなっており、西半部に集中度が高く、礫群があり、散漫な部分に石核、剥片等の石器群が出土している。

出土遺物　総計24点出土した。内訳は礫片15点、剥片6点、石核3点となっている。礫片は

いずれも加熱され破砕しており、表面の状態も熱変成をうけているため、石材の認定はなし得なかった。1～2は石核である。共に安山岩を石材としており、両面に求心的な剝離面が見られる。素材は1が円礫、2が剝片を素材としている。

母岩別資料・接合資料　石材は、不明2種を含め5種、母岩は5種以上となっている。礫片が多数を占めていることはすでに述べたが、石器群では安山岩が主体となっている。しかしながら、組成上の偏りはいずれの石材、母岩にもみられず、しかも数量的な保障がないため、内容的評価はできない。

まとめ　本ブロックの性格としては、礫群が考えられる。石器群は円盤形石核による剝片生産基盤が窺われる。礫群の構成礫はいずれも加熱され、表面が赤化しているものが多くみられるが、付着物はみられなかった。一方、石器群には加熱の痕跡はなかった。

表60　第16ブロック出土石器組成表

石材 ＼ 器種	安山岩		黒曜石		珪質頁岩		不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ピエス・エスキーユ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
使用痕ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
剝片	3	60.0	2	66.7	1	100	−	−	6	66.7
砕片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石核	2	40.0	1	33.3	−	−	−	−	3	33.3
台石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
計	5	55.6	3	33.3	1	11.1	−	−	9	100
礫片	−	−	−	−	−	−	15	−	15	−

表61　第16ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	不明　2	礫片12	Q-5-64-19(礫片)＋Q-5-64-6(礫片)＋Q-5-64-9(礫片)（3点）＋Q-5-64-13(礫片)＋Q-5-64-8(礫片)＋Q-5-64-12(礫片)＋Q-5-64-10(礫片)（2点）＋Q-5-64-7(礫片)＋Q-5-64-16(礫片)	12

表62　第16ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材	その他
1	Q-5-64-3	石核	5.3	4.0	2.1	−	48.0	1	−	−	有	無	−	−	安山岩	
2	Q-5-64-4	石核	4.6	4.5	1.8	−	34.0	2	−	−	無	無	−	−	安山岩	スクレーパー(?)
3	Q-5-64-18	石核	2.0	2.2	1.4	−	5.4	−	−	−	有	無	−	−	黒曜石	

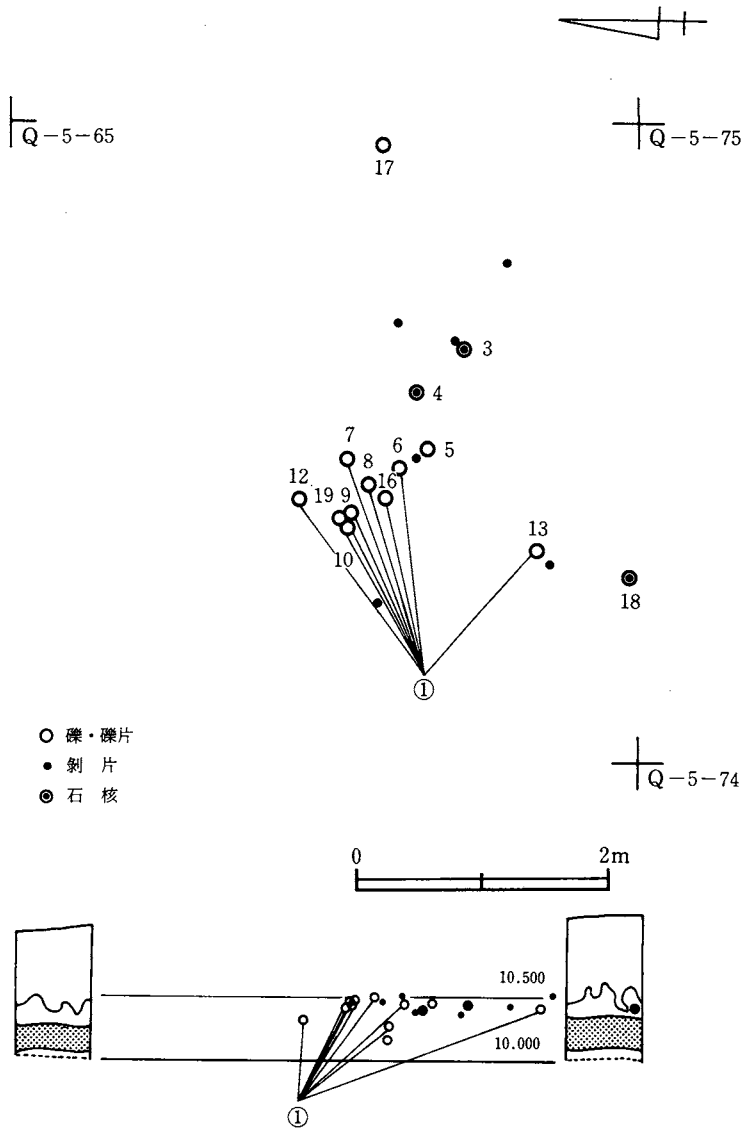


図49　第16ブロック遺物出土状況図

表63　第16ブロック母岩別資料石器組成表

器種 / 母岩	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	敲石	計
珪質頁岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
黒曜石　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	1	—	3
安山岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	2
安山岩その他	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	3
不　明　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
不　明　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	13	13
計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	—	3	14	23

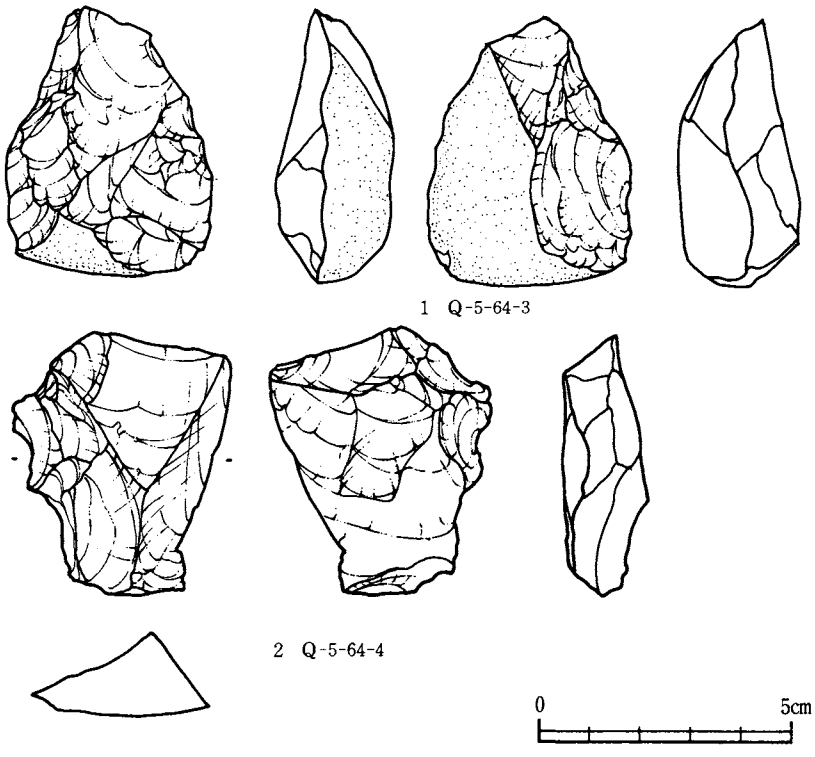


図50　第16ブロック出土遺物実測図

17. 第17ブロック（図51、図版6、表64～66）

出土状況　ソフトロームとハードロームの境界より出土しており、レベル差約40cmで礫群としては本遺跡内ではレベル差が相対的に大きく、最大で約30cmの幅で接合している。平面形は約3m×約2.6mの範囲にあり、南東隅に集中度が高い。

出土遺物　総計24点出したが、そのうち礫片が23点、石器群としては剝片が1点出土したにとどまる。礫片はいずれも他ブロックと同様に加熱され、破砕し、飛散しているため石材は定かではない。

表64　表17ブロック母岩別資料石器組成表

器種 / 母岩	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	礫片	計
黒曜石 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
砂岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
不明 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	13	13
不明その他	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9	9
計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	22	24

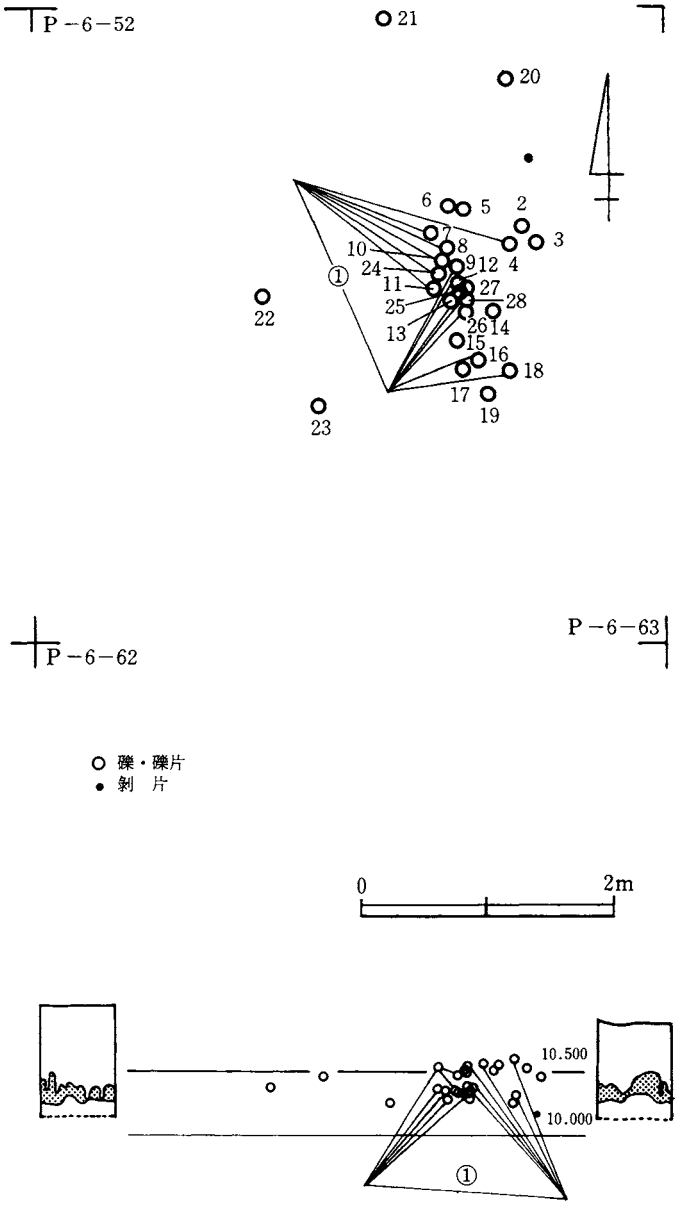


図51　第17ブロック遺物出土状況図

表65　第17ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内　訳	内　容	数量
1	不 明 1	礫片13	P-6-52-10(礫片)＋P-6-52-16(礫片)＋P-6-52-9(礫片)＋P-6-52-25(礫片)＋P-6-52-18(礫片)＋P-6-52-11(礫片)＋P-6-52-7(礫片)＋P-6-52,27(礫片)＋P-6-52-26(礫片)＋P-6-52-24(礫片)＋P-6-52-8(礫片)＋P-6-52-4(礫片)＋P-6-52-12(礫片)	13

母岩別資料・接合資料　石材は4種以上であり、正確な数量は不明である。母岩も同様で4種以上となっている。石器は黒曜石を石材とした剝片1点である。接合資料は礫片が13点、接合したものが1例みられるにすぎず、礫群としての性格は廃棄の公算が高い。

まとめ　本ブロックは礫群であることは疑い得ない。構成礫はいずれも礫片となっており、ブロック内で良く接合している。隣接した第16ブロックとの接合関係はない。

表66　第17ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		砂岩		不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	−	−	−	−	−	−	−	−
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−	−	−
削片	−	−	−	−	−	−	−	−
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−	−	−
削器	−	−	−	−	−	−	−	−
ピエス・エスキーユ	−	−	−	−	−	−	−	−
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−
使用痕ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−
剝片	1	100	−	−	−	−	1	100
砕片	−	−	−	−	−	−	−	−
石核	−	−	−	−	−	−	−	−
台石	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	−	−	−	−
計	1	100	−	−	−	−	1	100
礫片	−	−	1	−	22	−	23	−

18. 第18ブロック（図52〜54、図版7−1・2、13、14、表67〜70）

出土状況　ソフトロームよりVI層上面に至るまで出土しており、特にハードローム上部付近に集中度が高く、レベル差約50cmである。平面形は約7.0m×約3.7mの範囲にあるが、南北の2つの小さな集中部分に細分することも可能である。北半部は削器を中心としたまとまりとなっている。その他礫片が石器群とまばらに混在している様子が看取される。

出土遺物　総計30点出土した。内訳は礫片7点、ナイフ形石器1点、削器3点、2次加工のある剝片1点、剝片14点、砕片8点、石核3点となっている。1は2次加工のある剝片である。

表67　第18ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材	その他
1	Q-5-54-16	ナイフ形石器	5.6	1.7	0.8	30°	6.6	3	二側辺加工	無	有	無	−	有	珪質頁岩	
2	Q-5-44-7	削器	5.0	3.0	1.5	80°/55°	18.1	4	二側辺加工	有	有	無	−	−	黒曜石	
3	Q-5-44-9	削器	3.7	2.6	1.4	55°/70°/55°	10.0	5	全周	有	無	有	側辺	無	黒曜石	
4	Q-5-44-10	削器	4.5	2.2	1.4	65°	8.3	2	一側辺加工（部分的）	無	有	有	先端	無	黒曜石	
5	Q-5-44-3	二次加工ある剝片	1.6	1.6	0.6	65°	1.6	1	一側辺加工	不明	無	有	基部先端	無	黒曜石	ナイフ形石器(?)
6	Q-5-44-18	石核	4.2	3.6	3.3	−	66.0	7	−	−	有	無	−	−	安山岩	
7	Q-5-54-19	石核	5.3	3.1	2.8	−	53.0	6	−	−	有	無	−	−	安山岩	
8	Q-5-54-20	石核	5.0	3.5	2.0	−	35.7	8	−	−	有	無	−	−	安山岩	

下半部が欠損しているため正確な器種認定がなし得なかった。2、4、5は削器である。2は両面加工の石器の破損品と転用した例であり、4、5は幅広な剝片の側辺に連続的に2次加工が施された例である。3はナイフ形石器である。縦長剝片を素材として2側辺加工となっており、刃つぶし加工は急角度で精緻である。形状としては第7、8ブロック出土例と共通性をもっている。6～8は石核である。いずれも安山岩の円礫を原材としており、横長剝片を生産した痕跡をとどめている。9は安山岩の円礫である。搬入石材としての可能性が考えられるため図示した。

表68　第18ブロック出土石器組成表

器種＼石材	黒曜石		珪質頁岩		安山岩		不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	−	−	1	8.3	−	−	−	−	1	3.3
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削器	3	21.5	−	−	−	−	−	−	3	10.0
ピエス・エスキーユ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剝片	1	7.1	−	−	−	−	−	−	1	3.3
使用痕ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
剝片	5	35.7	8	66.7	1	25.0	−	−	14	46.7
砕片	5	35.7	3	25.0	−	−	−	−	8	26.7
石核	−	−	−	−	3	75.0	−	−	3	10.0
台石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
計	14	46.7	12	40	4	13.3	−	−	30	100
礫片	−	−	−	−	−	−	7	−	7	−

母岩別資料・接合資料　石材は不明5種を含め8種あり、母岩は16種以上を数え、数量に比べて多い。また、石器群から30点と少量であるにもかかわらず、11種存在する点に本ブロックの特異性が知られる。石器群は、利器の単独の母岩別資料は珪質頁岩5、黒曜石1があり、また、石核のみ存在する母岩別資料として、安山岩2、3が指摘できる。このように、各母岩とも数量的なバラツキがないことが特徴としてあげられる。接合資料としては2例あり、共に剝片どうしの接合例である。特記すべき点としては接合資料1で第11ブロックの剝片と接合していることが注目できる。

まとめ　礫片を少量含み、石器群の母岩が多岐にわたる点が本ブロックの特徴である。技術的特徴としては横長剝片を生産する類型が存在する。また、第11ブロックとの接合例があり、

表69　第18ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	珪質頁岩2	剝片2	Q-5-55-6(剝片)→Q-5-39-14(剝片) (S-11)	2
2	珪質頁岩1	剝片4	Q-5-44-9(剝片)→Q-5-44-2(剝片)→Q-5-44-11(剝片)→Q-5-44-19(剝片)	4

互いの同時性を窺わせる。

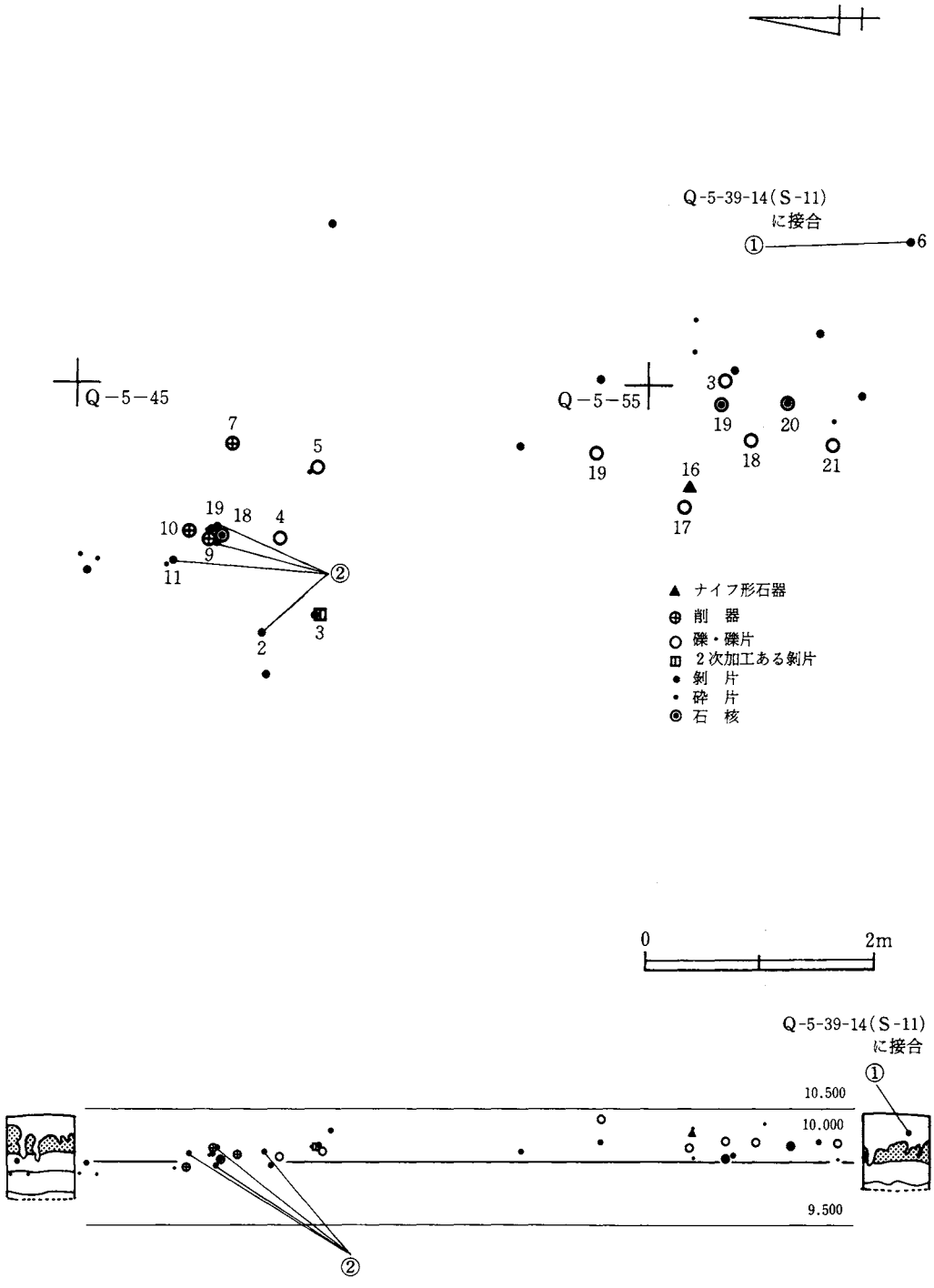


図52　第18ブロック遺物出土状況図

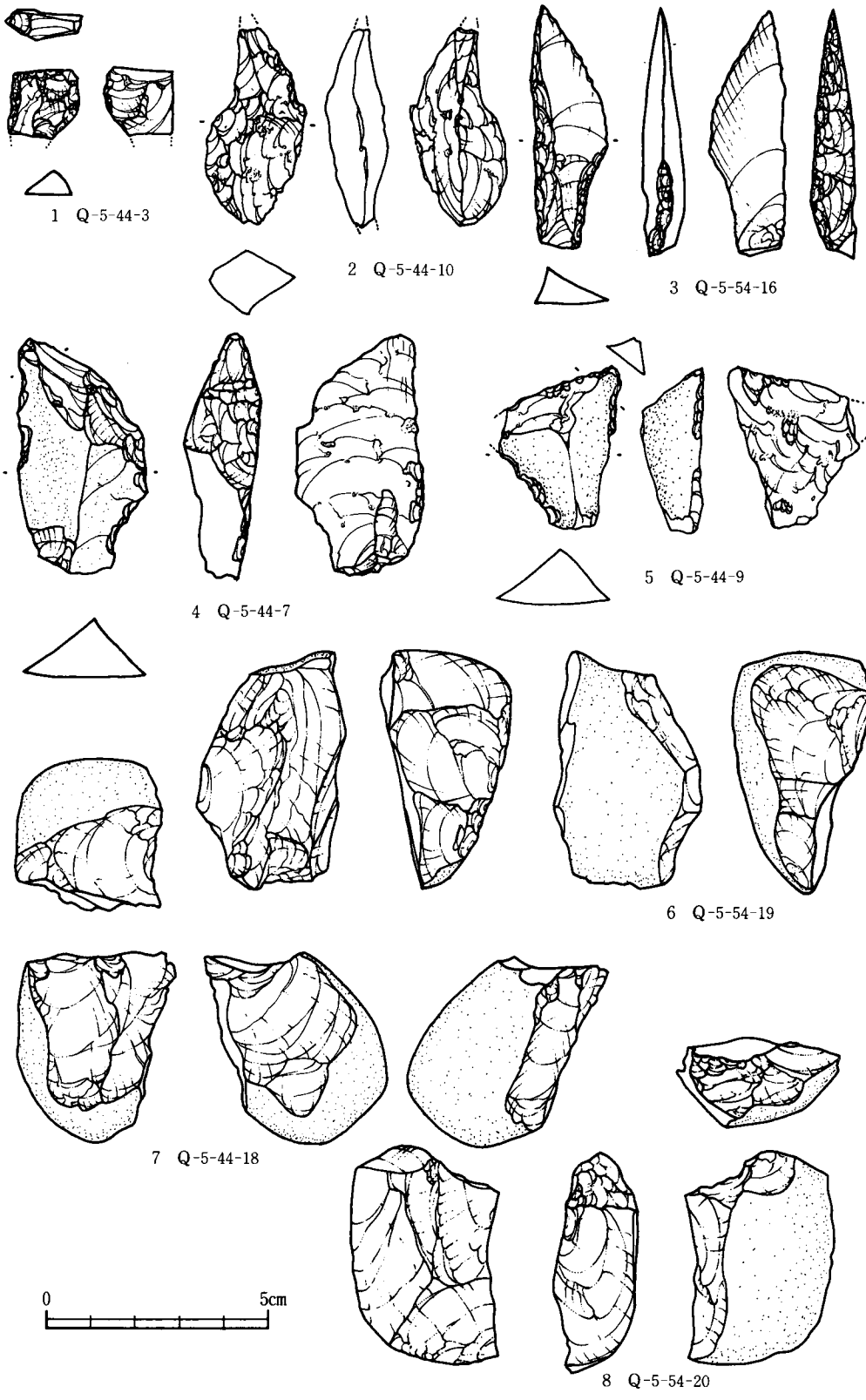


図53　第18ブロック出土遺物実測図(1)

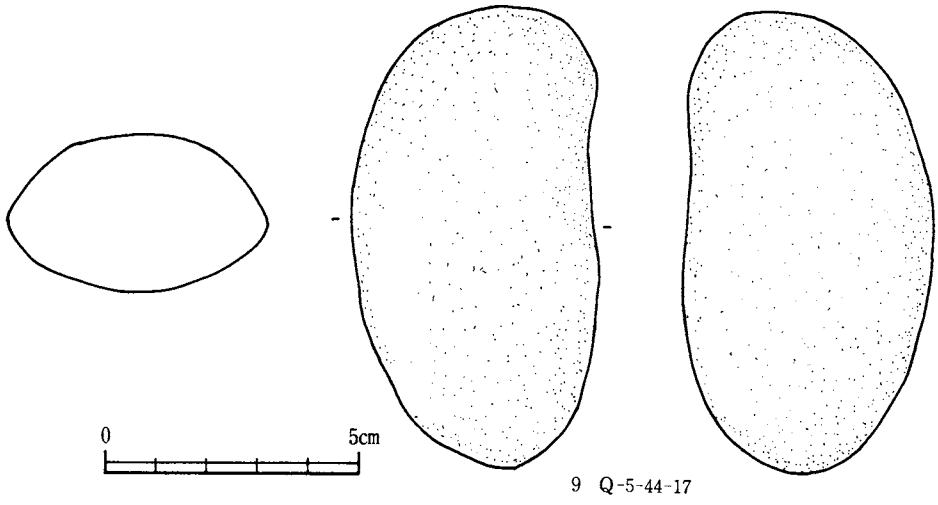


図54　第18ブロック出土遺物実測図(2)

表70　第18ブロック母岩別資料石器組成表

器種 / 母岩	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	礫片	計
珪質頁岩　1	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	4	2	—	—	7
珪頁質岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	3
珪質頁岩　3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	2
珪質頁岩　4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
珪質頁岩　5	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
珪質頁岩　6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
安山岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
安山岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	2
安山岩　3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1
砂岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
黒曜石　1	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
黒曜石その他	—	—	—	—	—	—	2	—	—	1	—	—	4	4	—	—	11
不明　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
不明　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	3
不明　3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
不明　4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
不明　5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
計	1	—	—	—	—	—	4	—	—	1	—	—	16	7	3	7	39

19. 第19ブロック（図55～57、図版14、表71～74）

出土状況　ハードロームの上部からVI層上部にかけて出土したが、特にハードローム上部のV層より出土した石器群が顕著である。最大レベル差約50cmで全体に石器群は東西方向に傾斜している。平面形は約8.0m×約7.8mにあり、広範囲に分布している。西半部は礫群、東半部は削器を中心として石器群によって構成されている。礫群は接合関係が全くない。

出土遺物　総計70点出土した。内訳は礫片17点、ナイフ形石器1点、尖頭器1点、削器3点、ピエス・エスキーユ3点、使用痕のある剝片2点、剝片30点、砕片8点、石核2点、敲石1点となっている。1はナイフ形石器である。横長剝片を素材としており、1側辺に刃つぶし加工がみられる。2、4は共に縦長剝片を素材とした削器である。2では1側辺、4では両側辺に2次加工が存在する。3は尖頭器である。全周にわたって急角度な2次加工があり、全体を三角形に整えている。素材は横長剝片となっている。5～7はピエス・エスキーユで、いずれも剝片を素材としており、上下両端に刃つぶれが観察される。8、9は石核である。平坦な単設打面より一方向に加撃し、幅広な縦長剝片を生産している。10は、敲石である。下半部が欠損

表71　第19ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	安山岩		黒曜石		玄武岩		頁岩		砂岩		メノウ		粘板岩		チャート		珪質頁岩		不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	1	3.7	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	2.0
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
尖頭器	1	3.7	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	2.0
削片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削器	−	−	−	−	−	−	1	12.5	2	66.7	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	3	5.9
ピエス・エスキーユ	2	7.4	−	−	−	−	−	−	−	−	1	100	−	−	−	−	−	−	−	−	3	5.9
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
使用痕ある剝片	−	−	1	14.3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	100	−	−	2	3.9
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
剝片	19	70.4	4	57.1	1	50.0	5	62.5	−	−	−	−	1	100	−	−	−	−	−	−	30	58.7
砕片	3	11.1	2	28.6	−	−	2	25.0	1	33.3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	8	15.7
石核	1	3.7	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	100	−	−	−	−	2	3.9
台石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	1	50.0	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	2.0
計	27	52.9	7	13.7	2	3.9	8	15.6	3	5.9	1	2.0	1	2.0	1	2.0	1	2.0	−	−	51	100
礫片	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	17	−	19	−

している。

母岩別資料・接合資料　石材は不明6種（いずれも加熱された破砕礫）を含み、15種を数え、母岩は、23種以上となっている。全体の数量に比べ、石材、母岩ともヴァラエティに富んでいる。また、石材として安山岩が相対的に多いが、他ブロックに比べ他の石材との数量比に大き

表72　第19ブロック母岩別資料石器組成表

器種 / 母岩	ナイフ形石器	角錐状石器	尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	礫片	剥片	砕片	石	敲石	計
珪質頁岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1
珪質頁岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
頁　岩　1	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	3	1	—	—	5
頁　岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
頁　岩　3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
砂　岩　1	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2
砂　岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
チャート　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1
メノウ　1	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1
玄武岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
黒曜石　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2	—	—	4
黒曜石　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	2	—	—	—	3
安山岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
安山岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	3
安山岩　3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	—	1	—	6
安山岩　4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	3
安山岩その他	1	—	1	—	—	—	—	2	—	—	—	—	6	3	—	—	13
不　明　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
不　明　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
不　明　3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
不　明　4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	—	—	—	—	7
不　明　5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8	—	—	—	—	8
不　明　6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	2
粘板岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
計	1	—	1	—	—	—	3	3	—	—	1	20	29	7	2	1	69

表73　第19ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内　訳	内　容	数量
1	安山岩　3	剥片2	P-6-54-8(剥片)→P-6-54-20(剥片)	2
2	砂　岩　1	削器2	P-6-54-13(削器)＋P-6-54-7(削器)	2

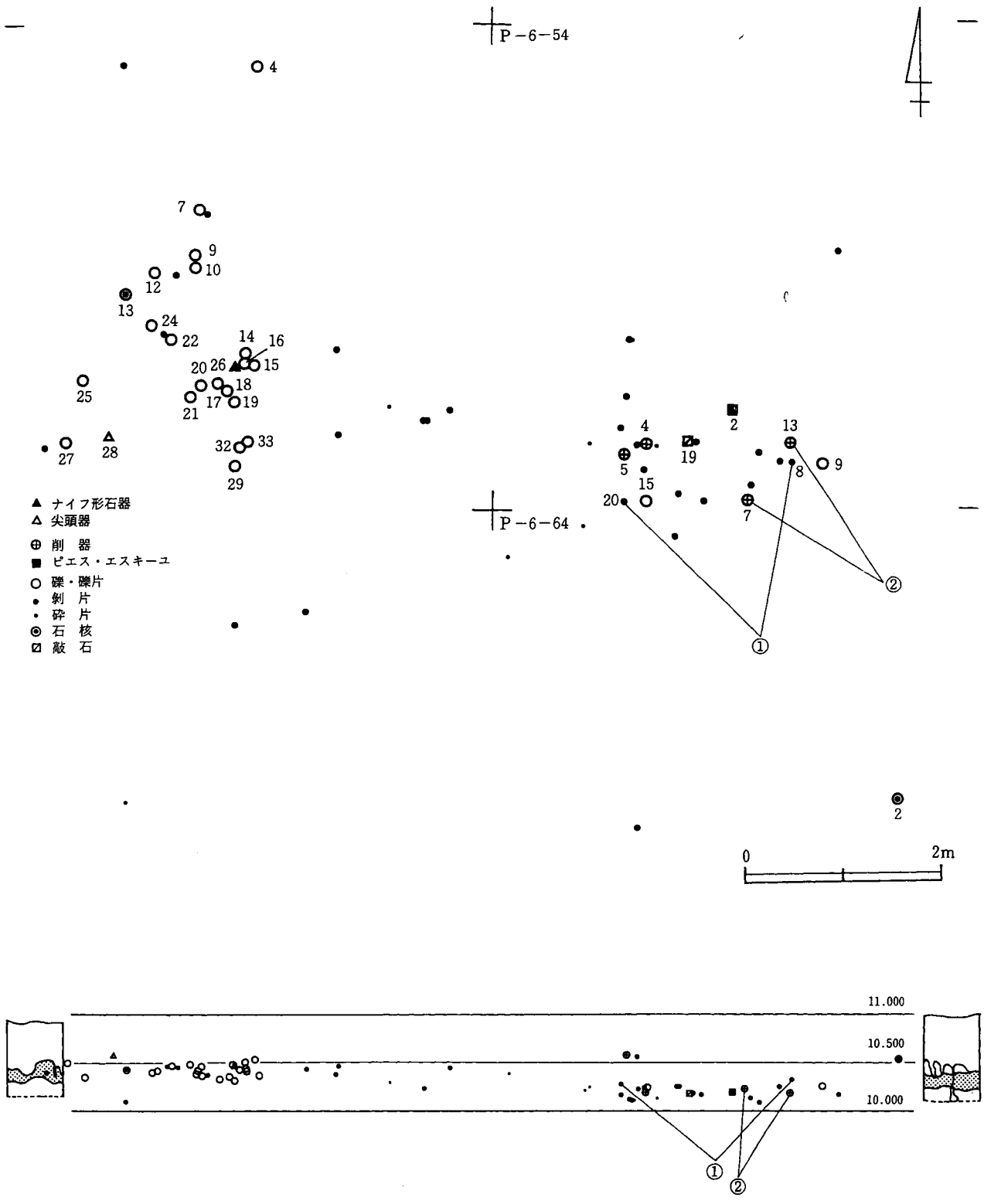


図55　第19ブロック遺物出土状況図

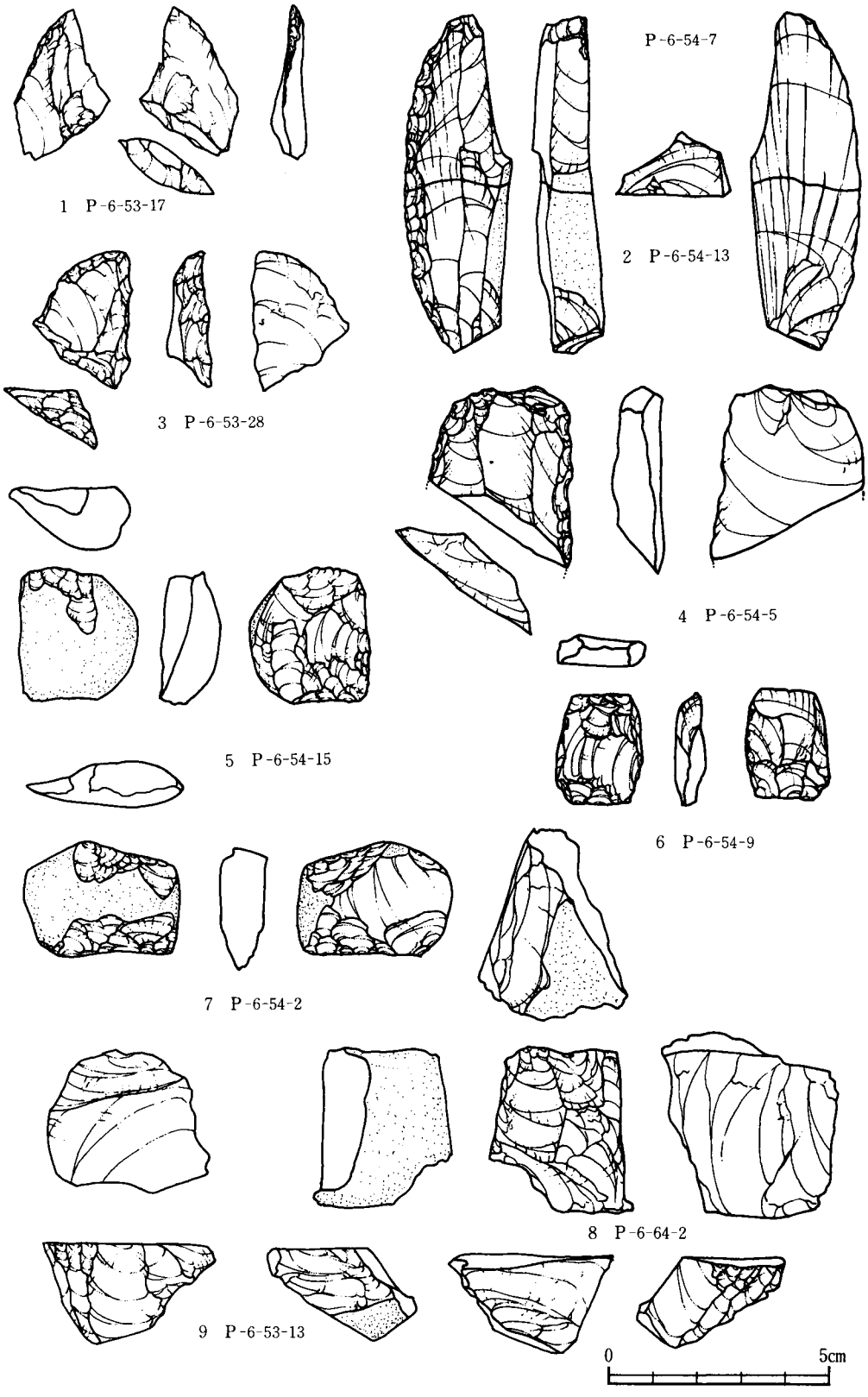


図56　第19ブロック出土遺物実測図(1)

な差異はなく、また、安山岩以外の石材では利器のみの単独の母岩別資料や、石核の単独資料も存在する。接合資料は2例となっており、剝片どうしの接合例、利器の破損例などがあるが、特筆すべき資料はない。

まとめ　本ブロックは器種が豊富であり、また石材、母岩が多岐にわたることが特徴である。一方、礫片があることから礫群の可能性も否めないが少量であるため断定はできない。

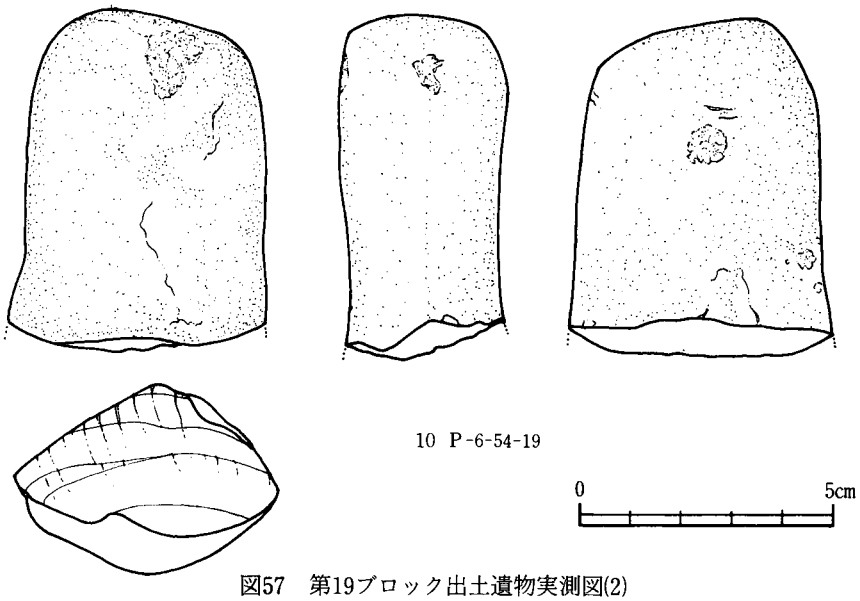


図57　第19ブロック出土遺物実測図(2)

表74　第19ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材
1	P-6-53-17	ナイフ形石器	3.6	2.1	0.8	50°	3.6	1	先端部一側辺加工	無	有	無	—	有	安山岩
2	P-6-53-28	尖頭器	3.1	2.2	0.9	刃先角 75°	4.8	3	全周	無	無	無	—	無	安山岩
3	P-6-54-5	削器	4.1	3.3	1.1	65° 75°	16.0	4	二側辺加工	無	有	有	先端	無	頁岩
4	P-6-54-7	削器	4.1	2.5	1.3	60°	14.0	2	先端部一側辺加工	無	有	無	—	有	砂岩
5	P-6-54-13	削器	4.0	2.5	1.4	60°	16.7	2	先端部一側辺加工	無	有	無	—	有	砂岩
6	P-6-54-2	ピエス・エスキーユ	2.6	3.7	0.9	80° 75°	10.6	7	上下両端	—	無	無	—	無	安山岩
7	P-6-54-9	ピエス・エスキーユ	2.5	1.9	0.7	50° 60°	4.1	6	上下両端	—	無	無	—	—	メノウ
8	P-6-54-15	ピエス・エスキーユ	3.1	2.8	1.3	65° 75°	13.3	5	上下両端一側辺	—	無	無	—	無	安山岩
9	P-6-64-1	使用痕ある剝片	3.6	3.6	1.0	60°	2.4	—	—	—	有	有	先端	一側辺(部分)	黒曜石
10	P-6-64-3	使用痕ある剝片	5.8	4.4	2.0	45°	51.3	—	—	—	有	無	—	二側辺	珪質頁岩
11	P-6-53-13	石核	2.0	3.5	3.1	—	19.3	9	—	—	有	無	—	—	安山岩
12	P-6-64-2	石核	3.6	3.1	3.7	—	44.5	8	—	—	有	無	—	無	チャート
13	P-6-54-19	敲石	6.5	4.8	3.8	—	152.5	10	—	—	—	有	半割	両面敲打痕	粘板岩

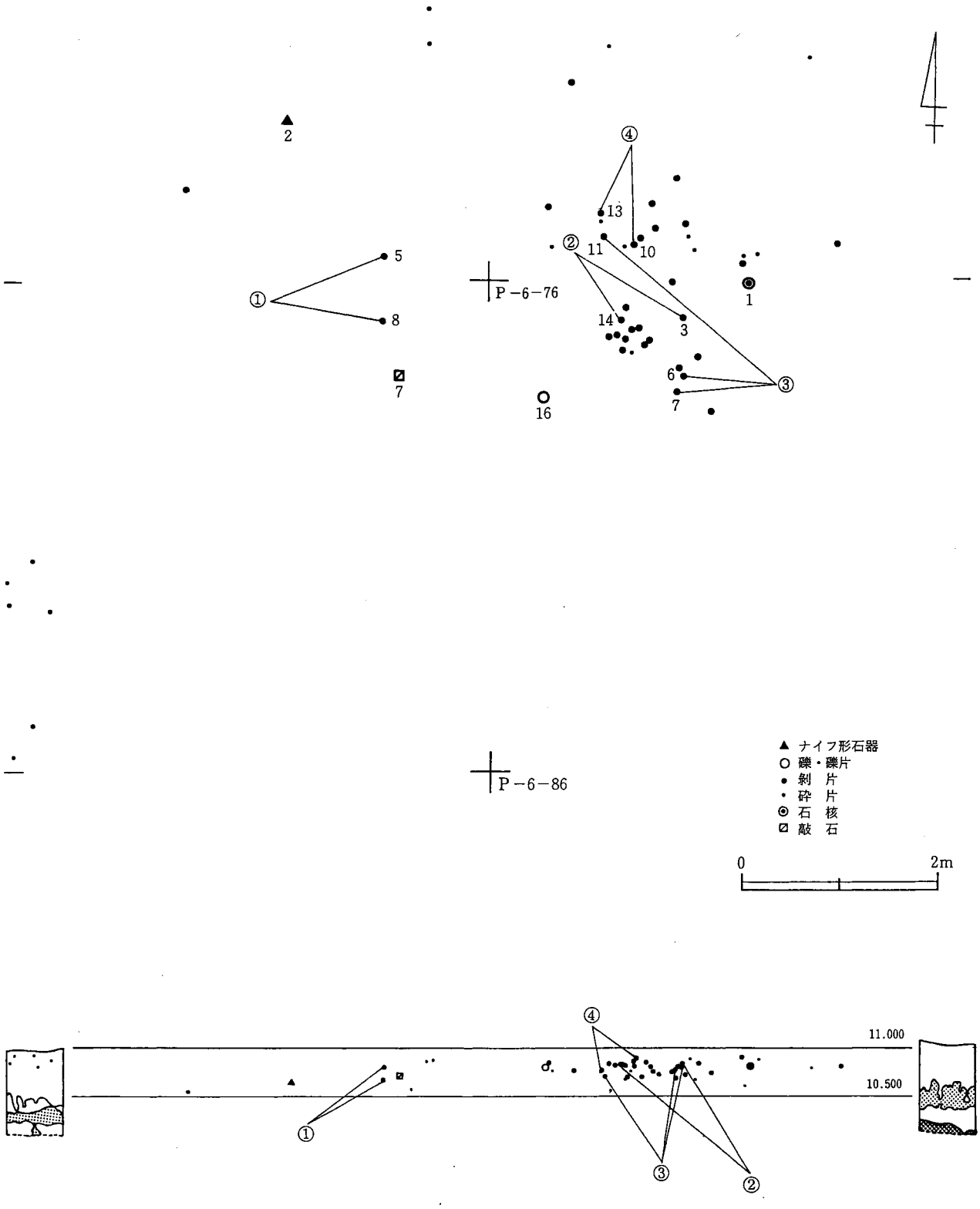


図58　第20ブロック遺物出土状況図

20. 第20ブロック（図58、59、図版14、表75～78）

出土状況　ソフトローム中部より出土している。最大レベル差約40 cmでほぼ水平に分布している。平面形は約10.8 m×約5.0mとなっており、広範囲であるが北東部にほとんどの石器群が集中している。ここでは剝片砕片が集中しており、他の器種はほとんどみられず利器は外縁部よりに出土している。

出土遺物　総計47点出土した。内訳は礫片1点、ナイフ形石器1点、剝片34点、砕片9点、石核1点、敲石1点となっている。1は2側辺加工のナイフ形石器である。2は小形の敲石上下両端に敲打痕を有する。

表75　第20ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	頁岩		珪質頁岩		チャート		黒曜石		砂岩		不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	−	−	1	25.0	−	−	−	−	−	−	−	−	1	2.2
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ピエス・エスキーユ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
使用痕ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
剝片	16	76.2	2	50.0	16	84.2	−	−	−	−	−	−	34	73.8
砕片	4	19.0	1	25.0	3	15.8	1	100	−	−	−	−	9	19.6
石核	1	4.8	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	2.2
台石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	−	−	−	−	1	100	−	−	1	2.2
計	21	45.6	4	8.7	19	41.3	1	2.2	1	2.2	−	−	46	100
礫片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1	−

表76　第20ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 \ 器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	敲石	計
珪質頁岩 1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
珪質頁岩 2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1
珪質頁岩 3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	2
頁岩 1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	2
頁岩 2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1
頁岩 3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	14	4	−	−	18
チャート 1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	17	1	−	−	18
黒曜石 1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	1
砂岩 1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1
計	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	36	6	1	1	45

母岩別資料・接合資料　石材は5種、母岩は9種識別し得た。石材はチャートと頁岩が互いに拮抗した数量で最も多い。母岩別資料では珪質頁岩1、砂岩1が利器の単独資料であり、頁岩2が石核の他は剥片と砕片となっている。接合資料は4例あり、剥片の欠損資料2例、剥片どうしの接合例2例で、特に技術的側面を追求するための有効な資料はない。

まとめ　利器がナイフ形石器1点と少なく主として剥片生産を反映したブロックである。

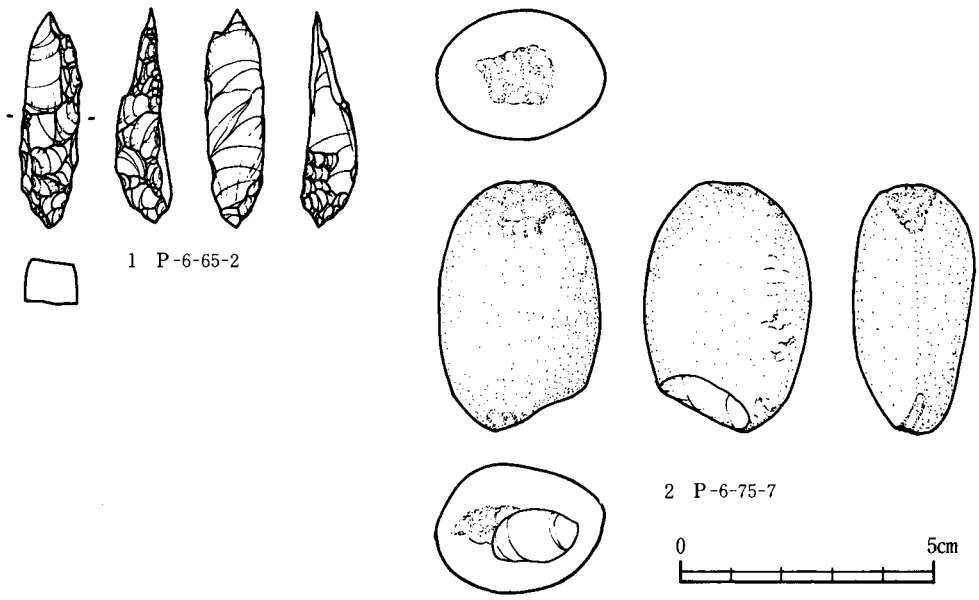


図59　第20ブロック出土遺物実測図

表77　第20ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内　訳	内　容	数量
1	珪質頁岩3	剥片2	P-6-75-8(剥片)＋P-6-65-5(剥片)	2
2	頁　岩　3	剥片2	P-6-76-3(剥片)→P-6-76-14(剥片)	2
3	チャート1	剥片3	P-6-66-11(剥片)＋P-6-76-7(剥片)＋P-6-76-6(剥片)	3
4	チャート1	剥片2	P-6-66-13(剥片)＋P-6-66-10(剥片)	2

表78　第20ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器　種	大きさ cm			刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石　材
			長さ	幅	厚										
1	P-6-65-2	ナイフ形石器	4.1	1.1	1.0	30°	4.4	1	二側辺加工	無	無	有	先端	無	珪質頁岩
2	P-6-76-1	石　核	3.6	4.5	2.8	—	31.9	—	—	—	有	無	—	—	頁　岩
3	P-6-75-7	敲　石	4.8	3.3	2.4	—	53.8	2	—	—	—	無	—	上下両端	砂　岩

21. **第21ブロック**（図60、61、図版14、表79～82）

出土状況　ソフトローム中部よりハードローム上部にかけて出土しているが、最も集中しているのはソフトローム中部である。最大レベル差約 70 cm で平面形は約12.3m×約5.5mとなっており、東半部に集中している。ここでは礫片、石器群が混在している。特に器種ごとの分布の偏在性は語れない。

出土遺物　総計65点出土した。内訳は礫片16点、ナイフ形石器１点、尖頭器１点、削器１点、剝片23点、砕片21点、石核２点となっている。礫片はいずれも加熱された破砕礫である。１はナイフ形石器である。横長剝片を素材としており２側辺加工である。２、４は石核である。４はぶ厚い剝片を素材としており、平坦な打面より同一方向に連続的に加撃し、不定形の剝片を得ている。５ａは尖頭器である。先端部と基部周辺に２次加工が施されている。３は削器である。ぶ厚い剝片の上端および左側辺に２次加工がみられる。

母岩別資料・接合資料　石材は不明（６種以上）を含め12種、母岩は16種以上を数える。母岩は器種ごとの偏りはなく、利器は剝片、砕片と組合さっている。注目すべき母岩別資料とし

表79　第21ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		砂岩		安山岩		珪質頁岩		チャート		頁岩		不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	－	－	－	－	－	－	1	9.1	－	－	－	－	－	－	1	2.0
角錐状石器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
尖頭器	1	5.6	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	2.0
削片	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
石錐	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
掻器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
削器	－	－	－	－	－	－	－	－	1	8.3	－	－	－	－	1	2.0
ピエス・エスキーユ	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
彫刻刀形石器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
二次加工ある剝片	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
使用痕ある剝片	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
石斧	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
剝片	5	27.8	1	100	2	66.7	6	54.5	7	58.3	2	50.0	－	－	23	47.0
砕片	12	66.6	－	－	1	33.3	4	36.4	2	16.7	2	50.0	－	－	21	42.9
石核	－	－	－	－	－	－	－	－	2	16.7	－	－	－	－	2	4.1
台石	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
敲石	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
計	18	36.7	1	2.1	3	6.1	11	22.4	12	24.5	4	8.2	－	－	49	100
礫片	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	16	－	16	－

てチャート1がある。チャートの1は石核、剥片、砕片、削器の組合せとなっており、剥片生産より石器調整に至る一連の工程を反映している。接合資料は2例あるが、尖頭器と剥片の接

表80　第21ブロック母岩別資料石器組成表

器種 / 母岩	ナイフ形石器	角錐状石器	尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石	礫片	計
珪質頁岩　1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	2
珪質頁岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
チャート　1	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	12	6	2	—	21
黒曜石　1	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
黒曜石その他	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	9	—	1	13
頁　岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
頁　岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
頁　岩　3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	2
頁　岩　4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
砂　岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
安山岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
安山岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	2
不　明　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2
不　明　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2
不　明　3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
不　明　4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2
不　明　5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
不明その他	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	7
計	1	—	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	24	18	2	16	63

表81　第21ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内　訳	内　容	数量
1	黒曜石　1	尖頭器 1 剥片 1	P-6-74-18(尖頭器)→P-6-74-16(剥片)	2
2	不　明　1	礫片 2	P-6-74-20(礫片)＋P-6-84-24(礫片)	2

表82　第21ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器　種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石　材
1	P-6-74-25	ナイフ形石器	3.8	1.1	0.7	35°	2.6	1	二側辺加工	無	無	無	—	有	珪質頁岩
2	P-6-74-18	尖　頭　器	4.1	2.4	0.9	刃先角 85°	7.8	5a	二側辺加工	無	有	無	—	無	黒曜石
3	P-6-74-13	削　器	3.1	2.9	1.0	65°	11.7	3	一側辺加工(部分的)	有	有	無	—	無	チャート
4	P-6-74-10	石　核	2.6	3.5	1.5	—	10.8	2	—	—	有	無	—	—	チャート
5	P-6-74-33	石　核	2.7	2.3	5.3	—	28.7	4	—	—	有	無	—	無	チャート

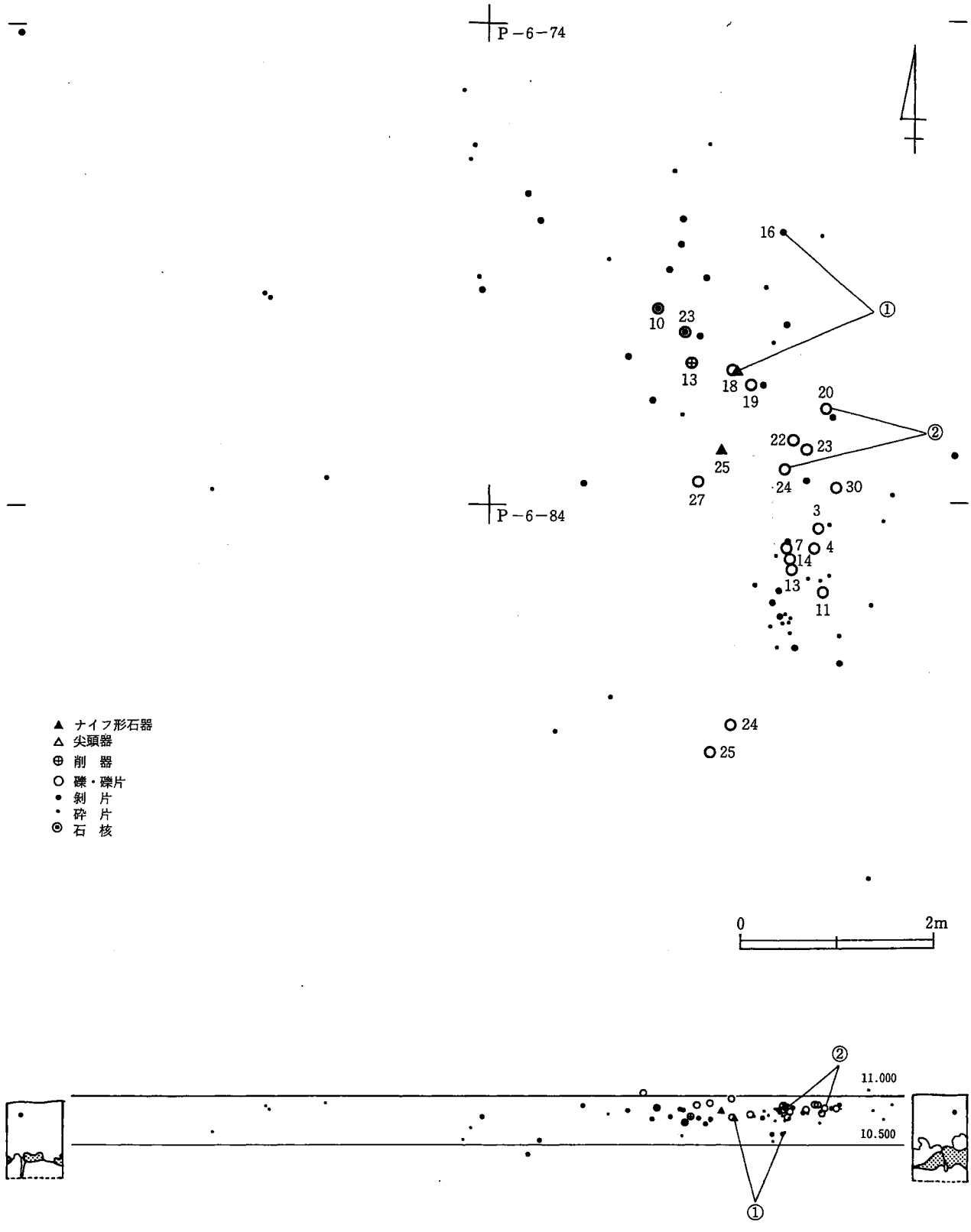


図60　第21ブロック遺物出土状況図

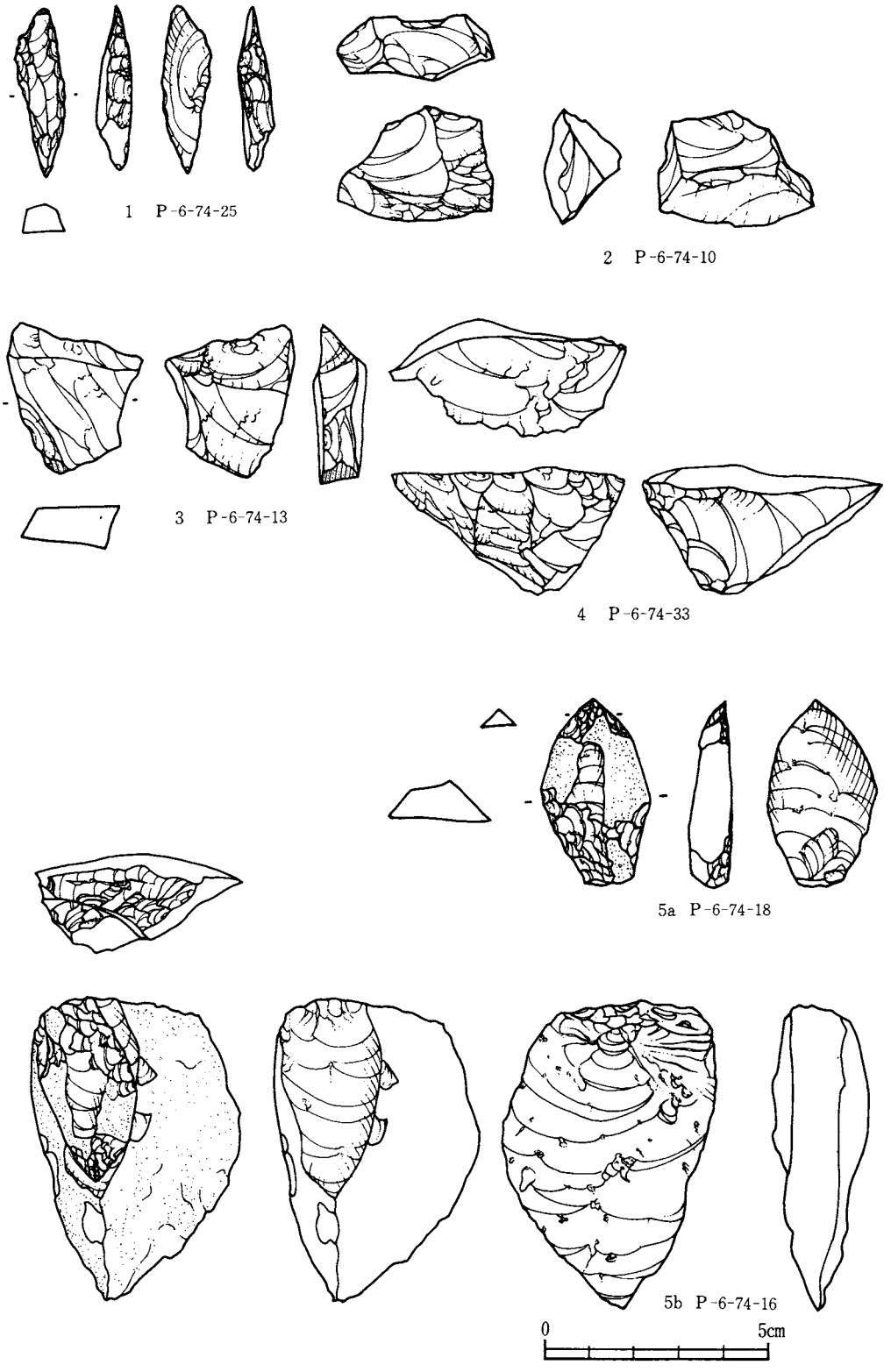


図61　第21ブロック出土遺物実測図

合資料1例、礫片どうしの接合例1例である。接合資料1は、大形の剥片と尖頭器が本来同一の石核より剥離されたことを示す資料である。打面は平坦であり、いずれも同一方向の加撃方向を示している。

まとめ　総体的に剥片生産を反映したブロックと言えよう。ただし、礫片も多く出土していることより礫群の可能性も否めない。

22. 第22ブロック（図62、63、図版14、表83～85）

出土状況　ソフトローム中部からハードローム上面にかけて出土している。最大レベル差約30cmで平面分布は散漫であり、約6.0m×約2.8mとなっている。石核が1点離れて出土していることが注目されるが、充分な評価はできない。

出土遺物　総計10点出土した。石器組成は剥片9点、石核1点となっている。1は石核である。自然面を打面としたぶ厚い剥片を素材としている。主要剥離面を打面として背面側に加撃している。上半部の2次加工を削器の調整と考えることも可能である。

母岩別資料・接合資料　石材は2種、母岩は4種識別し得た。石核が黒曜石である以外はいずれも剥片である。母岩別資料は石器の数量が乏しく、内容的な評価はできない。また、接合資料はない。

まとめ　極めて小規模なブロックである。石器群の内容も貧弱であり、検討の対象外である。

表83　第22ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		頁岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	−	−	−	−	−	−
角錐状石器	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−
削片	−	−	−	−	−	−
石錐	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−
削器	−	−	−	−	−	−
ピエス・エスキーユ	−	−	−	−	−	−
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剥片	−	−	−	−	−	−
使用痕ある剥片	−	−	−	−	−	−
石斧	−	−	−	−	−	−
剥片	−	−	9	100	9	90.0
砕片	−	−	−	−	−	−
石核	1	100	−	−	1	10.0
台石	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	−	−
計	1	10	9	90	10	100
礫片	−	−	−	−	−	−

表84　第22ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 / 器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	敲石	計
頁岩 1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	6	−	−	−	6
頁岩 2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1
頁岩 3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	2
黒曜石 1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1
計	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	9	−	1	−	10

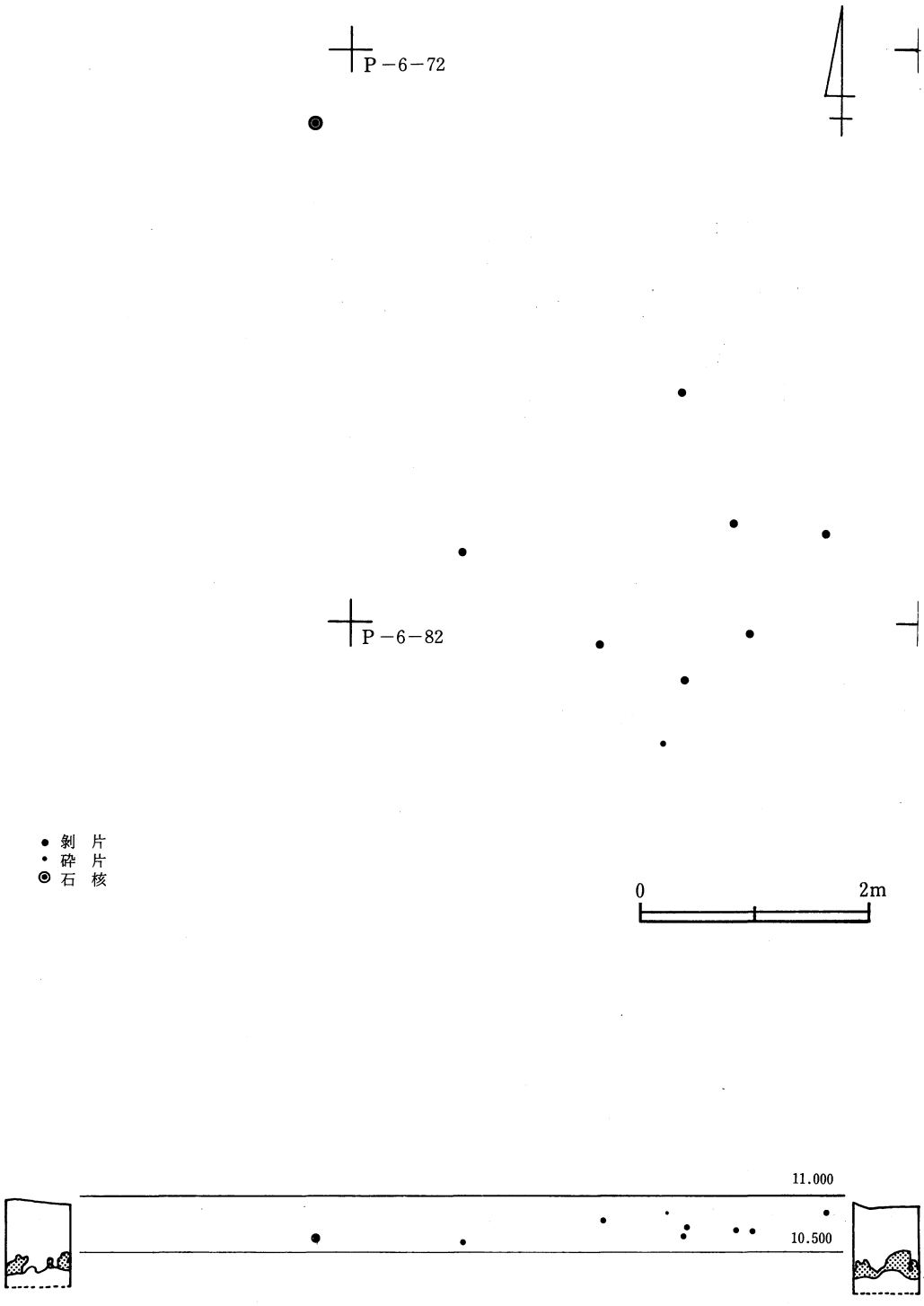


図62　第22ブロック遺物出土状況図

表85　第22ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材
1	P-6-71-1	石核	4.9	3.4	2.0	—	24.5	1	—	—	有	無	—	無	黒曜石

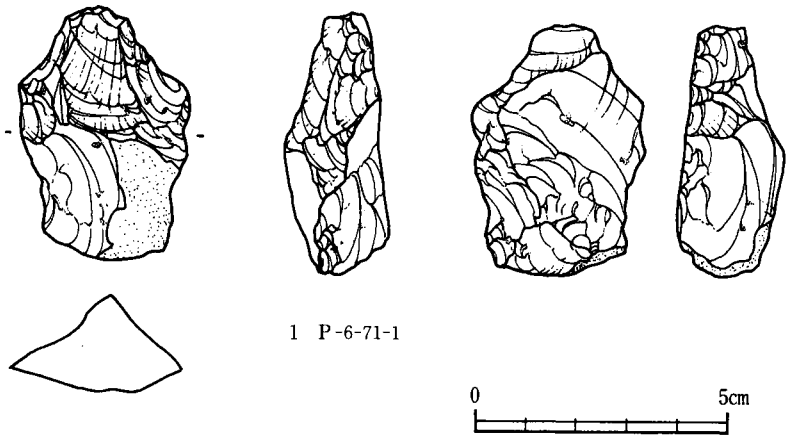


図63　第22ブロック出土遺物実測図

23. **第23ブロック**（図64、65、図版14、15、表86～88）

出土状況　ソフトローム下部よりVI層にかけて出土している。特にV層上部に集中しており、最大レベル差約40 cmである。ほぼ水平に堆積しており、自然層の堆積状況とは分布密度は合致しない。平面分布は7.8m×6.0mであり、全体の分布密度は均一である。器種ごとの分布の偏りは特にみられない。

出土遺物　総計45点出土した。内訳は礫片1点、削器2点、2次加工のある剝片3点、使用痕のある剝片2点、剝片28点、砕片8点、石核1点となっている。1、4は削器である。いずれも厚手の不定形剝片の1側辺に2次加工が施されている。なお1は断片である。2は使用痕のある剝片で2側辺に刃こぼれが観察される。3、6は2次加工のある剝片である3は右側辺、6は一端に2次加工が存在するが、6については石核の可能性もある。5は石核である。正面に大きな剝離面が存在する。

母岩別資料・接合資料　石材は不明1種を含めると6種となる。一方、母岩は9種以上ある。石器製作工程全体を反映した資料はないが、珪質頁岩2は剝片破片の他、削器、2次加工のある剝片、使用痕のある剝片を組成としており、間接的に剝片生産技術と石器調整技術の一端を知ることができる。ただし、石核がない。他は利器のみを組成する母岩はないが、石核を単独資料とする珪質頁岩3が存在する。全体としては剝片、砕片を組成した母岩が他のブロックと

同様に多い。接合資料はない。

まとめ　石核、剝片、砕片等より本ブロックの技術的特徴として横長剝片を生産した基盤が窺われる。また、他のブロックと同様、剝片生産の状況が色濃い。

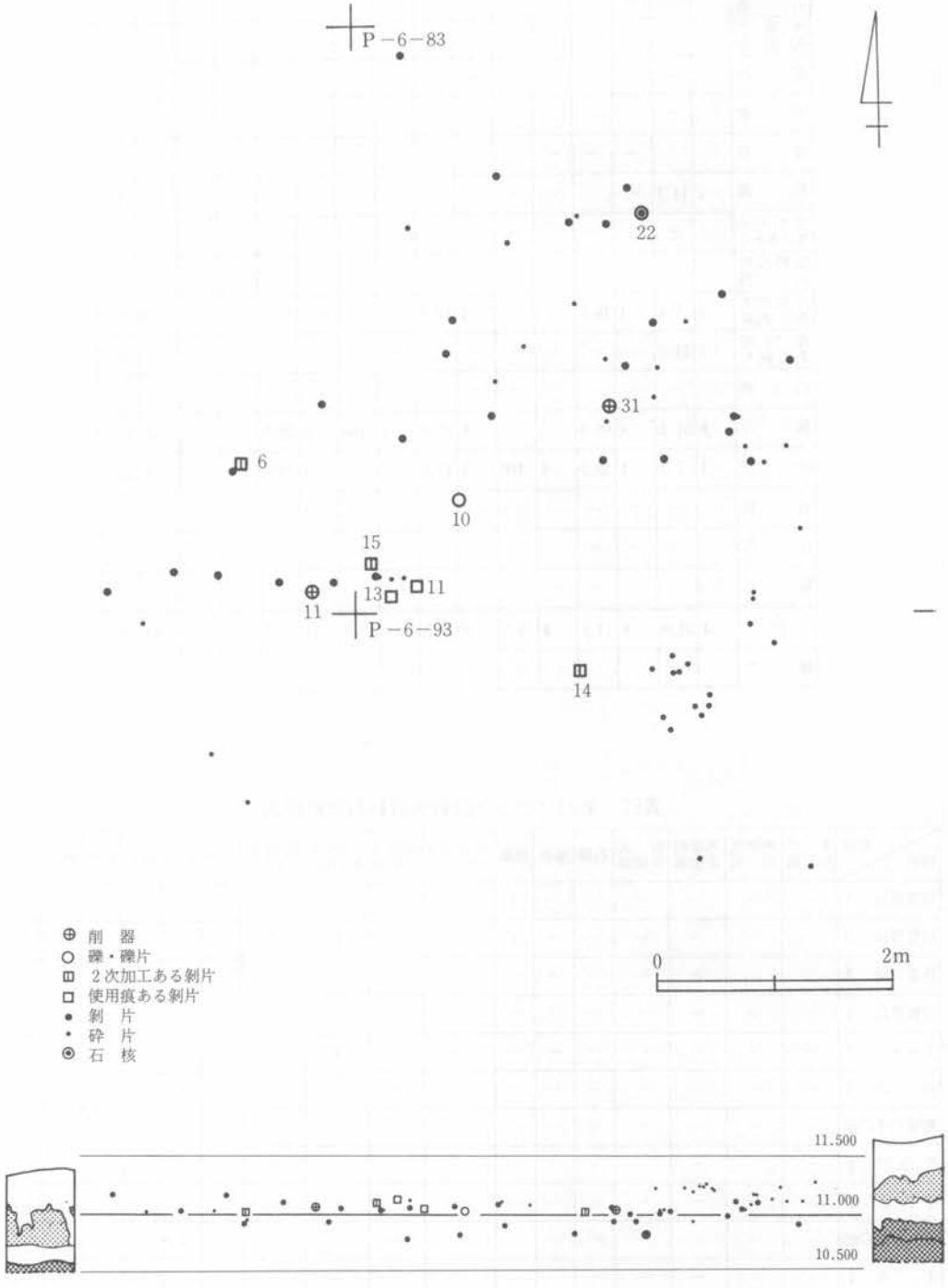


図64　第23ブロック遺物出土状況図

表86　第23ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	珪質頁岩		安山岩		黒曜石		チャート		メノウ		頁岩		不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削器	2	14.3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	4.5
ピエス・エスキーユ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剝片	1	7.1	1	16.7	−	−	1	12.5	−	−	−	−	−	−	3	6.8
使用痕ある剝片	2	14.3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	4.5
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
剝片	8	57.2	4	66.6	−	−	6	75.0	1	100	9	90.0	−	−	28	63.7
砕片	1	7.1	1	16.7	4	100	1	12.5	−	−	1	10.0	−	−	8	18.2
石核	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	10.0	−	−	1	2.3
台石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
計	14	31.8	6	13.6	4	9.1	8	18.2	1	2.3	11	25	−	−	44	100
礫片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1	−

表87　第23ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 \ 器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	礫片	計
珪質頁岩　1	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	3	1	−	−	5
珪質頁岩　2	−	−	−	−	−	−	1	−	−	1	2	−	7	1	−	−	12
珪質頁岩　3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1
珪質頁岩　4	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−	−	2
チャート　1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	3	−	−	−	4
頁岩　1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	6	−	−	−	6
黒曜石その他	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	4	−	−	4
安山岩　1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	2
安山岩　2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	1	−	−	−	2
安山岩その他	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−	−	2
不明　1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1
計	−	−	−	−	−	−	2	−	−	3	2	−	24	8	1	1	41

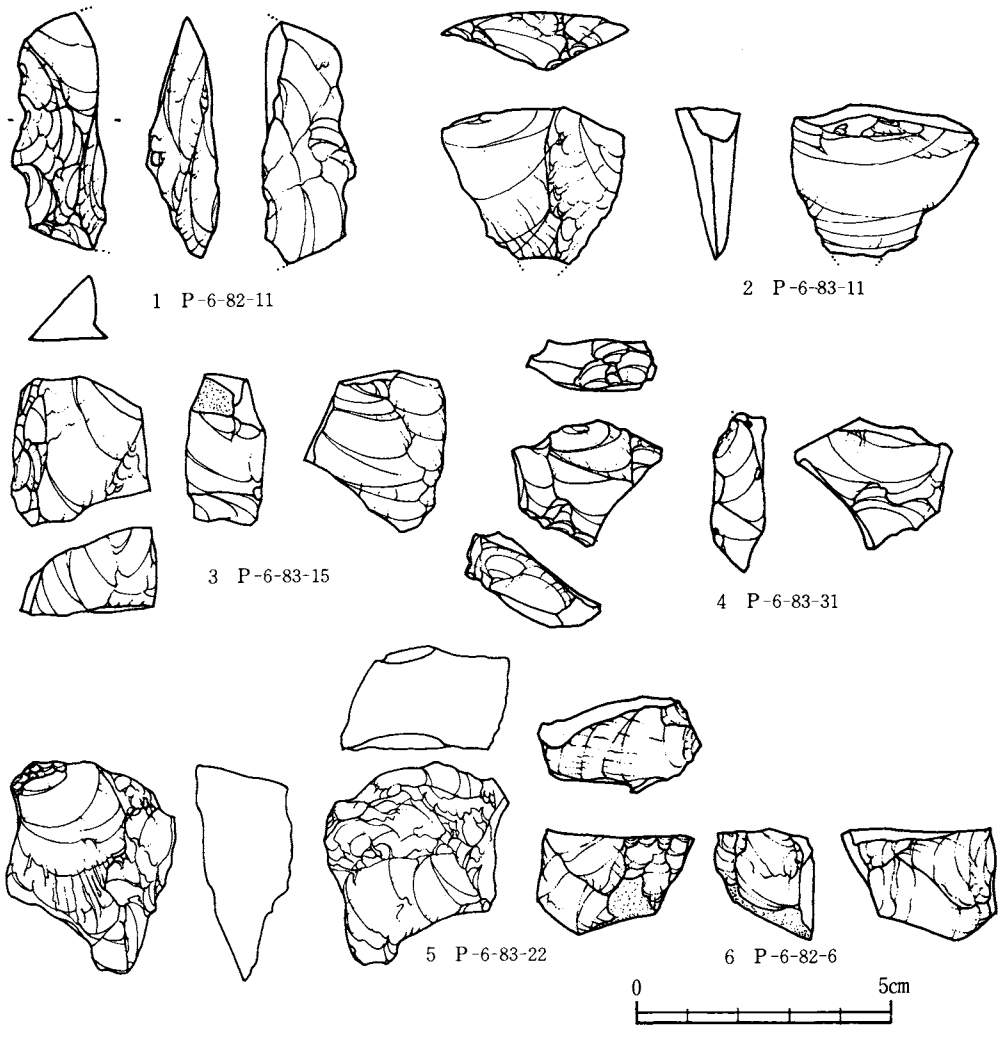


図65　第23ブロック出土遺物実測図

表88　第23ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材	その他
1	P-6-82-11	削器	4.8	1.9	1.3	55°	8.7	1	不明	無	無	有	断片	有	珪質頁岩	
2	P-6-83-31	削器	2.4	3.0	1.1	75°	7.8	4	先端	無	無	有	先端	無	珪質頁岩	
3	P-6-83-15	二次加工ある剝片	2.9	3.0	1.5	65°	14.6	3	一側辺加工(部分的)	無	有	有	先端	無	チャート	
4	P-9-93-14	二次加工ある剝片	3.0	2.8	0.7	65°	7.8	—	部分的	無	無	有	断片	無	安山岩	
5	P-6-82-6	二次加工ある剝片	3.0	1.8	2.0	75°	12.3	6	先端	無	無	無	—	無	珪質頁岩	石核(?)
6	P-6-83-11	使用痕ある剝片	2.9	3.6	1.2	25°	7.3	2	—	—	有	有	先端	一側辺	珪質頁岩	
7	P-6-83-13	使用痕ある剝片	2.5	3.9	1.5	35°	10.9	—	—	無	無	有	基部	一側辺	珪質頁岩	
8	P-6-83-22	石核	4.0	3.7	1.8	—	22.2	5	—	—	有	無	—	—	頁岩	

24. 第24ブロック（図66、67、図版15、表89～92）

出土状況　Ⅴ層上部よりⅤ層下部にかけて出土した。垂直分布では特に集中して出土した傾向はなく、散漫である。平面分布は約3.7m×約1.2mの範囲より出土しており、小範囲にまとまっている。

出土遺物　総計11点出土した。石器組成は掻器1点、ピエス・エスキーユ1点、剝片5点、砕片4点となっている。1はピエス・エスキーユである。黒曜石を石材としており上下両端につぶれ、また全体が上下両端からの剝離面によっておおわれている。2は縦長剝片である。両設打面の石刃石核より剝離されたものと考えられる。3aは掻器である。縦長剝片を素材として一端に急角度な2次加工が施されている。

母岩別資料・接合資料　石材は3種、母岩は4種識別し得た。石材は黒曜石が多いが、母岩別資料では各母岩とも大きな数量的差異がない。全体として数量が少なく検討に堪えない。

表89　第24ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石 数量	黒曜石 %	珪質頁岩 数量	珪質頁岩 %	頁岩 数量	頁岩 %	計 数量	計 %
ナイフ形石器	－	－	－	－	－	－	－	－
角錐状石器	－	－	－	－	－	－	－	－
木葉形尖頭器	－	－	－	－	－	－	－	－
削片	－	－	－	－	－	－	－	－
石錐	－	－	－	－	－	－	－	－
掻器	－	－	1	33.3	－	－	1	9.1
削器	－	－	－	－	－	－	－	－
ピエス・エスキーユ	1	14.3	－	－	－	－	1	9.1
彫刻刀形石器	－	－	－	－	－	－	－	－
二次加工ある剝片	－	－	－	－	－	－	－	－
使用痕ある剝片	－	－	－	－	－	－	－	－
石斧	－	－	－	－	－	－	－	－
剝片	2	28.6	2	66.7	1	100	5	45.4
砕片	4	57.1	－	－	－	－	4	36.4
石核	－	－	－	－	－	－	－	－
台石	－	－	－	－	－	－	－	－
敲石	－	－	－	－	－	－	－	－
計	7	63.6	3	27.3	1	9.1	11	100
礫片	－	－	－	－	－	－	－	－

表90　第24ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 \ 器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	敲石	計
珪質頁岩 1	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	3
頁岩 1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	1
黒曜石 1	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	1
黒曜石 2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	1	－	－	3
黒曜石その他	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	2
計	－	－	－	－	－	1	－	1	－	－	－	－	5	3	－	－	10

表91　第24ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	珪質頁岩1	掻器1 剝片1	P-6-94-9(掻器) →P-6-94-7(剝片)	2

まとめ　本ブロックは技術基盤について、他のブロックと比較して特異性がある。それは、両設打面を有する石刃石核より縦長剝片を生産している点である。接合資料1はそのような状況を反映しており、はなはだ興味深い。このように全体として、この付近のブロックとは技術基盤において大きな違いがみられ、孤立したブロックと言えよう。

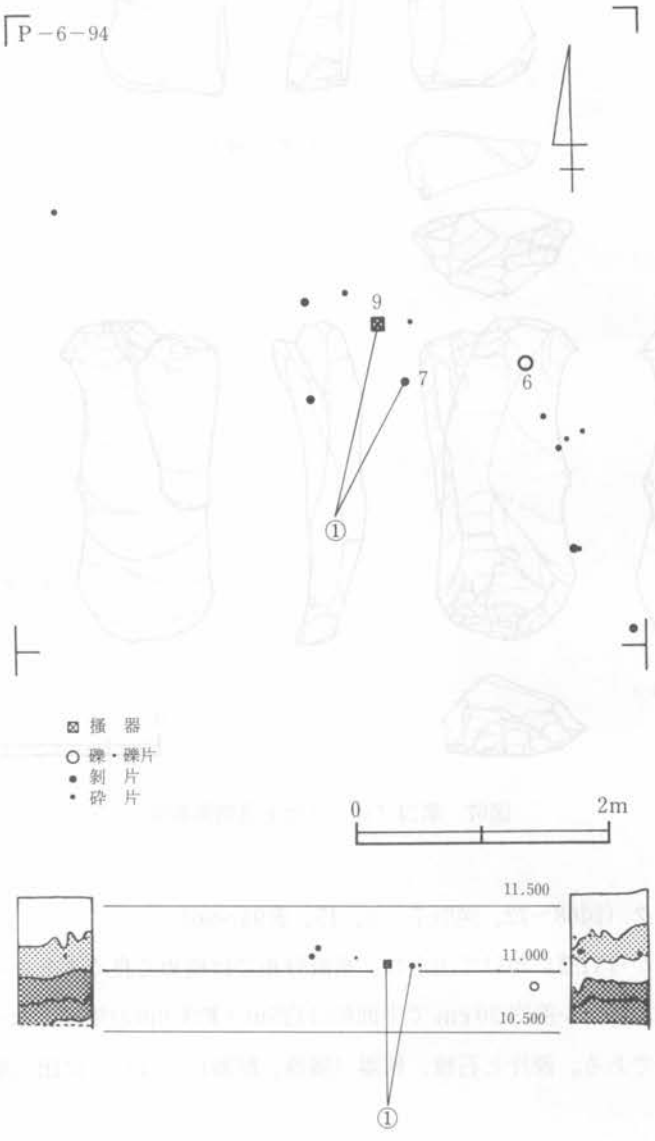


図66　第24ブロック遺物出土状況図

表92　第24ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器　種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石　材
1	P-6-94-9	掻　器	6.2	2.7	1.0	60°	19.6	3a	先　端	無	有	無	—	無	珪質頁岩
2	P-6-94-6	ピエス・エスキーユ	1.8	1.3	0.4	20° 45°	0.8	1	上下両端	—	無	無	—	無	黒曜石

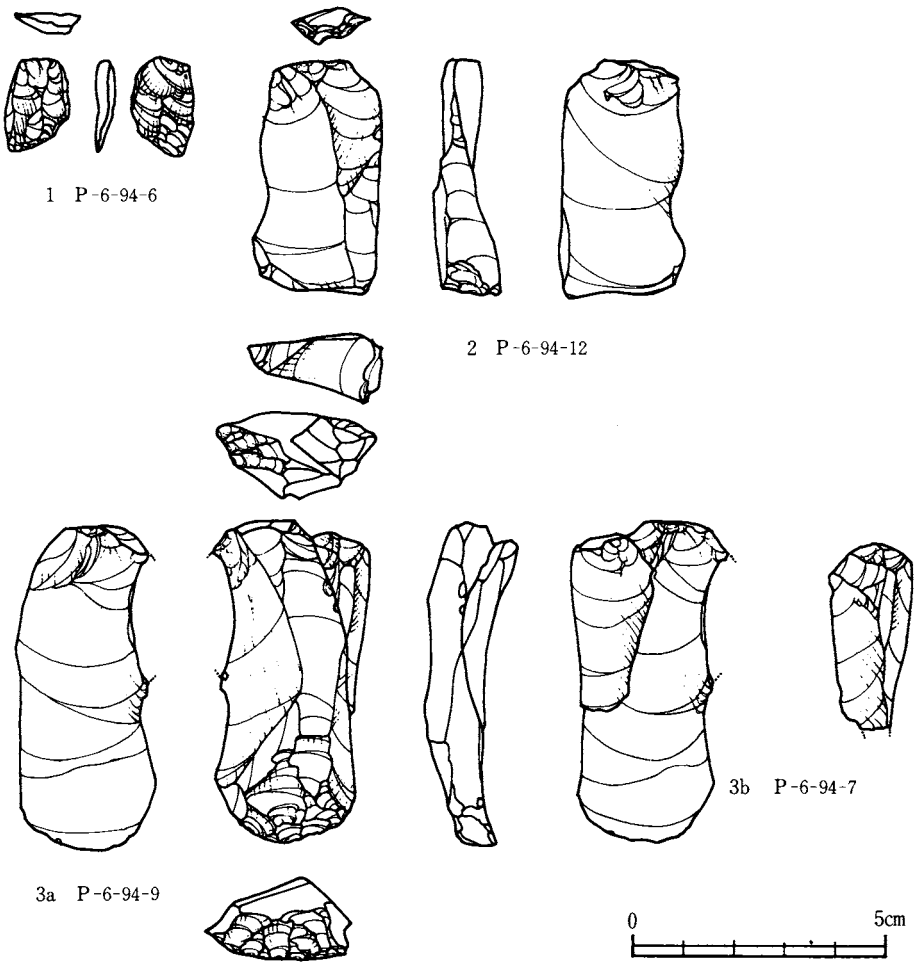


図67　第24ブロック出土遺物実測図

25. 第25ブロック（図68～72、図版７－３、15、表93～96）

出土状況　IV層からVI層にかけて出土し、垂直分布では極めて良くまとまっており、水平に分布している。最大レベル差約 30 cm で平面形は約5m×約3.9mの規模となっており、良くまとまったブロックである。礫片と石核、利器（掻器、削器）とは互いに出土地点が異なっている。

出土遺物　総計35点出土した。内訳は、礫片14点、掻器１点、削器１点、剝片14点、石核３点となっている。１は横長剝片を素材とした削器、２は同様に横長剝片を素材とした掻器であり、基部と先端部が接合している。

母岩別資料・接合資料　石材は不明６種を入れると９種、母岩は16種となっており、石器群ではチャートの占める割合が高い。母岩別資料では、各母岩とも数量的に大きな隔りがない。組成上では、掻器と削器が利器の単独の資料として注目される。他の母岩は剝片と砕片によっ

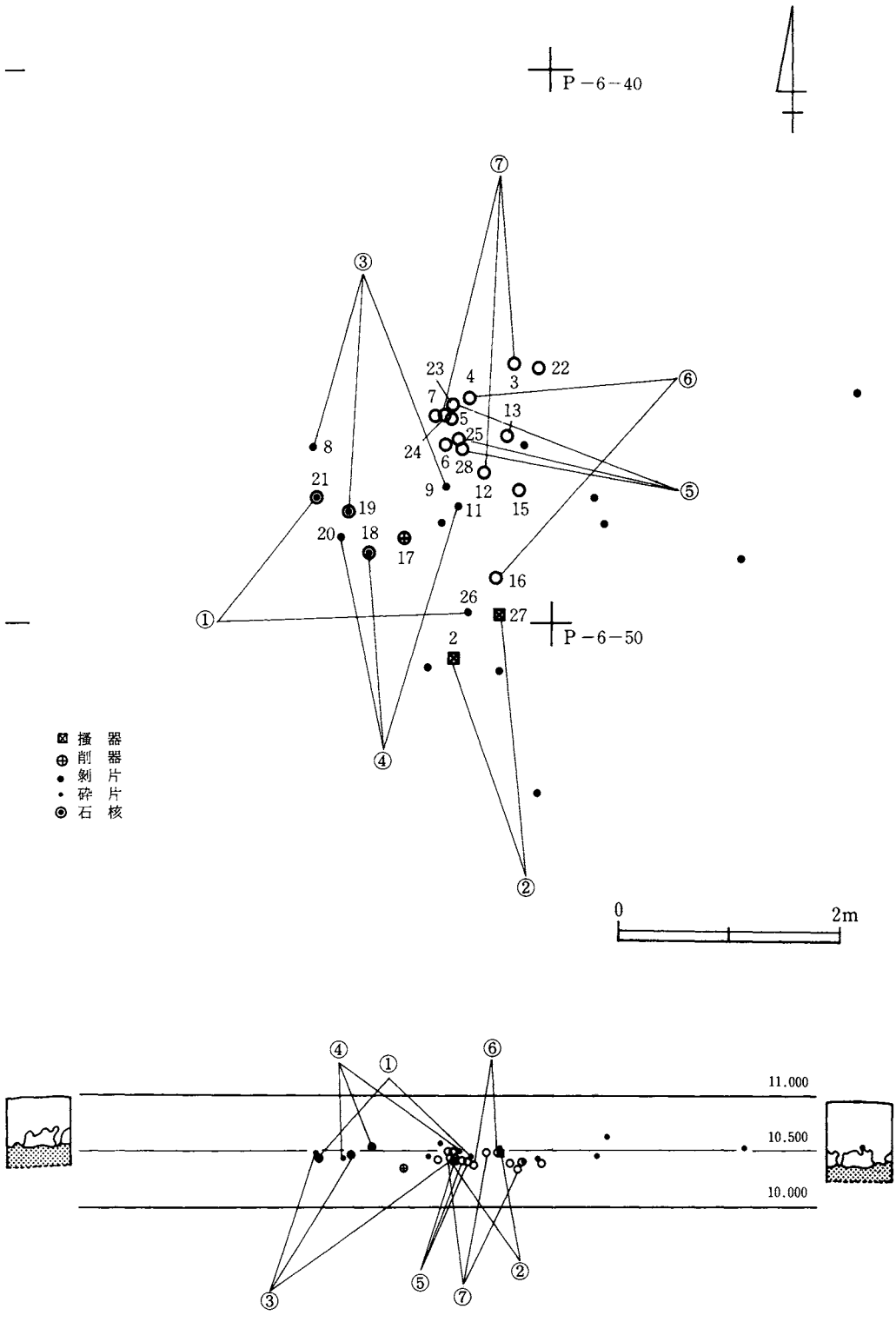


図68　第25ブロック遺物出土状況図

て構成されている。全体として数量の割合に母岩の数は多い。接合資料は7例あるが、剥片と石核との接合資料3例が注目される。接合資料1は、安山岩の円礫を原材としており、基本的には上端の平坦な剥離面の打面と、下端の自然面の打面より加撃し、剥片を生産しているが、時として加撃面転移したことが看取される。接合資料3は、節理面が顕著なチャートの角礫を素材として、上下両端の平坦な剥離面より幅広な剥片を剥離していることを窺わせる。接合資料4は、接合資料3と同様の形状と特徴を有する角礫を原材として、節理面より加撃し、横長の不定形剥片を生産したことを示している。

まとめ　本ブロックは剥片生産を反映しており、技術基盤としては接合資料1、3、4にその特徴が良くあらわれている。礫片が14点出土しており本ブロック内で良く接合しているが、付近には受熱の痕跡を示す状況

表93　第25ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	玄武岩		チャート		安山岩		珪質頁岩		不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	(2)	14.3	−	−	−	−	−	−	(2)	10.0
削器	−	−	−	−	−	−	1	100	−	−	1	5.0
ピエス・エスキーユ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剥片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
使用痕ある剥片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
剥片	1	100	10	71.4	3	75.0	−	−	−	−	14	70.0
砕片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石核	−	−	2	14.3	1	25.0	−	−	−	−	3	15.0
台石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
計	1	5	14	70	4	20	1	5	−	−	20	100
礫片	−	−	−	−	1	−	−	−	14	−	15	−

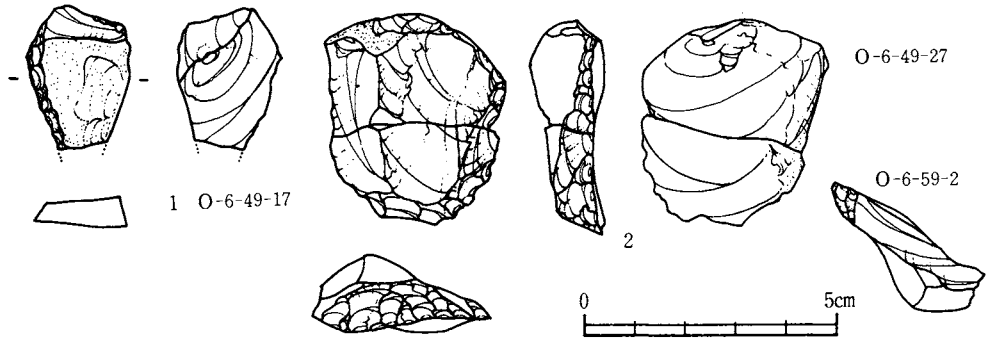


図69　第25ブロック出土遺物実測図(1)

証拠は存在しなかった。

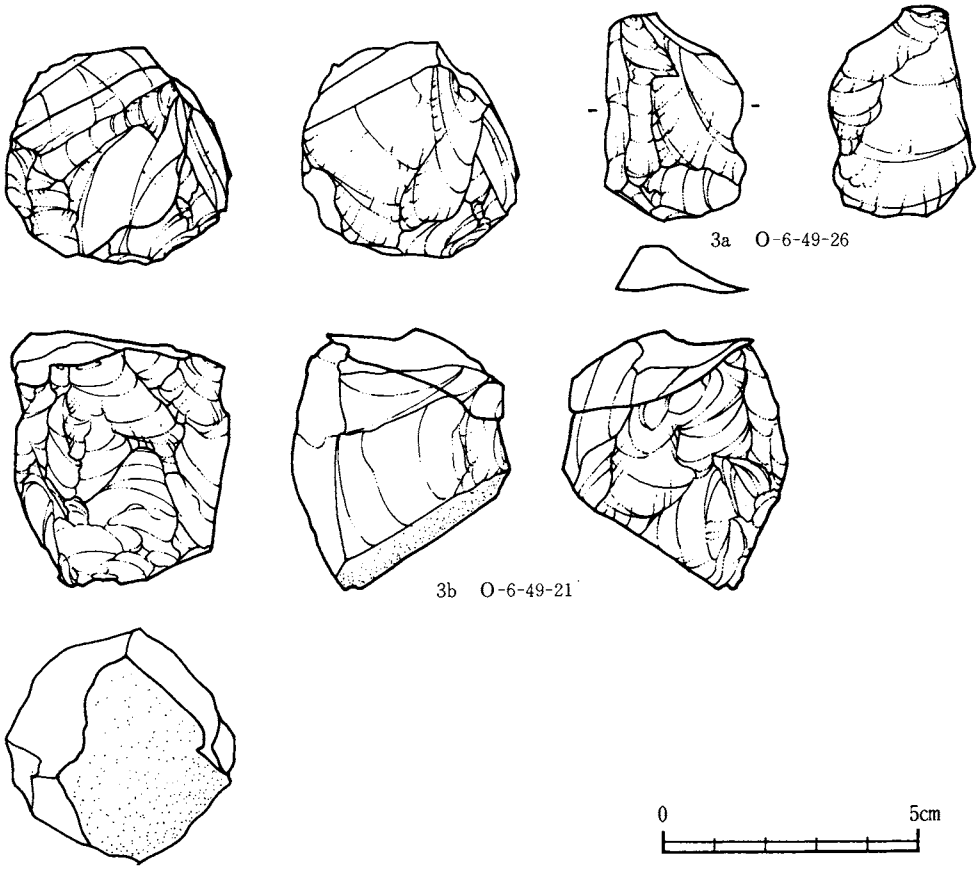


図70　第25ブロック出土遺物実測図(2)

表94　第25ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内　訳	内　容	数量
1	安山岩 2	剝片 1 石核 1	O-6-49-26(剝片)→O-6-49-21(石核)	2
2	チャート 6	掻器 2	O-6-59-2(掻器)＋O-6-49-27(掻器)	2
3	チャート 3	剝片 2 石核 1	O-6-49-9(剝片)→O-6-49-8(剝片)→O-6-49-19(石核)	3
4	チャート 2	剝片 2 石核 1	O-6-49-11(剝片) O-6-49-20(剝片)→O-6-49-18(石核)	3
5	不　明　2	礫片 3	O-6-49-23(礫片)＋O-6-49-25(礫片)＋O-6-49-28(礫片)	3
6	不　明　3	礫片 2	O-6-49-16(礫片)＋O-6-49-4(礫片)	2
7	不　明　1	礫片 3	O-6-49-24(礫片)＋O-6-49-12(礫片)＋O-6-49-3(礫片)	3

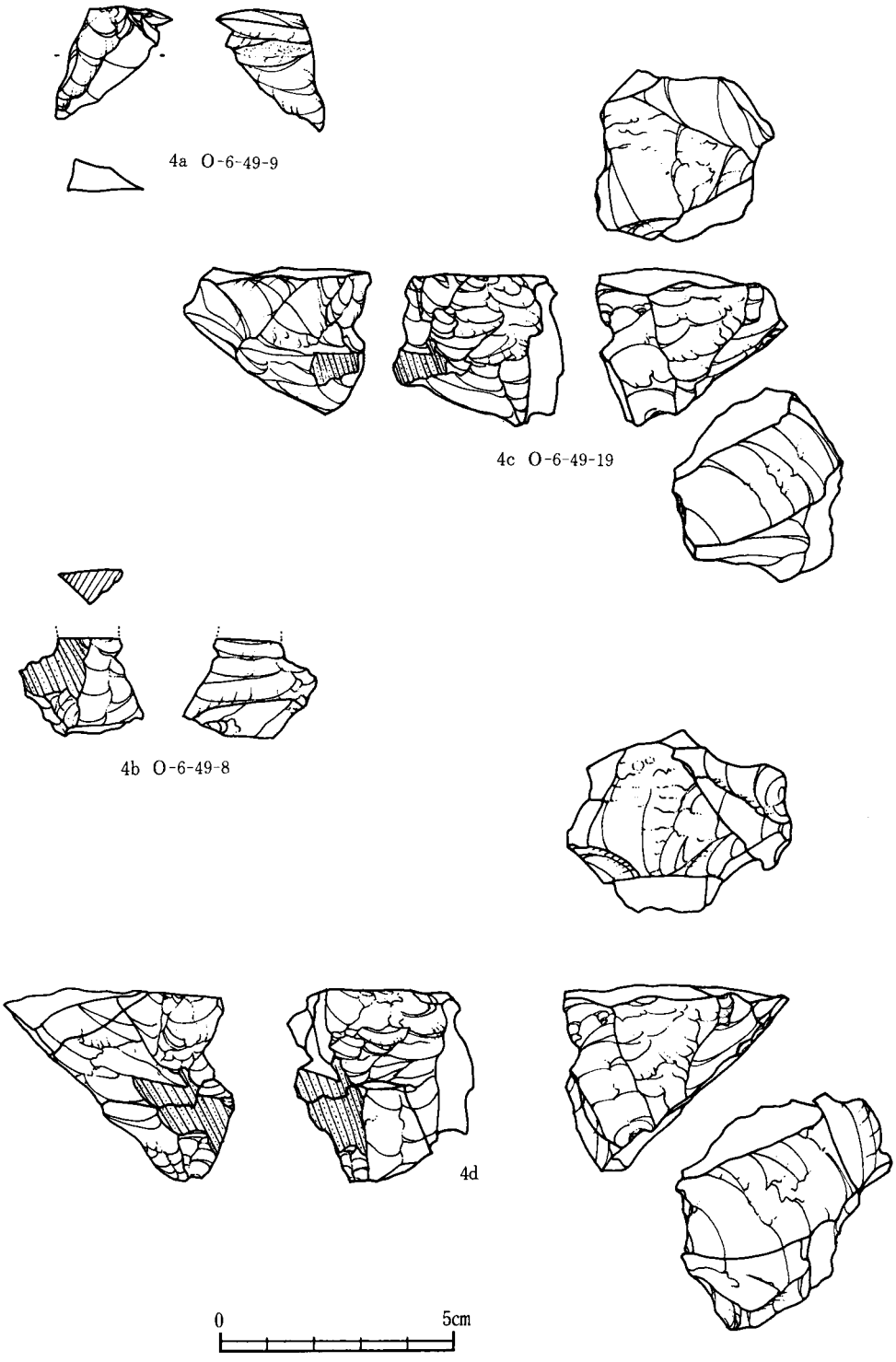


図71　第25ブロック出土遺物実測図(3)

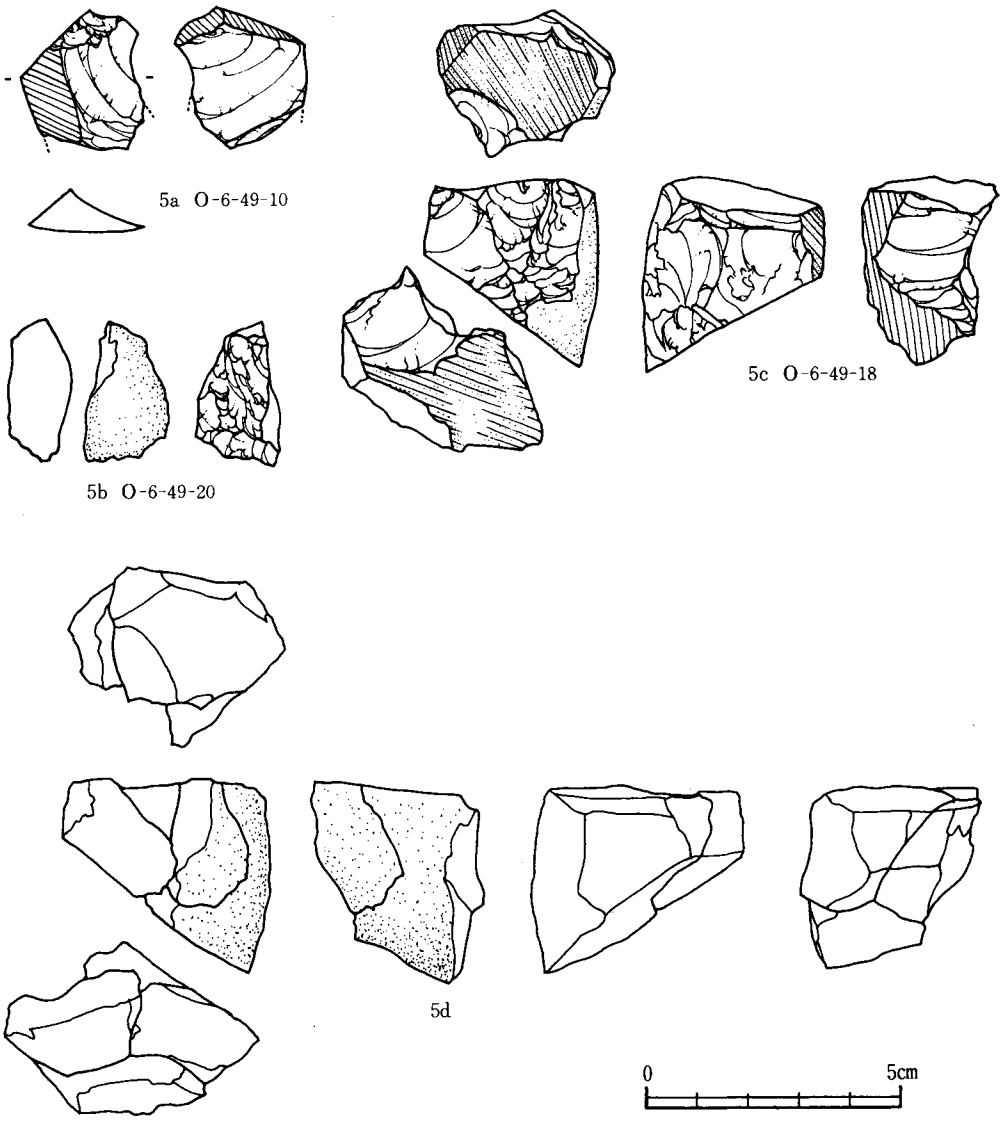


図72　第25ブロック出土遺物実測図(4)

表95　第25ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材
1	O-6-49-27 O-6-59-2	掻器	3.9	3.7	1.0	60°	16.7	2	先端 一側辺加工	無	有	無	—	無	チャート
2	O-6-49-17	削器	2.7	2.1	0.6	65°	3.7	1	一側辺加工	無	有	有	先端	無	珪質頁岩
3	O-6-49-18	石核	3.7	3.5	3.0	—	32.3	5c	—	—	有	無	—	—	チャート
4	O-6-49-19	石核	3.1	3.2	3.5	—	45.9	4c	—	—	有	無	—	—	チャート
5	O-6-49-21	石核	4.1	4.7	4.3	—	92.9	3b	—	—	有	無	—	—	安山岩

表96　第25ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	礫片	計
チャート　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	—	—	—	4
チャート　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	1	—	4
チャート　3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	1	—	4
チャート　4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
チャート　5	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
チャート　6	—	—	—	—	—	(2)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(2)
安山岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
安山岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	1	—	3
安山岩　3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
玄武岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
不　明　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	3
不　明　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	3
不　明　3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	3
不　明　4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
不　明　5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	3
不　明　6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
計	—	—	—	—	—	(2)	1	—	—	—	—	—	15	—	3	15	36

26. 第26ブロック（図73、図版８－１、表97、98）

出土状況　Ⅴ層下部よりⅦｂ層上面に至るまで、幅広く分布しているが、特にⅦａ層に顕著にみられる。最大レベル差約 50 cm で、平面分布は約9.1m×約6.8mの規模となっており、全体として散漫な分布密度を呈する。

出土遺物　総計21点出土した。石器組成は剝片16点、砕片５点となっている。特に図示しなかったが剝片は不定形を呈し、横長で平坦な打面を有するものが多い。

表97　第26ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	敲石	計
玄武岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	2	—	—	3
玄武岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	1	—	—	3
玄武岩　3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
玄武岩　4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
安山岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	2
頁　岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
不　明　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9	—	—	—	9
計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	16	4	—	—	20

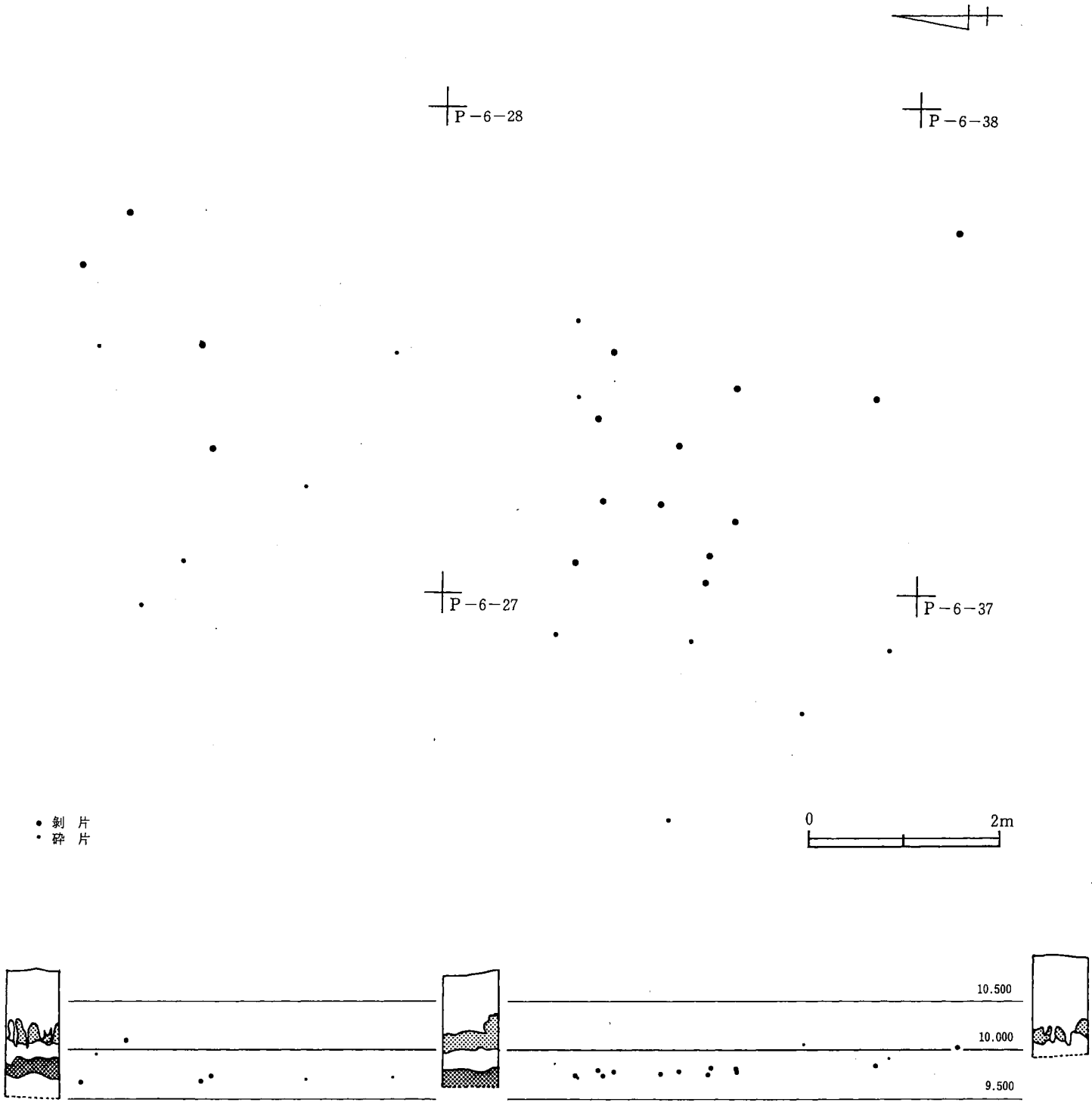


図73　第26ブロック遺物出土状況図

技術的特徴　石核が欠落しており、剝片剝離技術を窺わせる資料はない。

母岩別資料・接合資料　石材は4種7母岩にわたる。いずれも剝片、砕片であり、その多くは破損している。接合資料はない。

まとめ　破損した不定形の横長剝片の集合である。極めて廃棄の色彩が濃い。

表98　第26ブロック出土石器組成表

器種＼石材	安山岩		玄武岩		頁岩		不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
角錐状石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
削片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
削器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ピエス・エスキーユ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剝片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
使用痕ある剝片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
石斧	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
剝片	1	25.0	5	71.4	1	100	9	100	16	76.2
砕片	3	75.0	2	28.6	—	—	—	—	5	23.8
石核	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
台石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	4	19.0	7	33.3	1	4.8	9	42.9	21	100
礫片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

27. 第27ブロック（図74、75、図版8－2、15、表99～101）

出土状況　ソフトローム上面よりⅦa層に至る大きなレベル差を持って出土している。最大レベル差90cmである。したがって、2枚以上の文化層が重複している可能性もあるが、数量的に少なく、確実なことは言えない。平面分布は径4.0m×2.7mの規模にあり、全般的に散漫な状況を呈している。

出土遺物　総計7点出土した。石器組成は、削器1点、剝片1点、破片1点、礫片1点となっており、充分な量的保証があるとは言い難い。また利器が少ないことが特徴となっている。

表99　第27ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	礫片	計
珪質頁岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	2
砂岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
不明　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	1	—	1	4

表100　第27ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材	その他
1	P-6-05-1	削器	4.3	1.9	1.5	65°/75°	12.0	1	全周	無	無	無	—	無	安山岩	舟底形石器(?)

図示した1点は削器である。先端部および2側辺に急角度な剝離を施し、形態的には舟底形石器に近い。

技術的特徴　一連の工程を窺わせる資料はない。断片的な資料である。

母岩別資料・接合資料　母岩は3母岩に識別できたが、母岩各種とも2点で構成され、石器の総量からすれば母岩の数が多く、バラツキがみられる。接合資料はない。

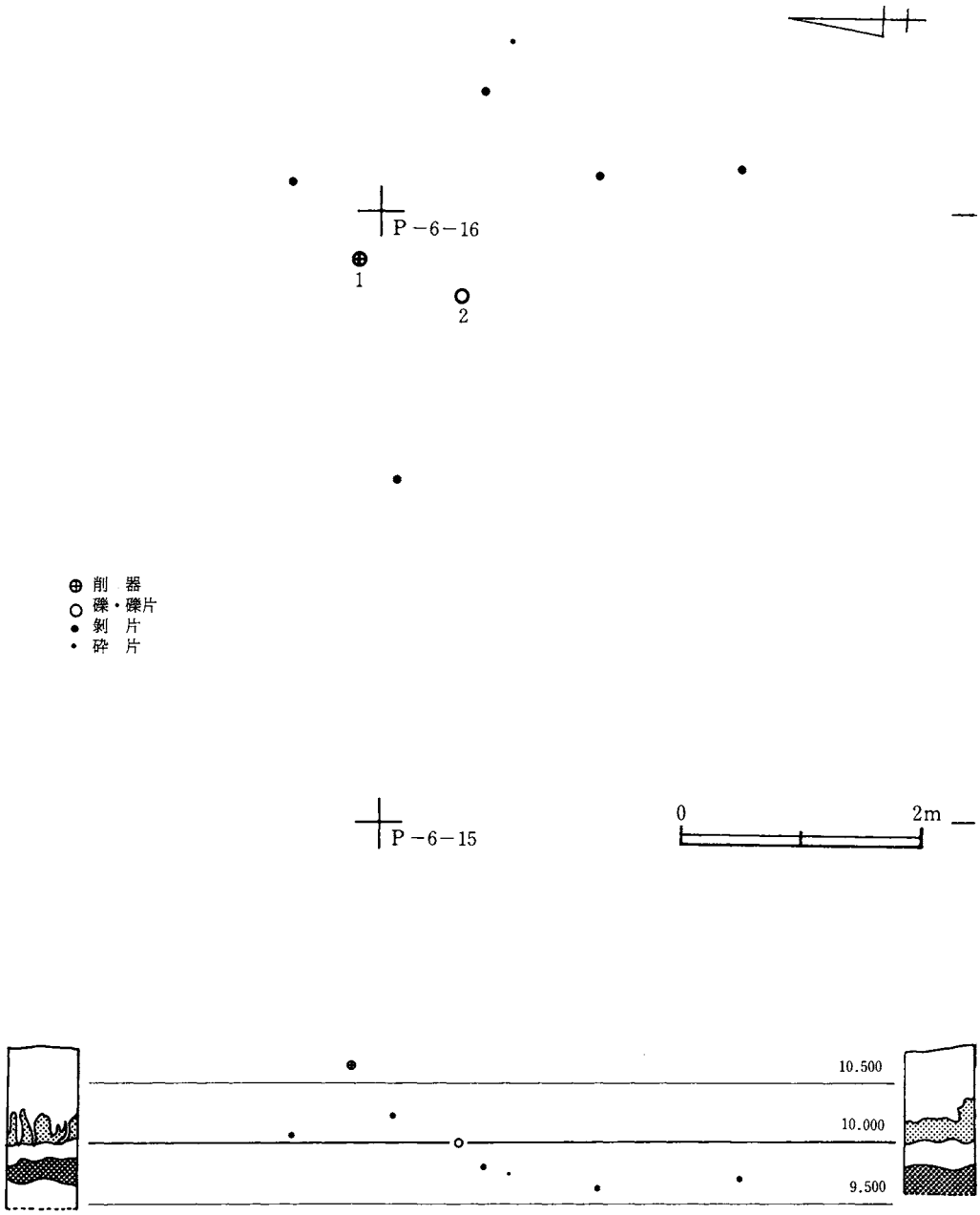
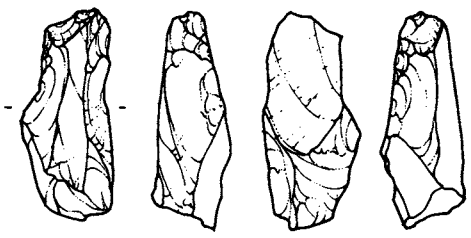


図74　第27ブロック遺物出土状況図



1　P-6-05-1

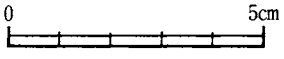


図75　第27ブロック出土遺物実測図

まとめ　石器群の数量、内容とも貧弱であり、充分な検討がなし得ない。

表101　第27ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	安山岩 数量	安山岩 %	珪質頁岩 数量	珪質頁岩 %	砂岩 数量	砂岩 %	不明 数量	不明 %	計 数量	計 %
ナイフ形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削器	1	33.3	−	−	−	−	−	−	1	16.7
ピエス・エスキーユ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
使用痕ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
剝片	2	66.7	2	100	−	−	−	−	4	66.6
砕片	−	−	−	−	1	100	−	−	1	16.7
石核	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
台石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
計	3	50	2	33.3	1	16.7	−	−	6	100
礫片	−	−	−	−	−	−	1	−	1	−

28. 第28ブロック（図76、77、図版15、表102〜104）

出土状況　ソフトローム層からVI層上部にかけて分布している。地形は全体に東方にむかって緩やかに傾斜している。石器群も同様の傾向にある。平面形は約7.8m×約4.0mとなっており、散漫な密度を呈する。礫片が東半部、一方石器群は西半部に分布している。

出土遺物　総計7点出土した。石器組成は石核1点、剝片2点、破片1点、礫片3点となっ

表102　第28ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 \ 器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	礫片	計
頁岩 1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1
珪質頁岩 1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1
黒曜石 1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	1
安山岩 1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1
不明 1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	3	3
計	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	1	1	3	7

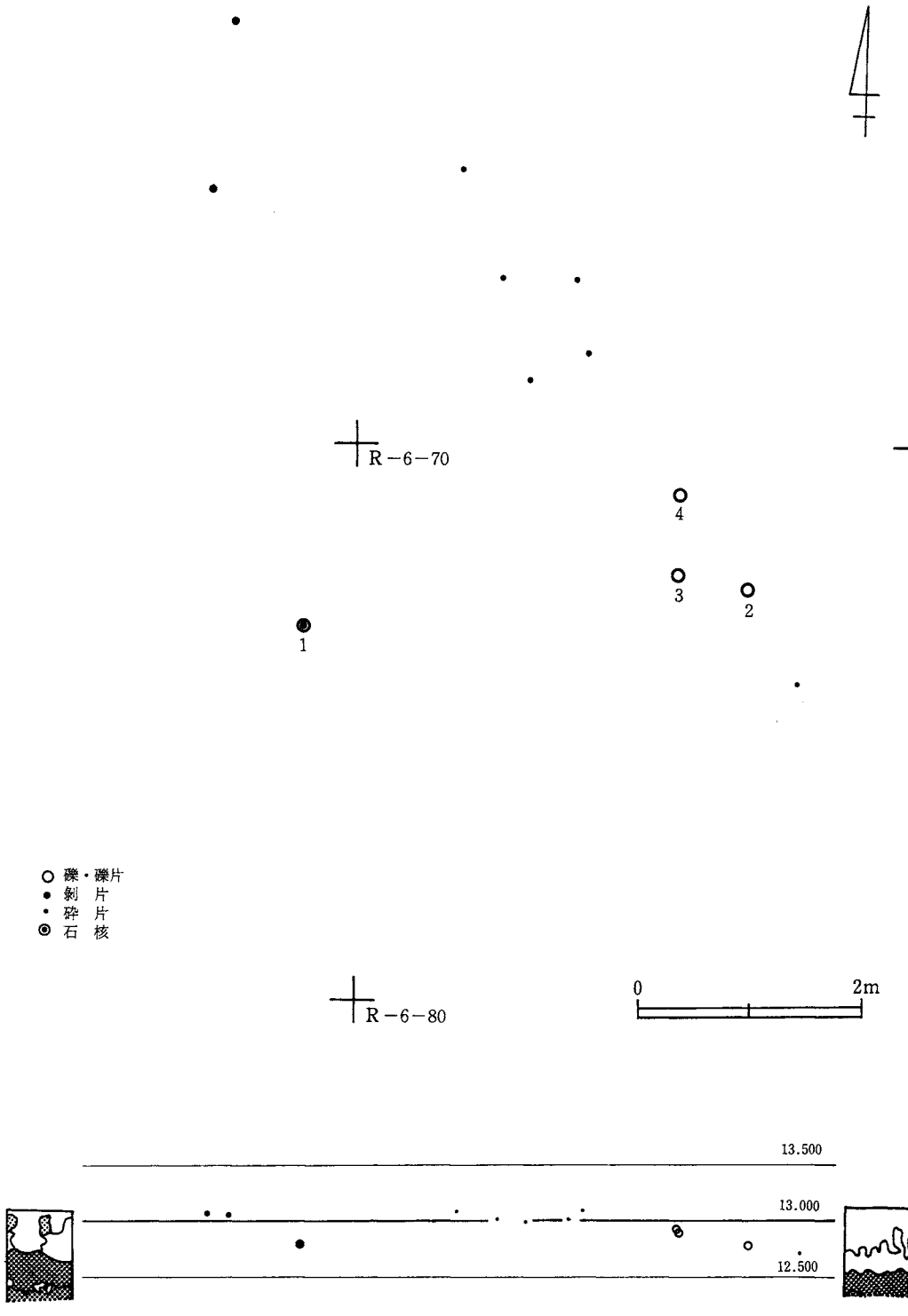


図76　第28ブロック遺物出土状況図

ている。図示した石器は石核である。安山岩のぶ厚い剝片を素材として表面より加撃し、平坦打面を有する横長剝片を生産したことが窺われる。上下両端は折損している。

技術的特徴　石核1点の他剝片2点、砕片2点となっているが、いずれも母岩が異なり、互いの技術的な相関関係は窺えない。剝片はいずれも横長剝片で平坦な打面を有し、先端部は内彎し、欠損している。

母岩別資料・接合資料　5母岩識別し得たが、前述のとおり、母岩のまとまりに欠き、バラエティに富むことが窺われる。その中で礫片3点は同一母岩であることが注目される。接合資料はない。

表103　第28ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		頁岩		安山岩		珪質頁岩		不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ピエス・エスキーユ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
使用痕ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
剝片	1	100	1	100	−	−	−	−	−	−	2	50.0
砕片	−	−	−	−	−	−	1	100	−	−	1	25.0
石核	−	−	−	−	1	100	−	−	−	−	1	25.0
台石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
計	1	25	1	25	1	25	1	25	−	−	4	100
礫片	−	−	−	−	−	−	−	−	3	−	3	−

まとめ　石器の数量が少なく、分布状況も散漫であり、ブロックの性格を捉えるに至らない。

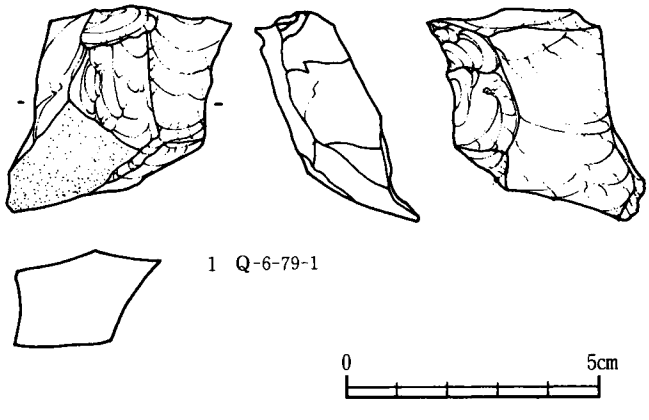


図77　第28ブロック出土遺物実測図

表104　第28ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材
1	Q-6-79-1	石核	3.7	3.6	1.7	—	30.9	1	—	—	有	無	—	—	安山岩

29. **第29ブロック**（図78、79、図版8－3、15、表105～108）

出土状況　ソフトローム下部よりハードローム上部にかけて分布している。最大レベル差30cmで、平面分布は径7.1m×3.5mの規模となっており、全体に散漫である。北半部に礫片が出土しており、石器群は南半部に限られる。

出土遺物　総計13点出土した。内訳は礫片7点、削器1点、剝片4点、砕片1点となっている。礫片はいずれも受熱によって破砕されている。1は削器である。背面側に自然面を有する横長剝片を素材としており、2側辺に急角度な2次加工が施されている。

母岩別資料・接合資料　石材は3種、母岩も3種をかぞえる。石器群の石材は安山岩が大勢を占め、他の石材としてはわずかに黒曜石が1点出土したのみである。礫片は6点出土したが、いずれも接合し、もとの円礫に復元し得る大きさをもち、全体の5分の4程度が残存している（長さ10.5cm、幅7.0cm、厚さ5.0cm、重量340g）。表面は加熱のためほとんど赤化している。

まとめ　破砕礫と安山岩製石器群で構成されているブロックである。

表105　第29ブロック出土石器組成表

器種＼石材	黒曜石 数量	%	安山岩 数量	%	不明 数量	%	計 数量	%
ナイフ形石器	—	—	—	—	—	—	—	—
角錐状石器	—	—	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—
削片	—	—	—	—	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—	—	—	—	—
削器	—	—	1	20	—	—	1	16.7
ピエス・エスキーユ	—	—	—	—	—	—	—	—
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剝片	—	—	—	—	—	—	—	—
使用痕ある剝片	—	—	—	—	—	—	—	—
石斧	—	—	—	—	—	—	—	—
剝片	1	100	3	60	—	—	4	66.6
砕片	—	—	1	20	—	—	1	16.7
石核	—	—	—	—	—	—	—	—
台石	—	—	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—	—	—
計	1	16.7	5	83.3	—	—	6	100
礫片	—	—	—	—	7	—	7	—

表106　第29ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	礫片	計
黒曜石 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
安山岩 1	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	3	1	—	—	5
不明 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	6
計	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	4	1	—	6	12

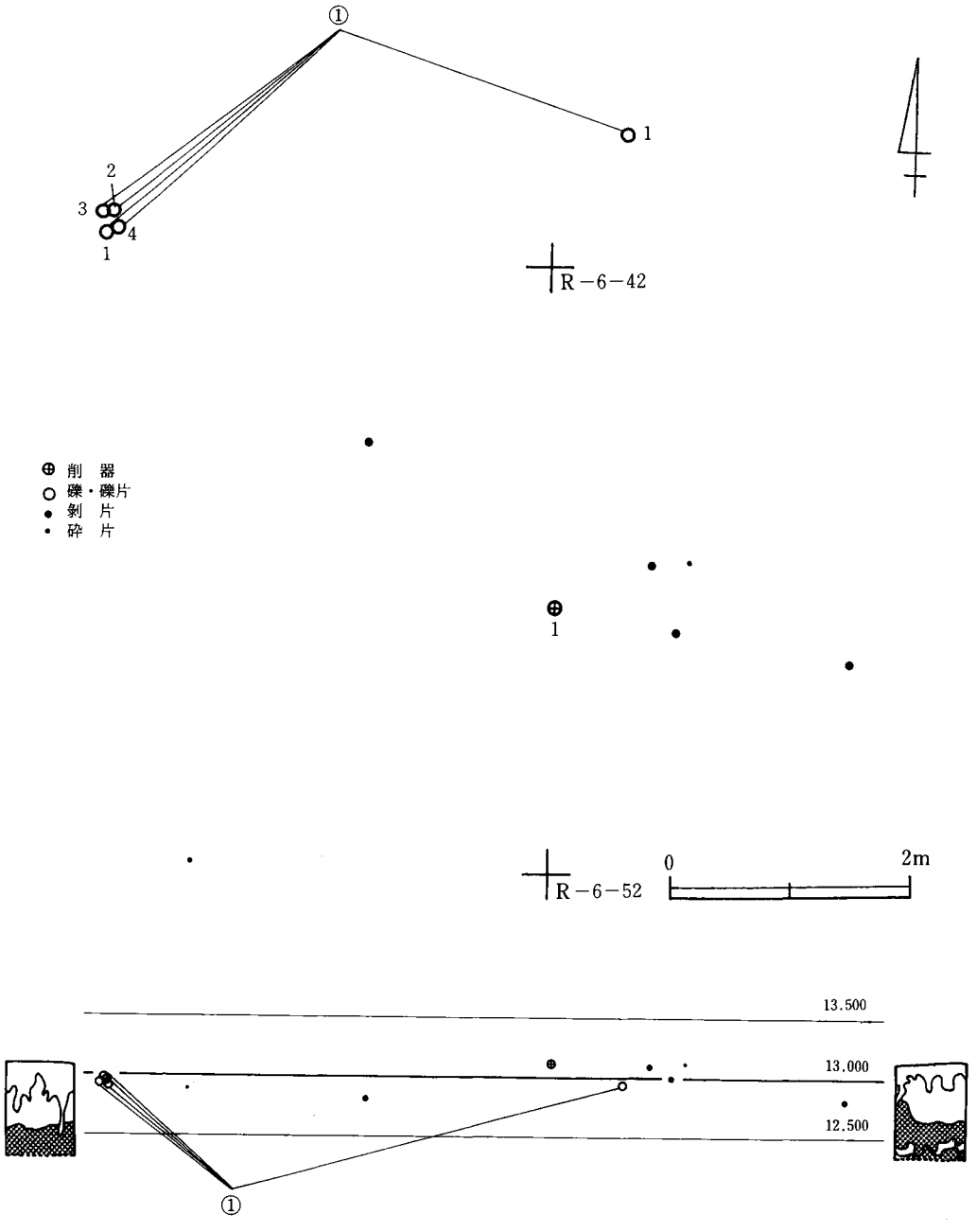


図78　第29ブロック遺物出土状況図

表107　第29ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内　訳	内　容	数量
1	不　明　1	礫片 6	R-6-31-1＋R-6-31-2＋R-6-31-3＋R-6-31-3＋R-6-31-4＋R-6-32-1	6

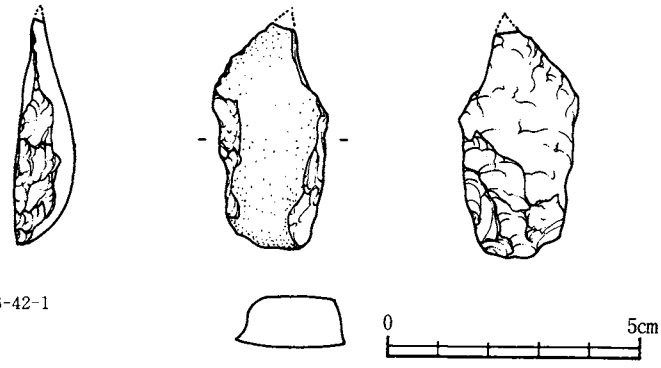


図79 第29ブロック出土遺物実測図

表108 第29ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm			刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材
			長さ	幅	厚										
1	R-6-42-1	削器	4.5	2.4	1.2	—	8.1	1	—	有	無	有	先端	無	安山岩

30. 第38ブロック（図80、81、図版9－1、15、表109～111）

出土状況 ソフトローム下部よりハードローム上部にかけて分布している。最大レベル差は約40 cmとなっており、良くまとまっている。平面分布は径7.8 m×5.4mと広範囲であるが分布密度に偏りはなく、ほぼ均一である。

出土遺物 総計14点出土した。石器組成は削片2点、石錐2点、2次加工のある剝片2点、剝片14点、砕片1点となっている。1～2は石錐である。1は基部の折損した縦長剝片を素材としており、先端部を片面加工により尖鋭に調整してある。2は先端部が主要剝離面側に内彎する大形剝片の先端部に調整が施されている。

母岩別資料・接合資料 石材は4種、母岩は10種を数える。石材としてはメ

表109 第38ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	珪質頁岩		メノウ		頁岩		黒曜石		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
角錐状石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
削片	—	—	1	7.7	—	—	1	100	2	10
石錐	—	—	1	7.7	1	25.0	—	—	2	10
掻器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
削器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ピエス・エスキーユ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剝片	—	—	1	7.7	—	—	—	—	1	5
使用痕ある剝片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
石斧	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
剝片	2	100	9	69.2	3	75.0	—	—	14	70
砕片	—	—	1	7.7	—	—	—	—	1	5
石核	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
台石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	2	10	13	65	4	20	1	5	20	100
礫片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

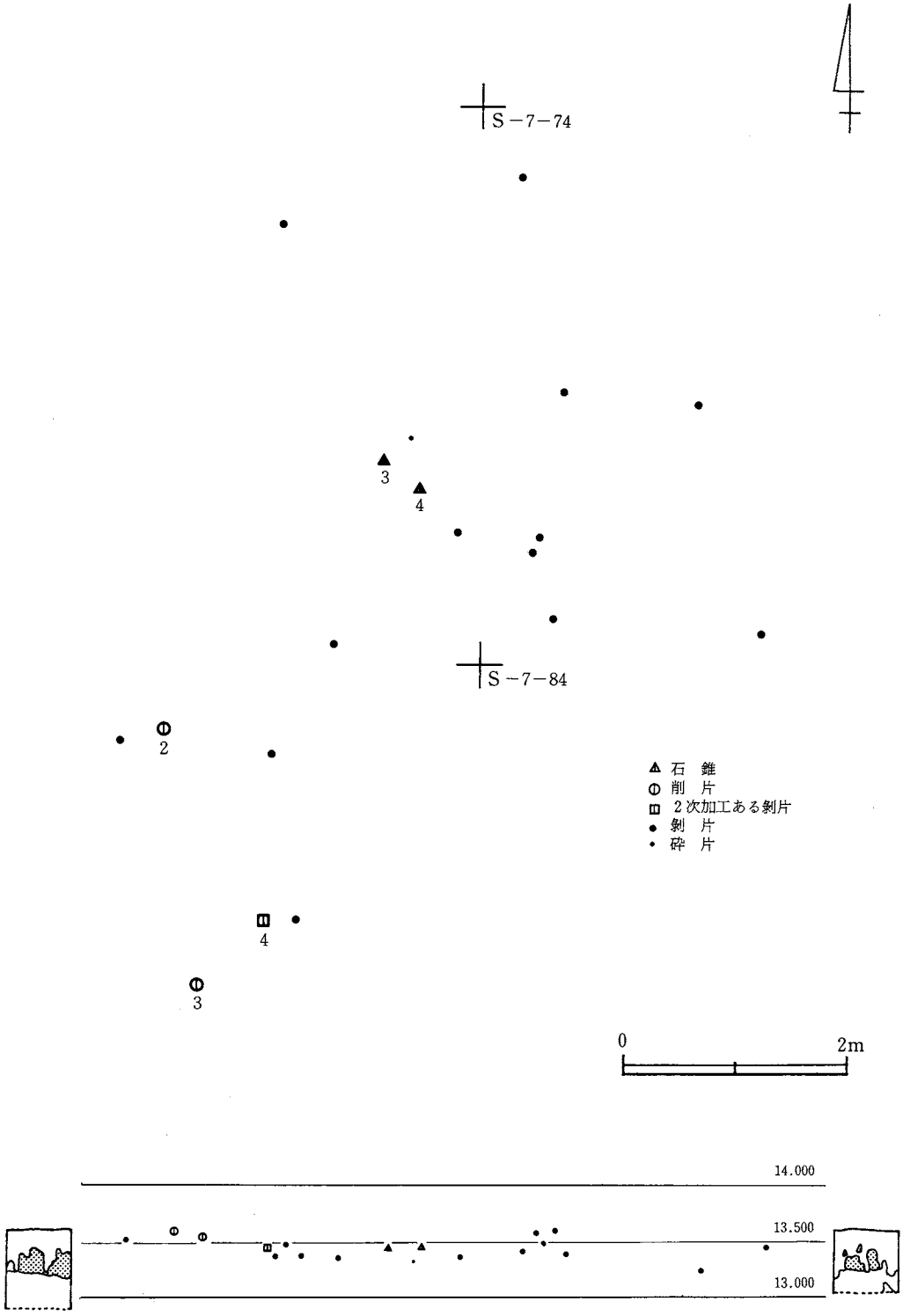


図80　第38ブロック遺物出土状況図

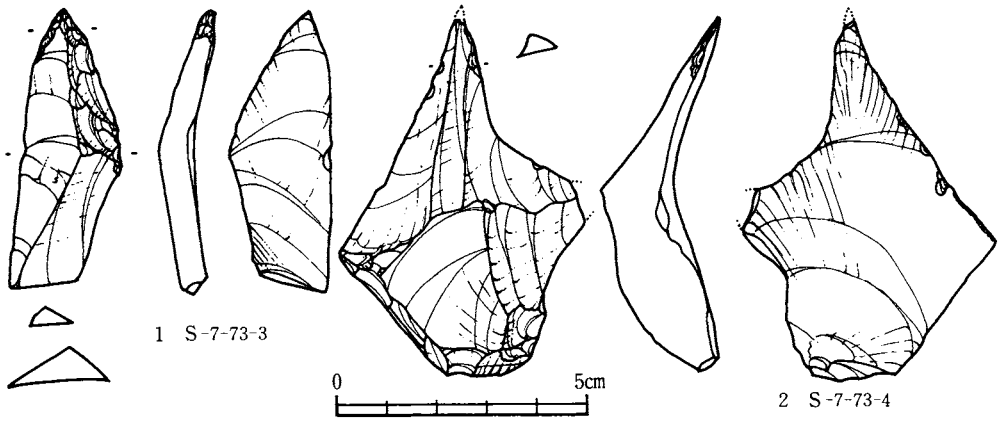


図81　第38ブロック出土遺物実測図

ノウが圧倒的に多い。母岩別石器組成表より特に工程上の偏りは窺えない。

まとめ　本ブロックはメノウを主要な石材としており、該期の石器群としては異質である。

表110　第38ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	削片	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	敲石	計
珪質頁岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
珪質頁岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
珪質頁岩　3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1
黒曜石　1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
頁　岩　1	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	2
メノウ　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	1	—	—	7
メノウ　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
メノウ　3	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
メノウ　4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	2
メノウ　5	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	2
計	—	—	—	2	2	—	—	—	—	1	—	—	13	1	—	—	19

表111　第38ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材
1	S-7-73-3	石錐	5.6	2.0	0.7	刃先角65°	6.2	1	先端部	無	無	有	基部	無	メノウ
2	S-7-73-4	石錐	6.6	4.7	1.5	刃先角50°	33.5	2	先端部	無	有	有	一側辺	無	頁岩
3	S-7-83-4	二次加工ある剥片	1.4	1.1	0.4	—	0.7	—	不明	不明	—	有	断片	—	メノウ

31. 第39ブロック（図82、83、図版15、表112～114）

出土状況　ソフトローム下部よりVI層に至るまで出土しているが、特にハードローム上面に水平に分布しており、VI層以下の遺物2点については、本ブロックに帰属するものか否かは不明なため除外される可能性が高いことを付記しておく。平面分布では、約3.3m×約7.0mの規模となっており、全体に散漫な分布密度を呈している。

出土遺物　総計11点出土した。石器組成はナイフ形石器3点、ピエス・エスキーユ1点、2次加工のある剝片1点、剝片4点、砕片2点となっており、他のブロックと比較して、全体の数量の中で利器の占める割合が大きいことが注目される。1はピエス・エスキーユである。メノウ製の横長剝片を素材として、長軸方向と短軸方向の上下両端に細かなつぶれがみられる。2～4はナイフ形石器である。いずれも横長に近い剝片を素材として2側辺加工で、全体の形状は切り出し形を呈する。5

表112　第39ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	珪質頁岩 数量	珪質頁岩 %	頁岩 数量	頁岩 %	黒曜石 数量	黒曜石 %	メノウ 数量	メノウ %	計 数量	計 %
ナイフ形石器	2	40.0	1	25.0	−	−	−	−	3	27.3
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ピエス・エスキーユ	−	−	−	−	−	−	1	100	1	9.1
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剝片	−	−	1	25.0	−	−	−	−	1	9.1
使用痕ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
剝片	1	20.0	2	50.0	1	100	−	−	4	36.3
砕片	2	40.0	−	−	−	−	−	−	2	18.2
石核	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
台石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
計	5	45.4	4	36.4	1	9.1	1	9.1	11	100
礫片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−

表113　第39ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 \ 器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	敲石	計
珪質頁岩 1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
珪質頁岩 2	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
珪質頁岩 3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	1
珪質頁岩 4	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−	−	2
頁岩 1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	1	−	−	−	2
頁岩 2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1
頁岩 3	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
黒曜石 1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1
計	3	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	4	2	−	−	10

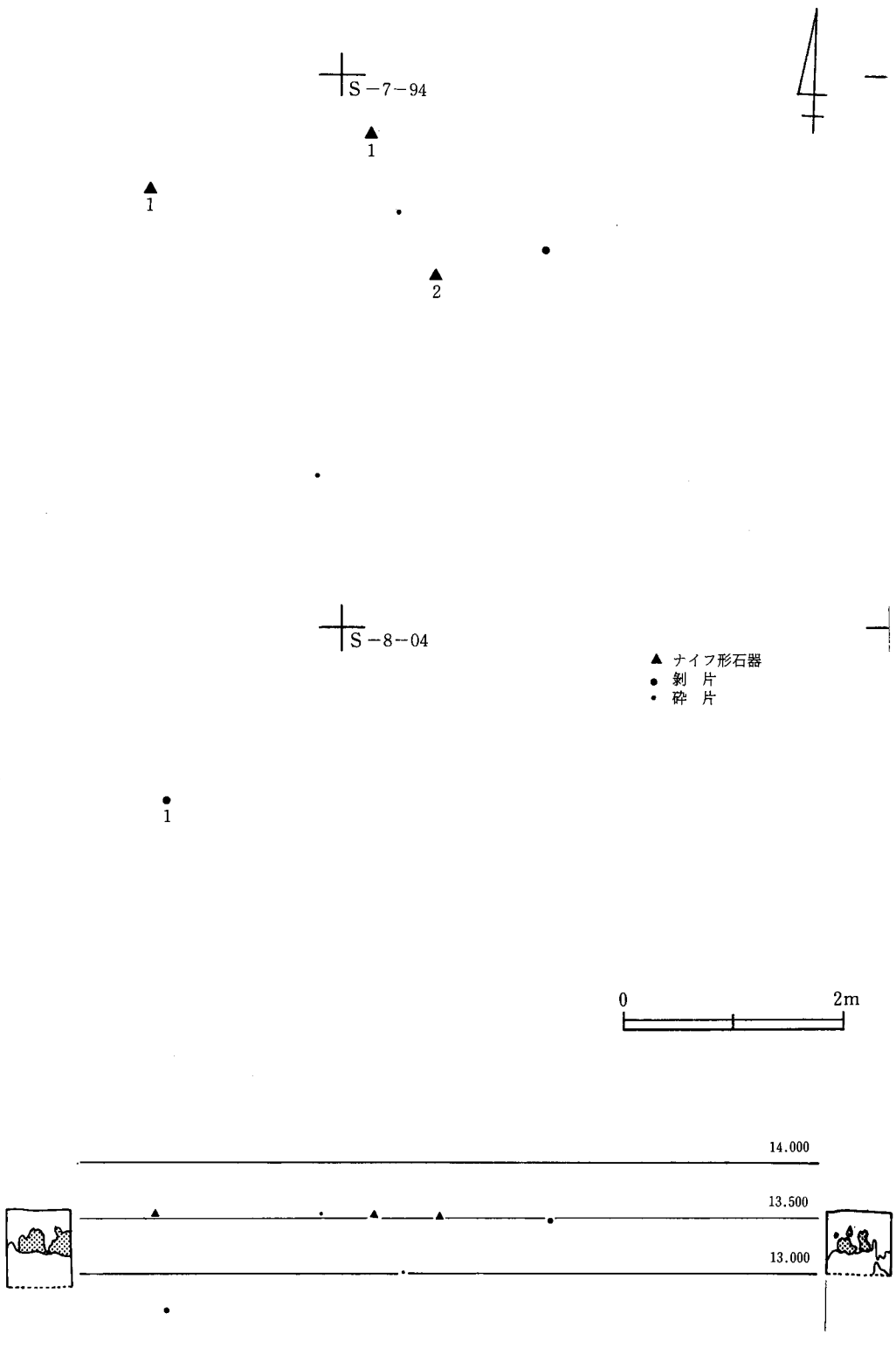


図82　第39ブロック遺物出土状況図

は2次加工のある剝片である。加撃点付近で分断された幅広な剝片を素材として先端部の上方に部分的に2次加工が施されている。石錐の可能性も考えられる。

母岩別資料・接合資料　石材は3種、母岩別資料は8母岩を識別し得た。各母岩とも数量的には1点ずつあり、バラツキがあることは否めない。接合資料はない。

まとめ　数量的に少なく、母岩別資料にまとまりを欠くとともに接合資料がない。性格不明のブロックである。

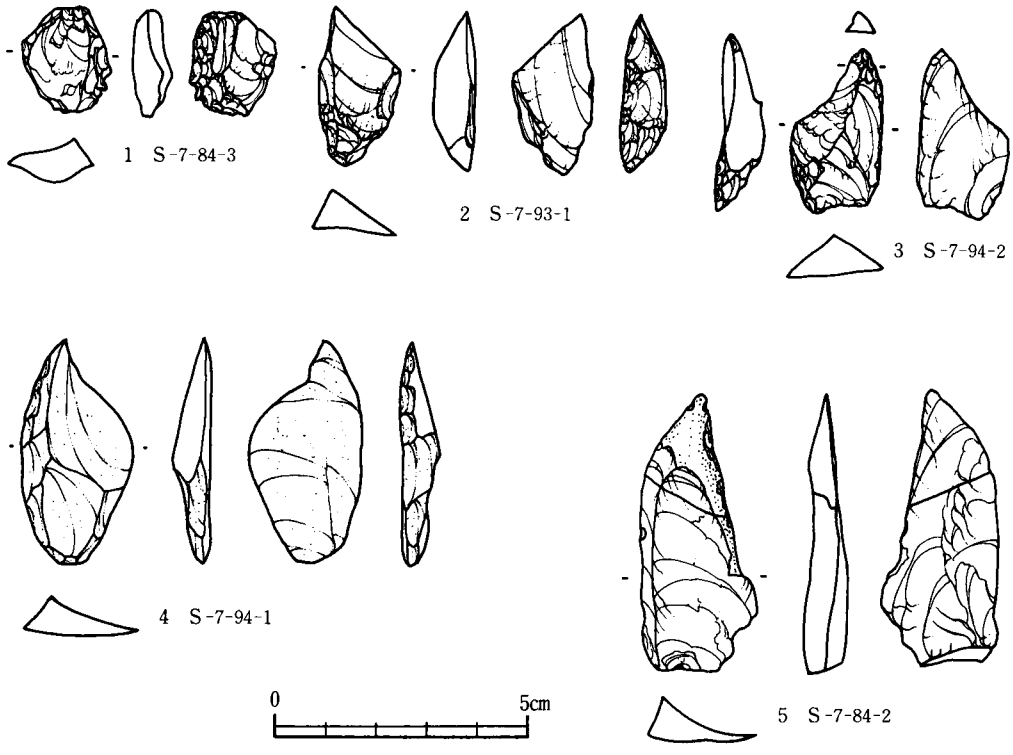


図83　第39ブロック出土遺物実測図

表114　第39ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材
1	S-7-93-1	ナイフ形石器	3.1	1.7	0.8	35°	3.1	2	二側辺加工	無	無	無	—	無	珪質頁岩
2	S-7-94-1	ナイフ形石器	4.4	2.2	0.7	35°	5.3	4	二側辺加工	無	無	無	—	不明	頁岩
3	S-7-94-2	ナイフ形石器	3.2	1.8	0.8	50°	3.4	3	二側辺加工	無	無	無	—	無	珪質頁岩
4	S-7-84-3	ピエス・エスキーユ	2.0	1.7	0.8	80° 70°	2.5	1	上下両端 左右両端	—	無	無	—	無	メノウ
5	S-7-84-2	二次加工ある剝片	5.4	2.3	0.9	45°	5.8	5	一側辺加工	無	有	無	—	無	頁岩

32. 第43ブロック（図84、85、図版9－2、16、表115～118）

出土状況　ソフトローム下部よりVI層にかけて出土している。ソフトローム下部の石器群とVI層出土の石器群とに二分できる可能性も考えられる。しかしながら、石器群の様相や平面分布より区分する根拠はみられず、ここでは便宜的に一つのブロックとしてとりあつかった。最大レベル差60cmで平面形は、6.9m×4.0mとなっている。

出土遺物　総計32点出土した。石器組成は削器1点、2次加工のある剝片1点、剝片22点、砕片3点、石核3点となっている。1は削器である。黒曜石の板状

表115　第43ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		珪質頁岩		頁岩		安山岩		チャート		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
角錐状石器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
木葉形尖頭器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
削片	－	－	－	－	2	22.2	－	－	－	－	2	6.3
石錐	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
掻器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
削器	1	50.0	－	－	－	－	－	－	－	－	1	3.1
ピエス・エスキーユ	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
彫刻刀形石器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
二次加工ある剝片	－	－	－	－	－	－	1	12.5	－	－	1	3.1
使用痕ある剝片	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
石斧	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
剝片	1	50.0	8	66.7	5	55.6	7	87.5	1	100	22	68.7
砕片	－	－	1	8.3	2	22.2	－	－	－	－	3	9.4
石核	－	－	3	25.0	－	－	－	－	－	－	3	9.4
台石	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
敲石	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
計	2	6.3	12	37.5	9	28.1	8	25.0	1	3.1	32	100
礫片	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－

表116　第43ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 / 器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	削片	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	敲石	計
珪質頁岩 1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	1
珪質頁岩 2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	2
珪質頁岩 3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	2	－	4
珪質頁岩 4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	1	1	－	3
珪質頁岩 5	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	1
頁岩 1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	1	－	－	－	2
頁岩 2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	1
頁岩 3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	1
頁岩 4	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	2	1	－	－	5
頁岩 5	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	1
チャート 1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	1
黒曜石 1	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1	－	－	－	2
安山岩 1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	7	－	－	－	7
計	－	－	－	2	－	－	1	－	－	1	－	－	22	2	3	－	31

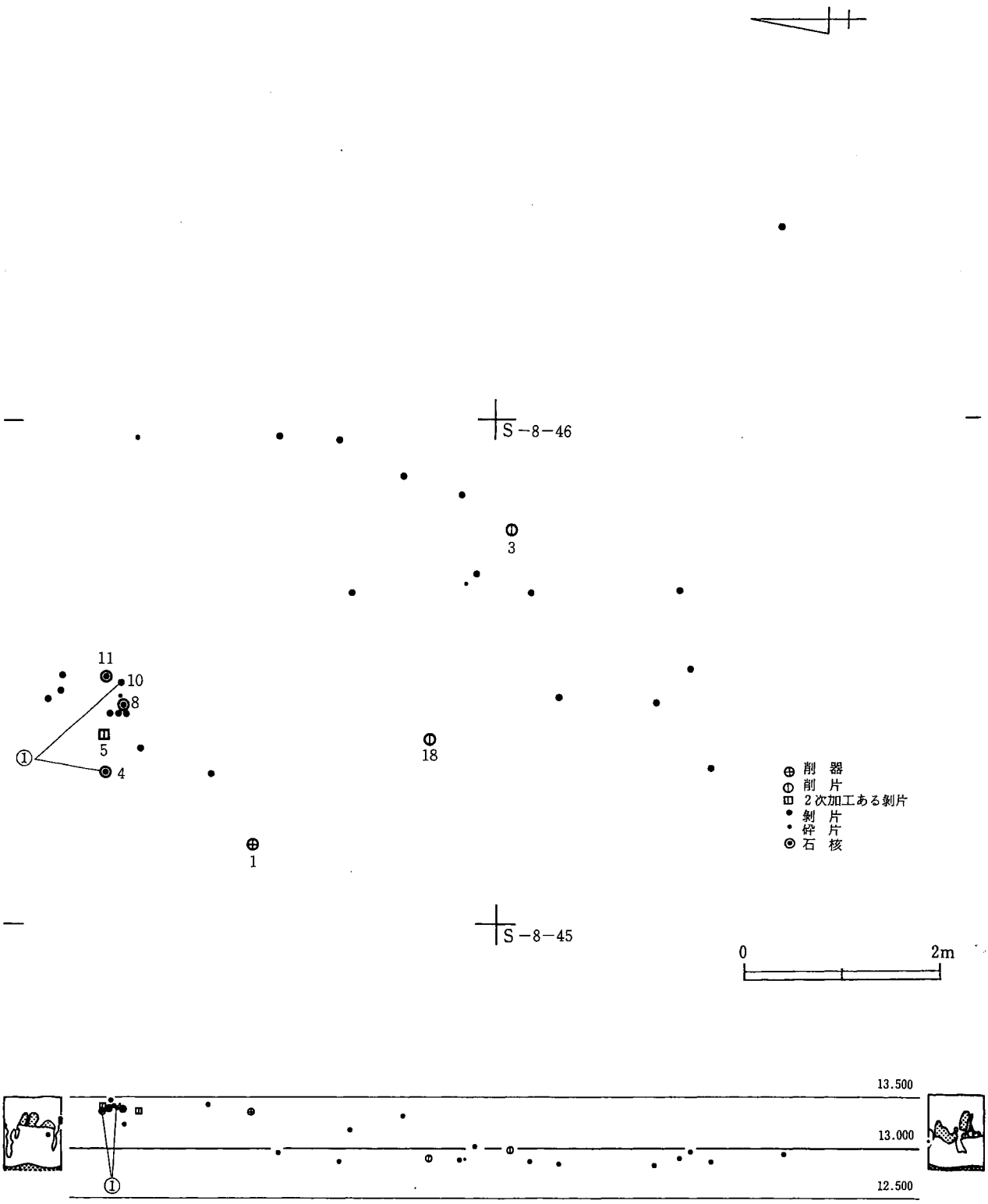


図84　第43ブロック遺物出土状況図

の角礫材として左面では上端部は折断後細かな調整が施され、側面は比較的大形の剝離面が残存している。右面は、左側辺部に急角度な2次加工、右側辺上端部に平坦な剝離面が一枚観察される。2は石核である。珪質頁岩の円礫を原材としており、最低限2回の加撃転移が施されている。そして最終的には上方の平坦な加撃面より2面の剝離面が残存している。3は、全体の形状が三稜形を呈する石核である。加撃面転移が3回以上行われたことが観察される。剝離面の形状より、横長に近い幅広な剝片が生産されたことが窺われる。なお、横長剝片が1点接合している。4も3と同様に、三稜形を呈する石核である。3とは同一母岩である。加撃面転移の痕跡も同様に3回以上みられる。剝片は不定形のものが多くみられる他、削片が3点存在する。

母岩別資料・接合資料　石材は5種類あり、一方母岩別資料は13母岩存在した。母岩別資料は剝片、砕片によって構成されている資料が多いが、珪質頁岩4については、石核と剝片およ

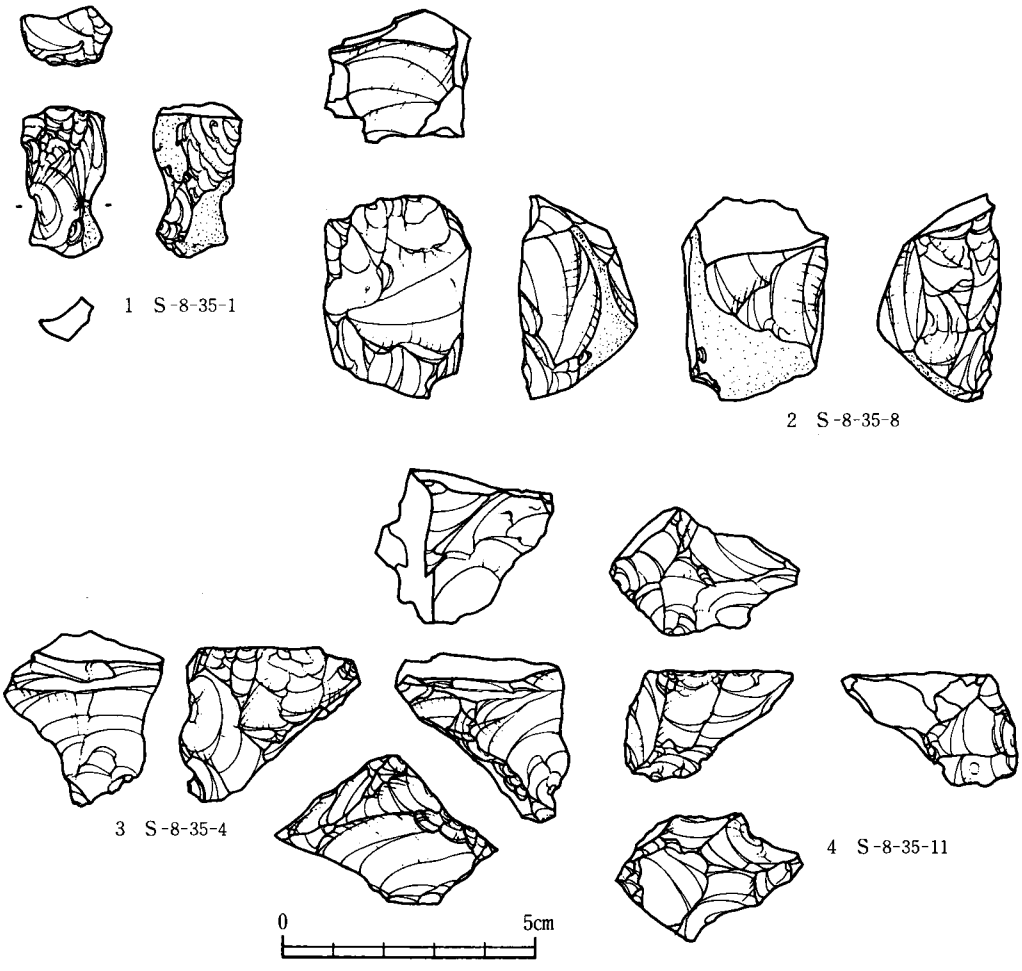


図85　第43ブロック出土遺物実測図

び、砕片の組合せになっている。剥片はいずれも横長剥片で縦長のものはみられない。接合資料は、3の石核と剥片との接合資料である。特に図示しなかったが、剥片生産のほぼ最終的な段階を示している。石核が3点みられるが母岩別資料の検討によれば、いずれも生産された剥片は1～2点である。生産された剥片は他の地点には見られず、多数の剥片が遺跡外へ搬出されたことが考えられる。

まとめ　数量が少ない割に母岩別資料の母岩数が多く、また石核が多い。また、利器は削器1点のみであり、総じて剥片生産を反映するブロックと言えよう。

表117　第43ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内　訳	内　容	数量
1	珪質頁岩3	剥片1 石核1	S-8-35-10(剥片)→S-8-35-4(石核)	2

表118　第43ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器　種	大きさ cm			刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石　材
			長さ	幅	厚										
1	S-8-35-1	削　器	2.8	1.8	1.0	50°	4.8	1	二側辺加工	有	無	無	—	無	黒曜石
2	S-8-35-5	二次加工ある剥片	3.6	2.0	1.1	80°	7.8	—	一側辺加工	有	無	無	—	無	頁　岩
3	S-8-35-4	石　核	2.7	3.1	2.6	—	16.6	3	—	—	有	無	—	—	珪質頁岩
4	S-8-35-8	石　核	4.0	2.7	3.0	—	29.9	2	—	—	有	無	—	—	珪質頁岩
5	S-8-35-11	石　核	1.1	2.5	3.8	—	9.9	4	—	—	有	無	—	—	珪質頁岩

33. 第45ブロック（図86、87、図版9－3、16、表119～121）

出土状況　ハードローム上部よりVI層上部にかけて出土し、ほぼ水平に堆積しており、最大レベル差は約10cmとなっている。平面分布は径4.7m×1.0mの範囲にあり、散在の傾向にある。

出土遺物　総計4点出土した。石器組成は極めて単純で切り出し形のナイフ形石器3点、および剥片1点となっている。1～3はナイフ形石器である。1は横長に近い剥片を素材として、

表119　第45ブロック母岩別資料石器組成表

器種／母岩	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	敲石	計
黒曜石1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
黒曜石2	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
黒曜石その他	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
計	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	3

表120　第45ブロック出土
石器組成表

石材 / 器種	黒曜石 数量	黒曜石 %	計 数量	計 %
ナイフ形石器	3	75	3	75
角錐状石器	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—
削片	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—
削器	—	—	—	—
ピエス・エスキーユ	—	—	—	—
彫刻刀形石器	—	—	—	—
二次加工ある剝片	—	—	—	—
使用痕ある剝片	—	—	—	—
石斧	—	—	—	—
剝片	1	25	1	25
砕片	—	—	—	—
石核	—	—	—	—
台石	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—
計	4	100	4	100
礫片	—	—	—	—

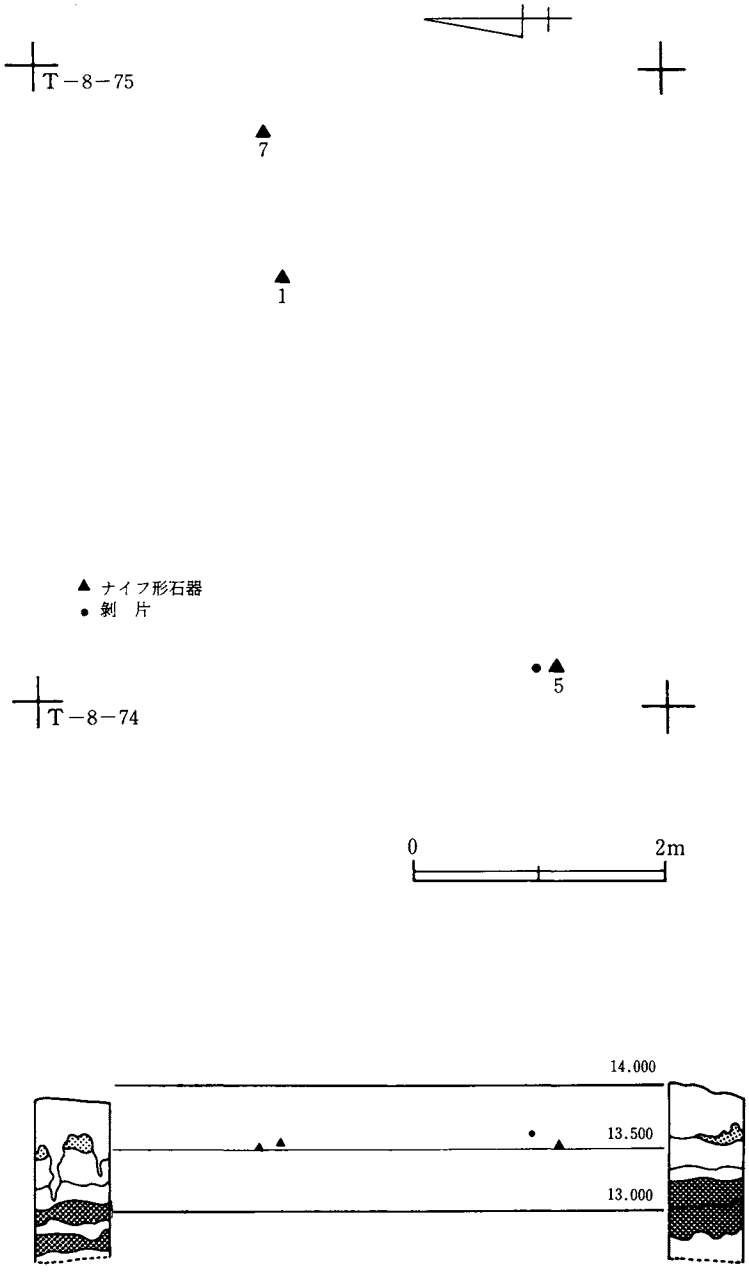


図86　第45ブロック遺物出土状況図

表121　第45ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材
1	T-8-74-1	ナイフ形石器	5.9	2.3	1.5	50°	15.9	2	二側辺加工	有	無	無	—	有	黒曜石
2	T-8-74-7	ナイフ形石器	7.6	3.8	1.5	40°	33.3	3	二側辺加工	無	無	有	刃部	有	黒曜石
3	T-8-74-5	ナイフ形石器	3.0	1.5	0.7	35°	2.8	1	一側辺加工	無	無	無	—	有	黒曜石

1側辺加工を施してある。刃部には顕著な刃こぼれが観察される。2は2側辺加工および、裏面加工が施されており、刃つぶし加工は急角度で広範囲である。3は大形の横長剝片を素材とし、2側辺加工で、全体の形状を切り出し形に整形してある。刃部には刃こぼれがみられる。

母岩別資料・接合資料　石材は1種、母岩は2母岩以上となっている。石材は黒曜石に限定されるが、母岩は爽雑物をほとんど含まず良質なもの(黒曜石1)、爽雑物を大量に含むもの(黒曜石2)などがある。

まとめ　本ブロックでは利器として巨大な切り出し形ナイフが出土しており、剝片、砕片、石核などを含まず利器を主体としている。3は切り出し形ナイフとしては本邦でも最大級のものであろう。

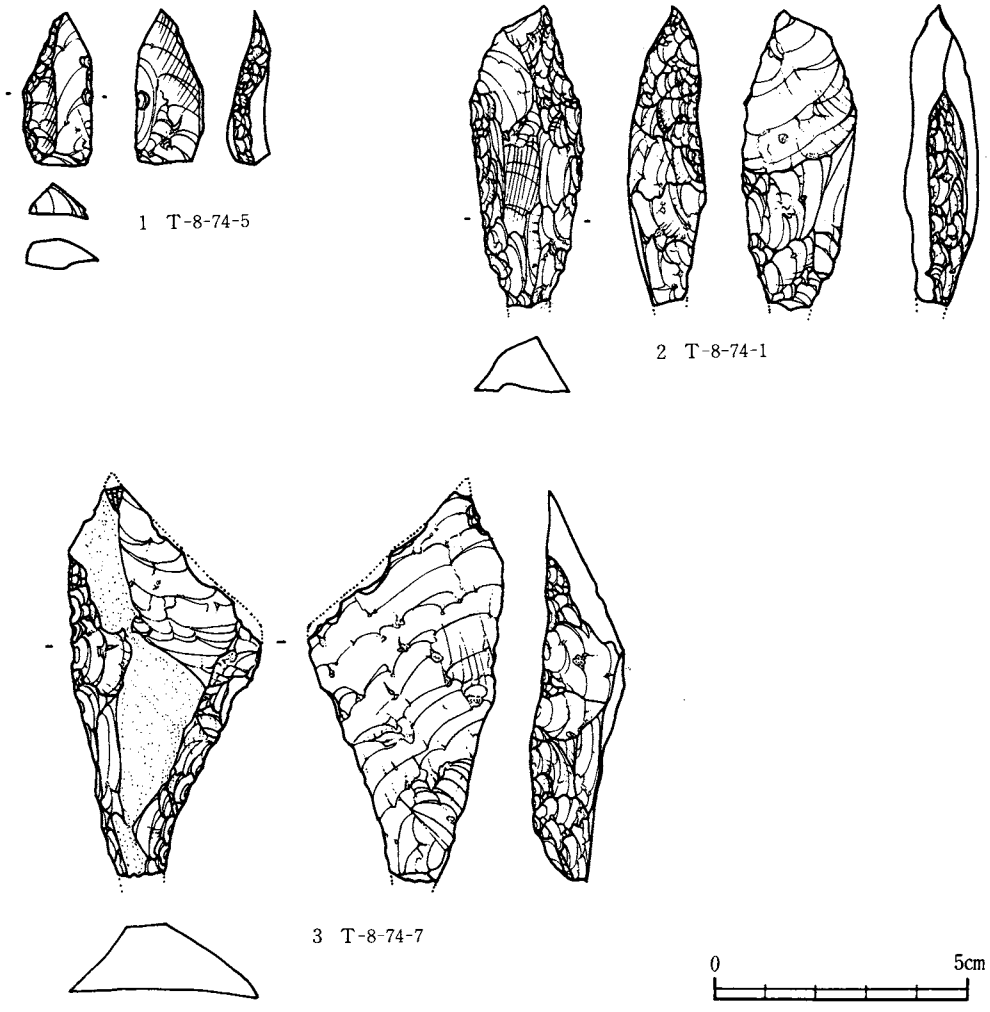


図87　第45ブロック出土遺物実測図

34. 第51ブロック（図88、89、図版16、表122～124）

出土状況　ソフトローム上部よりハードローム上面にかけて出土した。最大レベル差約 40 cm

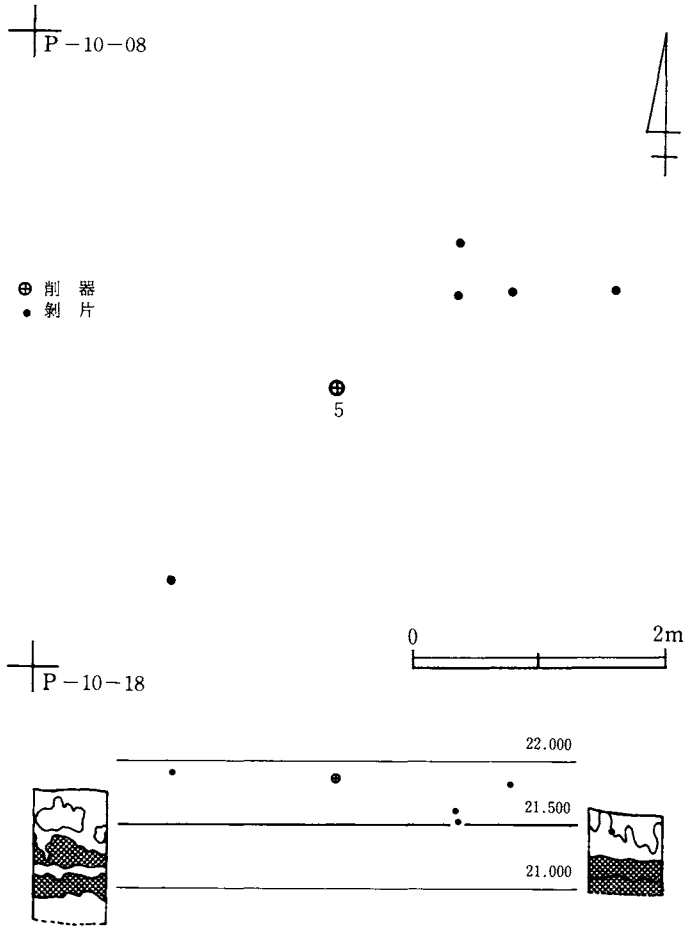


図88　第51ブロック遺物出土状況図

表122　第51ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	敲石	計
頁岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	3
安山岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
メノウ 1	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	—	—	—	2
計	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	5	—	—	—	6

表123　第51ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材
1	P-10-08-5	削器	4.9	4.0	1.5	60° 80°	29.1	1	基部一側辺加工	有	無	有	先端	無	メノウ

で、平面分布は径4.3m×1.2mとなっており、全体に密度は希薄である。

出土遺物　総計6点出土した。石器組成は、削器1点、剝片5点と単純であり、また、数量的に保証されていない。1は削器である。石材はメノウの大形でぶ厚い剝片を素材として、1側辺に2次加工が存在する。

母岩別資料・接合資料　石材は3種、母岩も同様に3種識別できたが数量的に少なく、内容的評価はできない。接合資料はない。

まとめ　全体として石器群の数量が少ないため検討に堪えない。

表124　第51ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	頁岩		メノウ		安山岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	−	−	−	−	−	−	−	−
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−	−	−
削片	−	−	−	−	−	−	−	−
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−	−	−
削器	−	−	1	50.0	−	−	1	16.7
ピエス・エスキーユ	−	−	−	−	−	−	−	−
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−
使用痕ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−
剝片	3	100	1	50.0	1	100	5	83.3
砕片	−	−	−	−	−	−	−	−
石核	−	−	−	−	−	−	−	−
台石	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	−	−	−	−
計	3	50	2	33.3	1	16.7	6	100
礫片	−	−	−	−	−	−	−	−

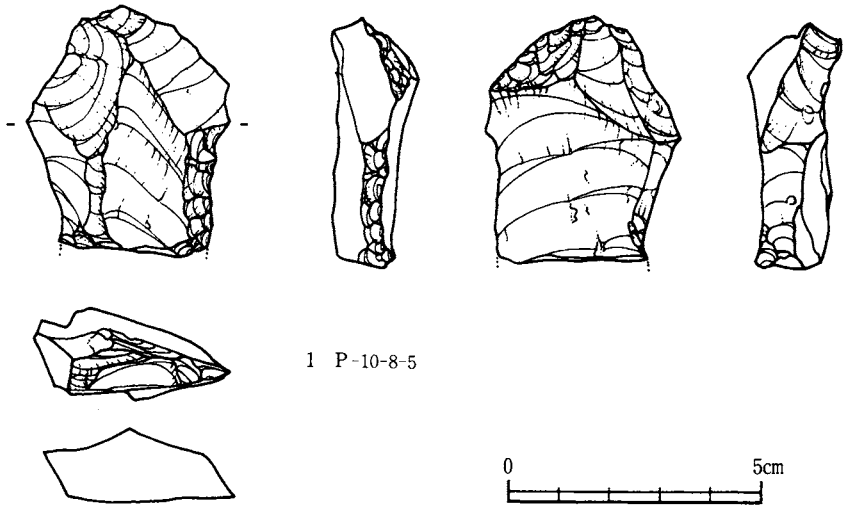


図89　第51ブロック出土遺物実測図

35. 第55ブロック（図90、91、図版10—1、16、表125～128）

出土状況　ハードローム上部からVI層にかけて出土している。最大レベル差約40cmで、平面分布は4.5m×1.8mとなっており、小規模かつ希薄である。

出土遺物　総計12点出土した。石器組成はピエス・エスキーユ1点、剥片11点と単純である。1はピエス・エスキーユで、上下両端に細かな刃つぶれがある。2、3は幅広な剥片である。本ブロックでは大形であり、石器の素材として良好である。

母岩別資料・接合資料　石材はメノウのみである。一方、母岩別資料は1種のみ識別し得たにとどまる。接合資料は1例あり、剥片の欠損資料である。

まとめ　本ブロックは、利器がピエス・エスキーユ1点のみにとどまり、他はいずれも剥片、砕片である。剥片生産を反映したブロックと言えよう。なお、石材がメノウのみである点が興味深い。

表125　第55ブロック出土石器組成表

石材／器種	メノウ 数量	メノウ %	計 数量	計 %
ナイフ形石器	—	—	—	—
角錐状石器	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—
削片	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—
削器	—	—	—	—
ピエス・エスキーユ	1	8.3	1	8.3
彫刻刀形石器	—	—	—	—
二次加工ある剥片	—	—	—	—
使用痕ある剥片	—	—	—	—
石斧	—	—	—	—
剥片	11	91.7	11	91.7
砕片	—	—	—	—
石核	—	—	—	—
台石	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—
計	12	100	12	100
礫片	—	—	—	—

表126　第55ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	敲石	計
メノウ 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	2
計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	2

表127　第55ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	メノウ 1	剥片2	T-7-42-3(剥片)＋T-7-42-5(剥片)	2

表128　第55ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材
1	T-7-42-4	ピエス・エスキーユ	2.5	2.4	0.7	60°/55°	4.6	1	上下両端	—	無	無	—	無	メノウ

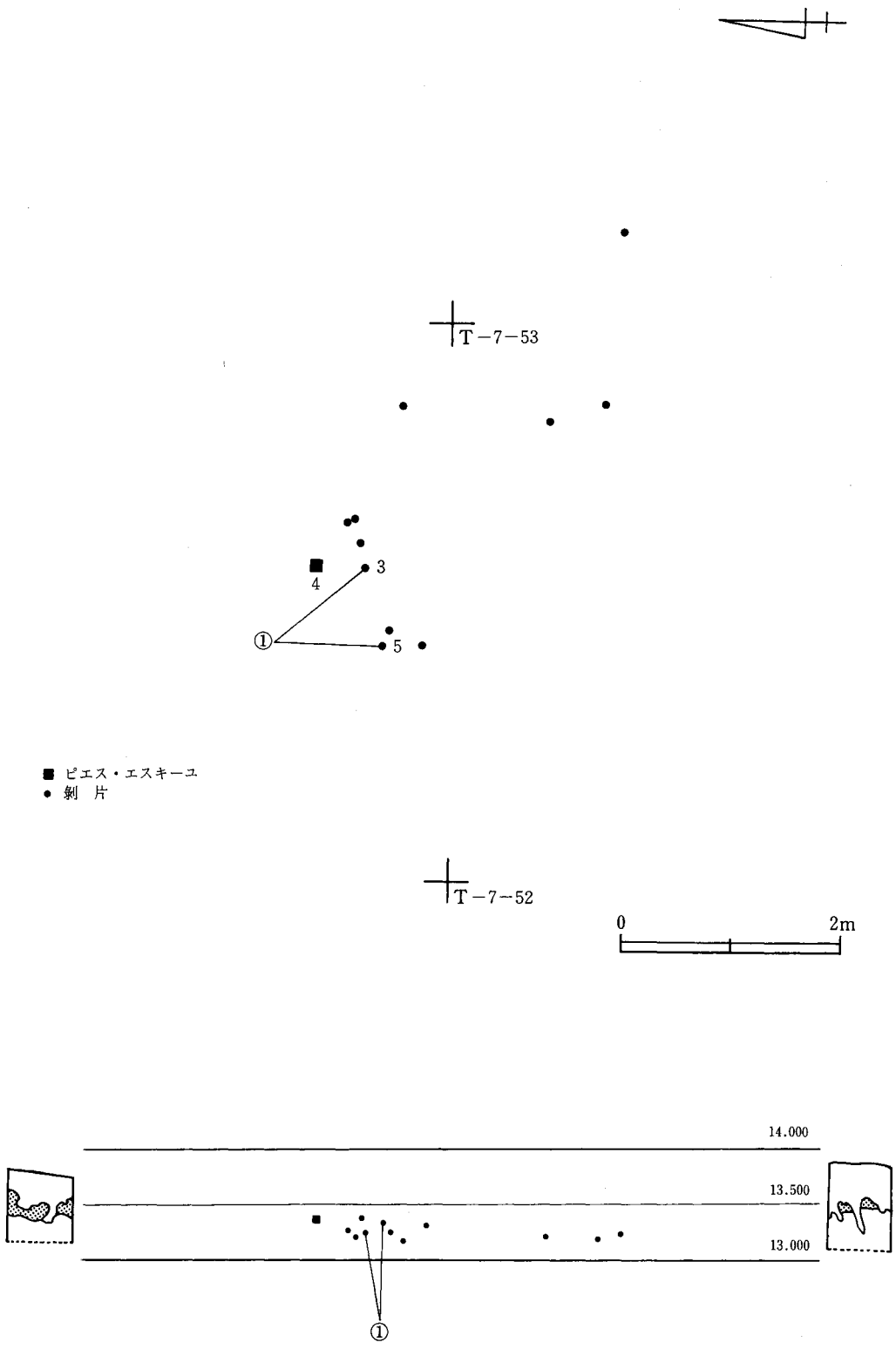


図90　第55ブロック遺物出土状況図

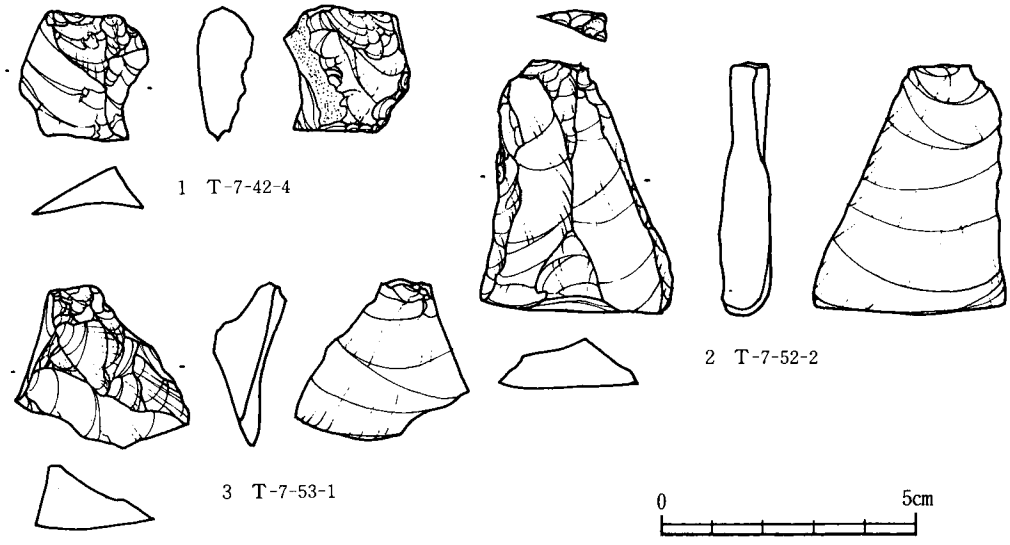


図91 第55ブロック出土遺物実測図

36. 第62ブロック（図92、93、図版10—2、16、表129～132）

出土状況 ソフトローム上部よりⅦa層上面に至る層準より出土しており、きわめてレベル差が大きい。最大レベル差、約80cmで、相対的にハードローム上部より出土する傾向にある。

表129 第62ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	礫片	計
頁岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	3
頁岩 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
頁岩 3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	—	—	—	6
頁岩 4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
安山岩 1	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	11	—	—	—	13
安山岩 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1
不明 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	2
不明 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	3
不明 3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1
砂岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
計	2	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	22	—	6	1	32

表130 第62ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	安山岩 1	剥片3	P-6-12-9(剥片)＋P-6-12-6(剥片)＋P-6-01-13(剥片)	3
2	不明 1	礫片2	P-6-01-3(礫片)＋P-6-01-2(礫片)	2

平面分布は径8.7m×4.5mとなっており、きわだった集中部分はない。また、器種ごとの分布に偏りはみられない。

出土遺物　総計39点出土した。内訳は礫片12点、ナイフ形石器２点、２次加工のある剝片２点、剝片22点、砕片１点、敲石１点となっている。１、３はナイフ形石器である。いずれも横長剝片を素材としており、切り出し形に整形されている。２は敲石である。上端に敲打痕が存在する。礫片は加熱された破砕礫である。

表131　第62ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	安山岩		頁岩		凝灰岩		珪質頁岩		砂岩		不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	2	11.8	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	7.4
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ピエス・エスキーユ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剝片	1	5.9	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	3.7
使用痕ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
剝片	13	76.4	7	100	1	100	1	100	−	−	−	−	22	81.5
砕片	1	5.9	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	3.7
石核	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
台石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	−	−	−	−	1	100	−	−	1	3.7
計	17	63.0	7	25.9	1	3.7	1	3.7	1	3.7	−	−	27	100
礫片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	12	−	12	−

表132　第62ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材
1	P-6-11-6	ナイフ形石器	3.1	1.6	0.6	50°	2.8	1	二側辺加工	無	無	無	−	有	安山岩
2	P-6-12-2	ナイフ形石器	3.5	1.7	0.8	55°	4.8	3	二側辺加工	無	無	無	−	無	安山岩
3	P-6-12-3	二次加工ある剝片	4.1	6.1	1.4	55°	22.2	−	部分加工	無	有	有	半割	無	安山岩
4	P-6-11-10	敲石	7.3	3.1	2.5	−	81.2	2	−	−	−	無	−	長軸一端	砂岩

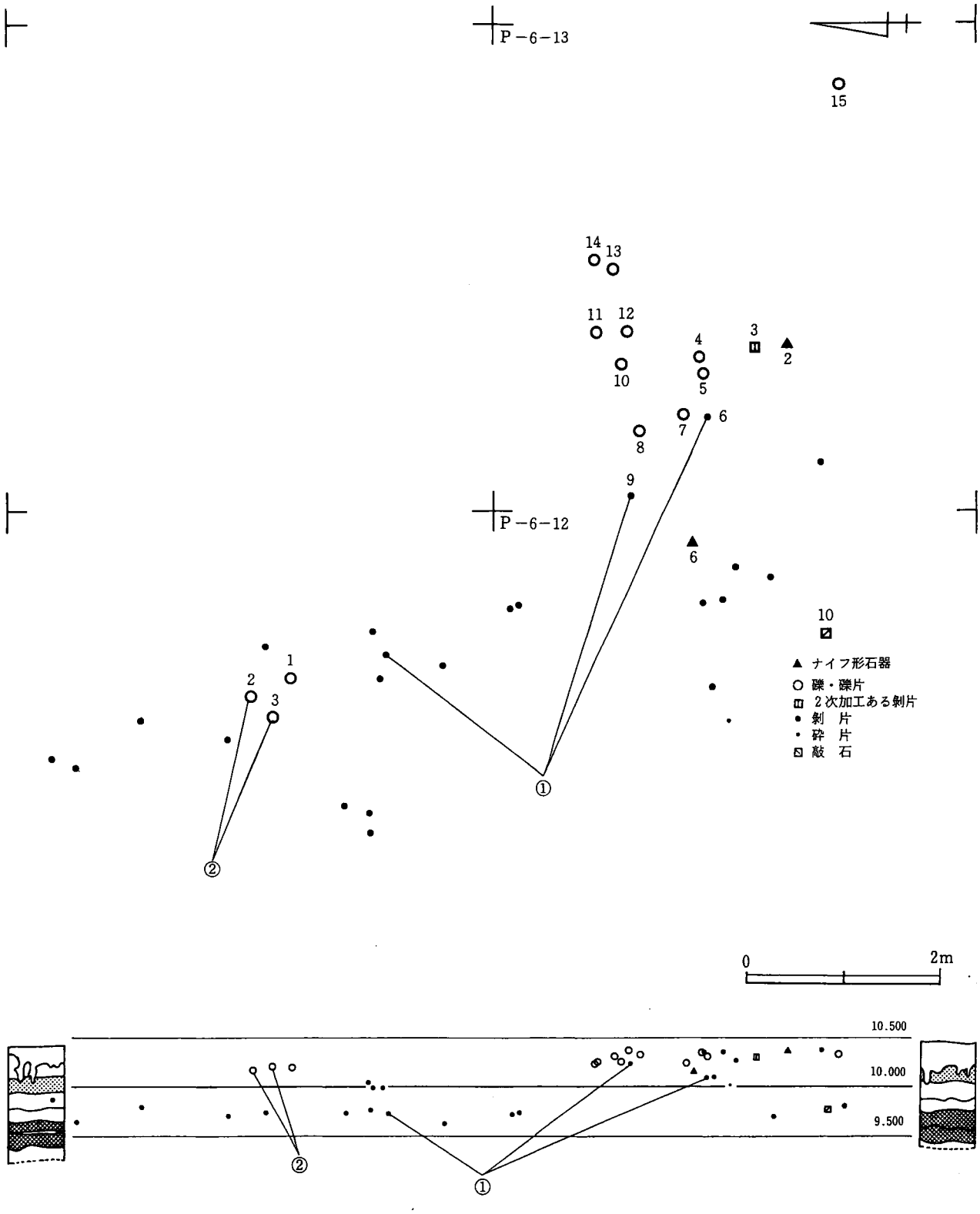


図92　第62ブロック遺物出土状況図

母岩別資料・接合資料　石材は不明3種を含めると6種、母岩別資料は10種識別し得た。特に技術的基盤を反映した母岩別資料はなく、剥片、砕片を組成とした資料が中心となっている。接合資料は2例ある。内訳は剥片の欠損資料1、礫片どうしの接合例1となっている。

まとめ　本ブロックは基本的には剥片生産を反映しているものと思われるが、石核が欠落しており、詳細は不明である。ただし、母岩別資料安山岩1がナイフ形石器と剥片11点の器種構成を持ち、石器の素材と完成品の組合せとして注目すべき資料となっている。

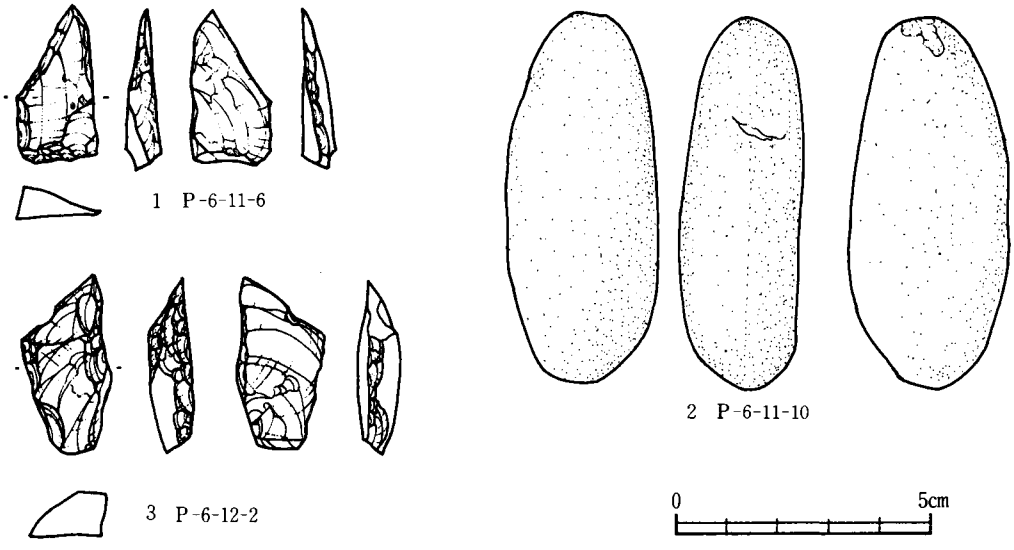


図93　第62ブロック出土遺物実測図

37. 第2文化層ブロック外出土資料（図94～96、図版10－3、16、17、表133、134）

ブロックを形成せず、単発的な出土状況を呈する。総計48点出土した。石器組成はナイフ形石器5点、削片1点、掻器1点、ピエス・エスキーユ1点、2次加工のある剥片2点、使用痕のある剥片3点、礫片1点、剥片27点、砕片4点、石核2点、台石1点となっている。この他礫片が7点出土した。

1～5はナイフ形石器である。1は2側辺加工、2は1側辺加工となっており、いずれも横長剥片を素材としているものと推察される。3は縦長剥片を素材として2側辺加工、刃つぶし加工は急角度であり、ほぼ90度に近い使用痕が刃部に連続的に観察される。4は横長剥片を素材として2側辺加工、5は縦長剥片を素材としており、基部周辺と先端部に刃つぶし加工が観察される。6は掻器である。上端は折断面であり、全周の約3分の2に調整が施されており、形態的には円盤形掻器に近い。7はピエス・エスキーユである。上下両端に微細なつぶれが観察される。8は2次加工のある剥片である。横長剥片を素材としている。9、10は石核である。

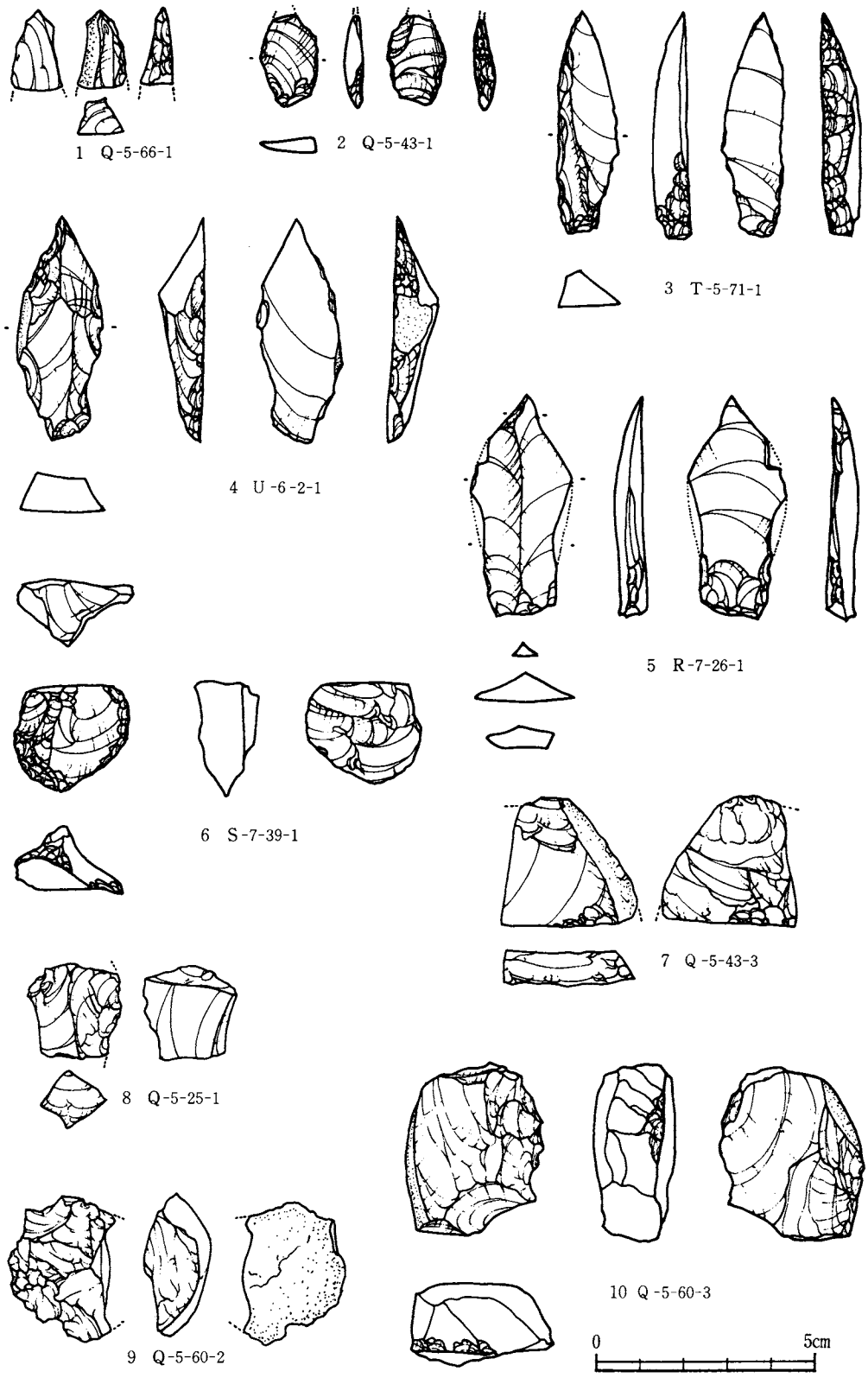


図94　第2文化層ブロック外出土遺物実測図(1)

いずれも安山岩を石材として、9は片面、10は両面に求心的な剝離面が観察される。なお、10については細かな2次加工があり、削器の可能性も考えられる。11は礫器である。上端および、下端に剝離面があり、下端が両刃の作業縁となっている。なお表裏に広範囲に敲打痕があり、台石として使用されたことが観察される。12は台石である。片面の全面および、裏面の一部に敲打痕が存在する。線状痕に近似した痕跡も観察される。

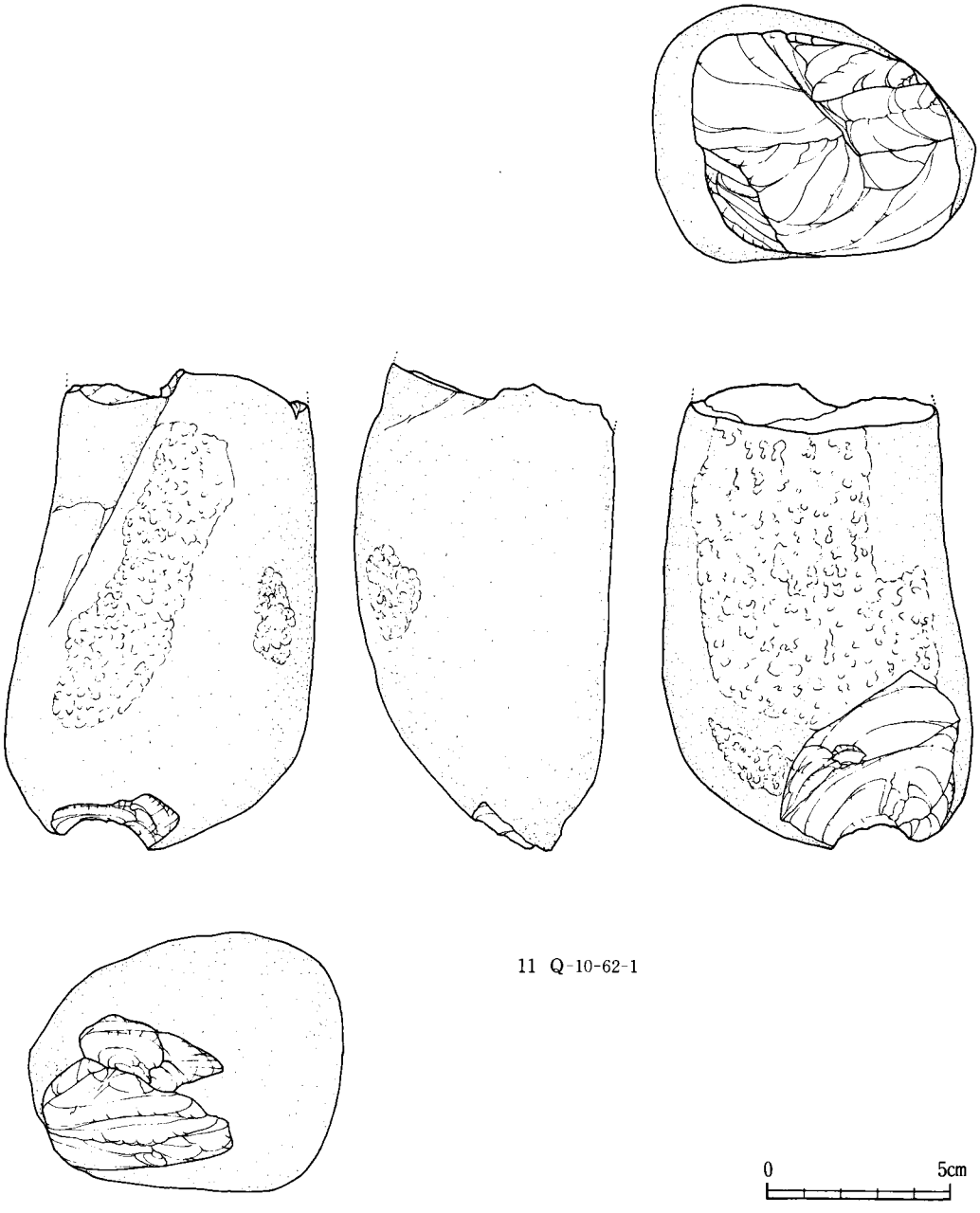


図95　第2文化層ブロック外出土遺物実測図(2)

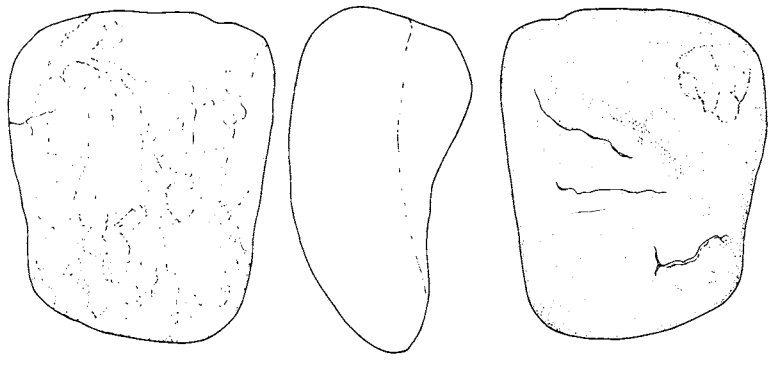


図96　第2文化層ブロック外出土遺物実測図(3)

表133　第2文化層ブロック外出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		頁岩		珪質頁岩		安山岩		砂岩		チャート		メノウ		粘板岩		玄武岩		流紋岩		不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	2	–	2	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	5	–
角錐状石器	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
木葉形尖頭器	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
削片	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
石錐	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
掻器	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
削器	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ピエス・エスキーユ	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
彫刻刀形石器	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
二次加工ある剝片	1	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	2	–
使用痕ある剝片	1	–	–	–	–	–	–	–	1	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	3	–
礫器	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
剝片	8	–	5	–	4	–	5	–	1	–	3	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	27	–
砕片	3	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	4	–
石核	–	–	–	–	–	–	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	2	–
台石	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	1	–
敲石	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
計	15	31.2	10	20.8	8	16.7	7	14.6	2	4.2	4	8.3	1	2.1	1	2.1	–	–	–	–	–	–	48	–
礫片	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	1	–	1	–	4	–	7	–

表134　第2文化層ブロック外出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm			刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材	その他
			長さ	幅	厚											
1	T-5-71-1	ナイフ形石器	5.2	1.5	0.8	40°	6.1	3	二側辺加工	有	無	無	—	有	珪質頁岩	
2	Q-5-43-1	ナイフ形石器	2.1	1.3	0.4	35°	1.2	2	二側辺加工	無	無	有	先端	無	黒曜石	
3	Q-5-66-1	ナイフ形石器	1.8	1.1	0.7	60°	1.1	1	一側辺加工？	無	無	有	基部	無	黒曜石	
4	U-6-2-1	ナイフ形石器	5.1	1.9	1.0	50°	9.1	4	二側辺加工	無	無	無	—	無	頁岩	
5	R-7-26-1	ナイフ形石器	5.0	2.2	0.6	30°	6.5	5	先端、基部二側辺	有	有	有	二側辺	無	頁岩	
6	S-7-39-1	掻器	2.4	2.7	1.5	65°	6.6	6	基部のぞき全周	無	無	無	—	無	珪質頁岩	
7	Q-5-43-3	ピエス・エスキーユ	2.8	3.1	0.8	75° 90°	11.3	7	上下両端	—	無	無	—	—	頁岩	
8	Q-5-25-1	二次加工ある剝片	2.2	2.2	1.2	55°	5.3	8	—	—	—	有	断片	—	黒曜石	
9	T-5-40-1	使用痕ある剝片	3.4	2.0	0.4	30°	2.7	—	—	無	無	有	基部	一側辺	チャート	
10	Q-5-56-1	使用痕ある剝片	3.1	2.0	0.9	60°	4.0	—	—	無	無	有	断片	—	黒曜石	
11	P-12-20-1	使用痕ある剝片	1.1	2.5	0.4	55°	1.0	—	—	無	無	有	先端	先端部	黒曜石	
12	T-8-6-1	使用痕ある剝片	4.3	1.3	0.6	45° 45°	3.3	—	—	無	有	無	—	二側辺	砂岩	
13	Q-5-60-2	石核	3.1	2.3	1.5	—	12.0	9	—	—	有	有	半割	無	安山岩	
14	Q-5-60-3	石核	3.8	3.3	1.9	—	29.6	10	—	—	有	無	—	無	安山岩	
15	Q-10-62-1	礫器	11.7	8.2	7.0	80°	1180.0	11	長軸一端	—	—	有	半割	無	頁岩	敲打痕あり
16	Q-5-43-2	台石	12.7	10.5	6.8	—	1410.0	12	—	—	—	無	—	片面	粘板岩	

38. 第2文化層のまとめ

ソフトローム下部からハードローム上部にかけてみられる石器群である。大きく礫群と石器群のまとまりとして区分し得る。礫群第9ブロック、17ブロックが該当するが、いずれも小規模である。一方石器群のまとまりは第1～6ブロックおよび、第11～16、18ブロックの2つの大きなグループが存在し、前者は石材をチャート、後者は黒曜石を使用している。他はいずれも自己完結的である。

全体として石器組成は横長剝片を素材とした切り出し形ナイフを基調としており、これに石錐、削器、掻器、2次加工のある剝片、使用痕のある剝片、ピエス・エスキーユが加わり、多岐である。

第4節　第　3　文　化　層

1．第30ブロック（図版97、98、図版17－1、25、表135～138）

出土状況　VI層より出土している。レベル差約15cmで、小規模なブロックであり、平面形も2m×0.6mの極めて小規模な範囲に分布している。分布の傾向について、特に検討に価する点はない。

出土遺物　総計6点出土した。石器組成はナイフ形石器1点、剥片5点となっている。1はナイフ形石器である。上下両端が尖り気味で全体としては尖頭器様である。素材は縦長剥片であり、2側辺加工、打瘤を除去し、側面を直線的に整えてある。剥片は、縦長剥片2点の他、

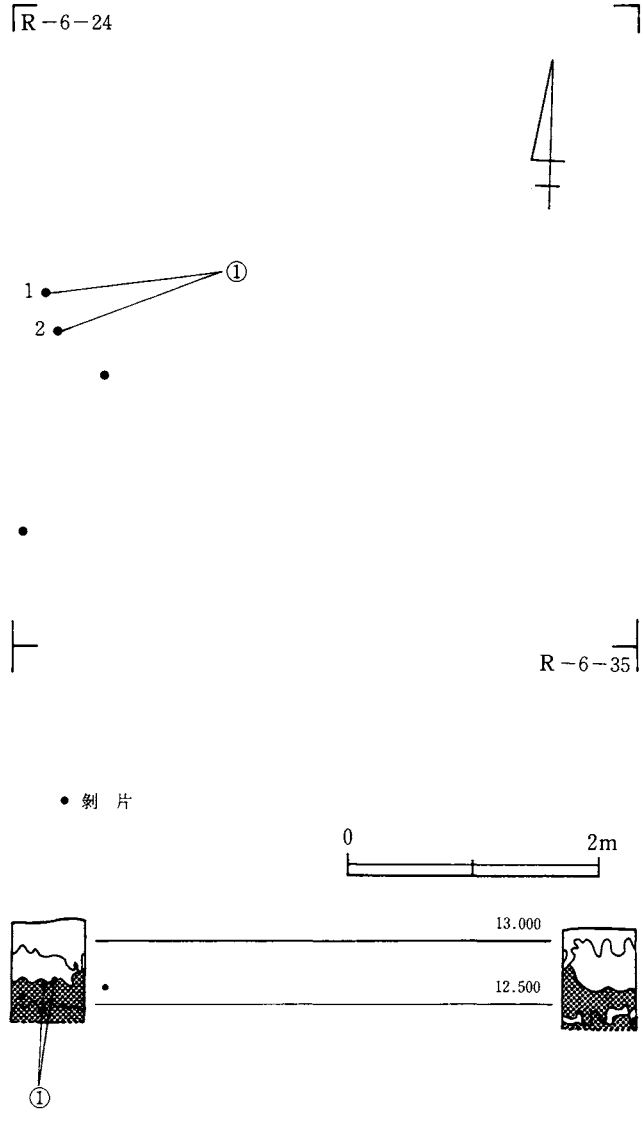


図97　第30ブロック遺物出土状況図

横長剥片となっている。いずれも欠損している。なお、ナイフ形石器は本ブロック付近の表面採集資料のため分布図には地点を記入していない。

技術的特徴　ナイフ形石器については縦長剥片というより石刃技法に近い剥片生産基盤が予想される。また、これに関係していると思われる縦長剥片が3点みられるが、平坦打面であり、ナイフ形石器と同様に単設打面の石刃石核が背後に存在したものと考えられる。

母岩別資料・接合資料　母岩別資料は、石材2種、5母岩を識別し得た。珪質頁岩をのぞき個々の母岩が

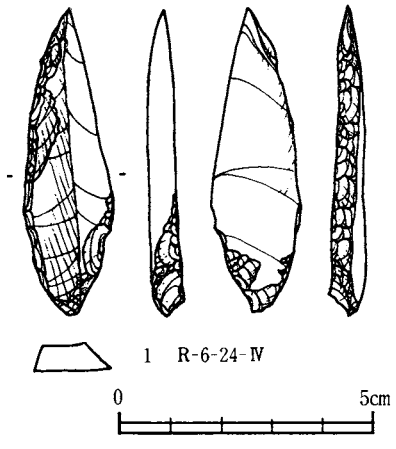


図98　第30ブロック出土遺物実測図

表135　第30ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	珪質頁岩		安山岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	1	25.0	—	—	1	16.7
角錐状石器	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—
削片	—	—	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—	—	—
削器	—	—	—	—	—	—
ピエス・エスキーユ	—	—	—	—	—	—
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剥片	—	—	—	—	—	—
使用痕ある剥片	—	—	—	—	—	—
石斧	—	—	—	—	—	—
剥片	3	75.0	2	100	5	83.3
砕片	—	—	—	—	—	—
石核	—	—	—	—	—	—
台石	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—
計	4	66.7	2	33.3	6	100
礫片	—	—	—	—	—	—

表136　第30ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 \ 器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	敲石	計
珪質頁岩　1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2
珪質頁岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	2
珪質頁岩　3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
安山岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
安山岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
計	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	—	—	—	6

表137　第30ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	珪質頁岩2	剥片2	R-6-24-2(剥片)＋R-6-24-1(剥片)(同時に剥落)	2

単独資料であり、数量に比べ母岩は多岐にわたり、まとまりがない。接合資料は珪質頁岩の縦長剝片どうしの接合資料が1例ある。加撃点より加撃方向にむかって分断されており、本来はこの2つを接合した状態の剝片が剝離されたはずであるが、偶発的に加撃時に1枚の剝片が2つに分割されたものと推察される。

まとめ　単純な器種構成を有し、母岩についてもまとまりがないが、剝片生産基盤に石刃技法が予測される。

表138　第30ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材
1	R-6-24-IV	ナイフ形石器	5.9	1.7	0.6	40°	6.5	1	二側辺加工	有	無	無	—	無	珪質頁岩

2．第31ブロック（図99、100、図版17—2、18—1、25、表139～142）

出土状況　VI層よりVII層にかけて分布しており、特にVII a層に集中している。最大レベル差約70cmで、平面形は東西方向に帯状の広がりを見せ、長径約5.4m、短径約2.6mとなっている。器種ごとの分布の偏りは特にみられず、また、ブロック内の石器群の密度もほぼ均一である。

表139　第31ブロック出土石器組成表

器種＼石材	珪質頁岩 数量	%	安山岩 数量	%	玄武岩 数量	%	頁岩 数量	%	砂岩 数量	%	不明 数量	%	計 数量	%
ナイフ形石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
角錐状石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
削片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
掻器	1	10.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	2.9
削器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ピエス・エスキーユ	1	10.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	2.9
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剝片	1	10.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	2.9
使用痕ある剝片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
石斧	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
剝片	4	40.0	4	66.6	8	88.9	4	44.4	1	100	—	—	21	60.0
砕片	3	30.0	1	16.7	1	11.1	5	55.6	—	—	—	—	10	28.6
石核	—	—	1	16.7	—	—	—	—	—	—	—	—	1	2.9
台石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	10	28.6	6	17.1	9	25.7	9	25.7	1	2.9	—	—	35	100
礫片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1	—

出土遺物　総計36点を出土した。石器組成は掻石1点、ピエス・エスキーユ1点、ナイフ形石器1点、剝片21点、砕片10点、石核1点、礫片1点となっている。1はナイフ形石器である。2側辺加工となっており、先端部は欠損している。2は

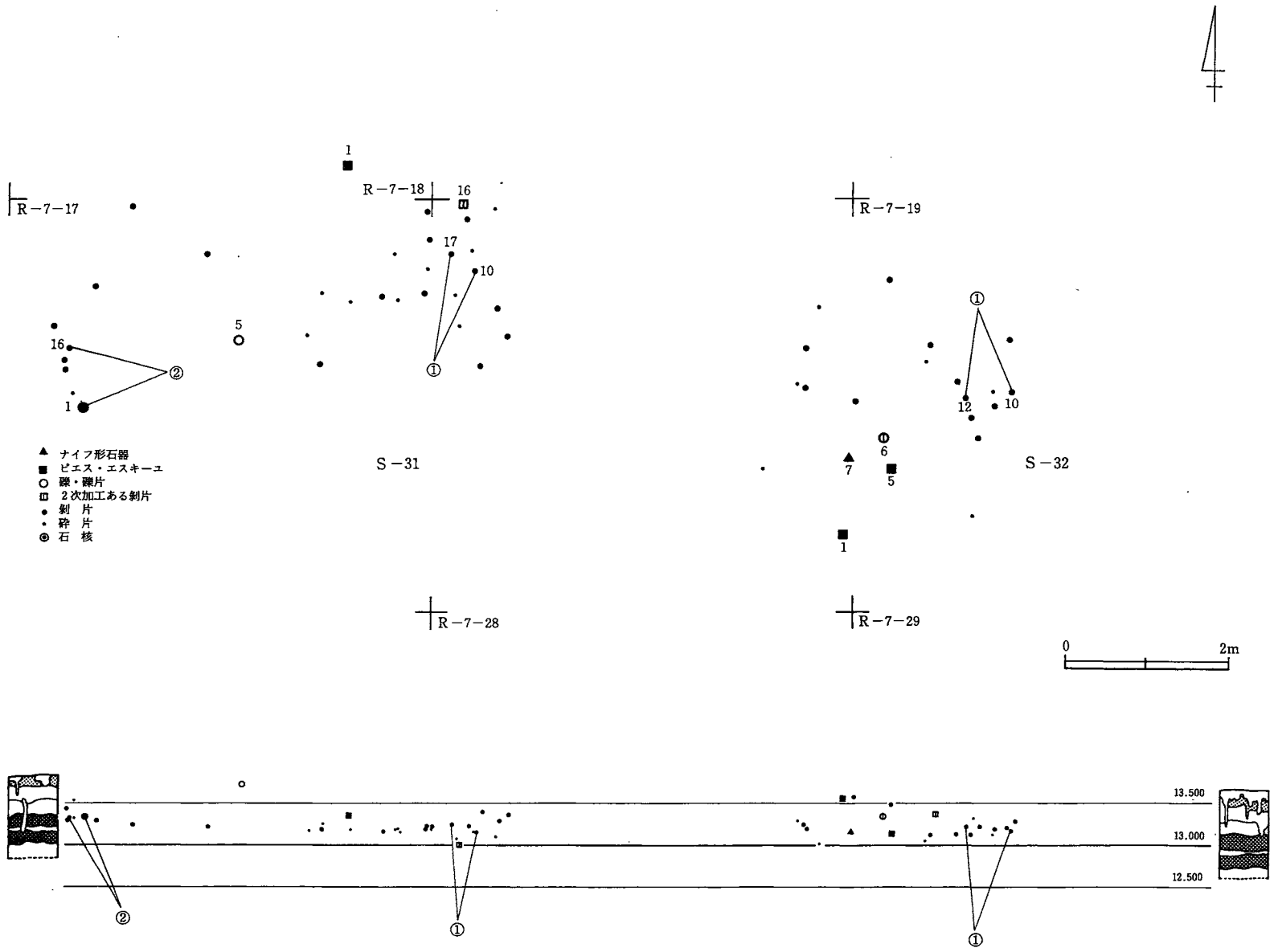


図99　第31・32ブロック遺物出土状況図

ピエス・エスキーユである。両極加撃により上下両端に細かなつぶれが存在する。3は縦長剝片を素材とした掻器、一端に急角度な調整がみられる。4は大形の縦長剝片である。

技術的特徴　平坦打面を有する縦長剝片の一群と、横長剝片の一群とがある。

母岩別資料・接合資料　石材は6種、母岩別資料は10種みられる。本ブロックは数量の割合には、多様な母岩で構成されている。その特徴としては掻器が単独資料、また、ナイフ形石器が2点（頁岩1）となっており、ピエス・エスキーユを除く利器が、ほぼ単独資料に近い数量を示している点の他は、他のブロックと同様に剝片、砕片を中心とした母岩別資料の石器組成となっている。したがって、いずれも石器製作工程の一部を反映しているにすぎない。接合資料は2例あり、一つは剝片どうしの接合例、いま一つは石核と剝片との接合例となっている。

まとめ　本ブロックはⅦa層段階の剝片生産基盤を背景とした石器群によって特徴づけられる。掻器、ナイフ形石器はいずれも縦長剝片を素材としていることが窺われる。また、図示し

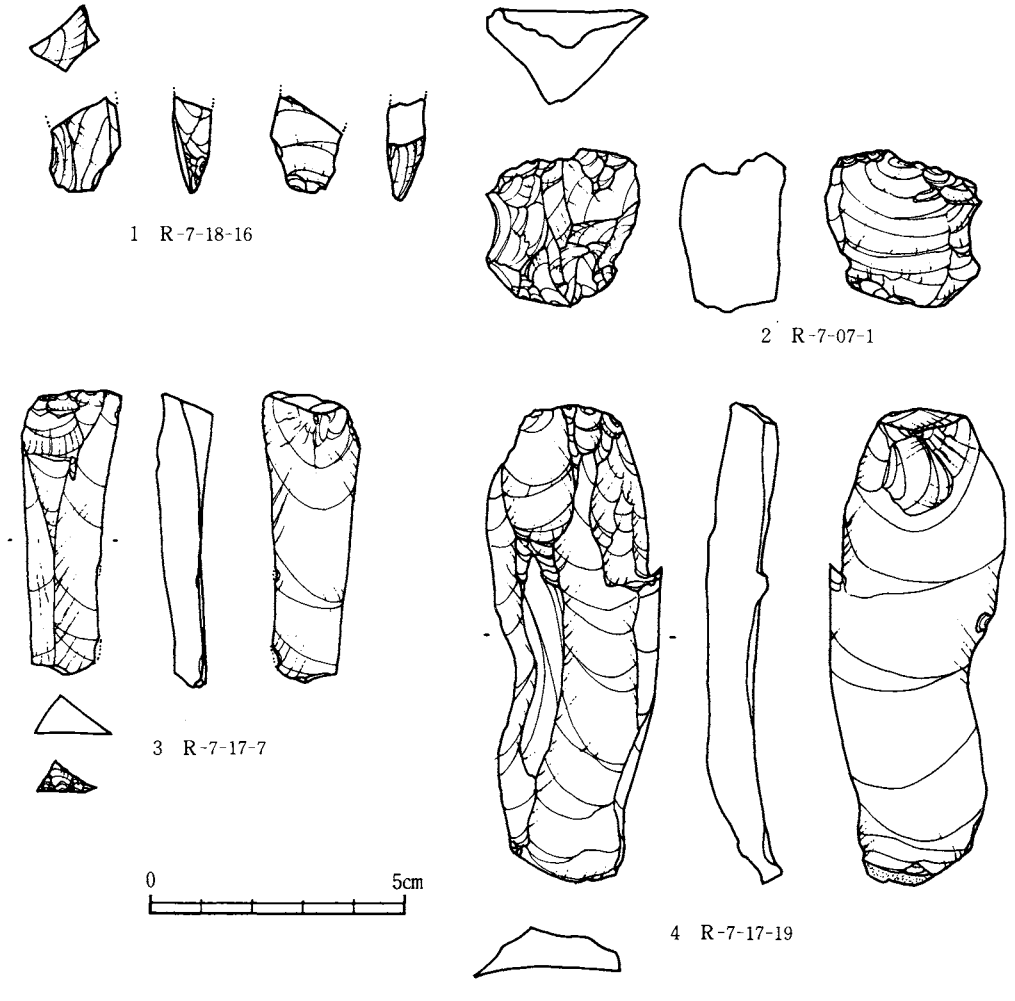


図100　第31ブロック出土遺物実測図

た大形の縦長剝片は、平坦な単設打面より生産されたと考えられる典型的な例である。

表140　第31ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	礫片	計
珪質頁岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	1	—	—	5
珪質頁岩　2	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1	2	—	1	4
頁　岩　1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	2
頁　岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
頁　岩　3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	4	—	—	5
頁　岩　4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
砂　岩　1	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
安山岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	—	1	—	6
玄武岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	1	—	—	8
不　明　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
計	1	—	—	—	—	1	—	1	—	—	—	—	20	8	1	2	34

表141　第31ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内　訳	内　容	数量
1	玄武岩　1	剝片2	R-7-18-17＋R-7-18-10	2
2	安山岩　1	剝片、石核	R-7-17-16→R-7-17-1	2

表142　第31ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器　種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石　材
1	R-7-17-7	掻　器	5.4	1.9	0.8	90°	8.9	3	先　端	無	有	無	—	無	砂　岩
2	R-7-07-1	ピエス・エスキーユ	2.9	3.2	1.8	90° 90°	15.3	2	上下両端	—	無	無	—	無	珪質頁岩
3	R-7-18-16	ナイフ形石器	1.8	1.3	0.8	75° 55°	1.7	1	二側辺加工	無	無	有	先端	無	珪質頁岩
4	R-7-17-1	石　核	4.2	7.7	3.1	—	95.0	—	—	—	有	無	—	—	安山岩

3．第32ブロック（図99、101、図版18—2、25、表143～146）

出土状況　第31ブロックの東側に隣接するほぼ同一規模のブロックである。V層より、Ⅶa層上面にかけて出土しており、特にⅦa層上面からの出土量が顕著である。最大レベル差約40cmで平面形は約3.1m×約3.0mとほぼ円形を呈し、分布密度は一定である。

出土遺物　総計24点出土した。石器組成はナイフ形石器1点、ピエス・エスキーユ2点、剝片14点、砕片6点となっている。1はナイフ形石器の先端部断片である。1側辺にみられる刃潰し加工は急角度である。2、3はピエス・エスキーユである。2は上下両端に両極加撃の痕

跡をとどめるのにとどまるが、3はその他に下縁部に2次加工、1側辺に樋状剝離面が1条観察される。剝片、砕片は不定形を呈する横長剝片がみられ、特に固有の特徴を有する例はみられない。なお多くは欠損している。

技術的特徴　本ブロックは利器（ナイフ形石器、ピエス・エスキーユ）の他には剝片、砕片が散発的にみられ、特に技術的な側面を窺わせる資料はない。

母岩別資料・接合資料　母岩は8母岩を識別し得た。その特徴としては利器では、ナイフ形石器が単独の母岩別資料であるのにもかかわらず、ピエス・エスキーユは削片をまじえており、それぞれ4点（頁岩1）、7点（玄武岩1）となっている。これはナイフ形石器は他のブロックより搬入されたことを想起させ、一方ピエス・エスキーユは、本ブロックで製作もしくは活用されたことを反映していると思われる。この他に剝片、砕片等の母岩別資料がみられるが特に量的な保証があるわけではなく、検討し得ない。

まとめ　利器としてピエス・エスキーユ、ナイフ形石器が出土しているが、ピエス・エスキーユは母岩別資料の結果、本ブロック内で製作、消費されたことが窺われる。

表143　第32ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	頁岩		玄武岩		安山岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	1	5.6	−	−	−	−	1	4.2
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−	−	−
削片	1	5.6	−	−	−	−	1	4.2
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−	−	−
削器	−	−	−	−	−	−	−	−
ピエス・エスキーユ	1	5.6	1	33.3	−	−	2	8.3
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−
使用痕ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−
剝片	9	50.0	2	66.7	3	100	14	58.3
砕片	6	33.3	−	−	−	−	6	25.0
石核	−	−	−	−	−	−	−	−
台石	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	−	−	−	−
計	18	75	3	12.5	3	12.5	24	100
礫片	−	−	−	−	−	−	−	−

表144　第32ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 / 器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	削片	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	敲石	計
頁岩 1	−	−	−	1	−	−	−	1	−	−	−	−	3	2	−	−	7
頁岩 2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1
頁岩 3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1
頁岩 4	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
頁岩 5	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	3	−	−	5
玄武岩 1	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	3	−	−	−	4
安山岩 1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1
安山岩 2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	2
計	1	−	−	1	−	−	−	2	−	−	−	−	13	5	−	−	22

表145　第32ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内　訳	内　容	数量
1	安山岩 2	剝片 2	R-7-19-10(剝片)＋R-7-19-12(剝片)	2

表146　第32ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器　種	大きさ cm			刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石　材
			長さ	幅	厚										
1	R-7-18-7	ナイフ形石器	1.5	1.0	0.4	—	0.2	1	一側辺加工？	—	—	有	断片	有	頁　岩
2	R-7-18-1	ピエス・エスキーユ	2.5	1.4	0.9	80° 80°	3.0	2	上下両端	—	無	無	—	無	頁　岩
3	R-7-19-5	ピエス・エスキーユ	3.7	3.0	1.1	50° 60°	11.9	3	上下両端	—	有	無	—	無	玄武岩

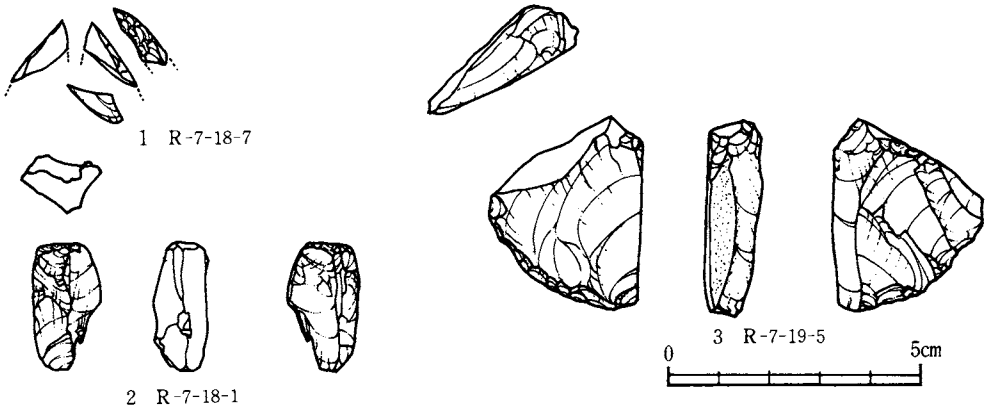


図101　第32ブロック出土遺物実測図

4．第33ブロック（図102、103、図版25、表147～150）

出土状況　ソフトロームよりⅦc層に至るまで出土しており、特にⅥ層下部（Ⅵ'層）よりⅦa層にかけて集中している。最大レベル差約 90 cm で、平面分布は約4.7m×約5.0mに広がっており、南側に集中度が高い。利器が少ないため特に器種ごとの分布の偏りは語れない。

出土遺物　総計76点出土した。石器組成はナイフ形石器１点、２次加工のある剝片１点、剝片34点、砕片40点となっている。１はナイフ形石器の先端部破片である。幅広な剝片を素材としており、１側辺に細かな刃潰し加工がみられる。刃部は部分的に欠損している。２は背面側に自然面を大きく残存させる剝片を素材とした２次加工のある剝片である。加工部位は、主要剝離面側上端にみられる。なお右側辺に樋状剝離面と思われる単一な剝離面がみられるが、２次加工によって加撃面が除去されており、彫刻刀形石器としての性格を有しているが、不明である。

技術的特徴　石器群は安山岩製の剝片、砕片を多量に出土しており、本ブロックを特徴づけ

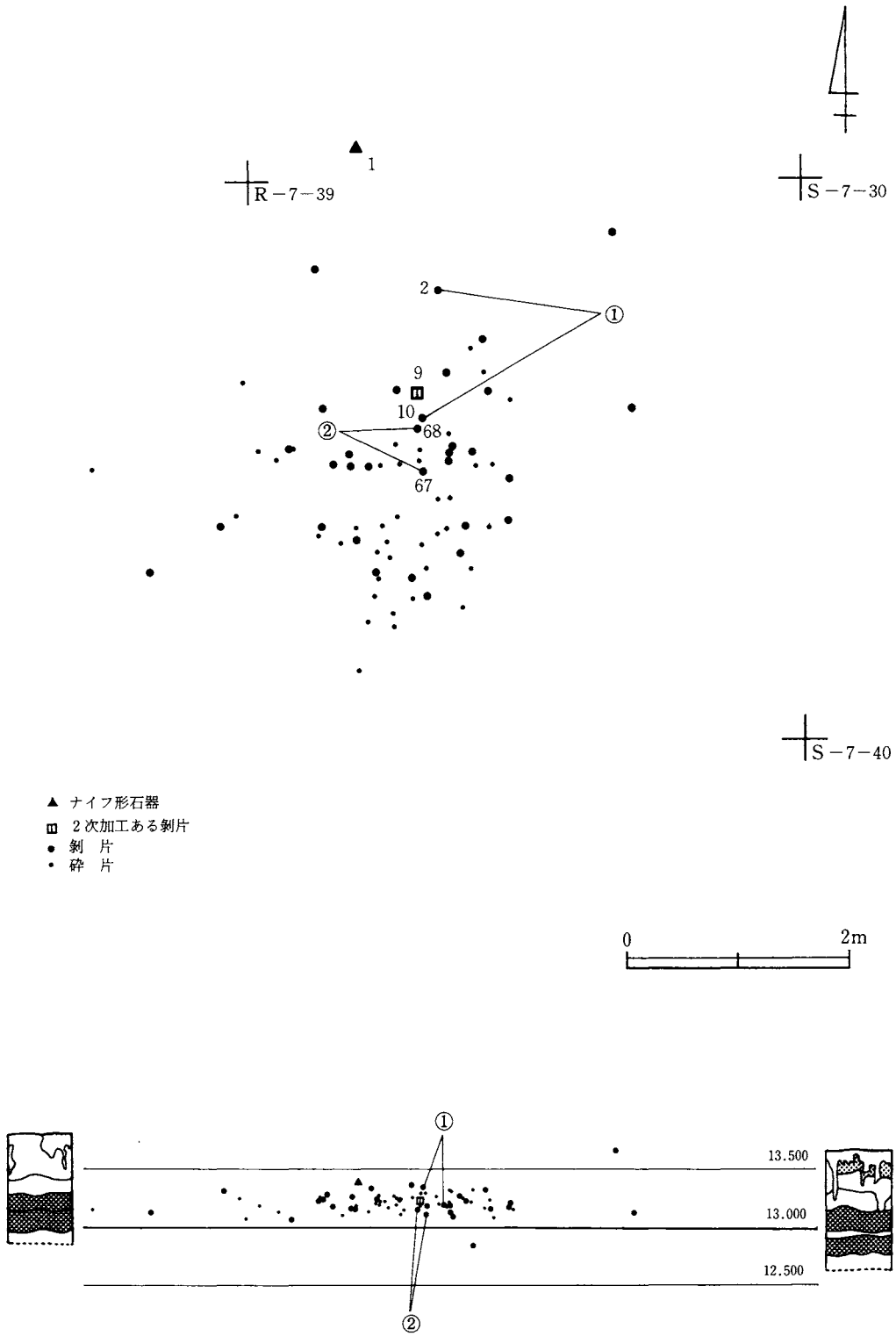


図102　第33ブロック遺物出土状況図

る遺物となっている。ただし、石核は皆無であり、また利器も2次加工のある剝片1点のみであるため、多くの情報は得られない。安山岩製の剝片、砕片はいずれも平坦な打面を有し、横長であり、背面側は主要剝離面側の加撃方向に対して、交差するような加撃方向の複数の剝離面によって構成されている。したがって、原石の周辺を順次移動して求心的に加撃して剝離する剝片生産技術がみとめられる。石核は円盤形石核か、もしくはそれに近い形態のものが予測される。安山岩以外の剝片についても同様の事実が観察される。

表147　第33ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		安山岩		頁岩		珪質頁岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	1	100	−	−	−	−	−	−	1	1.3
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ピエス・エスキーユ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剝片	−	−	1	1.5	−	−	−	−	1	1.3
使用痕ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
剝片	−	−	30	46.2	1	50.0	3	37.5	34	44.7
砕片	−	−	34	52.3	1	50.0	5	62.5	40	52.7
石核	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
台石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
計	1	1.3	65	85.5	2	2.7	8	10.5	76	100
礫片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−

母岩別資料・接合資料　石材は珪質頁岩、黒曜石、安山岩の3種である。母岩は7つの母岩に分かれるが、その中で安山岩1が大多数を占め全数量の80%におよぶ。しかしながら、その内容は剝片、砕片という2つの単純な器種によって占められ、前項のとおり、付近で剝片生産を主体とした石器製作が行われたことを反映している。一方、利器は、ナイフ形石器(黒曜石1)、2

表148　第33ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 \ 器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	敲石	計
珪質頁岩　1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	3	3	−	−	6
黒曜石　1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
安山岩　1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	24	31	−	−	55
安山岩　2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	1
安山岩　3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	2
安山岩　4	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1
安山岩　5	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	2
安山岩　6	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1
計	1	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	33	34	−	−	69

次加工のある剥片（安山岩２）とともに１母岩、１器種によって構成され、他より搬入されたことを窺わせる。

まとめ　母岩別資料安山岩１を主体としたブロックであるが、その中で、利器に異なった母岩がみられる点が特徴である。

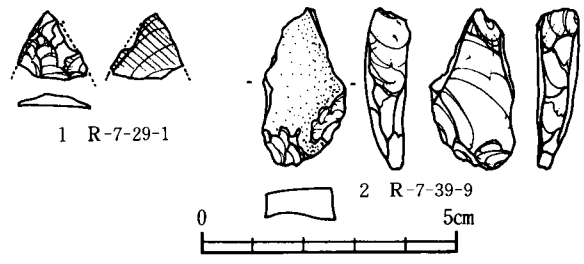


図103　第33ブロック出土遺物実測図

表149　第33ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内　訳	内　容	数量
1	安山岩１	剥片２	R-7-39-2(剥片)＋R-7-39-10(剥片)	2
2	安山岩１	剥片２	R-7-39-68(剥片)＋R-7-39-67(剥片)	2

表150　第33ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器　種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石　材
1	R-7-29-1	ナイフ形石器	1.4	1.3	0.3	20°	0.3	1	—	—	—	有	先端部破片	無	黒曜石
2	R-7-39-9	二次加工ある剥片	3.2	1.7	0.8	60°	4.6	2	一側辺加工	有	無	無	—	無	安山岩

5．第34ブロック（図104、105、図版25、表151～153）

出土状況　Ⅵ層よりⅦａ層上面にかけて分布しているが、最大レベル差約40cmで平面分布はまばらであり、径約7.6m×約4.3mの範囲に散漫に分布している。

表151　第34ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	敲石	計
珪質頁岩　1	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1
玄武岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
安山岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	2
頁　岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	2
計	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	4	1	—	—	6

表152　第34ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器　種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石　材
1	R-7-37-2	ピエス・エスキーユ	2.9	2.6	1.3	55° 80°	9.4	1	上下両端 一側辺加工	—	無	無	—	無	珪質頁岩

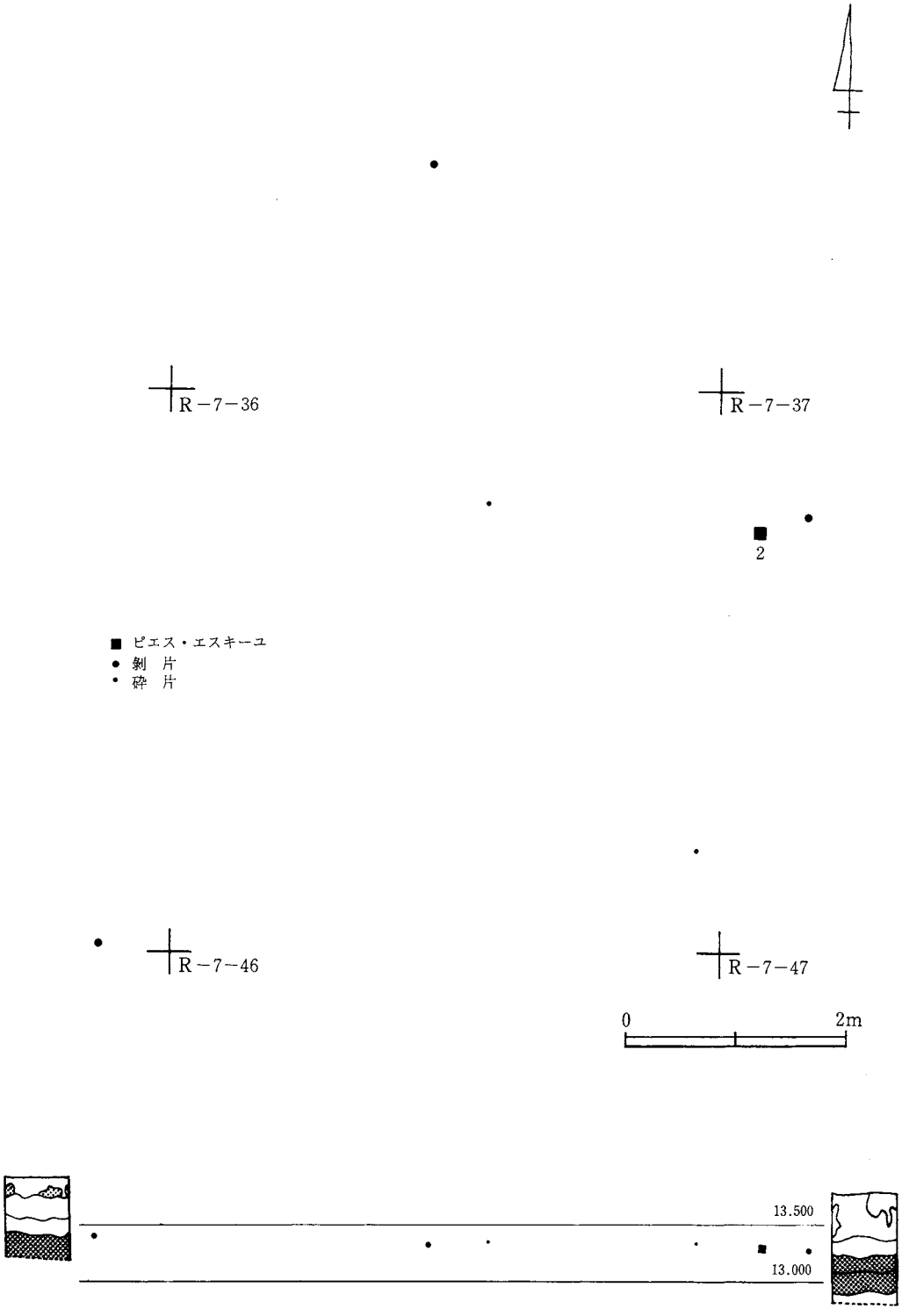


図104　第34ブロック遺物出土状況図

出土遺物　総計6点出土した。石器組成はピエス・エスキーユ1点、剝片4点、砕片1点となっている。1はピエス・エスキーユである。大形で幅広な剝片を素材としており、上下両端に微細な剝離面がみられ、1側辺には2次加工が存在する。石器の数量6点に対して石材は4種、母岩別資料は4種となっており、バラツキが大きい。したがって、特に検討するに堪えない。接合資料はない。

まとめ　総体的にブロックの内容を吟味するためには数量的な条件が揃っていない。

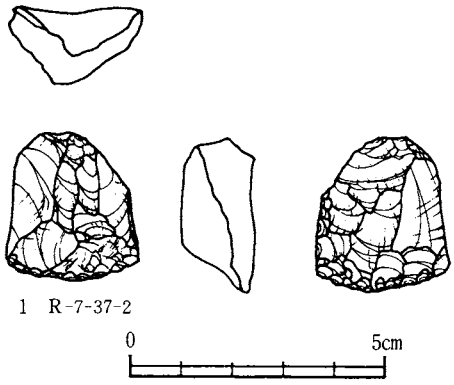


図105　第34ブロック出土遺物実測図

表153　第34ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	玄武岩		頁岩		安山岩		珪質頁岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ピエス・エスキーユ	−	−	−	−	−	−	1	100	1	16.7
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
使用痕ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
剝片	1	100	1	50.0	2	100	−	−	4	66.6
砕片	−	−	1	50.0	−	−	−	−	1	16.7
石核	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
台石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
計	1	16.7	2	33.3	2	33.3	1	16.7	6	100
礫片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−

6．第35ブロック（図106、107、図版18—3、表154〜156）

出土状況　V層下面よりⅦa層上面にかけて出土しており、レベル差が顕著である。最大レベル差が約 70 cm あり、集中部分でも約 50 cm となっている。平面形は4.1m×5.6mほどあるが、集中部分があり、1.6 m×0.6 mの中に大部分の石器群がまとまって出土している。

出土遺物　総計21点出土した。石器組成はナイフ形石器1点、剝片14点、砕片6点となっている。1はナイフ形石器である。1側辺に急角度な刃潰し加工が施されているが、他の1側辺は樋状剝離様の単一の平坦な剝離面となっている裏面調整がみられる。先端部が欠損しており、全体の形状は窺えない。2は、平坦な打面を有する大形の縦長剝片である。肉眼的には使用痕は観察されない。

母岩別資料・接合資料　石材は5種、母岩別資料は10母岩識別し得た。安山岩1が主体をな

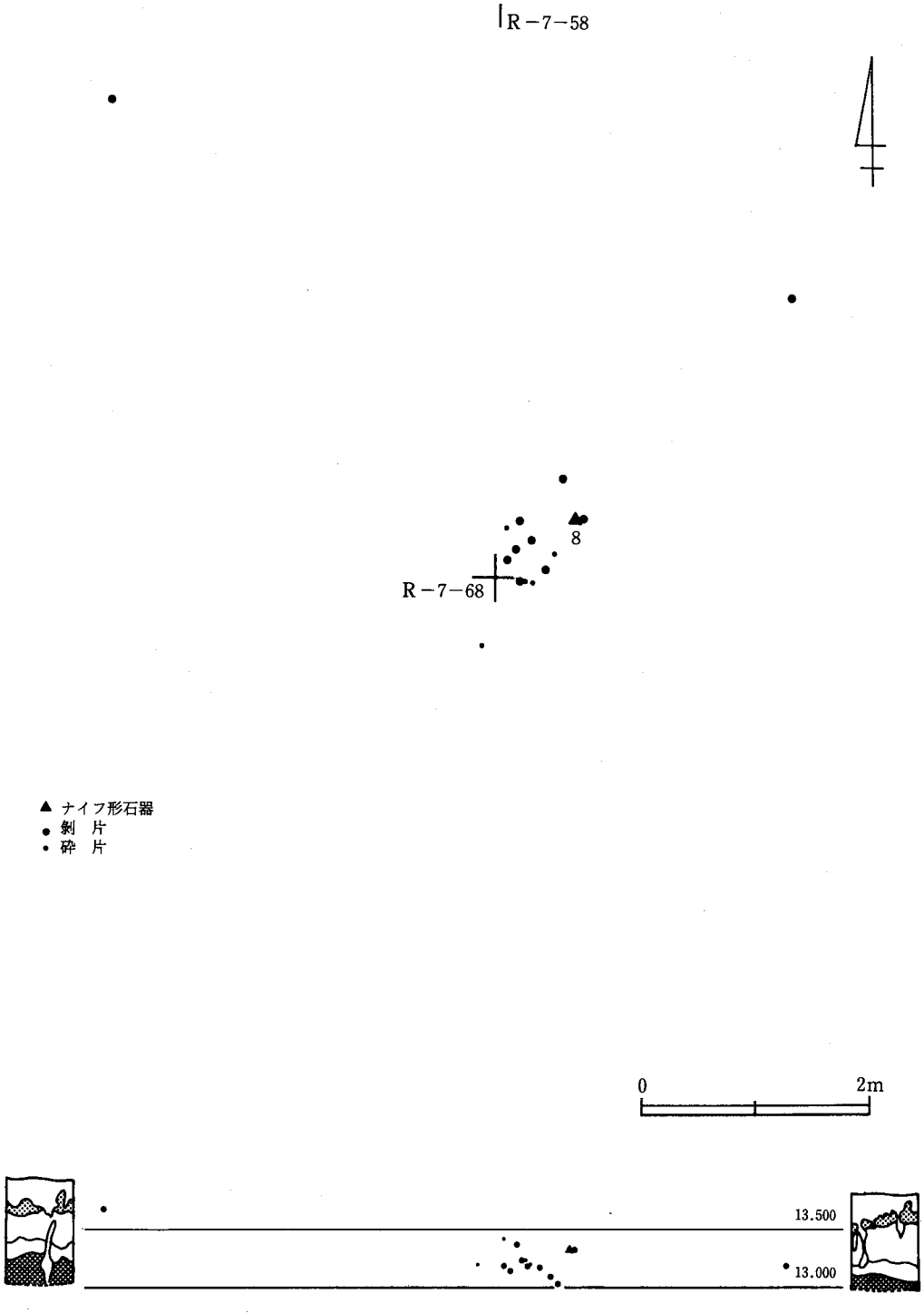


図106　第35ブロック遺物出土状況図

しているが、他の母岩はいずれも１点ずつであり、器種としてはナイフ形石器、砕片、剝片と偏りをみせていない。

まとめ　本ブロックは黒曜石製ナイフ形石器と、剝片、砕片を組成としている。分布状態からみれば、極めて狭い範囲に欠損したナイフ形石器、剝片、砕片等があり、廃棄の色濃いブロックと言えよう。

表154　第35ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	珪質頁岩		頁岩		安山岩		玄武岩		黒曜石		不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	1	50.0	−	−	1	4.8
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ピエス・エスキーユ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
使用痕ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
剝片	3	75.0	1	50.0	7	63.6	1	100	1	50.0	1	100	14	66.6
砕片	1	25.0	1	50.0	4	36.4	−	−	−	−	−	−	6	28.6
石核	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
台石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
計	4	19.0	2	9.5	11	52.4	1	4.8	2	9.5	1	4.8	21	100
礫片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−

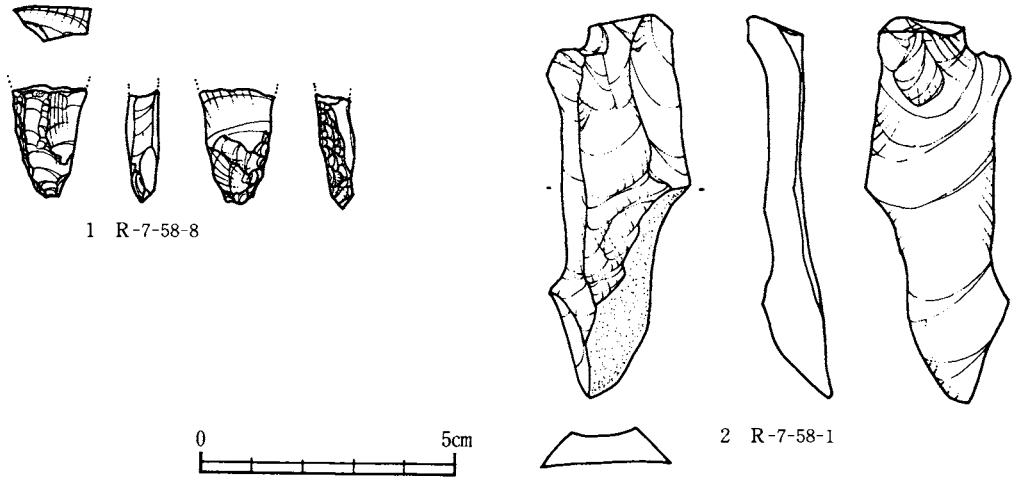


図107　第35ブロック出土遺物実測図

表155　第35ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	敲石	計
珪質頁岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
珪質頁岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	2
珪質頁岩　3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
黒曜石　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
黒曜石　2	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
玄武岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
安山岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8	3	—	—	11
安山岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
安山岩　3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
頁　岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
計	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	15	5	—	—	21

表156　第35ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材
1	R-7-58-8	ナイフ形石器	2.2	1.5	0.6	—	2.1	1	一側辺加工？	有	無	有	先端	無	黒曜石

7．第36ブロック（図108、109、図版19—1、25、表157～160）

出土状況　VI層よりVIIa層上部にかけて出土しているが、特にVIIa層上面に集中している。最大レベル差約30cmで、平面形は約7m×8mの規模を持ち、集中部分は東西方向に展開している。ナイフ形石器が、集中部分より離れて出土している。

出土遺物　総計78点出土した。石器組成はナイフ形石器1点、ピエス・エスキーユ3点、剥片29点、砕片45点となっている。1はナイフ形石器である。2側辺加工で、刃部はわずかに先

表157　第36ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	敲石	計
珪質頁岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
珪質頁岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	3	—	—	4
珪質頁岩　3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
頁　岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	3
黒曜石　1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
玄武岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
玄武岩　2	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	—	26	36	—	—	65
計	1	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	—	29	43	—	—	76

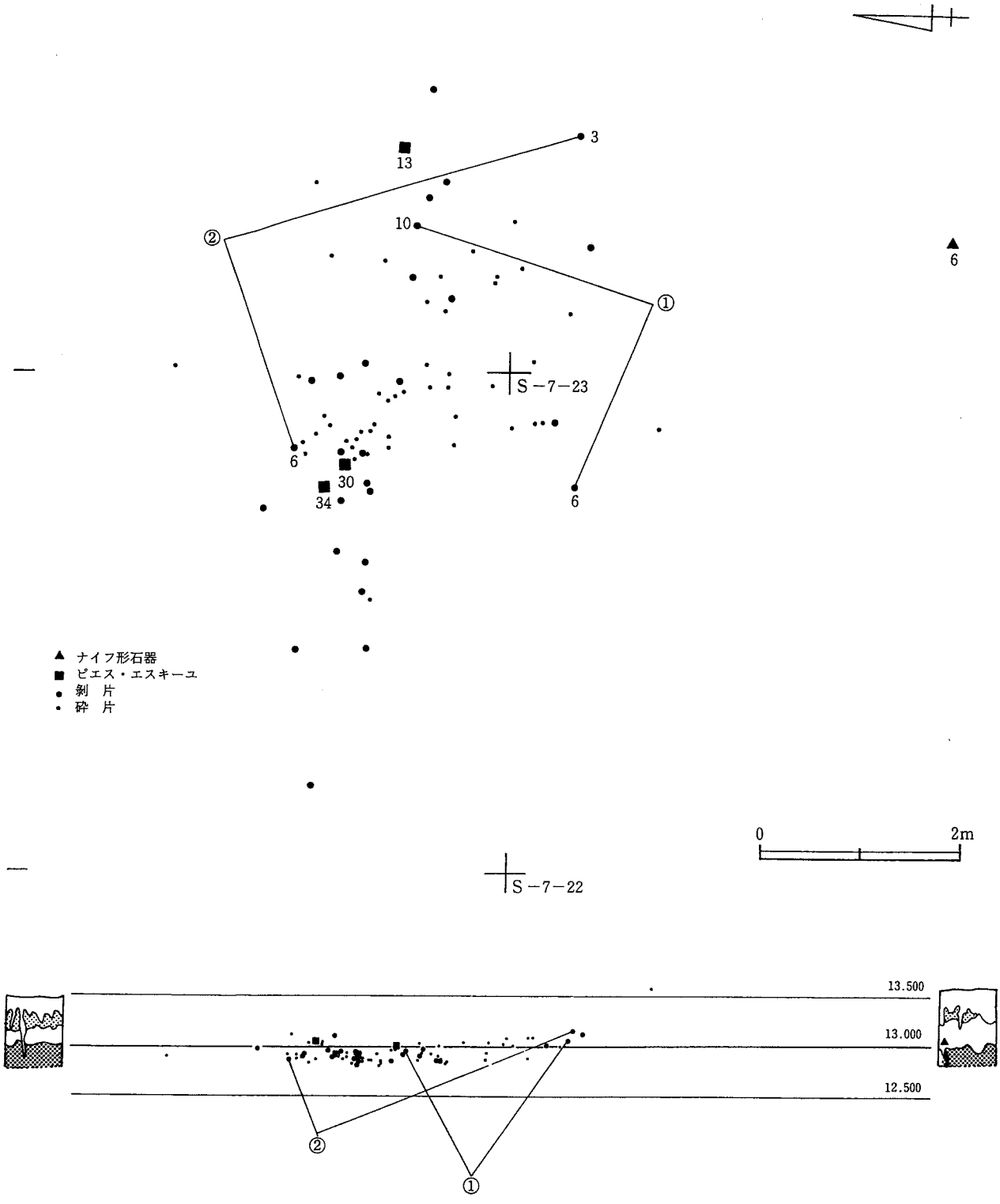


図108　第36ブロック遺物出土状況図

端部付近に存在するにすぎない。裏面調整がみられる。素材ははっきりしないが、大形で幅広な剝片かと推察される。なお、刃部には使用痕（微細な刃こぼれ）がみられる。2～4はピエス・エスキーユである。いずれも上下両端に微細なつぶれがあり、両極打法の所産を物語る。3については截断面がみられる。5は大形の縦長剝片である。打面は平坦であり、石材は珪質頁岩である。

母岩別資料・接合資料　石材は4種、母岩別資料は7母岩識別された。数量的には玄武岩2が他の母岩を凌駕する。利器としては1のナイフ形石器、5は各々、母岩別資料としては単独の性格を持っているが、ピエス・エスキーユ3点（2～4）はいずれも玄武岩2に含まれ、剝片、砕片とした中にピエス・エスキーユ、使用時もしくは、製作時の削片、剝片、砕片が含まれて

表158　第36ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	玄武岩		珪質頁岩		頁岩		安山岩		黒曜石		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	1	100	1	1.3
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ピエス・エスキーユ	3	4.4	−	−	−	−	−	−	−	−	3	3.8
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
使用痕ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
剝片	26	38.2	2	40.0	−	−	1	100	−	−	29	37.2
砕片	39	57.4	3	60.0	3	100	−	−	−	−	45	57.7
石核	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
台石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
計	68	87.2	5	6.4	3	3.8	1	1.3	1	1.3	78	100
礫片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−

表159　第36ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	玄武岩2	剝片2	S-7-13-10(剝片)＋S-7-22-6(剝片)	2
2	玄武岩2	剝片2	S-7-23-3(剝片)＋S-7-12-6(剝片)	2

表160　第36ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材
1	S-7-23-6	ナイフ形石器	2.8	1.7	0.8	30°	3.8	1	先端二側辺加工	有	無	無	−	有	黒曜石
2	S-7-12-30	ピエス・エスキーユ	3.3	4.9	0.8	65°50°	13.6	2	上下両端	−	無	有	一側辺	無	玄武岩
3	S-7-12-34	ピエス・エスキーユ	3.8	3.5	1.1	65°90°	15.5	4	二側辺加工	−	無	無	−	無	玄武岩
4	S-7-13-13	ピエス・エスキーユ	2.3	2.3	0.7	55°55°	4.0	3	上下両端	−	無	無	−	無	玄武岩

おり、このような性格を持った母岩と言えよう。

まとめ　利器としてはピエス・エスキーユを主体として、その製作、使用に関係した性格を持つブロックと言えよう。

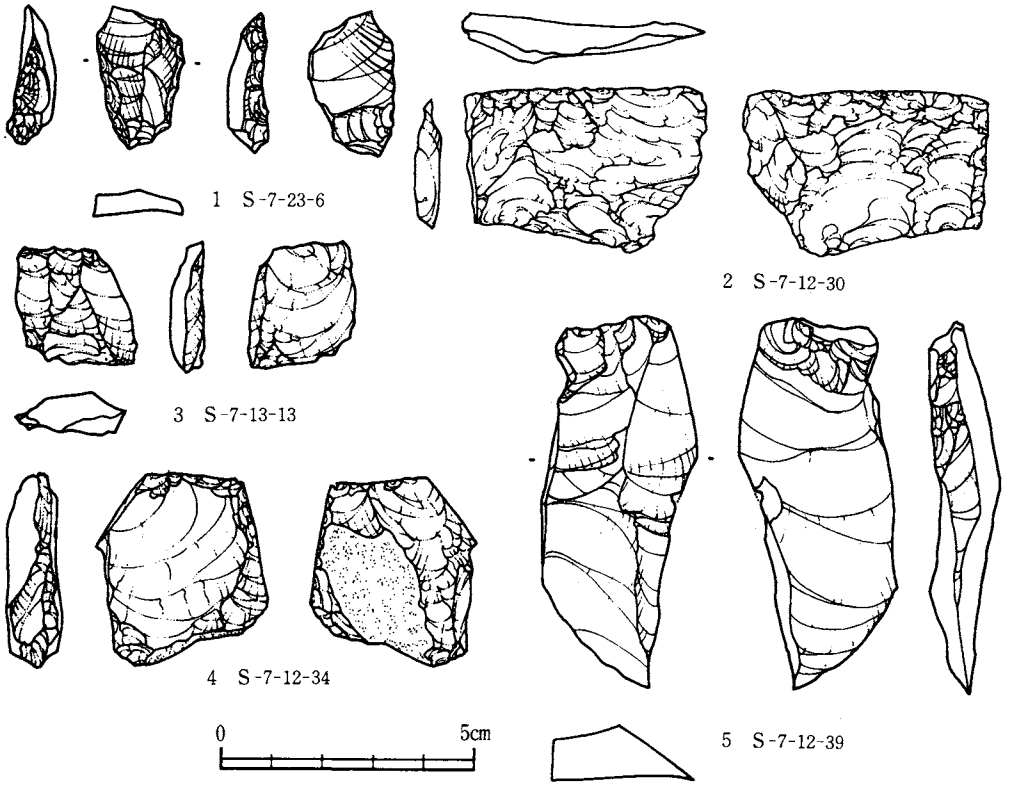


図109　第36ブロック出土遺物実測図

8．第37ブロック（図110、111、図版19—2・3、20—1、25、表161～163）

出土状況　V層よりⅦa層に至る層準で出土している。レベル差約50cmで、平面分布では約6.2m×約4.8mの広がりをみせているが、ブロック内は一定の密度で、しかも散漫な状況を呈している。

出土遺物　総計12点出土した。石器組成はナイフ形石器1点、剝片10点、石核1点となっている。1はナイフ形石器である。2側辺加工となっており、背面側の右側辺の打角は背面、あ

表161　第37ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材
1	S-6-32-2	ナイフ形石器	5.7	1.5	0.8	50°	6.5	1	二側辺加工	無	無	無	—	有	砂岩
2	S-6-42-1	石核	4.8	4.4	1.3	—	28.9	2	—	—	有	無	—	無	珪質頁岩

るいは主要剝離面側より加撃されているため、ほぼ90度に近い。素材は大形の縦長剝片と思われる。2は剝片素材の石核である。主要剝面側とは先端部より基部にむかって、平坦な剝離面が2面観察される。なお、背面側の左側辺上部には使用を物語る刃こぼれが部分的に存在する。剝片はいずれも目的剝片となり得る大きさを有し、調整剝片が出土している。

母岩別資料・接合資料　石材は珪質頁岩、頁岩、砂岩、安山岩、メノウの5種類の母岩を識別し得た。いずれの母岩も単発的で、数量的なまとまりを有する例はない。石核(珪質頁岩1)は同一母岩の剝片と共存していないことが明瞭である。なお、接合資料はない。

まとめ　ナイフ形石器、石核、剝片という石器組成を持つが、

表162　第37ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	メノウ		頁岩		砂岩		珪質頁岩		安山岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	—	—	—	—	1	100	—	—	—	—	1	8.3
角錐状石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
削片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
削器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ピエス・エスキーユ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剝片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
使用痕ある剝片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
石斧	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
剝片	6	100	1	100	—	—	1	50.0	2	100	10	83.4
砕片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
石核	—	—	—	—	—	—	1	50.0	—	—	1	8.3
台石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	6	50	1	8.3	1	8.3	2	16.7	2	16.7	12	100
礫片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

表163　第37ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 \ 器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	敲石	計
珪質頁岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1
珪質頁岩 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
頁岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
砂岩 1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
安山岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	2
メノウ 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
メノウ 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	2
メノウ 3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
メノウ 4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
計	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9	—	1	—	11

調整の段階を物語る砕片が存在せず、剥片はいずれも目的剥片に近いものとなっていることが、特徴である。

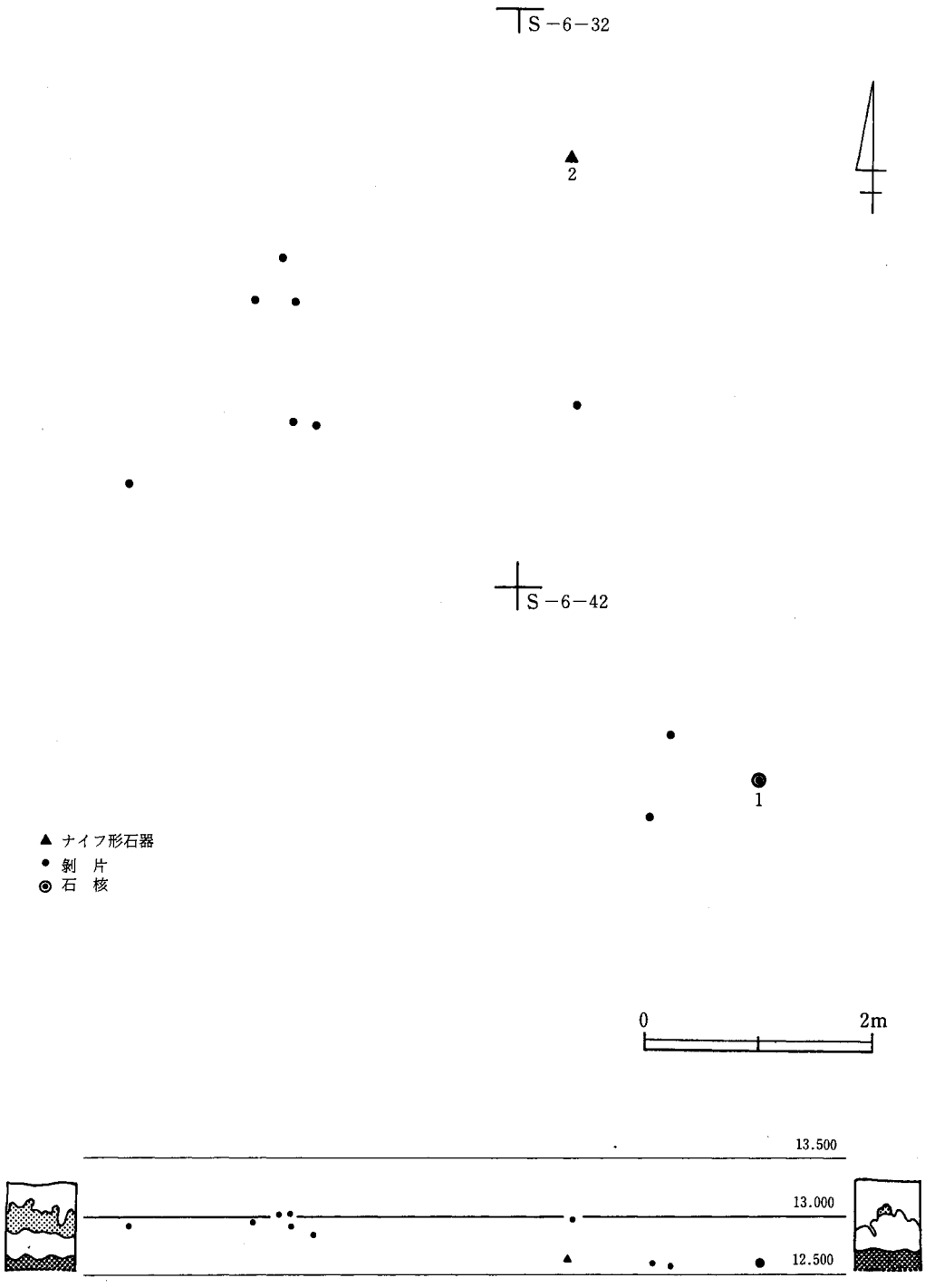


図110　第37ブロック遺物出土状況図

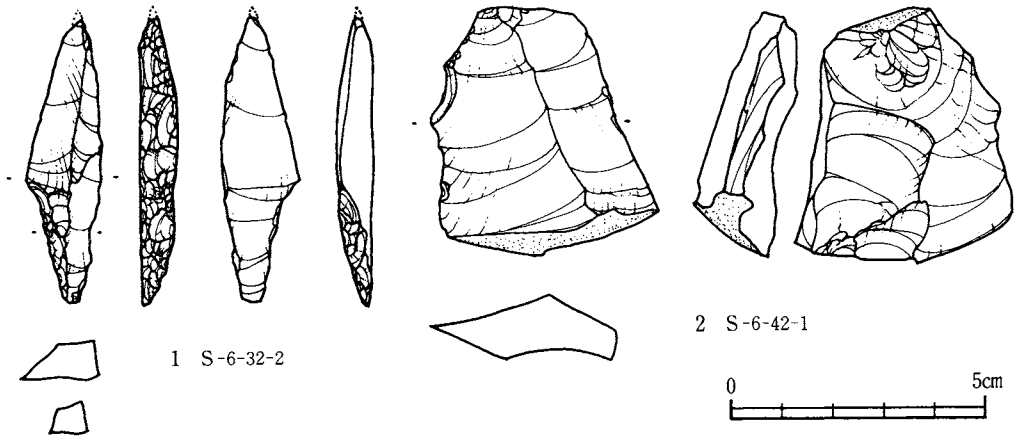


図111　第37ブロック出土遺物実測図

9．第40ブロック（図112～114、図版20－2、25、表164～167）

出土状況　V層よりⅦa層に至る層準より出土しているが、特にⅦa層から集中して出土している。最大レベル差約80cmである。一方、平面部分は約7.3m×約4.1mの規模となっており、中央部が密で、周辺部がやや散漫となっている。中央部には、ピエス・エスキーユとピエス・エスキーユの削片がまとまっており、それに接するよう敲石が存在する。そして、これ以外の利器は、この部分では出土していない。

表164　第40ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	安山岩 数量	安山岩 %	頁岩 数量	頁岩 %	チャート 数量	チャート %	砂岩 数量	砂岩 %	珪質頁岩 数量	珪質頁岩 %	不明 数量	不明 %	計 数量	計 %
ナイフ形石器	1	33.3	－	－	1	100	－	－	－	－	－	－	2	1.9
角錐状石器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
木葉形尖頭器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
削片	－	－	6	11.5	－	－	－	－	8	17.8	－	－	14	13.3
石錐	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
掻器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
削器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
ピエス・エスキーユ	－	－	1	1.9	－	－	－	－	－	－	－	－	1	1.0
彫刻刀形石器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
二次加工ある剝片	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
使用痕ある剝片	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
石斧	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
剝片	2	66.7	18	34.6	－	－	1	33.3	16	35.6	－	－	37	35.2
砕片	－	－	27	52.0	－	－	－	－	21	46.6	1	100	49	46.7
石核	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
台石	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
敲石	－	－	－	－	－	－	2	66.7	－	－	－	－	2	1.9
計	3	2.9	52	49.5	1	1.0	3	2.8	45	42.8	1	1.0	105	100
礫片	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3	－	3	－

出土遺物　総計108点出土した。石器組成はナイフ形石器2点、ピエス・エスキーユ1点、削片（ピエス・エ

スキーユスポール）14点、剝片37点、砕片49点、敲石２点、礫片３点出土した。１はピエス・

表165　第40ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	削片	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	礫片	敲石	計
チャート　1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
珪質頁岩　1	—	—	—	7	—	—	—	—	—	—	—	—	11	9	—	—	27
珪質頁岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	3	—	—	5
頁　岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
頁　岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	2
頁　岩　3	—	—	—	6	—	—	—	—	—	—	—	—	5	9	—	—	20
頁　岩　4	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	12	13	—	—	26
安山岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
安山岩　2	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	2
砂　岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
砂　岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
不　明　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	3	—	4
計	2	—	—	13	—	—	—	1	—	—	—	—	35	36	3	2	91

表166　第40ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内　訳	内　容	数量
1	安山岩 2	剝片１ ナイフ形石器１	S-8-51-1(剝片)→S-8-51-3(ナイフ形石器)	2
2	頁　岩　4	剝片２	S-8-62-2(剝片)＋S-8-62-17(剝片)	2
3	頁　岩　4	剝片２	S-8-62-1(剝片)＋S-8-62-3(剝片)	2
4	珪質頁岩１	剝片６	S-8-52-2(剝片)→S-8-51-15(剝片)→S-8-51-9(剝片)→{S-8-51-8(剝片), S-8-51-10(剝片)}→S-8-51-11(剝片)	6
5	珪質頁岩１	削片７	S-8-62-50(削片)→S-8-62-19(削片)＋S-8-61-4(削片)→S-8-61-9(削片)→S-8-62-8(削片)→S-8-62-16(削片)→S-8-52-3(削片)	7
6	不　明　1	礫片３	S-8-62-30(礫片)＋S-8-62-5(礫片)＋S-8-62-38(礫片)	3

表167　第40ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器　種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石　材
1	S-8-51-3	ナイフ形石器	4.2	2.6	1.1	45°/65°	13.5	2a	先　端　部	無	無	無	—	不明	安山岩
2	S-8-51-4	ナイフ形石器	3.5	1.6	0.4	30°	2.9	3	二側辺加工	有	無	有	先端	無	チャート
3	S-8-62-49	ピエス・エスキーユ	2.8	1.7	0.7	50°/65°	3.2	1	上下両端	—	無	無	—	無	頁　岩
4	S-8-61-11	敲　石	7.5	6.2	4.6	—	213.7	4	—	—	—	有	半割	長軸一端片面	砂　岩
5	S-8-62-23	敲　石	11.1	6.6	5.5	—	424.7	5	—	—	—	無	—	割面	砂　岩

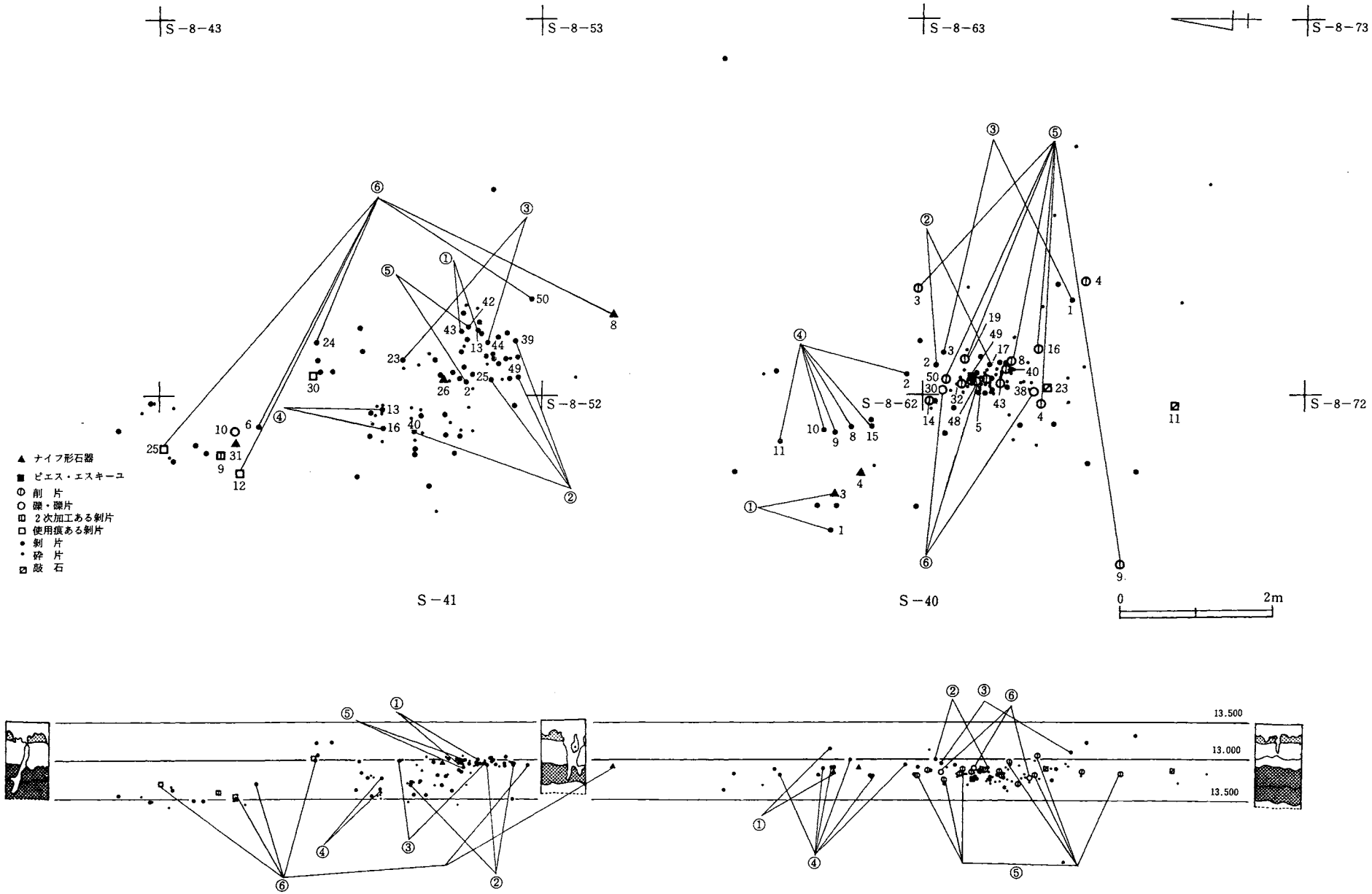


図112　第40・41ブロック遺物出土状況図

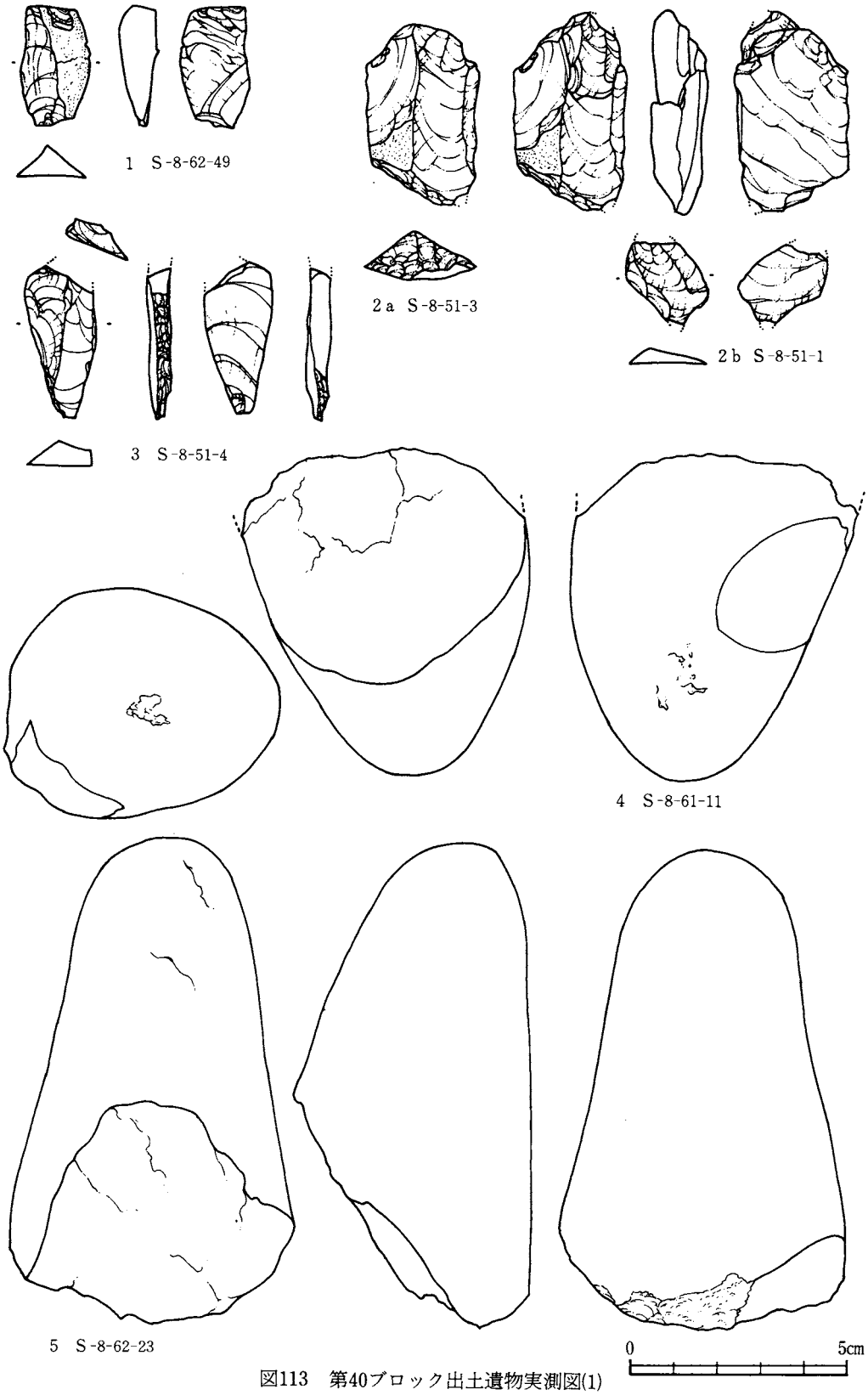


図113　第40ブロック出土遺物実測図(1)

エスキーユである。長軸方向の上下両端につぶれがみられる。２ａ～３はナイフ形石器である。２ａは接合資料であり、砕片（２ｂ）が接合している。幅広な縦長剝片を素材として先端部のみに急角度な刃潰し加工を施している。３は２側辺加工のナイフ形石器である。先端部は欠損している。

母岩別資料・接合資料　石材は６種、母岩別資料は12母岩を数えるが、注目すべき母岩別資料としては、珪質頁岩１、ならびに頁岩３、頁岩４がある。これらはいずれもピエス・エスキーユ、ピエス・エスキーユの削片を含む資料で、本ブロックの性格を捉える意味で重要である。全体として本ブロックはピエス・エスキーユの製作を中心として展開していることは明らかであるが、珪質頁岩１、頁岩３はいずれも削片のみである。一方、頁岩４は、ピエス・エスキーユのみの資料である。なお、これらの母岩はそれ以外にそれぞれ剝片、砕片を組成としている

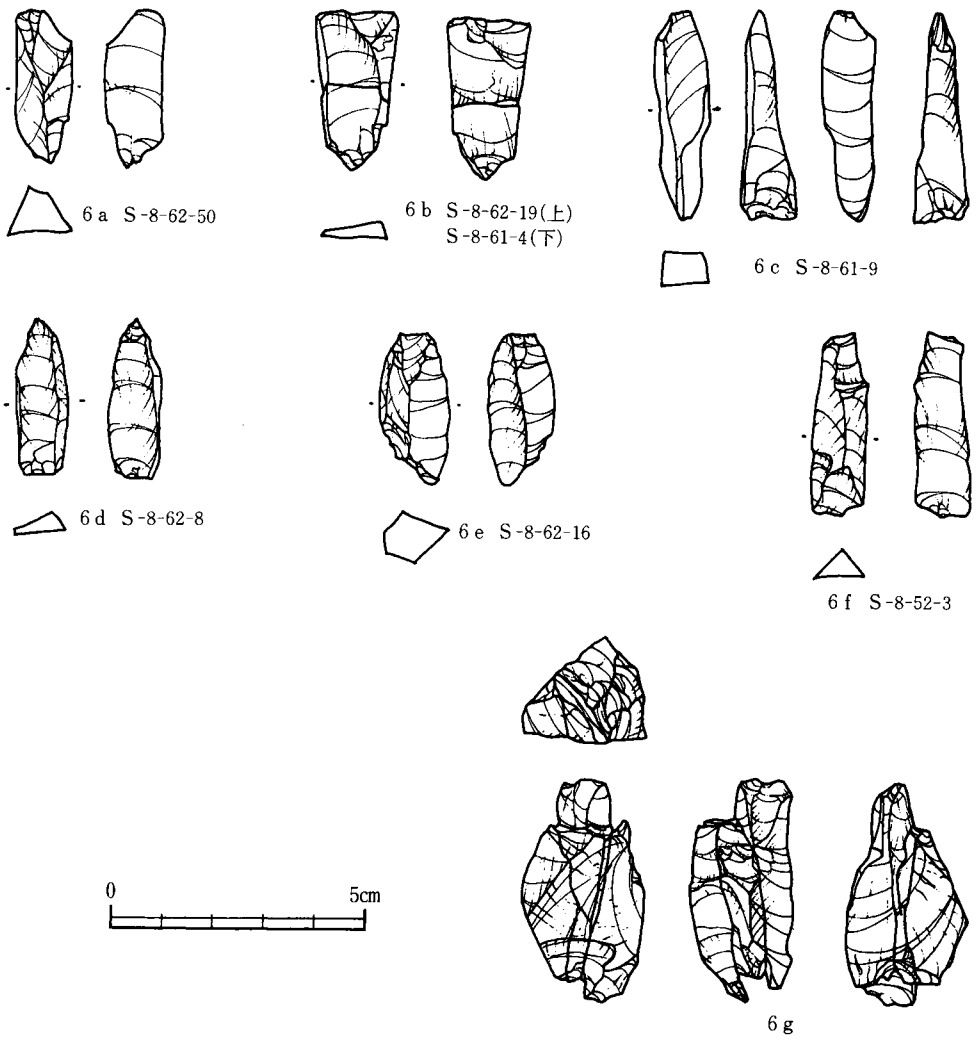


図114　第40ブロック出土遺物実測図(2)

が、ピエス・エスキーユの製作途上のものである可能性も否めない。それにしても珪質頁岩、頁岩3ではピエス・エスキーユ、頁岩では削片が欠落している事実があるが、他のブロックとの類縁関係をさぐることはできなかった。

まとめ　先述したとおり、本ブロックはピエス・エスキーユの製作を反映しているが、他のブロックと本ブロックとの有機的な関連性は見いだせなかった。

10. 第41ブロック（図112、115、116、図版20—3、26、表168～171）

出土状況　V層よりVIIc層に至る層準より出土した。最大レベル差約80 cmで、接合資料が最大約60 cmの幅で接合しており、他のブロックに比べ相対的にレベル差が大きいが、ほぼVIIa層に集中しているものと考えられる。平面分布は、6.8m×4.2mの規模となっており、南北に長い楕円形を呈している。ブロック内の密度は稠密であり、接合資料も集中部分で良く接合している。特に器種ごとの分布に偏りはみられない。

出土遺物　総計98点出土した。石器組成はナイフ形石器3点、ピエス・エスキーユ1点、2次加工のある剝片1点、使用痕のある剝片3点、剝片58点、砕片32点、礫片1点となっている。1、2、12fはナイフ形石器である。1ならびに12fはそれぞれ石刃素材で2側辺加工の横長剝片で、打面部を除去するかのような1側辺加工となっている。いずれも小形で細身である。3はピエス・エスキーユである。長軸方向の上下両端に刃こぼれがみられる。4～9は剝片である。これらの剝片は接合資料6に代表されるように、本ブロックの技術的特徴の一端をあらわしているものとして注目される。4～6、12aは剝片の背面側に石核の側面調整の痕跡をとどめる稜つき剝片である。また、7～9はこれに後続して石刃技法によって生産された縦長剝片（石刃）である。背面側の剝離面は2側辺に平行しており、8はその中でも整った形状を呈する。またいずれの剝片も打面調整の痕跡をとどめている。10、12c、12dは使用痕のある剝片である。いずれも縦長剝片であり、それぞれの1側辺に連続的に刃こぼれがみられる。11は

表168　第41ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	珪質頁岩		チャート		不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	3	3.1	—	—	—	—	3	3.1
角錐状石器	—	—	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—
削片	—	—	—	—	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—	—	—	—	—
削器	—	—	—	—	—	—	—	—
ピエス・エスキーユ	1	1.0	—	—	—	—	1	1.0
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剝片	1	1.0	—	—	—	—	1	1.0
使用痕ある剝片	3	3.1	—	—	—	—	3	3.1
石斧	—	—	—	—	—	—	—	—
剝片	58	59.8	—	—	—	—	58	59.1
砕片	31	32.0	1	100	—	—	32	32.7
石核	—	—	—	—	—	—	—	—
台石	—	—	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—	—	—
計	97	99.0	1	1.0	—	—	98	100
礫片	—	—	—	—	—	—	—	—

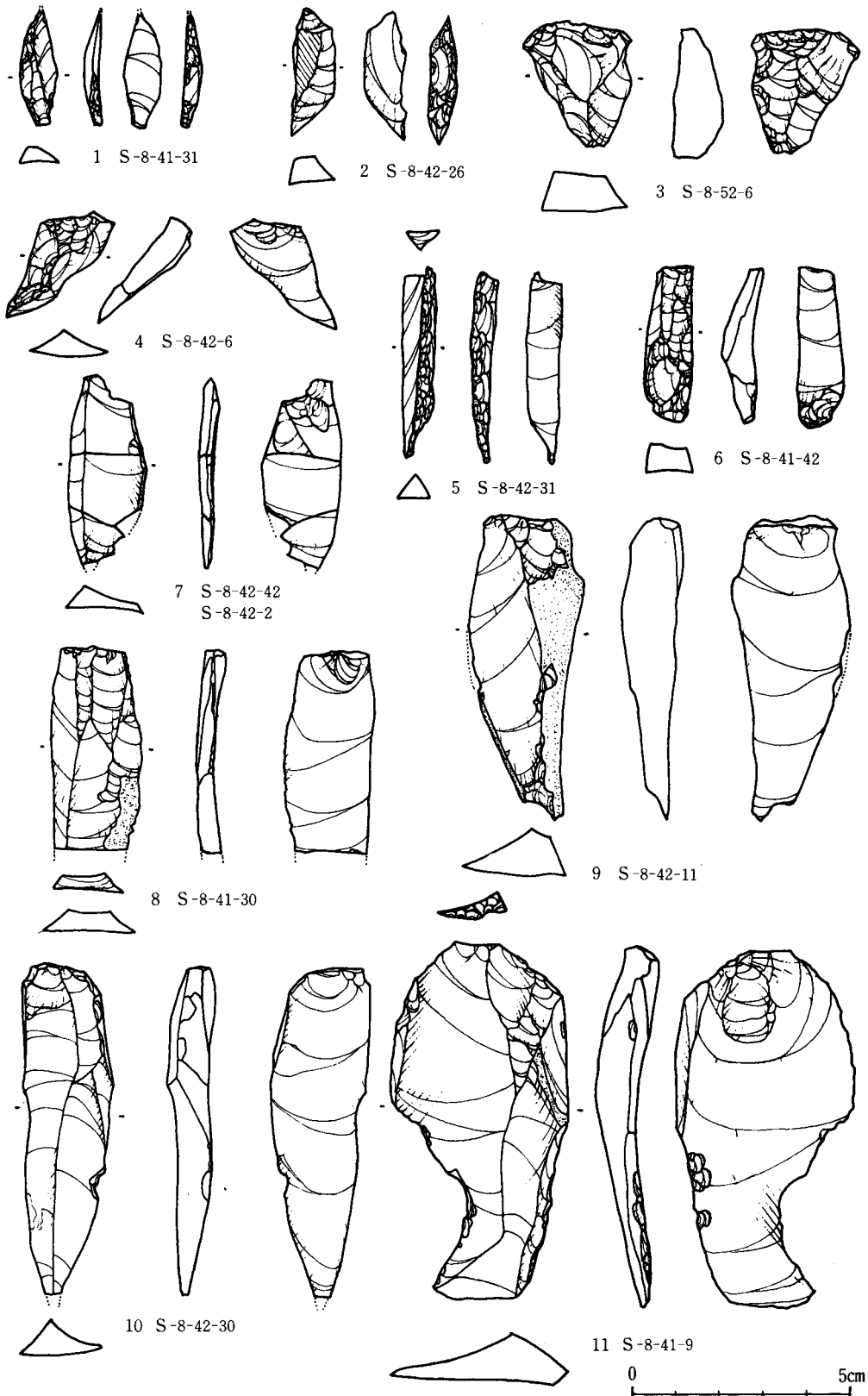


図115　第41ブロック出土遺物実測図(1)

2次加工のある剥片である。幅広な縦長剥片を素材として、部分的に2次加工が施されている。

母岩別資料・接合資料　母岩別資料は7母岩を数えるが、石材は珪質頁岩1種類で構成されている。この点は他のブロックに比べ特異な性格を持っている。注目すべき母岩としては珪質頁岩1、珪質頁岩6があり、両者はナイフ形石器、使用痕のある剥片、2次加工のある剥片、剥片、砕片などの組成を有している。したがって、石核より剥片を生産し、石器調整に至る工程を反映した母岩別資料と言えよう。特に珪質頁岩6は、ナイフ形石器、使用痕のある剥片、2次加工のある剥片、剥片、砕片などの組成を有している。したがって、石核より剥片を生産

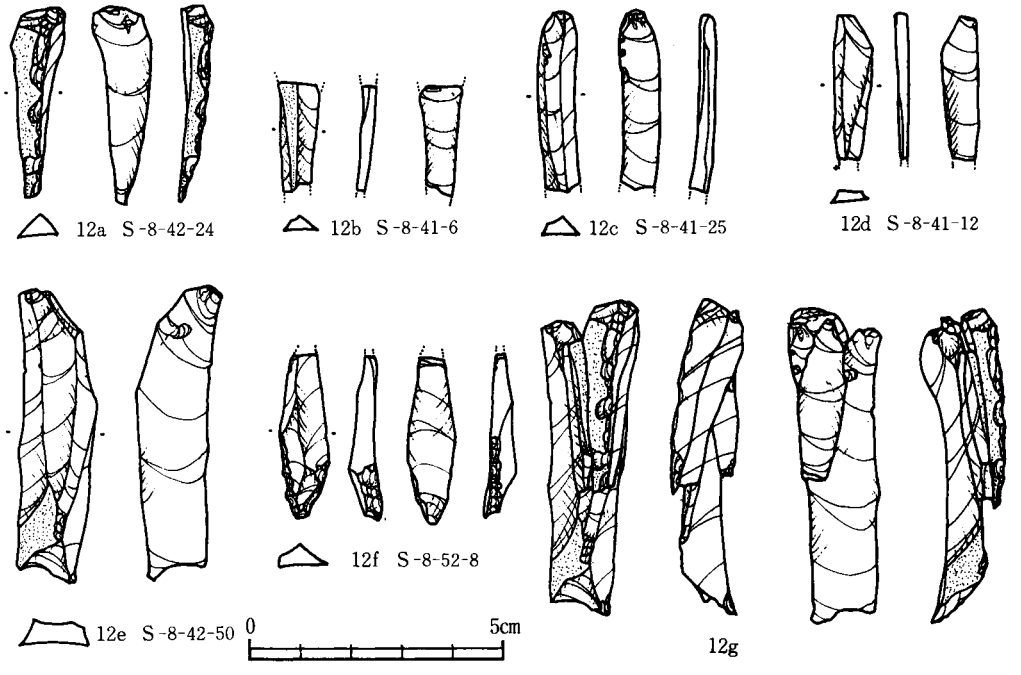


図116　第41ブロック出土遺物実測図(2)

表169　第41ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	敲石	計
珪質頁岩　1	2	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	28	15	—	—	47
珪質頁岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	10	—	—	16
珪質頁岩　3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	11	2	—	—	13
珪質頁岩　4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	3	—	—	7
珪質頁岩　5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	2
珪質頁岩　6	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	7	1	—	—	11
珪質頁岩　7	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	—	—	2
計	3	—	—	—	—	—	—	1	—	1	3	—	57	32	—	1	98

し、石器調整に至る工程を反映した母岩別資料と言えよう。特に珪質頁岩6は、ナイフ形石器、石刃の接合資料があり、本ブロックの剝片生産技術を示唆するとともにナイフ形石器により本ブロック付近で、石器調整が行われたことを物語っている。接合資料は、6例あるが、うち3例（接合資料1、4、5）は剝片の破損例であり、3例（接合資料2、3、6）が剝片生産技術を反映した資料である。特に接合資料6（12）は、石刃技法の具体例として注目すべき資料である。

まとめ　本ブロックは石材として珪質頁岩を使用して、石刃技法を基盤とした剝片生産、さらに石器調整石器の使用、廃棄の経過を反映している点に特色がみられる。

表170　第41ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内　訳	内　容	数量
1	珪質頁岩5	剝片2	S-8-42-13(剝片)＋S-8-42-43(剝片)	2
2	珪質頁岩3	剝片4	S-8-42-39(剝片)＋S-8-41-40(剝片)→S-8-42-49(剝片)→S-8-42-25(剝片)	4
3	珪質頁岩4	剝片2	S-8-42-23(剝片)→S-8-42-44(剝片)	2
4	珪質頁岩3	剝片2	S-8-41-16(剝片)＋S-8-41-13(剝片)	2
5	珪質頁岩1	剝片2	S-8-42-42(剝片)＋S-8-42-2(剝片)	2
6	珪質頁岩6	剝片3 ナイフ形石器1 使用痕ある剝片2	S-8-42-24(剝片)→S-8-41-6(剝片)→S-8-41-25(使用痕ある剝片)→S-8-41-12(使用痕ある剝片)→S-8-42-50(剝片)→S-8-52-8(ナイフ形石器)	6

表171　第41ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器　種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石　材
1	S-8-41-31	ナイフ形石器	2.6	0.9	0.3	25°	0.7	1	二側辺加工	無	無	有	基部	無	珪質頁岩
2	S-8-42-26	ナイフ形石器	3.0	1.0	0.6	55°	1.7	2	一側辺加工	無	無	無	—	無	珪質頁岩
3	S-8-52-8	ナイフ形石器	3.3	1.0	0.5	30°	1.3	12f	基部二側辺加工	無	無	有	先端	無	珪質頁岩
4	S-8-52-6	ピエス・エスキーユ	2.8	2.5	1.2	45° 90°	6.3	3	上下両端	—	無	無	—	無	珪質頁岩
5	S-8-41-9	二次加工ある剝片	8.1	4.2	1.0	60°	27.4	11	一側辺加工(部分的)	無	有	無	—	無	珪質頁岩
6	S-8-41-12	使用痕ある剝片	2.8	0.8	0.2	45°	0.5	12d	—	無	有	有	先端	一側辺	珪質頁岩
7	S-8-41-25	使用痕ある剝片	3.5	0.8	0.3	45°	1.1	12c	—	無	有	有	先端	一側辺(部分的)	珪質頁岩
8	S-8-42-30	使用痕ある剝片	7.4	2.4	0.9	45°	12.4	10	—	無	有	有	先端	一側辺	珪質頁岩

11. 第42ブロック（図117～119、図版21－1、26、表172～175）

出土状況　ソフトローム下部よりⅦ層に至るまで出土している。最大レベル差約50cmで、特にⅦ層より多く出土している。平面分布は約5.5m×約6.1mの範囲にあり、密度は一定で、極だって集中している部分はない。また、器種ごとの分布についても偏りがみられない。

出土遺物　総計55点出土した。石器組成はナイフ形石器1点、削器1点、ピエス・エスキー

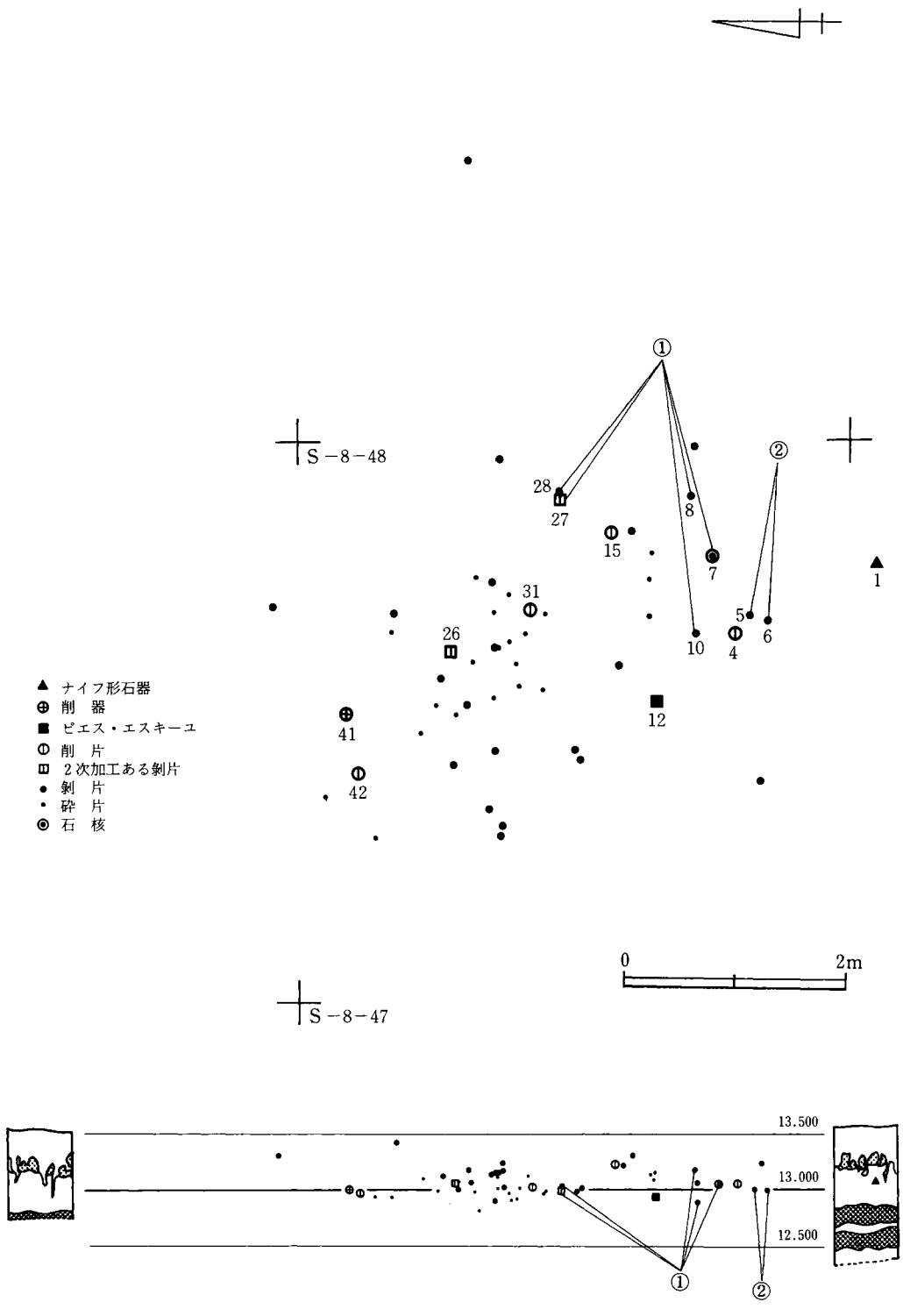


図117　第42ブロック遺物出土状況図

ユ1点、2次加工のある剝片2点、削片1点、剝片25点、砕片20点、石核1点となっている。

1はナイフ形石器である。幅広な剝片を使用して2側辺加工である。上下両端が欠損している。

2はピエス・エスキーユである。上下両端の微細なつぶれと共に、右側辺に1条の樋状剝離面が観察される。3は削片である。彫刻刀形石器の製作に関与する資料かと思われる。4は2次加工のある剝片である。主要剝離面側に平坦な2次加工が観察され、削器の可能性も否めない。

5はぶ厚い剝片を素材とした削器であるが、剝離面は概して大きく、石核の公算が高い。

母岩別資料・接合資料　石材は3種類に対して母岩別資料は

表172　第42ブロック出土石器組成表

器種＼石材	頁岩		安山岩		珪質頁岩		メノウ		不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	1	2.2	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1.8
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削片	4	8.9	−	−	−	−	−	−	−	−	4	7.3
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削器	−	−	1	25.0	−	−	−	−	−	−	1	1.8
ピエス・エスキーユ	1	2.2	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1.8
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剝片	2	4.4	−	−	−	−	−	−	−	−	2	3.6
使用痕ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
剝片	21	46.8	2	50.0	2	50.0	−	−	−	−	25	45.5
砕片	15	33.3	1	25.0	2	50.0	1	100	1	100	20	36.4
石核	1	2.2	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1.8
台石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
計	45	81.8	4	7.3	4	7.3	1	1.8	1	1.8	55	100
礫片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−

表173　第42ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	削片	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	敲石	計
珪質頁岩　1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1
珪質頁岩　2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−	−	2
珪質頁岩　3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	1
頁岩　1	−	−	−	1	−	−	−	1	−	1	−	−	3	2	−	−	8
頁岩　2	−	−	−	3	−	−	−	−	−	−	−	−	8	13	−	−	24
頁岩　3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	6	−	1	−	8
頁岩　4	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1
頁岩　5	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1
頁岩　6	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	2
頁岩　7	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
安山岩　1	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	2	1	−	−	4
計	1	−	−	4	−	−	1	1	−	2	−	−	25	18	1	−	53

12母岩の多くを数える。母岩の種類、各母岩の石器群の数量については、珪質頁岩は３母岩、４点と少なく、剥片、砕片などの器種に偏るが、頁岩は石器群の総数52点のうち44点と大多数を占め、母岩の種類も多岐にわたる。接合資料１は、剥片３点、２次加工のある剥片１点、石核１点の接合資料である。大形の剥片（長さ 7.6 cm 、幅 6.4 cm 、厚さ 1.9 cm ）を素材として、斜め方向に２分割（〔６ａ、６ｂ〕＋〔６ｃ、６ｄ〕）され、後に、６ｂを折断した６ａは、折断面より２条の細長い樋状剥離が施されている。６ａはさらに主要剥離面側に横長剥片を剥離した痕跡がみられるので、石核であるものと考えられる。一方、６ｃと６ｄは意図的に折断

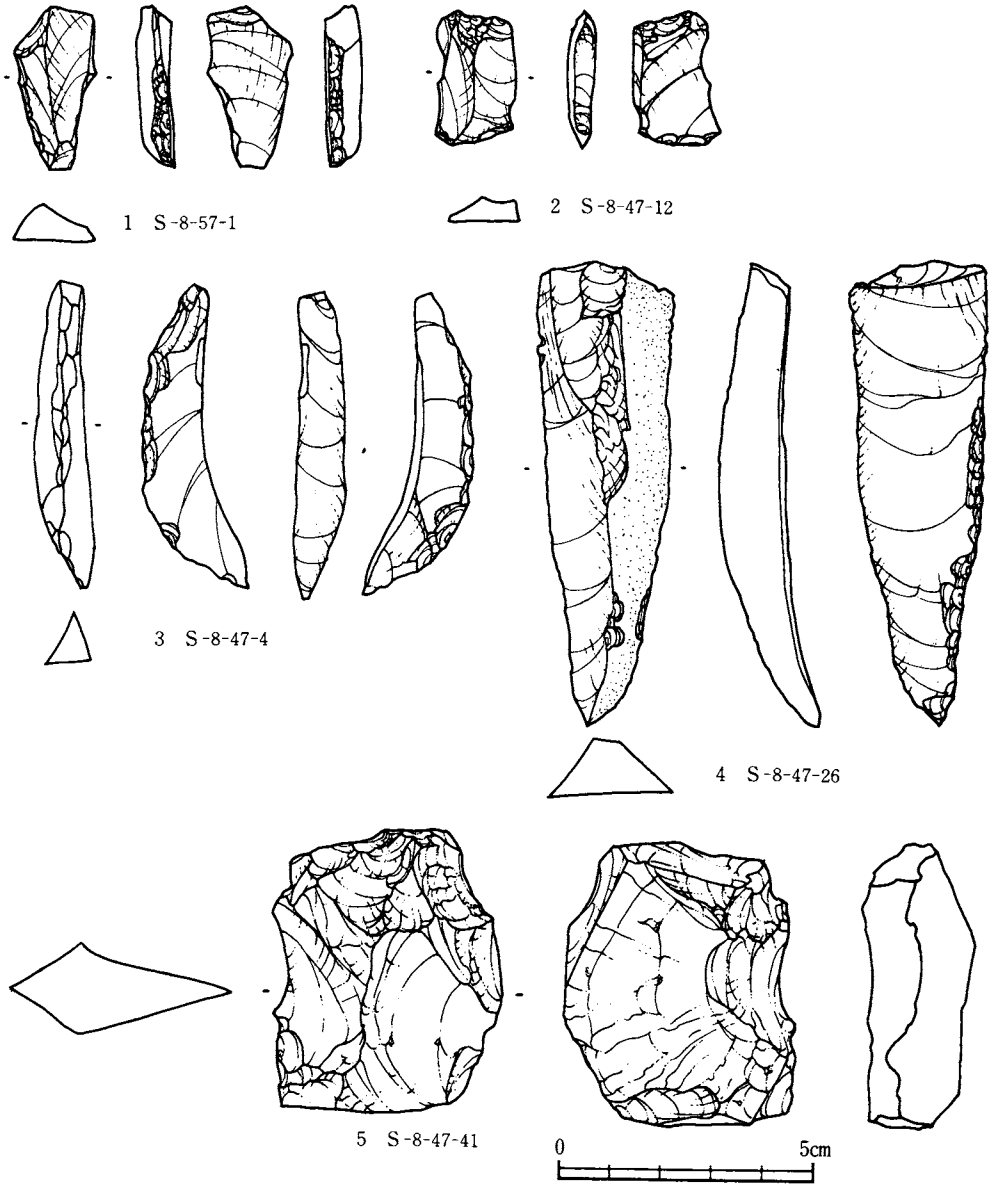


図118　第42ブロック出土遺物実測図(1)

された訳ではなく、本来は同一個体であったところが、石材幅に潜在的な節理面があり、また、素材そのものが加熱されているため上下に2分割ののち、離散したものと考えられる。6eと6fは、石核と剝片の接合例である。6fは剝片であるが、加撃方向に沿って左右に分断されている。7は、同一母岩の剝片であるが、接合しない参考例として図示した。

まとめ　前述の接合資料1に興味深い剝片生産技術が窺える。このように大形剝片を素材とした剝片生産技術は本遺跡では本ブロックのみにみられる。

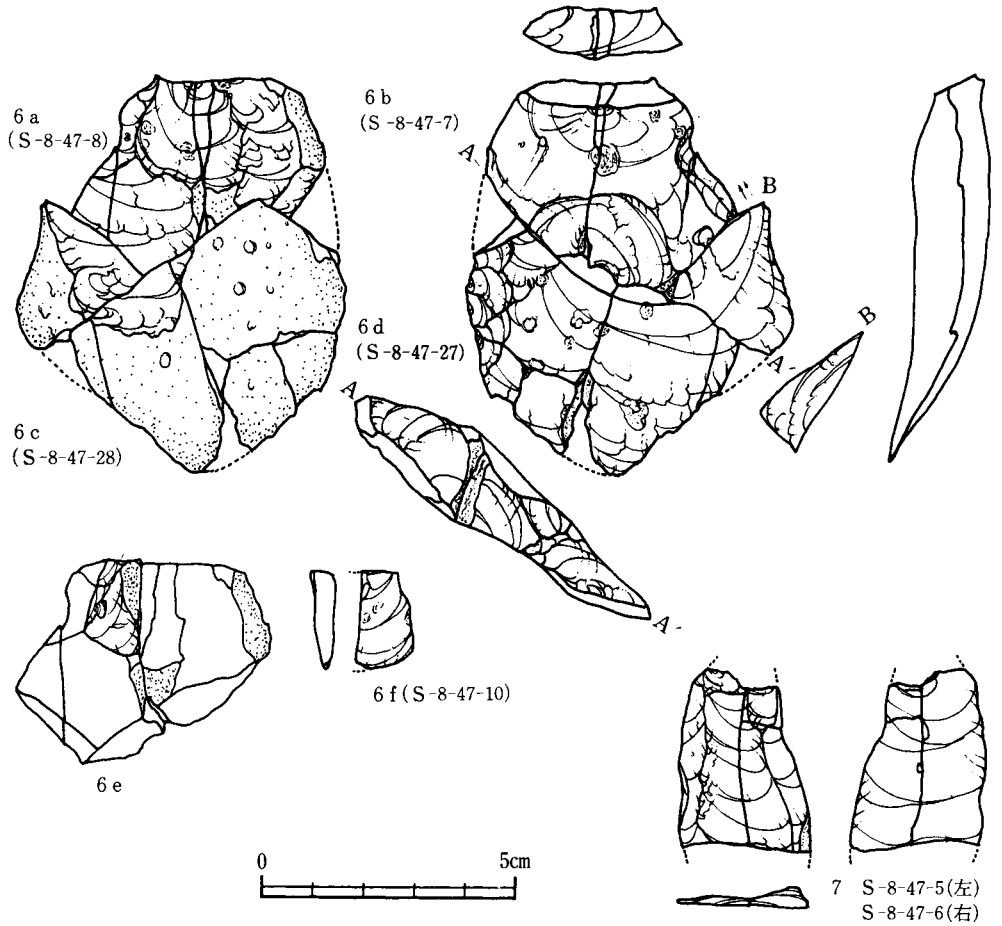


図119　第42ブロック出土遺物実測図(2)

表174　第42ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内　訳	内　容	数量
1	頁　岩　3	剝片3 石核1 二次加工ある剝片1	S-8-47-10(剝片)→S-8-47-7(石核)+S-8-47-8(剝片)+S-8-47-27(二次加工ある剝片)+S-8-47-28(剝片)	5
2	頁　岩　3	剝片2	S-8-45-5(剝片)+S-8-47-6(剝片)	2

表175　第42ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材
1	S-8-57-1	ナイフ形石器	3.0	1.7	0.6	不明	3.7	1	二側辺加工	無	無	有	先端	不明	頁岩
2	S-8-47-41	削器	5.3	4.6	1.8	80°	56.5	5	両面加工	有	無	有	側辺先端	無	安山岩
3	S-8-47-12	ピエス・エスキーユ	2.7	1.6	0.5	45°60°	2.8	2	上下両端	—	無	無	—	無	頁岩
4	S-8-47-26	二次加工ある剥片	8.7	2.8	1.4	55°55°	29.7	4	二側辺加工	有	無	有	基部	有	頁岩
5	S-8-47-27	二次加工ある剥片	4.3	3.2	1.4	65°	21.0	6d	部分的	有	無	有	半割	無	頁岩
6	S-8-47-7	石核	3.8	5.1	1.8	—	35.2	6b	—	—	有	無	—	—	頁岩

12. 第44ブロック（図120～122、図版21—2、26、表176～179）

出土状況　VI層からVIII層にかけて出土しているが、最も集中している層準はVII a 層である。最大レベル差約70 cm で、平面分布は、7.6m×6.3mとなっており中央部に密である。特に分布に極だった特徴はみられない。接合資料が中央部の比較的密度の高い部分に集中していることのみ記しておく。

出土遺物　石器組成はナイフ形石器の3点のみである。1、2はナイフ形石器である。1は、縦長剥片を素材とした2側辺加工、2は幅広な縦長剥片を素材として、1側辺加工となっている。3は使用痕のある剥片で、平坦な打面を有する縦長剥片の右側辺に連続的に微細な刃こぼれがみられる。4、6 f は石核である。4は、塊状の荒割り礫を素材として周辺部より横長剥片を素材とした痕跡をとどめている。6 f は、接合資料となっている。平坦な打面より横長剥片を生産している。剥離方向は一定していない。5 b は、彫刻刀形石器である。右側辺の樋状剥離を実施する際打面調整を施し、左面に対して、ほぼ90度に近い樋状剥離を形成している。使用痕は肉眼的には観察できない。

表176　第44ブロック出土石器組成表

器種＼石材	珪質頁岩 数量	%	頁岩 数量	%	チャート 数量	%	不明 数量	%	計 数量	%
ナイフ形石器	2	7.4	—	—	—	—	—	—	2	5.2
角錐状石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
削片	—	—	1	10.0	—	—	—	—	1	2.6
石錐	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
削器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ピエス・エスキーユ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
彫刻刀形石器	—	—	1	10.0	—	—	—	—	1	2.6
二次加工ある剥片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
使用痕ある剥片	1	3.7	—	—	—	—	—	—	1	2.6
石斧	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
剥片	12	44.5	—	—	1	100	—	—	13	34.2
砕片	10	33.3	8	80.0	—	—	—	—	18	47.4
石核	2	7.4	—	—	—	—	—	—	2	5.3
台石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	27	71.1	10	26.3	1	2.6	—	—	38	100
礫片	—	—	—	—	—	—	6	—	6	—

母岩別資料・接合資料　石材は5種類、

母岩別資料は13母岩を数える。母岩別資料より知れる特徴としては、刃こぼれある剝片（珪質頁岩6）、ナイフ形石器（珪質頁岩4、珪質頁岩5）などの利器がいずれも単独であることが読みとれる。一方、珪質頁岩2や珪質頁岩3などのように本ブロックでは相対的に数量が優位な、

表177　第44ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	削片	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石	礫片	計
珪質頁岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
珪質頁岩 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	3	1	—	11
珪質頁岩 3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	9	—	—	13
珪質頁岩 4	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
珪質頁岩 5	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
珪質頁岩 6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1
珪質頁岩 7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1
頁　岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
頁　岩 2	—	—	—	1	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	2
頁　岩 3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	—	—	4
チャート 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
不　明 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	4
不　明 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
計	2	—	—	1	—	—	—	—	1	—	1	—	13	17	2	5	42

表178　第44ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内　訳	内　容	数量
1	頁　岩 2	削片1 彫刻刀形石器1	S-8-95-19(削片)→S-8-95-12(彫刻刀形石器)	2
2	珪質頁岩2	剝片5 石核1	S-8-95-15(剝片)→S-8-95-6(剝片)→S-8-95-13(剝片)→S-8-95-26(剝片)→S-8-95-23(剝片)→S-8-95-18(石核)	6
3	不　明 1	礫片5	S-8-95-3(礫片)＋S-8-95-4(礫片)＋S-8-95-5(礫片)＋S-8-95-9(礫片)＋S-8-95-10(礫片)	5

表179　第44ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器　種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石　材	その他
1	S-8-85-3	ナイフ形石器	3.1	1.4	0.5	25°	2.2	2	一側辺加工	無	無	有	先端	有	珪質頁岩	
2	S-8-85-4	ナイフ形石器	3.6	1.2	0.5	50°	2.0	1	基　部 一側辺加工	無	無	無	—	無	珪質頁岩	
3	S-8-95-12	彫刻刀形石器	3.9	2.7	0.9	90°	11.1	5 a	一側辺加工	—	有	無	—	無	頁　岩	角形彫刻刀
4	S-8-85-5	使用痕ある剝片	5.2	2.5	0.9	35°	14.3	3	—	無	有	無	—	一側辺	珪質頁岩	
5	S-8-95-2	石　核	4.6	2.7	3.0	—	39.7	4	—	—	有	無	—	—	珪質頁岩	
6	S-8-95-18	石　核	5.0	3.8	2.7	—	72.5	6 f	—	—	有	無	—	—	珪質頁岩	

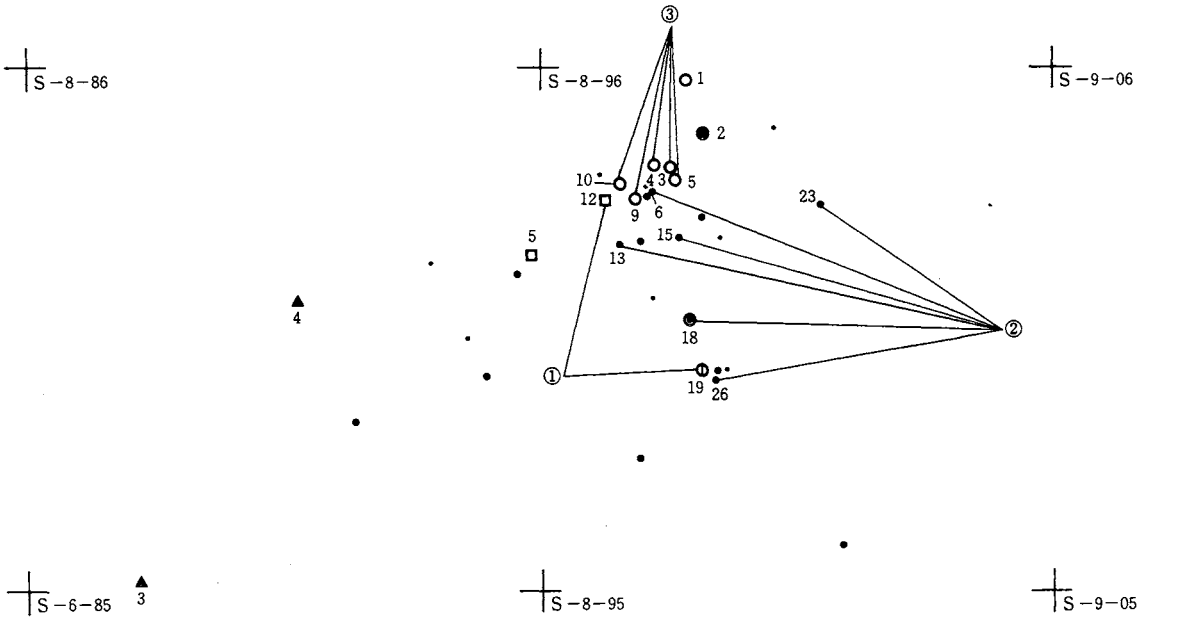


図120　第44ブロック遺物出土状況図

母岩（珪質頁岩２、３）では剥片、砕片が多い。珪質頁岩２は、石核と剥片との接合例がみられるが、生産された剥片のうち多くがブロック外へ搬出されている。接合資料は３例あり、彫刻刀形石器と削片、剥片と石核、礫片どうしの接合資料である。前二者についてはすでにその内容について記述した。礫片は接合状態で円礫が縦方向に２分割されたことを窺わせる資料であり、敲打痕は明白ではないものの敲石の可能性が考えられる。

まとめ　本ブロックでは利器と剥片、石核の母岩が明らかな相違をみせており、剥片生産と石器調整の場の違いが予測される。

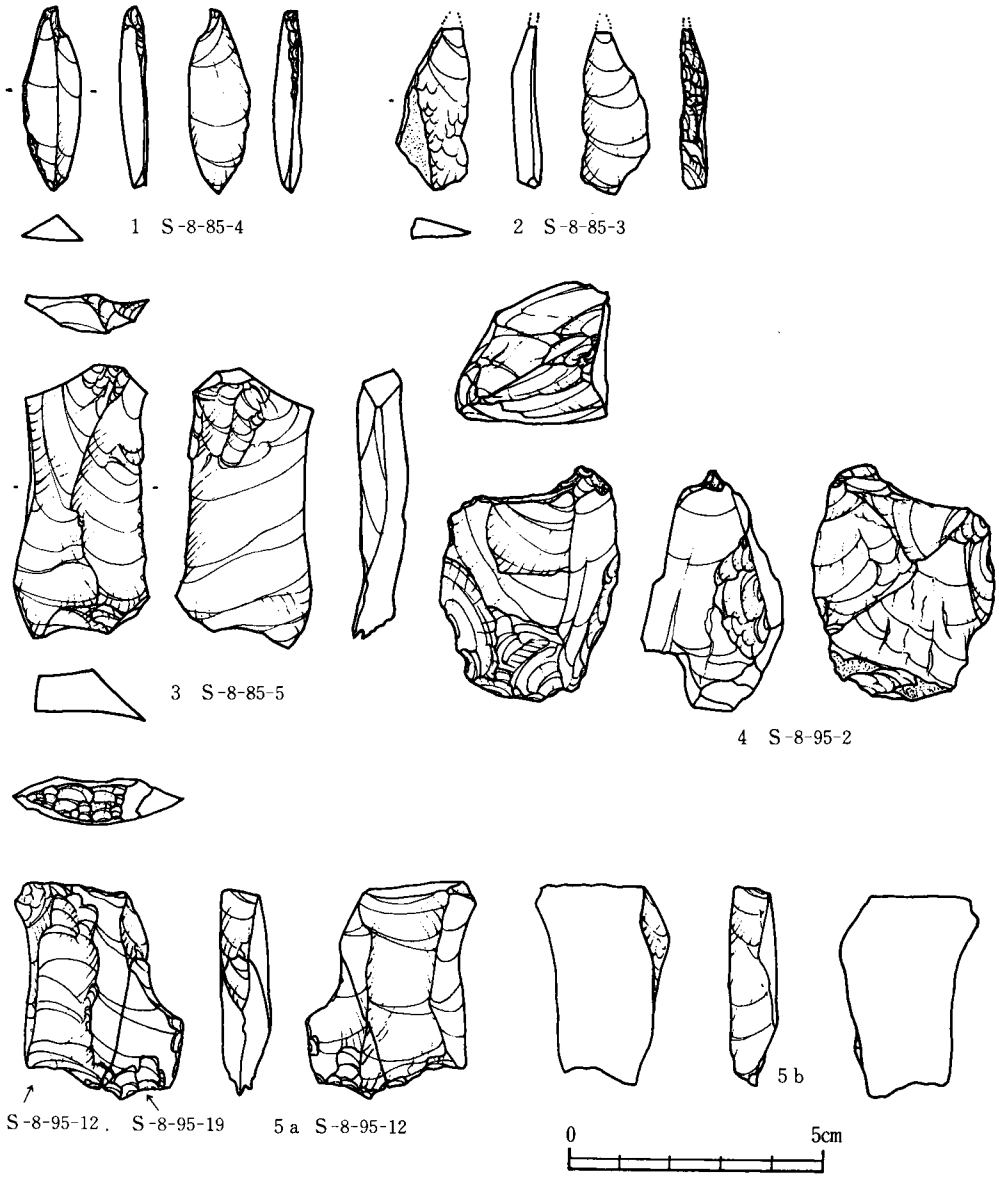


図121　第44ブロック出土遺物実測図(1)

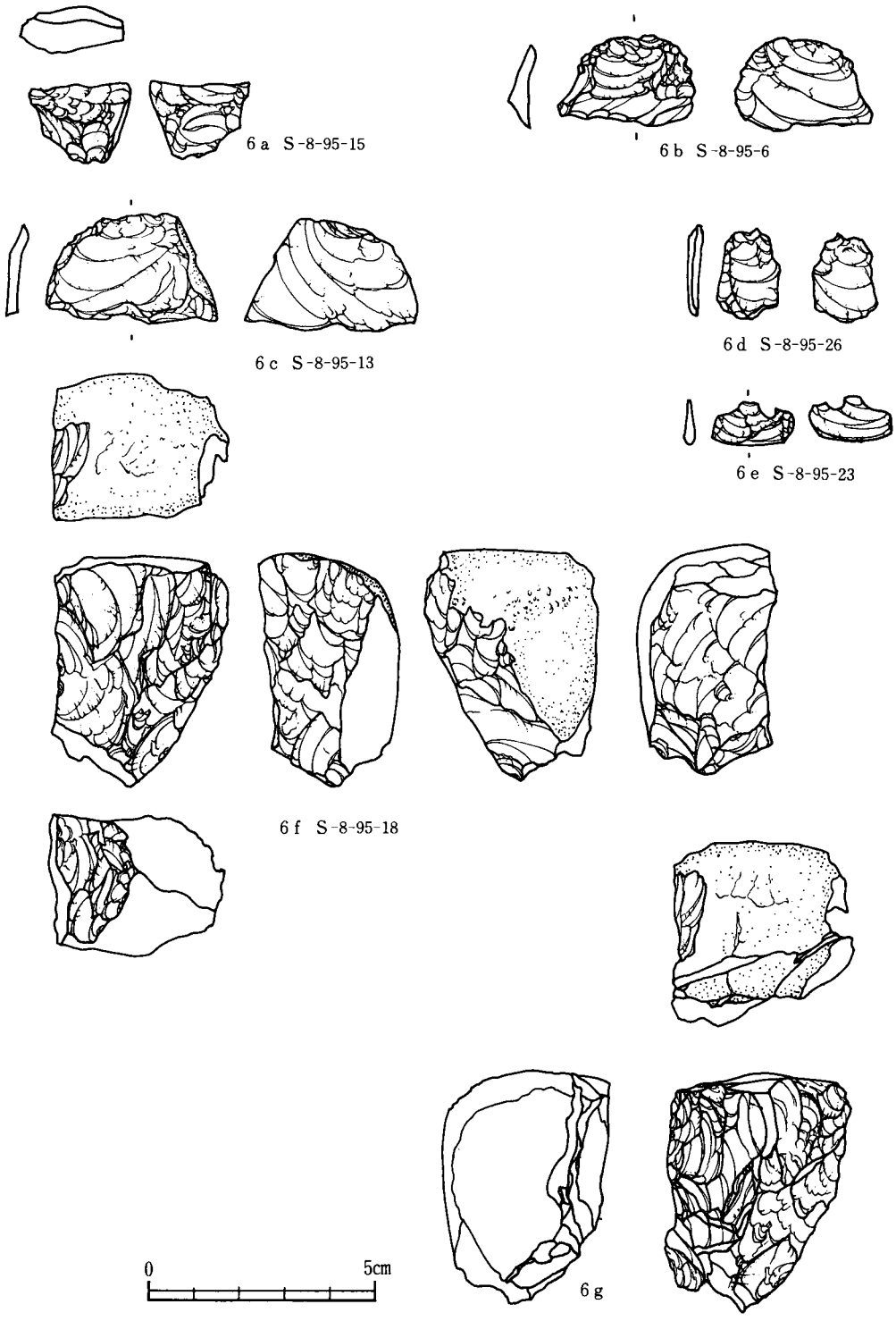


図122　第44ブロック出土遺物実測図(2)

13. 第46ブロック（図123、124、図版27、表180～183）

出土状況　VI層中位からVII a 層にかけて出土しているが、最も集中する層準はVII a 層である。レベル差は最大で 50 cm で、 30 cm の幅で接合関係がみられる。平面分布は、径4.3m×2.8mの規模となっており、均一な分布密度を呈している。

出土遺物　総計17点出土した。石器組成は、削器１点、剝片７点、砕片９点となっている。１は幅広で横に近い剝片を素材として１側辺に１背面側より主要剝離面側にむかって連続的な２次加工がみられる。また、背面側の先端部にも同様に２次加工が存在する。

母岩別資料・接合資料　石材は２種あり、黒曜石および、珪質頁岩となっている。そのうち数量的に優位にある石材は珪質頁岩である。母岩別資料では、珪質頁岩２が注目すべき母岩である。この母岩は色調、爽雑物などの特徴から他のブロックとは全く異質の母岩であることが理解された。また、接合資料があり（接合資料１）、平坦な単設打面より長軸方向に縦長剝片を生産したことが窺える。

まとめ　本ブロックは数量に乏しいがVII a 層段階の剝片生産技術を反映したブロックとして認定しうる。

表180　第46ブロック出土石器組成表

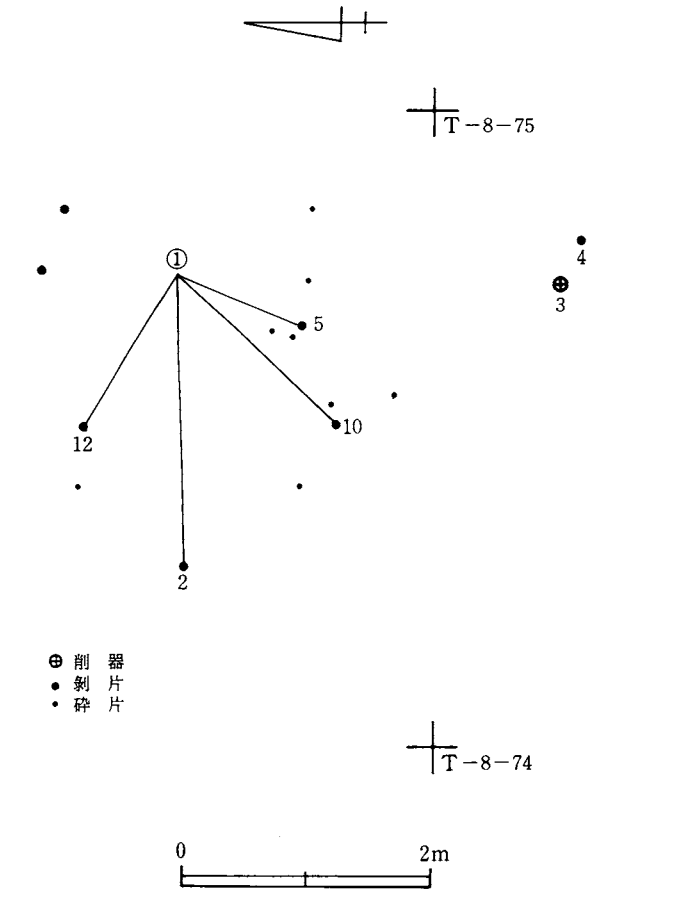
石材／器種	珪質頁岩		黒曜石		計	
	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	－	－	－	－	－	－
角錐状石器	－	－	－	－	－	－
木葉形尖頭器	－	－	－	－	－	－
削片	－	－	－	－	－	－
石錐	－	－	－	－	－	－
掻器	－	－	－	－	－	－
削器	1	7.7	－	－	1	5.9
ピエス・エスキーユ	－	－	－	－	－	－
彫刻刀形石器	－	－	－	－	－	－
二次加工ある剝片	－	－	－	－	－	－
使用痕ある剝片	－	－	－	－	－	－
石斧	－	－	－	－	－	－
剝片	5	38.5	2	50	7	41.1
砕片	7	53.8	2	50	9	53.0
石核	－	－	－	－	－	－
台石	－	－	－	－	－	－
敲石	－	－	－	－	－	－
計	13	76.5	4	23.5	17	100
礫片	－	－	－	－	－	－

表181　第46ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	敲石	計
珪質頁岩　1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	1
珪質頁岩　2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	4	7	－	－	11
珪質頁岩　3	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1
黒曜石　1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	2	－	－	4
計	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	7	9	－	－	17

表182　第46ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	珪質頁岩２	剝片４	T-8-64-12→T-8-64-2→T-4-64-5→T-8-64-10	4



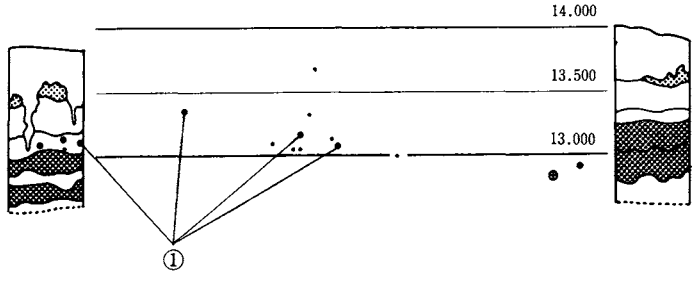


図123　第46ブロック遺物出土状況図

表183　第46ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器　種	大きさ cm			刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面(ノ)存否	欠損(ノ)有無	欠損部位	使用痕	石　材
			長さ	幅	厚										
1	T-8-74-3	削　器	5.4	1.5	0.7	60°	13.5	1		有	有	有	側辺	有	珪質頁岩

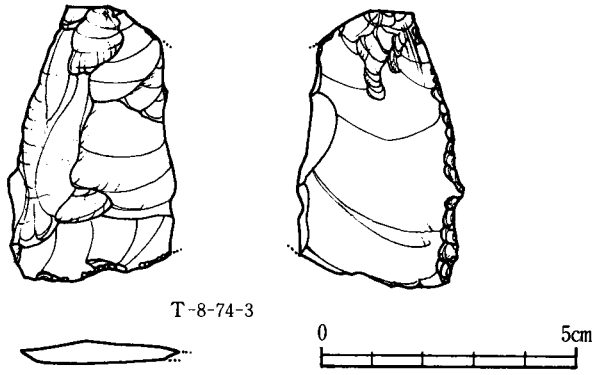


図124　第46ブロック出土遺物実測図

14. 第47ブロック（図125～128、図版21－3、27、表184～187）

出土状況　ソフトローム下部より出土しているが、特にⅦa層より多量の出土をみた。最大レベル差約60cmで、全体としてほぼ水平に堆積している。平面分布は、径5.1m×3.0mで、ブロック内は良くまとまっている。約5m離れ隣接した第48ブロックとの接合関係があり、同時性がみとめられる。器種ごとの分布に偏りはみられない。

出土遺物　総計93点出土した。石器組成はナイフ形石器を1点、ピエス・エスキーユ2点、2次加工のある剝片1点、剝片43点、砕片41点、石核2点となっている。1はナイフ形石器である。横長に近い剝片を素材としており2側辺加工で、全体の形状はほぼ切り出し形に近いが、先端が欠損しているため断定はできない。2、3aはピエス・エスキーユである。両者は互いに同一母岩の関係にある。いずれもぶ厚い剝片を素材としており、長軸方向の上下端に刃つぶれがみられる。3aは削片とピエス・エスキーユとの接合資料である。4は2次加工のある剝片である縦長剝片を素材として、1側辺の表裏に部分的に2次加工が施されている。先端部は欠損している。

表184　第47ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	安山岩		珪質頁岩		頁岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	－	－	－	－	1	9.1	1	1.1
角錐状石器	－	－	－	－	－	－	－	－
木葉形尖頭器	－	－	－	－	－	－	－	－
削片	－	－	3	15.0	－	－	3	3.2
石錐	－	－	－	－	－	－	－	－
掻器	－	－	－	－	－	－	－	－
削器	－	－	－	－	－	－	－	－
ピエス・エスキーユ	－	－	2	10.0	－	－	2	2.2
彫刻刀形石器	－	－	－	－	－	－	－	－
二次加工ある剝片	－	－	1	5.0	－	－	1	1.1
使用痕ある剝片	－	－	－	－	－	－	－	－
石斧	－	－	－	－	－	－	－	－
剝片	41	66.2	1	5.0	1	9.1	43	46.1
砕片	19	30.6	13	65.0	9	81.8	41	44.1
石核	2	3.2	－	－	－	－	2	2.2
台石	－	－	－	－	－	－	－	－
敲石	－	－	－	－	－	－	－	－
計	62	66.7	20	21.5	11	11.8	93	100
礫片	－	－	－	－	－	－	－	－

母岩別資料・接合資料　石材は3種、母岩別資料は7種の母岩を識別した。石材ごとの組成では、安山岩が圧倒的な数量を示す。珪質頁岩がこれに次ぐ。安山岩は同一母岩であり、剝片42点、砕片18点、石核2点を石器組成とする。剝片はいずれも平坦な打面を有する横長剝片であり、背面側の一部に円礫の自然面を残存させるものも散見される。母岩別資料はピエス・エスキーユと削片との接合例（接合資料7）を含む珪質頁岩3が注目される。接合資料としては、円礫を原材として表裏に求心的な剝離方向をとどめる接合資料6、接合資料5などが重要である。

まとめ　剝片、砕片、石核を組成とする安山岩製石器群を主体としており、全体としては剝片生産を反映しているブロックと言える。接合資料により第48ブロックとの同時併存が捉えられた。

表185　第47ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	削片	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	敲石	計
珪質頁岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	5	—	—	6
珪質頁岩　2	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	2	10	—	—	13
珪質頁岩　3	—	—	—	2	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	4
珪質頁岩　4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1
頁　岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	3	—	—	4
頁　岩　2	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	3
安山岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	42	18	2	—	62
計	1	—	—	3	—	—	—	2	—	1	—	—	46	38	2	—	93

表186　第47ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内　訳	内　容	数量
1	安山岩 1	剝片 2	S-9-7-1(剝片)＋S-9-39-21(剝片) (S-49)	2
2	安山岩 1	剝片 2	S-9-18-19(剝片)＋S-9-38-10(剝片) (S-49)	2
3	安山岩 1	剝片 4	S-9-28-5(剝片)＋S-9-39-52(剝片)→S-9-39-28(剝片)＋S-9-39-10(剝片)	4
4	安山岩 1	剝片 5	S-9-28-1(剝片)＋S-9-39-39(剝片)→S-9-39-9(剝片)→S-9-18-6(剝片)→S-9-38-14(剝片) (S-49)	5
5	安山岩 1	剝片 1 石核 1	S-9-39-47(剝片)→S-9-39-14(石核)	2
6	安山岩 1	剝片 4 石核 1	S-9-39-19(剝片) S-9-38-2 (剝片) } →{ S-9-38-6 (剝片) S-9-38-24(剝片) } →S-9-39-46(石核)	5
7	珪質頁岩 3	ピエス・エスキーユ スポール 1 ピエス・エスキーユ 1	S-9-39-25 (ピエス・エスキーユ、スポール)→S-9-39-26(ピエス・エスキーユ)	2

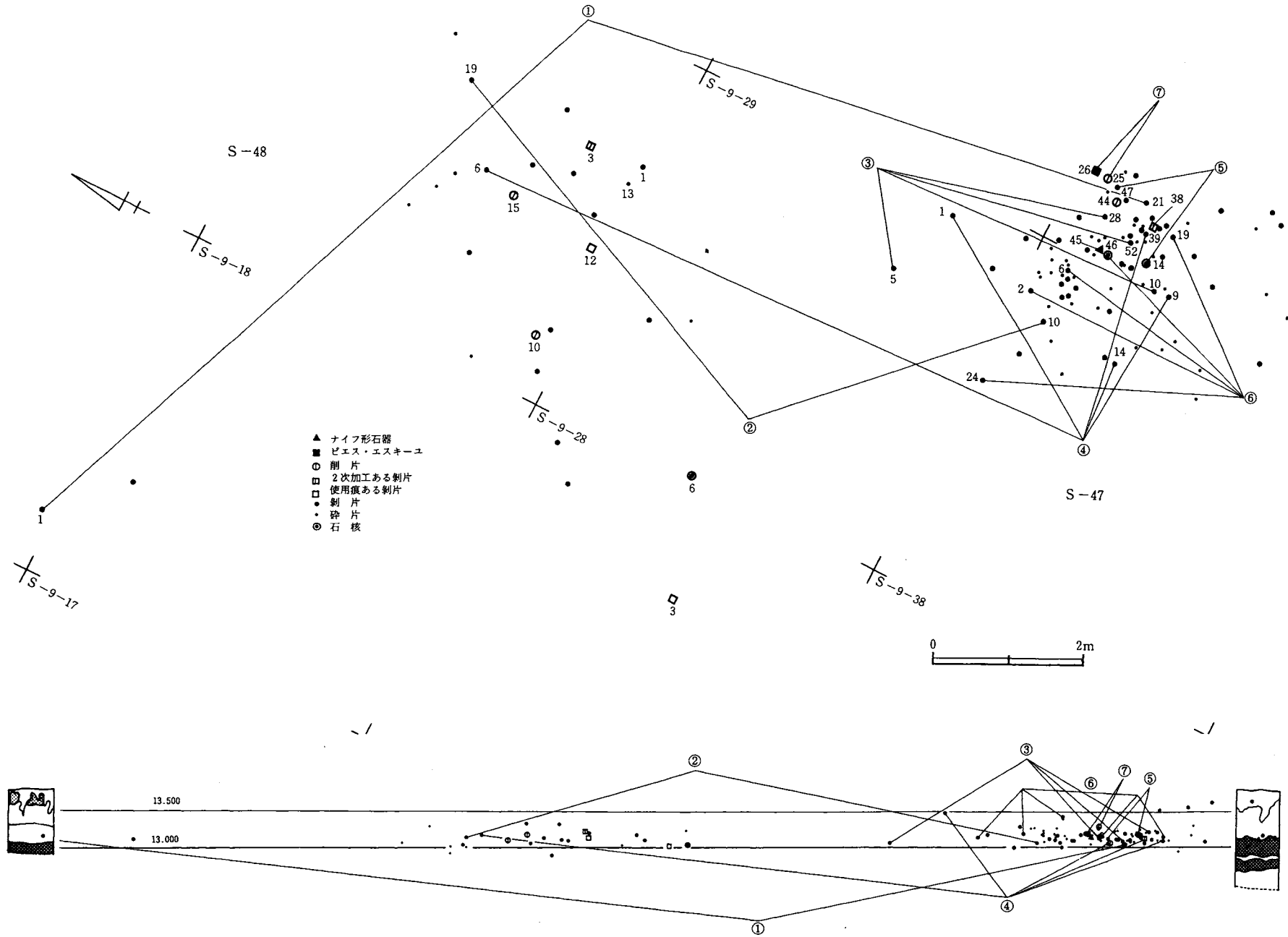


図125　第47・48ブロック遺物出土状況図

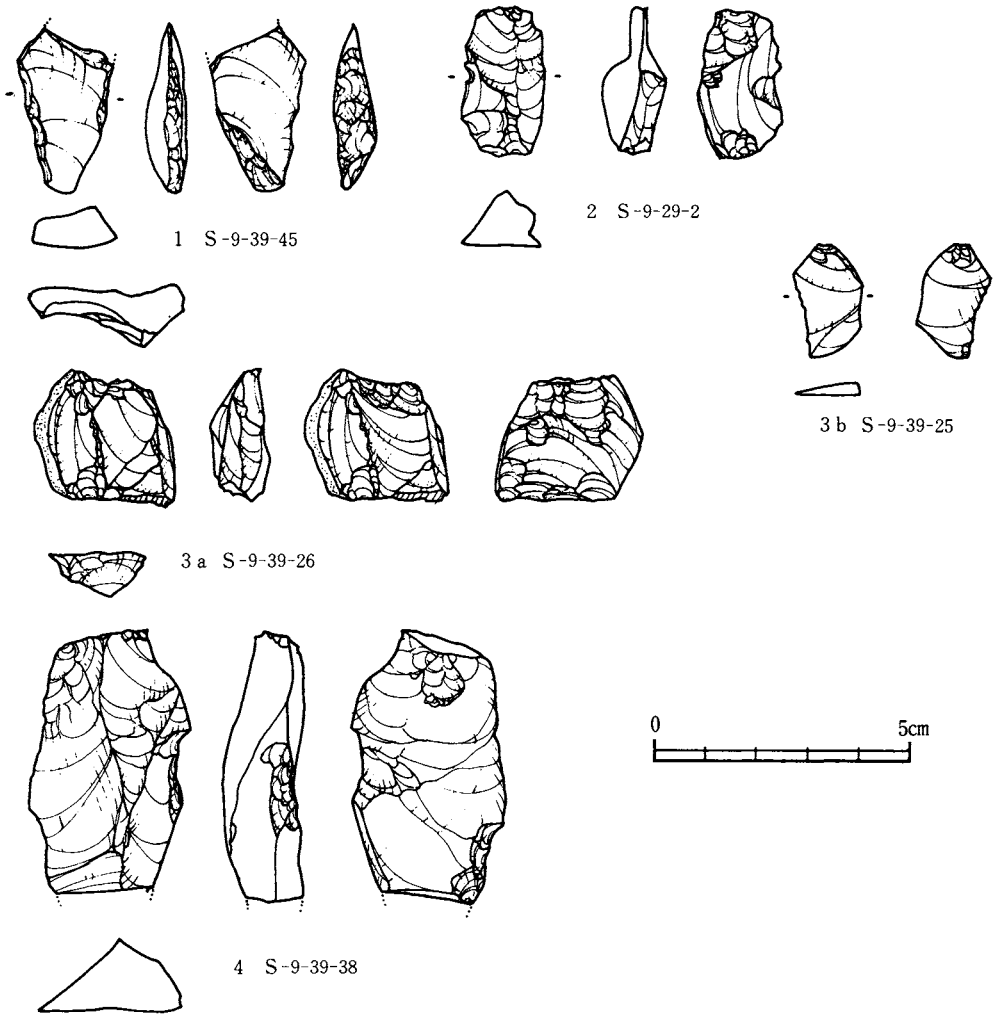


図126　第47ブロック出土遺物実測図(1)

表187　第47ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm			刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材
			長さ	幅	厚										
1	S-9-39-45	ナイフ形石器	3.3	1.9	0.4	不明	5.2	1	二側辺加工	無	有	有	先端	不明	頁岩
2	S-9-39-26	ピエス・エスキーユ	2.6	2.9	0.9	35° 50°	3.6	3a	上下両端	—	無	無	—	無	珪質頁岩
3	S-9-29-2	ピエス・エスキーユ	3.0	1.7	1.2	90° 25°	4.8	2	上下両端	—	無	無	—	無	珪質頁岩
4	S-9-39-38	二次加工ある剝片	5.0	3.2	1.4	80° 80°	25.0	4	二側辺加工(部分的)	有	有	有	先端	無	珪質頁岩
5	S-9-39-14	石核	3.3	4.2	1.9	—	23.2	6b	—	—	有	無	—	—	安山岩
6	S-9-39-46	石核	2.7	4.0	2.2	—	26.9	5e	—	—	有	無	—	—	安山岩

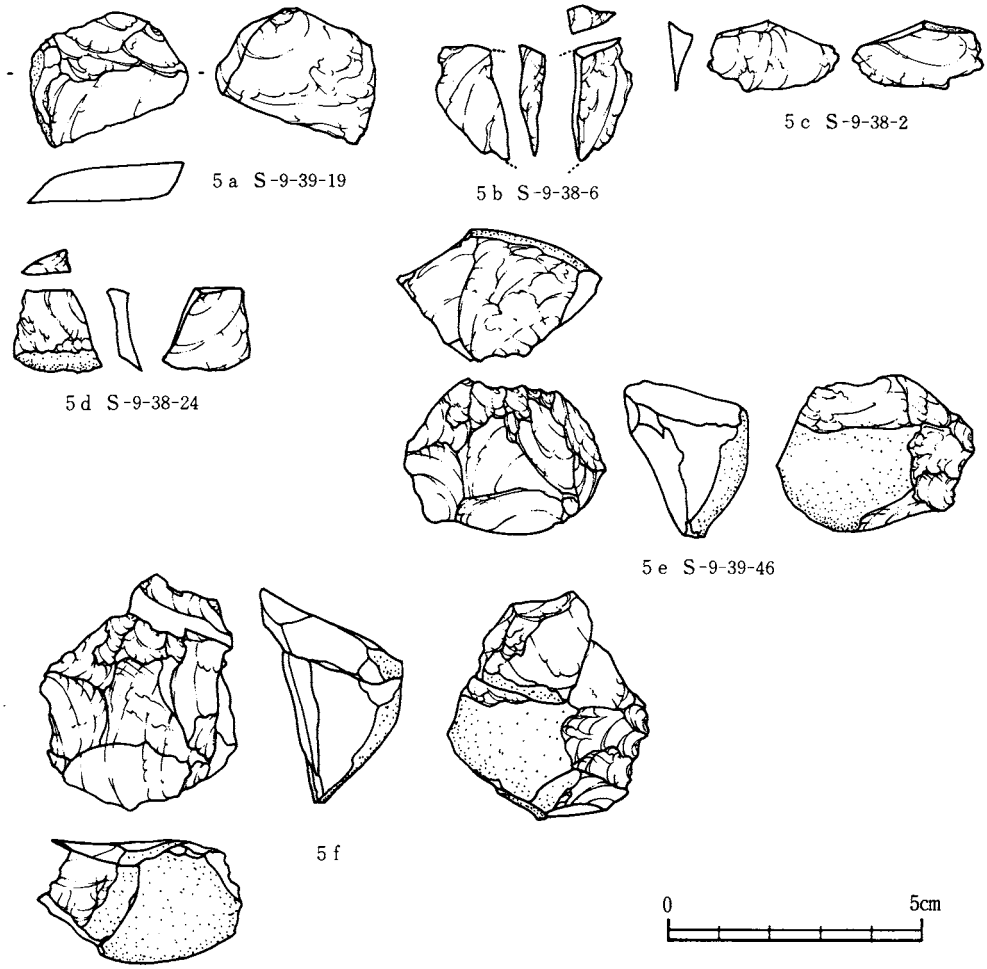


図127　第47ブロック出土遺物実測図(2)

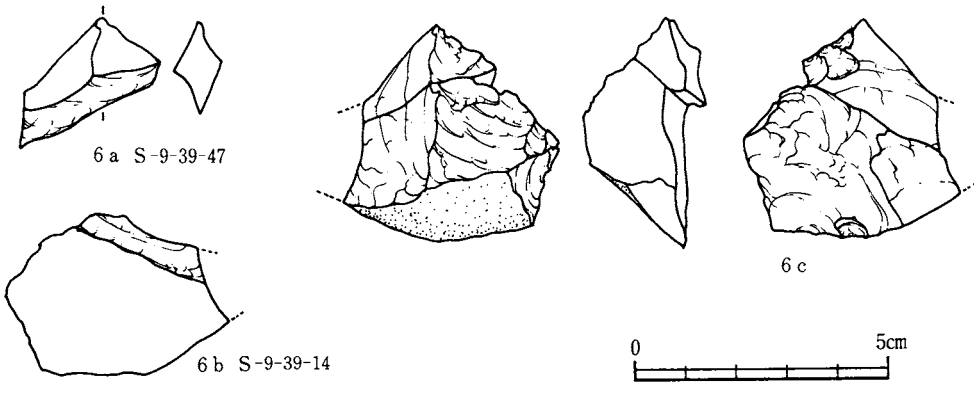


図128　第47ブロック出土遺物実測図(3)

15. 第48ブロック（図125、129、図版27、表188～190）

出土状況　VI層よりVII a層に至る層準より出土している。レベル差約60cmで、平面分布は、径8.0m×8.0mとなっており、他のブロックに比べ大形である。分布密度は希薄であり、特に集中している部分はない。第47ブロックとの接合関係が知られ、15mの離れた石器どうしが接合した例がある（第47ブロック、接合資料1）。

出土遺物　総計26点出土した。石器組成は2次加工のある剝片1点、使用痕のある剝片2点、剝片15点、砕片5点、石核（片）1点となっている。1は2次加工のある剝片である。上端が欠損した厚手の剝片を素材として主要剝離面側に平坦な2次加工が部分的に施されている。2は石核の断片である。チャートの円礫を原材として概し

表188　第48ブロック出土石器組成表

器種＼石材	安山岩		珪質頁岩		チャート		玄武岩		粘板岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
角錐状石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
削片	—	—	—	—	—	—	—	—	2	40.0	2	7.7
掻器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
削器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ピエス・エスキーユ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剝片	—	—	1	16.7	—	—	—	—	—	—	1	3.8
使用痕ある剝片	—	—	1	16.7	—	—	—	—	1	20.0	2	7.7
石斧	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
剝片	8	72.7	3	49.9	2	66.7	—	—	2	40.0	15	57.8
砕片	3	27.3	1	16.7	—	—	1	100	—	—	5	19.2
石核	—	—	—	—	1	33.3	—	—	—	—	1	3.8
台石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	11	42.3	6	23.1	3	11.5	1	3.9	5	19.2	26	100
礫片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

表189　第48ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	削片	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	敲石	計
珪質頁岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	1	—	3
珪質頁岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	2	—	—	—	3
珪質頁岩　3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1
粘板岩　1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	3
粘板岩　2	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1	—	1	1	—	—	4
安山岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2	—	—	4
安山岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
安山岩　3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
安山岩その他	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	1	—	—	3
計	—	—	—	2	—	—	—	—	—	1	2	—	12	5	1	—	23

て平坦な自然面を打面として不規則な方向に加撃している。生産された剝片は不定形を呈する。

母岩別資料・接合資料　石材は3種類、母岩別資料は9母岩以上を数える。総じて剝片、砕片が多くみられるが、その中で粘板岩を石材とする2母岩は、ピエス・エスキーユの削片を含んでいる。ピエス・エスキーユは本ブロックに存在しない。その他の母岩別資料の石器組成については互いに大きな差異はみられない。接合資料は第47ブロックの接合資料一覧表にすべて記載した。したがってここでは解説を省くこととする。

まとめ　石核片、2次加工のある剝片、ピエス・エスキーユの削片等、利器の中に破損例が多くみられ、廃棄の色彩が濃い。

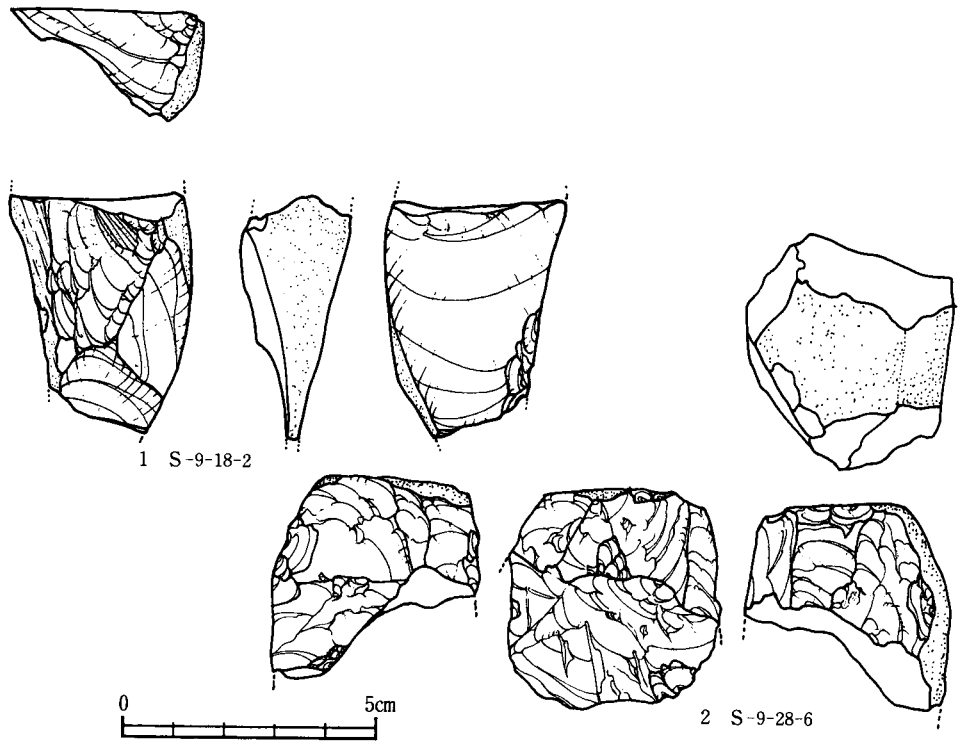


図129　第48ブロック出土遺物実測図

表190　第48ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm			刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材
			長さ	幅	厚										
1	S-9-18-3	二次加工ある剝片	2.9	1.5	0.8	60°	2.8	—	不明	無	不明	有	断片	有	珪質頁岩
2	S-9-18-12	使用痕ある剝片	4.5	3.6	2.0	60°	17.2	—	—	—	無	有	基部先端	一側辺	粘板岩
3	S-9-27-3	使用痕ある剝片	2.5	1.9	0.8	65°	2.6	—	—	—	有	無	—	一側辺	珪質頁岩
4	S-9-28-6	石核	4.0	3.9	3.2	—	64.7	2	—	有	有	有	半割	—	チャート

16. 第49ブロック（図130、131、図版22—1、27、表191～194）

出土状況　ソフトローム下部よりⅦa層上部に至るまで、幅広く分布している。最大レベル差60cmである。一方、平面分布は6.2m×3.1mの規模となっており、南西側に集中部分がある。

出土遺物　総計37点出土した。石器組成はナイフ形石器1点、剥片30点、砕片5点、石核1点となっている。1はナイフ形石器である。縦長剥片を素材としており2側辺加工、4は石核としたが削器の可能性もある。2、3、5～7は剥片である。2、6は縦長剥片であり、3、5、7は横長剥片である。

母岩別資料・接合資料　石材は珪質頁岩1種類に限定される。母岩は3種あり、いずれも剥片、砕片が主体となっている。接合資料は1例ある。縦長剥片どうしの接合例である。

まとめ　石材が1種類に限定されること、また、剥片生産技術に縦長剥片を生産する技術が窺われる点が注目される。

表191　第49ブロック出土石器組成表

石材／器種	珪質頁岩		計	
	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	1	2.7	1	2.7
角錐状石器	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—
削片	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—
削器	—	—	—	—
ピエス・エスキーユ	—	—	—	—
彫刻刀形石器	—	—	—	—
二次加工ある剥片	—	—	—	—
使用痕ある剥片	—	—	—	—
石斧	—	—	—	—
剥片	30	81.1	30	81.1
砕片	5	13.5	5	13.5
石核	1	2.7	1	2.7
台石	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—
計	37	100	37	100
礫片	—	—	—	—

表192　第49ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	敲石	計
珪質頁岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	11	2	—	—	13
珪質頁岩　2	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8	3	—	—	12
珪質頁岩　3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9	—	1	—	10
計	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	28	5	1	—	35

表193　第49ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材
1	T-9-81-2	ナイフ形石器	2.6	1.1	0.5	30°	1.2	1	二側辺加工	有	無	有	先端	有	珪質頁岩
2	T-9-82-2	石核	4.5	3.6	1.4	—	20.2	4	—	—	有	有	先端	—	珪質頁岩

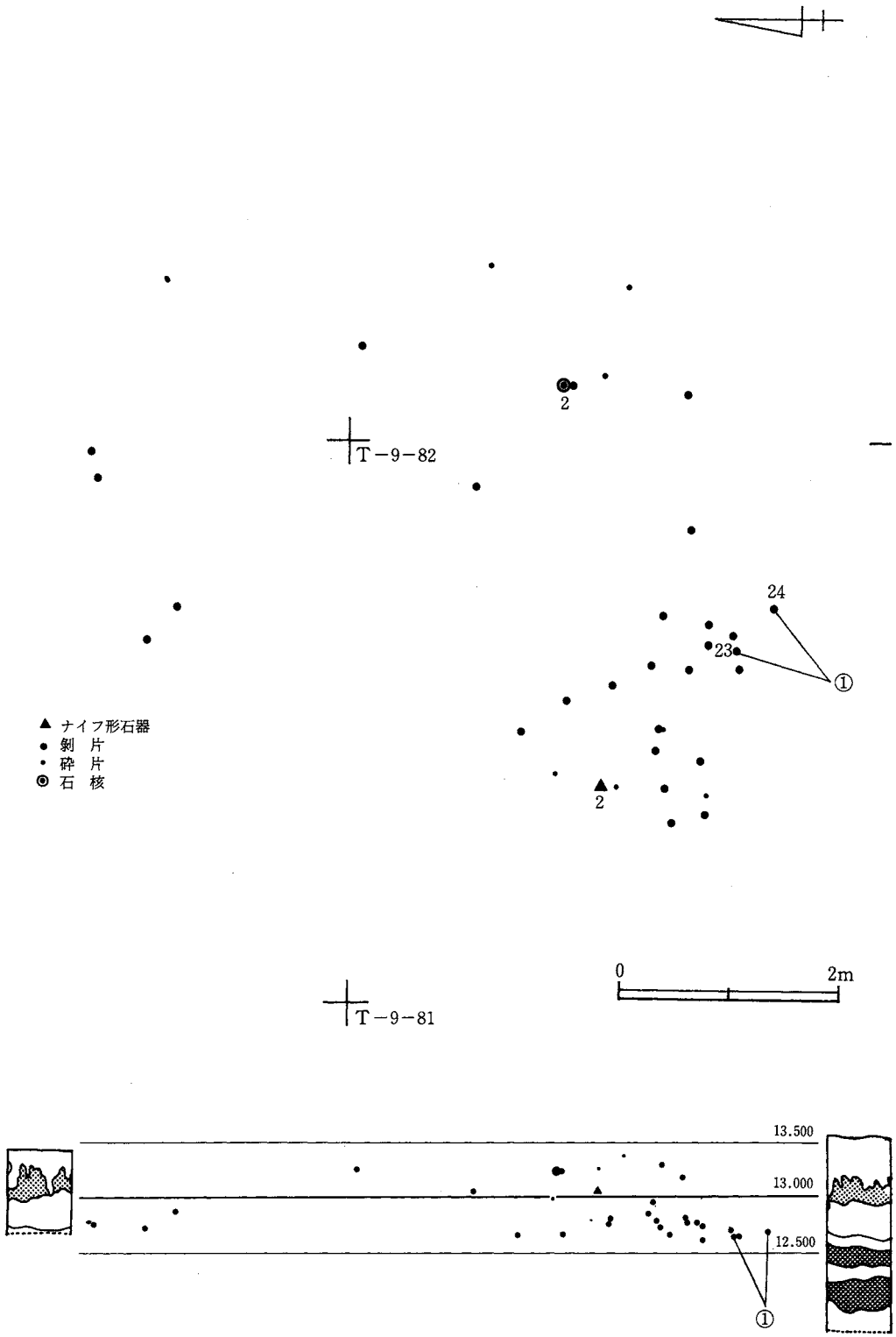


図130　第49ブロック遺物出土状況図

表194　第49ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内　訳	内　容	数量
1	珪質頁岩2	剝片2	T-9-81-23(剝片)→T-9-81-24(剝片)	2

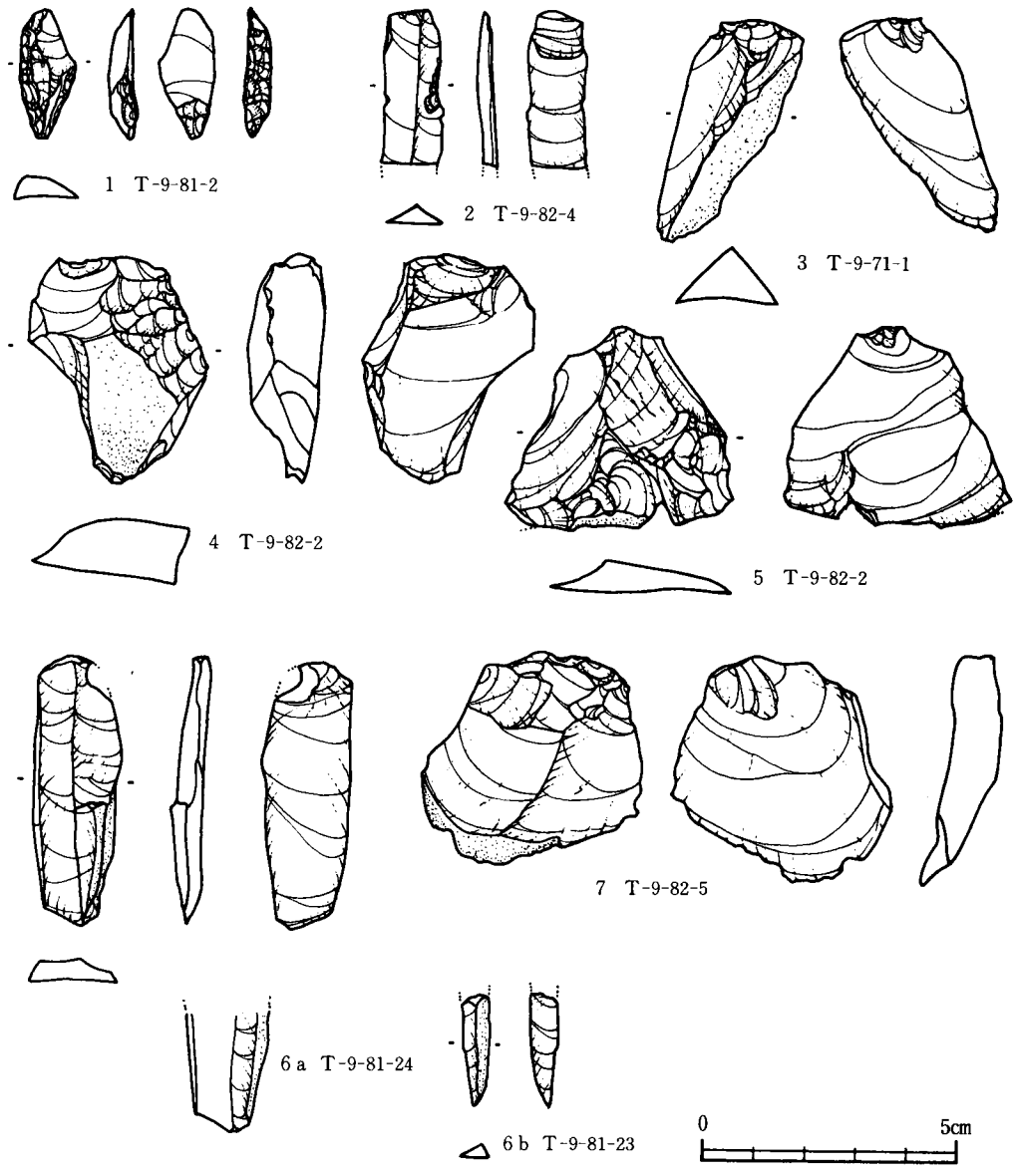


図131　第49ブロック出土遺物実測図

17. **第50ブロック**（図132、133、図版22—2、27、28、表195～198）

出土状況　VI層よりVIIa層に至る層準より出土しており、特にVIIa層より出土量が顕著である。ほぼ水平に堆積しており、レベル差は約40cmとよくまとまっている。平面分布は、南北

に細長く帯状を呈し、径8.0m×3.0mとなっている。ほとんど均一な分布密度で、器種ごとの分布に偏りはみられない。

出土遺物　総計37点出土した。石器組成はナイフ形石器1点、削器1点、ピエス・エスキーユ2点、2次加工のある剝片1点、使用痕のある剝片2点、剝片24点、砕片2点、石核1点、敲石1点となっている。1はナイフ形石器である。縦長剝片を素材として、素材の先端部を斜めに整形している。2、3はピエス・エスキーユ、上下両端に刃つぶれが観察される。2には1側辺に截断面が存在する。4・5は使用痕のある剝片であり、共に両側辺に刃こぼれが存在する。6は削器の断片である。7は縦長剝片の先端部に部分的に2次加工が施されている。8は石核

表195　第50ブロック出土石器組成表

器種＼石材	メノウ		珪質頁岩		頁岩		安山岩		不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	—	—	1	20.0	—	—	—	—	—	—	1	2.7
角錐状石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
削片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
削器	—	—	1	20.0	—	—	—	—	—	—	1	2.7
ピエス・エスキーユ	2	12.5	—	—	—	—	—	—	—	—	2	5.4
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剝片	1	6.2	—	—	—	—	—	—	—	—	1	2.7
使用痕ある剝片	1	6.2	—	—	1	10.0	—	—	—	—	2	5.4
石斧	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
剝片	11	68.9	2	40.0	8	80.0	3	100	—	—	24	64.9
砕片	—	—	1	20.0	1	10.0	—	—	—	—	2	5.4
石核	1	6.2	—	—	—	—	—	—	—	—	1	2.7
台石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—	—	—	(3)	100	(3)	8.1
計	16	43.3	5	13.5	10	27.0	3	8.1	3	8.1	37	100
礫片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

表196　第50ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	敲石	計
珪質頁岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
珪質頁岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
珪質頁岩　3	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
珪質頁岩　4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
珪質頁岩　5	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
頁岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8	—	—	—	8
安山岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	3
メノウ　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	2	—	—	—	3
メノウその他	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	2	—	7	1	1	—	13
不明　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	4
計	1	—	—	—	—	—	1	2	—	1	2	—	23	1	1	4	36

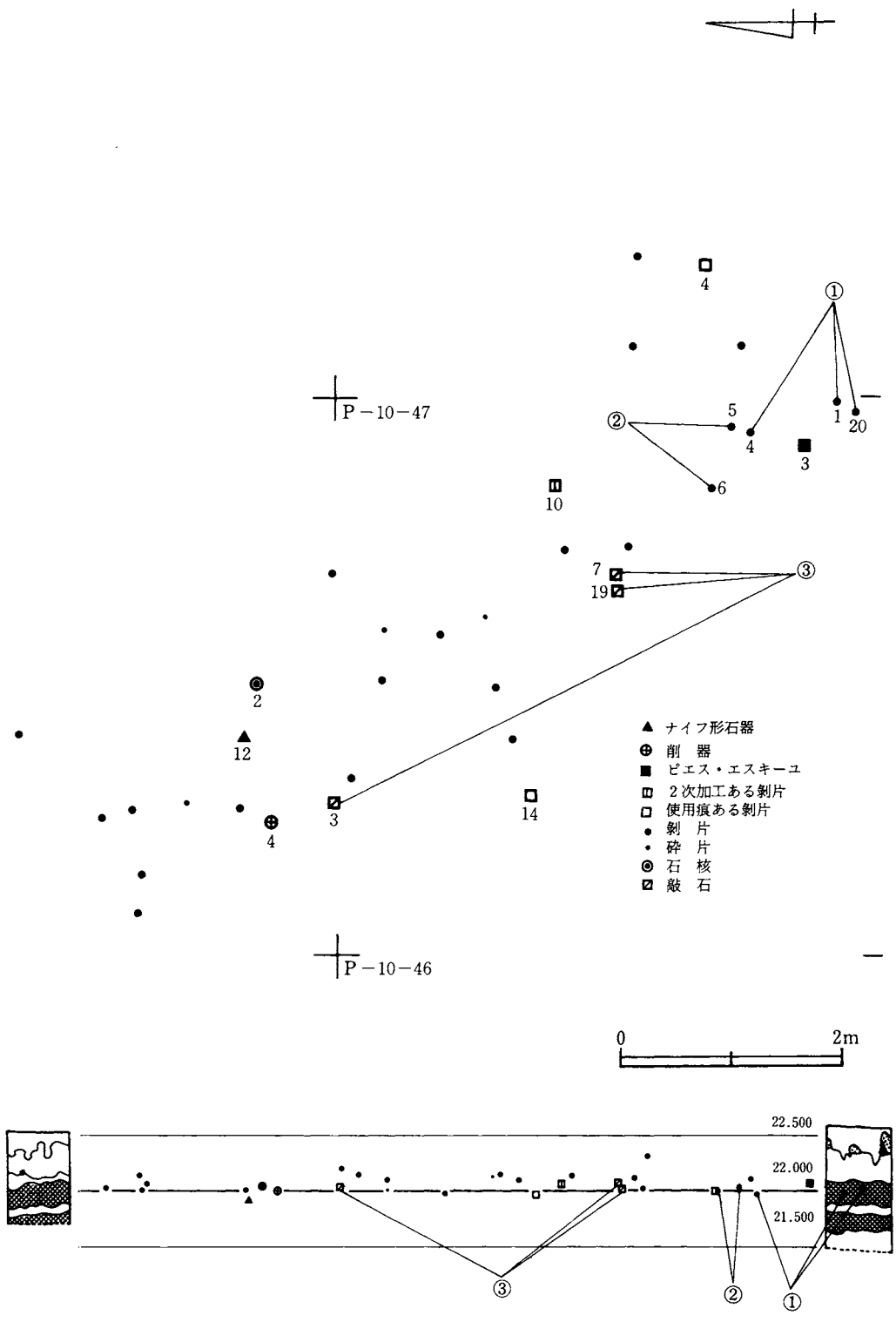


図132　第50ブロック遺物出土状況図

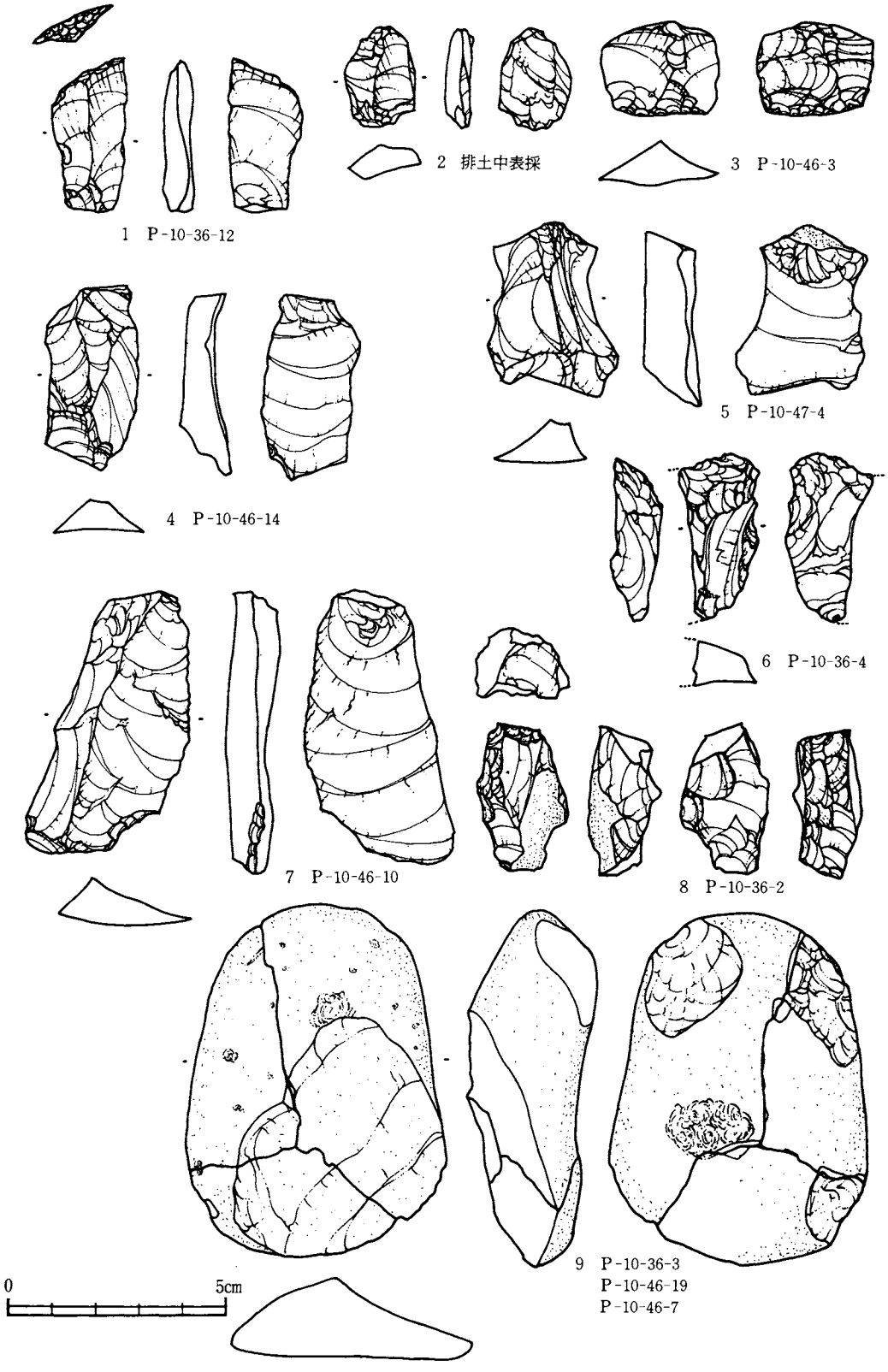


図133　第50ブロック出土遺物実測図

としたが、削器の2次加工と思われる。9は敲石である。表裏に敲打痕が存在するが加熱され、破砕した資料である。

母岩別資料・接合資料　石材は不明1種を含めると5種、母岩は10種以上が識別できた。石材としてはメノウが大勢を占め、頁岩がこれに次ぐ。一方、母岩別資料については、利器としてナイフ形石器、削器が単独の資料となっている点が注目される。なお、メノウは、母岩別資料の識別が困難であったことを付記しておく。接合資料は3例あるが、いずれも、本ブロックの技術的側面、あるいは全体的な内容の評価に至るほどの資料ではない。

まとめ　技術的には縦長剝片が多くみられ、利器も縦長剝片を素材としたものが存在する点が注目される。石材としてはメノウが大量にみられる点が本遺跡の他のブロックに比べ特異である。

表197　第50ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内　訳	内　容	数量
1	安山岩1	剝片3	P-10-46-20(剝片) P-10-46-4 (剝片) } →P-10-46-1(剝片)	3
2	メノウ その他	剝片2	P-10-46-5(剝片)＋P-10-46-6(剝片)	2
3	不明1	敲石3	P-10-46-7(敲石)＋P-10-46-19(敲石)＋P-10-36-3(敲石)	3

表198　第50ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm			刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材	その他
			長さ	幅	厚											
1	P-10-36-12	ナイフ形石器	3.5	1.7	0.6	35° 40°	2.9	1	先端	無	有	無	—	二側辺	安山岩	
2	P-10-36-4	削器	3.8	1.9	1.0	55°	7.1	6	不明	無	無	有	断片	無	珪質頁岩	
3	P-10-46-3	ピエス・エスキーユ	2.2	2.8	1.1	40° 55° 85°	7.0	3	上下両端 左右両端	—	無	無	—	無	メノウ	
4	排土中	ピエス・エスキーユ	2.3	1.6	0.6	55° 60°	3.7	2	上下両端	—	無	無	—	無	メノウ	
5	P-10-46-10	使用痕ある剝片	4.2	2.3	1.0	50°	7.8	7	—	無	有	有	先端	一側辺	メノウ	
7	P-10-47-4	使用痕ある剝片	3.8	3.0	1.2	75°	2.5	5	—	無	有	無	—	一側辺	頁岩	
8	P-10-36-2	石核	3.3	1.9	2.1	—	11.3	8	—	—	有	無	—	—	メノウ	受熱
9	P-10-36-3 P-10-46-19 P-10-46-7	敲石	8.0	6.1	2.6	—	135.1	9	—	—	—	上	一端	有	不明	接合

18. 第52ブロック（図134～136、図版28、表199～202）

出土状況　Ⅶa層より出土している。過去の層理面に沿って、堆積している。最大レベル差30 cmで、平面分布は径4.7m×1.6mと帯状を呈している。小規模で疎密に差がほとんどみられない。

出土遺物　総計16点出土した。石器組成は、ナイフ形石器1点、削片1点、ピエス・エスキ

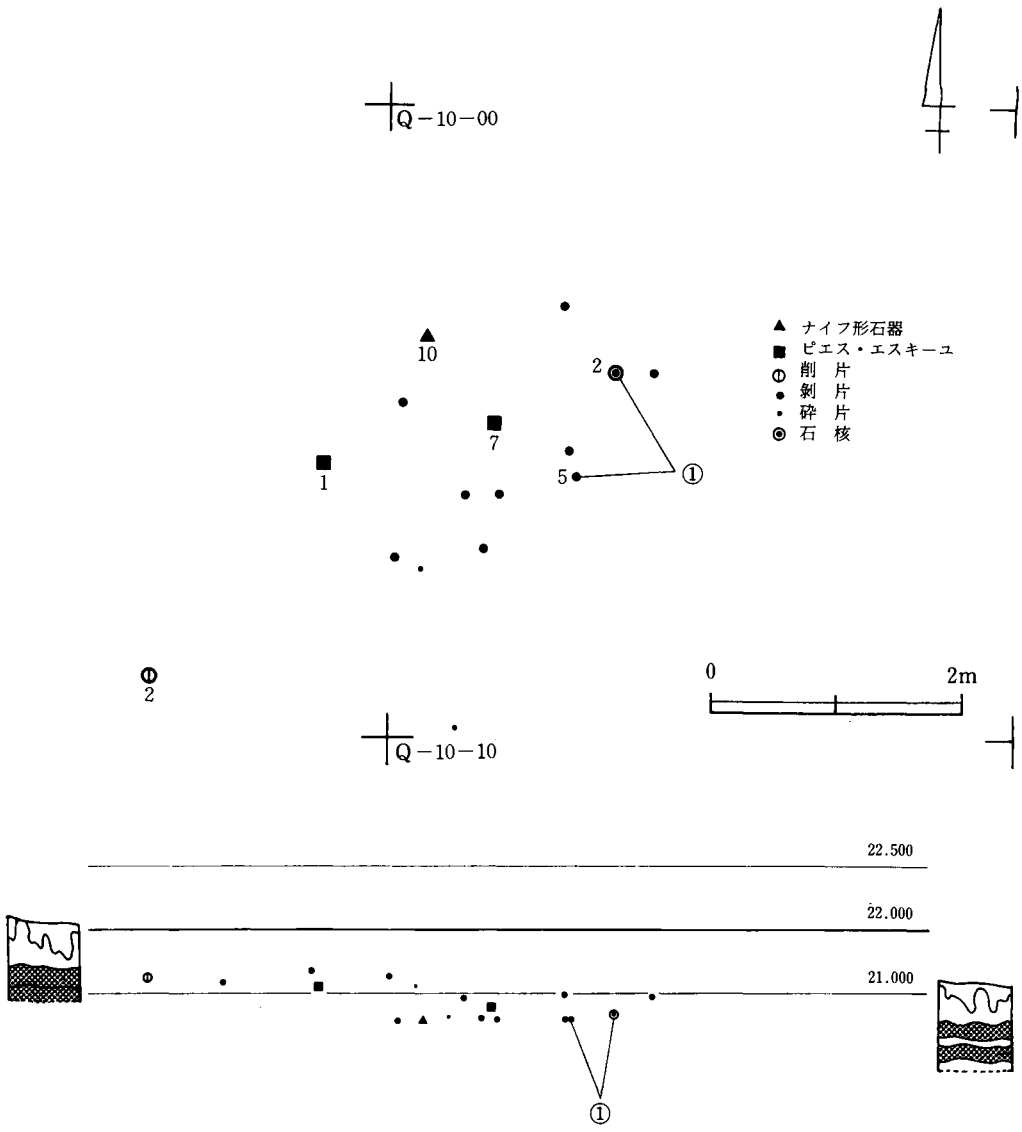


図134　第52ブロック遺物出土状況図

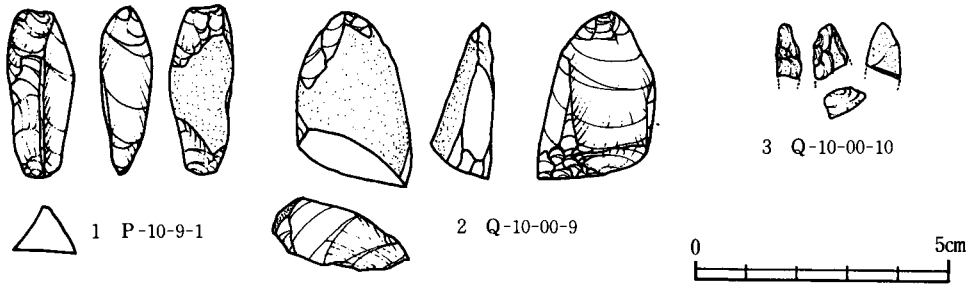


図135　第52ブロック出土遺物実測図(1)

ーユ2点、剝片9点、砕片2点、石核1点となっている。1、2はピエス・エスキーユで上下両端に細かな刃こぼれが観察される。3はナイフ形石器の先端部である。表面は風化が著しい。

母岩別資料・接合資料　石材は5種、母岩は9種以上識別し得た。石器群の数量の割合に、母岩が多いことが特徴となっている。注目すべき母岩としては頁岩2であり、ピエス・エスキーユ2点がこれにあたる。全般的に母岩別資料の各々はいずれも1～3点であり、互いに数量的な隔たりはみられない。接合資料は1例あり、石核と剝片との接合資料である。

まとめ　本ブロックでは母岩別資料が多岐にわたる点が指摘しうるが、全体として数量が乏しく、性格は不明である。

表199　第52ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	頁岩		珪質頁岩		チャート		黒曜石		メノウ		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	1	16.7	−	−	−	−	−	−	−	−	1	6.3
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削片	−	−	1	25.0	−	−	−	−	−	−	1	6.3
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ピエス・エスキーユ	2	33.3	−	−	−	−	−	−	−	−	2	12.5
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
使用痕ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
剝片	2	33.3	2	50.0	1	100	1	100	3	75.0	9	56.1
砕片	−	−	1	25.0	−	−	−	−	1	25.0	2	12.5
石核	1	16.7	−	−	−	−	−	−	−	−	1	6.3
台石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
計	6	37.4	4	25	1	6.3	1	6.3	4	25	16	100
礫片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−

表200　第52ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 / 器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	敲石	計
珪質頁岩　1	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	2
珪質頁岩　2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1
珪質頁岩　3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	1
チャート　1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1
頁岩　1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	1	−	3
頁岩　2	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−	2
頁岩　3	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
黒曜石　1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1
メノウ　1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	2
メノウその他	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−	−	2
計	1	−	−	1	−	−	−	2	−	−	−	−	9	2	1	−	16

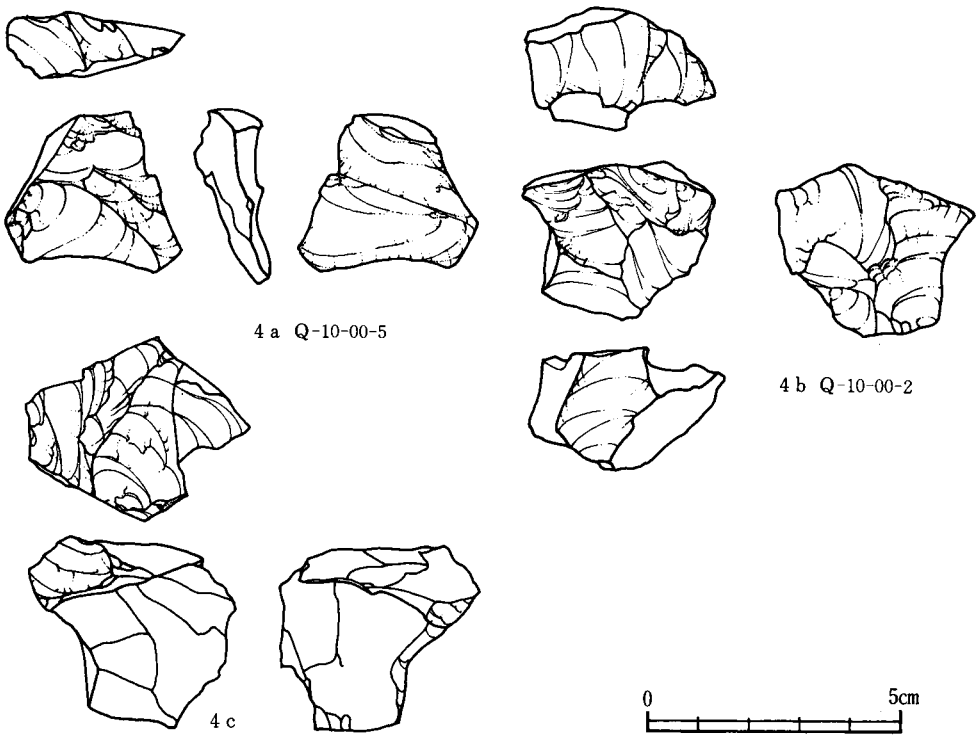


図136　第52ブロック出土遺物実測図(2)

表201　第52ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内　訳	内　容	数量
1	頁　岩　1	剝片 1 石核 1	Q-10-00-5(剝片)→Q-10-00-2(石核)	2

表202　第52ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器　種	大きさ cm			刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石　材
			長さ	幅	厚										
1	Q-10-00-10	ナイフ形石器	1.0	0.7	0.5	不明	0.3	3	不　明	不明	不明	有	先端部破片	不明	頁　岩
2	P-10-09-1	ピエス・エスキーユ	3.3	1.3	1.0	75° 50°	3.8	1	上下両端	—	無	無	—	無	頁　岩
3	Q-10-00-9	ピエス・エスキーユ	3.1	2.2	1.2	60° 45°	8.3	2	上下両端	—	無	無	—	無	頁　岩
4	Q-10-00-2	石　核	3.3	4.0	2.5	—	29.8	4b	—	—	有	無	—	—	頁　岩

19. 第53ブロック（図137、138、図版22—3、23—1、28、表203～206）

出土状況　ハードローム上部よりⅦa層に至る層準より出土している。特にⅦa層より集中して出土している。最大レベル差約 80 cm である。平面分布は、7.4m×8.6mとなっており、南北に 2 つの小規模な集中部分があり、それぞれ、その中でよく接合している。

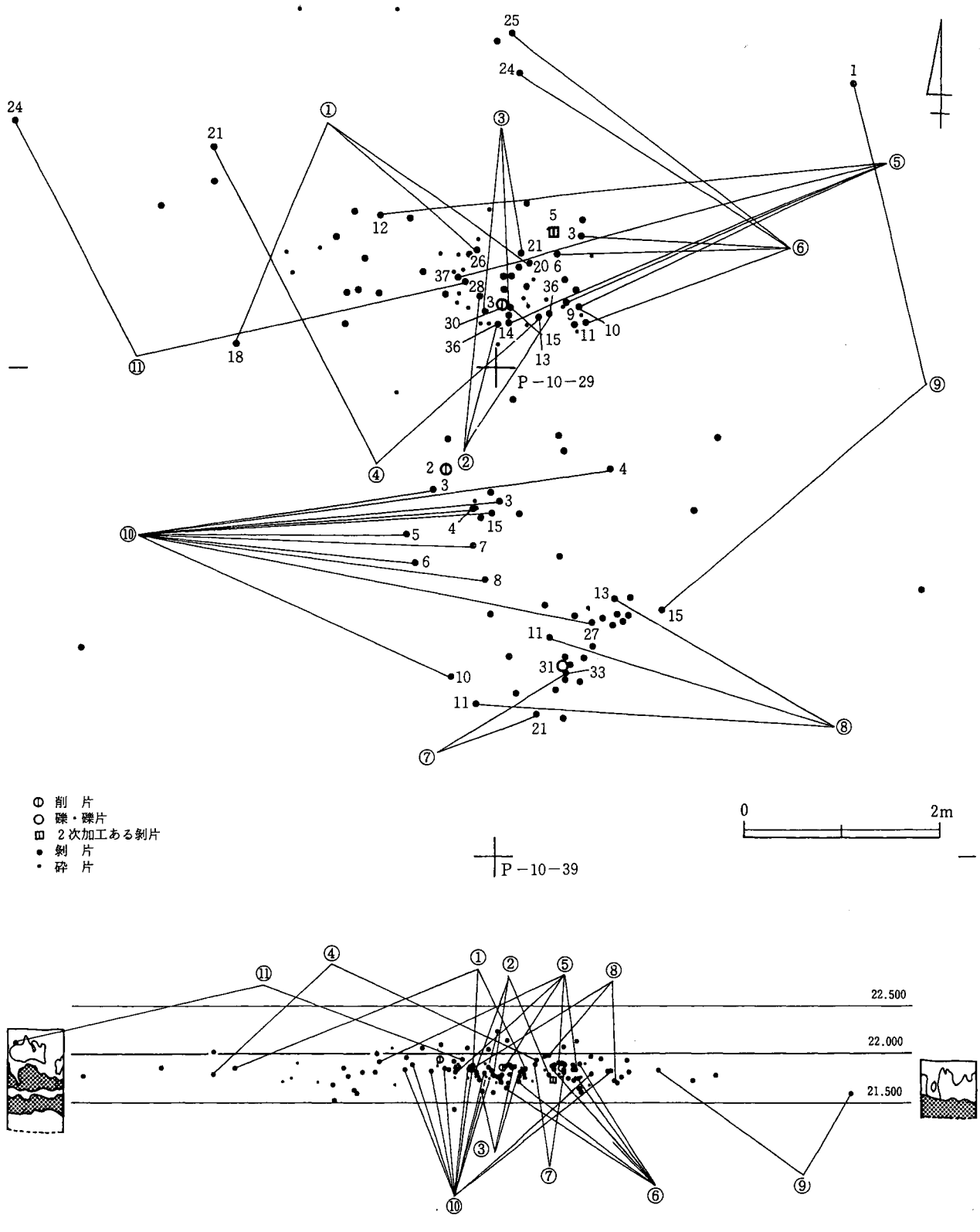


図137　第53ブロック遺物出土状況図

出土遺物　総計130点出土した。内訳は礫片１点、削片２点、２次加工のある剝片１点、剝片96点、砕片30点となっている。１は縦長剝片である。平坦な打面を有する単設打面と推定され

表203　第53ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	削片	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石	礫片	計
頁岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	36	18	—	—	54
頁岩 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
頁岩 3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
珪質頁岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
珪質頁岩 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
チャート 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
玄武岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	38	2	—	—	40
砂岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	3	—	—	7
砂岩 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1
砂岩 3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
安山岩 1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	5	2	—	—	8
メノウ 1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	5	2	—	—	8
黒曜石 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
黒曜石 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
計	—	—	—	2	—	—	—	—	—	1	—	—	92	30	—	1	126

表204　第53ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	頁岩 1	剝片３	P-10-18-18(剝片)→P-10-18-26(剝片)＋P-10-19-20(剝片)	3
2	頁岩 1	剝片３	P-10-18-3(剝片)＋P-10-19-38(剝片)→P-10-19-36(剝片)	3
3	頁岩 1	剝片３	P-10-18-36(剝片)→P-10-19-15(剝片)＋P-10-19-21(剝片)	3
4	頁岩 1	剝片２	P-10-19-13(剝片)＋P-10-18-21(剝片)	2
5	頁岩 1	剝片５	P-10-18-37(剝片)→P-10-18-12(剝片)＋P-10-19-10(剝片)→P-10-19-9(剝片)→P-10-19-14(剝片)	5
6	頁岩 1	剝片５	P-10-19-25(剝片)→P-10-19-11(剝片)→P-10-19-3(剝片)→P-10-19-6(剝片)→P-10-19-24(剝片)	5
7	玄武岩 1	剝片２	P-10-29-21(剝片)＋P-10-29-33(剝片)	2
8	玄武岩 1	剝片３	P-10-28-11(剝片)＋P-10-29-11(剝片)＋P-10-29-13(剝片)	3
9	玄武岩 1	剝片２	P-10-29-15(剝片)→P-10･19-1(剝片)	2
10	玄武岩 1	剝片14	P-10-28-5(剝片)→P-10･29-4(剝片)→P-10-28-10(剝片)→P-10-28-3(剝片) P-10-29-27(剝片) P-10-19-8(剝片) → P-10-28-6 P-10-28-7(剝片)＋P-10-28-8(剝片)、P-10-28-15(剝片)、P-10-28-4(剝片)	11
11	玄武岩 1	剝片２	P-10-18-28(剝片)→P-10-18-24(剝片)	2

る石刃石核より生産されたものと思われる。

母岩別資料・接合資料　石材は不明１種を含めると９種、母岩別資料は14種を数える。石材としては頁岩、玄武岩が本ブロックの主体をなしているが、中でも母岩別資料として頁岩１、玄武岩１が数量的に顕著である。いずれも剝片を主体として砕片がこれに加わっており、組成は単純である。接合資料は11例あるが、頁岩１、玄武岩１によって占められており、その内容は剝片の欠損資料２例、剝片どうしの接合資料９例となっている。接合資料はいずれも、不定形の横長剝片どうしの接合資料であり、技術的特徴を良く示すものとは言えない。多くは、潜在的な節理面によって剝片生産技術を観察し得るほどの良好な資料とは言いがたい。なお、すべて、円礫を原材としている模様である。

表205　第53ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	黒曜石		頁岩		メノウ		玄武岩		砂岩		安山岩		チャート		珪質頁岩		不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削片	−	−	−	−	1	12.5	−	−	−	−	1	20.0	−	−	−	−	−	−	2	1.6
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ピエス・エスキーユ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	1	50.0	−	−	−	−	−	−	−	−	1	0.8
使用痕ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
剝片	1	50.0	39	68.4	5	62.5	46	88.5	1	50.0	3	60.0	−	−	−	−	1	100	96	74.3
砕片	1	50.0	18	31.6	2	25.0	6	11.5	−	−	1	20.0	1	100	1	100	−	−	30	23.3
石核	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
台石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
計	2	1.5	57	44.2	8	6.2	52	40.3	2	1.5	5	3.9	1	0.8	1	0.8	1	0.8	129	100
礫片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1	−

表206　第53ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm			刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材
			長さ	幅	厚										
1	P-10-19-5	二次加工ある剝片	3.5	2.7	1.3	65°	12.8	−	一側辺加工(部分的)	無	無	有	基部	無	砂岩

まとめ　利器が少なく剥片、砕片が大勢を占めることより本ブロックが剥片生産を基調として、成立したものであることが理解される。

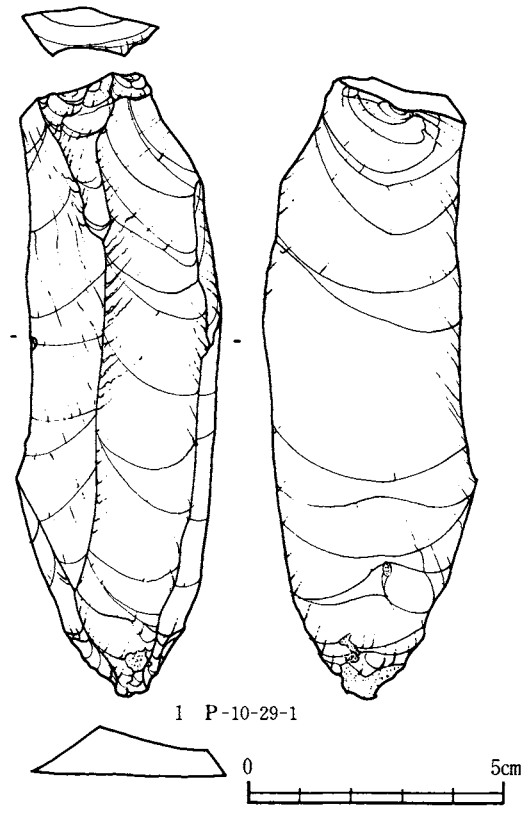


図138　第53ブロック出土遺物実測図

20. 第54ブロック（図139～141、図版23－2、28、表207～210）

出土状況　VI層下部よりVIIa層に至る層準より出土している。特にVIIa層からの出土量が顕著である。南より北にむかって、緩く傾斜し、石器群もそれに沿って堆積している。最大レベル差約60cmである。平面分布は、東西に長く、12m×4.5mとなっている。東端にナイフ形石器を含む小規模なまとまりがある他、西半部に良くまとまっている。

出土遺物　総計65点出土した。内訳は礫片1点、ナイフ形石器3点、削点1点、2次加工のある剥片1点、剥片44点、砕片12点、石核1点、敲石2点となっている。1～3はナイフ形石器である。1、3が縦長剥片であるのに対して、2は横長剥片を素材としている。

表207　第54ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	削片	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	敲石	計
珪質頁岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
珪質頁岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	3
珪質頁岩　3	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
珪質頁岩　4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9	1	1	—	11
珪質頁岩　5	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	2
頁　岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	5	—	—	—	6
頁　岩　2	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	1	—	—	5
砂　岩　1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	2
砂　岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	—	—	2	7
安山岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	18	7	—	—	24
不　明　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
計	4	—	—	1	—	—	—	—	—	1	—	1	44	10	1	2	63

1は1側辺加工、2、3は2側辺加工である。4は調整打面を有する縦長剝片である。利器の素材となり得る良好な目的剝片として捉えられるため掲載した。5は加熱によって破砕された棒状の細長い敲石である。表面は剝落し、また、分断されており、一部に酸化鉄が付着している。上下両端は磨耗しており、かつ、軽度な敲打痕が存在する。

母岩別資料・接合資料　石材は不明1点を含め5種、母岩は11種を数える。石材としては安山岩、頁岩、珪質頁岩が数量的に互いに拮抗しており、全体としても石材ごとの使用状況に大きな偏りがみられない。母岩別資料は、敲石の破砕資料である砂岩2、ナイフ形石器の単独資料である。珪質頁岩2、礫片を除き、他はいずれも剝片、砕片を中心として構成されている。その中で注目すべき資料としては石核と剝片の接合資料4を含む珪質頁岩4である。接合資料は5例あるが、その中で、接合資料4が重要である。接合資料4は、珪質頁岩製のぶ厚い剝片を素材としており、まず、主要剝離面を背面側より加撃し横長

表208　第54ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	安山岩		頁岩		砂岩		珪質頁岩		不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	−	−	(2)	15.4	1	14.3	1	5.6	−	−	4	6.2
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削片	−	−	−	−	−	−	1	5.6	−	−	1	1.5
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ピエス・エスキーユ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剝片	−	−	1	7.7	−	−	−	−	−	−	1	1.5
使用痕ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
剝片	17	68.0	8	61.5	4	57.1	13	72.1	2	100	44	67.7
砕片	8	32.0	2	15.4	−	−	2	11.1	−	−	12	18.5
石核	−	−	−	−	−	−	1	5.6	−	−	1	1.5
台石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	2	28.6	−	−	−	−	2	3.1
計	25	38.4	13	20	7	10.8	18	27.7	2	3.1	65	100
礫片	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1	−

表209　第54ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	頁岩　1	剝片3 二次加工ある剝片1	S-9-64-2(剝片) S-9-63-6(剝片) → S-9-73-10(剝片)＋S-9-63-11(二次加工ある剝片)	4
2	頁岩　1	剝片2	S-9-73-7(剝片)＋S-9-63-8(剝片)	2
3	頁岩　2	ナイフ形石器2	S-9-73-12(ナイフ形石器)＋S-9-73-26(ナイフ形石器)	2
4	珪質頁岩4	剝片5 石核1	S-9-72-4(剝片)→S-9-72-7(剝片)→S-9-72-15(剝片)→S-9-72-13(剝片)→S-9-72-5(剝片)→S-9-73-1(石核)	6
5	砂岩　2	敲石2	S-9-73-24(敲石)＋S-9-73-27(敲石)	2

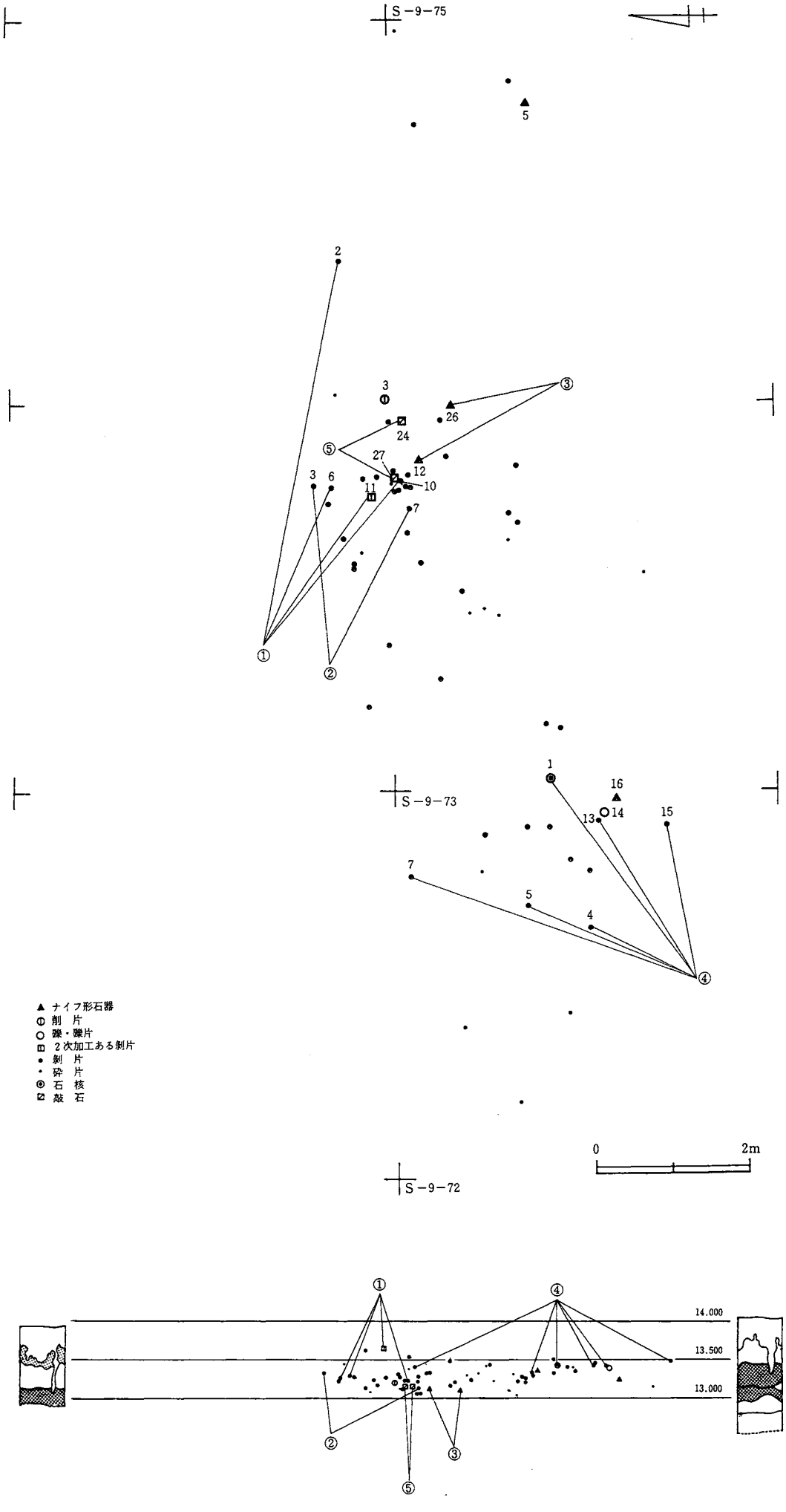


図139　第54ブロック遺物出土状況図

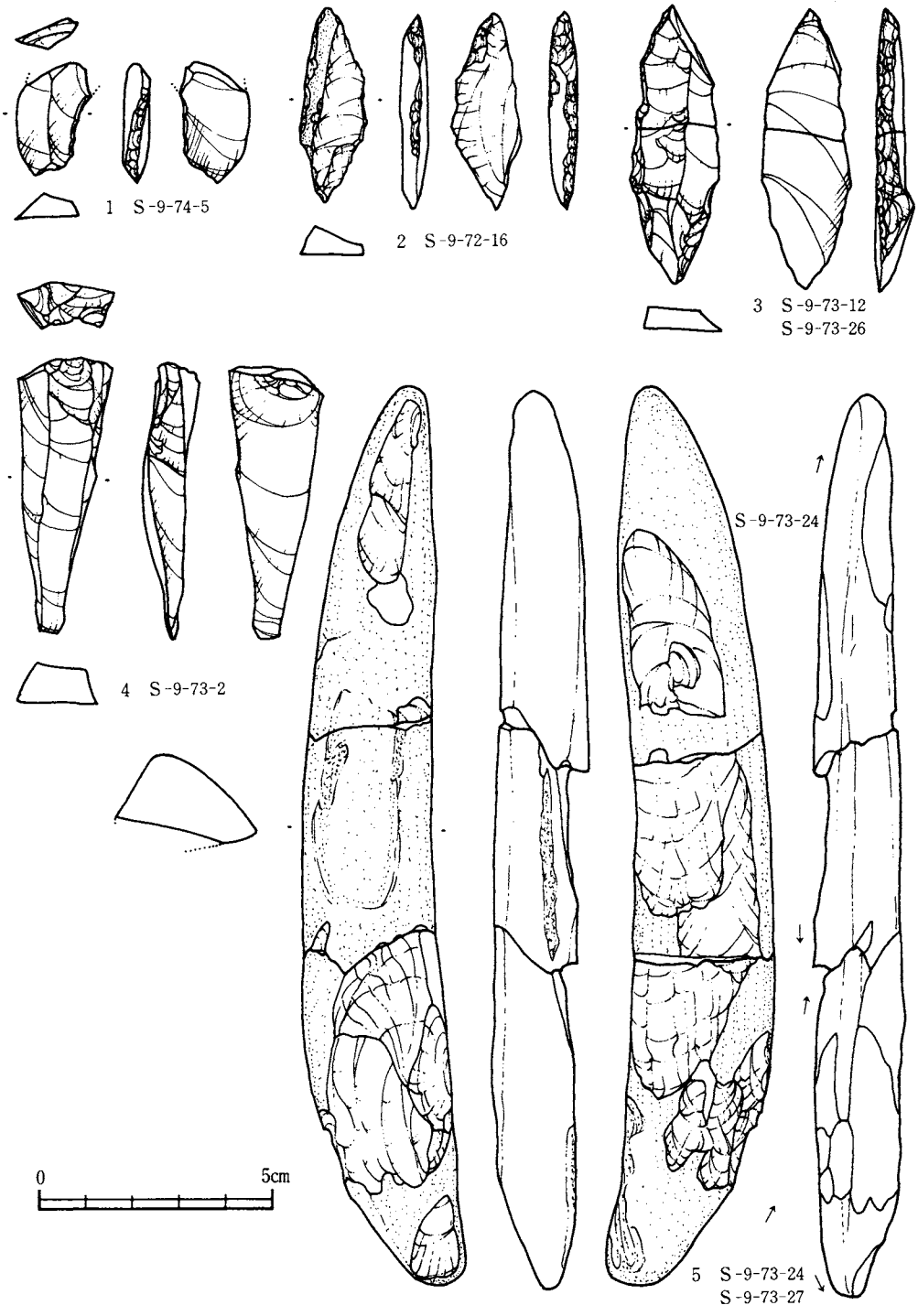


図140　第54ブロック出土遺物実測図(1)

剝片を生産したのち、90度打面転移し、主要剝離面より幅広で寸づまりの剝片を一方向に加撃し、連続的に生産している。

まとめ　本ブロックは、技術基盤として、接合資料4より捉えられる寸づまりの横長剝片を

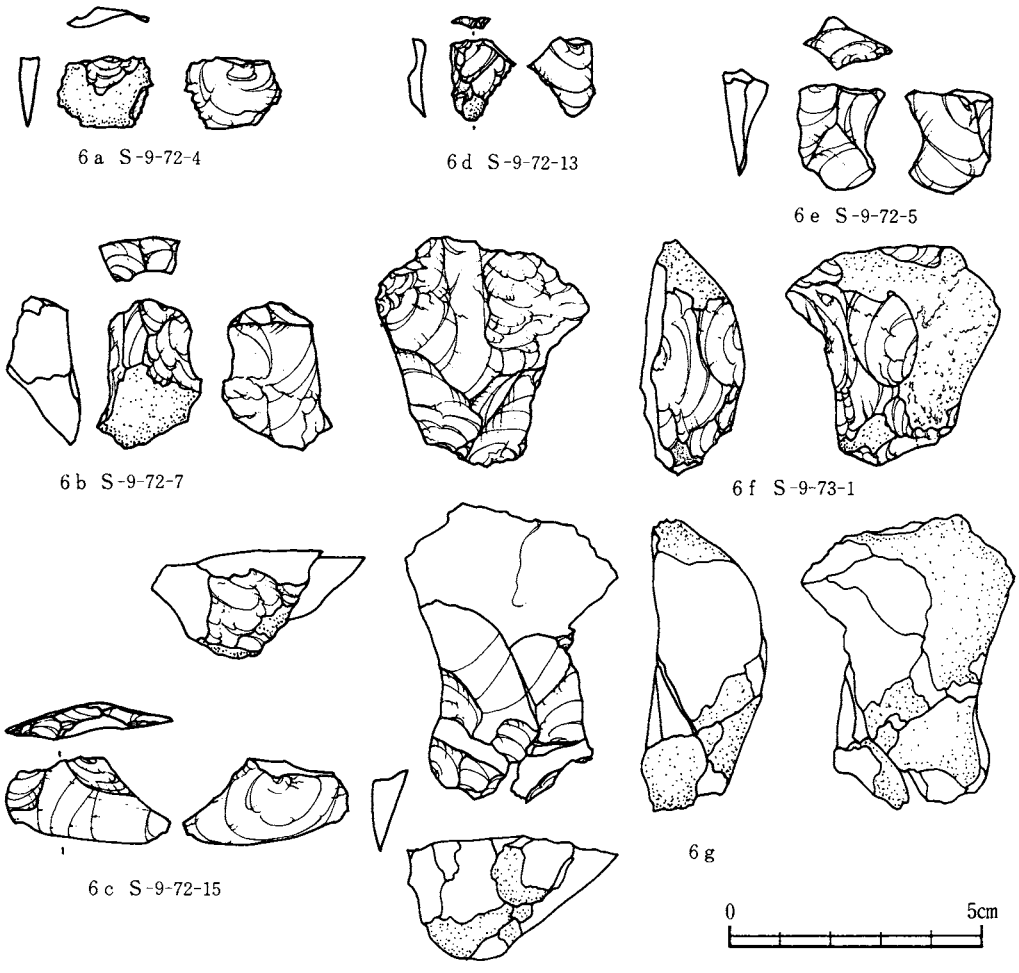


図141　第54ブロック出土遺物実測図(2)

表210　第54ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材	その他
1	S-9-72-16	ナイフ形石器	4.3	1.5	0.6	45°	3.9	2	二側辺加工	有	無	無	—	無	砂岩	
2	S-9-73-12 S-9-73-26	ナイフ形石器	6.1	1.9	0.8	35°	7.8	3	二側辺加工	無	無	—	—	有	頁岩	接合
3	S-9-74-5	ナイフ形石器	2.5	1.5	0.6	40°	1.9	1	一側辺加工?	無	無	有	先端	有	珪質頁岩	
4	S-9-63-11	二次加工ある剝片	3.9	2.7	1.6	—	11.6	—	部分加工	有	無	有	断片	無	頁岩	
5	S-9-73-1	石核	4.2	4.2	2.0	—	30.5	6f	—	—	有	無	—	—	珪質頁岩	
6	S-9-73-24 S-9-73-27	敲石	19.0	3.1	1.9	—	155.5	5	—	—	—	有	三分割	上下両端(磨耗痕)	砂岩	接合、受熱のため剝落

生産する類型と、縦長剥片の生産とした類型が存在する。全体として、利器と剥片技術を反映した資料の母岩が異なり、本ブロックで生産された利器のブロック外への移動が考えられる。剥片生産を反映したブロックと言えよう。

21. 第56ブロック（図142、143、図版23—3、表211～214）

出土状況　極めて小規模なブロックである。ソフトローム下部よりⅦa層に至る層準より出土しており、径2.7m×1.9mの分布範囲を有する。

出土遺物　総計4点出土した。石器組成は剥片3点、石核1点となっている。1は石核である。背面側に自然面を大きく残すぶ厚い縦長剥片を素材としており、背面より主要剥離面側にむかって求心的に加撃している。その結果、得られた剥片は、平坦な打面を有する幅広で寸づまりな剥片と思われる。

母岩別資料・接合資料　石材は2種、母岩別資料は3種識別し得た。いずれの母岩ともそれぞれ数量に乏しく、検討し得ない。石核のみ単独の母岩であることを記すにとどめる。

まとめ　全体の数量が少なく、本ブロックの性格は不明である。また、ここでは便宜的にまとめてとりあつかったが、ソフトローム出土の石核と剥片とは同時期というよりも時間差が存在する可能性が高い。

表211　第56ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	チャート		珪質頁岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	—	—	—	—	—	—
角錐状石器	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—
削片	—	—	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—	—	—
削器	—	—	—	—	—	—
ピエス・エスキーユ	—	—	—	—	—	—
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剥片	—	—	—	—	—	—
使用痕ある剥片	—	—	—	—	—	—
石斧	—	—	—	—	—	—
剥片	1	100	2	66.7	3	75.0
砕片	—	—	—	—	—	—
石核	—	—	1	33.3	1	25.0
台石	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—
計	1	25	3	75	4	100
礫片	—	—	—	—	—	—

表212　第56ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 / 器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	敲石	計
珪質頁岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	2
珪質頁岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1
チャート　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	1	—	4

表213　第56ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内　訳	内　容	数量
1	珪質頁岩1	剥片2	T-6-37-1(剥片)＋T-6-37-2(剥片)	2

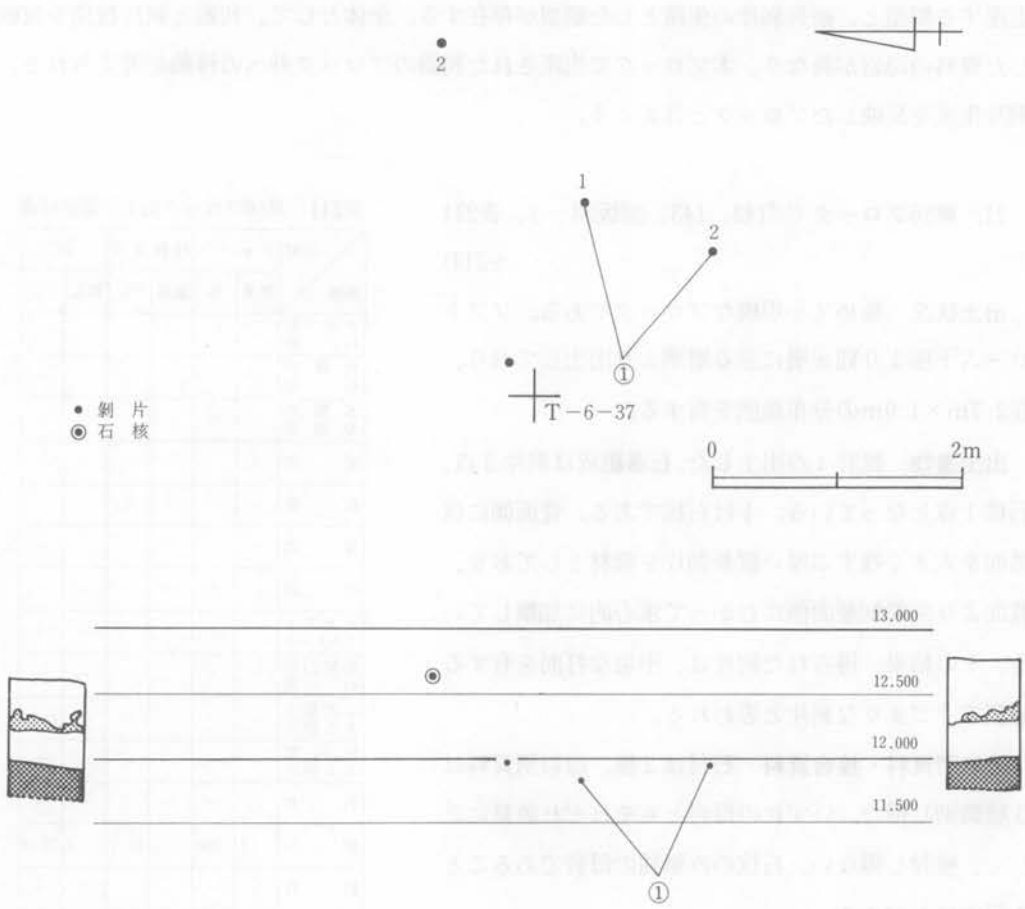


図142　第56ブロック遺物出土状況図

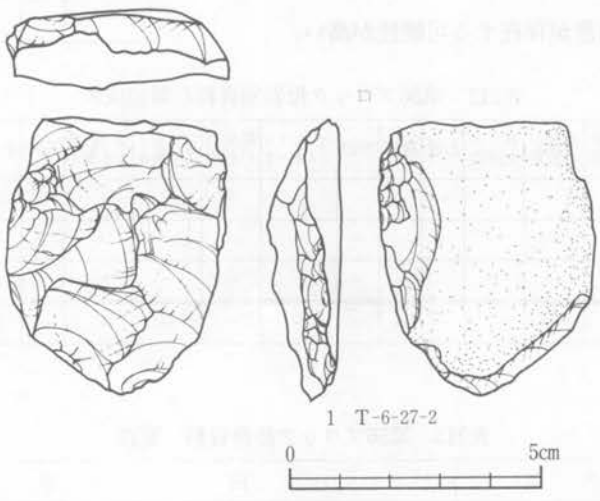


図143　第56ブロック出土遺物実測図

表214　第56ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材
1	T-6-27-2	石核	5.6	4.3	1.3	—	37.0	1	—	—	有	無	—	—	珪質頁岩

22. 第57ブロック（図144、145、図版24—1、28、表215～218）

出土状況　VI層上部よりVIIa層にかけて出土した。特にVIIa層に集中している。最大レベル差約 60 cm である。平面分布は、9.1m×3.3mの規模となっており南半部に密集している。

出土遺物　総計40点出土した。石器組成は使用痕のある剥片 4 点、剥片31点、砕片40点となっている。1 はナイフ形石器である。幅広な剥片を素材として 2 側辺加工、刃つぶし加工は90度に近く、精緻である。2 は使用痕のある剥片で平坦な打面を有する縦長剥片の右側辺に連続的に刃こぼれがみられる。

母岩別資料・接合資料　石材は 4 種存在し、母岩は 8 種存在する。石材としては安山岩が他を凌駕し、横長の不定形剥

表215　第57ブロック出土石器組成表

器種＼石材	黒曜石 数量	%	頁岩 数量	%	安山岩 数量	%	珪質頁岩 数量	%	計 数量	%
ナイフ形石器	—	—	1	25.0	—	—	—	—	1	2.5
角錐状石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
削片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
削器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ピエス・エスキーユ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剥片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
使用痕ある剥片	—	—	2	50.0	—	—	2	100	4	10.0
石斧	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
剥片	4	100	1	25.0	26	86.7	—	—	31	77.5
砕片	—	—	—	—	4	13.3	—	—	4	10.0
石核	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
台石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	4	10	4	10	30	75	2	5	40	100
礫片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

表216　第57ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	石核	敲石	計
珪質頁岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	2
頁岩 1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
頁岩 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1
頁岩 3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1
頁岩 4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
安山岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	26	3	—	—	29
黒曜石 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	3
黒曜石 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
計	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	—	31	3	—	—	39

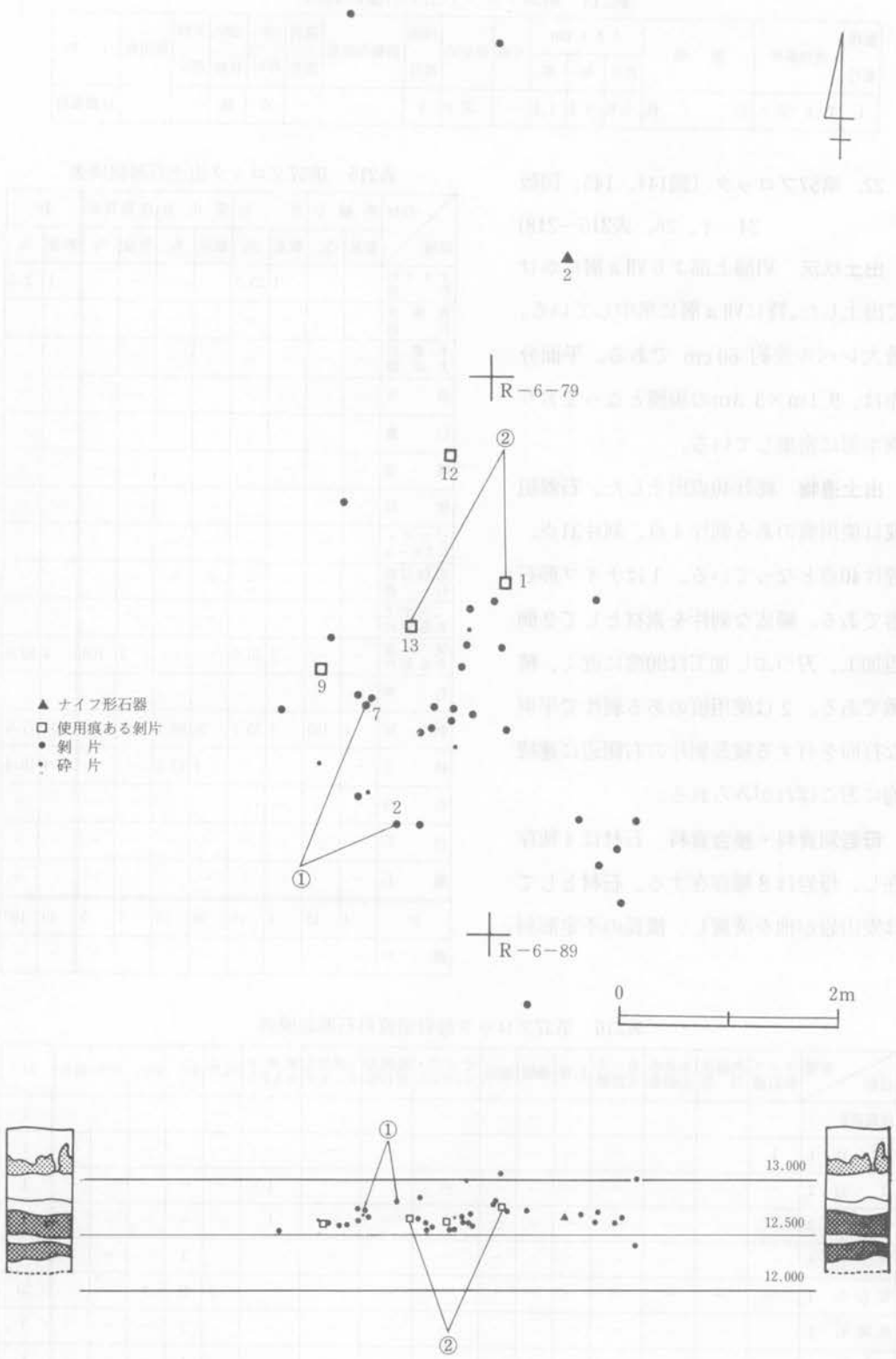


図144　第57ブロック遺物出土状況図

片で構成され、利器はない。一方、珪質頁岩、頁岩はナイフ形石器、使用痕のある剥片などの利器により構成されており、母岩別資料にその傾向が読みとれる。接合資料は2例あり、いずれも欠損資料である。

まとめ　本ブロックも剥片生産の痕跡が色濃い。一方、利器は母岩別資料の検討より他ブロックより搬入された公算が高い。

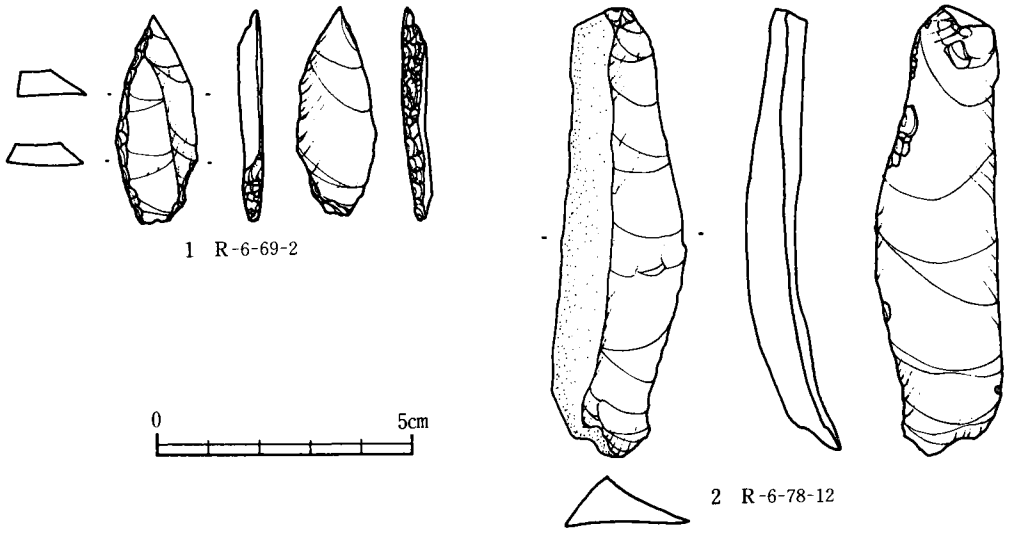


図145　第57ブロック出土遺物実測図

表217　第57ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内　訳	内　容	数量
1	安山岩1	剥片2	R-6-78-7(剥片)＋R-6-79-2(剥片)	2
2	珪質頁岩1	使用痕ある剥片2	R-6-78-13(使用痕ある剥片)＋R-6-79-1(使用痕ある剥片)	2

表218　第57ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器　種	大きさ cm			刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石　材	その他
			長さ	幅	厚											
1	R-6-69-2	ナイフ形石器	4.1	1.6	0.5	30°	3.2	1	二側辺加工	無	無	無	—	有	頁　岩	
2	R-6-78-9	使用痕ある剥片	2.7	1.7	0.4	30°	2.2	—	—	無	有	有	半割	一側辺	頁　岩	
3	R-6-78-12	使用痕ある剥片	8.4	3.7	1.1	35°	21.7	2	—	無	有	無	—	一側辺	頁　岩	
4	R-6-78-13 R-6-79-1	使用痕ある剥片	7.2	2.3	1.1	35°	19.8	—	無	無	無	—	—	一側辺	珪質頁岩	接合

23. 第58ブロック（図146、147、図版24－2、28、表219～221）

出土状況　Ⅵ層下部よりⅦa層に至る層準より出土している。特にⅦa層より集中して出土している。最大レベル差約30cmである。平面分布は、約5.5m×約3.0mとやや南北に細長い

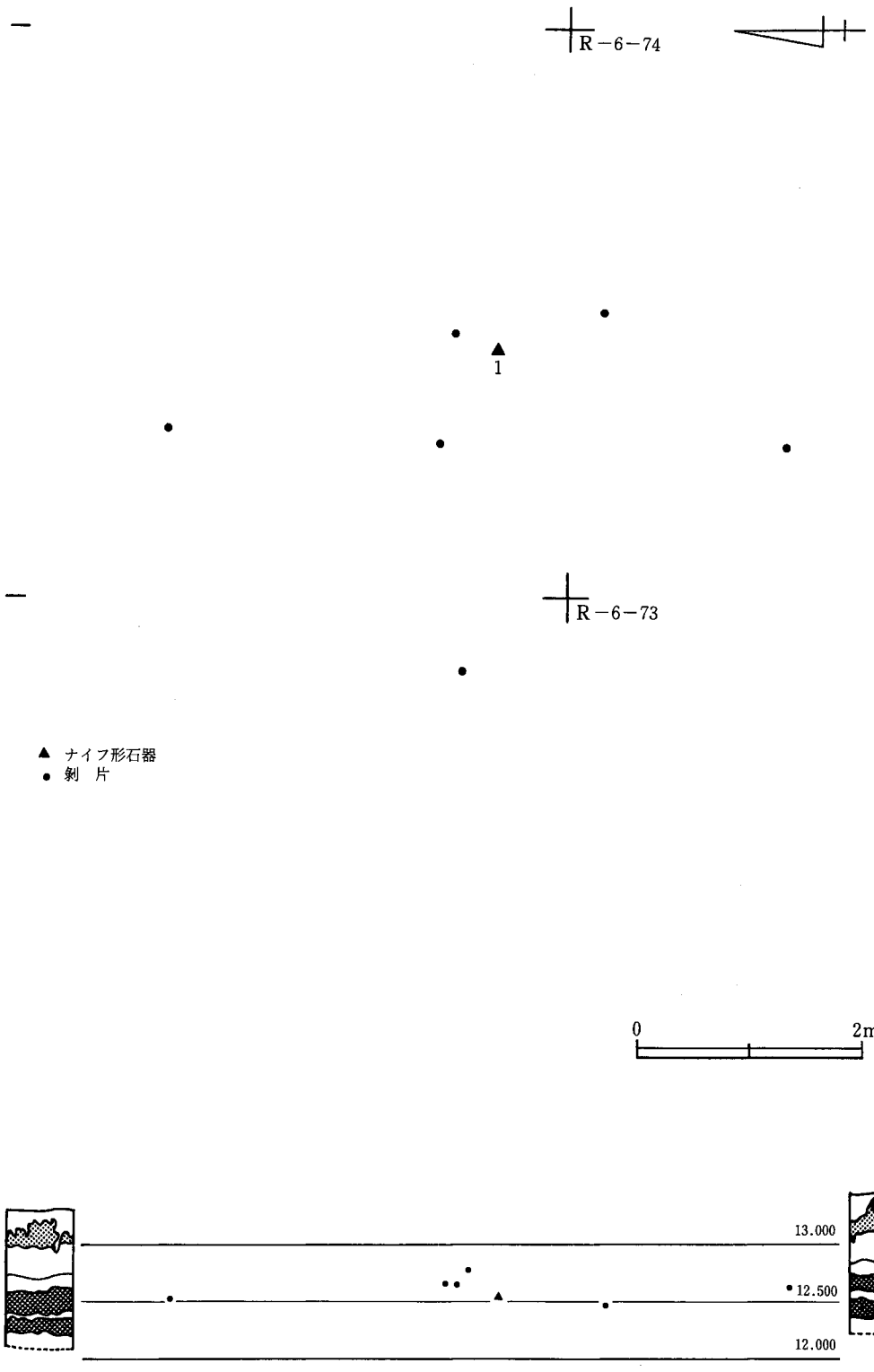


図146　第58ブロック遺物出土状況図

が、全体に散漫な分布状況を呈している。

出土遺物　総計7点出土した。石器組成はナイフ形石器1点、剝片6点となっている。1はナイフ形石器である。大形な剝片を素材として2側辺加工、左側辺の刃つぶし加工はほぼ90度に近く、表裏より加撃された状況が看取される。

母岩別資料・接合資料　石材は2種、母岩は5種識別し得た。石材としては珪質頁岩が主体をなし、安山岩はわずか1点である。母岩別資料組成表のように利器は単独の資料であり（珪質頁岩）、他の母岩は剝片、砕片によって構成されている。しかしながら、総計7

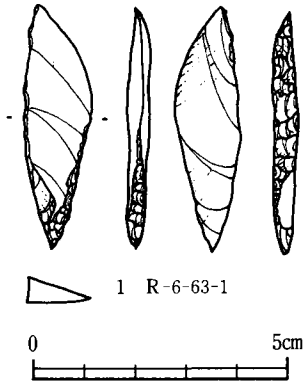


図147　第58ブロック出土遺物実測図

表219　第58ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	安山岩		珪質頁岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	—	—	1	16.7	1	14.3
角錐状石器	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—
削片	—	—	—	—	—	—
石錐	—	—	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—	—	—
削器	—	—	—	—	—	—
ピエス・エスキーユ	—	—	—	—	—	—
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剝片	—	—	—	—	—	—
使用痕ある剝片	—	—	—	—	—	—
石斧	—	—	—	—	—	—
剝片	1	100	5	83.3	6	85.7
砕片	—	—	—	—	—	—
石核	—	—	—	—	—	—
台石	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—
計	1	14.3	6	85.7	7	100
礫片	—	—	—	—	—	—

表220　第58ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 \ 器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	敲石	計
珪質頁岩　1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
珪質頁岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	3
珪質頁岩　3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
珪質頁岩　4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
安山岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
計	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	—	—	—	7

表221　第58ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材
1	R-6-63-1	ナイフ形石器	4.8	1.3	0.4	25°	2.5	1	二側辺加工	無	無	無	—	有	珪質頁岩

点と数量が乏しいため上述の事実記載にとどめておく。

まとめ　本ブロックは、石器群の数量的保証がなく、性格については不明である。

24. 第59ブロック（図148、149、図版24—3、29、表222～225）

出土状況　VI層よりVIIa層に至る層準より出土しており、VI層下部からVIIa層にかけての出土量が多い。最大レベル差 40 cm である。平面分布は、7.6m×0.6mの規模を有し全体に散漫である。

出土遺物　総計14点出土した。石器組成は、ナイフ形石器1点、削片1点、ピエス・エスキーユ1点、剝片11点となっている。1は幅広な剝片を素材とした1側辺加工のナイフ形石器である。2はピエス・エスキーユと削片（ピエス・エスキーユスポール）の接合例である(接合資料2)。剝片を素材としており上下両端に刃こぼれが観察される。

母岩別資料・接合資料　石材は2種、母岩は5種識別し得た。頁岩1、2が利器の母岩であるのに対して、安山岩はいずれも、剝片のみで構成されている。接合資料は2例あり、内訳は、剝片の欠損資料1例、ピエス・エスキーユとその削片との接合資料1例となっている。

まとめ　本ブロックは、石器群の数量が乏しく、また、技術基盤を知るうえで、石核が欠落しているため内容的評価はできない。

表222　第59ブロック出土石器組成表

石材 / 器種	安山岩 数量	安山岩 %	頁岩 数量	頁岩 %	計 数量	計 %
ナイフ形石器	—	—	1	16.7	1	7.1
角錐状石器	—	—	—	—	—	—
木葉形尖頭器	—	—	—	—	—	—
削片	—	—	1	16.7	1	7.1
石錐	—	—	—	—	—	—
掻器	—	—	—	—	—	—
削器	—	—	—	—	—	—
ピエス・エスキーユ	—	—	1	16.7	1	7.1
彫刻刀形石器	—	—	—	—	—	—
二次加工ある剝片	—	—	—	—	—	—
使用痕ある剝片	—	—	—	—	—	—
石斧	—	—	—	—	—	—
剝片	8	100	3	49.9	11	78.7
砕片	—	—	—	—	—	—
石核	—	—	—	—	—	—
台石	—	—	—	—	—	—
敲石	—	—	—	—	—	—
計	8	57.1	6	42.9	14	100
礫片	—	—	—	—	—	—

表223　第59ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 \ 器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	削片	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	敲石	計
頁岩 1	—	—	—	1	—	—	—	1	—	—	—	—	1	—	—	—	3
頁岩 2	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
頁岩 3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	3
安山岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	—	—	—	4
安山岩 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	3
計	1	—	—	1	—	—	—	1	—	—	—	—	11	—	—	—	14

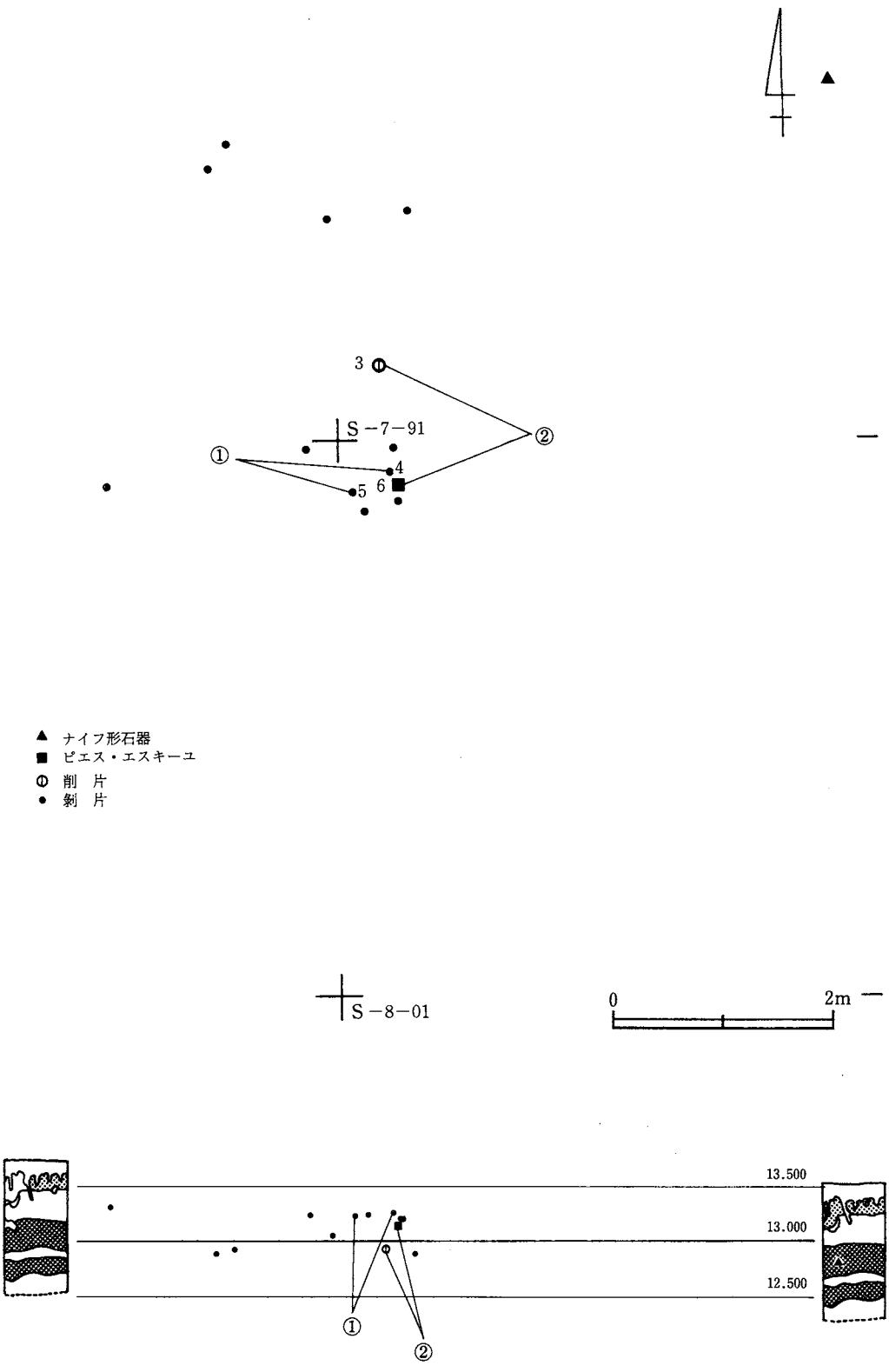


図148　第59ブロック遺物出土状況図

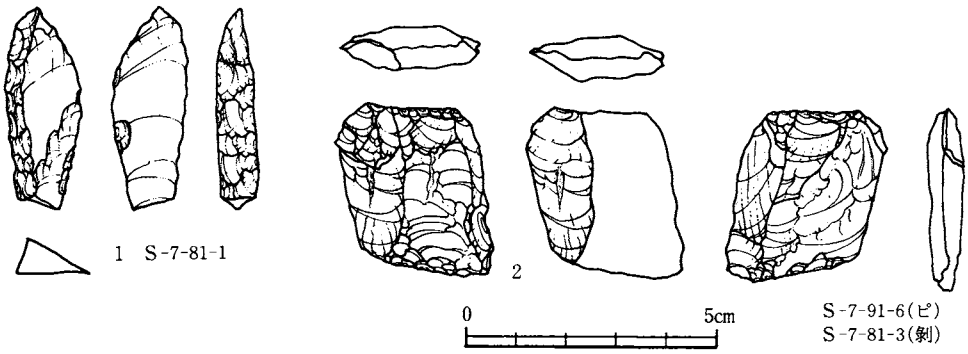


図149　第59ブロック出土遺物実測図

表224　第59ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内　訳	内　容	数量
1	頁　岩　3	剝片2	S-7-91-4(剝片)＋S-7-91-5(剝片)	2
2	頁　岩　1	ピエス・エスキーユ スポール1 ピエス・エスキーユ1	S-7-81-3(ピエス・エスキーユ、スポール)→S-7-91-6(ピエス・エスキーユ)	2

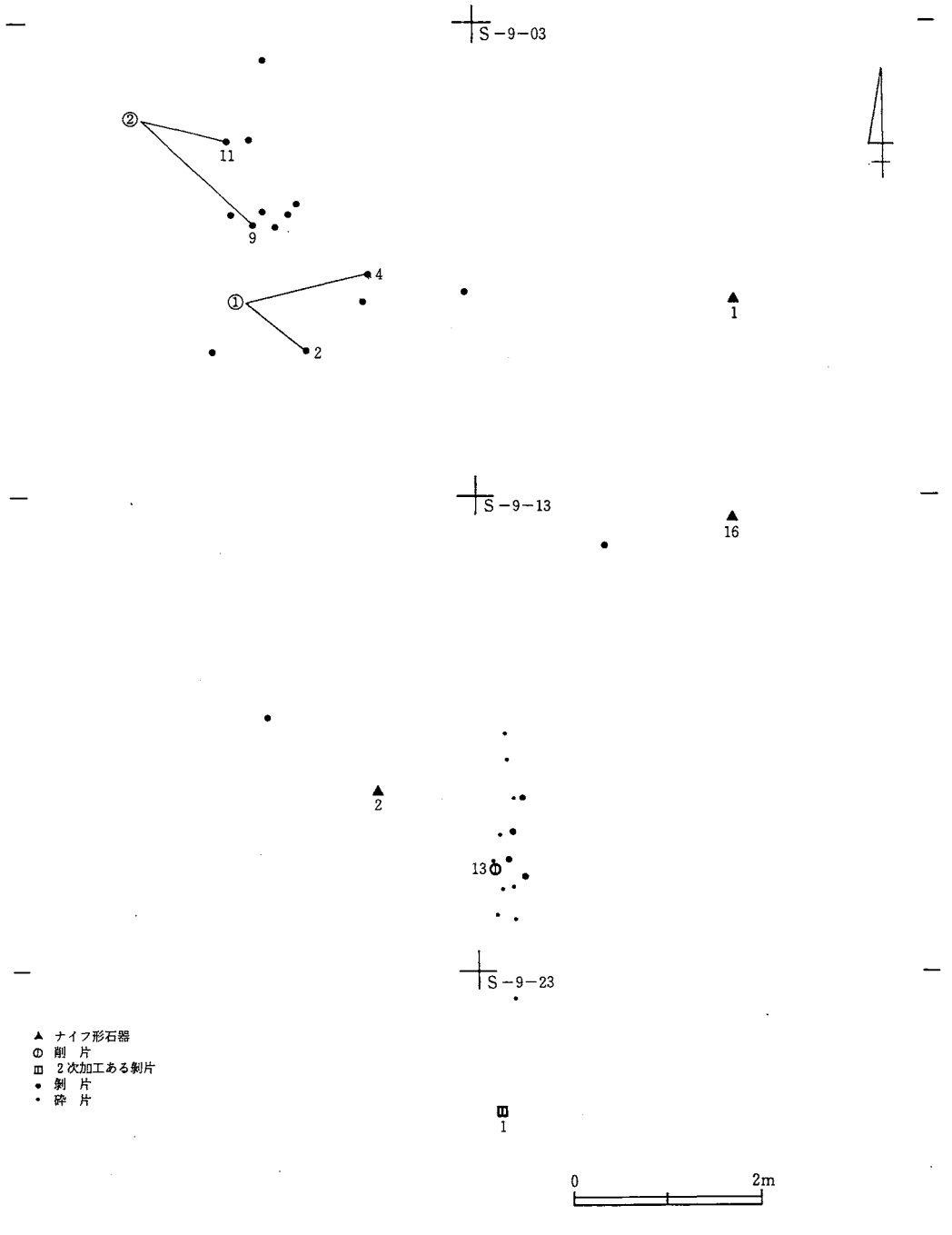
表225　第59ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器　種	大きさ cm			刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石　材
			長さ	幅	厚										
1	S-7-81-1	ナイフ形石器	4.0	1.5	0.7	30°	4.1	1	一側辺加工	無	無	有	基部	不明	頁　岩
2	S-7-91-6	ピエス・エスキーユ	3.3	2.8	0.8	65° 60°	8.9	2	上下両端	—	無	無	—	無	頁　岩

25. 第60ブロック（図150、151、図版29、表226～229）

出土状況　VI層よりVIIa層に至る層準より出土している。最大レベル差約60cm、接合資料は、約10cmの幅で接合している。平面分布は、径11.5m×6.5mの範囲にあり、大きく北半部と南半部に集中部分がみられる。北半部は剝片、南半部は砕片が多く、利器はブロックの周辺部に分布する傾向にある。なお、南半部の集中箇所については帯状にまとまっており、しかも他の石器群に比べてレベル的に分離し得る可能性があるが、ここでは便宜的に一括してとりあつかった。

出土遺物　総計36点出土した。石器組成は、ナイフ形石器3点、削片1点、剝片20点、砕片11点となっており、利器はナイフ形石器に限定される。1～3はナイフ形石器である。1は先端部の破片であり、素材や調整の種類等は不明である。2は縦長剝片を素材とした小形ナイフ形石器で2側辺加工である。3も縦長剝片を素材としており、2側辺加工で、刃つぶし加工は精緻でほぼ90度に近く、かなり急角度である。4は2次加工のある剝片で、断片的な資料であ



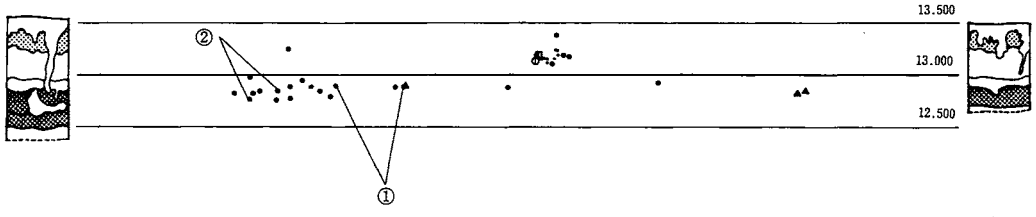


図150　第60ブロック遺物出土状況図

り、1側辺に2次加工がみられる。

母岩別資料・接合資料　石材は5種、母岩は9母岩以上を教える。石材は頁岩が最も多い。母岩別資料については、利器（ナイフ形石器）が単独資料であることが窺えるが、剝片生産を如実に反映した資料はない。接合資料は2例あり、いずれも剝片の欠損資料である。

まとめ　主として、剝片生産を反映したブロックであるが、該期の実態を明確化するには至らない。なお、ナイフ形石器は、本遺跡内の類例として第37ブロック出土のナイフ形石器をあげることができる。

表226　第60ブロック出土石器組成表

器種＼石材	安山岩		玄武岩		頁岩		珪質頁岩		砂岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	−	−	−	−	−	−	2		1		3	
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削片	1		−	−	−	−	−	−	−	−	1	
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ピエス・エスキーユ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剝片	−	−	−	−	1		−	−	−	−	1	
使用痕ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
剝片	9		8		1		2		−	−	20	
砕片	11		−	−	−	−	−	−	−	−	11	
石核	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
台石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
計	21	58.3	8	22.2	2	5.6	4	11.1	1	2.8	36	100
礫片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−

表227　第60ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	削片	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剝片	使用痕ある剝片	石斧	剝片	砕片	石核	敲石	計
玄武岩　1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	8	−	−	−	8
安山岩　1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	5	−	−	−	5
安山岩その他	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1
頁岩　1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	1	−	−	−	2
頁岩　2	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	3	11	−	−	15
砂岩　1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
珪質頁岩　1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
珪質頁岩　2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1
珪質頁岩　3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1
珪質頁岩　4	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
計	3	−	−	1	−	−	−	−	−	1	−	−	20	11	−	−	36

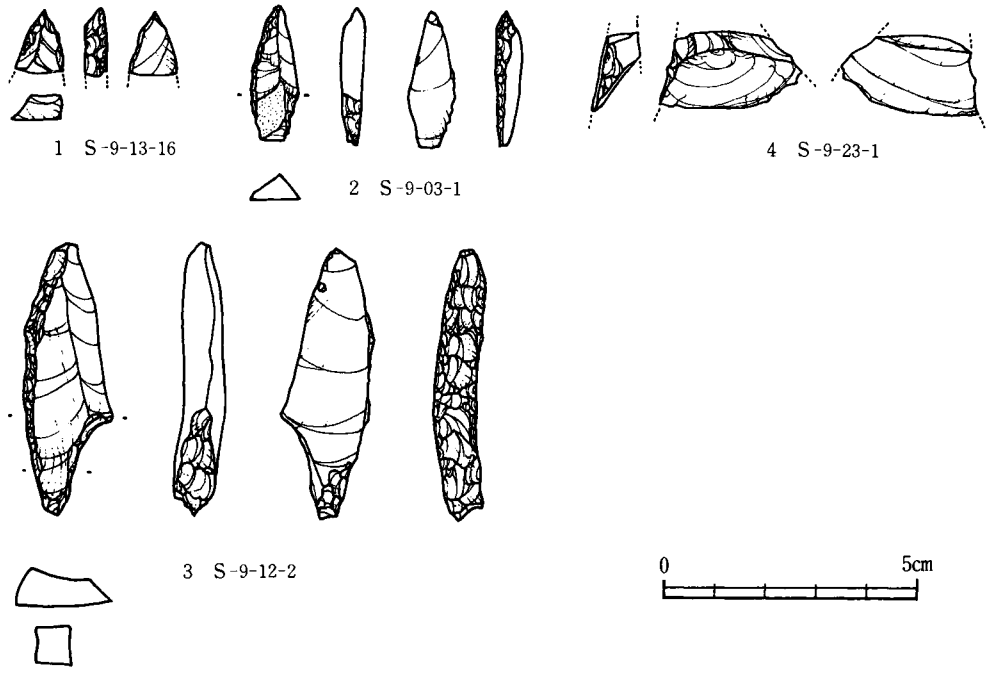


図151　第60ブロック出土遺物実測図

表228　第60ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内　訳	内　容	数量
1	玄武岩 1	剥片 2	S-9-02-2＋S-9-02-4	2
2	玄武岩 1	剥片 2	S-9-02-9＋S-9-02-11	2

表229　第60ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器　種	大きさ cm			刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石　材	その他
			長さ	幅	厚											
1	S-9-12-2	ナイフ形石器	5.4	1.8	1.8	55°	8.0	3	二側辺加工	有	無	有	先端	有	珪質頁岩	
2	S-9-03-1	ナイフ形石器	2.8	1.0	0.5	60°	1.1	2	二側辺加工	有	無	有	基部	有	珪質頁岩	
3	S-9-13-16	ナイフ形石器	1.3	1.0	0.4	50°	0.5	1	不　明	—	—	有	先端破片	有	砂　岩	
4	S-9-23-1	二次加工ある剥片	1.6	2.6	0.8	—	3.0	4	一側辺加工	—	—	有	断片	無	頁　岩	ナイフ形石器(?)

26. 第61ブロック（図152、153、図版29、表230～233）

出土状況　ソフトロームよりⅦc層上面に至るきわめてレベル差の大きなブロックである。集中部分はⅥ層からⅥ′層である。最大レベル差約 70 cm である。平面分布は、径10.9m×5.2 mとなっており、南北に細長い帯状の平面形を呈する。分布密度は全体としてあまり差異がみられないが、南端部、北端部付近にやや集中する傾向がある。

出土遺物　総計81点出土した。内訳は礫片 3 点、ナイフ形石器 1 点、ピエス・エスキーユ 3

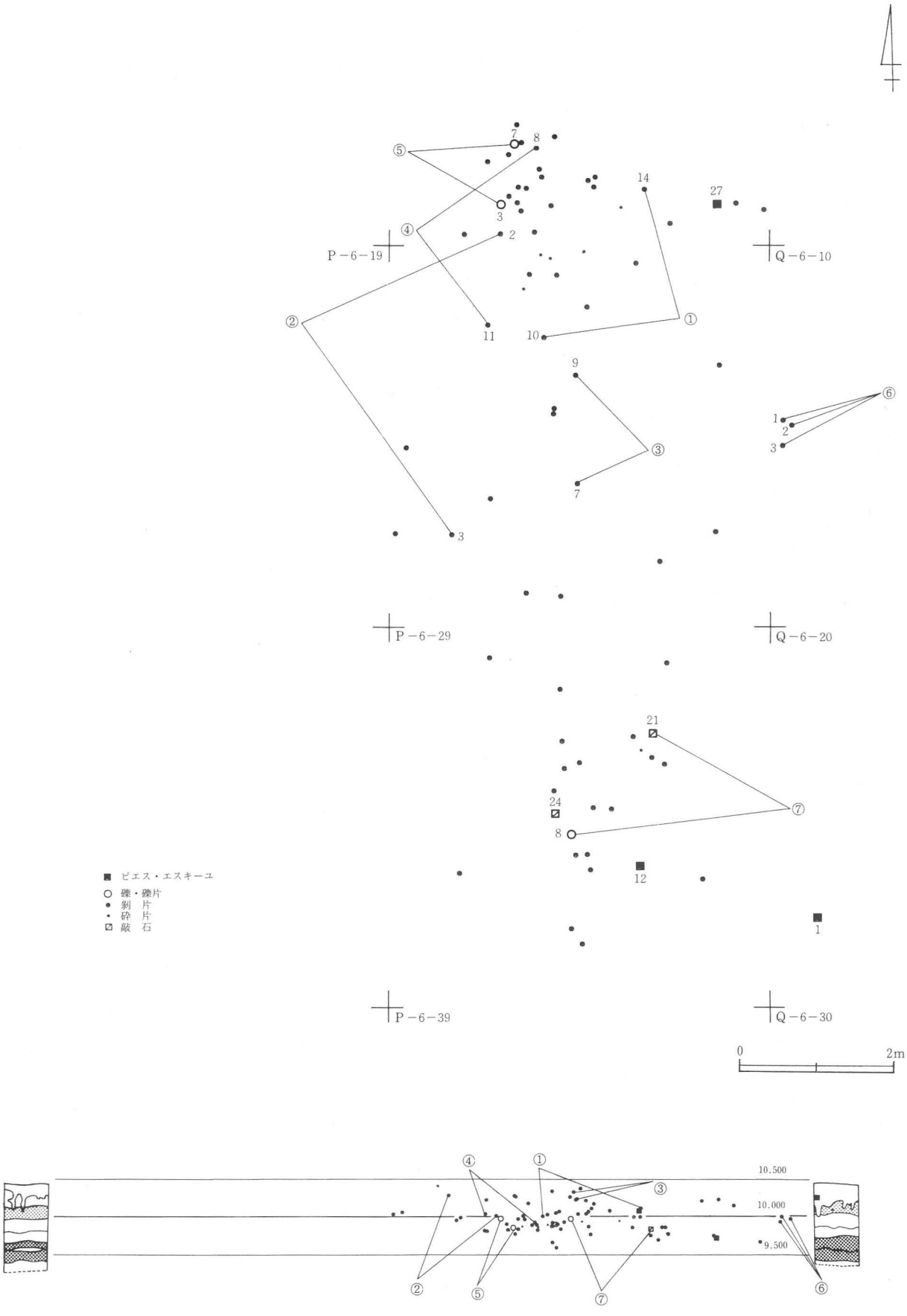


図152　第61ブロック遺物出土状況図

点、剝点65点、砕片７点、敲石３点となっている。１は横長剝片を素材としたナイフ形石器であり、２側辺加工となっている。２～４はピエス・エスキーユで、いずれも上下両端に刃つぶれが観察される。５、６は敲石である。５は破損品で、下端部に敲打痕、６は上下両端に刃つぶれがあり、両極加撃の所産と考えられる。なお、礫片はいずれも加熱によって破砕された痕跡をとどめている。

母岩別資料・接合資料

石材は不明１種をあわせると６種、母岩は12種識別し得た。石材としては珪質頁岩が最も多い。母岩別資料は珪質頁岩４がナイフ形石器の単独資料である他は、剝片、砕片のいずれかあるいは、この両者を組成とする母岩が主体となっている。接合資料は７例ある。剝片の欠損資料１例、剝片どうしの接合資料４例、砕片どうしの接合資料１例、敲石の欠損資料１例となっている。本ブロックの技術基盤を窺える資料は特にない。

表230　第61ブロック出土石器組成表

石材＼器種	珪質頁岩		頁岩		安山岩		玄武岩		砂岩		不明		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	1	2.3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1.3
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
木葉形尖頭器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ピエス・エスキーユ	−	−	−	−	3	25.0	−	−	−	−	−	−	3	3.8
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
使用痕ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
剝片	37	84.1	3	100	9	75.0	4	100	12	85.8	−	−	65	83.3
砕片	6	13.6	−	−	−	−	−	−	1	7.1	−	−	7	9.0
石核	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
台石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	−	−	−	−	1	7.1	1	100	2	2.6
計	44	56.4	3	3.9	12	15.4	4	5.1	14	17.9	1	1.3	78	100
礫片	−	−	2	−	−	−	−	−	−	−	1	−	3	−

表231　第61ブロック接合資料一覧表

番号	母岩別資料	内訳	内容	数量
1	珪質頁岩３	剝片２	P-6-19-10(剝片)→P-6-09-14(剝片)	2
2	珪質頁岩３	剝片２	P-6-09-2(剝片)→P-6-19-3(剝片)	2
3	珪質頁岩５	剝片２	P-16-19-9(剝片)→P-6-19-7(剝片)	2
4	珪質頁岩１	剝片２	P-6-19-11(剝片)→P-6-09-8(剝片)	2
5	頁岩１	礫片２	P-6-09-3(礫片)＋P-6-09-7(礫片)	2
6	玄武岩２	剝片３	Q-6-10-1(剝片)＋Q-6-10-2(剝片)＋Q-6-10-3(剝片)	3
7	不明１	敲石	P-6-29-8FP-6-29-26	2

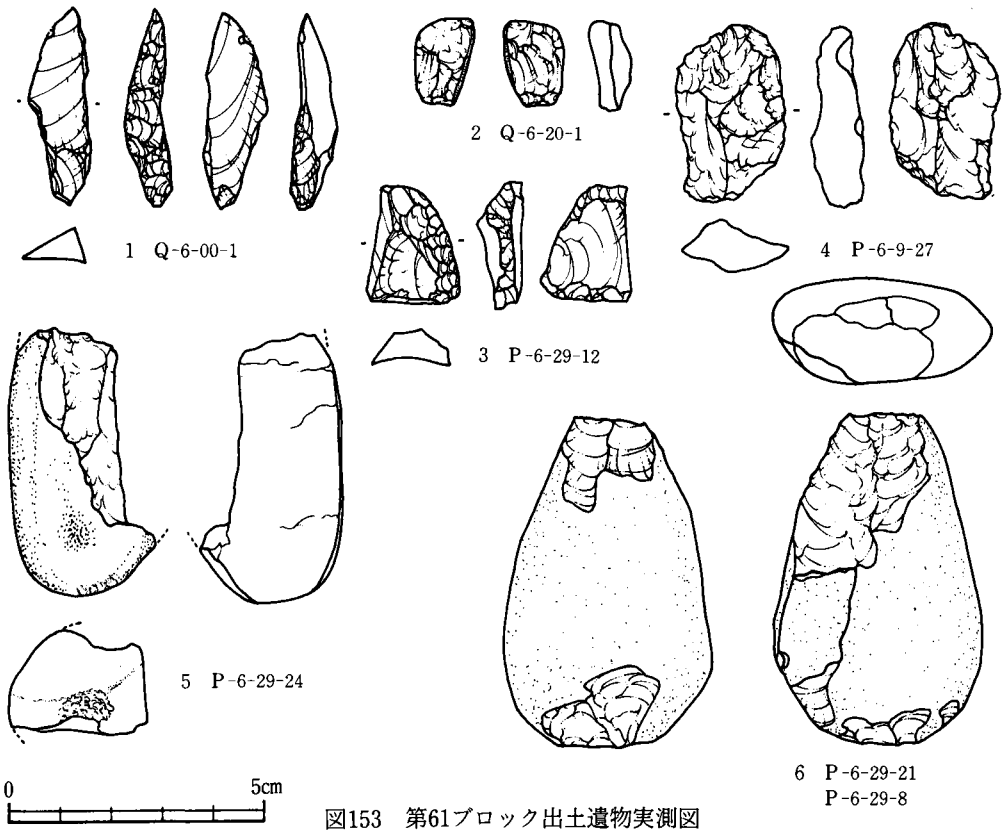


図153　第61ブロック出土遺物実測図

表232　第61ブロック母岩別資料石器組成表

母岩＼器種	ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器	有舌尖頭器	石錐	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石斧	剥片	砕片	礫片	敲石	計
珪質頁岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	23	5	—	—	28
珪質頁岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
珪質頁岩　3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	11	—	—	—	11
珪質頁岩　4	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
珪質頁岩　5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	2
頁　岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	2
頁　岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
砂　岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
砂　岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8	1	—	—	9
砂　岩　3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	—	—	—	4
玄武岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
玄武岩　2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	3
安山岩　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	—	—	—	4
安山岩その他	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	—	7	—	—	—	10
不　明　1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	2
計	1	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	—	65	6	3	2	80

まとめ　本ブロックも剝片生産を反映したブロックであり、利器については、ナイフ形石器が他ブロックより搬入されたことが窺われる。なお、敲石が2例あり、いずれも欠損し廃棄されている。

表233　第61ブロック出土石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm			刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材
			長さ	幅	厚										
1	Q-6-00-1	ナイフ形石器	3.9	1.2	0.7	35°	3.2	1	二側辺加工	有	無	無	—	有	珪質頁岩
2	P-6-09-27	ピエス・エスキーユ	3.2	2.2	1.0	75° 20°	6.6	4	上下両端	—	無	無	—	無	安山岩
3	P-6-29-12	ピエス・エスキーユ	2.3	1.9	0.8	65° 80°	3.6	3	上下両端	—	有	無	—	無	安山岩
4	Q-6-20-1	ピエス・エスキーユ	1.8	1.2	0.6	75° 90°	1.5	2	上下両端	—	無	無	—	無	安山岩
5	P-6-29-21	敲石	6.4	4.2	2.0	—	72.1	6	—	—	—	有	上下両端	上下両端	不明
6	P-6-29-24	敲石	5.1	2.9	1.7	—	33.6	5	—	—	—	有	断片	長軸一端	砂岩

27. 第3文化層のまとめ

Ⅶa層中に生活面をもつ文化層である。各ブロックともブロック間の接合関係、母岩別資料の類似性がなく、唯一、位置的に互いに近接している第47、48ブロックについて存在するにすぎない。石器群は縦長剝片を素材としたナイフ形石器、ピエス・エスキーユが多い。

第5節　表面採集遺物

表採資料（図154、図版29、表234、235）

住居跡や排土中より採集したもので、計7点採集した。1は尖頭器である。幅広な剝片を素材として、急角度な2次加工が施されている。調整の状況はナイフ形石器の刃つぶし加工を思

表234　表面採集石器組成表

石材 / 器種	頁岩		黒曜石		珪質頁岩		安山岩		砂岩		計	
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
ナイフ形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
角錐状石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
尖頭器	−	−	−	−	1	50	−	−	−	−	1	23.1
削片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石錐	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
掻器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
削器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ピエス・エスキーユ	−	−	−	−	1	50	−	−	−	−	1	7.7
彫刻刀形石器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
二次加工ある剝片	−	−	−	−	−	−	1	50	1	25.0	2	15.4
使用痕ある剝片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石斧	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
剝片	−	−	1	50.0	−	−	1	50	3	75.0	5	38.4
砕片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
石核	1	100	1	50.0	−	−	−	−	−	−	2	15.4
台石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
敲石	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
計	1	9.1	2	18.2	2	18.2	2	18.2	4	36.3	11	100
礫片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−

表235　表面採集石器計測表

整理番号	遺物番号	器種	大きさ cm 長さ	幅	厚	刃角	重量(g)	挿図番号	調整の位置	裏面調整	打面の存否	欠損の有無	欠損部位	使用痕	石材
1	D -20-16	尖頭器	3.9	1.7	0.6	刃先角 55°	3.9	1	全周	無	有	無	−	無	珪質頁岩
2	表採	ピエス・エスキーユ	2.3	2.5	0.7	20° 65°	3.2	2	上下両端	−	無	無	−	無	珪質頁岩
3	R-7-46-2	二次加工ある剝片	7.7	3.5	1.5	60°	27.5	5	部分加工	有	有	有	部分的	無	砂岩
4	Q-5-66表彩	石核	2.9	3.8	1.4	−	15.0	3	−	−	有	有	一側辺	−	頁岩
5	表採	石核	2.4	3.0	1.4	−	10.1	4	−	−	有	無	−	−	黒曜石

わせる。2はピエス・エスキーユ、4、5は石核である。3はぶ厚い剝片、4は角礫状の荒割り礫を素材としている模様で共に平坦な打面より複数の方向にむかって横長剝片を生産している。5は2次加工のある剝片である。先細りの縦長剝片を素材として、裏面に部分的に2次加工が施されている。

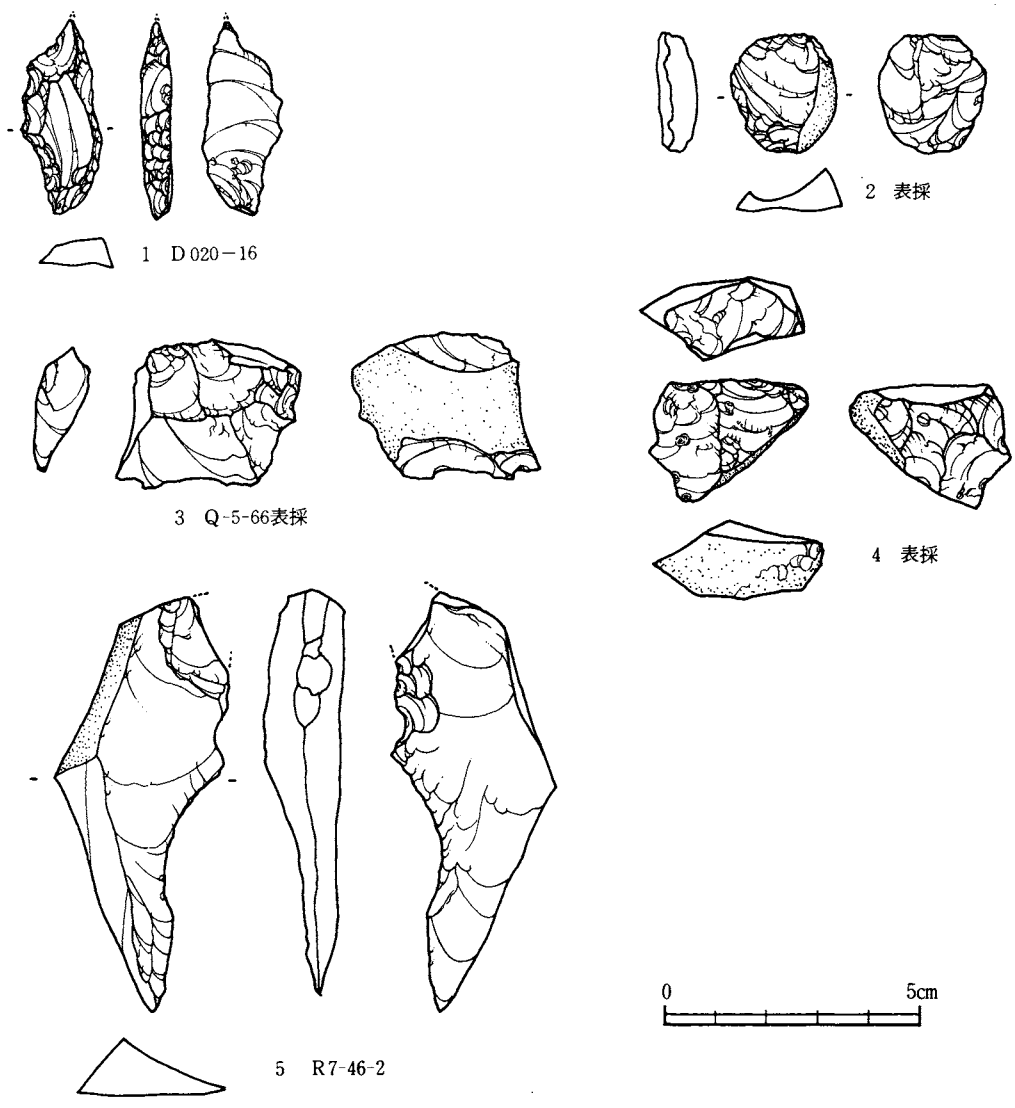


図154 表面採集遺物実測図

第3章　ま　　と　　め

第1節　石器群の変遷

1．I期（図155、156）

Ⅶa層に生活面を持つ石器群である。石器群としては、ナイフ形石器、ピエス・エスキーユ、掻器、削器などがみられる。中でもナイフ形石器、ピエス・エスキーユは他の器種の数量を凌駕している。

該期の剥片生産技術には二つの類型がある。一つは単設打面もしくは両設打面より長軸方向に加撃して、縦長剥片を生産する類型であり（類型Ⅰ）、いま一つは平坦な打面より求心的に幅広な剥片を生産する類型である（類型Ⅱ）。前者はさらに側面調整、打面調整がある例（類型Ⅰ－a）、打面調整がなく、平坦な打面より生産する例（類型Ⅰ－b）とがある。いずれも打面再生の痕跡はない。

石器調整技術は、ナイフ形石器に見るべきものがあり、類型Ⅰによって生産された縦長剥片を素材として2側辺加工の精緻な刃つぶし加工を施した例が多い。

類型Ⅰによって生産された剥片は、この他掻器、削器などの器種の素材として活用されたことが明確であるが、類型Ⅱによって生産された幅広な剥片がどのような器種の素材に用いられたかは不明な点が多い。しかしながら、ピエス・エスキーユの素材は、多くの場合幅広な剥片であり、この器種とのむすびつきが強いものと考えられる。ただし必ずしも確証がある訳ではない。

先にも述べたように、本遺跡では該期にピエス・エスキーユの機能は、一つは利器として、いま一つは石核としての可能性が考えられているが、本遺跡では、ピエス・エスキーユの削片を石器の素材として使用された例、または、削片に刃こぼれや線状痕などの使用痕が観察されないことから、利器としての可能性が強い。石材は珪質頁岩、頁岩等が多く、黒曜石は少ない。

2．II期（図157～159）

Ⅳ～Ⅴ層に生活面を持つと考えられる石器群である。各ブロックともソフトロームとハードロームとの境界付近より出土することが多く、該期を層位的に細分することは困難であった。したがって、技術、型式学的な所見が主体となっている。礫群が多くみられる。

石器群は、Ⅰ期に比べてヴァラエティに富み、ナイフ形石器を主体として、石錐、掻器、削器、ピエス・エスキーユなどがみられる。ピエス・エスキーユはⅠ期に比べ数量的に少なくなり、格段の違いがみられる。

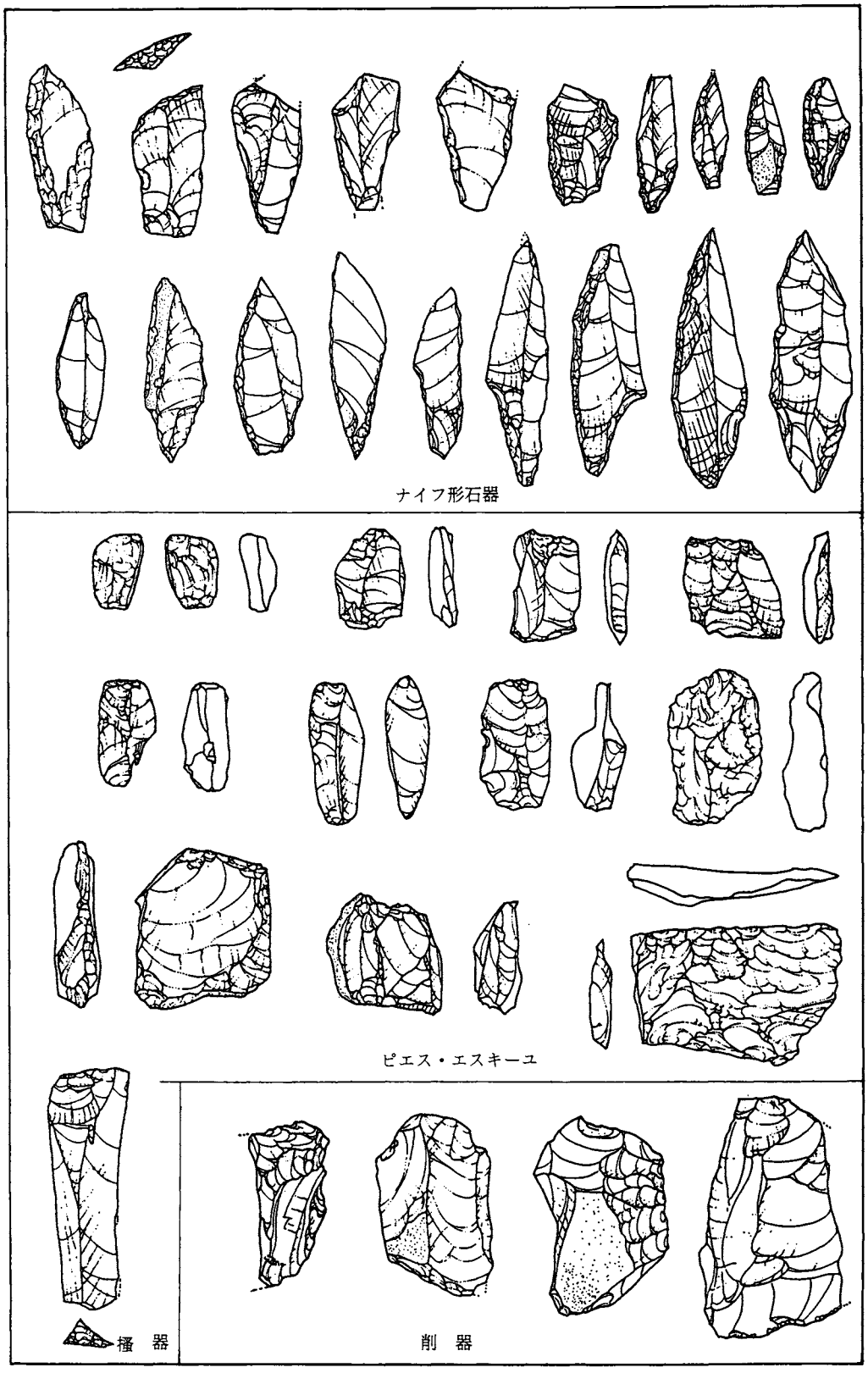


図155　北海道遺跡の旧石器時代石器群の変遷(1)　第Ⅰ期1

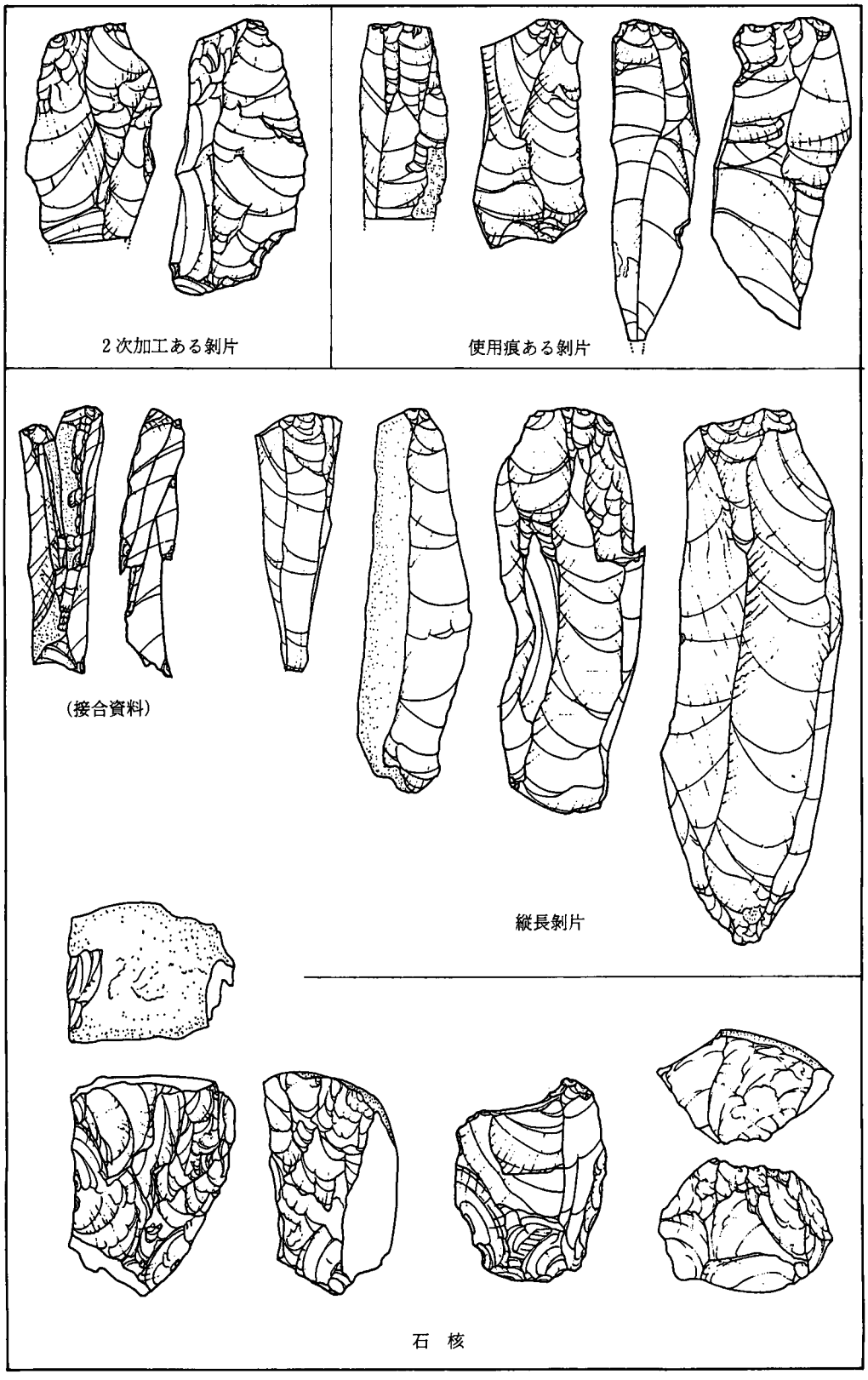


図156　北海道遺跡の旧石器時代石器群の変遷(2)　第Ⅰ期2

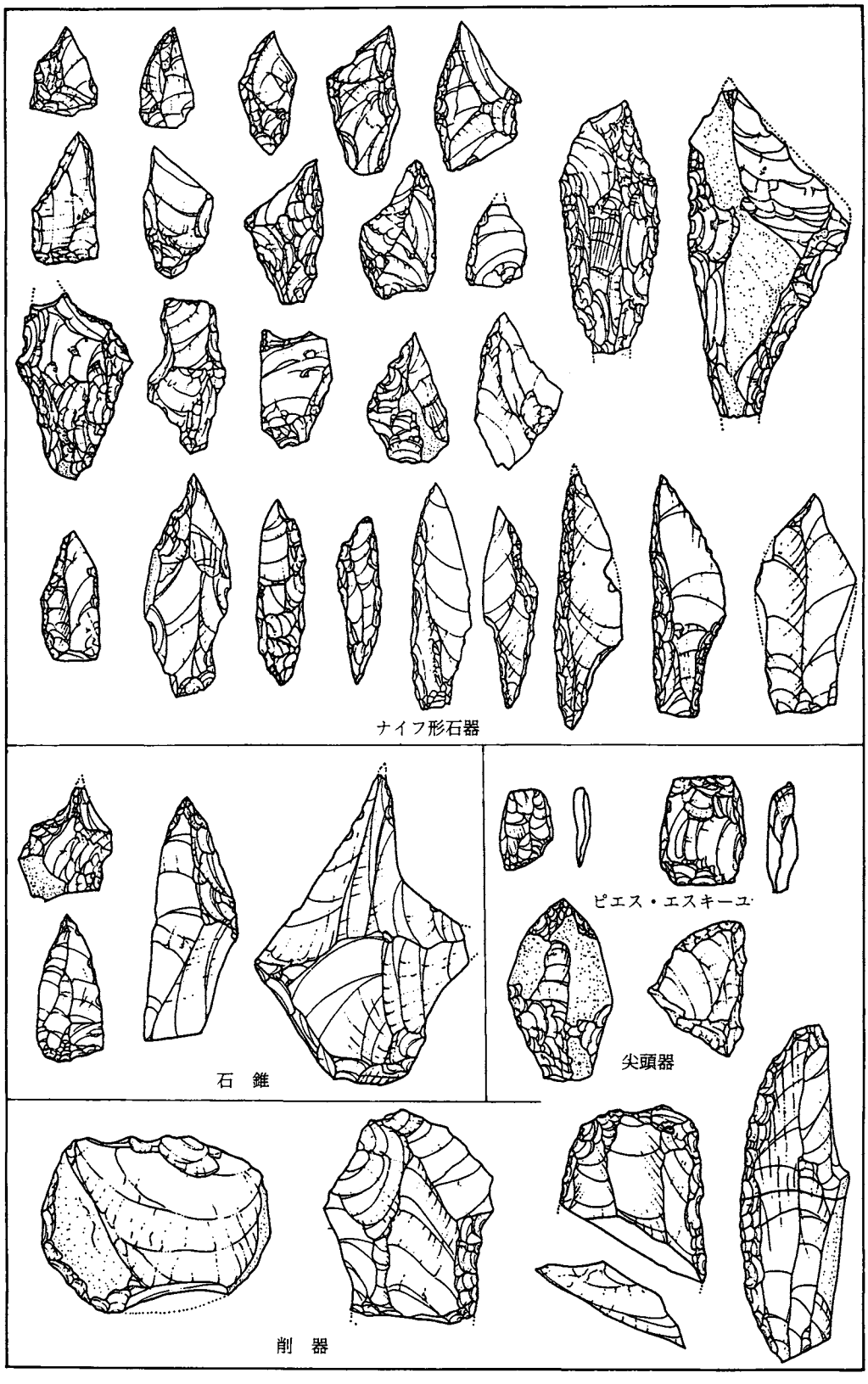
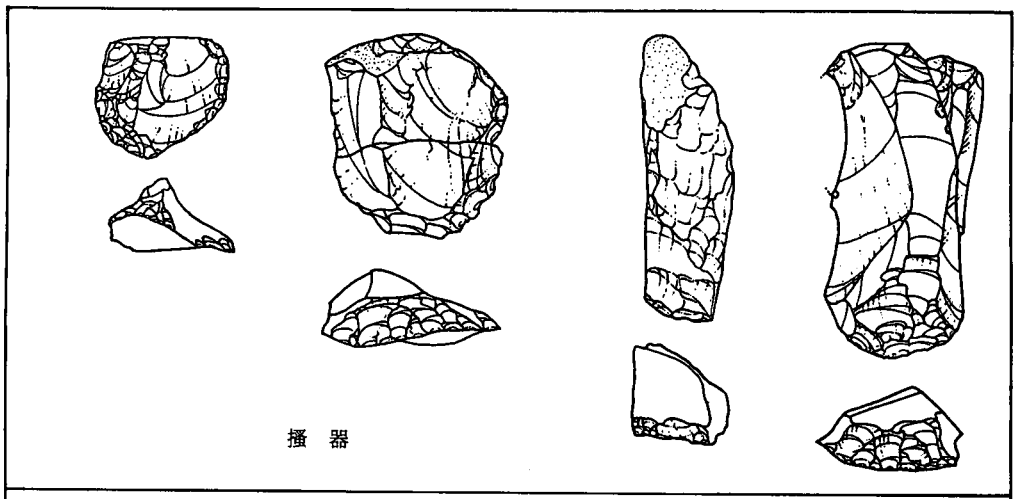


図157　北海道遺跡の旧石器時代石器群の変遷(3)　第II期1



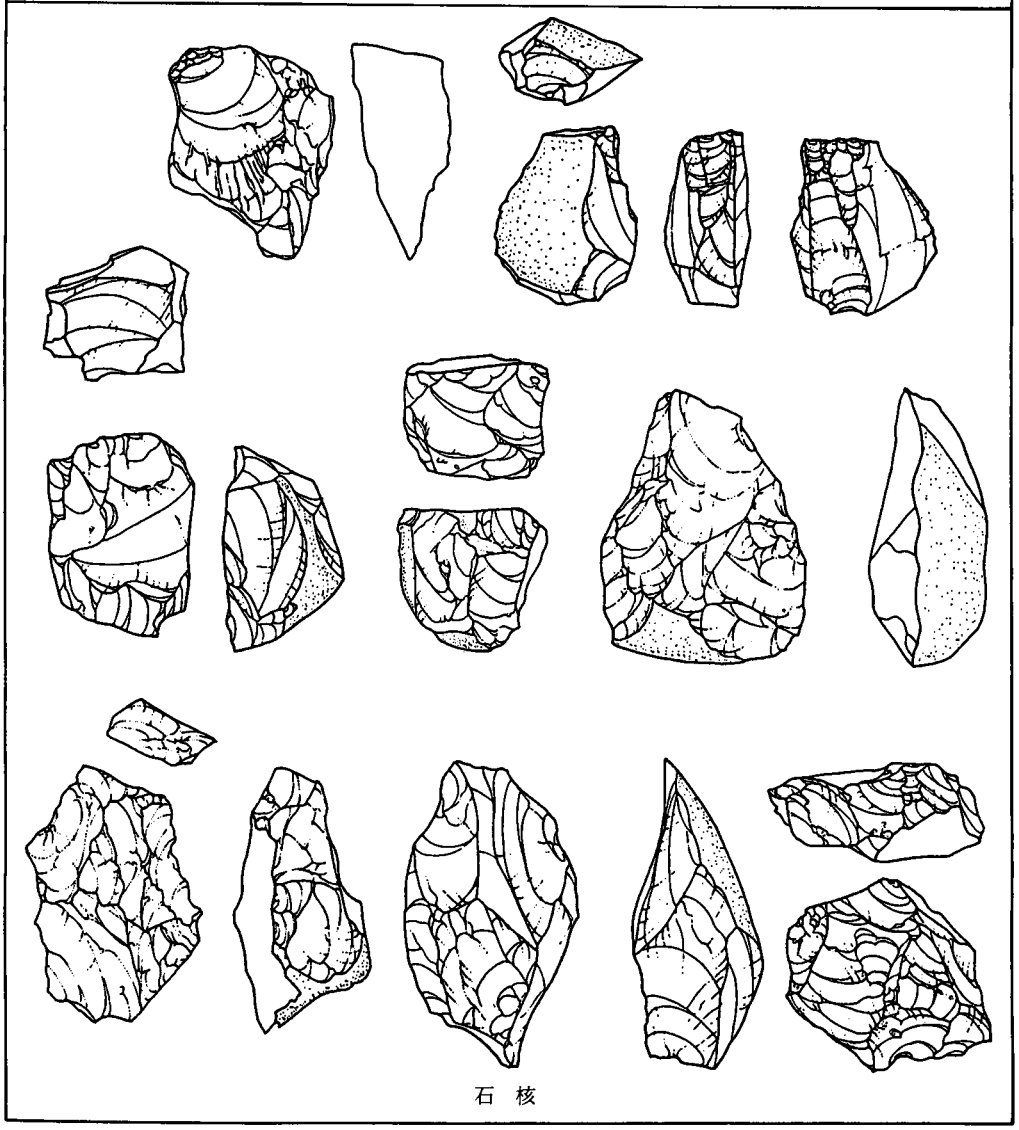


図158　北海道遺跡の旧石器時代石器群の変遷(4)　第II期2

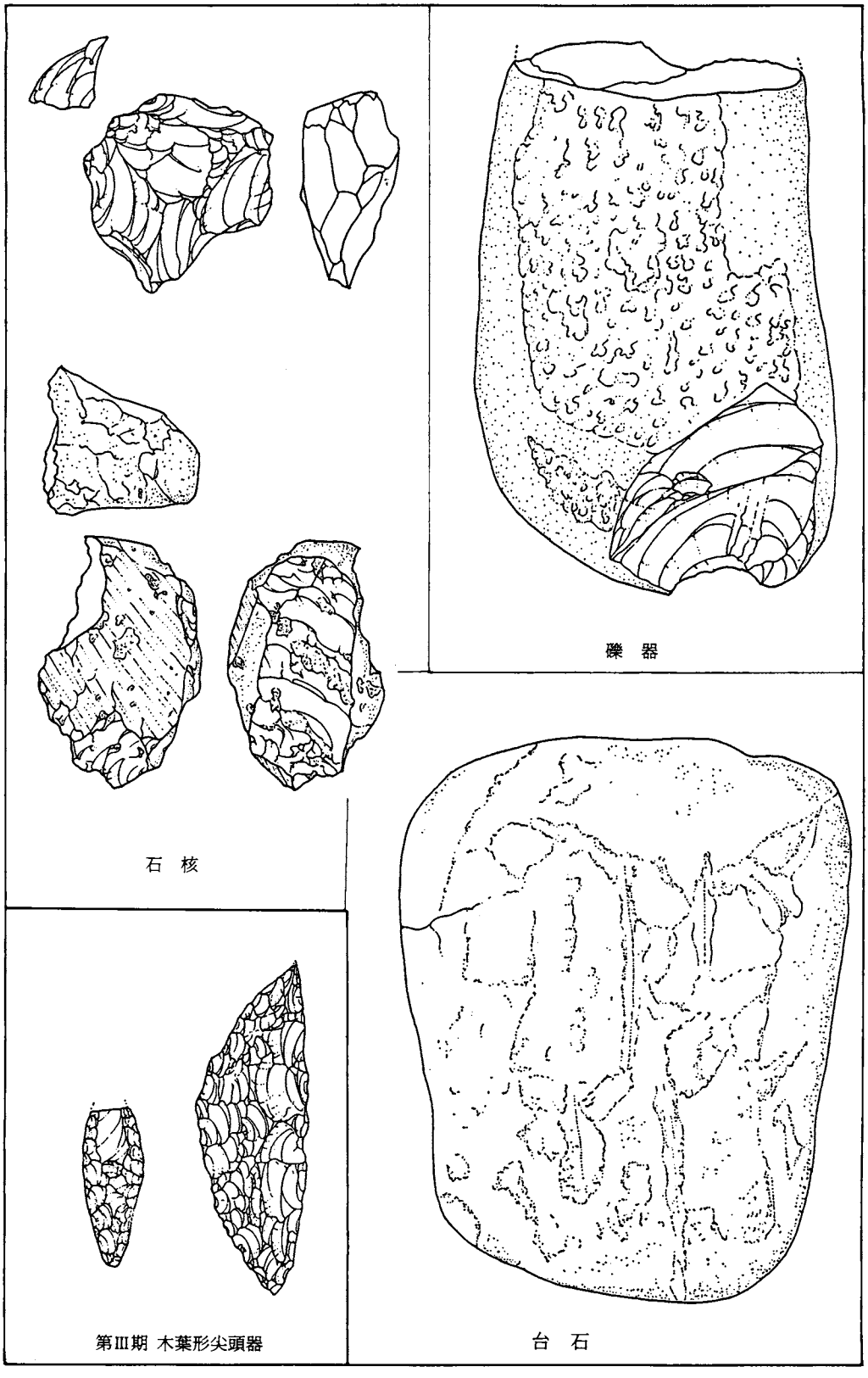


図159　北海道遺跡の旧石器時代石器群の変遷(5)　第Ⅱ期３、第Ⅲ期

剝片生産技術は、原材を求心的に加撃して幅広な横長剝片を生産する類型が多く、縦長剝片を生産する類型は剝片、石核を観察する限り、ほとんどみられない。そのような技術基盤を背景として、石器群は、横長剝片を素材としている例が多く、その中でも大きな割合を占めるナイフ形石器は切り出し形を呈する例が優占する。ただし、縦長剝片を素材としたものと考えられる例も散見し、VIIa層出土例に近い精緻な刃つぶし加工が施されている。石材は黒曜石、安山岩、チャートが主体となっており、この他、メノウ、粘板岩、頁岩等がこれに加わる。黒曜石は、爽雑物を多量に含み漆黒色のものが多く、I期のそれが良質半透明なものであるのに比べ大きな差異がみられる。なお角錐状石器が1点も存在していないため、確実にIV層～V層に相当すると判定し得るブロックはない。

3．III期（図159）

ソフトローム上面に生活面を持つ石器群である。いずれも、表面採集資料であり、しかも単独出土であり、ブロックを形成しない。石器群は木葉形尖頭器2点のみである。旧石器時代にはI～II期に本遺跡が生活の場として活用されたと言っても過言ではない。谷津を隔てて北面する権現後遺跡[註1]ではこの間にVI層段階のブロック群が存在した点と考えあわせると好対照である。本遺跡のある台地の成因とからめて、次節で検討してみたい。

註

1　千葉県文化財センター『八千代市権現後遺跡』昭和59年

参考文献

1　鈴木遺跡調査団『鈴木遺跡I、II』昭和53、55年

2　鈴木道之助『概説—房総における先土器文化の変遷—』『研究紀要1』（財）千葉県文化財センター　昭和51年

3　神奈川考古同人会主催「シンポジウム、南関東を中心としたナイフ形石器文化の諸問題」昭和57年

4　赤沢威、小田静夫、山中一郎『日本の旧石器』立風書房　昭和55年

5　鈴木次郎、矢島国雄「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ」（1）昭和53年

第2節　ブロックの性格について

1．ブロックの立地の時期的な変遷について

本遺跡は第I部で述べたように主としてI期とII期の2時期に集落が営まれ、第III期は副次的である。さてI期とII期とはその立地にどのような違いが見いだされるであろうか。遺跡内全体を眺めると、I期とII期では以下のような状況が捉えられる。

①ブロックは標高10.0m～15.0mの低位段丘と、標高20.0m～23.0mの高位段丘に立地する

例の２種がある。

低位段丘面では、標高13.5mを境として、より低位にII期のブロック群、より高位にＩ期のブロック群が等高線に沿って帯状に分布する傾向にあり、特にＩ期については標高13.5m以下では、ブロックはもとより石器は全く出土していない。

一方、標高20.0m～23.0mの高位段丘では台地縁辺部にＩ期とII期のブロックが共に存在する。

②標高13.5m以下の地区は谷津と近接しており、地下水位が高く、VI層以下は湿地的環境が強い。VI層より検出された姶良 Tn 火山灰は径３cm～５cm の黄灰色斑点状の塊を呈することから湿地性ないし、沼沢地性の火山灰が堆積したものと推察され、また、VI層以下のローム層、特に谷津に近接した地区（Ｐ－５、Ｐ－６、Ｑ－５、Ｒ－６、Ｔ－４地区）ではグライ化しており、先述の堆積環境にあったことを窺わせる。

以上の点から、標高15.0m以下の低位段丘では、Ｉ期においては標高13.5m付近に谷津が迫っていたが、その後段丘の発達に伴い、谷津が北に後退し、II期になってほぼ現状に近い地形環境になったものと想定される。

２．各時期の特徴

（１）Ｉ期

第30～37、40～42、44、45、47～50、52～54、56～61ブロックが該当するが、ブロック間で接合関係を有し、また母岩別資料に共通性がみられる例は、第47ブロックと第48ブロック１例のみであり、他はいずれも自己完結的である。したがって、ブロック群として一括し得る資料として活用できず、全体として個別の事象の集合体と言えよう。

第47ブロックと第48ブロックとは互いに近接しており、最も離れた地点では約15mの距離を隔てて、石器群が接合している。全体として、剝片生産技術を反映したブロック群と言える。

（２）II期

36か所のブロックのうち、石材において共通しているブロックは２グループあり、１つは第１～６ブロック、２つめは第11～16、18ブロックである。前者は青灰色のチャート、後者は爽雑物を多く含んだ黒曜石を主体的な石材としている。そして両者は、それぞれ地域的によくまとまっており、また、第１～５ブロック、11、14、18ブロックはそれぞれ互いに接合関係を有している。その他のブロックについては、ブロック間に接合関係はなく、母岩別資料の共通性もなかった。

II期においては、礫群としての性格を有する第９、17がある他、剝片生産技術を反映したブロックが大多数を占めている。最後にブロックは、礫群と石器群とに大別され、後者は石器製作工程の位置づけ、加工具の有無により本遺跡では、以下のように細分されることを付記して、

まとめとしたい。

Ⅰ礫群　第9、17ブロック

Ⅱ石器群

a〔剝片、砕片〕　7、8、26ブロック

b〔剝片、砕片〕＋利器第5、24、27、29、30、32～36、38、41、46、51、53、54、55、57、58、60ブロック

c〔剝片、砕片〕＋石核第6、16、22、28、37、39、56ブロック

d〔剝片、砕片〕＋利器＋石核第1～3、11、12、14、15、18、21、23、25、31、42～44、47～49、52ブロック

e〔剝片、砕片〕＋利器＋敲石第40、61、62ブロック

f〔剝片、砕片〕＋石核＋敲石

g〔剝片、砕片〕＋石核＋利器＋敲石第4、10、13、19、20、50、54ブロック

参考文献

1　近藤義郎「先土器時代の集団構成」『考古学研究22－4』昭和51年

2　稲田孝司「旧石器時代の小集団」『考古学研究24－2』昭和52年

3　安蒜政雄「遺跡の中の遺物」『どるめん15』昭和52年

4　岡村道雄「長野県石子原遺跡の再検討」『中部高地の考古学』昭和53年

第3節　礫　　群

本遺跡では、計23ブロックの礫片を検出したが、このうち、散発的な出土量を有するブロックを除くと計12か所が礫群として検討するに価するブロックである。しかし、この中でも単独に礫群としての性格を付与することのできるブロックは、第2文化層の第9ブロック、第17ブロックの2ブロックであり、他のブロックはいずれも石器群の中に礫片が付随的に加わるか、もしくは拮抗した数量となっている。

後者は、第2文化層では第5、12、14、16、18、19、21、25、28、29、62ブロック、第3文化層では第44ブロックがこれに該当する。ただし、加熱された礫片が多く含まれていることによりこの付近で、かつては礫片としての場の機能があったことは相違ないものと思われる。しかし、受熱の痕跡を窺わせる炭化物焼土塊、焼けた石器群は全く検出できなかった。第9、17ブロック構成礫より復元できた原材の大きさはほぼこぶし大程度の大きさのものが多く、また、個体数も武蔵野台地の例に比べはるかに稀で、全体として小規模である。

12か所の出土状況を検討すると、いずれも破砕礫であり、中にスス状、タール状の黒色の付

着物がみとめられ、接合関係がかなりの確率でみとめられ、ブロック間で接合することはない。したがって、いずれも廃棄の状態を呈しているものと言えよう。

破砕礫の出土したブロックは第44ブロックを除き、ほとんど本遺跡の台地、北縁部の水域に面した低地に存在しており、礫群の機能的側面を反映した出土状況と言えるかもしれない。

参考文献

小田静夫　金山喜昭「前原遺跡IV中2層文化の礫群」『考古学研究23－1』昭和51年

第4節　搬入石材について

北海道遺跡で出土した石器群の石材は黒曜石をはじめ安山岩、玄武岩、閃緑岩、花崗岩、頁岩、珪質頁岩、砂岩、凝灰岩、チャート、メノウ、粘板岩、流紋岩の計13種をかぞえる。

内訳は火成岩6種、堆積岩7種となっており形状は黒曜石、チャートの一部が角礫の他、いずれも円礫となっている。平均的な原材の大きさは、こぶし大である。

各文化期ごとの石材の出現率は表236のようになっている。III期は遺物の出土量が2点であるため、数量が少なく検討の対象外とする。

I期は、珪質頁岩を筆頭に安山岩、頁岩、玄武岩などが数量的に多く、これに黒曜石、砂岩、

表236　各文化層ごとの石材の変遷

文化期 / 石材	I 期		II 期		III 期	
	個　数	(%)	個　数	(%)	個　数	(%)
黒曜石	15	1.3	425	34.1	—	—
安山岩	277	23.7	125	10.0	1	50
玄武岩	147	12.6	12	1.0	—	—
閃緑岩	—	—	1	0.1	—	—
花崗岩	—	—	1	0.1	—	—
頁岩	258	22.1	99	8.0	—	—
珪質頁岩	371	31.8	113	9.1	1	50
砂岩	29	2.5	20	1.6	—	—
凝灰岩	—	—	1	0.1	—	—
チャート	9	0.8	248	19.9	—	—
メノウ	35	3.0	32	2.5	—	—
粘板岩	5	0.4	2	0.2	—	—
流紋岩	—	—	2	0.2	—	—
石材不明	22	1.9	163	13.1	—	—
計	1,168	100	1,244	100	2	100

チャート、メノウ、粘板岩等が加わる。

II期は、黒曜石、安山岩、珪質頁岩、頁岩、チャートなどが多いが、黒曜石が他を圧倒的に凌駕している。黒曜石は、爽雑物を含有した漆黒色の石材が多い。この他に、石材としては玄武岩、閃緑岩、花崗岩、砂岩、メノウ、凝灰岩、粘板岩、流紋岩などがあるが、前述の5種の石材に比べ数量的には、はるかに劣る。

全体を通観して、I期は珪質頁岩、頁岩、安山岩が主体、II期になると黒曜石の増加がみられ、これにチャートが加わるという石材の構成となっていることが窺われる。以上の石材に関して、権現後遺跡でその原産地の問題について論述したことがあるが、現状でも同様にいまだ不明である。今後の検討課題としたい。[註1]

註

1　千葉県文化財センター『八千代市権現後遺跡』昭和58年

第II部　弥　生　時　代

第1章　弥生時代の概観

弥生時代に比定できる遺構は竪穴住居跡のみである。しかも1軒と言う検出状況であり、須久茂谷津を挟んで位置する標高24mを計る権現後遺跡において、弥生時代後期の竪穴住居跡73軒、方形周溝墓3基、ピット1基を検出しているのに対し、対照的なあり方を示している。

両遺跡の対照的なあり方が何に原因するか明確でないが、すくなくとも権現後遺跡が標高24mの台地上に位置し、そこに集落が形成しているのに対し、北海道遺跡においては、標高12m前後の段丘上を中心に集落を形成していると言う、立地上の相違が明確に現われている。

弥生時代後期の集落立地は、北総地域においては台地上に求められるのが一般的であり、このような意味から考えれば、北海道遺跡における集落の立地は特異な状況として把握することも可能であるように思われる。

しかし、萱田地区内の遺跡群において、北海道遺跡の集落立地に近い状況を示す遺跡は他にないわけではなく、現に井戸向遺跡において標高14mから15mの段丘緩斜面に集落を形成している例が認められるが小規模な展開に終っており、やはり権現後遺跡とは比較できない状況を呈していると言っても良い。

先にも指摘したように、後期の一般的な集落立地は台地上に求められ、集落は台地上において展開を見せると言って良いであろう。

第2章　遺構と出土遺物

第1節　は　じ　め　に

弥生時代に比定できる群は第Ⅰ群のみで、しかも竪穴住居跡1軒で構成しており、S－6地域において検出した。

この地域には、古墳時代中期や歴史時代の集落も立地しており、さらに溝も認められ、弥生時代の住居跡は、溝によって一部重複切断されている。

出土遺物が稀少で、しかも土師器や須恵器であるため、明確な時期比定はできないが、平面形や、内部構造を見る限り後期に比定して間違いないと考えられる。

面的な調査を実施したにもかかわらず、1軒のみの検出に止まり、他に住居が所在する状況はまったく認められない。ただし、北側部分に地山が削平されている部分があり遺構が所在していた可能性は充分考えられるが、明確な検証資料を欠くため断定はできない（図A）。

第2節　遺構と遺物

1．D049号遺跡（図160、図版30－1、2）

南北に連なる溝状遺構によって遺構東壁コーナー部分が攪乱を受けているため、遺存状況は良好でない。

遺構　長径4.52m、短径3.13mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.24m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱で踏み固められた状況は認められない。柱穴は対角線上に配置したP₁～P₄を検出した。径平均0.24m、深さ平均61.5mを計る。壁溝は検出できなかった。

炉　P₁とP₂の中間、やや住居中央寄りに位置している。長径0.60m、短径0.46m、深さ0.08mを計り、焼土が充満している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層が堆積している。遺物は稀少で、しかも細片が多く、図示できるものはない。

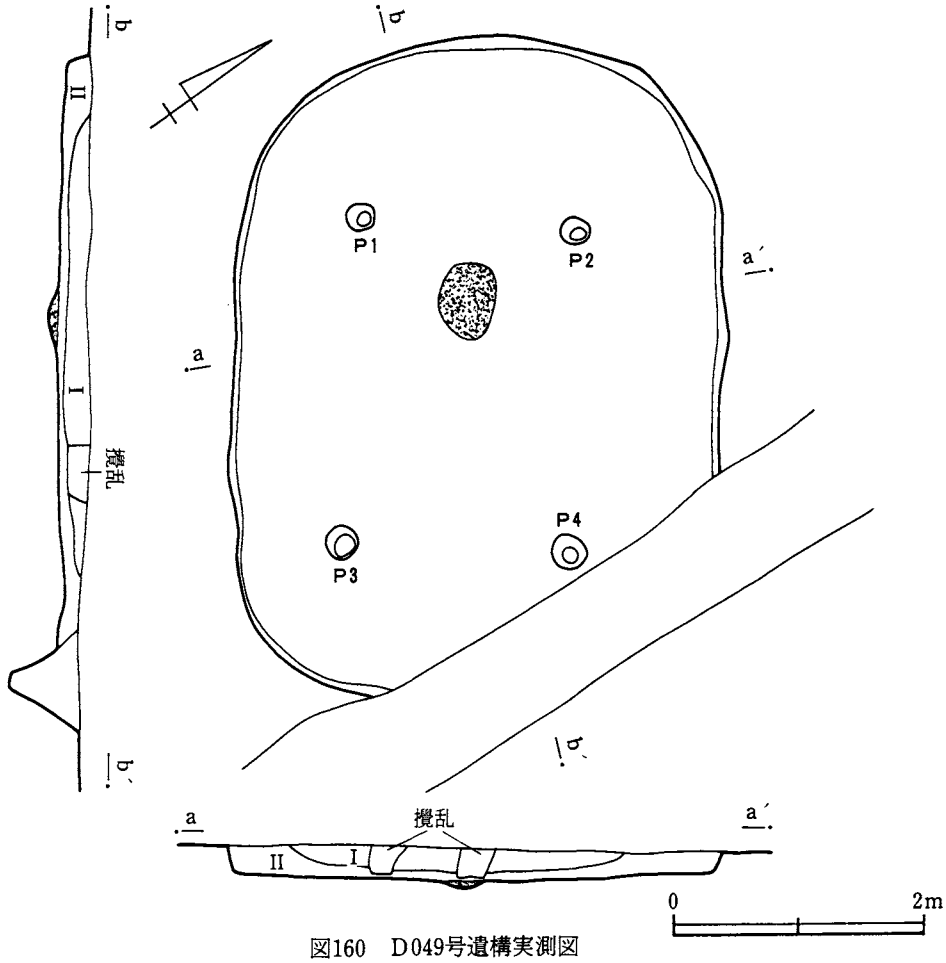


図160　D049号遺構実測図

第III部　古　墳　時　代

第1章　古墳時代の概観

古墳時代に比定できる遺構は、中期、後期の竪穴住居跡のみである。

古墳時代中期に比定できる住居跡は２２軒で、住居の平面形は方形を基調としながら個々に特徴を有しており、中には古墳時代前期に認められる横長の平面形を呈するものもあり、権現後遺跡との関係を窺わせる住居も存在する。また規模の点においても明瞭に大、小の違いがあり、住居の指向方位も統一的でない傾向が窺える。

中期の住居群は、第Ⅰ群から第Ⅵ群までかなり広範囲に分布しているが、中心は段丘の須久茂谷津に近接する地域に求めることが可能である。

22軒の住居群の内12軒からは、石製模造品が出土しており、工房跡も存在するなど多様性を帯びている住居群と言えよう。第Ⅲ群が10軒以上の住居群で構成される反面、他群は１軒ないし２軒で構成されると言う対照的な側面も有している。

一方、古墳時代後期に比定できる住居跡は７軒で、遺跡の北東部分を中心に立地している。この地域は地区界に近く、一部未調査部分もあるため、検出した７軒をもってすべて集落を把握できたことにはならず、集落はさらに東側に広がる可能性を秘めている。

後期の住居群は、第Ⅰ群から第Ⅲ群まで区分できるが、群の構成は大きな違いを生じている。第Ⅰ群は４軒、第Ⅱ群は２軒、第Ⅲ群は１軒となっている。第Ⅰ、Ⅱ群は先にも述べたように東側地域に住居群の広がる可能性があるため実際の住居数は増加しようが、第Ⅲ群は面的な調査にもかかわらず１軒のみである。１軒単独に存在するあり方は後期のみならず、中期においても認められ、また歴史時代においても認められる現像であるが、後期の場合は他群とかなりの距離を有している点が特異と言えるであろう。

住居の規模は大、小の違いが明確であるが、指向方位は第Ⅱ群の住居に不統一な面があるものの、ほぼ同一と考えて良く、群の分散傾向の割りには統一がとれていると言えるであろう。

第2章　中期の遺構と出土遺物

第1節　は　じ　め　に

古墳時代中期に比定できる竪穴住居跡は、第Ⅰ群１軒、第Ⅱ群２軒、第Ⅲ群13軒、第Ⅳ群２軒、第Ⅴ群２軒、第Ⅵ群２軒の合計22軒によって構成される。検出した22軒をもって集落全体がすべて把握できたわけでなく、特に東側地区界に近接する第Ⅳ、Ⅴ群は調査対象外の地域に広がることが充分に考えられる。

中期の住居群の立地は標高12mを中心とする段丘上に立地しており、最も遺構数が多い第III群は須久茂谷津の沖積地になかり接近している状況が窺える。また、第IV群から第VI群もほぼ同様な環境に立地していることも指摘できる。

このような沖積地に接近して立地する群が存在する反面、第Ⅰ群、第II群のように段丘面に移行する斜面上に立地する群もあり、特徴的な対照を見せていると言って良いであろう。

22軒の住居群の内12軒の住居跡より石製模造品やそれに関係する石製遺物が出土している。これらを直ちに工房跡と判断することはできないが、いわゆる工作用ピット内の底面に白色粘土を貼り込んだものもあり、明確に工房跡と判断できる住居もある。

住居の規模はかなりの相違を呈しており、大形と小形の住居の区分が明瞭である。また住居の指向方位も統一的なあり方を示していない状況を呈している。

第2節　第Ⅰ群の遺構と遺物

古墳時代中期の第Ⅰ群は、竪穴住居跡1軒のみの群で、R－11地域において検出した。

広範囲な面的な調査を実施したが、近傍には同時期の住居等の遺構はまったく検出することができず、単独で位置している。古墳時代中期の群では、この第Ⅰ群が1軒のみの検出に止まった。

古墳時代中期における他群のあり方を一瞥すれば、最も遺構数の多い第III群を除いた群は、いずれも2軒によって構成されており、しかもかなり近接する状況で住居が分布している。

このような分布状況は、場合によっては古墳時代中期における最少の単位として考えることが可能かもしれないが、1軒単独と言うあり方は、少なくとも北海道遺跡においては特異な状況を呈していると言って良いであろう（図A）。

1．D131号遺構（図161、図版30－3）

1軒単独で位置しており第II群のD105の南方約95mの距離を有している。

遺構　北壁3.13m、東壁4.37mで長方形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈して0.25m掘り込んでいる。床面は軟弱で踏み固められた状況はない。床面上にピットを2か所検出したが性格不明である。径0.25m、深さ0.3mを計る。柱穴、壁溝、炉は検出できなかった。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、II層褐色土層、III層暗茶褐色土層が堆積しているが、各層からは図示できる遺物の出土はない。

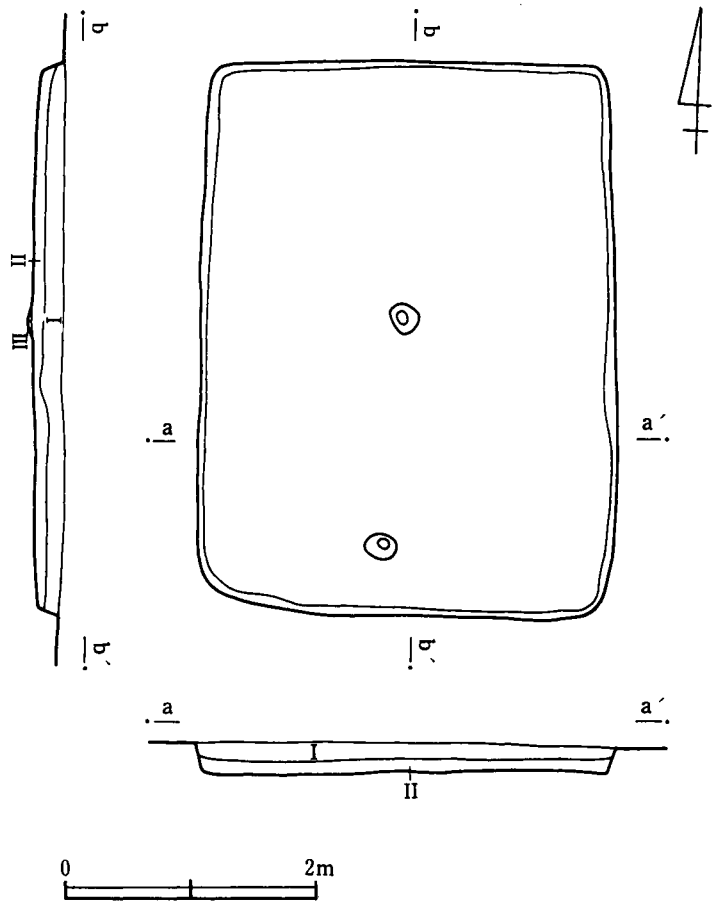


図161　D131号遺構実測図

第3節　第II群の遺構と遺物

古墳時代中期の第II群は、竪穴住居跡2軒で構成される群で、R－9地域において検出した。

第II群が位置する地域は段丘面に移行する直前の斜面で、歴史時代の第III群も立地しており、2軒の内1軒が歴史時代の住居跡に重複切断される状況を呈している。また、残る1軒も芋穴による攪乱を受けているため、遺在状況は良くなく、住居の全体について充分に把握できない面がある。

2軒の住居は、ほぼ東西方向に位置し、規模もほぼ均しく、内部構造の面から見ても近

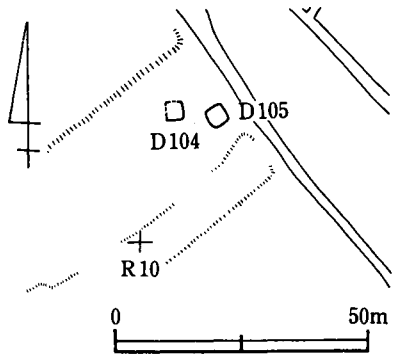


図162　古墳時代中期第II群遺構分布状況図

似する状況が認められるが、指向方位は違いを生じているところである。

重複関係を呈していたり、大きな攪乱を受けている関係であろうか、図示できる当該期の遺物は皆無であり、いずれも歴史時代の遺物を出土している。したがって、詳細な住居の時期決定については、具体的に検証できる遺物は皆無であるが、住居全体の規模、内部構造より考えれば、中期に比定して誤りないであろう（図162)。

1．D104号遺構（図163～165、図版31－1）

II群内で西側に位置し、D105と約4mの距離で近接している。歴史時代のD103に重複切断されており遺存状況は良好でない。

遺構　南壁3.2m、東壁3.45mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。北西部分はD103に切断されているため明瞭でない。壁は傾斜を呈して掘り込んでおり、約0.2mで床面に達する。床面はやや堅緻な状況を呈しているが、壁際は軟弱な状況を呈している。壁直下には幅0.2m、深さ0.01mの壁溝が認められる。柱穴は検出できなかった。

炉　住居中央より東に偏在している。長径0.4m、短径0.25m、深さ0.05mで楕円形を呈し、

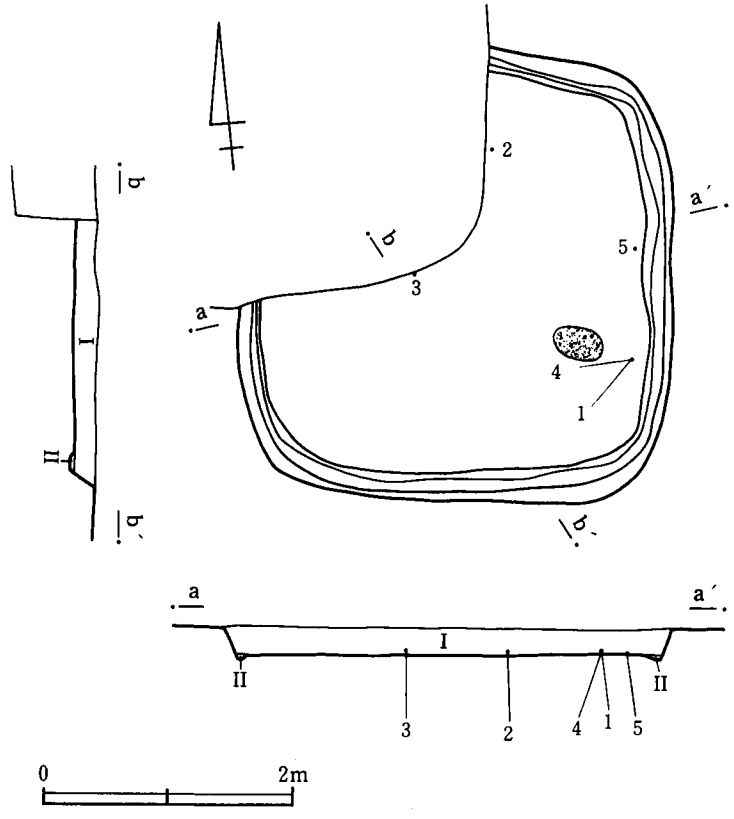


図163　D104号遺構実測図

ほぼ中央部分に厚さ0.05mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒褐色土層、Ⅱ層茶褐色土層が堆積しており、遺物はⅡ層中より出土しているが、いずれも歴史時代に比定できるものであり混入遺物と判断できる。

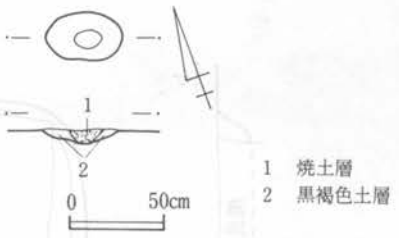


図164　D104号遺構炉跡実測図

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器がある。甕形土器は1で胴部下半の破片である。坏形土器は2～5で、2は丸底に近い平底を呈し、体部は内彎ぎみに開く。3は体部が若干内彎ぎみに開く形状を呈している。4は高台付の底部破片である。5は体部が大きく開く形状を呈し高台のあるものである。

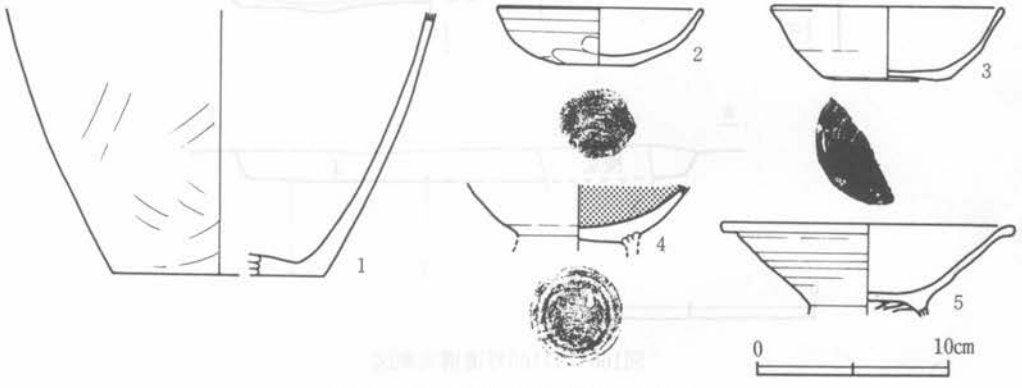


図165　D104号遺構出土遺物実測図

D104出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	—	—	(11.2)	底部のみ	ヘラ削り	雲母 砂粒	堅緻	茶褐色	
2	坏	3.0	11.0	4.05	⅓	下端静止ヘラ削り	雲母 砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
3	坏	3.8	(12.4)	(6.8)	¼	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
4	高台付坏	—	—	—	⅓	—	砂粒 雲母	堅緻	茶褐色	内黒、糸切り
5	高台付坏	—	15.6	—	½	—	砂粒	やや堅緻	茶褐色	

2．D105号遺構（図166～168、図版31－2・3）

Ⅱ群内で東側に位置し、D104と約4mの距離で近接している。芋穴による攪乱を受けているため遺存状況は悪い。

遺構　北壁3.5m、東壁3.54mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡であるが、壁は直線的に構

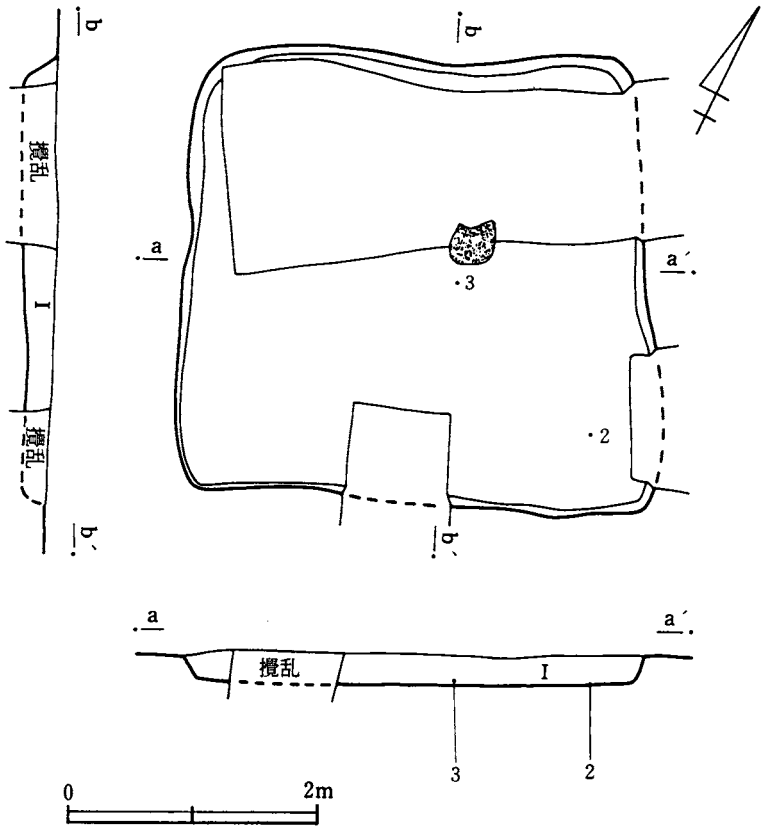


図166　D105号遺構実測図

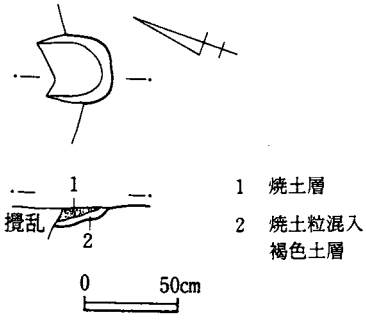


図167　D105号遺構炉跡実測図

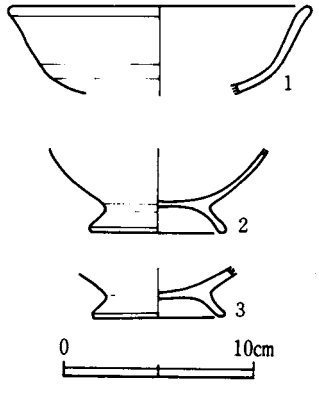


図168　D105号遺構出土遺物実測図

成されず、かなり不整である。壁は傾斜を呈して掘り込んでおり、約0.2mで床面に達する。床面は中央部が若干堅緻な以外は軟弱な状況を呈している。柱穴、壁溝は検出できなかった。

炉　住居中央部より北側に偏在している。一部攪乱を受けているため旧時の状況は不明であ

るが、長径は推定0.5m程度と思われる。深さは0.1mを現状で測り、厚さ0.06mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　黒色土層の単一層で、遺物は覆土中より出土しているが、いずれも歴史時代に比定できるものであり、混入遺物と判断できる。

出土遺物　遺物は、坏形土器のみである。1は底部が欠損し、体部は直立ぎみに開く。2、3は「ハ」字状に大きく開く高台を有するものである。

D105出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	坏	—	(16.1)	—	1/3	下端回転ヘラ削り	—	堅緻	暗茶褐色	
2	高台付坏	—	—	7.25	2/3	—	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
3	高台付坏	—	—	—	高台部のみ	—	砂粒	堅緻	黒褐色	

第4節　第III群の遺構と遺物

古墳時代中期の第III群は、竪穴住居跡13軒で構成される群で、P－5、6、Q－5、6、R－5、6の地域において検出した。

第III群が位置する地域は、須久茂谷津の沖積地に接する段丘上で、標高13mから11mの緩斜面となっている。

13軒の住居群は、最も東方に位置するD022と、最も西方に位置するD080との間は約100mの距離を有していることからもわかるように、かなり広範囲の分布を呈している。群内は場合によって細分できるような状況であるが一応一つの群として全体を纏るものである。

住居の規模や内部構造はかなりの相違が認められ、中には権現後遺跡において認められた古墳時代前期の横長な平面形を呈す住居もある。また、滑石製の模造品を出土する住居には、工作用ピットと

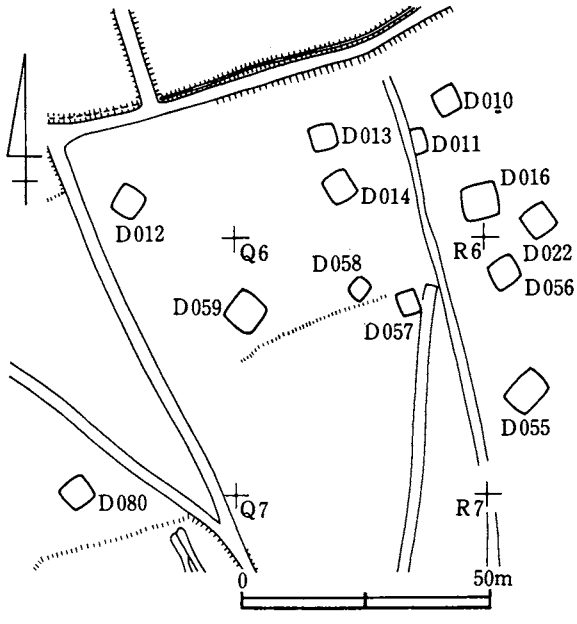


図169　古墳時代中期第III群遺構分布状況図

判断できるものもあり、第III群は石製模造品の工房群としての側面も有していると言えよう。

石製模造品などを出土する住居は、13軒の内10軒で認められ、7割以上の住居が何らかの形で石製模造品の生産に関係していたことが窺える（図169）。

1．D010号遺構（図170～176、図版32－1、39）

III群の住居群内において北東に位置し、D011が近接している。溝状の攪乱を受けているが全

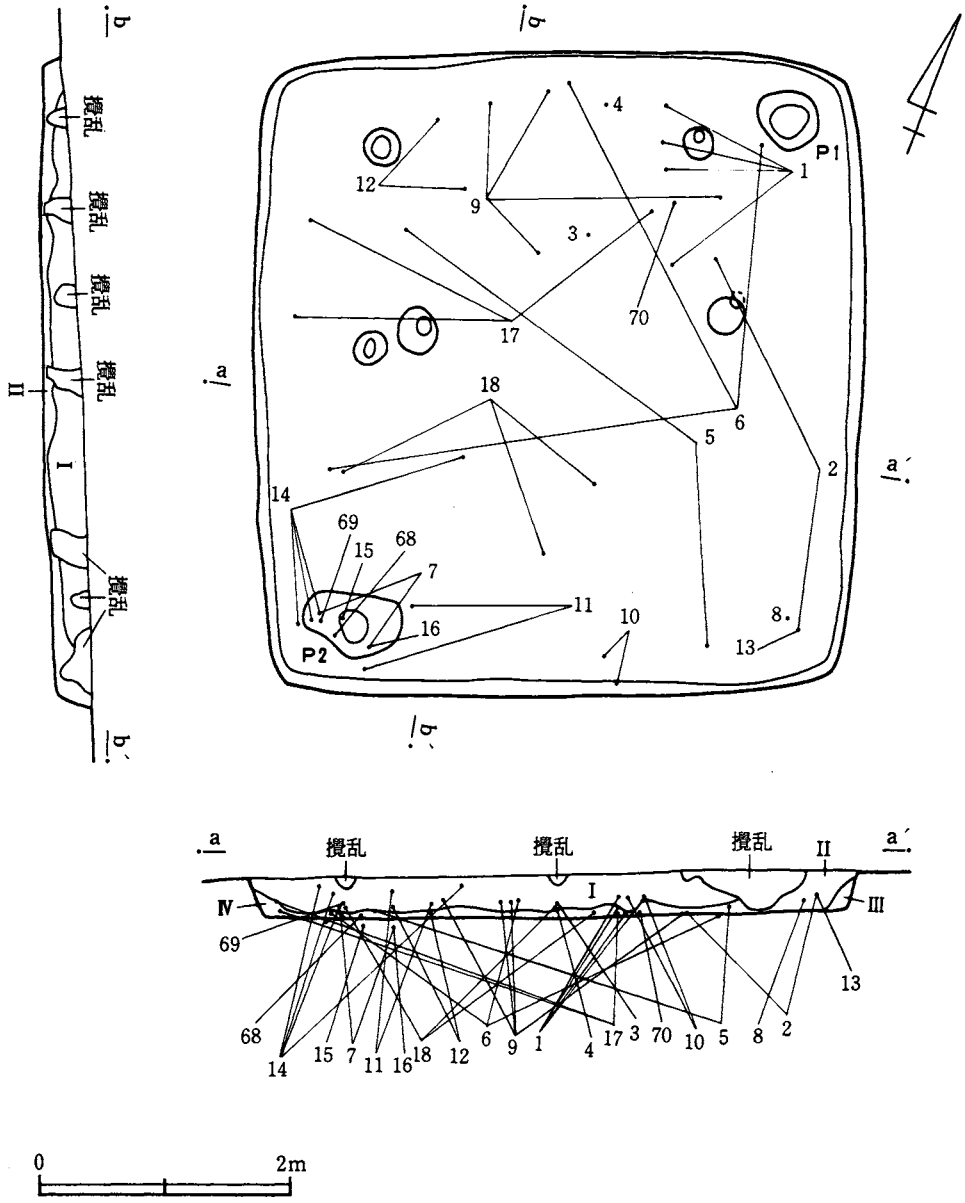


図170　D010号遺構実測図

体は充分に把握できる。

遺構　北壁4.6m、東壁4.65mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡で、石製模造品の工房跡でもある。壁は若干の傾斜を呈し東壁が0.3m掘り込んでいる。ただし緩斜面に構築しているため北壁の掘り込みは浅い。床面は堅緻な状況を呈している。北東壁コーナー部分に径0.5m、深さ0.25mのP_1、南西壁コーナー部分に長径0.8m、深さ0.18mのP_2を検出した。P_2は貯蔵穴と思われる。その他住居中央より北側に偏在して5か所に小ピットを検出したが柱穴とは考えがたい。壁溝、炉は検出できなかった。

遺物出土状況　I層暗黒褐色土層、II層ロームブロック混入黒褐色土層、III層黄褐色土層、IV層焼土粒混入黄褐色土層が堆積しており、遺物は、I層下部、P_2より出土している。石製遺物は北東部分と、南側部分のI、II層中より出土している。

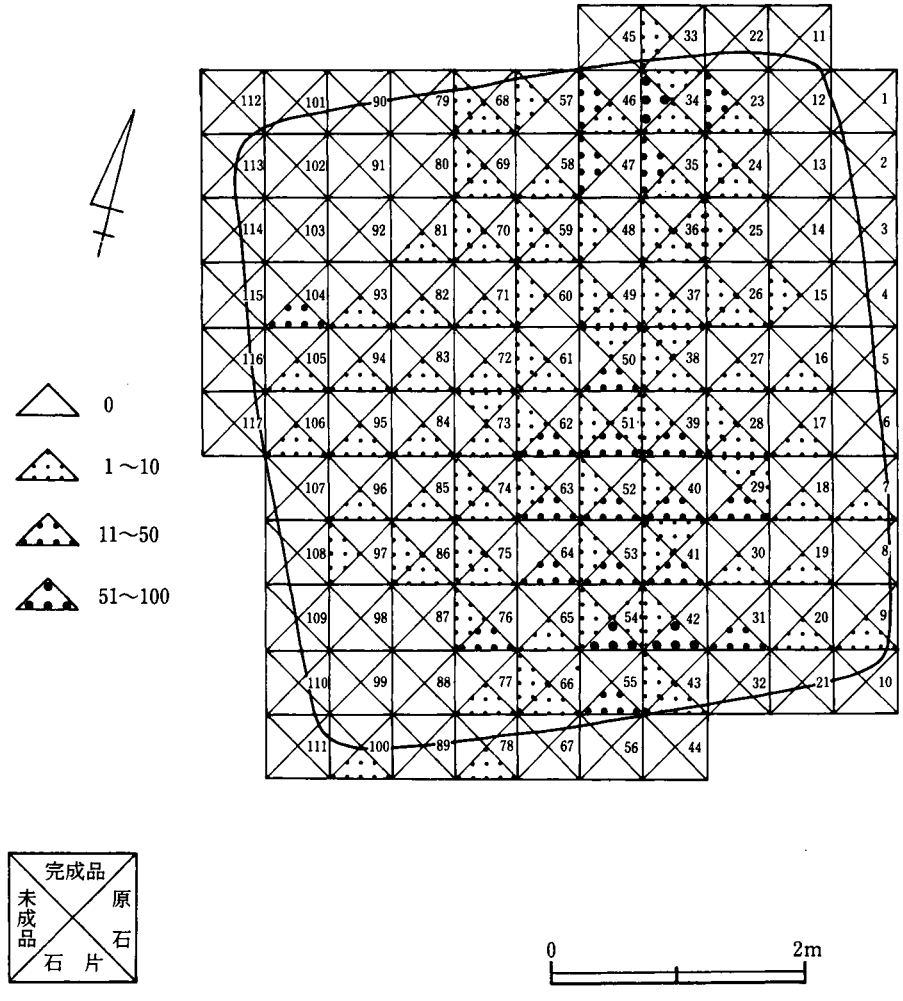


図171　D010号遺構石製遺物平面分布模式図

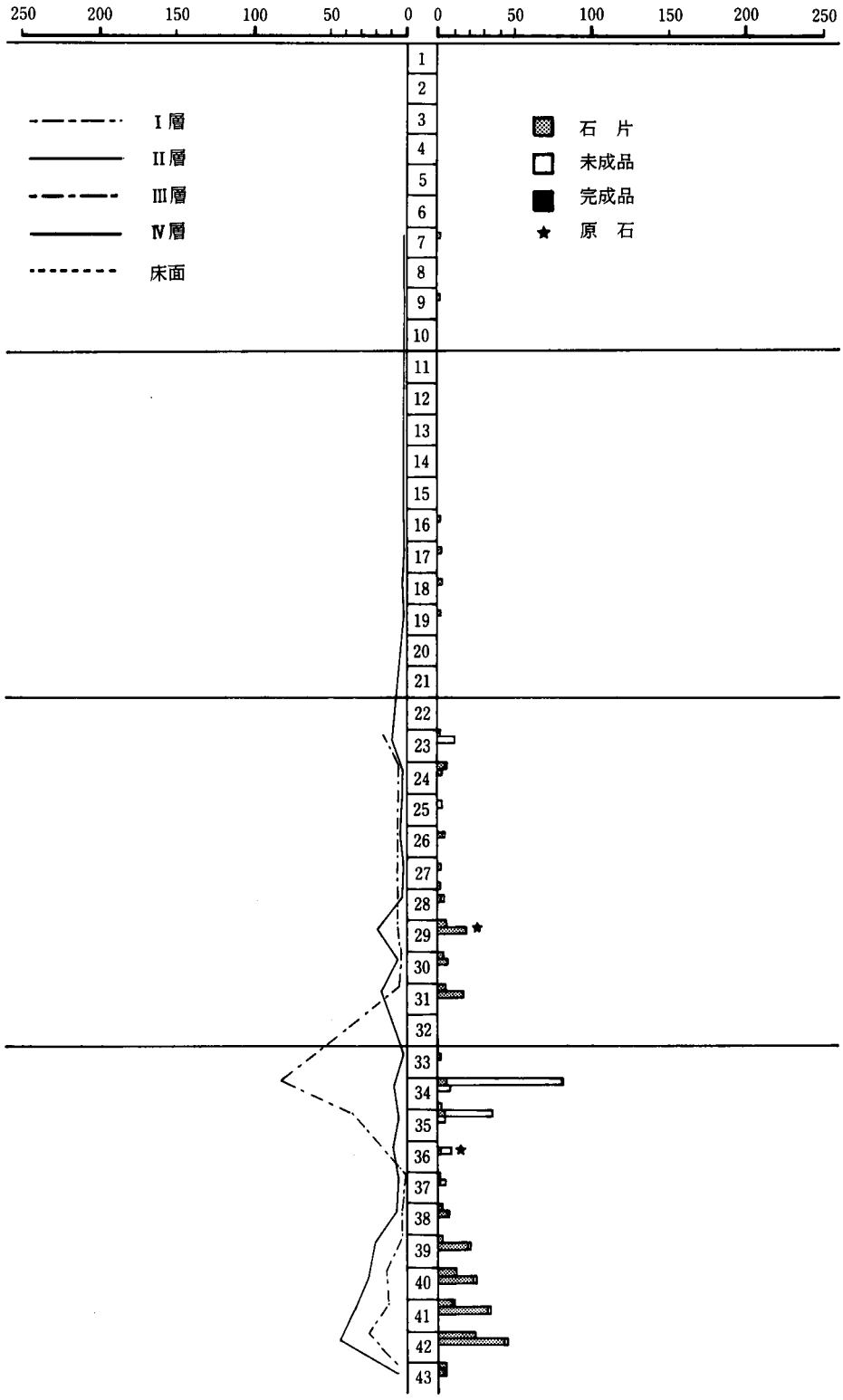


図172 D010号遺構石製遺物層位別分布図(1)

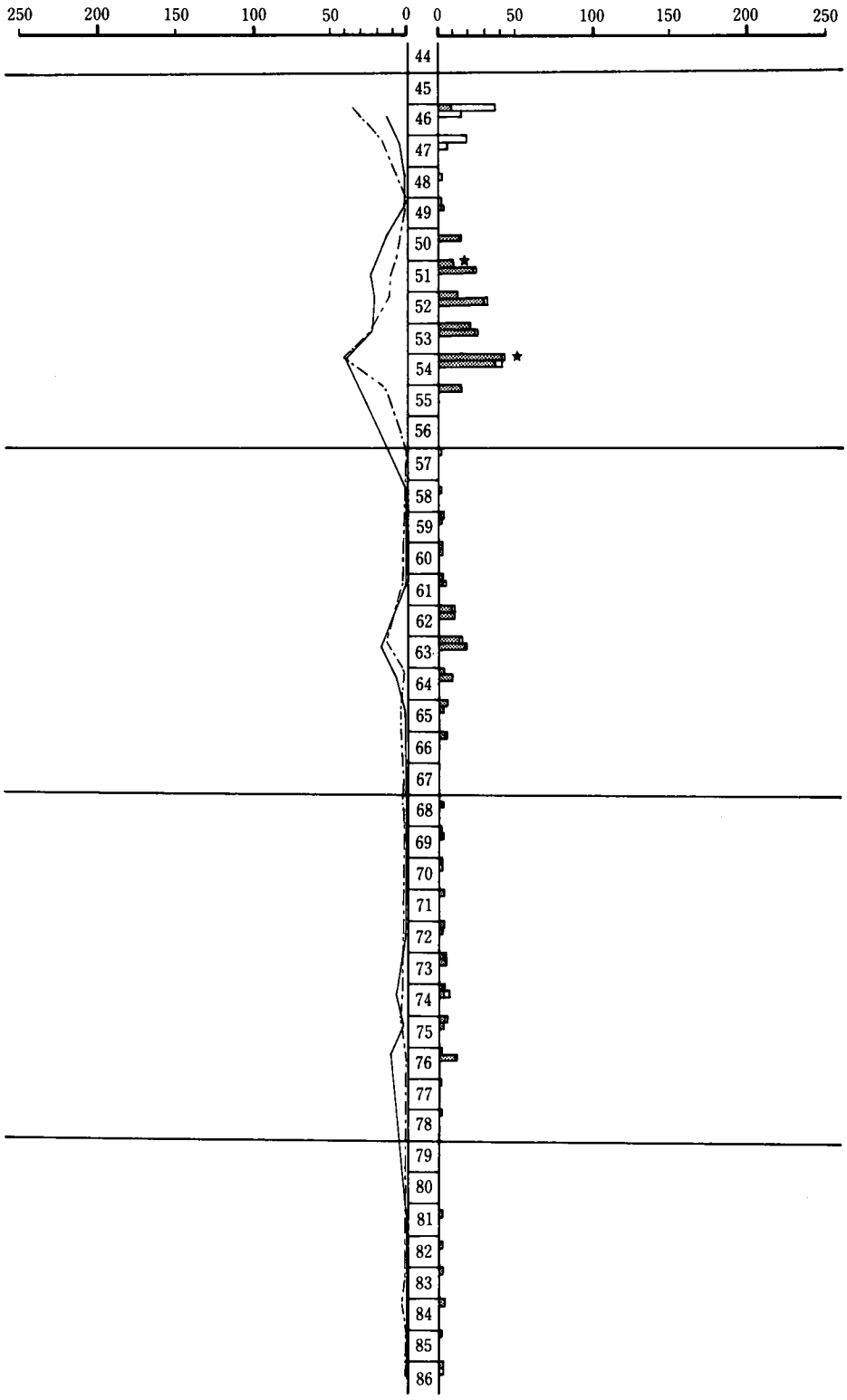


図173 D010号遺構石製遺物層位別分布図(2)

出土遺物　遺物は、甕、坩、坏、高坏形土器と石製品がある。甕形土器は１～７で、１は短い口縁が外反する。２は「く」字状に外反する口縁部破片、３は直立する口縁部破片である。４～７は底部破片である。坩形土器は８で胴部は球形を呈す。坏形土器は９～16で９は深身で埦に近い。他は内彎ぎみに開く体部を呈している。高坏形土器は17、18で、17は接合部の破片、18は大きく開く脚部の破片である。石製品は19～71で、19～25は臼玉、26～67は臼玉未成品および欠損品である。いずれも滑石製である。68、69は敲石で一端に使用痕が認められる。70、71は滑石の原石で部分的に鑿痕が認められる。

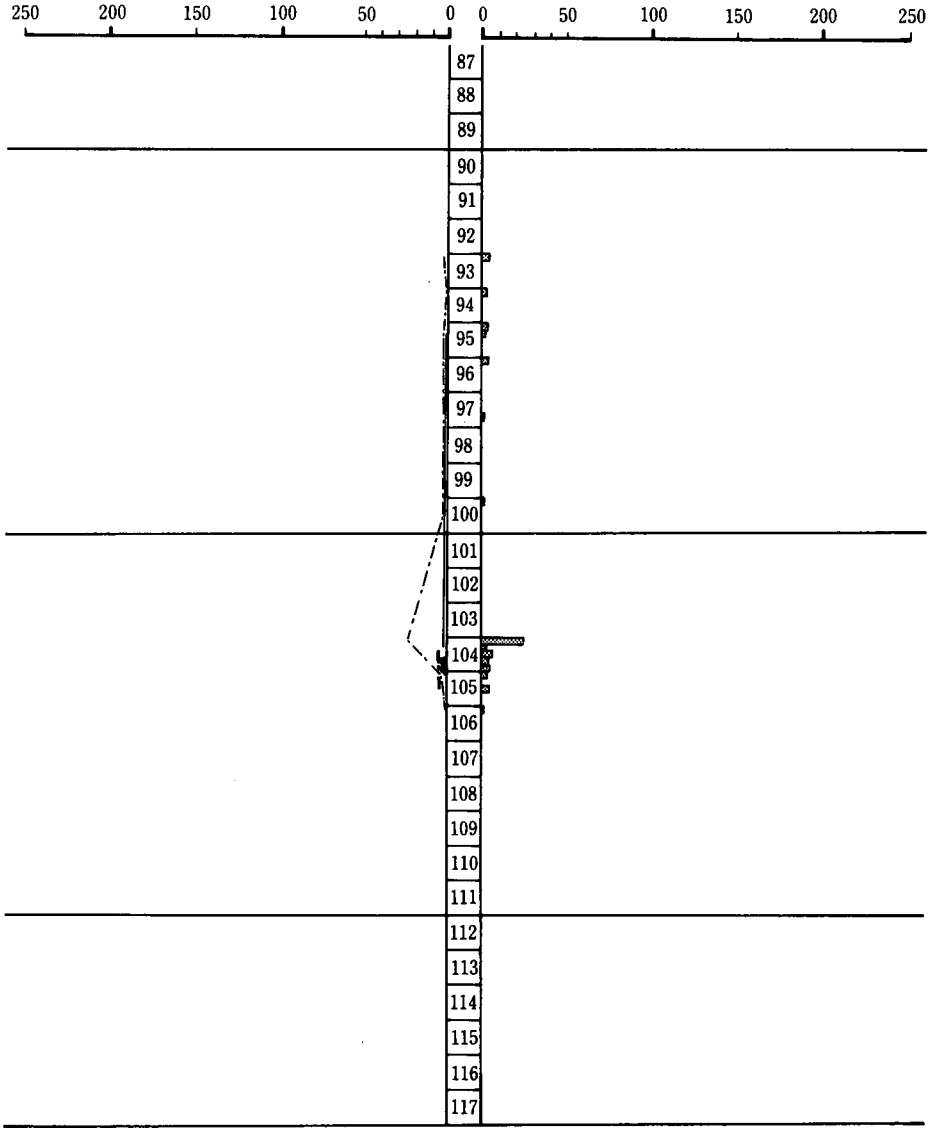


図174　D010号遺構石製遺物層位別分布図(3)

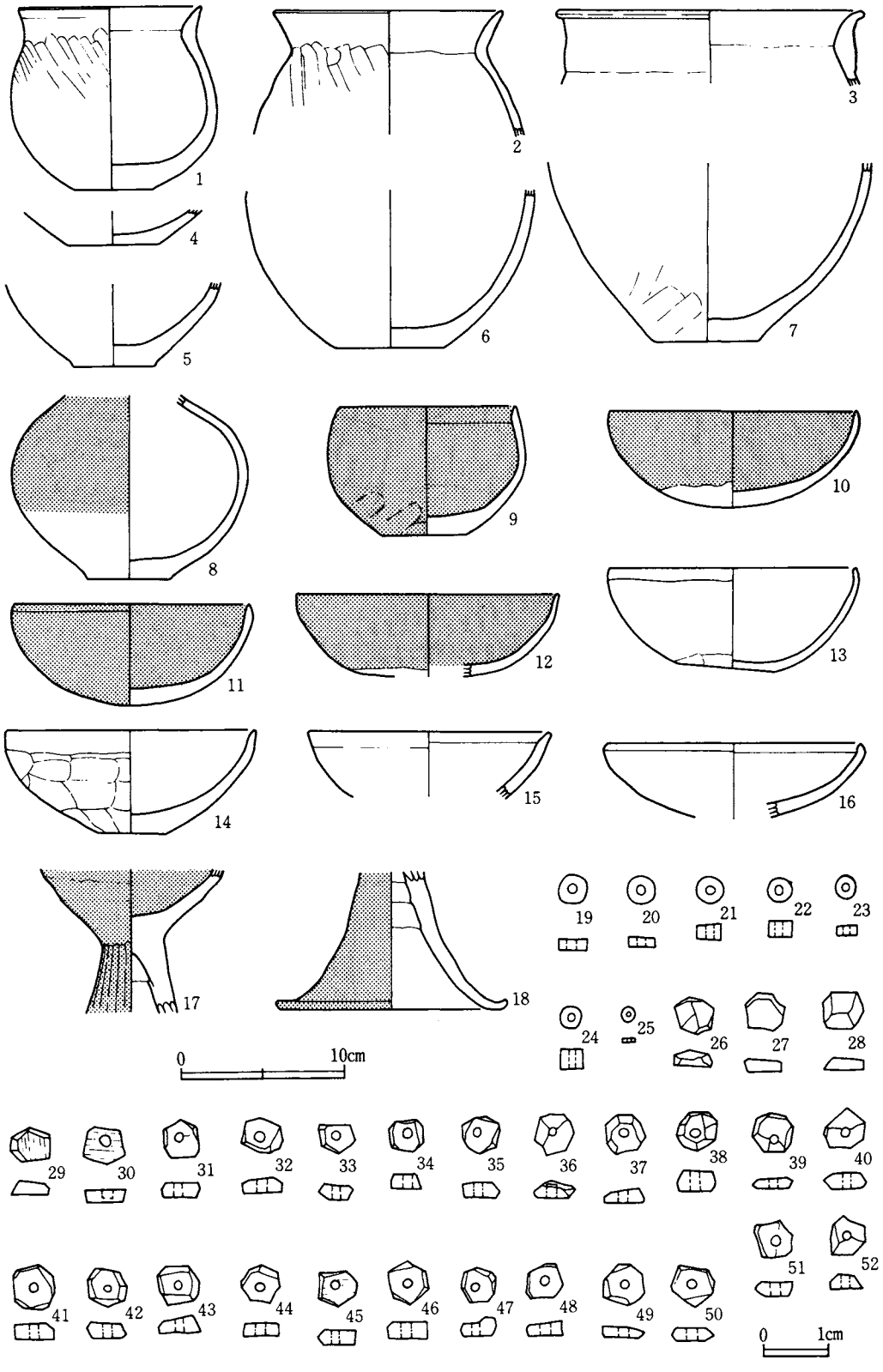


図175　D010号遺構出土遺物実測図(1)

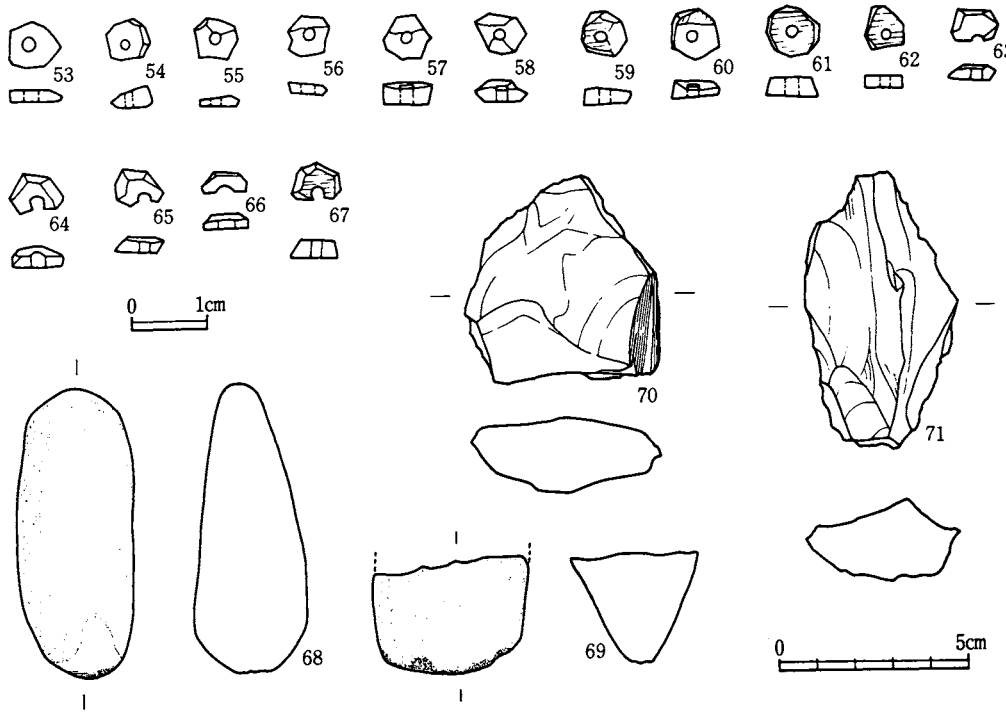


図176　D010号遺構出土遺物実測図(2)

D010出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎・土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	11.2	11.3	4.8	½	ヨコナデ	砂粒	堅緻	黒褐色	
2	甕	—	(14.2)	—	口縁部 ⅓	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒 雲母	堅緻	茶褐色	
3	甕	—	(19.1)	—	口縁部のみ	ヨコナデ	砂粒 雲母	堅緻	茶褐色	
4	甕	—	—	5.55	底部のみ	—	砂粒	堅緻	茶褐色	
5	甕	—	—	5.0	底部のみ	—	砂粒	堅緻	茶褐色	
6	甕	—	6.7	—	⅓	ナデ	砂粒 小石	堅緻	茶褐色	
7	甕	—	6.2	—	⅓	ヘラ削り	砂粒 小石	やや堅緻	茶褐色	
8	坩	—	—	4.9	¾	ナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	赤彩
9	埦	7.6	10.9	5.2	½	ヨコナデ	砂粒	堅緻	赤褐色	赤彩
10	坏	5.7	15.25	—	⅔	ヨコナデ	砂粒	堅緻	赤褐色	赤彩
11	坏	6.05	14.5	—	⅔	ヨコナデ	砂粒	堅緻	赤褐色	赤彩
12	坏	—	(16.3)	—	⅓	ヨコナデ	砂粒	堅緻	赤褐色	
13	坏	6.0	15.35	5.7	完形	ヨコナデ	砂粒	やや堅緻	茶褐色	赤彩
14	坏	6.1	15.5	4.1	完形	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
15	坏	—	(15.2)	—	⅕	ヨコナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	
16	坏	—	(15.7)	—	⅛	ヨコナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
17	高坏	—	—	—	接合部のみ	—	砂粒	やや堅緻	赤褐色	赤彩
18	高坏	—	—	(14.5)	脚部のみ	—	砂粒	堅緻	(内)黒褐色 (外)赤褐色	赤彩

D010出土位置別石製遺物集計　　※上段は成品、下段は未成品

出土位置	原石	石片	品目									合計
			臼玉	勾玉	剣形	有孔円板	双孔円板	円板状	双孔円板欠損品	勝	その他	
I層	2	278	3 205	—	—	—	—	—	—	—	—	488
II層	2	396	3 77	—	—	—	—	1	—	—	—	479
III層	—	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10
IV層	—	3	1	—	—	—	—	—	—	—	—	4
貯蔵穴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
工作ピット	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
柱穴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
床	—	5	4	—	—	—	—	—	—	—	—	9
床下	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
その他	1	11	4	—	—	—	—	—	—	—	—	16
計	5	703	297	—	—	—	—	1	—	—	—	1,006

2．D011号遺構（図177～183、図版32－2、39）

III群の住居群内において北東に位置し、D010が近接している。ほぼ南北に連なる溝によって遺構の西側部分は攪乱を受けており、遺存状況は悪いが、西壁が検出されており、規模は把握できる。焼失住居と考えられる。

遺構　北壁4.5m、東壁4.55mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡で、石製模造品の工房跡でもある。壁はほぼ垂直に0.5m掘り込んで床面に達する。床面は全体に堅緻な状況を呈している。ピットを8か所で検出したが柱穴と判断できるものはない。北東壁コーナー部に近く位置するP_1は径0.6m、深さ0.28mを計り、貯蔵穴と考えられる。

D011出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	台付甕	—	(21.1)	—	1/4	—	砂粒	堅緻	黒褐色	
2	坏	5.75	(15.0)	—	1/3	ヨコナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	
3	坏	—	16.1	—	1/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	赤彩

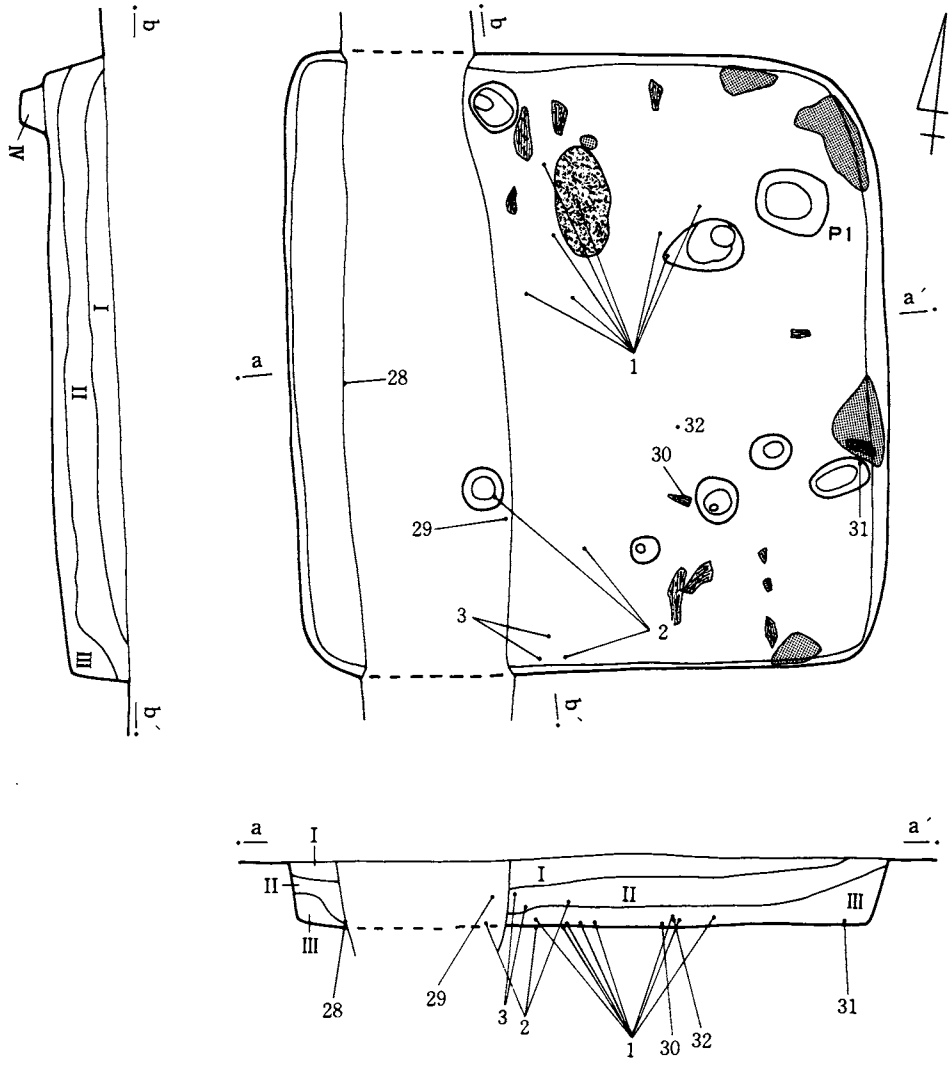


図177　D011号遺構実測図

炉　住居中央より北側に偏在しており、長径0.88mでかなり細長い形状を呈しているが、焼土は北側部分に若干認められる程度で、厚さ0.12mを計る。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層黒色土層、III層ローム粒混入黒褐色土層、IV層暗茶褐色土層が堆積しており、遺物はIII層より出土している。石製遺物はIII層が最も多く、次いでII層となっている。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器と石製品がある。

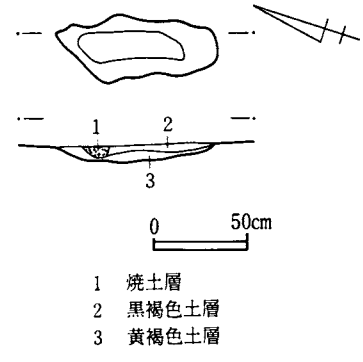


図178　D011号遺構炉跡実測図

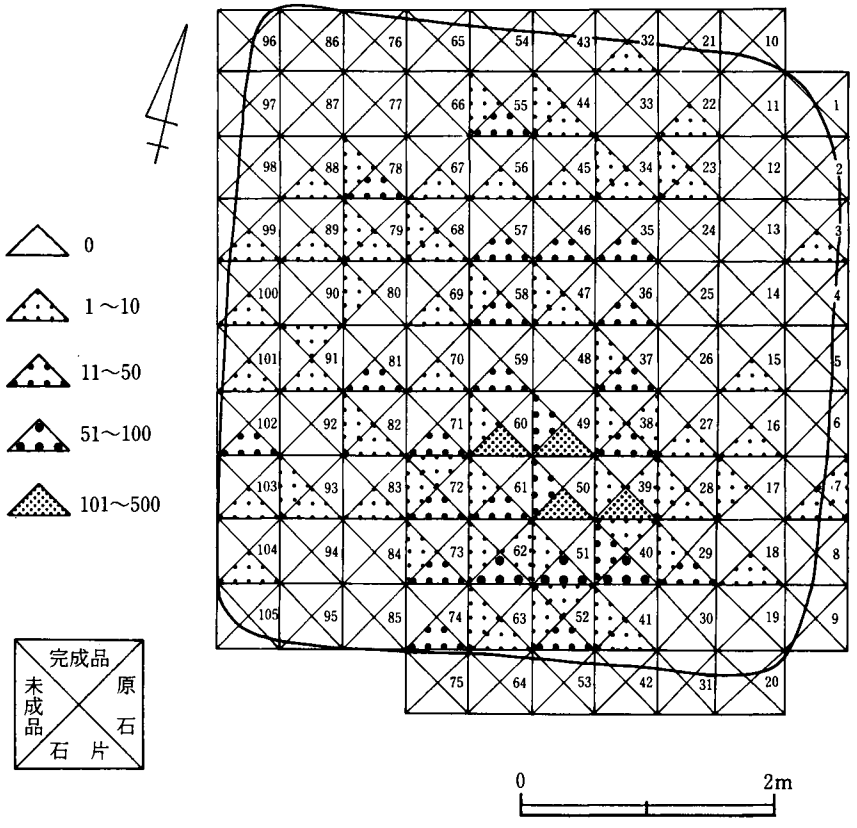


図179 D011号遺構石製遺物平面分布模式図

D011出土位置別石製遺物集計

※上段は成品、下段は未成品

出土位置	原石	石片	品目 臼玉	勾玉	剣形	有孔円板	双孔円板	円板状	双孔円板欠損品	滕	その他	合計
I 層	—	27	1 2	—	—	—	1	—	—	—	—	31
II 層	—	187	15	—	—	—	1	1	—	—	1	205
III 層	4	1,108	3 94	—	—	—	—	2	—	—	4	1,215
IV 層	—	7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7
貯蔵穴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
工作ピット	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
柱穴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
床	—	9	—	—	—	—	—	—	—	—	1	10
床下	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
その他	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	4	1,338	4 111	—	—	—	2	3	—	—	6	1,468

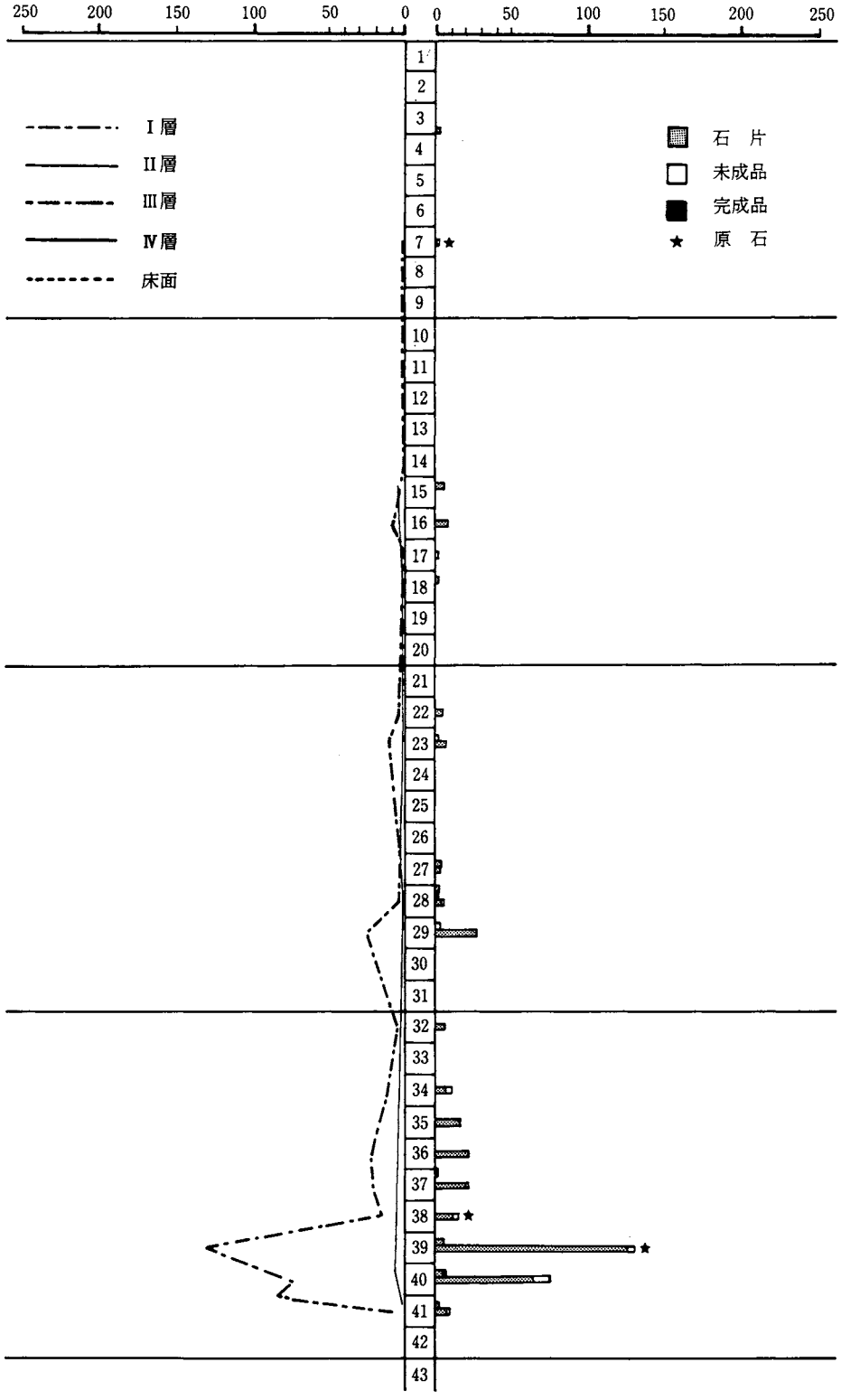


図180 D011号遺構石製遺物層位別分布図(1)

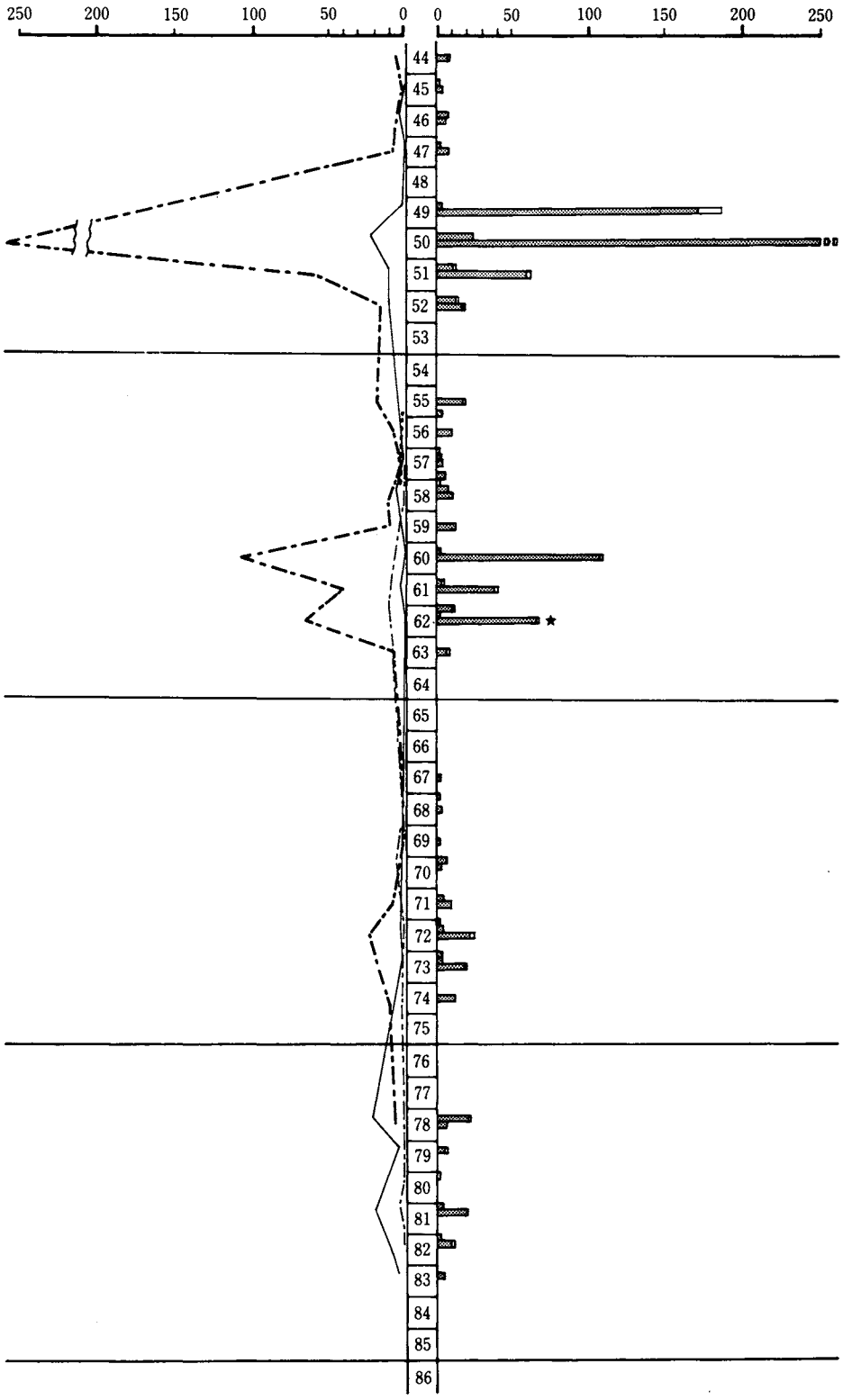


図181 D011号遺構石製遺物層位別分布図(2)

甕形土器は１で台部は欠損している。弥生時代のものと思われる。坏形土器は２、３で、丸底を呈し体部は内彎ぎみに開く形状を呈す。石製品は４～32で、４～７は臼玉、８～27は臼玉未成品および欠損品である。28、29は双孔円板、30～32は原石で部分的に敲痕が認められる。

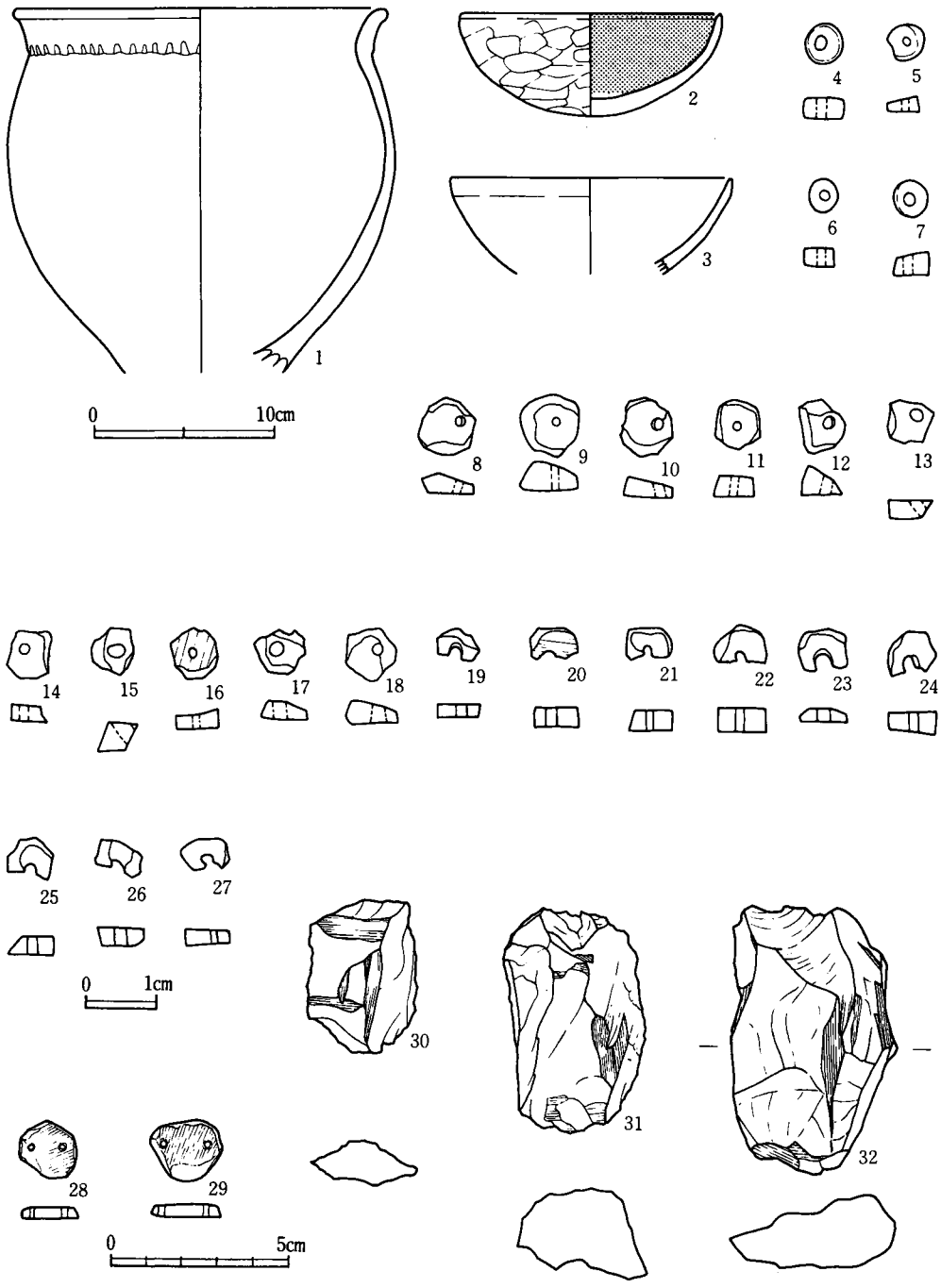


図182　D011号遺構出土遺物実測図

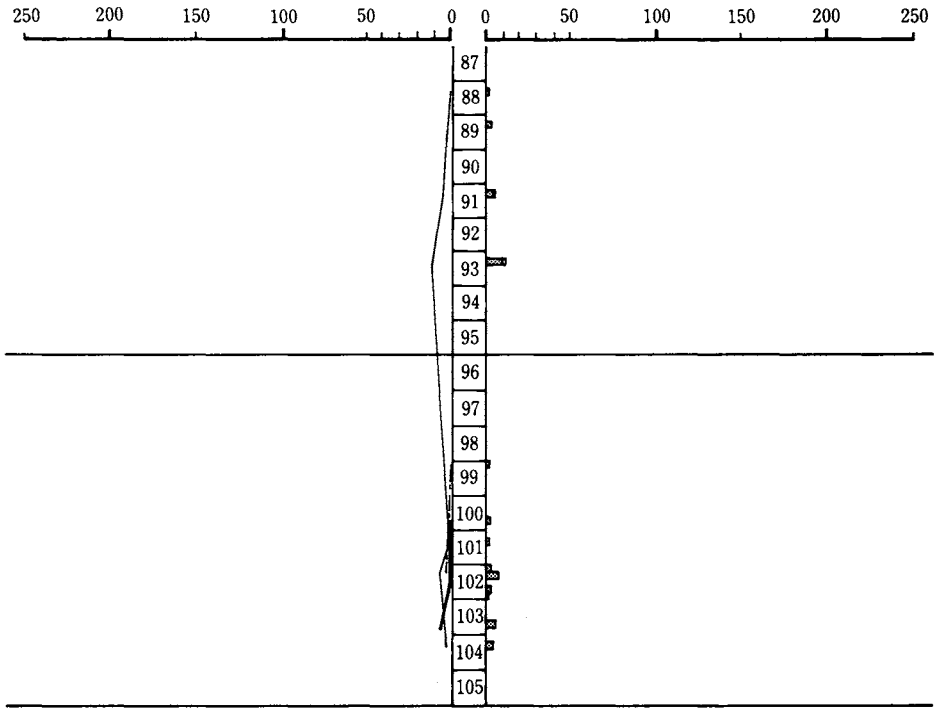


図183 D011号遺構石製遺物層位別分布図(3)

3．D012号遺構（図184～191、図版32－3、39）

III群の住居群内において北西に位置し、他の遺構とかなり距離を有している。D059まで約25mである。

遺構 北壁5.5m、東壁5.2mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡で、石製模造品の工房跡でもある。壁はかなり傾斜を呈して、0.32m掘り込んでいる。壁直下には幅0.2m、深さ0.08mを計る壁溝が四壁に認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴はP_1～P_4で径0.3mと小規模であるが、深さは平均0.6mを計る。その他4か所検出したピットの内、P_5は径0.6m、深さ0.28mを計り、南西壁コーナーに接している。貯蔵穴であるP_6は長径1.1m、深さ0.26mで南壁中央部に近く位置し、内部から砥糞と思われる焼土を混入した青白色粘質土を検出しており、工作用ピットと考えられるものである。

炉 北壁中央部に近く、P_1とP_3の中央に位置する。長径0.75mを計る不整な楕円形を呈しており、0.9mの焼土が堆積している。

遺物出土状況 I層黒褐色土層、II層黒色土層、III層褐色土層、IV層焼土粒混入褐色土層、V層茶褐色土層、VI層暗茶褐色土層が堆積しており、遺物はIII層床面上よりの出土が多い。石製遺物はIII層を中心に住居南西部分P_5、P_6周辺より多量に出土している。

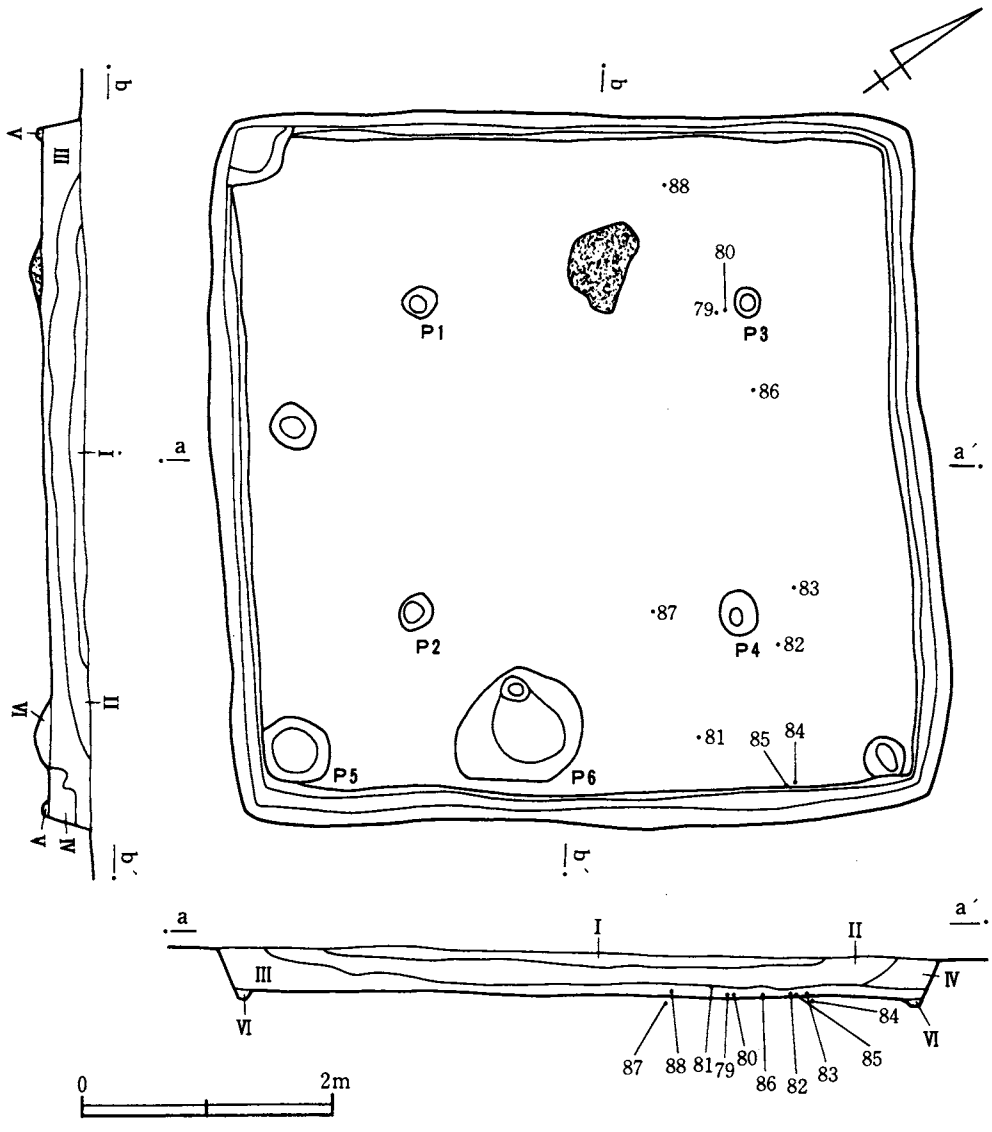


図184　D012号遺構実測図

出土遺物　遺物は石製品のみで土器類は出土しているが図示できるようなものはない。1～23は臼玉、24～78は臼玉未成品である。79、80は双孔円板、81は剣形品、82、83は勝で、82の両端は穿孔される。84～88は原石で88の一部には鑿痕が認められる。

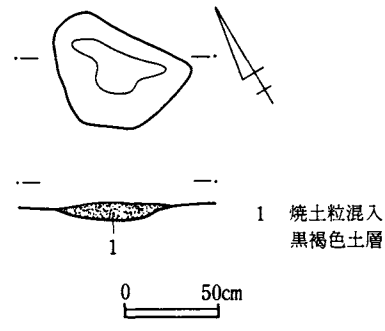


図185　D012号遺構炉跡実測図

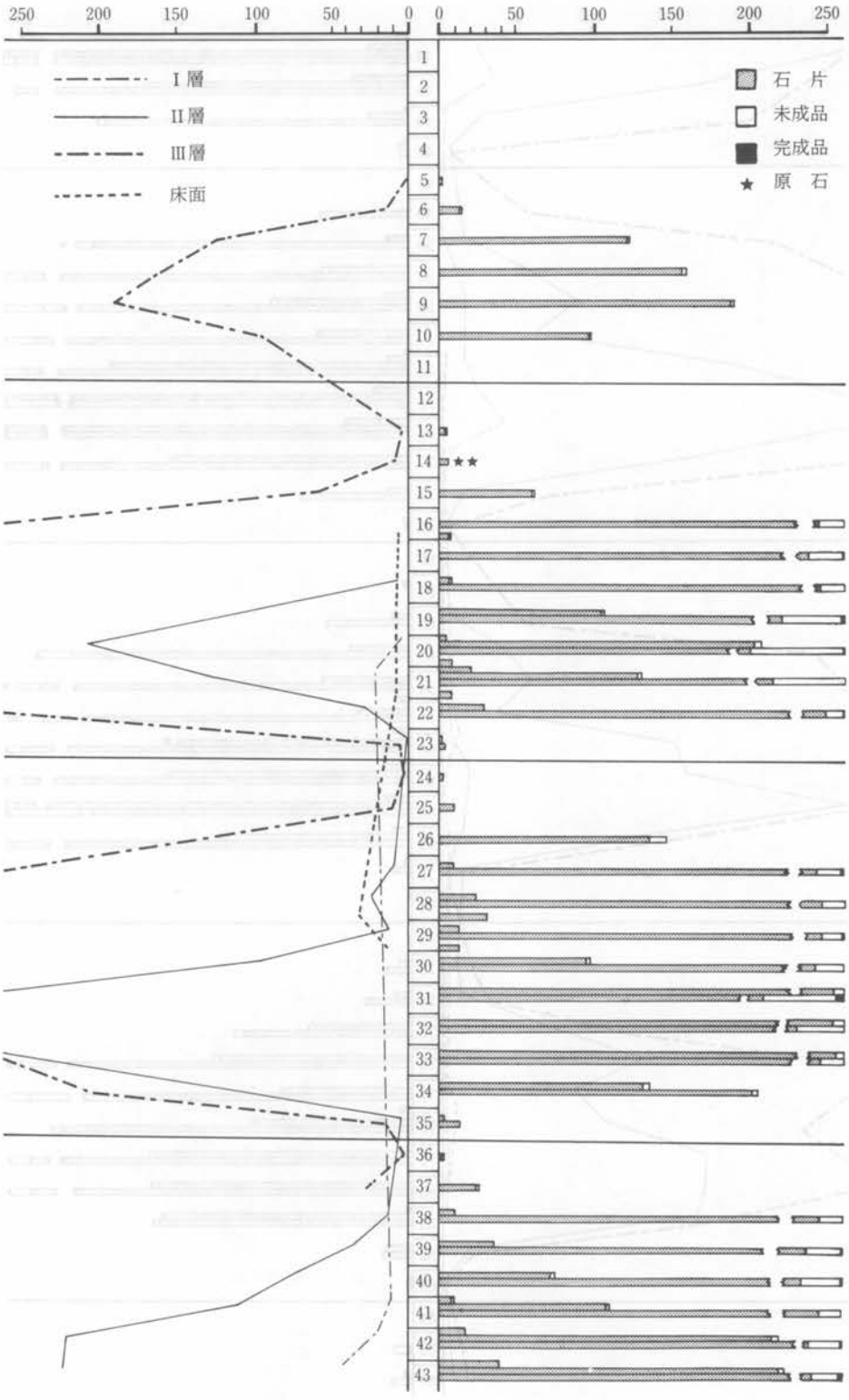


図186 D012号遺構石製遺物層位別分布図(1)

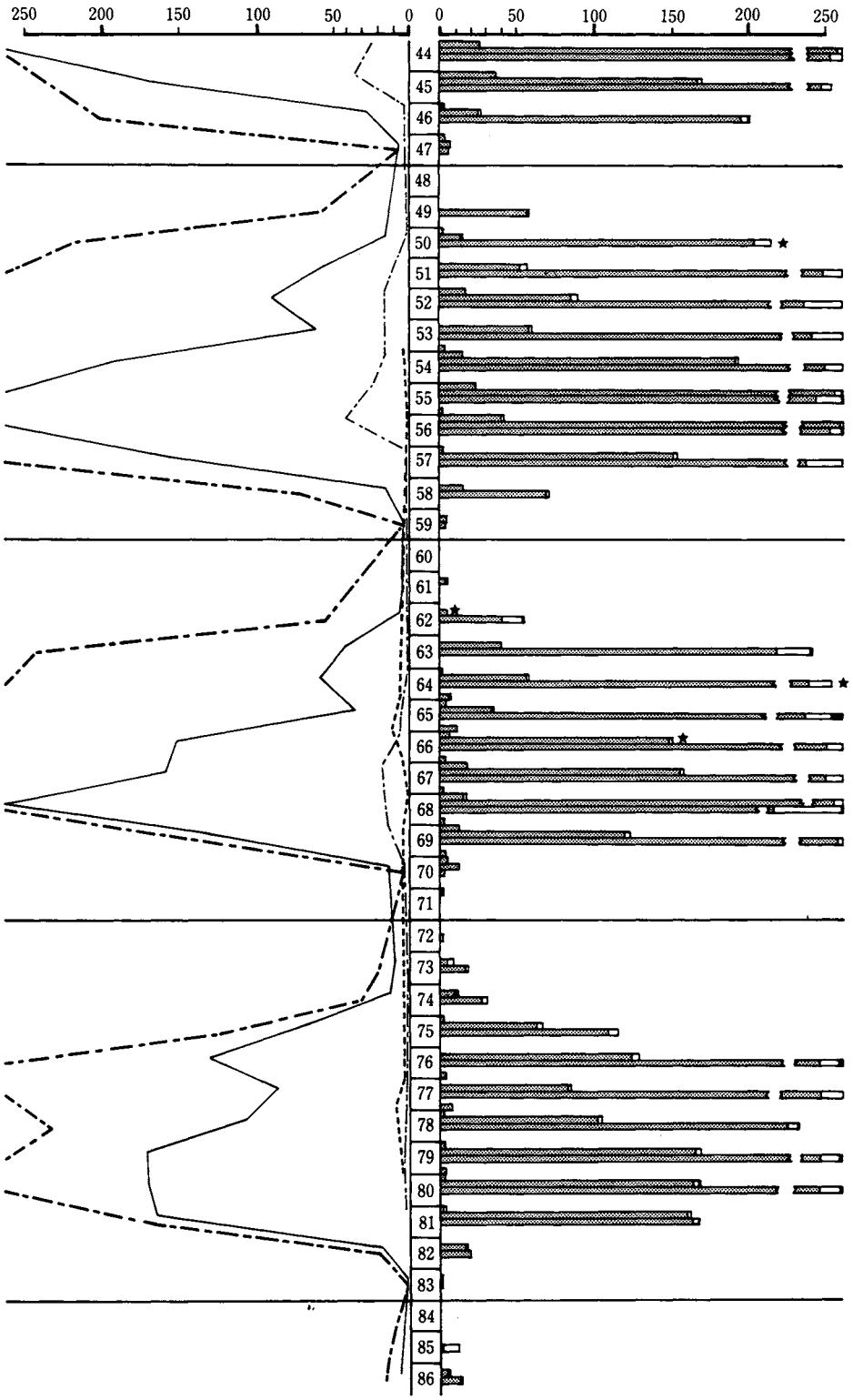


図187 D012号遺構石製遺物層位別分布図(2)

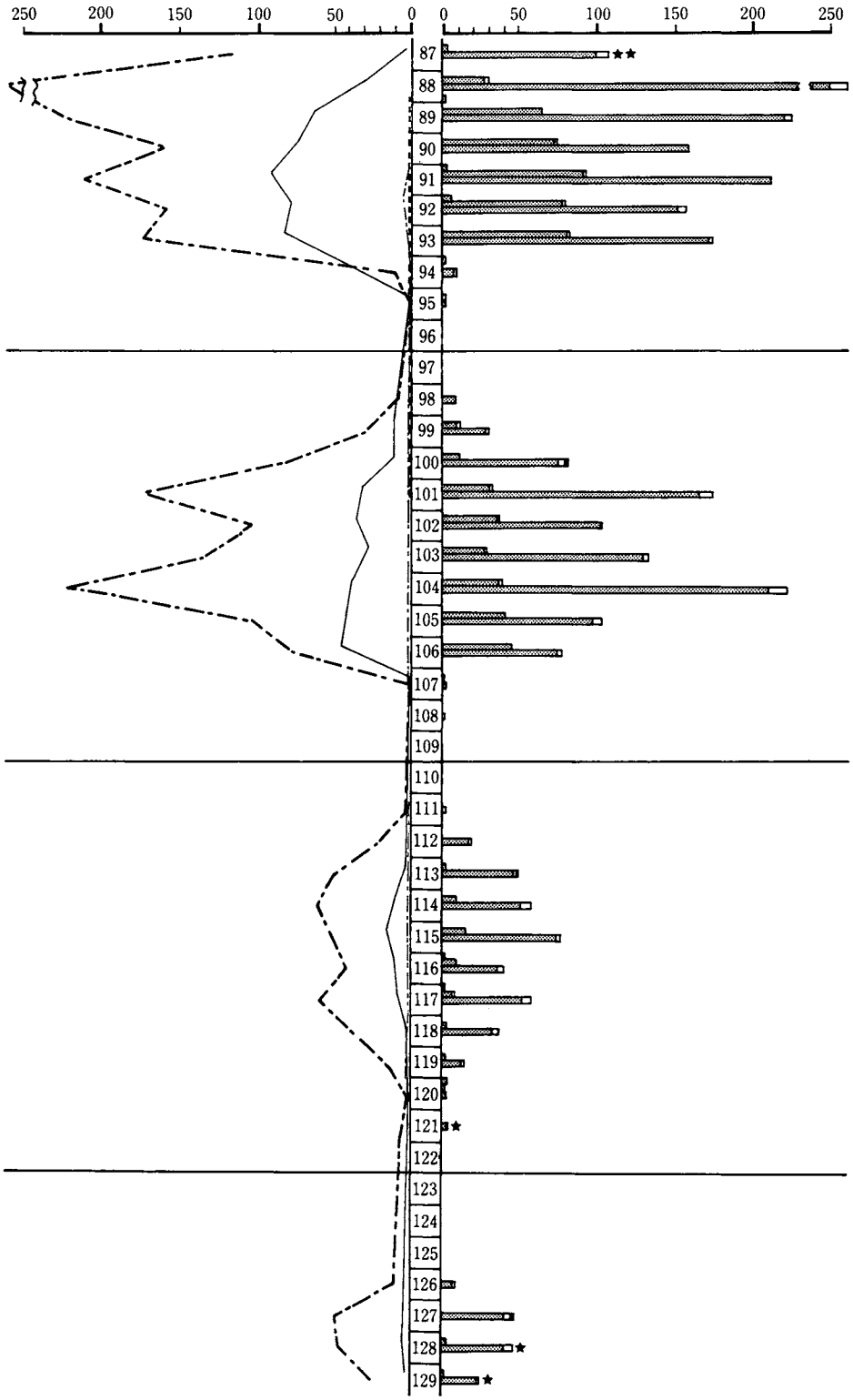


図188 D012号遺構石製遺物層位別分布図(3)

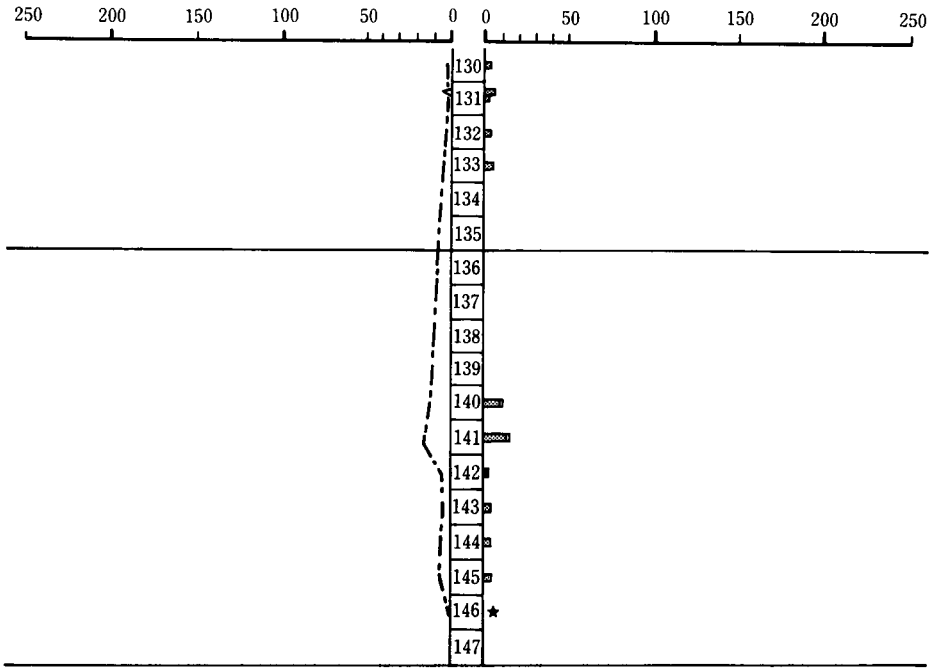


図189　D012号遺構石製遺物層位別分布図(4)

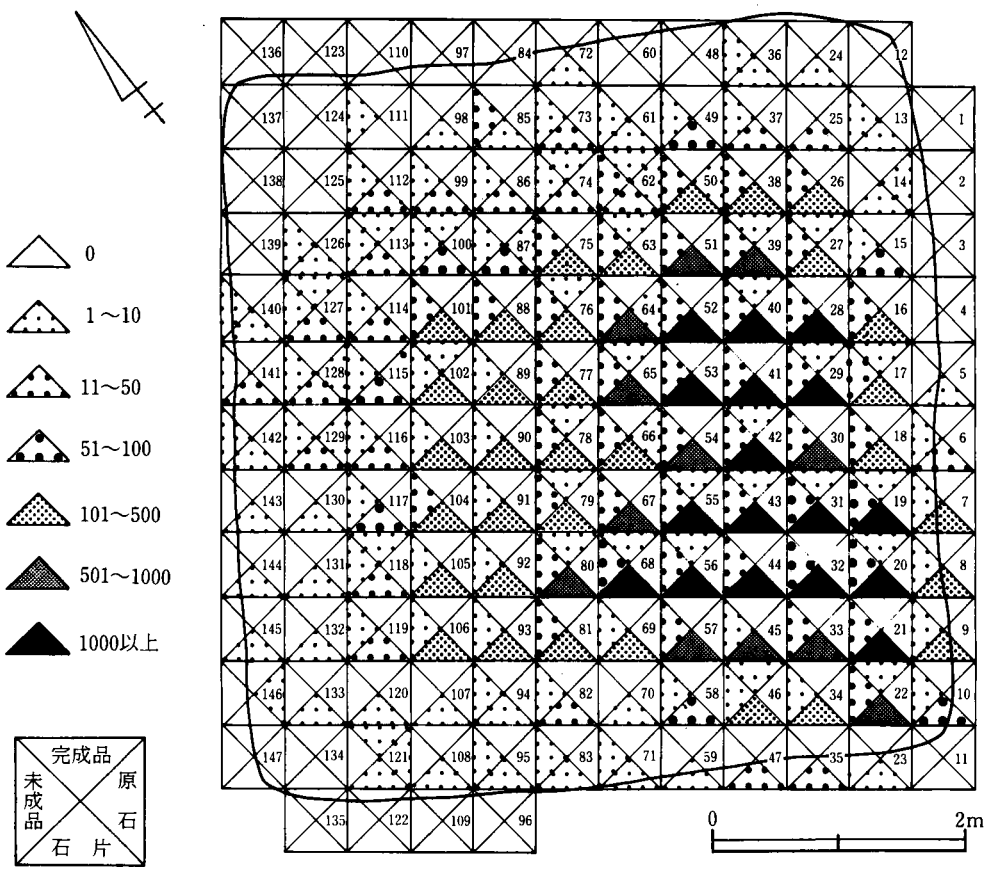


図190　D102号遺構石製遺物平面分布模式図

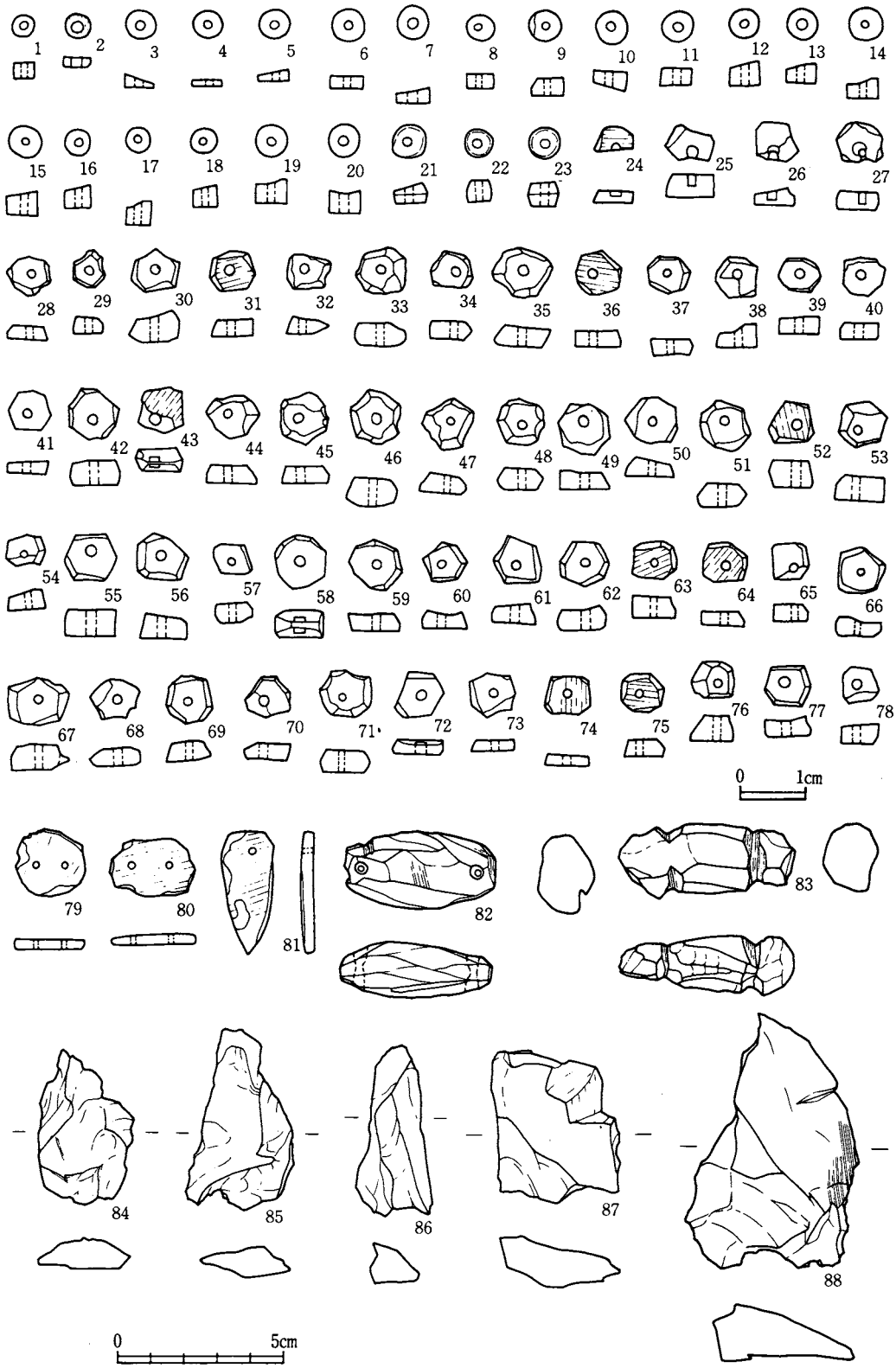


図191　D012号遺構出土遺物実測図

D012出土位置別石製遺物集計　　※上段は成品、下段は未成品

出土位置	原石	石片	品目									合計
			臼玉	勾玉	剣形	有孔円板	双孔円板	円板状	双孔円板欠損品	勝	その他	
I層	—	312	7	—	—	—	—	—	—	—	—	319
II層	1	5,860	5 264	—	—	—	—	—	—	—	—	6,130
III層	11	42,190	43 1,591	3	1	—	4 2	—	—	2	—	43,847
IV層	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
貯蔵穴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
工作ピット	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
柱穴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
床	—	110	—	—	—	—	—	—	—	—	—	110
その他	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	12	48,472	48 1,862	3	1	—	4 2	—	—	2	—	50,406

4．D013号遺構（図192～197、図版33—1・2、39）

III群の住居群内において北側に位置し、D011、D014が近接している。遺構の北側は沖積地にのびる溝によって攪乱を受けているため状況が把握できない。また遺構自体が緩斜面に構築しているため遺存状況は良好でない。

遺構　南壁4.55mで東壁は推定4.5m以上と思われる方形の平面形を呈する竪穴住居跡で、石製模造品の工房跡でもある。壁は若干傾斜を呈して東壁部分で0.32m掘り込んでいる。壁直下には幅0.2m、深さ0.04mの壁溝が認められ、四壁に廻っていたと思われる。床面は堅緻な状況を呈している。小ピットを2か所に検出したが柱穴にはならない。方形のピットを2か所に検出した。P_1は南西壁コーナー部分に位置し長辺0.9m、短辺0.6m、深さ0.35mを計る。P_1は調査後検出したものであり貼り床が施されており、遺構の修改築を示唆するものである。P_2は南東壁コーナー部分に近く一辺0.6mの方形を呈し、深さ0.34mを計る。P_1は工作用ピット、P_2は貯蔵穴と思われる。

D013出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	15.6	—	口縁部のみ	ハケ目	砂粒	堅緻	茶褐色	
2	甕	—	—	6.2	1/3	ナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	
3	坏	6.0	16.1	—	3/4	ヨコナデ	砂粒	堅緻	赤褐色	赤彩
4	坏	5.6	16.2	6.0	3/4	ヨコナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	赤彩
5	坏	5.3	16.0	—	3/4	ヨコナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	

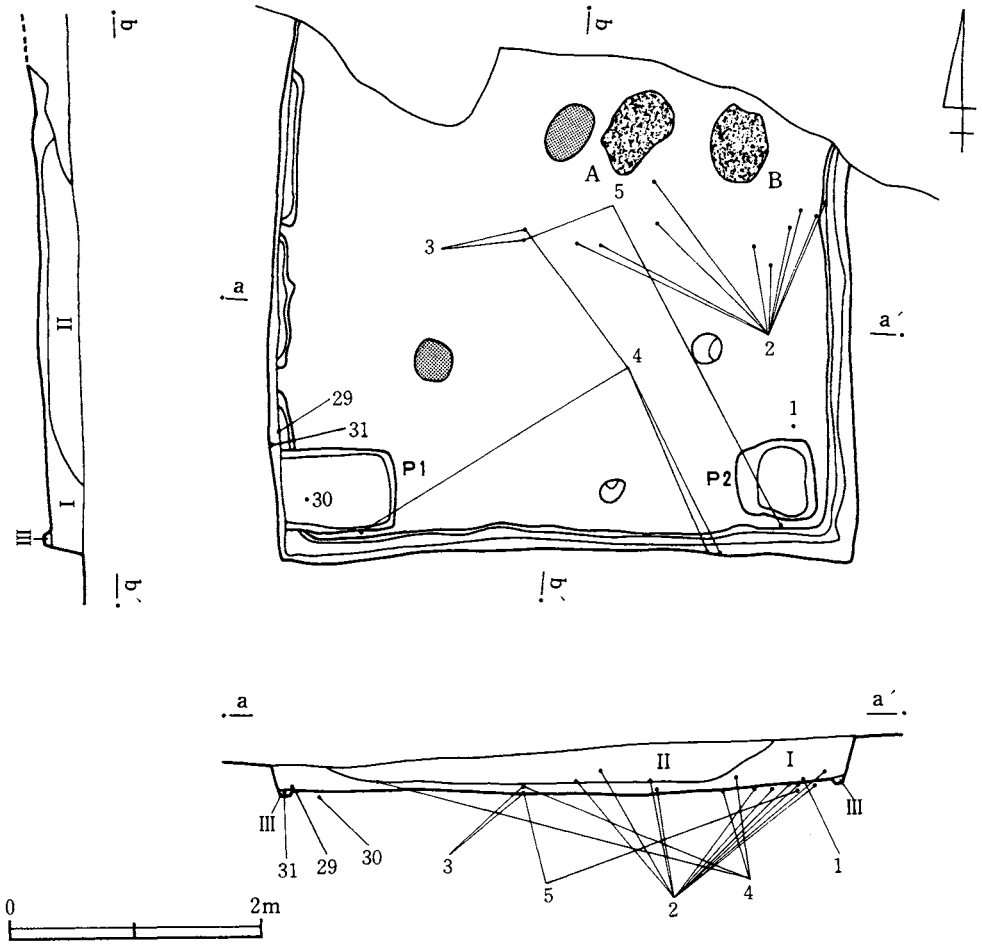
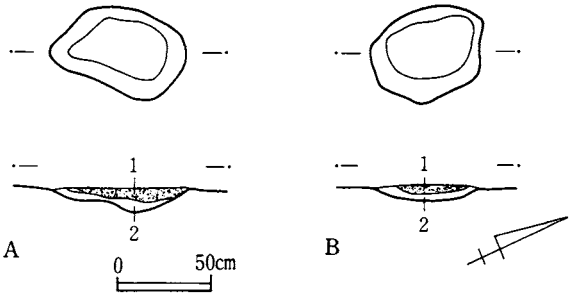


図192　D013号遺構実測図

炉　住居北側に偏在して2か所で検出した。Aは長径0.7m、深さ0.12m、厚さ0.07mの焼土が堆積し、Bは長径0.55m、深さ0.08m、厚さ0.05mの焼土が堆積している。A、Bの共存は修改築による所産と考えられる。



1　焼土層

2　黒褐色土層

図193　D013号遺構炉跡実測図

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層黒色土層、III層茶褐色土層が堆積しており、I層床面を中心に出土している。石製遺物は住居南側を中心にほぼ全体から出土している。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器と石製品、土製品がある。甕形土器は1、2で、1は直立

ぎみに開く口縁部で、2は球形の胴部を呈し、口縁部は欠損している。坏形土器は3～5で体部は内彎ぎみに開く。石製品は6～30で、6～12は臼玉、13～28は臼玉未成品であり、いずれ

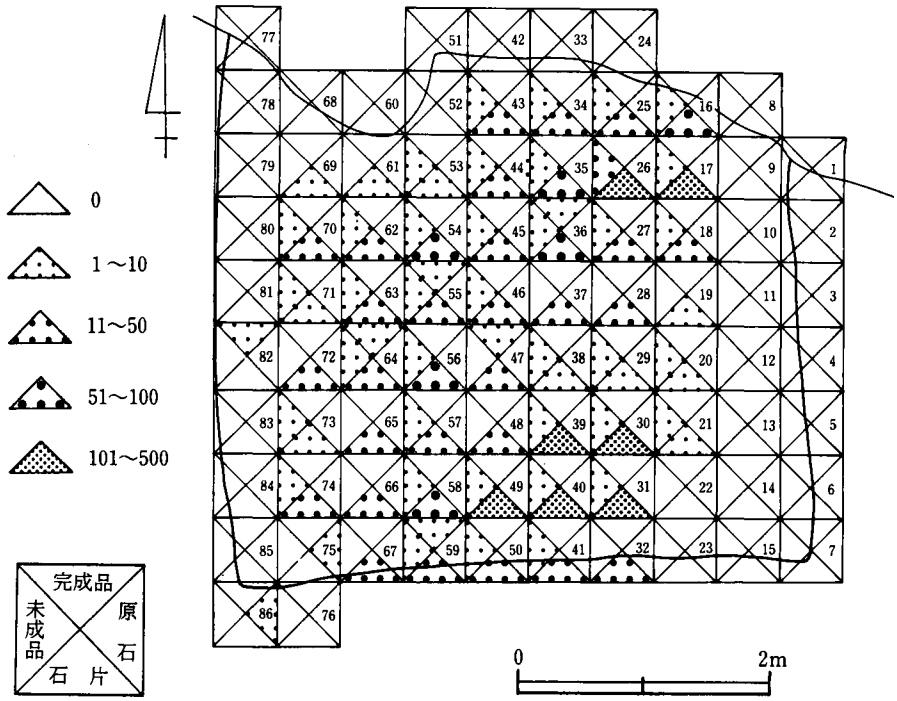


図194 D013号遺構石製遺物平面分布模式図

D013出土位置別石製遺物集計　　※上段は成品、下段は未成品

出土位置	原石	石片	品目 臼玉	勾玉	剣形	有孔円板	双孔円板	円板状	双孔円板欠損品	滕	その他	合計
I層	—	1,365	2 79	—	—	—	—	—	—	—	—	1,446
II層	2	1,004	3 61	—	—	—	—	—	—	—	—	1,070
III層	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
IV層	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
貯蔵穴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
工作ピット	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
柱穴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
床	—	129	1 3	—	—	—	—	—	—	—	—	133
床下	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
その他	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	2	2,498	6 143	—	—	—	—	—	—	—	—	2,649

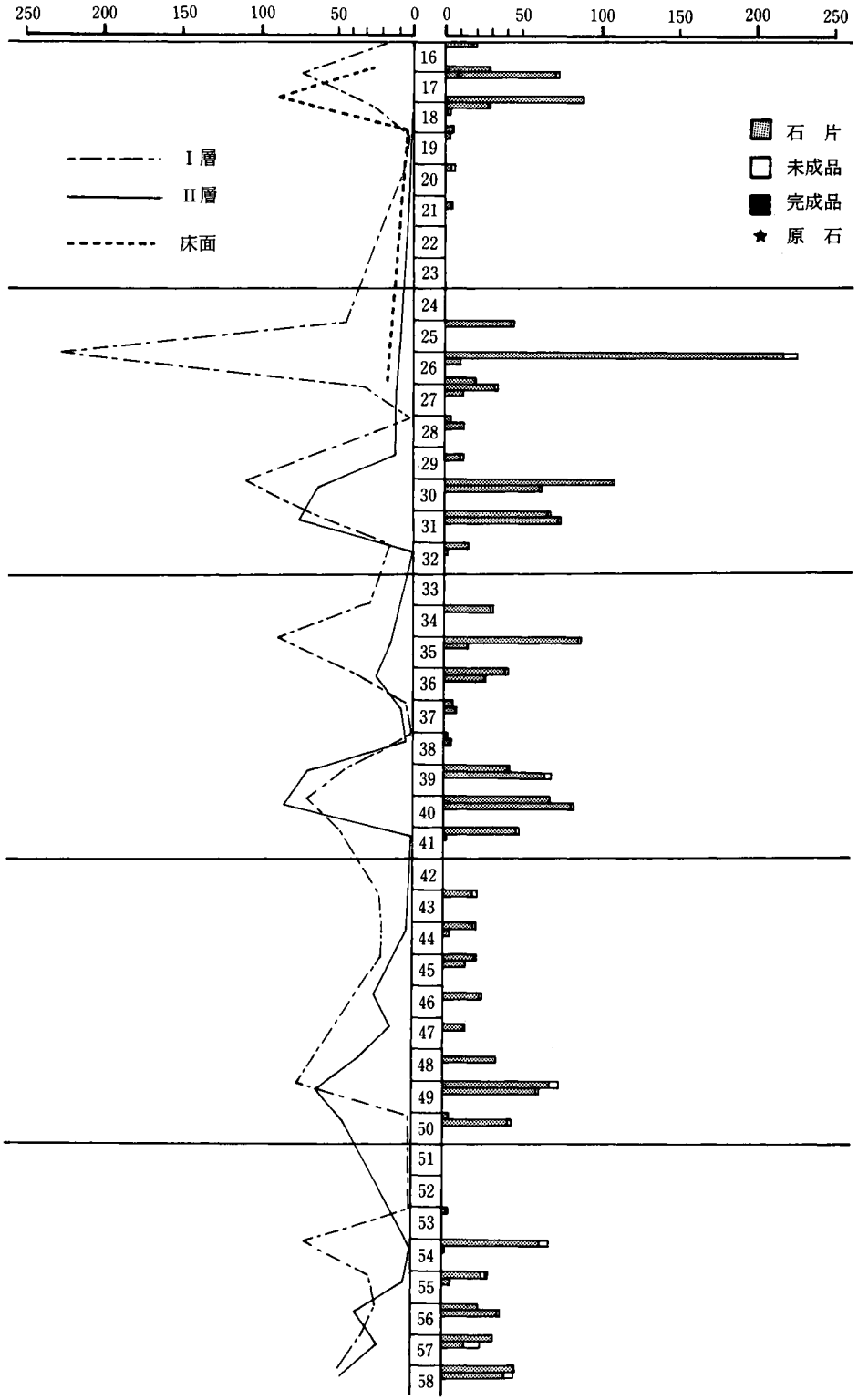


図195 D013号遺構石製遺物層位別分布図(1)

も滑石製である。29は滑石製の紡錘具で中央に 0.6 cm の軸孔があく。重さ50 g である。30は敲石で一端に使用痕が認められる。土製品は31の土玉で中央に 0.6 cm の孔があく。

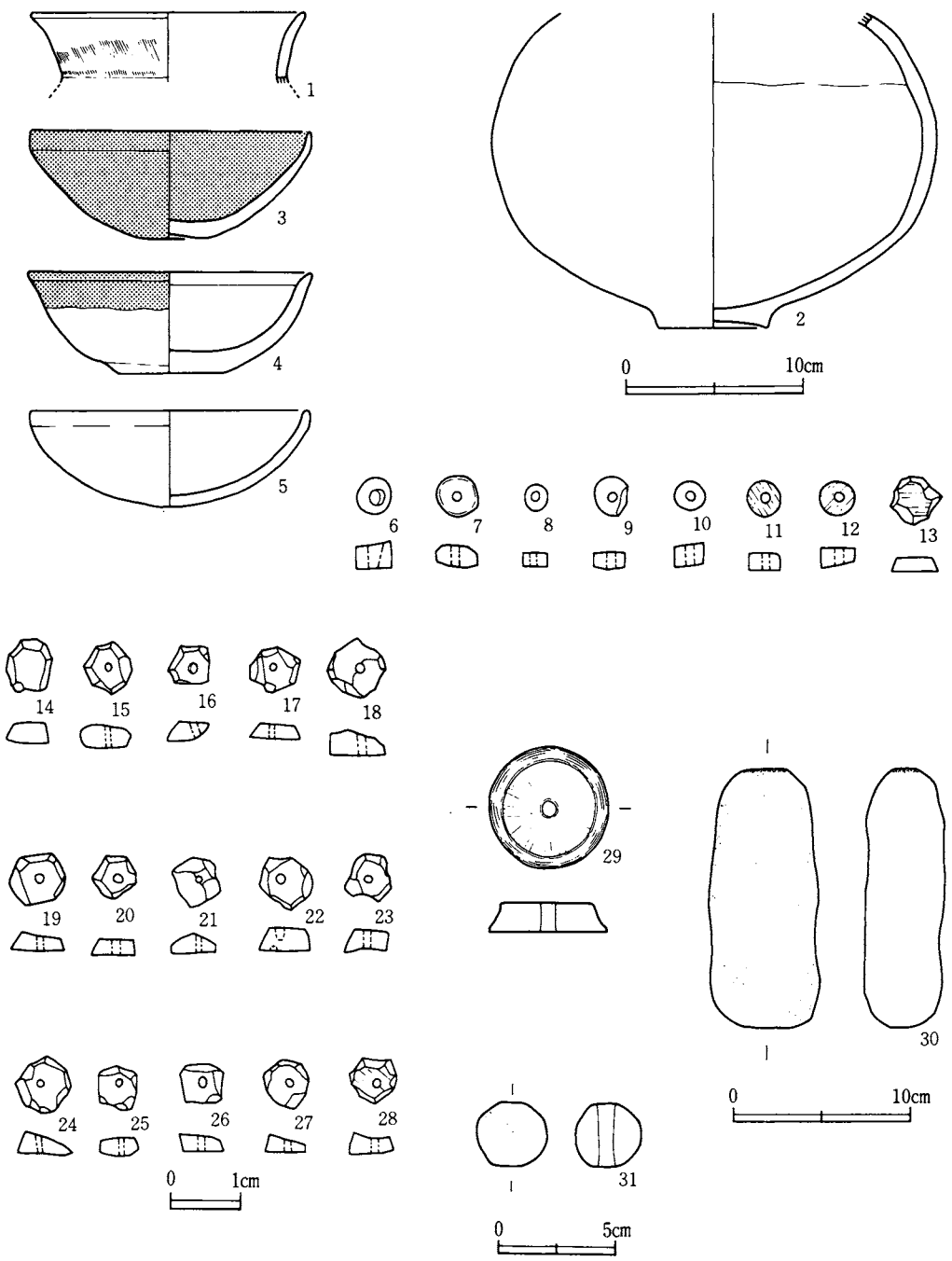


図196　D013号遺構出土遺物実測図

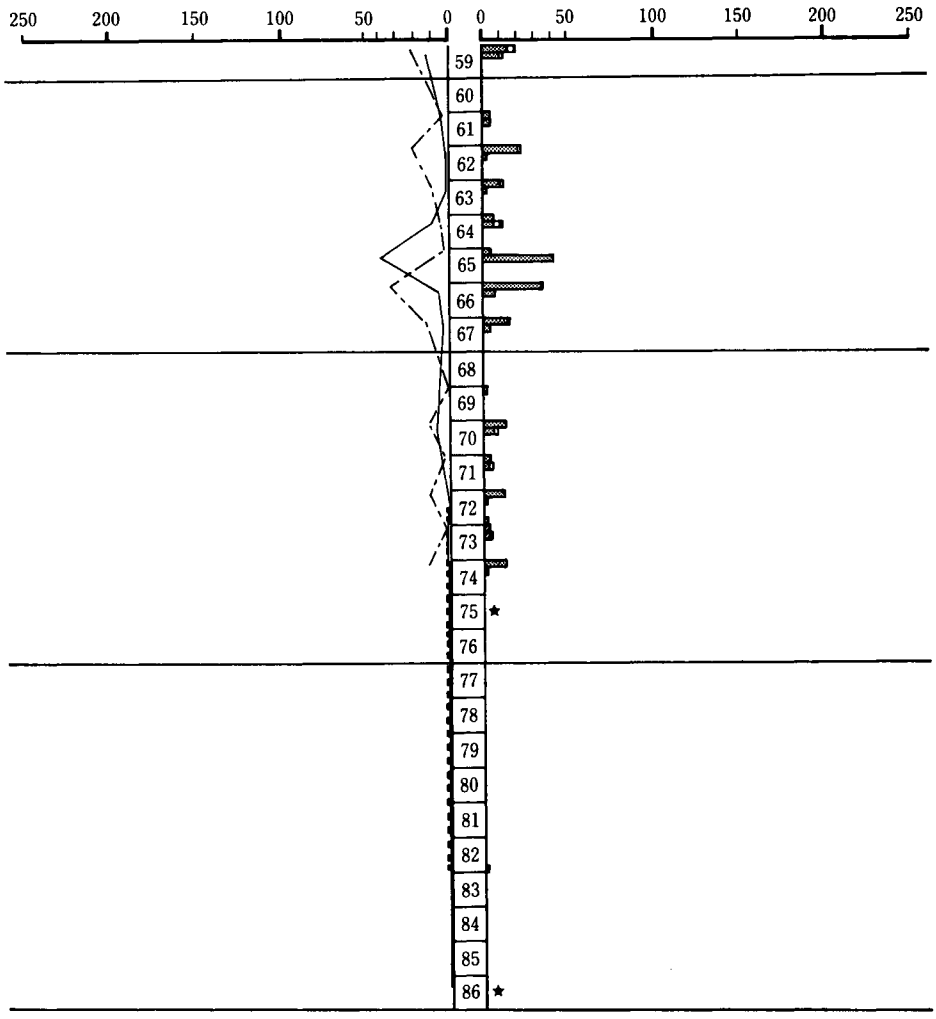


図197　D013号遺構石製遺物層位別分布図(2)

5．D014号遺構（図198～204、図版33－3、34、40）

III群の住居群内において北側に位置し、D013、D011が近接している。緩斜面に構築しているため壁高は一定していない。

遺構　北壁5.41m、東壁5.26mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡で、石製模造品の工房跡

D014出土土器一覧

番号	器種	法址 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	坏	—	(18.0)	—	½	ヨコナデ	砂粒	堅緻	赤褐色	赤彩
2	手捏	—	—	3.7	¼	—	砂粒	堅緻	黒褐色	

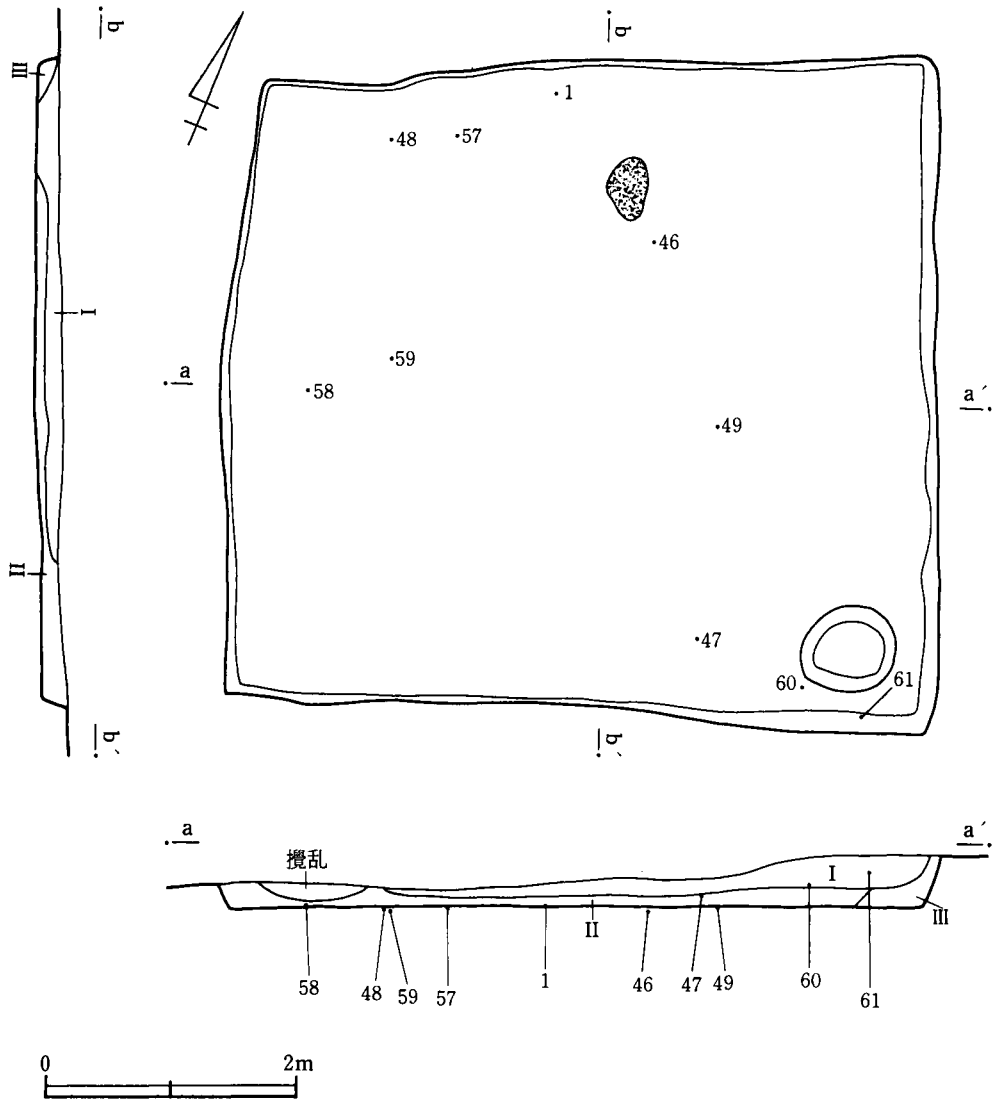


図198　D014号遺構実測図

でもある。壁は若干の傾斜を呈して東壁で0.4m掘り込んで床面に達している。床面は中央部が若干堅緻な状況を呈しているが、他は軟弱な状況である。ピットを南壁コーナー部分に接して検出した。径0.66m、深さ0.34mを計る貯蔵穴と思われる。柱穴、壁溝は検出できなかった。

炉　住居北側に偏在しており、長径0.5m、深さ0.13m、厚さ0.1mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層

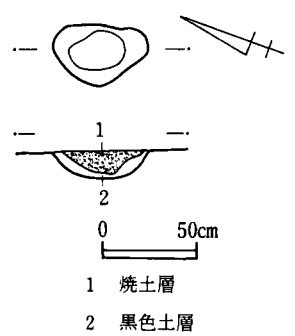


図199　D014号遺構炉跡実測図

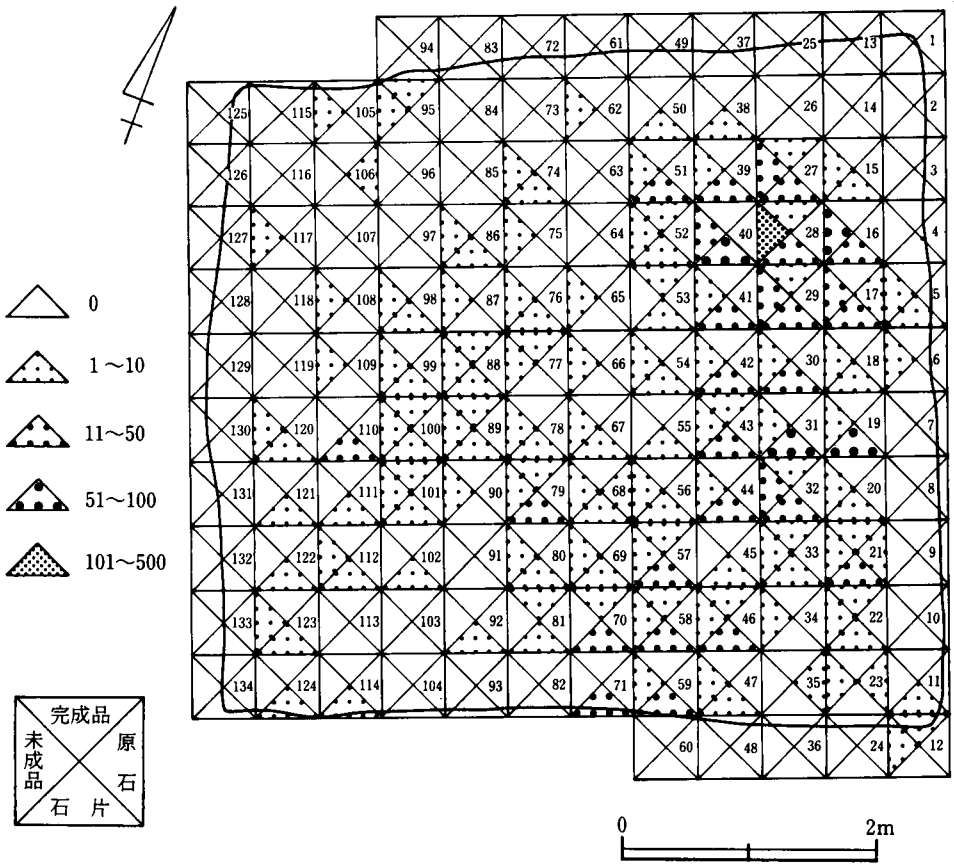


図200 D014号遺構石製遺物平面分布模式図

D014出土位置別石製遺物集計　　※上段は成品、下段は未成品

出土位置	原石	石片	品目 臼玉	勾玉	剣形	有孔円板	双孔円板	円板状	双孔円板欠損品	滕	その他	合計
I 層	—	78	7 29	1	—	—	—	—	—	—	1	116
II 層	5	578	19 390	1	—	—	1	—	—	—	4	998
III 層	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
IV 層	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
貯蔵穴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
工作ピット	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
柱穴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
床	1	259	5 105	1 1	—	—	—	7	—	—	4	383
床下	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
その他	—	10,707	8 403	2	2	—	—	3	—	—	44	11,169
計	6	11,622	39 927	6	2	—	1	10	—	—	53	12,666

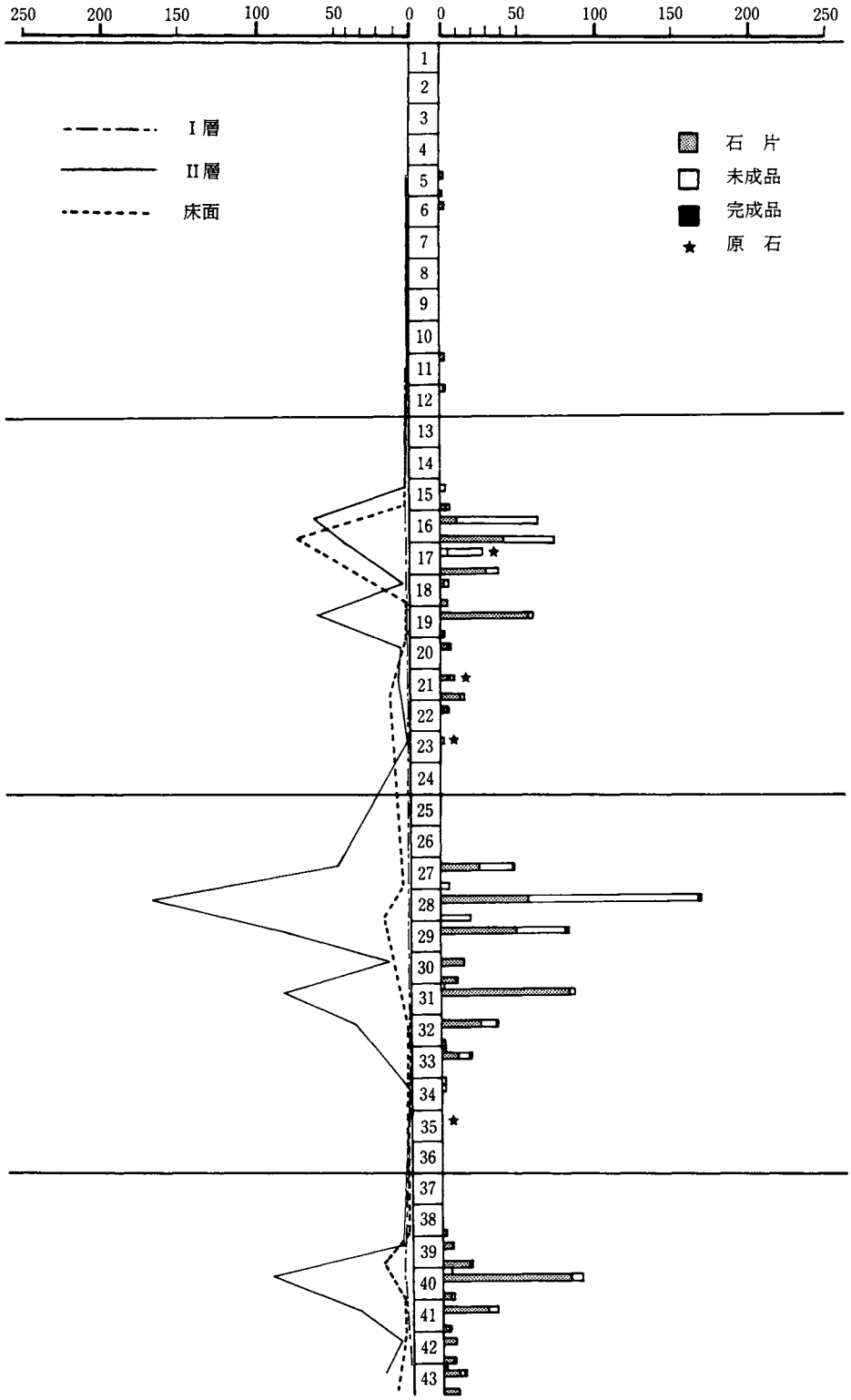


図201 D014号遺構石製遺物層位別分布図(1)

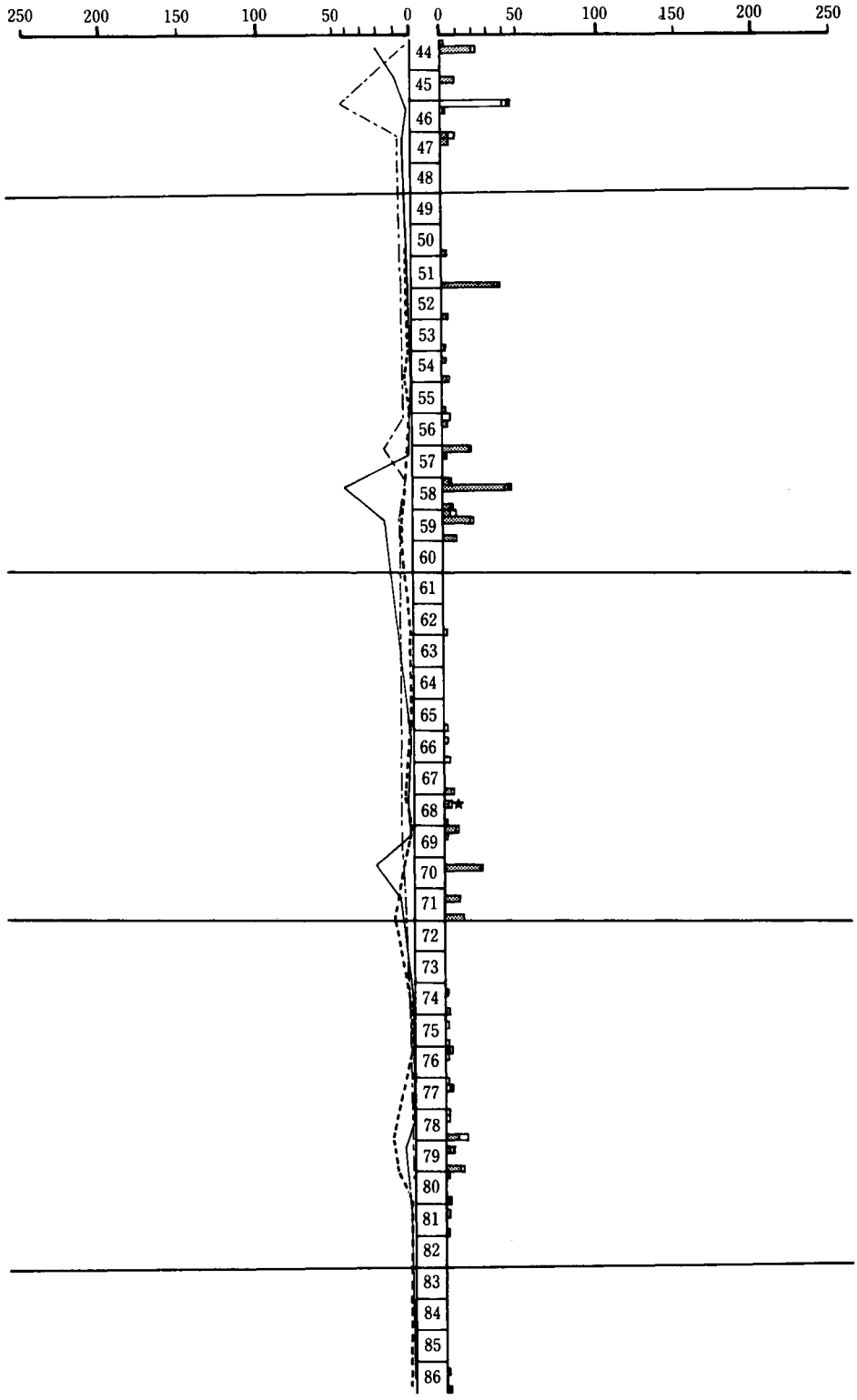


図202 D014号遺構石製遺物層位別分布図(2)

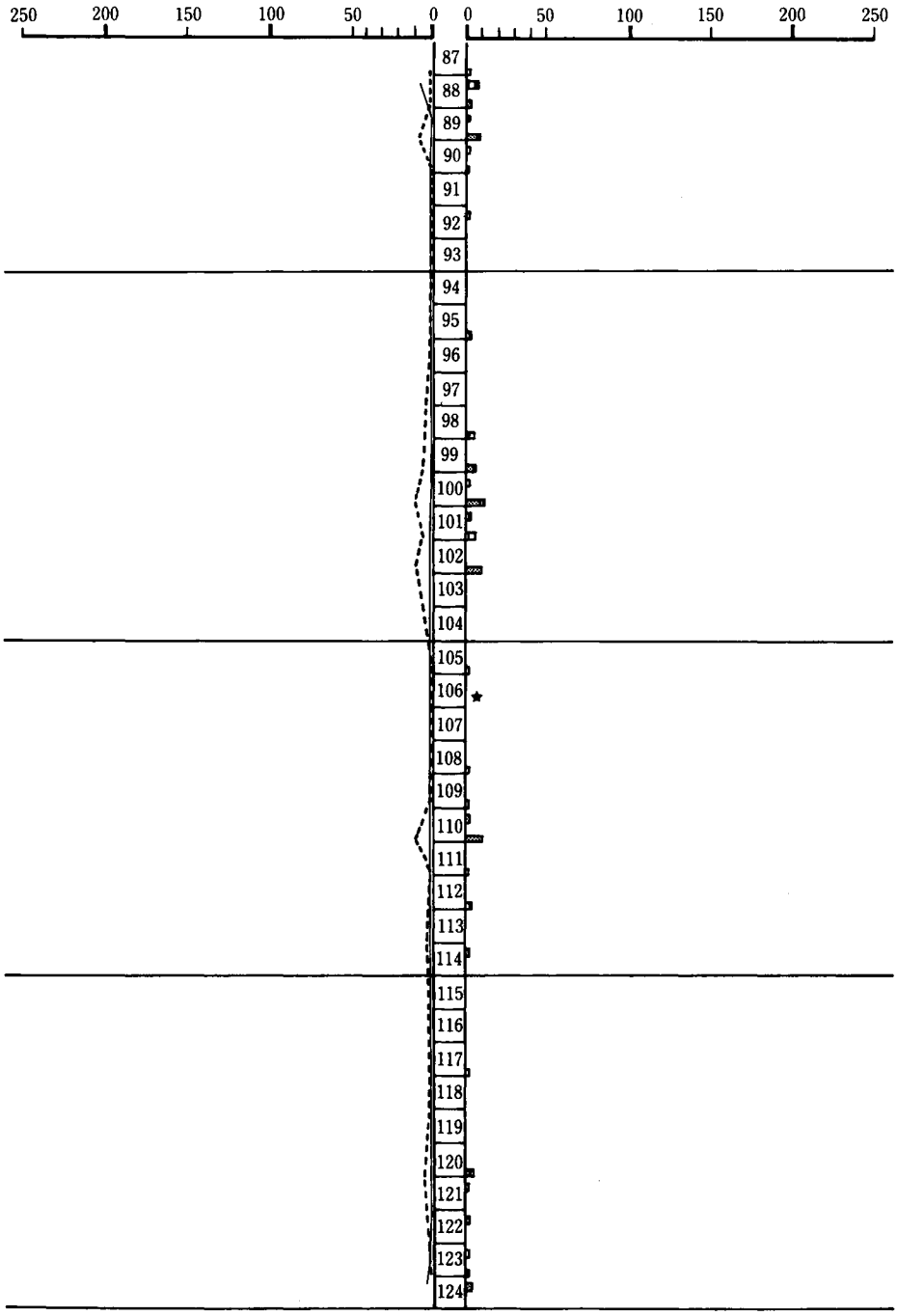


図203 D014号遺構石製遺物層位別分布図(3)

ローム粒混入黒褐色土層が堆積しており、遺物は床面ないしII層を中心に出土している。石製遺物は住居北壁側に偏在し、II層から多く出土している。

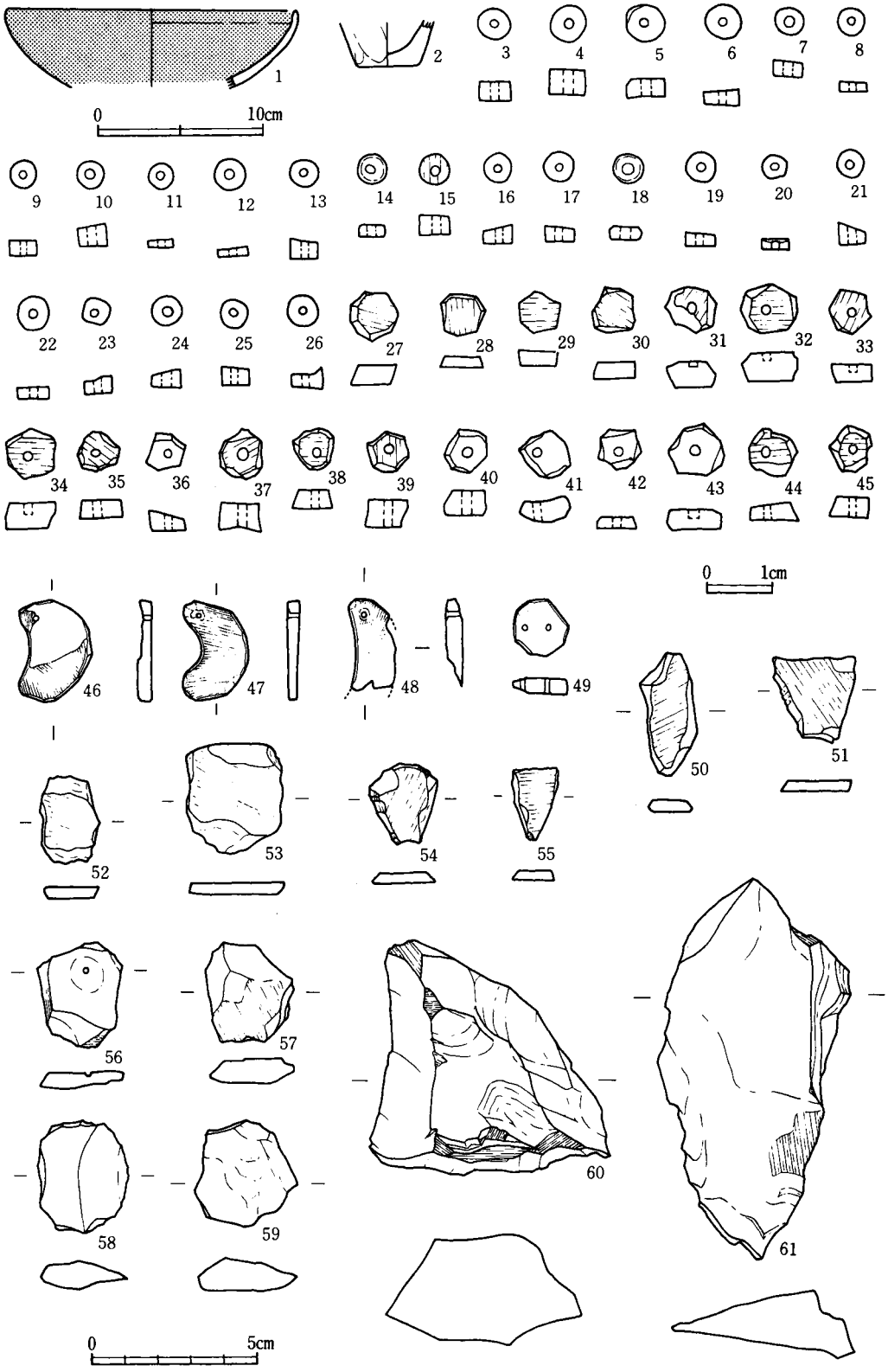


図204　D014号遺構出土遺物実測図

出土遺物　遺物は、坏形土器と石製品がある。坏形土器は1、2で、1は内彎する体部を呈し、2は手捏である。石製品は3～61で、いずれも滑石製である。3～26は臼玉、27～45は臼玉未成品、46～48は勾玉、49は双孔円板、50～55は扁平に作出した素材で、50、55は剣形品の未成品と思われる。56～59は原石より割り取られた剝片で56には穿孔がしてある。60、61は原石である。

6．D016号遺構（図205～213、図版35－1・2、40）

III群の住居群内において北東部分に位置し、D022、D056が近接する。溝状の攪乱を受けているため出土遺物は一括資料と判断できない。

遺構　北壁6.72m、東壁6.38mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡で、石製模造品の工房跡でもある。壁は緩斜面に構築しているため掘り込みは一定していないが、東壁部分では0.46mを計る。壁直下には幅0.2m、深さ0.04mの壁溝が四壁に認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は対角線上にP_1～P_4が配置してあり、いずれも径0.54m、深さ約0.45mを計る。P_5は工作用ピット、P_6は貯蔵穴と考えられるもので、P_5は南壁中央部に接し長辺0.76m、短辺0.7m、深さ0.2m、P_6は南東壁コーナー部に接し一辺0.55m、深さ0.18mを計る。

炉　住居中央部より北側に偏在しP_1とP_3の間に位置している。長径0.88mの楕円形を呈し、深さ0.18m、厚さ0.08mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層ローム粒混入黒褐色土層、IV層茶褐色土層、V層暗茶褐色土層が堆積しており、遺物は床面を中心にI、II層から出土している。石

D016出土位置別石製遺物集計　　※上段は成品、下段は未成品

出土位置	原石	石片	品目									合計
			臼玉	勾玉	剣形	有孔円板	双孔円板	円板状	双孔円板欠損品	滑	その他	
I層	1	2,787	21 282	—	—	—	1	—	1	—	1	3,094
II層	1	2,865	18 201	2 1	—	—	2	—	—	—	6	3,096
III層	—	74	6	—	—	—	—	—	—	—	—	80
IV層	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
貯蔵穴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
工作ピット	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
柱穴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
床	1	199	15	—	—	—	—	—	—	—	—	215
床下	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
その他	3	1,690	4 49	—	—	—	1 1	—	—	—	—	1,748
計	6	7,615	596	3	—	—	5	—	1	—	7	8,233

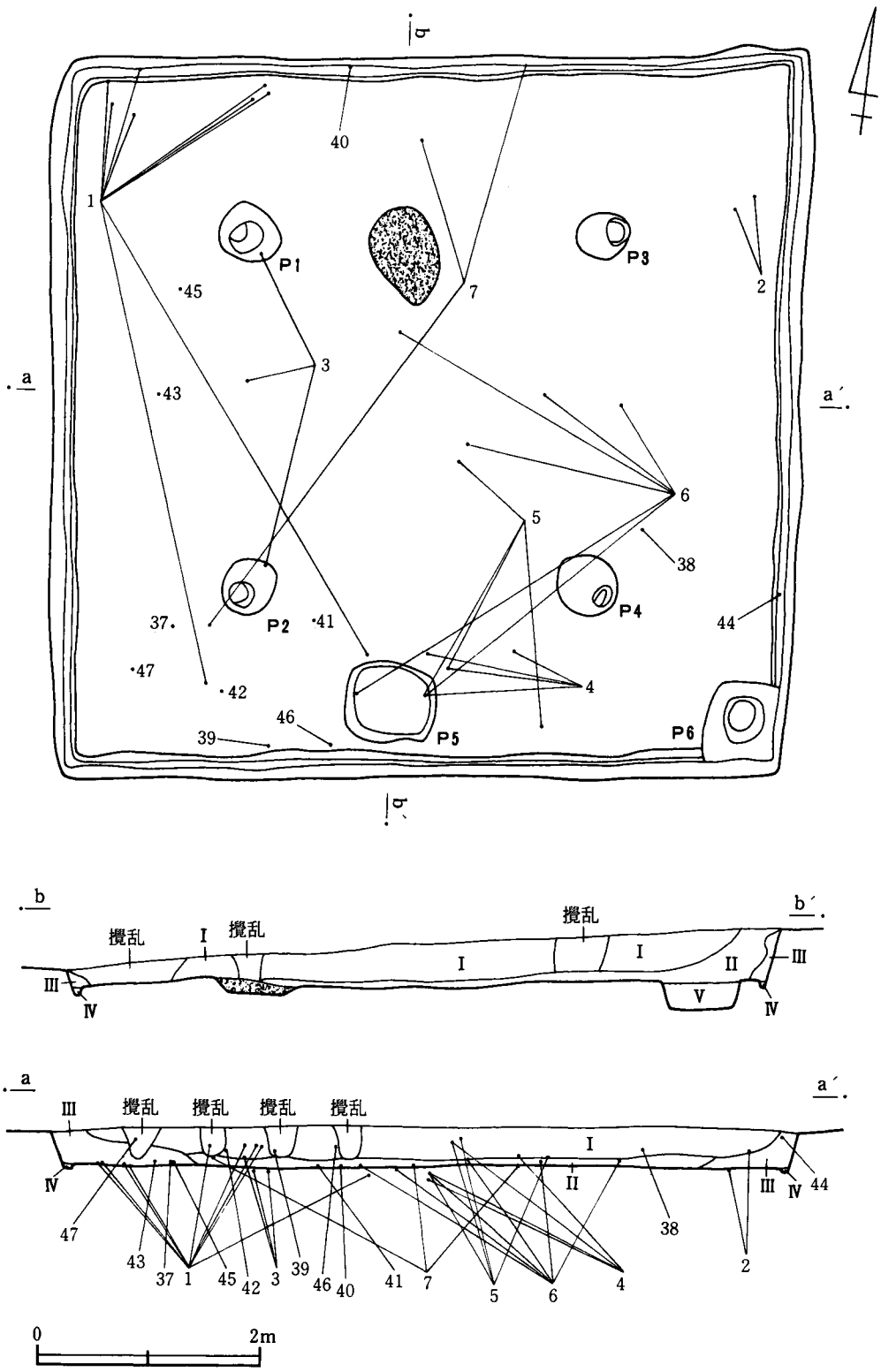


図205　D016号遺構実測図

製遺物は住居中央部を中心にⅠ、Ⅱ層から出土しており、偏在の傾向は窺えない。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器と石製品がある。甕形土器は1～3で、1は直立する口縁部を呈し、2は「く」字状に外反する口縁部破片で、3は底部破片である。坏形土器は4～7で、5～7は深身で椀形に近い形状を呈す。石製品は8～47でいずれも滑石製で

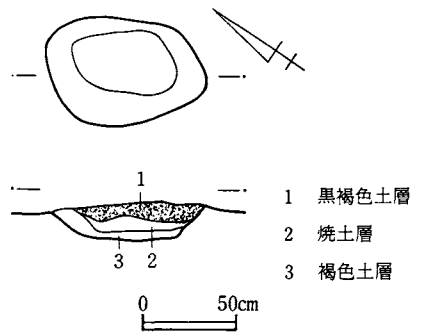


図206　D016号遺構炉跡実測図

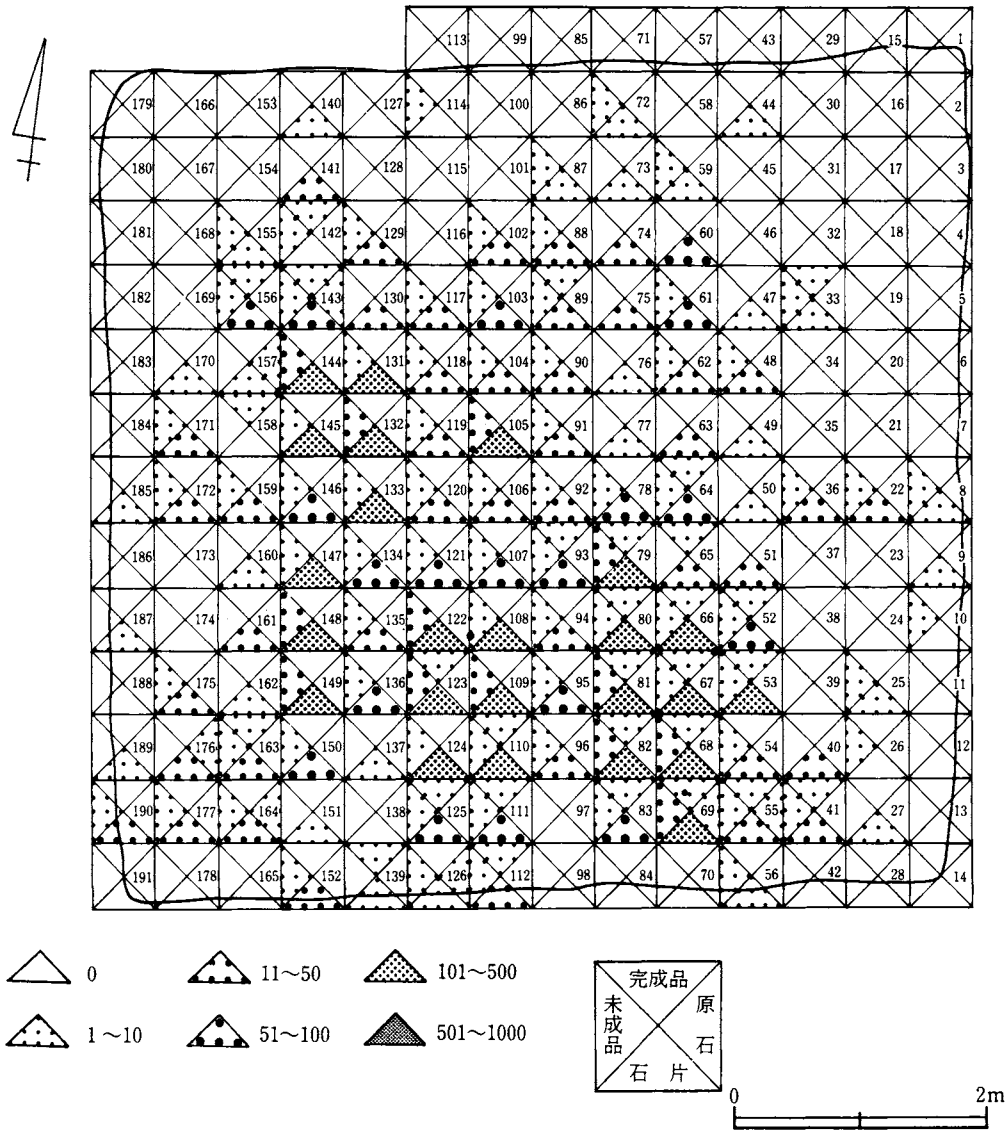


図207　D016号遺構石製遺物平面分布模式図

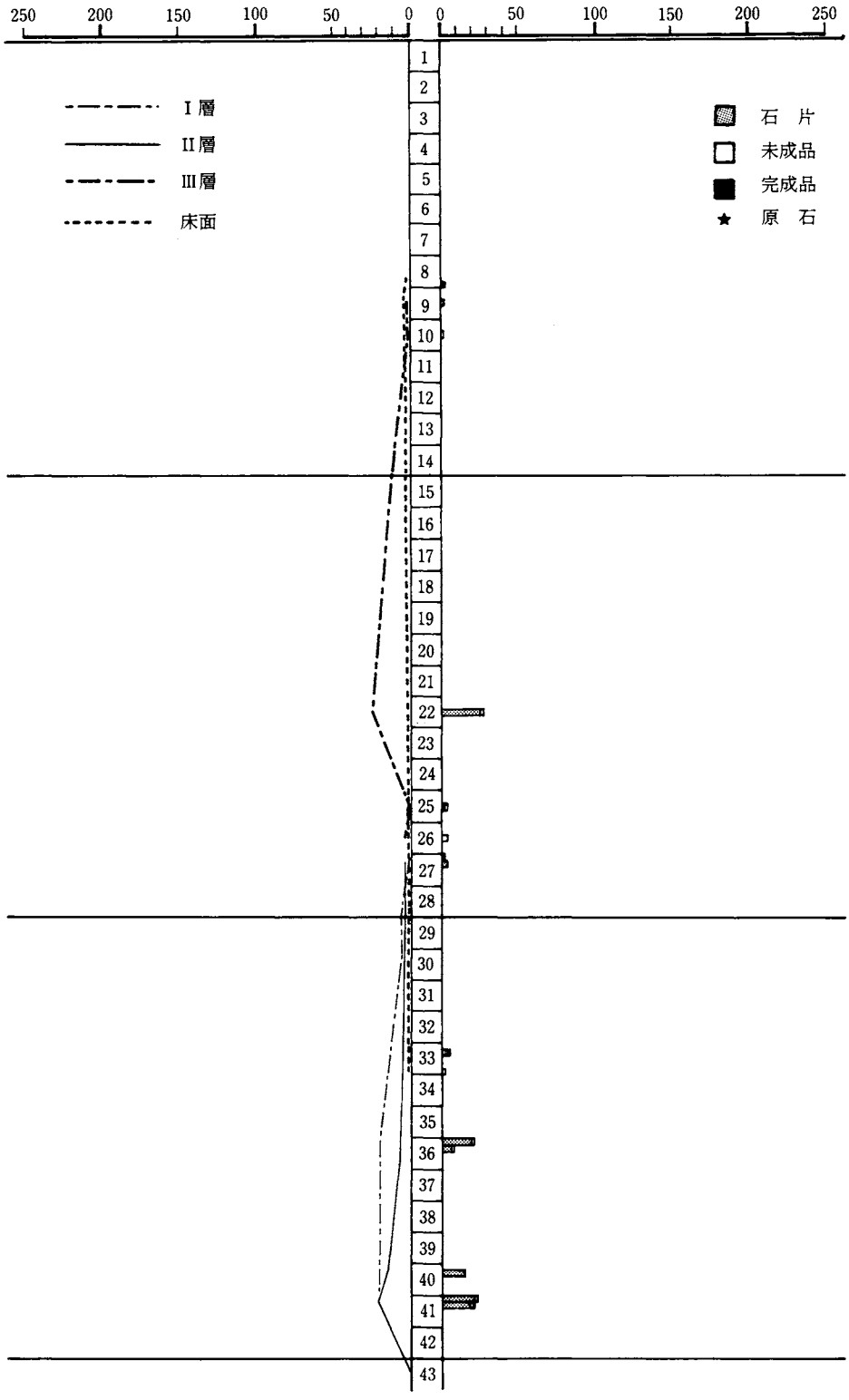


図208 D016号遺構石製遺物層位別分布図(1)

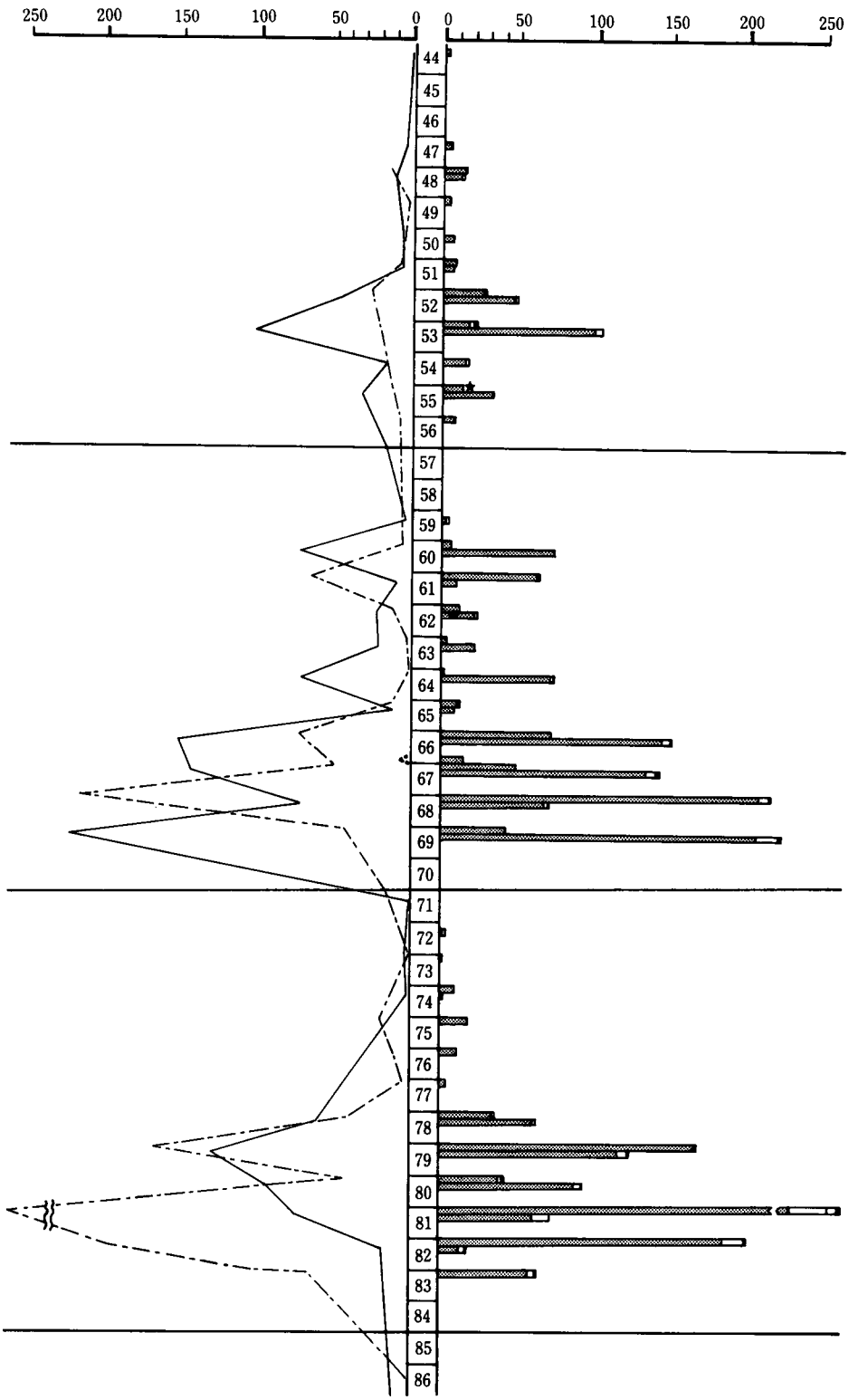


図209 D016号遺構石製遺物層位別分布図(2)

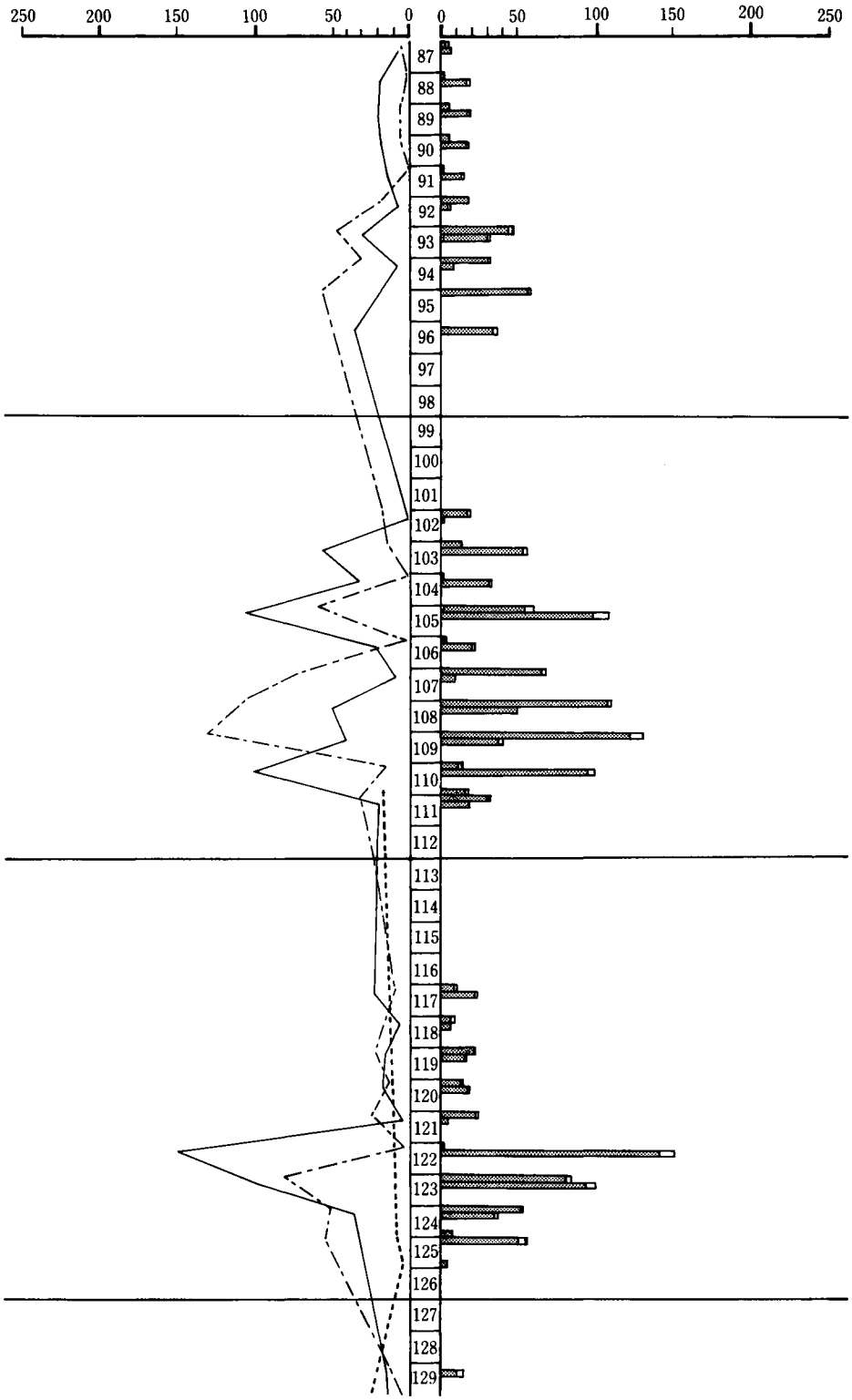


図210 D016号遺構石製遺物層位別分布図(3)

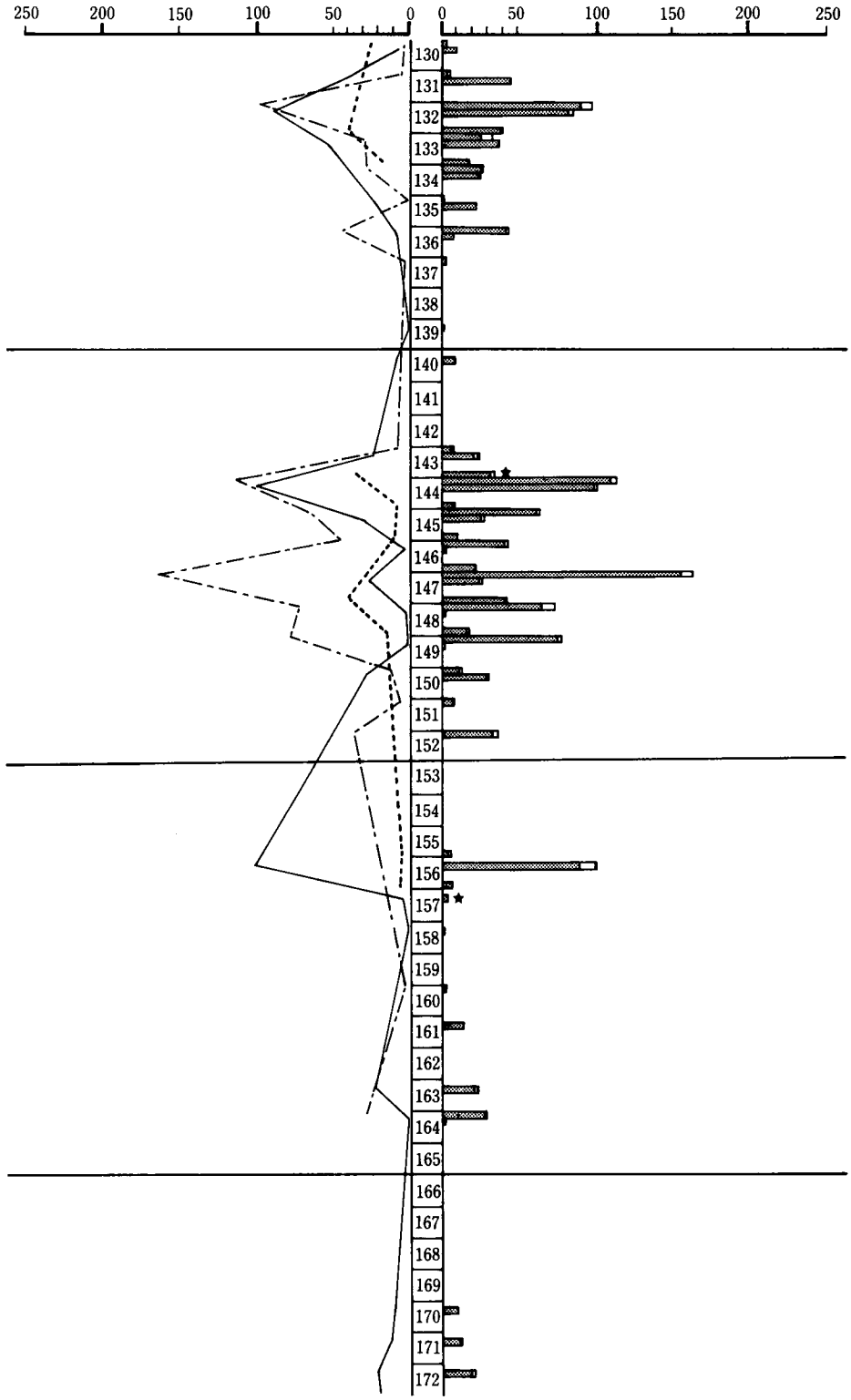


図211 D016号遺構石製遺物層位別分布図(4)

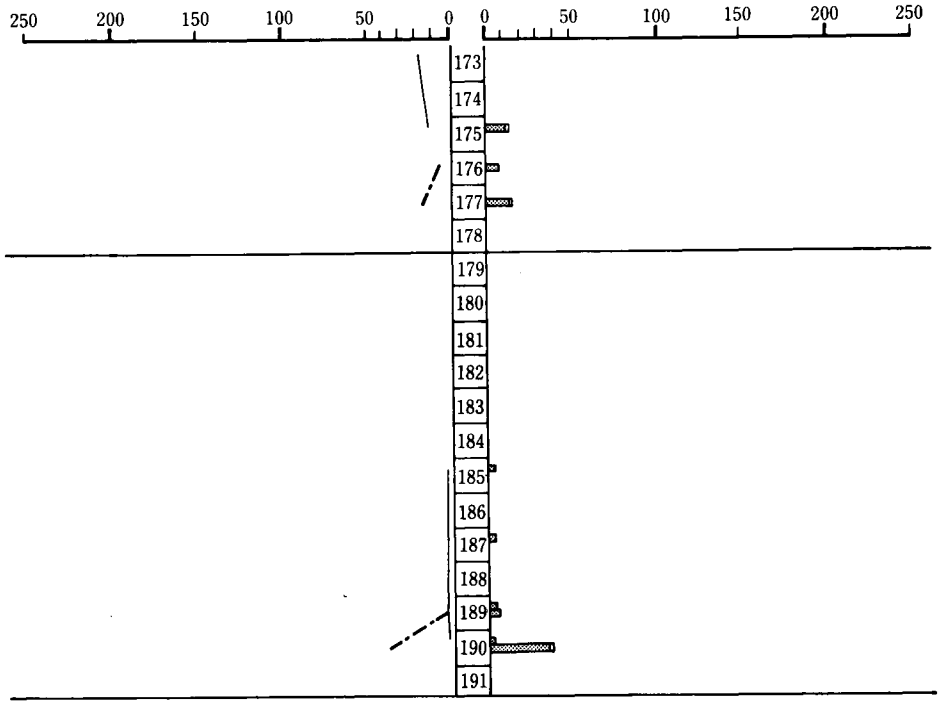


図212 D016号遺構石製遺物層位別分布図(5)

ある。8～24は臼玉、25～36は臼玉未成品、37は勾玉、42は剣形品と思われる。43、44は紡錘具で、中央に0.8cmの軸孔があく。43は40g、44は35gである。45～47は原石で、いずれも部分的に整痕が認められる。

D016出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	(19.7)	—	1/3	ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
2	甕	—	(16.0)	—	口縁部のみ	ヨコナデ	砂粒	やや軟弱	黒褐色	
3	甕	—	—	7.15	1/2	—	砂粒	やや軟弱	茶褐色	
4	坏	—	15.2	—	1/4	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
5	椀	6.6	11.6	4.4	1/2	—	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
6	椀	6.4	(14.0)	4.07	1/3	ヨコナデ	砂粒	堅緻	赤褐色	
7	椀	—	(13.8)	—	1/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	(内)黒褐色 (外)黒色	赤彩

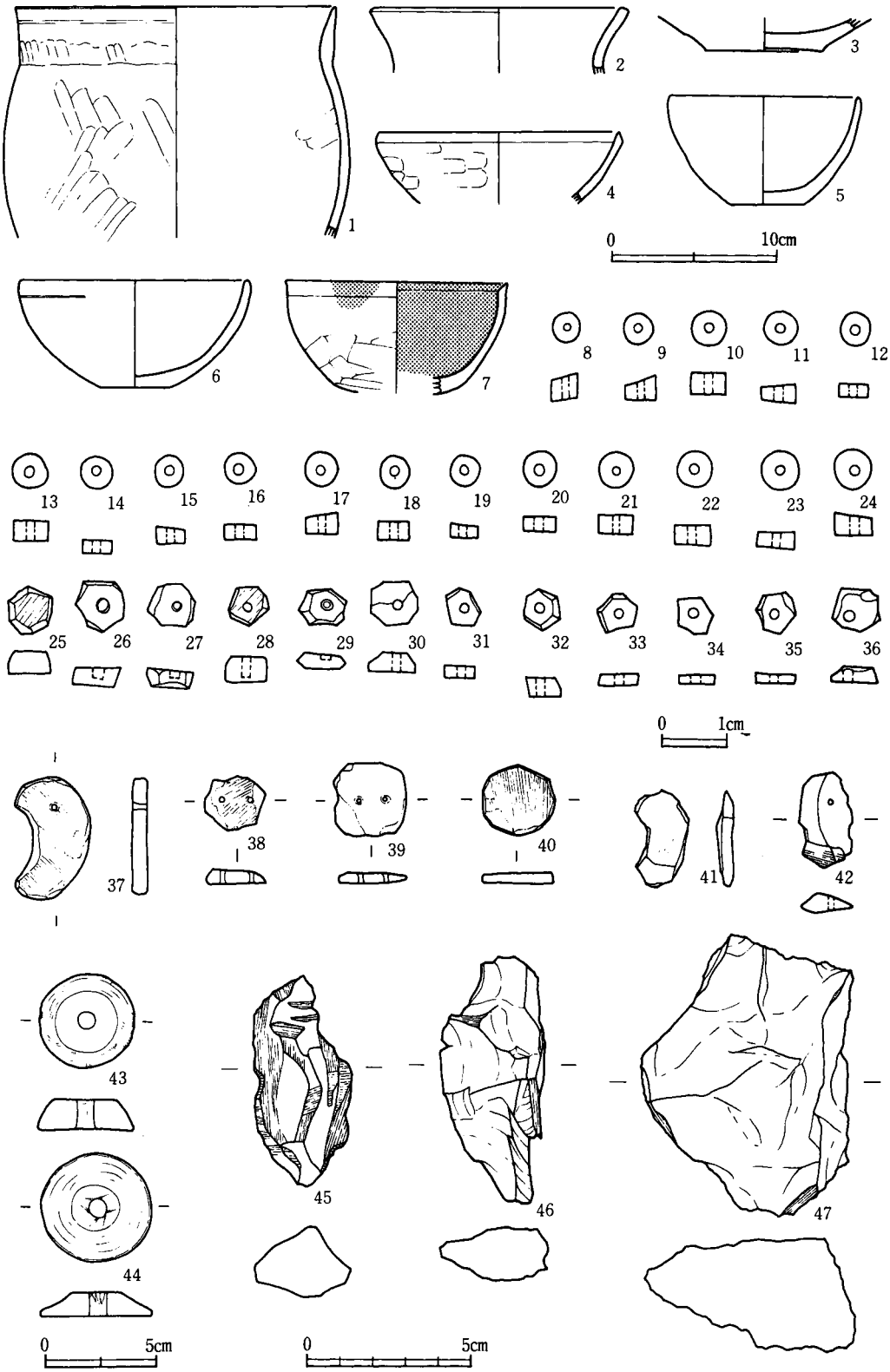


図213　D016号遺構出土遺物実測図

7．D022号遺構（図214～221、図版35－3、41）

Ⅲ群の住居群内において東側に位置し、D016、D056が近接している。重複関係を呈しているが、切断している遺構の状況が断片的であるため充分に把握することができないが長径0.2m、短径4.6m程度の隅丸長方形の平面形を呈するものと思われる遺構で、弥生時代に比定できるか

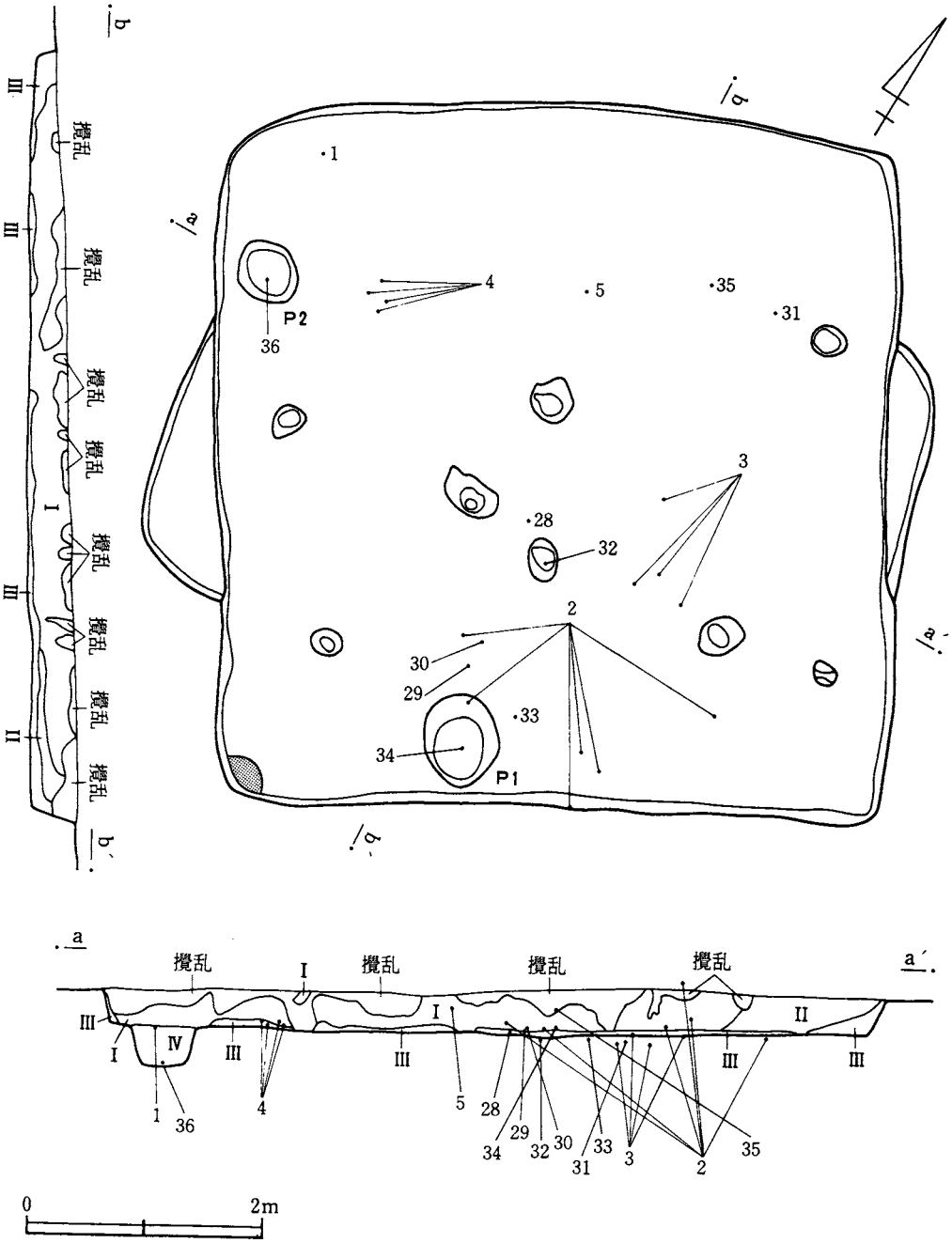


図214　D022号遺構実測図

もしれない。

遺構　北壁5.57m、東壁5.66mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡で、石製模造品の工房跡でもある。壁は若干傾斜を呈し0.3m掘り込んで床面に達している。床面は中央部が若干堅緻な状況を呈するものの全体に軟弱な状況である。9か所に小ピットを検出したが柱穴になるもの

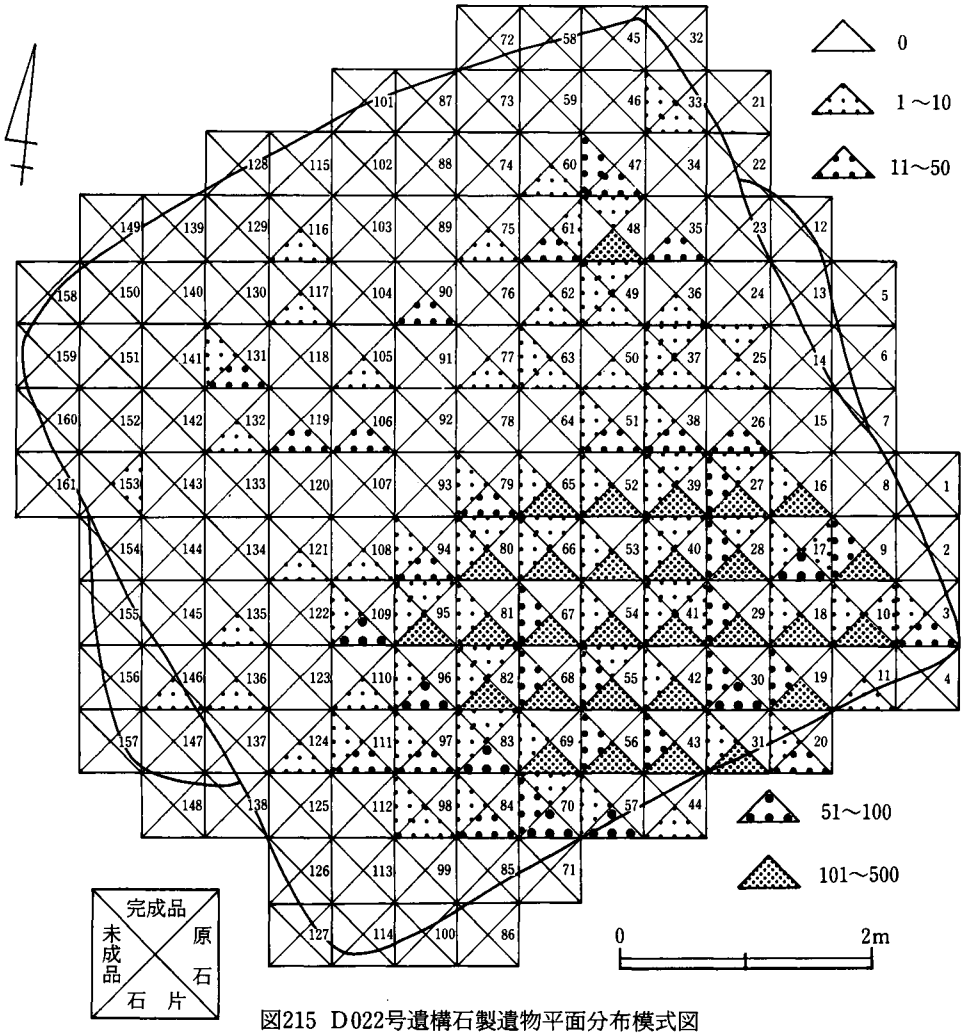


図215　D022号遺構石製遺物平面分布模式図

D022出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	坩	—	—	5.0	⅔	ナデ	砂粒	やや軟弱	茶褐色	赤彩 切り込み痕
2	鉢	—	—	4.9	½	ナデ	砂粒	堅緻	黒褐色	
3	坏	—	(13.4)	—	¼	ナデ	雲母	堅緻	茶褐色	
4	高坏	—	—	—	坏部 ½	—	砂粒	堅緻	赤褐色	赤彩

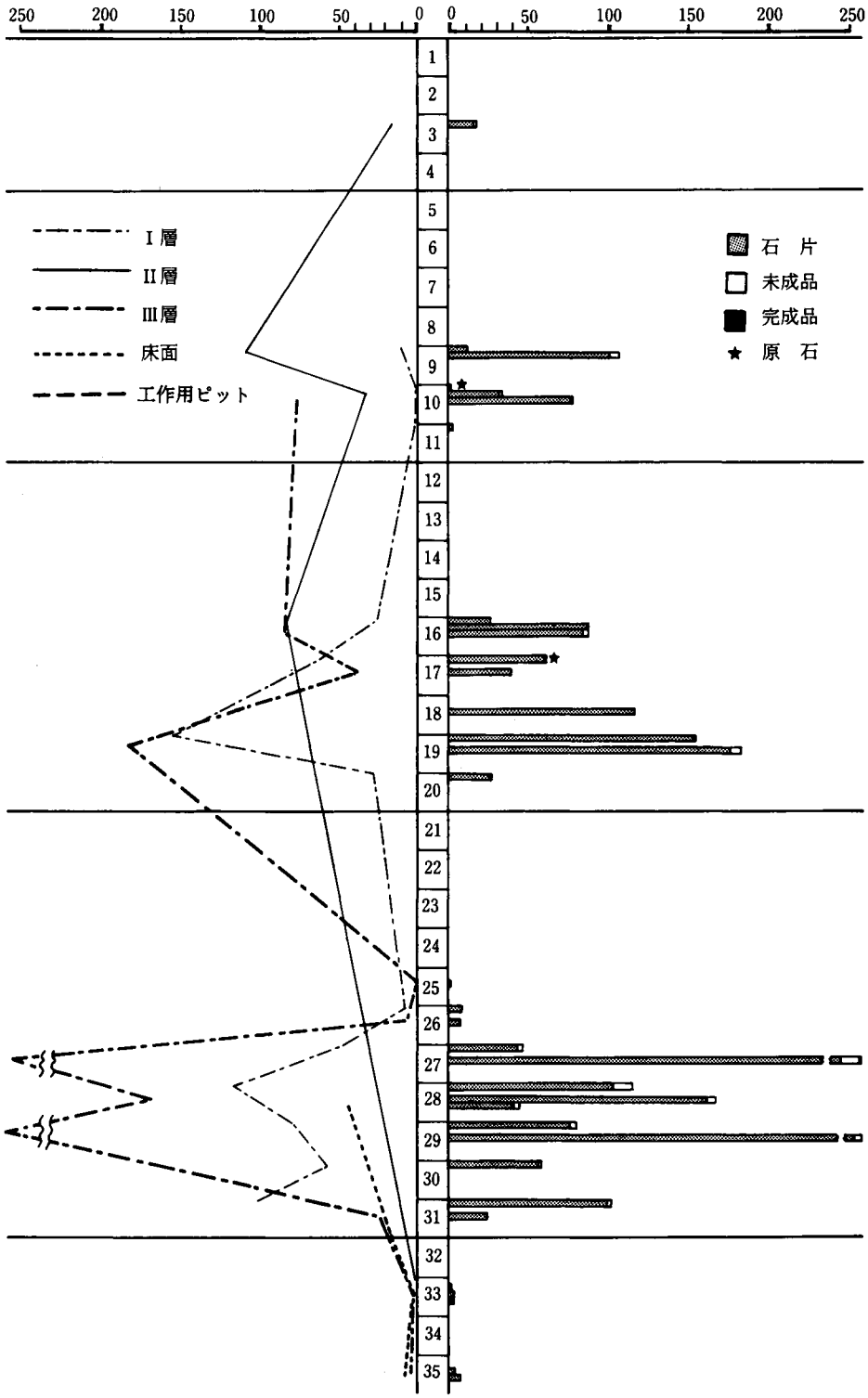


図216 D022号遺構石製遺物層位別分布図(1)

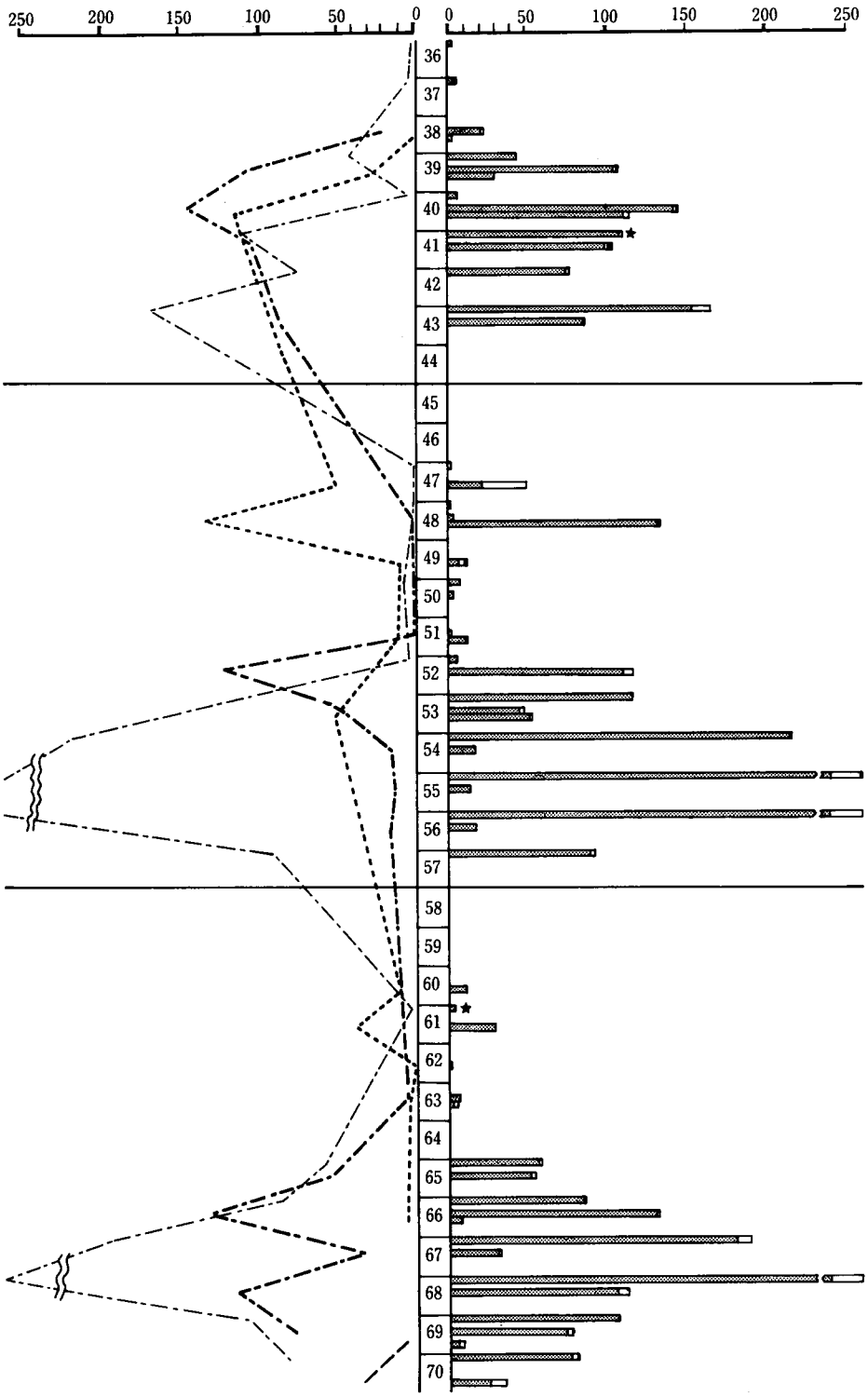


図217 D022号遺構石製遺物層位別分布図(2)

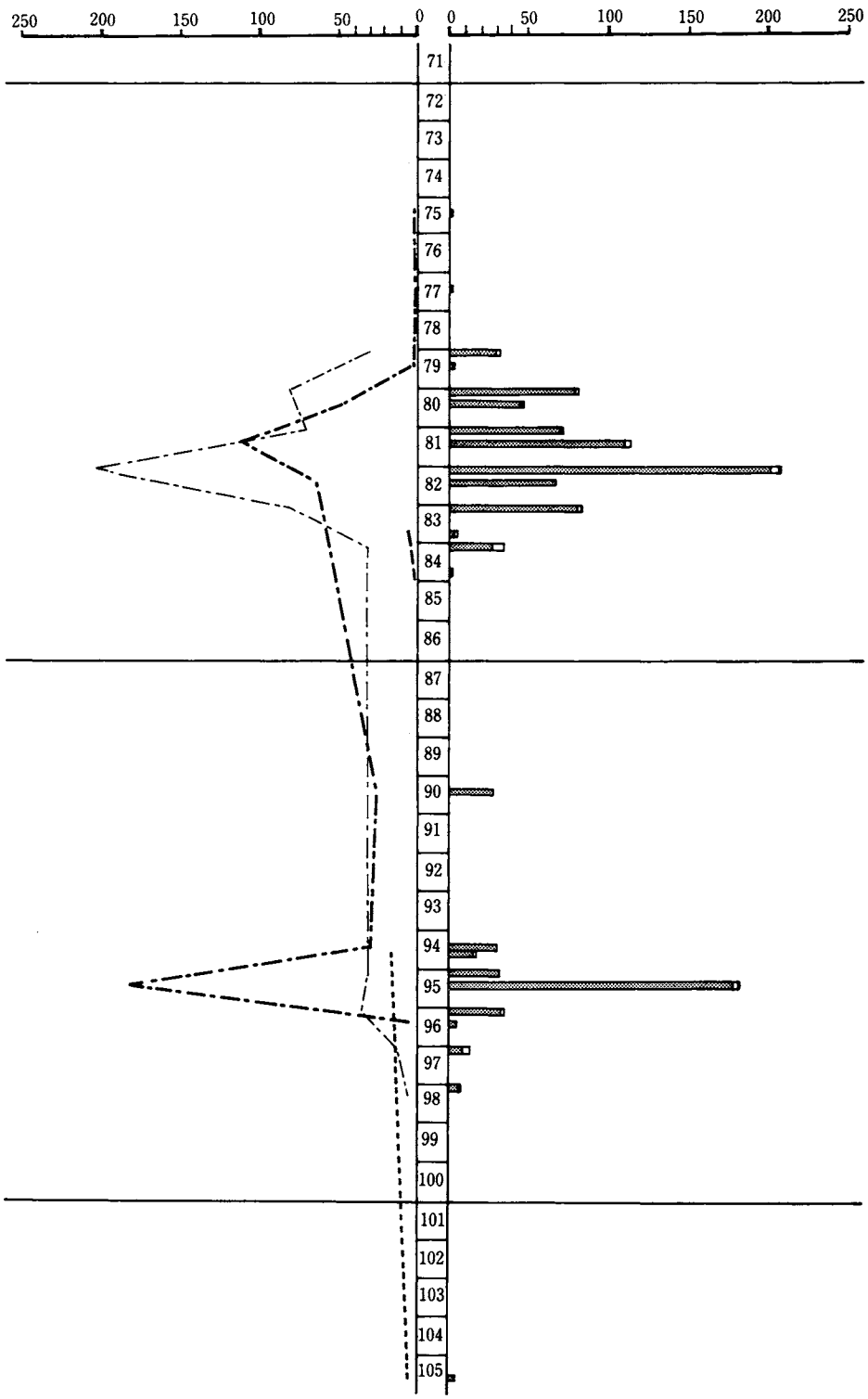


図218 D022号遺構石製遺物層位別分布図(3)

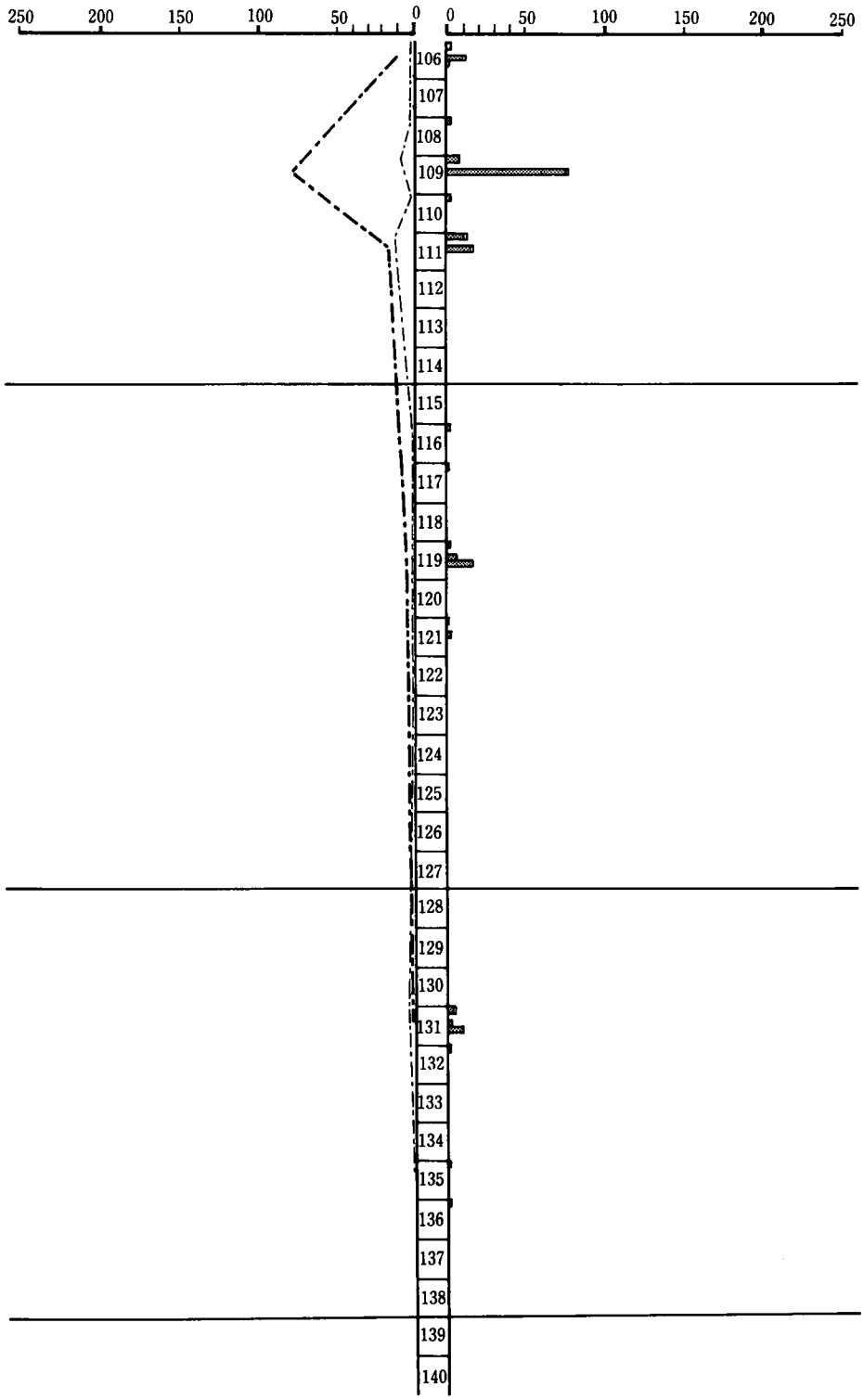


図219 D022号遺構石製遺物層位別分布図(4)

はない。南壁中央部に近く長径0.76m、深さ0.33mを計るP₁を検出した。底面には厚さ0.06mを計る白色粘土が堆積しており工作用ピットと考えて差し支えないであろう。また西壁に接し長径0.54m、深さ0.39mを計る貯蔵穴と思われるP₂を検出した。壁溝は検出できなかった。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層茶褐色土層、IV層暗茶褐色土層が堆積

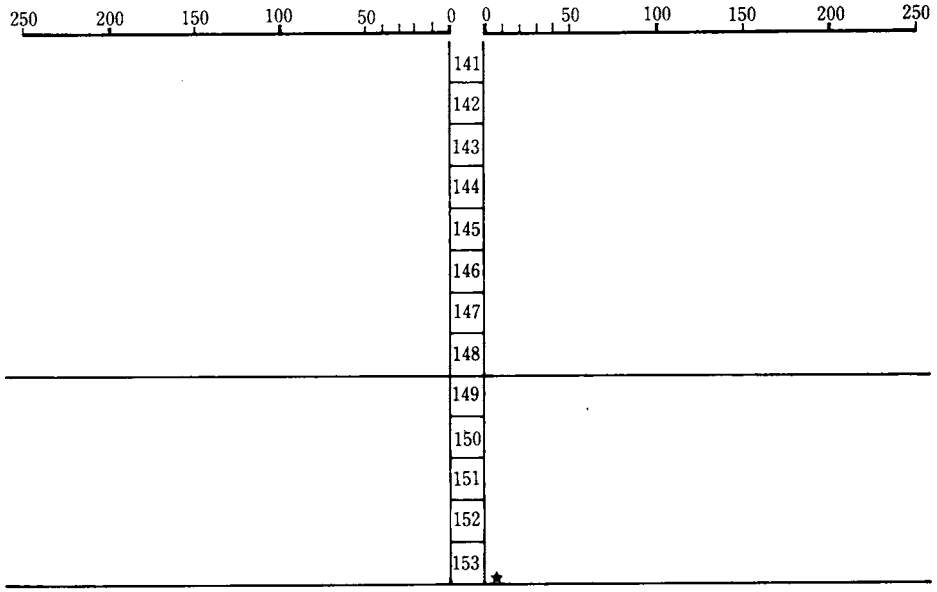


図220　D022号遺構石製遺物層位別分布図(5)

D022出土位置別石製遺物集計　　※上段は成品、下段は未成品

出土位置	原石	石片	品目 臼玉	勾玉	剣形	有孔円板	双孔円板	円板状	双孔円板欠損品	滑	その他	合計
I層	4	3,767	3 172	—	2	—	1	6	—	—	4	3,959
II層	—	223	14	—	—	—	—	—	—	—	—	237
III層	—	3,443	5 215	—	1	—	1	3	—	—	3	3,671
IV層	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
貯蔵穴	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
工作ピット	—	18	19	—	—	—	—	—	—	—	—	37
柱穴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
床	—	339	12	—	—	—	1	—	—	—	2	354
床下	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
その他	—	810	13	—	—	—	—	—	—	—	—	823
計	5	8,600	453	—	3	—	3	9	—	—	9	9,082

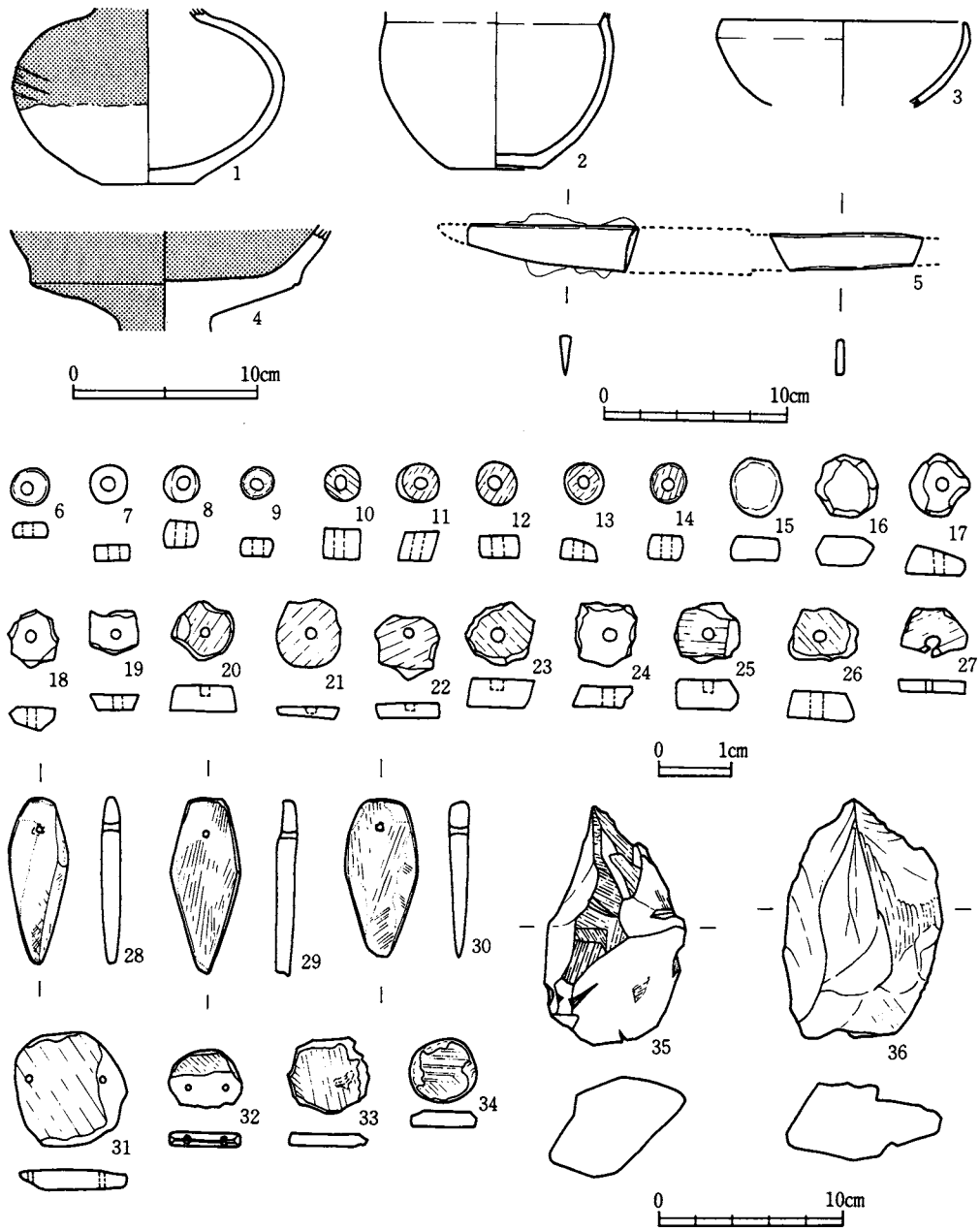


図221　D022号遺構出土遺物実測図

しており、遺物は床面、Ⅰ層、Ⅲ層下部より出土している。石製遺物は住居南側を中心にⅠ層とⅢ層より出土している。

出土遺物　遺物は、坩、鉢、坏、高坏形土器と鉄製品、石製品がある。坩形土器は1で胴部は扁平である。鉢形土器は2で口縁部は欠損する。坏形土器は3で内彎ぎみに開く体部を呈す。高坏形土器は4で接合部の破片である。鉄製品は5の刀子で一部欠損するが同一個体と思われ

る。石製品は6～36で、いずれも滑石製である。6～14は臼玉、15～27は臼玉未成品および欠損品である。28～30は剣形品、31、32は双孔円板、33、34は双孔円板の未成品と思われる。35、36は原石で、35には整痕が認められる。

8．D055号遺構（図222～225、図版36－1・2、41、42）

III群の住居群内において南東部分に位置し、D056、D057が近接するが約20mの距離を有している。

遺構　北壁5.75m、東壁7.34mを計る長方形の平面形を呈す竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し約0.32m掘り込んで床面に達している。床面は全体に堅緻な状況を呈している。床面上には19か所にわたり小ピットを検出したが柱穴になるものはなく、性格は不明である。北東壁コーナー部分に長径0.98m、深さ0.31mを計るP_1を、南西壁コーナー部分に長径0.56m、深さ0.31mを計るP_2を検出した。P_1は貯蔵穴として考えて差し支えないであろう。壁溝は検出できなかった。

炉　西壁中央部に近く位置し、小ピットと重複している。長径0.6m、短径0.5m、深さ0.08m、厚さ0.05mの焼土が堆積しているが、焼土の範囲は部分的に遺存する程度である。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層褐色土層、III層ローム粒混入黒褐色土層、IV層ローム粒混入暗茶褐色土層、V層暗茶褐色土層が堆積しており、遺物は覆土全体から出土している。

D055出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	23.4	(15.8)	6.8	3/3	ヨコナデ	砂粒	やや軟弱	黒褐色	
2	甕	19.4	11.75	5.4	完形	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
3	甕	17.5	12.2	3.9	完形	ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
4	甕	—	(16.2)	—	口縁部～頸部1/2	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
5	甕	—	—	—	口縁部 1/3	ヨコナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	
6	甕	—	—	—	胴部のみ	ヘラ削り	砂粒 小石	やや軟弱	赤褐色	
7	甕	—	—	—	底部 1/2	—	砂粒	堅緻	黒褐色	
8	甕	—	—	7.45	胴部～底部3/3	ナデ	砂粒	堅緻	黒褐色	
9	甑	—	—	6.2	胴部 1/3	—	砂粒	堅緻	茶褐色	
10	坏	5.5	15.65	—	1/3	ヨコナデ	—	やや堅緻	茶褐色	赤彩
11	坏	6.0	(14.6)	—	1/2	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
12	坏	5.7	15.45	3.5	1/2	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	赤彩
13	坏	5.8	17.5	5.3	1/2	ヨコナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	赤彩
14	坏	6.4	15.4	—	3/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
15	坏	4.4	14.0	—	3/3	ヨコナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	赤彩

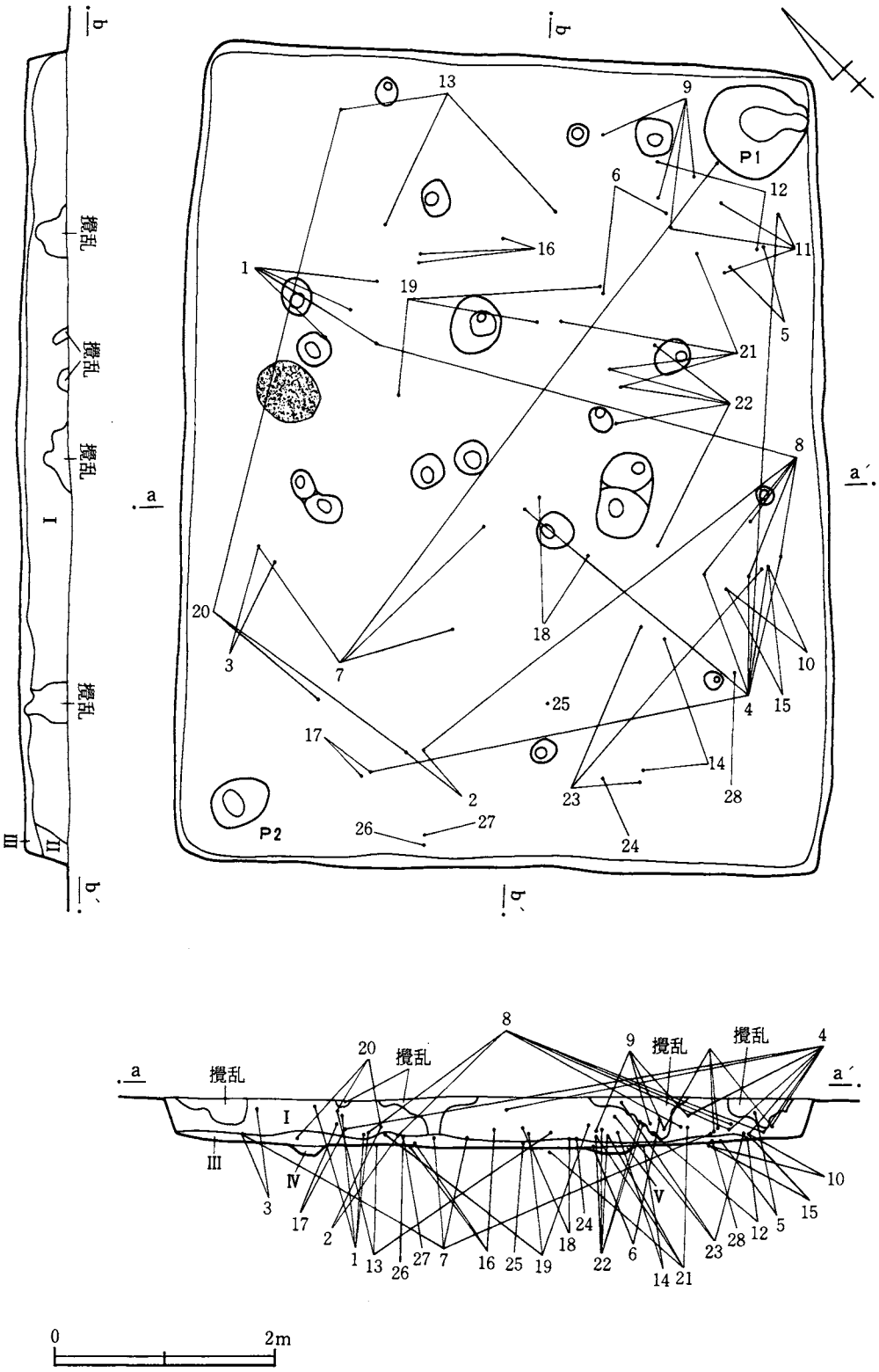


図222　D055号遺構実測図

出土遺物　遺物は、甕、甑、坏、高坏形土器と石製品がある。甕形土器は１～８で、胴部は多少長胴ぎみであるが球形に近い形状を呈し、口縁部は緩やかに「く」字状に外反する１～３がある。４、５は口縁部破片、７、８は底部破片、６は壺かもしれない。甑形土器は９で、単孔の底部破片である。坏形土器は10～18で、10～16、18は体部が内彎ぎみに開く形状を呈し、12、13は小平底である。17は稜を境に体部が直立ぎみに開く形状を呈する。高坏形土器は19～23で、19の坏部は

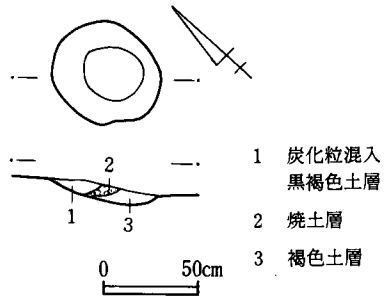


図223　D055号遺構炉跡実測図

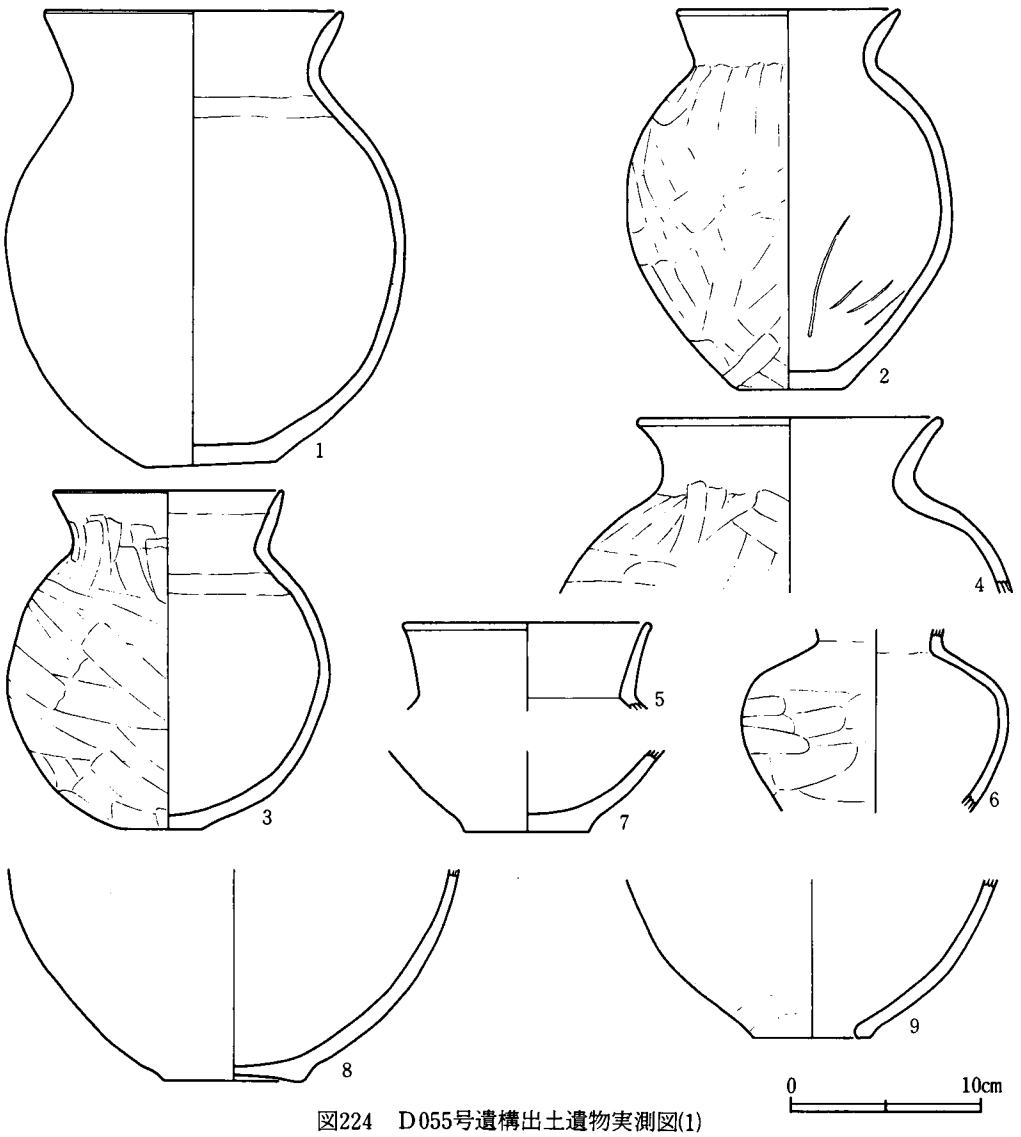


図224　D055号遺構出土遺物実測図(1)

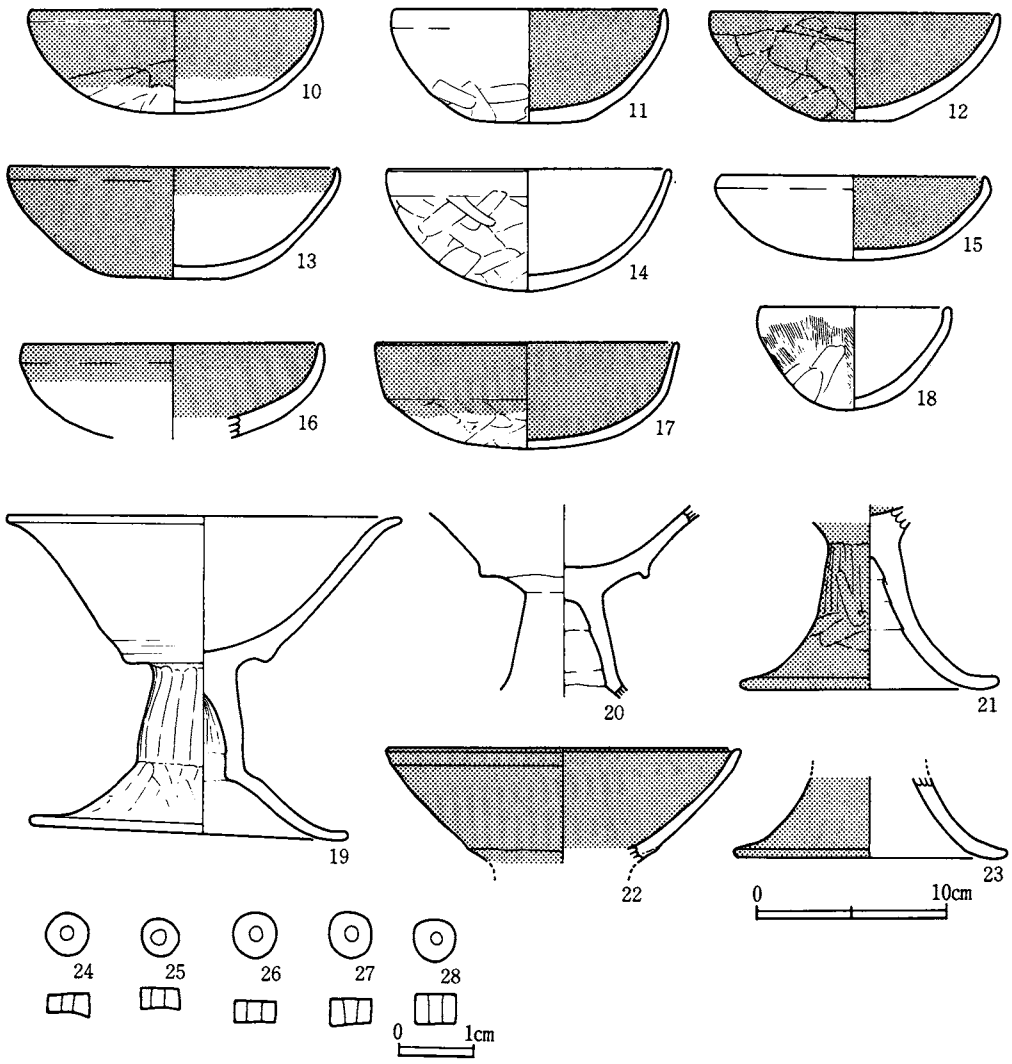


図225　D055号遺構出土遺物実測図(2)

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
16	坏	—	—	—	体部 1/3	ヨコナデ	雲母	堅緻	茶褐色	赤彩
17	坏	5.5	(16.3)	—	完形	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒 雲母	やや堅緻	茶褐色	
18	坏	5.3	10.2	—	完形	ハケ目 ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	茶褐色	
19	高坏	16.2	21.0	16.2	3/4	ナデ	砂粒	やや軟弱	茶褐色	
20	高坏	—	—	—	接合部 1/2	—	—	堅緻	褐色	
21	高坏	—	—	13.8	脚部のみ	ヘラナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	赤彩
22	高坏	—	(19.1)	—	坏部 1/3	ナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	赤彩
23	高坏	—	—	(14.6)	脚部 1/3	—	砂粒	堅緻	茶褐色	赤彩

直線的に大きく開く形状を呈す。20、21、23は脚部破片、22は坏部の破片で23の脚部と接合するものである。石製品は24～28で、滑石製の臼玉である。

9．D056号遺構（図226～228、図版36－3、42）

III群の住居群内において東側に位置し、D016、D022が近接している。

遺構　北壁5.1m、東壁5.14mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は若干の傾斜を呈して約0.46m掘り込んで床面に達している。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上に配置しており、径0.4m、深さ約0.6mを計るP1～P4を検出した。その他南東壁コーナー部分に近くP5、北西壁コーナー部分にP6を検出した。P5は長径0.6m、深さ0.41m、

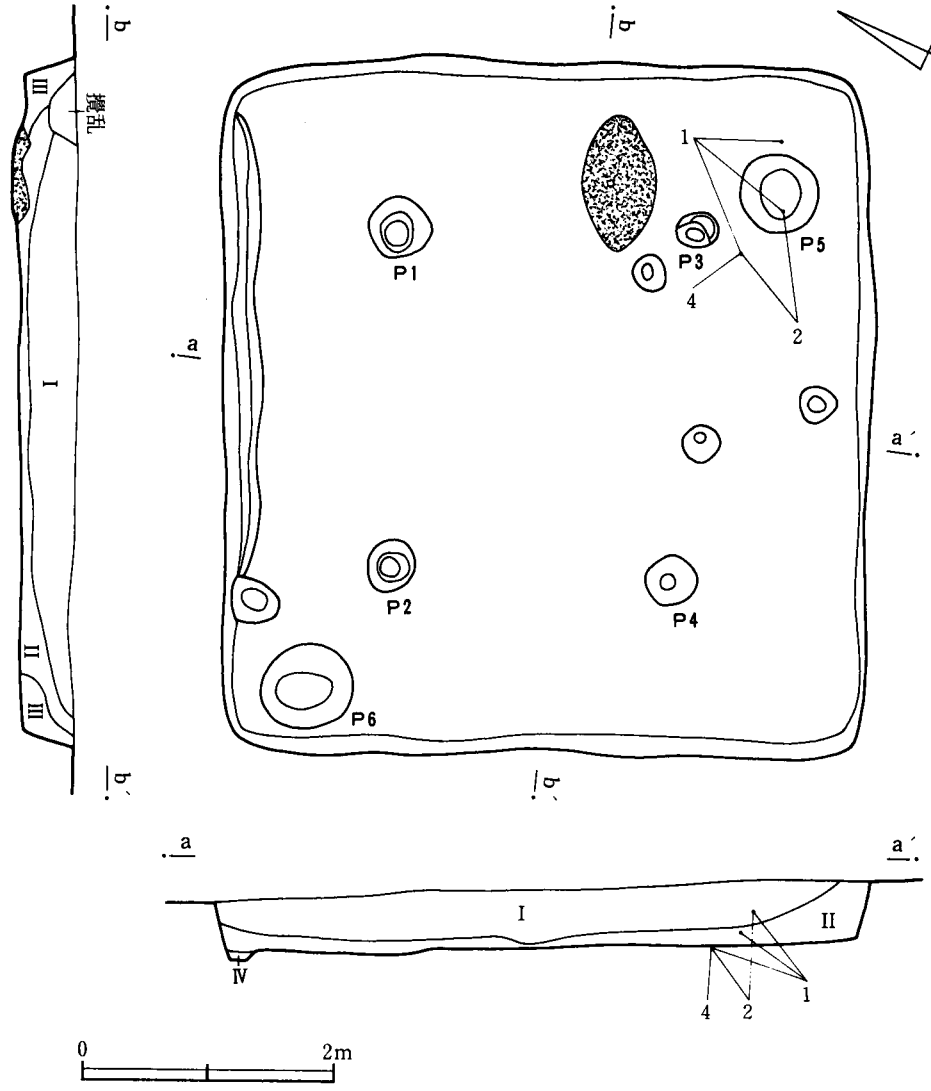


図226　D056号遺構実測図

P_6は長径0.6m、深さ0.29mを計り、貯蔵穴と考えられる。壁溝は幅0.25m、深さ0.07mで北壁の一部に認められるだけである。

炉　東壁中央部に近く位置している。長径1.05m、短径0.6mの長楕円形を呈し、深さ0.11m、厚さ0.1mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層ローム粒混入黒褐色土層、IV層茶褐色土層が堆積しており、遺物は覆土中に散在して出土している。出土量は少ない。

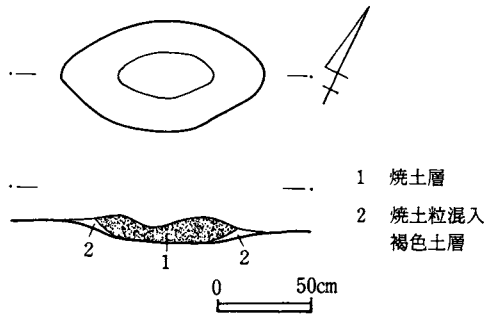


図227　D056号遺構炉跡実測図

出土遺物　遺物は、甕、坏、高坏形土器と石製品がある。甕形土器は1、2でいずれも口縁部は「く」字状に外反する。若干長胴を呈す。坏形土器は3の体部破片である。高坏形土器は4で、坏部のみである。3と形状が似ている。石製品は5の凝灰岩製の砥石である。

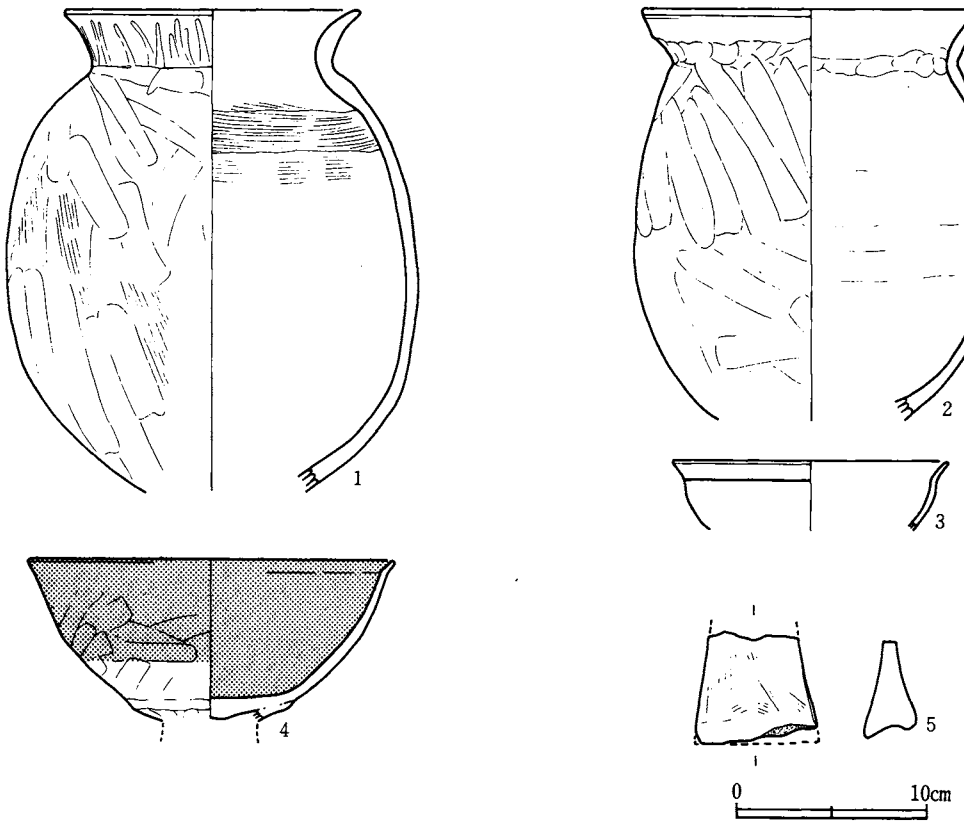


図228　D056号遺構出土遺物実測図

D056出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	(15.7)	—	2/3	ハケ目 ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
2	甕	—	18.15	—	1/2	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	軟弱	黒褐色	二次的に火を受ける
3	坏	—	(14.7)	—	1/3	ヨコナデ	—	堅緻	茶褐色	
4	高坏	—	(19.5)	—	坏部 1/3	ヘラ削り	砂粒	堅緻	赤褐色	赤彩

10. D057遺構（図229～231、図版37－1・2、42）

III群の住居群内においてほぼ中央に位置し、D058が近接している。緩斜面に構築しているため壁高は一定していない。

遺構　北壁3.91m、東壁4.62mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はかなり傾斜を呈し南壁部分で0.3m掘り込んでいる。壁直下には、幅0.22m、深さ0.07mを計る壁溝が認め

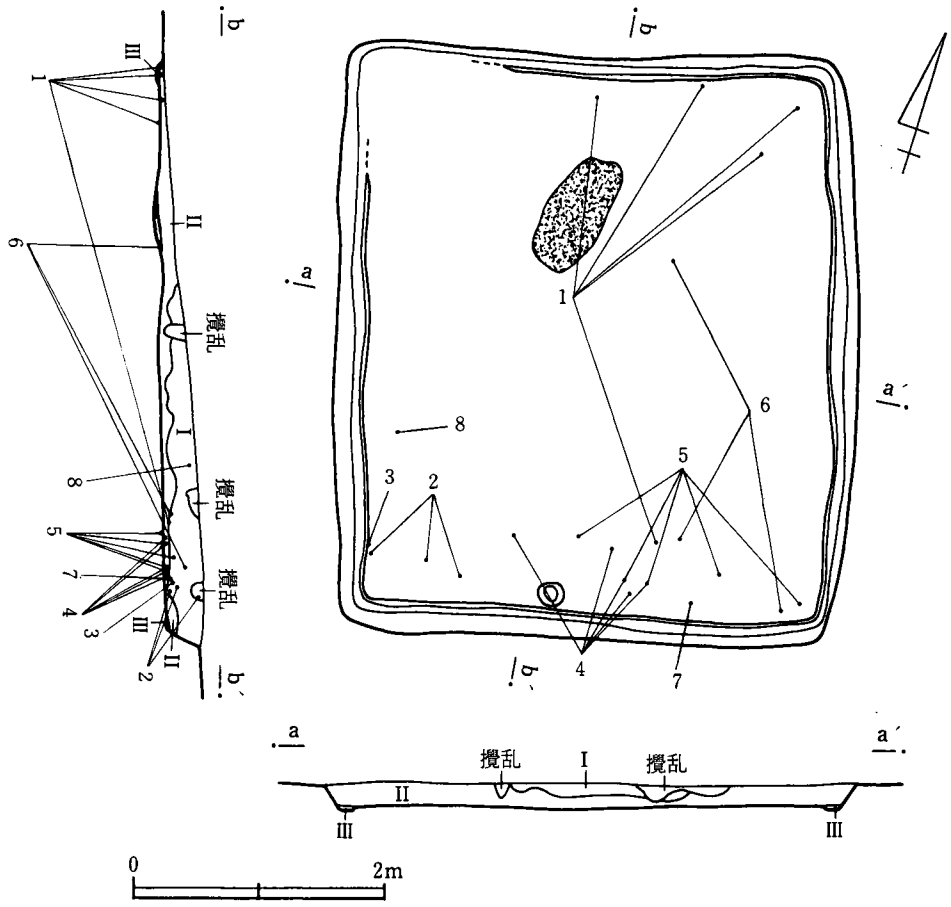


図229　D057号遺構実測図

られるが、北東壁コーナー部分は明瞭でない。南壁中央部に近く径0.21m、深さ0.19mを計る小ピットを検出したが柱穴は検出できなかった。

炉　住居中央部より北側に偏在している。長径0.95m、短径0.4m、深さ0.1mで厚さ0.07mの焼土が堆積している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層茶褐色土層が堆積しており、遺物は床面ないしⅢ層中より出土している。

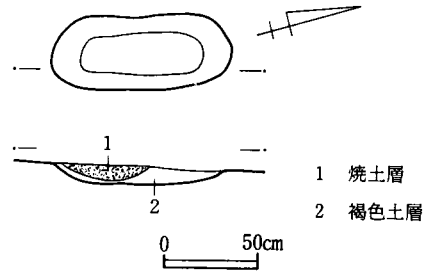


図230　D057号遺構炉跡実測図

出土遺物　遺物は、甕、坏、高坏形土器と石製品がある。甕形土器は1、2で、1は口縁部が一度直立して外反を呈す。2は底部破片である。坏形土器は3、4で、いずれも丸底を呈し、体部はヘラ削りされる。4は椀に近い形状を呈す。高坏形土器は5、6で、5は大きく開く体部と脚部を呈す。6は脚部破片である。石製品は7、8で、いずれも滑石製の臼玉である。

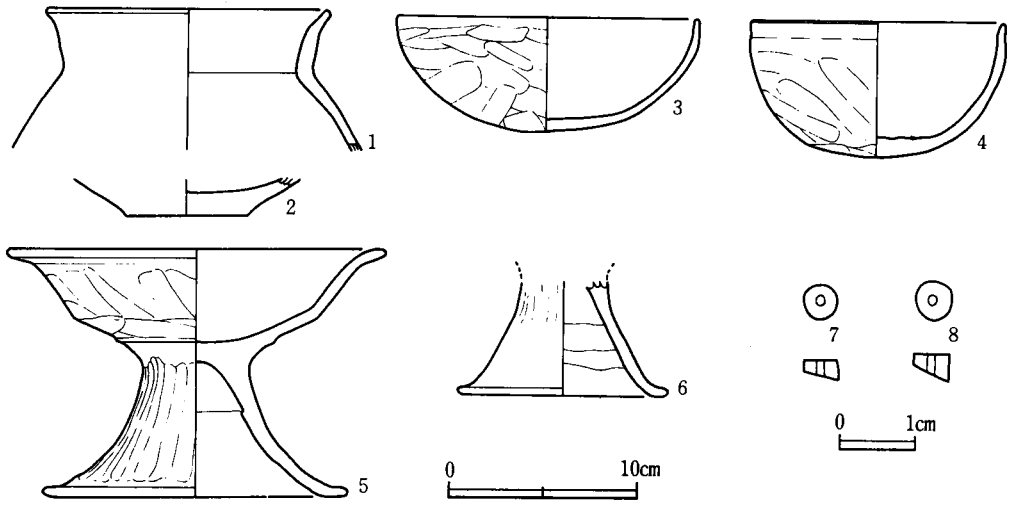


図231　D057号遺構出土遺物実測図

D057出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	15.2	—	口縁部～頸部½	ヨコナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	
2	甕	—	—	6.35	底部 ⅔	—	砂粒	堅緻	黒褐色	
3	坏	5.7	16.3	—	完形	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒 小石	軟弱	茶褐色	二次的に火を受ける
4	坏	7.0	13.6	—	½	ヘラ削り	砂粒	軟弱	茶褐色	
5	高坏	12.7	20.25	16.2	⅓	ヘラ削り	砂粒	軟弱	茶褐色	
6	高坏	—	—	—	脚部 ⅓	—	砂粒	堅緻	(内)黒褐色 (外)茶褐色	

11. D058号遺構（図232～236、図版37－3、42）

III群の住居群内において中央に位置し、D057が近接している。緩斜面に構築しているため壁高は一定しておらず、北側では認められない部分もある。

遺構　北壁3.5m、東壁3.63mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡で、石製模造品の工房跡でもある。壁は一定の高さを保っておらず南壁では0.32mを計る。壁直下には幅0.06m、深さ0.02

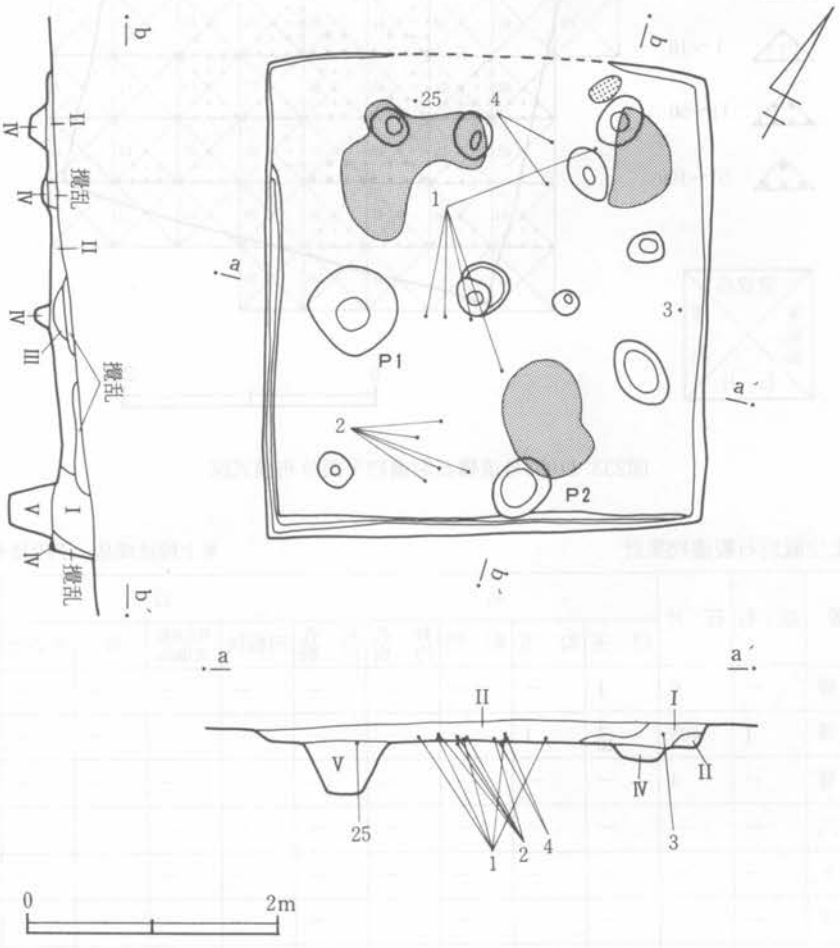


図232　D058号遺構実測図

D58出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	—	—	—	½	ヨコナデ ナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	
2	甕	—	—	—	½	ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
3	甕	—	—	5.9	½	ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
4	坏	5.6	13.6	4.5	¾	ナデ	砂粒	やや堅緻	茶褐色	

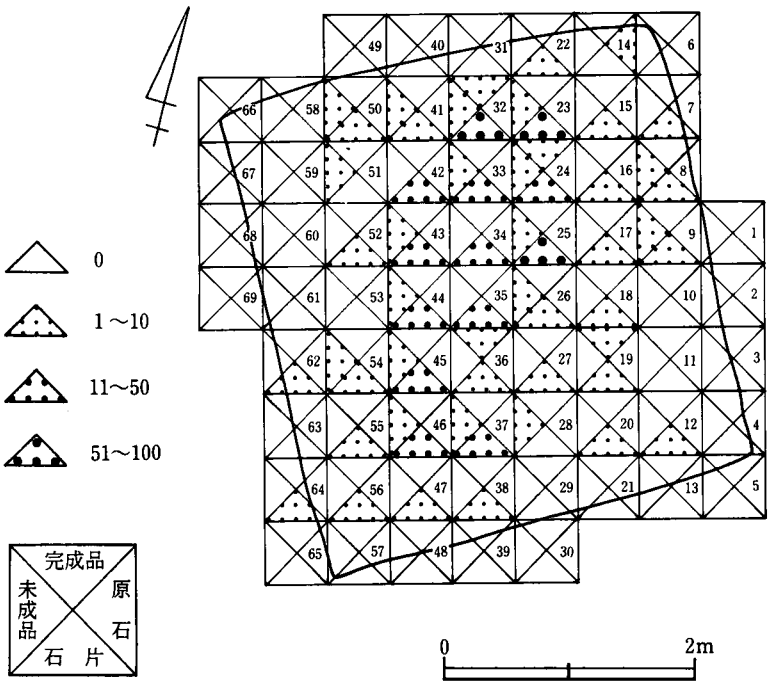


図233 D058号遺構石製遺物平面分布模式図

D058出土位置別石製遺物集計　　※上段は成品、下段は未成品

出土位置	原石	石片	品目 臼玉	勾玉	剣形	有孔円板	双孔円板	円板状	双孔円板欠損品	勝	その他	合計
I層	—	6	1	—	—	—	—	—	—	—	—	7
II層	1	408	4 40	1	—	—	—	—	—	—	—	454
III層	—	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4
貯蔵穴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
工作ピット	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
柱穴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
床	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
床下	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
その他	—	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5
計	1	423	45	1	—	—	—	—	—	—	—	470

mを計る壁溝が西、南壁部分に認められる。床面はやや堅緻な状況を呈している。床面上には大小12か所にピットを検出したが、柱穴になるものはない。P_1は西壁中央近く、径0.74m、深さ0.43mを計り、P_2は南壁中央に近く、径0.50m、深さ0.36mを計る。貯蔵穴ないし工作用ピ

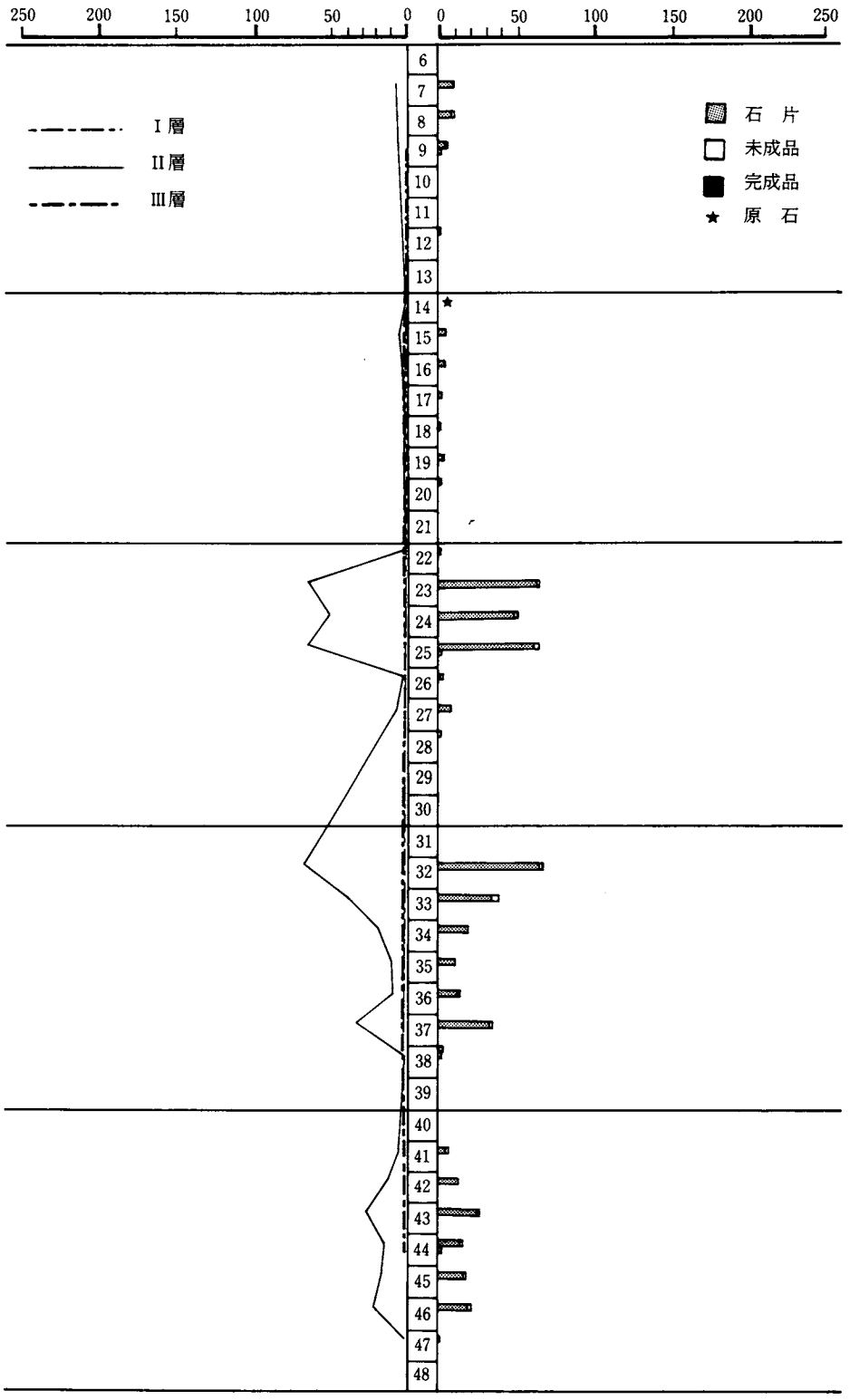


図234 D058号遺構石製遺物層位別分布図(1)

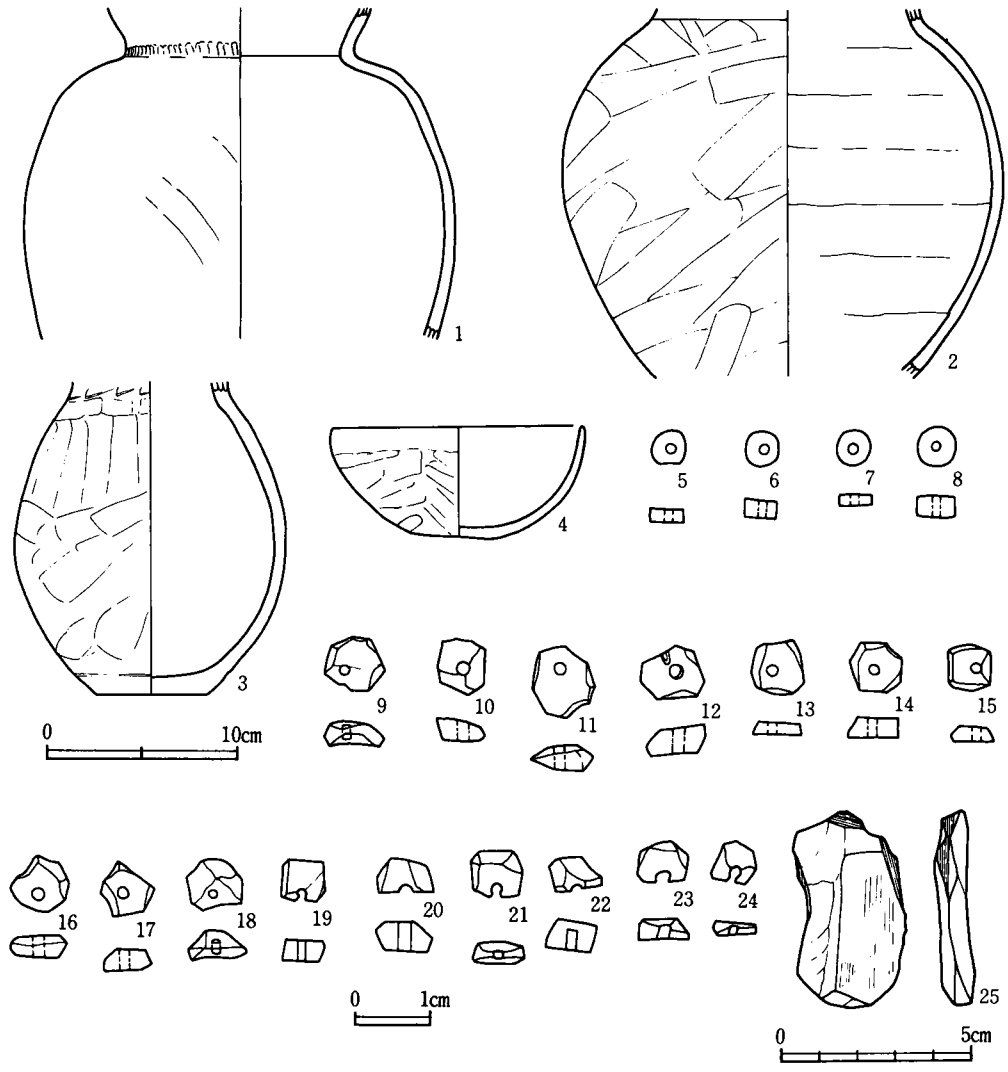


図235　D058号遺構出土遺物実測図

ットの可能性を有しているが具体的な検証はできない。炉は検出できなかったが、床面上に焼土を検出している程度である。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層ローム粒混入黒褐色土層、Ⅳ層黄褐色土層、Ⅴ層茶褐色土層が堆積しており、遺物は床面より出土している。石製遺物はⅡ層を中心にほぼ住居全体より出土している。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器と石製品がある。甕形土器は1～3で、1は「く」字状に外反する口縁部を呈し、2は胴部破片、3はかなり長胴なもので口縁部は欠損している。石製品は5～25でいずれも滑石製で、5～8は臼玉、9～24は臼玉未成品および欠損品である。25は勾玉の素材と思われるものである。

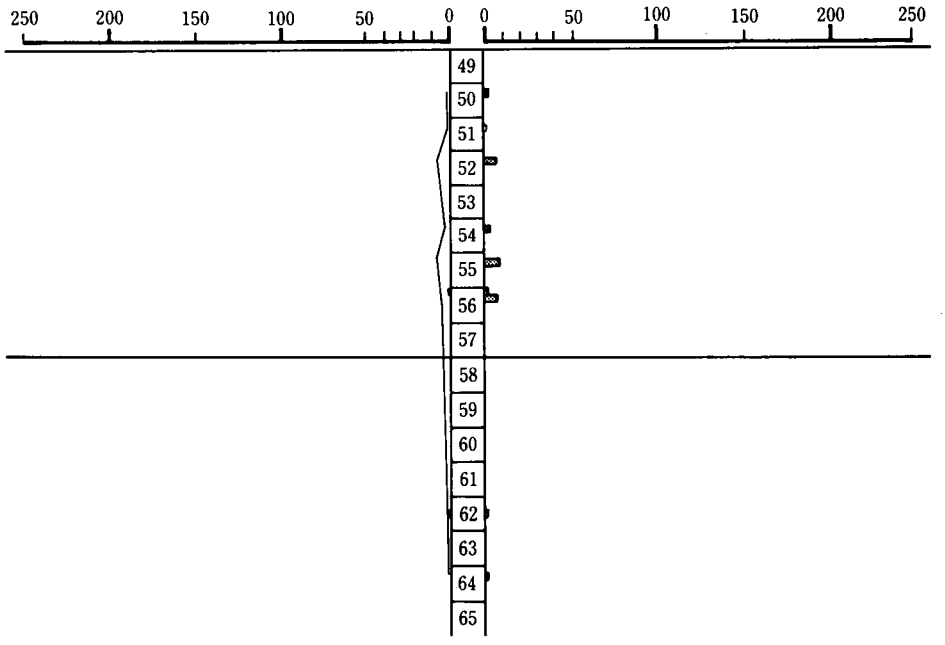


図236 D058号遺構石製遺物層位別分布図(2)

12. D059号遺構（図237～245、図版38－1・2、42、43）

III群の住居群内において中央より西側に位置し、D058が約20m東に位置している。緩斜面に構築しているため壁高は一定していない。

D059出土位置別石製遺物集計　　※上段は成品、下段は未成品

出土位置	原石	石片	品目									合計
			臼玉	勾玉	剣形	有孔円板	双孔円板	円板状	双孔円板欠損品	滑	その他	
I層	5	838	35 46	1	1	—	6	1	—	—	—	933
II層	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
III層	—	2,411	17 176	—	—	—	6 3	3	—	—	—	2,616
IV層	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
貯蔵穴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
工作ピット	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
柱穴	1	21	—	—	—	—	—	—	—	—	—	22
床	1	658	3 62	—	—	—	1	—	—	—	—	725
床下	1	54	2	—	—	—	9	—	—	—	1	67
その他	—	157	8	—	—	—	—	—	—	—	—	165
計	8	4,139	349	1	1	—	25	4	—	—	1	4,528

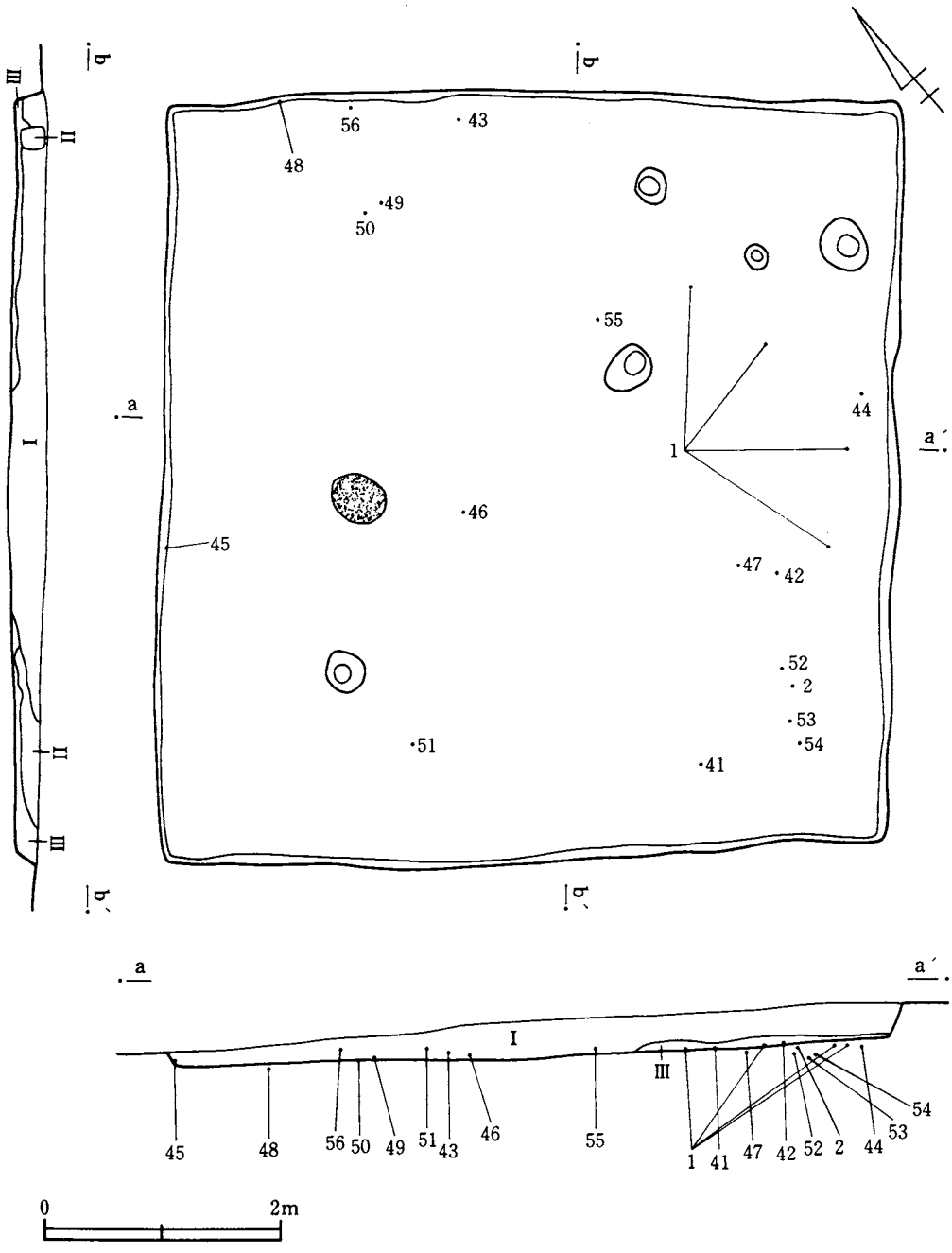


図237　D059号遺構実測図

遺構　北壁6.28m、東壁6.22mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡で、石製模造品の工房跡でもある。壁は若干の傾斜を呈し東壁で約0.3m掘り込んで床面に達している。床面は全体に堅緻な状況を呈している。床面上には小ピットを5か所にわたり検出したが柱穴になるものはない。いずれも径0.3m前後で、深さ0.25m前後である。壁溝、貯蔵穴等は検出できなかった。

炉　住居中央部より西側に偏在している。長径0.48m、短径0.38m、深さ0.12mで厚さ0.1mの焼土が堆積している。

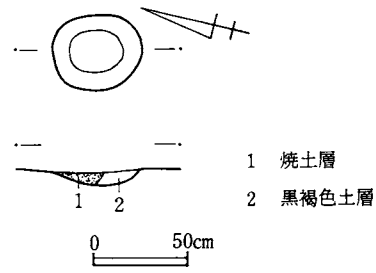


図238　D059号遺構炉跡実測図

遺物出土状況　Ⅰ層ローム粒焼土粒混入黄褐色土層、Ⅱ層炭化物焼土粒混入黒褐色土層、Ⅲ層黄褐色土層が堆積しており、遺物は床面近くの各層より出土している。石製遺物は住居東側の床面および、Ⅰ、Ⅲ層、そして貼り床より出土している。

出土遺物　遺物は、甕、甑形土器と石製品がある。甕形土器は1の底部破片である。甑形土器は2の底部破片で単孔である。石製品は3～56で、いずれも滑石製である。3～29は臼玉、

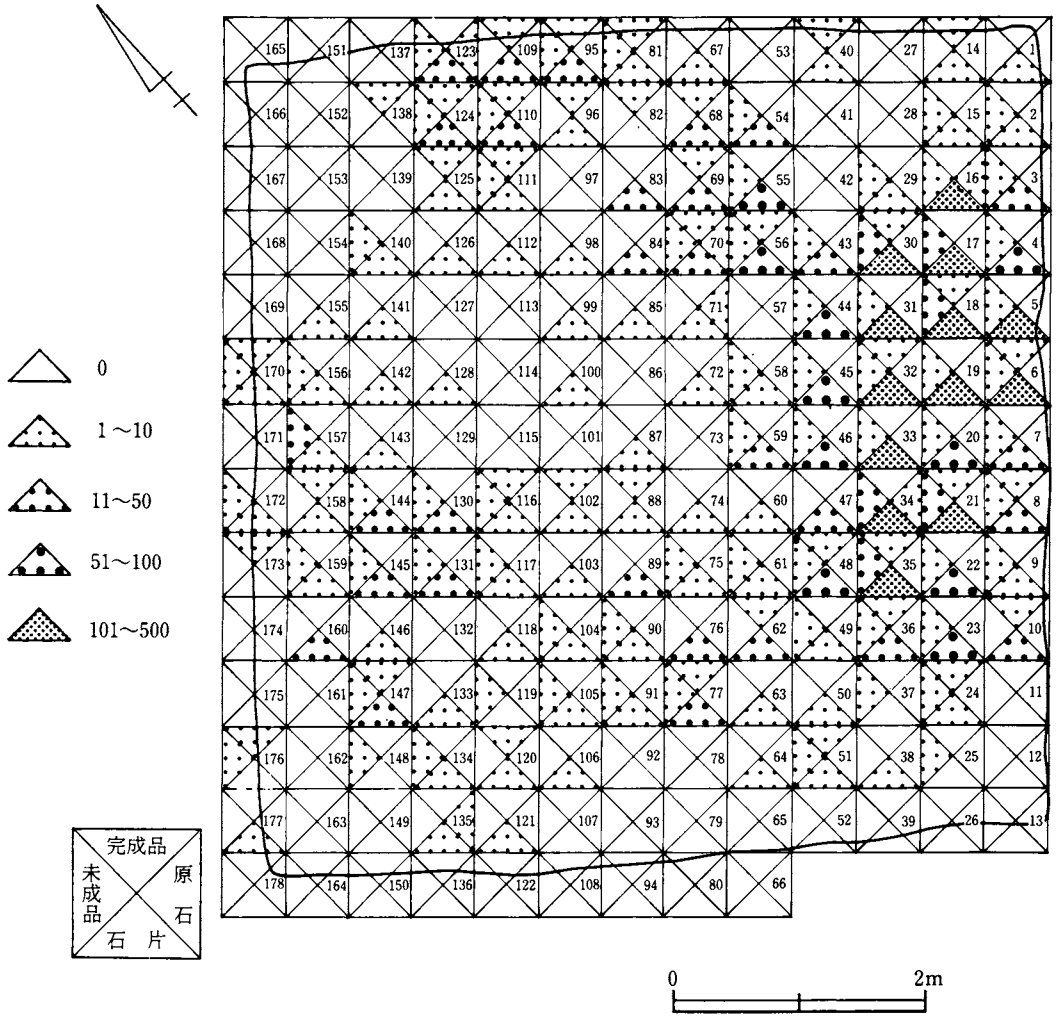


図239　D059号遺構石製遺物平面分布模式図

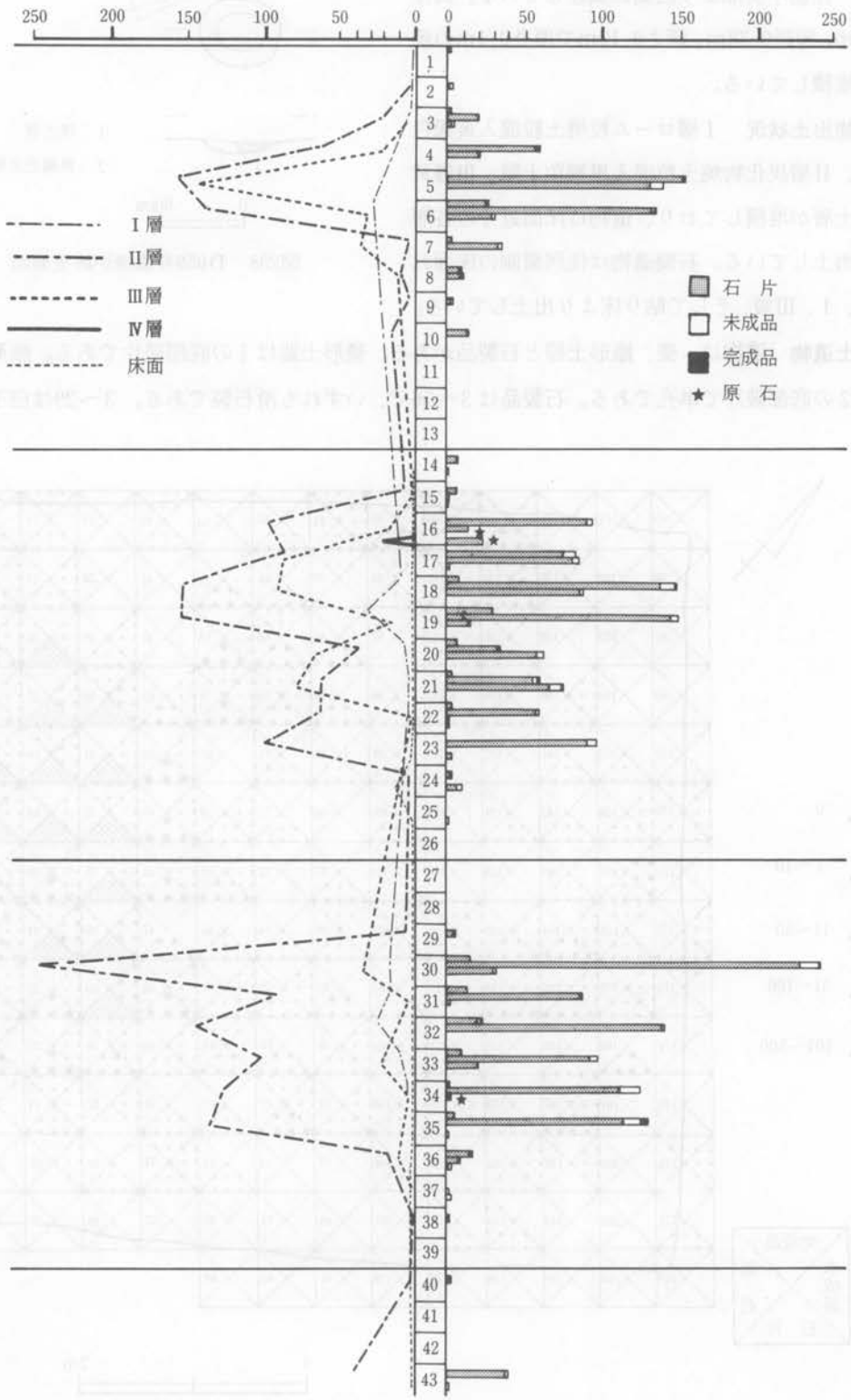


図240 D059号遺構石製遺物層位別分布図(1)

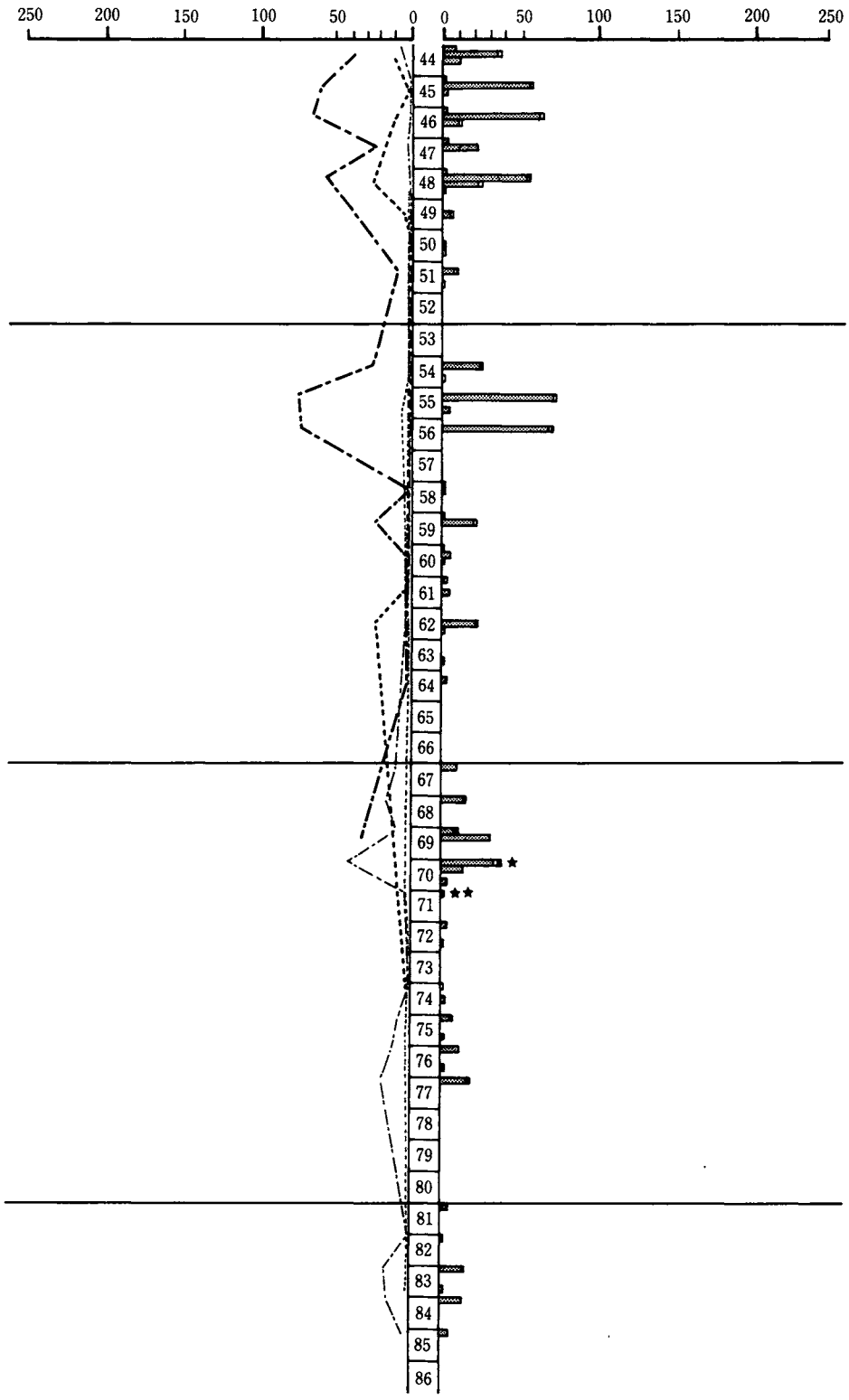


図241 D059号遺構石製遺物層位別分布図(2)

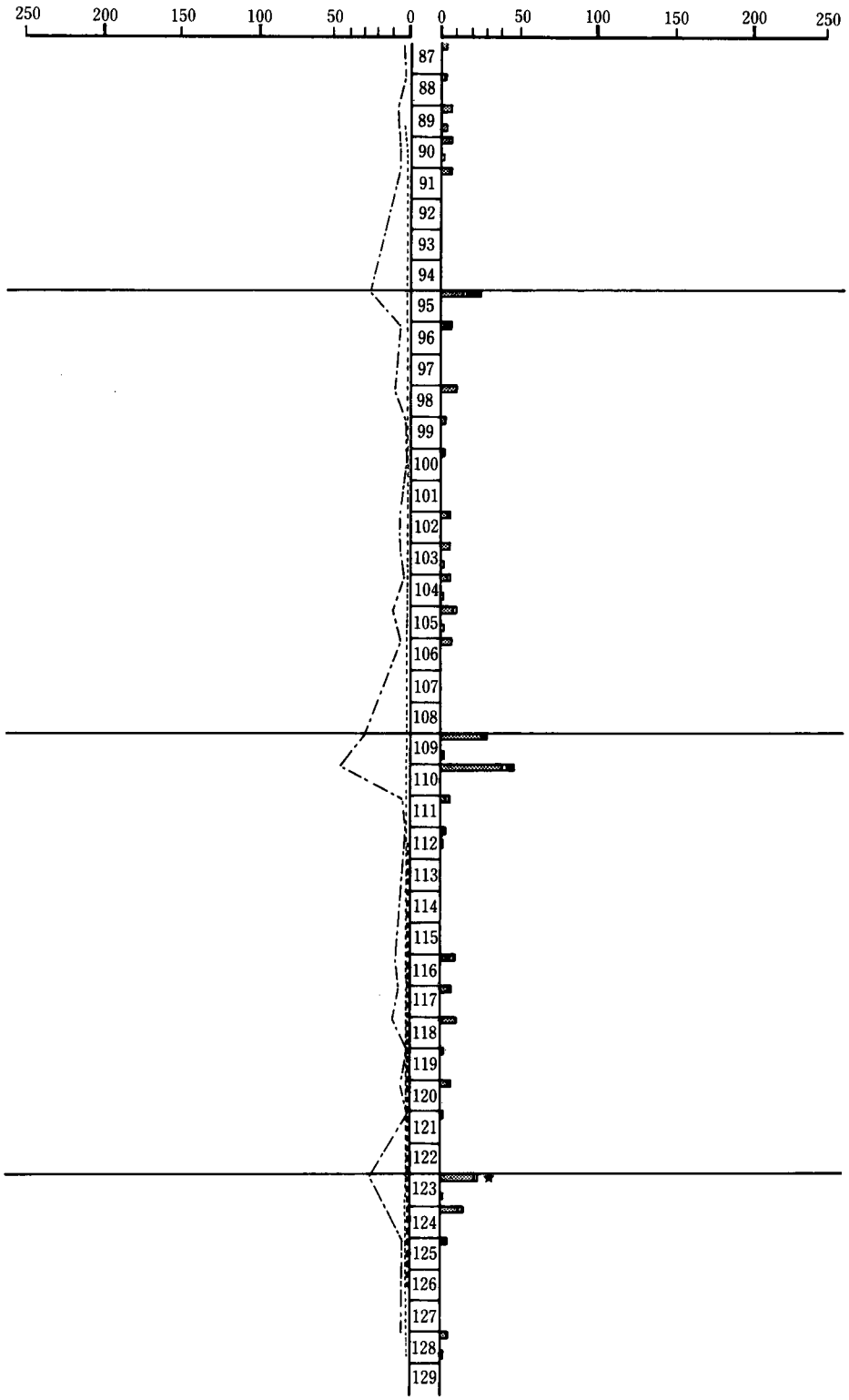


図242 D059号遺構石製遺物層位別分布図(3)

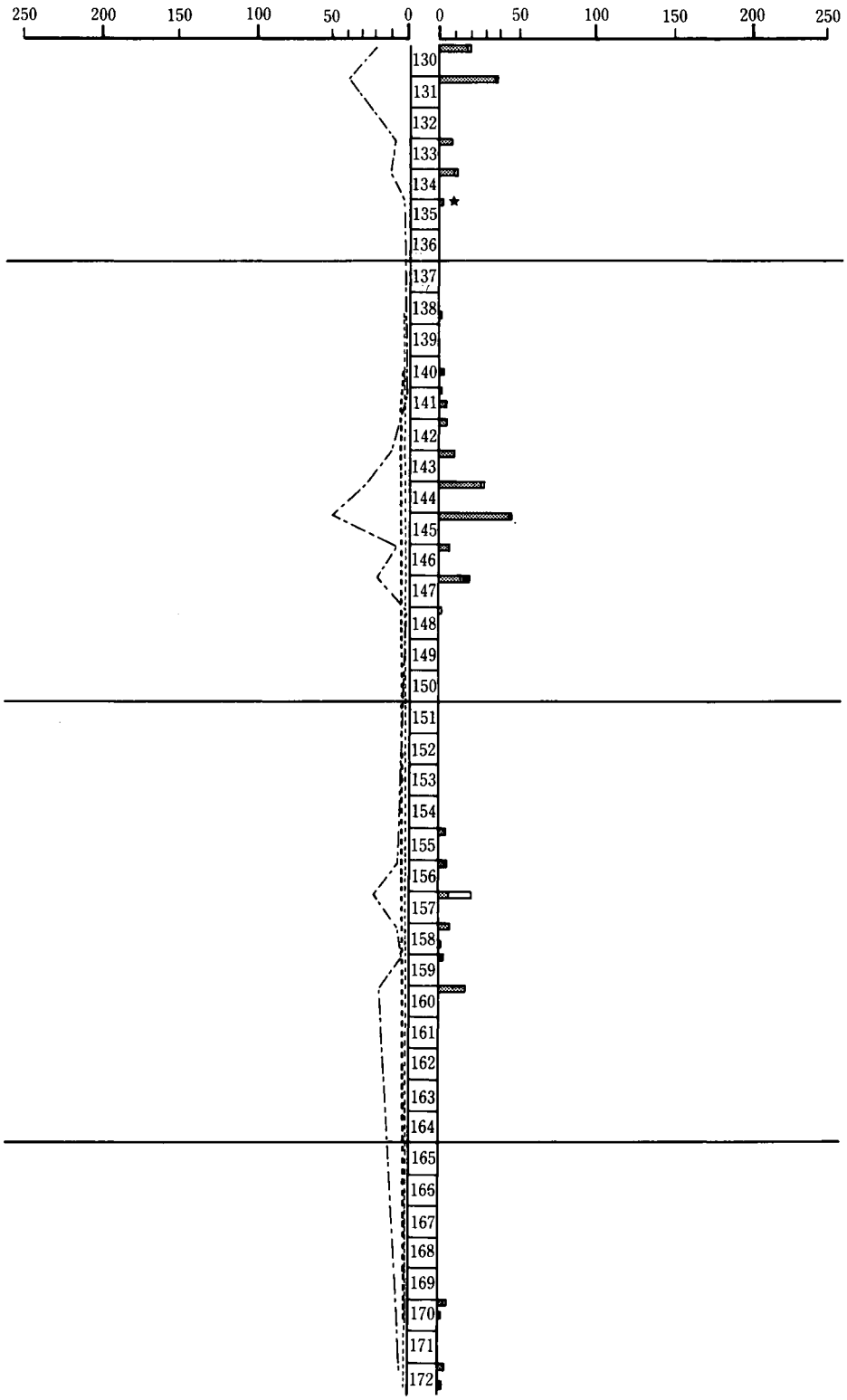


図243 D059号遺構石製遺物層位別分布図(4)

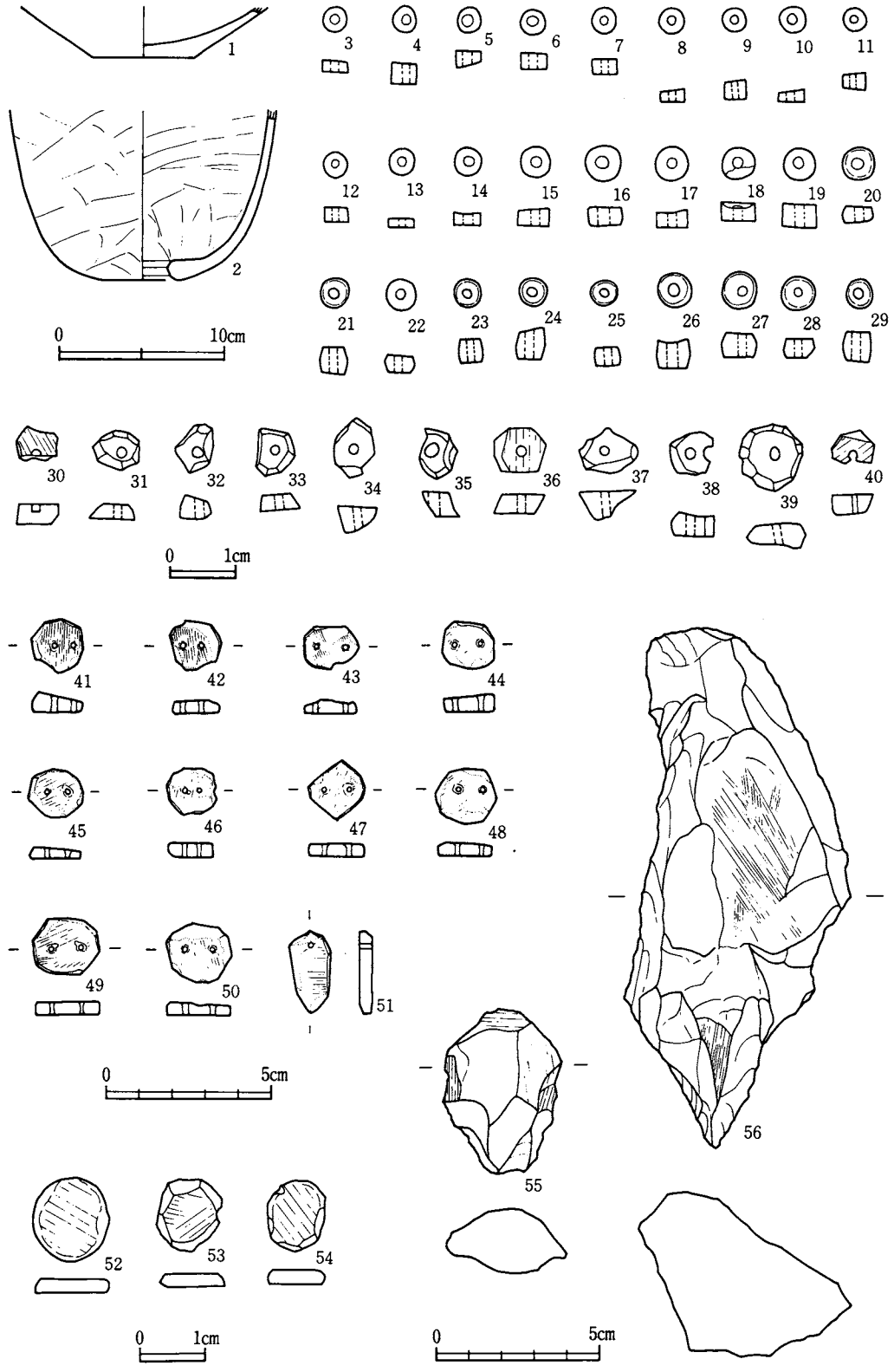


図244　D059号遺構出土遺物実測図

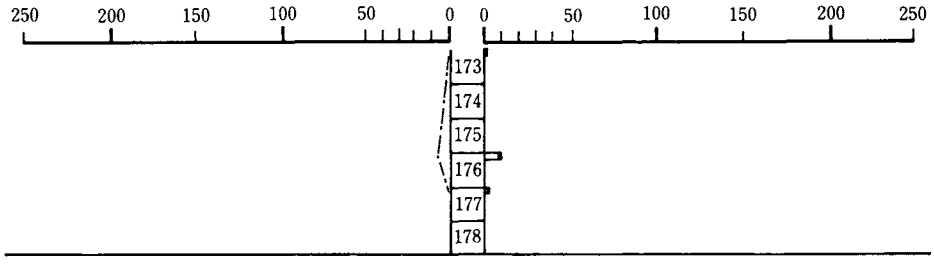


図245 D059号遺構石製遺物層位別分布図(5)

30～40は臼玉未成品および欠損品、41～50は双孔円板である。51は剣形品である。52～54は双孔円板の未成品と思われる。55、56は原石でいずれも整痕が認められる。

D059出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	6.2	底部のみ	—	砂粒	堅緻	黒褐色	
2	甑	—	—	—	½	ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	

13. **D080号遺構**（図246～251、図版38－3、43）

III群の住居群内において南西部分に位置し、最も近く位置するD059は約40mも離れ、単独に位置するかのような状況を呈している。緩斜面に構築しているため壁高は一定しておらず、北東壁コーナー部分、北西壁コーナー部分は明瞭に把握できない。

遺構　南壁5.03m、西壁推定5.0mの規模で、長方形の平面形を呈するものと思われる竪穴住居跡で、石製模造品の工房跡でもある。壁は傾斜を呈し0.15m掘り込んで床面に達する。床面は軟弱で踏み固められたような状況は認められない。南西壁コーナー部分に近く2か所にピットを検出した。いずれも径0.45m、深さ0.20m前後であるが、貯蔵穴や工作用ピットとの判断

D080出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	25.2	17.0	6.8	¾	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
2	甕	23.5	(14.2)	9.7	½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	黒褐色	
3	甕	—	—	7.0	底部破片	ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
4	甕	—	—	—	胴部 ½	ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒褐色	

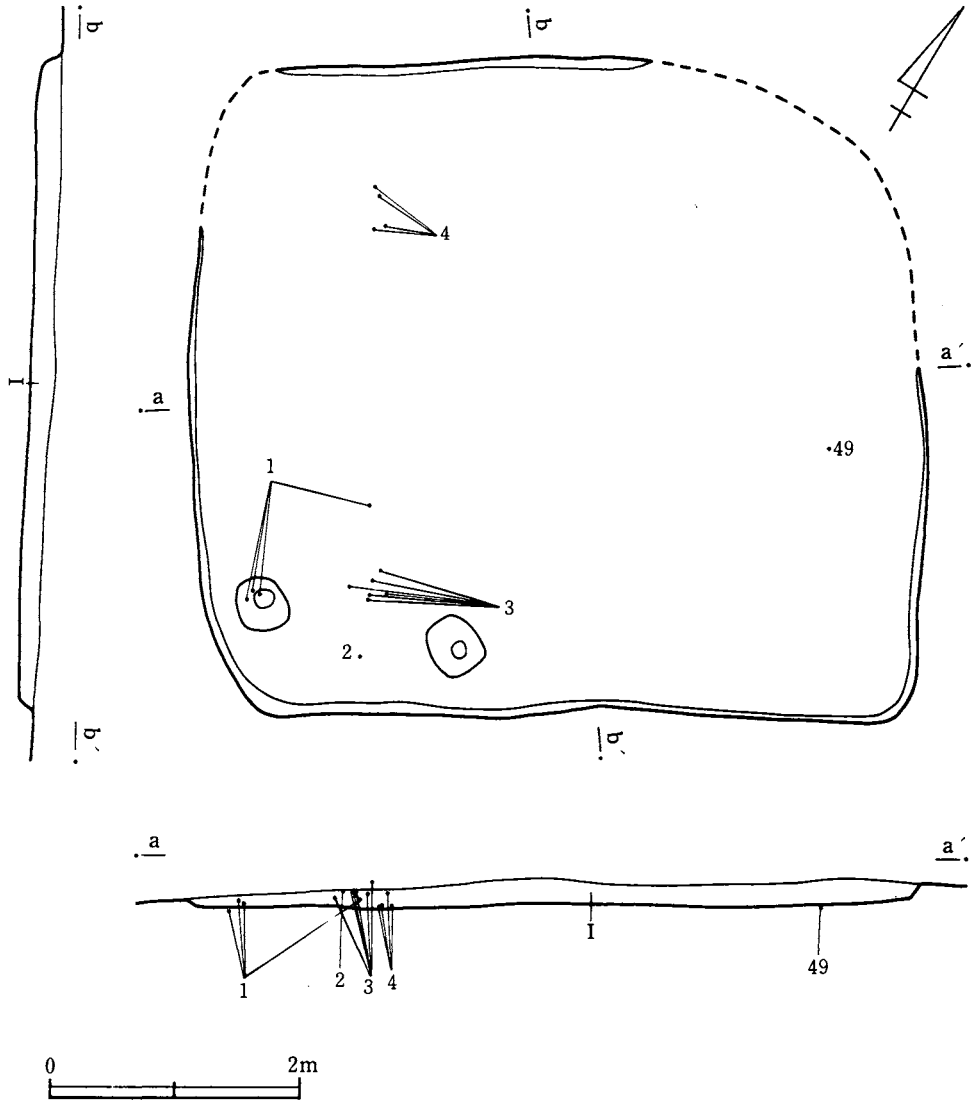


図246　D080号遺構実測図

はできない。柱穴、壁溝は認められない。

遺物出土状況　黒褐色土層の単一層で遺物は上部より出土している。石製遺物は一部床面上出土のものが認められるものの、大多数はⅠ層中の出土で、住居南側に偏在する傾向が窺える。

出土遺物　遺物は、甕形土器と鉄製品がある。甕形土器は1～4で、1、2は口縁部がほぼ直立する形状を呈す。3は底部、4は胴部破片である。鉄製品は5で刀子の柄の部分である。石製品は6～52で、いずれも滑石製である。6～19は臼玉、20～52は臼玉未成品および欠損品である。

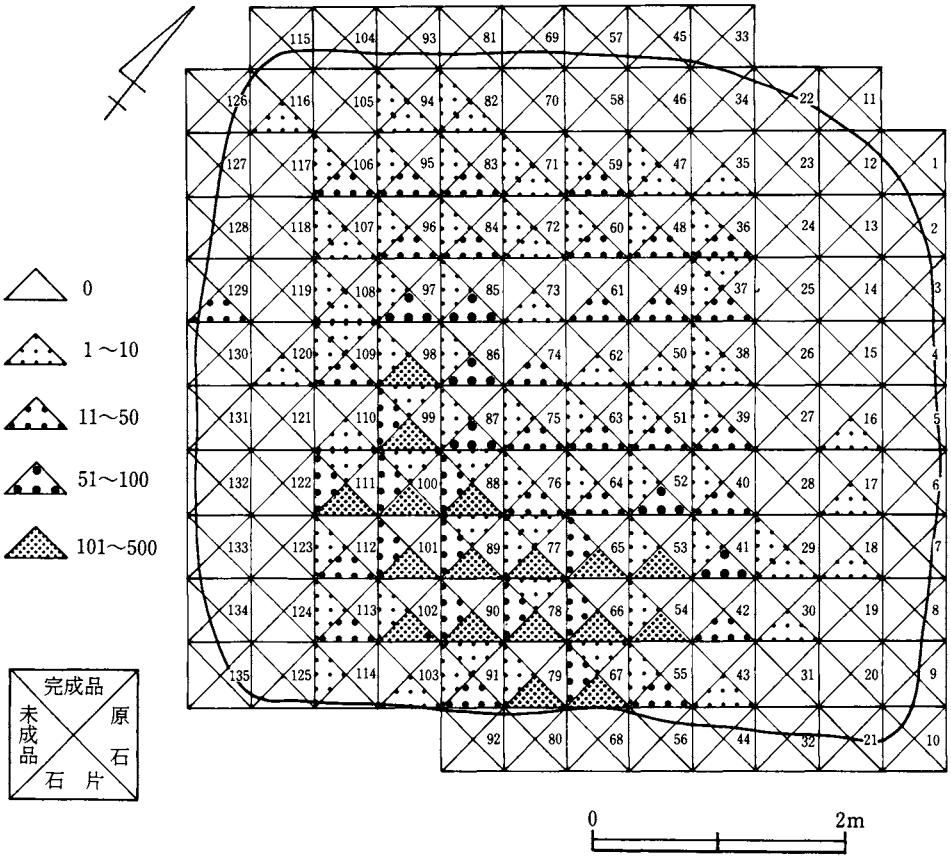


図247 D080号遺構石製遺物平面分布模式図

D080出土位置別石製遺物集計　　※上段は成品、下段は未成品

出土位置	原石	石片	品目 臼玉	勾玉	剣形	有孔円板	双孔円板	円板状	双孔円板欠損品	勝	その他	合計
I 層	—	4,447	18 303	—	—	—	—	—	—	—	—	4,768
II 層	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
III 層	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
IV 層	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
貯蔵穴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
工作ピット	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
柱穴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
床	—	271	25	—	—	—	—	—	—	—	—	296
床下	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
その他	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	—	4,718	346	—	—	—	—	—	—	—	—	5.064

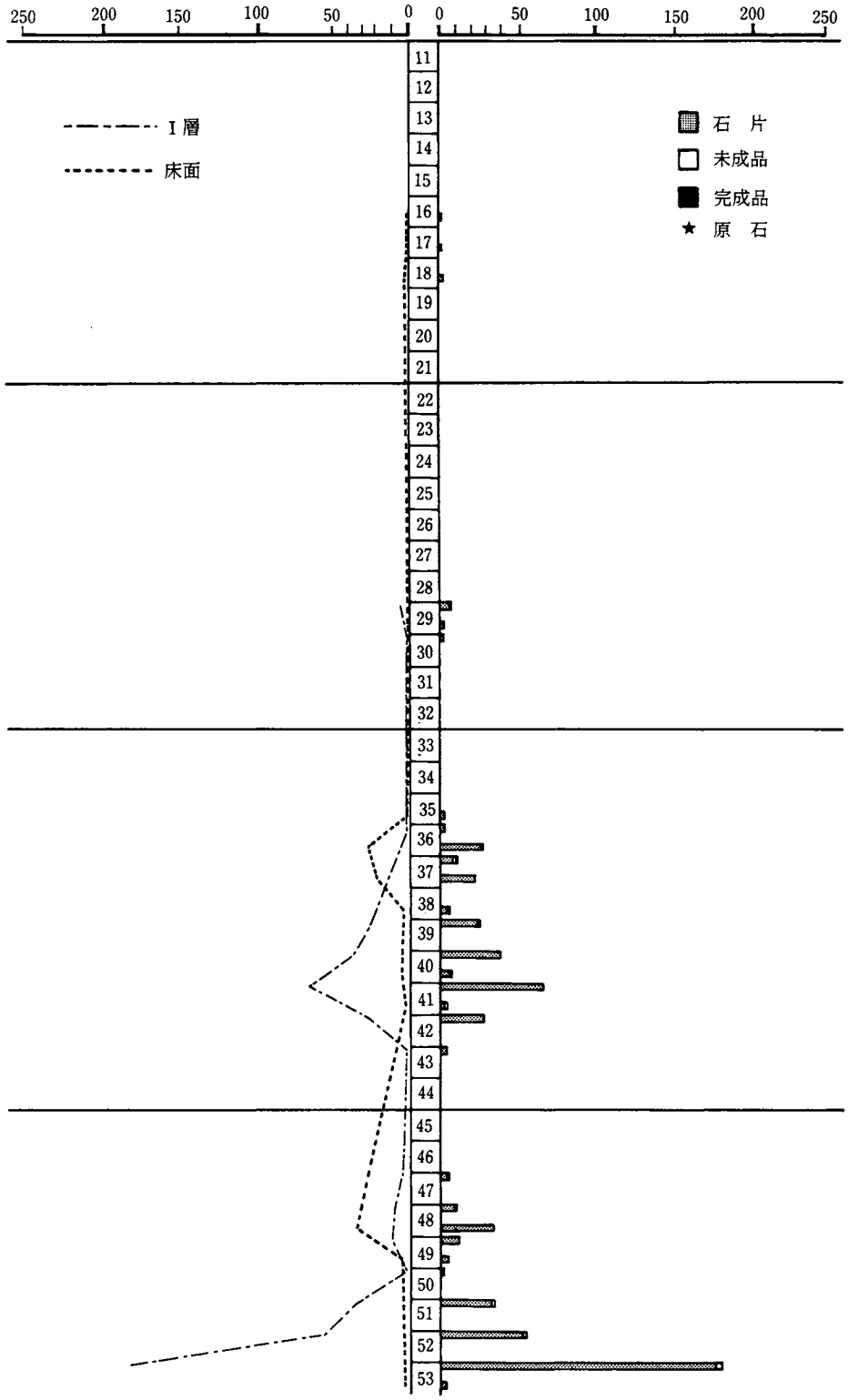


図248 D080号遺構石製遺物層位別分布図(1)

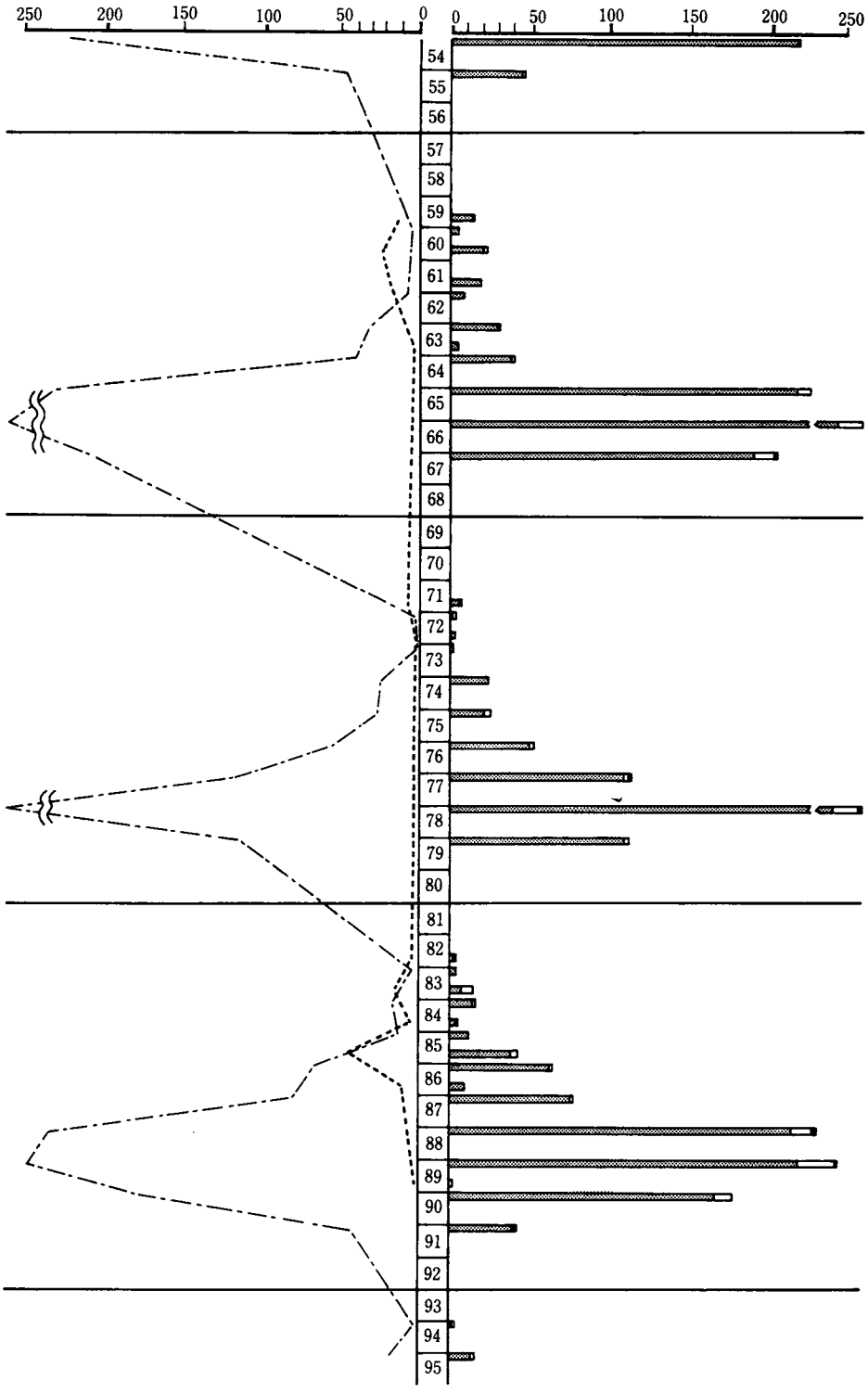


図249 D080号遺構石製遺物層位別分布図(2)

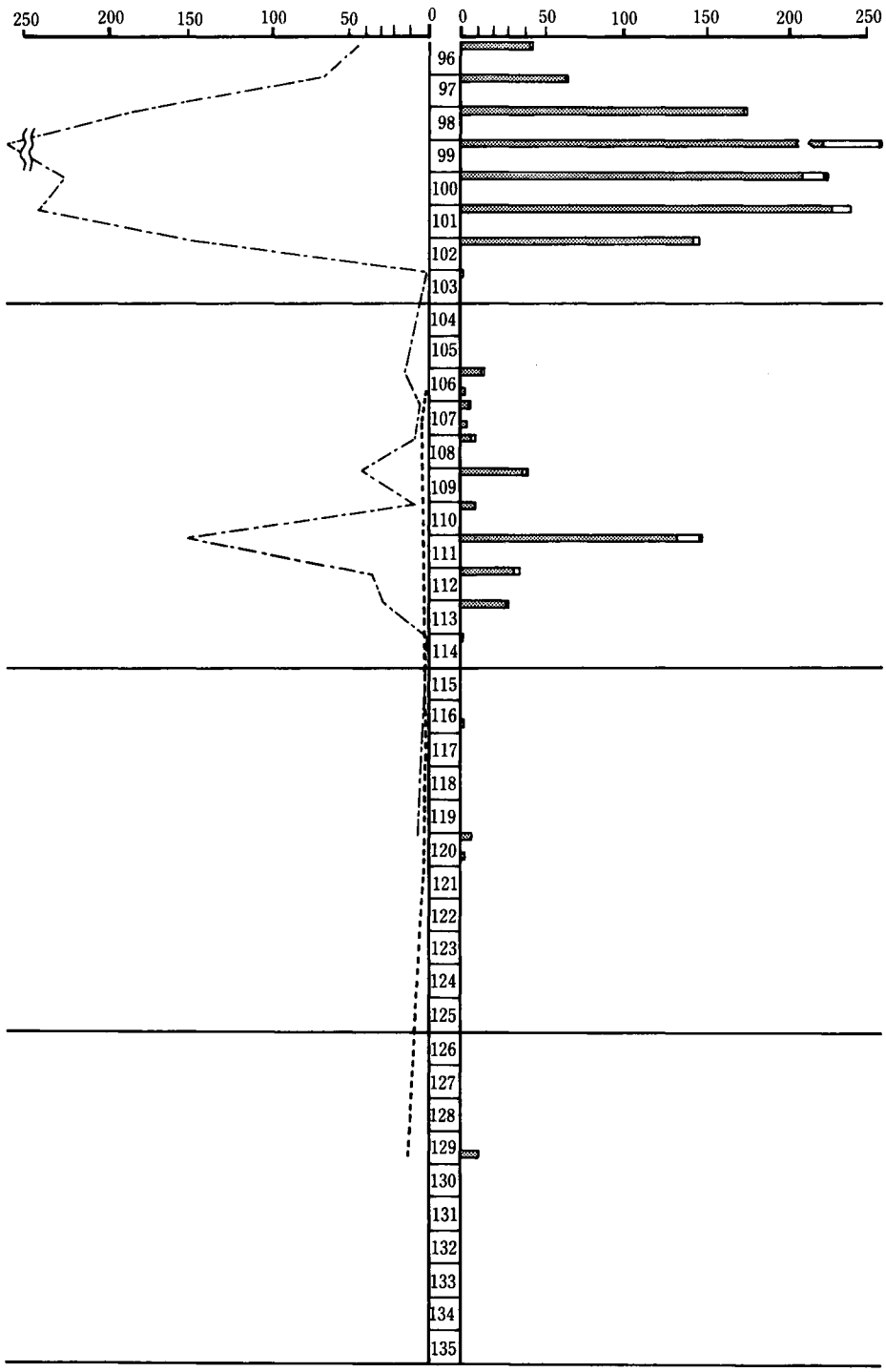


図250 D080号遺構石製遺物層位別分布図(3)

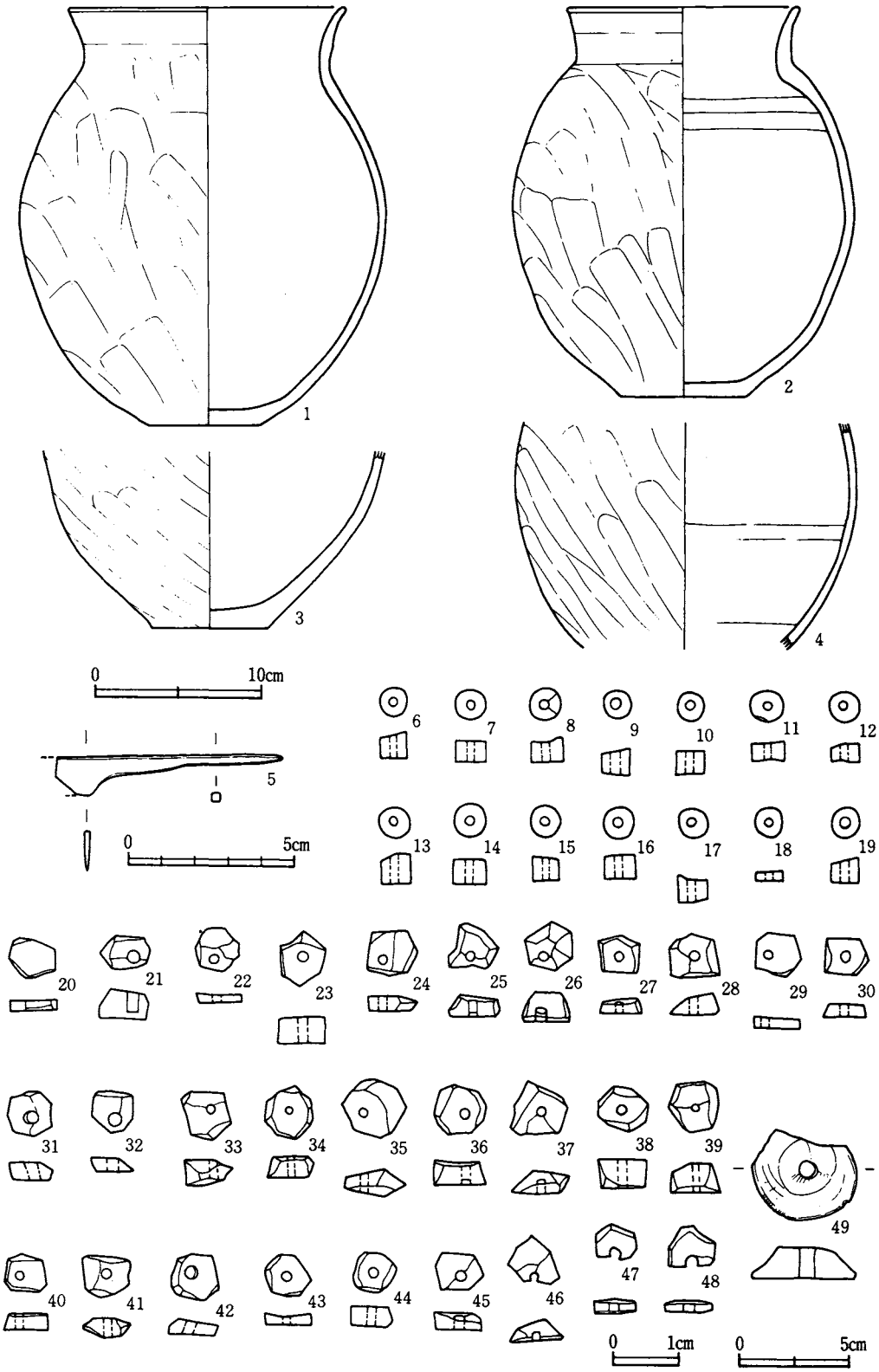


図251　D080号遺構出土遺物実測図

第5節　第IV群の遺構と遺物

古墳時代中期の第IV群は、竪穴住居跡2軒で構成される群で、T－5地域において検出した。

第IV群が位置する地域は東側の地区界に近く、古墳時代後期や歴史時代の住居群も立地しており、D036は歴史時代のD035に重複切断されていたり、芋穴状の攪乱を受けているため遺存状況はきわめて悪い。

地区界に沿って未調査部分があるため第IV群の住居の広がりが充分考えられるところであるが、第II群や第V群などにおける住居の分布するあり方を見れば、この2軒で完結している群とも判断できる可能性を有している。

2軒の住居は、ほぼ南北方向に位置しており、第II群の状況とは異なっている。D039が方形の整然とした平面形を呈し主柱穴を配置しているなどD036と対比すると、規模や構造においてかなり相違する点が認められる。

D039は石製模造品関係の遺物を出土しているが、具体的に工房跡であるという検証はできていないが、何らかの形で模造品生産に関係していたと思われる（図252）。

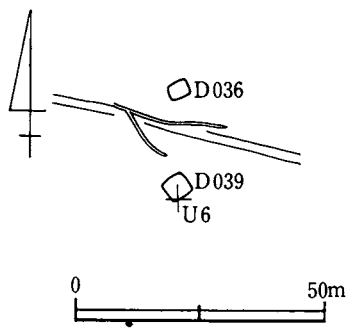


図252 古墳時代中期第IV群遺構分布状況図

1．D036号遺構（図253～255、図版43－1、44）

IV群内で北側に位置し、歴史時代D035に重複切断されている。さらに芋穴状の攪乱を受けているため遺存状況は悪い。

D036出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	－	(15.95)	－	破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	
2	甕	－	－	6.9	底部 ½	ヘラ削り	雲母砂粒	堅緻	黒褐色	
3	坩	－	－	－	¾	ヘラ削り	小石	やや軟弱	黒褐色	
4	坏	5.6	(16.7)	－	½	ヨコナデ	－	堅緻	赤褐色	
5	坏	－	16.1	－	¾	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
6	坏	5.6	13.6	－	完形	ヨコナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	赤彩
7	坏	5.7	(15.1)	－	½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
8	坏	8.0	(16.1	－	½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
9	高坏	－	－	－	接合部のみ	－	砂粒	堅緻	赤褐色	赤彩

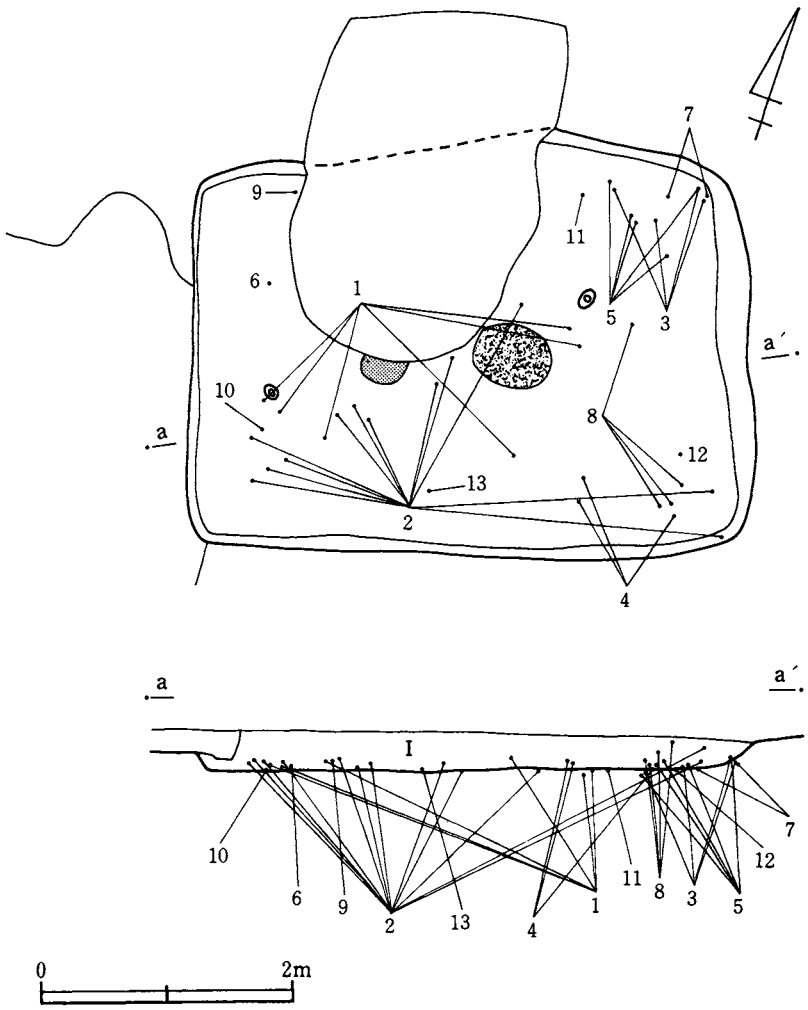


図253 D036号遺構実測図

遺構　北壁4.24m、東壁3.23mで長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はかなり傾斜を呈し0.25m掘り込んで床面に達している。床面は全体に堅緻な状況を呈している。床面上には小ピットを2か所に検出したが径0.1m程度のものである。柱穴、壁溝は検出できなかった。

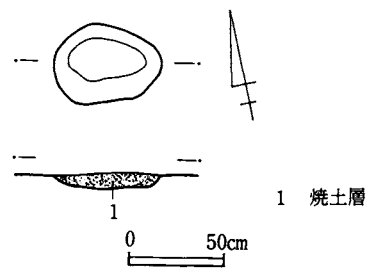


図254 D036号遺構炉跡実測図

炉　住居中央部より若干東に偏在している。長径0.55m、短径0.4m、深さ0.08mで厚さ0.08mの焼土が堆積している。炉の西側に焼土の範囲を検出したが炉ではない。

遺物出土状況　黒褐色土層の単一層で、遺物は床面上をはじめ覆土中に散在して出土してい

る。

出土遺物　遺物は、甕、坩、坏、鉢、高坏形土器と石製品がある。甕形土器は１、２で１は直立ぎみに開く口縁部を呈し、２は長胴を呈しているが中位上半は欠損している。坩形土器は３で胴部はかなり扁平で、口縁部は直線的に開くと思われる。坏形土器は４～７で、４は内彎ぎみに開く体部を呈し、５～７は屈曲を呈してほぼ直立する体部を呈している。鉢形土器は８で体部は曲線的に大きく開く。高坏形土器は９で坏と脚の接合部分である。石製品は10～13で、10は安山岩製の敲石で一端に使用痕が認められる。11は臼玉、12、13は臼玉未成品である。

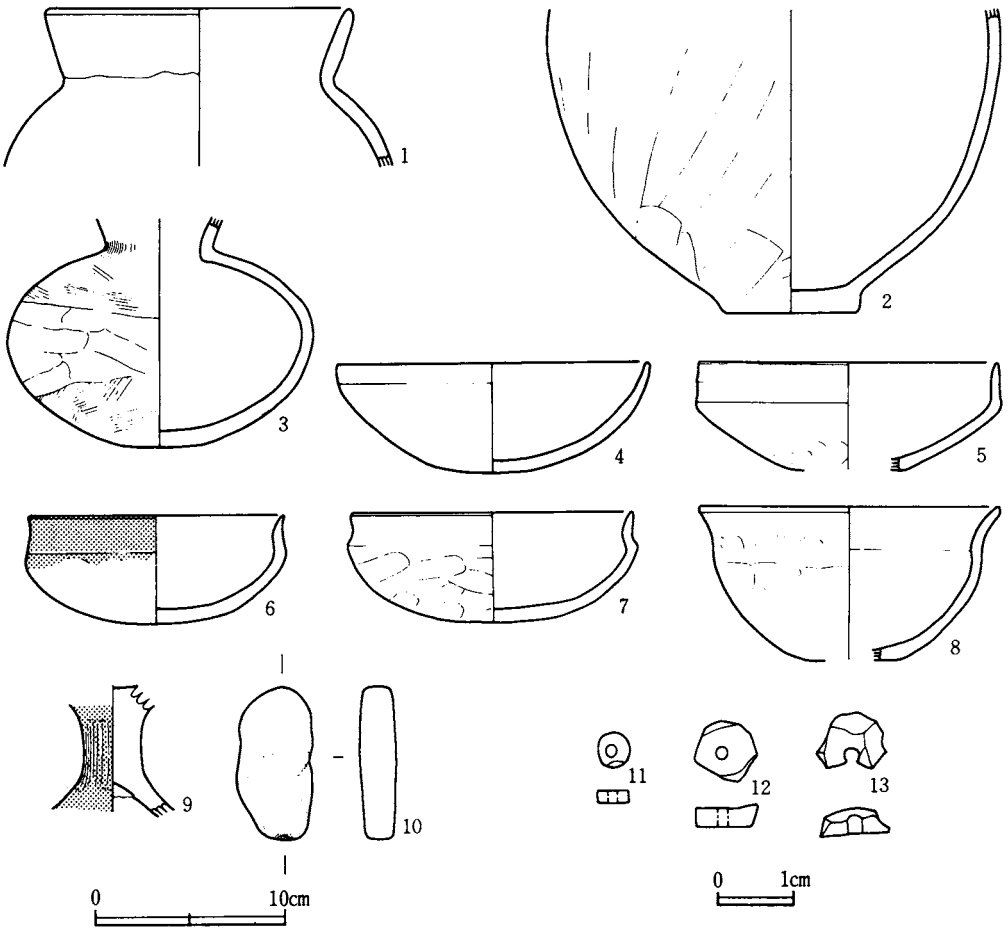


図255　D036号遺構出土遺物実測図

２．D039号遺構（図256～262、図版44－１・２、45）

IV群内で南側に位置し、D036とは約20mの距離を有している。

遺構　北壁4.61m、東壁4.35mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡で、石製模造品の工房跡でもある。壁はほぼ垂直に0.56m掘り込んでおり、直下には幅0.22m、深さ0.05mを計る壁溝

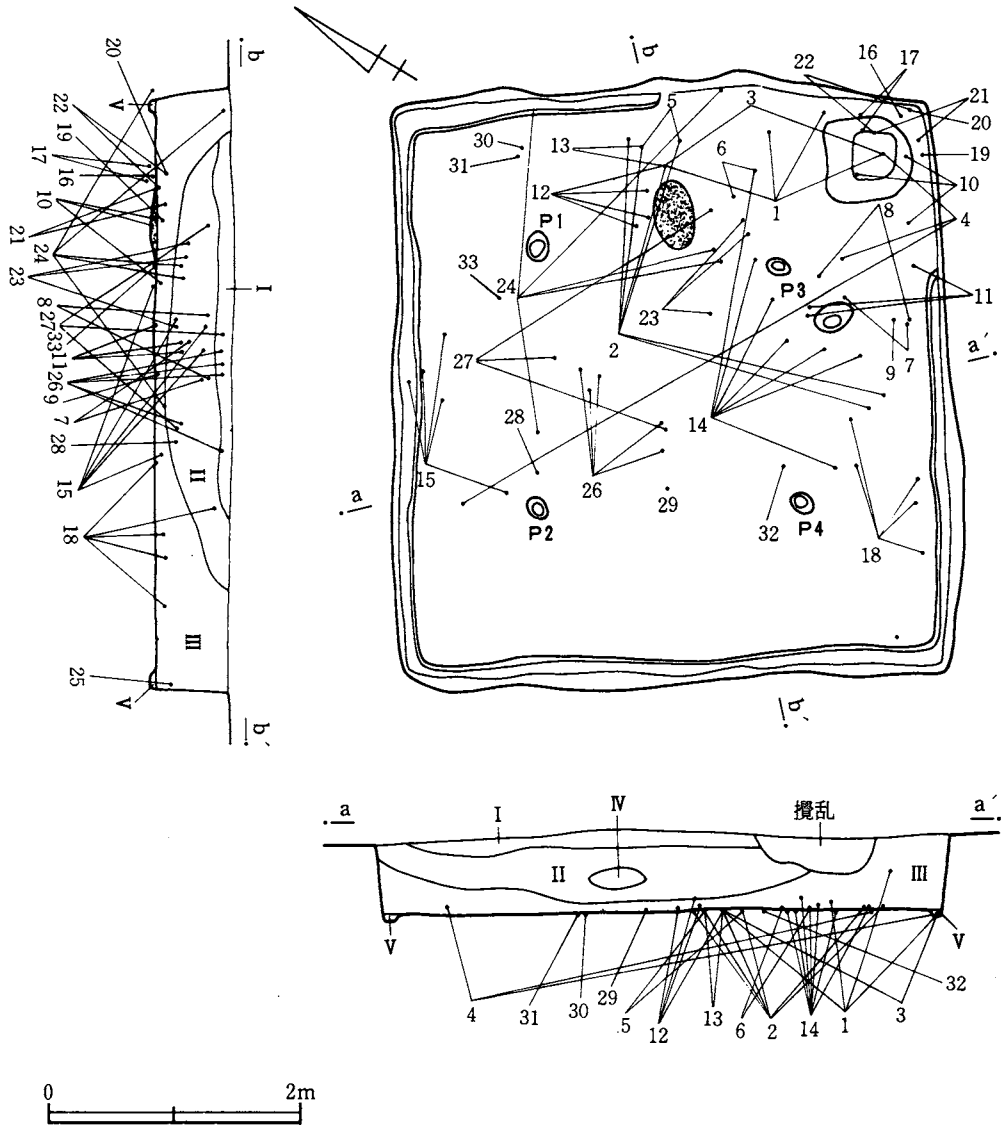


図256 D039号遺構実測図

が南東壁コーナー部分を除いて認めることができる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上にあり、P_1～P_4を検出した。いずれも径0.17m～0.31m、深さ0.45m前後である。貯蔵穴、工作用ピットは検出できなかった。

炉　住居中央部より東壁に偏在している。長径0.65m、短径0.3m、深さ0.1mで厚さ0.06mの焼土を堆積している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層ロ

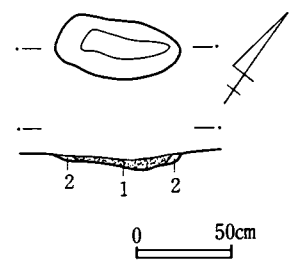


図257 D039号遺構炉跡実測図

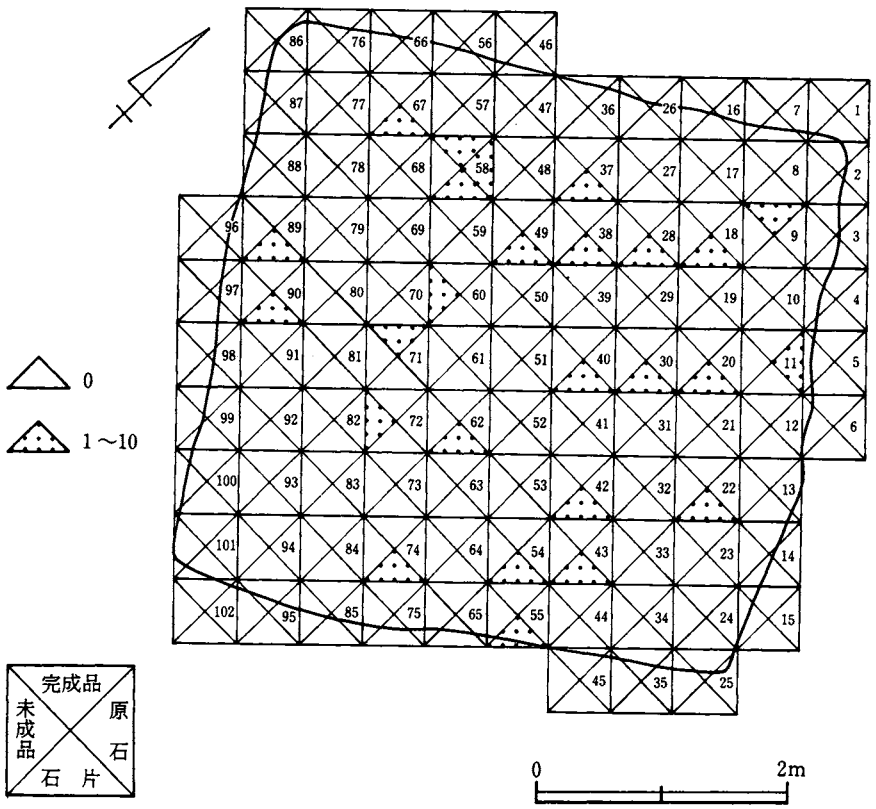


図258 D039号遺構石製遺物平面分布模式図

D039出土位置別石製遺物集計　　※上段は成品、下段は未成品

出土位置	原石	石片	品目 臼玉	勾玉	剣形	有孔円板	双孔円板	円板状	双孔円板欠損品	滕	その他	合計
I 層	—	8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8
II 層	—	12	—	—	—	—	1	—	—	—	—	13
III 層	3	15	3 1	—	—	—	—	—	—	—	—	22
IV 層	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
貯蔵穴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
工作ピット	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
柱穴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
床	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1
床下	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
その他	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	3	35	5	—	—	—	1	—	—	—	—	44

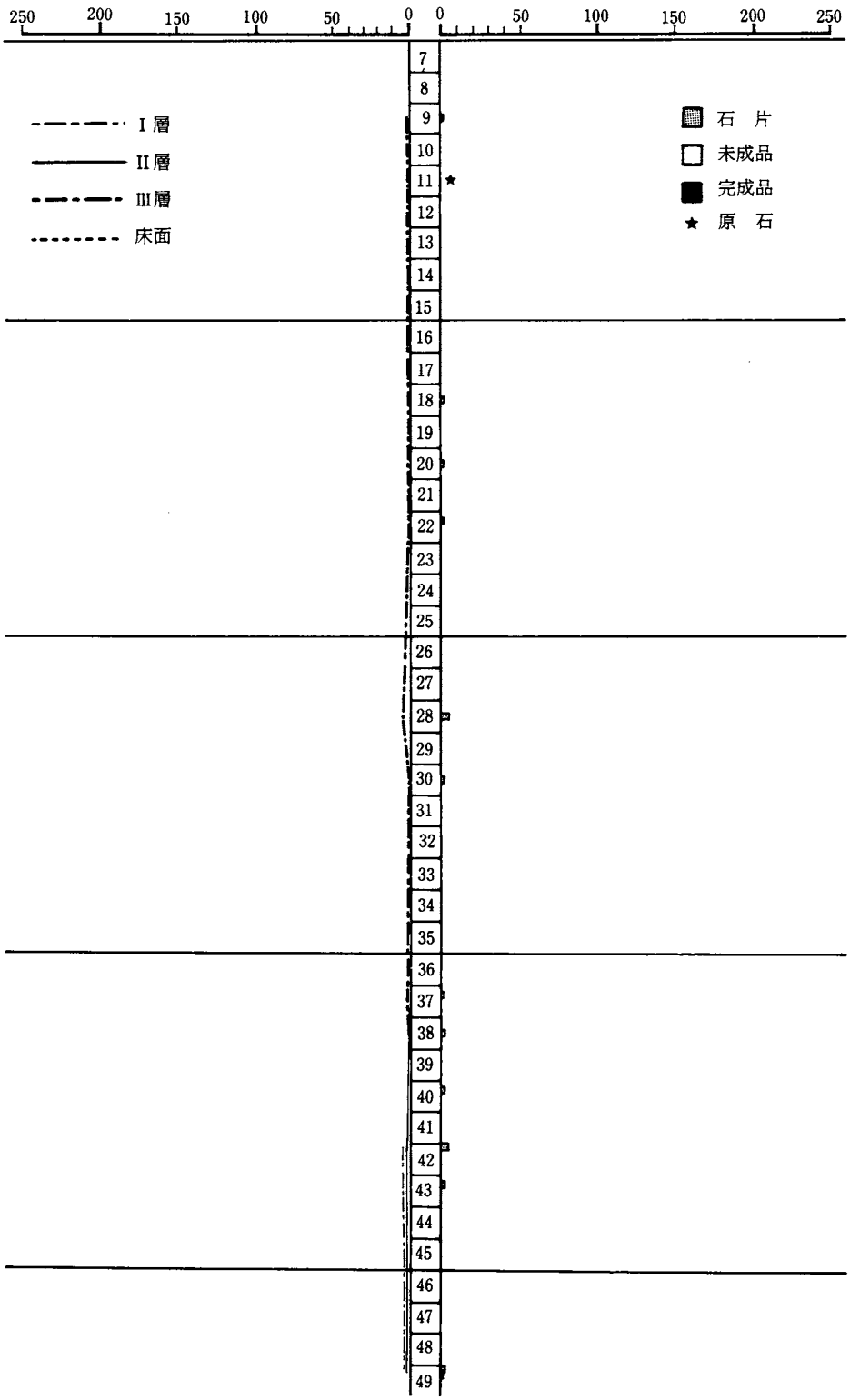


図259 D039号遺構石製遺物層位別分布図(1)

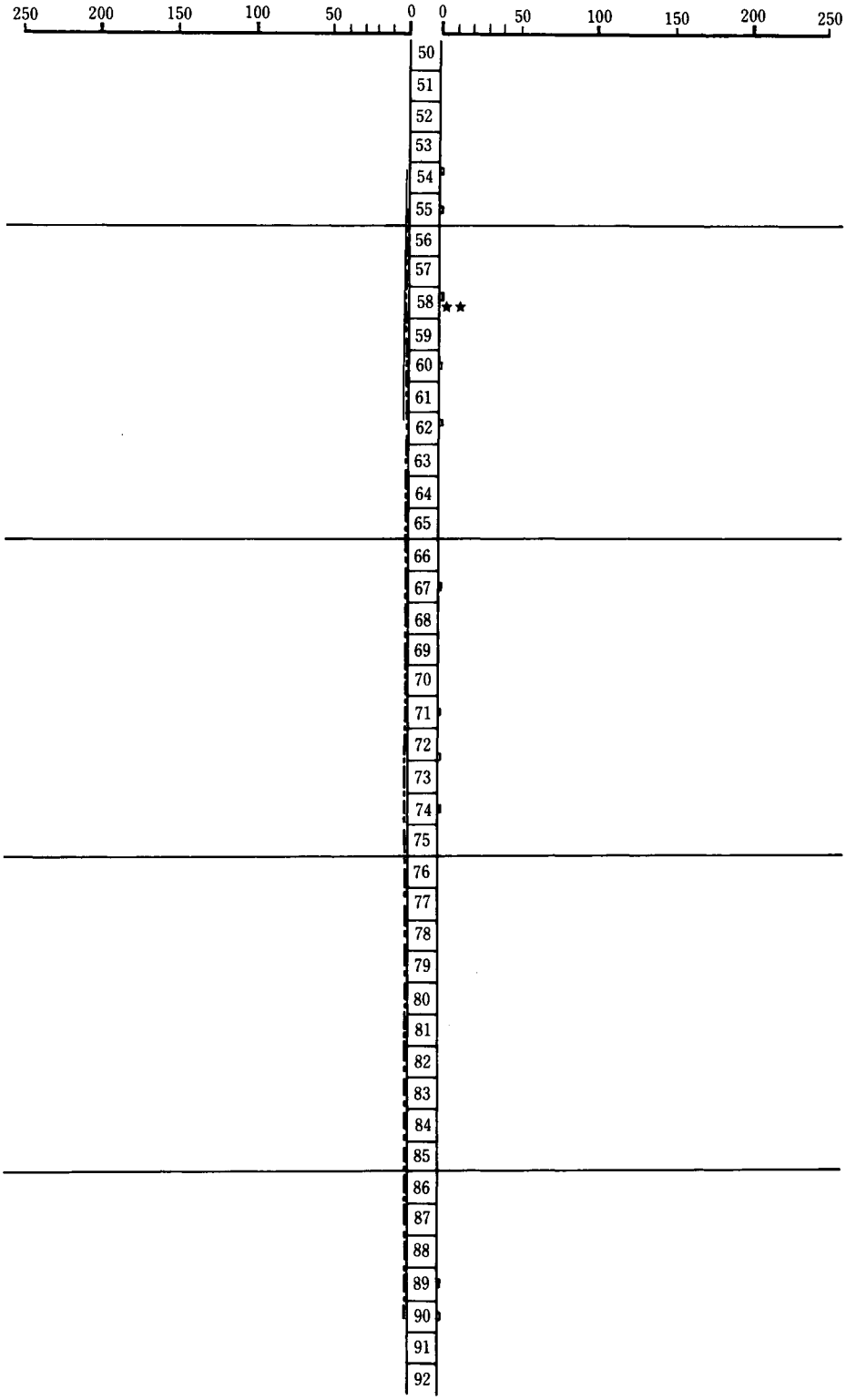


図260 D039号遺構石製遺物層位別分布図(2)

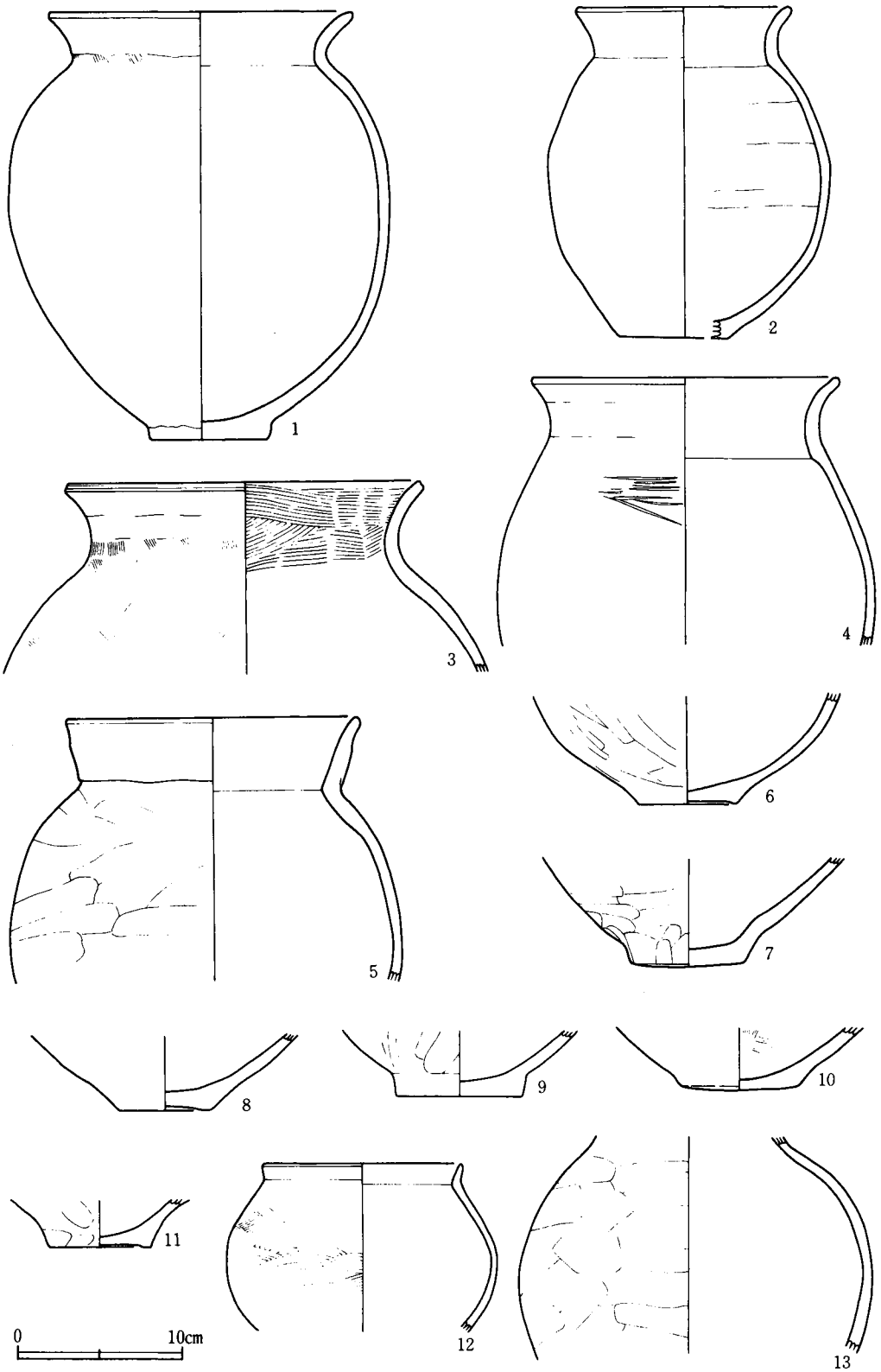


図261 D039号遺構出土遺物実測図(1)

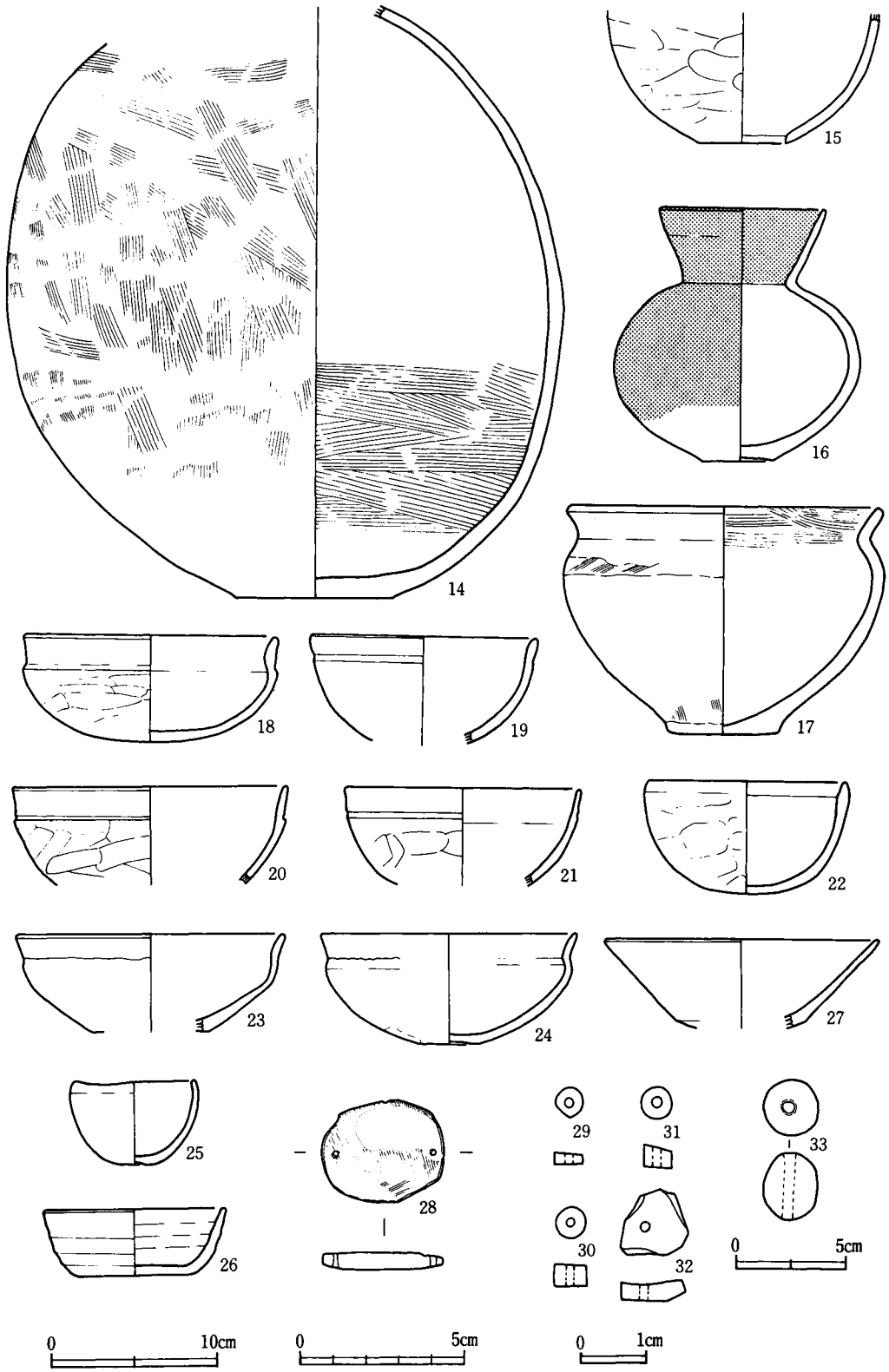


図262 D039号遺構出土遺物実測図(2)

ーム粒混入黒褐色土層、Ⅳ層ロームブロック層、Ⅴ層茶褐色土層が堆積しており、遺物は床面上を中心に各層より出土している。石製遺物は、Ⅲ層を中心に住居全体より出土している。

出土遺物　遺物は、甕、甑、坩、鉢、坏、高坏形土器と石製品、土製品がある。甕形土器は1～14で、1～4は緩やかに外反する口縁部を呈している。5は「く」字状に外反する口縁部を呈している。6～11は底部破片である。12は短い口縁を呈し、胴部は球形に近い。13、14は胴部のみで口縁部等は欠損している。甑形土器は15の底部破片で、単孔である。坩形土器は16で胴部は球形を呈し、口縁部は直線的に開く形状を呈している。鉢形土品は17で口縁部が短かく「く」字状に外反する。坏形土器は18～26で、18～24は口縁部が直立するものと若干外反するものがある。25は手捏で、26は歴史時代の土器で体部が直立ぎみに開く形状を呈している。高坏形土器は27の坏部の破片である。石製品は28～30で、28は双孔円板、29～31は臼玉、32は臼玉未成品である。33は土玉で中央に 0.4 cm の孔があく。

D039出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	25.9	18.6	7.1	½	ヨコナデ ハケ目	砂粒	堅緻	黒褐色	
2	甕	20.0	13.2	6.6	⅔	ヨコナデ	砂粒 小石	堅緻	茶褐色	
3	甕	—	22.0	—	口縁部のみ	ヨコナデ ハケ目	砂粒	堅緻	茶褐色	
4	甕	—	18.9	—	½	ヨコナデ	砂粒	堅緻	黒褐色	肩部に切り込み痕
5	甕	—	18.1	—	½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
6	甕	—	—	5.95	底部のみ	ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
7	甕	—	—	6.6	底部のみ	ヘラ削り	雲母 砂粒	堅緻	黒褐色	
8	甕	—	—	5.5	底部のみ	—	砂粒	堅緻	黒褐色	
9	甕	—	—	7.8	底部のみ	ヘラ削り	砂粒	堅緻	(内)黒褐色 (外)赤褐色	木葉痕
10	甕	—	—	7.1	底部のみ	—	砂粒 雲母	堅緻	(内)赤褐色 (外)黒色	
11	甕	—	—	6.25	底部のみ	ヘラ削り	砂粒	堅緻	(内)赤褐色 (外)黒色	
12	甕	—	(12.4)	—	⅓	ヨコナデ ハケ目	砂粒	堅緻	黒褐色	
13	甕	—	—	—	胴部のみ	ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
14	甕	—	—	9.5	¾	ハケ目	砂粒 雲母	堅緻	茶褐色	
15	甑	—	—	(5.3)	⅓	ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
16	坩	15.1	10.2	4.3	完形	ヨコナデ	砂粒	やや堅緻	赤褐色	赤彩
17	鉢	13.6	(19.4)	6.8	⅓	ヨコナデ ハケ目	砂粒	堅緻	黒褐色	
18	坏	6.4	(15.6)	—	½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
19	坏	—	(14.1)	—	⅓	ヨコナデ	砂粒	やや軟弱	黒褐色	
20	坏	—	(16.8)	—	⅓	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	赤褐色	
21	坏	—	(14.6)	—	⅓	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
22	坏	6.7	12.1	—	完形	ヨコナデ ヘラ削り	小石 砂粒	やや軟弱	茶褐色	

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
23	坏	—	(16.5)	—	¼	ヨコナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	
24	坏	3.7	(15.9)	6.6	⅕	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
25	坏	—	(17.3)	—	½	—	砂粒	堅緻	黒褐色	
26	坏	3.9	(11.2)	(7.6)	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
27	高坏	—	(16.8)	—	¼	ナデ	砂粒	堅緻	(内)黒褐色 (外)茶褐色	

第6節　第Ⅴ群の遺構と遺物

古墳時代中期の第Ⅴ群は、竪穴住居跡2軒で構成される群で、U－4地域において検出した。

第Ⅴ群が位置する地域は東側の地区界に近く、古墳時代後期や歴史時代の住居群も立地しており、D077は歴史時代のD003に重複切断されているために遺存状況は良好とは言えない。

地区界に沿った東側の地域は調査対象外となっているため、この2軒をもってすべての住居を検出したとは断定できないが、第II群や第III群などにおける住居の分布する状況から察すれば、ほぼこの2軒で完結している群と考えて差し支えないであろう。

2軒の住居は、第IV群で見られたように南北方向に位置しており、約4mの距離を有している。住居の規模や内部構造はかなり相違点が認められ、第IV群において認められた傾向と同様であることが指摘できる。さらに、指向方位も統一的でない(図263)。

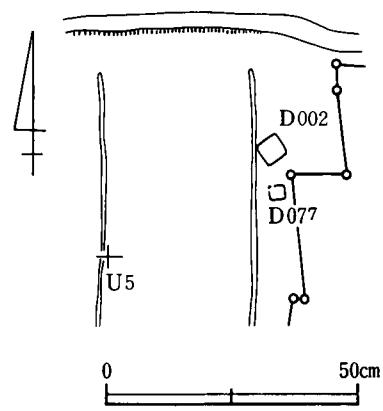


図263 古墳時代中期第Ⅴ群遺構分布状況図

1．D002号遺構（図264～267、図版45—3・4、46—1・2、47）

Ⅴ群内で北側に位置し、D077とは約5mの距離を有している。

遺構　北壁4.5m、東壁4.4mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈して掘り込んでおり、0.28mで床面に達する。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上に位置し、P_1～P_4を検出した。いずれも規模は小さく径0.16mで深さ0.4m以上0.7m以下を計る。南東壁コーナー部分に径0.77m、深さ0.26mを計る貯蔵穴と思われるP_5を検出した。その他小ピットが2か所に位置している。壁溝は認められない。

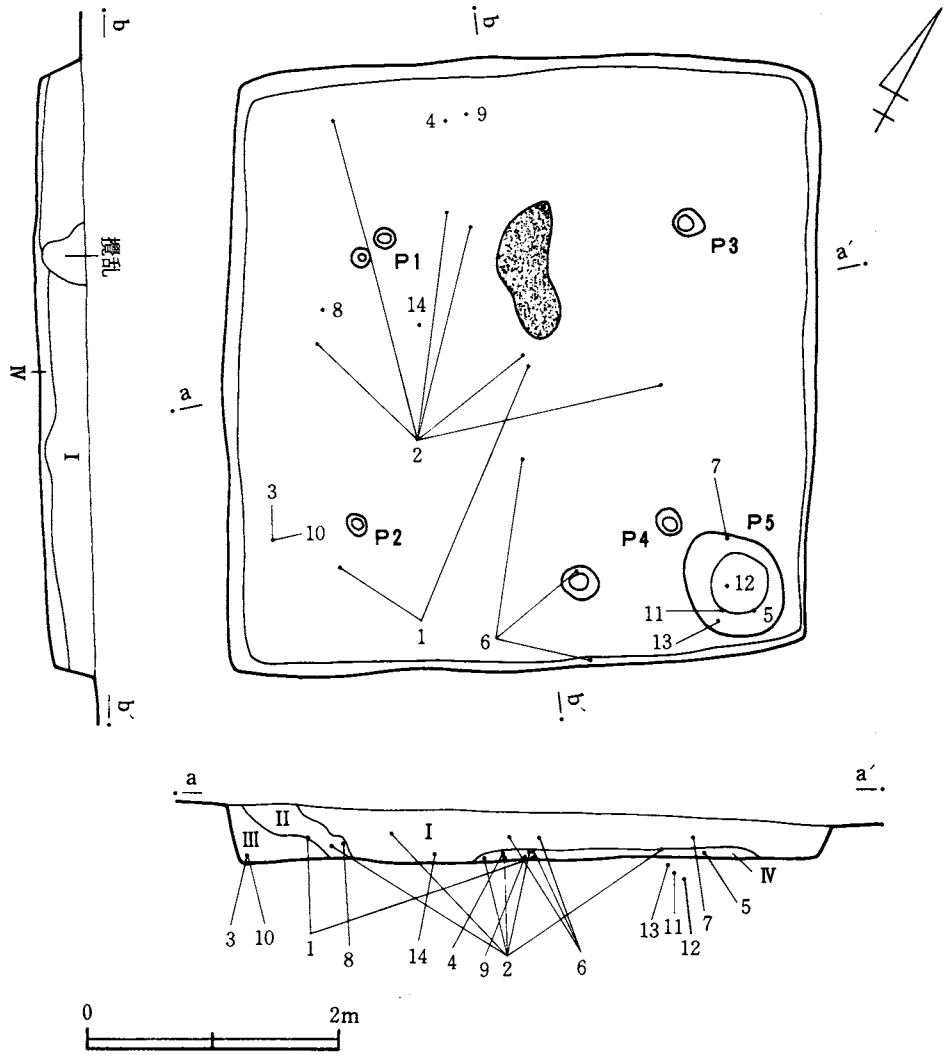


図264 D002号遺構実測図

炉 住居中央部より北側に偏在し、P_1とP_3の間に位置している。大、小の炉が接続した状況を呈しており、長径1.1mを計り、深さ0.08m、厚さ0.06mの焼土が堆積している。

遺物出土状況 Ⅰ層黒褐色土層、Ⅱ層ローム粒混入黒褐色土層、Ⅲ層褐色土層、Ⅳ層焼土粒炭化粒混入黒色土層が堆積しており、遺物は床面や各層中より出土している。またP_5からの出土も認められる。

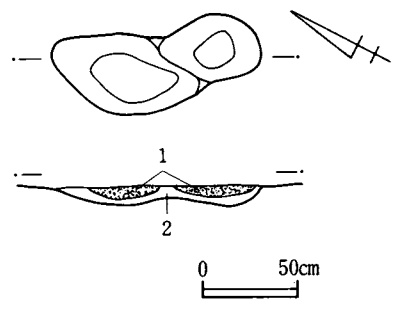


図265 D002号遺構炉跡実測図

出土遺物　遺物は、甕、坩、坏、鉢、それに高坏形土器がある。甕形土器は1～6で1は「く」字状に外反する口縁部破片である。2は球形の胴部、3～6は底部および胴部下半である。坩形土器は7で胴部は球形に近く、口縁部は若干内彎ぎみに開く。外面および口縁部内面は赤彩される。坏形土器は8～11で、11が平底の他は丸底を呈す。9～11は赤彩される。鉢形土器は12、13で、12は直線的に開く体部を呈している。13は内彎ぎみに開

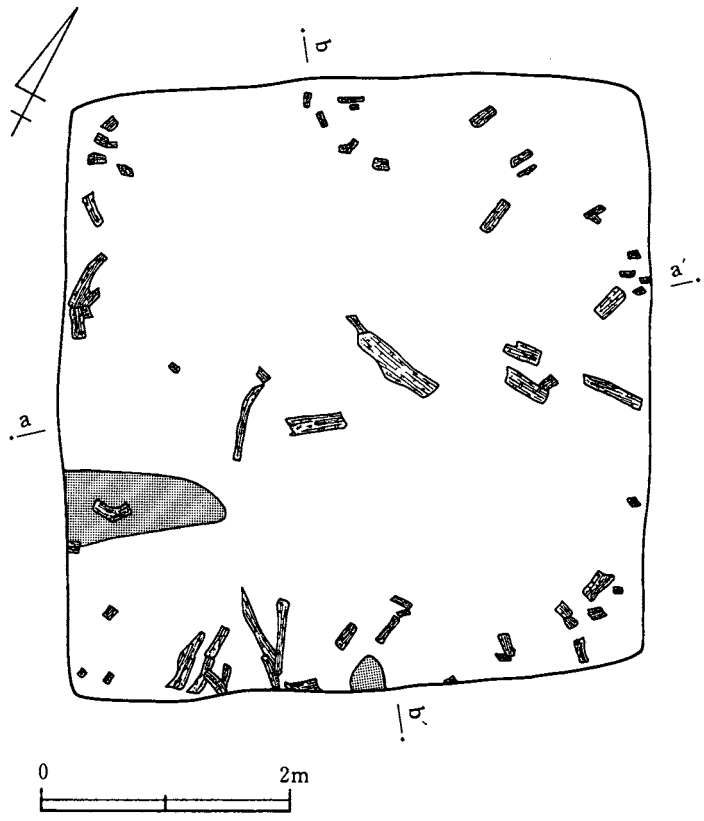


図266　D002号遺構炭化物出土状況図

D002出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	21.7	—	口縁部～胴部⅓	ヨコナデ	—	堅緻	茶褐色	
2	甕	—	—	6.6	胴部～底部½	ナデ	雲母 砂粒	やや堅緻	黒褐色	
3	甕	—	—	6.5	½	ナデ	雲母	堅緻	黒色	二次的に火を受ける
4	甕	—	—	8.0	胴部～底部½	ナデ	—	やや堅緻	黒色	
5	甕	—	—	6.45	胴部～底部¼	ナデ	砂粒	堅緻	黒褐色	二次的に火を受ける
6	甕	—	—	5.2	胴部～底部½	ヘラ削り	小石	堅緻	茶褐色	
7	坩	14.9	12.2	3.9	完形	ヨコナデ	小石	堅緻	赤褐色	二次的に火を受ける、内面磨き、赤彩
8	坏	—	(16.5)	—	¼	—	—	堅緻	(内)茶褐色 (外)黒色	内面磨き
9	坏	5.5	14.4	—	完形	ナデ	—	堅緻	赤褐色	赤彩
10	坏	—	15.1	—	体部⅓	ナデ	—	堅緻	赤褐色	赤彩
11	坏	5.0	11.7	3.9	⅔	ヨコナデ ナデ	砂粒	やや軟弱	茶褐色	赤彩
12	鉢	7.4	14.6	4.5	完形	ヨコナデ	雲母	堅緻	黒褐色	内面赤彩
13	鉢	5.6	8.2	—	½	ヨコナデ	小石	やや堅緻	黒褐色	
14	高坏	—	—	—	坏部⅔	—	砂粒	堅緻	明茶褐色	

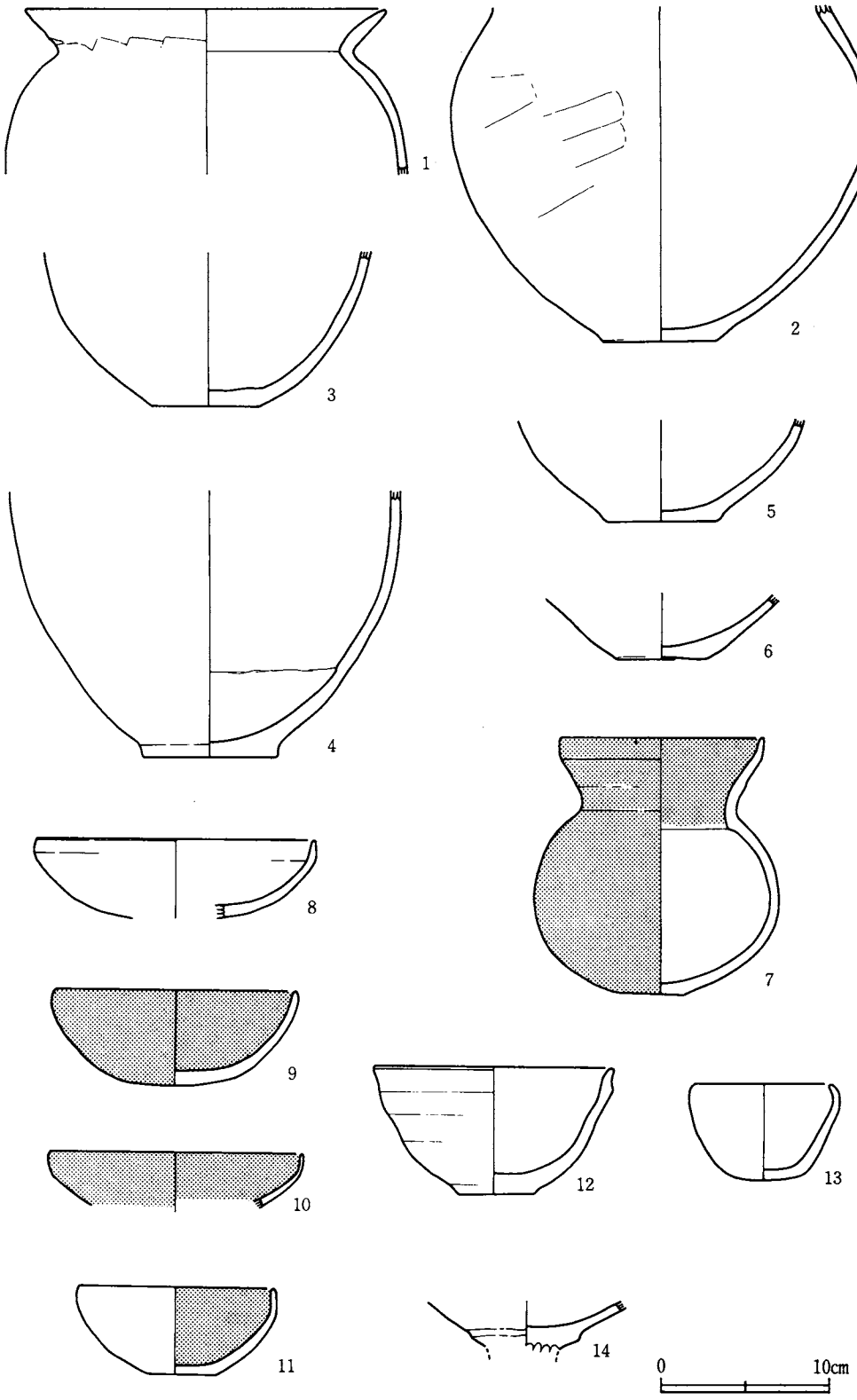


図267 D002号遺構出土遺物実測図

く体部を呈している。高坏形土器は14で坏部と脚部との接合部分の破片である。若干の稜が認められる。

2．D077号遺構（図268～270、図版46－3、47）

V群内で南側に位置し、歴史時代D003に重複切断されていれため遺存状況は悪い。

遺構　南壁3.02m、東壁2.58mで長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は若干傾斜

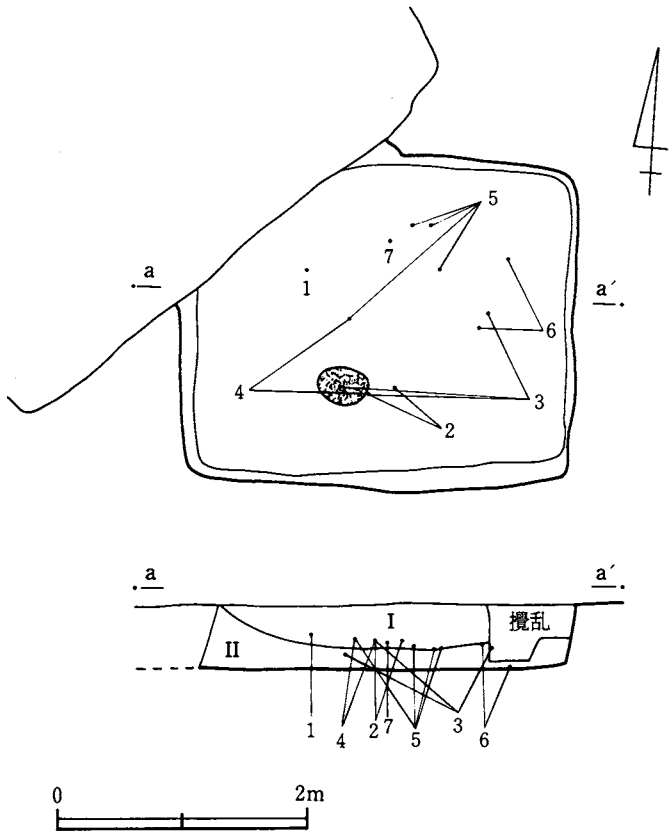


図268 D077号遺構実測図

を呈して掘り込んでおり、約0.5mで床面に達する。床面はやや軟弱な状況を呈している。柱穴、壁溝は検出できなかった。

炉　住居中央部より南側に偏在している。長径0.4m、短径0.28m、深さ0.05m、厚さ0.05mの焼土が堆積している。

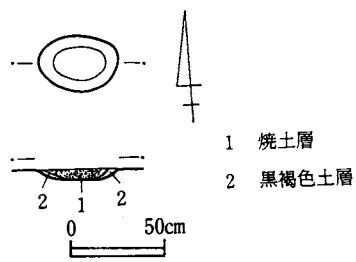


図269 D077号遺構炉跡実測図

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層が

堆積しており遺物はⅠ層下部より出土している。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器がある。甕形土器は1～5で、底部破片である5以外は口縁部は「く」字状に外反する。坏形土器は6、7で丸底を呈し、内彎ぎみ開く体部を呈している。

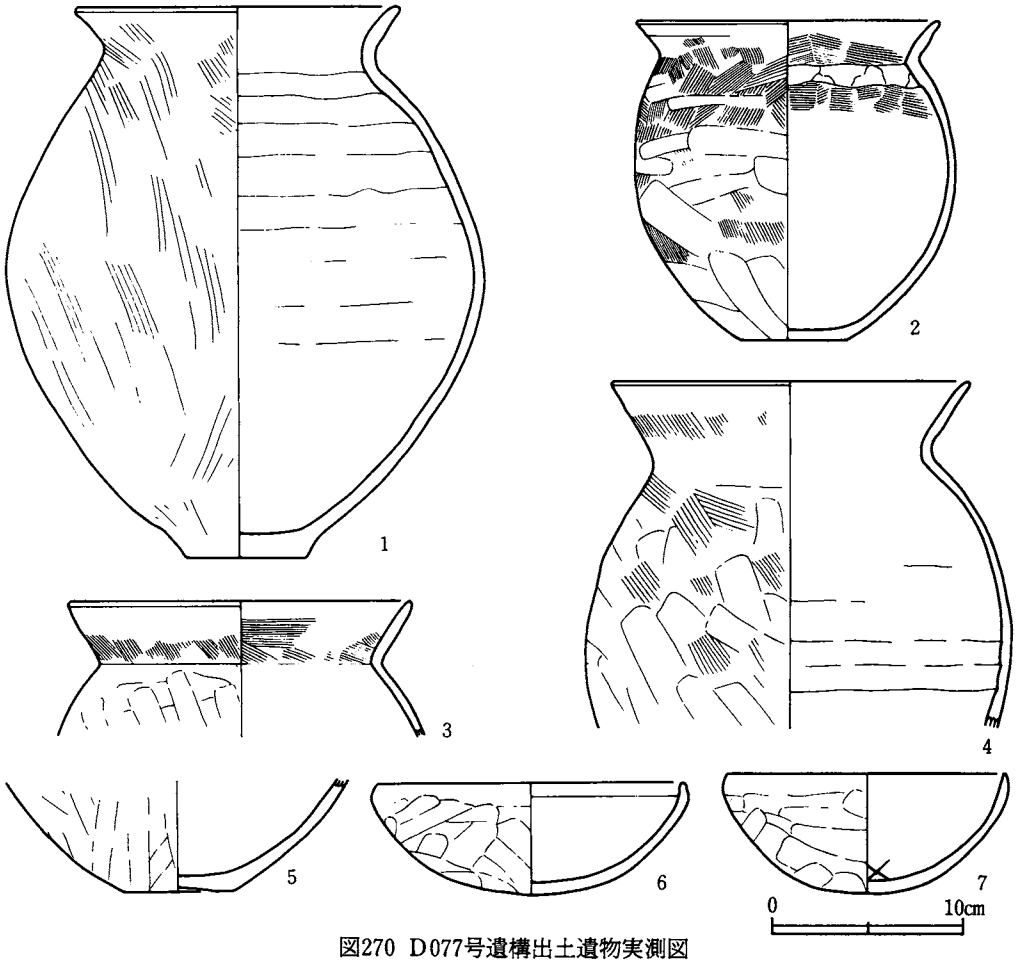


図270 D077号遺構出土遺物実測図

D077出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	28.5	17.2	6.4	完形	ハケ目	砂粒	やや軟弱	茶褐色	
2	甕	16.5	16.1	5.8	½	ハケ目	砂粒	やや軟弱	茶褐色	
3	甕	—	18.3	—	口縁部～頸部⅔	ハケ目	砂粒	堅緻	茶褐色	
4	甕	—	19.0	—	口縁部～胴部½	ハケ目	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
5	甕	—	—	5.8	胴部～底部⅔	ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
6	坏	5.75	17.0	—	½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
7	坏	6.1	15.0	—	完形	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	

第7節　第VI群の遺構と遺物

古墳時代中部の第VI群は、竪穴住居跡2軒で構成される群で、R－5からS－5の地域において検出した。

第VI群が位置する地域は第III群に近く、場合によっては第III群に包括する必要も生じるかもしれないが、一応一つの群として取り扱うこととする。

群の周辺は歴史時代の住居群も密に分布しており、重複関係は認められないものの、かなり接近した状況で歴史時代の住居跡が位置している。

2軒の住居は約29mの距離をもって東西方向に位置しており、第II群で見られたと同じ状況を呈している。29mの距離を有しているのはこの第VI群だけの傾向であり、先にも述べたように第III群との関係において捉えた方が良いかもしれない。

住居の規模や内部構造については基本的に類似する様相を呈しており、さらに指向方向についても統一的な状況が窺える（図271）。

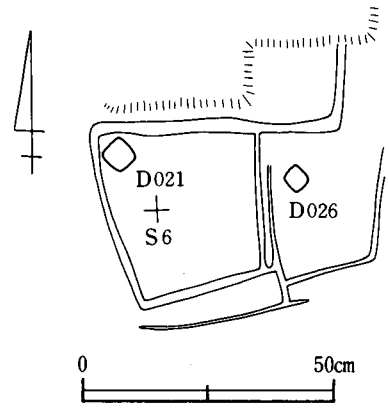


図271 古墳時代中期第VI群遺構分布状況図

1．D021号遺構（図272～278、図版48—）

VI群内で西側に位置し、D026とは約29mの距離を有している。

遺構　北壁4.5m、東壁4.74mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈して掘り込んで約0.4mで床面に達する。床面は全体に堅緻な状況を呈している。床面上に小ピットを検出しているが、いずれも柱穴にはなり得ないものである。南西壁コーナー部分に近く径0.58

D021出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	22.4	13.8	5.7	完形	ヨコナデ	砂粒	やや軟弱	黒褐色	
2	甕	—	—	7.9	胴部～底部¾	ナデ	砂粒 雲母	堅緻	黒褐色	二次的に火を受ける
3	甕	—	—	5.0	胴部～底部½	—	砂粒	堅緻	黒褐色	
4	甕	—	—	5.6	底部のみ	—	砂粒	堅緻	黒褐色	
5	鉢	—	(15.9)	—	口縁部のみ	—	砂粒	堅緻	茶褐色	
6	壺	10.4	10.2	6.6	完形	ヨコナデ ナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	赤彩
7	鉢	6.2	14.4	4.4	完形	ヨコナデ ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	

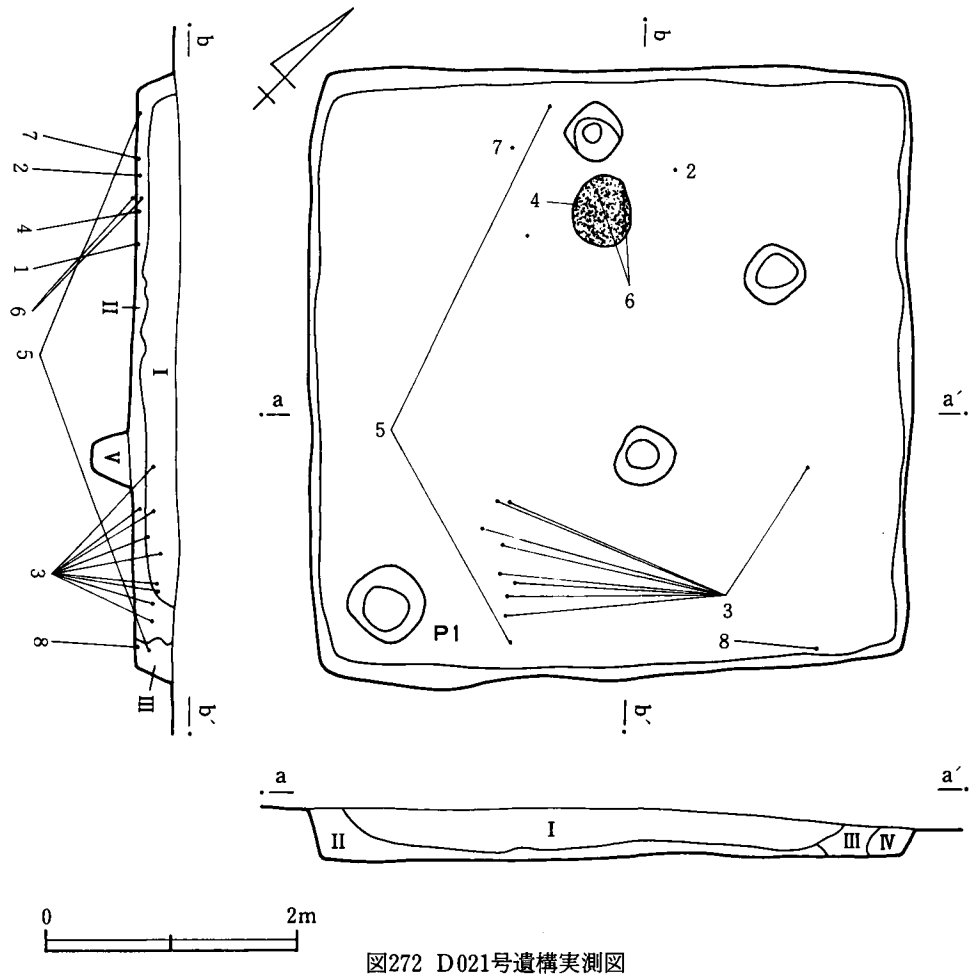


図272 D021号遺構実測図

m、深さ0.22mを計る貯蔵穴と思われるP₁を検出した。P₁の床面から焼土塊を検出した。壁溝は検出できなかった。

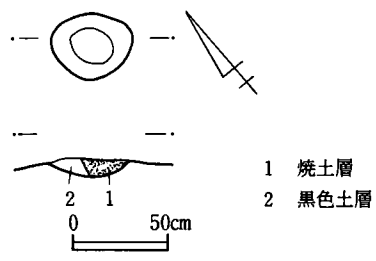


図273 D021号遺構炉跡実測図

炉 住居中央部より北側に偏在している。長径0.55m、短径0.46m、深さ0.08mで厚さ0.08mの焼土が堆積している。

遺物出土状況 Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層褐色土層、Ⅳ層ロームブロック混入褐色土層、Ⅴ層暗茶褐色土層が堆積しており、遺物は各層より出土している。石製遺物が出土しているが数量は少なく、また具体的な検証ができないため工房跡でないと思われる。

出土遺物 遺物は、甕、鉢、壺形土器と石製品がある。甕形土器は1～4で、1は「く」字

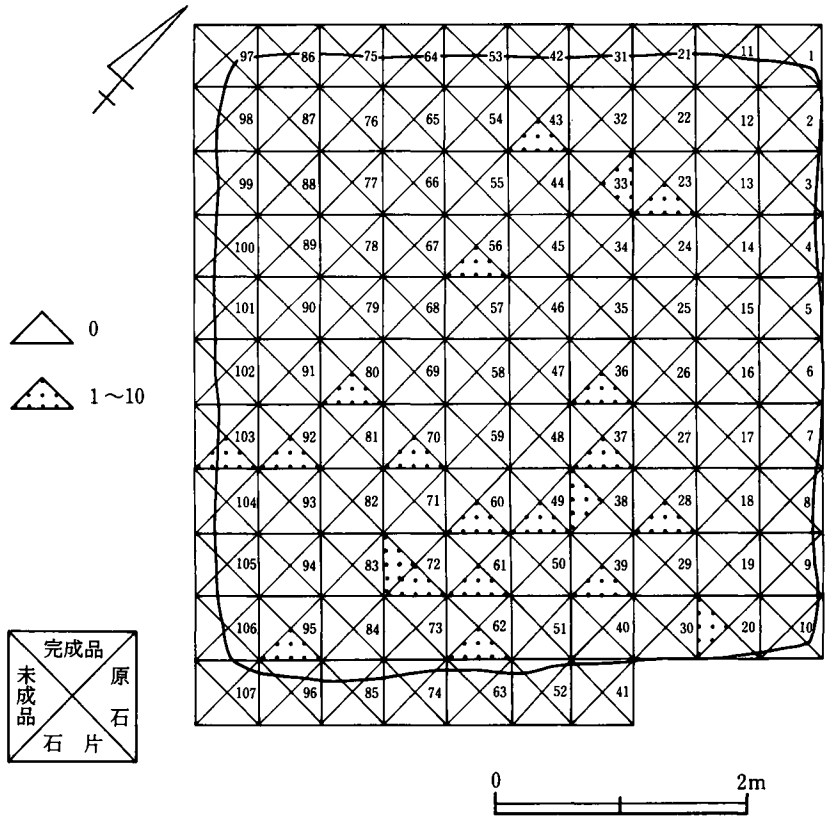


図274 D021号遺構石製遺物平面分布模式図

D021出土位置別石製遺物集計　　※上段は成品、下段は未成品

出土位置	原石	石片	品目									合計
			臼玉	勾玉	剣形	有孔円板	双孔円板	円板状	双孔円板欠損品	滕	その他	
I層	—	4	1	—	—	—	—	—	—	—	—	5
II層	1	17	1	—	—	—	—	—	—	—	—	19
III層	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
IV層	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
貯蔵穴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
工作ピット	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
柱穴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
床	—	8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8
床下	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
その他	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	1	29	2	—	—	—	—	—	—	—	—	32

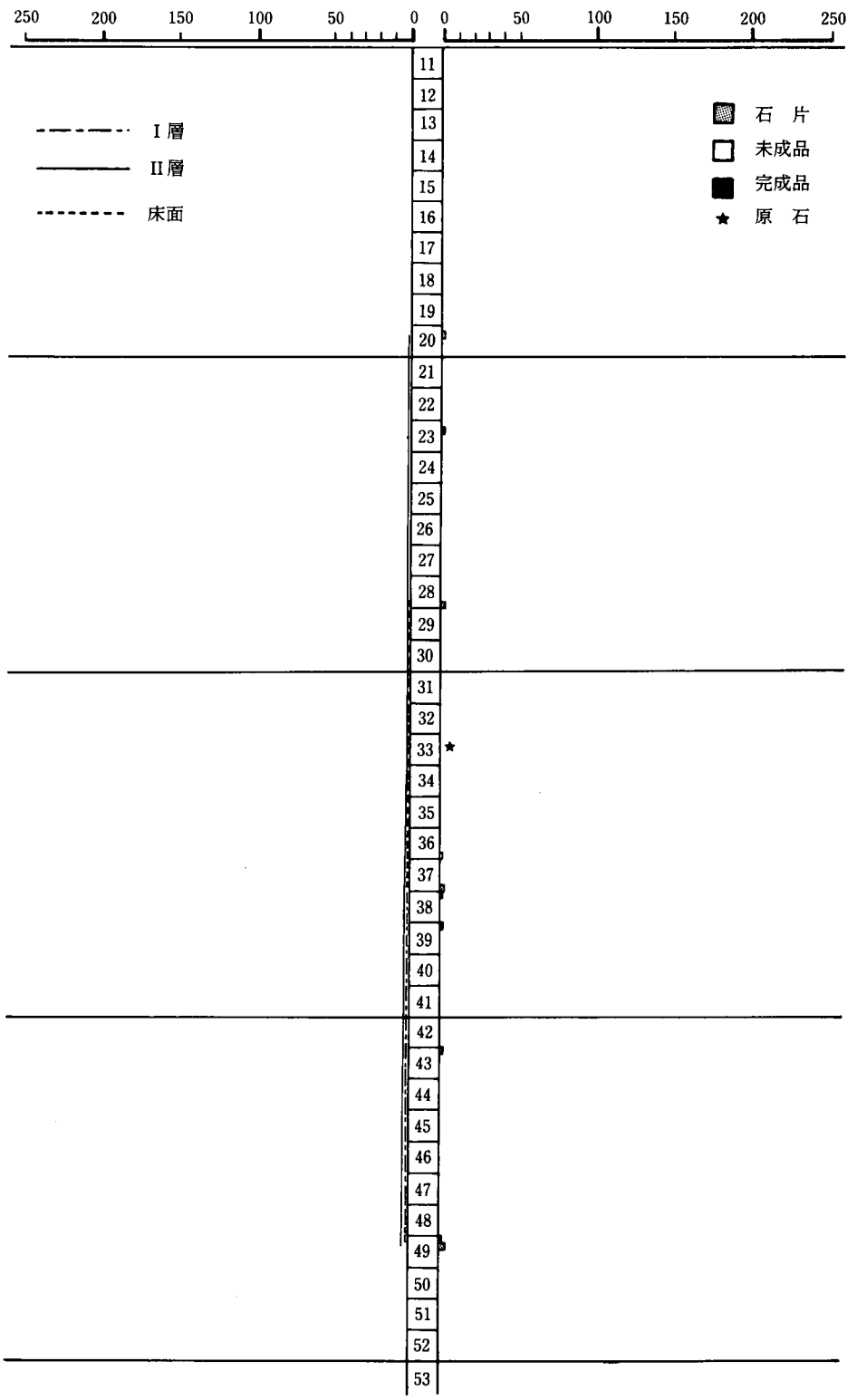


図275 D021号遺構石製遺物層位別分布図(1)

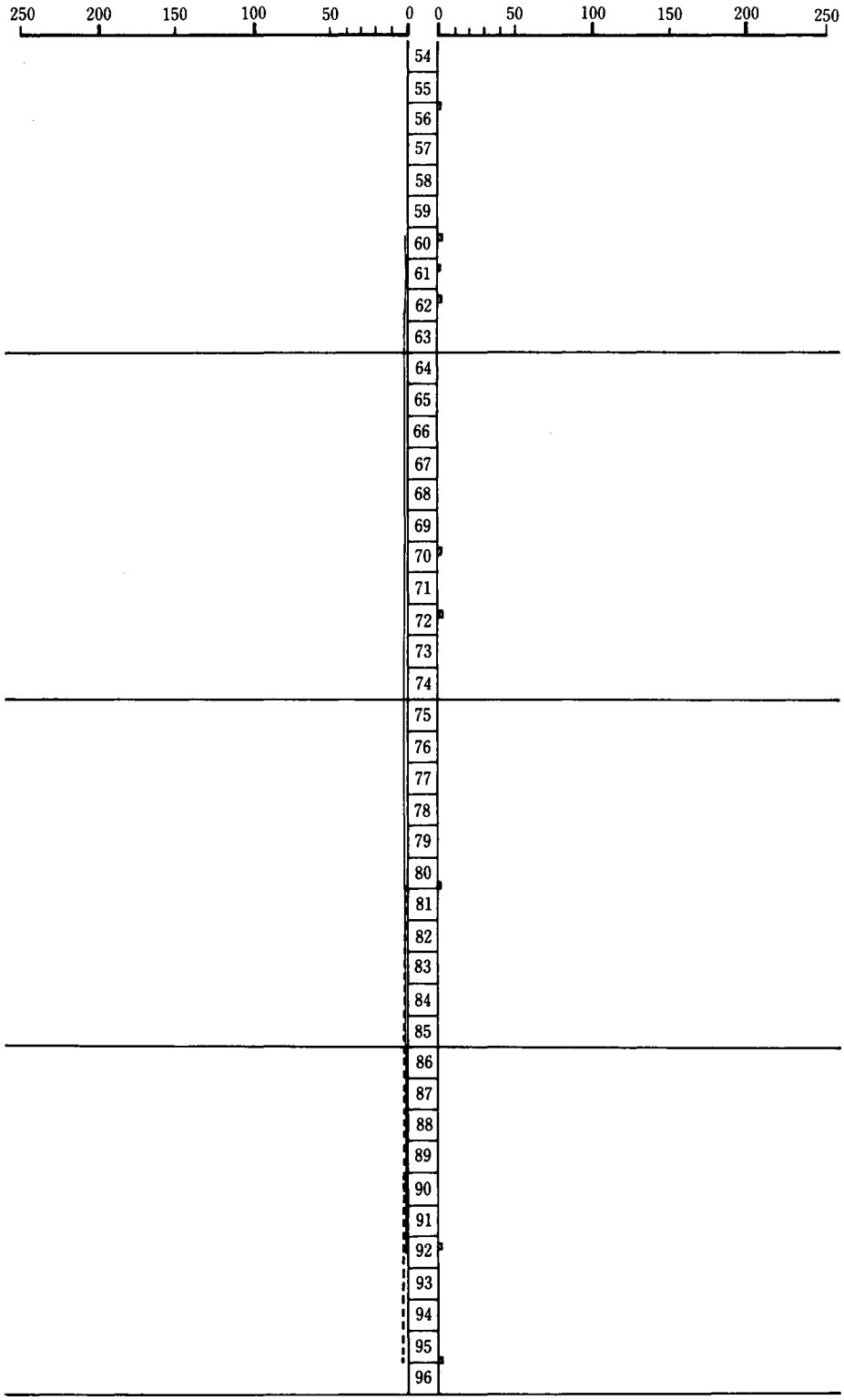


図276 D021号遺構石製遺物層位別分布図(2)

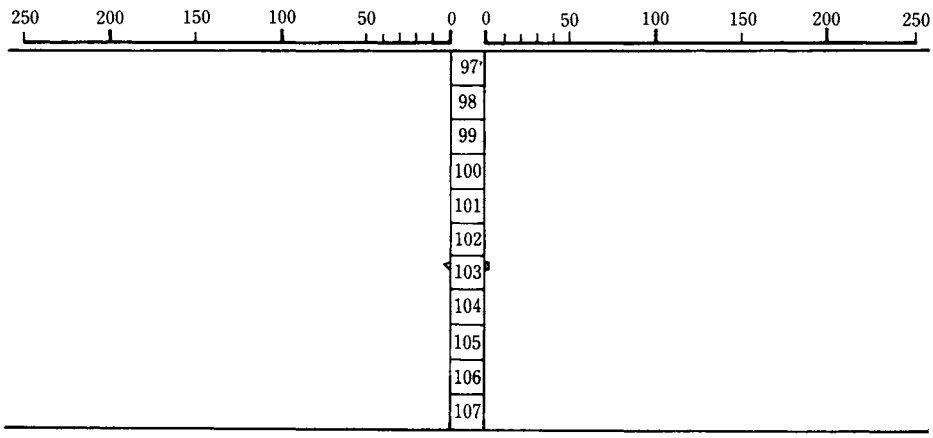


図277 D021号遺構石製遺物層位別分布図(3)

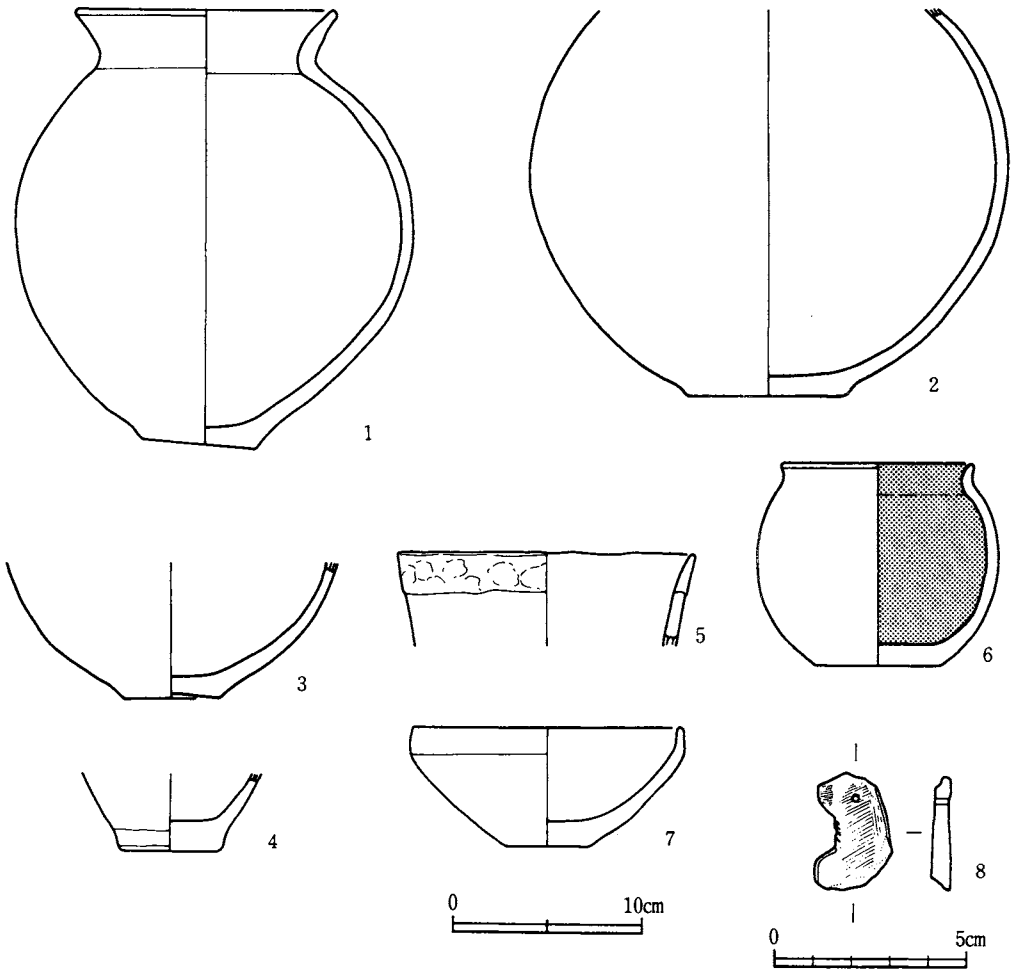


図278 D021号遺構出土遺物実測図

状に強く外反する口縁部を呈す。2は球形に近い胴部を呈す。3、4は底部破片である。鉢形土器は5、7で、5のように直線的な胴部に対し7は坏に近い球形を呈している。5は場合によっては甑となるかもしれない。壺形土器は6で短頸で、胴部は球形を呈し、内面は赤彩される。石製品は8の滑石製勾玉である。形状は充分に整ってはいないが頭部に小孔があく。

2．D026号遺構（図279～281、図版48）

IV群内で東側に位置し、D021とは約29mの距離を有している。歴史時代のD205、D206が近接している。

遺構　北壁3.28m、東壁4.28mで長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈して掘り込んでおり、約0.4mで床面に達する。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上に配置したP₁～P₃を検出した。いずれも径0.28m、深さ0.7mを計る。その他小ピットを5か所検出したが性格は不明である。壁溝は検出できなかった。

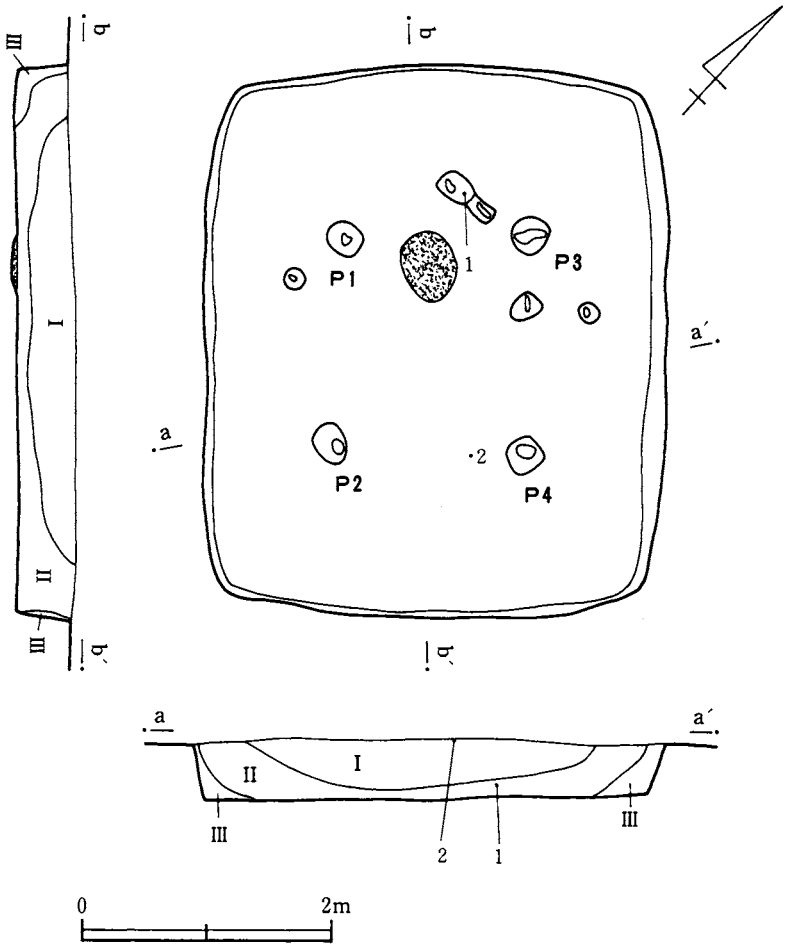


図279　D026号遺構実測図

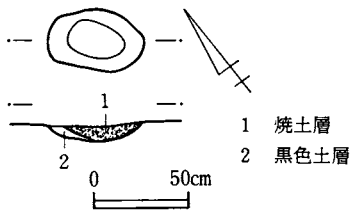


図280 D026号遺構炉跡実測図

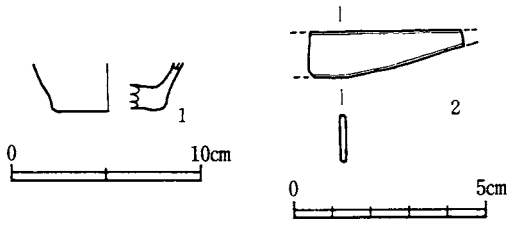


図281 D026号遺構出土遺物実測図

炉 住居中央より北側に偏在している。長径0.5m、短径0.3m、深さ0.08mで厚さ0.07mの焼土が堆積している。

遺物出土状況 Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層ローム粒混入黒褐色土層が堆積しており、遺物は各層より出土するが数量は少ない。

出土遺物 遺物は、甕形土器と鉄製品がある。甕形土器は1の底部破片である。鉄製品は2で刀子の柄と思われる。

D026出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	(6.0)	底部のみ	ヘラ削り	砂粒	堅緻	暗茶褐色	

第3章 後期の遺構と出土遺物

第1節 はじめに

古墳時代後期に比定できる竪穴住居跡は、第Ⅰ群4軒、第Ⅱ群2軒、第Ⅲ群1軒の合計7軒によって構成される。検出した7軒をもって集落全体がすべて把握できたわけでなく、特に東側の地区界沿における未調査部分や、調査対象外の地域に遺構の広がることは充分に考えられるからである。

後期の住居群の立地は標高12mを中心とする段丘上に立地しており、かなり須久茂谷津を意識しての分布状況を呈していると読み取ることができよう。

三つの群は、第Ⅰ群と第Ⅱ群が遺跡の北東部分に塊村のごとく分布するのに対し、第Ⅲ群の1軒の住居は、第Ⅱ群の住居から約210mの距離をもって北側部分に位置している。

このように1軒単独で他群から隔絶した状況で住居が分布するのは、古墳時代中期のみならず、古墳時代中期や歴史時代の集落においても認められる現象であり、北海道遺跡での特異性として捉えることが可能であろう。

7軒の住居跡の内、第Ⅰ群に位置する大形の住居跡であるD037からは滑石の石製模造品関係の遺物が出土しており、古墳時代中期に認められる石製模造品の工房跡との関係も考慮しなければならないであろう。

住居の規模や内部構造などは相違点が認められるところであるが、指向方位はほぼ統一的であることが指摘できよう。

第2節　第Ⅰ群の遺構と遺物

古墳時代後期の第Ⅰ群は、竪穴住居跡4軒で構成される群で、U－4、5地域において検出した。

第Ⅰ群が位置する地域は東側の地区界に近く、古墳時代中期や歴史時代の住居跡も立地している。また、南北に連なる溝も位置しており、この溝によってD001は住居中央部が攪乱を受けている。

地区界に沿った東側の地域は未調査部分や調査対象外となっているため、検出した4軒をもってすべての住居を検出したとは言いがたい。4軒の住居は一見して一直線上に分布しているかのような状況を呈しているが、環状形に分布する可能性も認めなければならないであろう。しかし未調査部分や調査対象外の地域にかかるため充分に言究はできない。

住居の規模はかなり差があり、内部構造においても違いが認められる。指向方位はほぼ均しい。

D037は滑石の石製模造品関係の遺物が出土しているが、具体的な工房跡との検証は得られておらず、古墳時代中期の工房跡との関係について攻玉技術を踏まえて考える必要がある（図282）。

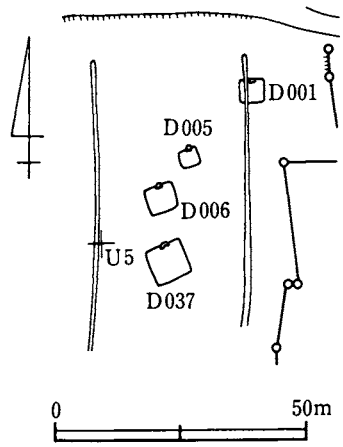


図282 古墳時代後期第Ⅰ群遺構分布状況図

1．D001号遺構（図283～285、図版49－1、51、52）

Ⅰ群の住居群内において最も北側に位置し、D005が近接している。

遺構　北壁3.6m、東壁3.8mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.7m掘り込んでいる。壁直下には幅0.16m、深さ0.1mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。床面上に7か所の小ピットを検出したが柱穴にはならない。深さはいずれも0.15m前後である。また北壁の壁溝中に1か所認められるが、ほぼ

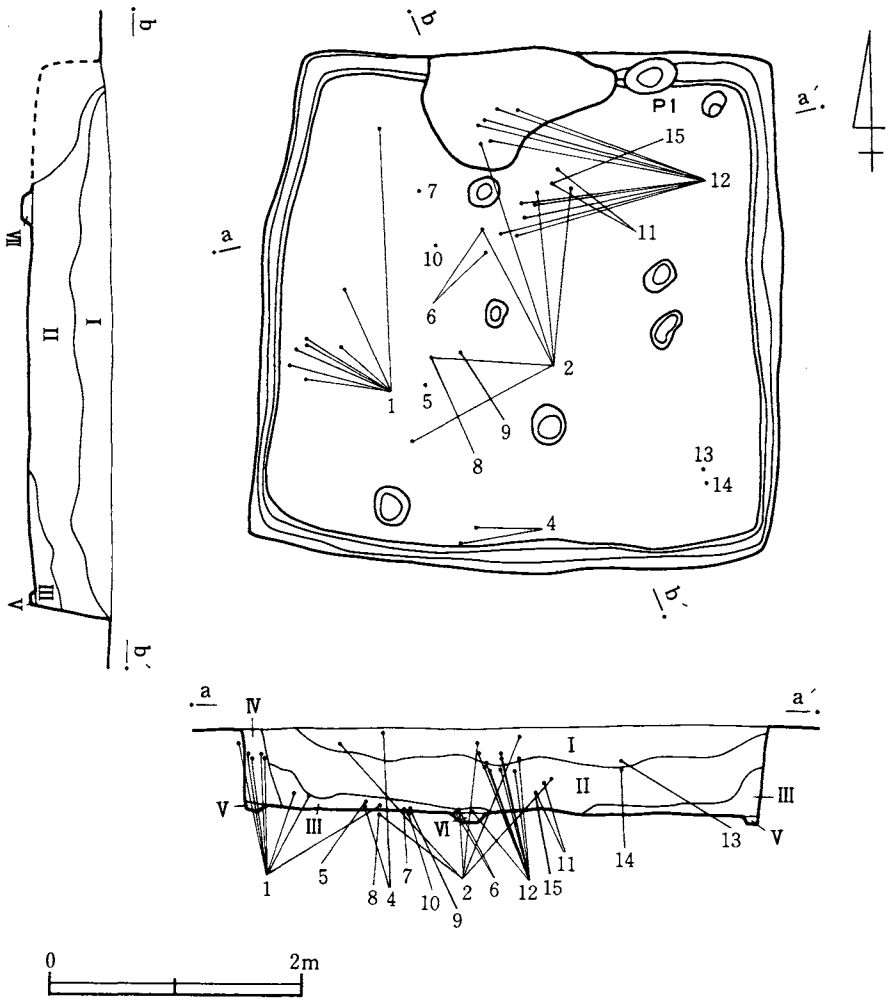
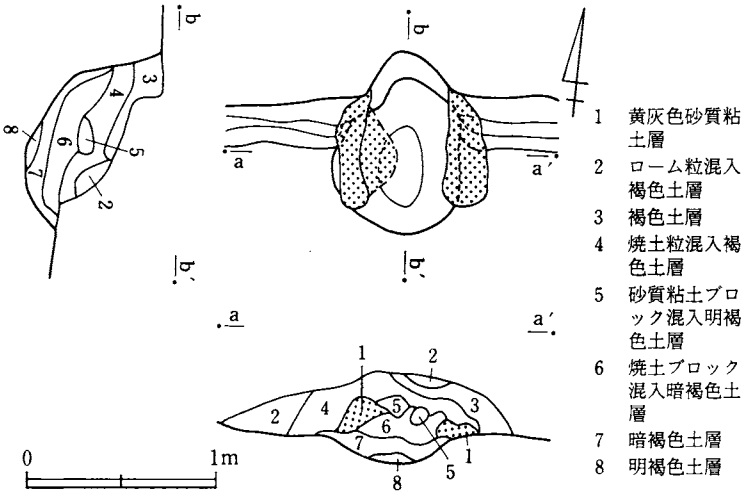


図283 D001号遺構実測図

同規模である。

カマド　北壁中央部を三角形に0.22m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは7層上に行なわれており、掘り込み部分に袖を形成している。火床部は深さ0.09mで擂鉢状を呈している。



1　黄灰色砂質粘土層
2　ローム粒混入褐色土層
3　褐色土層
4　焼土粒混入褐色土層
5　砂質粘土ブロック混入明褐色土層
6　焼土ブロック混入暗褐色土層
7　暗褐色土層
8　明褐色土層

図284　D001号遺構カマド実測図

遺物出土状況　Ⅰ層黒

褐色土層、II層黒色土層、III層ローム粒混入黒褐色土層、IV層褐色土層、V層茶褐色土層、VI層暗茶褐色土層、VII層ローム粒混入暗茶褐色土層が堆積しており、遺物は各層より出土している。

出土遺物　遺物は、甕、坏、埦、壺形土器と石製品、鉄製品がある。甕形土器は1、2で、1は球形に近い胴部を呈し口縁部は緩やかに外反する。2は大きく外反を呈する口縁部の破片である。坏形土器は3～6、8～11である。体部が稜を境に直立する3、内屈する4と、緩やかに開く5、6がある。8～11は手捏土器で、8、9の底部には木葉痕が見られる。埦形土器は7で、胴部は球形に近く、口縁部は内彎ぎみに開く形状を呈している。壺形土器は12で長頸瓶で、頸部上半が欠損している。石製品は13、14で、いずれも薄い板状を呈しており勾玉の未成品とも思われる。鉄製品は15で、刀子の刃先残片である。

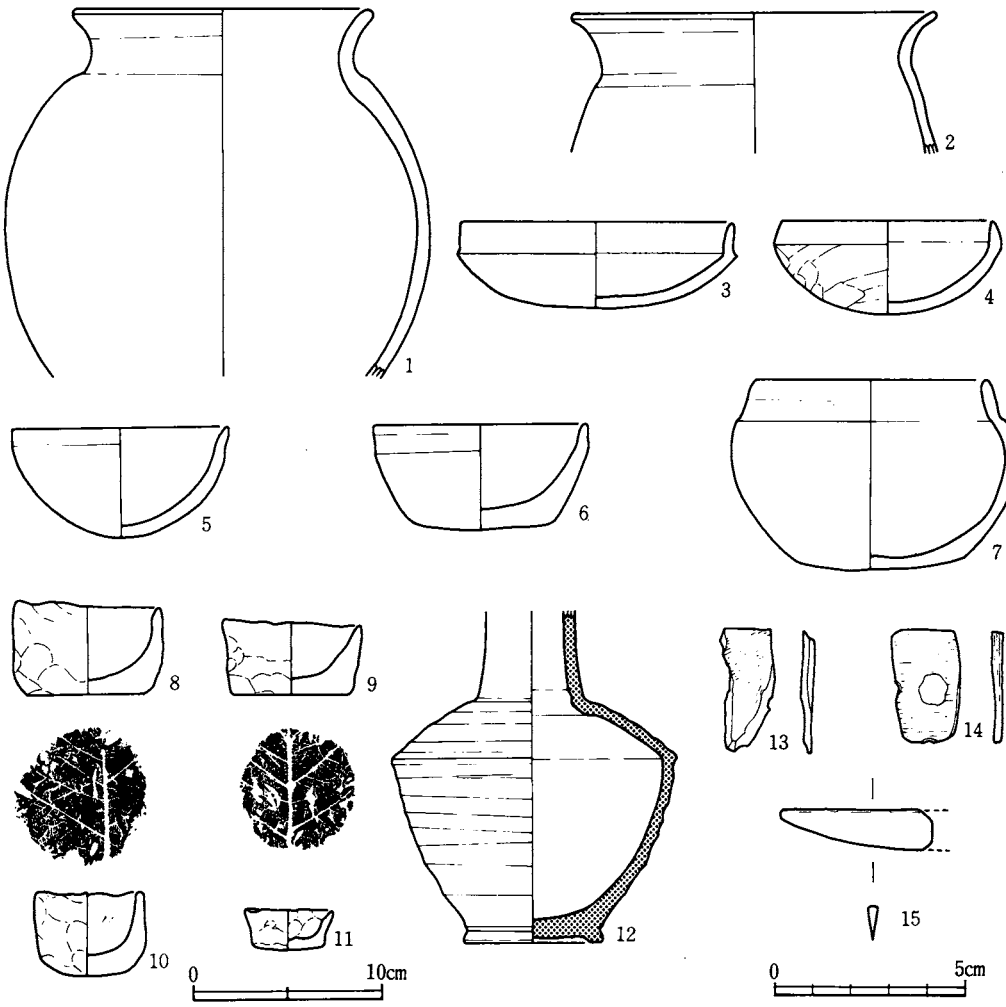


図285　D001号遺構出土遺物実測図

D001出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	(15.9)	—	口縁部～胴部⅓	ヨコナデ ナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	
2	甕	—	(19.5)	—	口縁部～胴部⅓	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
3	坏	4.4	(14.7)	—	⅔	ヨコナデ ナデ	小石	堅緻	黒褐色	二次的に火を受ける
4	坏	4.8	11.3	—	ほぼ完形	ヨコナデ ヘラ削り	雲母 砂粒	堅緻	黒褐色	内面磨き
5	坏	11.6	11.6	—	完形	ヨコナデ ナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	内面磨き
6	坏	5.4	11.6	7.2	¾	ヨコナデ ナデ	砂粒	堅緻	黒褐色	
7	埦	9.8	12.4	8.8	ほぼ完形	ヨコナデ ナデ	雲母 砂粒	堅緻	黒褐色	
8	手捏土器	4.6	7.7	6.2	ほぼ完形	—	砂粒	やや軟弱	黒色	
9	手捏土器	3.8	(7.3)	6.1	⅔	—	砂粒	やや軟弱	黒色	
10	手捏土器	4.4	5.5	3.5	完形	—	砂粒	堅緻	茶褐色	
11	手捏土器	2.1	4.6	3.8	⅔	—	砂粒	堅緻	茶褐色	
12	長頸瓶	—	—	7.4	¾	—	—	堅緻	灰色	

2．D005遺構（図286～289、図版49—2・3、50—1、52、53）

I群の住居群内において、ほぼ中央に位置しD006が近接している。

遺構　北壁3.31m、東壁3.57mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.78m掘り込んでおり、直下には幅0.10m、深さ0.11mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上にP_1～P_4を検出した。径平均0.16m、深さ平均0.12mを計る。また、P_3とP_4の間に径0.23m、深さ0.13mのP_5を、南壁ほぼ中央に接して径0.40m、深さ0.12mのP_6を検出した。

カマド　北壁中央部を0.28m掘り込んで暗灰褐色砂質粘土をもって構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙出し部まで一体化している。火床部は浅い擂鉢状を呈し、平滑な底面を呈していない。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層黒色土層、III層ローム粒混入黒褐色土層、IV層褐色土層、V層茶褐色土層、VI層暗茶褐色土層が堆積しており、床面上を中心にカマド内からも11、18、20が出土している。

出土遺物　遺物は、甕、甑、高坏、鉢、坏形土器と土製品がある。甕形土器は1～4で、1は「く」字状に外反する口縁部を呈す。2は深鉢状のもので頸部がなく直線的に開く。3も2に近い形状を呈す。4は底部破片である。甑形土器は5で鉢状の胴部を呈し口縁部が若干外反する単孔のものである。高坏形土器は6～8で、大小の差はあるが、いずれも坏部は大きく開き、裾も大きく開く形状を呈す。坏部内面は黒色処理される。鉢形土器は9～13である。9は小形の深鉢を呈す。10～12は手捏で坏に近いものである。13は肩部から短い口縁部を呈すもの

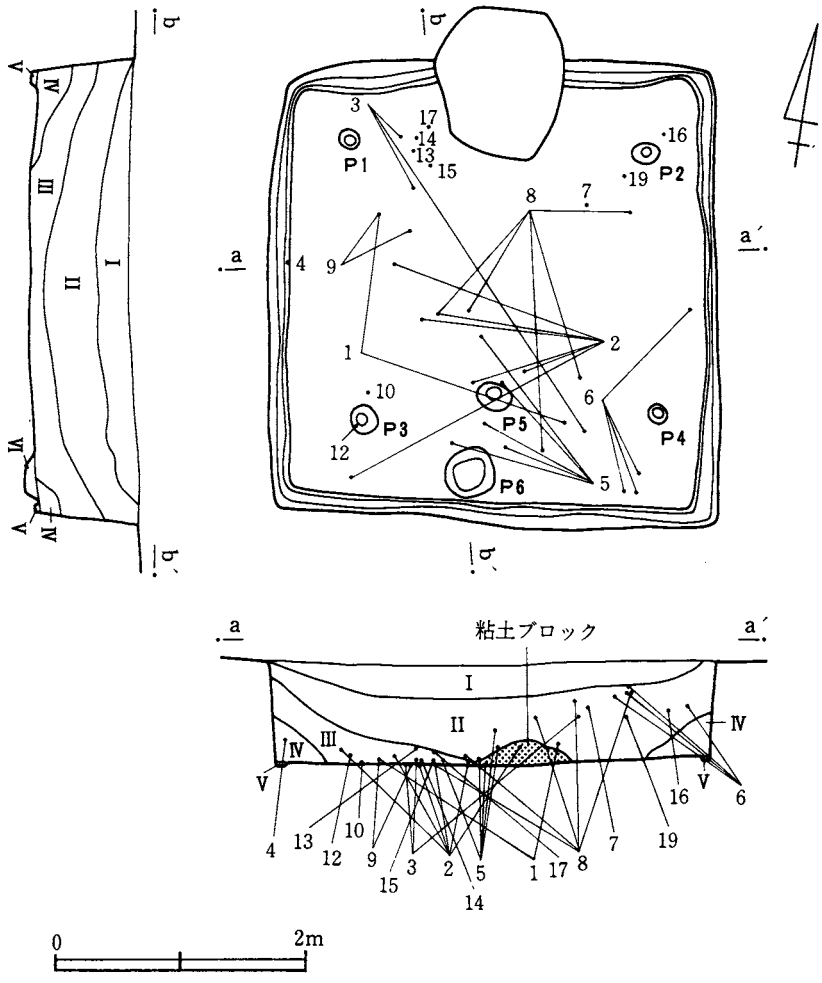


図286 D005号遺構実測図

である。坏形土器は14～19である。14～16は稜を境に体部が屈曲する。17～19は稜が顕著でない。いずれも丸底を呈し、中に赤彩されるものもある。土製品は20の支脚である。円錐状を呈したもので、胎土中に砂粒を混入する。

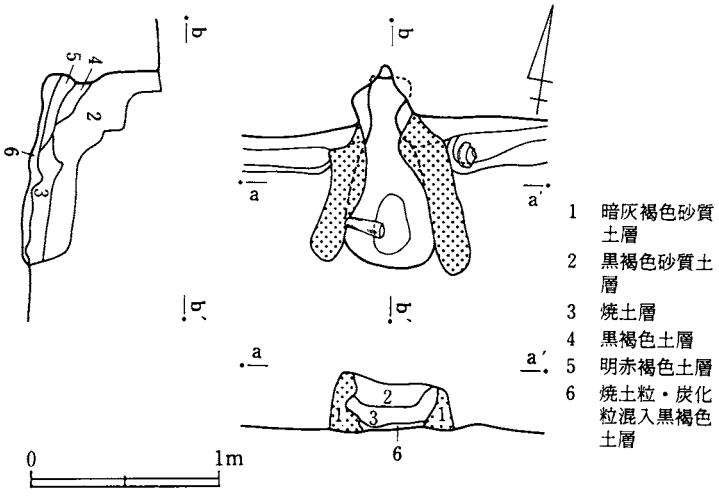


図287 D005号遺構カマド実測図

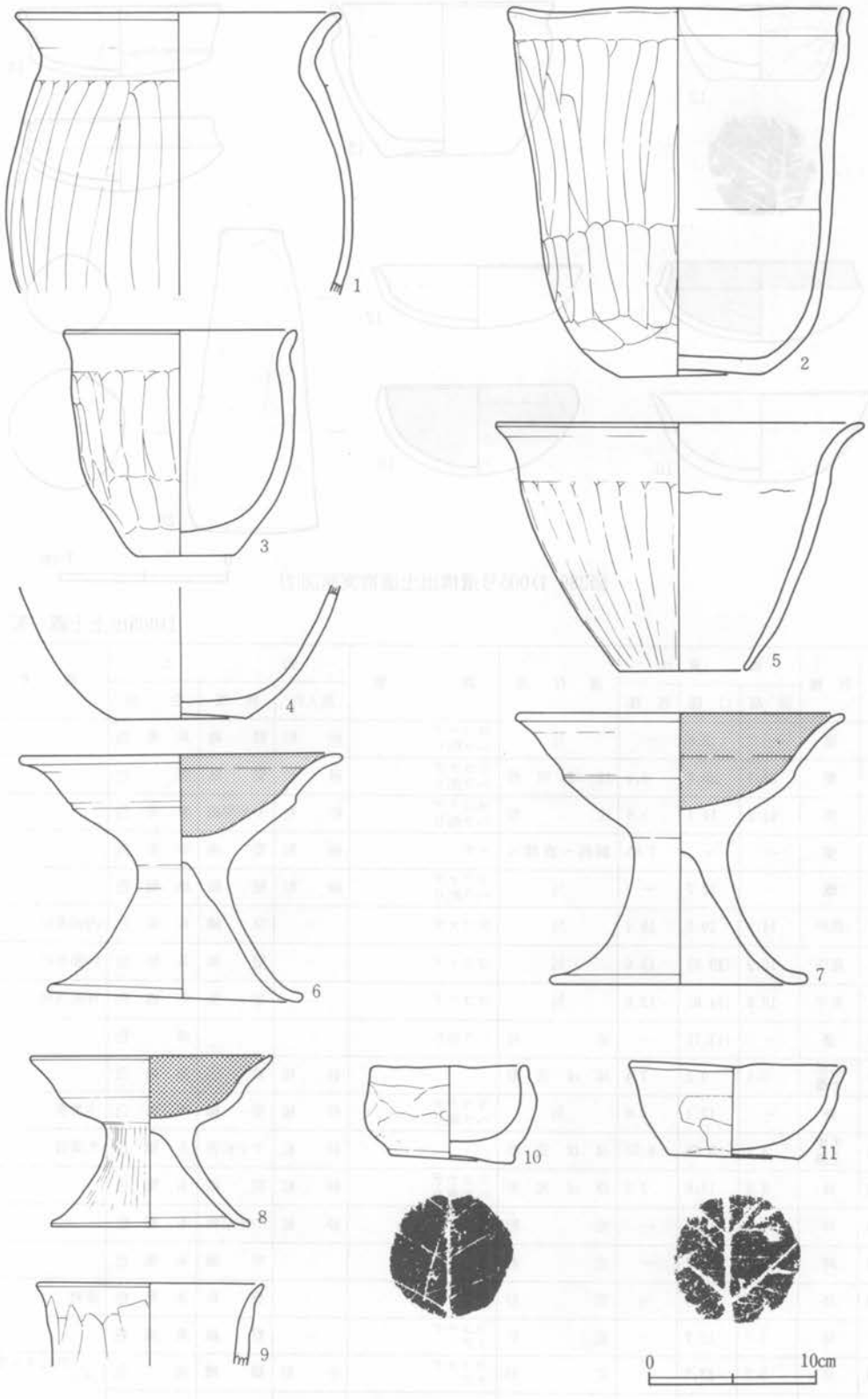


図288 D005号遺構出土遺物実測図(1)

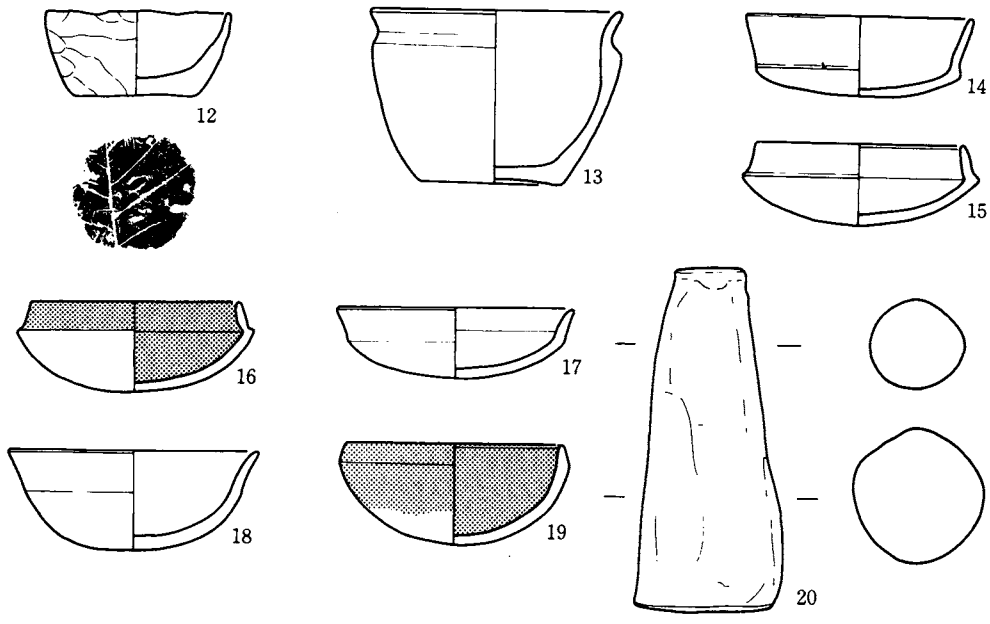


図289 D005号遺構出土遺物実測図(2)

D005出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	19.6	—	½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
2	甕	21.9	20.6	8.6	ほぼ完形	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒色	
3	甕	13.2	14.1	5.9	完形	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
4	甕	—	—	7.85	胴部～底部⅙	ナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	
5	甑	—	22.2	—	½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
6	高坏	14.2	19.5	15.4	¾	ヨコナデ	—	堅緻	茶褐色	内面赤彩
7	高坏	15.9	(19.8)	15.6	½	ヨコナデ	—	堅緻	茶褐色	内面赤彩
8	高坏	10.0	(14.6)	12.0	⅔	ヨコナデ	—	堅緻	茶褐色	坏部内黒
9	甕	—	(13.7)	—	破片	ヘラ削り	—	—	黒色	
10	手捏土器	5.5	9.2	7.4	ほぼ完形	—	砂粒	軟弱	黒褐色	
11	鉢	—	13.1	7.6	⅔	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	木葉痕
12	手捏土器	4.4	9.65	6.55	ほぼ完形	—	砂粒	やや軟弱	茶褐色	木葉痕
13	鉢	9.0	13.6	7.5	ほぼ完形	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
14	坏	4.2	12.1	—	完形	ヨコナデ ナデ	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
15	坏	4.3	11.2	—	完形	ヨコナデ ナデ	—	堅緻	黒褐色	
16	坏	4.7	11.1	—	完形	ヨコナデ ナデ	—	堅緻	赤褐色	赤彩
17	坏	3.7	12.7	—	完形	ヨコナデ ナデ	—	堅緻	黒褐色	
18	坏	5.2	13.3	—	完形	ヨコナデ ナデ	小石	堅緻	黒色	二次的に火を受ける
19	坏	5.25	11.7	—	完形	ヨコナデ	—	堅緻	赤褐色	赤彩、内面磨き

3．D006号遺構（図290～292、図版50—2・3、53）

Ⅰ群の住居群内においてほぼ中央に位置し、D005、D037が近接している。

遺構　北壁5.46m、東壁5.30mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.63m掘り込んでおり、直下には幅0.22m、深さ0.07mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。床面の南壁コーナー部の床面上には焼土を検出した。柱穴はほぼ対角線上にP_1～P_4を検出した。径平均0.24m、深さ平均0.55mを計る。その他小ピットを6か所検出したがP_5～P_7はほぼ一直線上にならんで位置しており、径平均0.15m、深さ平均0.16mを計る。

カマド　北壁中央部を0.47m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込み

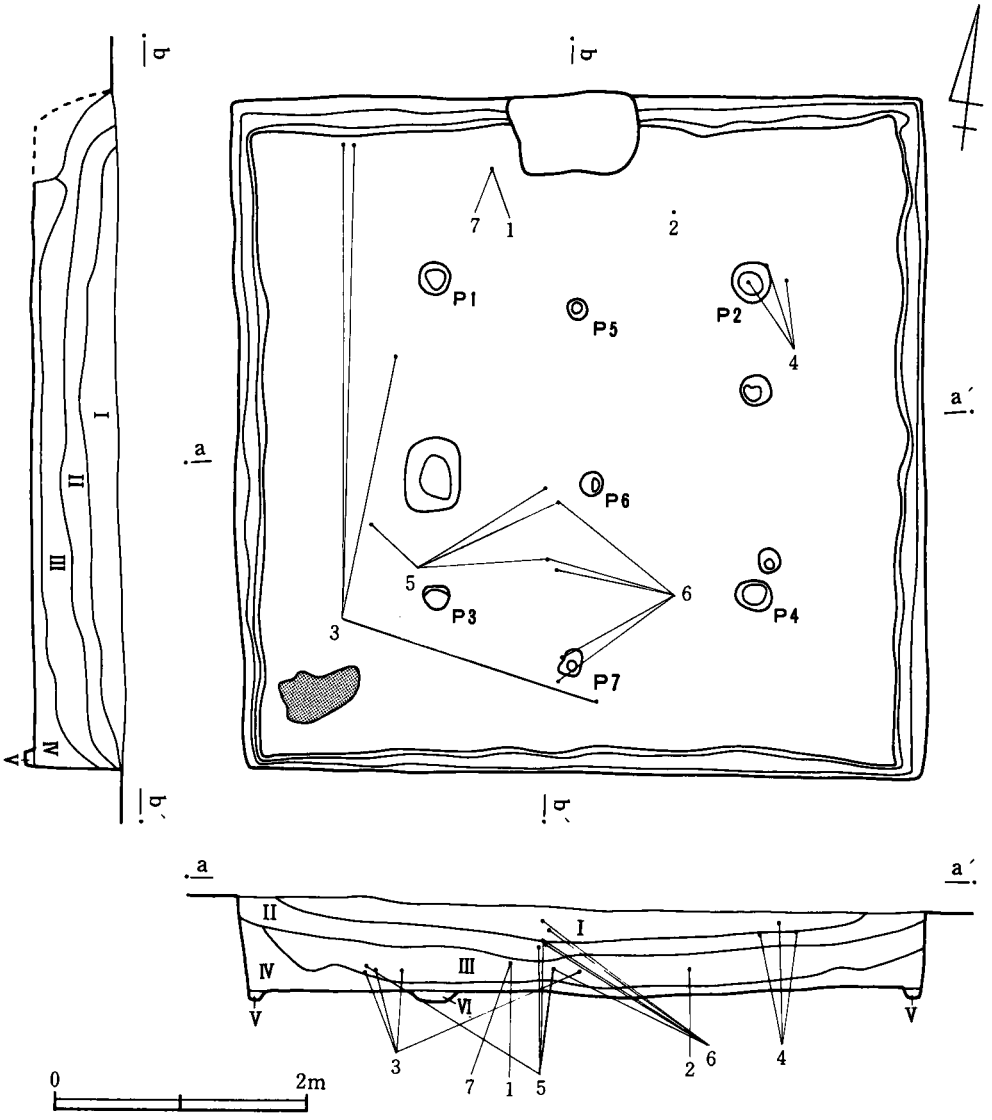


図290　D006号遺構実測図

は２層上に行われ、袖部から煙道部まで一体化している。火床は楕円形を呈し若干窪む程度である。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層ローム粒焼土粒混入黒色土層、Ⅳ層ローム粒混入黒褐色土層、Ⅴ層茶褐色土層、Ⅳ層暗茶褐色土層が堆積しており、遺物はⅠ～Ⅲ層を中心として出土している。

出土遺物　遺物は、甕、甑、坏、鉢形土器と土製品がある。甕形土器は１、２で小形のものである。１は長胴を呈

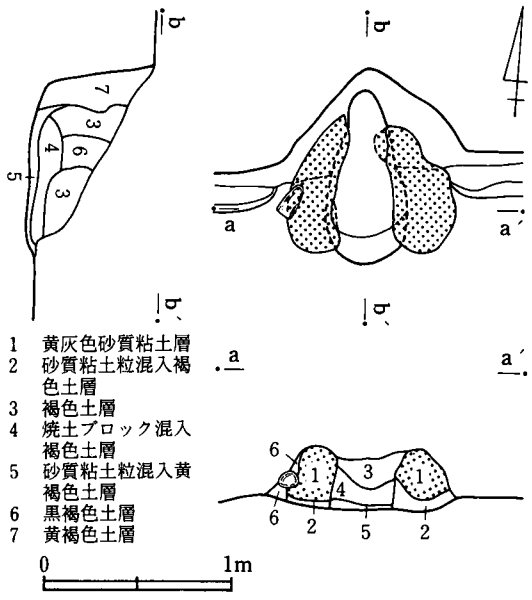


図291　D006号遺構カマド実測図

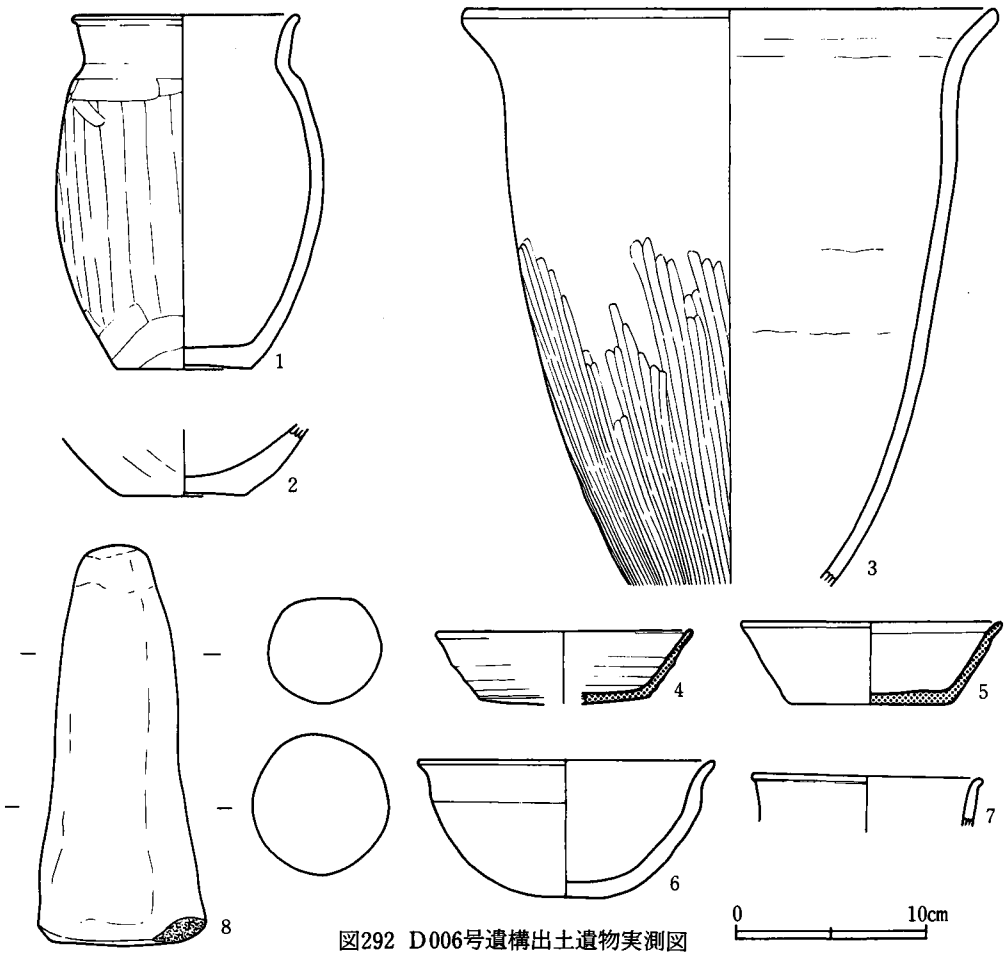


図292　D006号遺構出土遺物実測図

し口縁は直立ぎみに外反する。2は底部破片である。甑形土器は3で底部は欠損するが、下方からの条痕状の磨きが施される。坏形土器は4、5で体部が直線的に開く形状のもので口径と底径の差が小さい。鉢形土器は6、7で、6は丸底で坏に近い。7は直線的な胴部を呈する深鉢である。

D006出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	18.3	12.1	7.1	3/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
2	甕	—	—	6.5	破片	ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
3	甑	—	28.4	—	ほぼ完形	ヨコナデ 磨き	砂粒	堅緻	茶褐色	
4	坏	—	(13.8)	(9.3)	1/3	底部一方向ヘラ削り	小石	堅緻	灰色	
5	坏	4.2	(14.0)	8.2	1/3	底部一方向ヘラ削り	小石	やや軟弱	灰色	
6	坏	7.0	16.0	—	1/3	ヨコナデ ナデ	砂粒	やや軟弱	黒褐色	
7	甕	—	(12.3)	—	破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	黒色	

4．D037号遺構（図293～302、図版51—1・2、53、54）

I群の住居群内において最も南に位置し、D006が近接している。

遺構　北壁7.37m、東壁7.38mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡で、石製模造品の工房跡でもある。壁はほぼ垂直に0.6m掘り込んでおり、直下には幅0.17m、深さ0.04mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。床面の北西部分に焼土の範囲を検出した。柱穴は対角線上に配置したP_1～P_4を検出した。径0.8m、深さ0.56m前後を計る。その他のピットを13か所で検出したが、深さ約0.28m前後のものである。また南壁に近く径0.4m、深さ0.33mを計るP_5を検出した。

カマド　北壁中央部を掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土の貼り込みは

D037出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	13.5	(13.3)	5.4	1/2	ヨコナデ	砂粒	堅緻	黒褐色	
2	甕	—	14.8	—	口縁部のみ	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
3	甕	—	8.1	—	底部のみ	ヘラ削り	雲母	堅緻	茶褐色	
4	甕	—	(18.4)	—	底部のみ	叩きじめ	小石	堅緻	灰色	
5	坏	4.8	12.0	—	完形	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	内面磨き
6	坏	4.8	14.0	—	1/2	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	内面磨き
7	坏	3.47	(13.4)	—	1/4	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒色	内面磨き

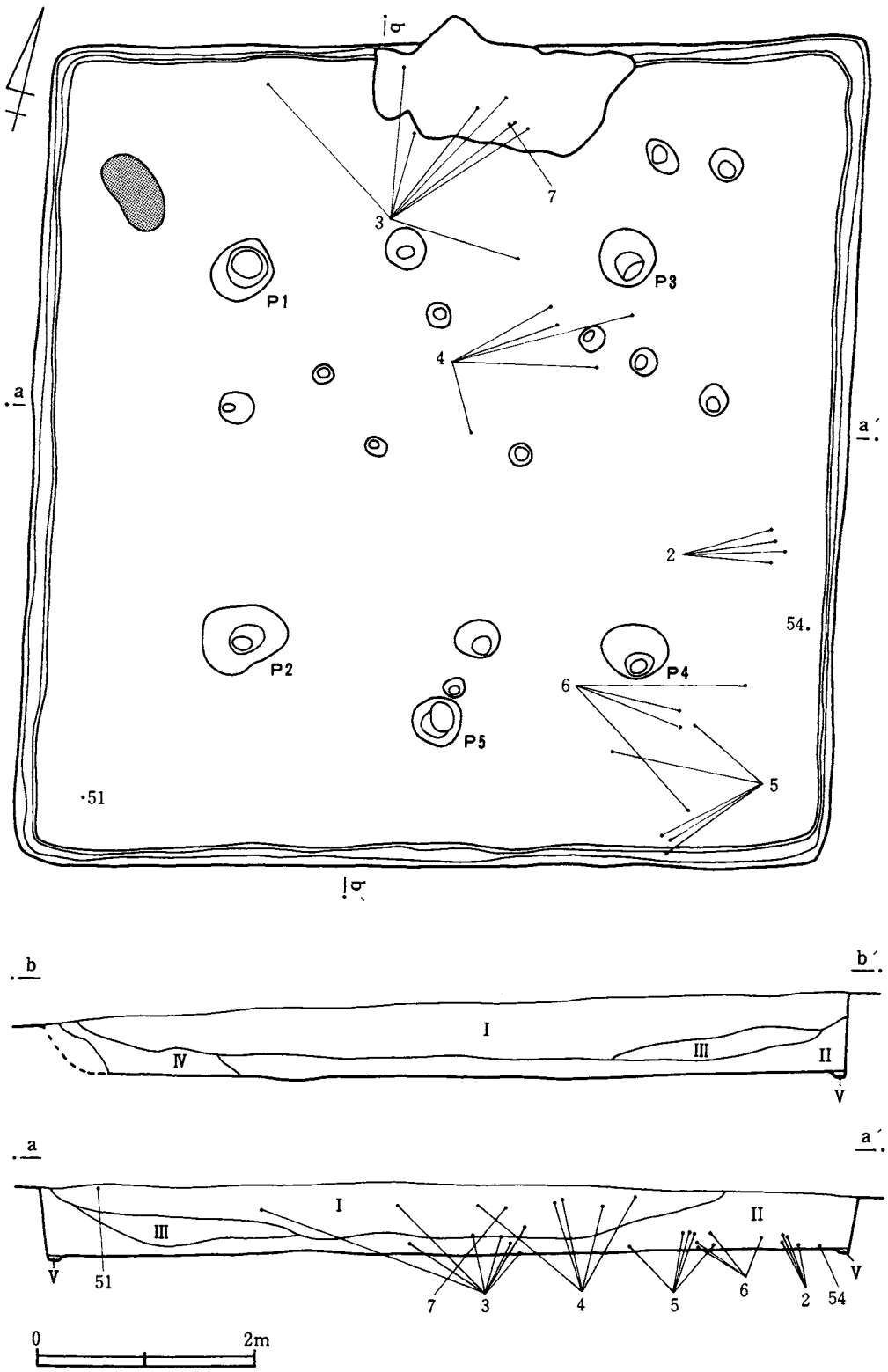


図293 D037号遺構実測図

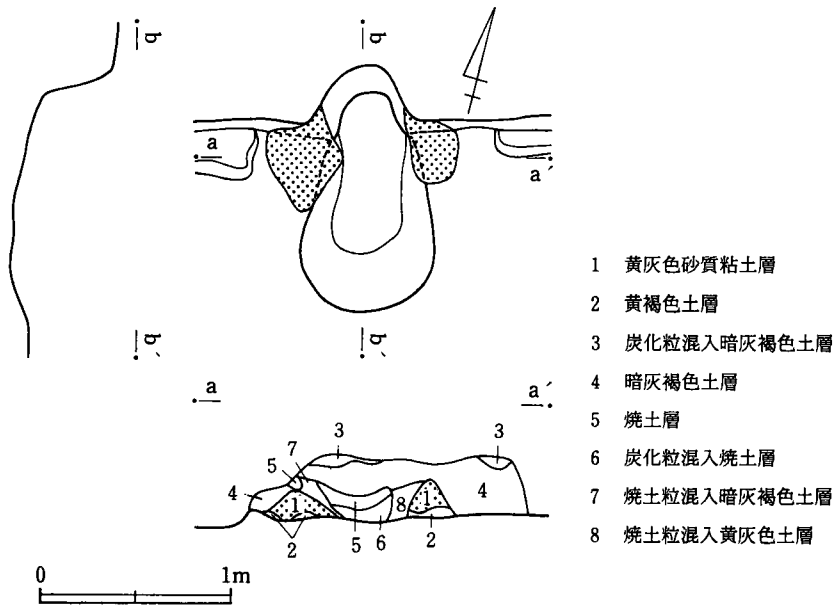


図294 D037号遺構カマド実測図

掘り込み部分に袖を形成しているみである。火床部は煙道部と続き楕円形を呈し、径0.05mの窪みとなっている。遺存状況は良好でない。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層ローム粒混入黒色土層、III層黒褐色土層、IV層粘土粒混入黒褐色土層、V層茶褐色土層が堆積しており、遺物は各層より出土している。石製遺物も各

D037出土位置別石製遺物集計　　※上段は成品、下段は未成品

出土位置	原石	石片	品目									合計
			臼玉	勾玉	剣形	有孔円板	双孔円板	円板状	双孔円板欠損品	勝	その他	
I層	—	1,975	8 199	—	1	—	—	—	—	—	1	2,184
II層	1	1,109	3 81	—	—	—	—	—	—	—	—	1,194
III層	—	412	1 36	—	—	—	—	—	—	—	1	450
IV層	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
貯蔵穴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
工作ピット	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
柱穴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
床	—	125	11	—	—	—	—	—	—	—	—	136
床下	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
その他	—	102	4	—	—	—	1	—	—	—	—	107
計	1	3,723	343	—	1	—	1	—	—	—	2	4,071

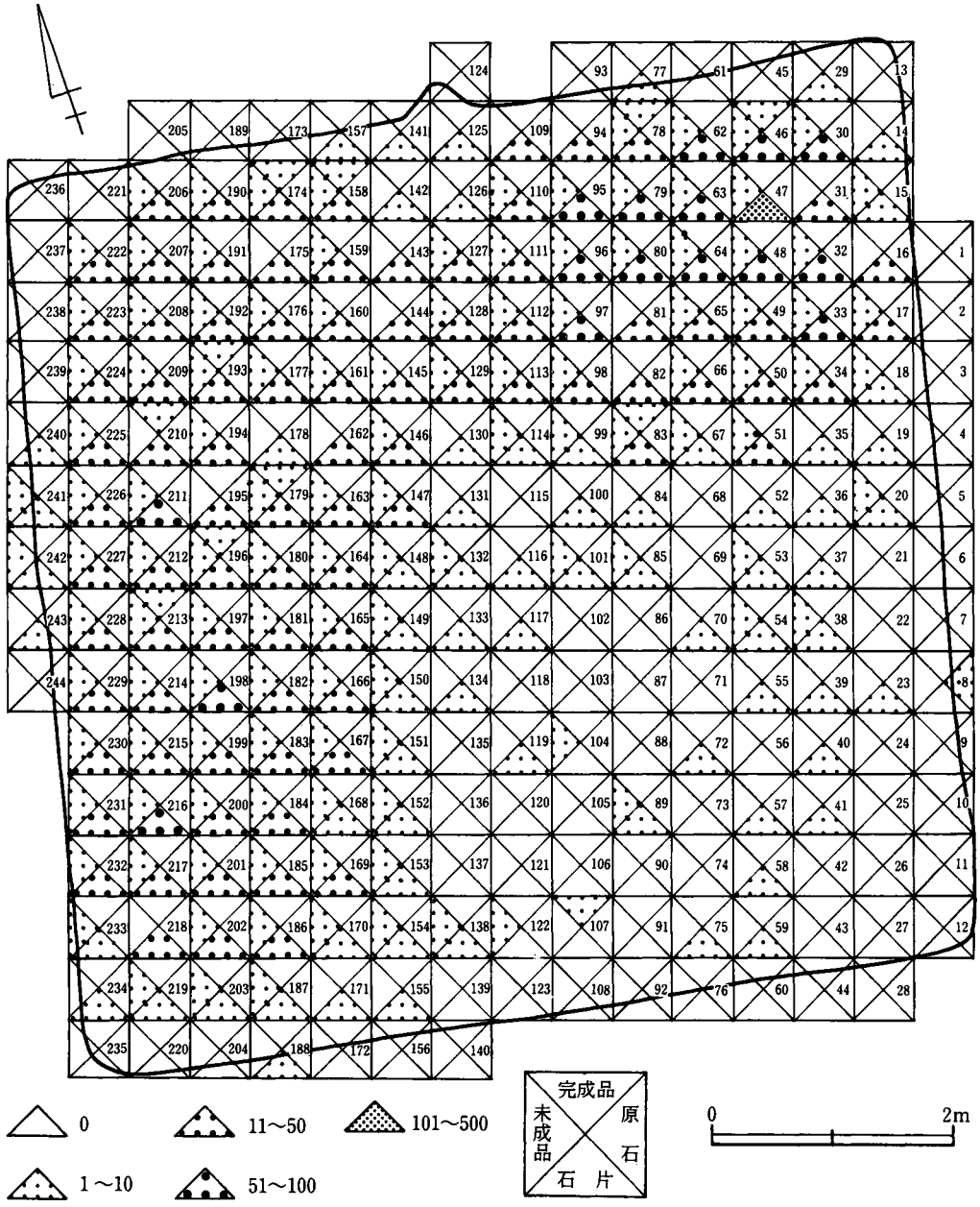


図295 D037号遺構石製遺物平面分布模式図

層より出土しているが、Ⅰ層が最も多く出土している。

出土遺物 遺物は、甕、坏形土器と石製品がある。甕形土器は1～4で、1、2は緩やかに外反する口縁部を呈している。3、4は底部破片であるが、4は歴史時代の遺物である。坏形土器は5～7で口縁部外面に稜を持ち、内屈する5、ほぼ直立する6、7がある。石製品は8～54で、いずれも滑石製である。8～18は臼玉、19～50は臼玉未成品、51は剣形品の未成品、52は勾玉、53は双孔円板の欠損品である。54は原石である。

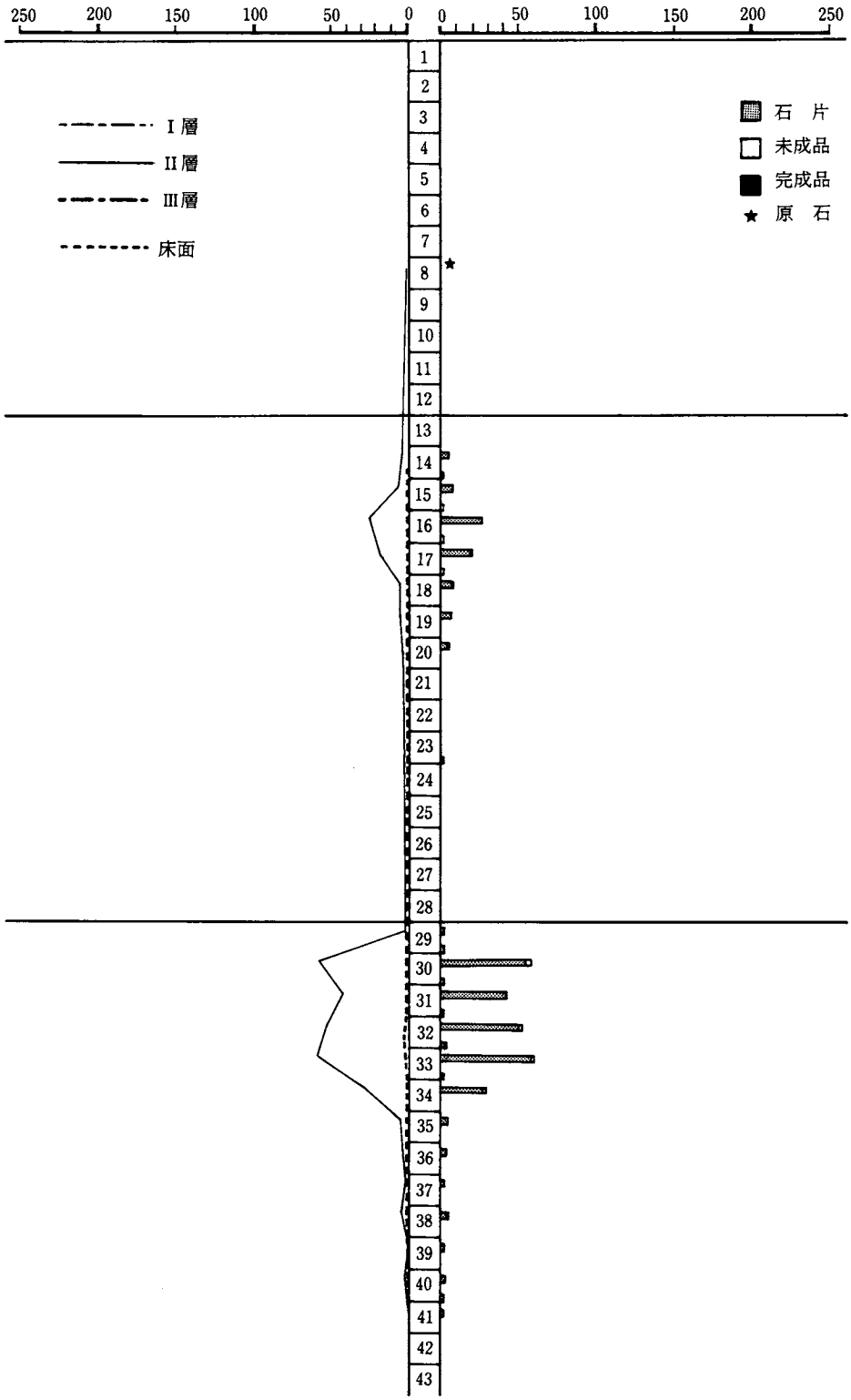


図296 D037号遺構石製遺物層位別分布図(1)

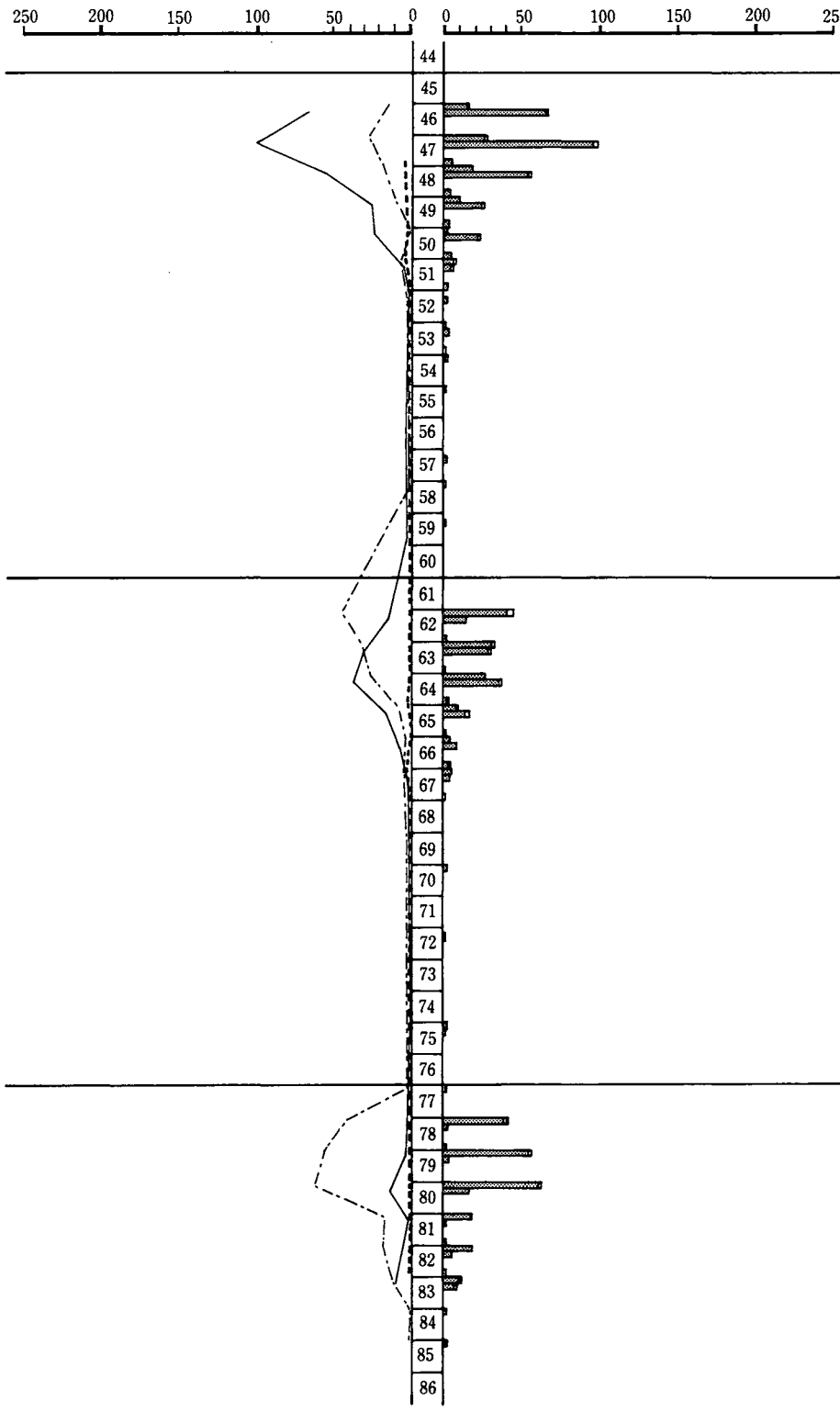


図297 D037号遺構石製遺物層位別分布図(2)

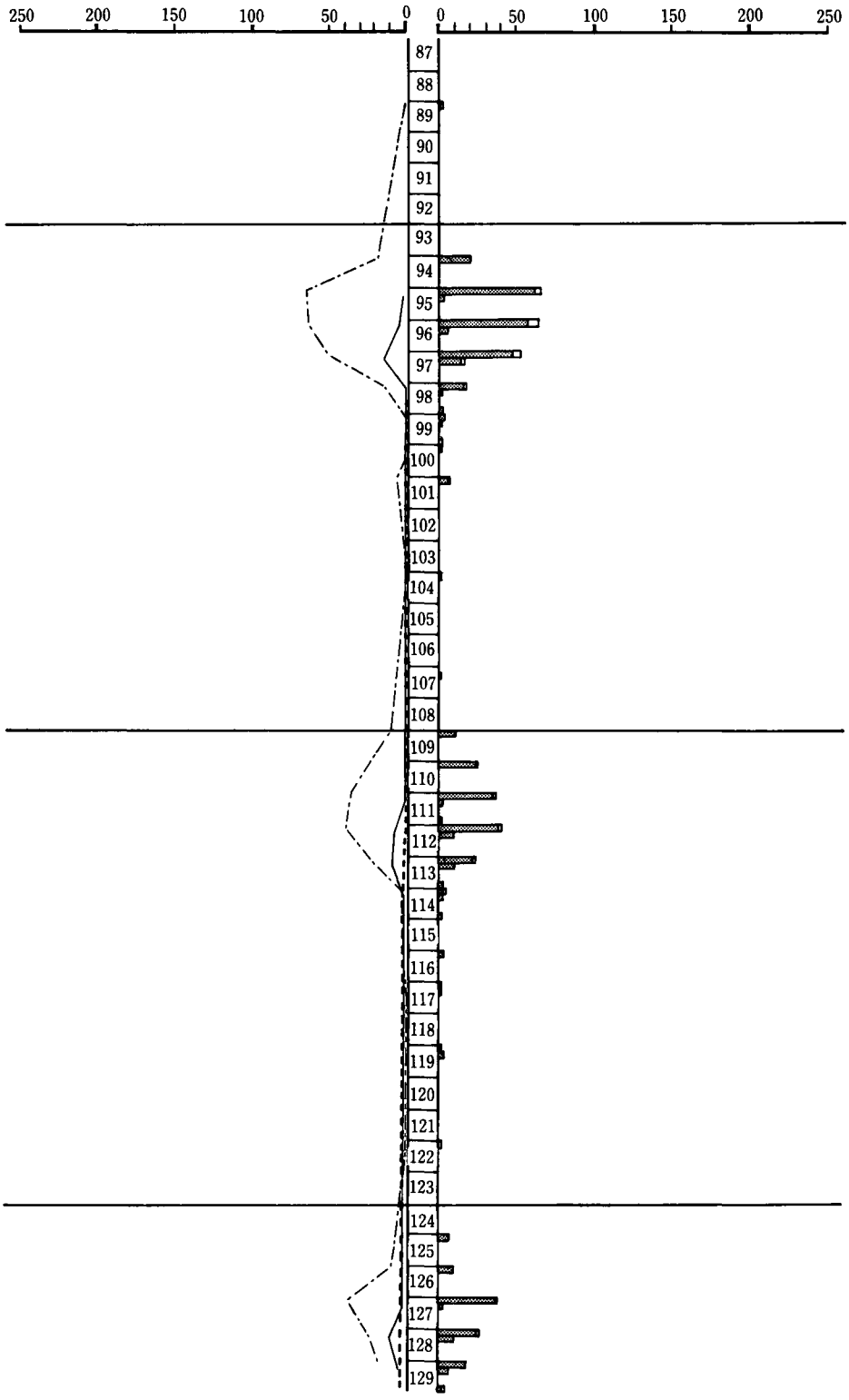


図298 D037号遺構石製遺物層位別分布図(3)

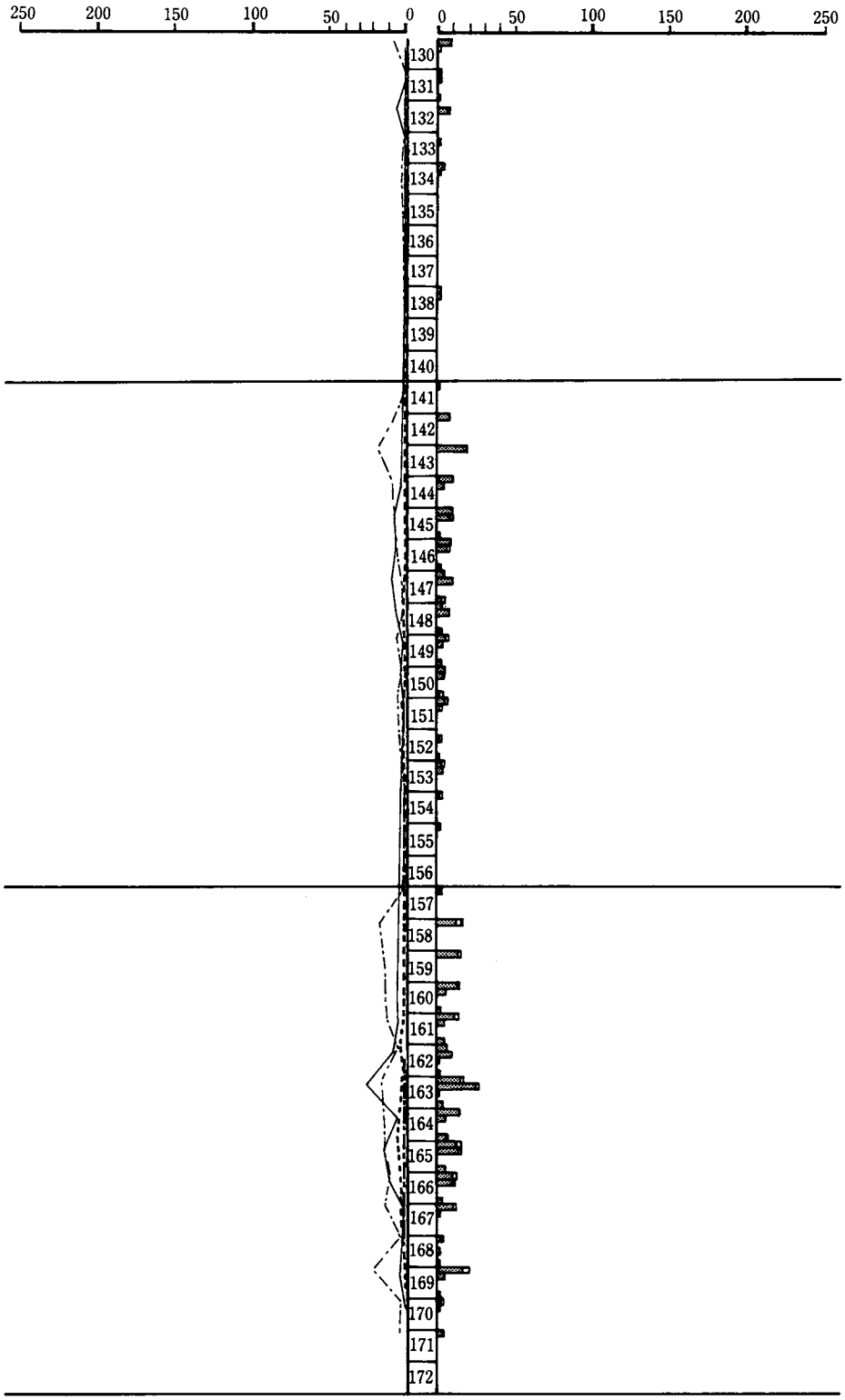


図299 D037号遺構石製遺物層位別分布図(4)

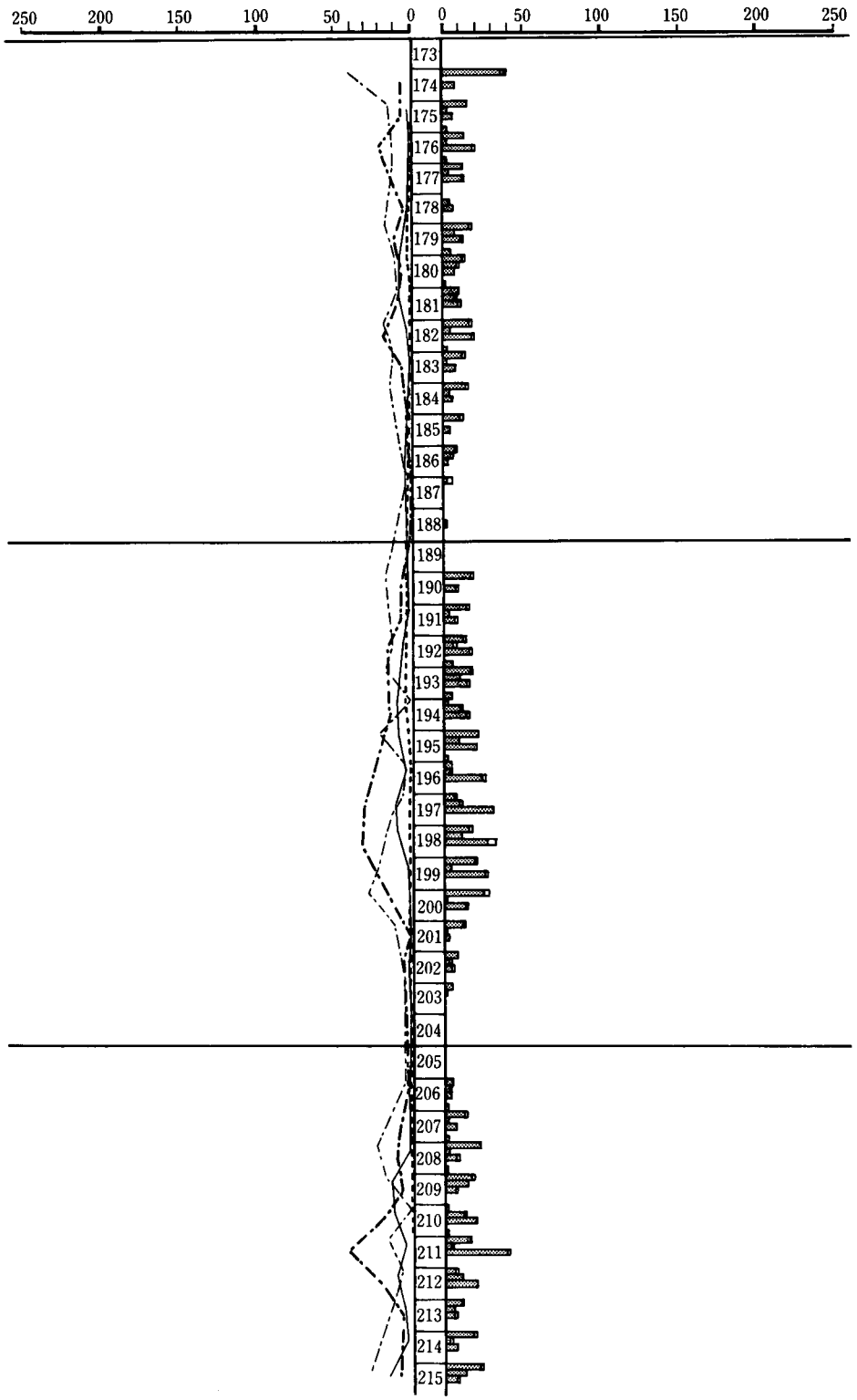


図300 D037号遺構石製遺物層位別分布図(5)

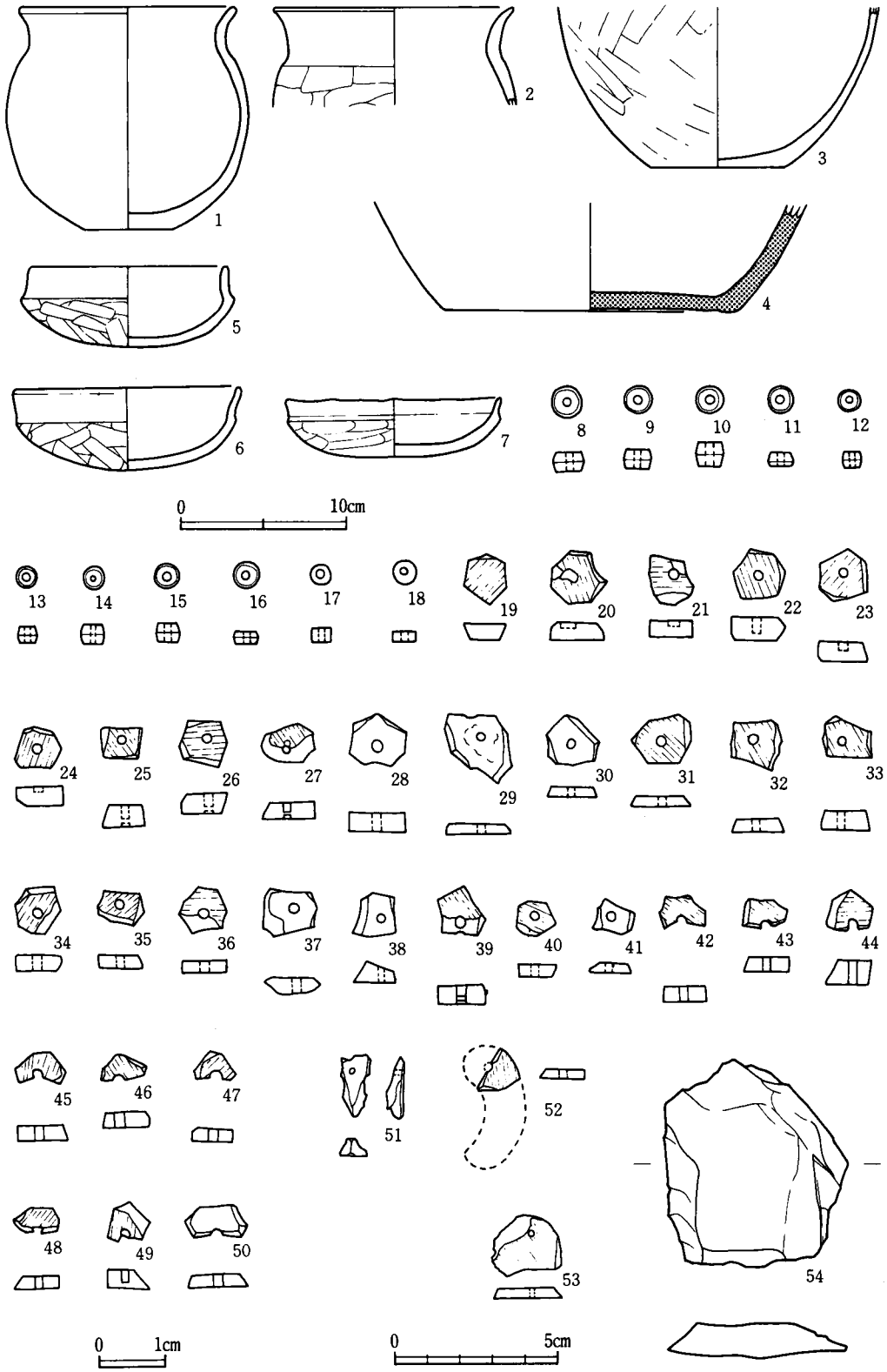


図301 D037号遺構出土遺物実測図

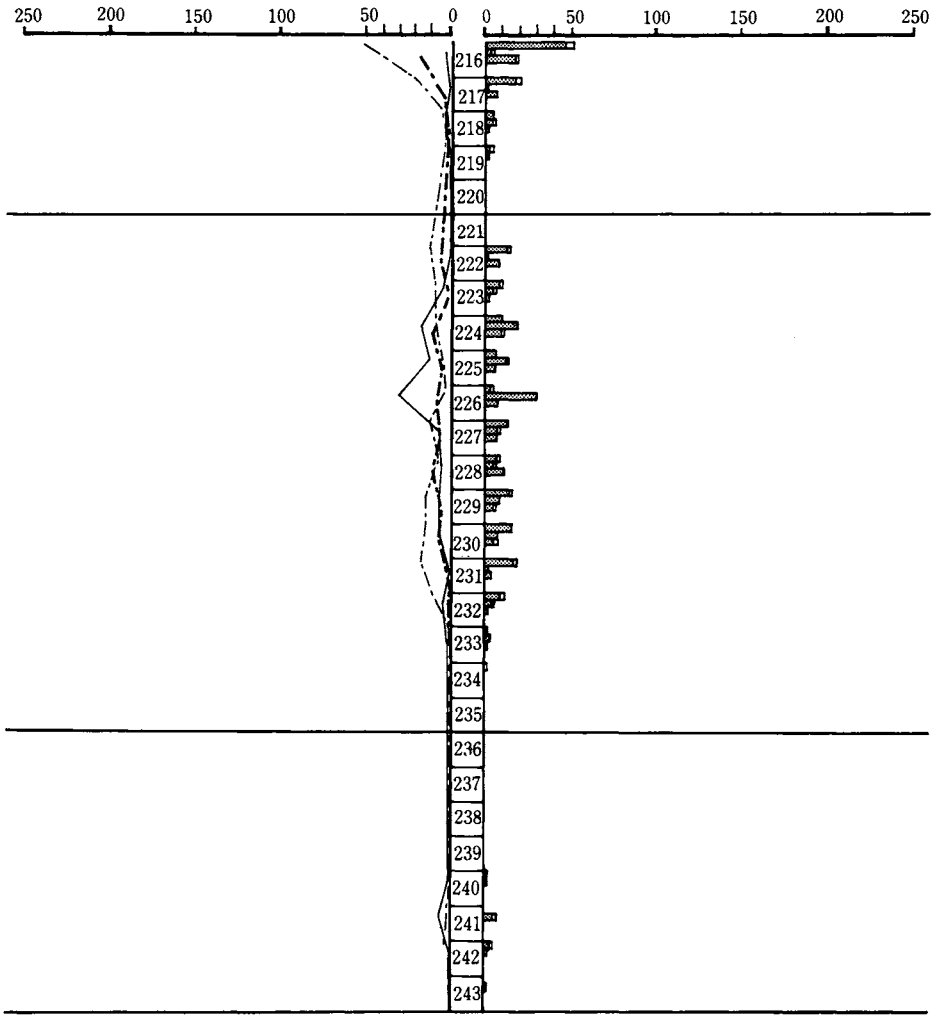


図302　D037号遺構石製遺物層位別分布図(6)

第3節　第II群の遺構と遺物

古墳時代後期の第II群は、竪穴住居跡2軒で構成される群で、T－6地域において検出した。

第II群が位置する地域は東側の地区界に近く、古墳時代中期や歴史時代の住居跡も立地しているが、重複関係を呈することなく分布している。

地区界に沿った東側の地域は未調査部分や調査対象外となっているため、検出した2軒をも

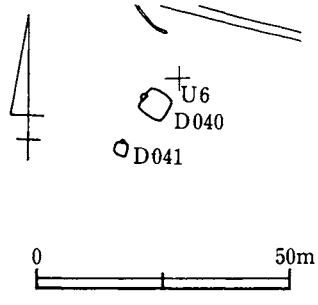


図303 古墳時代後期第II群遺構分布状況図

ってすべての住居を検出したとは言いがたく、東側の地域に住居の広がりが充分考えられるところである。しかし、後期の群構成は第Ⅰ群では東側地域の広がりが予測できるものの、第Ⅲ群では1軒単独に位置する状況を呈しており、第Ⅱ群においては検出した2軒だけの構成と言う可能性も考えられる。

住居の規模はかなり差があり、内部構造においても明瞭な違いが認められ、また、指向方位の面から見ても違いを生じているのが一瞥できる（図303)。

1．D040号遺構（図304～306、図版54－2・3、55）

地区界に近く、Ⅱ群内で北側に位置し、D041とは約6mの距離を有している。覆土の15%に相当する部分が芋穴による攪乱を受けているが、床面まで達しているのは5%にすぎず、遺構

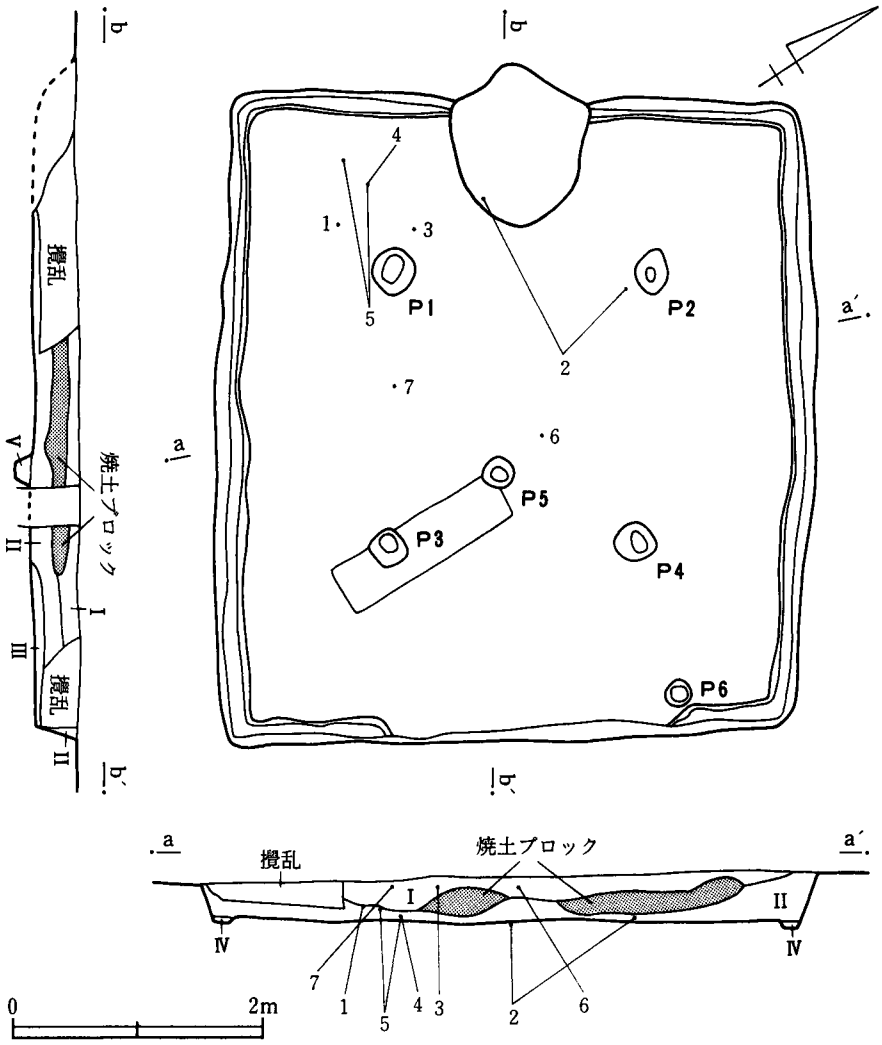
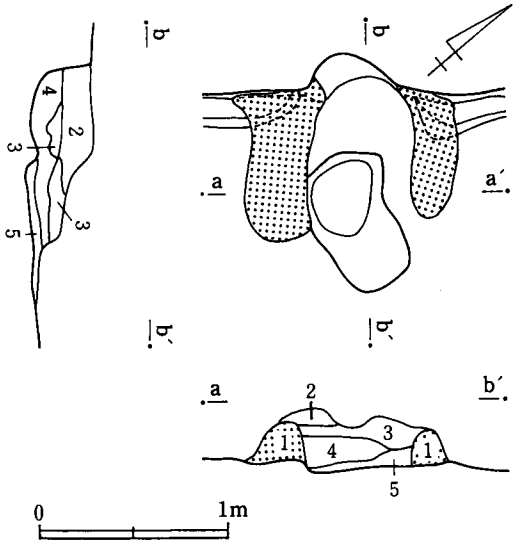


図304 D040号遺構実測図

の状況は充分に把握し得る。

遺構　北壁4.55m、東壁5.02mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.36m掘り込んでおり、直下には幅0.18m、深さ0.06mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は対角線上に配置したP_1～P_4を検出した。径平均0.30m、深さ平均0.37mを計る。その他、P_5、P_6を検出した。それぞれ径0.24m、深さ0.20mを計る。

カマド　北壁中央部を0.19m掘り込み、黄灰色砂質粘土で構築されている。粘土の貼り込みは壁前面部について認められるのみである。火床は長径0.70m、短径0.39m、深さ0.06mを計る不整の楕



1　黄灰色砂質粘土層
2　黒褐色土層
3　暗褐色土層
4　焼土ブロック層
5　ロームブロック混入明褐色土層

図305　D040号遺構カマド実測図

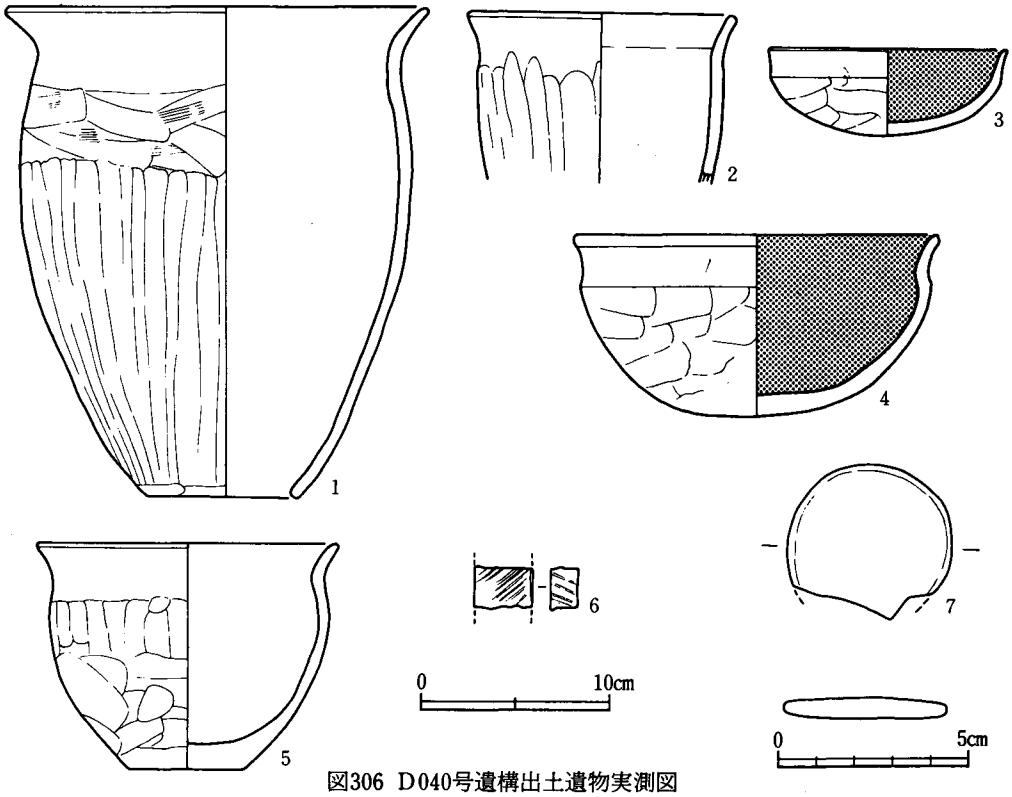


図306　D040号遺構出土遺物実測図

円形を呈している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層ローム粒混入黒褐色土層、Ⅳ層茶褐色土層、Ⅴ層暗茶褐色土層が堆積しており、遺物は床面上を中心に出土している。なお、D041出土の遺物と接合関係にあるものも認められる。

出土遺物　遺物は、甑、甕、坏、鉢形土器と石製品、鉄製品がある。甑形土器は1で口縁部は短かく外反する単孔のものである。甕形土器は2の口縁部破片である。坏形土器は3で、底部は丸底を呈し体部は若干の稜を境に直立する。鉢形土器は4、5で、口縁部は短かく外反するが、4は埦に近いものである。また5は甕に近いものである。石製品は6の凝灰岩製の砥石で、部分的に擦痕が認められる。鉄製品は7で、円盤状のものであるが用途は不明である。

D040出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甑	25.2	22.5	7.8	完形	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒 小石	やや堅緻	(内)赤褐色 (外)黒色	
2	甕	—	14.4	—	口縁部～胴部1/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
3	坏	4.4	12.6	—	完形	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	赤褐色	内黒
4	鉢	9.4	19.4	—	2/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	赤褐色	
5	鉢	11.6	16.0	6.0	完形	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	(内)黒色 (外)茶褐色	

2．D041号遺構(図307～309、図版55－1)

Ⅱ群内で南側に位置し、D040とは約6mの距離を有している。

遺構　南壁2.31m、東壁2.31mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈し、0.32m掘り込んで床面に達している。床面は中央部を中心として堅緻な状況である。南西コーナー部に径0.23m、深さ0.11mのP₁を検出した。柱穴、壁溝は検出できなかった。

カマド　東壁中央部よりやや南寄りに検出した。攪乱を受けているため遺存状況はきわめて悪く袖および

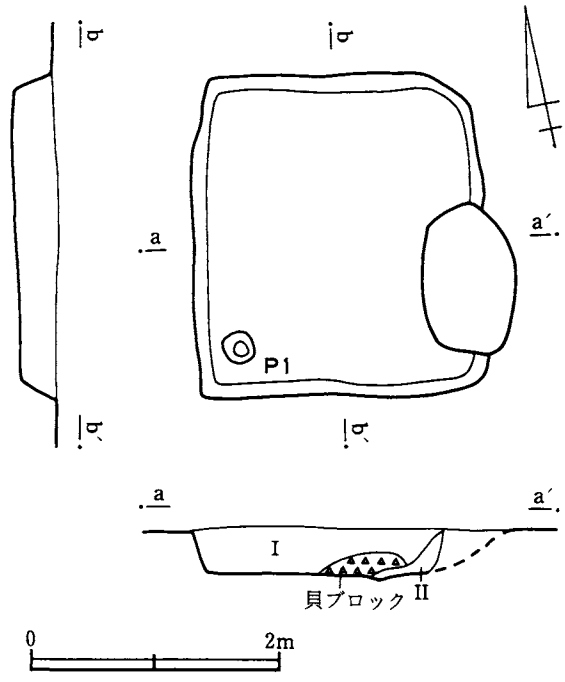
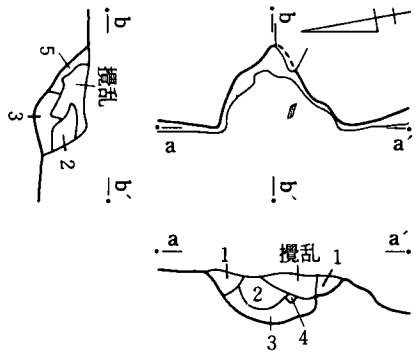


図307　D041号遺構実測図



1　黄褐色土層
2　ローム粒混入赤褐色土層
3　焼土ブロック混入赤褐色土層
4　焼土粒混入赤褐色土層
5　黒褐色土層

図308　D041号遺構カマド実測図

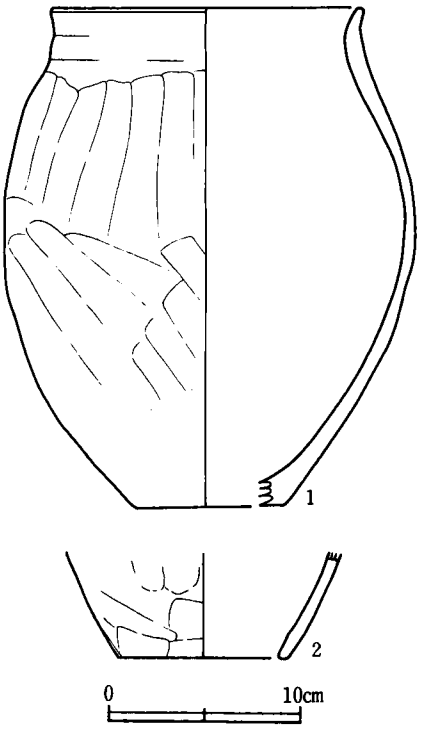


図309　D041号遺構出土遺物実測図

天井部の構築状況は不明である。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層ロームブロック混入黒褐色土層が堆積しており、カマド周辺には貝層が流れ込んでいる。遺物はカマド内を中心として少量出土している。1、2はカマド内出土である。

出土遺物　遺物は、甕、甑形土器がある。甕形土器は1で、底部の一部が欠損するが、短かく外反する口縁を有する長胴のものである。甑形土器は2の底部破片である。

D041出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	26.0	16.7	(7.7)	½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
2	甑	—	—	(8.85)	¼	ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	

第4節　第III群の遺構と遺物

古墳時代後期の第III群は、竪穴住居跡1軒のみの群で、P－5地域において検出した。

広範囲な面的調査を実施したが、近傍には同時期の住居等の遺構はまったく検出することができず、単独で位置している。古墳時代後期の群では、この第I群が1軒のみの検出に止まった。

第III群は、遺跡の北西部分の段丘の緩斜面に位置しており、前面には須久茂谷津の沖積地が迫っている。他群と立地的には共通の状況を呈していると言っても良いであろう。

古墳時代後期における他群のあり方を見れば、第Ⅰ群が4軒、第II群が2軒で構成している。第Ⅰ群は既に指摘したように東側地域に遺構の広がりを予測できるが、第II群は2軒のみの可能性を有しており、最少単位が想定できるものであるが、1軒のみの第III群のあり方は特異な状況を呈していると言って良いであろう。また、1軒単独で位置するあり方は古墳時代後期だけでなく、古墳時代中期や歴史時代においても設められる現象であることが注意されよう（図A）。

1．D020号遺構（図310～312、図版56）

1軒単独で位置しており、最も近い第II群からは210mの距離を有している。

遺構　北壁5.50m、東壁5.56mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.30m掘り込んでおり、直下には幅0.18m、深さ0.06mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は対角線上に配置しており、径平均0.25m、深さ平均0.38mを計るP_1～P_4を検出した。いずれも住居中央寄りに位置している。その他ピットは、南壁中央部に近接して径0.30m、深さ0.45mのP_5を検出した。

カマド　北壁中央部を0.34m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは掘り込み部分までの袖を形成するのみで煙道部への貼り込みは認められない。火床に相当する部分はほとんど窪んだ状況は認められない。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、III層黒褐色土層、III層褐色土層、IV層茶褐色土層が堆積しており、遺物は少量であるが、床面上およびカマド内から出土している。

出土遺物　遺物は、甕、甑、坏、高坏形土器と土製品、石製品がある。甕形土器は1、2で口唇部に特徴を有し、胴部に条痕状の磨きが認められる。甑形土器は3、4で3は口縁部が短かく外反するもので単孔である。4は口縁部破片である。坏形土器は5、6で、いずれも丸底

D020出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	33.9	22.6	7.2	完形	ヨコナデ 磨き	砂粒 雲母	やや軟弱	茶褐色	
2	甕	—	—	9.45	底部のみ	磨き	雲母	堅緻	(内)茶褐色 (外)赤褐色	
3	甑	24.7	21.2	8.9	¾	ヨコナデ ヘラ削り	雲母	やや軟弱	茶褐色	二次的に火を受ける
4	甑	—	(27.6)	—	口縁部のみ	ヨコナデ	雲母	堅緻	茶褐色	
5	坏	—	12.5	—	½	ヨコナデ	—	堅緻	黒褐色	
6	坏	3.7	(13.0)	—	½	—	砂粒	堅緻	黒褐色	

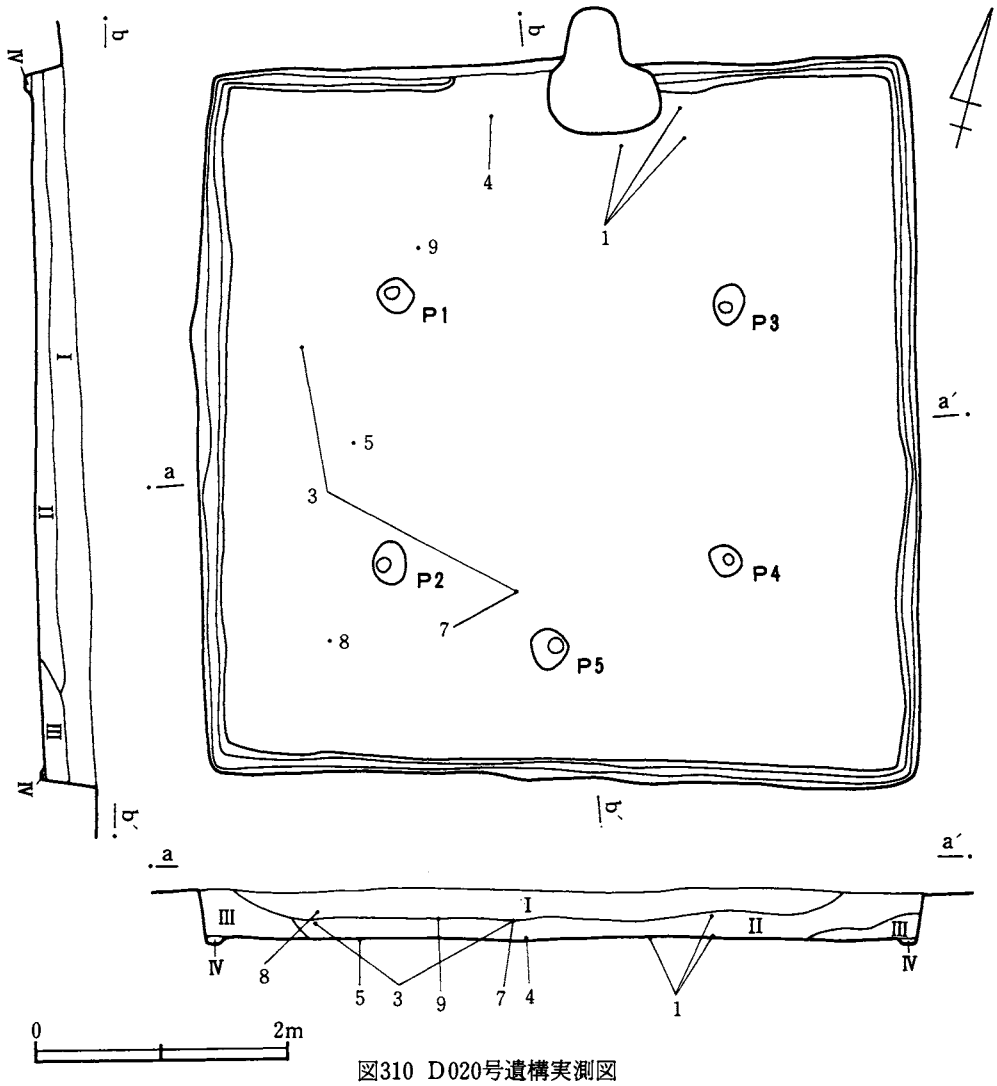
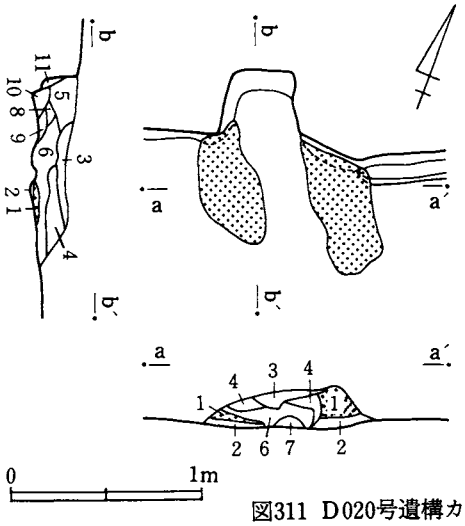


図310 D020号遺構実測図



1 黄灰色砂質粘土層
2 黒褐色土層
3 暗褐色土層
4 砂質粘土粒混入褐色土層
5 赤褐色土層
6 黒灰色土層
7 焼土ブロック層
8 焼土層
9 ローム粒・焼土粒混入褐色土層
10 褐色土層
11 茶褐色土層

図311 D020号遺構カマド実測図

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
7	高坏	—	—	—	接合部のみ	ナデ	砂粒	堅緻	(内)黒色 (外)茶褐色	内面磨き

を呈している。高坏形土器は7で脚部の破片である。土製品は8の支脚で円錐状を呈すると思われる。石製品は9の砂岩製の敲石である。上下両端にその痕跡が認められる。

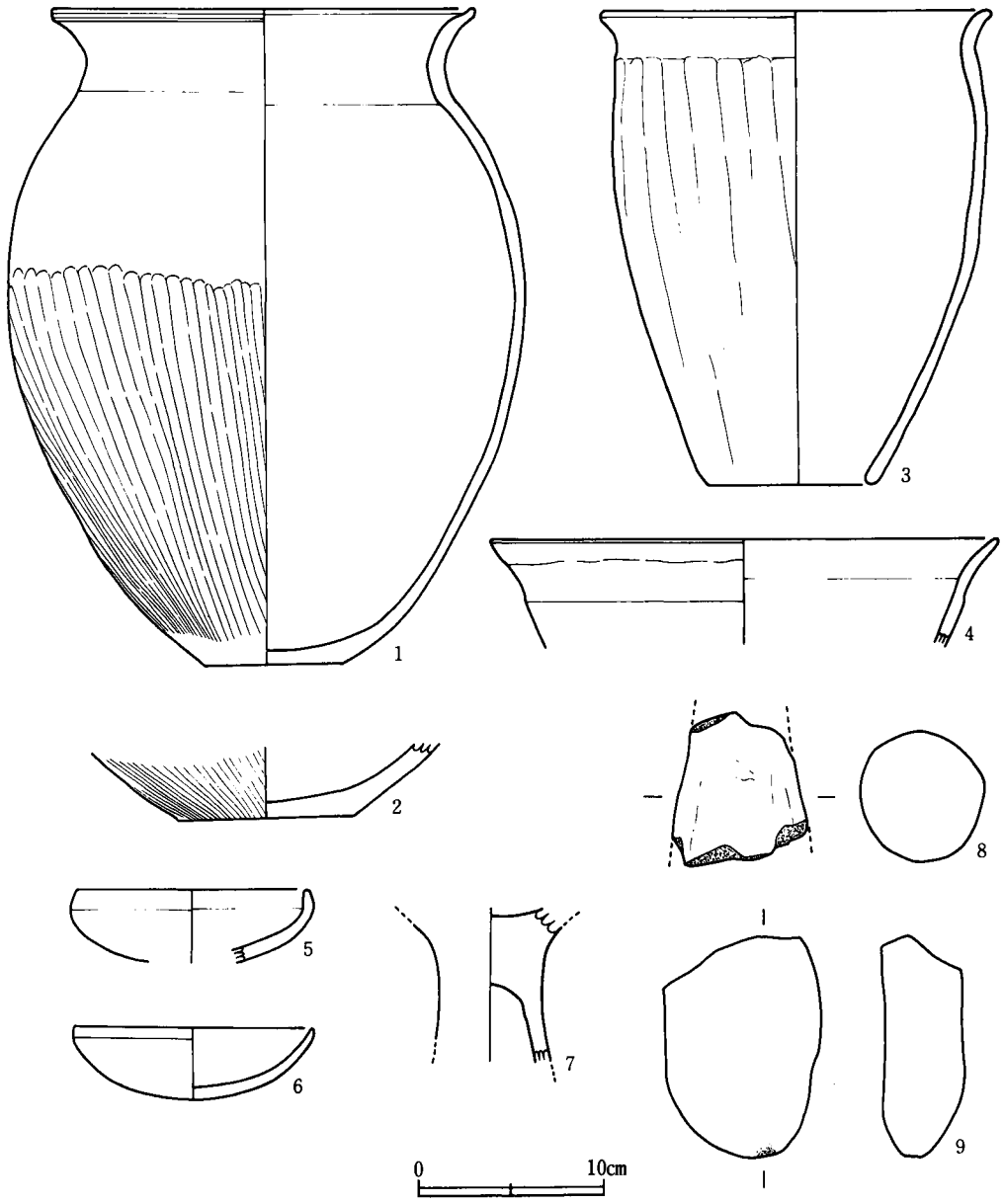


図312 D020号遺構出土遺物実測図

第4章　ま　　と　　め

第1節　古墳時代中期の様相

1．竪穴住居跡について

古墳中期に比定できる遺構は、竪穴住居跡22軒で、住居跡の分布のうえからⅠ群からⅥ群による集落を構成している。

各群については事実記載において述べたように各群各様の状況を呈しているが、22軒の内約半分に相当する12軒は、多量の石製模造品の成品や未成品を出土する工房跡でもあり、中期の集落は工房跡群を包括した様相を有している点に特徴づけられよう。ただし、12軒すべてが石製模造品の生産に関与していたかについては明瞭な検証資料を提示しているとは言えない状況である。したがって、個々の竪穴住居跡の規模や内部構造を中心に対比し検討する必要がある。

平面形は、方形を呈する遺構が全体の7割を占め、当該期における一般的なあり方を示している一方、長方形を呈する住居が存在する。長方形を呈する住居は南北方向に長く、北側の壁寄りに炉が設置しているものであるが、D055のように横広な長方形を呈する住居の存在も見逃すわけにはいかない。工房跡は、一部不整な形状を呈するものの、12軒すべて方形を呈しており、統一的な傾向を示していると言って良いであろう。

規模においてはD131が最も小さく、方約3mで、D016が最も大きく方約6.7mであり、極端な差を有している。当然、他の住居跡はこの範囲内に位置している。規模において見られるこの差は、実際には一定の集中する範囲を示す傾向があり、住居跡と工房跡にそれぞれ集中分布のうえで相違しているのが認められるところである。まず、住居跡について見れば、方約3mから方約4.5mの範囲であるのに対し、工房跡は方約4.5mから方約5.5mにあり、少なくとも機能の違いによって遺構の規模を選択している可能性が窺えるところである。

内部構造においては、柱穴、炉、貯蔵穴(工作用ピット)、壁溝等の施設があり、各部分ごとに住居跡と工房跡とを対比して見る必要がある。

柱穴は、住居跡10軒の内4軒に認められるが、残り6軒については認められず、また工房跡においても12軒の内3軒に認められ、9軒には認められないと言う無柱穴住居の比率が高い状況を呈している。

炉は、住居跡10軒の内8軒に認められ、2軒については認められない。工房跡においては12軒の内7軒に認められ、5軒については認められず、工房跡は住居跡に比較して炉の設置割合が低い傾向を示していると言える。

貯蔵穴および工作用ピットについては、互いに重なる面があり、工作用ピットの性格につい

てはいずれか判断しかねる場合もあるが、この状況は工房跡について言えることであり、住居跡の場合については貯蔵穴と考えて良いであろう。また、工房跡においても貯蔵穴を併設する場合も当然考えられる。

住居跡において貯蔵穴が認められるのは10軒の内3軒と、かなり設置される場合が少い状況を呈しており、さらに設置される住居跡は規模や柱穴等の内部施設が他の住居跡より勝っている点を指摘できる。一方工房跡においては、先に指摘したように工作用ピットは、貯蔵穴と重なり判然としない面があるが、明らかに工作用ピットとしての性格を具備した工房跡もある、D012、D022に設置されるピットがそれに当たり、D012のピット内部からは砥糞が、D022のピットから粘土を検出している。この2軒以外の10軒において貯蔵穴、あるいは工作用ピットがまったく認められない工房跡が1軒存在しており、他と様相を異にしていると言えるであろうが、工房跡であることを否定する材料にはならない。

壁溝は、住居跡10軒の内変則的なあり方を呈している1軒を含め3軒のみである。工房跡においてもほぼ同様であり、12軒の内変則的なあり方を呈している1軒を含め5軒のみで、他にはまったく認められない状況が看取でき、少なくとも北海道遺跡においては壁溝の設置は一般的なあり方を示していないようである。

以上を要約すれば、北海道遺跡における当該期の平面形のあり方は、工房跡においては方形の形状を呈すものの、住居跡においては長方形を呈するものも散見できる。また先に指摘したようにD055のように横広な住居の存在も注意する必要があろう。

横広な長方形の平面形を呈する住居跡は既に権現後遺跡弥生時代第IV群Bに認められており、北海道遺跡が初見になるものではない。

権現後遺跡では弥生時代終末期から古墳時代前期に推移する集落構造が捉えることができた関係で、便宜的に古墳時代前期に比定できる住居群を弥生時代に包括して解説しており、第IV群Bはいずれも古墳時代前期の住居跡である。したがって、北海道遺跡において古墳時代中期に横広な平面形を呈す住居跡が存在することは、長方形の平面形を根強く採用していることを示唆するものと言えるであろう。

規模は、住居跡より工房跡が大形であり、内部構造においても炉が住居跡に一般的であるのに対し、工房跡では5軒に認められない状況を呈している。一方、貯蔵穴については、住居跡において一般的に認められて良いところであるが、3軒と少なく、工作用ピットを含め貯蔵穴は工房跡に多く認められる傾向を示している。

以上のように住居跡と工房跡を対比して検討してきたが、明確な相違は認められず、両者が示す傾向が把握できただけであり、傾向は両者を区分するだけの積極的な資料にはなり得ない。したがって、12軒すべてが工房跡と考えて良いと思われるが、総合的な所見より判断すれば、IV群D039とVI群D021は住居跡の蓋然性が高い。

2．石製遺物について

北海道遺跡出土の石製遺物は、臼玉をはじめ勾玉、剣形品、有孔円板、双孔円板、円板状石製品、滑などがある。これらの品目は権現後遺跡で認められた石製遺物の品目を凌ぐもの[註1]であり、北海道遺跡における工房跡の特徴が示されるところである。しかしながら、権現後遺跡における品目の少なさは、生産自体を否定するものではなく生産量に問題があり、成品を遺構外に搬出した結果として考えている。このことは実は、北海道遺跡においても言えることであり、品目が多いとは言え、臼玉と比較すればその量は極めて稀少と言わざるを得ず、ここに臼玉以外の品目についての生産の実態が認められるところと考えられ、加えて該期における祭祀等の実態からも、臼玉の大量生産の必然性が窺えるところである。

臼玉に関しては出土量が多いため、成品、未成品を多く含んでおり、製作過程が比較的容易に把握できる内容を有しているところであるため、臼玉の製作技術を中心に記述したい。

玉類についての基本的な製作過程は、採石―荒割―形割―側面打製―研磨―穿孔―仕上げの工程を経るものと考えられており[註2]、本遺跡における製作過程についてもほぼこの範囲の中で考えることが可能であろう。

原石より剝離された剝片は、最も薄いもので0.7㎜、最も厚いもので５㎜を計り、平均的には1.5㎜から５㎜の範囲に剝離された剝片を素材としていることが窺れる。臼玉計測値の分布図は、臼玉の成品と未成品について厚さと外径について図示したものであり、素材の厚さがかなり均質化していることを反映していると言って良いであろう（図313)。

臼玉の成品と未成品について細部を観察すると表裏両面に研磨を施した剝片を素材としたものと、研磨を施さず剝片そのままを素材としたものと２通りの工程を看取することができる。今、仮りに前者をＡタイプ、後者をＢタイプとして各工房跡から出土した臼玉の成品と未成品についてその比率を求めると次のようになる。

D010は、Ａタイプが20点、Ｂタイプ277点で、Ａタイプ6.7%に対しＢタイプは93.4%と圧倒的にＢタイプがＡタイプを凌駕している。またD011では、Ａタイプが３点、Ｂタイプ112点で、Ａタイプ2.6%に対しＢタイプ97.4%と本跡も圧倒的にＢタイプが多い、D012は工房跡の中で最も出土量を誇っており、Ａタイプ44点、Ｂタイプ1,818点で、Ａタイプ2.3%に対しＢタイプは97.7%と本跡も圧倒的にＢタイプが多い。D013は出土量が少なく検討に堪えない面があるものの、Ａタイプ５点、Ｂタイプ144点で、Ａタ

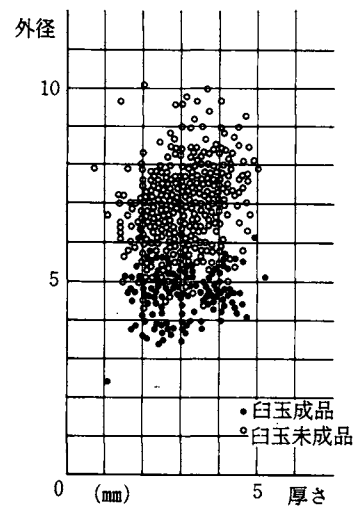


図313 古墳時代中期の臼玉計測値分布図

イプ3.3%に対しBタイプ96.7%とBタイプが多い。D014では、Aタイプ574点、Bタイプ392点で、Aタイプ59.4%に対しBタイプは40.6%とAタイプの比率がBタイプより高い数値を示しておりAタイプとBタイプの比率値が前の4軒と比して逆転する現象を示している。D016は、Aタイプ77点、Bタイプ519点で、Aタイプ12.9%に対しBタイプ87.1%とBタイプがAタイプを凌ぐもののAタイプが他より若干多い傾向を示している。D022は、Aタイプ18点、Bタイプ435点で、Aタイプ3.9%に対しBタイプは96.1%と本跡も圧倒的にBタイプが多い。D058は出土量が少なく検討に堪えない面があるものの、Aタイプ3点、Bタイプ42点で、Aタイプ6.6%、Bタイプ93.4%を示している。D059は、Aタイプ65点、Bタイプ284点で、Aタイプ18.6%に対しBタイプは81.4%を示している。D080は、Aタイプ4点、Bタイプ342点で、Aタイプ1.2%に対しBタイプ98.8%を示し、本跡も圧倒的にBタイプが多い。

以上のように北海道遺跡においてはBタイプの剝片素材を多用して臼玉の生産が行われていた例が多く、一つの技術的な特徴として捉えることが可能であろう。このことは臼玉の計測分布図が示す通り、成品と未成品は厚さの上ではほぼ同様な分布値の範囲を示しており、成品までの過程において表裏両面を研磨すると言う工程を経ることが少なかった結果として理解することができる。

一方、D014のようにAタイプの比率がBタイプを凌ぐ状況も見過ごすわけにはいかない。実際には、このAタイプはD014以外の工房跡においても散見できるものであり、未成品のみならず成品においても認めることができる。しかし、数量的に少ない点や、Bタイプを凌く例がD014の1軒と言う点からすれば、やはり北海道遺跡における一般的なあり方はBタイプが主流を占めていたと考えざるを得ないであろう。

さて、Aタイプについては、北海道遺跡では一般的な技術的特徴として認めることはできないが、須久茂谷津を挟んで対峙する権現後遺跡においては、該期の工房跡を4軒検出しているが、いずれもAタイプが主流を占めており、北海道遺跡とはまったく違ったあり方を示している点に注目しなければならないであろう。そこで問題となるのはD014の存在である。D014の状況については先に指摘した通り、権現後遺跡において支配的である技術（Aタイプ）と北海道遺跡において支配的である技術（Bタイプ）を持ち合せていることである。このことは滑石製模造品、特に臼玉の生産行為から見れば、明らかに表裏両面を研磨するAタイプよりBタイプを素材とした方が量産が望めるところであり、北海道遺跡における工房跡は正に量産体制下における生産行為が行われていたことになる。その中におけるD014は、基本的なAタイプの技術を有しながらBタイプの素材を用いた生産が併行して行われており、両遺跡での技術的特徴を反映していると言って良いであろう。

この技術的特徴がどのような背景の中で成立したかについては検証資料に恵まれないため明確に理解することは難しいが、権現後遺跡における工房跡は、銅鏃の出土などからすれば、中

期前葉の時期に比定が可能であり、北海道遺跡における工房跡は総じて権現後遺跡の工房跡より後出要素のある土器を出土しているため、時期差による技術の相違が考えられるところである。残念ながらD014からは土器の出土がきわめて少量であるため時期を決定するうえで適格な判断ができないが、権現後遺跡と同様のAタイプを素材とする技術的特徴を有しているとともにBタイプを素材とする技術的特徴の存在も認められることから考えれば、石製品の生産拠点が権現後遺跡から北海道遺跡に推移したことを物語っているのではないであろうか。北海道遺跡においては、D014は工房の中核的な存在として生産を開始する一方、量産体制を執る必要からBタイプを素材とする生産体制に移行し量産体制の一翼を担ったものと推測できる。しかしながら、権現後遺跡における技術と、北海道遺跡における技術が同一系譜における量産体制のみの問題によって顕現するものか、あるいはまったく異なる生産体制下における所産であるかについては判断し難い点もあり、今後の課題としなければならないところである。

註

1　千葉県文化財センター　『八千代市権現後遺跡』　昭和59年

2　寺村光晴　「石工」　『考古学講座』　9　昭和46年

第2節　古墳時代後期の様相

1．遺構について

古墳時代後期の集落跡については、事実記載において述べたように3群から構成されている。各群で検出した遺構は、I群で4軒、II群で2軒、III群で1軒の合計7軒である。この7軒をもって後期の集落跡をすべて検出したわけではなく、III群を除いた2群は、群の立地する地域の状況から察すれば、東側の地区界沿における未調査部分や、調査対象地の地域に遺構の広がる可能性を充分に持っている点を考慮しなければならない。一方、III群は、かなり広範囲な面的調査を実施したにもかかわらず該期の遺構は1軒のみの検出に止まった。遺構の位置する北方には須久茂谷津の沖積地が迫っており、住居の所在する可能性はきわめて薄いと考えられる。

検出した7軒をもって集落について考えることは難しいが、この7軒の内1軒が滑石製模造品の工房跡である可能性があり、中期における集落と関連して考える必要があろう。

遺構は、方形の平面形が主流を占め、規模や内部施設において相違が認められる。I群においては、D037が方約7.3mであるのに対して、D050は方約3.3mであり、著しい差を生じている。内部施設の内柱穴については、D001のみに認められず、他の3軒に認められる。壁溝は4軒共通して認めることができる。カマドは、北壁中央部に近く構築され、指向方位もほぼ同一である。この点は遺構の分布状況を一瞥しても明らかであろう。壁の掘り込みは比較的深く、

堅牢な構えを呈していると言えるであろう。遺構の分布状況は、一見直線上にほぼ南北に連なるようであるが、環状形に分布する可能性も否めない。II群においては遺構数が2軒と少ないため検討に堪えない面もあるが、規模としてはD040が方約 4.5 m に対してD041が方約 2.3 m とかなりの差を生じていると言えるであろう。内部施設に関して言えばD040は壁溝、柱穴が認められるが、D041はこれらが欠落している。カマドに関してはD040が北壁であるのに対し、D041は東壁に位置している。壁の掘り込みについてはD040が比較的堅牢な状況を呈しているのに対してD041は掘り込み自体が浅い。しかしながら床面の状況は両者間において差は見い出すことはできない。III群は1軒単独であるため他と対比することはできないが、規模や内部施設はI群のD006に近似してる点が指摘できる。各群の住居跡に共通して言える点は、貯蔵穴が認められないことである。I群中のD005、D037においては南壁中央部に近く小ピットを検出してるが貯蔵穴の性格は具備していない。該期においてはカマドの脇や、カマドと対面する壁の中央部や、一部壁を掘り込んで認められる例もあるが、北海道遺跡においては一例も存在していない。

2．出土遺物について

出土遺物の内、土器は鬼高期の範疇において捉えることが可能であるが、いずれも同一時期として捉えることは不可能であり、時間差が認められるところである。

土器の器種構成は、甕、甑、鉢、坏、高坏形土器の構成が一般的で、その他に数種の器種が加わる場合が認められる。

甕形土器は、口縁部の形状の違いによって次のように区分できる。

(1) 緩やかに外反するもの。

(2) 直線的に直立ぎみに開くもの。

(3) 緩やかに外反し口唇部が若干突出するもの。

(1)の中に胴部が球形に近いものが存在するもののほとんど長胴を呈している。胴部の調整はヘラ削りが主流を占めるが、(1)の中にはナデを施すものもあり、(3)は条痕状の磨きが施される。

甑形土器は形状の相違によって次のように区分できる。

(1) 鉢形の形状を呈すもの。

(2) 長甕形の形状を呈すもの。

いずれも胴部は直線的に構成されており、調整はヘラ削りが多用されるが、(2)の中には条痕状の磨きが施されるものもある。

鉢形土器は、2通りに区分できるが、区分した中には厳密に言えば、小形甕、埦として取り扱うべき器種も含めていることをあらかじめ断っておきたい。

(1) 埦形の形状を呈すもの。

(2) 鉢形の形状を呈すもの。

(3) 体部が直線的になるもの。

(1)は丸底を呈しており、口縁部は短かく、中には赤彩されるものもある。(2)、(3)は平底を呈し、体部はヘラ削り調整が施される。

坏形土器は、丸底を呈すものが多いが、体部の形状の相違によって次のように区分できる。

(1) 体部が曲線的になるもの。

(2) 体部外面に稜を有し、内屈するもの。

体部の調整はナデが主流を占め、赤彩されるものもある。(2)、(3)は身が浅く体部はヘラ削り調整が施されている。

高坏形土器は、出土例が少ないため検討に堪えない面があるが、大小の差は認められるものの、坏部は体部外面に稜を有し大きく外反する形状を呈し、脚部も「ハ」字状に大きく開く形状を呈している。

遺構ごとの器種構成を示すと以下のようになる。

第Ⅰ群

D001　甕(1)＋鉢(2)＋坏(1)、(2)、(3)＋手捏土器＋長頸瓶（須恵器）

D005　甕(1)＋甑(1)＋鉢(2)、(3)＋坏(1)、(2)、(3)＋高坏＋手捏土器

D006　甕(2)＋甑(2)＋鉢(1)

D037　甕(1)＋坏(2)

第Ⅱ群

D040　甑(2)＋鉢(1)、(2)＋坏(2)

D041　甕(1)＋甑(?)

第Ⅲ群

D020　甕(3)＋甑(2)＋鉢(?)＋坏(1)＋高坏(?)

器種構成における煮沸、供膳形態の土器群が明確に捉えられる遺構は、Ⅰ群中のD005とⅢ群のD020である。ただし、D020の鉢、高坏に関しては破片であるため正確な器種構成を反映しているか危惧されるところであり、厳密に言うならばD001の１軒と言うことになる。特にD001における高坏の保有は他の遺構には認めることができないと言う状況であり、器種構成上の優位性を認めなければならないであろう。

D005に続く器種構成を有するのはD001があげられる。D001には甑が欠落するものの、須恵器の長頸瓶と、D005においても認められている手捏土器を保有しており、D005に近い内容を呈していると言えるであろう。残るD006、D037、D040、D041、D020は器種構成上様相を異にしている。

D041は煮沸形態の土器のみによって構成されており、しかも甑は破片であるため明確に把握

できるのは甕だけとなり、器種構成上かなり貧弱な様相を呈していると言って良いであろう。

D037は多量な滑石製模造品の成品や未成品が出土しており、他の遺構と様相を異にしているため、同じような検討は加えることはできないかもしれない。

北海道遺跡において、古墳時代中期に比定できる集落跡に滑石製模造品の工房跡が位置しており、このことについては既に記載しているが、D037も工房跡として捉えるならば中期から後期にわたる工房が所在することになり、遺跡自体の特徴づけにつながるものであろう。

D037はⅠ群の最も西に位置し、遺構の規模も最大であり、かなり堅牢な遺構である。石製遺物の集計表でも明らかなようにⅠ層からⅢ層にわたり石製品が出土している。特に工作用ピットとおぼしき内部施設は認められないものの、工房跡と考えて差し支えないであろう。

臼玉を中心に各品目について生産していたと考えられるが、資料的には臼玉に関する成品、未成品が圧倒的に多い。臼玉の製作工程は既に述べたところであるが、後期における工程についても同様な経過を呈していたと考えられる。中期の工房跡出土の臼玉に認められた技術的特徴から見れば、D037はAタイプを素材に生産していたことが出土した成品や未成品より窺われる。数量的に言えばAタイプ296点に対してBタイプ47点で、Aタイプの占める比率は86.2%ときわめて高く、Bタイプは13.8%を示す程度である。

このことは、計測値分布図を見ても明らかなように、中期においては素材の厚さが1.5㎜から5㎜の範囲のものを用いているのに対し後期のものは1㎜から3.5㎜の範囲であり、両面研磨によって素材が中期のものよりかなり薄く仕上げられていることが理解できよう（図314）。

中期において認められた技術的特徴が後期においても認められることは驚くべき点である。萱田地区においては今日の段階では権現後遺跡と北海道遺跡の2遺跡において滑石製模造品の工房跡を検出しており、両遺跡とも中期が初現となるもので、しかも権現後遺跡における工房跡が北海道遺跡より前出であることを考慮すれば、北海道遺跡における中期のD014を中継してAタイプの技術的特徴が継承されていると言って良いであろう。実際の集落の展開についても権現後遺跡と北海道遺跡は古墳時代において綿密な関係の上で展開していたと考えられる。

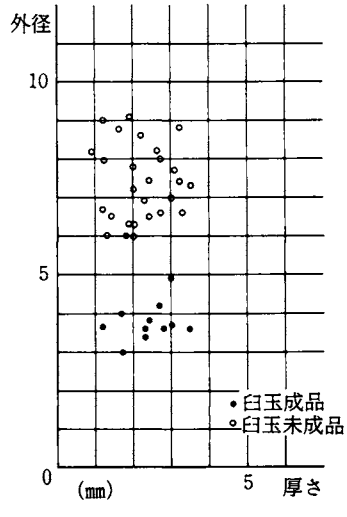


図314 古墳時代後期の臼玉計測値分布図

第IV部　歴　史　時　代

第1章　歴史時代の概観

歴史時代に比定できる遺構は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、ピット、溝などがある。これらは奈良、平安時代に構築されたものが主であるが、溝は地形図上の地境と整合する部分が多く、ごく最近の所産と考えられる遺構である。

奈良、平安時代の遺構群は、塊村のごとく群集した状況で集落を構成しているのを一瞥できる。群構成は個々によって様々な状況を呈しており、中には1軒だけ孤立した様相を示すものもある。各群は遺構の所在しない空間部分を取り込んで分布しており、八つの群からなっている。これをⅠ群からⅧ群として各群ごとに報告したい。

北海道遺跡は、標高23mの下総下位面から標高11mの千葉第1段丘面にわたり形成された遺跡であることは既に述べたところであるが、地形的な特徴をうまく利用して集落は立地していると言って良いであろう。特に緩斜面に形成された群が最も遺構が多く他群と異質な相様を呈している。また、群の分布は、台地上から緩斜面、そして段丘面に認められ、一部は千葉第2段丘面に移行する地域に延びる状況を呈している。

段丘面の北側には須久茂谷津を挟んで権現後遺跡が位置しており、ともに歴史時代の集落遺跡でありながら集落立地に著しい相違を呈していることに注目できよう。

ここに言う群とは、同時性を示す住居の集合でなく、長い時間の経過の中で群として形成したものである。しかしながら、広範囲にわたる面的な調査の結果からは、明瞭に遺構の所在する地域とそうでない地域が分離しており、群としての纏りは意味のあるところと理解できる。かかる観点に立って群の一構成要素となっている住居跡を遺構、出土遺物等を関連させて報告することによって群内での集落展開や細部の特徴が把握できるものと考えられる。

第2章　遺構と出土遺物

第1節　は　じ　め　に

歴史時代の内最も多く検出できたのは奈良、平安時代の竪穴住居跡である。竪穴住居跡は114軒におよび、北海道遺跡を特徴づけている。その他、掘立柱建物跡10棟、ピット19基、それに溝などがある。

検出した遺構をもって集落全体が検出できたとは考えられない。と言うのは、調査区北側には土取された部分があり、周辺の遺構群の状況から考えればこの部分に遺構が所在していたことは充分に察せられる。また、東側は地区界外のため調査対象地域となっていないため、第Ⅳ

群、第Ⅶ群については群として全体を捉えることはできない。第Ⅶ群はさらに東方に集落が延びる可能性が充分考えられる。この地域は新川に突出する千葉第2段丘面に移行する部分に相当し、沖積地を含めた土地利用が注目されるところであるが、残念ながら調査の手が及ぶ範囲でない。

部分的な不備があるものの各群の纏りは良く、南西から北東にほぼ一直線上に分布している。10軒以内の住居で構成される群もあれば50軒以上の住居で構成される群もある。また、他群と隔絶するかのように1軒単独で位置する群もあり、かなり多様性を帯びる群の様相を呈していると言って良いであろう。

第2節　第Ⅰ群の遺構と遺物

歴史時代の第Ⅰ群は、竪穴住居跡8軒で構成される群である。P－10、Q－10、P－11の地域において検出した。

この地域は遺構確認調査時において補足的に追加トレンチを設定し調査したにもかかわらず、1軒のみの確認に終っていたが、面的に表土層を除去した結果、他に7軒の住居が所在するところとなった。

住居群は標高23mの台地上に立地しており、北海道遺跡において一番高所にあたる。住居は緩斜面に移行する縁辺部に南北に細長い楕円形状に分布している。楕円形の中央部には住居は構築されていない。

群は住居跡だけの検出に止り、掘立柱建物跡、ピット等は一切検出できなかった。掘立柱建物跡が群中になかったり、あるいは少なかったりする状況は他群にも指摘できる（図315）。

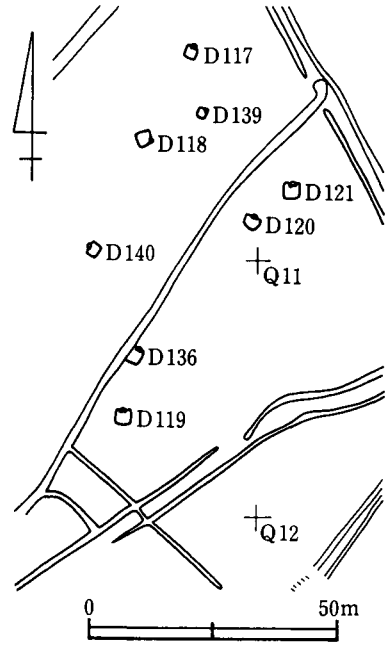


図315 歴史時代第Ⅰ群遺構分布状況図

1．D117号遺構（図316～318、図版57－1・2、63）

楕円形に分布するⅠ群の住居群内において最も北側に位置し、D118、D139が近接する。

遺構　北壁2.27m、南壁2.77mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はやや傾斜を呈し、0.43m掘り込んで床面に達している。床面は全体的に堅緻な状況を呈している。柱穴、壁溝等の施設は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を三角形に0.28m掘り込み、黄灰色砂質粘土で構築している。遺存状況

は比較的良好であるが、天井部は煙出し部分に認められる程度である。火床部は若干の窪みが認められる。煙道部は傾斜を呈して煙出し部に続く。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層褐色土層が堆積している。遺物は床面上を中心に出土している。またカマド内からの出土もある。

出土遺物　遺物は、鉢、坏形土器がある。鉢形土器は1で口縁部が肩部から著しく屈曲して開き、胴部は直線的に底部に続く。坏形土器は2、3で、2は手捏、3は若干外反ぎみに開く体部を呈している。

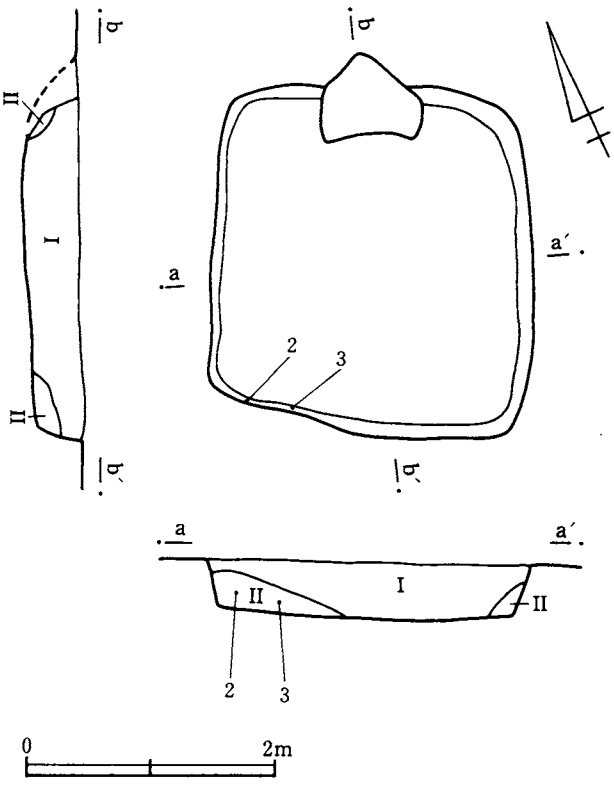


図316　D117号遺構実測図

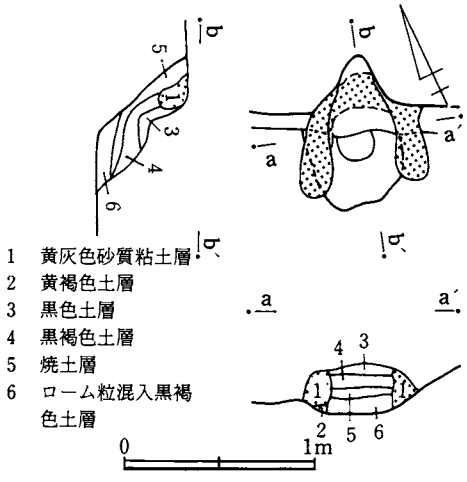


図317　D117号遺構カマド実測図

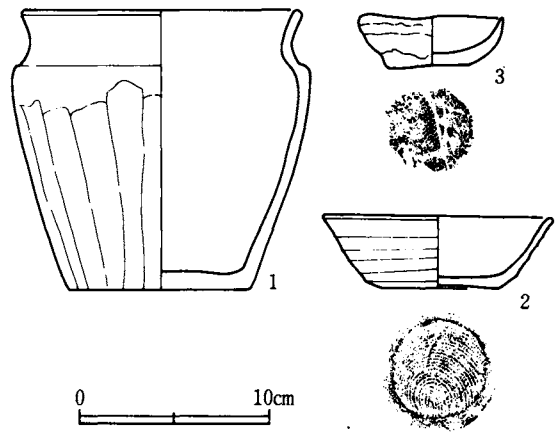


図318　D117号遺構出土遺物実測図

D117出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	鉢	14.5	15.0	9.7	完形	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒褐色	

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
2	坏	2.5	7.3	4.3	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	茶褐色	糸切り
3	坏	3.75	12.2	6.2	完形	—	砂粒	堅緻	茶褐色	手捏 木葉痕

2．D118号遺構（図319～322、図版57－3、58－1・2、64）

楕円形に分布するⅠ群の住居群内において北側に位置しており、D117、D139が近接する。

遺構　北壁2.52m、東壁2.70mで、方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.35mほり込んでおり、直下には幅0.21m、深さ0.04mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈しているが、南西側はやや軟弱である。径平均0.20m、深さ0.10m～0.19mのピットが3か所に点在するが柱穴にはなり得ない。

カマド　南東壁コーナー部分より若干北側へ寄った所に位置し、0.13mの掘り込みを有する。袖および天井は黄灰色砂質粘土で構築している。火床部は深さ0.05mで浅い擂鉢状を呈する。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ

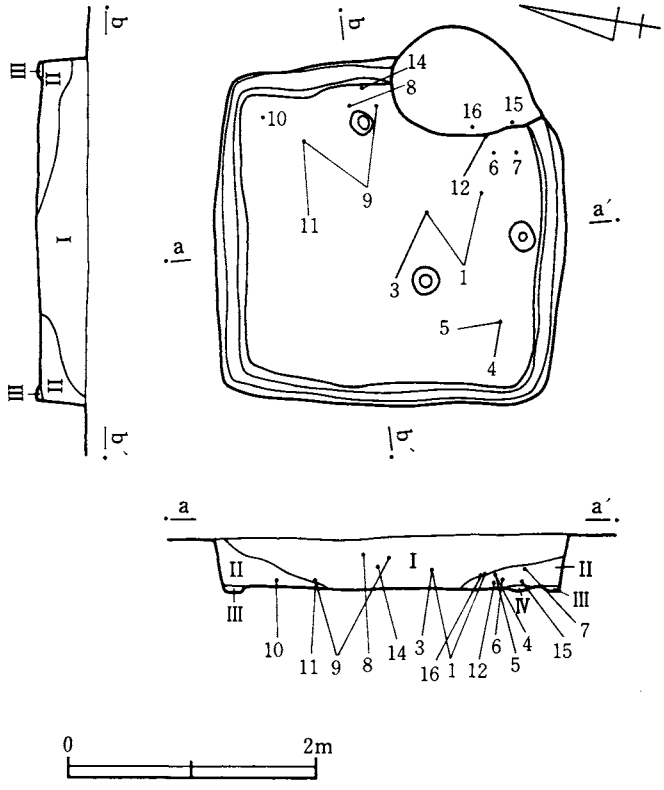


図319　D118号遺構実測図

D118出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	(29.0)	22.8	—	口縁部～胴部¾	ヨコナデ 磨き	雲母 砂粒	やや軟弱	茶褐色	
2	甕	—	22.65	—	½	ヨコナデ 磨き	雲母 砂粒	やや軟弱	茶褐色	

層茶褐色土層、IV層暗茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上出土を中心とし、カマド周辺のI、II層、そしてカマド内より出土している。完形もしくは完形に近い状態で出土していることなどから、後世の攪乱の影響はほとんどないと考えられ、一括資料として捉えることが可能である。

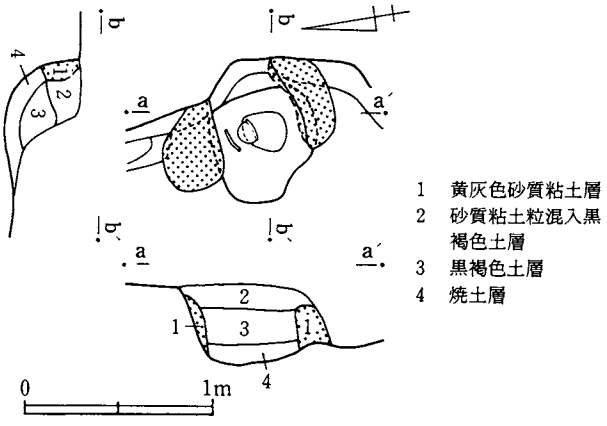


図320 D118号遺構カマド実測図

出土遺物 遺物は、甕、甑、坏、鉢形土器がある。甕形土器は1、2で、いずれも口唇部に特徴を有し、胴部は条痕状の磨きが施される。甑形土器は3で、胴部に叩き目があり、口縁部は水平近く外反する。坏形土器は4～14で、4、5は丸底で小形なものである。6は体部がヘラ削りされる。7、11、13は体部がほぼ直線的に開く。8～10、12、14は外反ぎみに開く体部を呈している。鉢形土器は15、16で、坏に近い形状を呈するもので、深身である。

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
3	甑	—	—	—	破片	ヨコナデ 叩きじめ	小石 雲母	軟弱	(内)茶褐色 (外)黒褐色	
4	坏	2.7	7.0	—	完形	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	手捏
5	坏	2.4	7.05	—	完形	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	手捏
6	坏	3.4	11.4	7.65	完形	ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
7	坏	3.35	12.0	7.6	完形	底部回転ヘラ削り	—	やや堅緻	茶褐色	
8	坏	3.9	11.4	6.8	完形	下端回転ヘラ削り	—	やや堅緻	茶褐色	判読不明墨書 静止糸切り
9	坏	4.0	12.0	6.8	完形	下端回転ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
10	坏	4.1	11.8	8.3	¾	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母 砂粒	やや堅緻	茶褐色	糸切り
11	坏	4.0	11.8	7.0	½	底部回転ヘラ削り	雲母	やや堅緻	茶褐色	糸切り
12	坏	4.2	11.8	8.5	完形	底部回転ヘラ削り	雲母 砂粒	軟弱	赤褐色	
13	坏	4.5	(11.6)	(9.2)	⅓	底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	ヘラ切り
14	坏	4.9	13.2	6.9	完形	下端回転ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	灰色	ヘラ切り
15	鉢	8.4	18.2	8.8	完形	底部一方向ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	内面磨き
16	鉢	7.3	14.9	10.3	完形	底部回転ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	

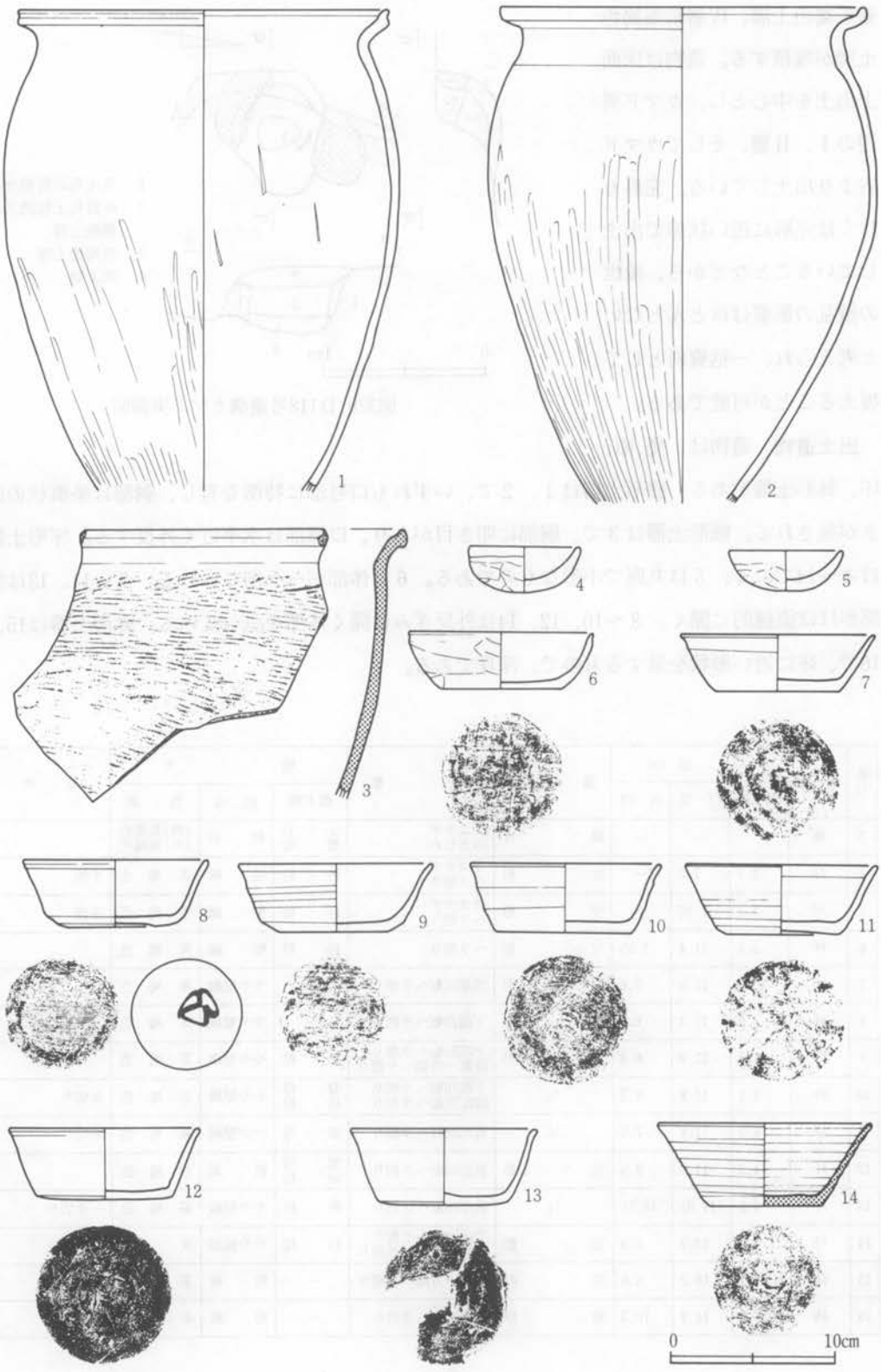


図321　D118号遺構出土遺物実測図(1)

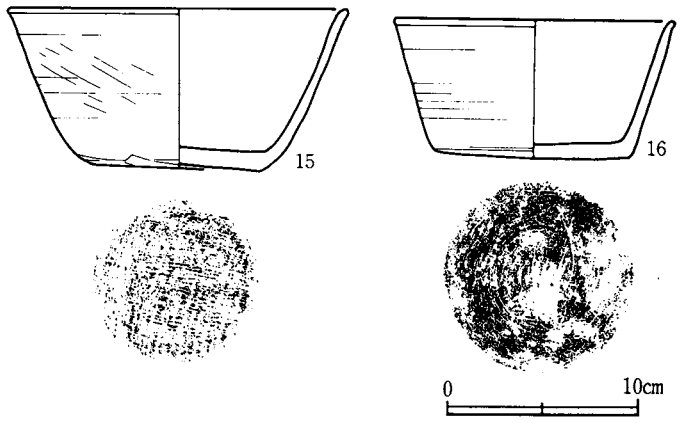


図322 D118号遺構出土遺物実測図(2)

3．D119号遺構（図323～325、図版58－3、59－1）

楕円形に分布するⅠ群の住居群内において最も南側に位置しており、D136が近接する。

遺構　北壁2.82m、東壁3.02mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.26m掘り込んでおり、直下には幅0.13m、深さ0.06mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は中央部を中心として堅緻な状況を呈している。南壁中央部に近接して、径0.28m、深さ0.22mの二段に掘り込まれたP1を検出した。柱穴は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を0.33m掘り込み、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは、壁前面部にのみ検出したが、本来掘り込み部分にも貼り込みが行われていたものと考えられる。火床部は浅い擂鉢状の掘り込みを呈し、煙道部は緩やかな傾斜を呈している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒褐色土層、Ⅱ層ローム粒混入黒褐色土層、Ⅲ層褐色土層、Ⅳ層茶褐色土層、Ⅴ層暗褐

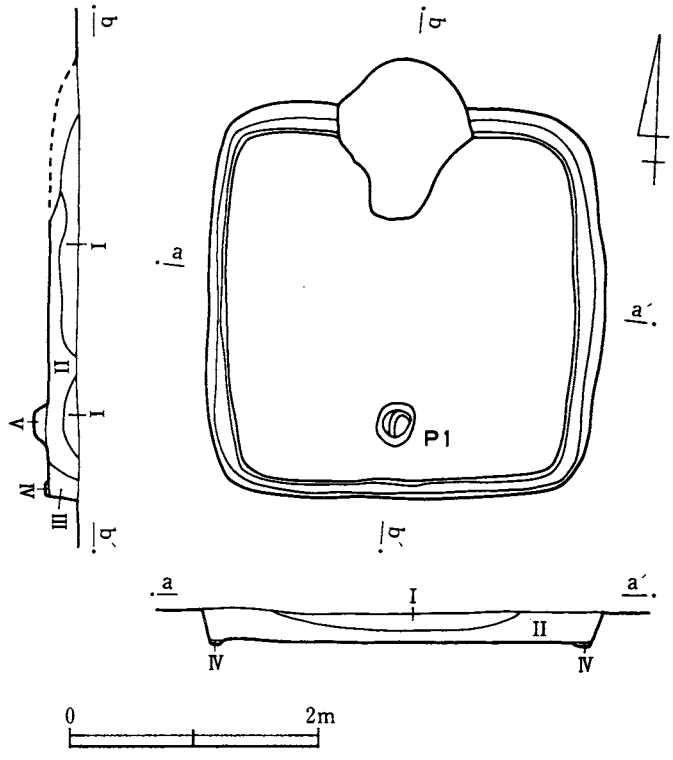


図323 D119号遺構実測図

色土層が堆積する。遺物は稀少で、カマド内を中心として、Ⅰ、Ⅱ層からも出土している。1、2、3はいずれもカマド内出土である。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器と鉄製品がある。甕形土器は1で、口唇部に特徴のある口縁部破片である。坏形土器は2で体部は大きく開く形状を呈している。鉄製品は3の手鎌と思われるもので左端に小孔があく。

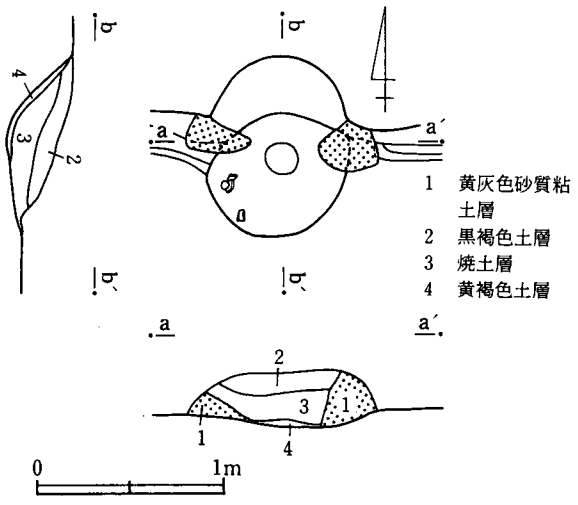


図324　D119号遺構カマド実測図

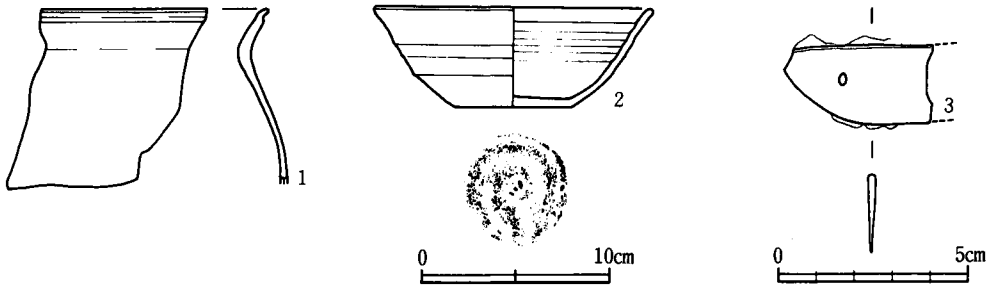


図325　D119号遺構出土遺物実測図

D119出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	
2	坏	5.1	(15.0)	6.3	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	茶褐色	

4．D120号遺構（図326～328、図版59－2・3、64、65）

楕円形に分布する住居群の東側に位置し、D121が近接している。

遺構　北壁3.01m、東壁2.11mで長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.56m掘り込んでおり、直下には幅0.23m、深さ0.03mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は検出できなかった。

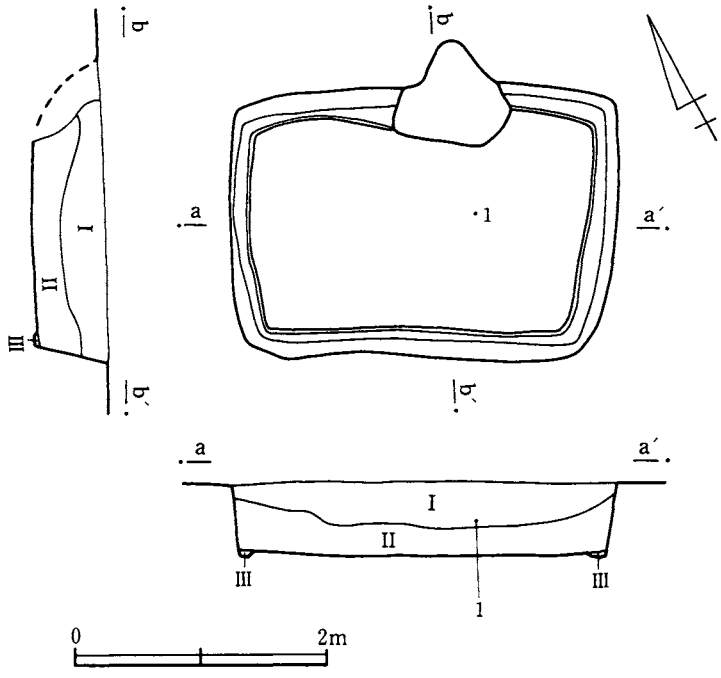


図326 D120号遺構実測図

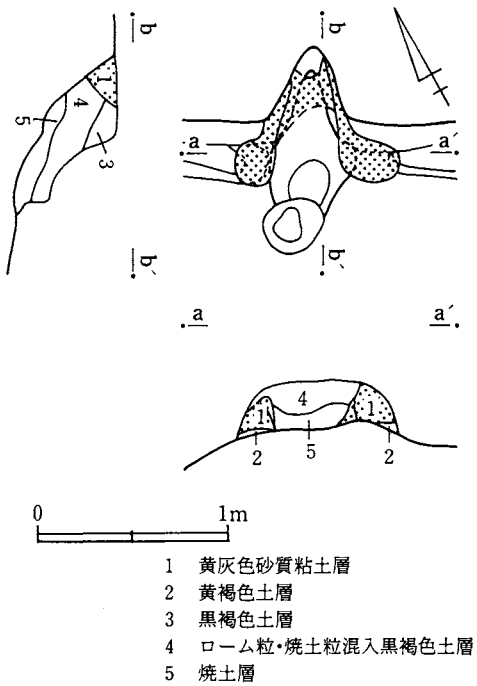


図327 D120号遺構カマド実測図

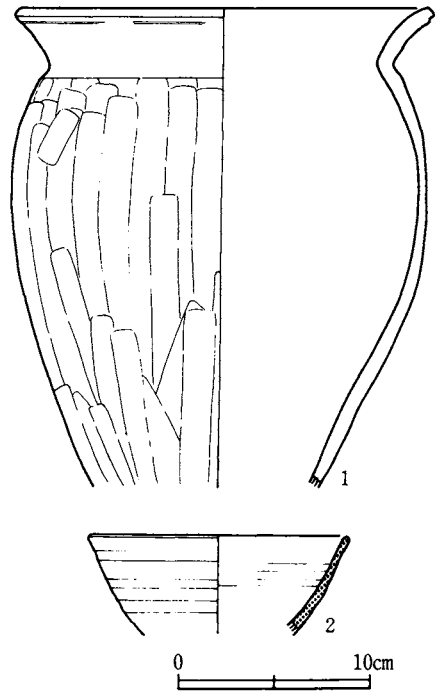


図328 D120号遺構出土遺物実測図

カマド　北壁中央部を三角形に0.38m掘り込み、黄灰色砂質粘土で構築している。遺存状況

は比較的良好で、天井部は、煙出し部分で遺存するのが認められる。袖は本来もう少し前面まで構築されていたと考えられる。火袋に相当する袖は焼土化が著しい。火床部は浅い擂鉢状の掘り込みを呈し、煙道部は緩やかな傾斜を呈している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層茶褐色土層が堆積する。遺物は少量であるが各層に分散して出土している。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器がある。甕形土器は1で口縁部は「く」字状に外反し長胴を呈している。坏形土器は2で体部が若干内彎ぎみに開く形状を呈している。

D120出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	(25.0)	22.20	—	¾	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
2	坏	—	13.9	—	⅓	—	雲母 砂粒	やや軟弱	灰色	

5．D121号遺構（図329～331、図版60—1・2、64、65）

楕円形に分布するⅠ群の住居群内において、最も東側の台地縁辺部に位置しており、D120が近接している。

遺構　北壁3.14m、東壁3.33mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.40m掘り込んでおり、直下には幅0.35m、深さ0.07mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈する。柱穴は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を0.26m掘り込み、黄灰色砂質粘土で構築している。

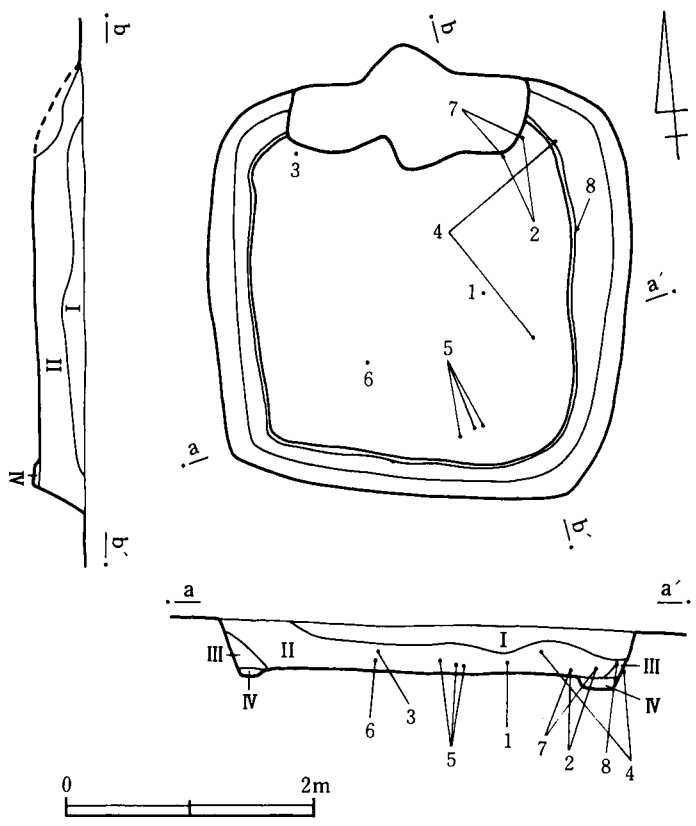


図329　D121号遺構実測図

粘土の貼り込みは壁前面部分にのみ認められる。天井部は遺存しない。火床部は深さ0.10mの擂鉢状の掘り込みを呈し、煙道部はやや急激な傾斜を呈している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層ローム粒混入黒褐色土層、IV層茶褐色土層が堆積する。遺物は床面より若干上方で出土しており、平面的には、カマド周辺部分および住居東側部分を主とし、特にカマド周辺部分出土の遺物は遺存状態が良好である。

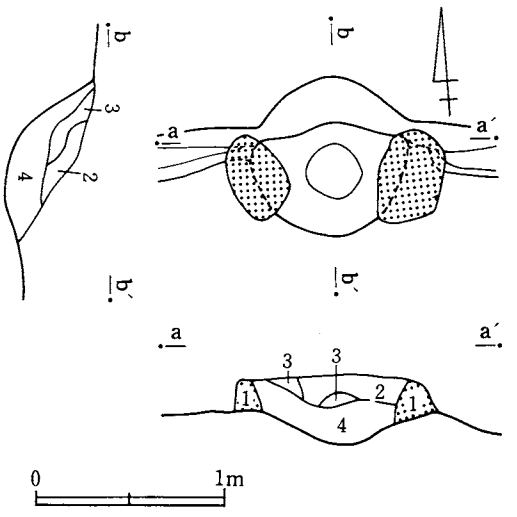


図330 D121号遺構カマド実測図

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器がある。甕形土器は1～5で、1は口唇部に特徴を有す。2は小形甕の頸部下半である。3、4は底部破片、5は胴部に叩き目がある小形の甕である。坏形土器は6～8で、口径 12 cm 前後の6、7と、口径 15 cm 前後の8がある。8は内面黒色処理してある。

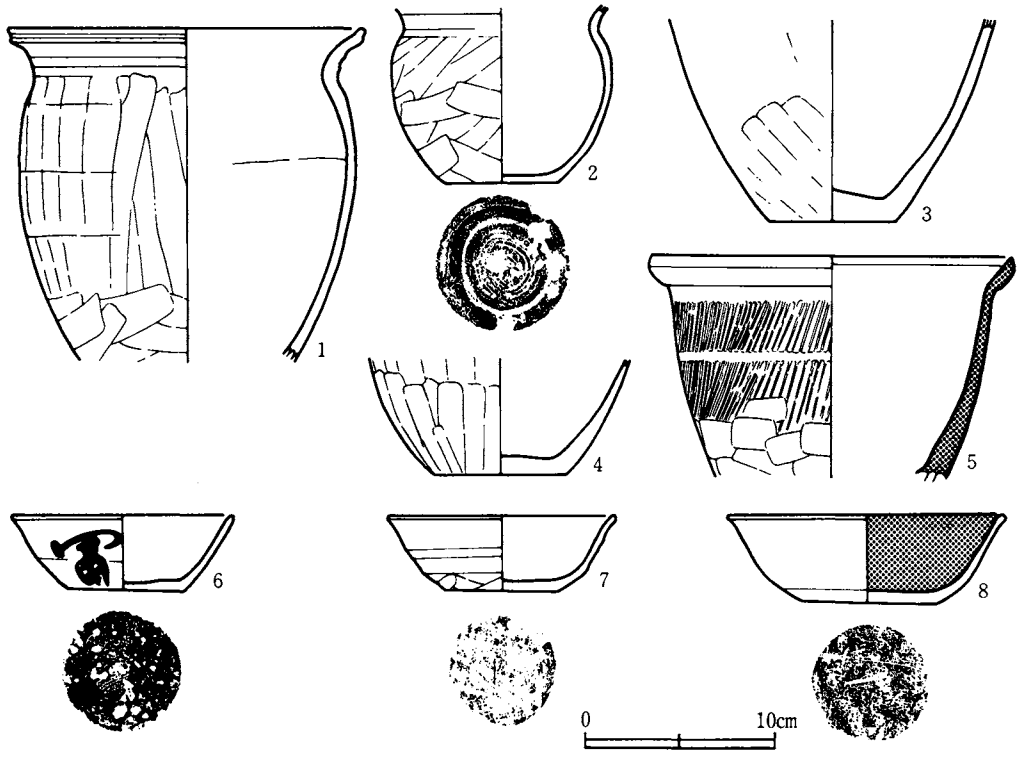


図331 D121号遺構出土遺物実測図

D121出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	(17.0)	19.0	—	2/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
2	甕	—	—	6.0	2/3	ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	黒褐色	
3	甕	—	—	6.6	1/3	ヘラ削り	雲母 砂粒	堅緻	黒褐色	
4	甕	—	—	7.0	胴部～底部2/3	ヘラ削り	雲母 砂粒	堅緻	黒褐色	
5	甕	11.5	(19.0)	(12.2)	1/3	ヨコナデ，叩きじめ ヘラ削り	雲母	堅緻	茶褐色	
6	坏	3.85	11.8	6.2	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	—	やや軟弱	茶褐色	墨書「冨」 糸切り
7	坏	3.8	12.25	6.2	完形	下端静止ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	—	やや軟弱	黒褐色	糸切り
8	坏	4.5	14.8	7.1	完形	下端回転ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	—	やや堅緻	黒褐色	内黒

6．D136号遺構（図332～334、図版60－1）

楕円形に分布するⅠ群の住居群内において南側に位置しており、D119が近接する。遺構の西側部分は溝により攪乱されているため遺存状況は良好ではないが、およその規模は把握し得る。

遺構　南壁推定3.30m、東壁3.22mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.31m掘り込んでおり、直下には幅0.18m、深さ0.05mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は中央部を中心として堅緻な状況を呈している。ピットは、北東コーナー部分に径0.27m、深さ0.15mを計るP1、南壁やや西寄りに径0.23m、深さ0.15mを計るP2を検出した。柱穴は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を推定0.35m掘り込み構築しているが、袖および天井部は遺存しない。また、袖、天井部の崩壊土と考えられる土もほとんど検出できなか

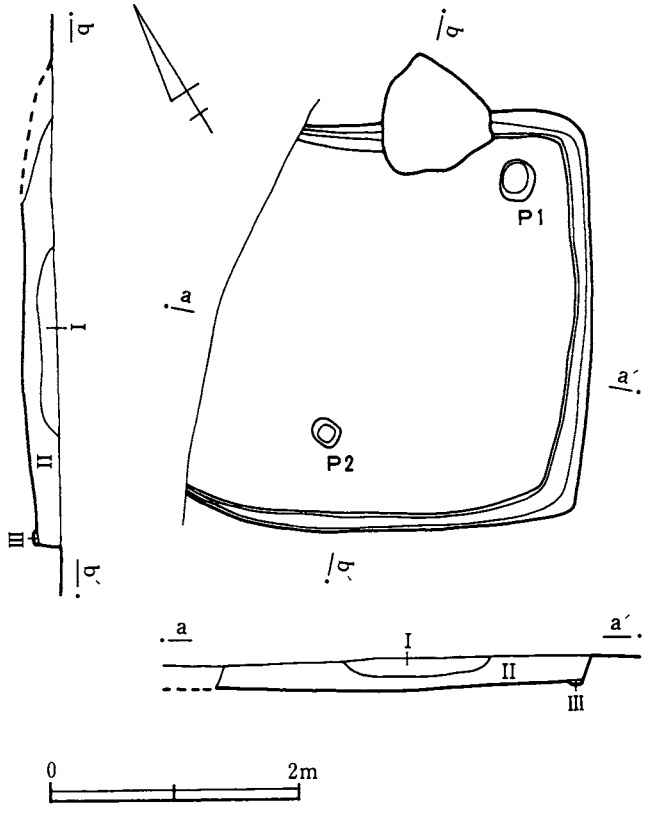


図332　D136号遺構実測図

ったため、人為的な取り毀しの可能性が高いと考えられる。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層茶褐色土層が堆積する。遺物は少量だが各層より出土し、カマド内出土のものも認められる。

出土遺物　遺物は、甕、坏、皿形土器と石製品がある。甕形土器は1で、底部は上げ底風を呈し、胴部には自然釉の付着が見られる。坏形土器は2で、高台を有し、黒色処理される。皿形土器は3で、高い高台が付く。石製品は4の凝石岩製の砥石で片面に不規則な研ぎべり痕が見られる。

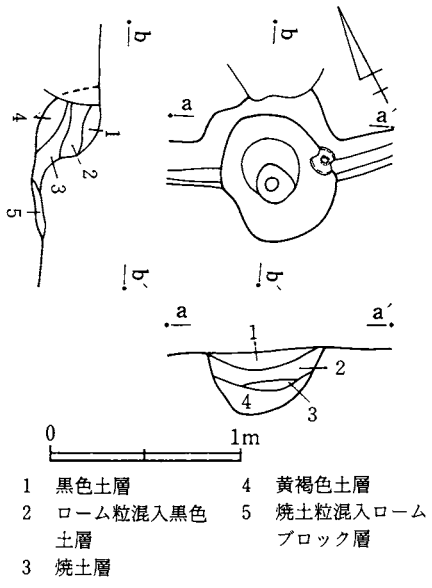


図333　D136号遺構カマド実測図

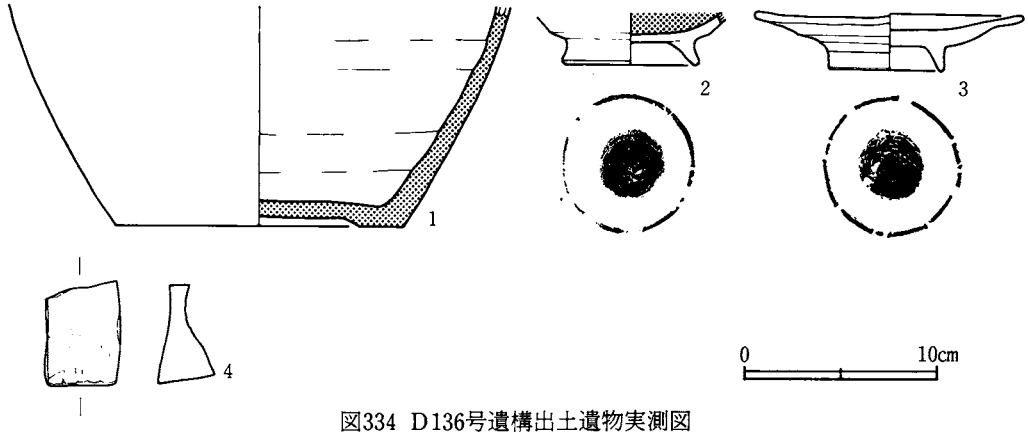


図334　D136号遺構出土遺物実測図

D136出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	—	—	(15.2)	¼	ナデ	砂粒	堅緻	灰色	自然釉付着
2	高台付坏	—	—	7.3	底部のみ	—	砂粒	堅緻	茶褐色	内黒
3	高台付皿	2.9	14.2	6.0	完形	下端回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り

7．D139号遺構（図335～337、図版61－1・2、65）

楕円形に分布するⅠ群の住居群内において北側に位置し、D117、D118が近接する。

遺構　北壁1.70m、西壁1.76mで、やや不整な方形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に

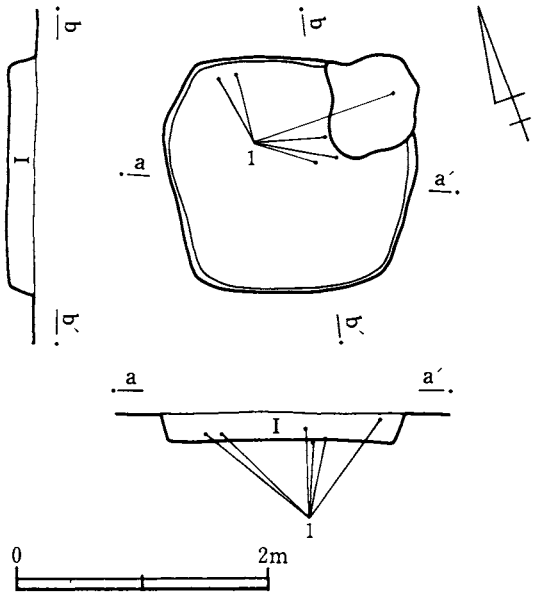
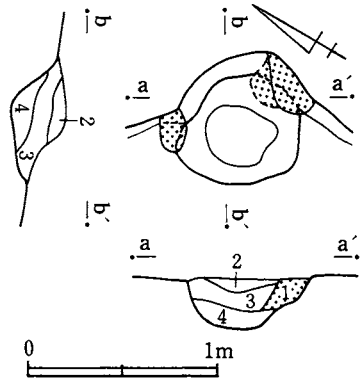


図335 D139号遺構実測図



1 黄灰色砂質粘土層
2 砂質粘土粒・焼土粒混入黒色土層
3 焼土層
4 焼土粒混入黄褐色土層

図336 D139号遺構カマド実測図

0.20m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱な状況を呈している。柱穴、壁溝は検出できなかった。当該期の住居としては小形である。

カマド 北東壁コーナー部分を若干掘り込み、黄灰色砂質粘土で構築している。遺存状況は悪く、袖、天井部が若干認められるのみである。火床部は深さ0.07mの掘り込みを呈し、煙道部はやや急激な傾斜を呈している。

遺物出土状況 覆土は黒褐色土層の単一層である。カマド周辺部分を中心として、床面上より1個体分の甕が散在して出土したが、全体的に出土量は稀少である。

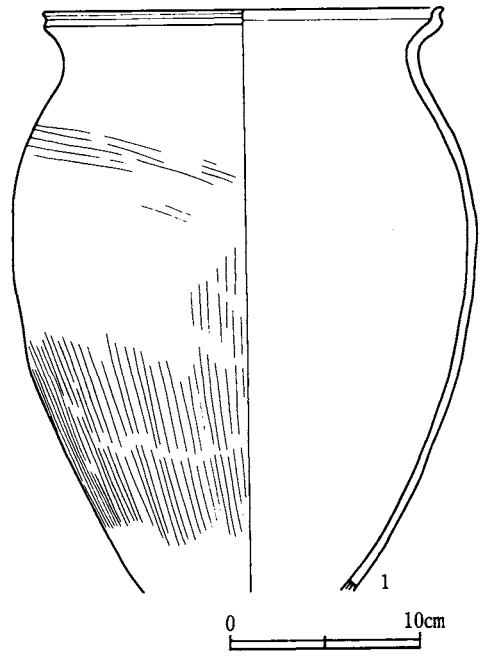


図337 D139号遺構出土遺物実測図

D139出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	(30.0)	21.4	—	2/3	ヨコナデ 磨き	砂粒	軟弱	黒褐色	

出土遺物　遺物は、稀少で図示できる遺物は1点だけである。1は甕形土器で口唇部に特徴を有する口縁部を呈しており、胴部は条痕状の磨きがみられる。

8．D140号遺構（図338～340、図版61－3、62、65）

楕円形に分布するⅠ群の住居内において西側に位置し、他の遺構とはやや距離をおく。D118、D136まで25mを計る。

遺構　北壁2.37m、東壁2.39mで不整な方形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.24m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱な状況を呈している。柱穴、壁溝は検出できなかった。

カマド　北壁やや東寄りの位置を0.14m掘り込み、黄灰色砂質粘土で構築する。袖は2層を基礎に粘土を貼り込んで構築している。天井部は遺存しない。火床部は若干窪んだ状況が認められ、煙道部は緩やかな傾斜を呈している。

遺物出土状況　覆土は黒褐色土が堆積する単一層である。遺物はカマド周辺部分を中心としており、床面上出土は皆無である。

出土遺物　遺物は、甕、坏、皿形土器がある。甕形土器は1で胴部に叩き目のある広口甕胴部下半である。坏形土器は2、3で、2は口径12.5cm、3は口径14cmを計る。皿形土器は4で平底を呈し、体部は大き

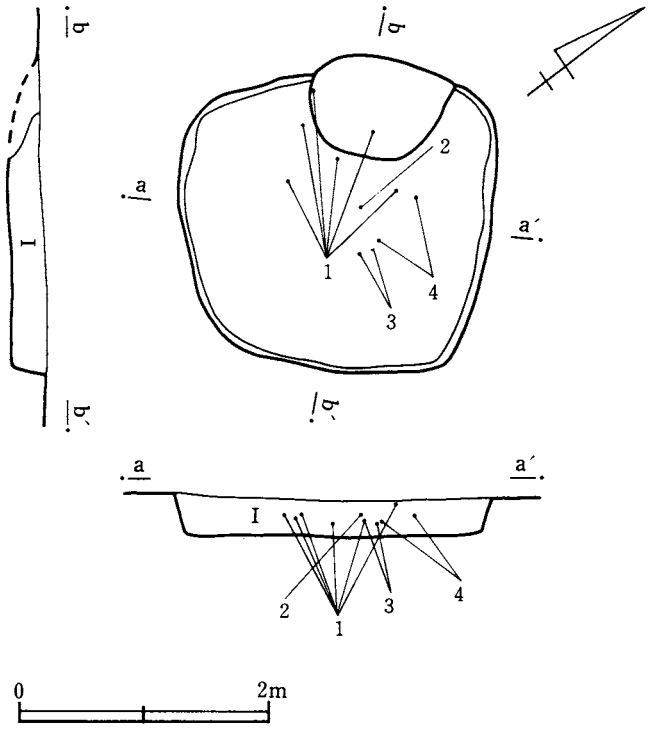


図338　D140号遺構実測図

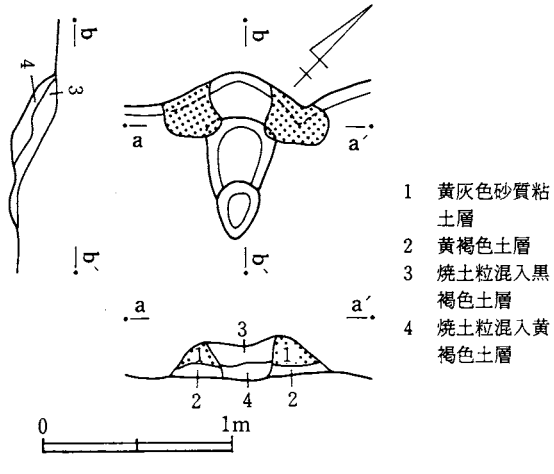


図339　D140号遺構カマド実測図

く開く形状を呈している。

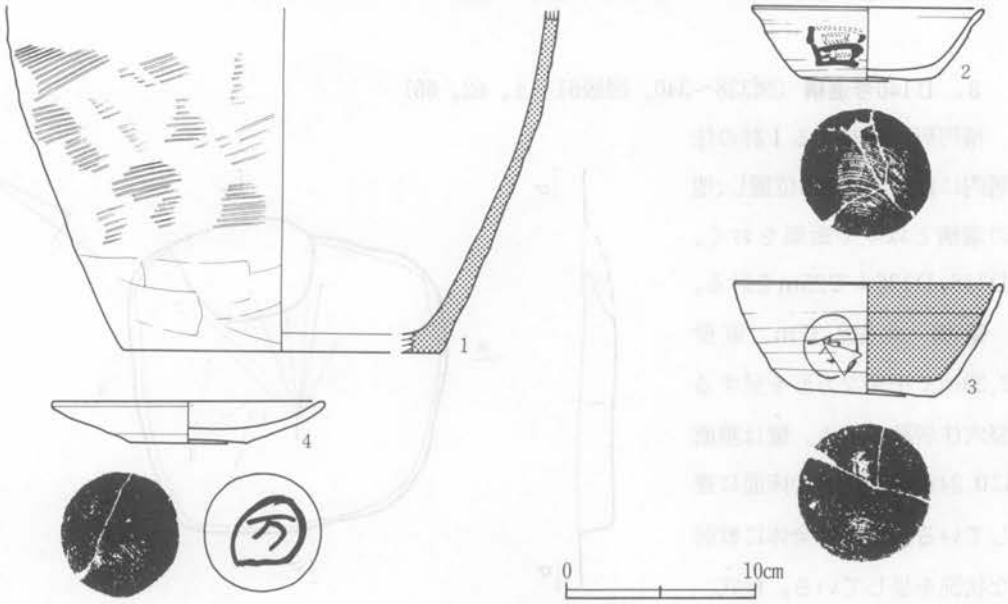


図340 D140号遺構出土遺物実測図

D140出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	16.7	½	叩きじめ ヘラ削り	砂粒	軟弱	灰色	
2	坏	3.8	12.4	6.9	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	墨書「冨」 糸切り
3	坏	5.65	14.4	7.1	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	墨書「方」 糸切り、内黒
4	皿	2.2	14.6	6.3	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「方」 糸切り

第3節　第II群の遺構と遺物

歴史時代の第II群は、竪穴住居跡1軒のみで構成される群であり、住居の集合を群として捉えている範疇より外れるかもしれないが、ここでは一応一群として考えておきたい。

北海道遺跡においては多くの住居が群としての纏りを有して位置するところであるが、いずれの群とも分布を異にして位置しており、特異な状況を呈していると言って良いであろう。

R—11地域においては、D130の他、D131を検出しているが、面的な発掘調査を展開したにもかかわらず、これ以外に遺構の検出はできなかった。D130を中心として東、北、西側の地域にはまったく遺構のない空間地帯があり、隔絶したあり方を示している。ただし南側の地域は面的な調査を実施していないため遺構の所在する可能性がある所であるが、遺構確認調査の結

果や、井戸向地域の状況から総合して判断すれば、この地域にも遺構の所在することはないと言って良い。

1．D130号遺構（図341～343、図版66、67）

R－11地域に1軒単独で位置し、他群とは分布の上で大きな隔たりを呈している。

遺構　北壁3.56m、東壁3.40mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.61m掘り込んでおり、直下には幅0.19m深さ0.07mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に著しく堅緻な状況を呈している。南西壁コーナー部分の床面に焼土を検出したが、極所的な状況を呈しているため流れ込んだものと考えられる。柱穴、その他のピットは検出できなかった。

カマド　東壁中央部を三角形に0.78m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。遺存状況は比較的良好である。天井部は煙出し部分で認められる。袖は焚口部分の貼り込みが壁寄りに施されているため、火袋に相当する部分は壁の掘り込み中に位置する。火床部は深さ0.08m

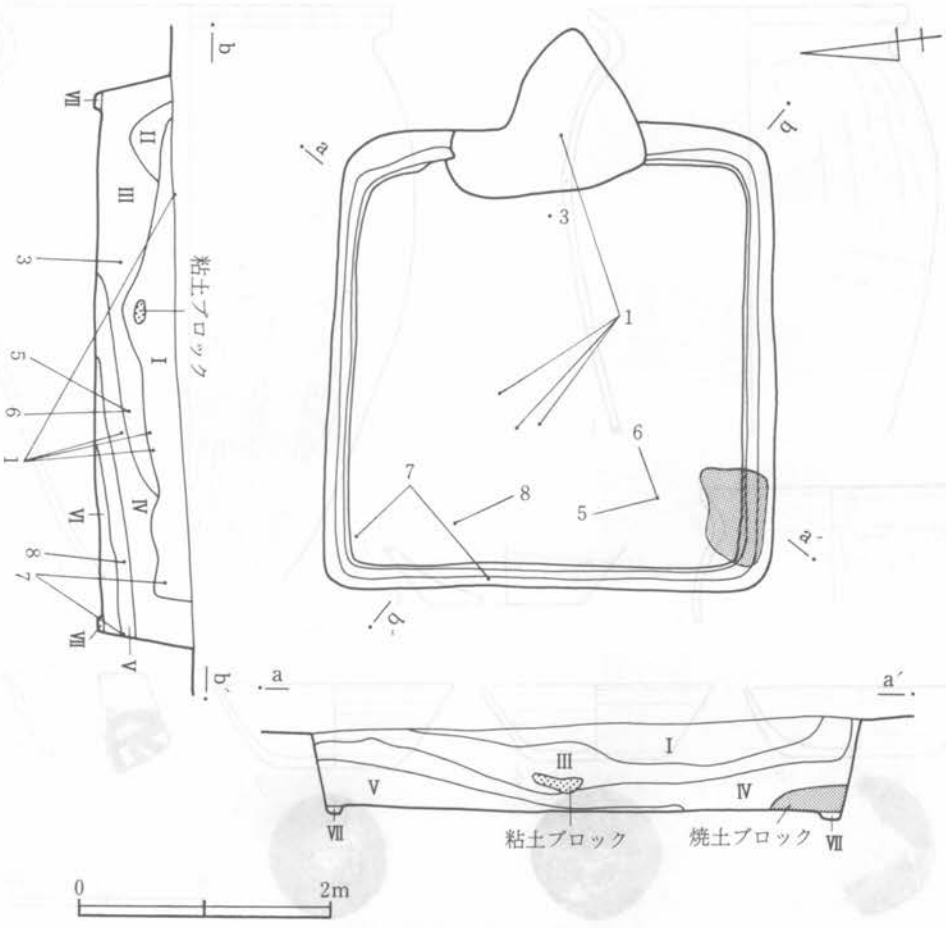


図341　D130号遺構実測図

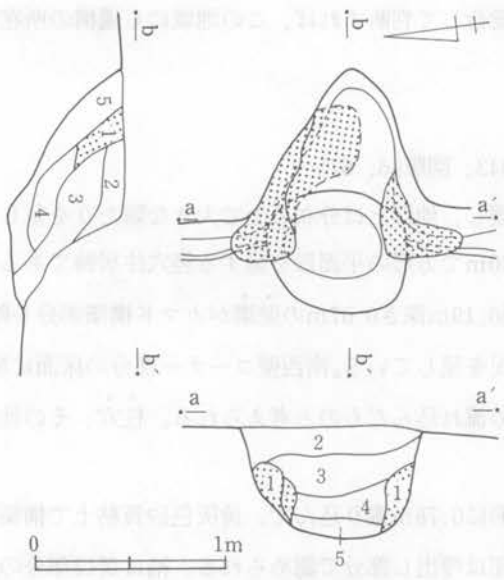


図342 D130号遺構カマド実測図

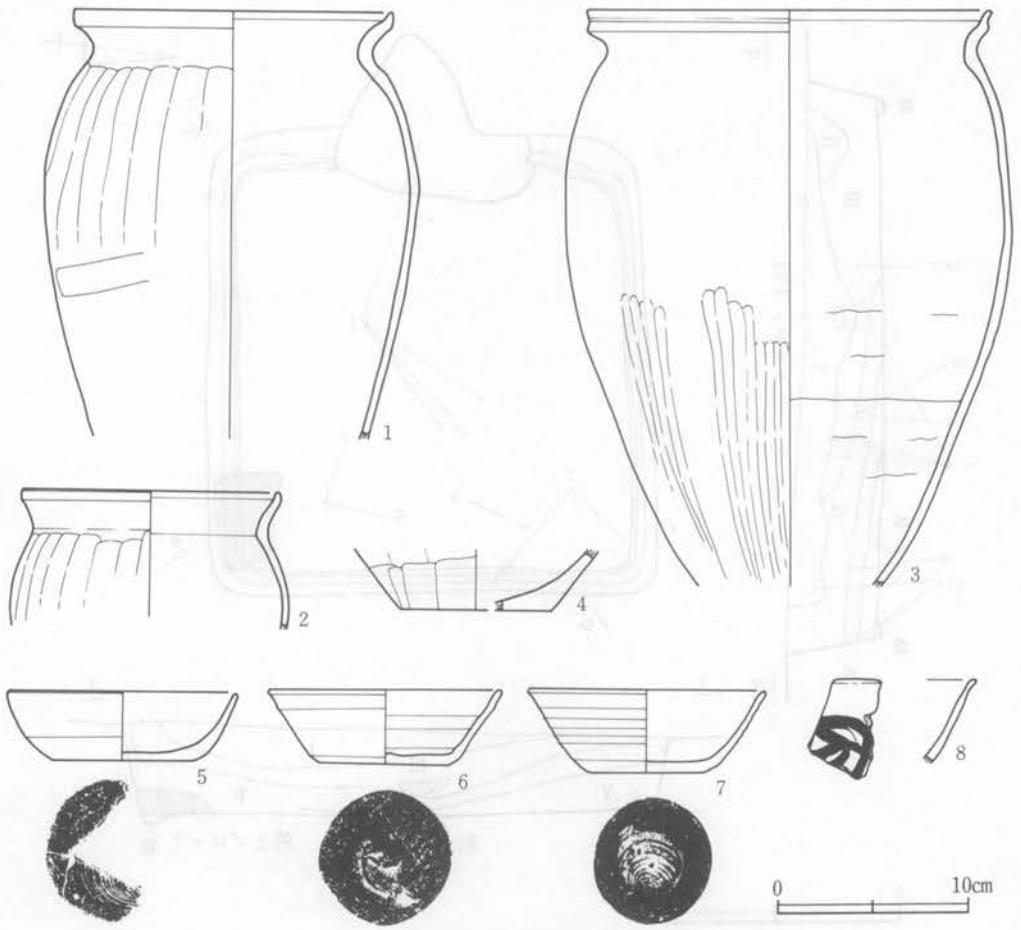


図343 D130号遺構出土遺物実測図

の楕円形の掘り込みを呈し、壁溝と接続している。煙道部は緩やかな傾斜を呈している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層ロームブロック混入黒色土層、Ⅲ層ロームブロック混入黒褐色土層、Ⅳ層黒褐色土層、Ⅴ層褐色土層、Ⅵ層ローム粒混入黒色土層、Ⅶ層茶褐色土層が堆積する。遺物は各層より出土しているが、稀少で、床面上出土は皆無である。2はカマド内出土である。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器がある。甕形土器は1～4で、1～3は口唇部に特徴のある口縁部を呈す。4は底部破片である。坏形土器は5～8で、5は体部が短かく直立ぎみに開く。6、7は直線的に大きく開く体部を呈す。8は墨書がある体部破片である。

D130出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	(17.0)	—	口縁部～胴部⅓	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	
2	甕	—	(13.6)	—	口縁部～胴部⅓	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	
3	甕	—	21.6	—	⅓	ヨコナデ 磨き	砂粒	軟弱	茶褐色	
4	甕	—	—	8.0	底部 ½	ヘラ削り	小石	やや軟弱	黒褐色	
5	坏	3.5	(12.0)	7.4	⅓	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	橙褐色	糸切り
6	坏	3.8	12.5	6.9	完形	下端回転ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒色	ヘラ切り
7	坏	4.25	12.8	6.1	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
8	坏	—	—	—	破片	—	—	堅緻	(内)黒褐色 (外)橙褐色	墨書「㊧」

第4節　第Ⅲ群の遺構と遺物

歴史時代の第Ⅲ群は、竪穴住居跡56軒、掘立柱建物跡1棟、ピット8基で構成される群で、Q－7～10、R－7～10、S－8、9の地域において検出した最大規模を誇る群である。

群は緩斜面上より段丘面にわたり、かなり広範囲な分布状況を呈しており、緩斜面上に住居群が位置するのはⅢ群のみで、北海道遺跡において住居数の多い点とともに特異な状況を呈していると言って良いであろう。

Ⅲ群の占有面積は1.5haを計るが、この面積を充分吸収できる部分はこの地点のみでなく、他にも求めることは容易である。よって、どのような必然性を有して立地してかについては今のところ定かでない。

先に述べたように、掘立柱建物跡が北海道遺跡全体を通して数少ない傾向を示しているところであるが、第Ⅲ群においては竪穴住居跡58軒に対して掘立柱建物跡が1棟と極端に少ない。この点に関しては資料を充分に吟味しなければならないであろう問題である。

58軒の住居群はかなり密集する状況で分布しており、5例、9軒の住居が重複関係を呈して

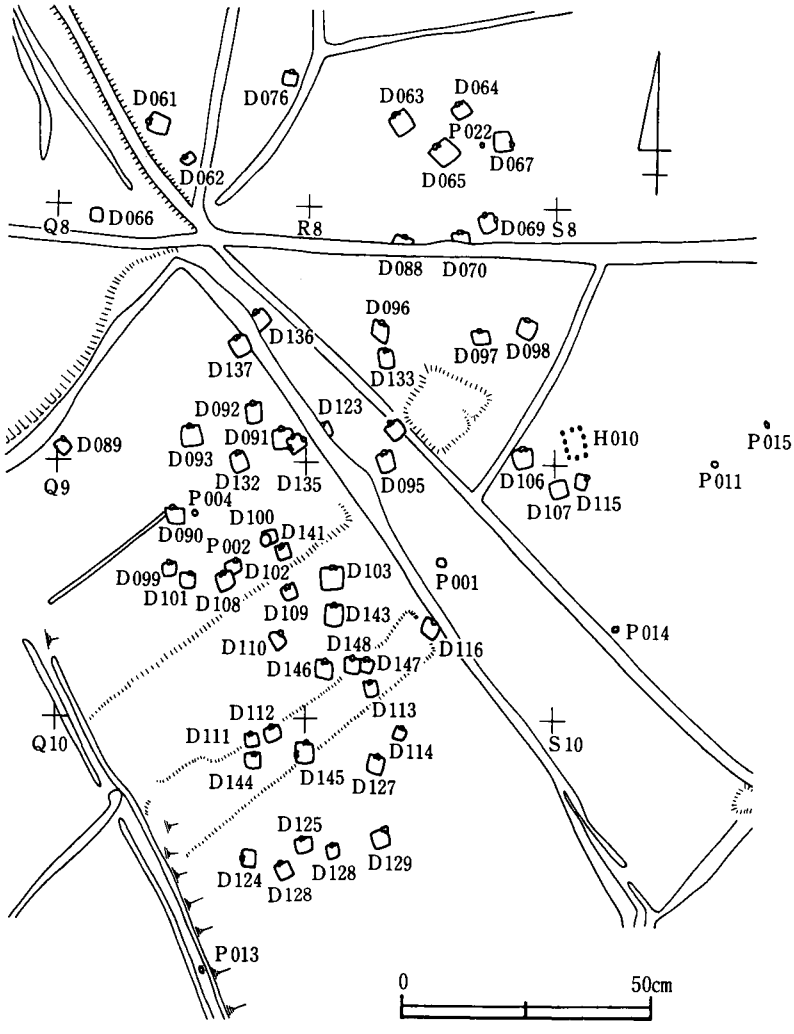


図344 歴史時代第Ⅲ群遺構分布状況図

いる。重複関係の状況は不規則な状況でないところに注目できよう（図344）。

1．D061号遺構（図345～349、図版67－1・2、68、109、110）

Ⅲ群の住居群内において最も北側に位置し、D062が近接している。

遺構　北壁3.74m、西壁3.85mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.40m掘り込んでおり、直下には幅0.20m、深さ0.06mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈しているが、特に中央部で顕著である。ピットは北壁および南壁に近接してP_1～P_4、南壁中央部に近接してP_5、P_6を検出した。P_1～P_4は径0.20m前後、深さ0.05～0.22mを計るが、配置が不規則で規模も小さく柱穴とは考えられない。P_5は径0.30m、深さ0.09m、P_6は径0.34m、深さ0.28mを計る。

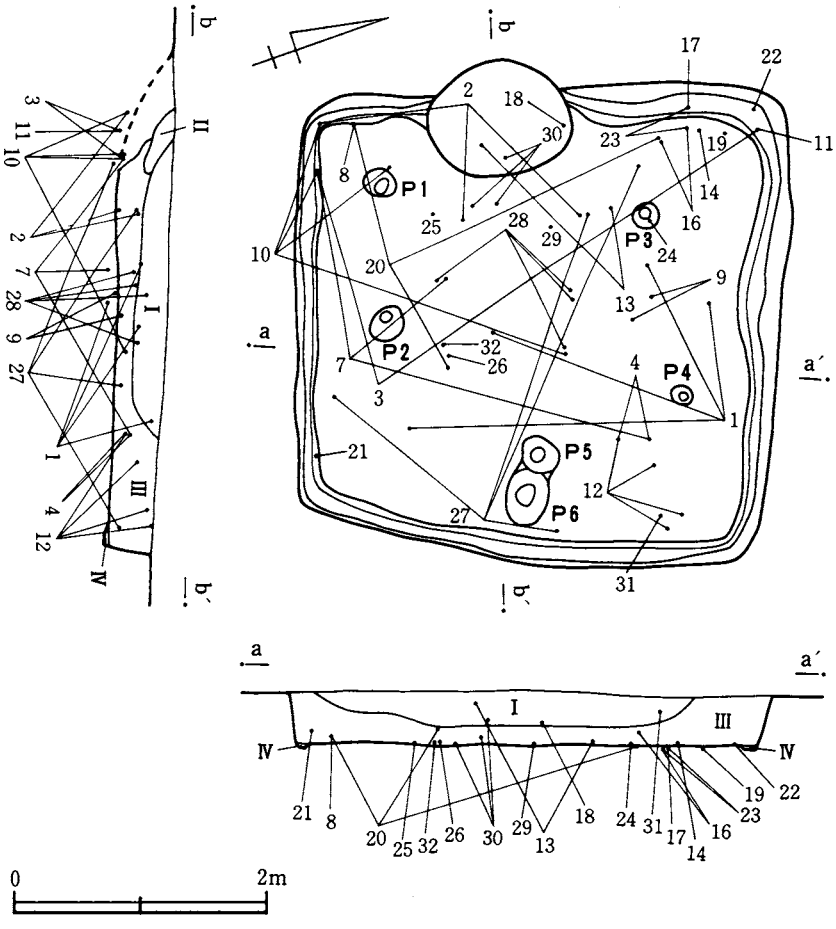


図345 D061号遺構実測図

カマド　西壁中央部より若干左に偏して位置し、壁を三角形に0.25m掘り込み、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖から煙道部まで一体化して貼り込んでいる。火床部は深さ0.08mの掘り込みが認められる。火袋部に相当する部分より小形な甕形土器が出土している。

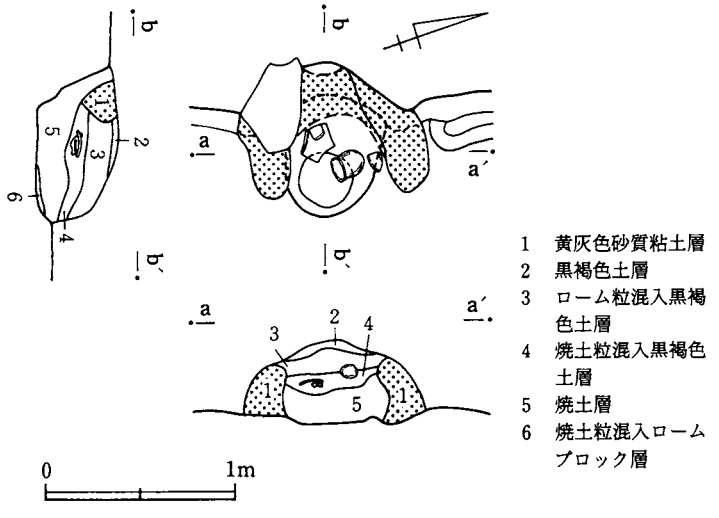


図346 D061号遺構カマド実測図

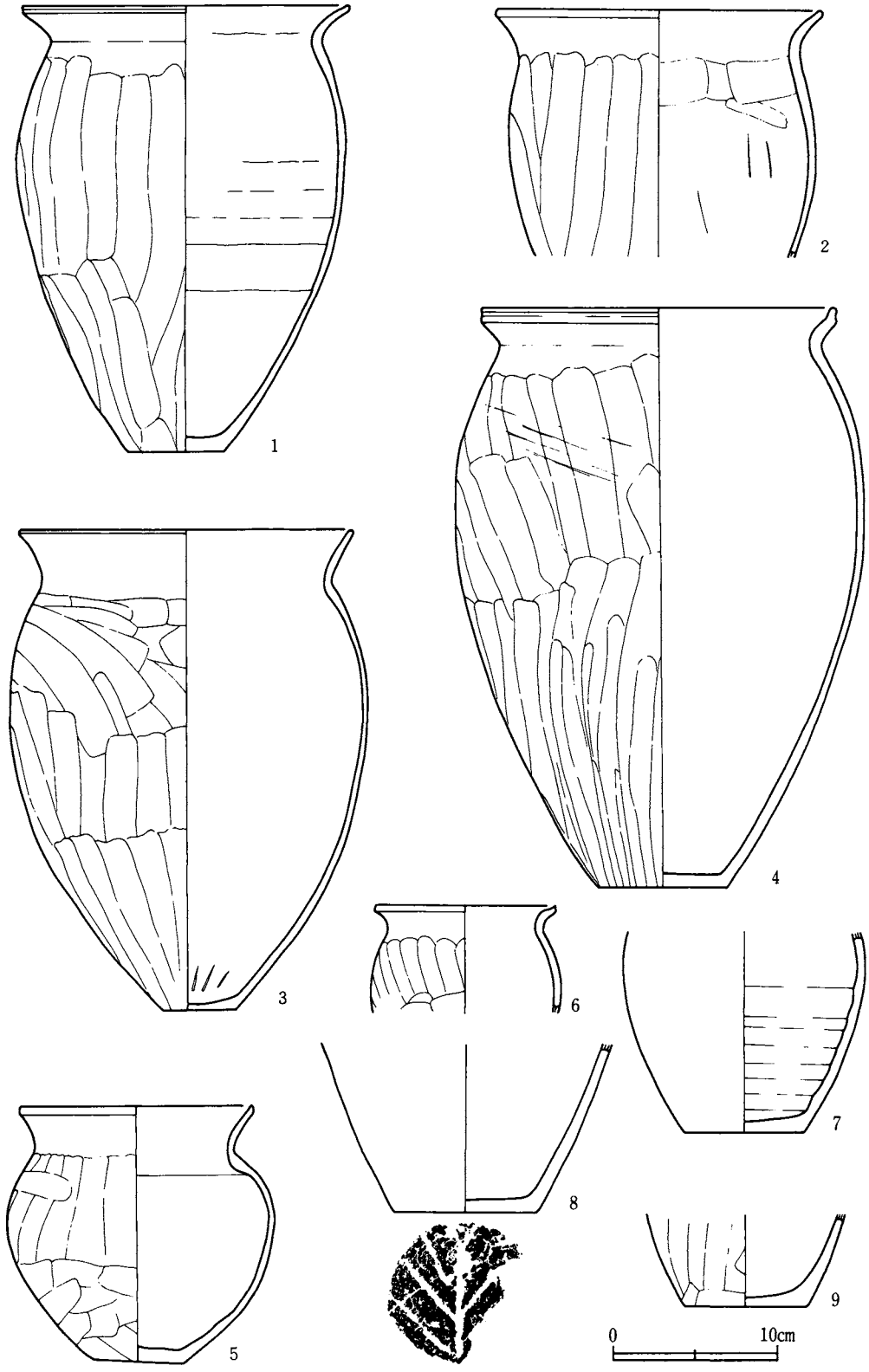


図347 D061号遺構出土遺物実測図(1)

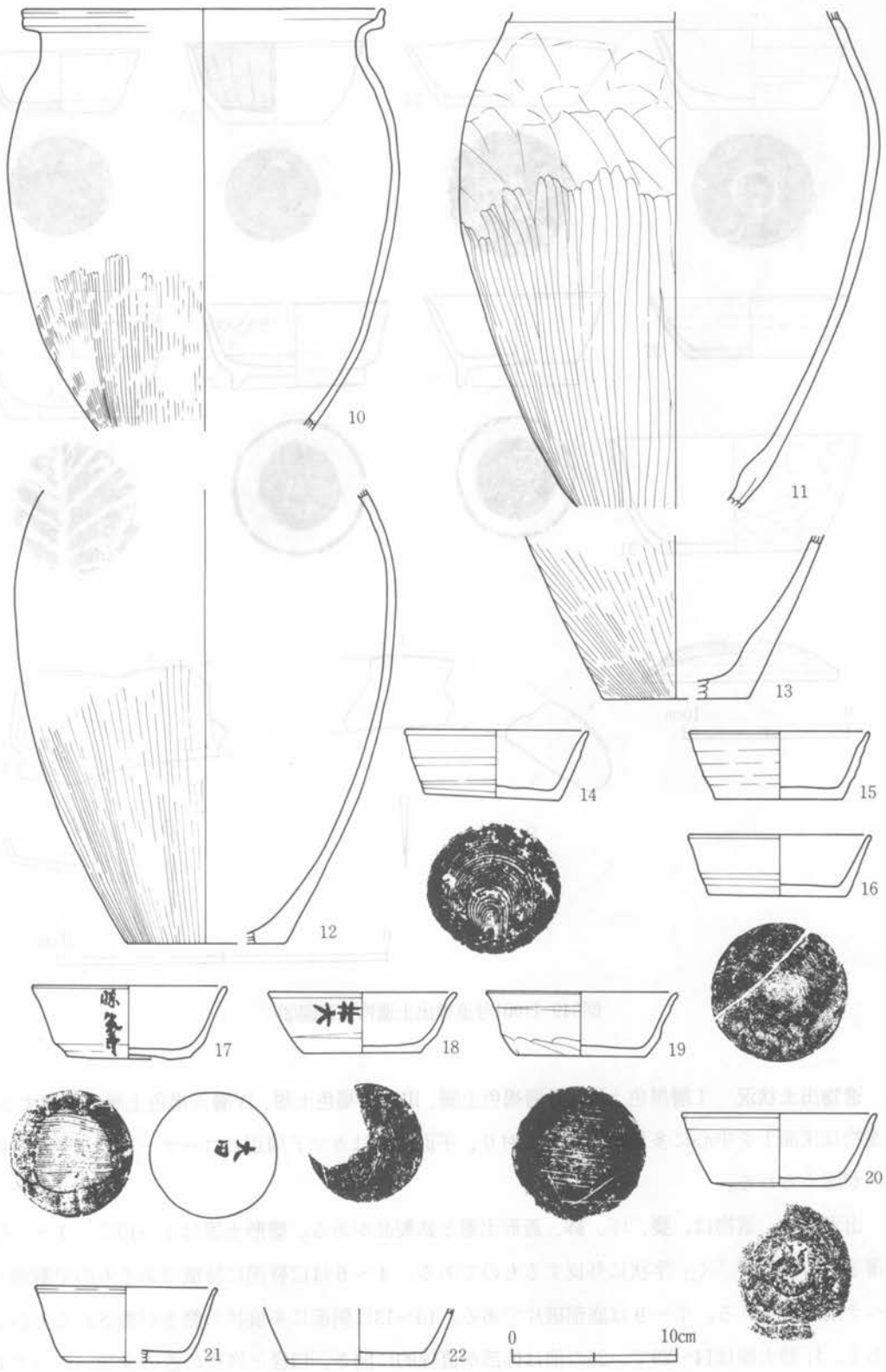


図348 D061号遺構出土遺物実測図(2)

図349 D061号遺構出土遺物実測図(3)

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層褐色土層、Ⅲ層黒褐色土層、Ⅳ層茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上を中心に多量に出土しており、平面的にはカマド周辺とコーナー部に集中する傾向が認められる。

出土遺物　遺物は、甕、坏、鉢、蓋形土器と鉄製品がある。甕形土器は１～13で、１～３は薄手で口縁部が「く」字状に外反するものである。４～６は口唇部に特徴のあるもので胴部はヘラ削調整される。７～９は底部破片である。10～13は胴部に条痕状の磨きが施されるものである。坏形土器は14～29で、25の他は体部が直線的に開き、口径と底径の差の少ないものである。25は若干体部が内彎ぎみに開く。28、29は高台付である。鉢形土器は30、31で、いずれも

若干体部が内彎ぎみに開く形状を呈し、30には木葉痕が認められる。蓋形土器は32である。鉄製品は33の鎌で破損しているが同一個体と思われるもので、全体に研ぎべりを生じている。

D061出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	26.8	20.2	5.9	½	ヨコナデ ヘラ削り	雲母 砂粒	やや堅緻	黒褐色	
2	甕	—	(20.2)	—	口縁部～胴部½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
3	甕	28.5	20.4	4.5	¾	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
4	甕	34.8	21.55	7.8	完形	ヨコナデ ヘラ削り	雲母 砂粒	やや軟弱	(内)茶褐色 (外)黒褐色	
5	甕	15.25	14.4	5.4	完形	ヨコナデ ヘラ削り	雲母 砂粒	やや堅緻	茶褐色	
6	甕	—	11.2	—	頸部～胴部⅓	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
7	甕	—	—	7.35	胴部～底部½	ナデ	砂粒	堅緻	赤褐色	
8	甕	—	—	8.85	胴部～底部⅔	ナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	木葉痕
9	甕	—	—	7.5	胴部～底部⅔	ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	
10	甕	—	(22.4)	—	口縁部～胴部⅓	ヨコナデ 磨き	雲母	堅緻	黄褐色	
11	甕	—	—	—	胴部のみ	ナデ 磨き	雲母 砂粒	やや堅緻	茶褐色	
12	甕	—	—	9.7	胴部～底部⅓	ナデ 磨き	雲母 砂粒	堅緻	茶褐色	
13	甕	—	—	(8.8)	底部⅓	磨き	砂粒	堅緻	茶褐色	
14	坏	4.0	11.4	8.3	完形	底部回転ヘラ削り	—	堅緻	(内)黒色 (外)茶褐色	糸切り
15	坏	4.0	(11.1)	7.9	⅓	底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	赤褐色	
16	坏	3.65	11.2	8.4	完形	底部一方向ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	糸切り
17	坏	4.3	12.0	7.6	完形	底部静止ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「勝先園」、「大田」、静止糸切り
18	坏	3.6	11.65	7.3	完形	底部一方向ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	墨書「井大」
19	坏	3.8	11.80	8.0	完形	下端静止ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	静止糸切り
20	坏	4.35	12.0	8.3	½	—	砂粒	やや堅緻	茶褐色	ヘラ切り
21	坏	4.5	(11.2)	(7.0)	⅓	底部一方向ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	
22	坏	—	—	8.4	底部⅓	底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
23	坏	4.8	12.0	7.7	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	
24	坏	4.05	13.1	7.9	完形	—	砂粒	やや堅緻	茶褐色	ヘラ切り
25	坏	4.85	11.0	6.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	内黒
26	坏	3.7	9.8	6.0	完形	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	
27	坏	3.6	(12.3)	7.55	½	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	ヘラ切り
28	高台付坏	5.4	11.2	7.4	½	—	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
29	高台付坏	5.0	11.6	8.3	完形	—	—	堅緻	茶褐色	内面硯に使用
30	鉢	7.5	10.2	8.2	完形	—	砂粒	やや軟弱	茶褐色	手捏、木葉痕
31	鉢	6.9	15.0	9.0	½	体部ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
32	蓋	—	12.0	—	完形	天井部回転ヘラ削り	—	堅緻	灰色	転用硯

2．D062号遺構（図350～352、図版69—1・2）

III群の住居群において北側に位置し、D061が近接している。北東部分は溝による攪乱を受けている。

遺構　北壁2.70m、東壁2.20mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.40m掘り込んでおり、直下には幅0.20m、深さ0.05mの壁溝が北壁を除いて認められる。ただしカマド右側部は攪乱のため明らかでない。床面は一部攪乱されるものの全体に堅緻な状況を呈している。南西壁コーナー部分に近接してP_1を検出した。径0.20m、深さ0.19mを計る。柱穴は検出できなかった。

カマド　北壁中央部より南寄りに位置し、壁を0.5m掘り込んでいる。粘土の貼り込みは左袖の一部に認められるだけであり、不明な点が多い。煙道部は緩やかな立ち上がりを呈している。

遺物出土状況　I層黄褐色土層、II層ローム粒混入黄褐色土層、III層黒褐色土層、IV層褐色土層、V層ローム粒混入黒褐色土層、VI層暗茶褐色土層、VII層茶褐色土層が堆積する。遺物は少なく、ほとんどが覆土中の出土であるがカマド内出土もある。

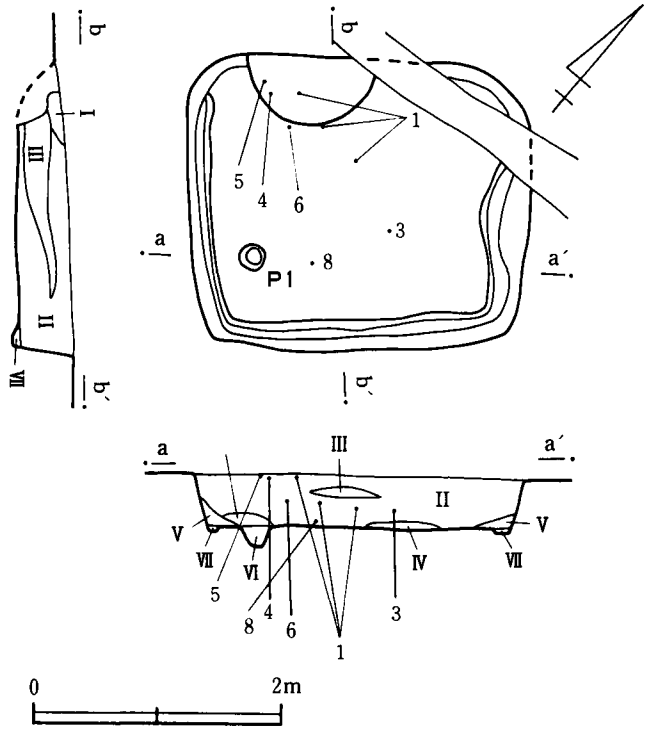


図350　D062号遺構実測図

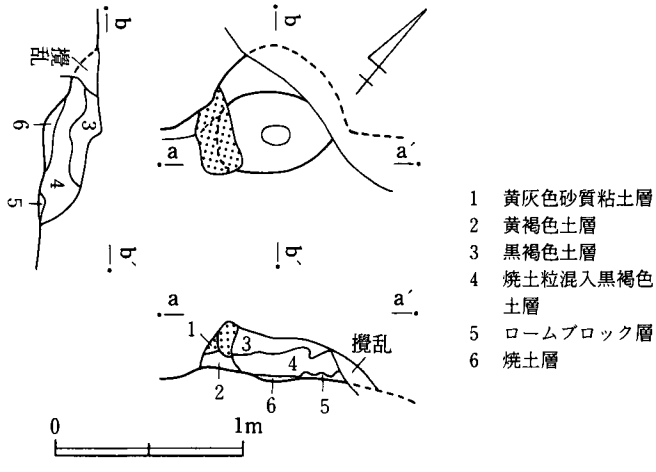


図351　D062号遺構カマド実測図

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器である。甕形土器は1～6で、1、2は口唇部に特徴のある口縁部破片、3、5は緩やかに外反する口縁部を呈している。4は3のような甕の底部と思われ、6は5のような甕のものと思われる。坏形土器は7、8でいずれも破片である。8は高台を有する。

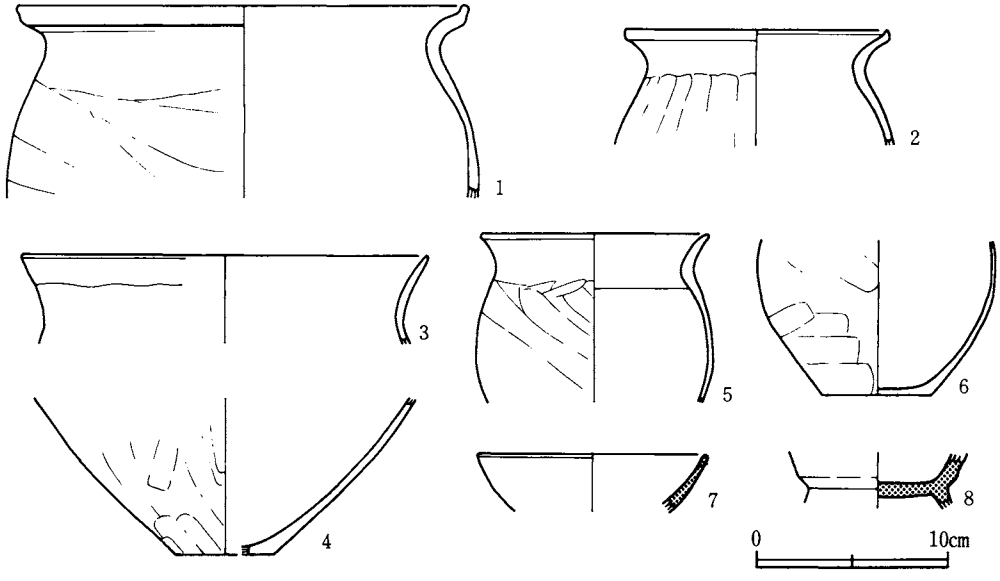


図352 D062号遺構出土遺物実測図

D062出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	口縁部～頸部⅓	ヨコナデ	雲母 砂粒	やや軟弱	茶褐色	
2	甕	—	—	—	口縁部～頸部⅔	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
3	甕	—	(3.5)	—	口縁部のみ	ヨコナデ	—	堅緻	茶褐色	
4	甕	—	—	5.1	胴部 ⅓	ヘラ削り	雲母	堅緻	黒褐色	
5	甕	—	—	—	口縁部～胴部½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
6	甕	—	—	5.7	胴部～底部½	ヘラ削り	雲母	堅緻	黒褐色	
7	坏	—	(12.1)	—	¼	—	—	堅緻	灰色	
8	高台付坏	—	—	—	¼	—	砂粒	堅緻	灰色	

3．D063号遺構（図353～355、図版69—1、111）

III群の住居群内において北東部に位置し、D064、D065、D067が近接し、纏りを呈している。

遺構　北壁3.90m、東壁3.74mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.72m掘り込んでおり、直下には幅0.26m、深さ0.06mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められ

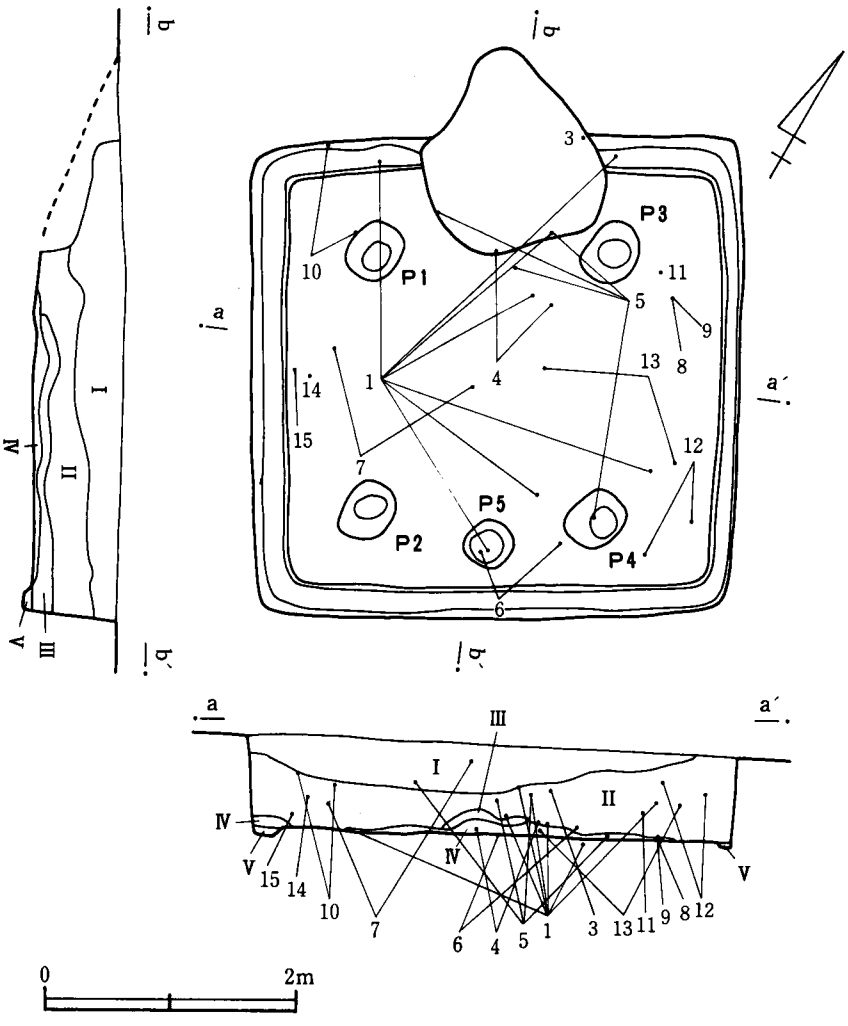
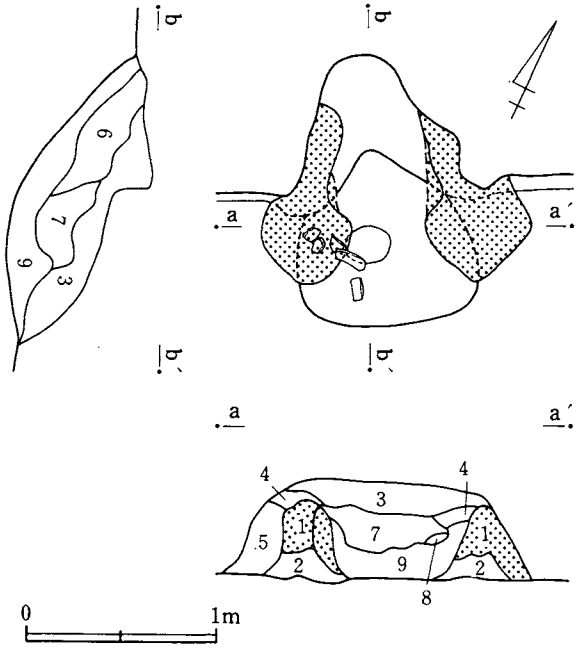


図353 D063号遺構実測図

る。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は対角線上にP_1～P_4を検出した。径平均0.42m、深さ平均0.62mを計る。規模は均一でいずれも円形の掘りかたを呈している。南壁中央部に近接して径0.40m、深さ0.09mを計るP_5を検出した。

カマド　北壁中央部を三角形に最長0.69m掘り込み、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは2層の上に行われ、袖から煙道部まで一体化している。火袋部に相当する左袖部は焼土化しているが右袖部には認められない。火床部は深さ0.05mで浅い擂鉢状の掘り込みを呈している。煙道部は緩やかな傾斜を呈している。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層ローム粒混入黒褐色土層、III層黒色土層、IV層暗褐色土層、V層茶褐色土層が堆積する。遺物は各層より出土するが、完形に近い土器は床面上より出土している。



1　黄灰色砂質粘土層
2　砂質粘土粒混入黄褐色土層
3　ローム粒混入黒褐色土層
4　黄褐色土層
5　砂質粘土粒混入黒褐色土層
6　ローム粒混入黄褐色土層
7　焼土粒混入黒褐色土層
8　黄灰色砂質粘土ブロック層
9　焼土層

図354　D063号遺構カマド実測図

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器と鉄製品がある。甕形土器は1～6で、1～3は口唇部に特徴のある口縁部を呈している。4は緩やかに外反する口縁部を呈している。5、6は底部破片である。坏形土器は7～13で、7は口唇部が内屈する形状の体部である。8～13は体部が直線的に開く形状を呈している。鉄製品は14、15で、いずれも刀子の先端部分である。

D063出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	2.75	20.2	5.7	¾	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
2	甕	14.5	12.8	6.3	½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
3	甕	—	21.4	—	口縁部～胴部⅓	ヨコナデ	雲母 砂粒	堅緻	茶褐色	
4	甕	—	20.0	—	口縁部～頸部⅓	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
5	甕	—	—	9.15	胴部～底部⅓	ナデ	雲母	堅緻	黒色	
6	甕	—	—	5.4	胴部～頸部¾	ナデ	砂粒	堅緻	黒褐色	
7	坏	—	12.6	—	⅓	ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	
8	坏	4.5	13.0	8.0	完形	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	赤褐色	墨書「盛」
9	坏	4.0	12.2	8.5	¾	下端静止ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	糸切り
10	坏	4.45	(12.2)	(8.2)	⅓	—	砂粒	堅緻	茶褐色	
11	坏	—	(12.2)	—	⅓	—	砂粒	堅緻	黒褐色	

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
12	坏	—	(13.0)	—	⅓	—	砂粒	堅緻	灰色	
13	坏	3.7	14.2	(9.0)	⅓	底部一方向ヘラ削り	雲母砂粒	やや軟弱	灰色	ヘラ切り

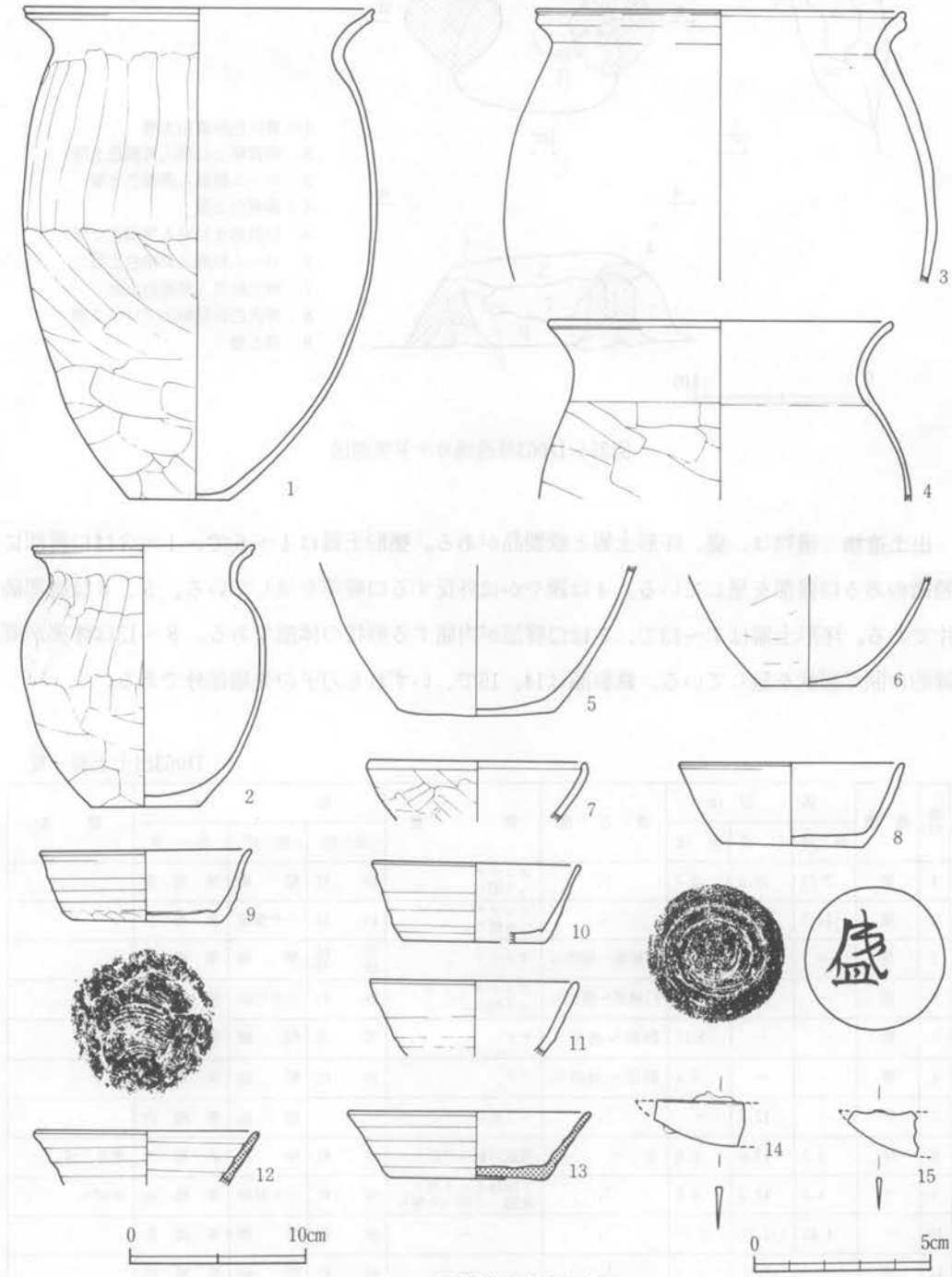


図355 D063号遺構出土遺物実測図

4．D064号遺構（図356～358、図版70—1・2）

III群の住居群内において北東部に位置し、D063、D065、D067と纏りを呈している。

遺構　北壁2.78m、東壁2.68mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はやや傾斜を呈して0.40m掘り込んでいる。直下には幅0.14m、深さ0.05mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は検出できなかった。

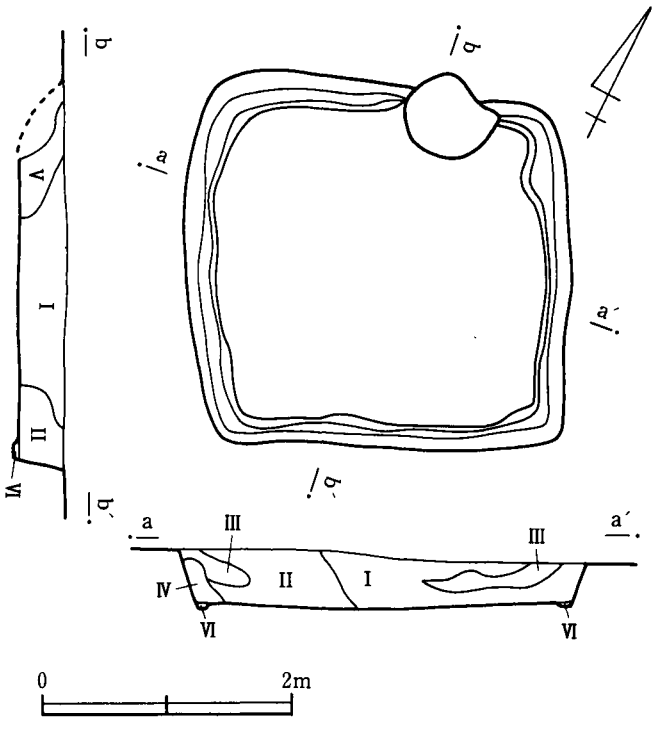


図356 D064号遺構実測図

カマド　北壁中央部より東に寄り、壁を三角形に0.17m掘り込み、黄灰色砂質粘土で構築している。掘り込みが浅く、しかも粘土の貼り込みは掘り込み端部に若干認められるだけであり、焚口から煙出し部まで明確に把握できない。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層ローム粒混入黒褐色土層、IV層褐色土層、V層ローム粒混入黒色土層、VI層茶褐色土層が堆積する。遺物は覆土中からの出土はなく、カマド内出土のみである。

出土遺物　遺物は、甑、坏形土器と鉄製品がある。甑形土器は1、2で、1は水平近く外反する口縁部破片で叩き目がある。2は単孔の底部破片である。坏形土器は3の底部破片である。

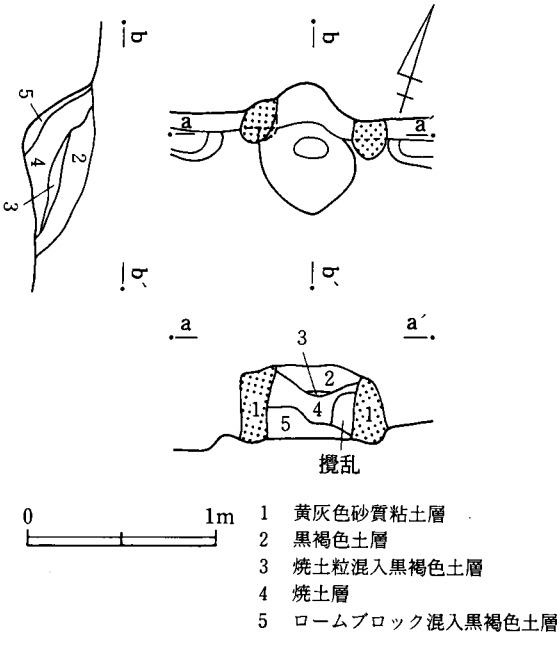


図357 D064号遺構カマド実測図

鉄製品は4の刀子である。柄の部分に木質が付着している。関は明瞭でなく身は研ぎべりが著しい。

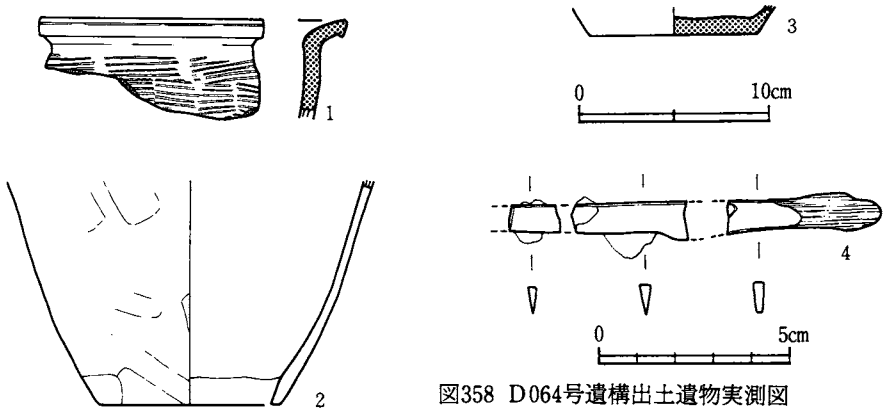


図358 D064号遺構出土遺物実測図

D064出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ 叩きじめ	小石	堅緻	灰色	
2	甕	—	—	(9.65)	胴部 1/4	ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
3	坏	—	—	8.8	底部 1/3	—	雲母	堅緻	灰色	

5．D065号遺構（図359～361、図版70－3、71－1、111）

III群の住居群内において北東部に位置し、D063、D064、D067と纏りを呈している。

遺構　北壁4.66m、東壁4.86mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.76m掘り込んでおり、直下には幅0.20m、深さ0.08mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は対角線上にP_1～P_4を検出した。径平均0.53m、深さ平均0.62mを計る。規模はほぼ均一で、いずれも円形の掘りかたを呈している。南壁中央部に近く径0.40m、深さ0.16mを計るP_5を検出した。

カマド　北壁中央部を三角形に0.86m掘り込み、黄灰色砂質粘土で構築しており、袖芯用の小ピットがある。粘土の貼り込みは袖部から煙出し部まで一体化を呈している。天井部は煙道部分の粘土貼り込みに続くもので良好な状況を呈している。火袋部に相当する左袖部は焼土化が顕著である。火床部は深さ0.11mの掘り込みを呈し煙道部に続くが、煙道部は長軸線より若干ずれを生じている。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層ローム粒混入黒褐色土層、IV層茶褐色土層が堆積する。遺物は床面より若干上方より出土している。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器と土製品、鉄製品がある。甕形土器は1～4で、1は口唇

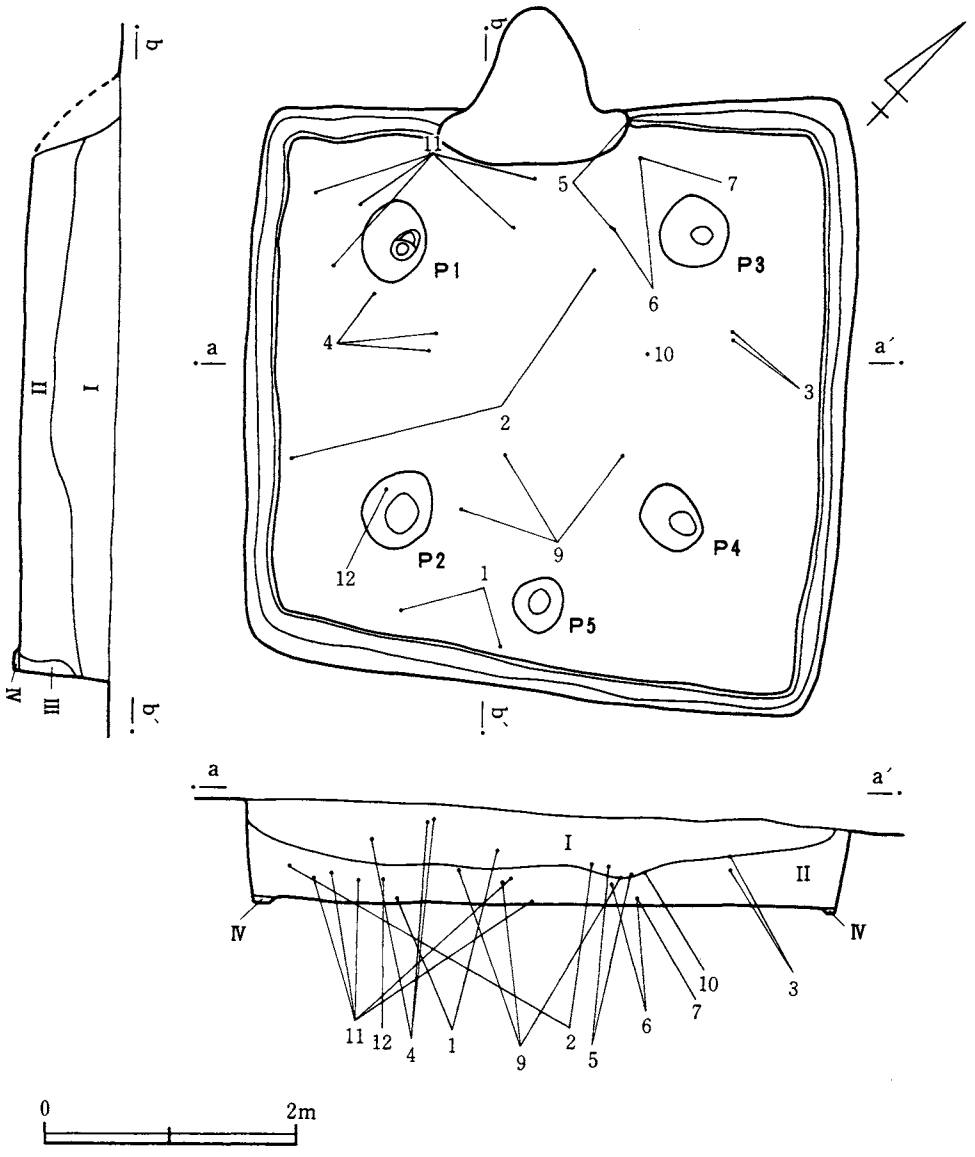


図359 D065号遺構実測図

D065出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	(14.0)	—	口縁部～頸部1/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
2	甕	—	—	7.7	底部 1/2	—	砂粒	堅緻	(内)茶褐色 (外)黄褐色	
3	甕	—	—	7.15	胴部～底部1/2	—	砂粒	堅緻	(内)茶褐色 (外)黒褐色	
4	甕	—	—	6.8	底部 3/4	—	砂粒	堅緻	茶褐色	
5	坏	4.7	12.2	6.35	3/4	ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	

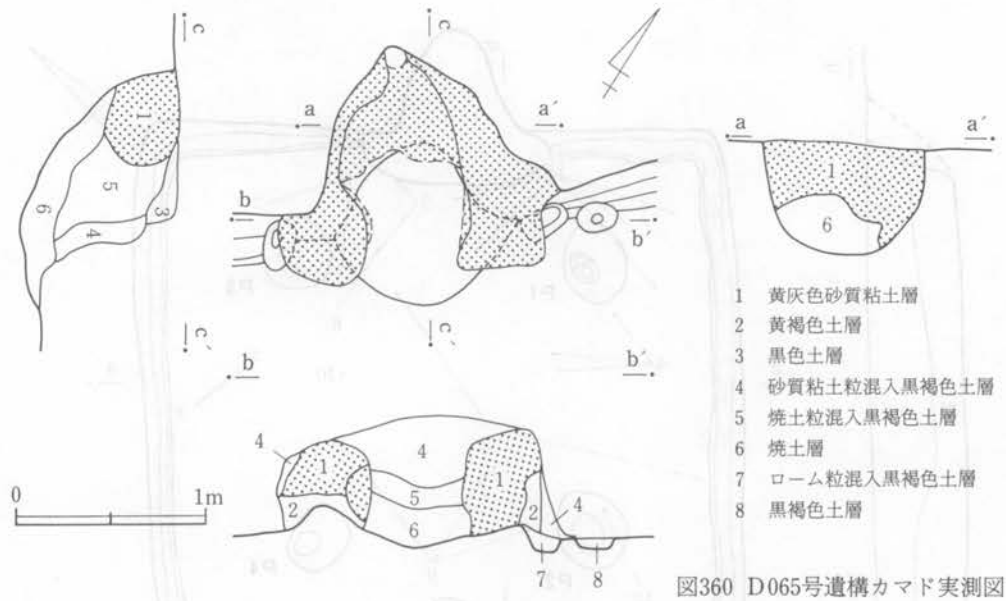


図360 D065号遺構カマド実測図

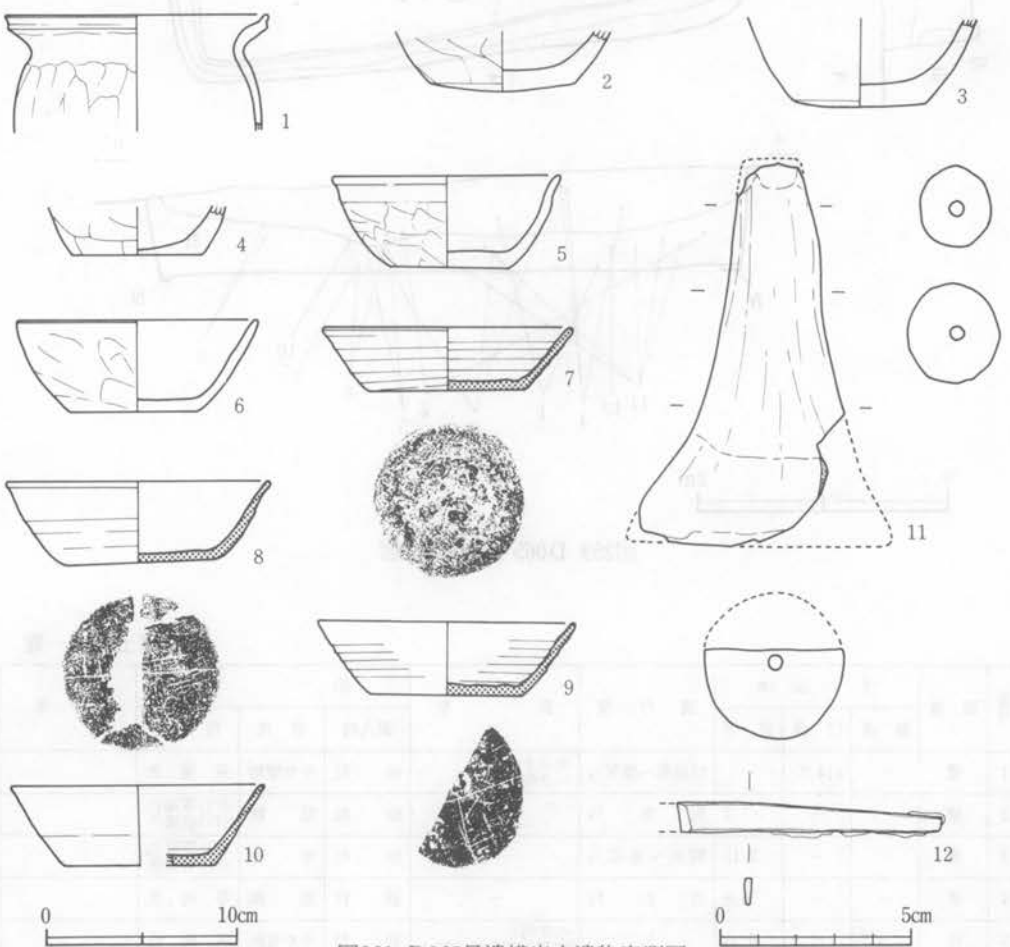


図361 D065号遺構出土遺物実測図

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
6	坏	4.7	12.8	6.9	完形	ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	茶褐色	
7	坏	3.3	(13.4)	8.3	完形	底部一方向ヘラ削り	小石	堅緻	灰色	ヘラ切り
8	坏	4.1	(14.0)	7.9	完形	底部一方向ヘラ削り	雲母 砂粒	やや軟弱	灰色	
9	坏	3.8	13.8	8.1	¼	底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	
10	坏	4.2	13.4	7.95	½	—	砂粒	堅緻	黄灰色	

部に特徴のある口縁部破片、2～4は底部破片である。坏形土器は5～10で、5、6は体部がヘラ削りされたものである。7～10は須恵器で体部は直線的に開く形状を呈す。土製品は11の支脚で円錐状を呈し下端は幅広くなっている。中央部には小孔があく。胎土中砂粒を混入し、焼成は良、色調は橙色を呈す。鉄製品は12の刀子である。柄に相当する部分と思われ、かなり身の長いものになると思われる。

6．D066号遺構（図362、図版71－2）

III群の住居群内において北西部に位置し、D061、D062が約25m離れて北方に所在している。

遺構　北壁2.20m、東壁2.24mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はやや傾斜を呈し、0.20m掘り込んで床面に達する。床面は全体にやや軟弱な状況を呈している。柱穴、壁溝、カマドは検出できず、住居機能を有していたか否か疑問であるが、一応竪穴住居跡として捉えて差し支えないであろう。

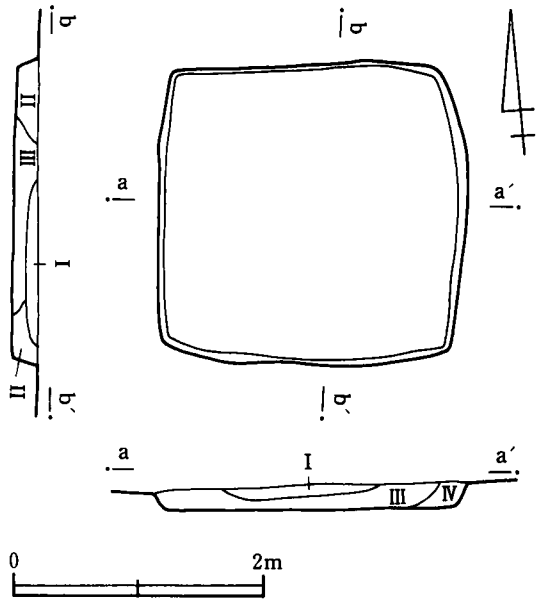


図362　D066号遺構実測図

遺物出土状況　I層黒色土層、II層ローム粒混入黒褐色土層、III層黒褐色土層、IV層褐色土層が堆積しているが、遺物の出土は皆無である。

7．D067号遺構（図363～365、図版71－3、111）

III群の住居群内において北東部に位置し、D063、D064、D065と纏りを呈している。

遺構　北壁3.10m、東壁3.88mでやや不整な方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は

やや傾斜を呈して、0.12m掘り込んで床面に達する。床面は全体にやや軟弱である。柱穴、壁溝等の施設は検出できなかった。

カマド　東壁中央部より南に寄り、壁を0.27m掘り込んで構築しているが、袖、天井部等については明確に把握することができず、カマドとしての機能を有する施設であるか疑問である。

遺物出土状況　覆土は黒褐色土の単一層である。遺物は稀少であるが、床面上を中心として出土し、カマド内出土もある。

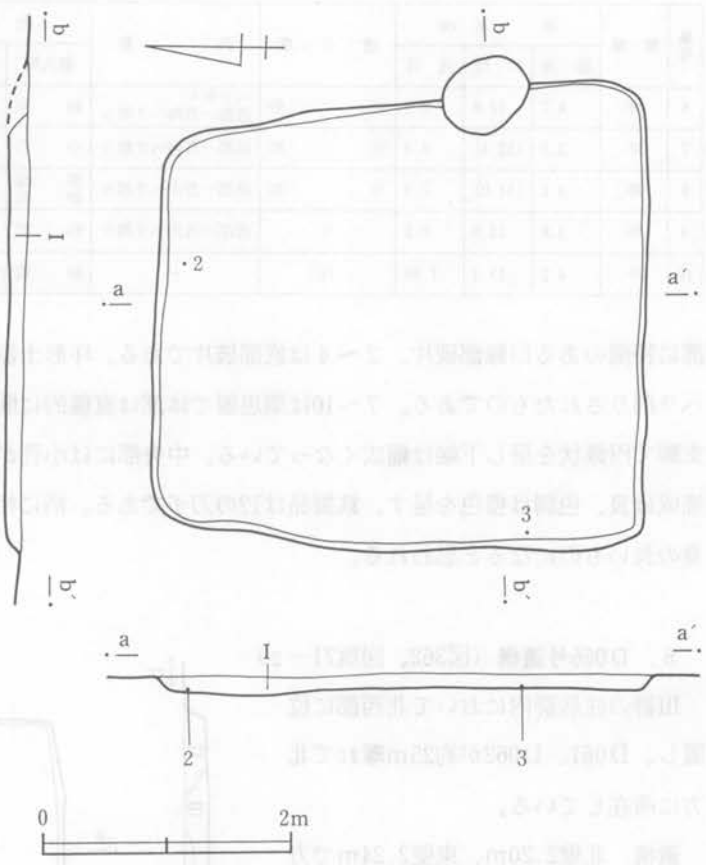


図363　D067号遺構実測図

出土遺物　遺物は、稀少でしかも坏形土器のみである。1は丸底に近い形状を呈している。2、3は小形なもので体部は大きく開く形状を呈している。

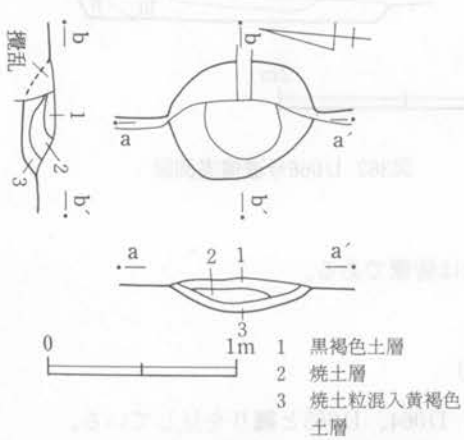


図364　D067号遺構カマド実測図

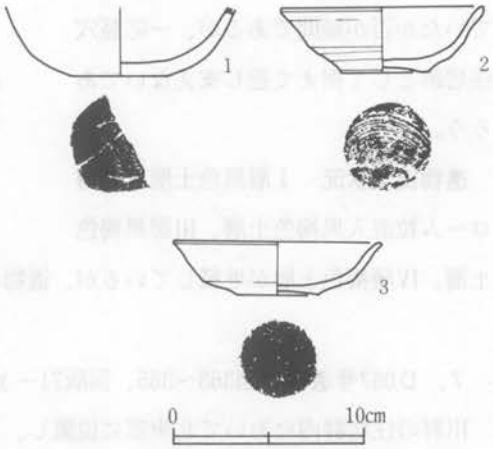


図365　D067号遺構出土遺物実測図

D067出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	坏	—	—	5.15	底部 1/3	底部一方向ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	糸切り
2	坏	3.35	10.85	4.7	完形	—	砂粒	やや堅緻	茶褐色	糸切り
3	坏	2.7	11.15	4.3	1/2	—	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り

8．D069号遺構（図366～372、図版72－1・2、111～113）

III群の住居群内において北側に位置し、D070、D088と纏りを呈している。覆土を掘り下げていく途中多量の炭化材や焼土が出土したため、焼失した遺構と判断できる。

遺構　北壁2.90m、東壁3.36mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はやや傾斜を

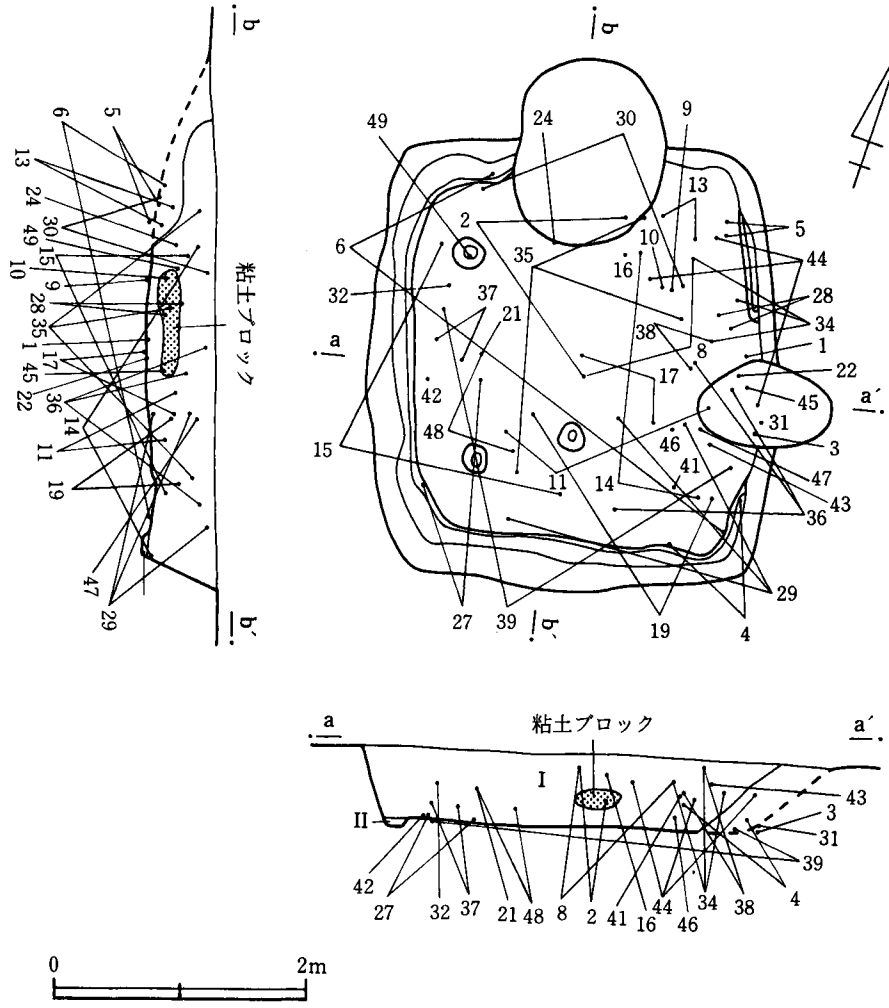


図366 D069号遺構実測図

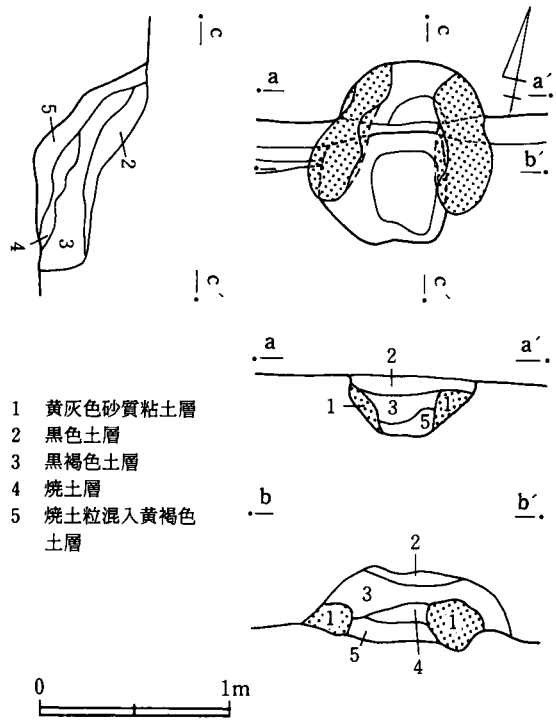


図367 D069号遺構Aカマド実測図

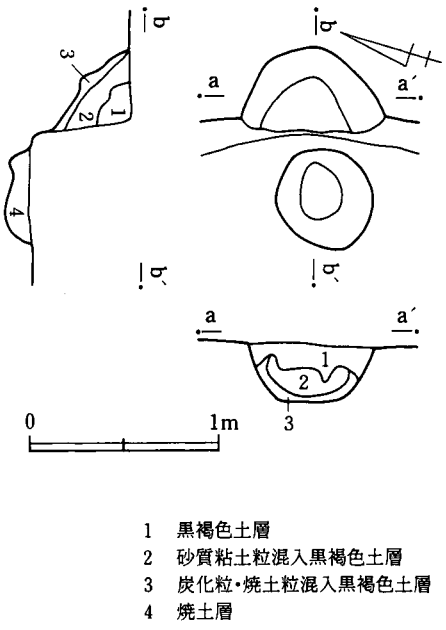


図368 D069号遺構Bカマド実測図

呈して、0.58m掘り込んでいる。直下には幅0.20m、深さ0.05mの壁溝がカマド構築部分と北東壁コーナー部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。径0.22m、深さ0.06～0.13mを計るピットが3か所に位置するが、規模や配置から柱穴とは考えられない。

カマド　北壁と東壁において検出した。旧時のカマドBは東壁中央部より若干右に寄り壁を0.39m掘り込んでいるが、修改築に際して煙出し部を除いて削平されているため全体について充分把握できない。長径0.52m、

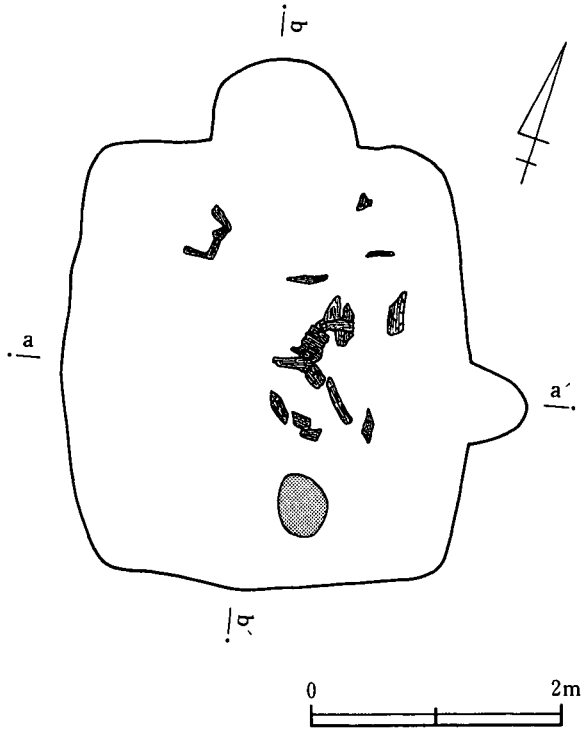


図369 D069号遺構炭化物出土状況図

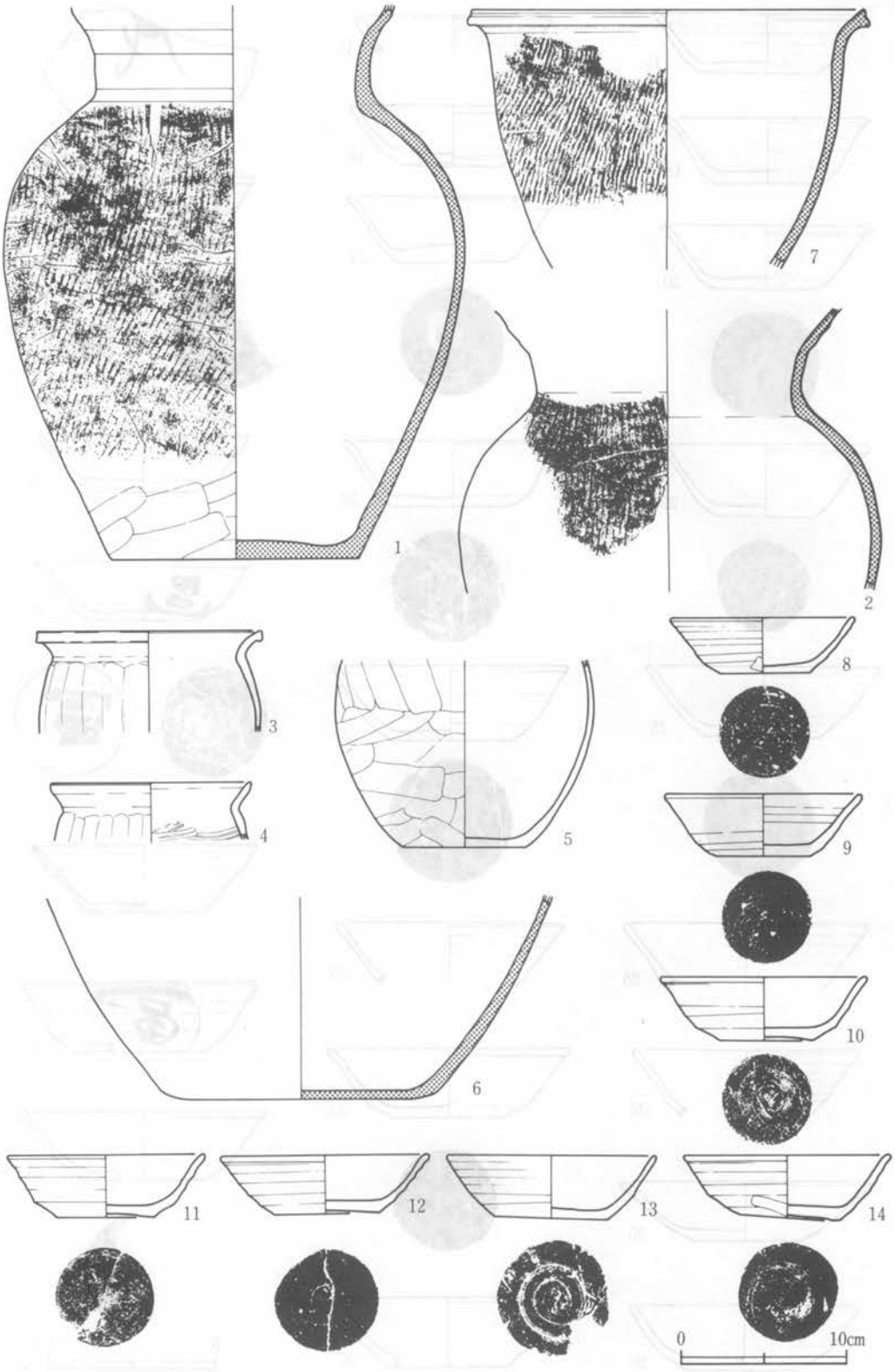


図370 D069号遺構出土遺物実測図(1)

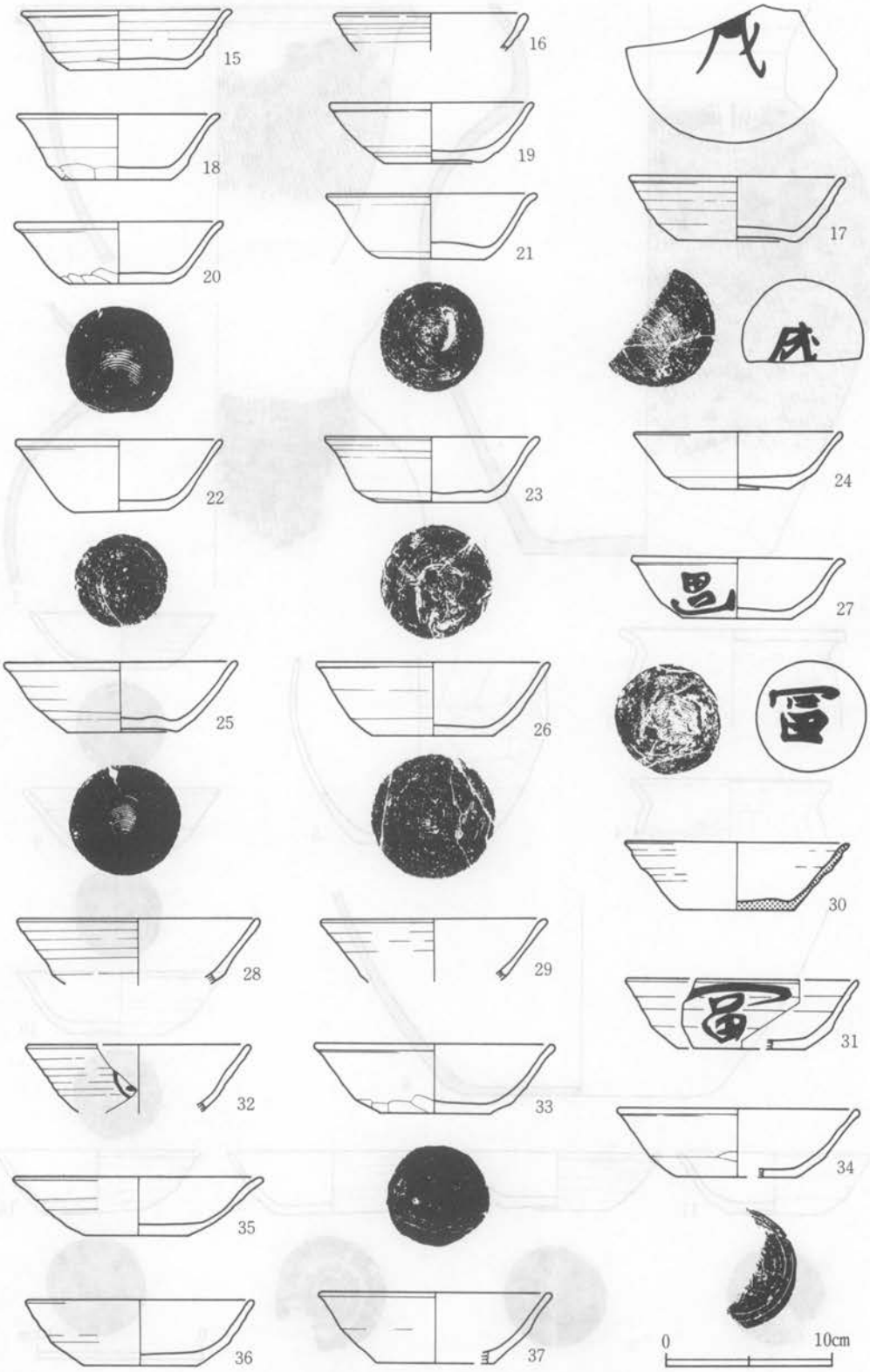


図371　D069号遺構出土遺物実測図(2)

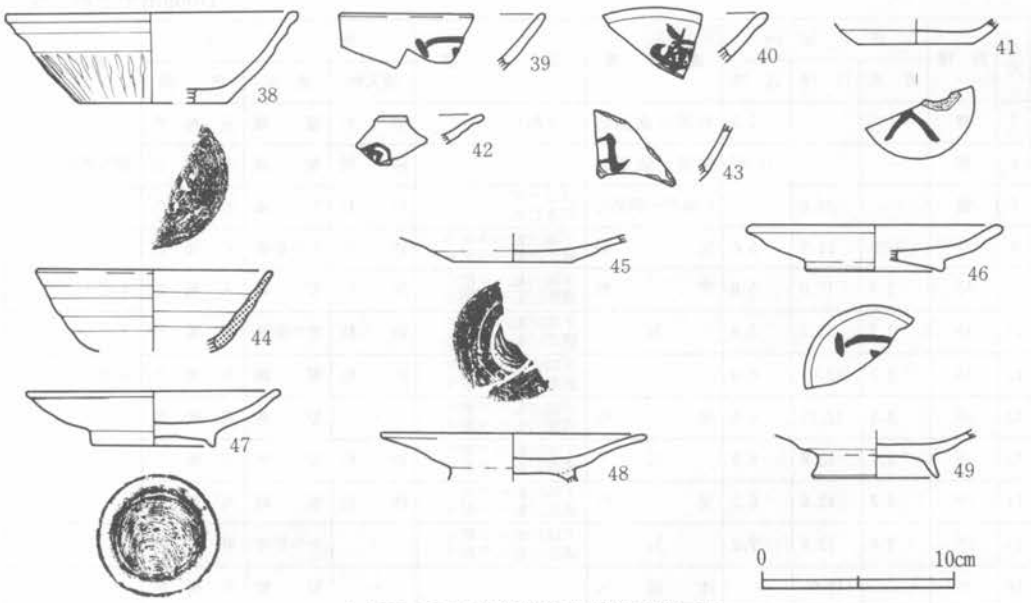


図372 D069号遺構出土遺物実測図(3)

深さ0.13mを計り、円形を呈する火床部が遺存している。住居廃絶時まで使用されていたカマドAは北壁中央部を0.3m掘り込み、黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土の貼り込みは、煙道部まで認められる。煙出し部は明瞭でない。天井部は遺存せず、火床は若干認められる程度である。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上を中心として多量に出土している。カマドA内からも多く出土している。

出土遺物　遺物は、甕、甑、坏、皿形土器がある。甕形土器は1～6で、1、2は叩き目のある広口甕である。3、4は小形の甕の口縁部である。5も3、4と同様に小形甕の胴部下半である。6は大形甕の胴部である。甑形土器は7で胴部に叩き目があり、口縁部は水平近く外反する。坏形土器は口径 12 cm 前後の8～24と、口径 15 cm 前後の25～38がある。39～43は墨書のある体部破片、44は須恵器の体部破片である。皿形土器は45～49で、45は平底、他は高台を有している。

D069出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	14.9	1/4	ヨコナデ 叩きじめ	雲母 砂粒	堅緻	茶褐色	
2	甕	—	—	—	頸部 1/3	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
3	甕	—	13.7	—	口縁部～頸部1/2	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
4	甕	—	(12.2)	—	口縁部 1/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
5	甕	—	—	7.5	胴部～底部3/4	ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
6	甕	—	—	(16.8)	胴部～底部1/4	—	砂粒	堅緻	茶褐色	器面磨滅
7	甑	—	24.6	—	口縁部～胴部3/4	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	堅緻	赤褐色	
8	坏	3.25	11.2	5.5	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
9	坏	3.7	12.0	5.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
10	坏	3.7	12.5	5.6	2/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
11	坏	3.7	(12.0)	6.0	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
12	坏	3.4	12.75	6.5	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	
13	坏	3.7	12.8	6.9	2/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	赤褐色	
14	坏	3.7	12.6	6.2	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
15	坏	3.6	12.8	7.2	2/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	—	やや堅緻	黒褐色	
16	坏	—	(12.0)	—	体部 1/3	—	—	堅緻	茶褐色	
17	坏	3.9	(13.2)	9.4	1/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	墨書「成」 糸切り
18	坏	3.9	(12.4)	6.7	1/2	下端静止ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
19	坏	3.6	12.6	6.1	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	へり切り
20	坏	3.8	(12.8)	6.1	1/2	下端静止ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
21	坏	3.9	13.0	6.65	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
22	坏	4.25	12.6	5.7	3/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
23	坏	3.9	13.2	6.8	2/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
24	坏	3.35	(12.8)	6.2	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
25	坏	4.15	14.2	6.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰褐色	糸切り
26	坏	4.35	14.4	7.5	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母 砂粒	やや堅緻	茶褐色	
27	坏	3.6	13.0	6.7	3/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	墨書「冨」 糸切り
28	坏	—	14.8	—	1/3	下端回転ヘラ削り	—	堅緻	黒褐色	内面磨き
29	坏	—	(14.0)	—	1/3	—	—	堅緻	黒褐色	内面磨き
30	坏	4.0	(13.7)	(7.0)	1/4	底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
31	坏	4.1	(14.3)	(7.75)	1/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	茶褐色	墨書「冨」
32	坏	—	(13.8)	—	体部 1/3	—	—	堅緻	茶褐色	墨書判読不明
33	坏	4.1	14.8	6.7	2/3	下端静止ヘラ削り 底部静止ヘラ削り	雲母 砂粒	堅緻	橙色	
34	坏	4.05	(14.8)	7.4	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	糸切り 内面磨き
35	坏	3.5	(15.2)	6.25	1/3	底部一方向ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	内面磨き
36	坏	3.9	(13.9)	6.9	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	糸切り
37	坏	4.2	(14.5)	(7.2)	1/4	—	砂粒	堅緻	茶褐色	
38	坏	4.7	15.4	(7.8)	1/3	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
39	坏	—	—	—	破片	—	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「冨」
40	坏	—	—	—	破片	—	—	堅緻	茶褐色	墨書判読不明

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
41	坏	—	—	(6.2)	底部のみ	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書判読不明
42	坏	—	—	—	破片	—	—	堅緻	茶褐色	墨書判読不明
43	坏	—	—	—	破片	—	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書判読不明
44	坏	—	(12.5)	—	体部 1/4	下端回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	
45	皿	—	—	6.3	底部 1/2	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
46	高台付皿	—	—	—	1/3	—	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「冨」、糸切り、内面磨き
47	高台付皿	2.8	13.5	6.4	完形	—	砂粒	堅緻	黒褐色	糸切り
48	高台付皿	—	(14.2)	—	1/2	—	—	堅緻	茶褐色	内面磨き 糸切り
49	高台付皿	—	—	6.65	高台部 1/3	—	—	堅緻	茶褐色	内面磨き

9．D070号遺構（図373～375、図版72—3、73—1、113）

III群の住居群内において北側に位置し、D069、D088と纏りを呈している。遺構の南側半分は東西に連なる溝によって切断されているため遺存状況は悪い。

遺構　北壁3.47mを計るが、南北方向の規模は攪乱のため確認し得ないが、溝の掘りかた中に壁の一部分も認められないため、少なくとも4mを越える規模でないことがわかる。およそ北壁辺長と同様であったと思われる。壁は垂直に0.50m掘り込んでおり、直下には幅0.16m、深さ0.02mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は検出できなかった。

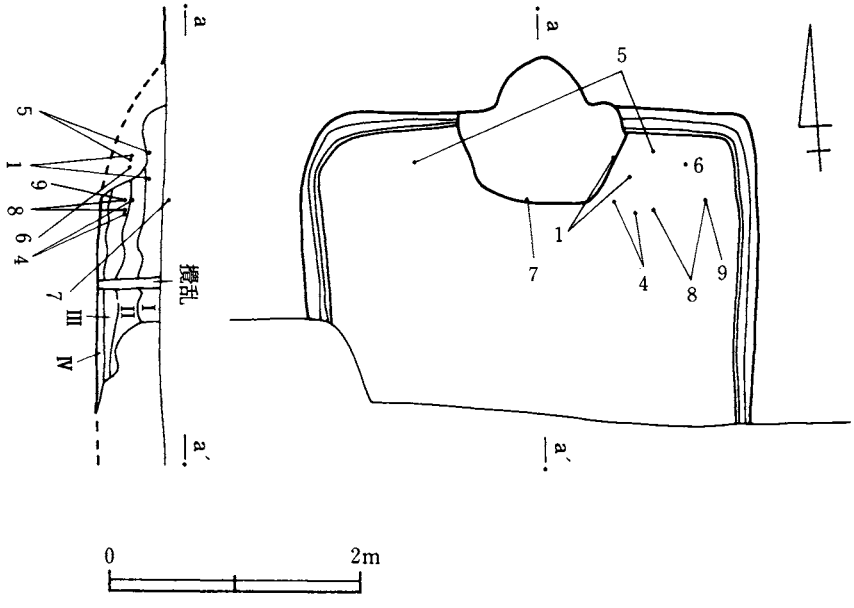


図373　D070号遺構実測図

カマド　北壁中央部を三角形に0.47m掘り込み、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖部のみに認められ、天井部、煙道部には確認できなかった。火袋に相当する袖部は焼土化が認められる。火床部は深さ0.08mで擂鉢状の掘り込みを呈し、煙道部は緩やかな傾斜を呈している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層ローム粒混入黒色土層、IV層ローム粒混入黒色土層が堆積する。遺物は大部分覆土中の出土で、平面的にはカマド周辺からの出土が多く、カマド内出土もある。

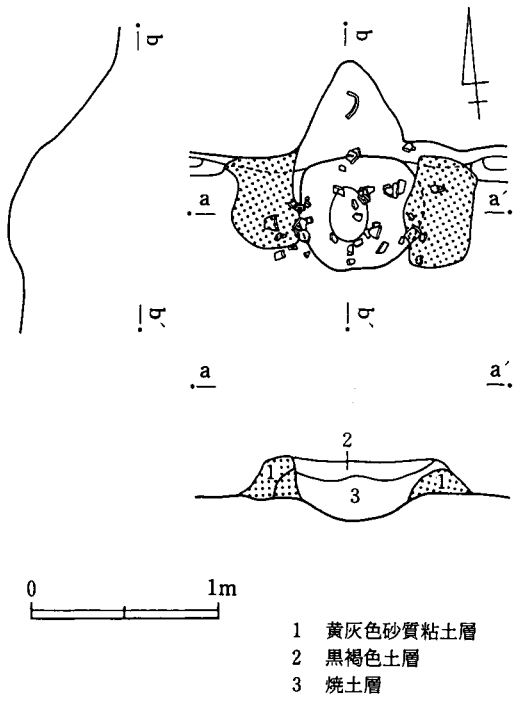


図374 D070号遺構カマド実測図

出土遺物　遺物は、甕、坏、皿形土器がある。甕形土器は1～5で、1は口縁部が水平近く外反する。2は口唇部に特徴を有る小形の甕、3、4は底部破片、5は胴部に叩き目がある広口甕の胴部である。坏形土器は6、8、9で、体部は大きく開く形状を呈している。皿形土器は7、10で、10は高台風の底部を呈している。

D070出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	19.2	—	½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	茶褐色	
2	甕	14.5	(14.2)	6.1	⅔	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
3	甕	—	—	7.7	底部 ⅔	ヘラ削り	小石	堅緻	茶褐色	
4	甕	—	—	6.3	底部 ½	ヨコナデ	雲母	堅緻	茶褐色	
5	甕	—	—	(14.2)	胴部 ⅓	叩きじめ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
6	坏	3.3	(12.2)	(6.6)	⅓	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	
7	皿	—	—	7.5	底部 ⅔	—	砂粒	堅緻	茶褐色	内面磨き
8	坏	—	—	6.7	底部 ½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	茶褐色	
9	坏	4.4	(13.7)	(6.15)	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	赤褐色	内黒
10	皿	2.7	13.5	6.5	½	—	砂粒	堅緻	茶褐色	内面磨き 糸切り

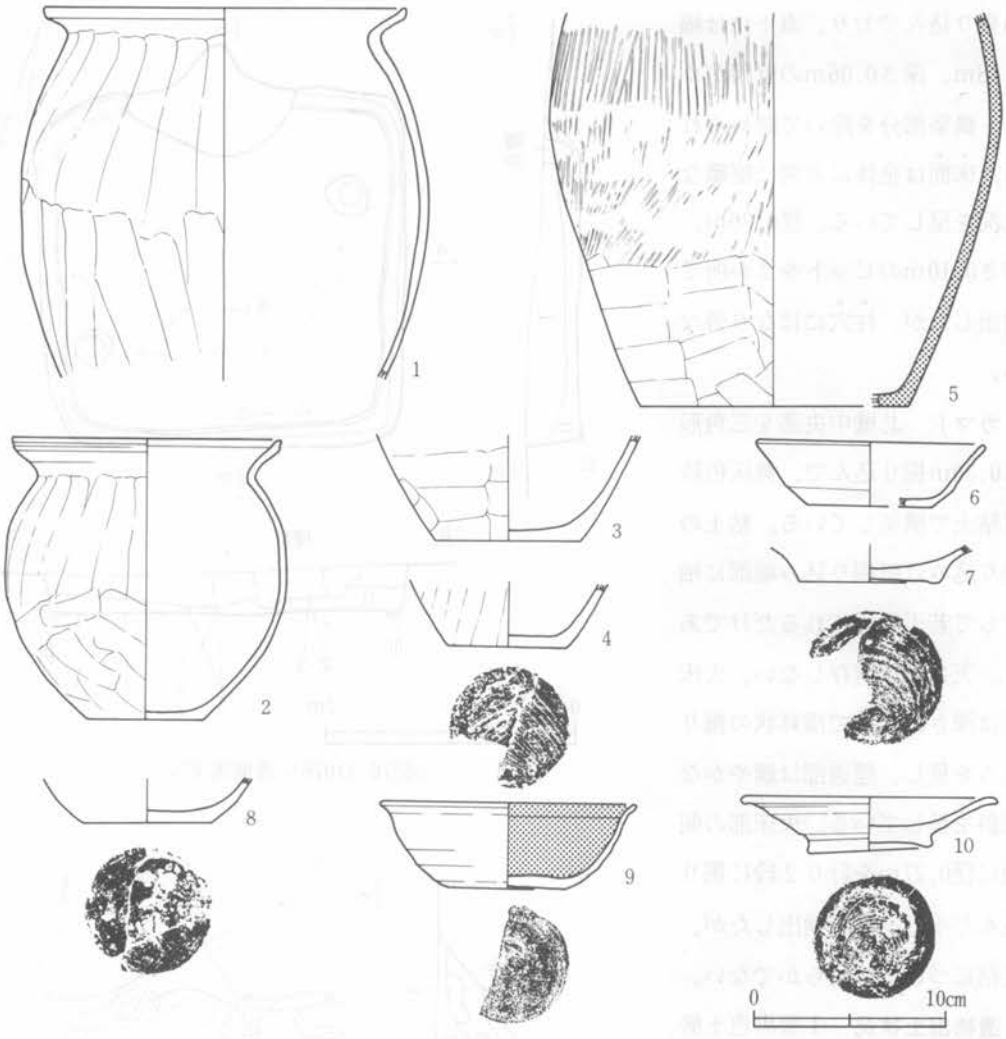


図375 D070号遺構出土遺物実測図

10. D076号遺構（図376～378、図版73－2・3、113）

III群の住居群内において最も北側に位置し、西方約25m離れてD061、D062がある。

遺構 北壁2.94m、東壁2.77mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.44

D076出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	14.8	(14.8)	7.0	½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	軟弱	黒褐色	
2	甕	—	16.0	—	口縁部～胴部⅗	ヨコナデ ヘラ削り	雲母 砂粒	やや軟弱	灰褐色	
3	甕	—	—	6.0	胴部～底部½	ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
4	甕	—	—	15.3	胴部～底部⅗	ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	

m掘り込んでおり、直下には幅0.18m、深さ0.06mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に非常に堅緻な状況を呈している。径0.30m、深さ0.10mのピットを2か所で検出したが、柱穴にはなり得ない。

カマド　北壁中央部を三角形に0.30m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは壁掘り込み端部に袖として若干認められるだけであり、天井部は遺存しない。火床部は深さ0.10mで擂鉢状の掘り込みを呈し、煙道部は緩やかな傾斜を呈している。火床部の側面に径0.27mを計り2段に掘り込んだ小ピットを検出したが、性格については明らかでない。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層茶褐色土層が堆積する。遺物は稀少で、床面上を中心に出土している。

出土遺物　遺物は、甕、坏、皿形土器がある。甕形土器は1～4で、1、2は口唇部に特徴のある口縁部を呈している。3は小形甕の底部、4は広口甕の底部である。坏形土器は5の体部破片である。皿形土器は6で高台付である。

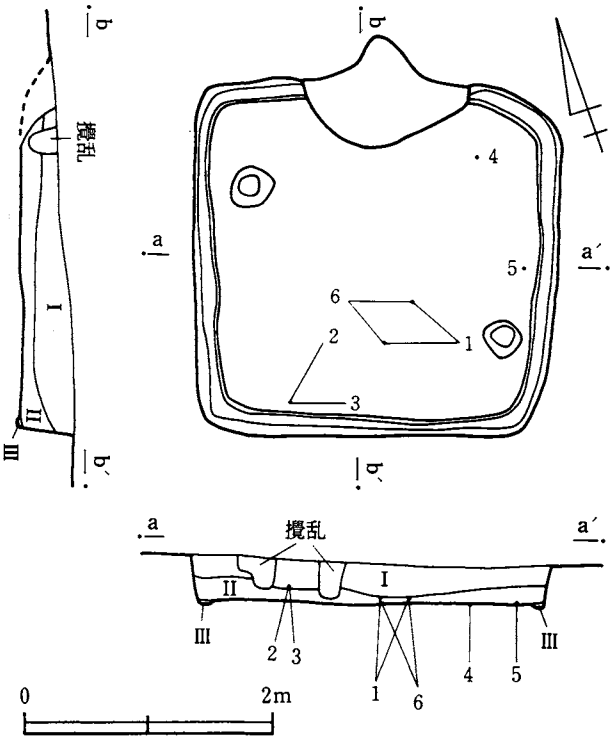


図376　D076号遺構実測図

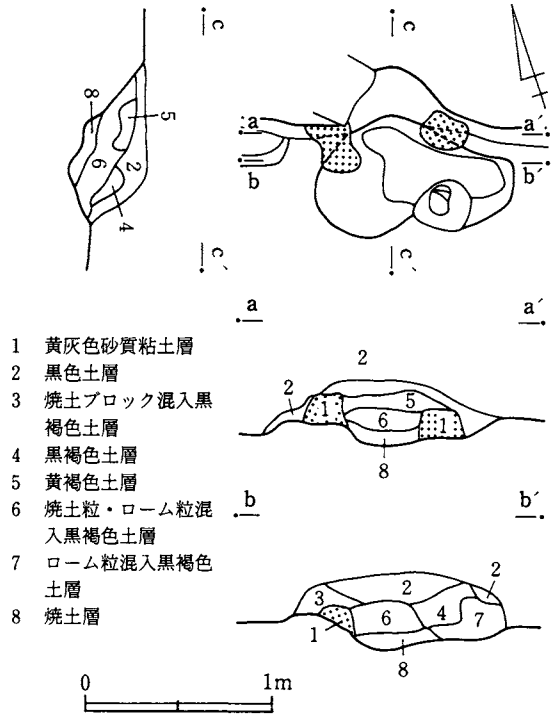


図377　D076号遺構カマド実測図

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
5	坏	4.1	(15.5)	(9.4)	¼	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
6	高台付皿	2.7	14.2	6.85	完形	—	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り 内面磨き

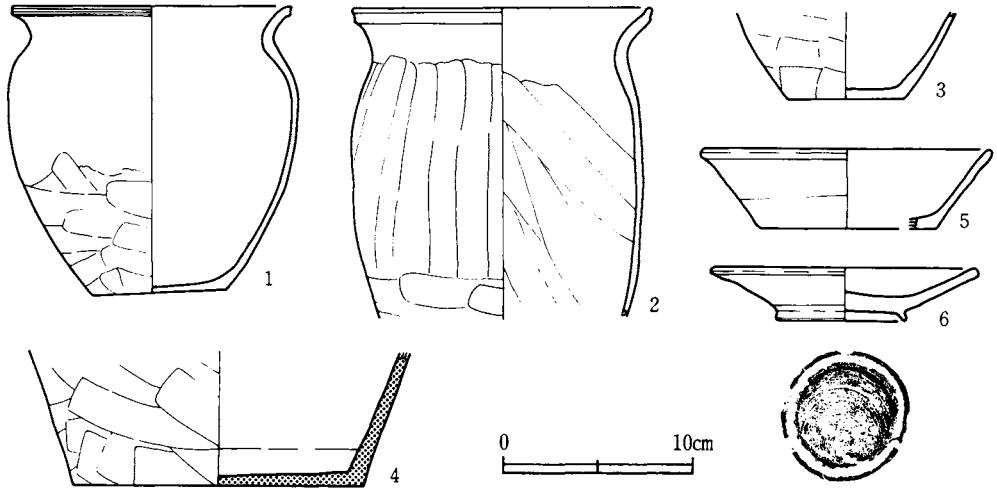


図378 D076号遺構出土遺物実測図

11. D088号遺跡（図379～381、図版74－1・2、114）

III群の住居群内において北側に位置し、D069、D070と纏りを呈している。遺構の南側半分は、東西に連なる溝によって攪乱を受けており、遺存状況がきわめて悪い。

遺構 北壁3.84mを計るが、南北方向の規模は攪乱のため確認し得ないが、溝の掘りかた面に遺構の一部分も認められないので北壁辺長に均いと思われる。平面形は方形を呈していたと考えられる竪穴住居跡である。北壁は垂直に0.30m掘り込んでおり、北壁カマド左側部分から西壁にかけて、直下に幅0.24m、深さ0.03mの壁溝が認められる。床面は遺存している部分の状況から全体に堅緻な状況を呈していると思われる。柱穴は検出できなかった。

D088出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	24.0	(18.6)	8.2	½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	軟弱	茶褐色	
2	甕	—	(23.3)	—	口縁部～胴部⅓	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
3	甕	17.2	20.0	11.8	完形	ヨコナデ、叩きじめ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
4	坏	4.6	13.2	5.8	完形	下端静止ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	黒褐色	糸切り
5	坏	4.3	12.7	6.5	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	

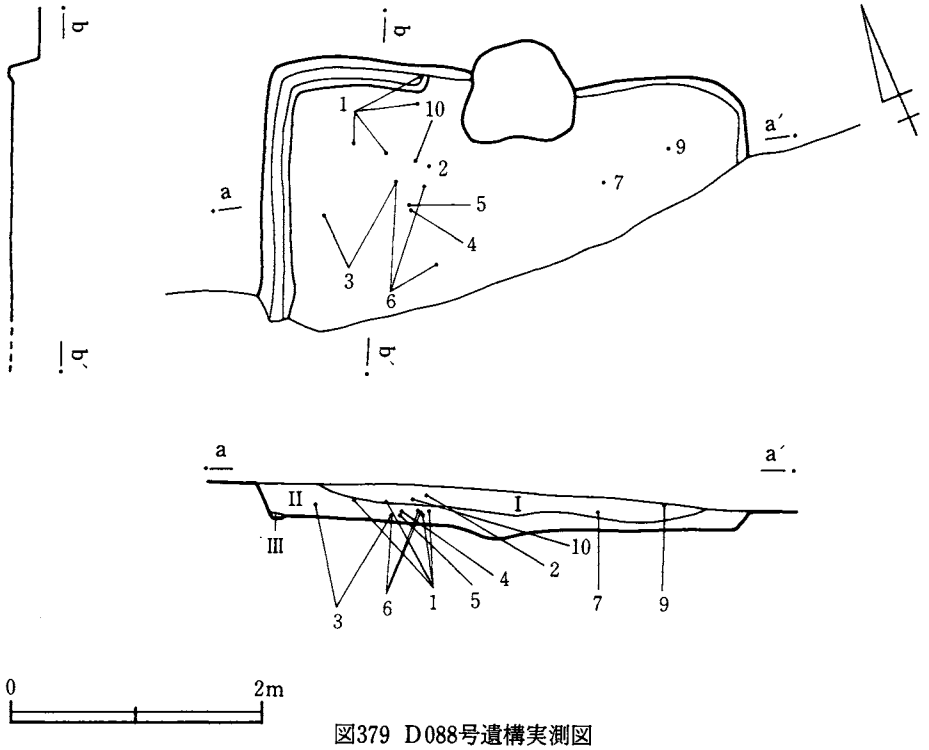


図379 D088号遺構実測図

カマド　北壁中央部を0.30m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは掘り込み部分に若干認められる程度であり、天井部、袖部等の状況は充分把握できない。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層粘土粒混入黒褐色土層、III層黒褐色土層、IV層茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上を中心として出土している。

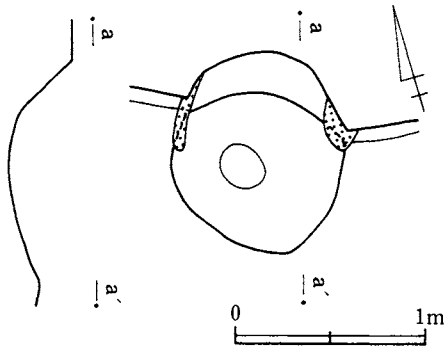


図380 D088号遺構カマド実測図

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
6	坏	3.7	12.6	7.6	完形	—	砂粒	やや堅緻	茶褐色	糸切り
7	坏	4.0	(15.0)	7.7	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	茶褐色	内面磨き
8	坏	—	—	(7.7)	底部 ⅓	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書判読不明 糸切り
9	鉢	—	—	—	破片	—	雲母	堅緻	茶褐色	墨書「仁」、内面磨き
10	皿	3.5	(13.7)	7.2	½	—	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「方」、内面磨き、糸切り

出土遺物　遺物は、甕、坏、鉢、皿形土器がある。甕形土器は1～3で、1は口唇部に特徴を有する口縁部を呈している。2は緩やかに外反する口縁部を呈す。3は「く」字状に外反する口縁部を呈し、胴部に叩き目がある。坏形土器は4～8で、口径12cm前後の4～6と、口径15cm前後の7がある。8は墨書のある底部破片である。鉢形土器は9で墨書がある体部破片である。皿形土器は10で高台風の造り出しがある。

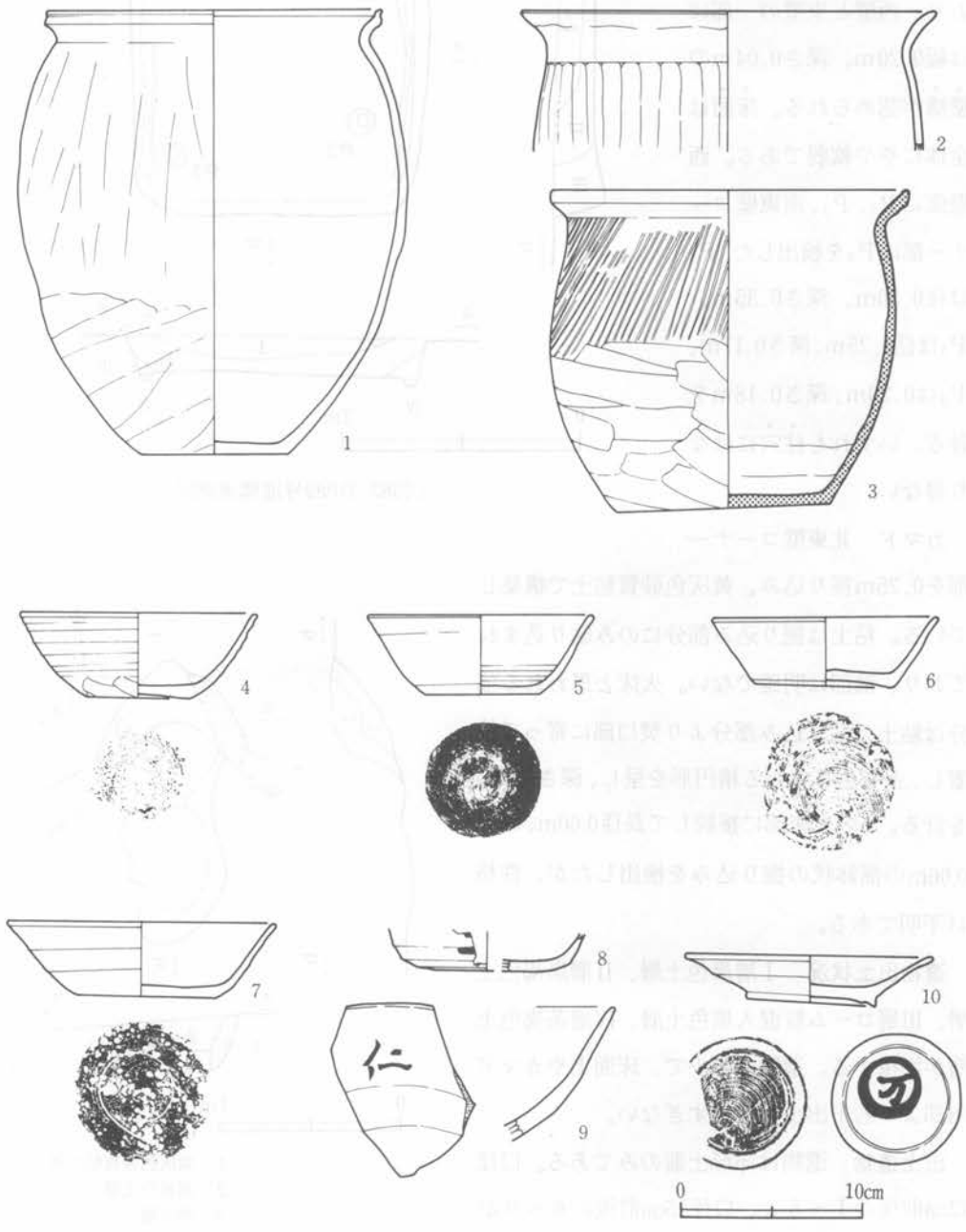


図381　D088号遺構出土遺物実測図

12. D089号遺構（図382～384、図版74－3、75－4、114）

III群の住居群内において最も西側に位置し、D090、D093が東方約27m離れてある。

遺構　北壁2.44m、東壁2.63mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.32m掘り込んでおり、西壁と東壁の一部には幅0.20m、深さ0.04mの壁構が認められる。床面は全体にやや軟弱である。西壁側にP_1、P_2、南東壁コーナー部にP_3を検出した。P_1は径0.30m、深さ0.35m、P_2は径0.25m、深さ0.17m、P_3は0.20m、深さ0.18mを計る。いずれも柱穴にはなり得ない。

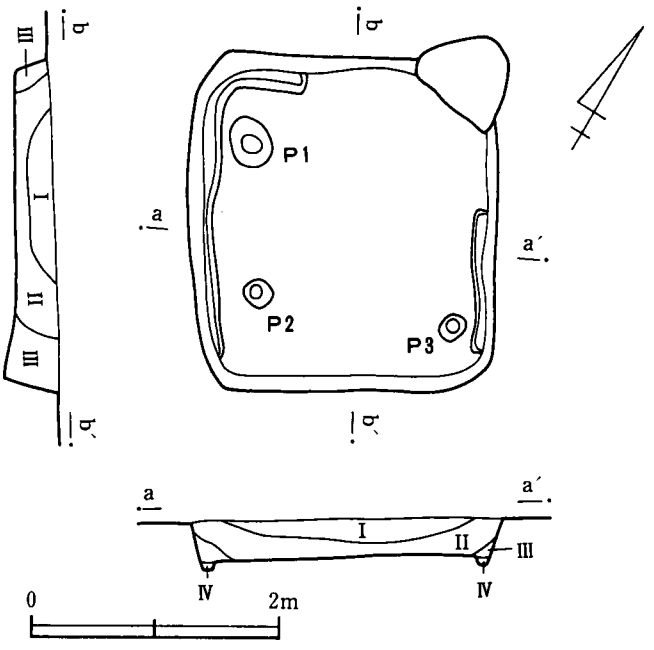


図382　D089号遺構実測図

カマド　北東壁コーナー部を0.25m掘り込み、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土は掘り込み部分にのみ貼り込まれており、袖部は明確でない。火床と思われる部分は粘土の貼り込み部分より焚口部に寄って位置し、歪を生じている楕円形を呈し、深さ0.10mを計る。この火床部に接続して長径0.60m、深さ0.06mの擂鉢状の掘り込みを検出したが、性格は不明である。

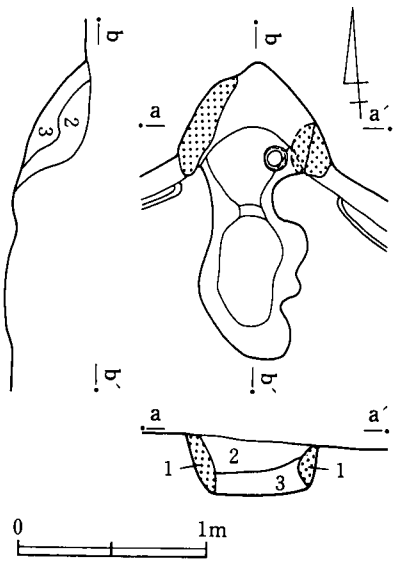


図383　D089号遺構カマド実測図

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層ローム粒混入黒色土層、IV層茶褐色土層が堆積する。遺物は稀少で、床面上やカマド内部より若干出土したにすぎない。

出土遺物　遺物は坏形土器のみである。口径12cm前後の1～5と、口径15cm前後の6～9がある。5、6の体部には墨書が認められる。

D089出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	坏	3.9	12.0	6.4	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒褐色	糸切り
2	坏	3.5	13.0	6.1	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	糸切り
3	坏	3.7	(13.3)	6.1	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
4	坏	3.8	(13.2)	6.6	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	茶褐色	糸切り
5	坏	3.8	(13.2)	7.2	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	墨書「㊇」、糸切り
6	坏	4.6	(13.6)	7.4	⅔	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「㊇」糸切り、内面磨き
7	坏	4.45	15.2	8.3	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	内面磨き
8	坏	5.3	(13.6)	6.9	⅓	下端静止ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	内面磨き
9	坏	—	—	7.5	底部 ½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り

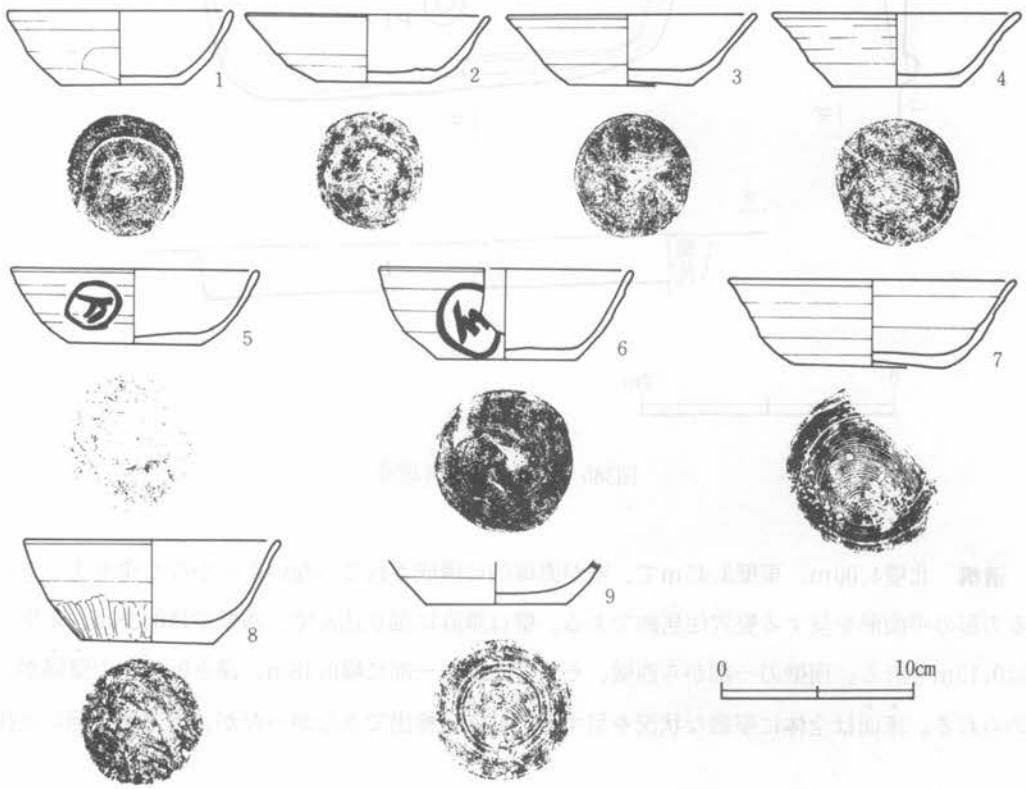


図384 D089号遺構出土遺物実測図

13. D090号遺構（図385～387、図版75—2・3、114）

III群の住居群内において中央に群集する1軒で西側に位置し、D099が近接している。緩斜面に構築されているため、壁高は一定でない。遺構西側は溝によって壁と床面の一部が攪乱を受けている。

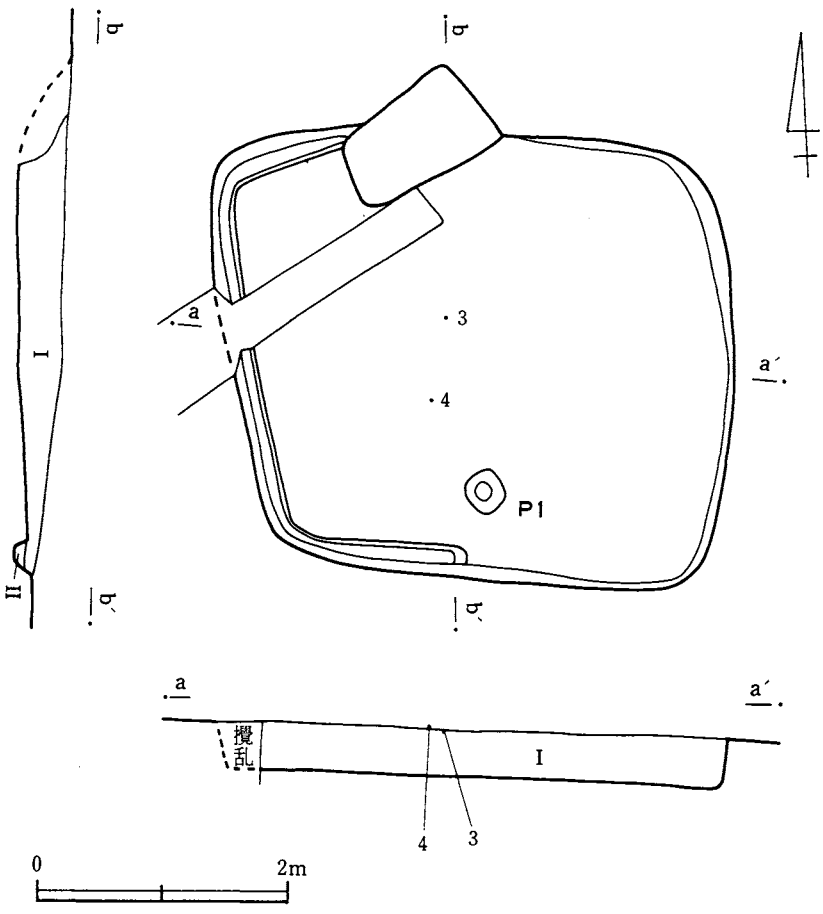


図385 D090号遺構実測図

遺構 北壁4.00m、東壁3.45mで、壁が直線的に構成されていないためかなり歪を生じている方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に掘り込んで、西壁では0.38m、東壁では0.15mを計る。南壁の一部から西壁、そして北壁の一部に幅0.18m、深さ0.04mの壁溝が認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈する。柱穴は検出できなかったが、南壁中央部に近接

D090出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ ヘラ削り	雲母	堅緻	黒褐色	
2	坏	3.5	(12.0)	7.0	⅔	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書判読不明 糸切り
3	坏	3.75	13.0	8.1	½	底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	ヘラ切り
4	坏	3.6	(12.4)	6.2	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	灰色	糸切り

して径0.32m、深さ0.14mを計るP1を検出した。

カマド　北壁中央よりやや西寄りの壁を0.66m掘り込み、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖部と火袋部の一部に認められるだけであり、天井部等は遺存しない。火袋に相当する部分は焼土化が顕著である。火床部は深さ0.06mで浅い擂鉢状の掘り込みを呈する。煙道部は緩やかな傾斜を呈して立ち上がるが粘土の貼り込みは認められない。

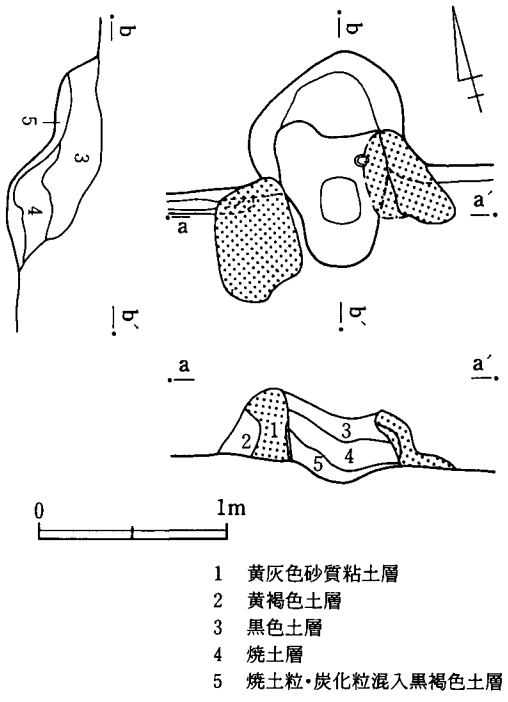


図386　D090号遺構カマド実測図

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層茶褐色土層が堆積する。遺物は、覆土上層を中心として若干出土したにすぎない。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器がある。甕形土器は1のみである。口唇部に特徴のある口縁部破片である。坏形土器は2～4で、体部は大きく開く形状を呈している。4は須恵器である。

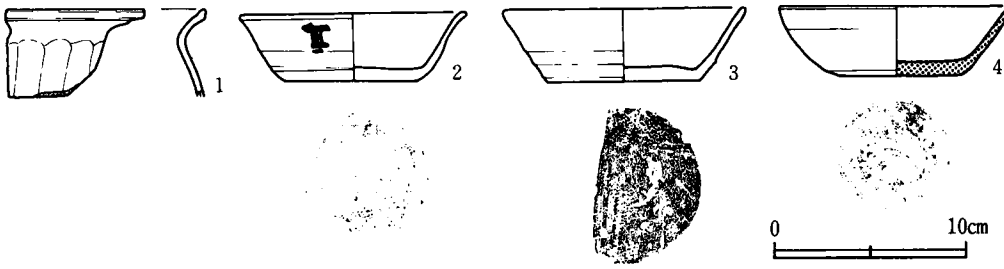


図387　D090号遺構出土遺物実測図

14. D091号遺構（図388～390、図版76、114、115）

III群の住居群内において、ほぼ中央に群集する1軒で、D092、D123、D132が近接し、D135と重複関係を呈しているため遺構の南東部分は充分把握できない。さらに修改築の痕跡も認められるため複雑な相様を呈している。

遺構　北壁4.34m、西壁3.76mで方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁は垂直に0.62m掘り込んでおり、直下に幅0.25m、深さ0.08mを計る壁溝がカマド構築部分を除いて廻

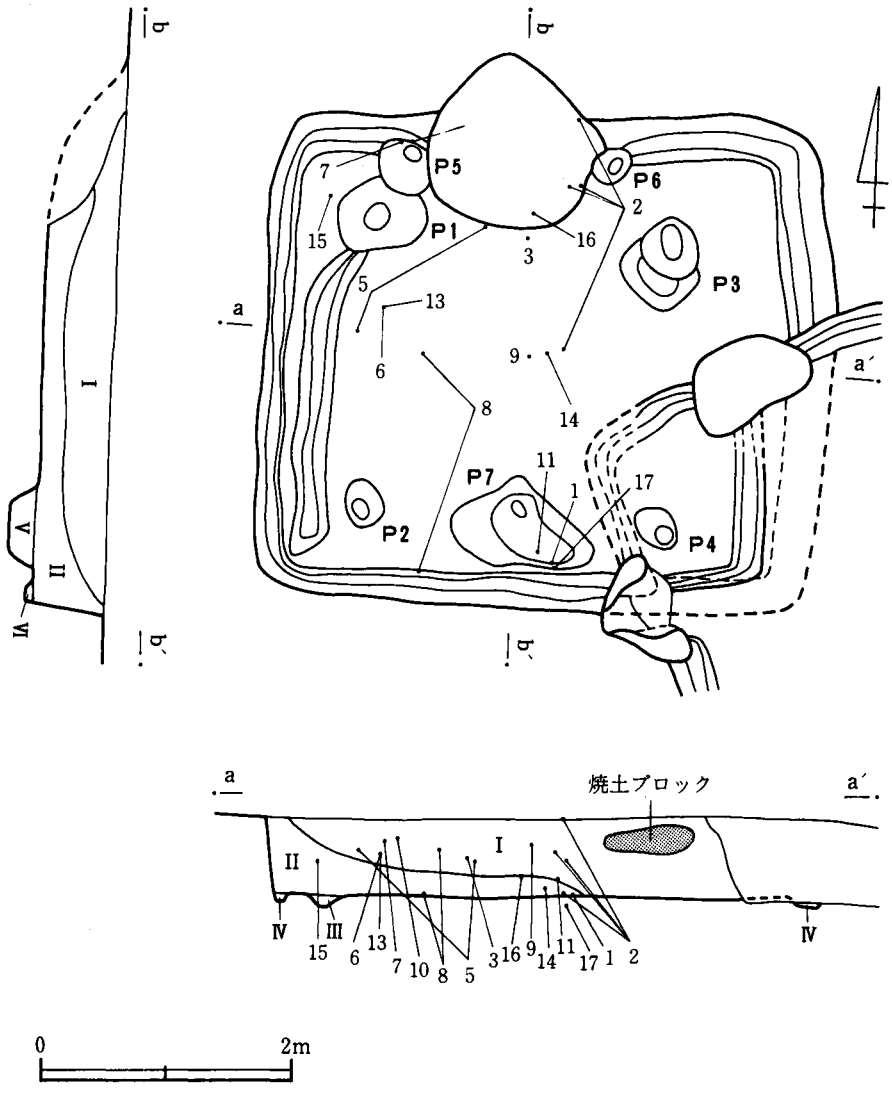


図388 D091号遺構実測図

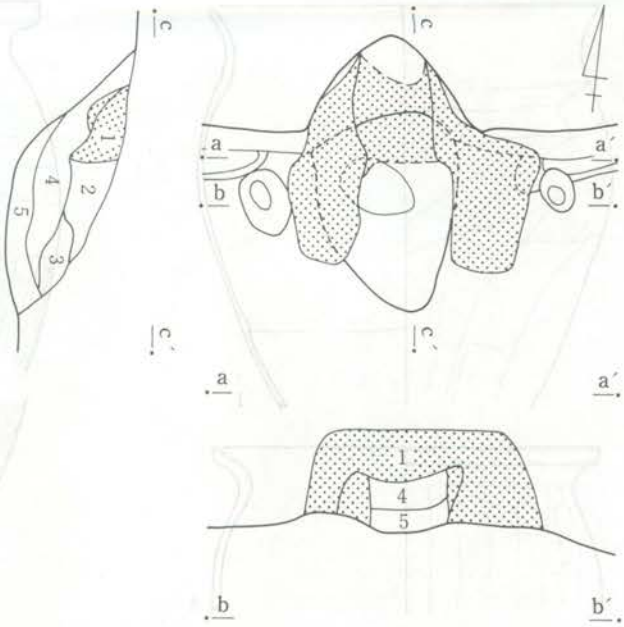
っているが、南東壁コーナー部分ではD135に重複切断されているため遺存していない。それにかわってD135の床面において、溝を検出しているが、この壁溝は北方に続くものの途中で消滅し、連続するものではない。このことは西壁直下以外に構築された溝と関連するもので、修改築に伴う所産であると考えられる。

カマド　北壁中央よりやや西寄りの壁を0.50m掘り込んでおり、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙道部まで一体化しており、煙道部は火袋部よりかなり幅狭く貼り込んでいる。火床部は深さ0.08mで擂鉢状の掘り込みを呈し、緩やかな傾斜を呈している煙道部に続く。全体的に遺存状況は良好である。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層ローム粒混入黒褐色土層、IV層茶褐色

土層、Ⅴ層暗茶褐色土層が堆積する。遺物は覆土中の出土が多いが、カマド周辺からの出土も注目できる。

出土遺物　遺物は、甕、甑、坏形土器と鉄製品がある。甕形土器は1～5で、1は口縁部が緩やかに外反する。2、3は口唇部に特徴のある口縁部を呈する。4は短い口縁が「く」字状に外反するものである。5は条痕状の磨きがある胴部下半である。甑形土器は6で、口縁部は水平近くに外反する。坏形土器は口径11cm前後の7～12、14、15と、口径15cmの13がある。11、12、14、15は須恵器である。鉄製品は16、17で、いずれも刀子の破片と思われる。



1　黄灰色砂質粘土層
2　黒褐色土層
3　砂質粘土粒混入黒褐色土層
4　焼土粒混入黒褐色土層
5　焼土層

0　1m

図389　D091号遺構カマド実測図

D091出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	—	(20.5)	—	口縁部～胴部½	ヨコナデ ヘラ削り	雲母 砂粒	やや堅緻	茶褐色	
2	甕	—	21.65	—	口縁部～胴部½	ヨコナデ 磨き	小石 雲母	軟弱	茶褐色	
3	甕	—	(20.6)	—	口縁部～胴部½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
4	甕	—	12.8	—	口縁部～胴部½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
5	甕	—	—	—	胴部～底部¼	磨き	雲母 砂粒	堅緻	黒褐色	木葉痕
6	甑	—	—	—	破片	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	堅緻	灰色	
7	坏	4.5	10.8	7.7	完形	底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	淡茶褐色	墨書「朝日」
8	坏	3.6	(11.4)	8.0	½	底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
9	坏	3.6	11.2	7.7	完形	底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	淡茶褐色	糸切り
10	坏	4.4	11.8	7.7	ほぼ完形	底部一方向ヘラ削り	小石	やや堅緻	茶褐色	静止糸切り
11	坏	4.3	(12.0)	(8.45)	½	底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	

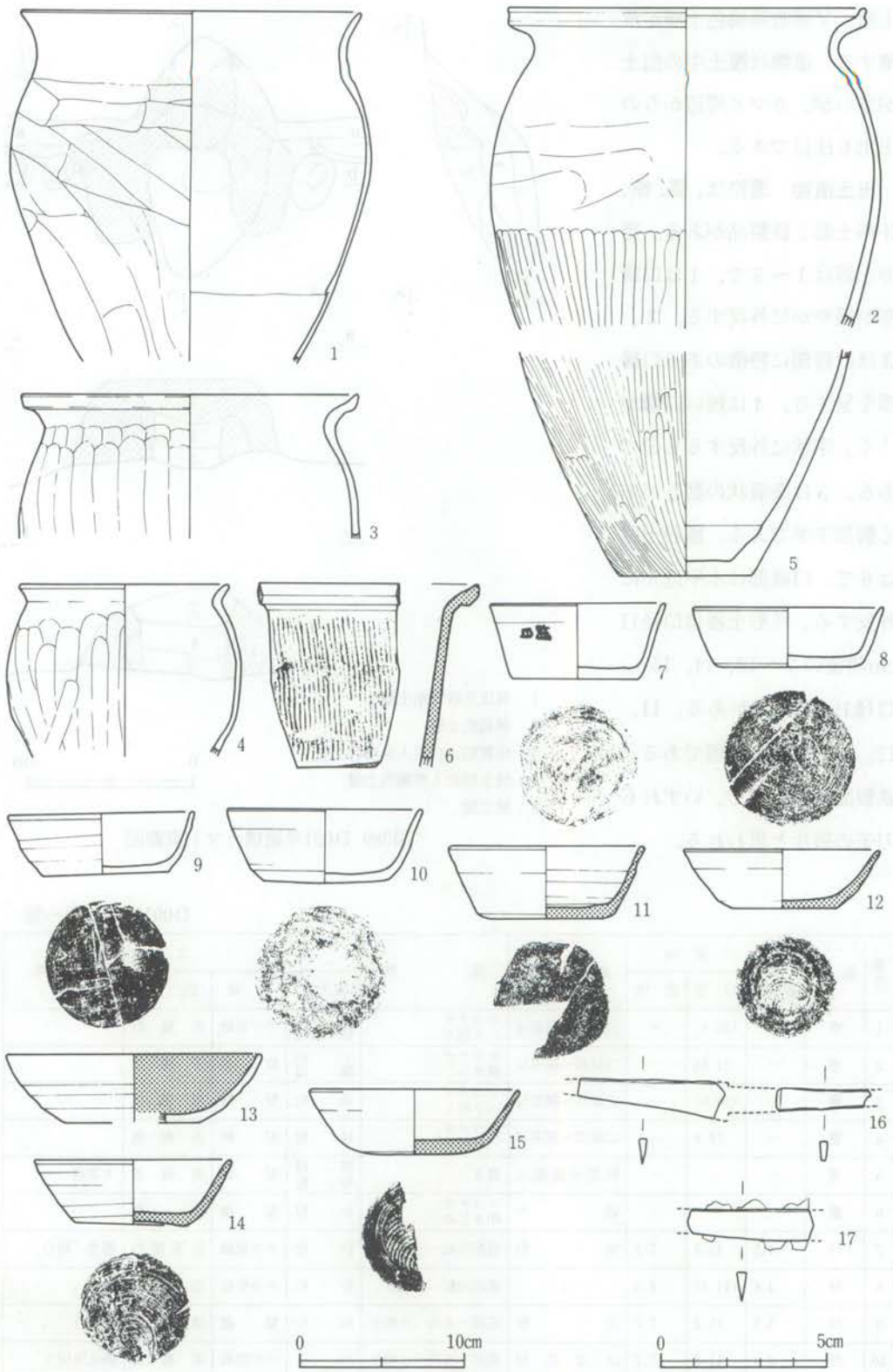


図390 D091号遺構出土遺物実測図

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
12	坏	3.5	12.0	6.4	½	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	糸切り
13	坏	4.95	15.5	8.2	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	黒褐色	内黒
14	坏	3.9	11.8	6.7	¾	—	砂粒	やや軟弱	灰色	糸切り
15	坏	3.85	13.0	6.65	⅓	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	糸切り

15. D092号遺構（図391～393、図版77－1・2、115）

III群の住居群内においてほぼ中央に群集する1軒で、D091、D093、D132、D135が近接している。遺構南東部分は攪乱を受けている。

遺構　北壁3.52m、西壁3.55mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.55m掘り込んでおり、直下には幅0.26m、深さ0.05mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められ

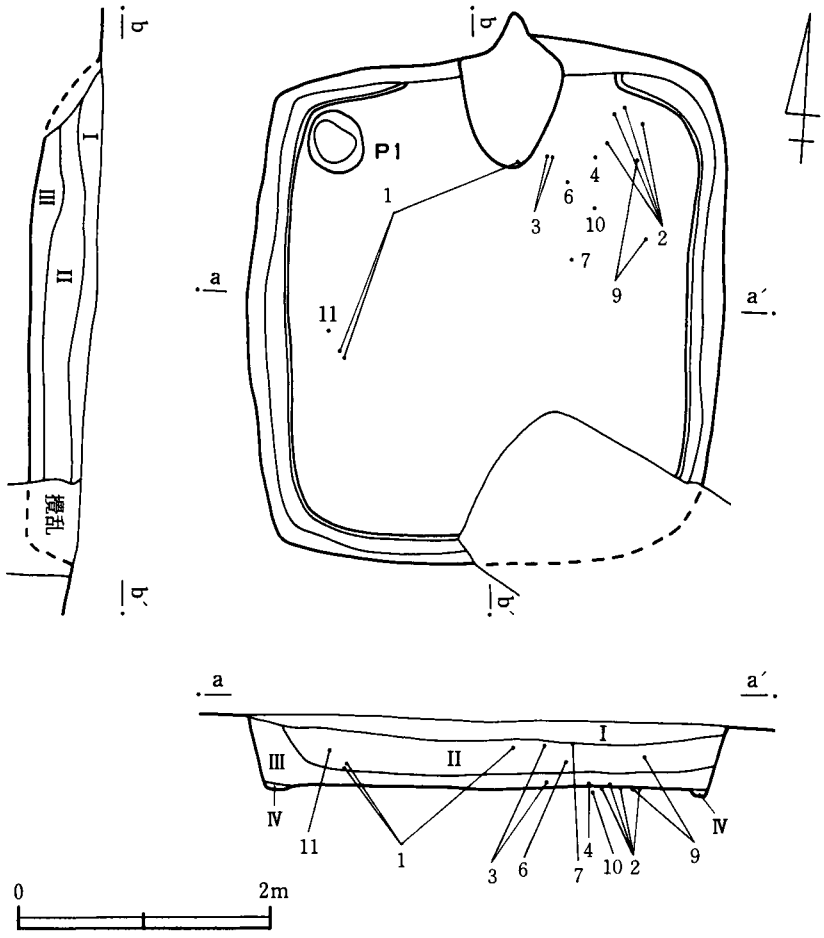
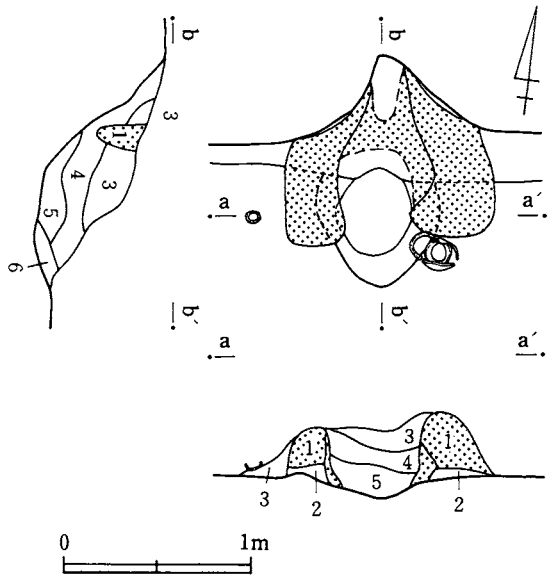


図391 D092号遺構実測図

る。床面は全体に堅緻な状況を呈している。北西コーナー部に小ピットP_1を検出した。径0.44m、深さ0.12mを計る。柱穴は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を0.44m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは2層上から認められ、袖部から煙道部まで一体化している。火袋部に相当する袖は焼土化が著しい。火床部は深さ0.09mを掘り込み、煙道部は緩やかな傾斜を呈している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層ローム粒混入黒色土層、IV層茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上を中心にカマド東側に集中している。



1　黄灰色砂質粘土層　　4　砂質粘土粒混入黒褐色土層
2　黄褐色土層　　5　焼土層
3　黒褐色土層　　6　焼土粒混入黄褐色土層

図392　D092号遺構カマド実測図

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器がある。甕形土器は1～3で、1、2は口唇部に特徴のある口縁部を呈している。3は口縁部が「く」字状に外反し、胴部は叩き目をヘラ削り調整している。坏形土器は4～11で、口径12cm前後の4～7、9と、口径14cm前

D092出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	—	(21.6)	—	1/3	ヨコナデ 磨き	雲母 砂粒	堅緻	茶褐色	
2	甕	—	12.3	—	口縁部～胴部1/2	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	(内)赤褐色 (外)黒褐色	
3	甕	—	19.3	—	1/2	ヨコナデ 叩きじめ、ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
4	坏	3.7	12.25	7.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	糸切り
5	坏	4.1	11.7	6.6	2/3	底部回転ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	糸切り
6	坏	3.5	(12.0)	(8.1)	1/3	底部一方向ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	
7	坏	4.0	(12.3)	(7.7)	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
8	坏	—	—	—	破片	—	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書判読不明
9	坏	3.5	12.9	8.4	2/3	底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	灰黒色	糸切り
10	坏	4.0	13.6	9.3	完形	底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黄褐色	糸切り
11	坏	4.7	(14.0)	(7.6)	1/3	下端静止ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	—	堅緻	灰色	

後の10、11がある。8は墨書のある体部破片である。9～11は須恵器である。

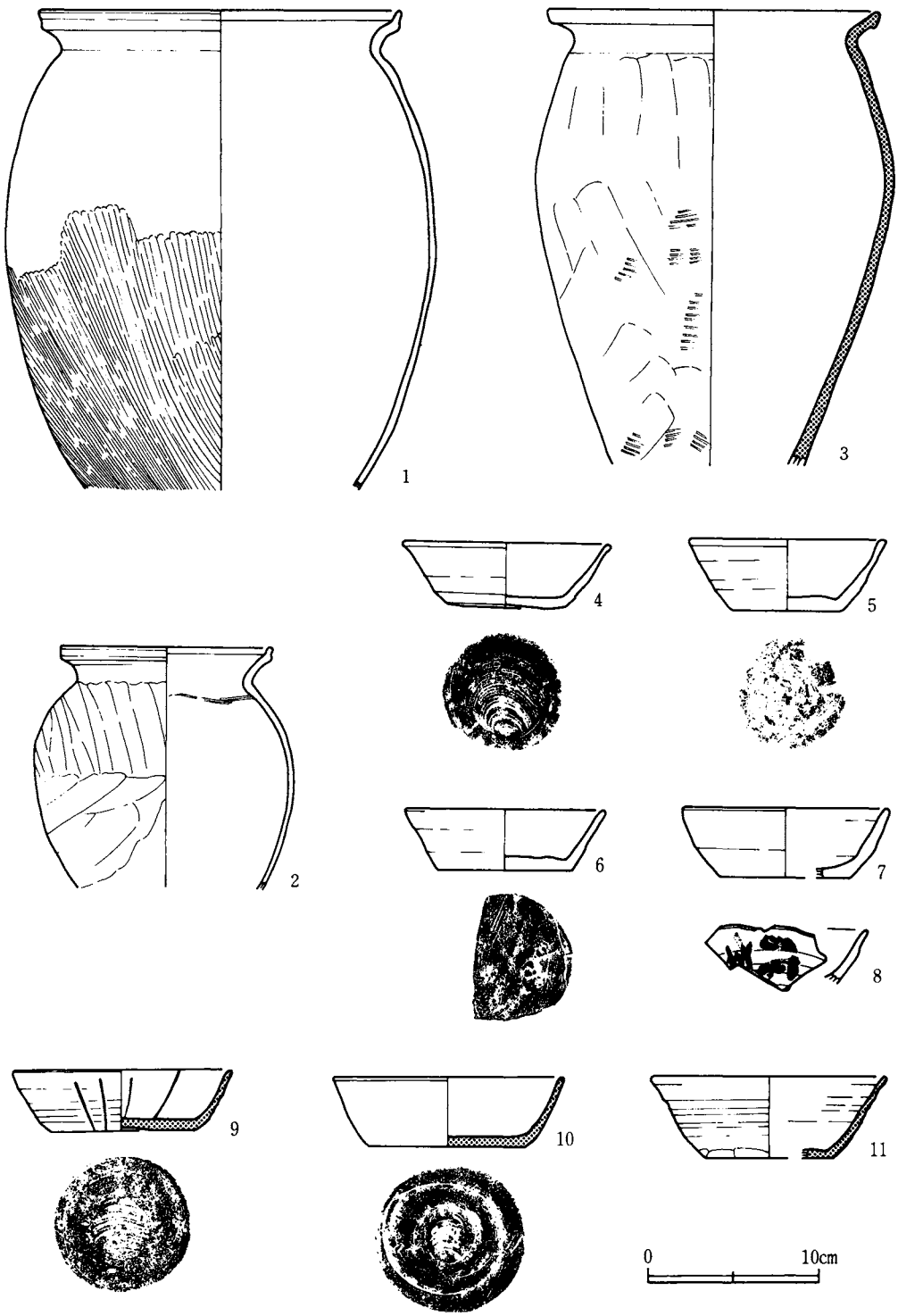


図393 D092号遺構出土遺物実測図

16. D093号遺構（図394、395、図版77—3、78—1）

III群の住居群内においてほぼ中央に位置し、D092、D132が近接している。斜面に構築されているため、壁高は一定していない。

遺構　北壁4.02m、東壁3.94mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に北西部では0.46m、南東部では0.06mを掘り込んでいる。直下には幅0.20m、深さ0.08mの壁構がカマド構築部分および、北東壁コーナー部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴はやや不規則な配置を示すP₁～P₅を検出した。いずれも径平均0.26m、深さ0.27～0.37mを計る。P₁、P₂以外については柱穴でないかもしれない。その他、南壁中央部に近接して径0.36m、深さ0.25mを計るP₆、南西壁コーナー部分に径0.34m、深さ0.20mを計るP₇を検出した。

カマド　北壁中央部を三角形に0.40m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは掘り込み部分にわずか認められる程度で、天井部、煙道部への貼り込みは認められない。火床部は深さ0.08mで浅い擂鉢状の掘り込みを呈している。煙道部は煙出し直前で若干

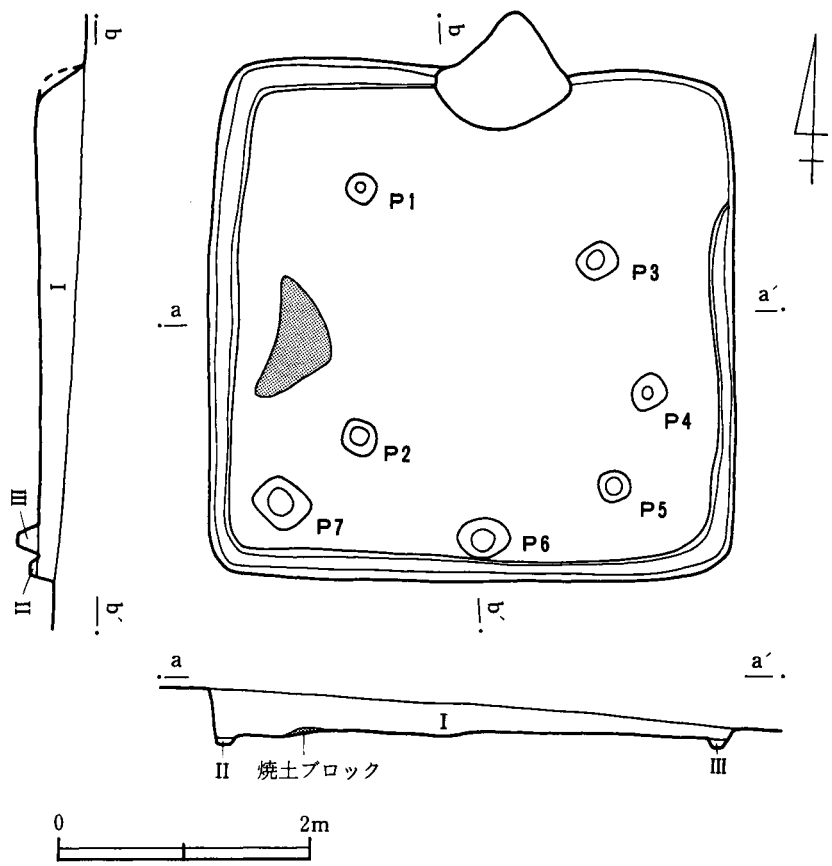


図394　D093号遺構実測図

の段を有するが、緩やかな傾斜を呈している。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層茶褐色土層、III層暗茶褐色土層が堆積する。遺物の出土は皆無である。

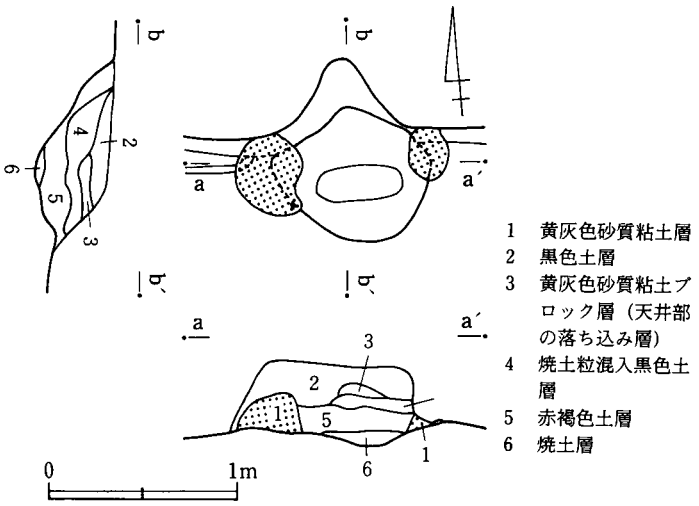


図395　D093号遺構カマド実測図

17. D095号遺構（図396～398、図版78—2・3、115）

III群の住居群内においてほぼ中央に位置し、D134が近接している。

遺構　北壁3.35m、東壁3.50mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.45m掘り込んでおり、直下には幅0.25m、深さ0.10mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は各コーナーに接するようにP1～P4を検出し

D095出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	19.0	—	口縁部～胴部3/4	ヨコナデ ヘラ削り	—	やや軟弱	茶褐色	
2	甕	—	(20.5)	—	口縁部～頸部1/4	ヨコナデ ヘラ削り	雲母	堅緻	茶褐色	
3	甕	—	(24.1)	—	口縁部～胴部1/3	ヨコナデ ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	
4	甕	—	—	6.7	胴部～底部1/2	ヨコナデ	砂粒 雲母	堅緻	黒褐色	
5	坏	3.9	(13.7)	(8.7)	1/4	底部一方向ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	ヘラ切り
6	坏	4.5	(12.4)	6.5	完形	底部一方向ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
7	高台付坏	5.2	(10.8)	(7.25)	1/4	—	砂粒	堅緻	赤褐色	
8	坏	4.2	13.5	8.4	1/2	底部一方向ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	灰色	墨書判読不明
9	坏	4.0	13.4	8.0	1/2	下端回転ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	雲母 砂粒	軟弱	黒灰色	ヘラ切り
10	坏	3.6	(13.8)	(9.1)	1/4	底部一方向ヘラ削り	雲母 砂粒	軟弱	灰色	ヘラ切り
11	坏	—	—	(7.8)	底部1/3	底部一方向ヘラ削り	雲母 砂粒	堅緻	灰色	ヘラ切り
12	高台付坏	—	—	(11.5)	1/2	—	砂粒 雲母	やや軟弱	灰色	
13	蓋	4.75	14.3	—	3/4	天井部回転ヘラ削り	砂粒 雲母	軟弱	灰色	

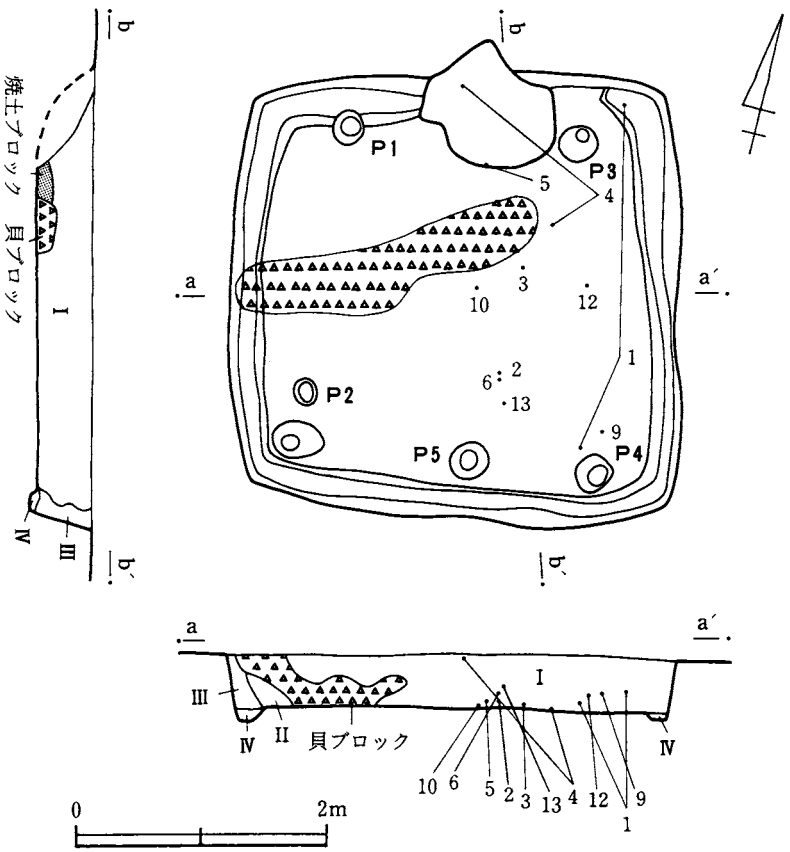


図396 D095号遺構実測図

た。径0.22m～0.30m、深さ0.27m～0.45mを計る。その他、南壁中央部に近接して径0.28m、深さ0.17mを計るP₅を検出した。

カマド　北壁中央部よりやや東寄りの壁を掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。煙出し部は溝による攪乱を受けているため明らかでないが、推定0.25mの掘

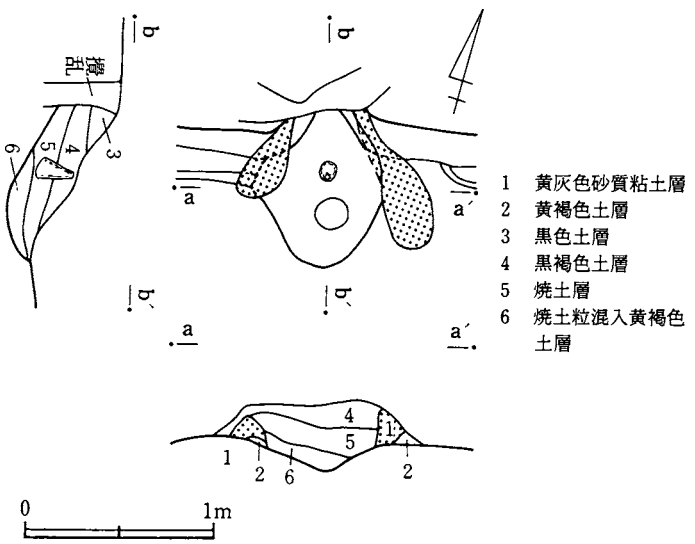


図397 D095号遺構カマド実測図

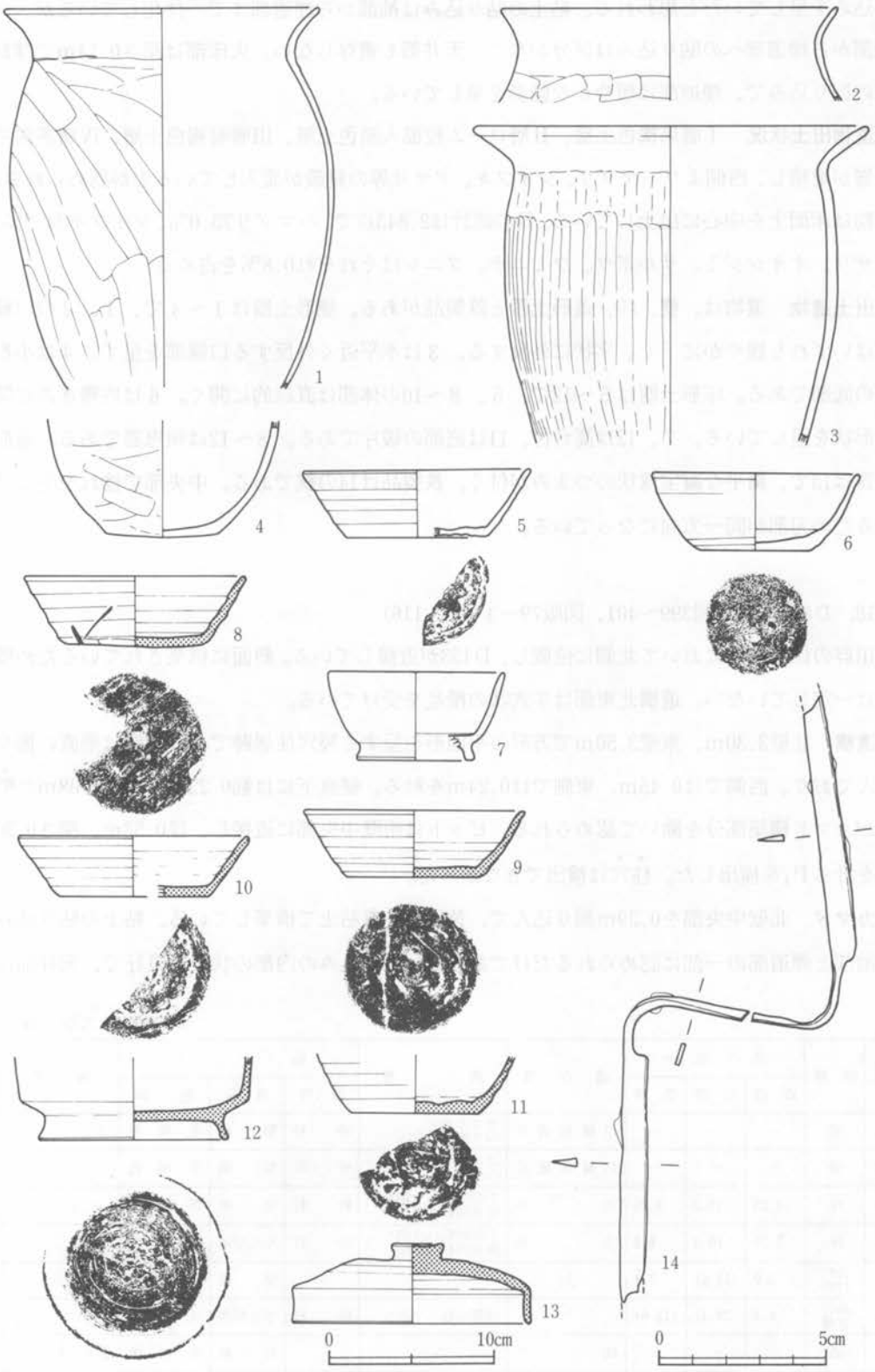


図398　D095号遺構出土遺物実測図

り込みを呈していたと思われる。粘土の貼り込みは袖部から煙道部まで一体化しているが、火袋部から煙道部への貼り込みは区分がなく、天井部も遺存しない。火床部は深さ0.14mで擂鉢状の掘り込みで、煙道部は緩やかな傾斜を呈している。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層ローム粒混入黒色土層、III層暗褐色土層、IV層茶褐色土層が堆積し、西側よりハマグリ、シオフキ、アサリ等の貝殻が流入しているのが認められる。遺物は床面上を中心に出土している。貝の総計は2,843点で、ハマグリ75.0%、シオフキ24.2%、アサリ、オオシジミ、サルボウ、ウミニナ、タニシはそれぞれ0.8%を占める。

出土遺物　遺物は、甕、坏、蓋形土器と鉄製品がある。甕形土器は1～4で、1、2の口縁部はいずれも緩やかに「く」字状に外反する。3は水平近く外反する口縁部を呈す。4は小形甕の底部である。坏形土器は5～12で、5、8～10の体部は直線的に開く。6は内彎ぎみに開く形状を呈している。7、12は高台付、11は底部の破片である。8～12は須恵器である。蓋形土器は13で、扁平な凝宝珠状のつまみが付く。鉄製品は14の鋏である。中央部で捻れを生じているため刃部が同一方向になっている。

18. D096遺構（図399～401、図版79－1・2、116）

III群の住居群内において北側に位置し、D133が近接している。斜面に構築されているため壁高は一定していない。遺構北東部は芋穴状の攪乱を受けている。

遺構　北壁3.30m、東壁3.50mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に掘り込んでおり、西側では0.45m、東側では0.24mを計る。壁直下には幅0.22m、深さ0.08mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。ピットは南壁中央部に近接し、径0.53m、深さ0.30mを計るP_1を検出した。柱穴は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を0.39m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖部と煙道部の一部に認められるだけであるが、掘り込みの内部の状況は良好で、天井部は

D096出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
2	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
3	坏	4.25	13.2	8.75	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
4	坏	3.75	10.0	6.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	灰色	
5	高台付坏	3.9	(11.6)	7.1	1/2	—	—	堅緻	灰色	
6	高台付盤	4.4	(20.4)	(12.6)	1/3	底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	灰色	
7	蓋	—	—	—	破片	—	—	堅緻	茶褐色	墨書「大」
8	高坏	—	—	—	接合部のみ	—	—	堅緻	茶褐色	

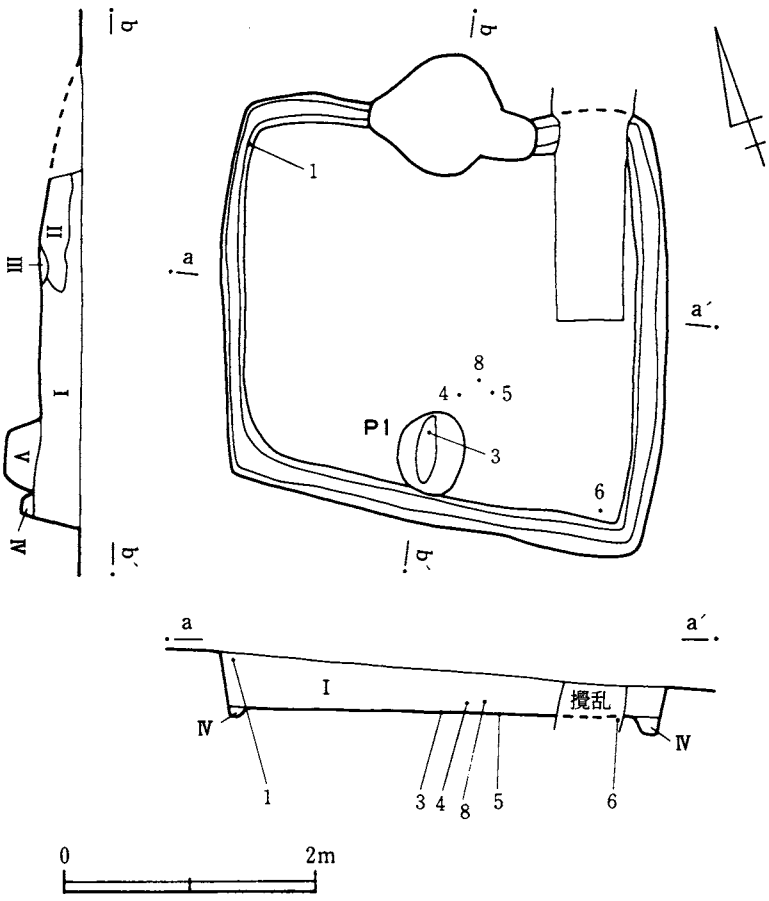
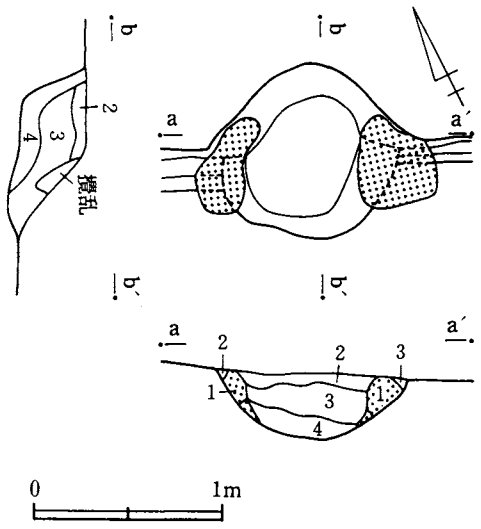


図399 D096号遺構実測図

ここに続いて構築していたと思われる。火袋部に相当する部分は焼土化が著しい。火床部は深さ0.06mの浅い落ち込みで、煙道部は急角度を呈している。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層粘土粒混入黒褐色土層、III層褐色土層、IV層茶褐色土層、V層暗茶褐色土層が堆積する。遺物はP₁周辺を中心とした床面



1　黄灰色砂質粘土層
2　黒色土層
3　焼土粒混入黒褐色土層
4　焼土層

図400 D096号遺構カマド実測図

上から出土している。なお覆土中より多量の貝殻を検出した。総計は813点で、ハマグリ69.7%、シオフキ16.4%、マガキ11.7%、アサリ、オオノガイ、ウミナニはそれぞれ2.2%を占める。

出土遺物　遺物は、甕、坏、盤、蓋、高坏形土器がある。甕形土器は1、2で、口縁部は屈曲度の強い外反を呈している。坏形土器は3～5で、3は体部が若干内彎ぎみに開く。4は体部が直線的に開く。5は高台付で体部は内彎ぎみに開く。盤形土器は6で高台付である。蓋形土器は7で体部に墨書のある破片である。高坏形土器は8で脚部破片である。

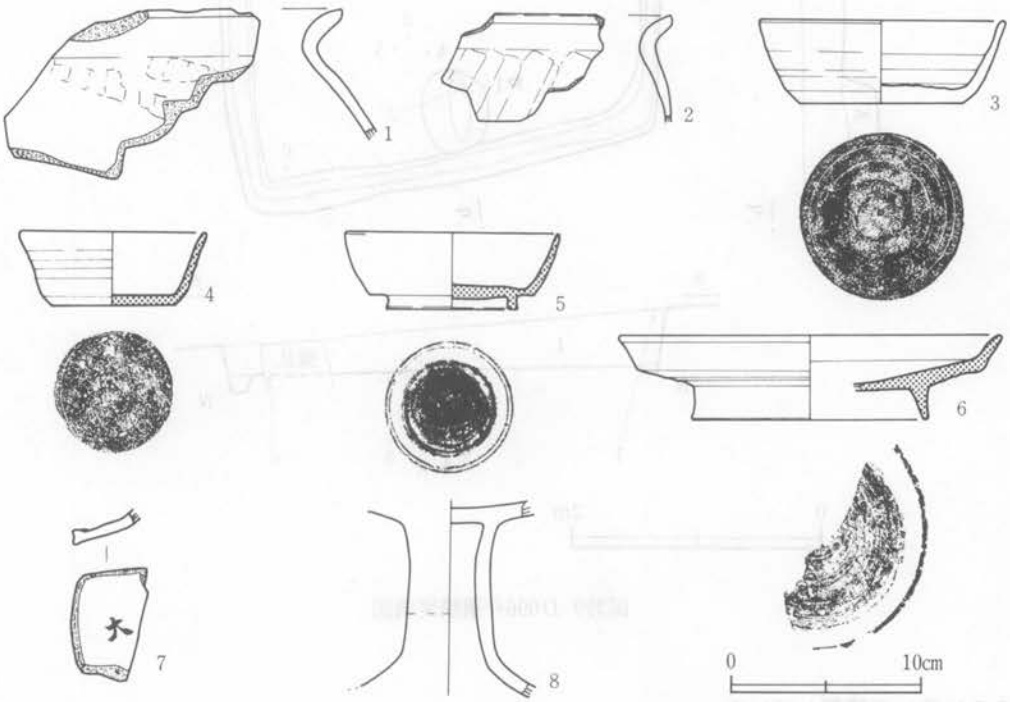


図401　D096号遺構出土遺物実測図

19. D097号遺構（図402～404、図版79－3、80－1、116）

III群の住居群内において北東部分に位置し、D098が近接している。

遺構　北壁3.20m、西壁2.68mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.39m掘り込んでおり、直下に幅0.18m、深さ0.05mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ壁コーナー部分に近く、P_1～P_4を検出した。径平均0.28m、深さ0.21～0.27mを計る。その他、南壁中央部に接して径0.15m、深さ0.14mを計るP_5を検出した。

カマド　北壁中央部を0.23m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙出し部分まで一体化しており、火袋部に相当する袖は焼土化が著しい。火床部は

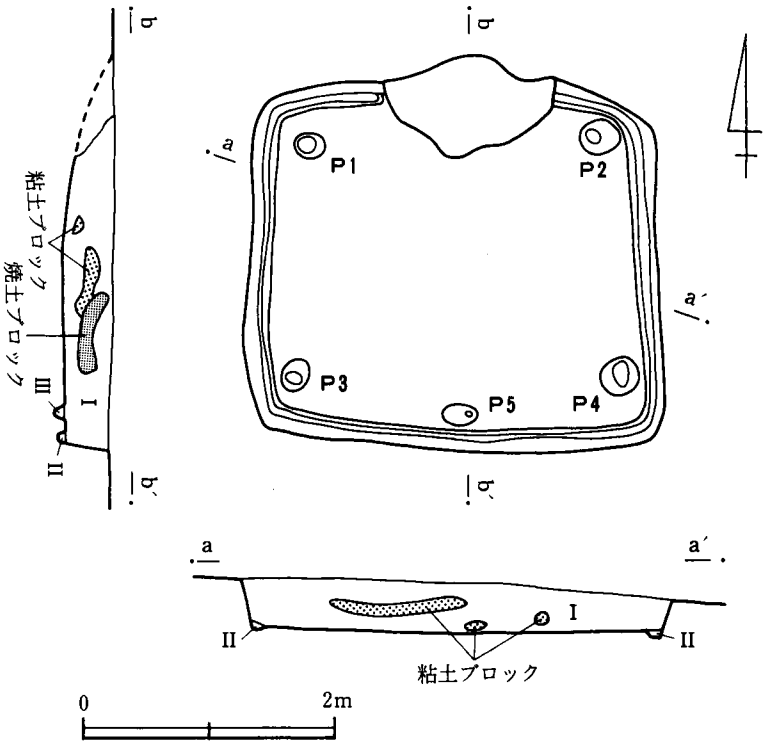
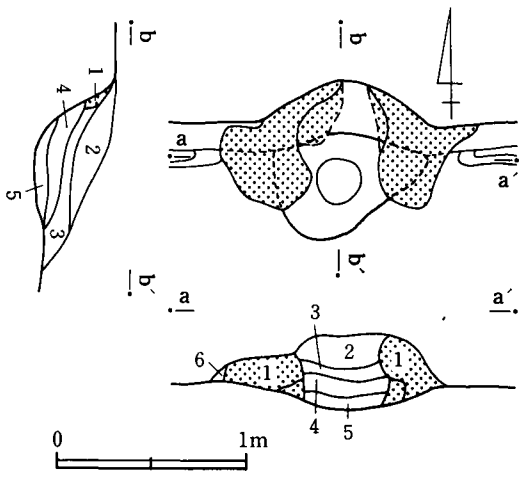


図402 D097号遺構実測図

深さ0.05mで擂鉢状の掘り込みを呈している。煙道部はやや緩やかな傾斜を呈している。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層茶褐色土層、III層暗茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上を中心として出土しているが、調査途中に移動されてしまったため原位置を止めていない。また、カマド内出土も認められる。

出土遺物　遺物は、甕、坏、鉢形土器がある。甕形土器は1～3で、1は口唇部に特徴のある口縁部破片である。2は叩き目のある口縁部破片である。3は広口甕の口縁部破片である。坏形土器は4～10で、口径12cm前後の4、5と、口



1　黄灰色砂質粘土層
2　黒褐色土層
3　砂質粘土粒混入黒褐色土層
4　焼土層
5　焼土粒混入黄褐色土層
6　黒色土層

図403 D097号遺構カマド実測図

径14cm前後の6、7がある。8～10は墨書のある破片である。鉢形土器は11で、内面が黒色処理される。

D097出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ	雲母	堅緻	茶褐色	
2	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	やや軟弱	茶褐色	
3	甕	—	—	—	破片	—	砂粒	堅緻	茶褐色	
4	坏	3.9	(11.8)	7.0	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	茶褐色	
5	坏	3.6	(12.3)	(6.15)	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	茶褐色	
6	坏	3.9	(14.5)	(8.3)	1/3	底部静止ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	墨書「冨、静止糸切り
7	坏	4.3	(13.4)	7.1	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	茶褐色	墨書判読不明、内黒
8	坏	—	—	6.9	底部のみ	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「冨」、内黒
9	坏	—	—	—	破片	—	—	堅緻	茶褐色	墨書判読不明
10	坏	—	—	—	破片	—	—	堅緻	茶褐色	墨書判読不明
11	鉢	9.6	(22.2)	(9.4)	1/4	—	—	やや堅緻	黒褐色	内黒

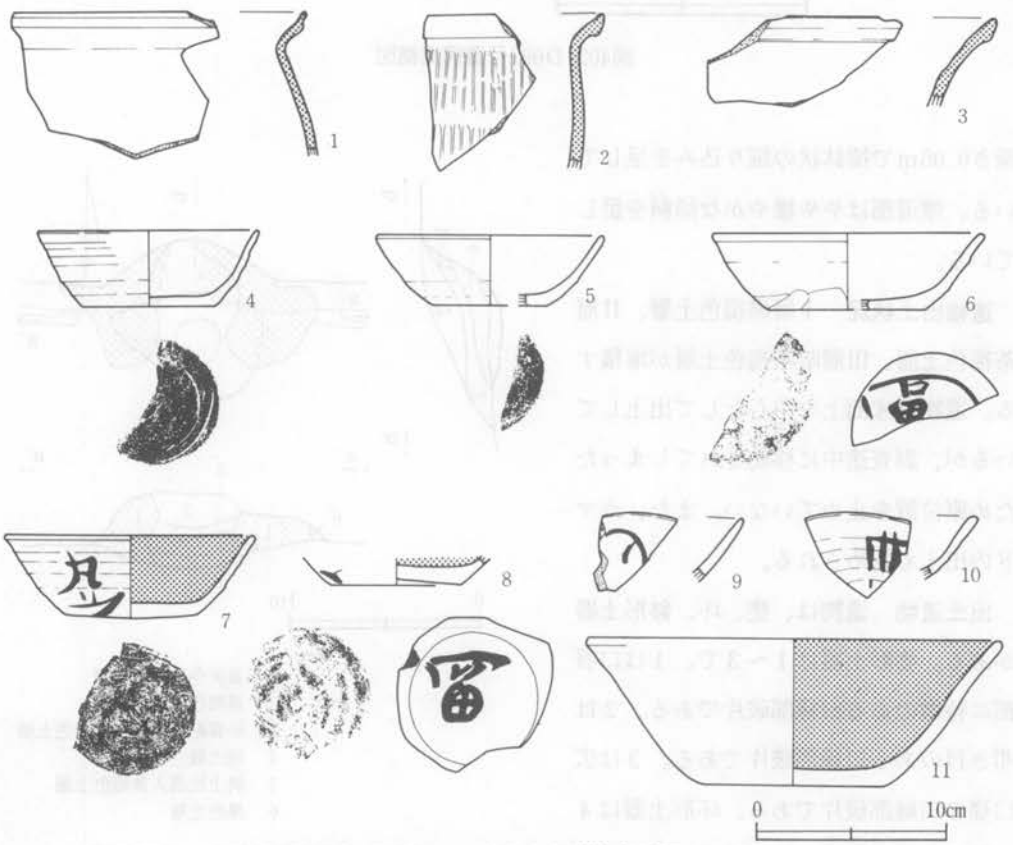


図404 D097号遺構出土遺物実測図

20. D098号遺構（図405～407、図版80 2・3、116）

III群の住居群内において北東部分に位置し、D097が近接している。

遺構　北壁3.44m、東壁3.57mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.54m掘り込んでおり、直下には幅0.24m、深さ0.06mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は検出できなかったが、小ピットをカマド西側にP_1、南壁中央部に近接してP_2、南東コーナー部にP_3を検出した。P_1は径0.26m、深さ0.13m、P_2は径0.20m、深さ0.10m、P_3は径0.45m、深さ0.32mをそれぞれ計る。

カマド　北壁中央部を0.48m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙出し部まで一体化しているが、左袖は掘り込み部分のみの貼り込みである。煙道部分は溝状の攪乱を受けているため明瞭に把握できない。火床部は深さ0.19mの掘り込みを呈している。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層暗褐色土層、III層暗茶褐色土層、IV層茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上を中心として出土しているが、調査途中に移動されてしまったため原位

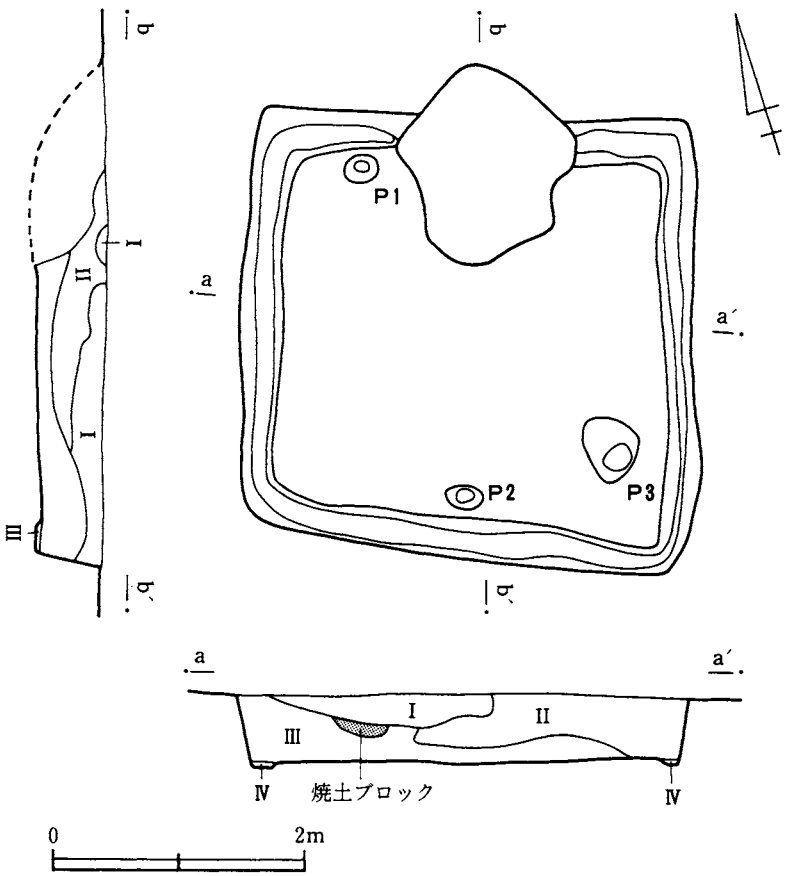


図405 D098号遺構実測図

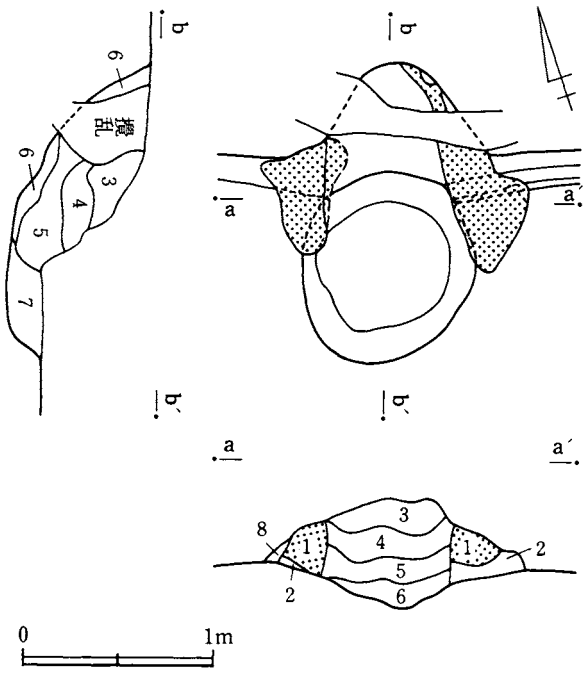


図406 D098号遺構カマド実測図

D098出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	(12.6)	—	口縁部～頸部⅓	ヨコナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	
2	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	
3	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	やや軟弱	茶褐色	
4	坏	4.2	(12.9)	(6.8)	¼	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
5	坏	3.9	(11.3)	6.5	⅓	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	
6	坏	4.7	(14.7)	(8.6)	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	内面磨き
7	坏	4.85	(14.7)	(7.4)	½	底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	内面磨き、糸切り
8	坏	5.05	14.45	6.1	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	墨書判読不明 内黒
9	坏	—	—	—	破片	—	—	堅緻	茶褐色	墨書「㐂」
10	坏	—	—	—	破片	—	—	堅緻	茶褐色	墨書「冨」
11	坏	—	—	—	破片	—	—	堅緻	茶褐色	墨書判読不明
12	坏	—	—	—	破片	—	—	堅緻	茶褐色	墨書「冨」
13	坏	—	—	—	破片	—	—	堅緻	茶褐色	墨書判読不明 内黒
14	坏	—	—	—	破片	—	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書判読不明
15	高台付皿	—	—	—	底部のみ	—	砂粒	堅緻	茶褐色	内面磨き
16	皿	2.0	14.4	6.5	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「㐂」、糸切り

置を止めていない。

出土遺物　遺物は、甕、坏、皿形土器がある。甕形土器は1～3で、1、2は口唇部に特徴のある口縁部を呈す。3は叩き目のある口縁部破片である。坏形土器は4～14で、口径12cm前後の4、5と、口径15cm前後の6～8がある。9～14は墨書のある破片である。皿形土器は15、16で、15は高台付、16は平底である。

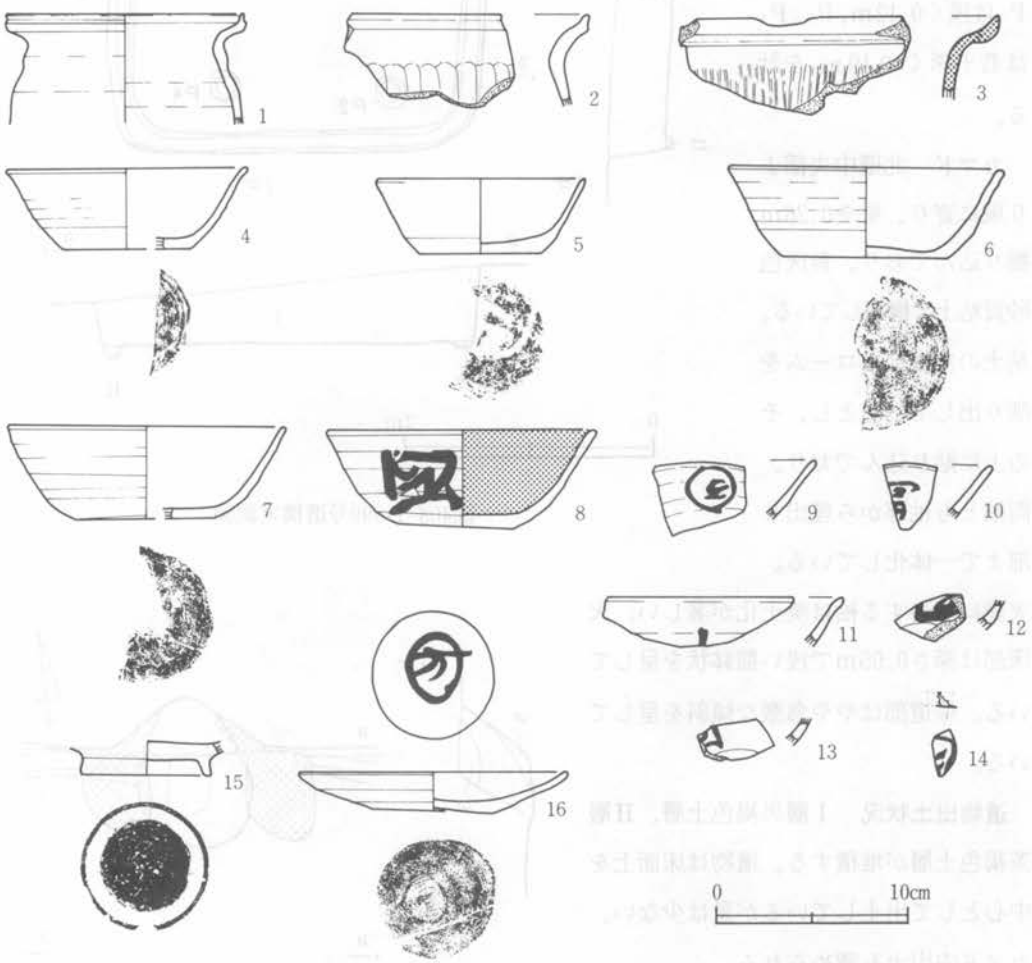


図407　D098号遺構出土遺物実測図

21. D099号遺構（図408～410、図版81－1・2、116）

III群の住居群内においてほぼ中央部に群集する1軒で西側に位置し、D101が近接している。緩斜面に構築された関係で遺存状況は良くない。

遺構　北壁3m、東壁2.75mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に掘り込んでおり、東壁部は0.15m、西壁部は0.70mを計る。壁直下には幅0.20m、深さ0.07mの壁溝

がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上にP_1～P_4を検出した。径平均0.24mを計り、P_1、P_2は浅く0.12m、P_3、P_4は若干深く 0.19m を計る。

カマド　北壁中央部より東に寄り、壁を0.26m掘り込んでおり、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の左袖部はロームを削り出して袖芯とし、その上に貼り込んでおり、両袖とも袖部から煙出し部まで一体化している。火袋に相当する袖は焼土化が著しい。火床部は深さ0.05mで浅い擂鉢状を呈している。煙道部はやや急激な傾斜を呈している。

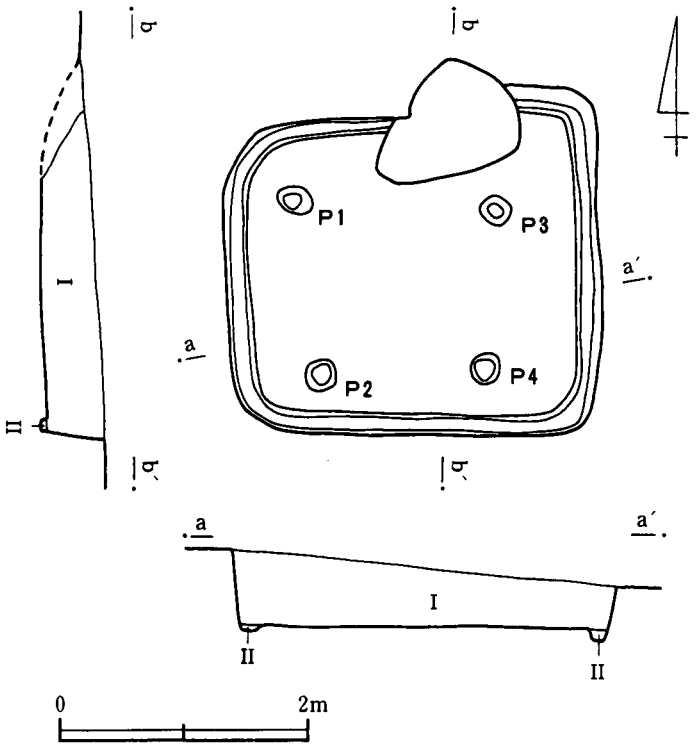
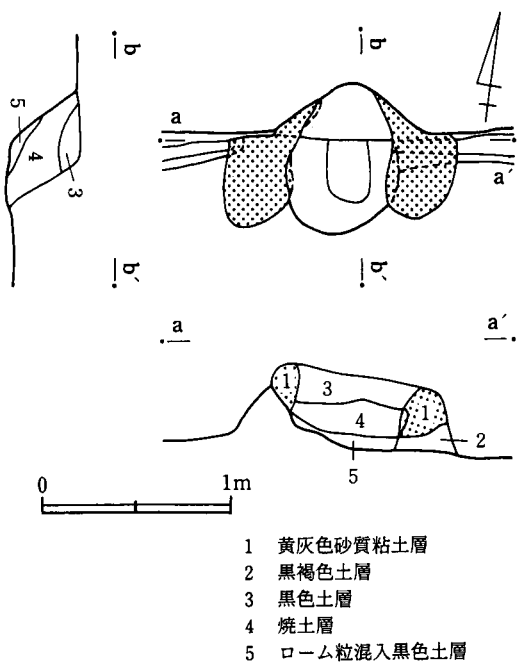


図408 D099号遺構実測図

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上を中心として出土しているが量は少ない。カマド内出土も認められる。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器と鉄製品がある。甕形土器は1～3で、1は水平近く外反する口縁部を呈す。2は口唇部に特徴のある口縁部を呈す。3は「く」字状に外反する口縁部破片である。坏形土器は4～8で、4は丸底を呈し、体部は内彎ぎみに開く。5～7はほぼ直



1　黄灰色砂質粘土層
2　黒褐色土層
3　黒色土層
4　焼土層
5　ローム粒混入黒色土層

図409 D099号遺構カマド実測図

線的に大きく開く体部を呈す。8は底部破片である。鉄製品は9、10で、いずれも刀子の残片である。

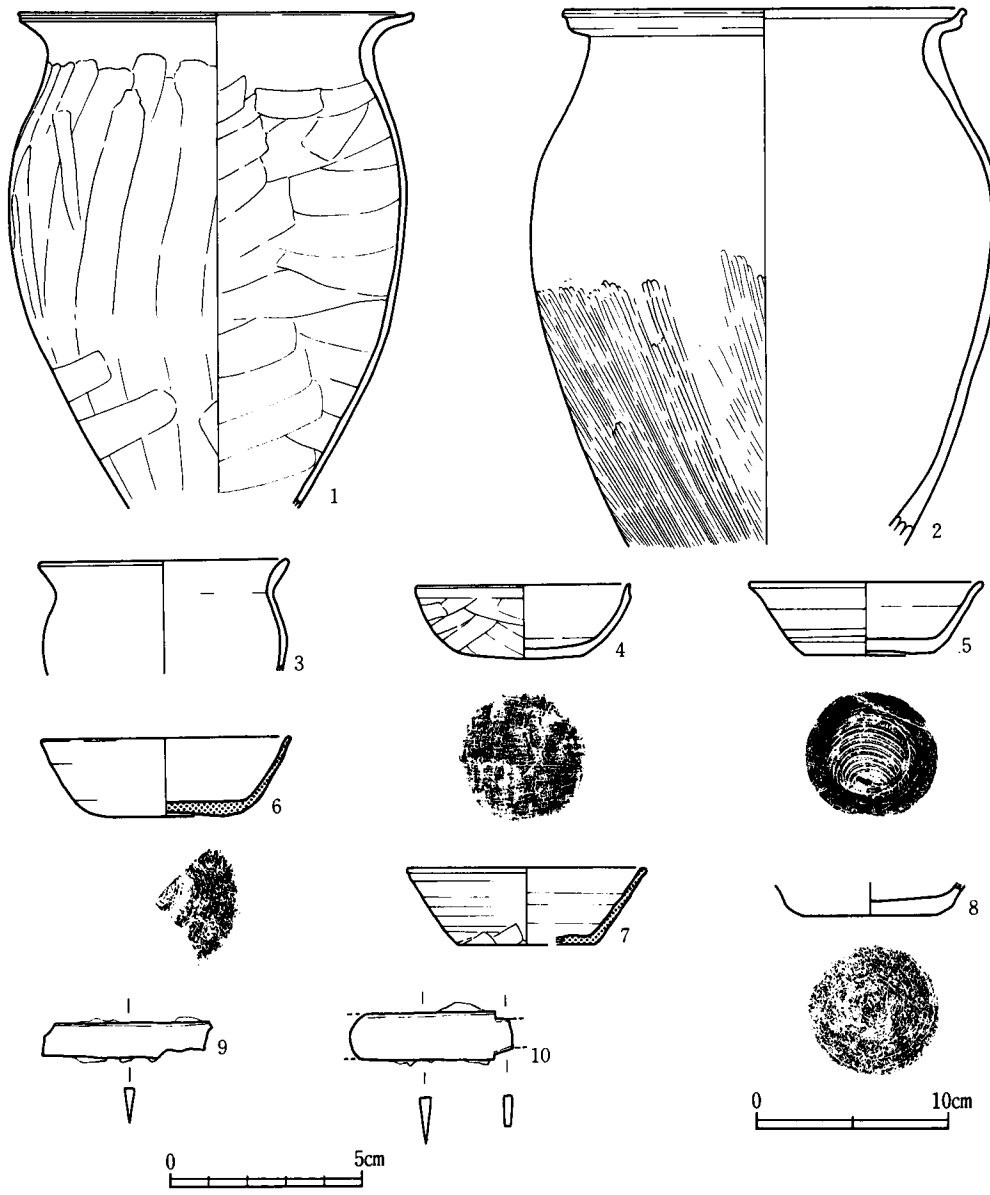


図410 D099号遺構出土遺物実測図

D099出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	21.0	—	口縁部～胴部½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
2	甕	—	(21.4)	—	口縁部～胴部⅓	ヨコナデ 磨き	雲母 砂粒	堅緻	茶褐色	

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
3	甕	—	(13.3)	—	口縁部～胴部⅓	ヨコナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	
4	坏	3.7	11.5	6.8	完形	体部ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	—	やや堅緻	(内)茶褐色 (外)黒色	
5	坏	3.7	(12.4)	6.85	½	底部回転ヘラ削り	—	堅緻	(内)茶褐色 (外)黒褐色	糸切り
6	坏	4.1	(13.3)	(7.8)	½	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	糸切り
7	坏	4.0	12.9	(7.4)	½	底部一方向ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	灰色	
8	坏	—	—	7.1	底部のみ	底部回転ヘラ削り	—	堅緻	黒褐色	糸切り

22. D100号遺構（図411、412、図版81－3、116）

III群の住居群内において中央に群集する1軒で、D141が近接している。P002に2分の1程度切断されているため遺存状況はきわめて悪い。よって全体について充分把握できない。

遺構　北壁3.50m、東壁3.00mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はやや傾斜を呈して0.10m掘り込んでおり、直下には幅0.20m、深さ0.04mの壁溝が認められるが、全周す

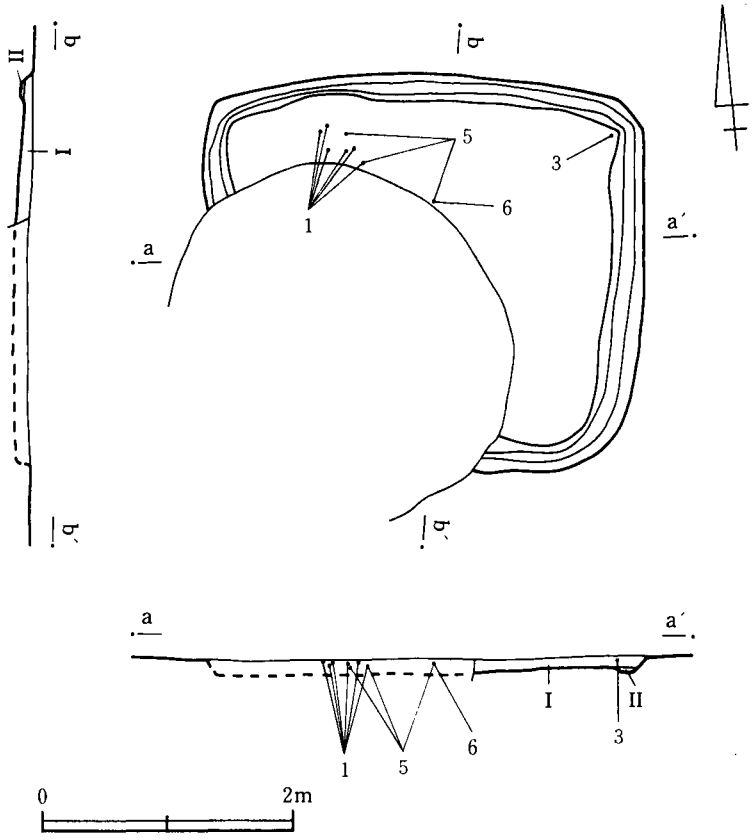


図411　D100号遺構実測図

るものであるか不明である。床面は遺存する部分で判断するならばきわめて堅緻な状況を呈していると言ってよい。柱穴はなかったと考えられる。カマドについては出土遺物の時期から見て構築してあったと考えられるが、どこに所在したか不明である。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層茶褐色土層が堆積する。遺物は床面より若干上方より少量出土している程度である。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器がある。甕形土器は1のみで、口唇部に特徴がある口縁部を呈し、胴部は球形に近い。坏形土器は2～6で、2、3は口径10cm前後の小形なものである。4は体部がほぼ直線的に開く形状を呈し、5は内彎ぎみに開く形状を呈している。6は高台付の底部破片である。

D100出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	—	(20.7)	—	口縁部～胴部⅓	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒 雲母	堅緻	淡茶褐色	
2	坏	2.9	(10.4)	4.8	½	—	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
3	坏	3.0	11.0	4.7	完形	—	砂粒 雲母	やや軟弱	淡茶褐色	糸切り
4	坏	4.1	11.95	6.85	完形	底部一方向ヘラ削り	砂粒	軟弱	茶褐色	
5	坏	5.0	(14.6)	4.4	⅓	底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	糸切り 内面磨き
6	高台付坏	—	—	(6.85)	高台部½	—	砂粒 雲母	堅緻	黒褐色	

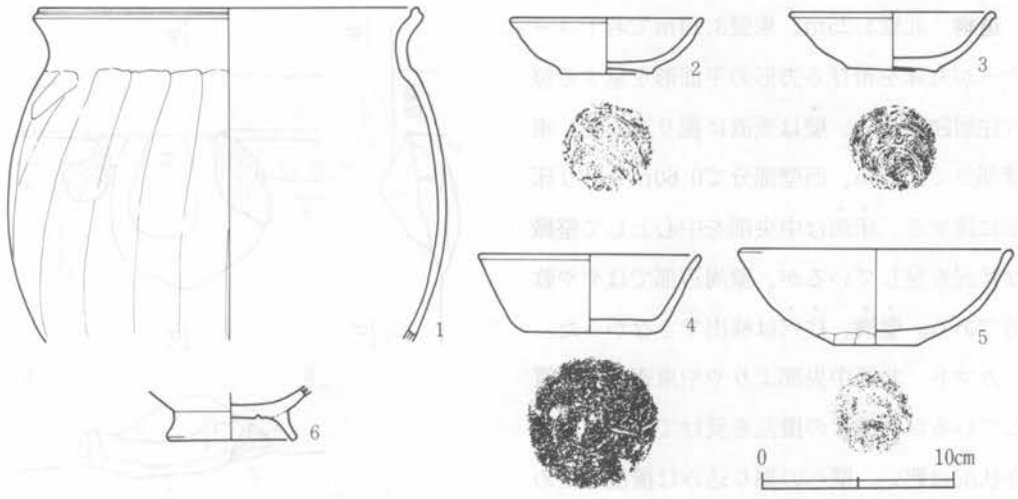


図412　D100号遺構出土遺物実測図

23. D101号遺構（図413～415、図版82－1・2、116）

Ⅲ群の住居群内において中央部に群集する1軒で西側に位置し、D099が近接している。緩斜面に構築されている関係で壁高は一定でない。

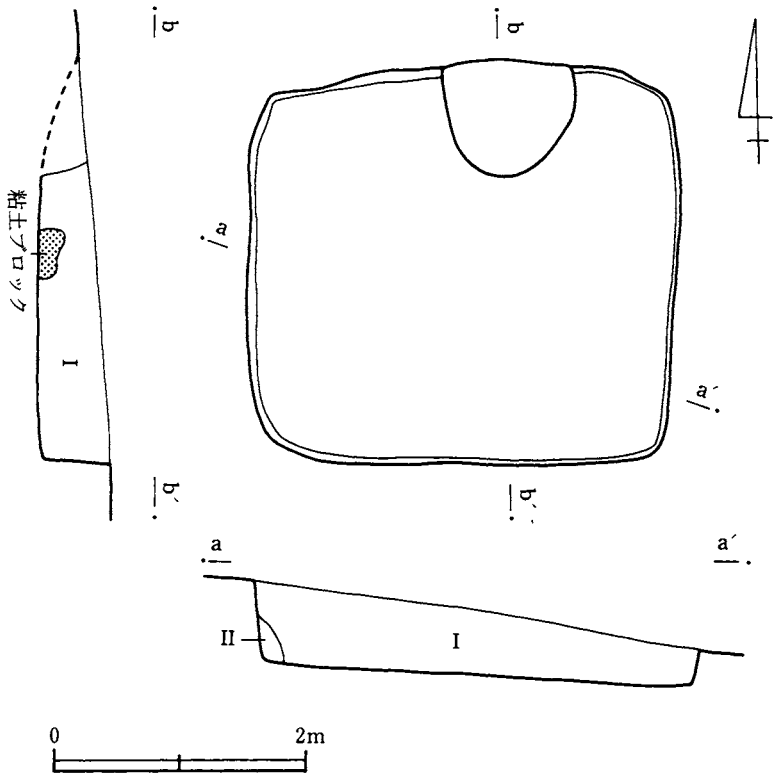
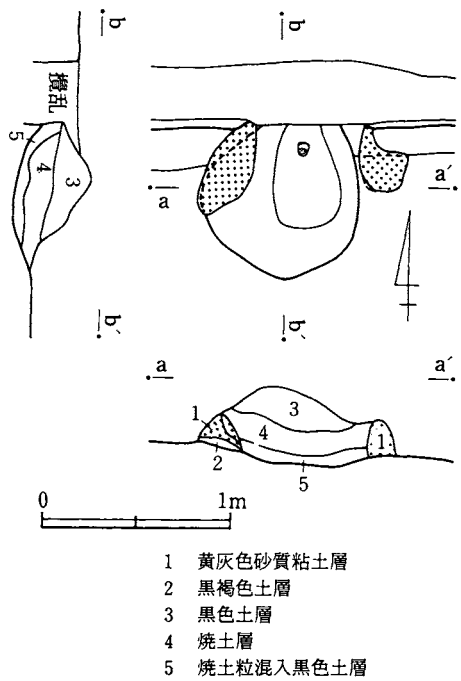


図413 D101号遺構実測図

遺構 北壁3.25m、東壁3.14mで若干コーナーが丸味を帯びる方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に掘り込んで、東壁部分で0.25m、西壁部分で0.60mを計り床面に達する。床面は中央部を中心として堅緻な状況を呈しているが、壁周辺部ではやや軟弱である。壁溝、柱穴は検出できなかった。

カマド 北壁中央部よりやや東寄りに位置しているが、溝状の攪乱を受けているため遺存状況は悪い。壁への掘り込みは攪乱のため定でないが、溝の幅員を考慮すれば0.5m以上でないことが判断できる。粘土の貼り込みは掘り込み部分に若干認められる程度であり、天井部は遺存していない。火袋に相当する袖は焼土化が認められる。火床部は深さ0.10m



1 黄灰色砂質粘土層
2 黒褐色土層
3 黒色土層
4 焼土層
5 焼土粒混入黒色土層

図414 D101号遺構カマド実測図

の掘り込みを呈している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層焼土粒混入黒色土層が堆積する。遺物は床面上を中心としているが稀少である。カマド内出土も認められる。

出土遺物　遺物は、甕、坏、皿、鉢形土器と土製品がある。甕形土器は1で、口唇部に特徴のある小形甕である。坏形土器は2～7で、口径 10 cm 前後の2と、口径 12 cm 前後の3、4がある。5～7は底部破片で、6には墨書がある。皿形土器は8、9で造り出し高台を有する。鉢形土器は10で体部破片である。土製品は11の支脚で、上下端部ともに欠損するが円柱形のものである。胎土に砂粒を混入し、焼成良、色調は赤褐色を呈す。

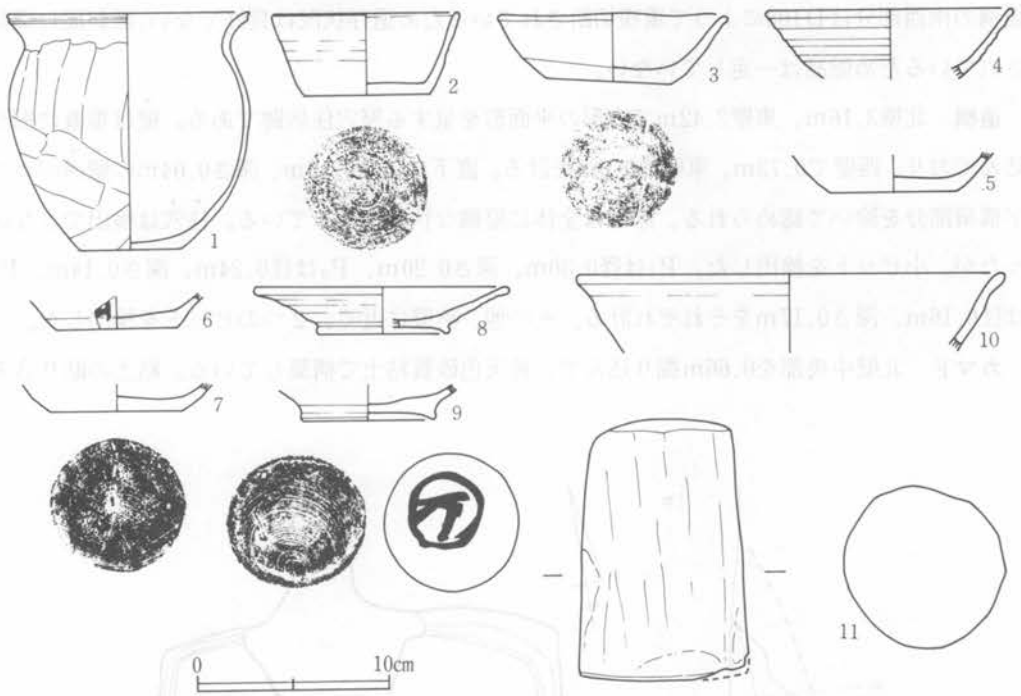


図415　D101号遺構出土遺物実測図

D101出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	12.3	12.8	5.4	1/2	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	茶褐色	
2	坏	4.2	10.0	6.7	1/2	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
3	坏	3.5	12.3	6.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒 雲母	堅緻	茶褐色	糸切り
4	坏	—	(13.1)	—	1/3	—	砂粒	堅緻	茶褐色	
5	坏	—	—	6.7	3/4	底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
6	坏	—	—	(6.4)	底部のみ	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書判読不明 糸切り

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
7	坏	—	—	7.0	½	底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	茶褐色	糸切り
8	高台付皿	2.4	13.6	6.85	½	—	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
9	高台付皿	—	—	7.2	底部のみ	—	雲母	堅緻	茶褐色	墨書「㊀」、糸切り、内面磨き
10	鉢	—	(22.7)	—	¼	—	—	堅緻	茶褐色	内面磨き

24. D102号遺構（図416～418、図版82－3、83－1、117）

Ⅲ群の住居群内においてほぼ中央部に群集する1軒で、D100、D101、D141が近接している。遺構の南西部分はD108によって重複切断されているため遺存状況は良好でない。緩斜面に構築されているため壁高は一定していない。

遺構　北壁3.16m、東壁2.42mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に掘り込んでおり、西壁で0.73m、東壁で0.6mを計る。直下には幅0.16m、深さ0.04mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は検出できなかったが、小ピットを検出した。P_1は径0.30m、深さ0.20m、P_2は径0.24m、深さ0.14m、P_3は径0.16m、深さ0.17mをそれぞれ計る。その他、南壁に近く、2つのピットを検出した。

カマド　北壁中央部を0.66m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込み

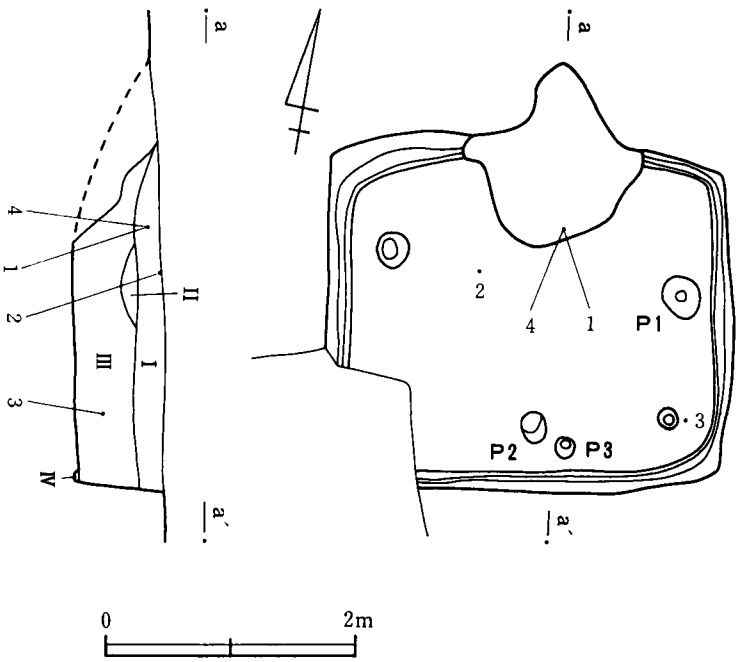
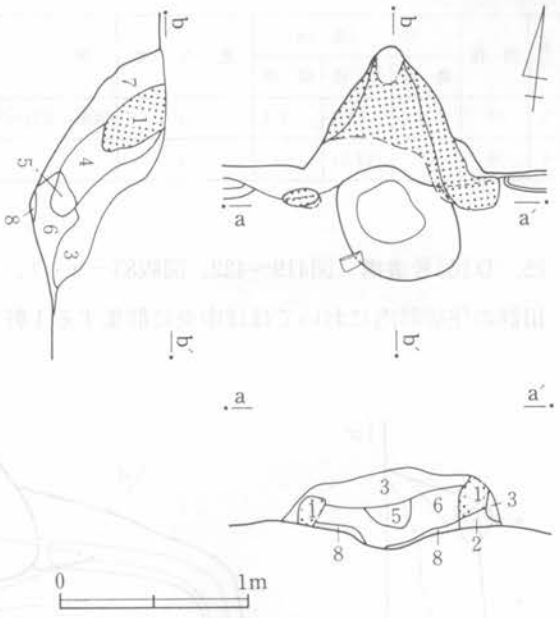


図416 D102号遺構実測図

は袖部から煙出し部まで一体化しているが、左袖においてはその状況は明瞭に捉えることができない。天井部の一部は煙道部において遺存している。火床部は深さ0.11mの擂鉢状で、煙道部はゆるやかな傾斜を呈している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層焼土粒混入黒色土層、Ⅲ層黒褐色土層、Ⅳ層茶褐色土層が堆積する。遺物はⅡ層を中心として若干出土した程度である。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器がある。甕形土器は1、2で、口唇部に特徴を有する口縁部破片である。2は底部破片である。坏形土器は3、4で、体部が直線的に開く形状を呈する。



1　黄灰色砂質粘土層
2　黒褐色土層
3　黒色土層
4　黄褐色土層
5　黄灰色砂質粘土ブロック層
（天井部の落ち込み層）
6　焼土層
7　焼土粒・炭化粒混入黒褐色土層
8　ロームブロック層

図417　D102号遺構カマド実測図

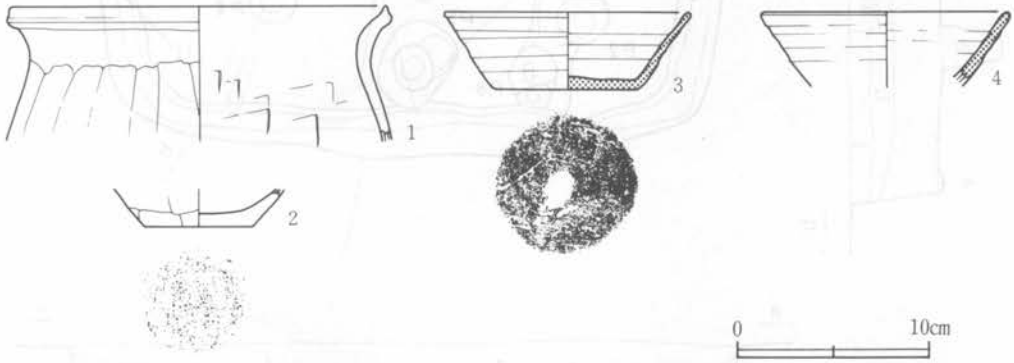


図418　D102号遺構出土遺物実測図

D102出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	20.4	—	⅓	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
2	甕	—	—	(5.7)	底部のみ	—	砂粒	堅緻	黒褐色	

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
3	坏	4.0	13.2	7.4	½	底部一方向ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	灰色	
4	坏	—	(13.2)	—	⅓	—	—	堅緻	灰色	

25. D103号遺構（図419～422、図版83—2・3、117）

III群の住居群内においてほぼ中央に群集する1軒で、D109、D141、D143が近接している。

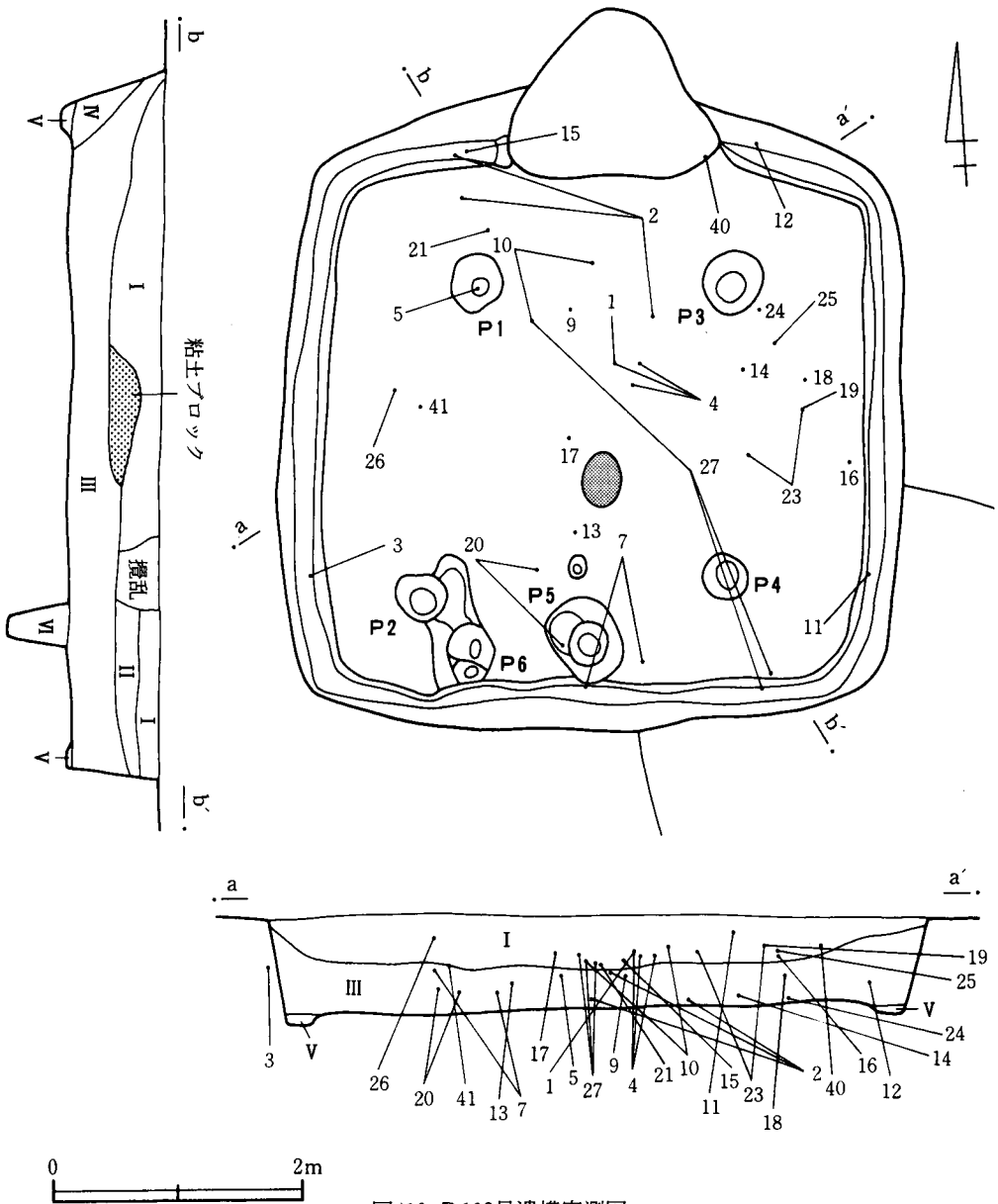


図419 D103号遺構実測図

古墳時代中期第II群のD104を重複切断して構築している。

遺構　北壁4.77m、東壁4.26mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.77m掘り込んでおり、直下に幅0.32m、深さ0.08mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は対角線上にP_1～P_4を検出した。径平均0.42m、深さ0.43m～0.63mを計り、堅固な掘りかたを呈している。その他、小ピットが南壁に近接してP_5、P_6を検出した。P_5は径0.67m、深さ0.23m、P_6は径0.46m、深さ0.51mを計るものである。

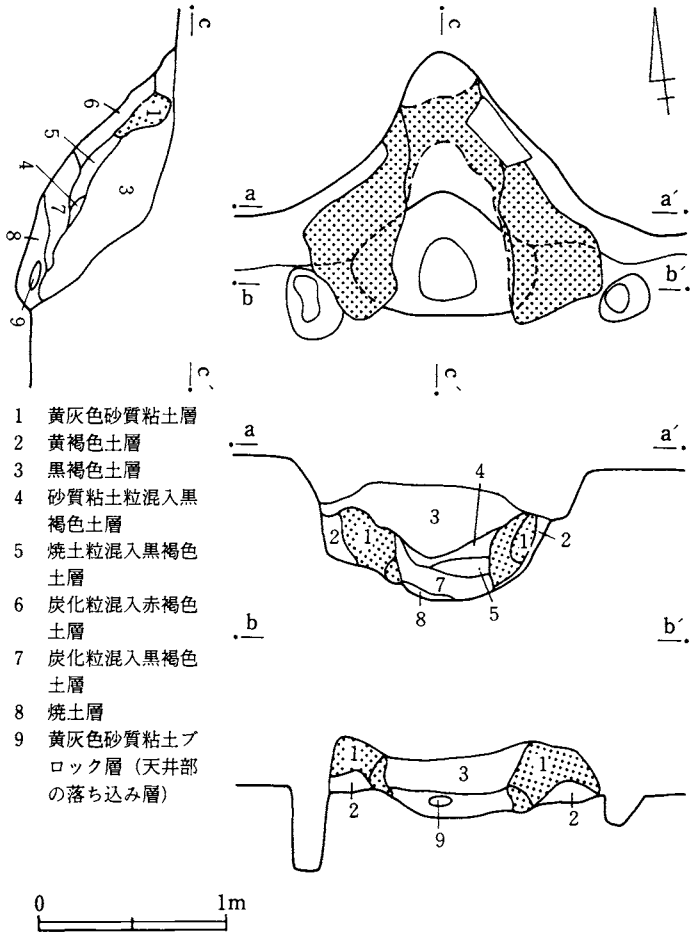


図420　D103号遺構カマド実測図

カマド　北壁中央部を三角形に最長0.90m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土は一部ロームの削出しを袖芯とし、袖部から煙出し部まで一体化して貼り込まれている。煙道部分が段状に掘り込まれており、この段に火袋部に相当する部分の貼り込みが認められるが、天井部は遺存していない。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層ローム粒混入黒褐色土層、IV層明茶褐色土層、V層茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上の出土は少なく、III層、IV層を中心として多量に出土している。カマド内出土も多く認められる。

出土遺物　遺物は、甕、甑、坏、皿形土器と銅製品、鉄製品がある。甕形土器は1～5、7～10で、1は口唇部に特徴のある口縁部の破片、2～5は底部破片、7、8は叩き目のある口縁部破片、9、10は胴部に叩き目をもつ広口甕の底部と思われる。甑形土器は6で口縁部が水

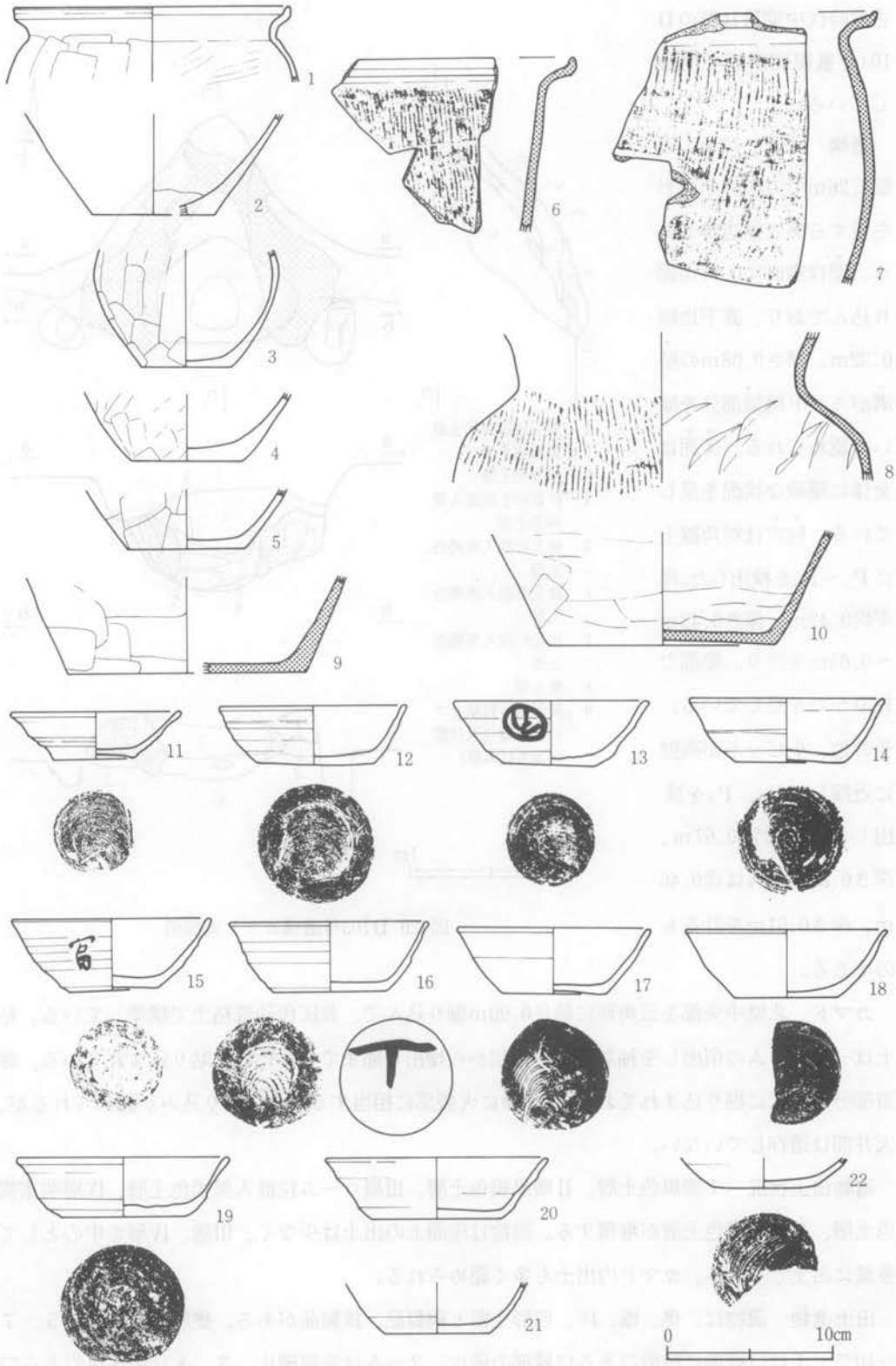


図421 D103号遺構出土遺物実測図(1)

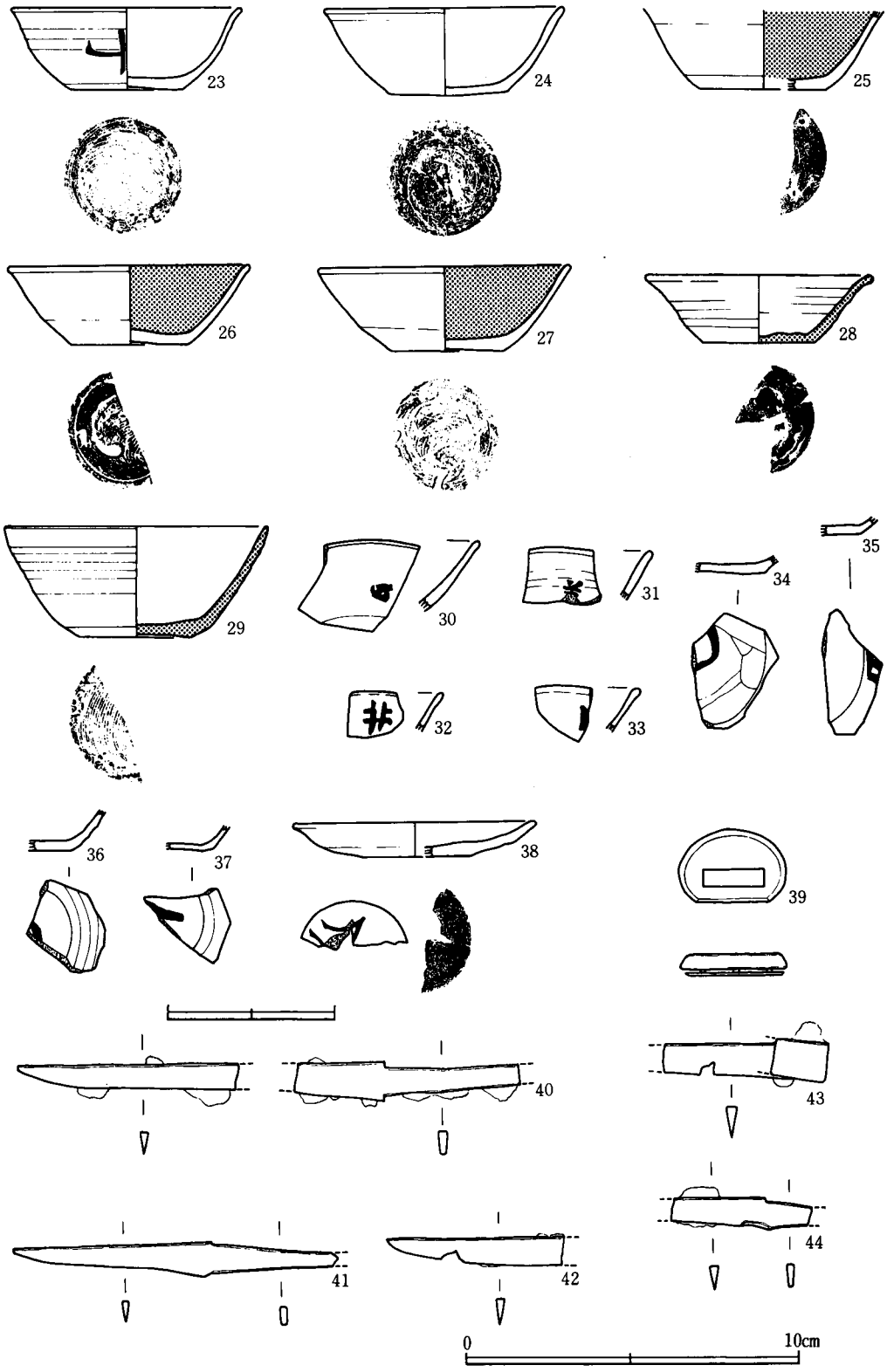


図422 D103号遺構出土遺物実測図(2)

D103出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	(17.0)	—	口縁部 1/3	ヨコナデ ヘラ削り	雲母	堅緻	黒褐色	
2	甕	—	—	7.5	底部 1/3	—	砂粒	堅緻	茶褐色	
3	甕	—	—	5.5	2/3	ヘラ削り	雲母	堅緻	茶褐色	
4	甕	—	—	6.8	底部 1/3	ヘラ削り	砂粒	堅緻	赤褐色	
5	甕	—	—	7.2	底部 1/3	ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
6	甑	—	—	—	破片	ヨコナデ 叩きじめ	雲母	堅緻	灰色	
7	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	軟弱	黒色	
8	甕	—	—	—	頸部～胴部 1/3	ヨコナデ 叩きじめ	雲母	軟弱	灰色	
9	甕	—	—	—	底部 1/3	ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	
10	甕	—	—	13.9	底部 1/3	ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	灰色	
11	坏	2.75	10.4	5.1	完形	—	砂粒 雲母	やや堅緻	茶褐色	糸切り
12	坏	3.45	11.5	7.1	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒 雲母	やや堅緻	茶褐色	糸切り
13	坏	3.7	12.0	5.6	2/3	底部回転ヘラ削り	砂粒 雲母	やや堅緻	茶褐色	墨書「㊀」、糸切り
14	坏	3.8	(12.0)	6.75	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒 雲母	やや堅緻	赤褐色	
15	坏	4.2	12.2	5.5	3/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒 雲母	堅緻	茶褐色	墨書「冨」、糸切り
16	坏	4.1	(12.2)	7.0	1/2	底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	墨書「千」、糸切り
17	坏	3.9	12.0	6.35	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母 砂粒	やや堅緻	黒色	糸切り
18	坏	4.0	12.4	6.35	1/2	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
19	坏	3.6	(13.0)	7.65	1/3	底部回転ヘラ削り	砂粒 雲母	やや堅緻	黒褐色	
20	坏	3.65	(13.8)	8.0	1/3	底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
21	坏	—	—	6.5	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
22	坏	—	—	6.5	1/3	底部回転ヘラ削り	砂粒 雲母	堅緻	茶褐色	糸切り
23	坏	5.0	(14.0)	6.8	2/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母 砂粒	やや堅緻	茶褐色	墨書「丁」、糸切り、内面磨き
24	坏	5.4	14.8	7.2	1/2	底部回転ヘラ削り	雲母 砂粒	やや堅緻	茶褐色	内面磨き
25	坏	—	—	(7.7)	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	茶褐色	内黒
26	坏	4.7	(14.8)	7.1	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	茶褐色	内黒
27	坏	5.0	15.5	6.8	3/4	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り、内黒
28	坏	4.0	(13.8)	(6.65)	1/4	底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	ヘラ切り
29	坏	6.6	16.0	6.8	1/3	—	砂粒	やや堅緻	灰色	糸切り
30	坏	—	—	—	破片	—	雲母 砂粒	堅緻	茶褐色	墨書判読不明
31	坏	—	—	—	破片	—	—	堅緻	茶褐色	墨書「寿」
32	坏	—	—	—	破片	—	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「井」
33	坏	—	—	—	破片	—	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書判読不明
34	坏	—	—	—	破片	—	—	堅緻	赤褐色	墨書判読不明
35	坏	—	—	—	破片	—	砂粒 雲母	堅緻	茶褐色	墨書判読不明
36	坏	—	—	—	破片	—	雲母	堅緻	茶褐色	墨書判読不明

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
37	坏	—	—	—	破片	—	雲母	堅緻	茶褐色	墨書判読不明
38	皿	20.0	4.5	(6.6)	1/3	底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	茶褐色	墨書判読不明

平に開き、胴部に叩き目のある口縁部破片である。坏形土器は11～37で、11は最も小形で体部が大きく開く形状を呈するもので、他は口径12cm前後の12～19と、口径15cm前後の20、23～29がある。21、22は底部破片、30～37は墨書がある破片である。皿形土器は38の1点だけである。銅製品は39の丸鞆で、裏金も遺存する。鉄製品は40～44で、いずれも刀子であり、41は研ぎべりが著しい。

26. D106号遺構（図423～425、図版84－1・2、117、118）

III群の住居群内においてほぼ中央に群集する1軒で東側に位置し、D107、D115、H010と纏

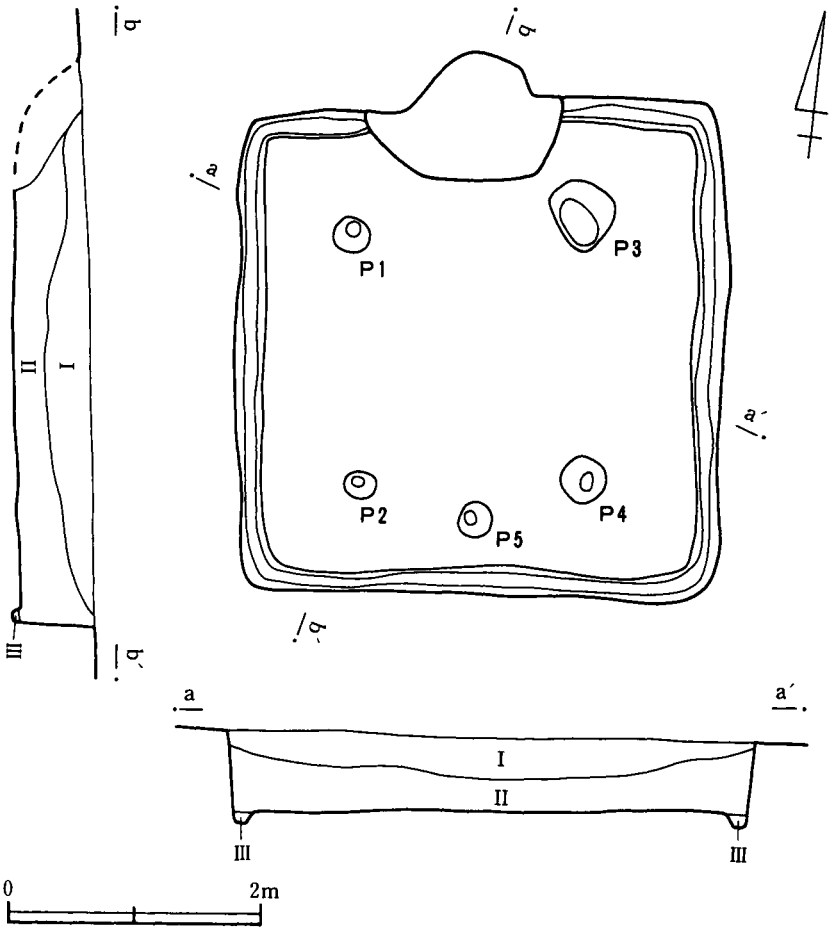
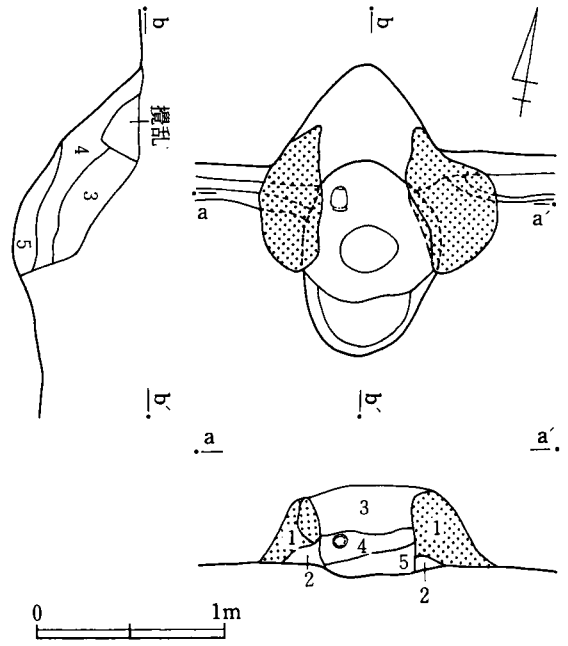


図423 D106号遺構実測図

りの考えられる遺構である。

遺構　北壁3.74m、東壁3.94mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.62m掘り込んでおり、直下には幅0.20m、深さ0.10mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は対角線上にP_1～P_4を検出した。掘りかたの規模は統一的ではないが、深さは0.31m～0.47mと平均している。その他、小ピットが南壁中央部に近接して径0.25m、深さ0.27mを計るP_5を検出した。

カマド　北壁中央部を三角形に最長0.51m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙道部まで認められるが、天井部は認められない。火床部は深さ0.14mの楕円形で、煙道部はゆるやかな傾斜を呈している。



1　黄灰色砂質粘土層
2　黄褐色土層
3　黒褐色土層
4　焼土層
5　ローム粒混入黒褐色土層

図424　D106号遺構カマド実測図

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層茶褐色土層が堆積する。遺物は多量に出土したが、調査途中において移動されてしまったため原位置を止めていない。カマド内出土も認められる。

D106出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	14.2	14.0	5.3	完形	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
2	甕	—	(10.5)	—	1/3	ヨコナデ	砂粒	堅緻	黒褐色	
3	甕	—	(12.6)	—	1/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒 雲母	堅緻	茶褐色	
4	甕	—	(22.6)	—	1/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
5	甕	(29.5)	(22.0)	—	1/2	ヨコナデ 磨き	雲母 砂粒	堅緻	茶褐色	
6	甕	—	(22.2)	—	1/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
7	甕	—	(20.4)	—	1/2	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	堅緻	灰色	

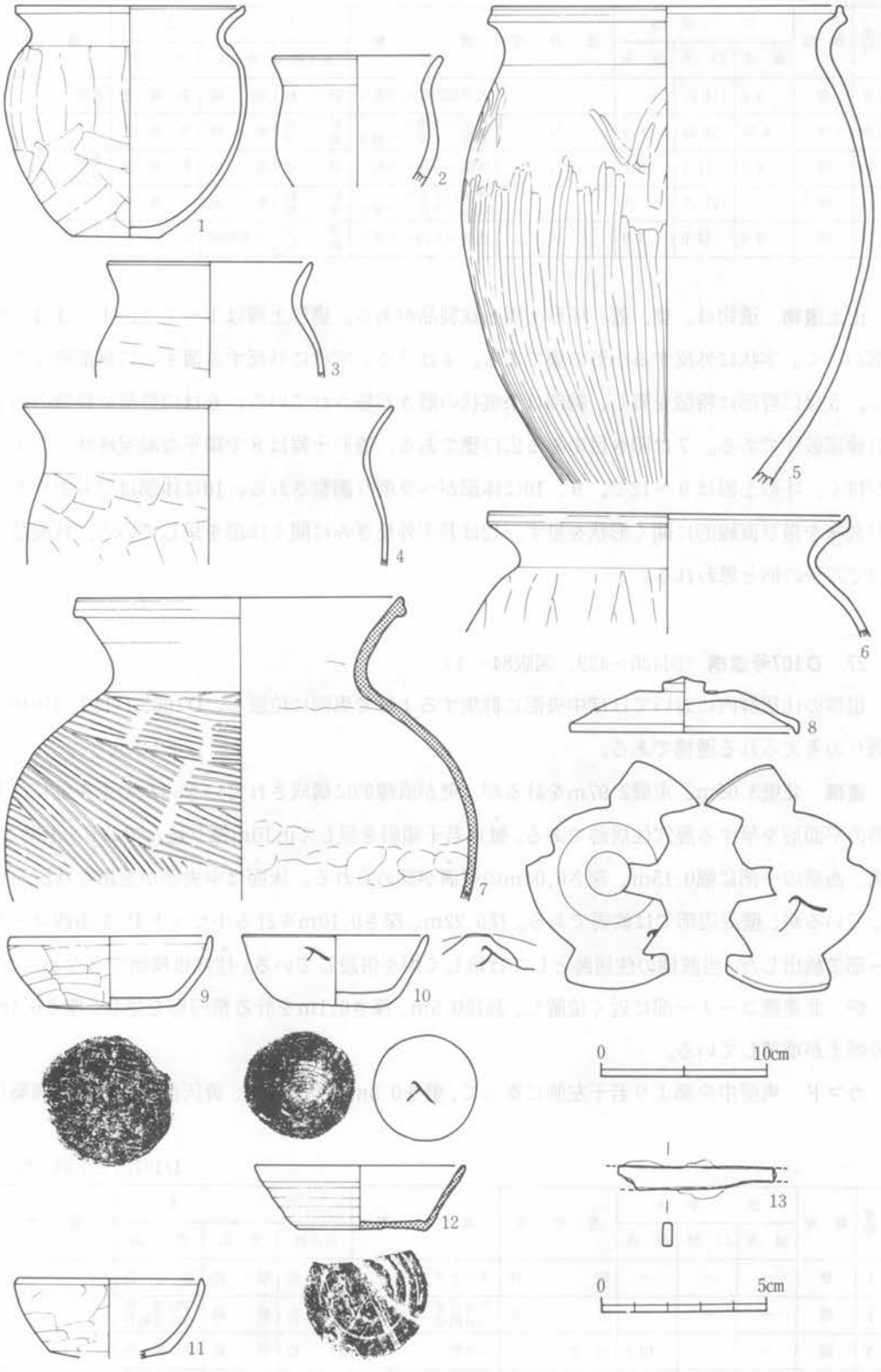


図425 D106号遺構出土遺物実測図

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
8	蓋	3.4	(14.0)	—	½	天井部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「入」
9	坏	4.35	12.35	8.0	½	体部ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	砂粒 雲母	堅緻	黒褐色	
10	坏	4.3	11.3	6.8	⅔	底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「入」、糸切り
11	坏	—	(11.2)	(7.3)	⅓	体部ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	砂粒 雲母	堅緻	赤褐色	
12	坏	3.8	13.0	7.9	⅓	底部一方向ヘラ削り	雲母 砂粒	やや堅緻	灰色	ヘラ切り

出土遺物　遺物は、甕、蓋、坏形土器と鉄製品がある。甕形土器は1～7で、1～3は口縁部が「く」字状に外反する小形の甕である。4は「く」字状に外反する薄手の口縁部破片である。5は口唇部に特徴を有し、胴部は条痕状の磨きが施されている。6は口唇部に特徴のある口縁部破片である。7は叩き目のある広口甕である。蓋形土器は8で扁平な凝宝珠状のつまみが付く。坏形土器は9～12で、9、10は体部がヘラ削り調整される。10は体部は立ち上り部分が丸味を帯び直線的に開く形状を呈す。12は若干外反ぎみに開く体部を呈している。鉄製品は13で刀子の柄と思われる。

27. D107号遺構（図426～429、図版84－3）

III群の住居群内においてほぼ中央部に群集する1軒で東側に位置し、D106、D115、H010と纏りの考えられる遺構である。

遺構　北壁3.66m、東壁2.97mを計るが、壁が直線的に構成されていないため歪を生じた方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は若干傾斜を呈して0.10m掘り込んでおり、南壁と、東、西壁の一部に幅0.15m、深さ0.04mの壁溝が認められる。床面は中央部が堅緻な状況を呈しているが、壁周辺部では軟弱である。径0.22m、深さ0.10mを計る小ピットP_1を南西コーナー部で検出した。当該期の住居跡としては珍しく炉を併設している。柱穴は検出できなかった。

炉　北東壁コーナー部に近く位置し、長径0.5m、深さ0.1mを計る楕円形を呈し、厚さ0.1mの焼土が堆積している。

カマド　東壁中央部より若干左側に寄って、壁を0.3m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築し

D107出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	黒色	
2	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	(内)黒色 (外)茶褐色	
3	甕	—	—	10.8	底部のみ	ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
4	坏	—	16.7	—	¼	—	砂粒	堅緻	茶褐色	

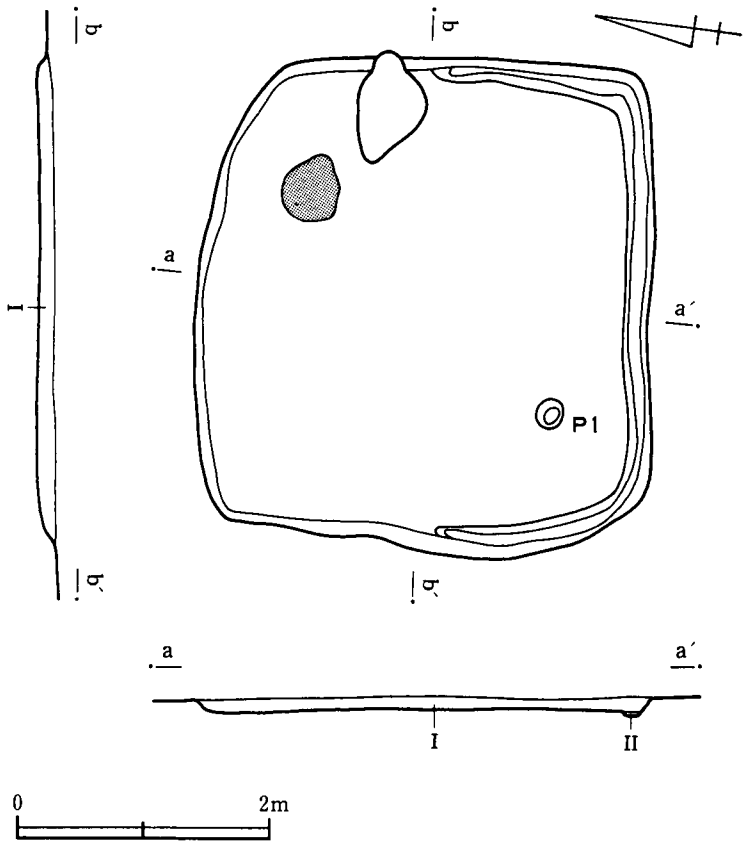
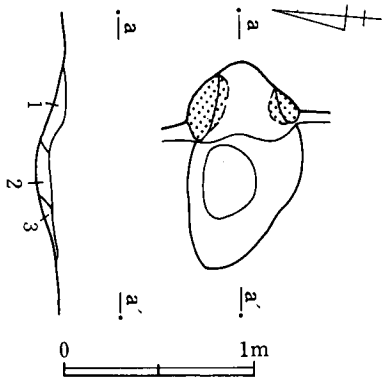


図426 D107号遺構実測図

ている。粘土の貼り込みは掘り込み部分にのみ認められるものの、住居自体の掘り込みが浅いため充分把握することができない。火床に相当すると思われる楕円形の掘り込みが煙道部の掘り込み部分より突出した状況で検出できた。

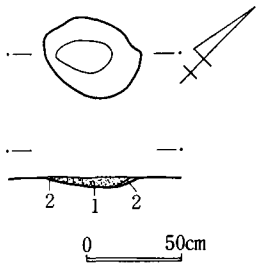
遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層茶褐色土層が堆積する。遺物はI層の出土であるが、破片が多く、しかも量的に少ない。カマド内出土も認められる。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器で量的に少ない。甕形土器は1～3で、1は広口甕の口縁部、2は緩やかに外反す口縁部破片、3は底部破片である。坏形土器は4の体部破片である。



1　焼土粒混入黄褐色土層
2　焼土層
3　黒色土層

図427 D107号遺構カマド実測図



1　焼土層
2　焼土粒混入褐色土層

図428　D107号遺構炉跡実測図

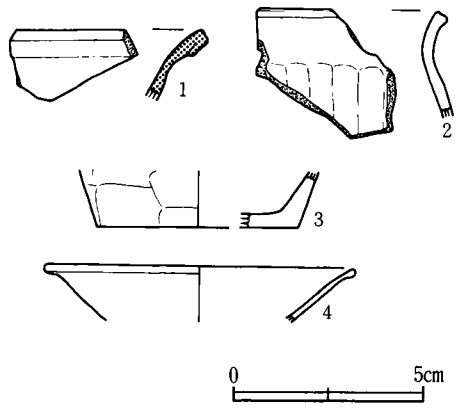


図429　D107号遺構出土遺物実測図

28. D108号遺構（図430～432、図版85、118）

III群の住居群内においてほぼ中央に群集する1軒で、D101が近接している。D102を重複切断して構築している。緩斜面に構築されているため壁高は一定していない。

遺構　北壁3.07m、西壁3.75mで長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は若干の傾斜をもって掘り込んでおり、西壁部で1.00m、東壁部で0.80mを計る。直下には幅0.20m、深さ0.05mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈する。南壁中央部に近接してP_1、P_2を検出した。P_1は径0.20m、深さ0.08m、P_2は径0.20m、深さ0.22mを計る。柱穴は検出できなかった。

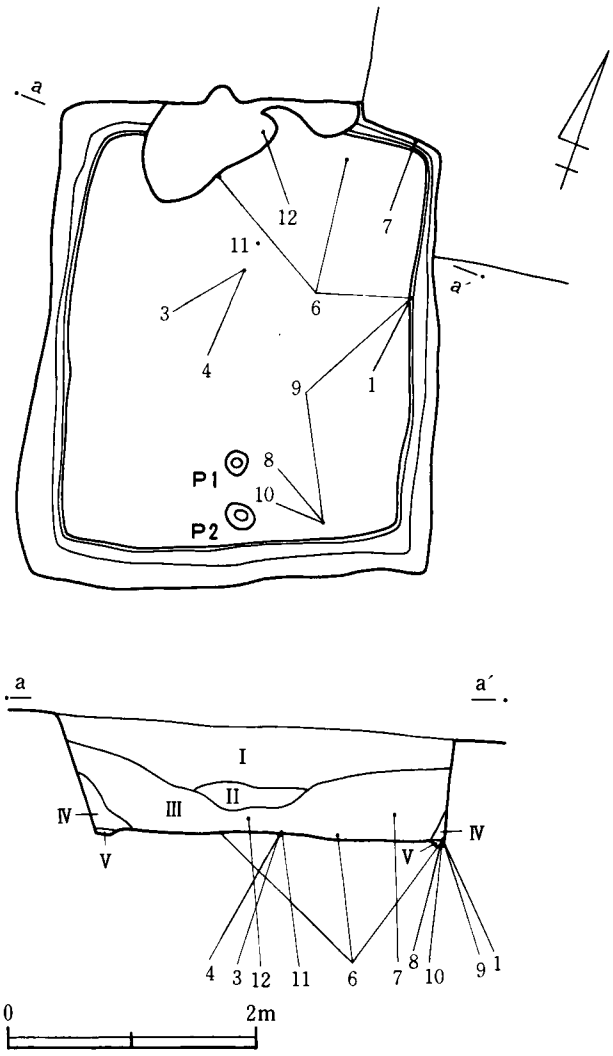


図430　D108号遺構実測図

カマド　北壁中央部より若干西に寄った壁を0.90m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。掘り込みは2段になっており、粘土は袖部から掘り込み上段部に貼り込まれ、煙出し部まで一体化している。天井部は遺存しないものの、かなり堅固な構造である。火床部は掘り込み内に位置し、深さ0.06mの楕円形で煙道部は緩やかな傾斜を呈している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層粘土粒混入黒色土層、Ⅲ層黒褐色土層、Ⅳ層ローム粒混入黒褐色土層、Ⅴ層茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上を中心

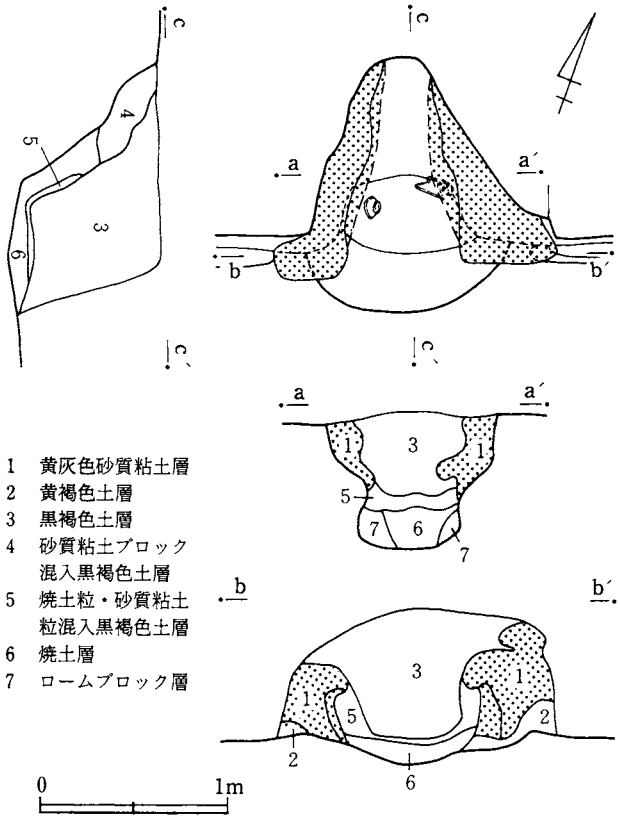


図431 D108号遺構カマド実測図

D108出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	—	23.7	—	⅔	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
2	甕	—	(14.4)	—	⅓	ヨコナデ ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	
3	甕	—	(14.2)	—	½	ヨコナデ ヘラ削り	雲母	堅緻	黒褐色	
4	甕	—	(14.6)	—	⅓	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
5	甕	—	—	5.7	½	ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
6	甕	—	—	4.6	⅔	ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
7	坏	3.95	12.1	8.0	完形	底部回転ヘラ削り	雲母 砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「大」
8	坏	3.8	12.2	8.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒褐色	糸切り
9	坏	—	(12.6)	—	¼	—	—	堅緻	茶褐色	
10	坏	5.25	14.4	7.15	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒 雲母	やや堅緻	茶褐色	墨書「大」 糸切り
11	坏	3.35	12.4	8.55	完形	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
12	坏	4.2	12.0	8.4	⅔	底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	灰色	
13	坏	4.1	13.0	6.8	完形	—	砂粒	堅緻	灰色	糸切り
14	坏	—	—	—	破片	—	—	堅緻	茶褐色	墨書判読不明

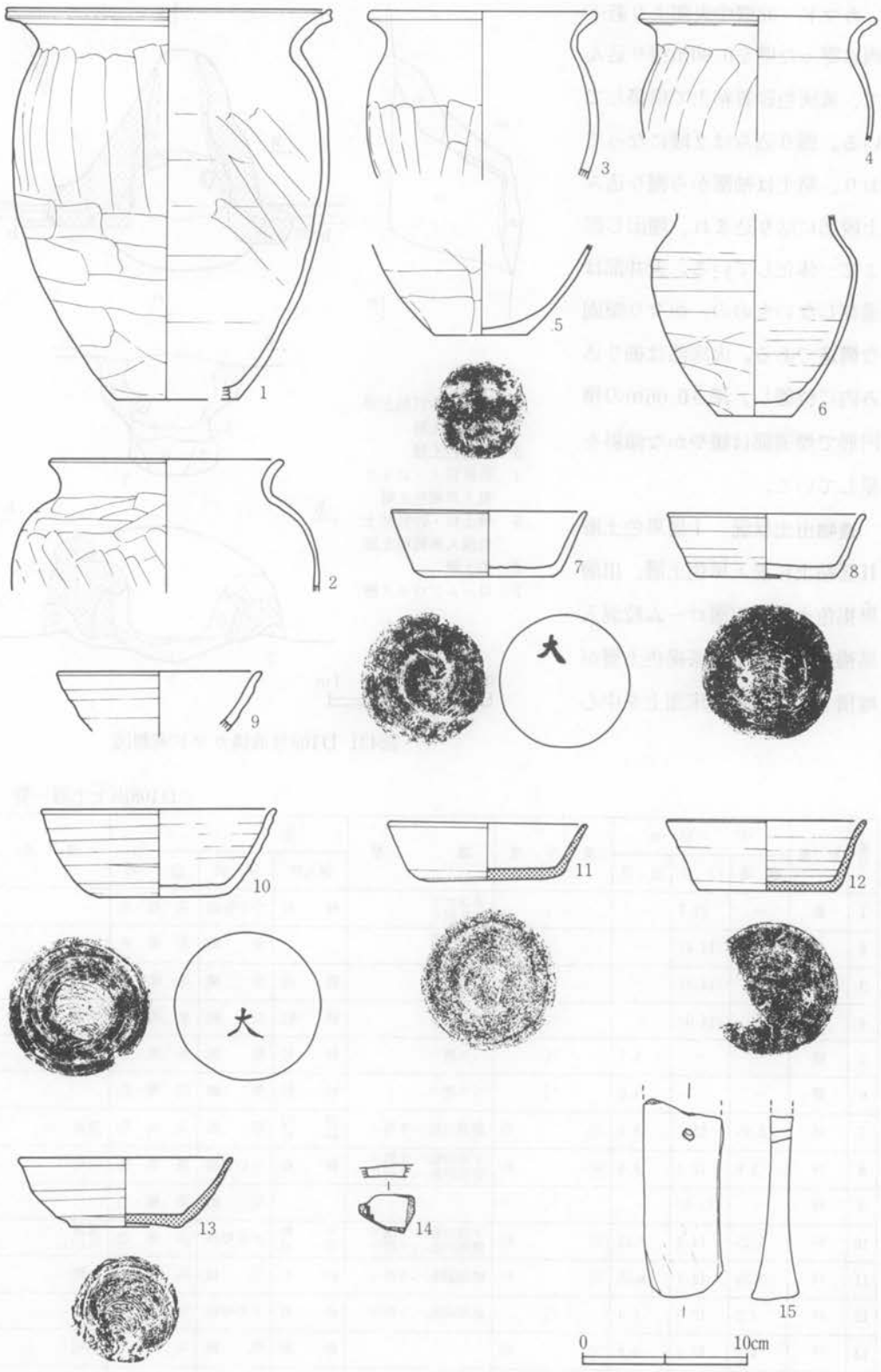


図432 D108号遺構出土遺物実測図

として完形もしくは完形に近い土器が出土している。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器と石製品がある。甕形土器は1～6で、1は「く」字状に屈曲が強い口縁部を呈す。2は球形に近い胴部から直立ぎみに開く口縁部を呈す。3は緩やかに外反する口縁部を呈す。4は一度直立して外反する口縁部を呈す。5は底部破片、6は頸部下半のものである。坏形土器は7～14で、7、8は体部が直線的でほぼ直立ぎみに開く形状を呈している。9、10は体部が若干内彎ぎみに開く形状を呈す。11、12は若干外反ぎみに開く形状を呈している。13は底部が上げ底風を呈し、体部は内彎ぎみに開く。14は墨書のある破片である。石製品は15の凝灰岩製の砥石で一端に小孔があり、小孔のある部分が研ぎべりを生じている。

29. D109号遺構（図433～435、図版86—1・2、118、119）

III群の住居群内においてほぼ中央に群集する1軒で、D102、D103、D108、D110、D141、D143が近接している。遺構のほぼ中央に芋穴状の攪乱を受けている。

遺構　北壁3.25m、東壁2.95mで若干胴張りする方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。

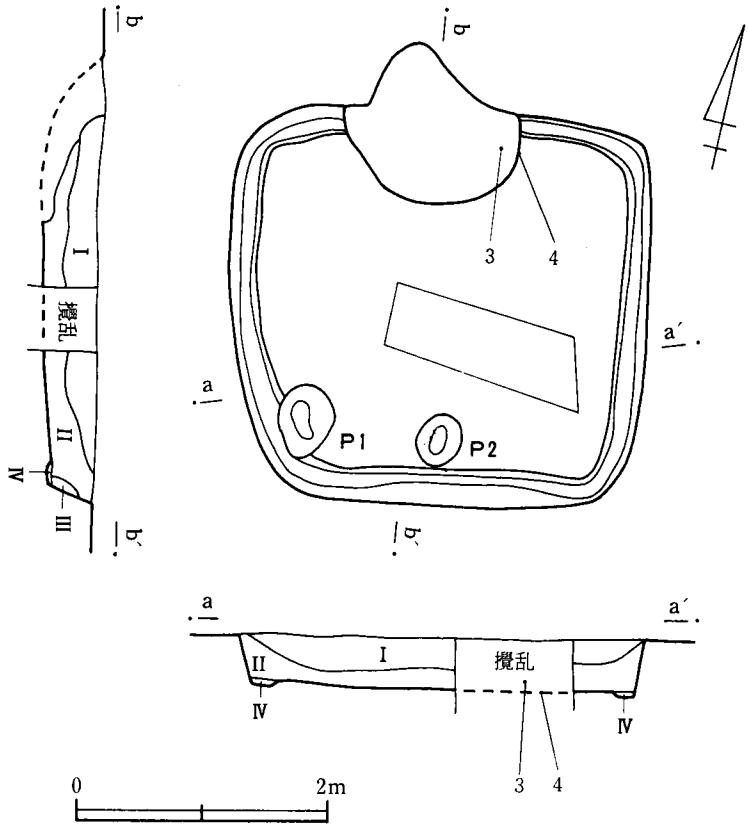
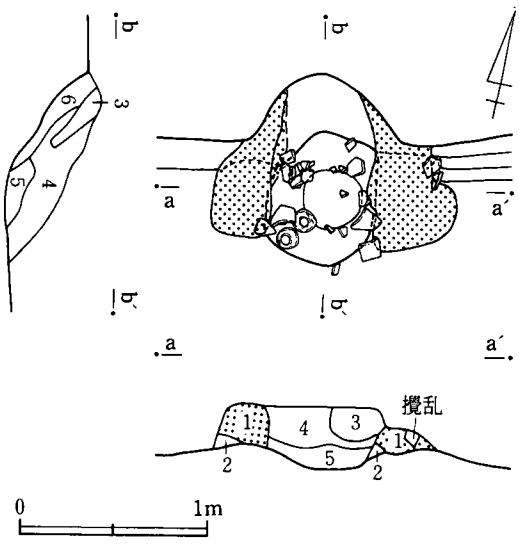


図433 D109号遺構実測図

壁は垂直に0.42m掘り込んでおり、直下には幅0.24m、深さ0.06mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。南西壁コーナー部に径0.46m、深さ0.33mを計るP₁、南壁中央部に径0.36m、深さ0.13mを計るP₂を検出した。柱穴は検出できなかった。



1 黄灰色砂質粘土層
2 黄褐色土層
3 黄灰色砂質粘土ブロック層
(天井部の落ち込み層)
4 黒褐色土層
5 焼土層
6 焼土粒・炭化粒混入黒褐色土層

図434 D109号カマド実測図

カマド 北壁中央部を0.36m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みはロームを削り出した袖芯の上に行われ、袖部から煙道部まで一体化している。火床部は深さ0.05mの擂鉢状で、煙道部は緩やかな傾斜を呈している。天井部は遺存しない。

遺物出土状況 Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層ローム粒混入黒褐色土層、Ⅳ層茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上を中心として各層より出土している。一方カマド内からも多量に出土しており注目に値する。

出土遺物 遺物は、甕、甑、坏、皿形土器と石製品、鉄製品がある。甕形土器は1～3で、1は緩やかに「く」字状に外反する口縁部破片、2は叩き目のある口縁部破片、3は広口甕の底部である。甑形土器は4で叩き目が胴部に施され、口縁は水平近くに開く。坏形土器は5～7で、5、6は直線的に大きく開く体部を呈している。7は底部破片である。皿形土器は8で、

D109出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ ヘラ削り	雲母	堅緻	茶褐色	
2	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	堅緻	黒色	
3	甕	—	—	14.0	底部のみ	ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
4	甑	28.1	30.0	14.9	⅓	ヨコナデ 叩きじめ、ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	灰褐色	
5	坏	4.3	12.7	5.8	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒 雲母	やや軟弱	茶褐色	
6	坏	4.0	12.9	6.45	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	黒褐色	
7	坏	—	—	7.3	底部のみ	底部回転ヘラ削り	砂粒 雲母	堅緻	茶褐色	糸切り 内面磨き
8	皿	—	—	6.4	底部のみ	—	砂粒 雲母	堅緻	茶褐色	墨書「ク」 内面磨き

高台が付く底部破片である。石製品は9の凝灰岩製の砥石の残片である。鉄製品は10であるが、用途不明品である。

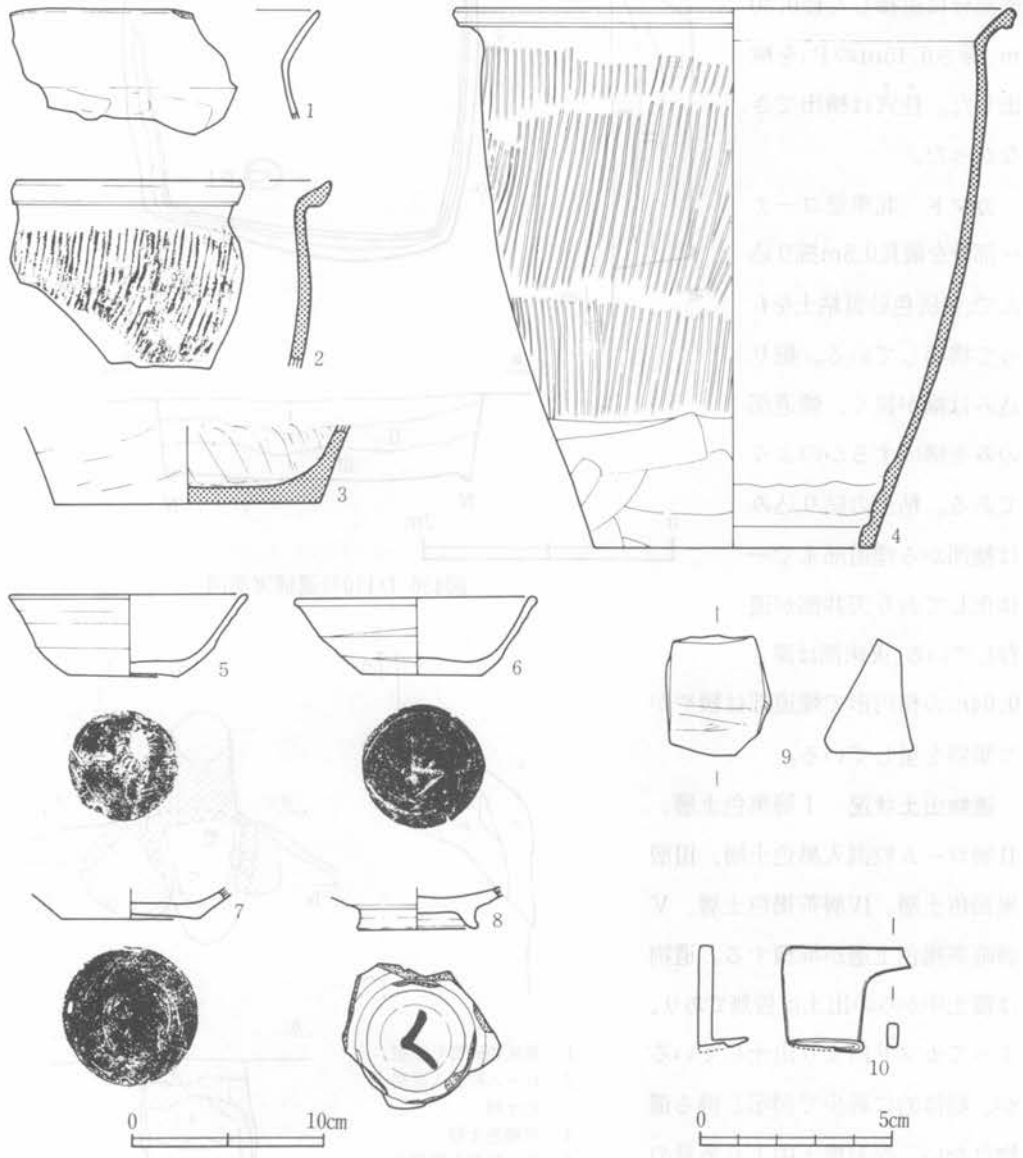


図435 D109号遺構出土遺物実測図

30. D110号遺構（図436、437、図版86－3、87－1）

III群の住居群内においてほぼ中央に群集する1軒で、D109、D143、D146が近接している。

遺構 南壁2.50m、西壁2.90m、で胴張りのある方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.62m掘り込んでおり、直下には幅0.14m、深さ0.05mの壁溝がカマド構築部分を

除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。小ピットは南壁部分に近接した径0.30m、深さ0.15mのP1を検出した。柱穴は検出できなかった。

カマド　北東壁コーナー部分を最長0.5m掘り込んで、黄灰色砂質粘土をもって構築している。掘り込みは幅が狭く、煙道部のみを構成するかのようである。粘土の貼り込みは袖部から煙道部まで一体化しており天井部が遺存している。火床部は深さ0.04mの楕円形で煙道部は緩やかな傾斜を呈している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層ローム粒混入黒色土層、III層黒褐色土層、IV層茶褐色土層、V層暗茶褐色土層が堆積する。遺物は覆土中からの出土は皆無であり、すべてカマド内より出土しているが、総体的に稀少で図示し得る遺物はない。なお覆土中より多量の貝殻を検出した。総計1,258点で、ハマグリ77.2%、シオフキ20.1%、アサリ、カガミガイ、サルボウはそれぞれ2.7%を占める。

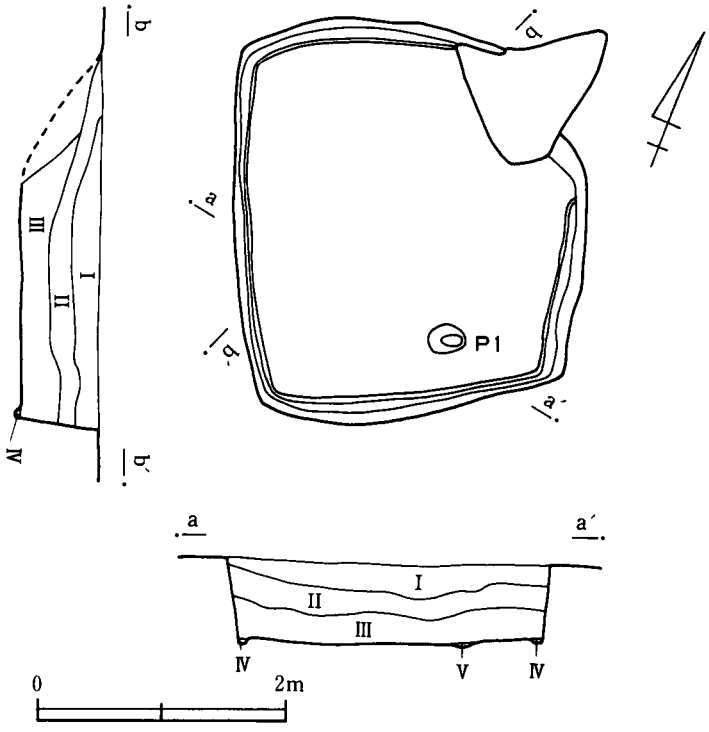


図436　D110号遺構実測図

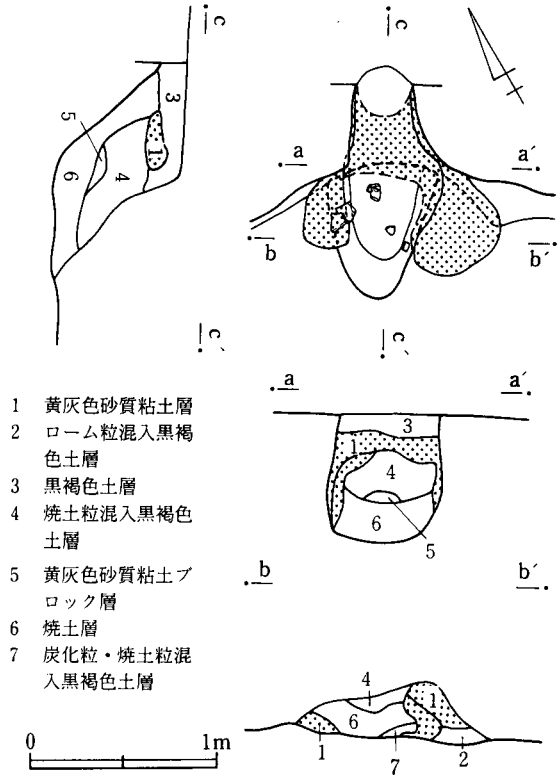


図437　D110号遺構カマド実測図

31. D111号遺構（図438～440、図版88—1・2、119）

III群の住居群内において中央部より少し南に寄って位置し、D112、D144が近接している。斜面部に構築されているため、壁高は一定していない。

遺構　北壁2.63m、東壁2.92mで隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に掘り込んでおり、西壁部では0.35mを計る。斜面下の東側壁直下には幅0.17m、深さ0.05mの壁溝が認められるが、それ以外には認められない。床面は中央部で軟弱なものの、壁周辺部では壁緻な状況を呈している。小ピットを1か所検出したが、柱穴になるものではない。平均径0.20m、深さ0.25mを計る。

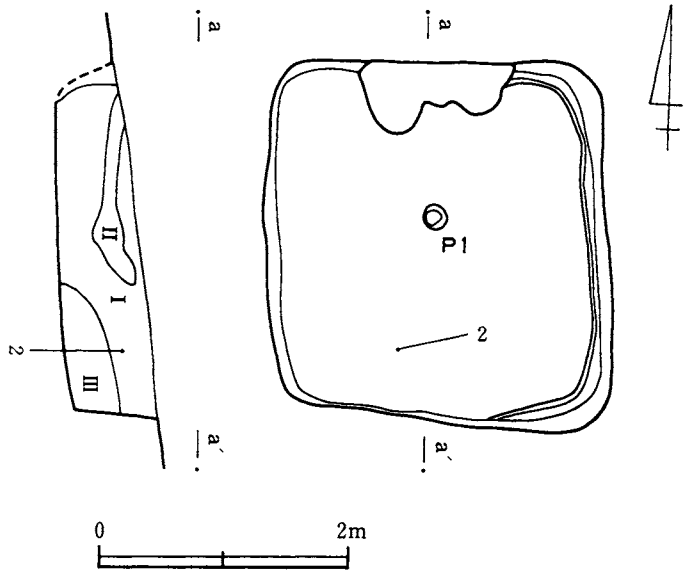
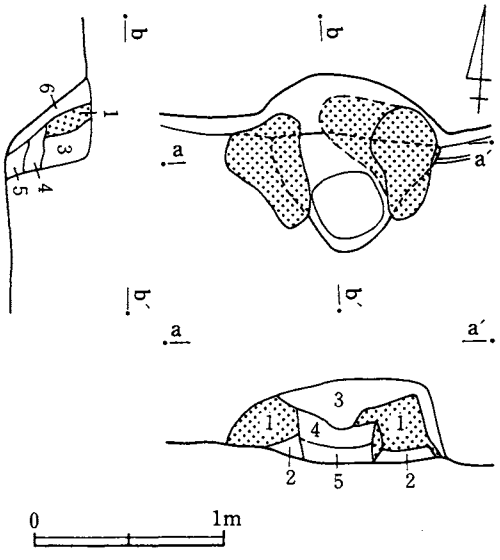


図438　D111号遺構実測図

カマド　北壁中央部を0.24m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは、掘り込みが浅いため袖部と煙道部の一部を形成するにすぎず、良好な状況を呈していない。火袋に相当する袖は焼土化が著しい。火床部は深さ0.03mの楕円形で、煙道部は緩やかな傾斜を呈している。



1　黄灰色砂質粘土層
2　黄褐色土層
3　黒色土層
4　焼土粒混入黒色土層
5　焼土層
6　ローム粒混入黒色土層

図439　D111号遺構カマド実測図

遺物出土状況　I層黒色土層、II層ローム粒混入黒色土層、III層褐色土層が堆積する。遺物はI層を中心として出土しているが稀少である。カマド内の出土が認められる。

出土遺物　遺物は、甕、坏、壺形土器がある。甕形土器は1で口唇部に特徴を有する口縁部破片である。坏形土器は2～4で、2は大きく開く体部を呈し、3、4は直線的に直立ぎみに開く形状を呈している。壺形土器は5で、長頸瓶の口縁部破片である。

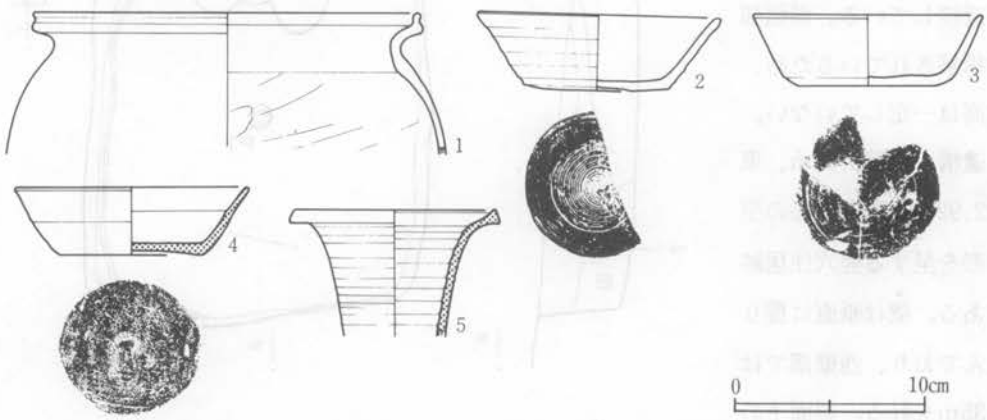


図440　D111号遺構出土遺物実測図

D111出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	(20.6)	—	1/3	ヨコナデ	砂粒	軟弱	茶褐色	
2	坏	3.5	12.2	7.7	1/3	底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	(内)茶褐色 (外)黒色	ヘラ切り
3	坏	3.7	12.2	7.4	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	糸切り
4	坏	3.95	13.0	7.8	3/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	灰褐色	糸切り
5	壺	—	(10.6)	—	口縁部1/4	—	砂粒	堅緻	灰色	

32. D112号遺構（図441～444、図版88—1・2、119、120）

III群の住居群内において中央部より少し南に寄って位置し、D144、D145が近接している。斜面部に構築されているため壁高は一定していない。

遺構　北壁3.38m、東壁2.92mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に東部では0.34m、南西部では0.75mを掘り込んでいる。直下には幅0.32m、深さ0.04mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。小ピットP_1～P_3を南壁部に検出した。P_1は径0.27m、深さ0.41m、P_2、P_3は径0.25m、深さ平均0.13mを計る。柱穴は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を0.21m掘り込んでいるが、粘土の貼り込みがまったく検出できないため、構造は不明である。

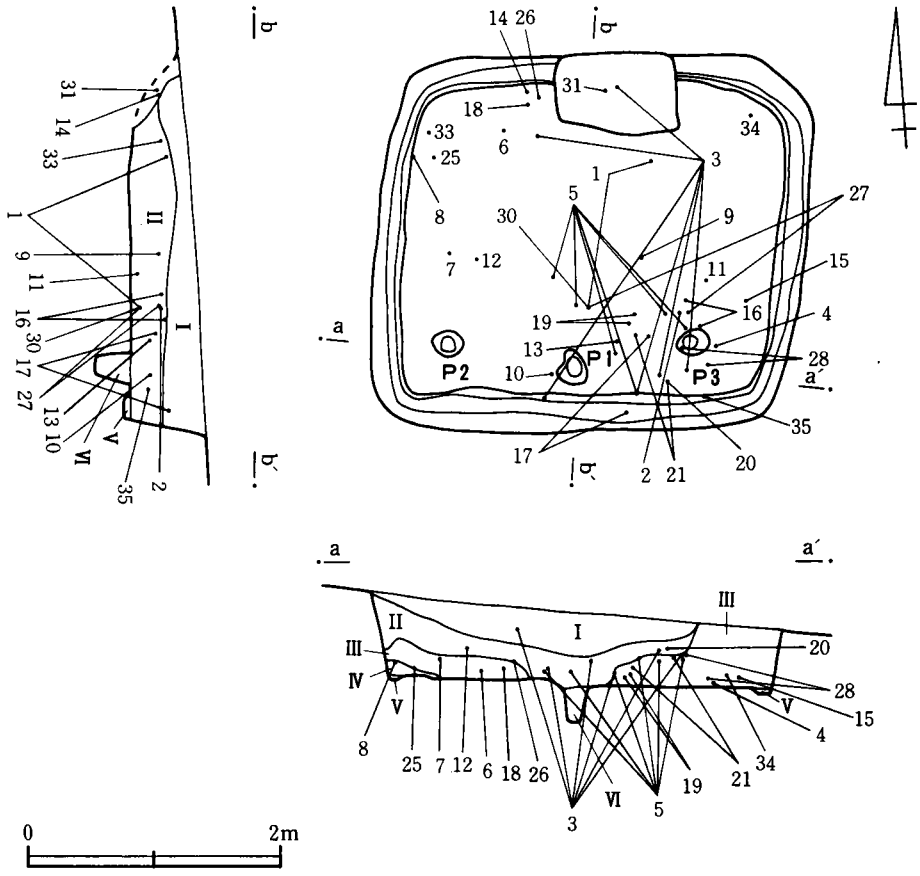
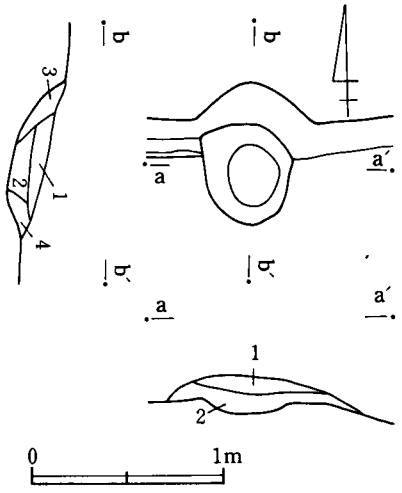


図441 D112号遺構実測図

遺物出土状況　I層ローム粒混入黒色土層、II層黒褐色土層、III層黒色土層、IV層明茶褐色土層、V層褐色土層、VI層暗茶褐色土層が堆積する。遺物はII、III層を中心に住居南東部分から多量に出土している。

出土遺物　遺物は、甕、坏、皿形土器がある。甕形土器は1～6で、1、2は口唇部に特徴のある口縁部を呈す。3は球形に近い胴部を呈す。4は口唇部が肥厚し外反が緩やかな口縁部を呈す。5は胴部に叩き目がある甕である。6はヘラ書のある底部破片である。坏形土器は7～32である。口径 12 cm 前後の7～21と、口径 15 cm 前後の7～32がある。22～24は底部破片、29～32は墨書



1　黄褐色砂質粘土粒混入黒色土層
2　黒色土層
3　黒褐色土層
4　ローム粒混入黒色土層

図442 D112号遺構カマド実測図

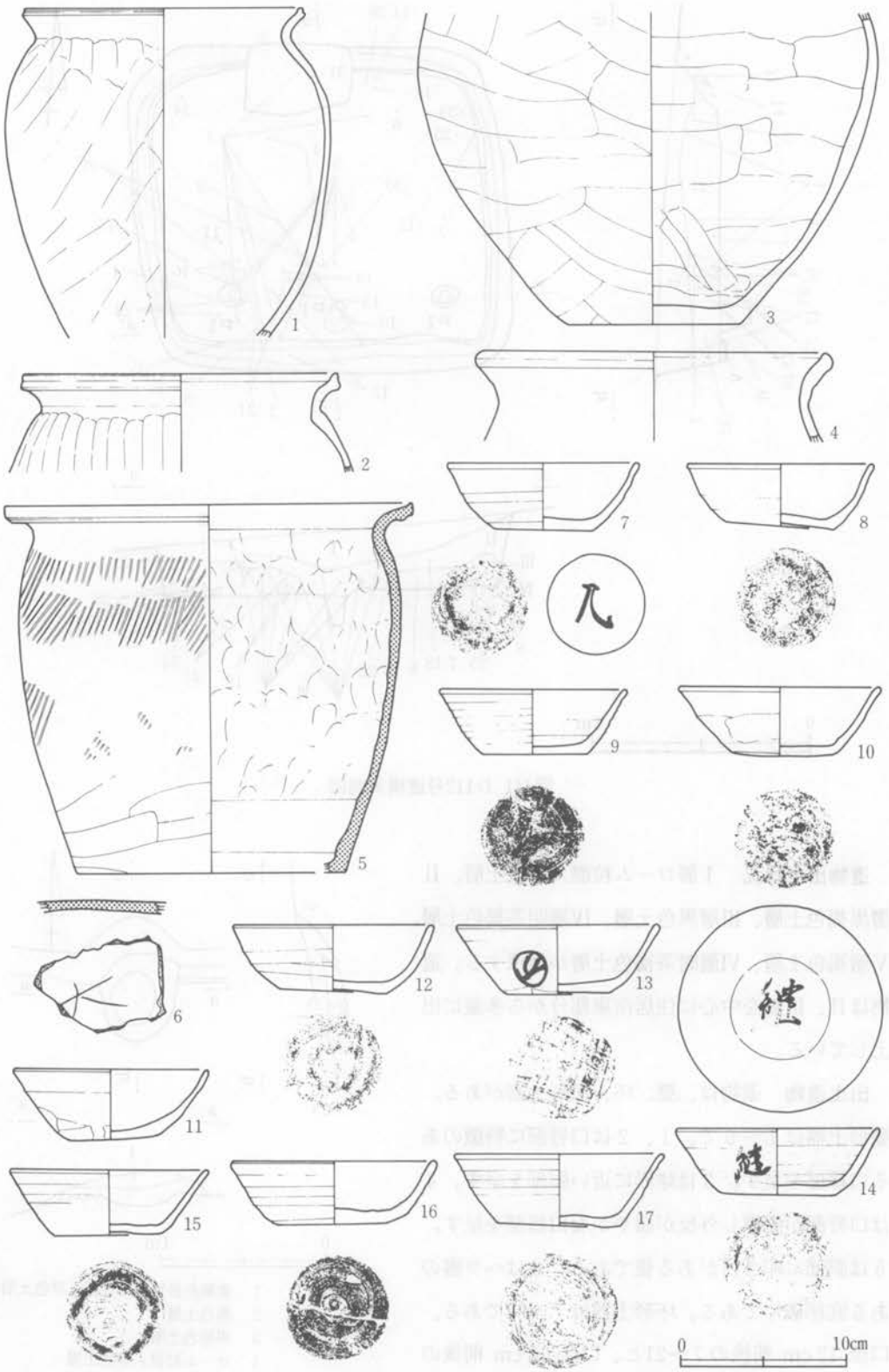


図443 D112号遺構出土遺物実測図(1)

がある破片である。皿形土器は33～35で、33、34は高台が付き、35は平底である。

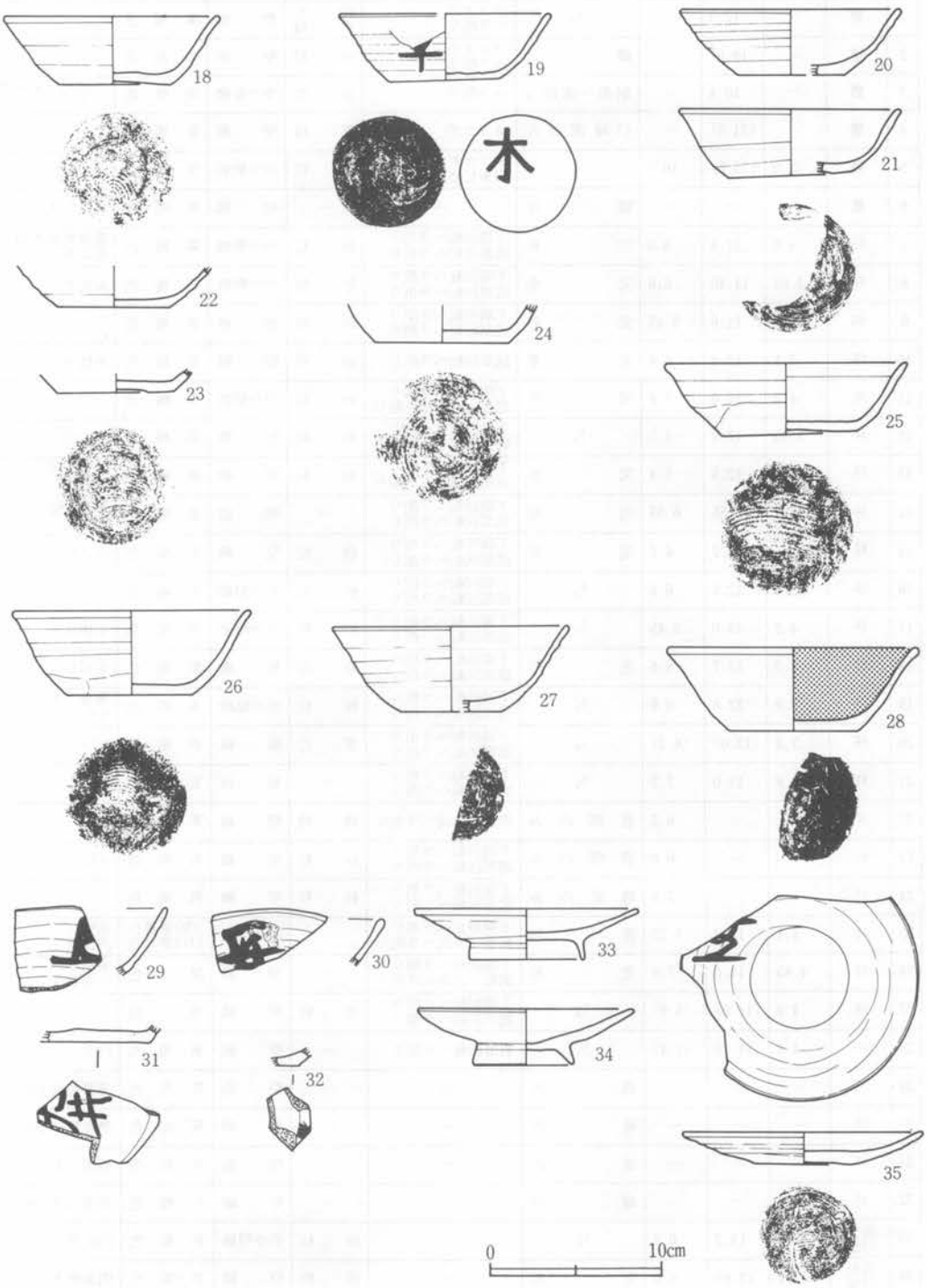


図444 D112号遺構出土遺物実測図(2)

D112出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	17.3	—	½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒 雲母	軟弱	黒褐色	
2	甕	—	(19.0)	—	破片	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
3	甕	—	10.4	—	胴部～底部½	ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	二次的に火を受ける
4	甕	—	(21.0)	—	口縁部破片	ヨコナデ	雲母	堅緻	茶褐色	
5	甕	22.0	(25.0)	16.3	½	ヨコナデ 叩きじめ、ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	灰褐色	
6	甕	—	—	—	破片	—	—	堅緻	茶褐色	線刻「大」
7	坏	4.0	11.8	6.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	墨書判読不明 糸切り
8	坏	3.65	11.45	6.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	糸切り
9	坏	3.85	11.6	6.45	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	〃
10	坏	3.1	12.4	6.4	完形	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
11	坏	4.2	12.0	5.8	完形	下端静止ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
12	坏	3.95	12.2	6.5	¾	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
13	坏	4.1	12.5	6.4	完形	下端静止ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「㊇」 糸切り
14	坏	3.9	12.55	6.95	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	墨書「継」 糸切り
15	坏	3.85	12.2	6.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
16	坏	3.75	12.6	6.6	⅔	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
17	坏	4.2	13.0	3.45	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒褐色	糸切り
18	坏	4.0	12.7	6.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	糸切り
19	坏	3.9	12.6	6.6	⅔	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	墨書「木」 糸切り
20	坏	3.8	(13.0)	(6.2)	¼	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	茶褐色	
21	坏	3.8	13.0	7.2	⅓	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	
22	坏	—	—	6.5	底部のみ	底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
23	坏	—	—	6.8	底部のみ	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
24	坏	—	—	7.8	底部のみ	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
25	坏	4.1	14.2	7.75	完形	下端静止ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	—	やや堅緻	(内)茶褐色 (外)黒色	糸切り 内面磨き
26	坏	4.85	14.0	7.4	完形	下端回転ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	—	堅緻	黒色	糸切り 内面磨き
27	坏	4.9	(14.0)	(5.9)	⅓	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	黒色	
28	坏	4.8	(14.7)	(7.4)	⅓	底部回転ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	内黒
29	坏	—	—	—	破片	—	—	堅緻	茶褐色	墨書判読不明
30	坏	—	—	—	破片	—	—	堅緻	茶褐色	墨書判読不明
31	坏	—	—	—	破片	—	—	堅緻	茶褐色	墨書「大井」
32	坏	—	—	—	破片	—	—	堅緻	茶褐色	墨書判読不明
33	高台付皿	2.9	13.2	6.8	⅔	—	砂粒	やや堅緻	茶褐色	内面磨き
34	高台付皿	3.2	12.85	6.0	完形	—	砂粒	堅緻	茶褐色	内面磨き
35	皿	1.9	14.0	5.9	⅔	底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	墨書「主」 糸切り

33. D113号遺構（図445～447、図版88－3、89－1、120）

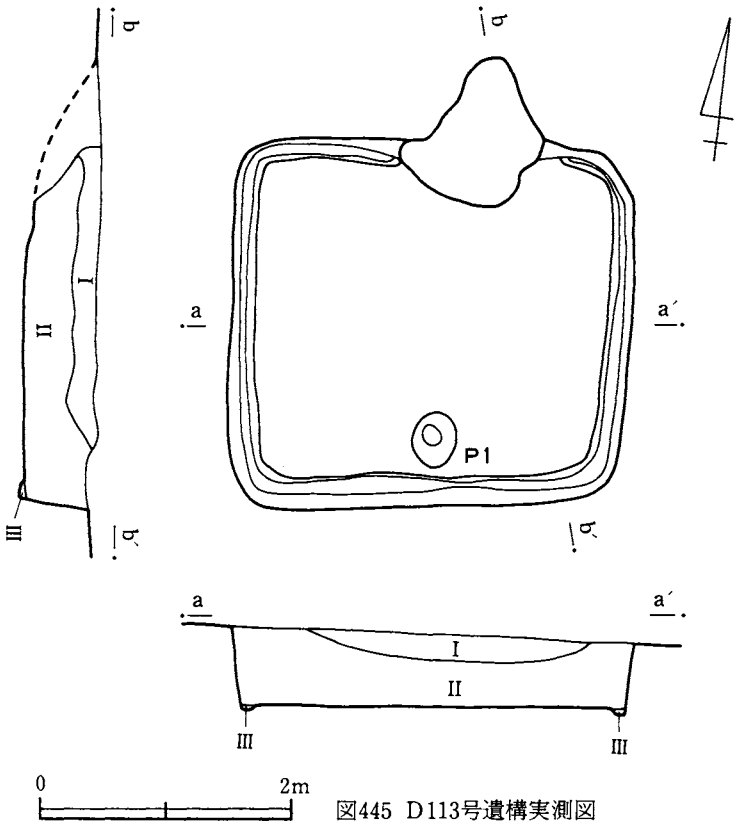


図445 D113号遺構実測図

III群の住居群内においてほぼ中央に群集する1軒で、D147、D148が近接している。緩斜面に構築されているため壁高は一定していない。

遺構 北壁3.20m、東壁2.73mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に掘り込んでおり、西壁で0.60m、東壁で0.50mを計る。壁直下には幅0.20m、深さ

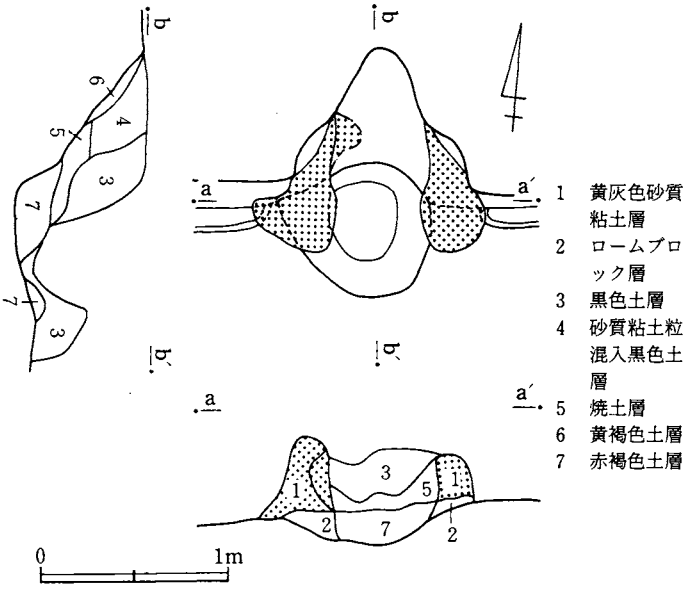


図446 D113号遺構カマド実測図

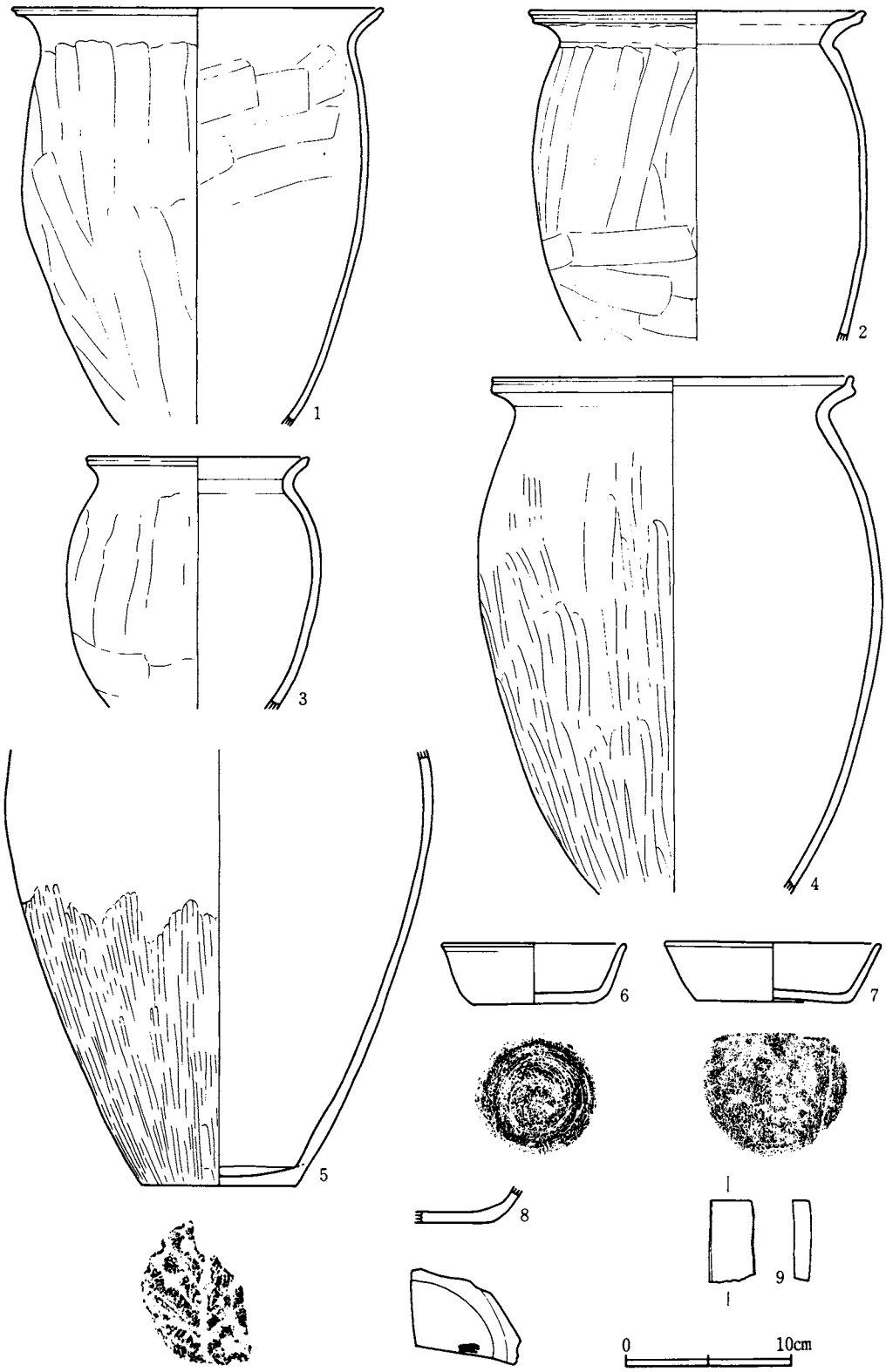


図447 D113号遺構出土遺物実測図

0.07mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。南壁中央部に近接してP_1を検出した。径0.35m、深さ0.26mを計る。柱穴は検出できなかった。

カマド　北壁中央部より若干東寄りの壁を最長0.73m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙道部まで一体化しており、火袋に相当する部分は焼土化が著しい。火床部は深さ0.07mの楕円形で、煙道部は段を有している。天井部は遺存していない。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層茶褐色土層が堆積する。遺物は覆土中に散在して出土するが小破片が多い。カマド内出土も認められる。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器と石製品がある。甕形土器は1～5で、1は「く」字状に外反する口縁を呈す。2～4は口唇部に特徴のある口縁部を呈す。4、5は条痕状の磨きが施される。坏形土器は6～8で、6、7は短かい体部が直立ぎみに開く形状を呈す。8は墨書のある底部破片である。石製品は9の凝灰岩製の砥石である。

D113出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	22.8	—	1/2	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
2	甕	—	22.6	—	2/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	黒褐色	
3	甕	—	13.5	—	2/3	ヨコナデ ヘラ削り	雲母 砂粒	軟弱	黒褐色	
4	甕	—	21.9	—	1/2	ヨコナデ ヘラ削り	雲母 砂粒	やや軟弱	茶褐色	
5	甕	—	—	9.4	1/3	磨き	砂粒 雲母	堅緻	茶褐色	木葉痕
6	坏	3.55	11.3	7.4	完形	底部回転ヘラ削り	—	やや軟弱	黒褐色	
7	坏	3.5	13.2	9.5	1/2	底部一方向ヘラ削り	—	軟弱	茶褐色	
8	坏	—	—	—	破片	—	—	堅緻	茶褐色	墨書判読不明

34. D114号遺構（図448～450、図版89—2・3、120）

III群の住居群内においてほぼ中央に群集する1軒で南側に位置し、D127が近接している。

遺構　北壁2.50m、東壁2.26mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.68m掘り込んでおり、直下に幅0.24m深さ0.08mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。

D114出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	
2	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ	雲母 砂粒	堅緻	灰色	

床面は全体に堅緻な状況を呈している。南壁中央部に近接してP_1、西壁中央部にP_2を検出した。P_1は径0.23m、深さ0.13m、P_2は0.30mで2分割して掘り込み、深さ0.15mを計る。柱穴は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を最長0.65m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖から煙出し部まで一体化している。火袋部は掘り込み内部に位置し、袖は焼土化が著しい。火床部は長径0.65mの不整な楕円形を呈し、煙道部は緩やかな傾斜を呈している。

遺物出土状況　I層ローム粒混入黒色土層、II層黒褐色土層、III層黒色土層、IV層茶褐色土層が堆積する。遺物はII、III層を中心として出土しているが、小破片が多い。カマド内出土も認められる。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器がある。甕形土器は1～5で、1は口縁部が直立し外反する。2は広口甕の破片、3、4は胴部に条痕状の磨きが施される。5は肩部下半の小形甕である。坏形土器は6、7で、6は体部が内彎ぎみに開く。7は高台を有する底部

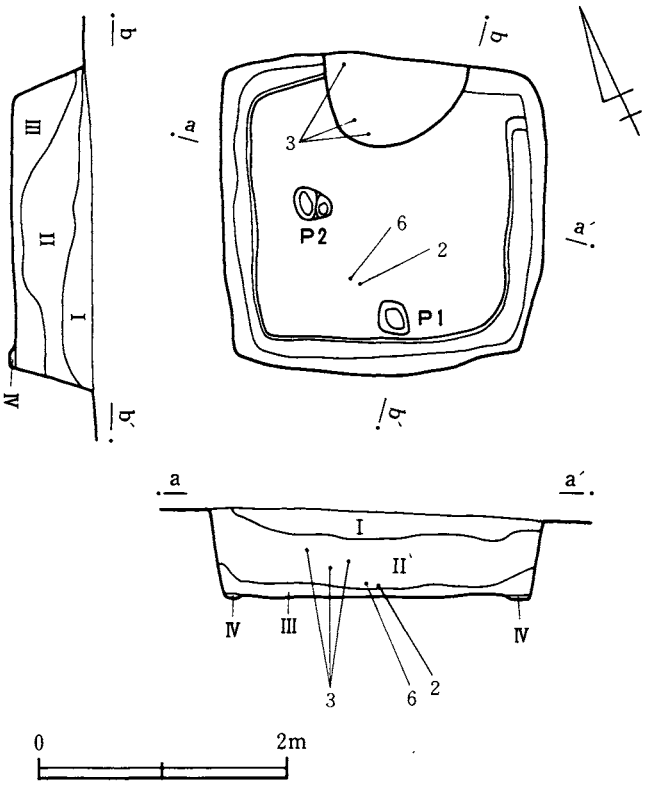


図448 D114号遺構実測図

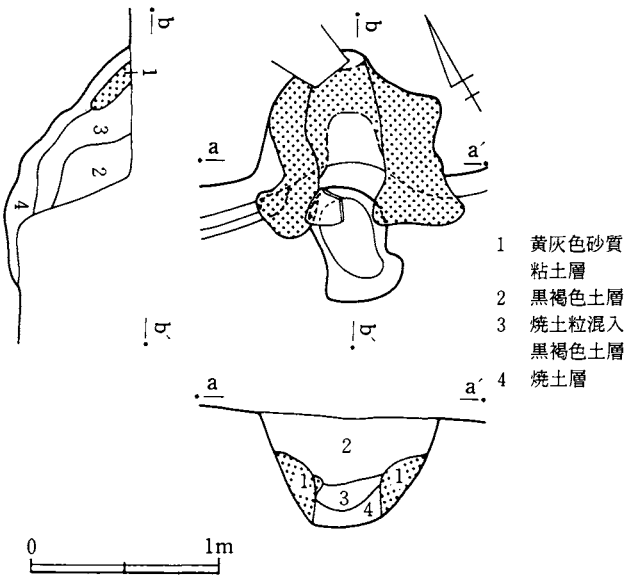


図449 D114号遺構カマド実測図

破片である。

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
3	甕	—	—	—	1/3	磨き	砂粒 雲母	やや堅緻	茶褐色	
4	甕	—	—	—	破片	磨き	砂粒 雲母	堅緻	茶褐色	
5	甕	—	—	5.75	2/3	ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
6	坏	3.98	11.6	7.8	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒 雲母	堅緻	黒褐色	糸切り
7	高台付坏	—	—	6.0	底部のみ	—	砂粒	堅緻	茶褐色	

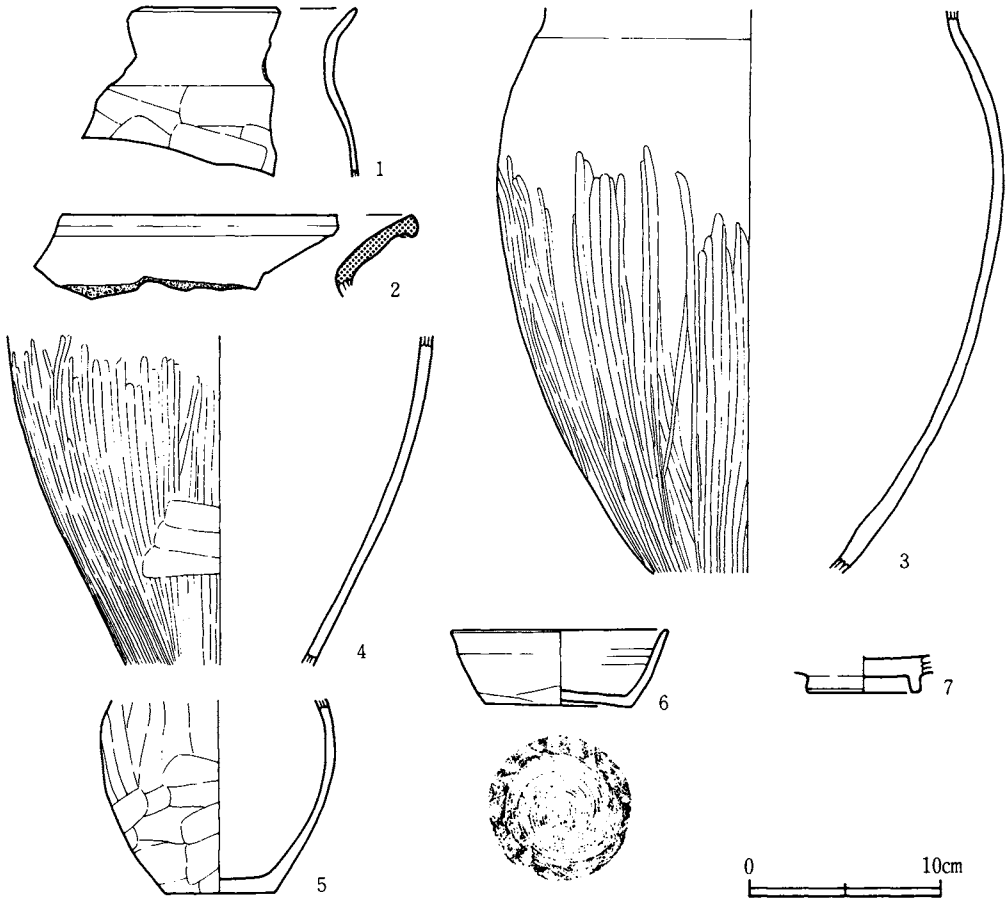


図450 D114号遺構出土遺物実測図

35. D115号遺構（図451～454、図版90－1・2、121）

III群の住居群内においてほぼ中央部に群集する1軒で東側に位置し、D106、D107、H010と纏りの考えられる遺構である。

遺構　南壁2.75m、西壁2.60mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.32m掘り込んでおり、直下には幅約0.26m、深さ0.06mの壁溝が一部変則的な部分があるもののカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。床面上に小ピットを3か所に検出したが、柱穴にはなり得ない。径0.20m前後、深さ0.08m～0.14mを計る。

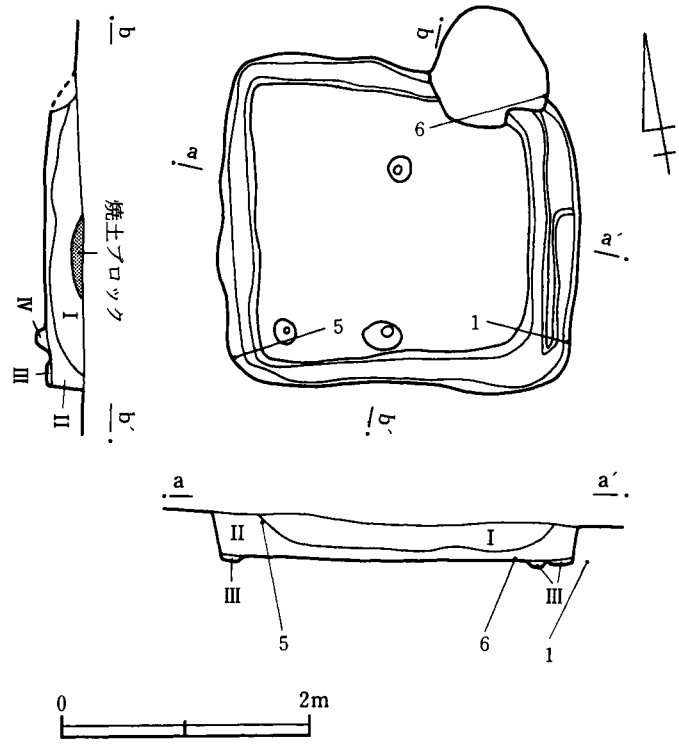
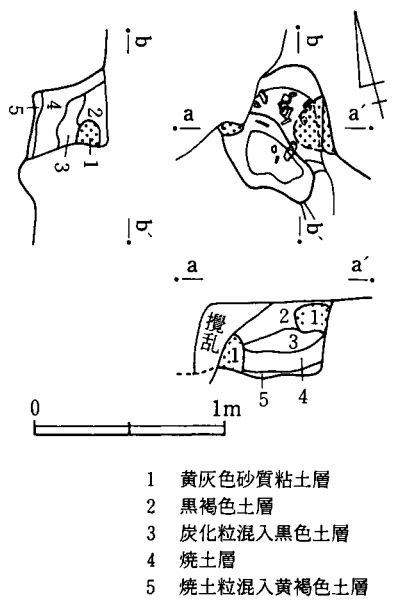


図451　D115号遺構実測図

カマド　北壁と北東壁コーナー部の2か所において検出した。旧時のカマドBは北壁中央部に構築されたものであるが攪乱を受けているため不明な点が多く、深さ0.1mを計る火床部を検出したに止った。住居廃絶時までのカマドAは北東壁コーナー部分を0.23m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。一部攪乱を受けているため遺存状況は悪く、特に左袖部では顕著である。右袖部の粘土貼り込みは掘り込み部分のみに認められるだけであり、このことをもって構造を知る手懸りにはなり得ない。



1　黄灰色砂質粘土層
2　黒褐色土層
3　炭化粒混入黒色土層
4　焼土層
5　焼土粒混入黄褐色土層

図452　D115号遺構Aカマド実測図

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層茶褐色土層、IV層暗茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上を中心として出土しているが、小破片は覆土中から出土している。

出土遺物　遺物は坏形土器のみである。1、2

は内彎ぎみに開く体部を呈している。3は深身のもので体部は直線的に開く。4は短かく体部が開く。5は上げ底風を呈し、体部は直線的に開く。6は深身で体部は内彎ぎみに開く形状を呈している。

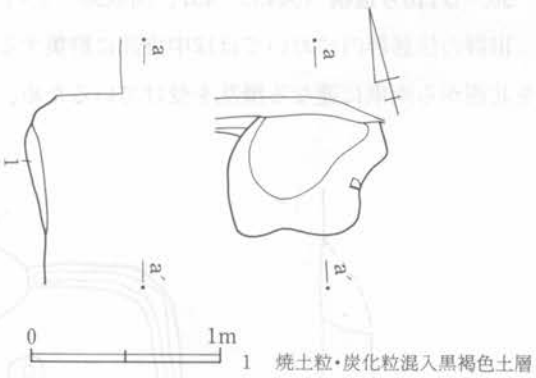


図453 D115号遺構Bカマド実測図

D115出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	坏	3.9	11.85	6.6	完形	体部ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	砂粒 雲母	やや堅緻	茶褐色	
2	坏	4.0	(12.6)	6.5	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	やや堅緻	茶褐色	
3	坏	4.55	12.6	6.6	¼	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	茶褐色	
4	坏	4.0	(13.6)	9.0	⅓	底部回転ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	糸切り
5	坏	3.8	13.25	6.7	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	糸切り
6	坏	6.0	15.6	7.8	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	灰色	糸切り

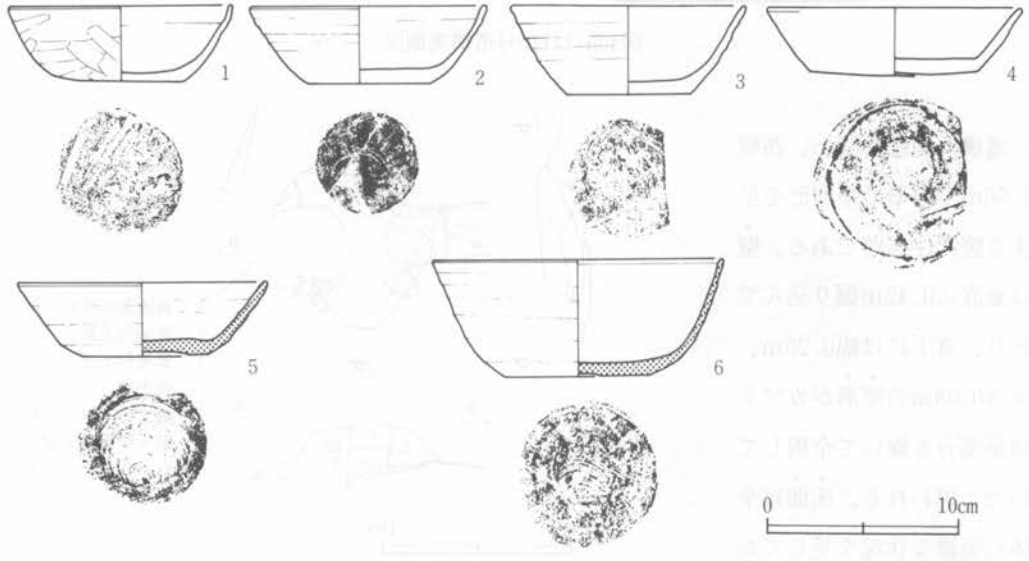


図454 D115号遺構出土遺物実測図

36. D116号遺構（図455～457、図版90－3・1、121）

III群の住居群内においてほぼ中央部に群集する1軒で、東側に位置している。遺構北東部分を北西から南東に連なる攪乱を受けているため、この部分については不明である。

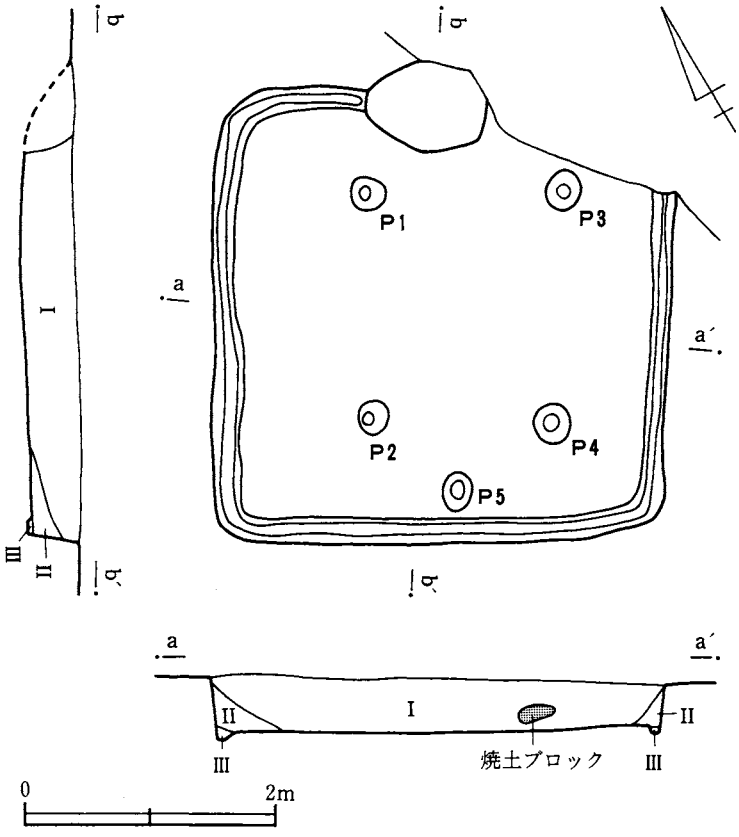


図455 D116号遺構実測図

遺構 南壁3.62m、西壁3.56mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.42m掘り込んでおり、直下には幅0.20m、深さ0.08mの壁溝がカマド構築部分を除いて全周していたと思われる。床面は全体に堅緻な状況を呈しており、特に中央部において顕

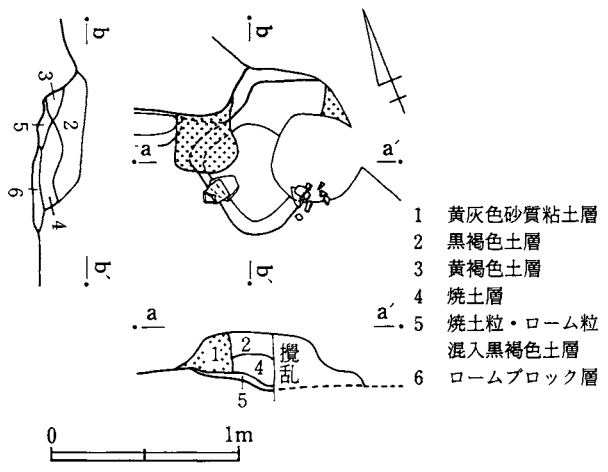


図456 D116号遺構カマド実測図

著である。柱穴はほぼ対角線上にP_1～P_4を検出したが、全体に東に寄り、規模も小さく、掘り込みも深くないため柱穴としての機能を有していたか疑問である。その他、ピットは南壁中央部に近接して小ピットP_5を検出した。径0.30m、深さ0.14mを計る。

カマド　北壁中央部に構築されているが、右側半分が溝による攪乱を受けているため、全体を充分把握できる状況でない。火床部は深さ0.04mの浅い掘り込みを呈している。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層黒色土層、III層ローム粒混入黒褐色土層が堆積する。遺物は床面上を中心として出土しているが量は少ない。カマド内出土も認められる。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器がある。甕形土器は1～3で、1、2は口唇部に特徴のある口縁部である。3は肩部下半の小甕形である。坏形土器は4～8で、口径12cm前後の4～5と、口径15cm前後の8がある。

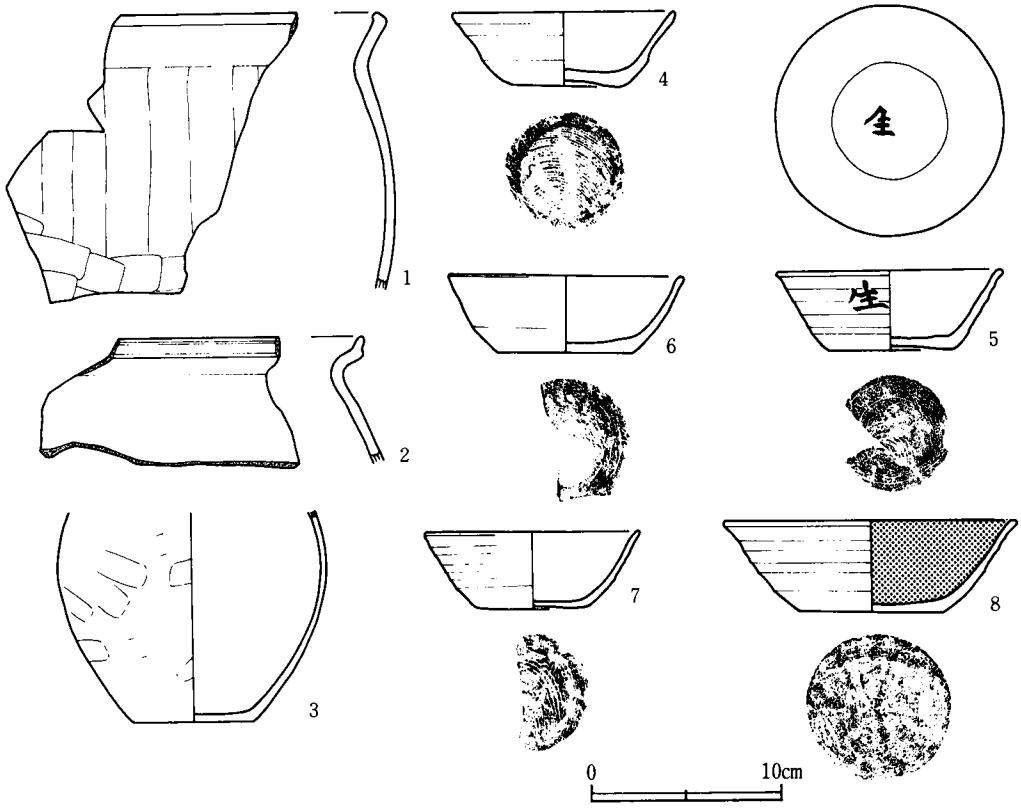


図457　D116号遺構出土遺物実測図

D116出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
2	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	
3	甕	—	—	6.4	½	ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
4	坏	3.8	12.0	5.7	⅓	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
5	坏	4.05	(12.0)	6.6	⅓	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	墨書「生」 糸切り
6	坏	3.9	(12.6)	(7.3)	⅓	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	
7	坏	3.95	(11.6)	6.0	⅓	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	糸切り
8	坏	4.65	(15.6)	7.7	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	内黒

37. D123号遺構（図458～460、図版91—2・3）

III群の住居群内においてほぼ中央に位置し、D091、D135が近接している。遺構の大半は北西から南東に連なる溝によって切断されているため、全体の状況を充分把握することができない。

遺構　東壁は2.70mを計るものの他壁は欠落しており明らかでないが、カマドあるいは東壁の状況より判断すれば、他壁とほぼ規模が同じであったと考えて差し支えないであろう。壁はほぼ垂直に0.25m掘り込んでおり、直下には幅0.22m、深さ0.05mの壁溝が認められ全周していたと思われる。床面は遺存する部分は堅緻な状況を呈しており、全体におよんでいたと思われる。柱穴は検出できなかった。

カマド　北壁中央部より東に寄って位置すると思われ、壁を0.40m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙道部に認められる程度で、天井部は遺存しない。火袋に相当する袖は焼土化が著しい。火床部は長径0.7mの楕円形で、煙道部は緩やかな傾斜を呈している。

遺物出土状況　I層粘土粒混入黒褐色土層、II層黒褐色土層、III層褐色土

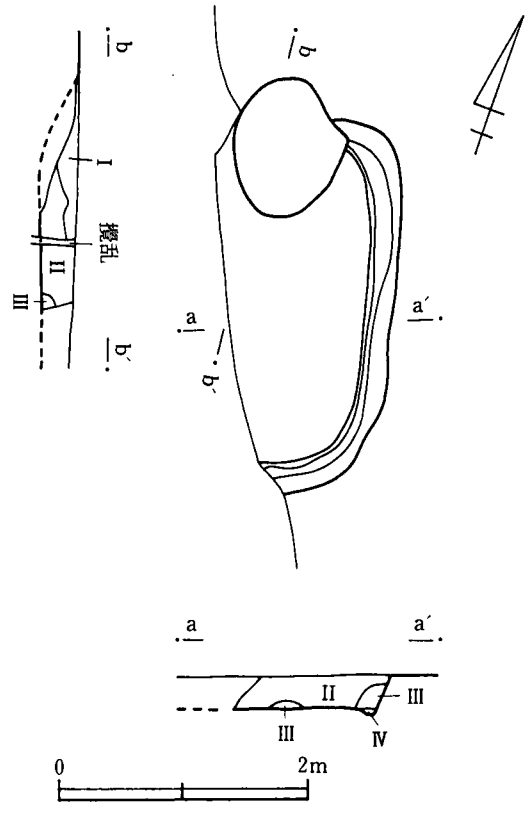


図458　D123号遺構実測図

層、IV層茶褐色土層が堆積する。遺物はⅠ、Ⅱ層を中心として出土している。

出土遺物　遺物は、壺、坏、皿形土器がある。壺形土器は1の短頸壺である。坏形土器は2で体部が大きく開く形状を呈している。皿形土器は3、4でいずれも高台付で体部は大きく開く。

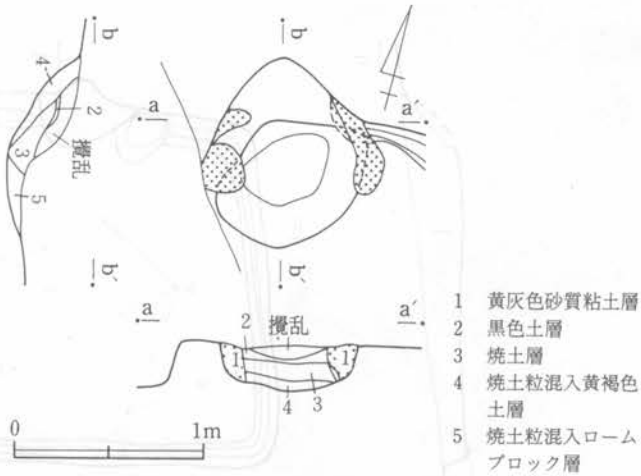


図459　D123号遺構カマド実測図

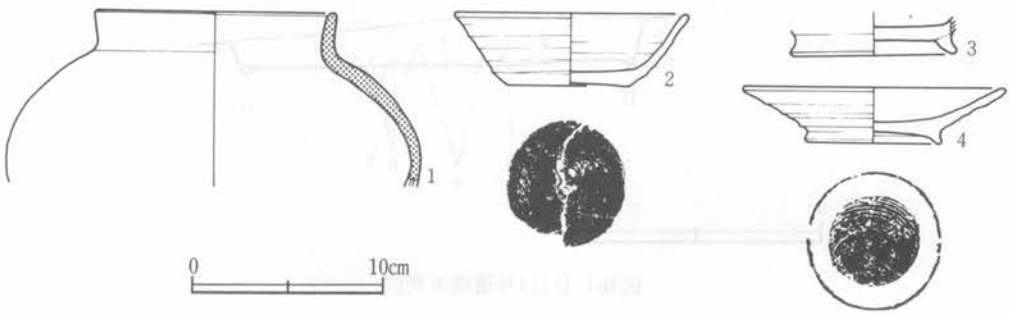


図460　D123号遺構出土遺物実測図

D123出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	壺	—	(12.8)	—	¼	—	砂粒	堅緻	灰色	
2	坏	3.7	12.55	6.55	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
3	高台付皿	—	—	(8.8)	高台部のみ	—	砂粒	堅緻	茶褐色	内面磨き
4	高台付皿	2.9	14.0	7.2	½	—	砂粒 雲母	やや堅緻	茶褐色	糸切り 内面磨き

38. D124号遺構（図461～463、図版92—1・2、121）

Ⅲ群の住居群内において最も南に位置し、D125、D126、D128、D129と纏りの考えられる遺構である。斜面部に構築されている関係で壁高は一定しない。

遺構　北壁2.80m、西壁3.20mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に西壁部で0.45m、東壁部で0.15mを掘り込んでおり、直下には幅0.18m、深さ0.07mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は中央部が堅緻な状況を呈しているが、壁周辺部分では

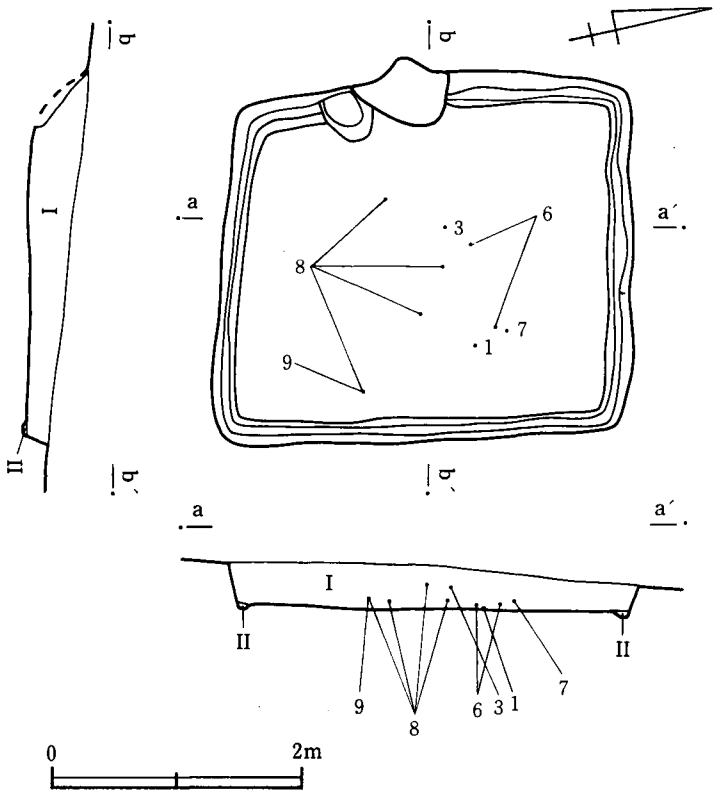


図461 D124号遺構実測図

やや軟弱な状況を呈している。柱穴は検出できなかった。

カマド　西壁中央部を0.55m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。掘り込みは2段になっており、粘土の貼り込みは上段部分に認められる程度で全体として充分構造を知り得る状況は呈していない。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上を中心として出土しており、カマド内の出土もある。

出土遺物　遺物は、甕、坏、鉢形土器がある。甕形土器は1、2で、1は口唇部に特徴のある口縁部破片、2は底部破片である。坏形土器は口径 12 cm 前後の3～5と、口径 15 cm 前後

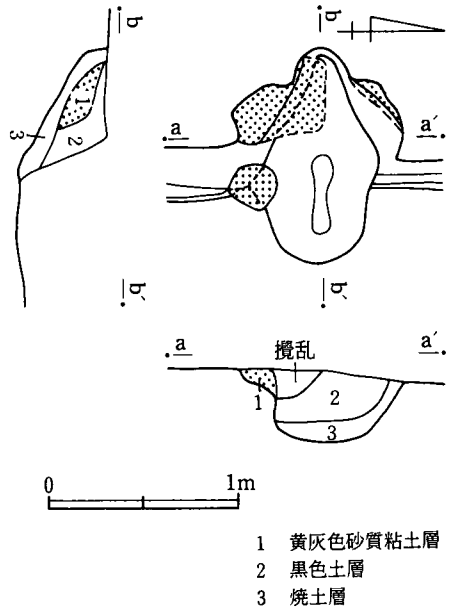


図462 D124号遺構カマド実測図

の6～8がある。8は高台付である。9は墨書のある体部破片である。鉢形土器は10で、大形の坏のような形状を呈す。

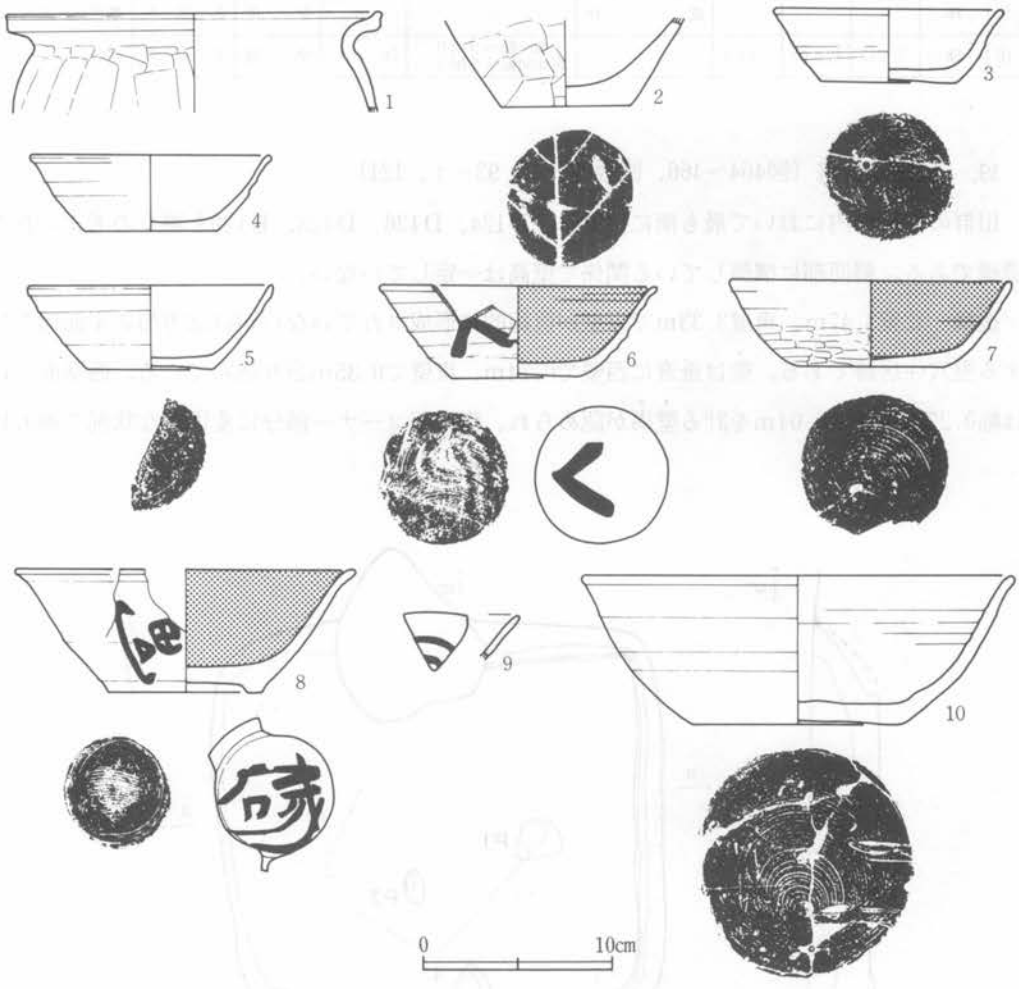


図463 D124号遺構出土遺物実測図

D124出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	—	(20.0)	—	口縁部のみ	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
2	甕	—	—	6.8	底部のみ	ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	木葉痕
3	坏	3.9	12.0	7.2	完形	—	砂粒	やや堅緻	茶褐色	糸切り
4	坏	3.9	(12.8)	(7.0)	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	茶褐色	
5	坏	4.4	(13.0)	(6.6)	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒 雲母	堅緻	茶褐色	
6	坏	4.8	14.85	6.8	完形	下端回転ヘラ削り	雲母 砂粒	堅緻	黒褐色	墨書「へ」 糸切り、内黒
7	坏	4.5	(15.0)	7.6	1/2	体部ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母 砂粒	堅緻	黒褐色	糸切り、内黒

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
8	坏	6.4	(18.0)	(8.1)	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「冨」、「磯」、内黒、糸切り
9	坏	—	—	—	破片	—	—	堅緻	茶褐色	墨書判読不明
10	鉢	7.7	(23.0)	11.2	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り

39. D125号遺構（図464～466、図版92—3、93—1、121）

III群の住居群内において最も南に位置し、D124、D126、D128、D129と纏りの考えられる遺構である。斜面部に構築している関係で壁高は一定していない。

遺構　北壁3.47m、東壁3.33mで東壁が直線的に形成されていないがほぼ方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に西壁で0.74m、東壁で0.35m掘り込んでいる。西壁直下には幅0.22m、深さ0.04mを計る壁溝が認められ、南東壁コーナー部分に変則的な状況で幅0.12

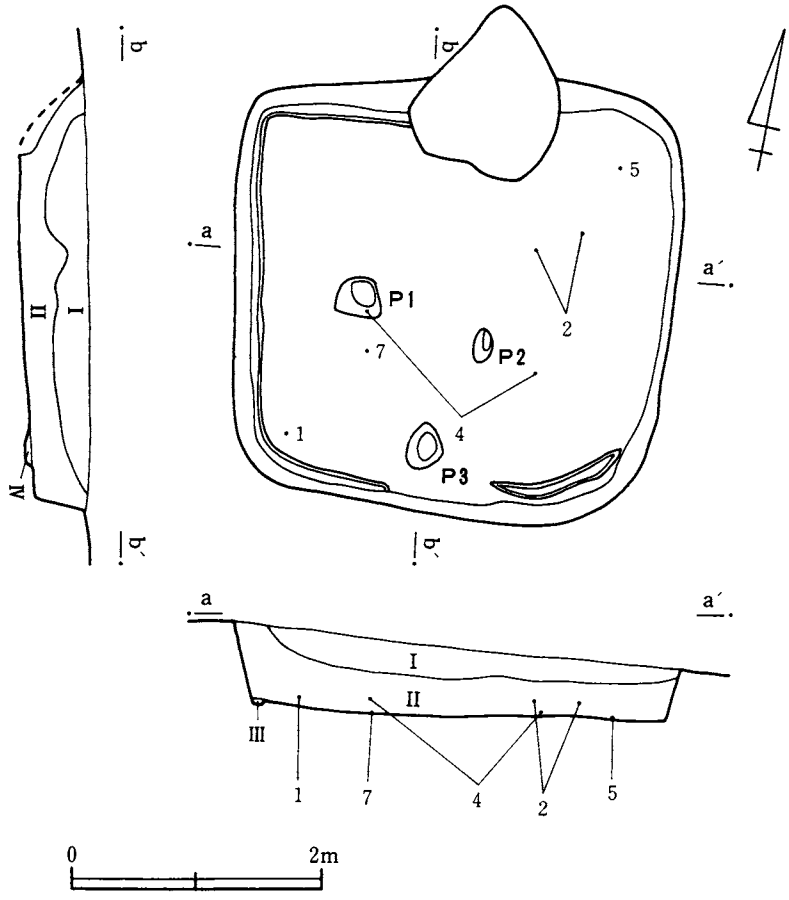
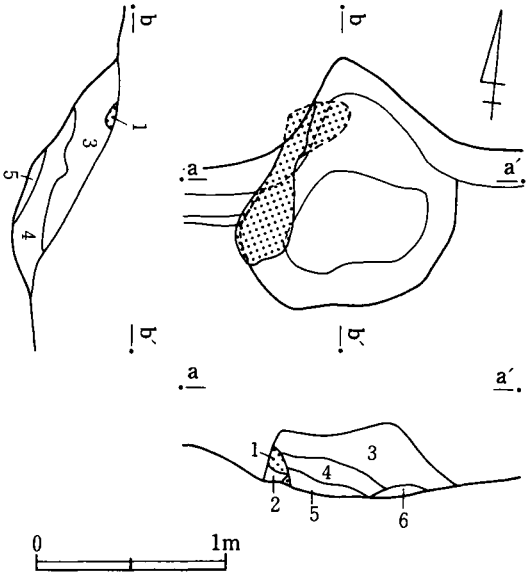


図464 D125号遺構実測図

m、深さ0.04mの溝が認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈する。柱穴は検出できなかったが、小ピットP_1～P_3を検出した。P_1は径0.32m、深さ0.17m、P_2は径0.24m、深さ0.40m、P_3は径0.33m、深さ0.15mをそれぞれ計る。

カマド　北壁ほぼ中央部を0.54m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは左袖が煙道部まで認められるものの、右袖部分には粘土の貼り込みは施されていない。全体として遺存状況は良好でない。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層茶褐色土層、Ⅳ層暗褐色土層が堆積する。遺物は床面上を中心として出土し、カマド内出土も認められる。また、1、2、4はD126出土の土器と接合復元できた資料である。



1　黄灰色砂質粘土層
2　黒褐色土層
3　黒色土層
4　焼土層
5　焼土粒混入黒褐色土層
6　ロームブロック層

図465　D125号遺構カマド実測図

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器がある。甕形土器は1～5で、1は緩やかに外反する口縁部を呈す。2は口唇部に特徴のある口縁部を呈す。3は底部破片である。4、5は胴部に叩き目がある広口甕である。坏形土器は6～8で、いずれも口径12cm前後のものである。

D125出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	19.9	—	⅓	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒 雲母	やや軟弱	茶褐色	
2	甕	29.7	21.4	(7.4)	½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒 雲母	堅緻	茶褐色	
3	甕	—	—	6.0	底部のみ	ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
4	甕	—	22.75	—	口縁部～頸部½	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
5	甕	—	—	15.35	ほぼ完形	ヨコナデ、叩きじめ ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	灰褐色	
6	坏	4.15	12.0	7.4	½	下端静止ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	雲母 砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
7	坏	4.05	12.2	7.85	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母 砂粒	やや堅緻	茶褐色	糸切り
8	坏	4.5	11.4	5.8	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書判読不明

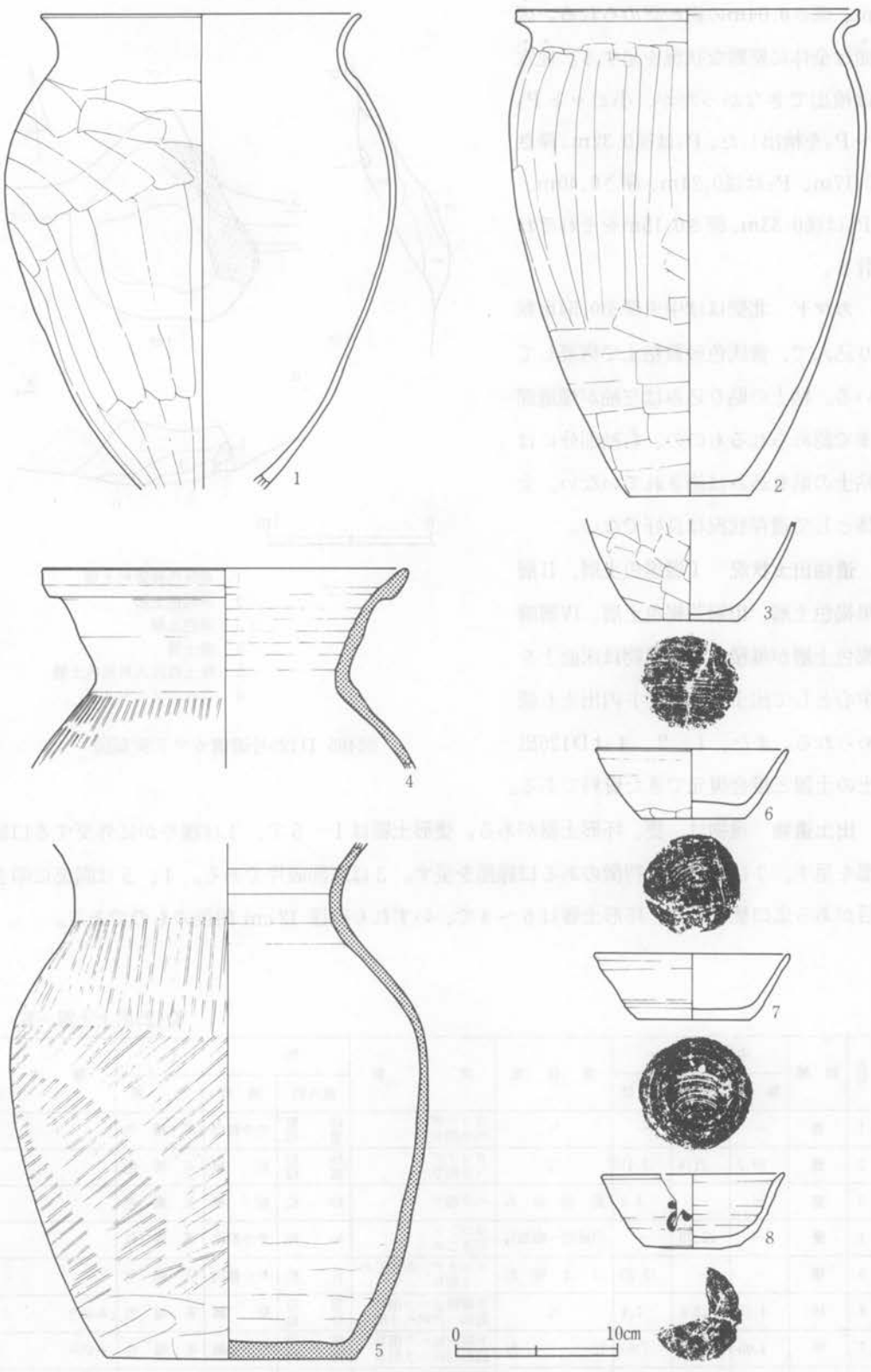


図466 D125号遺構出土遺物実測図

40. D126遺構（図467～469、図版93－2・3）

III群の住居群内において最も南に位置し、D124、D125、D128、D129と纏りの考えられる遺構である。斜面部に構築している関係で壁高は一定してしない。

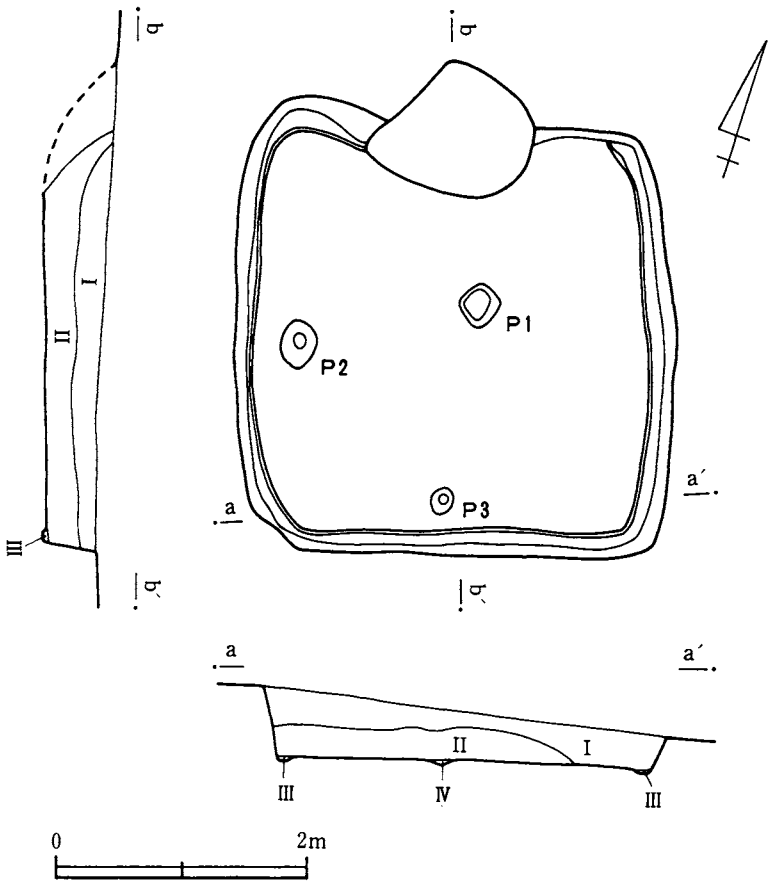
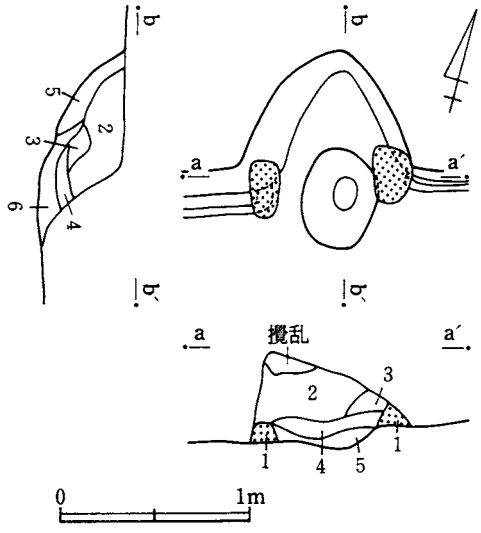


図467 D126号遺構実測図

遺構 北壁3.16m、東壁3.30mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に西壁で0.57m、東壁で0.17m掘り込んでいる。直下には幅0.22m、深さ0.05mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。ピットを3か所に検出した。P_1はカマド前方部にあり径0.30m、深さ0.17m、P_2は西壁部分に近接し径0.28m、深さ0.21m、P_3は南壁部分に近接し径0.16m、深さ0.22mをそれぞれ計る。いずれも配置から見れば柱穴にはなり得ない。

カマド 北壁中央部を三角形に最長0.63m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。遺存状況は非常に悪く、粘土の貼り込みは掘り込み部において若干認められるのみであり、構造は充分に把握できない。火床部は壁掘り込み部分に位置し、深さ0.03mの浅い擂鉢状の掘り込



1 黄灰色砂質粘土層
2 黒色土層
3 砂質粘土ブロック層
(天井部の落ち込み層)
4 焼土層
5 黒褐色土層
6 焼土粒混入黄褐色土層

図468 D126号遺構カマド実測図

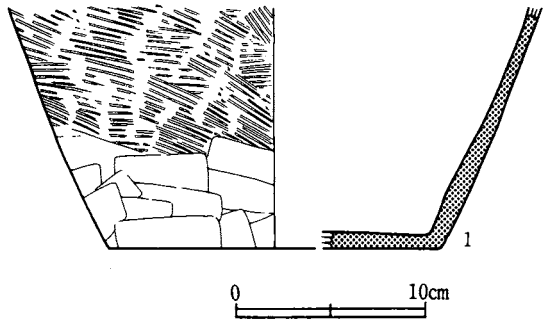


図469 D126号遺構出土遺物実測図

みを呈している。

遺物出土状況 Ⅰ層黒褐色土層、Ⅱ層ローム粒混入黒褐色土層、Ⅲ層茶褐色土層、Ⅳ層暗茶褐色土層が堆積する。遺物は小片が大部分であり、Ⅰ、Ⅱ層を中心として出土しているが、図示できるものは少ない。D125出土遺物と接合復元できた資料もある。

出土遺物 遺物は稀少で図示できるものは1点のみである。1は胴部に叩き目がある広口甕の胴部下半である。

D126出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	(17.6)	破片	叩きじめ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	灰色	

41. D127号遺構（図470～472、図版94－1・2）

Ⅲ層の住居群内において南側に位置し、D114が近接している。斜面部に構築している関係で壁高は一定していない。

遺構 北壁3.35m、東壁3.44mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に西壁で0.55m、東壁で0.30m掘り込んでいる。直下には幅0.22m、深さ0.06mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。南壁中央部に近接して小ピットP_1を検出した。径0.35m、深さ0.25mを計る。柱穴は検出できなかった。

カマド 北壁中央部を0.22mを掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土は2層上に袖部から煙出し部まで一体化して貼り込んでおり、煙出し部分には天井部の一部が遺存して

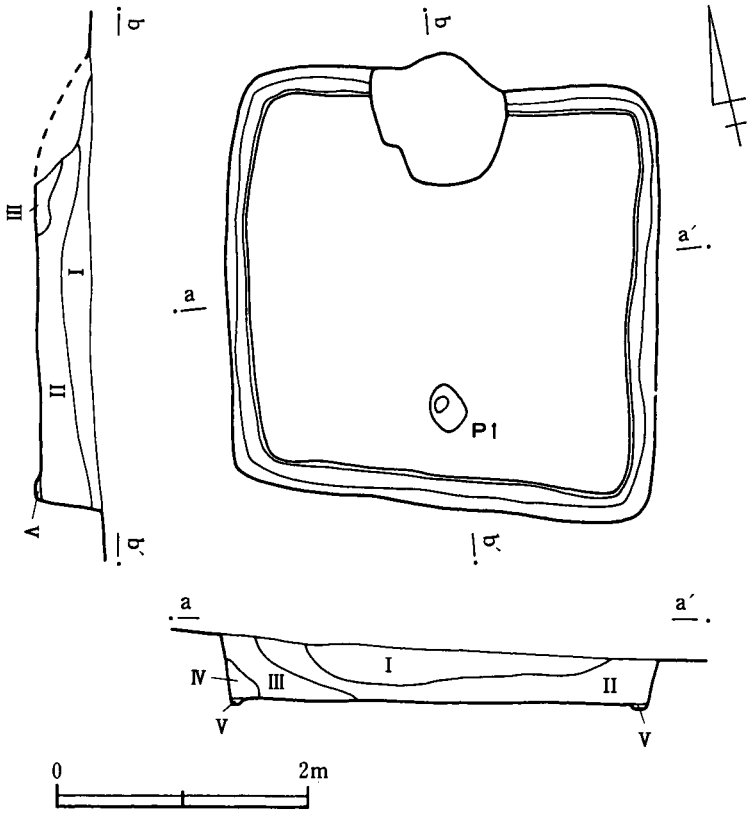


図470 D127号遺構実測図

いる。火袋部に相当する袖は焼土化が著しい。火床部は深さ0.19mの擂鉢状で、煙道部はやや急激な傾斜を呈している。

遺物出土状況 I層黒褐色土層、II層ローム粒混入黒褐色土層、III層暗茶褐色土層、IV層褐色土層、V層茶褐色土層が

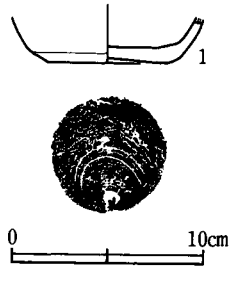
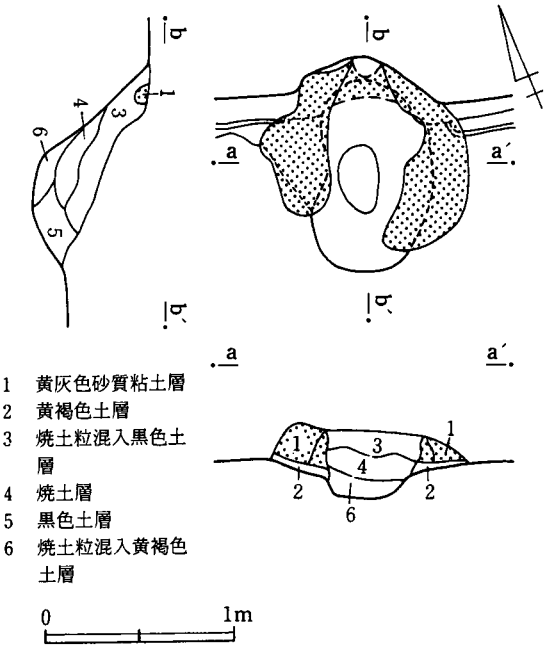


図472 D127号遺構出土遺物実測図



1 黄灰色砂質粘土層
2 黄褐色土層
3 焼土粒混入黒色土層
4 焼土層
5 黒色土層
6 焼土粒混入黄褐色土層

図471 D127号遺構カマド実測図

堆積する。遺物は覆土中からの出土は皆無で、若干カマド内より出土する程度である。

出土遺物　遺物は稀少で図示できるものは坏形土器1点である。1は若干上げ底風を呈する底部の破片である。

D127出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	坏	—	—	6.0	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	軟弱	橙褐色	

42. D128号遺構（図473～475、図版94—3、95—1、121、122）

III群の住居群内において最も南に位置し、D124、D125、D126、D129と纏りの考えられる遺構である。斜面部に構築している関係で壁高は一定していない。

遺構　北壁2.43m、東壁2.86mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に西壁で0.66m、東壁0.48m掘り込んでいる。直下には幅0.22m、深さ0.06mの壁溝がカマド構築部分と北東壁コーナー部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を0.24m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは右袖の一部に認められるだけで、全体に遺存状況が悪く、構造は充分把握することができない。火床部は深さ0.08mの楕円形で煙道部は急激な傾斜を呈している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層ローム粒混入黒褐色土層、IV層茶褐色土層が堆積する。遺物は床面中央部に集中して出土しているが、稀少である。カマド内出土も認められる。

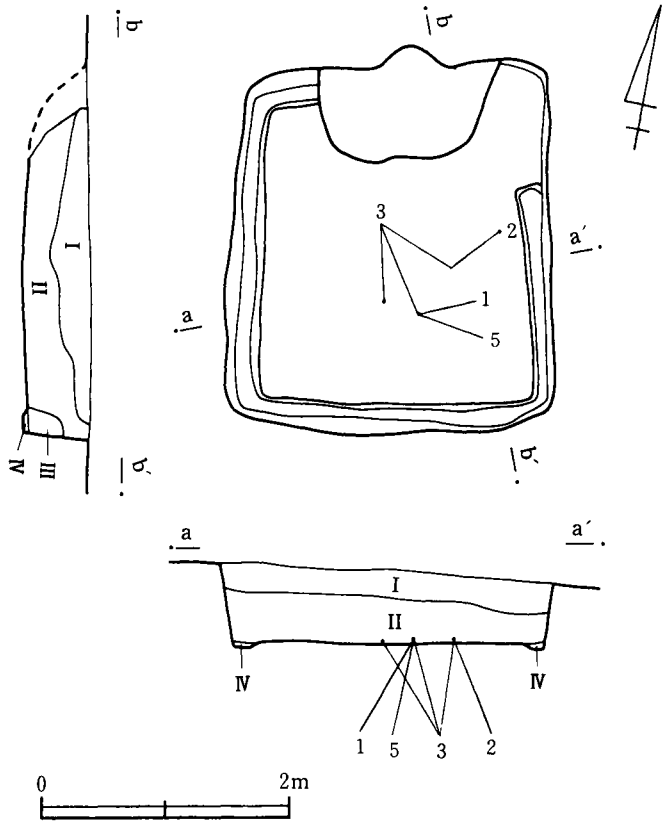


図473　D128号遺構実測図

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器がある。甕形土器は1～4で、1は屈曲度の強い口縁部を呈す。2は口縁部が短かく、しかも直立ぎみに開く形状を呈している。3、4は底部破片である。坏形土器は5で、体部は直線的に開く形状を呈している。

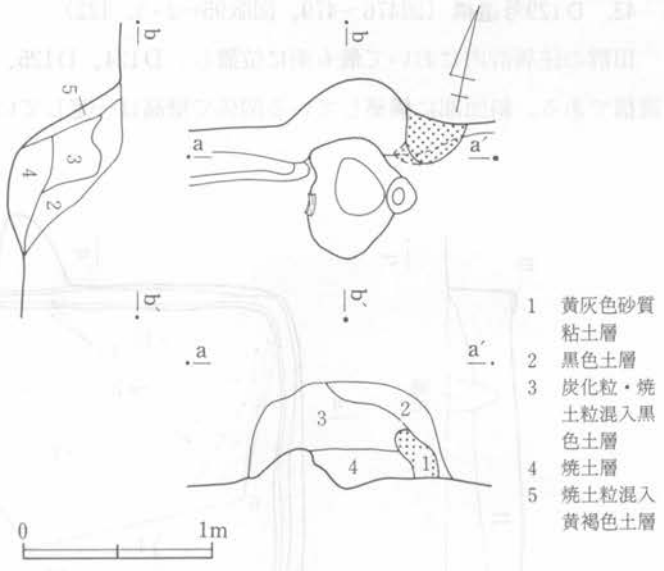


図474　D128号遺構カマド実測図

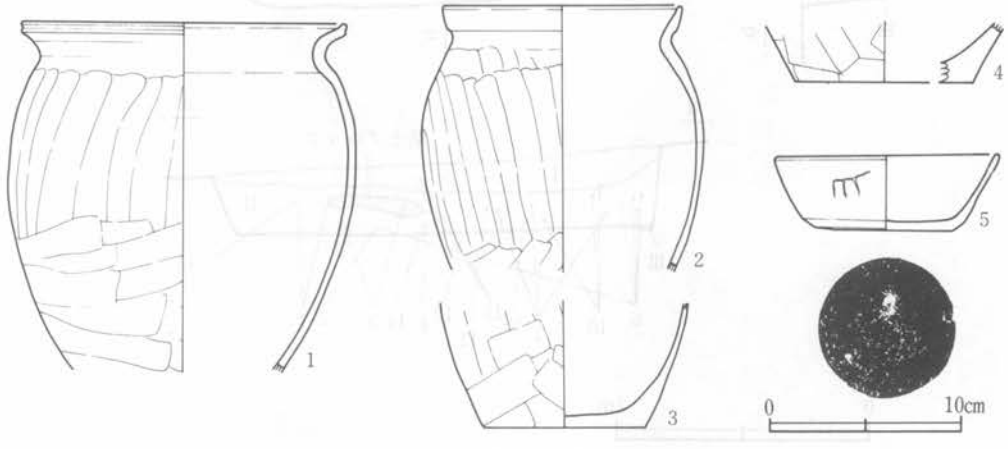


図475　D128号遺構出土遺物実測図

D128出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	—	17.2	—	1/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	赤褐色	
2	甕	—	12.8	—	1/4	ヨコナデ ヘラ削り	雲母	やや軟弱	黒褐色	
3	甕	—	—	8.6	底部のみ	ヘラ削り	雲母 砂粒	堅緻	褐色	
4	甕	—	—	(11.4)	底部のみ	ヘラ削り	—	堅緻	(内)橙褐色 (外)褐色	
5	坏	4.0	12.0	6.3	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	線刻判読不明

43. D129号遺構（図476～479、図版95—2・3、122）

III群の住居群内において最も南に位置し、D124、D125、D126、D128と纏りの考えられる遺構である。斜面部に構築している関係で壁高は一定していない。

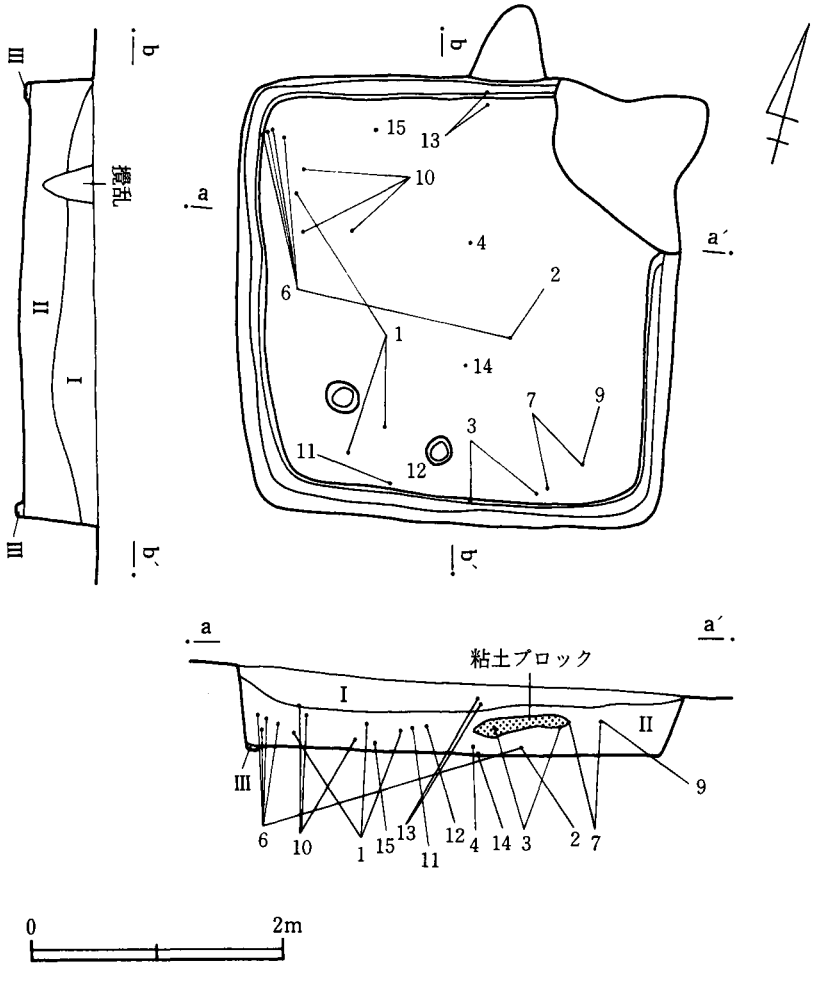


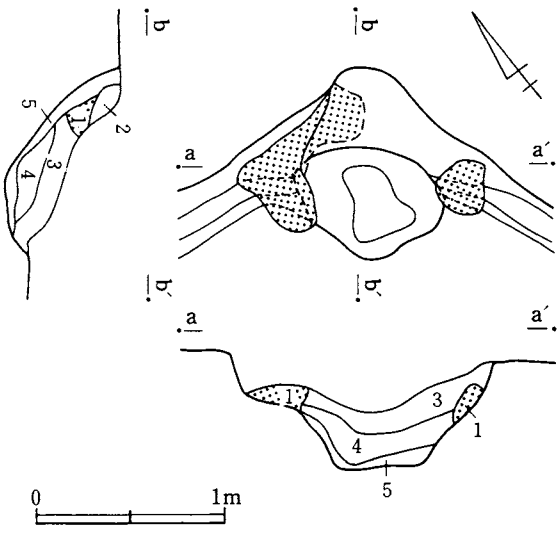
図476 D129号遺構実測図

D129出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	12.7	(12.8)	5.4	⅔	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	(内)褐色 (外)暗褐色	
2	甕	8.3	(10.1)	4.6	½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	軟弱	(内)赤褐色 (外)褐色	二次的に火を受ける
3	甕	—	(10.5)	—	口縁部～胴部⅓	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒 雲母	堅緻	茶褐色	
4	甕	—	(11.2)	—	口縁部～胴部½	—	砂粒	堅緻	褐色	
5	甕	—	(19.6)	—	口縁部～胴部⅓	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	赤褐色	

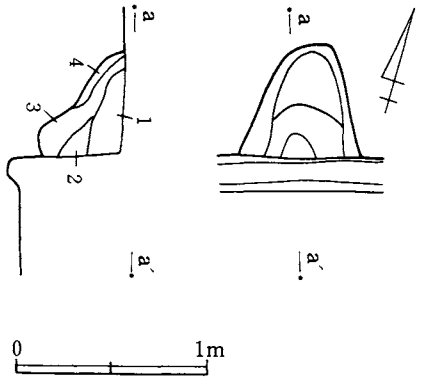
遺構　西壁3.38m、南壁3.26mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に西壁で0.68m、東壁で0.47m掘り込んでいる。直下には幅0.20m、深さ0.05mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈する。小ピットを2か所において検出したが、規模は小さく、また、配置からも柱穴にはなり得ない。

カマド　北壁と北東壁コーナー部分の2か所に検出した。旧時のカマドBは、北壁中央部より若干東に偏しているが、修改築によって取り毀しているため、掘り込みの一部が検出できた程度であり、構造については不明である。住居廃絶時まで使用していたカマドAは、北東壁コーナー部分を利用しているため掘り込みはほとんど認められないが、黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土の貼り込みは袖部と煙道部の一部に認められるものの、天井部は遺存していない。火床部は歪を生じており、煙出しは長軸上に位置していない。



1　黄灰色砂質粘土層
2　ローム粒混入黒褐色土層
3　黒褐色土層
4　焼土層
5　焼土粒混入黄褐色土層

図477　D129号遺構Aカマド実測図



1　黒色土層
2　焼土粒混入黒色土層
3　焼土層
4　焼土粒混入黄褐色土層

図478　D129号遺構Bカマド実測図

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上出土のものは少ない。II層を中心として出土している。カマド内出土も認められる。

出土遺物　遺物は、甕、鉢、高坏、坏形土器と鉄製品がある。甕形土器は1～9で、1～4は小形甕、8、9はその底部である。5は口唇部に特徴を有する口縁部破片である。6は緩やかに外反する口縁部を呈す。7はナデで調整する胴部である。鉢形土器は10で、口縁部は短かく外反し、胴部は若干肩部に張りを有している。高坏形土器は11で脚部の破片である。坏形土器は12～14で口径12cm前後のものである。14は墨書

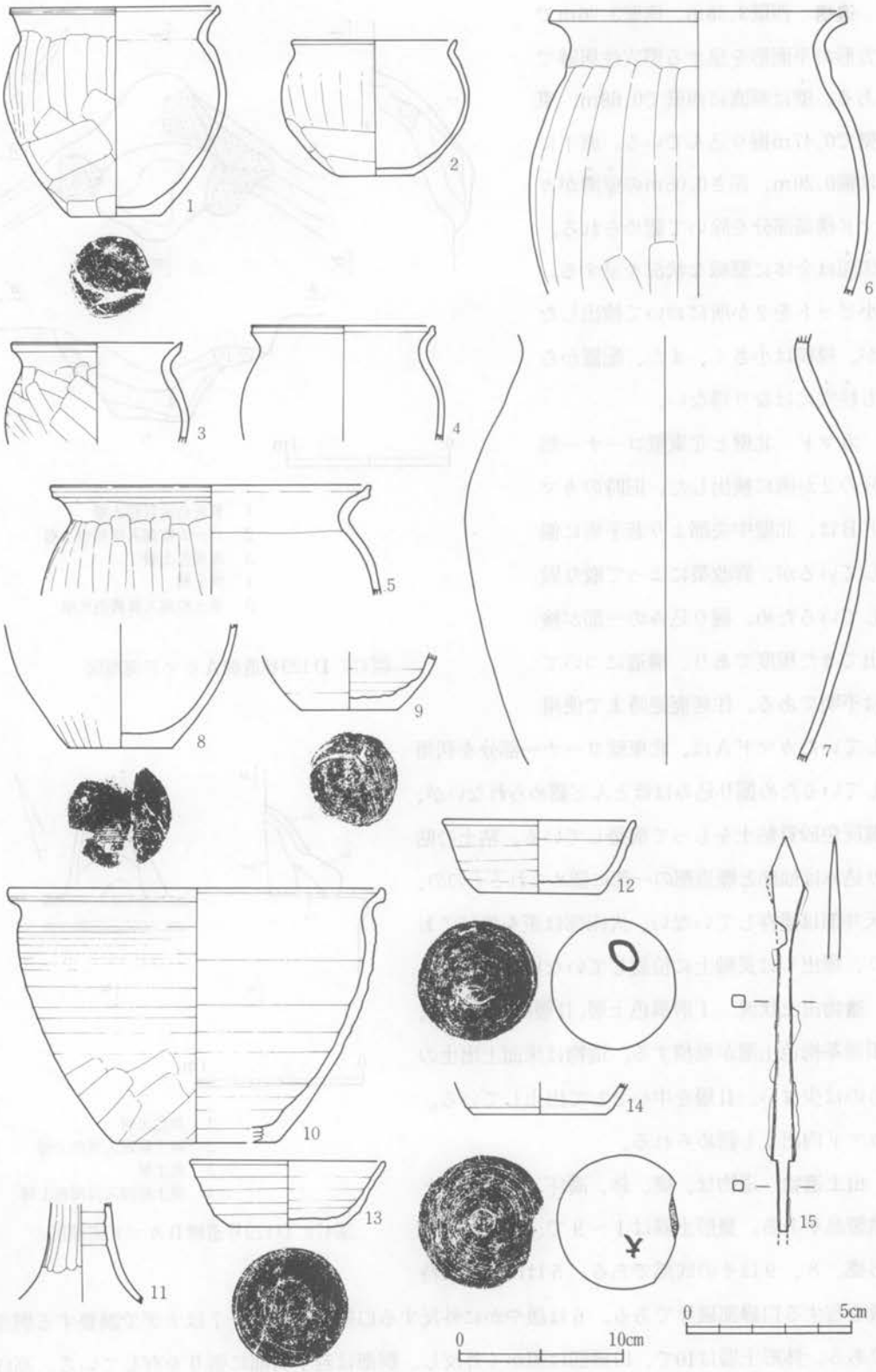


図479　D129号遺構出土遺物実測図

のある底部破片である。鉄製品は15の鏃で、柄が欠損している。

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
6	甕	—	(18.0)	—	口縁部～胴部½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	
7	甕	—	—	—	胴部のみ	—	砂粒 雲母	堅緻	橙褐色	
8	甕	—	—	6.45	底部のみ	—	砂粒	堅緻	褐色	
9	甕	—	—	5.8	破片	—	砂粒	堅緻	褐色	糸切り
10	鉢	15.25	(23.2)	9.8	⅓	ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
11	高坏	—	—	—	脚部のみ	ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	
12	坏	4.4	12.0	7.5	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒褐色	墨書記号
13	坏	4.0	12.0	7.1	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒色	
14	坏	—	—	8.0	底部のみ	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母 砂粒	堅緻	橙褐色	墨書「大」

44. D132号遺構（図480～482、図版96—1・2）

III群の住居群内においてほぼ中央に位置し、D091、D092、D093、D135が近接している。

遺構　北壁3.00m、東壁3.46mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.38m掘り込んでおり、東壁直下には幅0.25m、深さ0.05mの壁溝が認められる。床面は中央部で堅緻な状況を呈する以外は軟弱である。ピットは住居の東側に集中してP_1～P_4を検出した。P_1は径0.26m、深さ0.47m、P_2は径0.42m、深さ0.17m、P_3は径0.26m、深さ0.19m、P_4は径0.40m、深さ0.09mをそれぞれ計る。いずれも性格不明である。柱穴は検出できなかった。床面に近く焼土塊、炭化物が出土しており、焼失住居と判断できる。

カマド　北壁中央部より若干西寄りの壁を0.25m掘り込んで黄灰色砂質粘土で構築している。

D132出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	坏	4.8	(11.5)	(8.0)	⅓	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	橙褐色	糸切り
2	坏	(12.2)	4.0	(6.8)	⅓	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	
3	坏	—	—	—	破片	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	橙褐色	墨書判読不明
4	坏	—	—	—	破片	—	砂粒	堅緻	褐色	墨書判読不明
5	坏	(5.8)	(22.6)	(9.6)	⅓	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	橙褐色	内黒
6	坏	—	—	(6.7)	⅓	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	内黒、糸切り
7	高台付坏	—	—	7.4	高台部のみ	—	—	堅緻	茶褐色	内黒
8	坏	4.2	(12.4)	8.1	⅓	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
9	坏	—	—	—	破片	—	—	堅緻	黒灰色	

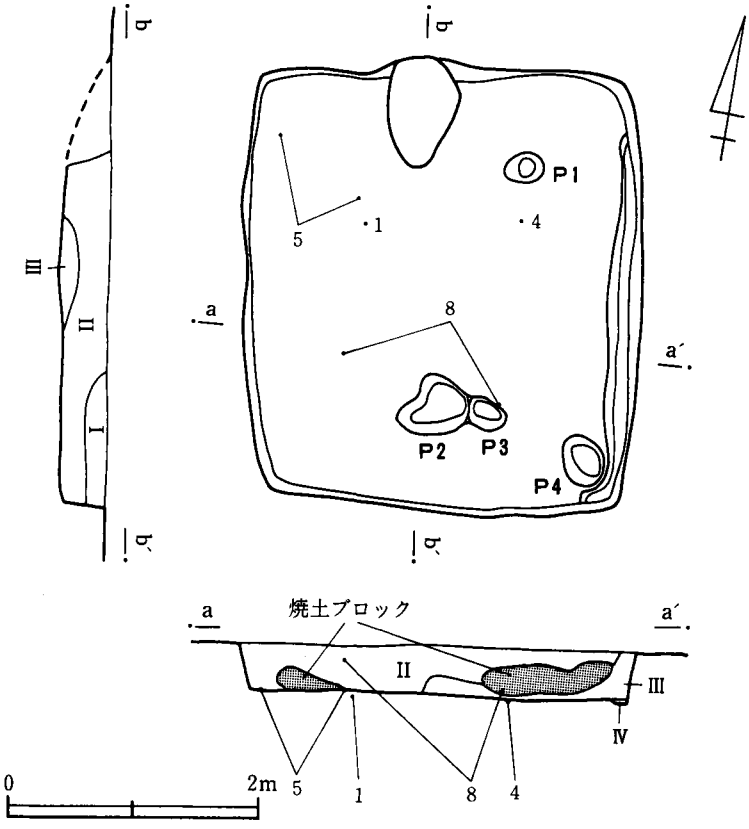


図480 D132号遺構実測図

粘土は袖部から煙出し部まで一体化して貼り込んでおり、天井部も良好な状況で遺存している。火袋部に相当する袖は焼土化が著しい。火床部は深さ0.07mの擂鉢状で、煙道部はやや急激な傾斜を呈している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層炭化粒混入黒褐色土層、Ⅳ層茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上を中心に出土している。

出土遺物　遺物は、坏形土器のみである。1～7は土師器、8、9は須恵器である。1は上げ底風を呈し体部はほぼ直線的に開く。2は内彎ぎみに開く体部を呈する。5は体部が大きく開く大形のものである。8

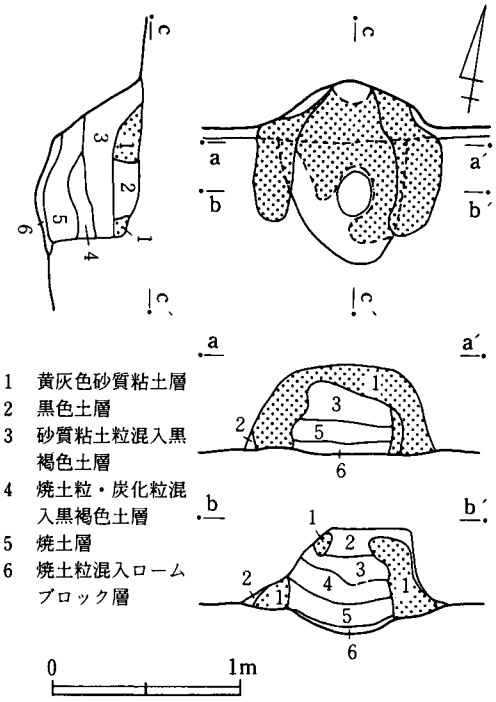


図481 D132号遺構カマド実測図

は外反ぎみに開く体部を呈す。3～6、9は体部破片、7は高台を有する底部破片である。

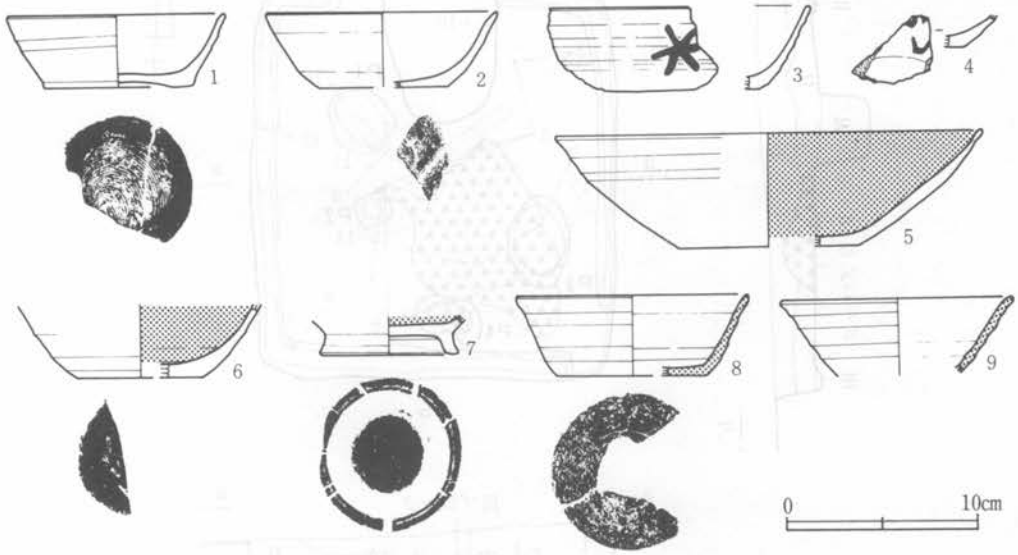


図482 D132号遺構出土遺物実測図

45. D133号遺構（図483～485、図版96－3、97、122、123）

III群の住居群内においてほぼ中央に群集する1軒で北側に位置し、D096が近接している。斜面部に構築されている関係で壁高は一定しない。

遺構 北壁2.80m、東壁3.04mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に西壁で0.55m、東壁で0.25m掘り込んでいる。直下には幅0.20m、深さ0.05mの壁溝がカマド構築部分と南西壁コーナー部分を除いて認められる。床面は中央部で堅緻な以外は軟弱な状況を呈している。ピットを4か所で検出したが、いずれも柱穴になり得ないものである。P_1は長径0.75m、短径0.48m、深さ0.44m、P_2は径0.24m、深さ0.11m、P_3は長径0.72m、短径0.48m、深さ0.22m、P_4は長径0.50m、短径0.28m、深さ0.14mをそれぞれ計る。

D133出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	—	—	—	胴部 1/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
2	甕	—	—	7.2	底部のみ	磨き	砂粒	堅緻	茶褐色	
3	甕	—	16.0	—	1/3	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	堅緻	灰色	
4	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	堅緻	茶褐色	
5	甕	—	—	15.0	底部のみ	叩きじめ ヘラ削り	砂粒	堅緻	(内)茶褐色 (外)黒褐色	

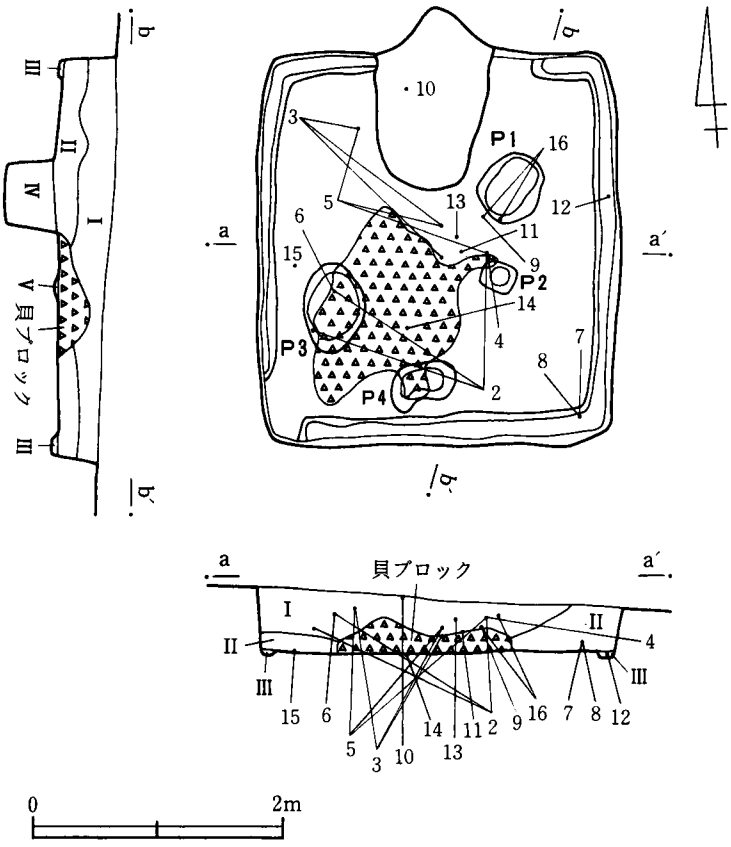


図483 D133号遺構実測図

カマド　北壁中央部を0.34m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。右側は溝状の攪乱を受けているため粘土の貼り込み、掘り込みの状況について把握できない。よって粘土の貼り込みは左袖部のみに認められ、袖部から煙道部まで一体化している。火床部は深さ0.13mの擂鉢状で、煙道部は急激な傾斜を呈し

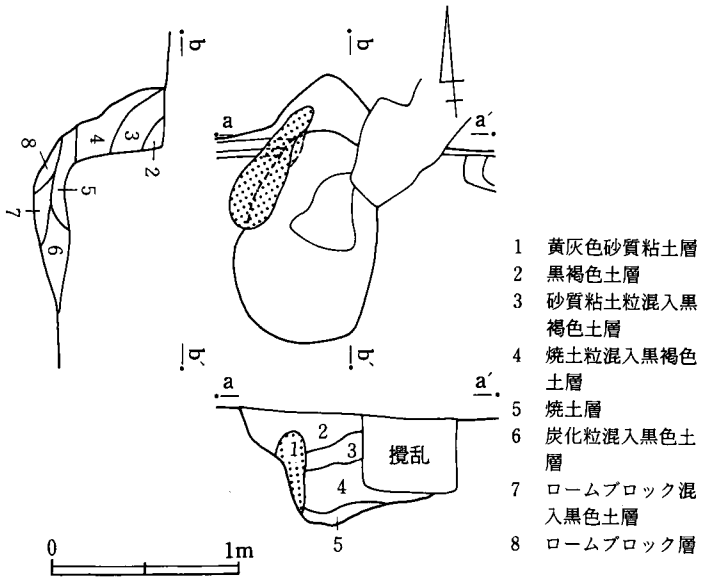


図484 D133号カマド実測図

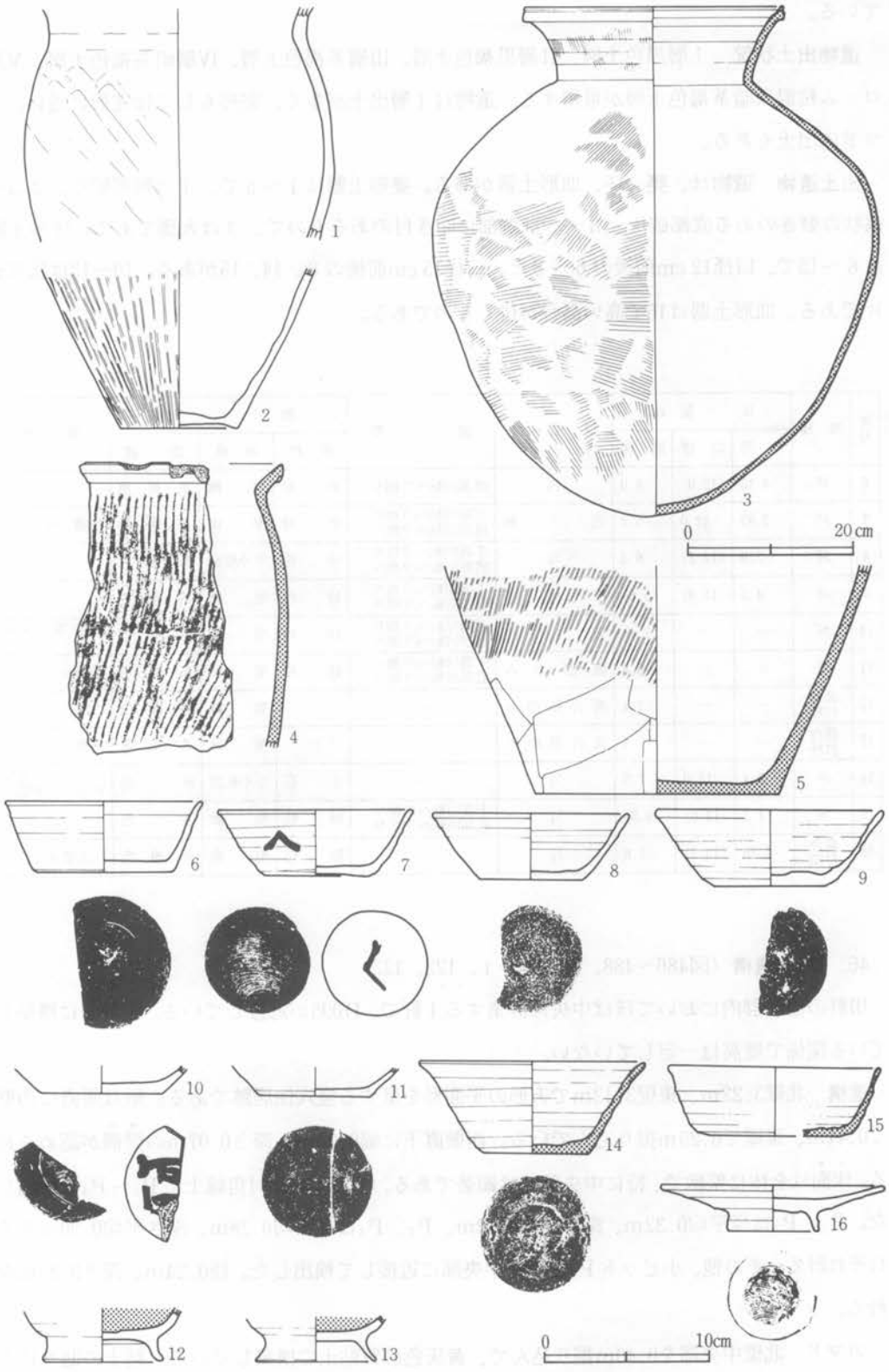


図485 D133号遺構出土遺物実測図

ている。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層茶褐色土層、Ⅳ層暗茶褐色土層、Ⅴ層ローム粒混入暗茶褐色土層が堆積する。遺物はⅠ層出土が多く、完形もしくは完形に近い。カマド内出土もある。

出土遺物　遺物は、甕、坏、皿形土器がある。甕形土器は1～5で、1は胴部破片、2は条痕状の磨きのある底部破片、3～5は胴部に叩き目のあるもので、3は大甕である。坏形土器は6～15で、口径12cm前後の6～8と、口径15cm前後の8、14、15がある。10～13は底部破片である。皿形土器は16で高い高台が付くものである。

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
6	坏	4.15	(12.0)	8.0	1/3	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
7	坏	3.85	12.0	6.4	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「へ」
8	坏	3.9	(12.2)	6.3	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
9	坏	4.5	(14.0)	(6.6)	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
10	坏	—	—	(7.4)	破片	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「冨」、糸切り
11	坏	—	—	6.8	底部のみ	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
12	高台付坏	—	—	7.4	高台部のみ	—	—	堅緻	茶褐色	内黒
13	高台付坏	—	—	7.4	高台部のみ	—	—	堅緻	茶褐色	内黒
14	坏	5.4	14.0	7.5	1/2	—	小石	やや軟弱	灰色	二次的に火を受ける、ヘラ切り
15	坏	4.1	(13.0)	(9.5)	1/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	
16	高台付皿	2.75	(13.7)	5.6	1/2	—	砂粒	堅緻	茶褐色	内面磨き

46. D134遺構（図486～488、図版98－1、122、123）

Ⅲ群の住居群内においてほぼ中央に群集する1軒で、D095が近接している。緩斜面に構築している関係で壁高は一定していない。

遺構　北壁3.22m、東壁3.42mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に西壁で0.41m、東壁で0.25m掘り込んでいる。西壁直下に幅0.20m、深さ0.07mの壁溝が認められる。床面は全体に堅緻で、特に中央部では顕著である。柱穴はほぼ対角線上にP_1～P_4を検出した。P_1、P_3は径平均0.32m、深さ平均0.12m、P_2、P_4は径平均0.28m、深さ平均0.30mをそれぞれ計る。その他、小ピットP_5を南壁中央部に近接して検出した。径0.24m、深さ0.20mを計る。

カマド　北壁中央部を0.40m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙出し部まで一体化しており、天井部は煙道部に認められる。火袋部に相当する部

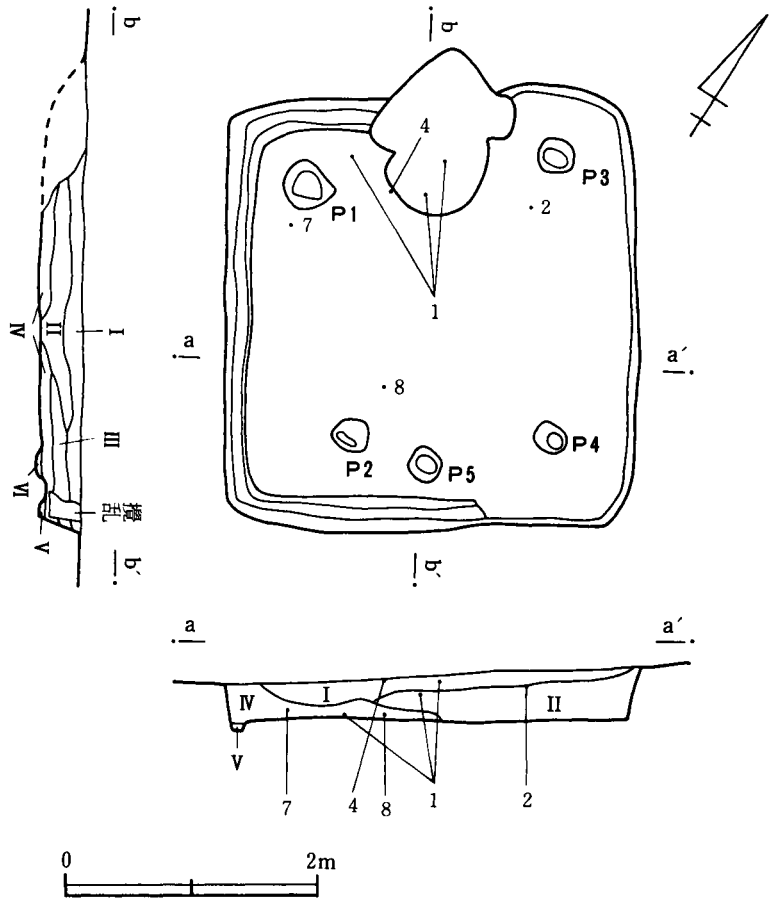


図486 D134号遺構実測図

分の袖は焼土化が著しい。火床部は深さ0.07mの楕円形で煙道部は緩やかな傾斜を呈している。

遺物出土状況 I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層褐色土層、IV層ローム粒混入黒褐色土層、V層茶褐色土層、VI層暗茶褐色土層が堆積する。遺物は各層より出土し、カマド周辺に多い。カマド

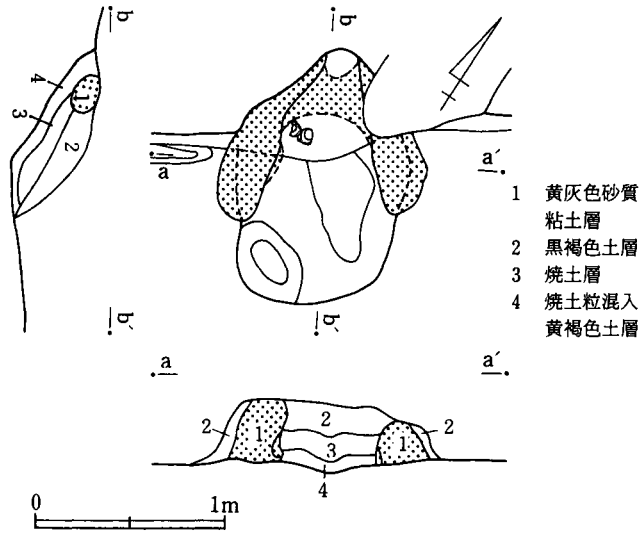


図487 D134号遺構カマド実測図

内出土も認められる。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器と鉄製品がある。甕形土器は1～4で、1、2は大小の差はあるが口唇部に特徴のある口縁部を呈している。3は底部、4は叩き目がある口縁部破片である。坏形土器は5、6で5は体部が内彎ぎみに開く形状を呈している。6は墨書のある体部破片である。鉄製品は7、8でいずれも刀子の残片である。8の柄には木質が付着する。

D134出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	(14.3)	(12.8)	(6.6)	1/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
2	甕	—	(19.0)	—	破片	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	褐色	
3	甕	—	—	(7.0)	底部のみ	ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	木葉痕
4	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	堅緻	灰色	
5	坏	4.3	12.6	6.8	3/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
6	坏	—	—	—	破片	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「へ」

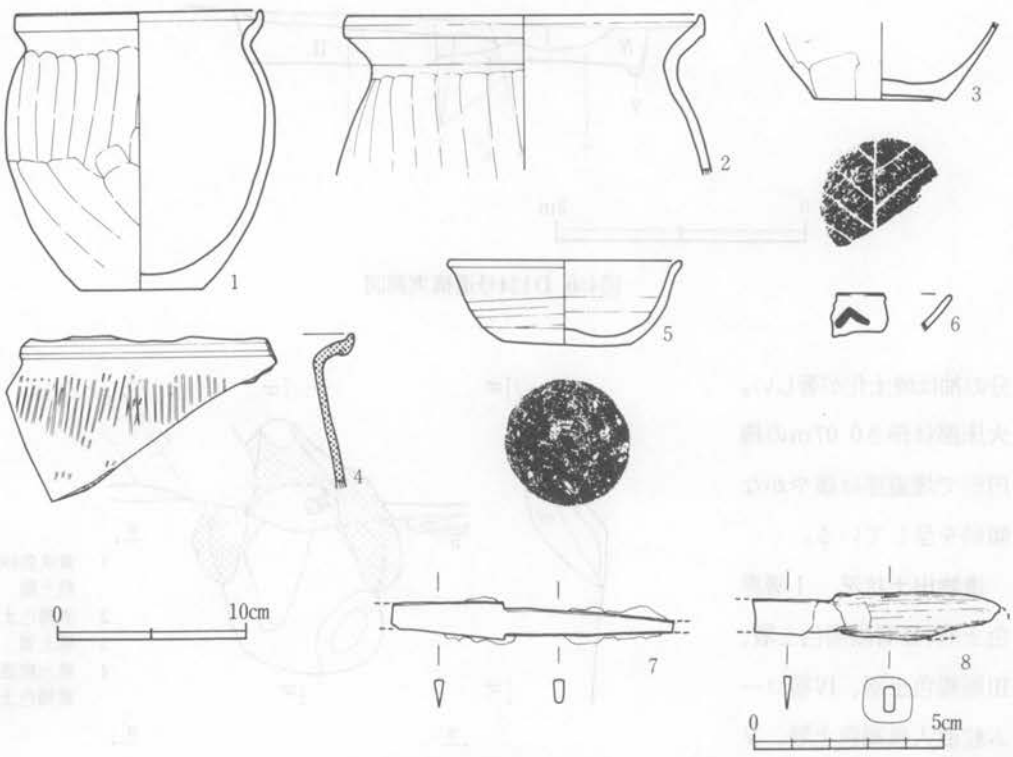


図488　D134号遺構出土遺物実測図

47. D135号遺構（図489～493、図版98—2・3）

Ⅲ群の住居群内においてほぼ中央に群集する1軒で、D092、D123、D132が近接している。

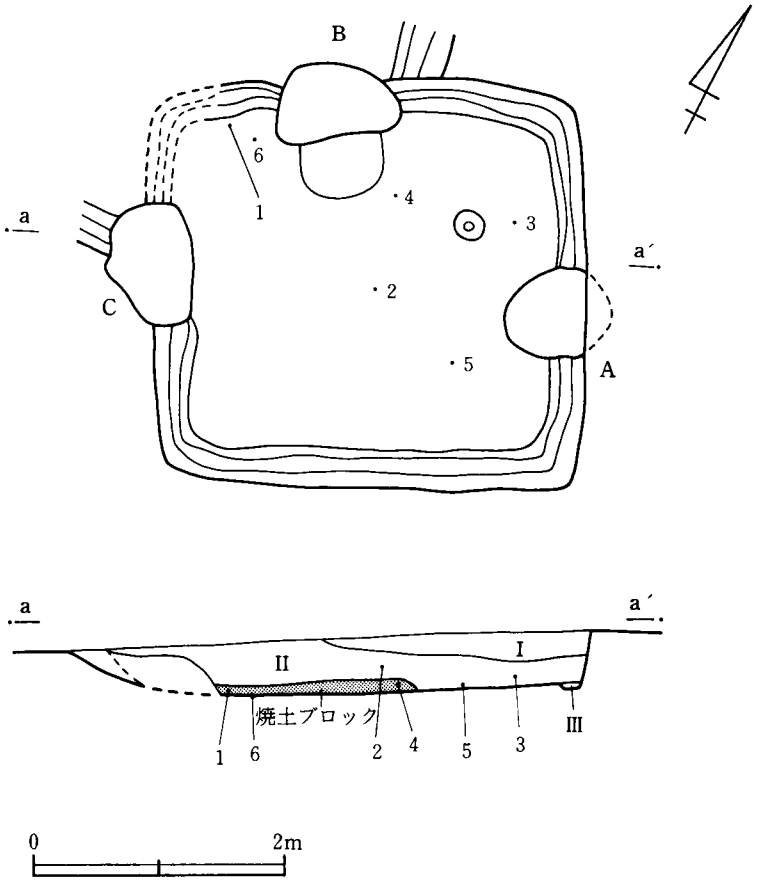


図489 D135号遺構実測図

D091の南東コーナー部を切断して構築している。

遺構 南壁3.38m、東壁3.14mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.43m掘り込んでおり、直下には幅0.26m、深さ0.05mの壁溝が認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。小ピットを検出したが、小規模で性格は不明である。柱穴は検出できなかった。カマドが3か所にわたり認められ、修改築が行なわれたことが窺える。

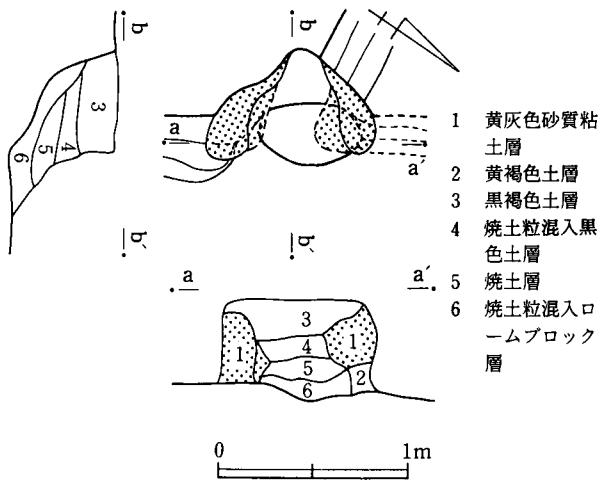
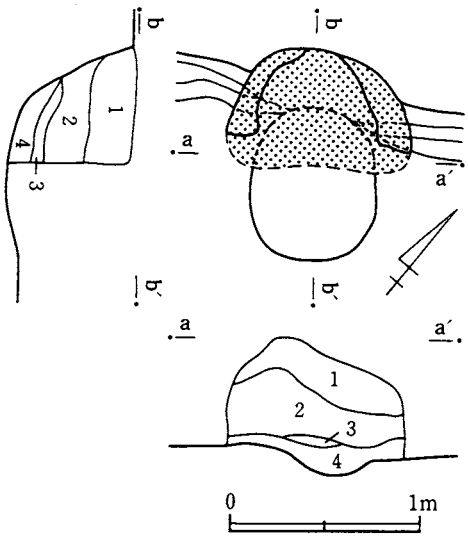
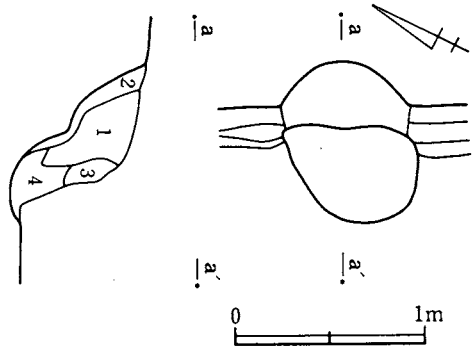


図490 D135号遺構Aカマド実測図



1　黄灰色砂質粘土層
2　黄灰色砂質粘土粒混入黒褐色土層
3　焼土層
4　焼土粒・ローム粒混入黒褐色土層

図491　D135号遺構Bカマド実測図



1　ローム粒・焼土粒混入黒色土層
2　ローム粒混入焼土層
3　黄灰色砂質粘土層
4　黄灰色砂質粘土粒混入黒色土層

図492　D135号遺構Cカマド実測図

カマド　東壁、北壁、西壁の3か所で検出した。最も古いカマドはCで東壁に位置するものであるが、壁への掘り込みと火床の一部を検出した程度である。次に構築されたのはカマドBで北壁に位置しているが、調査手順の不備や、D091の覆土中に掘り込みが位置するため充分に構造を把握できる資料を得られなかったが、粘土の貼り込みは袖部から煙道部まで一体化していたと思われる。火床は長径0.8mの楕円形を呈している。住居廃絶まで使用していたカマドAは西壁中央部を掘り込んで黄灰色粘土をもって構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙道部まで一体化している。火床部は掘り込み部分に位置している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒褐色土層、Ⅱ層黒色土層、Ⅲ層茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上を中心に出土している。

D135出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甑	—	—	—	破片	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	堅緻	暗褐色	
2	甑	—	—	(16.2)	¼	ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	
3	坏	12.95	7.1	3.7	⅓	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
4	坏	—	—	(6.3)	⅓	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
5	皿	—	—	(6.5)	底部のみ	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
6	皿	2.2	(13.4)	(6.8)	⅓	—	砂粒	堅緻	(内)茶褐色 (外)黒褐色	糸切り

出土遺物　遺物は、甑、坏、皿形土器がある。甑形土器は1、2で胴部に叩き目がある。坏形土器は3、4で、体部が若干内彎ぎみに開く形状を呈す。皿形土器は5、6で5は底部破片、6は高台風の造り出しのあるものである。

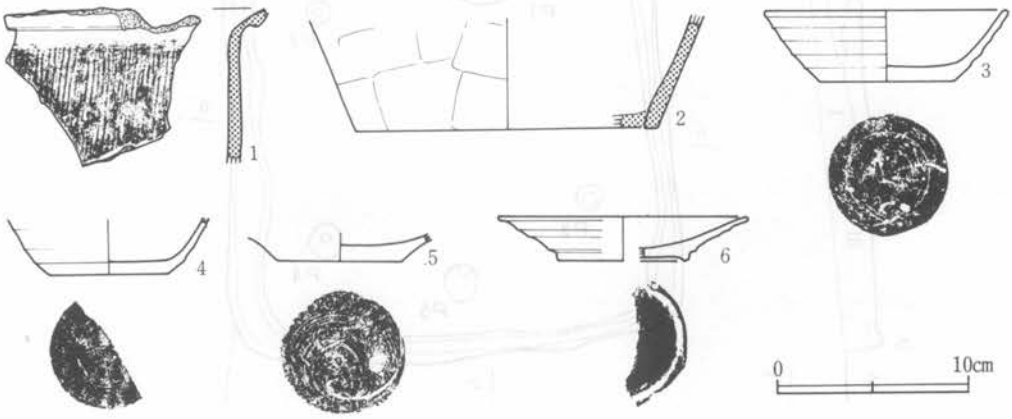


図493　D135号遺構出土遺物実測図

48. D137号遺構（図494～496、図版99－1・2、123）

III群の住居群内において中央に群集する1軒で北寄りに位置し、D138が近接している。遺構の東側は北西から南東に連なる溝によって攪乱を受けているものの壁上部のみに止っているため、遺構の全容は充分把握できる。緩斜面に構築している関係で壁高は一定していない。

遺構　北壁3.35m、東壁3.58mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に西壁で0.53m、東壁で0.10m掘り込んでおり、直下には幅0.24m、深さ0.08mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は中央部を中心に堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上にP_1～P_4を検出した。P_1は径0.20m、深さ0.12m、P_2は径0.19m、深さ0.12m、P_3は径0.22m、深さ0.43m、P_4は径0.28m、深さ0.32mで深さは一定していない。その他南壁中央部に近接して径0.28m、深さ0.23mを計るP_5を検出した。

カマド　北壁中央部より若干左側に寄った壁を掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙道部まで一体化している。天井部は遺存しないものの全体的に良好な状況である。火袋に相当する袖部は焼土化が著しい。火床部は深さ0.07mの擂鉢状で、煙

D137出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	坏	3.8	12.0	6.65	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
2	坏	－	－	7.1	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	暗褐色	糸切り

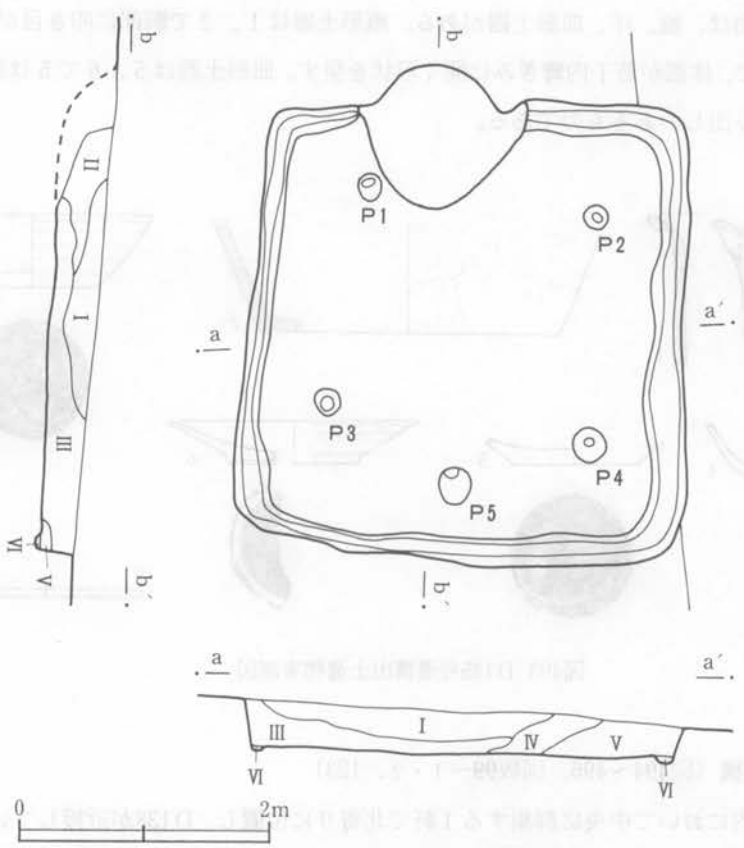


図494 D137号遺構実測図

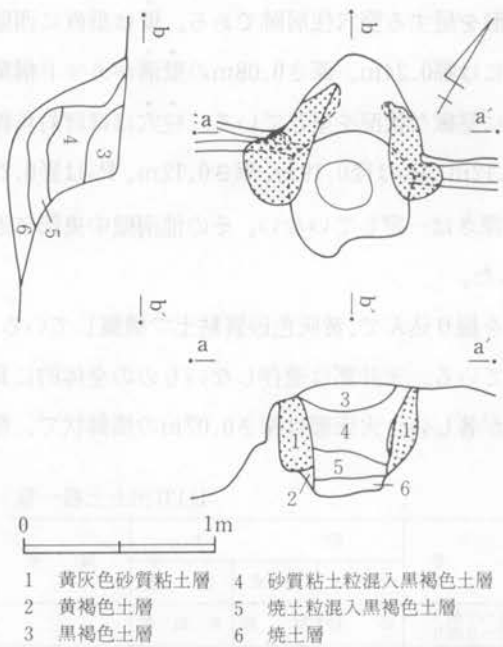


図495 D137号遺構カマド実測図

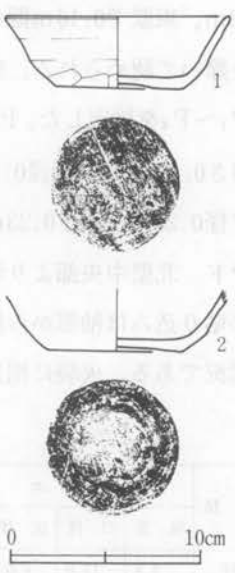


図496 D137号遺構出土遺物実測図

道部は急激な傾斜を呈している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒褐色土層、Ⅱ層黒色土層、Ⅲ層ローム粒混入黒褐色土層、Ⅳ層ローム粒混入黒色土層、Ⅴ層褐色土層、Ⅵ層茶褐色土層が堆積する。遺物は稀少であるがカマド内出土であり、覆土中からの出土は皆無である。

出土遺物　遺物は稀少で坏形土器のみである。1は口径12cmで、体部は若干外反ぎみに開く形状を呈す。2は底部破片である。

49. D138号遺構（図497～499、図版99－3、100－1、123）

Ⅲ群の住居群内においてほぼ中央部に群集する1軒で北寄りに位置し、D137が近接している。遺構西側部分は北西から南東に連なる溝によって切断されている。また住居東側に2か所芋穴による攪乱を受けている。緩斜面に構築している関係で壁高は一定していない。

遺構　北壁3.38m、東壁3.32mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に北西壁で0.42m、東壁で0.15m掘り込んでおり、直下には幅0.22m、深さ0.02m～0.06mの壁溝が

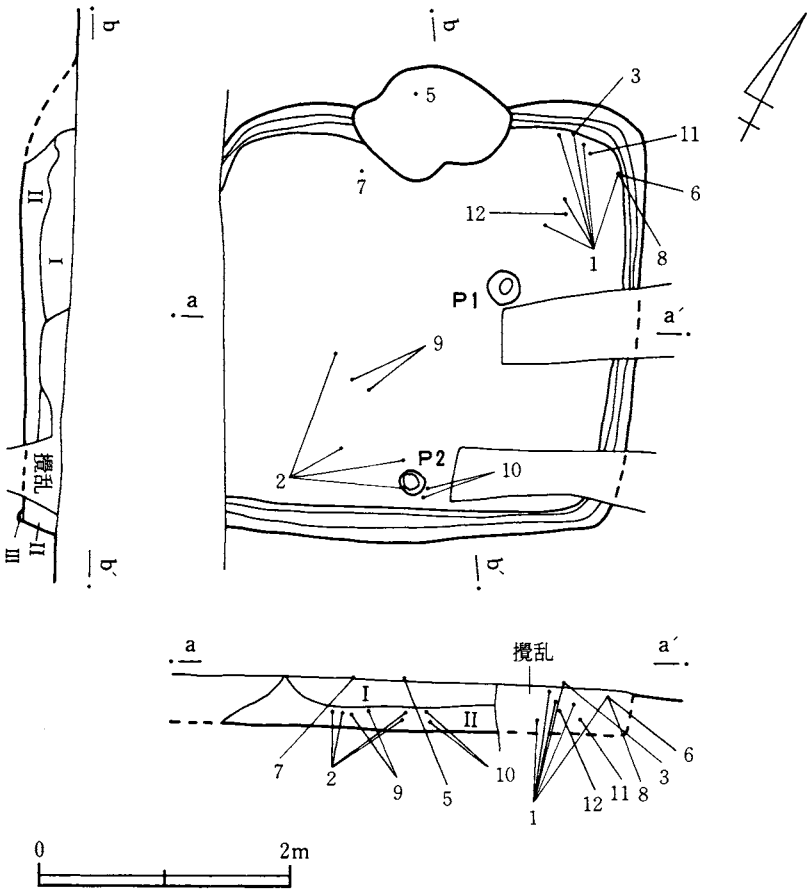
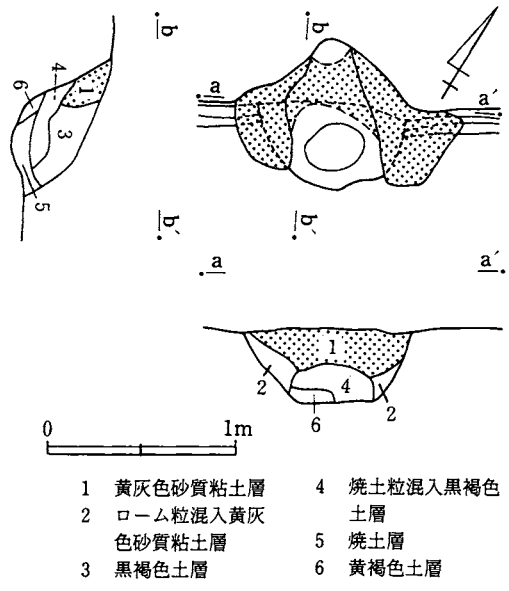


図497　D138号遺構実測図

認められる。西壁にも廻っていたと考えられる。床面は中央部で堅緻な状況を呈する以外は軟弱な状況である。小ピットを2か所に検出した。中央よりやや東寄りにP_1、南壁中央部に近接してP_2が位置している。P_1は径0.26m、深さ0.28m、P_2は径0.20m、深さ0.13mを計る。柱穴は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を0.36m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土は2層上に袖部から煙道部まで一体化して貼り込んでおり、煙道部分には天井部が遺存している。火床部は深さ0.05mの掘り込みを呈し、煙道部はやや急激な傾斜を呈している。



1　黄灰色砂質粘土層
2　ローム粒混入黄灰色砂質粘土層
3　黒褐色土層
4　焼土粒混入黒褐色土層
5　焼土層
6　黄褐色土層

図498　D138号遺構カマド実測図

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上出土は少なくII層を中心として出土している。カマド内出土もある。2はD139出土のものと接合復元できた資料である。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器と石製品、鉄製品がある。甕形土器は1～3で、1は「く」状に緩やかに外反する口縁部を呈す。2は肩部上半を欠損するもので胴部はナデ調整される。3は広口甕の底部破片である。坏形土器は4～10で、口径12cm前後の4、5と、口径15cm

D138出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	10.0	—	¾	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	茶褐色	二次的に火を受ける
2	甕	—	—	9.9	胴部～底部½	ヨコナデ	砂粒	堅緻	暗褐色	
3	甕	—	—	17.6	底部⅔	ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
4	坏	3.95	12.0	6.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	糸切り
5	坏	4.2	(13.1)	7.5	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「大田」
6	坏	—	—	(6.2)	底部⅓	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
7	坏	—	—	5.6	底部のみ	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
8	坏	—	—	—	破片	—	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書判読不明
9	坏	5.3	15.6	7.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒褐色	内黒
10	坏	4.7	(15.9)	(7.8)	⅓	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	内黒

前後の9、10がある。6、7は底部破片、8は墨書のある体部破片である。石製品は11の凝灰岩製の砥石である。鉄製品は12で環状を呈するものであるが用途は不明である。

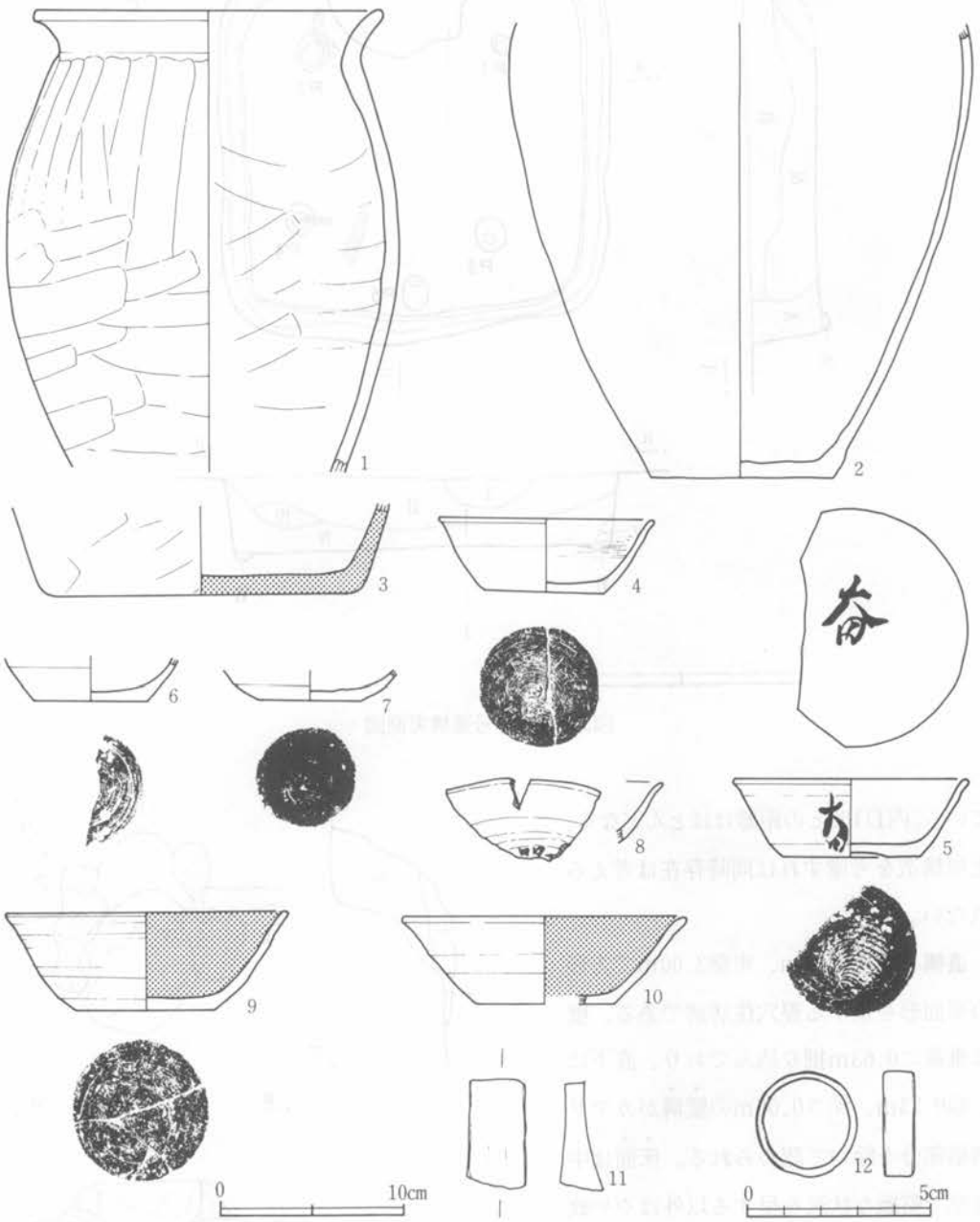


図499 D138号遺構出土遺物実測図

50. D141号遺構（図500～502、図版100－2・3）

III群の住居群内においてほぼ中央に群集する1軒で、D100、D102、D103、D109が近接し

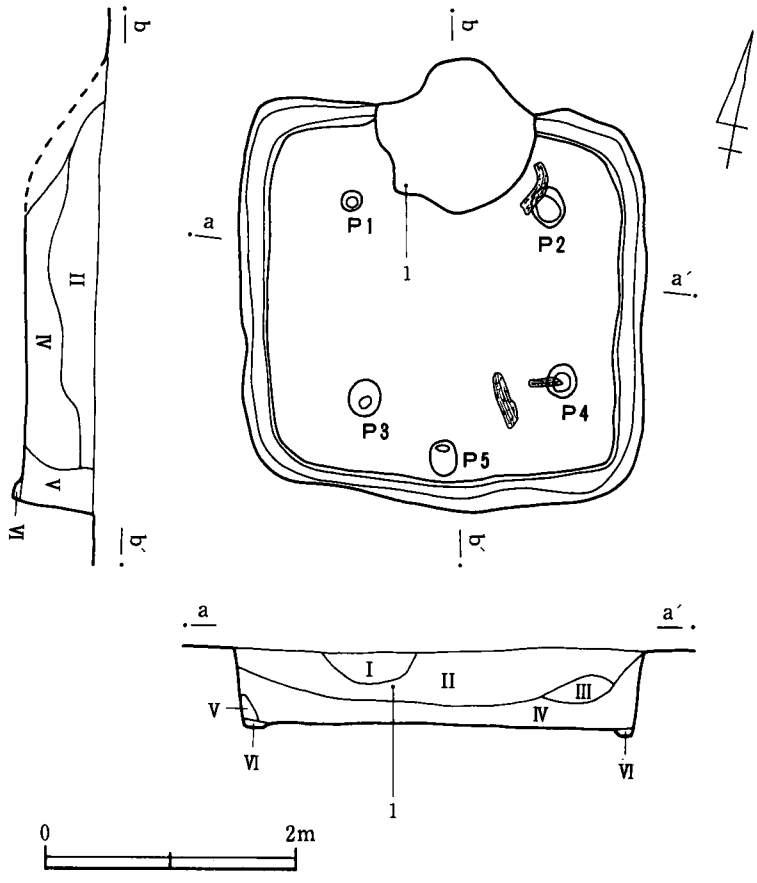
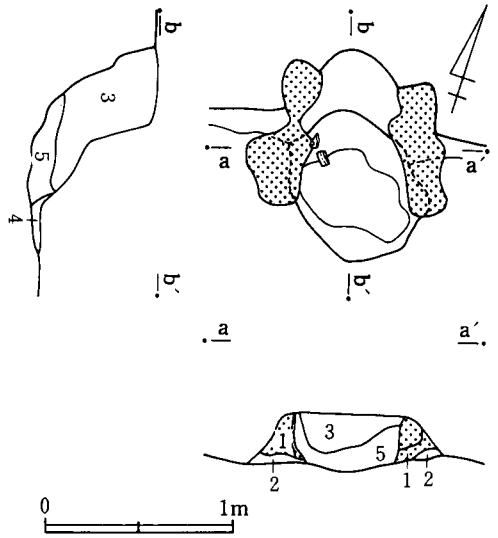


図500 D141号遺構実測図

ている。内D100との距離はほとんどなく、上屋構造を考慮すれば同時存在は考えられない。

遺構 北壁3.04m、東壁3.00mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.63m掘り込んでおり、直下には幅0.23m、深さ0.06mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は中央部で堅緻な状況を呈する以外はやや軟弱な状況である。柱穴は対角線上にP_1～P_4を検出した。P_1は径0.16m、深さ0.05m、P_2は径0.26m、深さ0.20m、P_3は径0.25m、深さ0.14m、P_4は径0.23m、



1 黄灰色砂質粘土層
2 砂質粘土粒混入黄褐色土層
3 砂質粘土ブロック混入黒褐色土層
4 ローム粒混入黒褐色土層
5 焼土層

図501 D141号遺構カマド実測図

深さ0.10mをそれぞれ計るが、規模は一定していない。床面近くに炭化物を検出したため、焼失した住居であると考えられる。

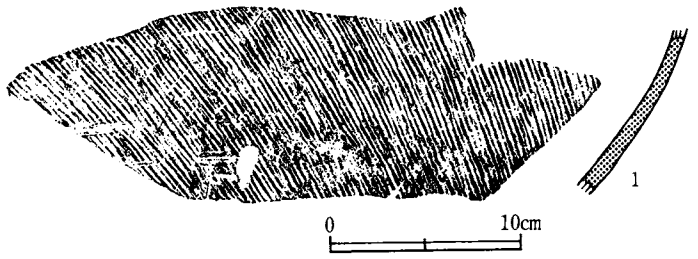


図502 D141号遺構出土遺物実測図

カマド　北壁中央部を0.35m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。掘り込みは2段になっているが、この部分に粘土の貼り込みはなく、粘土は2層上に袖部から煙道部の一部まで貼り込んでいるだけで、天井部は遺存しない。火袋に相当する袖は焼土化が著しい。火床部は深さ0.06mの浅い掘り込みを呈し、煙道部はやや急激な傾斜を呈している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層褐色土層、IV層ローム粒混入黒褐色土層、V層暗茶褐色土層、VI層茶褐色土層が堆積する。遺物は覆土中より若干出土している程度である。

出土遺物　遺物は稀少で図示できる遺物は1点のみである。1は叩き目のある胴部破片である。

D141出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	破片	叩きじめ	砂粒	堅緻	暗灰色	

51. D143号遺構（図503～506、図版101、123、124）

III群の住居群内においてほぼ中央に群集する1軒で、D103が近接している。芋穴状の攪乱を受けている。

遺構　北壁3.24m、東壁3.72mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.43m掘り込んでおり、直下には幅0.23m、深さ0.06mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈しているが、壁コーナー部分はやや軟弱である。ピットをP_1～P_3まで検出したが、柱穴にはなり得ない。P_1、P_2はカマド両側面に位置しており、類似する遺構としてD091、D103、D145がある。

カマド　北壁中央部を0.43m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙出し部まで一体化しており、天井部が煙道部分で認められる。火袋に相当する袖は焼土化が著しい。火床部は深さ0.07mの掘り込みを呈し、煙道部は緩やかな傾斜を呈している。

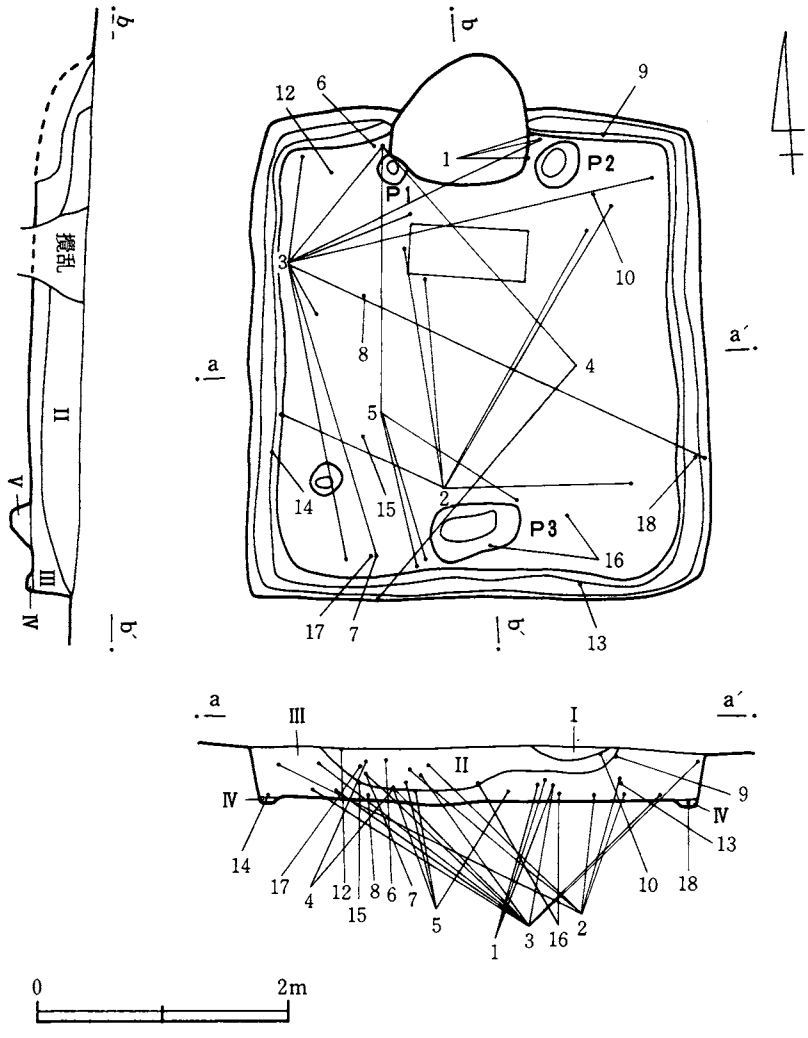


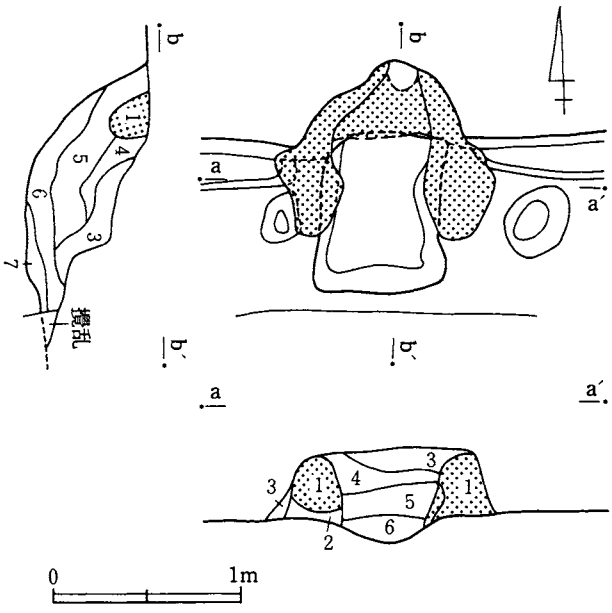
図503 D143号遺構実測図

D143出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	台付甕	—	11.75	—	3/4	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
2	台付甕	—	(15.0)	—	1/2	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
3	甕	28.2	29.6	16.65	2/3	ヨコナデ、叩きじめ ヘラ削り	雲母 砂粒	やや堅緻	灰色	
4	甕	—	—	(15.0)	破片	—	砂粒	軟弱	灰褐色	
5	甑	—	—	(15.0)	破片	叩きじめ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
6	坏	3.5	12.2	6.1	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	墨書「万」
7	坏	3.9	12.55	6.55	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	茶褐色	ヘラ切り

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層ローム粒混入黒褐色土層、Ⅳ層茶褐色土層、Ⅴ層暗茶褐色土層が堆積する。遺物はⅢ層を中心に多量に出土している。

出土遺物　遺物は、台付甕、甕、甑、坏、皿形土器と銅製品がある。台付甕形土器は1、2で、いずれも台部は欠損している。甕形土器は3、4で胴部に叩き目がある。甑形土器は5で胴部に叩き目がある。坏形土器6～13で、口径12cm前後の6、7と口径15cm前後の8、12がある。9、10は底部破片、11は墨書のある破片である。13は高台を有する須恵器の底部破片である。皿形土器は14～17で15～17は「ハ」の字に大きく開く高台を有する。14は体部に墨書がある破片である。銅製品は18の巡方で長辺3.2cm、短辺2.3cmの長方形を呈し、内面には裏金をとめるピンが遺存している。全体的に中央寄りの配置を呈



1　黄灰色砂質粘土層
2　黄褐色土層
3　黒色土層
4　砂質粘土粒混入黒褐色土層
5　焼土粒・砂質粘土粒混入黒褐色土層
6　焼土粒・ローム粒混入黒褐色土層
7　焼土層

図504　D143号遺構カマド実測図

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
8	坏	4.75	14.2	7.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	—	堅緻	(内)黒色 (外)茶褐色	ヘラ切り、内面磨き
9	坏	—	—	(6.6)	底部のみ	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	—	堅緻	暗褐色	墨書「一」
10	坏	—	—	6.9	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	糸切り
11	坏	—	—	—	破片	—	砂粒	堅緻	黄茶褐色	墨書判読不明
12	坏	4.9	15.15	7.4	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	内黒
13	高台付坏	—	—	(10.7)	⅓	—	砂粒	堅緻	灰色	
14	皿	—	(13.4)	—	⅓	—	雲母	堅緻	茶褐色	墨書「木」
15	高台付皿	—	—	(6.4)	高台部のみ	—	雲母 砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「八」、内面磨き
16	高台付皿	3.6	14.0	7.8	¾	—	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
17	高台付皿	—	—	8.0	高台部のみ	—	砂粒	堅緻	茶褐色	内面磨き

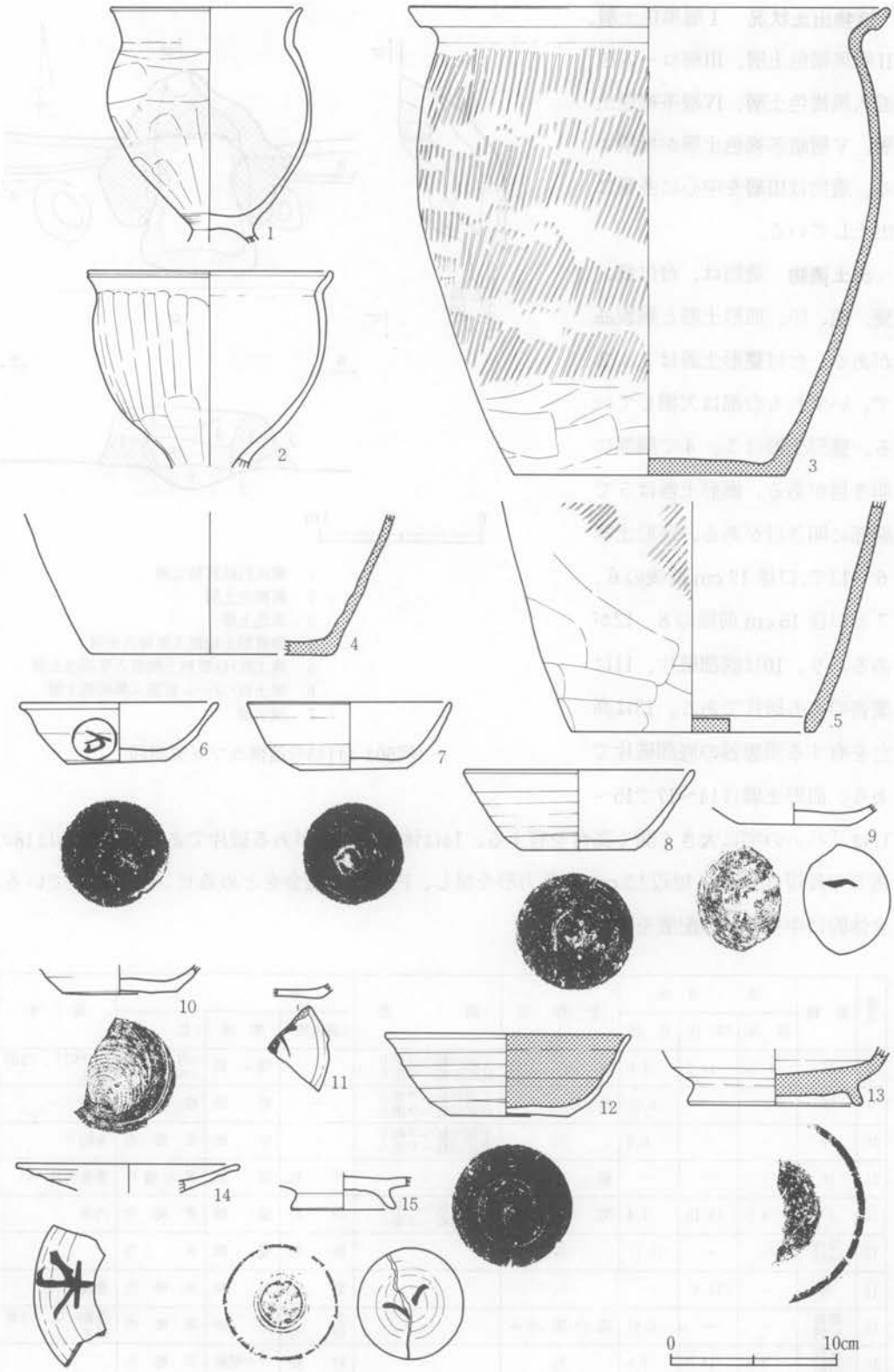


図505 D143号遺構出土遺物実測図(1)

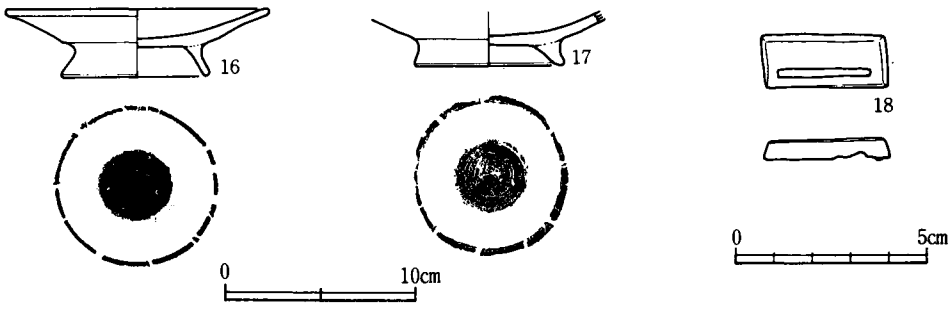


図506 D143号遺構出土遺物実測図(2)

52. D144号遺構（図507～509、図版102－1・2、124）

III群の住居群内においてほぼ中央に群集する1軒で南側に位置し、D111、D112が近接している。斜面部に構築している関係で壁高は一定していない。

遺構 北壁2.74m、東壁3.16mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に西壁で0.29m、東壁では0.05m掘り込んでいる。東壁直下には幅0.16m、深さ0.05mの壁溝が認められ、南壁にも1.1mの範囲で認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上にP_1～P_4を検出した。径平均0.30m、深さ平均0.18mを計り、全体的に中央寄りの配置を呈しているが、P_2が若干北寄りに位置する。その他、径0.27m、深さ0.15mを計るP_5、径0.18m、深さ0.21mを計るP_6、径0.36m、深さ0.11mを計るP_7を検出した。

カマド 北壁中央部を0.24m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙道部まで

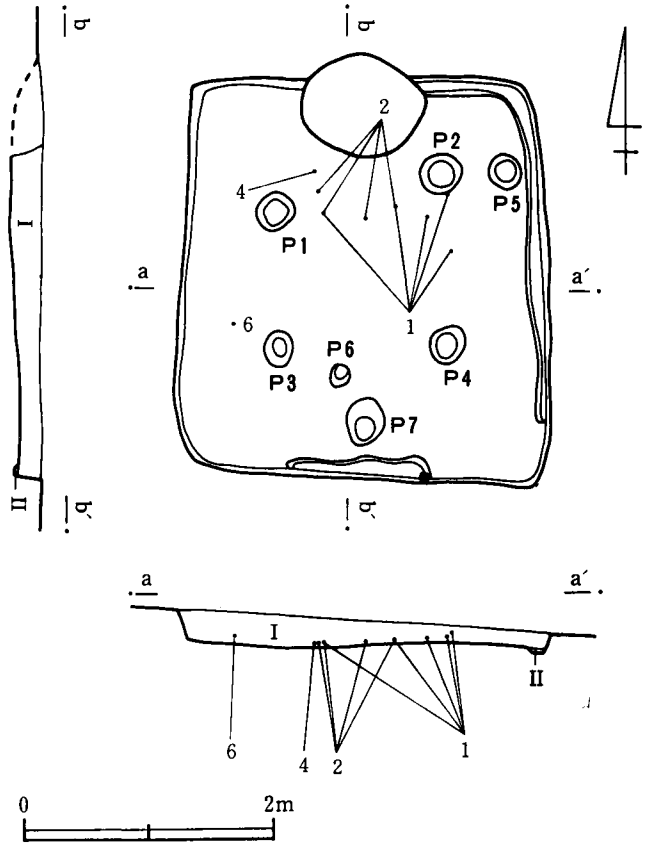


図507 D144号遺構実測図

認められるものの天井部は遺存していない。火袋に相当する袖は焼土化が著しい。火床部は深さ0.07mの掘り込みを呈し、煙道部は緩やかな傾斜を呈している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上より出土している。カマド内出土も認められる。

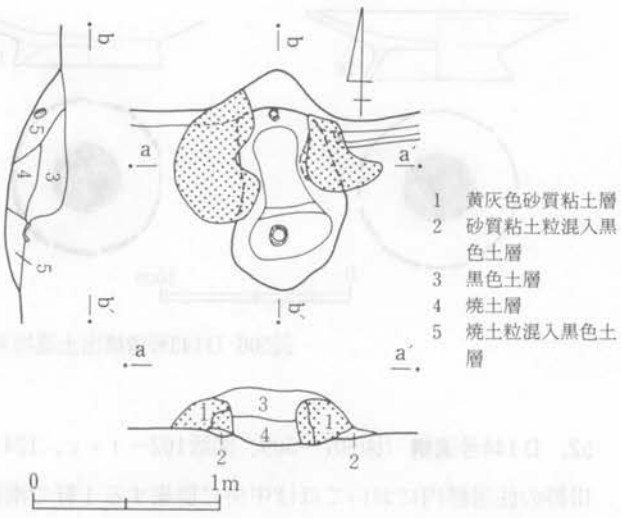


図508　D144号遺構カマド実測図

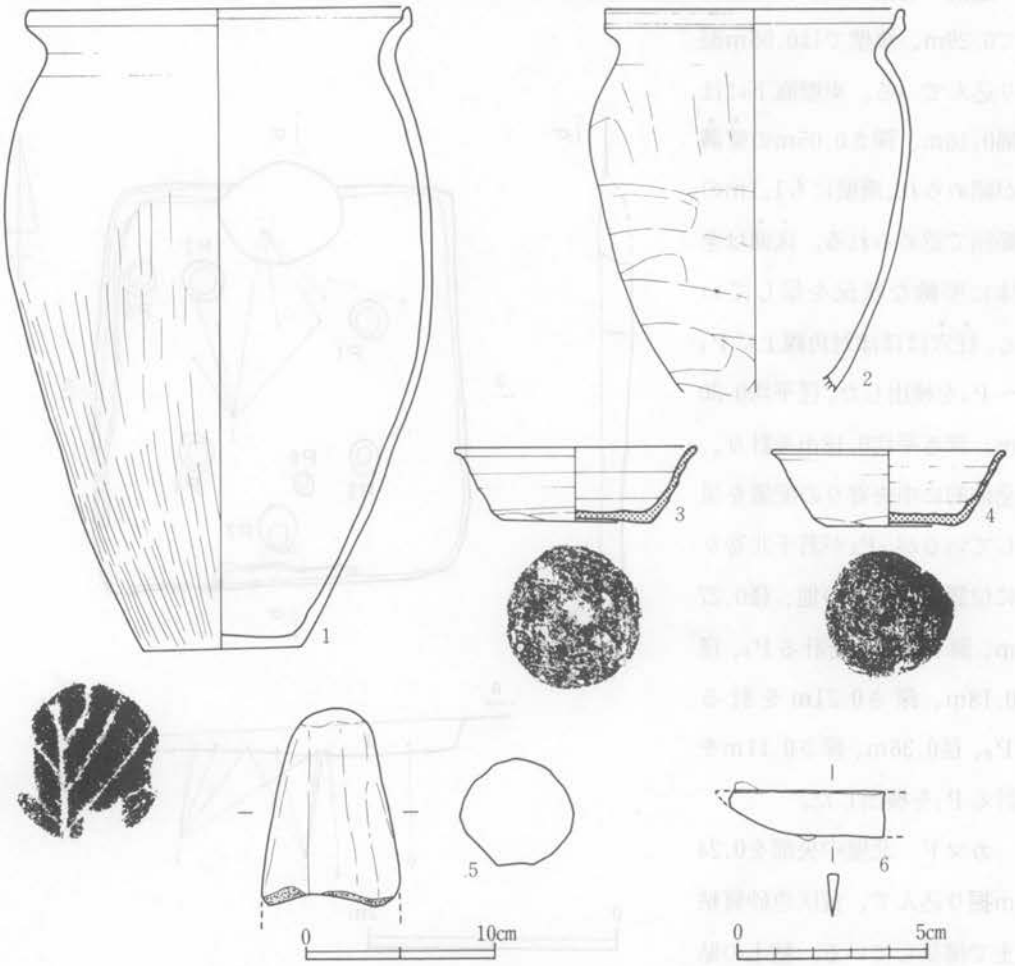


図509　D144号遺構出土遺物実測図

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器と土製品、鉄製品がある。甕形土器は1、2で、いずれも口唇部に特徴のある口縁部を呈す。坏形土器は3、4で、いずれも須恵器であり、体部が若干外反ぎみに開く形状を呈す。土製品は5の支脚で下端を欠損するが、胎土、焼成は良好で、色調は黄灰色を呈す。鉄製品は6で刀子の残片である。

D144出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	32.9	20.65	8.4	2/3	ヨコナデ 磨き	砂粒	やや軟弱	黒褐色	二次的に火を受ける、木葉痕
2	甕	—	16.1	—	2/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	軟弱	黒褐色	
3	坏	3.9	13.0	7.95	完形	下端静止ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒灰色	
4	坏	3.9	12.4	6.95	完形	下端静止ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒灰色	

53. D145号遺構（図510～514、図版102－3、103－1、124、125）

III群の住居群内においてほぼ中央に群集する1軒で、南側に位置し、D111、D112、D144が近接している。斜面部に構築している関係で壁高は一定していない。

遺構　北壁3.90m、東壁3.22mで胴張り方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に東壁で0.33m、西壁で0.55m掘り込んでおり、直下には幅の0.10m～0.26m、深さ0.05mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈する。柱穴はほぼ対角線上に配置するP_1～P_4を検出した。径0.20m～0.30m、深さ0.20m～0.37mを計る。その他、小ピットP_5～P_7を検出した。

D145出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	10.0	19.4	30.85	完形	ヨコナデ 磨き	雲母 砂粒	やや軟弱	黒褐色	
2	甕	—	19.2	—	2/3	ヨコナデ 磨き	雲母 砂粒	やや堅緻	茶褐色	
3	甕	—	21.0	—	1/2	ヨコナデ ヘラ削り	雲母 砂粒	堅緻	灰色	
4	甕	—	18.4	—	口縁部～胴部1/2	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
5	甕	—	(21.2)	—	1/4	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
6	甕	—	20.2	—	1/3	ヨコナデ 叩きじめ	雲母 砂粒	軟弱	黒褐色	
7	台付甕	11.85	12.4	7.6	完形	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
8	鉢	—	(13.6)	—	口縁部～胴部1/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒 雲母	堅緻	茶褐色	
9	坏	3.5	12.0	7.0	3/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	—	やや堅緻	黒褐色	糸切り
10	坏	3.65	12.1	6.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
11	坏	3.75	11.8	6.1	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	墨書「村棚図」、「朝日」、糸切り
12	坏	3.8	12.6	7.4	3/4	下端静止ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒色	ヘラ切り

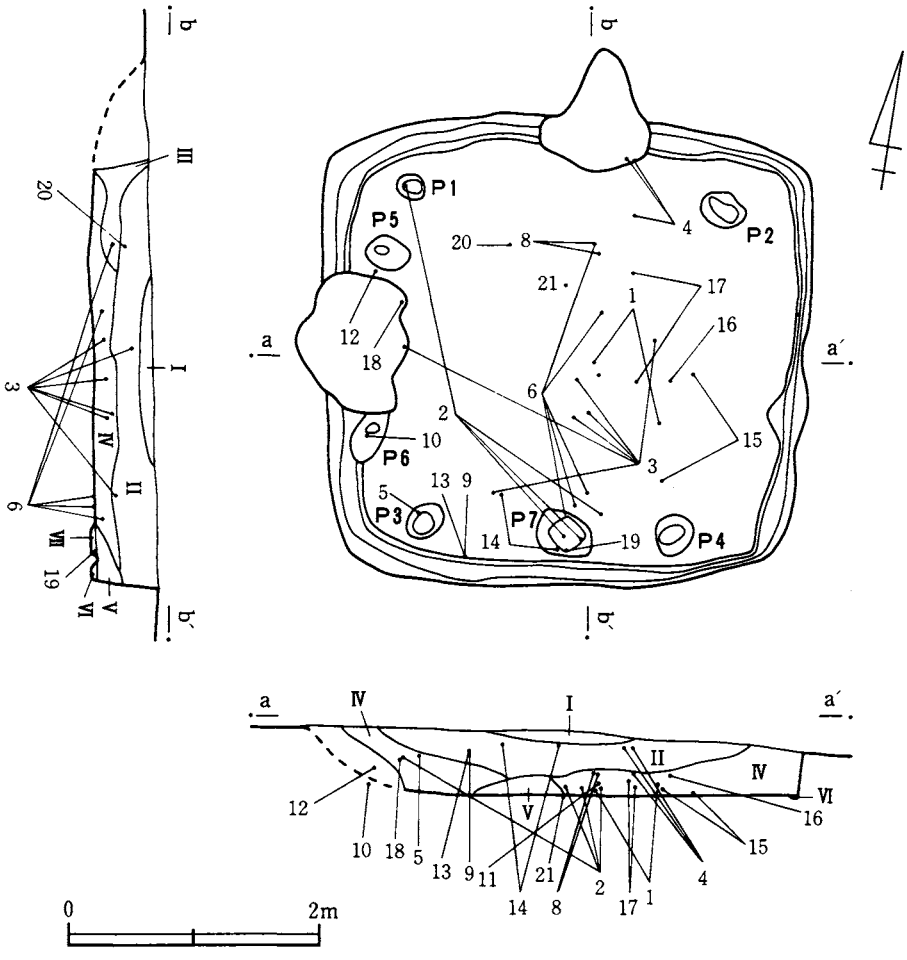


図510 D145号遺構実測図

カマド　北壁と西壁の2か所に検出した。旧時のカマドBは北壁中央部に位置しているが、修改築に伴って掘り込み部のみを残し、取り毀している。掘り込み部に若干粘土の貼り込み部が認められるものの全体は把握できない。住居廃絶時まで使用していたカマドAは

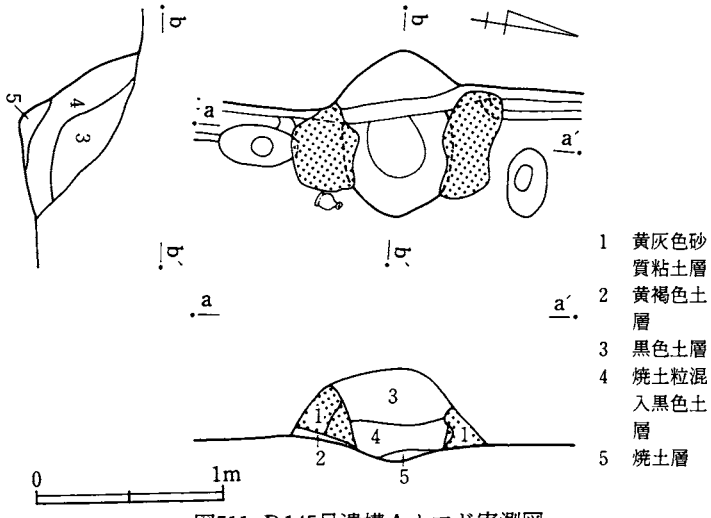
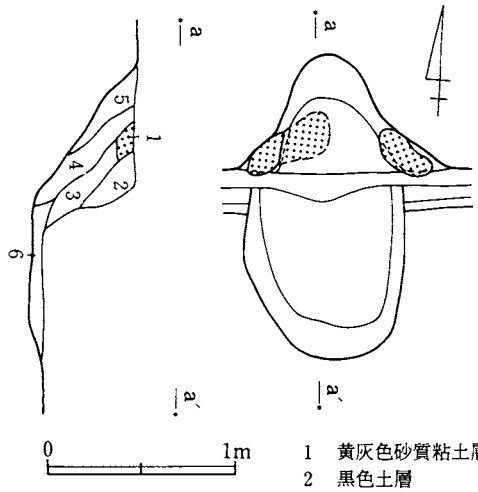


図511 D145号遺構Aカマド実測図

西壁中央部を最長0.27m掘り込んで、黄灰色粘土で構築している。粘土の貼り込みは掘り込み部分まで袖を形成するものの煙道部の貼り込みは認められず、天井部も遺存していない。火床部は掘り込み外にあり、深さ0.09mで擂鉢状の掘り込みを呈し、火袋に相当する袖は焼土化が著しい。煙道部は急傾斜を呈している。



1 黄灰色砂質粘土層
2 黒色土層
3 砂質粘土粒混入黒色土層
4 焼土層
5 ローム粒混入黒色土層
6 黒色土混入黄褐色土層(貼床部分)

図512 D145号遺構Bカマド実測図

遺物出土状況 I層黒色土層、II層焼土粒混入黒色土層、III層粘土粒混入黒褐色土層、IV層黒褐色土層、V層明茶褐色土層、VI層茶褐色土層、VII層暗茶褐色土層が堆積する。遺物は多量で、IV層を中心に出土している。

出土遺物 遺物は、甕、台付甕、鉢、坏形土器と鉄製品がある。甕形土器は1～6で、1、2は口唇部に特徴がある口縁部を呈し、胴部は条痕状の磨きがある。3、4は「く」字状に緩やかに外反する口縁部を呈す。5は逆「コ」字状を呈す口縁部を呈す。6は胴部に叩き目がある広口甕である。台付甕形土器は7で「ハ」字状に大きく開く台部を有する。鉢形土器は8で口縁部は内屈する。坏形土器は9～18で、口径 12cm 前後の9～15と、口径 13cm 前後の17がある。16、18は底部破片で、18は墨書がある。鉄製品は19、20で、19は刀子の残片であるが柄に木質の付着が認められる。20は角棒状のもので用途は不明である。

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
13	坏	3.3	12.0	6.4	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	糸切り
14	坏	4.2	12.0	7.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
15	坏	3.5	(12.2)	7.2	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
16	坏	—	—	6.0	底部のみ	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
17	坏	4.3	(13.3)	(7.6)	1/4	下端静止ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	
18	坏	—	—	—	破片	—	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書判読不明

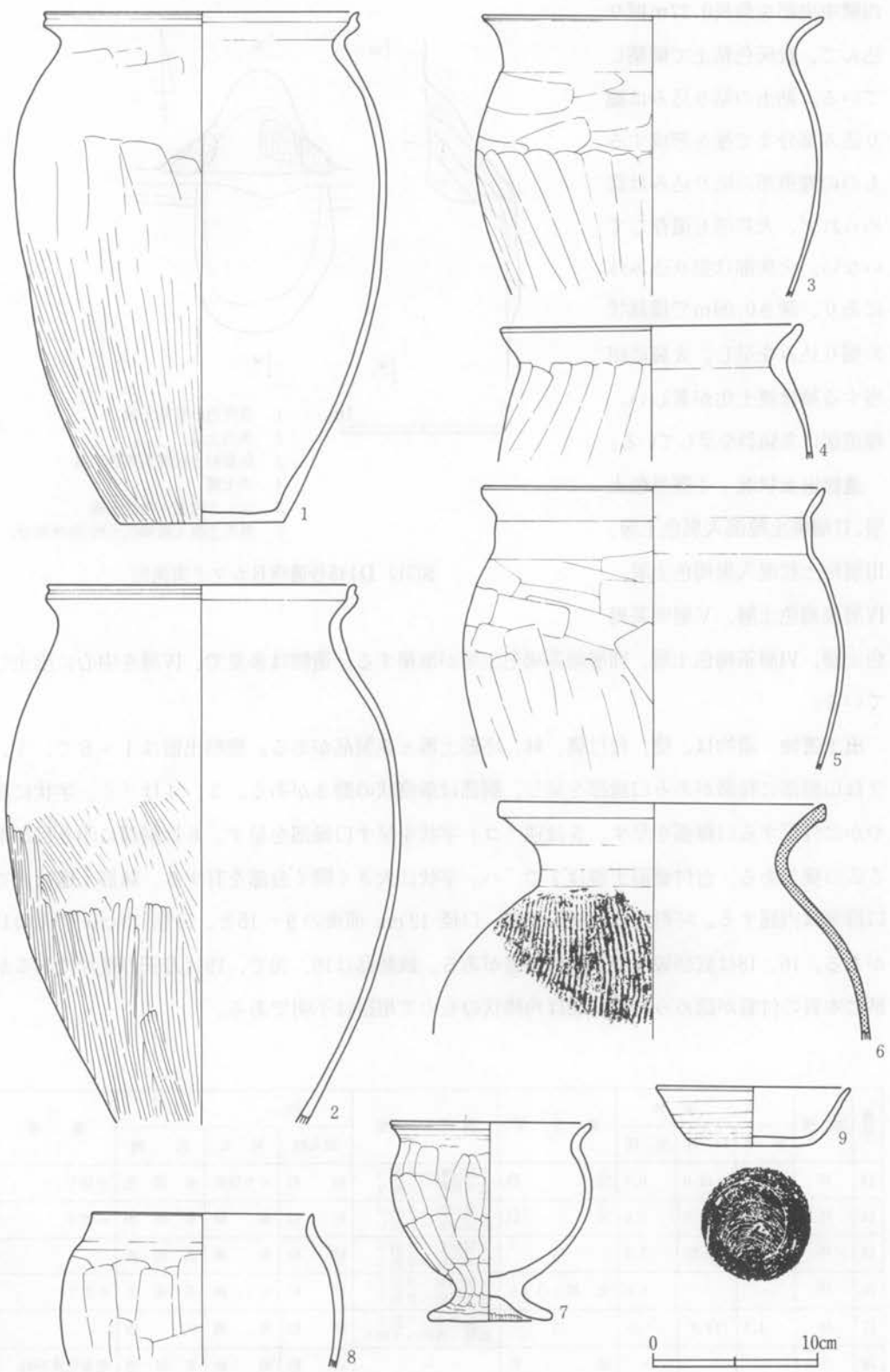


図513 D145号遺構出土遺物実測図(1)

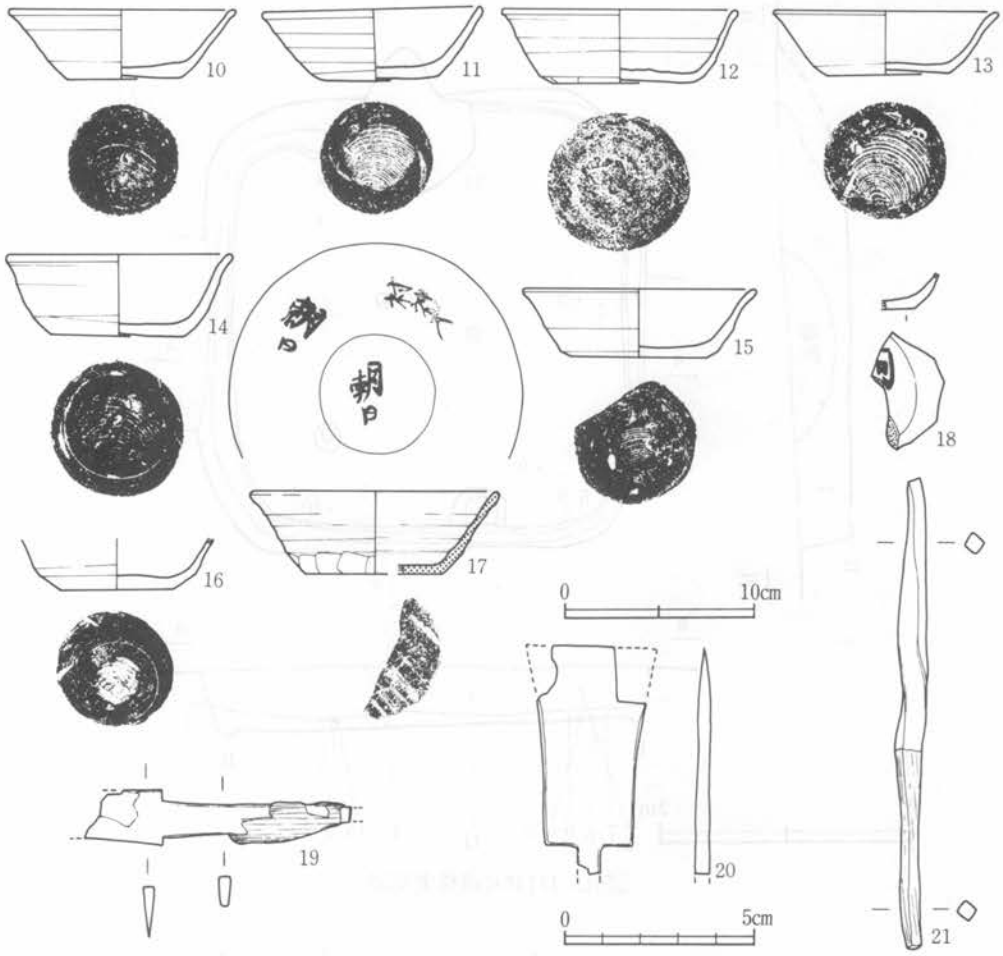


図514　D145号遺構出土遺物実測図(2)

54. D146号遺構（図515～517、図版103—2・3、125）

III群の住居群内においてほぼ中央部に群集する1軒で、D148が近接している。遺構中央部を東西に連なる溝によって攪乱を受けているが、床面まで達するものではない。攪乱は覆土の17%に相当する。

遺構　北壁3.40m、東壁3.53mで若干壁コーナーが丸味を帯びている方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.50m掘り込んでおり、直下には幅0.26m、深さ0.06mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。ピットを4か所に検出したが、いずれも小規模であり、配置を見ても柱穴にはなり得ない。

カマド　北壁中央部を0.44m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土は2層上に袖部から煙道部の一部まで貼り込んでいるが、天井部は遺存していない。火床部は掘り込み以外に位置し、深さ0.18mの掘り込みを呈し、火袋部に相当する袖は焼土化が著しい。煙道部は

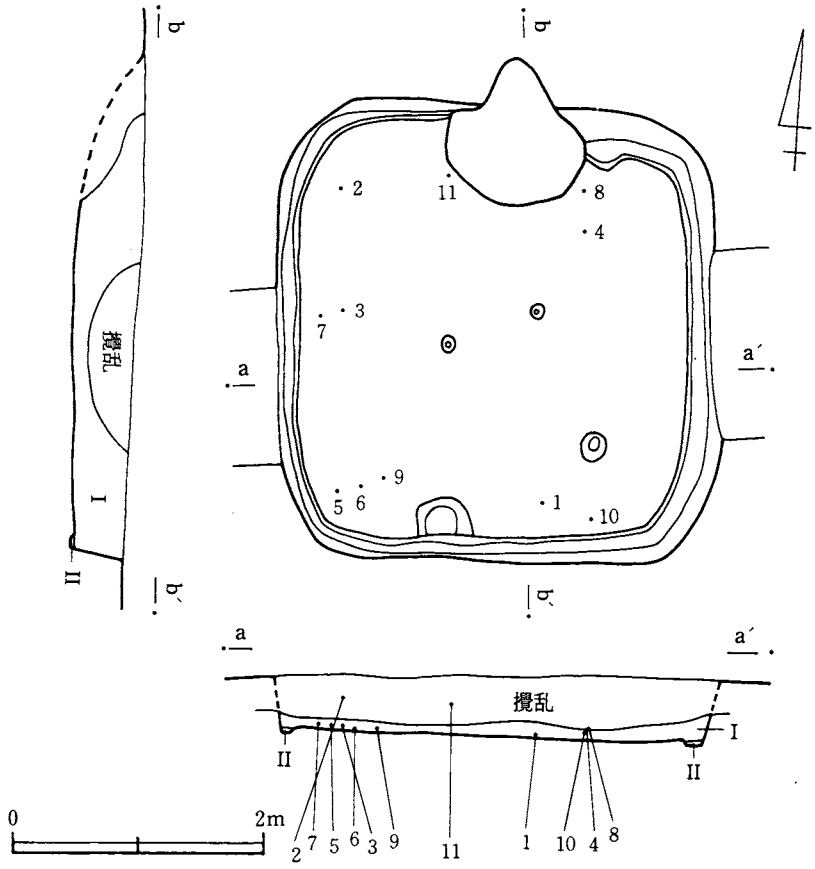
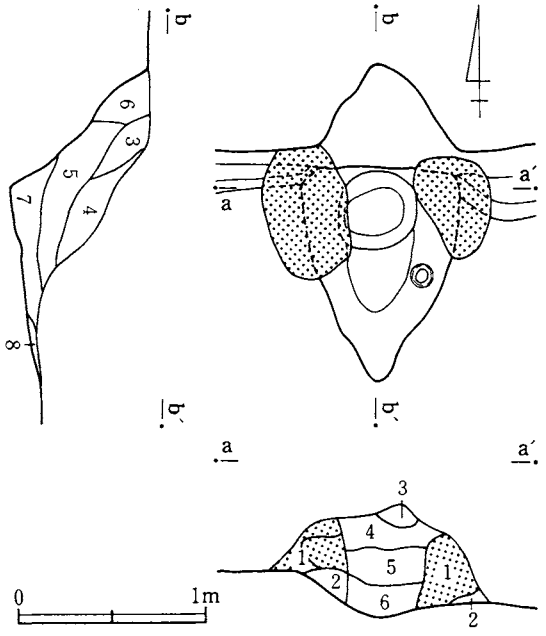


図515 D146号遺構実測図

やや緩やかな傾斜を呈している。

遺物出土状況 Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層茶褐色土層が堆積する。遺物は完形もしくは完形に近い土器が床面上より出土している。

出土遺物 遺物は、甕、坏形土器などがある。甕形土器は1、2で、1は口縁部が「く」字状に外反する小形甕である。2



1 黄灰色砂質粘土層
2 黄褐色土層
3 砂質粘土ブロック混入黒色土層
4 砂質粘土粒・焼土粒混入黒色土層
5 焼土層
6 焼土粒混入黒色土層
7 黒色土層
8 ローム粒混入黒色土層

図516 D146号遺構カマド実測図

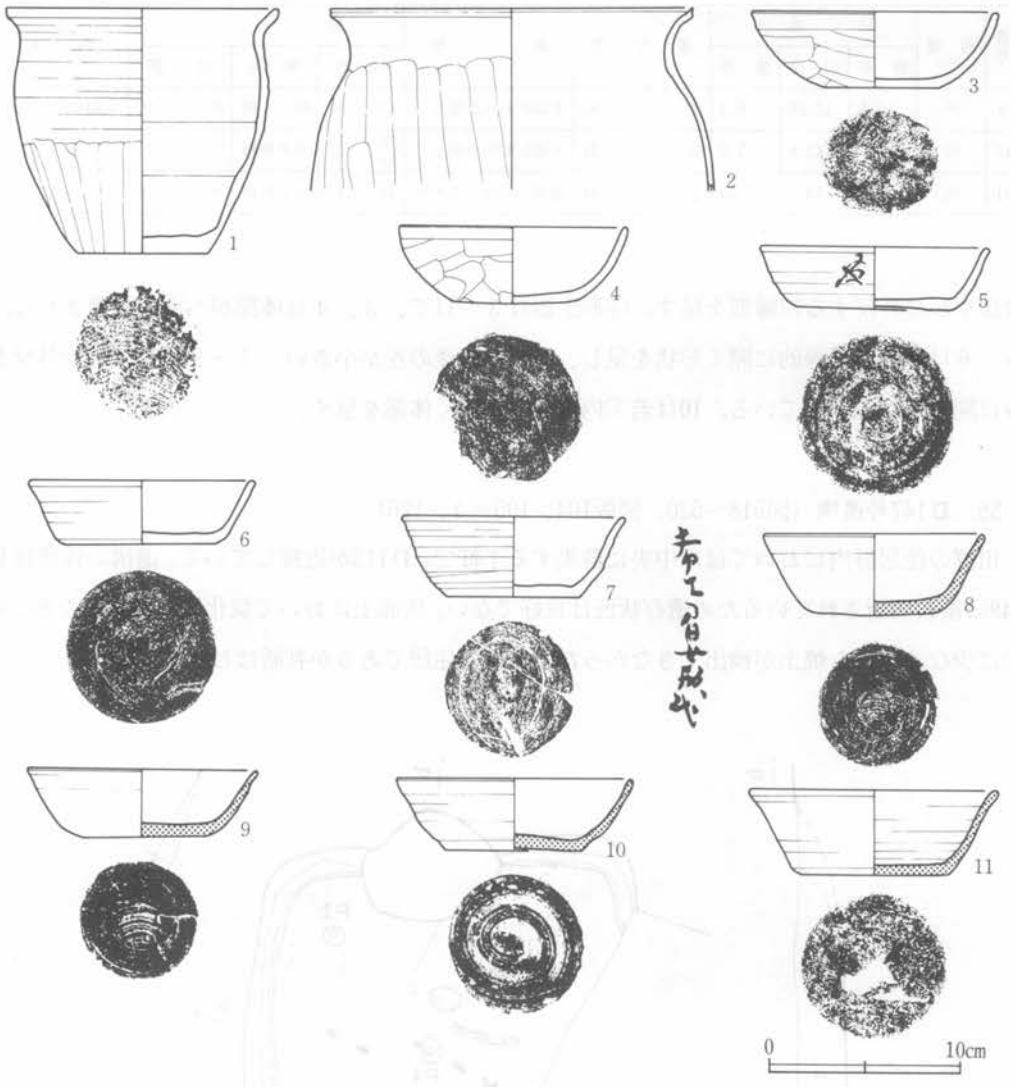


図517 D146号遺構出土遺物実測図

D146出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	13.0	14.4	6.75	3/8	ヨコナデ ヘラ削り	—	やや堅緻	茶褐色	糸切り
2	甕	—	(19.2)	—	口縁部～頸部1/2	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	二次的に火を受ける
3	坏	4.0	13.0	6.05	完形	体部ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
4	坏	4.1	12.2	6.65	3/8	体部ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
5	坏	3.25	12.2	8.2	完形	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「成」
6	坏	3.3	12.0	7.85	完形	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
7	坏	4.2	11.75	7.0	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	墨書「丈部乙刀自女形代」
8	坏	5.2	11.70	6.7	完形	下端回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	糸切り

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
9	坏	3.5	12.20	6.3	完形	下端回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	糸切り
10	坏	3.7	12.6	7.3	完形	下端回転ヘラ削り	雲母砂粒	やや堅緻	灰色	
11	坏	4.55	13.2	7.65	完形	底部一方向ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	灰色	

は緩やかに外反する口縁部を呈す。坏形土器は3～11で、3、4は体部がヘラ削調整される。5、6は体部が直線的に開く形状を呈し、口径と底径の差が小さい。7～9、11は若干外反ぎみに開く形状を呈している。10は若干内彎ぎみに開く体部を呈す。

55. D147号遺構（図518～520、図版104、105－3、126）

III群の住居群内においてほぼ中央に群集する1軒で、D113が近接している。遺構の西側はD148に重複切断されているため遺存状況は良好でない。床面上において炭化物を検出したが、量的に少なく、また焼土が検出できなかったため焼失住居であるか判断はむずかしい。

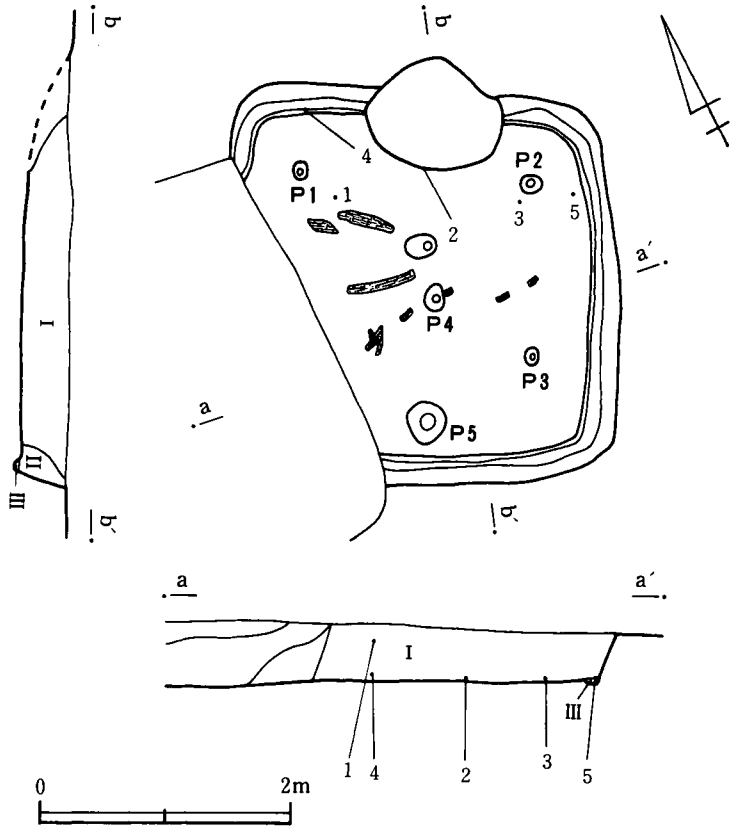


図518 D147号遺構実測図

遺構　北壁2.94m、東壁2.85mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.45m掘り込んでおり、直下には幅0.20m、深さ0.07mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。西壁部分にも構築されていたものと考えられる。床面は全体に堅緻な状況で、特に中央部は顕著である。柱穴は南西部分が不明であるが、ほぼ対角線上に配置するP_1～P_3を検出した。いずれも径平均0.14m、深さ平均0.14mを計る。その他、南壁中央部に近接して径0.33m、深さ0.16mを計るP_5を検出した。

カマド　北壁中央部を0.27m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙道部まで一体化している。天井部は煙道部で一部残存するものの状況は悪い。火床部は深さ0.04mで浅い擂鉢状の掘り込みを呈している。火袋に相当する袖は焼土化が著しい。煙道部は緩やかな傾斜を呈している。

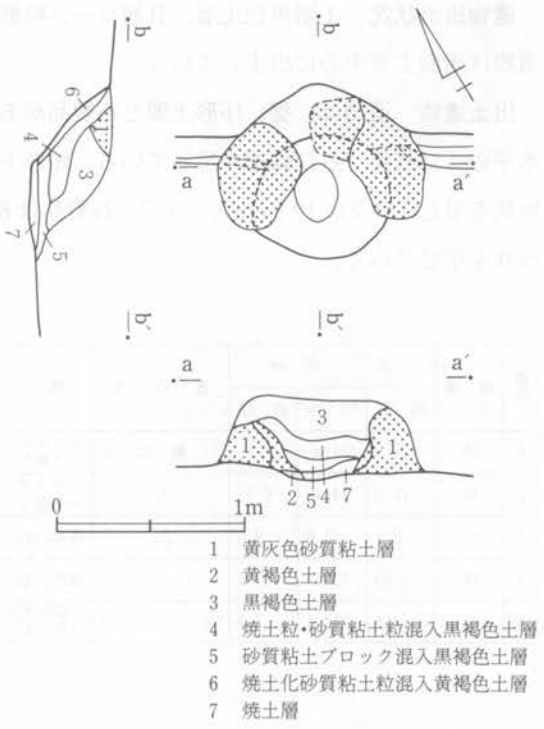


図519　D147号遺構カマド実測図

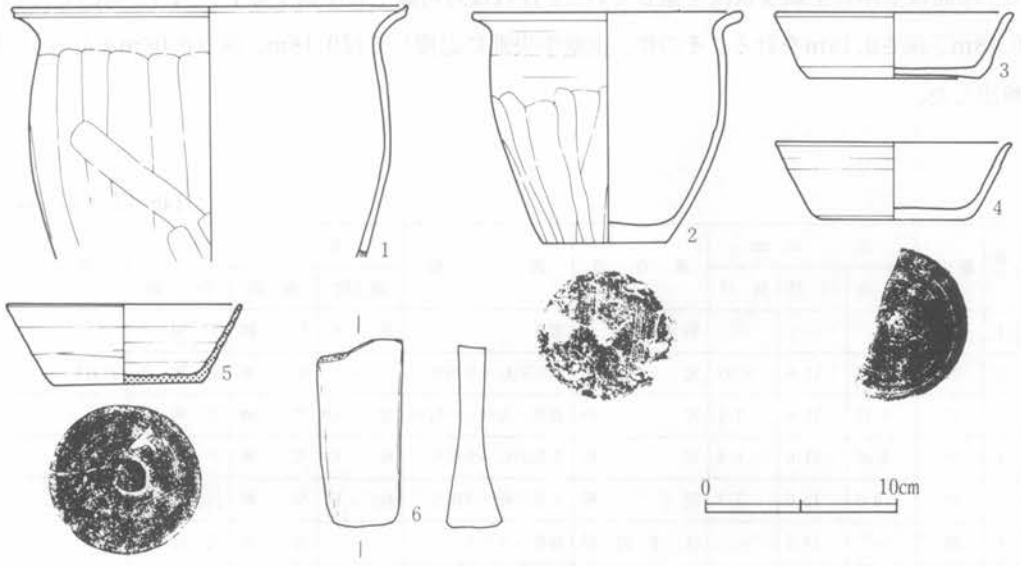


図520　D147号遺構出土遺物実測図

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層ローム粒混入黒褐色土層、Ⅲ層茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上を中心に出土している。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器と石製品がある。甕形土器は1、2で、大小の差はあるが水平近くに外反する口縁部を呈している。坏形土器は3～5で、いずれも体部が直線的に開く形状を呈し、口径は12.5cm大である。石製品は6の凝灰岩製の砥石である。一端が著しい研きべりを生じている。

D147出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	(21.0)	—	口縁部 ½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
2	甕	12.0	14.45	6.55	¾	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒褐色	糸切り
3	坏	3.4	12.6	9.0	¾	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	二次的に火を受ける
4	坏	4.05	12.45	7.4	½	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
5	坏	4.1	12.4	7.9	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	灰色	ヘラ切り

56. D148号遺構（図521～523、図版105－1・2、126）

Ⅲ群の住居群内においてほぼ中央に群集する1軒で、D113、D146が近接している。D147の南西部分を重複切断して構築している。

遺構　北壁2.70m、東壁3.05mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.55m掘り込んでおり、直下には幅0.20m、深さ0.05mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は対角線上に配置するP_1～P_4を検出した。径0.18m、深さ0.15mを計る。その他、南壁中央部に近接して径0.18m、深さ0.08mを計るP_5を検出した。

D148出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	胴部 ½	磨き	砂粒	堅緻	茶褐色	
2	坏	3.5	11.6	8.35	完形	底部回転ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	糸切り
3	坏	4.15	11.6	7.1	完形	底部一方向ヘラ削り	雲母	堅緻	茶褐色	
4	坏	3.95	11.6	6.8	完形	下端回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
5	坏	4.3	12.6	7.3	完形	下端回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	(内)茶褐色 (外)黒褐色	
6	鉢	—	18.6	—	ほぼ完形	体部ヘラナデ	—	堅緻	茶褐色	内黒
7	壺	11.4	3.95	4.45	完形	下端静止ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	糸切り

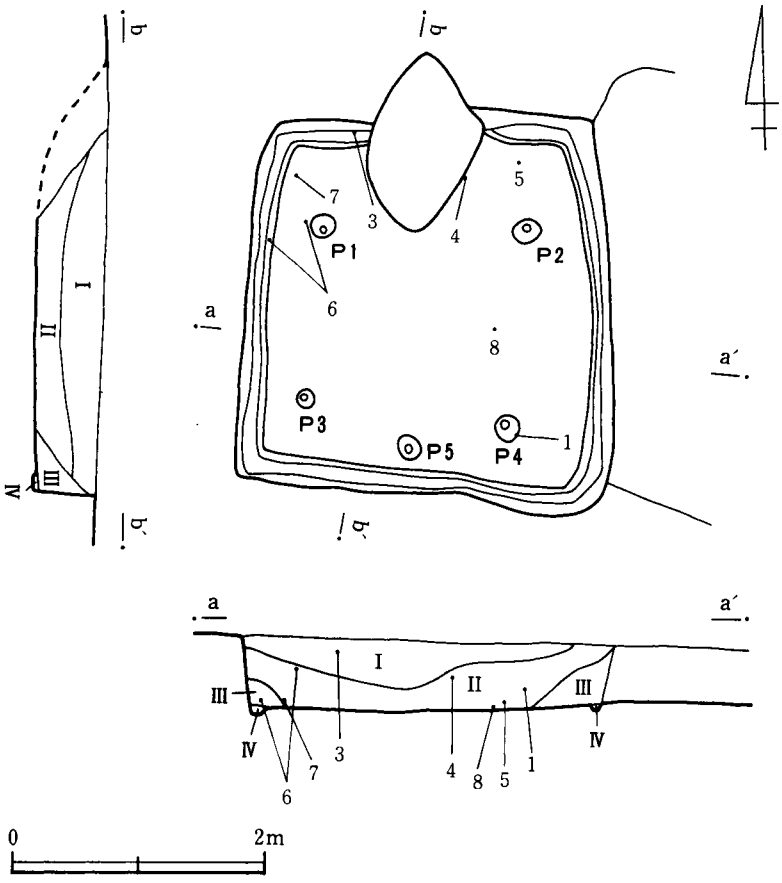
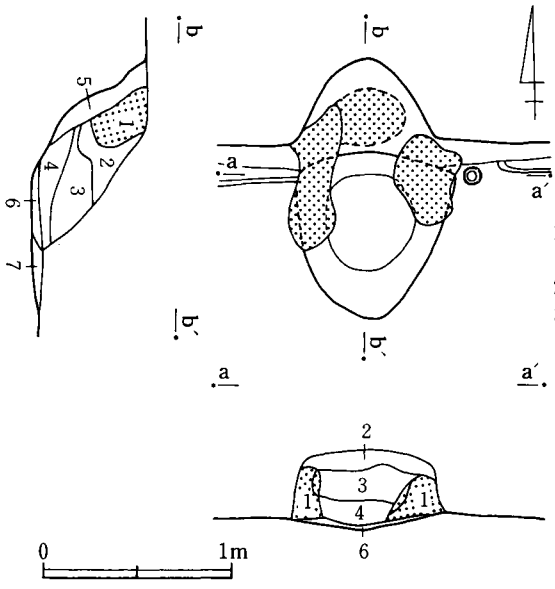


図521 D148号遺構実測図

カマド　北壁中央部を0.43m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙出しまで一体化している。天井部は煙道部分に遺存するのみである。火床部は掘り込み外に位置し、深さ0.05mの浅い掘り込みを呈している。火袋に相当する袖は焼土化が著しい。煙道部は緩やかな傾斜を呈して



1　黄灰色砂質粘土層
2　黒色土層
3　砂質粘土粒混入黒色土層
4　焼土層
5　焼土粒混入黒色土層
6　黄褐色土層
7　ローム粒混入黒色土層

図522 D148号遺構カマド実測図

いる。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層ローム粒混入黒色土層、Ⅲ層黒褐色土層、Ⅳ層茶褐色土層が堆積する。遺物は完形もしくは完形に近い土器がⅡ、Ⅲ層を中心として出土している。カマド内出土も認められる。

出土遺物　遺物は、甕、坏、鉢、壺形土器と鉄製品がある。甕形土器は1で、条痕状の磨きがある胴部である。坏形土器は2～5で、口径11.5cm大の2～4と、口径12.5cm大の5がある。鉢形土器は6で、大形の坏の形状を呈し、内面は黒色処理される。壺形土器は7で小形の長頸瓶である。鉄製品は8で鎌の刀先である。

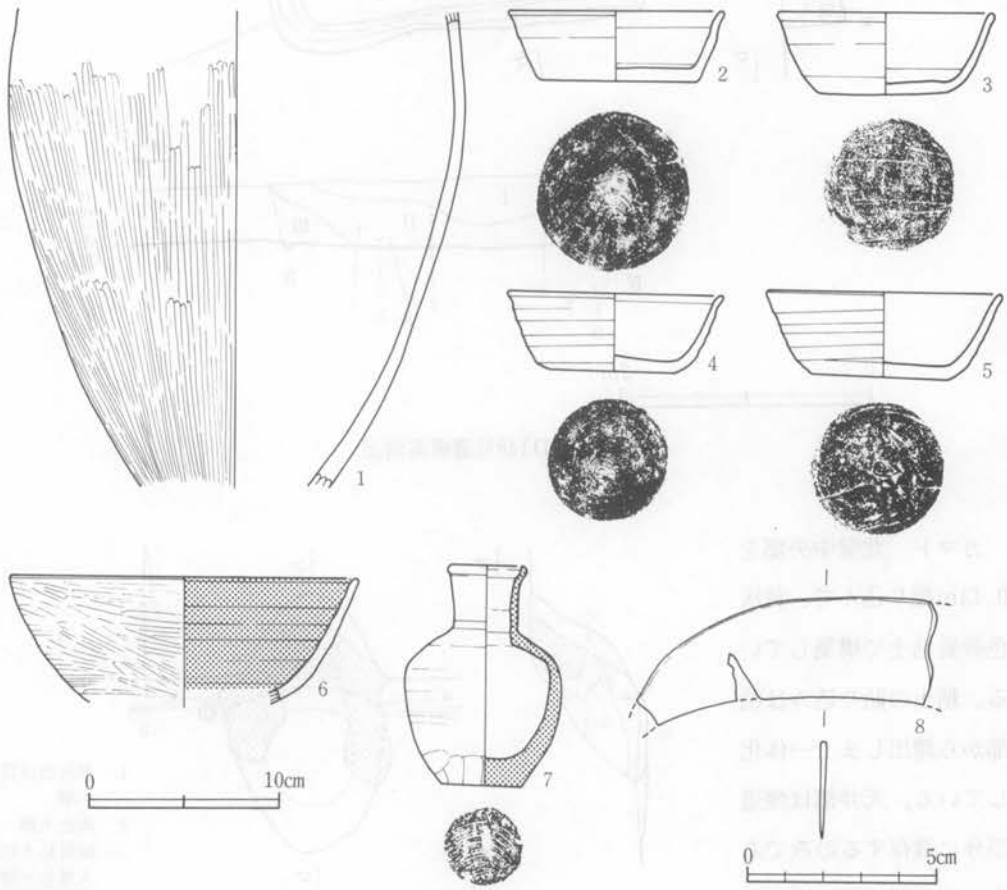


図523　D148号遺構出土遺物実測図

57. H010号遺構（図524、図版106－1）

Ⅲ群の遺構群内においては中央の東側に位置し、D106、D107、D115が近接している。一部溝による攪乱を受けている。

遺構　遺構として痕跡を止めるものは柱穴のみである。3間×2間の南北棟建物である。柱掘りかたは径平均0.5m、深さ0.4mの規模で、ほぼ円形を呈している。柱痕を認めることができる柱穴があるものの据かたは検出できない。柱穴内にはI層暗褐色土層、II層黒色土層、III層ローム粒混入暗褐色土層、IV層ローム粒混入黒色土層が堆積している。遺物の出土は皆無である。

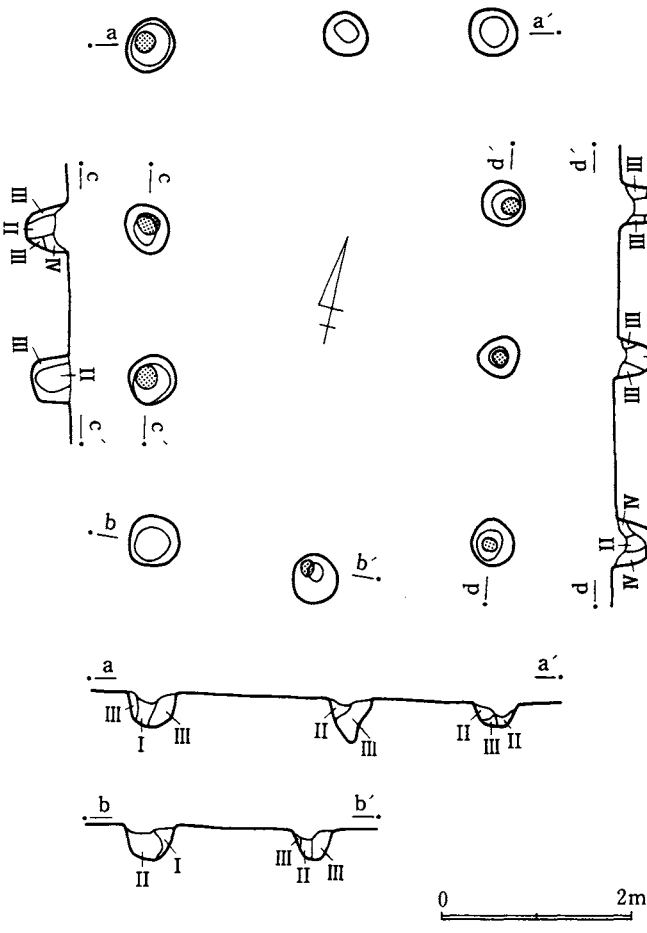


図524　H010号遺構実測図

58. P001号遺構（図525・526、図版106－2）

III群の遺構群内においてほぼ中央部に位置し、D105が近接している。

遺構　長径1.95m、短径1.7mでほぼ楕円形の平面形を呈する遺構である。壁の掘り込みは北側でほぼ垂直であるのに対し、南側ではかなりの傾斜を呈しており、約0.52mを計る。底面はほぼ平坦であるが踏み固められたような状況は呈していない。ピット等の施設は認められない。出土遺物は覆土中より数点出土した程度である。

P001出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
2	坏	—	—	5.8	破片	—	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
3	高台付坏	—	—	—	破片	—	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り

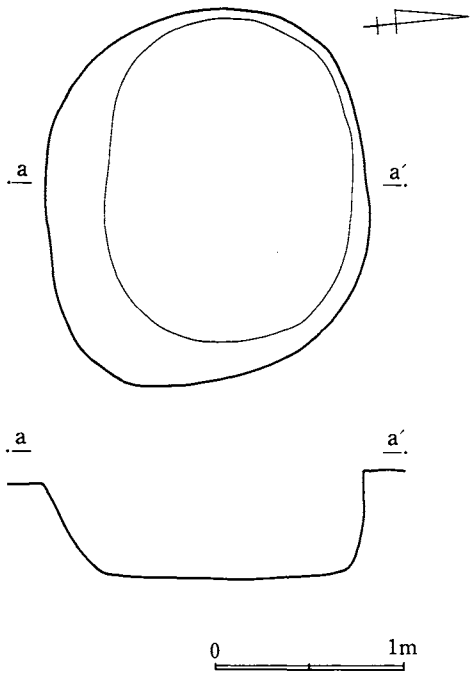


図525 P001号遺構実測図

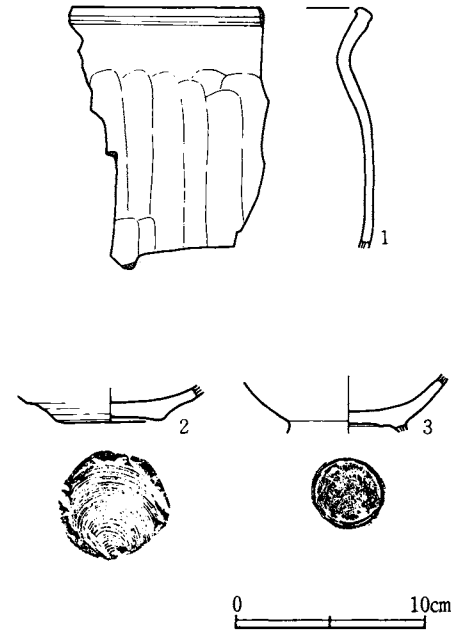


図526 P001号遺構出土遺物実測図

出土遺物 遺物は、甕、坏形土器がある。甕形土器は1で、口唇部に特徴のある口縁部破片である。2、3は坏形土器の底部破片で、3は高台が付つものであるが欠損している。

59. P002号遺構（図527、図版106－3）

III群の遺構群内において中央に群集する1基で、D141が近接している。D100の南西部分を重複切断している。

遺構 長径3m、短径2.7mを計る円形の平面形を呈する遺構である。掘り込みは傾斜を呈している。諸般の事由で完掘することができなかったため、底面の状況は明らかでない。I層粘度質灰色土層、II層ローム粒混入粘土質灰色土層、III層黒色土層、IV層粘度粒混入褐色土層、V層粘土粒混入褐色土層が調査範囲内で認められるが、いずれも遺物は包含していない。

60. P004号遺構（図528、図版107－1）

III群の遺構群内においてほぼ中央部の西側に位置し、D090が近接している。

遺構 長径1.2m、短径1.05mでほぼ楕円形の平面形を呈する遺構である。壁の掘り込みは傾斜を呈し、0.33mで底面に達する。底面は平坦であるが踏み固められた状況ではない。

遺構内にはI層黒色土層、II層黒色土層が堆積しているが、いずれも遺物は包含していない。したがって図示する遺物はない。

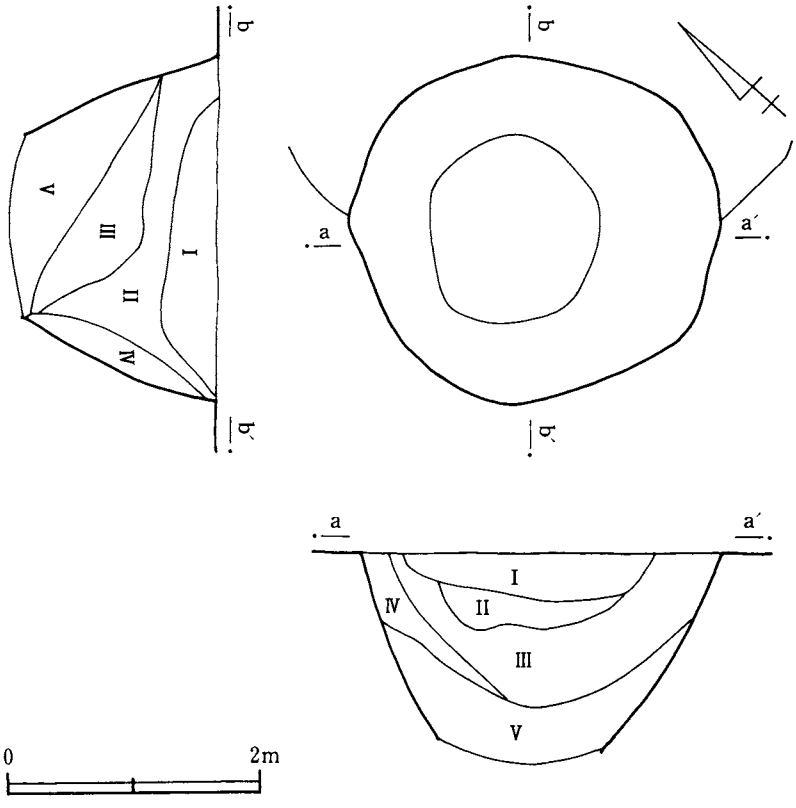


図527　P002号遺構実測図

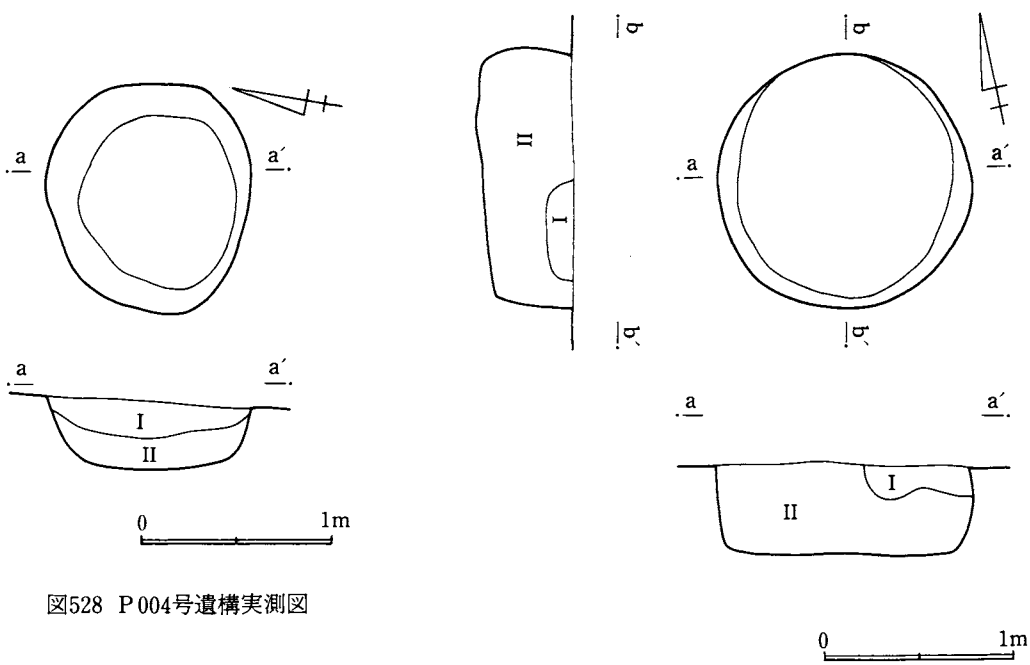


図528　P004号遺構実測図

図529　P011号遺構実測図

61. P011号遺構（図529・530、図版107－2）

III群の遺構群より約40m東側の地域に位置し、P015が近接している。住居群と距離的な隔たりを有しているが、一応III群中の遺構として報告したい。

遺構　径1.34mを計る円形の平面形を呈す遺構である。壁はほぼ垂直に0.45m掘り込んで底面に達する。底面は平坦であるが、踏み固められたような状況は呈していない。

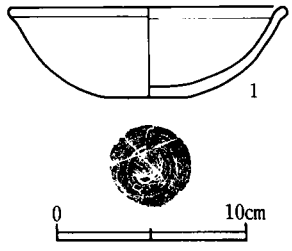


図530　P011号遺構出土遺物実測図

遺物出土状況　I層焼土粒炭化粒混入黒褐色土層、II層黒色土層が堆積している。遺物の出土はきわめて稀少である。

出土遺物　遺物は稀少で、図示できるのは坏形土器1点のみである。口径に比して底部が小さく、体部は内彎ぎみに開く形状を呈している。

P011出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	坏	4.8	14.9	4.3	3/4	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	糸切り

62. P013号遺構（図531・532、図版107－3）

III群の遺構群内において南西端部に位置し、D124、D126が近接している。遺構の南側は北面から南東に連なる溝によって切断されているため全体の状況は充分把握できない。

遺構　長辺推定1.3m、短辺0.65mの長方形の平面形を呈す土壙である。掘り込みは2段になっており、上段はかなりの傾斜を呈し、掘り込み面より0.15mからほぼ垂直に0.28m掘り込んで底面に達する。底面は平坦であるが踏み固められた状況は呈していない。

遺物出土状況　I層ロームブロック混入暗褐色土層、II層茶褐色土層、III層黒褐色土層、IV層暗褐色土層、V層ロームブロック混入黒褐色土層が堆積しており、遺物はII層、III層から出土している。

P013出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	7.0	底部のみ	ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
2	坏	3.6	11.4	6.8	完形	底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	茶褐色	墨書「廓」、「豊」、糸切り
3	坏	4.0	13.1	9.7	完形	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰黄褐色	糸切り

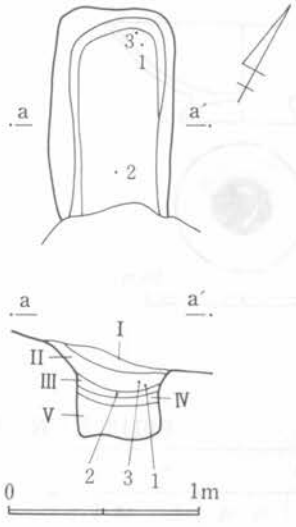


図531　P013号遺構実測図

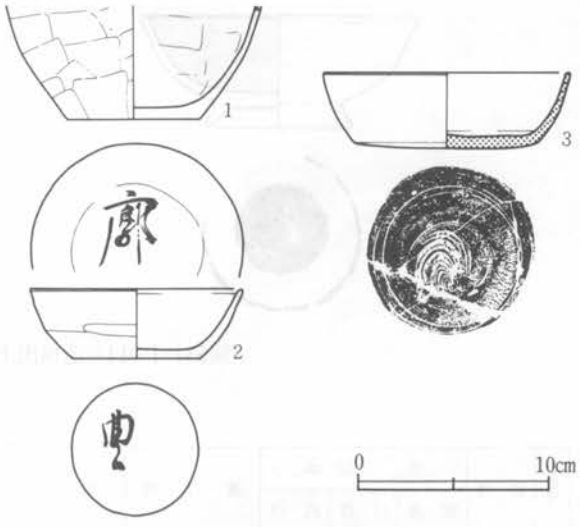


図532　P013号遺構出土遺物実測図

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器がある。甕形土器は1で、小形の底部破片である。坏形土器は2、3で、2は体部が内彎ぎみに開く形状を呈している。3は体部が内彎ぎみに直立するもので、口径と底径の差が小さい。

63. P014号遺構（図533・534、図版108－1）

III群の遺構群内において南東に位置し、最も近接するD116まで約28mを有しており、単独に位置するかのようである。

遺構　長辺1.5m、短辺1.3mの長方形の平面形を呈する土壙である。壁は傾斜を呈して約0.35m掘り込んで底面に達する。底面は平坦であるが、踏み固められた状況ではない。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層茶褐色土層、III層焼土粒混入黒色土層、IV層粘土粒混入茶褐色土層が堆積しており、遺物は壁際のI、II層より出土しているが、量的に少ない。

出土遺物　遺物は、坏形土器のみである。いずれも「ハ」字状に開く高台を有し、体部は内彎ぎみに大きく開く形状を呈している。1は内面を黒色処理している。

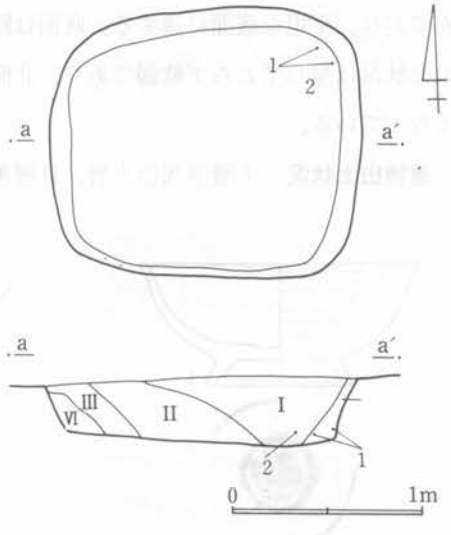


図533　P014号遺構実測図

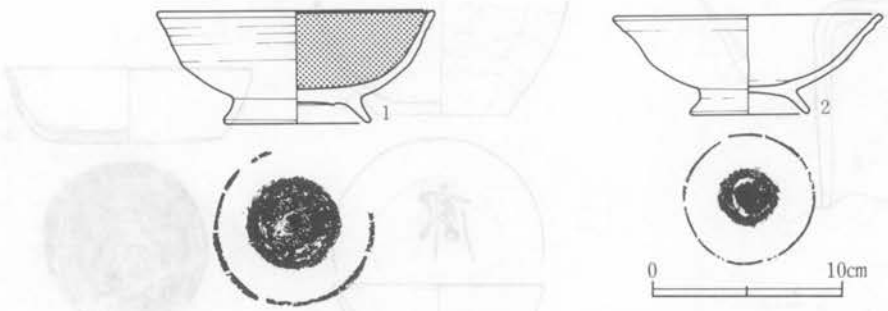


図534 P014号遺構出土遺物実測図

P014出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	高台付坏	6.0	(14.8)	7.8	½	—	砂粒	堅緻	茶褐色	内黒
2	高台付坏	5.3	14.4	6.4	¾	—	砂粒	堅緻	黒褐色	

64. P015号遺構（図535・536、図版108－2）

III群の遺構群より約40m東側の地域に位置し、P011が近接している。住居群と距離的な隔たりを有しているが、一応III群中の遺構として報告したい。一部攪乱を受けているが全体は充分に把握できる。

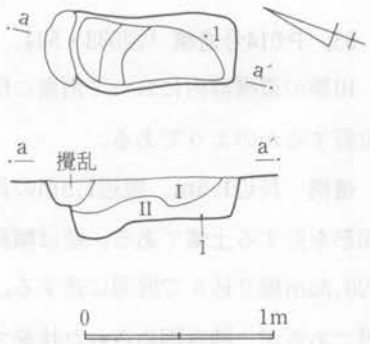


図535 P015号遺構実測図

遺構　長辺0.85m、短辺0.35mの長方形の平面形を呈する土壙である。壁はほぼ垂直に0.23m掘り込んでおり、平坦な底面に達する。底面は踏み固められた状況は呈しておらず軟弱であり、北側は若干深くなっている。

遺物出土状況　I層暗褐色土層、II層黄褐色土層

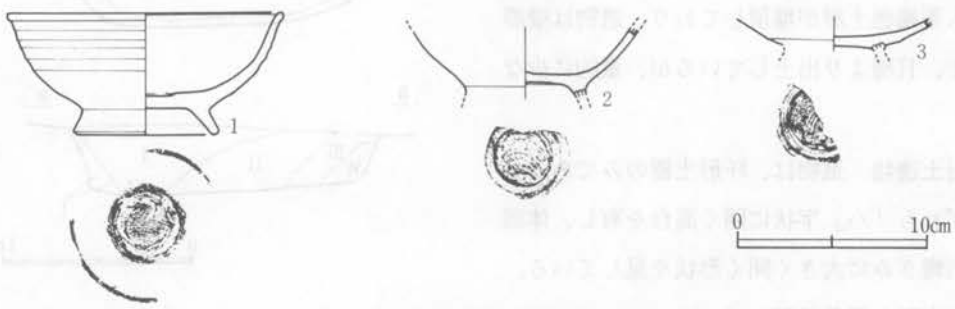


図536 P015号遺構出土遺物実測図

が堆積しており、遺物は少量であるが底面や覆土中より出土している。

出土遺物　遺物は、坏形土器のみである。いずれも「八」字状に大きく開く高台を有し、体部は内彎ぎみに開く形状を呈している。

P015出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	高台付坏	6.3	(14.8)	7.8	3/4	—	砂粒	堅緻	黒褐色	糸切り
2	高台付坏	—	—	—	底部破片	—	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
3	高台付坏	—	—	—	底部破片	—	砂粒	堅緻	黒色	糸切り

65. P022号遺構（図537、図版108－3）

III群の遺構群内において北側に位置し、D064、D067が近接している。

遺構　長径1.24m、短径0.88mを計る楕円形の平面形を呈する遺構である。壁は傾斜を呈し約0.12m掘り込んで底面に達する。底面は平坦であるが軟弱な状況を呈している。

遺構内には暗褐色土層が堆積しているが、遺物は包含しておらず、よって図示できる遺物はない。

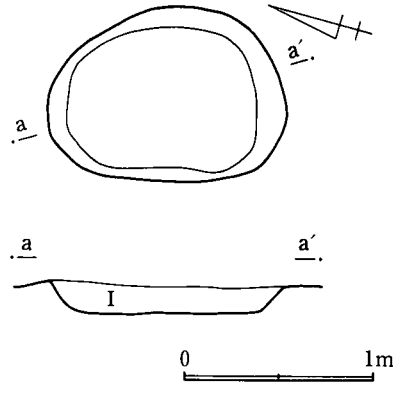


図537　P022号遺構実測図

第5節　第IV群の遺構と遺物

歴史時代の第IV群は、竪穴住居跡13軒、掘立柱建物跡9棟、ピット3基で構成される群で、S－7、T－7の地域において検出した群である。

第IV群は、標高14mの段丘上に立地しており、住居はほぼ環状形に分布している。群の東側は地区界に接するため、未調査地域に広がる可能性もあるが、全体の纏りから見ればほぼ完結した群である可能性が大である。

既に指摘したように北海道跡においては掘立柱建物跡が数少ない傾向を示しているところであるが、この第IV群に限って、住居跡13軒に対して掘立柱建物跡は9棟位置しており、他群とは比較にならない数を有している。掘立柱建物跡が偏在する原因については明らかでないが、集落構成において第IV群が他群とは異質な歴史背景を有して位置しているのではないかと考えられる。

掘立柱建物跡は、環状形に分布する住居群のほぼ中央部に位置しており、中央部の空間が広場的な意味を有しているとするならば、まさにその広場を占有している状況を呈している。また、住居と掘立柱建物が近接して位置する状況もあり、すべての遺構が同時性を示していないことを指摘できる（図538）。

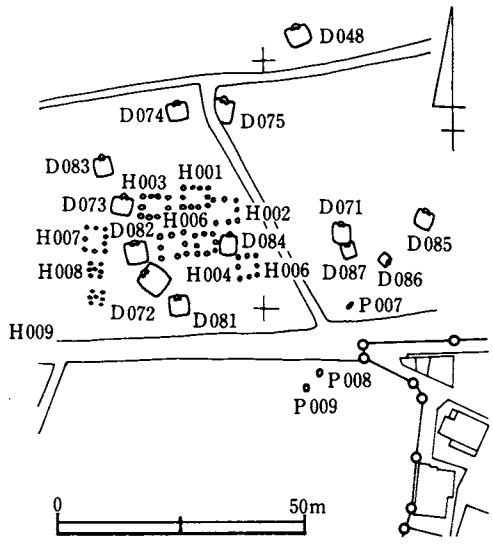


図538 歴史時代第Ⅳ群遺構分布状況図

1．D048号遺構（図539～541、図版132—1・2、144）

Ⅳ群の住居群内において最も北側に位置し、Ⅶ群に近接している。

遺構　北壁3.63m、東壁3.74mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.46m掘り込んでおり、直下に幅0.23m、深さ0.12mの壁溝が北壁を除いて認められる。床面は中央部を中心として堅緻な状況を呈しているものの、周辺はやや軟弱である。柱穴は壁に寄

D048出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	—	(12.8)	—	1/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
2	甕	—	(28.0)	—	口縁部～胴部1/3	ヨコナデ 叩きじめ	—	堅緻	灰色	
3	甕	—	—	(15.2)	胴部～底部1/3	叩きじめ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
4	鉢	—	(18.4)	—	口縁部～胴部1/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒色	
5	坏	3.9	(12.2)	59	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	(内)茶褐色 (外)黒褐色	
6	坏	3.9	12.4	6.6	1/2	底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	(内)茶褐色 (外)黒褐色	墨書「㊀」
7	坏	3.6	(13.6)	(6.6)	1/4	—	—	堅緻	茶褐色	
8	坏	4.3	13.8	7.7	口縁部～底部1/10	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	茶褐色	墨書「承和五年二月田」、人面
9	坏	3.9	15.1	8.0	2/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「へ」 糸切り
10	坏	—	(15.2)	—	1/3	—	—	堅緻	茶褐色	内黒
11	高台付坏	—	—	9.4	高台のみ	—	雲母	堅緻	茶褐色	内面磨き 糸切り
12	坏	—	—	—	破片	—	—	堅緻	茶褐色	墨書判読不明
13	皿	1.7	14.4	4.8	1/2	底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	茶褐色	
14	皿	1.95	(14.8)	5.7	1/2	底部回転ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	内面磨き
15	高台付皿	3.0	13.15	5.9	完形	—	—	堅緻	茶褐色	
16	高台付皿	3.15	14.4	6.5	完形	—	—	堅緻	茶褐色	

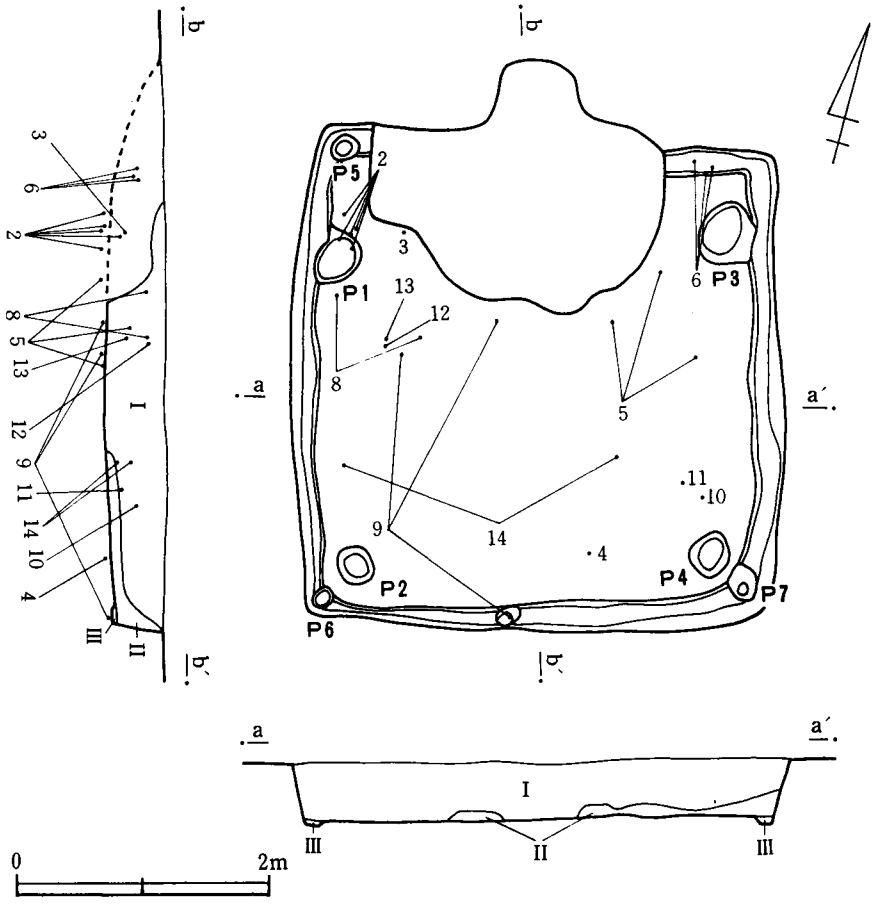


図539 D048号遺構実測図

ってP₁～P₄を検出した。径0.32m～0.52m、深さ0.18mの規模である。北東壁コーナー部分を除くコーナー部分の壁溝中に小ピットを検出した。小ピットは主柱に付属するものと思われる。

カマド　北壁中央部を三角形に最長0.67m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土は袖部から煙出し部まで一

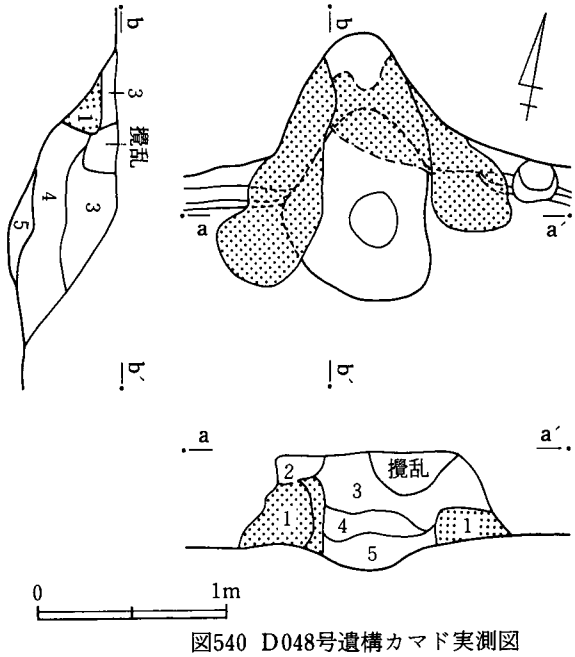


図540 D048号遺構カマド実測図

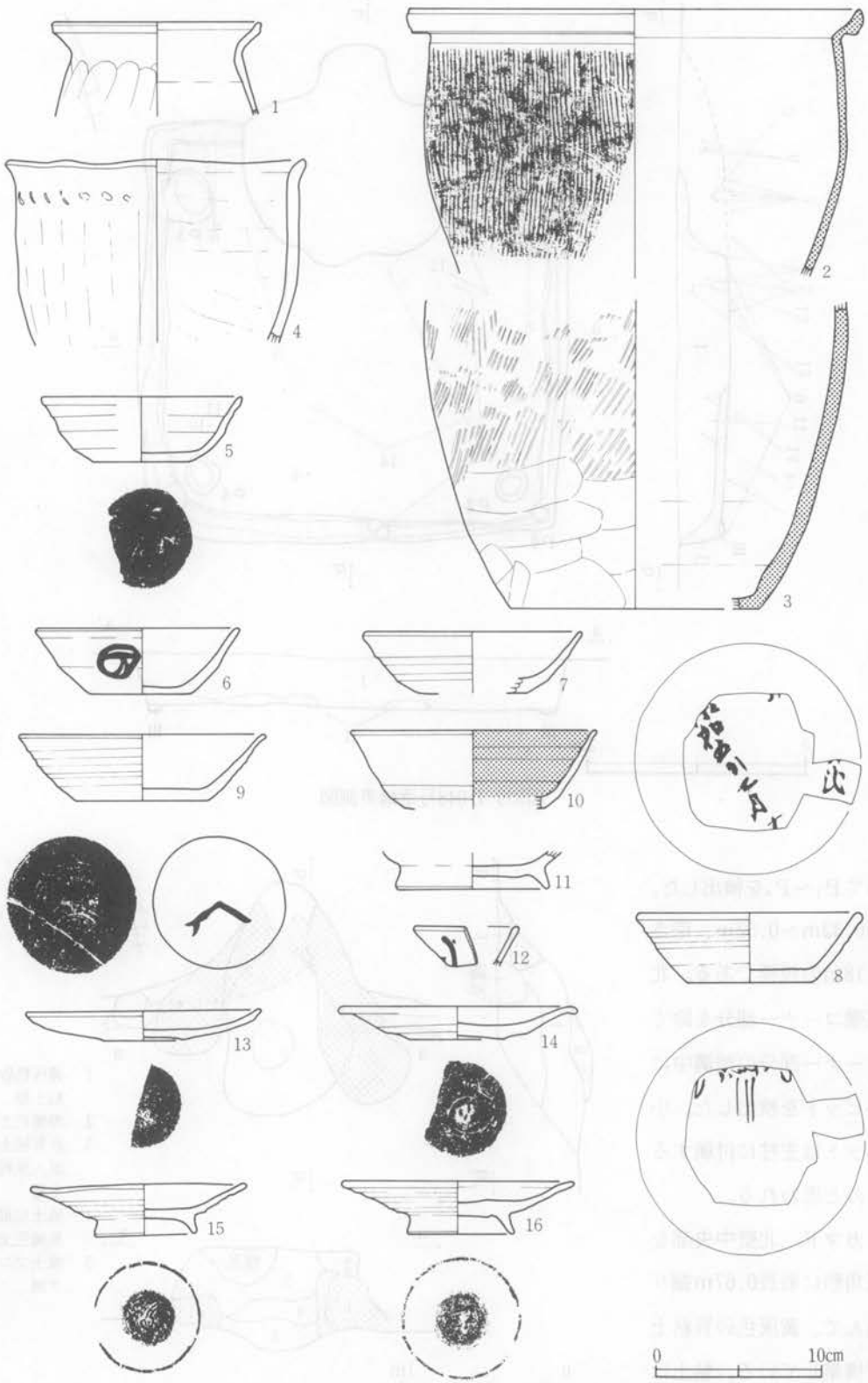


図541 D048号遺構出土遺物実測図

体化して貼り込まれており、火袋に相当する袖では焼土化が著しい。火床部は深さ0.09mで擂鉢状の掘り込みを呈し、煙道部は緩やかな傾斜を呈している。天井部は煙道部に遺存する。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層ローム粒混入黒褐色土層、III層茶褐色土層が堆積する。遺物は床面を中心に出土している。カマド内出土もある。

出土遺物　遺物は、甕、鉢、坏、皿坏土器がある。甕形土器は1～3で、1は口唇部に特徴を有する小形甕の口縁部である。2は叩き目がある口縁部破片である。3は叩き目がある広口甕の胴部下半である。鉢形土器は4で胴部は直線的で口縁部は極端に短かい。坏形土器は5～12で口径 12 cm 前後の5・6と、口径 15 cm 前後の7～10がある。11は高台が付く底部破片、12は墨書がある体部破片である。皿形土器は13～16で、13、14は平底、15、16は高台付である。

2．D071号遺構（図542～544、図版132－3、133－1）

IV群の住居群内において東側に位置し、D085、D086が近接している。遺構南東部分をD087によって重複切断されているが、ごく一部分であるため全体は充分に把握できる。

遺構　北壁3.56m、西壁3.73mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.48m掘り込んでおり、直下に幅0.19m、深さ0.04mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。南壁中央部に近接して径0.36m、深さ0.09mを計るP_1、南西コーナー部に径0.44m、深さ0.13mを計るP_2を検出した。

カマド　北壁中央部を0.38m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土は2層上に袖部から煙道部の一部まで貼り込んで

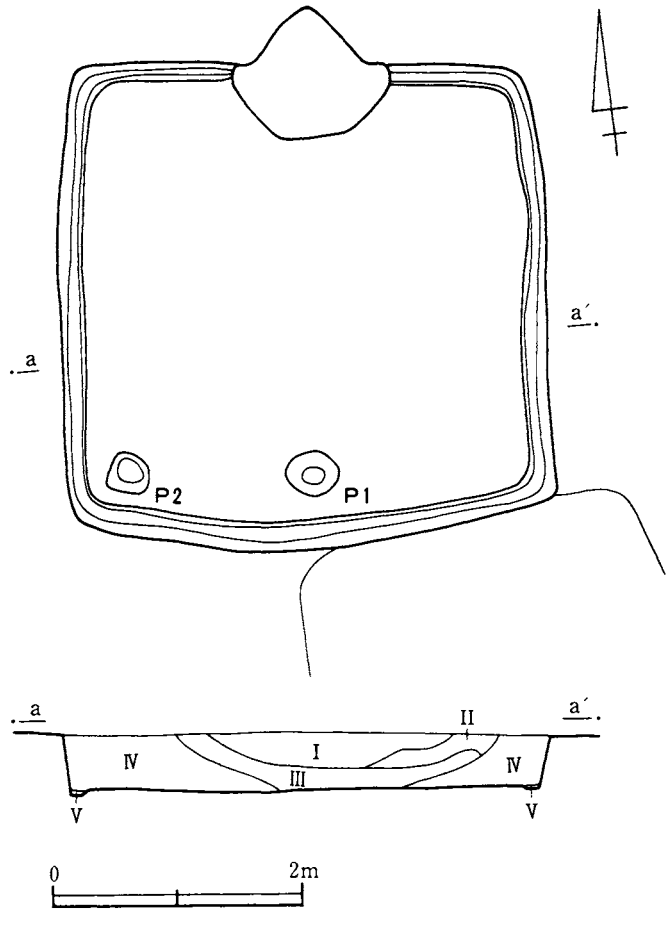
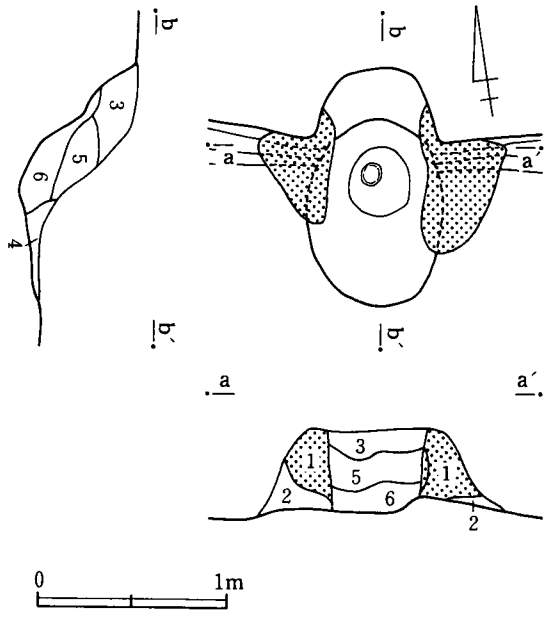


図542　D071号遺構実測図

いる。火袋に相当する袖は焼土化が認められ、火床部は深さ0.09mの擂鉢状の掘り込みを呈し、煙道部はやや急激な傾斜を呈している。天井部は遺存しない。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層ローム粒混入黒褐色土層、III層黒色土層、IV層明茶褐色土層、V層茶褐色土層が堆積する。遺物は各層より出土しているものの全体に稀少である。P_2の内部からの出土もある。

出土遺物　遺物は、甕、台付甕形土器と石製品がある。甕形土器は1、2で、1は緩やかに外反する口縁部を呈している。2は広口甕の口縁部である。台付甕形土器は3で胴部上半を欠損するが、台部は「ハ」字状に大きく開く。石製品は凝灰岩製の砥石で中央部が著しく磨滅している。



1　黄灰色砂質粘土層
2　黄褐色土層
3　黒褐色土層
4　焼土粒混入黒褐色土層
5　焼土粒・砂質粘土粒混入黒褐色土層
6　焼土層

図543　D071号遺構カマド実測図

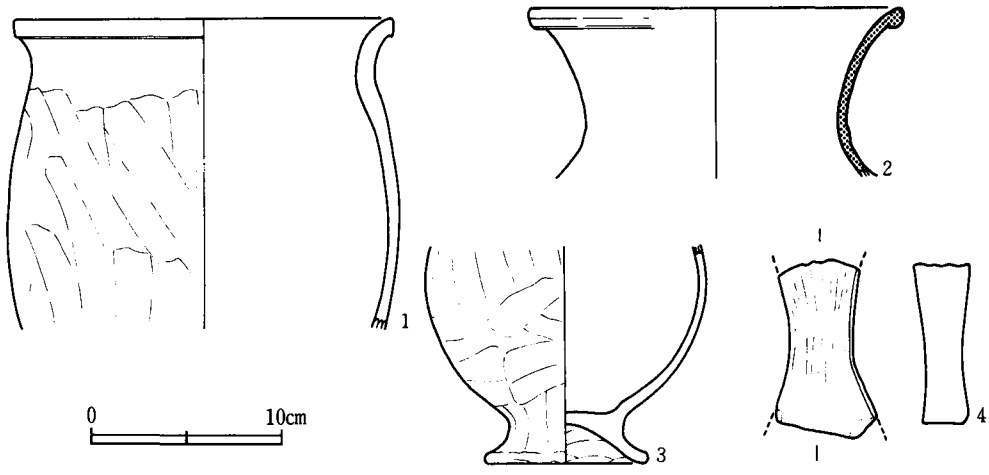


図544　D071号遺構出土遺物実測図

D071出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	20.2	—	口縁部～胴部⅓	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒 雲母	やや堅緻	黒褐色	
2	甕	—	(19.8)	—	口縁部⅓	ヨコナデ	—	堅緻	黒褐色	
3	台付甕	—	—	8.5	胴部～底部½	ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	(内)黒色 (外)茶褐色	

3．D072号遺構（図545～548、図版133－2、144）

IV群の住居群内において西側に位置し、D081、D082、H006が近接している。

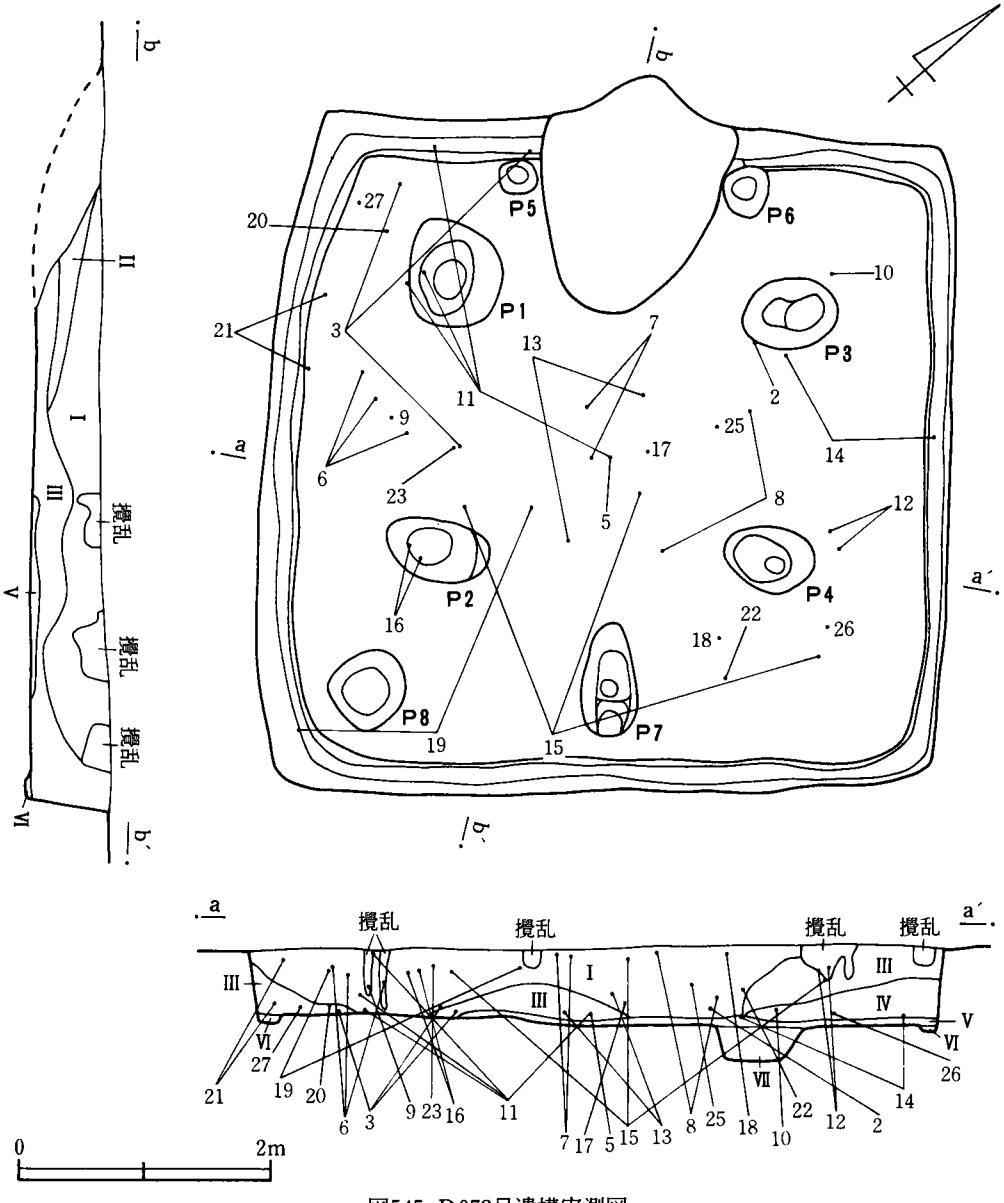


図545 D072号遺構実測図

遺構　北壁５m、東壁4.92mで方形の平面形を呈している竪穴住居跡である。壁は垂直に0.62m掘り込んでおり、直下に幅0.28m、深さ0.06mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上に位置してP_1～P_4を検出した。径平均0.75m、深さ平均0.70mを計る堅固な掘りかたである。その他、南壁中央部に近接して２つのピットが連続する径平均0.42m、深さ平均0.30mのP_7、南西コーナー部に径0.60m、深さ0.10mを計るP_8を検出した。

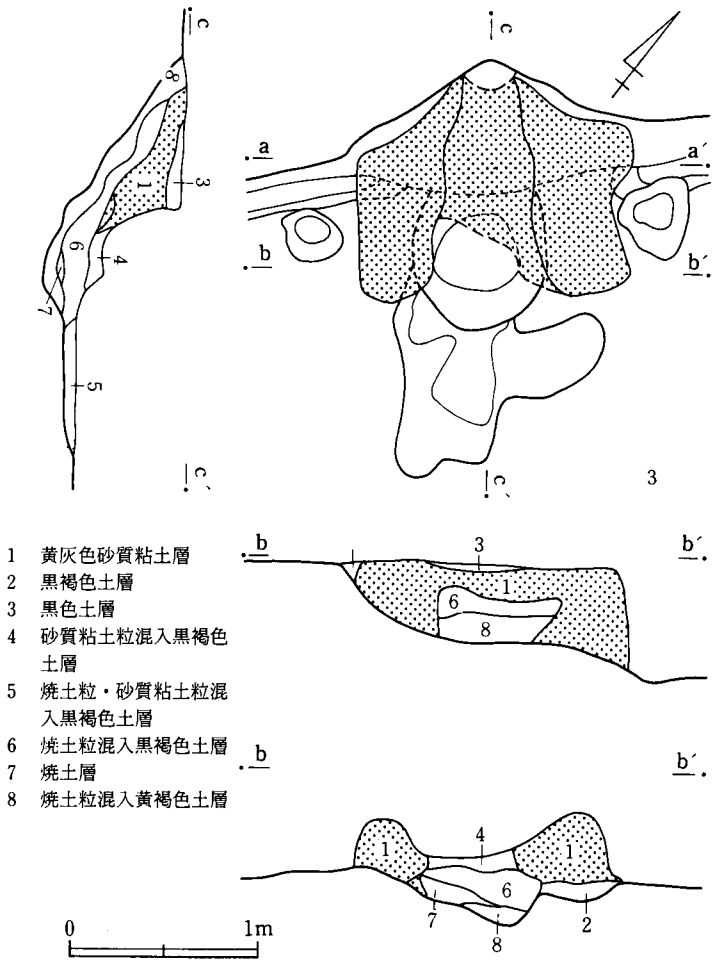


図546　D072号遺構カマド実測図

カマド　北壁中央部を0.41m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。遺存状況はきわめて良好である。粘土は袖部から煙出し部まで一体化して貼り込まれており、天井部も良好に遺存している。火袋に相当する袖は焼土化が認められ、火床部は深さ0.12mで擂鉢状の掘り込みを呈しており、煙道部は緩やかな傾斜を呈している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層焼土粒粘土粒混入黒色土層、Ⅲ層黒褐色土層、Ⅳ層明褐色土層、Ⅴ層ローム粒混入黒褐色土層、Ⅵ層茶褐色土層、Ⅶ層暗茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上出土のものは少ない反面各層より多量に出土している。カマド内出もある。

出土遺物　遺物は、甕、甑、坏、高坏、壺鉢形土器と鉄製品、土製品がある。甕形土器は１～３で、１は口縁部が一度直立して外反する。２は口唇部に特徴を有す口縁である。３は口縁部が緩やかに外反するものである。甑形土器は４、５で、いずれも叩き目がある。坏形土器は６～19で、６～８、10～13はほぼ体部が直線的に開く。14、16は若干内彎ぎみに開く体部を呈

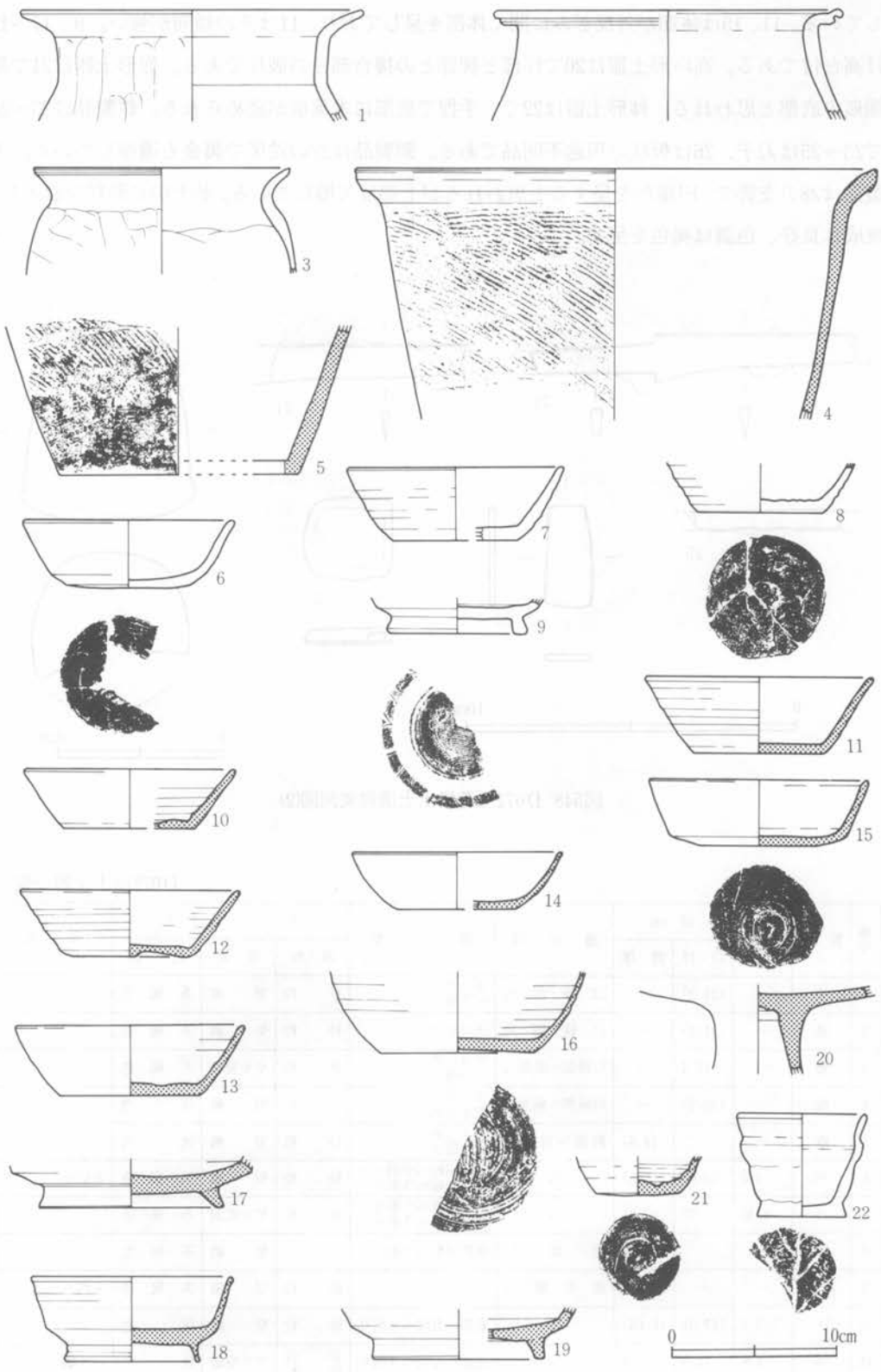


図547 D072号遺構出土遺物実測図(1)

している。11、15は体部が外反ぎみに開く体部を呈しており、11はその傾向が強い。9、17～19は高台付である。高坏形土器は20で坏部と脚部との接合部分の破片である。壺形土器は21で長頸瓶の底部と思われる。鉢形土器は22で、手捏で底部に木葉痕が認められる。鉄製品は23～26で23～25は刀子、26は板状の用途不明品である。銅製品は27の鉈尾で裏金も遺存している。土製品は28の支脚で、円錐形を呈すると思われるが上部は欠損している。胎土中に砂粒を混入し、焼成は良好、色調は褐色を呈す。

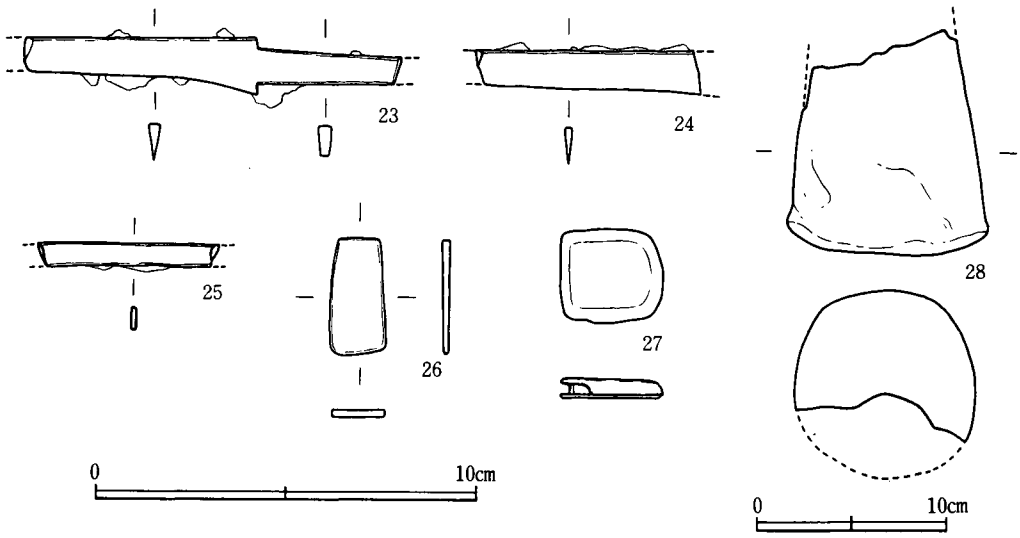


図548 D072号遺構出土遺物実測図(2)

D072出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	(21.2)	—	口縁部 1/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
2	甕	—	(21.5)	—	口縁部 1/3	ヨコナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	
3	甕	—	15.7	—	口縁部～頸部2/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
4	甑	—	(32.2)	—	口縁部～胴部1/3	ヨコナデ 叩きじめ	小石	堅緻	灰色	
5	甑	—	—	(14.6)	胴部～底部1/3	叩きじめ ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	
6	坏	4.0	(13.0)	7.55	1/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	糸切り
7	坏	4.35	(13.5)	(7.8)	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	赤褐色	
8	坏	—	—	7.6	底部 1/2	底部回転ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	
9	高台付坏	—	—	8.8	高台部 1/2	—	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
10	坏	3.5	(13.0)	(8.05)	1/4	底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	
11	坏	4.6	14.0	7.8	1/2	底部一方向ヘラ削り	雲母 砂粒	やや堅緻	灰色	ヘラ切り
12	坏	4.0	(13.6)	6.9	1/2	—	雲母	堅緻	灰色	ヘラ切り、磨滅あり

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
13	坏	4.1	(14.1)	(8.5)	¼	底部回転ヘラ削り	—	やや堅緻	灰色	
14	坏	3.4	(13.0)	7.1	⅓	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	
15	坏	3.85	(13.4)	10.6	⅓	底部回転ヘラ削り	—	堅緻	灰色	
16	坏	—	—	9.45	体部 ½	底部回転ヘラ削り	—	堅緻	灰色	糸切り
17	高台付坏	—	—	11.4	高台部 ½	—	砂粒	堅緻	灰色	
18	高台付坏	5.0	12.4	8.3	⅓	底部回転ヘラ削り	—	堅緻	灰色	
19	高台付坏	—	—	10.6	高台部 ½	—	—	堅緻	灰色	
20	高坏	—	—	—	接合部のみ	—	雲母	堅緻	灰色	
21	壺	—	—	5.2	底部のみ	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	
22	鉢	6.2	(8.0)	5.45	⅓	—	—	堅緻	茶褐色	木葉痕

4．D073号遺構（図549～551、図版133－1、134－1・2、144）

IV群の住居群内において西側に位置し、D082、D083、H003が近接している。

遺構　北壁3.89m、東壁2.96mで、長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に

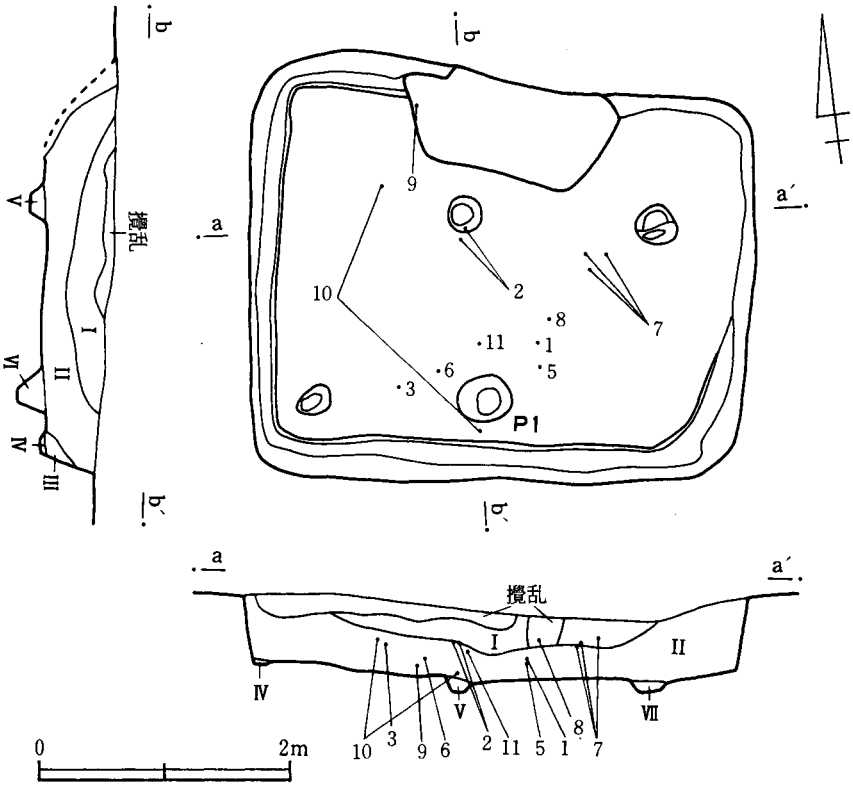


図549　D073号遺構実測図

0.53m掘り込んでおり、直下に幅0.23m、深さ0.07mの壁溝を検出したが、カマド構築部には認められず、また、東壁部分は明瞭に検出することはできなかった。床面はやや軟弱な状況を呈している。床面にはP₁～P₄のピットを検出したが柱穴にはなり得ない。

カマド　北壁中央部を0.17m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙道部まで一体化しており、火袋に相当する袖は焼土化が著しく、火床部は深さ0.05mで浅い擂鉢状の窪みが認められ、煙道部は急激な傾斜を呈している。

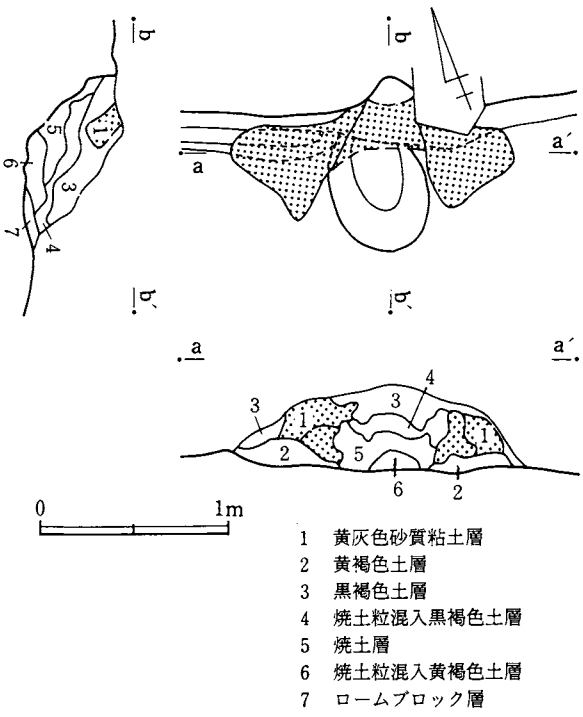


図550　D073号遺構カマド実測図

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層明茶褐色土層、Ⅳ層茶褐色土層、Ⅴ層ローム粒混入暗茶褐色土層、Ⅵ層暗茶褐色土層、Ⅶ層ローム粒混入黒褐色土層が堆積する。遺物はⅡ層上面を中心としており、廃棄の状況が窺える。

D073出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	灰色	
2	甕	—	—	(17.1)	底部 1/3	ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
3	甕	—	—	21.0	胴部～底部1/3	叩きじめ	—	堅緻	灰色	
4	甕	—	(11.4)	—	口縁部～頸部1/3	ヨコナデ	—	堅緻	赤褐色	
5	甑	—	—	(16.3)	胴部 1/3	叩きじめ	雲母砂粒	やや堅緻	灰色	
6	壺	—	—	—	2/3	—	—	堅緻	灰色	自然釉付着
7	坏	3.7	12.6	6.5	2/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
8	坏	3.85	12.2	5.9	完形	底部多方向ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	赤褐色	
9	坏	3.4	(12.2)	7.2	1/3	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
10	坏	3.55	(12.4)	7.8	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	糸切り
11	坏	4.05	13.0	6.7	2/3	下端静止ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
12	坏	3.2	(11.8)	(7.15)	1/4	下端回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り

出土遺物　遺物は、甕、甑、壺、坏形土器がある。甕形土器は1～4で、1～3は広口甕の口縁部と底部である。4は小形甕の口縁部破片である。甑形土器は5で胴部に叩き目がある。壺形土器は6で円形浮文が付く長頸瓶である。坏形土器は7～12で、7～9のように体部が大きく開くものと、10～12のように体部が直線的にほぼ直立する形状のものとある。

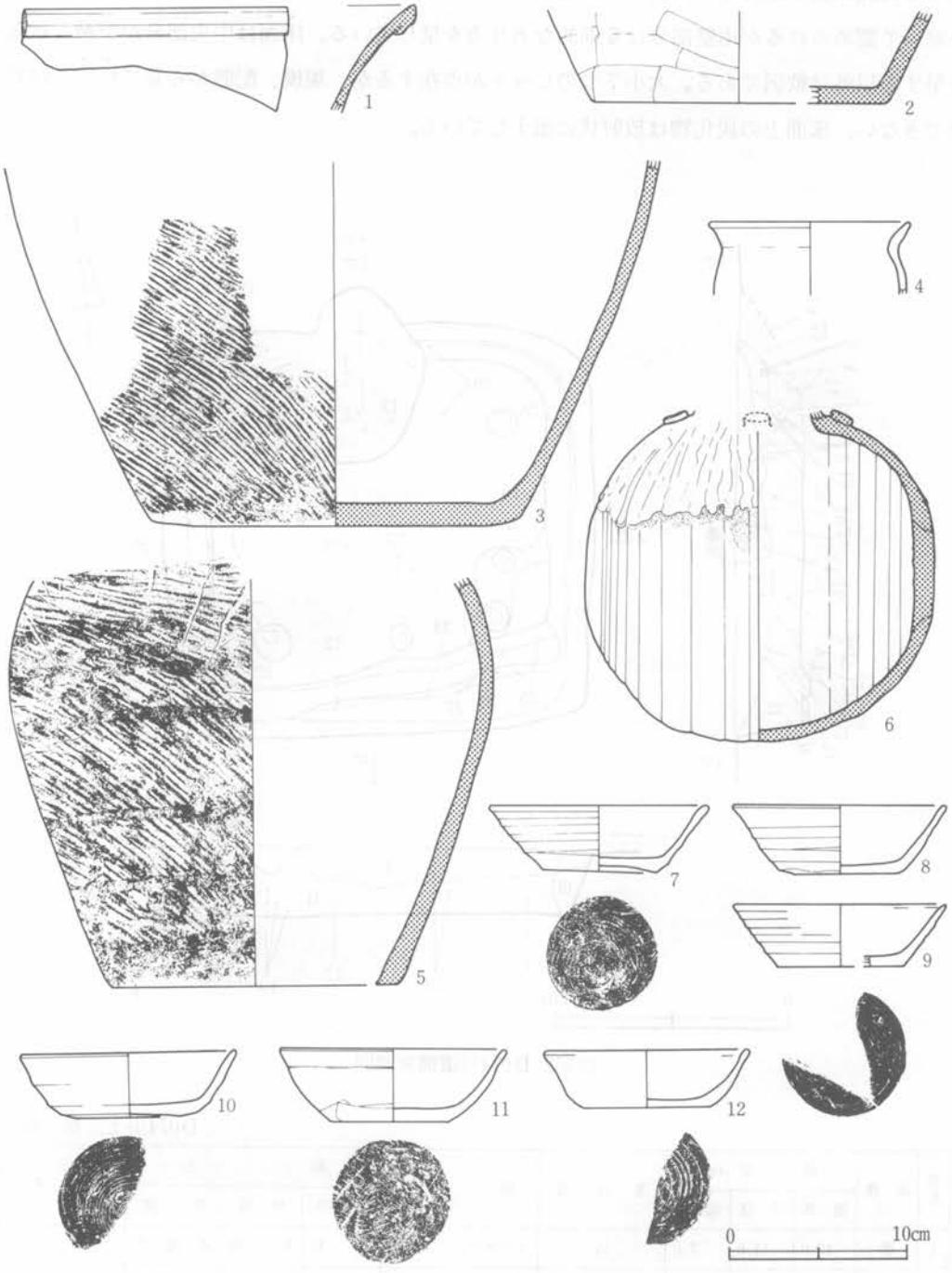


図551　D073号遺構出土遺物実測図

5．D074号遺構（図552～556、図版134－3、135－1・2、145）

IV群の住居群内において北側に位置し、D075が近接している。床面上において焼土塊、炭化物を検出したため、焼失した遺構と考えられる。

遺構　北壁3.58m、東壁3.43mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はやや傾斜を呈して0.56m掘り込んでおり、直下に幅0.20m～0.30m、深さ0.05mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められるが南壁部分は変則的なあり方を呈している。床面は中央部分が堅緻な状況を呈する以外は軟弱である。大小7つのピットが点在するが、規模、配置から見て柱穴とは判断できない。床面上の炭化物は放射状に出土している。

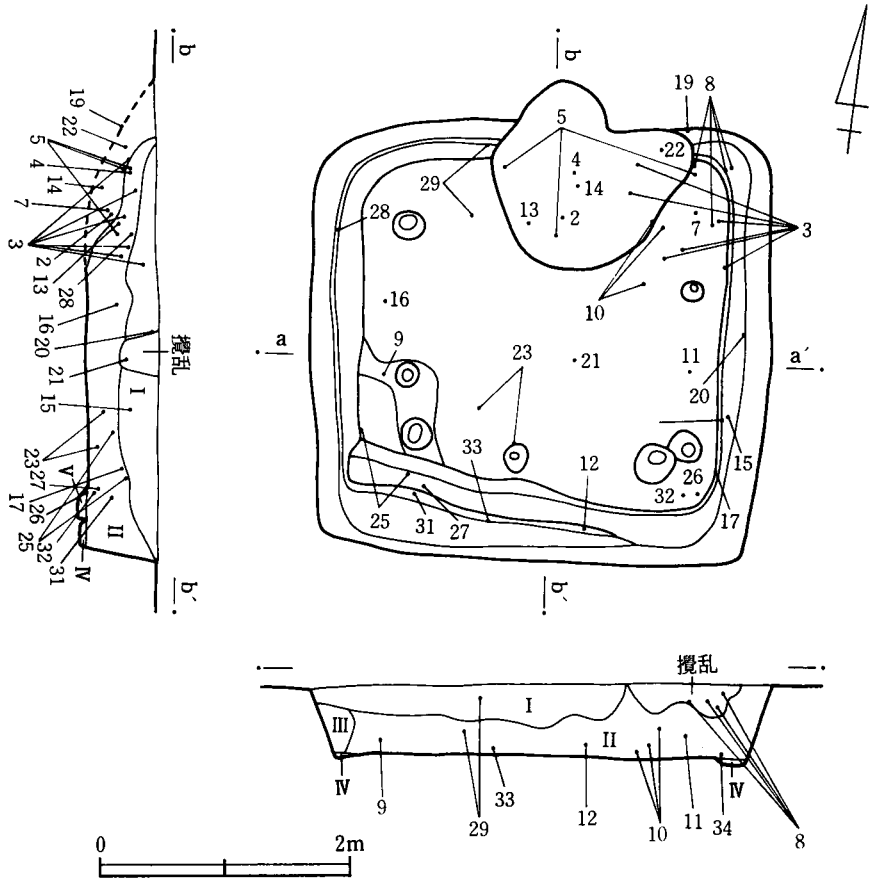


図552　D074号遺構実測図

D074出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	12.0	11.6	7.0	3/3	ヨコナデ、ヘラ削り	砂粒	堅緻	赤褐色	二次的に火を受ける
2	甕	—	14.5	—	口縁部～頸部1/3	ヨコナデ	砂粒	堅緻	赤褐色	

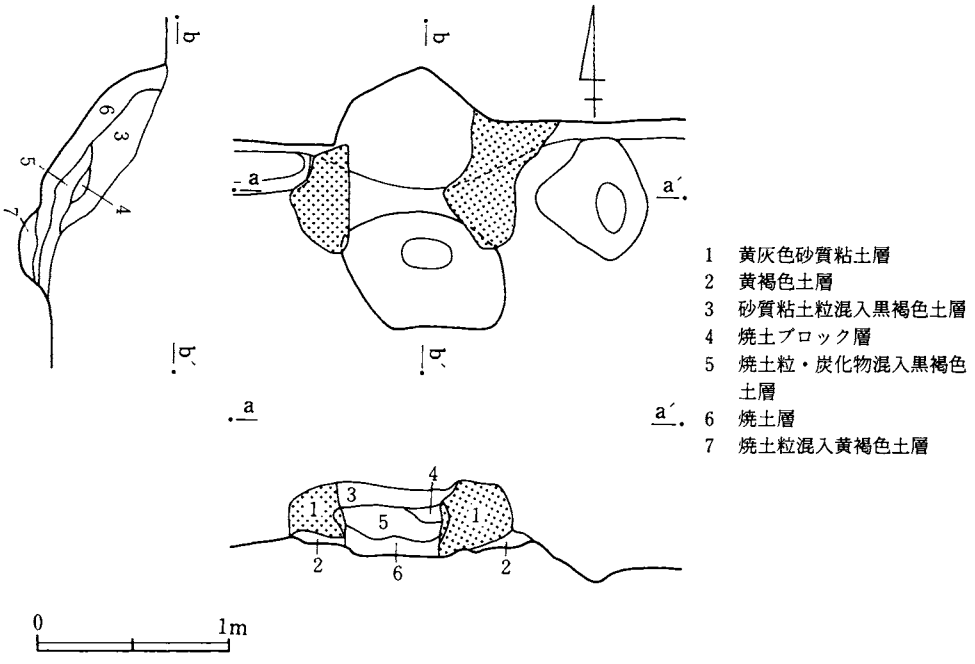


図553 D074号遺構カマド実測図

カマド　北壁中央部を0.35m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土は2層上に袖部から煙道部まで貼り込んでいる。火袋に相当する袖は焼土化が著しく、火床部は深さ0.18mの掘り込みを呈し、煙道部は緩やかな傾斜を呈している。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層ローム粒混入黒褐色土層、III層褐色土層、IV層茶褐色土層が堆積する。遺物は各層より出土するが、床面および床面より若干上方のカマド周辺部から出土

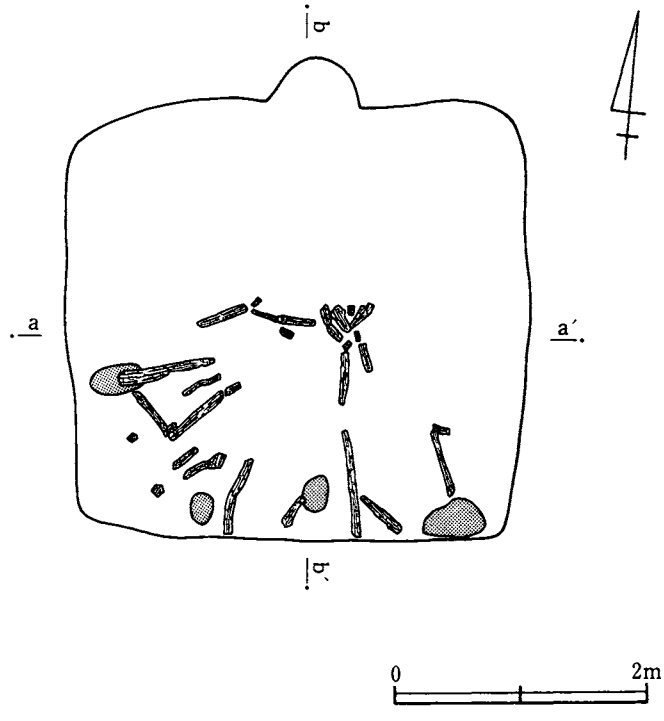


図554 D074号遺構炭化物出土状況図

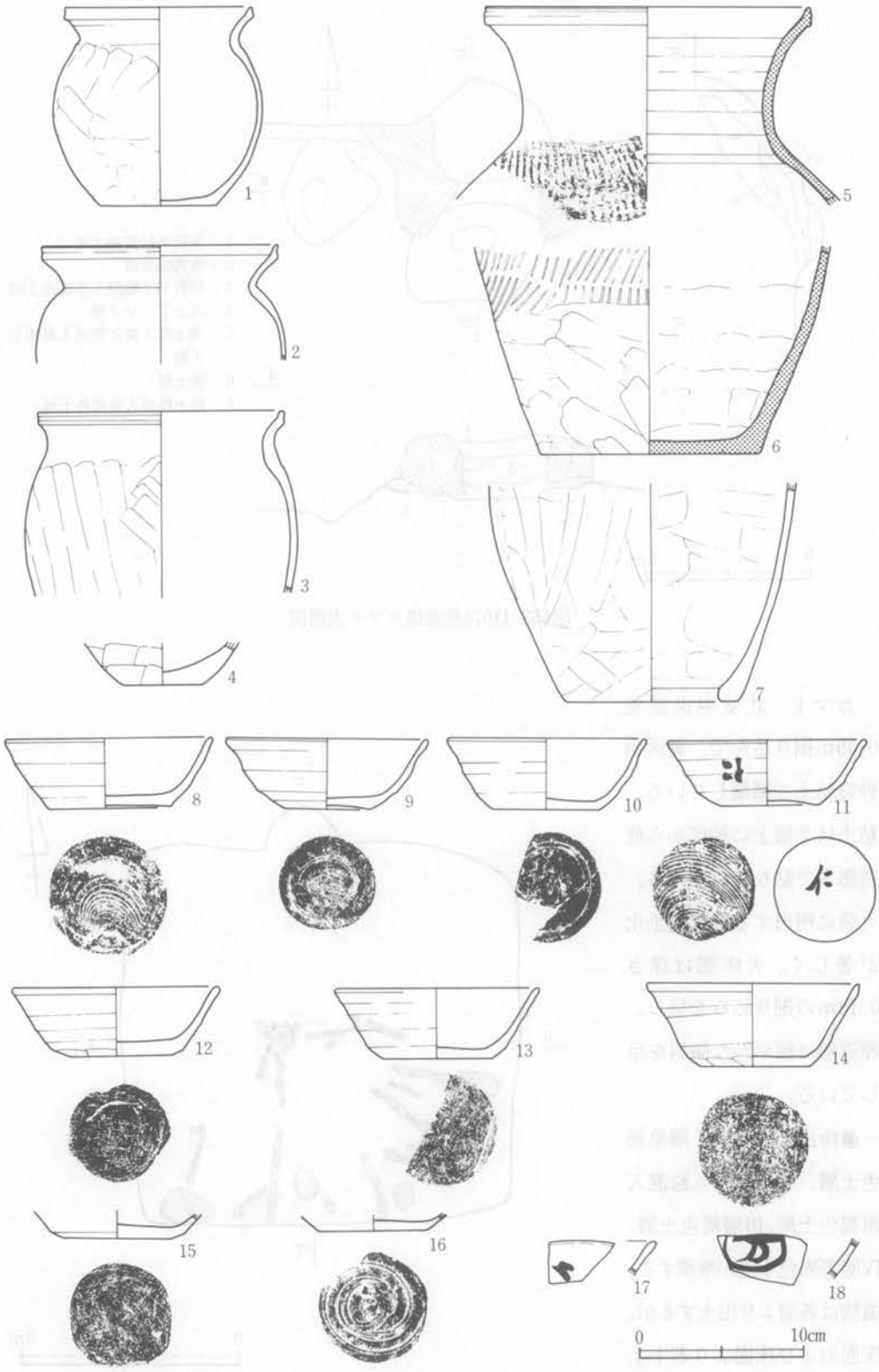


図555 D074号遺構出土遺物実測図(1)

している。カマド内出土もある。

出土遺物　遺物は、甕、甑、坏、皿、鉢、蓋形土器と石製品、鉄製品がある。甕形土器は1～6で、1～3は口唇部に特徴を有するものである。4はこれらと同様な甕の底部と思われる。5、6は広口甕の口縁部、6は底部である。甑形土器は7で単孔の底部である。坏形土器は8～23で、いずれも口径12cm前後のもので体部は直線的に開く。17～19は墨書のある体部破片である。22、23は高台付である。皿形土器は24～27で、24、25は平底、26、27は高台付である。鉢形土器は28で、底部の破片である。蓋形土器は29で天井部は欠損している。石製品は30、33、

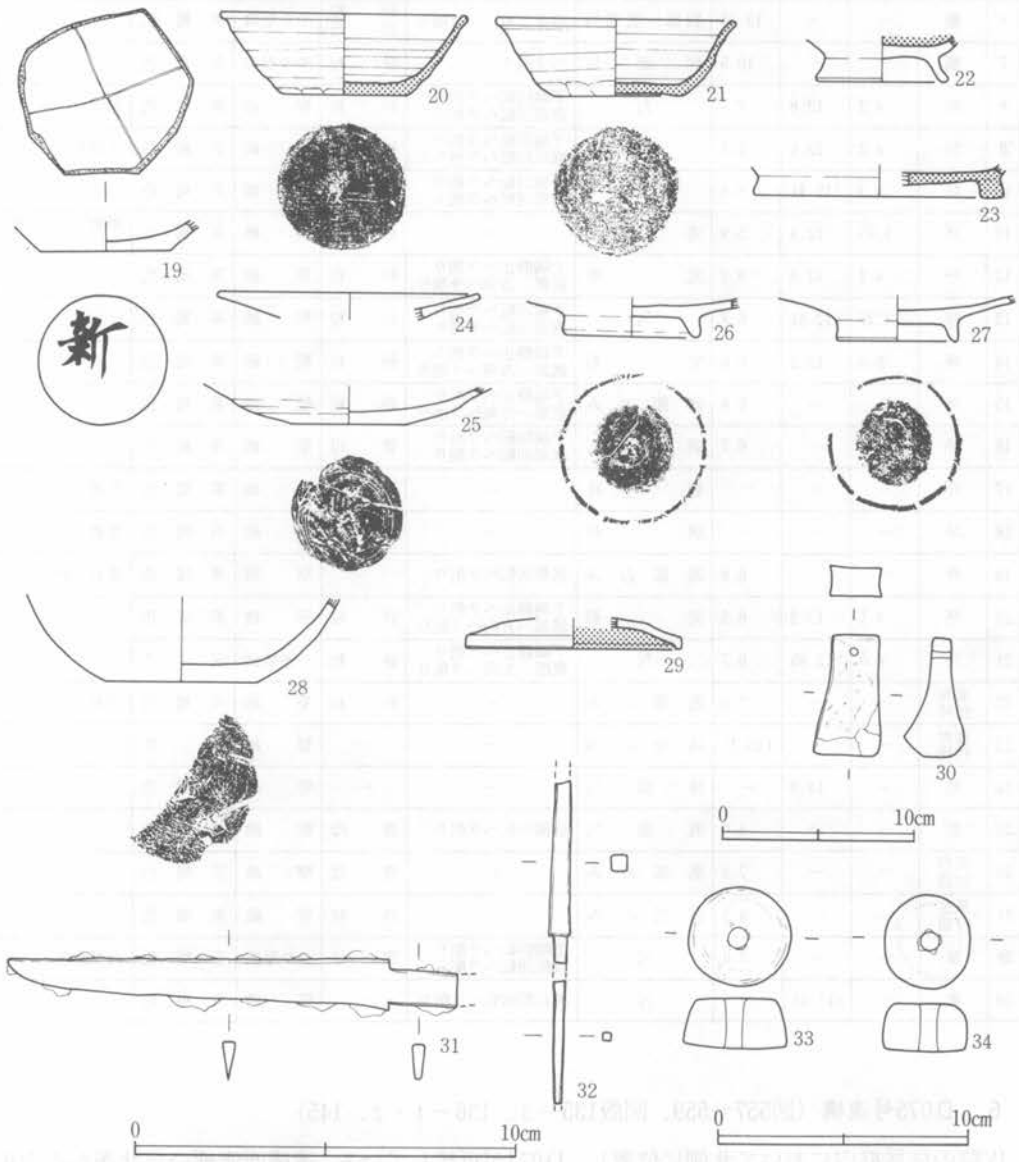


図556　D074号遺構出土遺物実測図(2)

34で、30は一端に小孔のあく凝灰岩製の砥石、33、34は凝灰岩製の紡錘具で径約 4 cm 前後で中央に 0.7 cm の軸孔があく。33は重さ55.5ｇ、34は31ｇを測る。鉄製品は31、32で、31は刀子、32は鏃と思われる。

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
3	甕	—	15.2	—	1/3	ヨコナデ、ヘラ削り	砂粒	堅緻	赤褐色	
4	甕	—	—	4.8	胴部～底部2/3	ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
5	甕	—	20.3	—	口縁部～頸部1/2	ヨコナデ、叩きじめ	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
6	甕	—	—	13.45	胴部～底部2/3	叩きじめ、ヘラ削り	砂粒 雲母	やや堅緻	黒褐色	
7	甑	—	—	10.5	胴部 2/3	ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
8	坏	4.2	12.8	7.5	3/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
9	坏	4.2	12.6	5.1	3/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
10	坏	4.3	(12.4)	6.6	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
11	坏	3.85	12.4	5.9	完形	—	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「仁」、糸切り
12	坏	4.1	12.8	6.2	完形	下端静止ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
13	坏	4.25	(12.8)	6.8	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
14	坏	5.0	13.2	6.6	完形	下端静止ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
15	坏	—	—	6.6	底部のみ	下端静止ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
16	坏	—	—	6.7	底部 1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	黒褐色	
17	坏	—	—	—	破片	—	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書判読不明
18	坏	—	—	—	破片	—	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「万」
19	坏	—	—	6.8	底部のみ	底部回転ヘラ削り	—	堅緻	黄褐色	墨書「新」
20	坏	4.1	13.2	6.5	完形	下端静止ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒灰色	
21	坏	4.0	12.85	6.7	2/3	下端静止ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	灰色	
22	高台付坏	—	—	7.0	底部のみ	—	砂粒	堅緻	赤褐色	内黒
23	高台付坏	—	—	(13.2)	高台のみ	—	—	堅緻	灰色	
24	皿	—	14.0	—	体部 1/3	—	—	堅緻	茶褐色	
25	皿	—	—	6.0	底部 2/3	底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	茶褐色	
26	高台付皿	—	—	7.4	底部のみ	—	雲母	堅緻	茶褐色	
27	高台付皿	—	—	6.5	底部のみ	—	砂粒	堅緻	茶褐色	
28	鉢	—	—	8.0	3/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	やや堅緻	茶褐色	内面磨き
29	蓋	—	(11.6)	—	1/3	天井部回転ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	

6．D075号遺構（図557～559、図版135－3、136－1・2、145）

IV群の住居群内において北側に位置し、D074が近接している。遺構西側部分は北西から南東に連なる溝によって切断されているため、壁および床面の一部は検出できなかった。

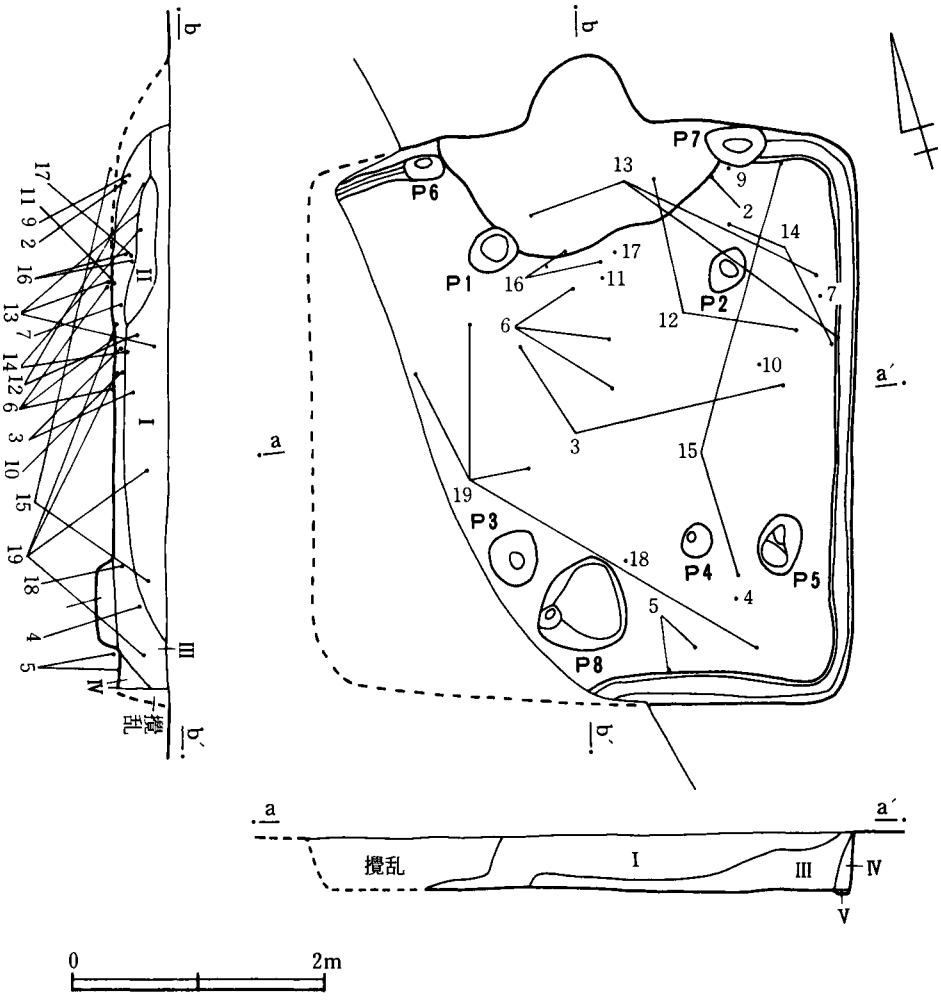


図557 D075号遺構実測図

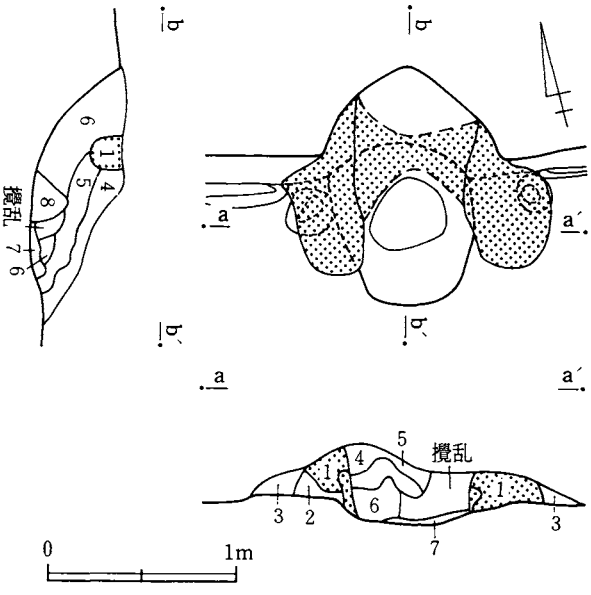
遺構　北壁推定4.30m、東壁4.46mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.4m掘り込んでおり、直下に幅0.15mの壁溝が認められる。ただし、北壁カマド部分はなく、また西壁については明らかでない。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上より若干ずれるがP_1～P_4を検出した。P_1は長径0.38m、深さ0.43m、P_2は長径0.4m、深さ0.3m、P_3は長径0.42m、深さ0.35m、P_4は長径0.28m、深さ0.24mを計る。その他、東壁に近くP_5、カマド両脇にP_6、P_7、南壁近くP_8を検出した。

カマド　北壁中央部を0.48m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。一部攪乱を受けているものの粘土の貼り込みは袖部から煙出し部まで一体化しており、良好な状況を止めている。掘り込み部分に、袖芯を埋設したと思われる小ピットが両袖部に認められる。火袋に相当する袖は焼土化が著しく、火床部は深さ0.08mで擂鉢状の掘り込みを呈し、煙道部は緩やかな

傾斜を呈している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒褐色土層、Ⅱ層粘土粒混入黒褐色土層、Ⅲ層ローム粒混入黒褐色土層、Ⅳ層褐色土層、Ⅴ層茶褐色土層、Ⅵ層暗茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上を中心に各層より出土する。

出土遺物　遺物は、甕、坏、高坏形土器と鉄製品、石製品がある。甕形土器は1～3で、1は口唇部に特徴のある口縁部破片である。2は広口甕の口縁部破片、3は胴部に叩き目がある胴部下半の破片である。坏形土器は4～18で、4は丸底に近い底部を呈している。5～11は口径12cm前後で体部が直線的に開く形状を呈している。



1　黄灰色砂質粘土層
2　黄褐色土層
3　黒色土層
4　黒褐色土層
5　砂質粘土粒混入黒褐色土層
6　焼土粒混入黒褐色土層
7　焼土層
8　黄灰色砂質粘土ブロック層（天井部の落ち込み層）

図558　D075号遺構カマド実測図

D075出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	—	13.0	—	口縁部～頸部⅓	ヨコナデ、ヘラ削り	砂粒	軟弱	赤褐色	
2	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	灰色	
3	甕	—	—	(17.0)	胴部 ¼	叩きじめ、ヘラ削り	砂粒 雲母	やや軟弱	黒褐色	
4	坏	4.2	11.65	7.1	完形	体部ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	—	堅緻	赤褐色	墨書「へ」
5	坏	3.8	11.8	7.65	¾	底部一方向ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	茶褐色	糸切り
6	坏	3.95	12.0	7.8	完形	底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	赤褐色	
7	坏	4.0	11.4	7.6	完形	—	砂粒	堅緻	茶褐色	ヘラ切り
8	坏	4.05	(12.0)	(8.1)	½	—	砂粒	堅緻	赤褐色	ヘラ切り
9	坏	4.5	11.4	8.0	完形	底部…方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
10	坏	4.6	11.4	7.8	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「冨」 糸切り
11	坏	3.8	11.4	6.9	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
12	坏	3.4	12.6	8.2	完形	底部回転ヘラ削り	—	やや堅緻	茶褐色	
13	坏	3.3	(13.3)	9.25	¼	—	砂粒	堅緻	茶褐色	
14	坏	—	(11.7)	—	体部 ⅓	—	砂粒	堅緻	茶褐色	
15	坏	4.65	13.0	8.3	⅔	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	内黒

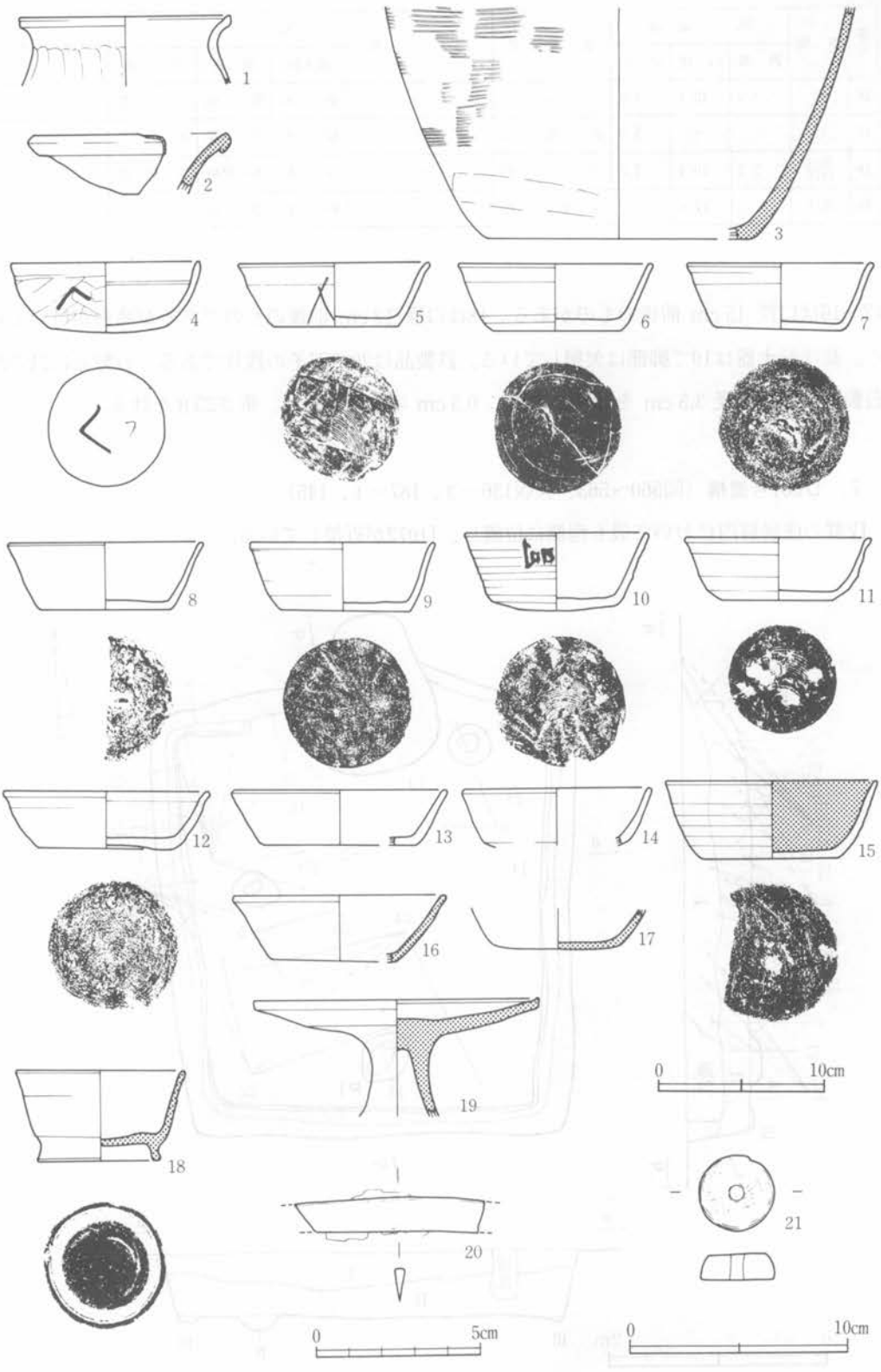


図559 D075号遺構出土遺物実測図

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
16	坏	3.9	13.1	7.6	½	—	砂粒	堅緻	灰色	
17	坏	—	—	8.0	底部 ⅔	—	砂粒	堅緻	灰色	ヘラ切り
18	高台付坏	5.3	10.4	7.5	完形	—	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
19	高坏	—	17.6	—	ほぼ完形	—	砂粒	堅緻	灰色	

12～16は口径 15 cm 前後のものがある。18は口径 12 cm 前後のものであるが高台が付いている。高坏形土器は19で脚部は欠損している。鉄製品は20で刀子の残片である。石製品は21の滑石製の紡錘具で径 3.5 cm を計り、中央に 0.5 cm の軸孔があく。重さ25 g を計る。

7．D081号遺構（図560～563、図版136－3、187－1、145）

IV群の住居群内において最も南側に位置し、D072が近接している。

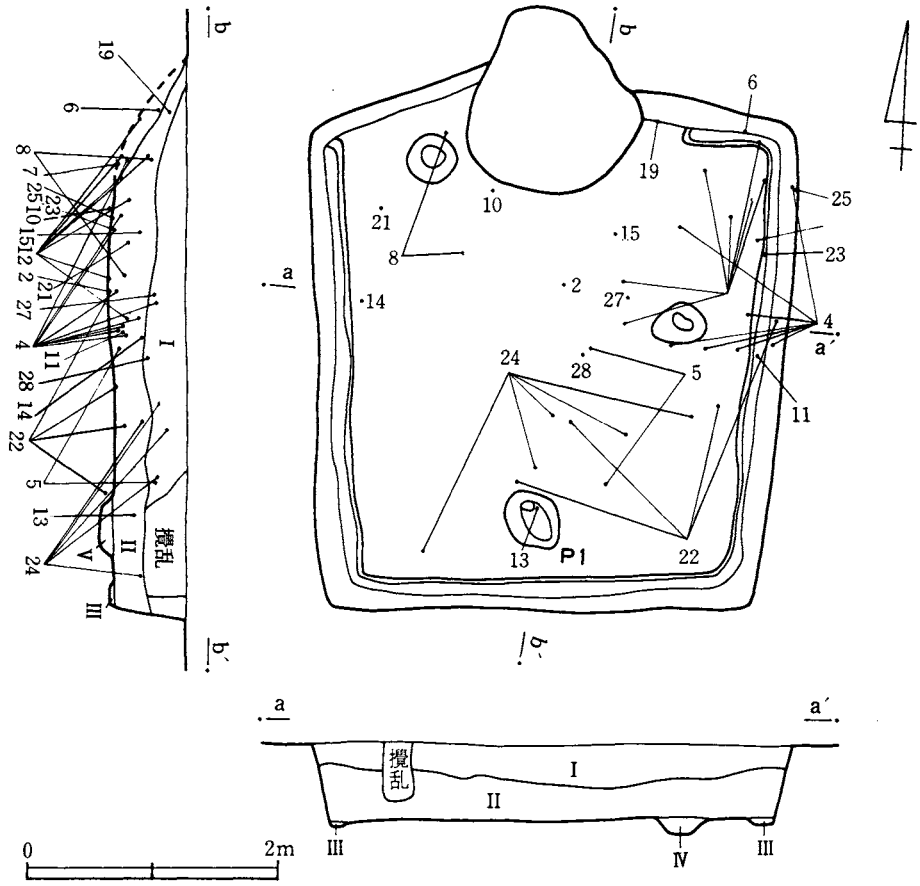


図560 D081号遺構実測図

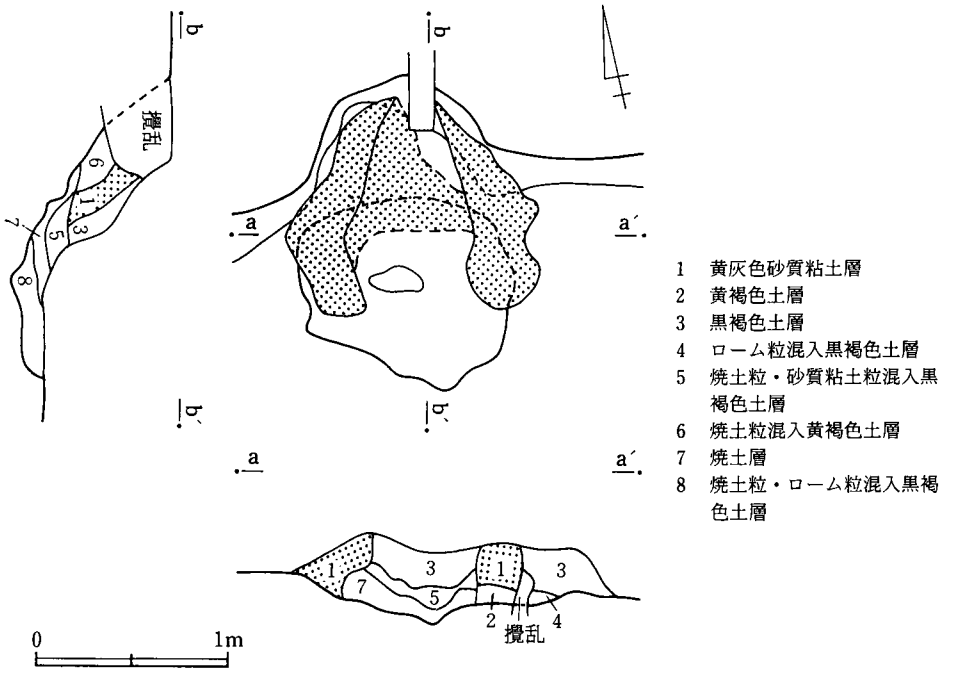


図561 D081号遺構カマド実測図

遺構 北壁3.90m、東壁3.84mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.57m掘り込んでおり、直下に幅0.30m、深さ0.09mの壁溝が北壁の一部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。南壁中央部に近接して径0.42m、深さ0.27mを計り、2段に掘り込んだP_1を検出した。その他、2か所にピットを検出したが、性格は不明である。柱穴は検出できなかった。

カマド 北壁中央部を最長0.53m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙出し部まで一体化しており、天井部は良好に遺存している。火床部は深さ0.12mで擂鉢状の掘り込みを呈し、煙道部は緩やかな傾斜を呈している。

遺物出土状況 Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層茶褐色土層、Ⅳ層暗茶褐色土層、Ⅴ層ローム粒混入暗茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上を中心に各層より出土しており、カマド内出土もある。

出土遺物 遺物は、甕、坏、皿形土器と鉄製品がある。甕形土器は1～5で、1は口唇部に特徴のある小形甕である。2、3は広口甕の口縁部破片、4、5は胴部下半である。坏形土器は6～21で、口径 12cm 前後の6～10と、口径 15cm 前後の11、12がある。13～21は墨書のある破片である。皿形土器は22～27で、23は平底、22、24、25は高台付である。26、27は墨書のある破片である。鉄製品は28、29で、28は刀子の残片、24は角棒状で一端が屈曲を呈す用途不明品である。

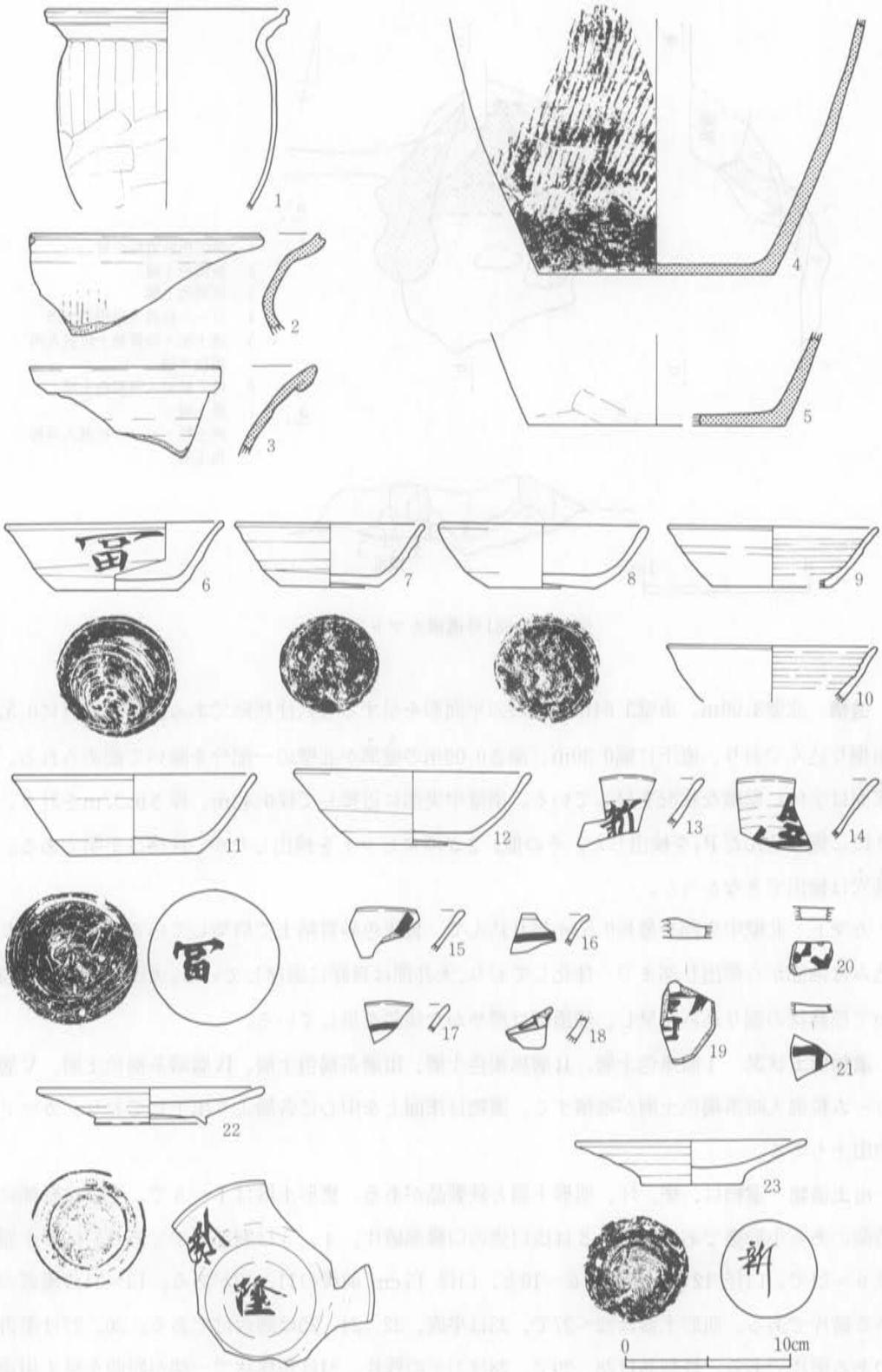


図562 D081号遺構出土遺物実測図(1)

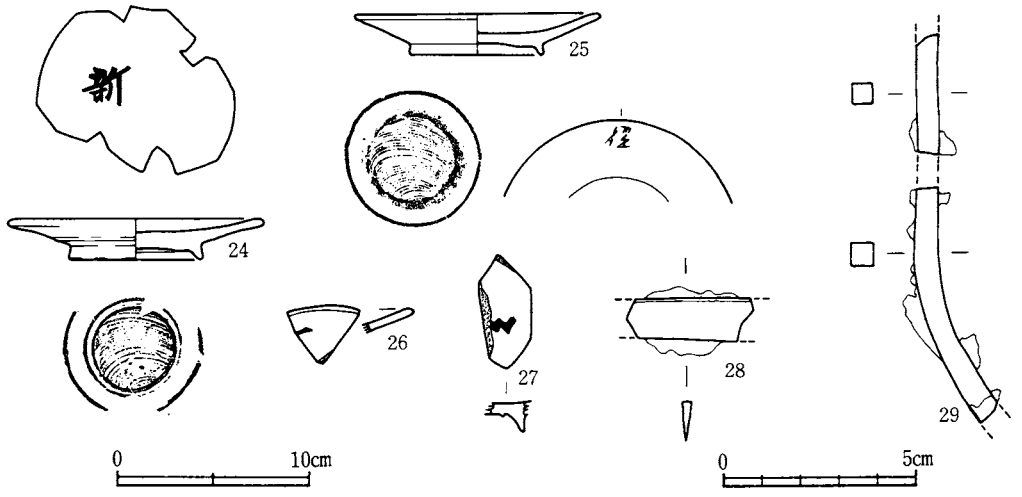


図563 D081号遺構出土遺物実測図(2)

D081出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	(15.1)	—	口縁部～胴部⅓	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒 雲母	堅緻	黒褐色	
2	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ、ヘラ削り	雲母	堅緻	灰色	
3	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ	砂粒	やや堅緻	灰色	
4	甕	—	—	14.5	胴部～底部⅓	叩きじめ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	灰色	
5	甕	—	—	(15.7)	胴部～底部⅓	ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	
6	坏	4.0	13.15	7.35	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「冨」 糸切り
7	坏	3.75	11.8	6.0	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
8	坏	3.75	(13.0)	6.6	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
9	坏	3.65	(13.0)	(7.3)	⅓	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
10	坏	—	(13.0)	—	体部⅓	—	砂粒	堅緻	茶褐色	
11	坏	468	15.0	8.0	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母 砂粒	やや堅緻	茶褐色	墨書「冨」、糸切り、内面磨き
12	坏	4.4	14.7	7.0	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	内面磨き
13	坏	—	—	—	破片	—	—	堅緻	茶褐色	墨書「新」
14	坏	—	—	—	破片	—	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「冨」 内面磨き
15	坏	—	—	—	破片	—	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書判読不明 内面磨き
16	坏	—	—	—	破片	—	—	堅緻	茶褐色	墨書判読不明 内面磨き
17	坏	—	—	—	破片	—	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書判読不明
18	坏	—	—	—	破片	—	—	堅緻	茶褐色	墨書「冨」、内面磨き
19	坏	—	—	—	破片	—	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「冨」
20	坏	—	—	—	破片	—	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書判読不明

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
21	坏	—	—	—	破片	—	—	堅緻	茶褐色	墨書判読不明
22	高台付皿	2.2	14.0	6.85	½	—	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「新」、「隆」、内面磨き、糸切り
23	皿	2.65	14.2	6.1	⅓	—	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「新」、糸切り、内面磨き
24	高台付皿	2.1	13.6	7.1	½	—	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「新」、糸切り、内面磨き
25	高台付皿	2.2	13.15	7.15	完形	—	砂粒	堅緻	茶褐色	線刻「経」、内面磨き、糸切り
26	皿	—	—	—	破片	—	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書判読不明
27	皿	—	—	—	破片	—	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書判読不明 内面磨き

8．D082号遺構（図564～567、図版137－2、146）

IV群の住居群内において西側に位置し、D072、D073、H006、H007、H008が近接している。

遺構　北壁3.88m、東壁3.86mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.53

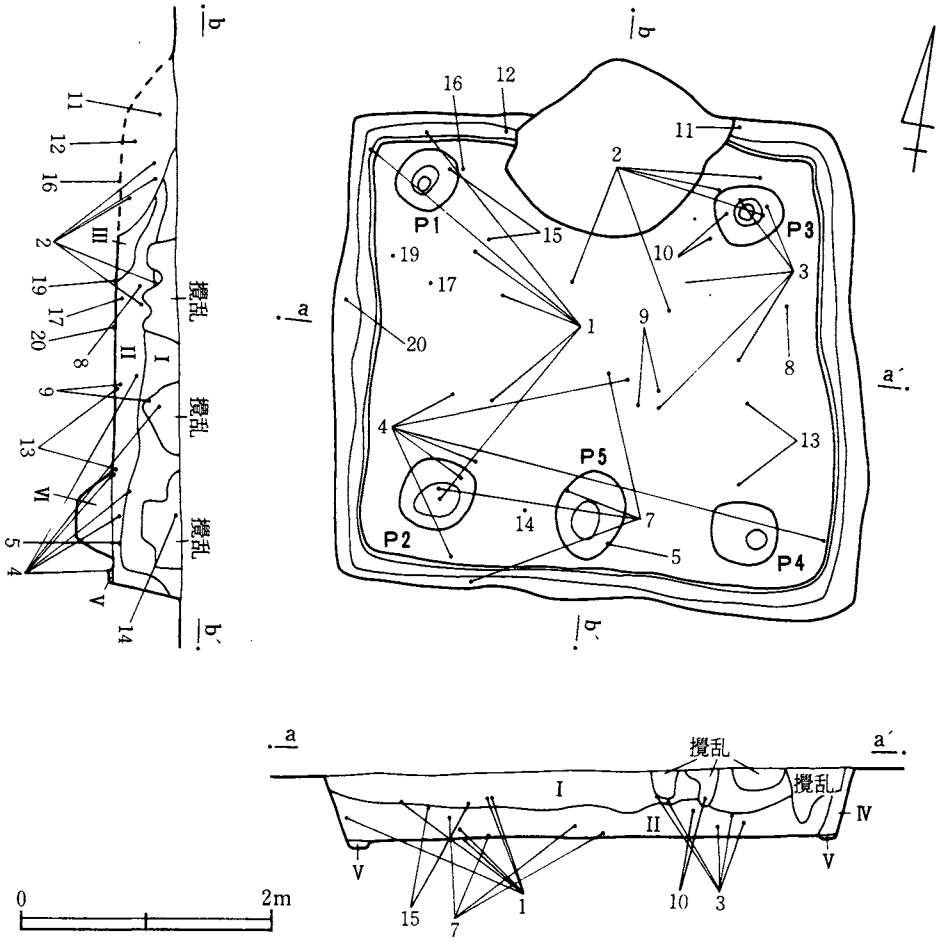


図564　D082号遺構実測図

m掘り込んでおり、直下に幅0.26m、深さ0.07mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は対角線上に配置したP₁～P₄を検出したが、いずれも壁コーナー部分に近接している。径平均0.52m、深さ0.50mを計り、大形な掘りかたである。その他、南壁中央部に近接して径0.54m、深さ0.32mを計るP₅を検出した。規模は柱穴に均しい。

カマド　北壁中央部を0.43m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙出し部まで一体化しており、天井部が良好に遺存している。火袋に相当する袖は焼土化が著しく、火床部は深さ0.10mで浅い掘り込みを呈し、煙道部は緩やかな傾斜を呈している。

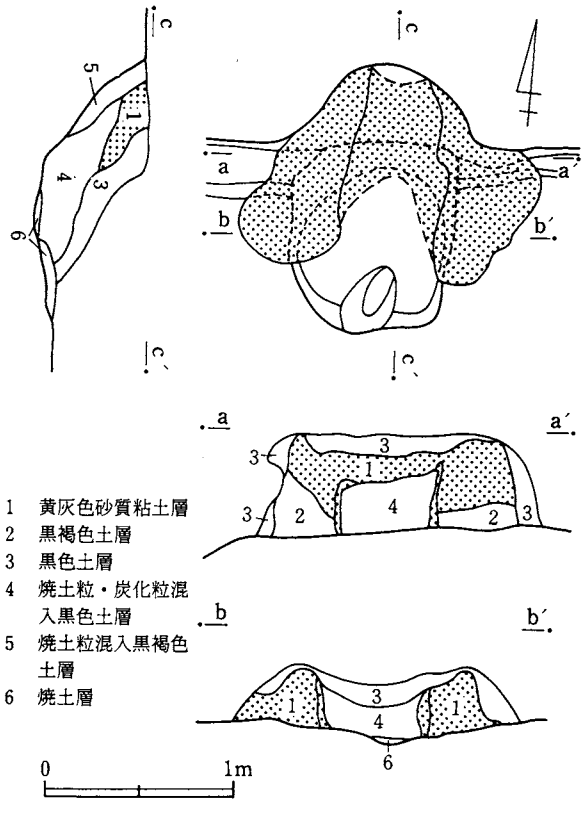


図565 D082号遺構カマド実測図

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層暗褐色土層、III層粘土粒混入暗褐色土層、IV層褐色土層、V層茶褐色土層、VI層暗茶褐色土層が堆積する。遺物は各層から多量に出土し、土器は覆土中、鉄製品、石製品は床面上を中心として出土する傾向が認められる。カマド内出土もある。

D082出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	(19.2)	—	口縁～頸部⅓	ヨコナデ	砂粒 雲母	堅緻	茶褐色	
2	甕	—	—	16.7	胴部～底部⅔	叩きじめ、ヘラ削り	雲母 砂粒	堅緻	灰色	
3	甑	—	—	16.0	胴部～底部⅓	ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
4	甑	—	32.3	—	口縁部～胴部⅓	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	堅緻	灰色	
5	坏	3.15	11.6	8.0	⅔	底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
6	坏	4.0	(12.0)	8.5	½	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
7	坏	3.8	11.7	7.8	½	底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	黄褐色	墨書「八」 糸切り

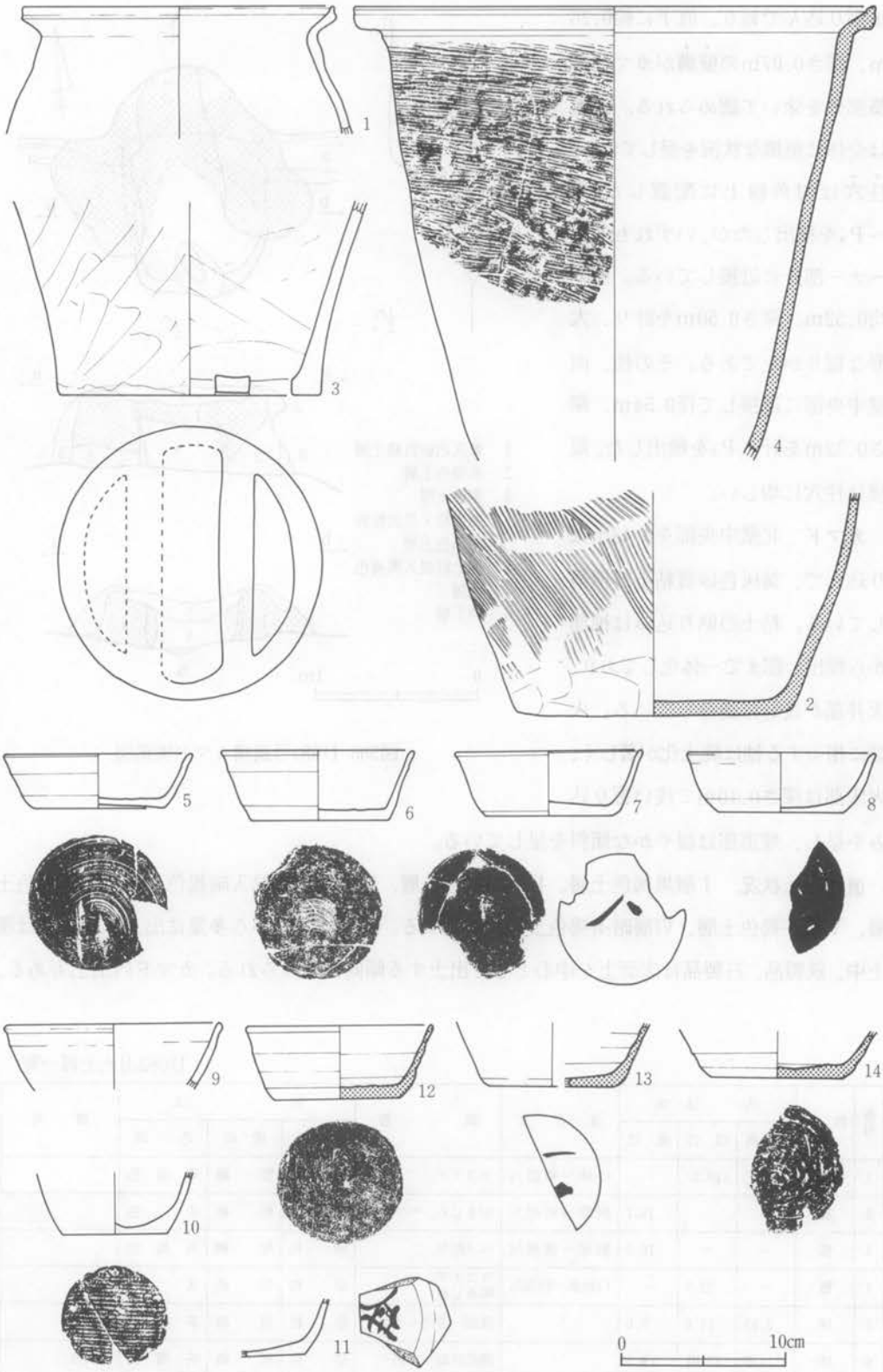


図566 D082号遺構出土遺物実測図(1)

出土遺物　遺物は、甕、甑、坏、盤形土器と鉄製品、石製品がある。甕形土器は1、2で、1は口唇部に特徴のある口縁部、2は胴部に叩き目がある広口甕胴部下半である。甑形土器は3、4で、3は胴部ヘラ削調整されるもので、孔は2本の簀子を配している。4は胴部に叩き目があり、口縁部は水平近く外反する。坏形土器は5～14で、体部はほぼ直線的に開く形状を呈す。11は墨書のある底部破片である。盤形土器は15で、高台付である。鉄製品は16～19で、16～18は刀子、19は鏃と思われる。石製品は20の凝灰岩製の紡錘具で、径3.5cmで台形の断面を呈し、中央に0.6cmの軸孔があく、重さ32gである。

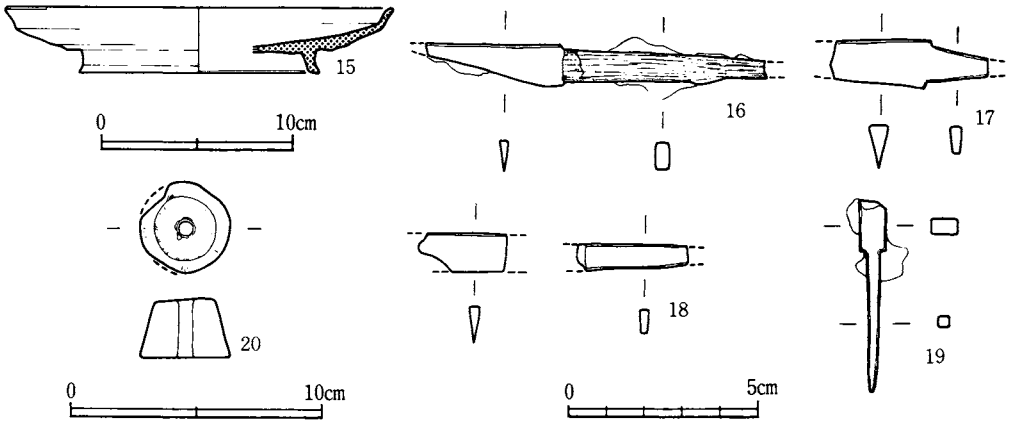


図567　D082号遺構出土遺物実測図(2)

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
8	坏	3.5	(11.7)	7.6	1/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
9	坏	—	(13.4)	—	体部 1/3	—	—	堅緻	黒褐色	内面磨き
10	坏	—	—	6.4	底部 3/4	—	雲母	堅緻	茶褐色	糸切り
11	坏	—	—	—	破片	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	黄褐色	墨書「盛」
12	坏	4.3	11.6	7.8	完形	底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	
13	坏	—	—	(7.7)	底部 1/3	底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	墨書判読不明
14	坏	—	—	8.1	底部 1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
15	高台付盤	3.4	(20.6)	(12.7)	1/4	—	砂粒	堅緻	灰色	

9．D083号遺構（図568～570、図版137－3、138－1、146）

IV群の住居群内において北西側に位置し、D073が近接している。

遺構　北壁3.32m、東壁3.30mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.55m掘り込んでおり、直下に幅0.29m、深さ0.08mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。

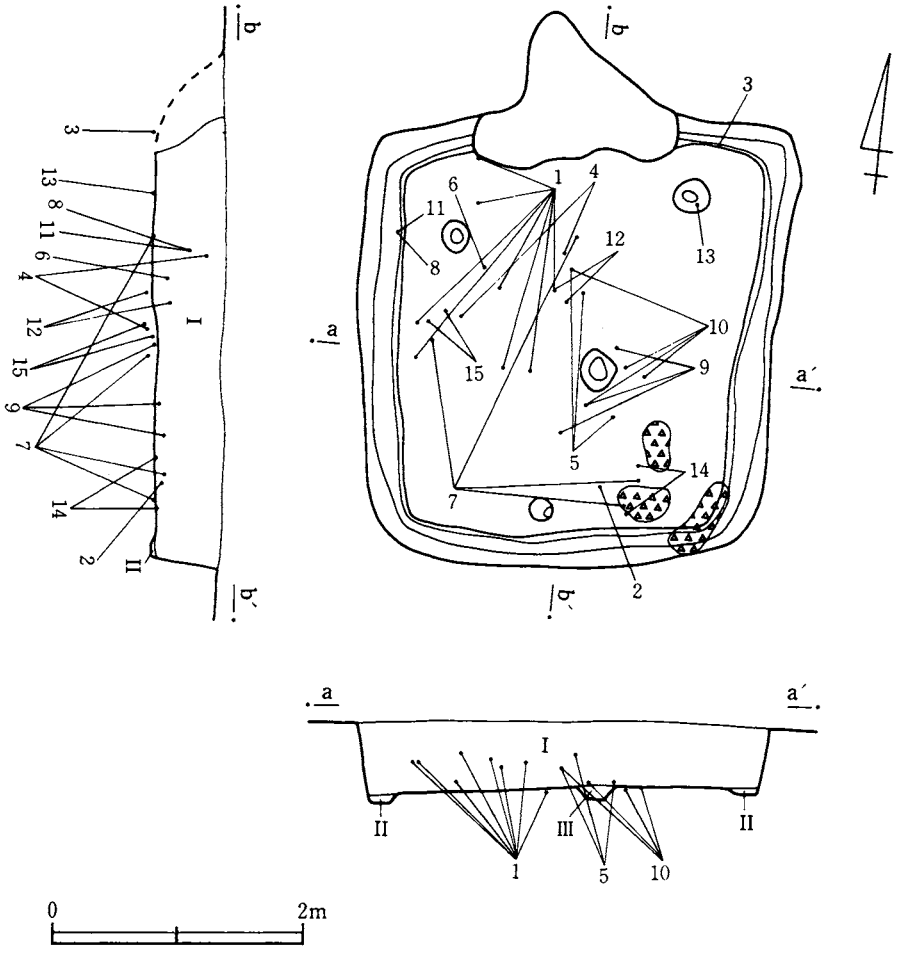


図568 D083号遺構実測図

D083出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	(21.6)	—	口縁部～胴部1/3	ヨコナデ	小石 雲母	堅緻	茶褐色	
2	甕	—	(19.9)	—	口縁部～頸部1/3	ヨコナデ	砂粒	堅緻	赤褐色	
3	甕	—	(13.1)	—	口縁部～頸部1/3	ヨコナデ	砂粒 雲母	堅緻	茶褐色	
4	甕	—	(12.3)	—	口縁部～胴部1/3	ヨコナデ、ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	赤褐色	
5	甕	—	—	4.3	底部 1/2	ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
6	甕	—	—	7.1	胴部～底部2/3	ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
7	甕	—	—	(15.3)	胴部～底部1/3	叩きじめ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	灰色	
8	坏	3.9	11.2	7.5	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	墨書「山」 糸切り
9	坏	4.2	13.15	7.2	3/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
10	坏	—	—	6.7	底部 1/3	—	砂粒	堅緻	茶褐色	

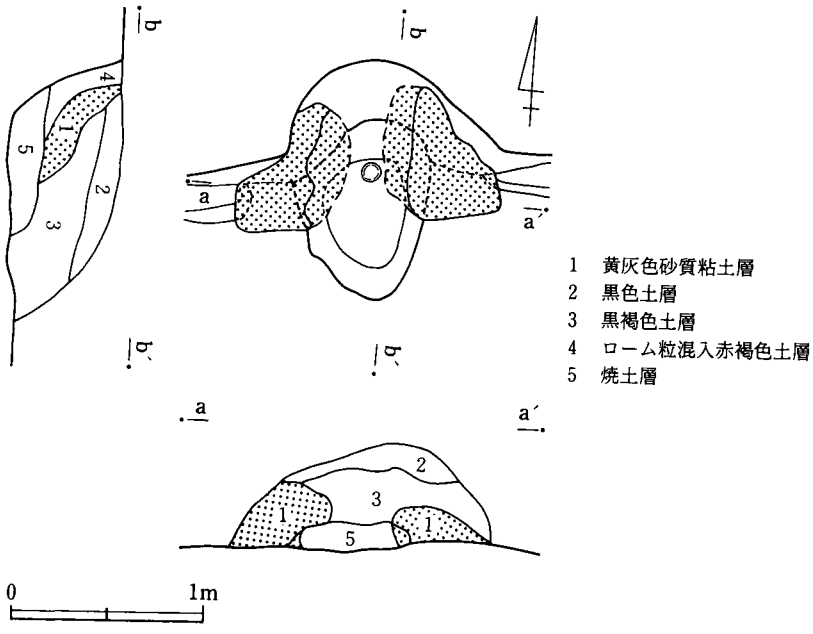


図569 D083号遺構カマド実測図

床面は全体に堅緻な状況を呈している。ピットを4か所で検出したが柱穴にはなり得ず、性格は不明である。

カマド　北壁中央部を最長0.53m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙道部まで一体化し、天井部が遺存している。火袋に相当する袖は焼土化が認められ、火床部は深さ0.05mで浅い掘り込みを呈し、煙道部は急激な傾斜を呈している。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層茶褐色土層、III層暗茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上を中心として出土している。

出土遺物　遺物は、甕、坏、台付甕、蓋形土器がある。甕形土器は1～7で、1～3は口唇部に特徴のある口縁部を呈す。4は小形甕、5、6は底部破片である。7は叩き目がある広口甕胴部下半である。坏形土器は8～13で、体部は直線的に開く形状を呈している。13は墨書の

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
11	坏	4.5	12.4	7.6	完形	底部一方向ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	灰褐色	
12	坏	—	(13.7)	—	体部 1/3	—	砂粒	やや堅緻	灰色	
13	坏	—	—	—	破片	—	—	堅緻	茶褐色	墨書「圓」
14	台付甕	—	—	8.2	台部のみ 3/3	ヘラ削り	雲母	堅緻	茶褐色	
15	蓋	—	—	—	1/2	天井部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	

ある破片である。台付甕形土器は14で台部の破片である。蓋形土器は15で扁平な擬宝珠状のつまみが付く。

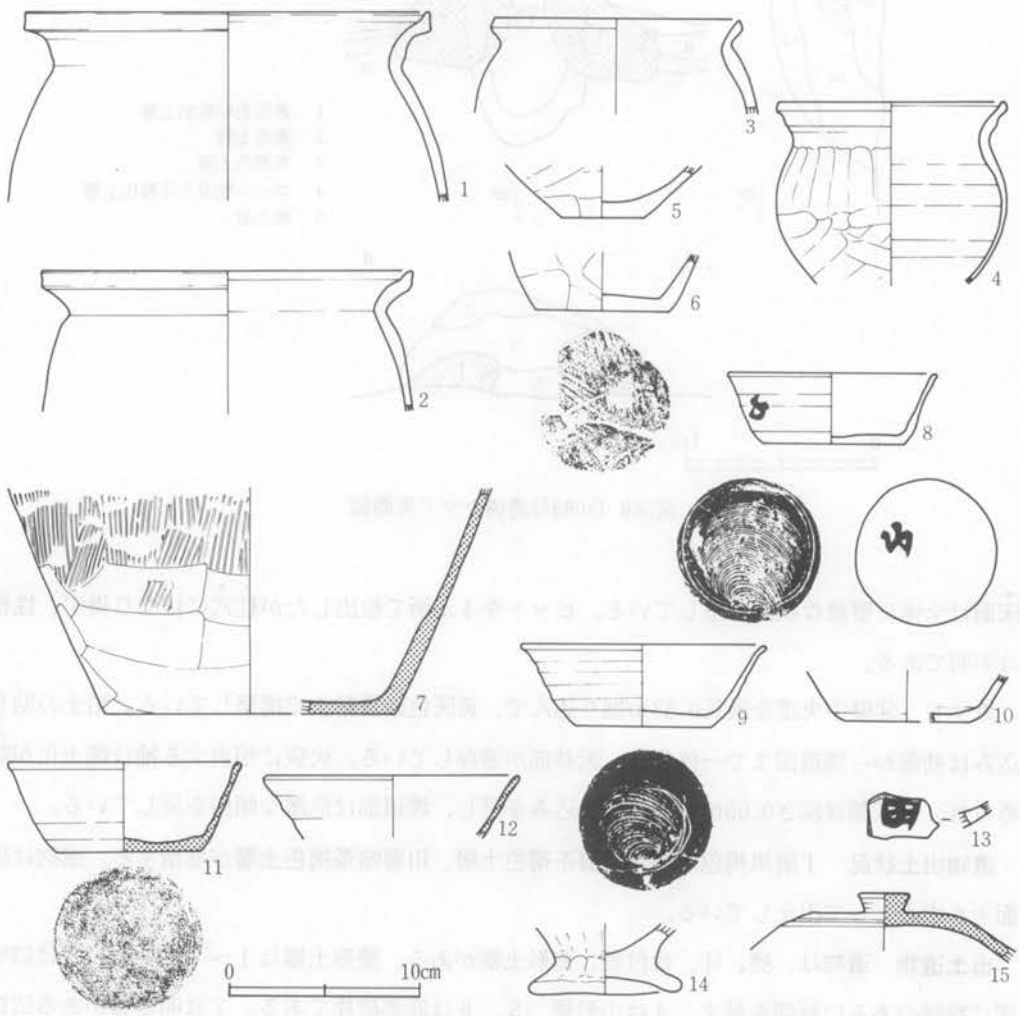


図570 D083号遺構出土遺物実測図

10. D084号遺構（図571～573、図版138－2・3、146）

IV群の住居群内においてほぼ中央に位置し、H002、H004、H005が近接している。遺構の南側に芋穴状の攪乱を受けている。

遺構 北壁3.10m、東壁3.52mで長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.45m掘り込んでおり、直下に幅0.23m、深さ0.07mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は一部攪乱を受けるものの全体に堅緻な状況を呈している。ピットが北東コーナー部に径0.61m、深さ0.26mを計るP_1、南西コーナー部に径1.03m、深さ0.26mを計るP_2を検出した。

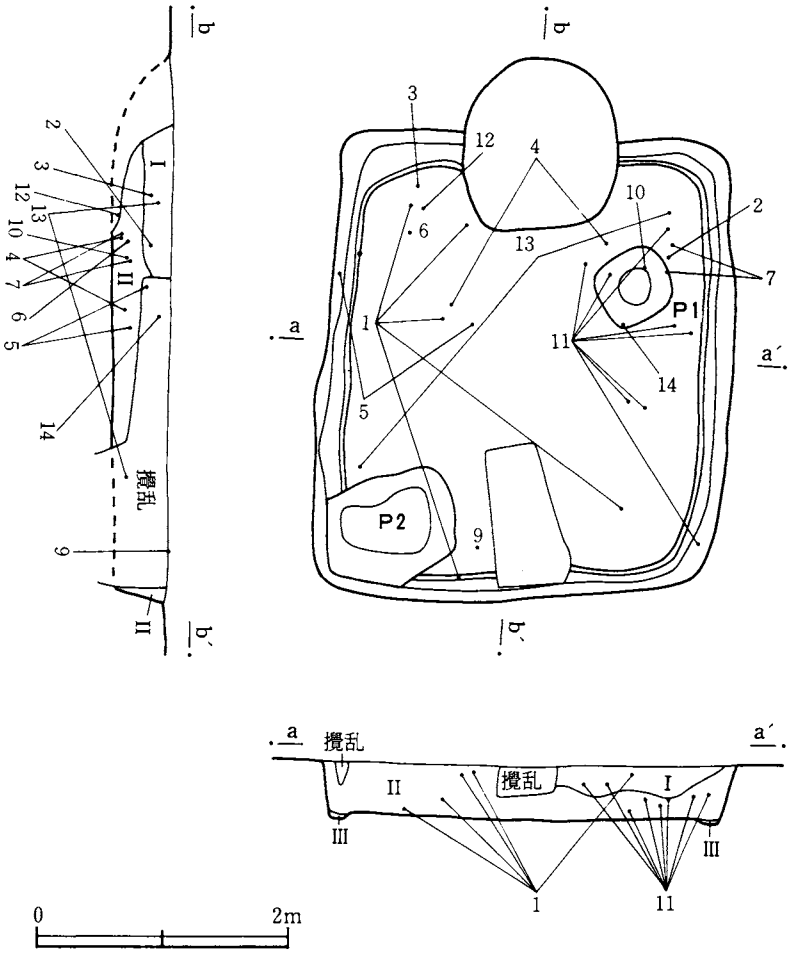


図571 D084号遺構実測図

柱穴は検出できなかった。

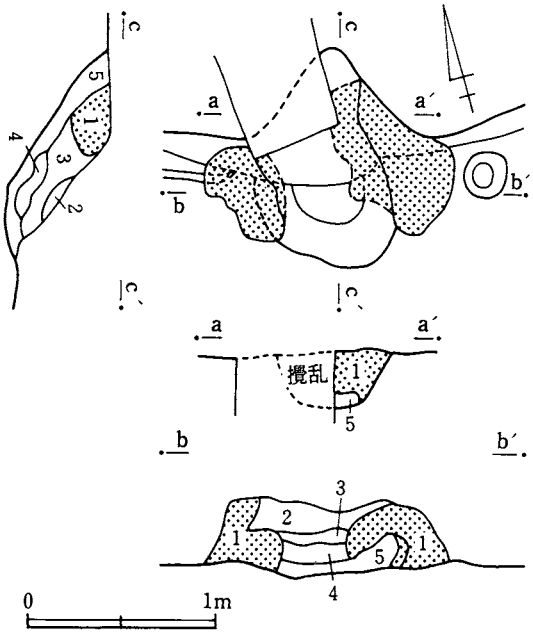
カマド　芋穴状の攪乱を受けているため遺存状況は良くないが、北壁中央部を三角形に0.46m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙出し部まで一体化していると思われるが、左袖、天井部は旧時の形状を止めていないため、充分に構造は把握できない。火袋に相当する袖は焼土化が認められ、火床部は深さ0.07mで浅い掘り込みを呈し、煙道部は緩やかな傾斜を呈している。

D084出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	13.0	—	口縁部～胴部⅔	ヨコナデ ヘラ削り	—	やや軟弱	茶褐色	
2	坏	4.4	13.0	8.4	½	体部ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	墨書「圖」

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層茶褐色土層が堆積する。遺物は床面より若干上方で出土しているが、量的には稀少である。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器と鉄製品がある。甕形土器は1のみである。口縁部がわずかに外反する形状を呈するものである。坏形土器は2～13で、2、3は体部をヘラ削調整している。4～11は若干外反ぎみに開く体部を呈している。12、13は高台付である。鉄製品は14、15で14は用途不明。15は手鎌で小孔が左端にあく。



1　黄灰色砂質粘土層
2　黒色土層
3　焼土粒混入黒褐色土層
4　焼土層
5　ローム粒混入黒褐色土層

図572　D084号遺構カマド実測図

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
3	坏	4.4	(11.4)	(7.65)	1/3	体部ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	
4	坏	3.3	12.6	8.05	1/2	底部回転ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	茶褐色	
5	坏	3.0	12.4	7.9	1/2	底部回転ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	茶褐色	
6	坏	3.6	(12.2)	(6.9)	1/2	底部回転ヘラ削り	雲母 砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「冨」 糸切り
7	坏	3.7	(12.3)	6.3	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
8	坏	3.8	(12.1)	6.0	1/2	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
9	坏	—	(12.4)	—	体部 1/3	—	砂粒	堅緻	灰色	ヘラ切り
10	坏	—	—	9.0	底部 1/2	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
11	坏	5.0	14.6	8.1	1/2	—	小石	堅緻	灰色	ヘラ切り
12	高台付坏	—	—	7.1	底部 1/2	—	砂粒	やや軟弱	黒褐色	内黒
13	高台付坏	6.7	14.4	9.4	3/3	—	砂粒	堅緻	茶褐色	

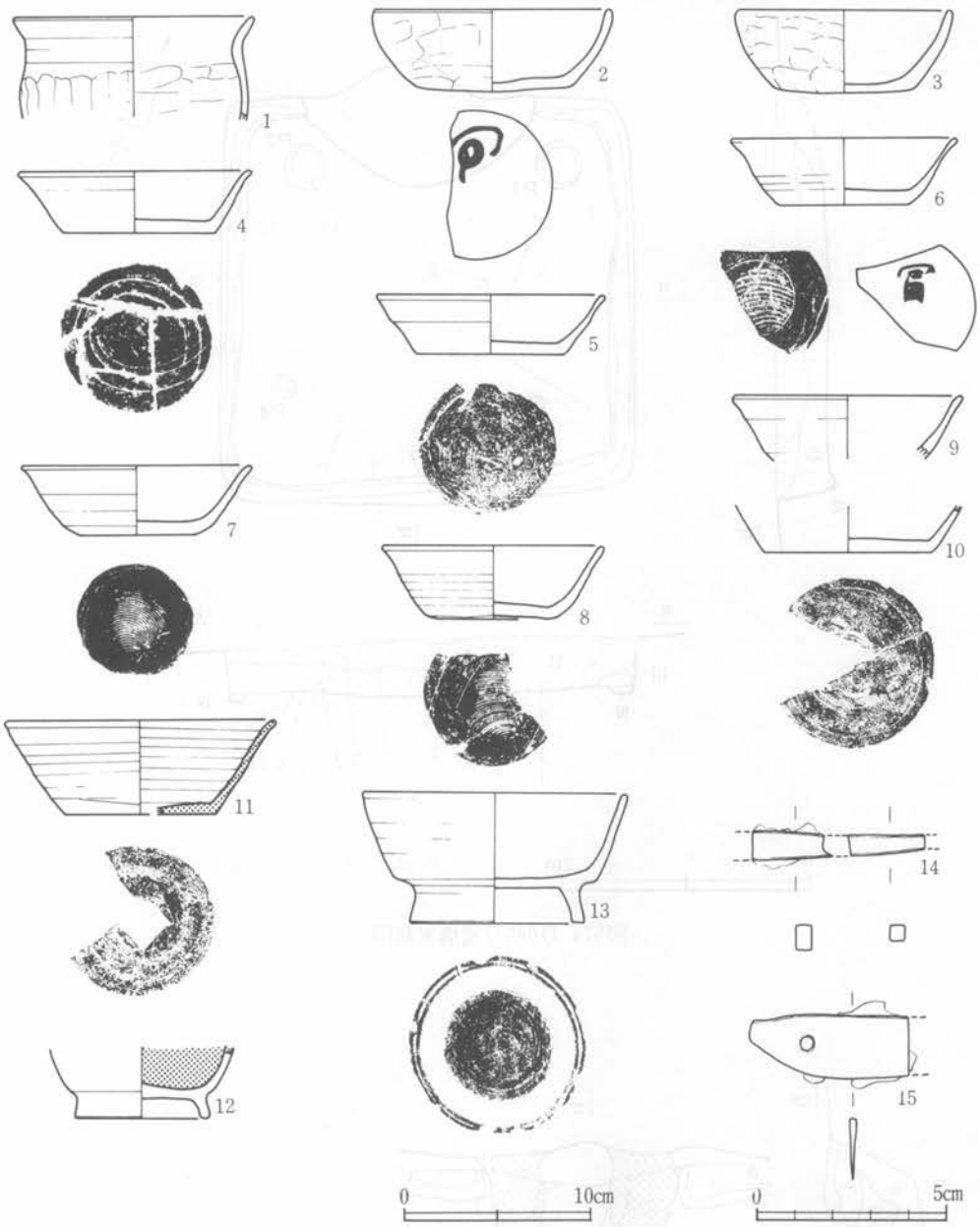


図573 D084号遺構出土遺物実測図

11. **D085号遺構**（図574～576、図版139－1・2、146）

IV群の住居群内において最も東側に位置し、地区界に近くで検出した遺構である。D086が近接している。

遺構 北壁3.20m、東壁3.24mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.40m掘り込んでおり、直下に幅0.18m、深さ0.06mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。

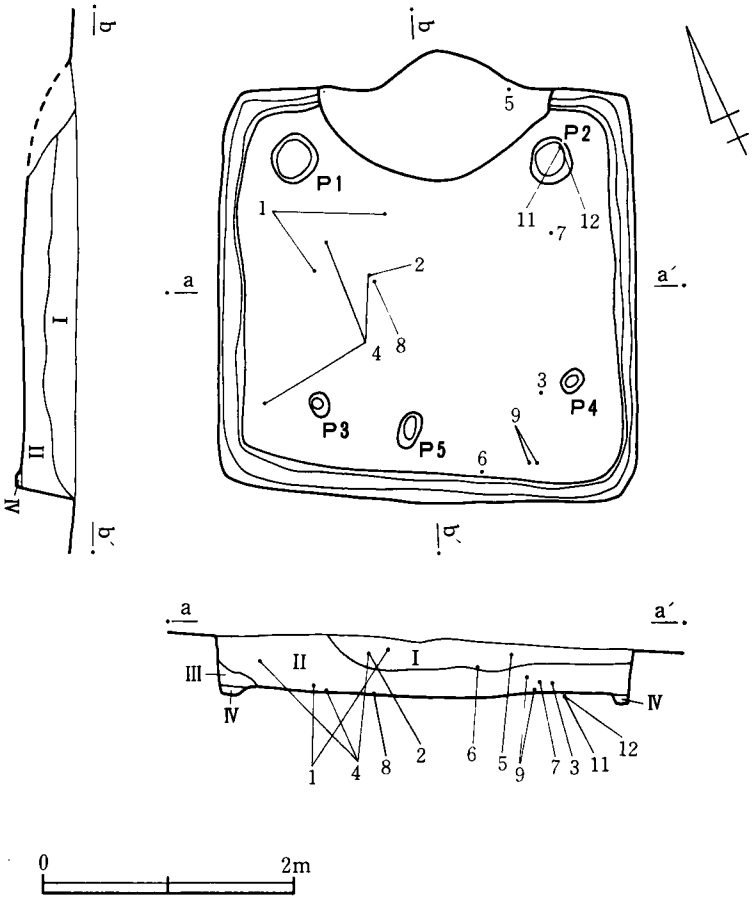


図574 D085号遺構実測図

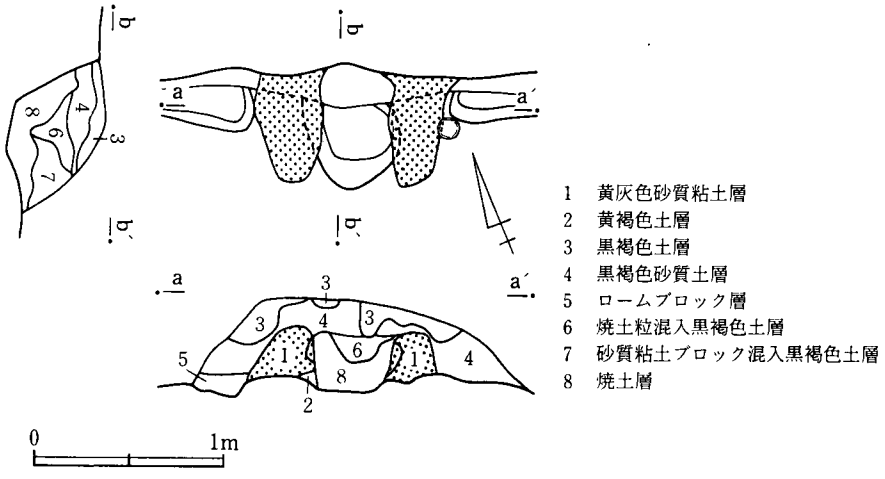


図575 D085号遺構カマド実測図

床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴と考えられるのはP_1～P_4で、P_1、P_2は径0.35m、深さ0.01m～0.17m、P_3、P_4は径0.20m、深さ0.12m～0.15m、P_5は径0.15m、深さ0.21mを計るがいずれも小規模である。

カマド　北壁中央部に、黄灰色粘土砂質で構築しているが、壁への掘り込みは認められない。しかし掘り込みに相当するようにロームを削り出しており、煙道部が傾斜を呈することは他と同様である。粘土の貼り込みは袖部から煙出し部まで一体化しており、粘土の貼り込みが主体となる構造を呈している。火袋に相当する袖は焼土化が著しく、火床部は深さ0.07mで浅い掘り込みを呈している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒褐色土層、Ⅱ層黒色土層、Ⅲ層褐色土層、Ⅳ層茶褐色土層が堆積する。

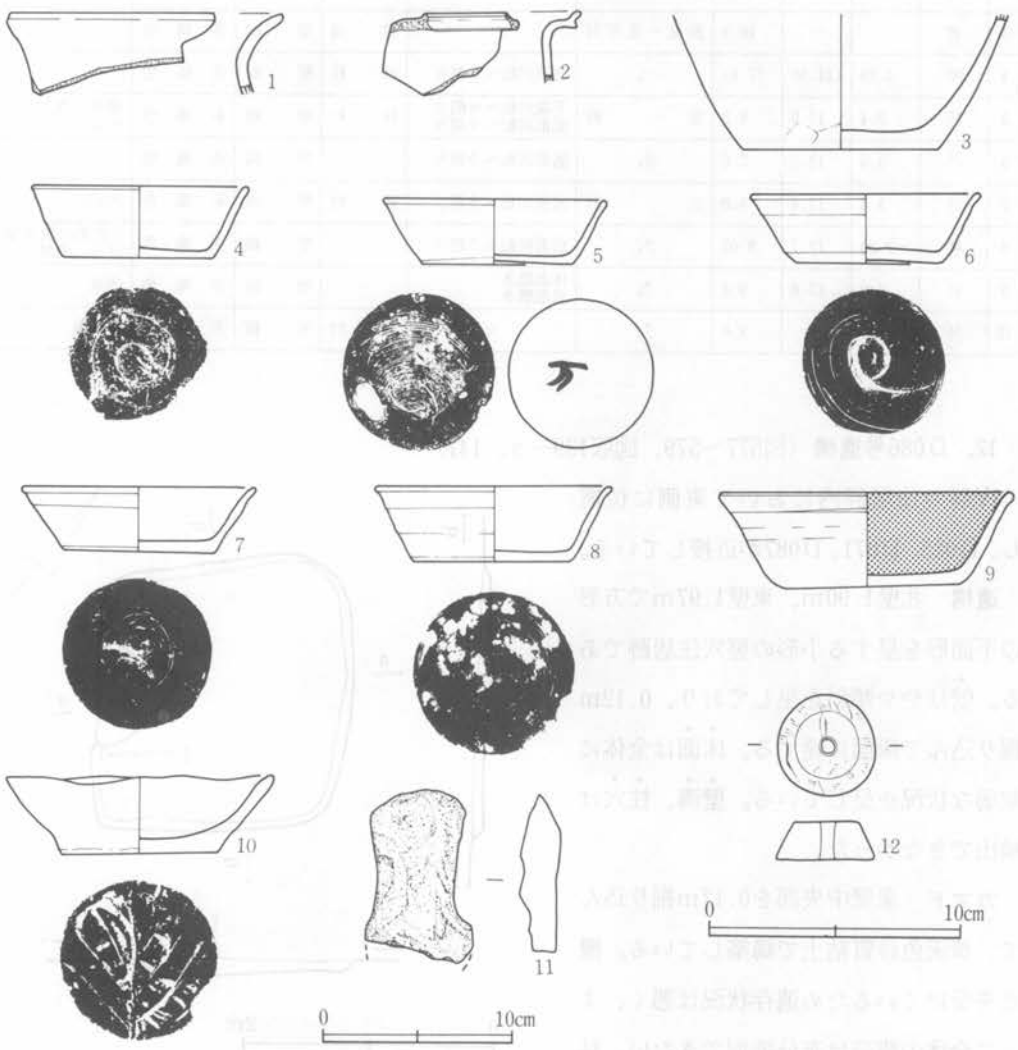


図576　D085号遺構出土遺物実測図

遺物は床面上出土を中心とし、カマド内出土もある。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器と石製品がある。甕形土器は1～3で、1、2は口縁部破片、3は底部破片である。坏形土器は4～10で、口径 12 cm 前後の4～8と、口径 15 cm 前後の9がある。10は甕形土器の底部を調整し、坏として使用したものと思われる。石製品は11、12で、11は砂岩製の石斧残片である。12は滑石製の紡錘具で、径4 cm を計り中央に 0.5 cm の軸孔があく。重さ34ｇを計る。

D085出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ	雲母	堅緻	茶褐色	
2	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ	雲母	堅緻	茶褐色	
3	甕	—	—	10.3	胴部～底部½	—	雲母	堅緻	茶褐色	
4	坏	3.75	(11.5)	(7.8)	⅓	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
5	坏	3.4	12.0	8.2	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「万」 糸切り
6	坏	3.5	12.2	7.6	¾	底部回転ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	
7	坏	3.4	12.4	8.0	完形	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
8	坏	3.09	12.7	8.03	¾	底部回転ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	二次的に火を受ける、内黒
9	坏	4.9	15.6	9.4	¾	体部磨き 底部磨き	—	堅緻	茶褐色	内黒
10	坏	—	—	8.6	¾	—	砂粒	堅緻	茶褐色	木葉痕

12. D086号遺構（図577～579、図版139—3、147）

IV群の住居群内において東側に位置し、D085、D071、D087が近接している。

遺構　北壁1.90m、東壁1.97mで方形の平面形を呈する小形の竪穴住居跡である。壁はやや傾斜を呈しており、0.12m掘り込んで床面に達する。床面は全体に軟弱な状況を呈している。壁溝、柱穴は検出できなかった。

カマド　東壁中央部を0.17m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。攪乱を受けているため遺存状況は悪く、よって全体の構造は充分把握できない。粘土の貼り込みは右袖が煙道部まで認めら

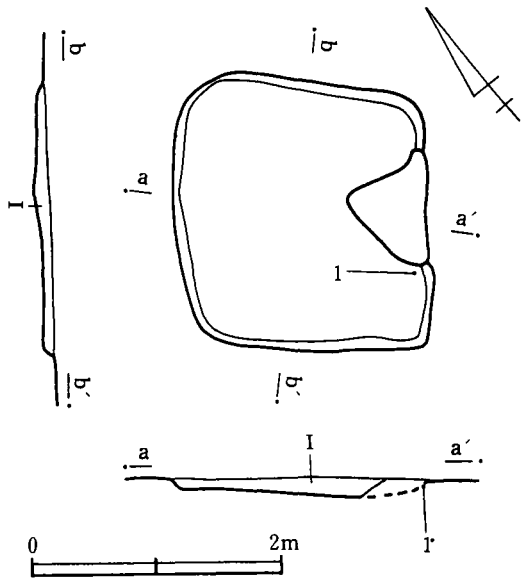


図577　D086号遺構実測図

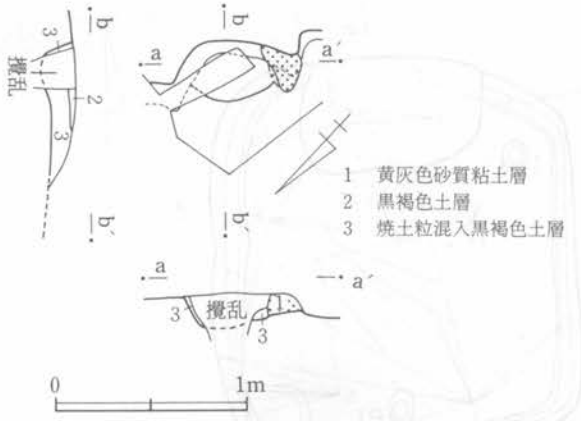


図578 D086号遺構カマド実測図

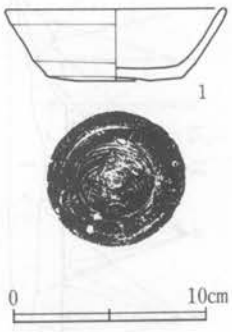


図579 D086号遺構出土遺物実測図

れるものの左袖、天井部は遺在していない。

遺物出土状況　覆土は黒褐色土の単一層で、出土遺物は稀少であり、図示できるのはカマド脇より出土した1点のみである。

出土遺物　遺物は稀少で図示できるものは1点だけである。1は坏形土器で口径12cmを計り、体部はほぼ直線的に開く形状を呈している。

D086出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	坏	3.75	11.7	7.2	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り

13. **D087号遺構**（図580～582、図版140、147）

IV群の住居群内において東側に位置し、D085、D086が近接している。D071を重複切断して構築している。

遺構　北壁2.74m、東壁3.02mで胴張りのある方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.47m掘り込んでおり、直下に幅0.18m、深さ0.08mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は検出できなかったが、北西壁コーナーにP_1、南壁中央部に近接して径0.20m、深さ0.07mを計るP_2を検出した。また南東壁コーナー部分には一辺0.4m、深さ0.05mの四角形の掘り込みがある。

カマド　煙道部分が攪乱を受けているため充分に把握できないが、北壁中央部を掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土は袖部から煙道部まで貼り込んでいると思われるが、攪乱を受けるため明確でない。火袋に相当する袖は焼土化が認められ、火床部は深さ0.10mの掘

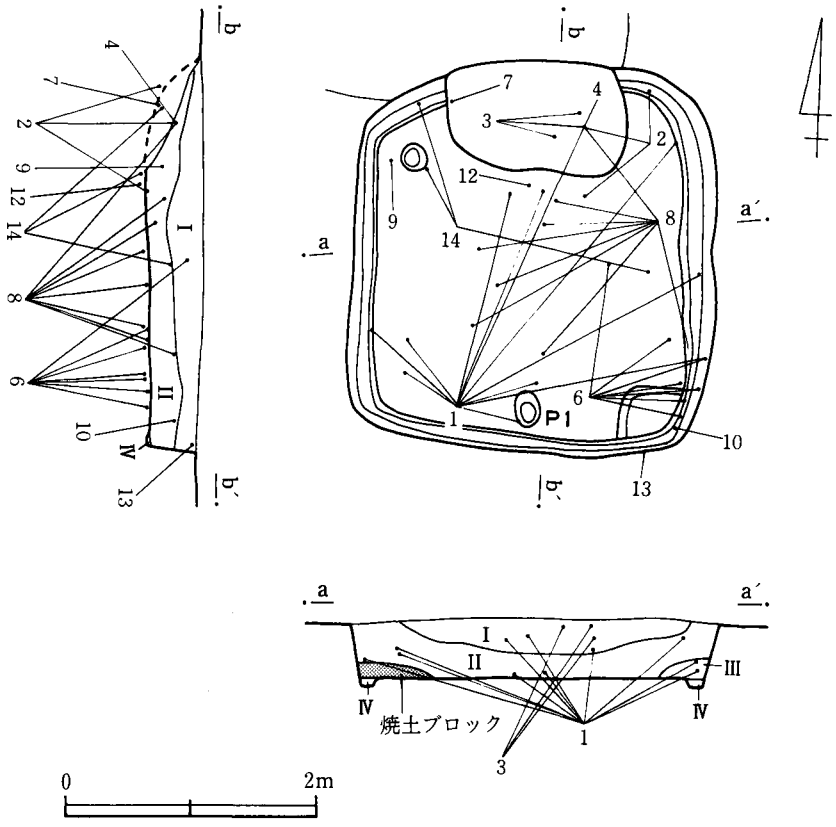


図580 D087号遺構実測図

り込みを呈している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層褐色土層、III層黒褐色土層、IV層茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上を中心として出土し、カマド内出土もある。

出土遺物　遺物は、甕、甑、坏、皿、壺形土器がある。甕形土器は1～3で、1、2は口唇部に特徴のある口縁部を呈している。3は1、2のような口縁部を呈す甕の底部と思われる。5は広口甕の底部である。甑形土器は4で胴部に叩き目がある。坏形土器は口径12cm前後の6と、口径15cm前後の7～9がある。10～12は墨書のある破片である。皿形土

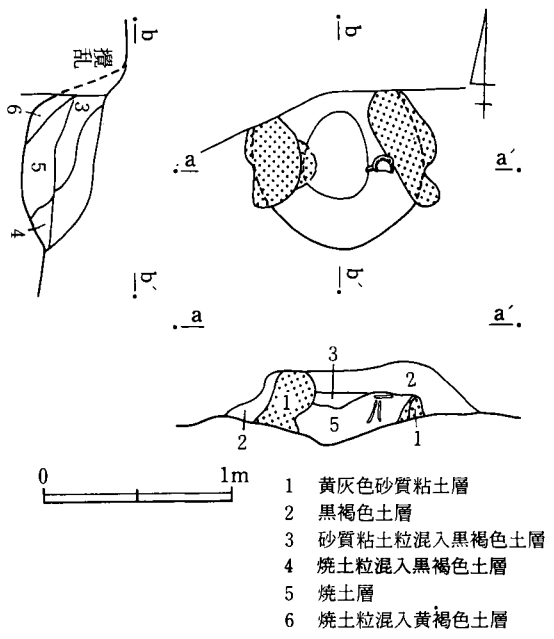


図581 D087号遺構カマド実測図

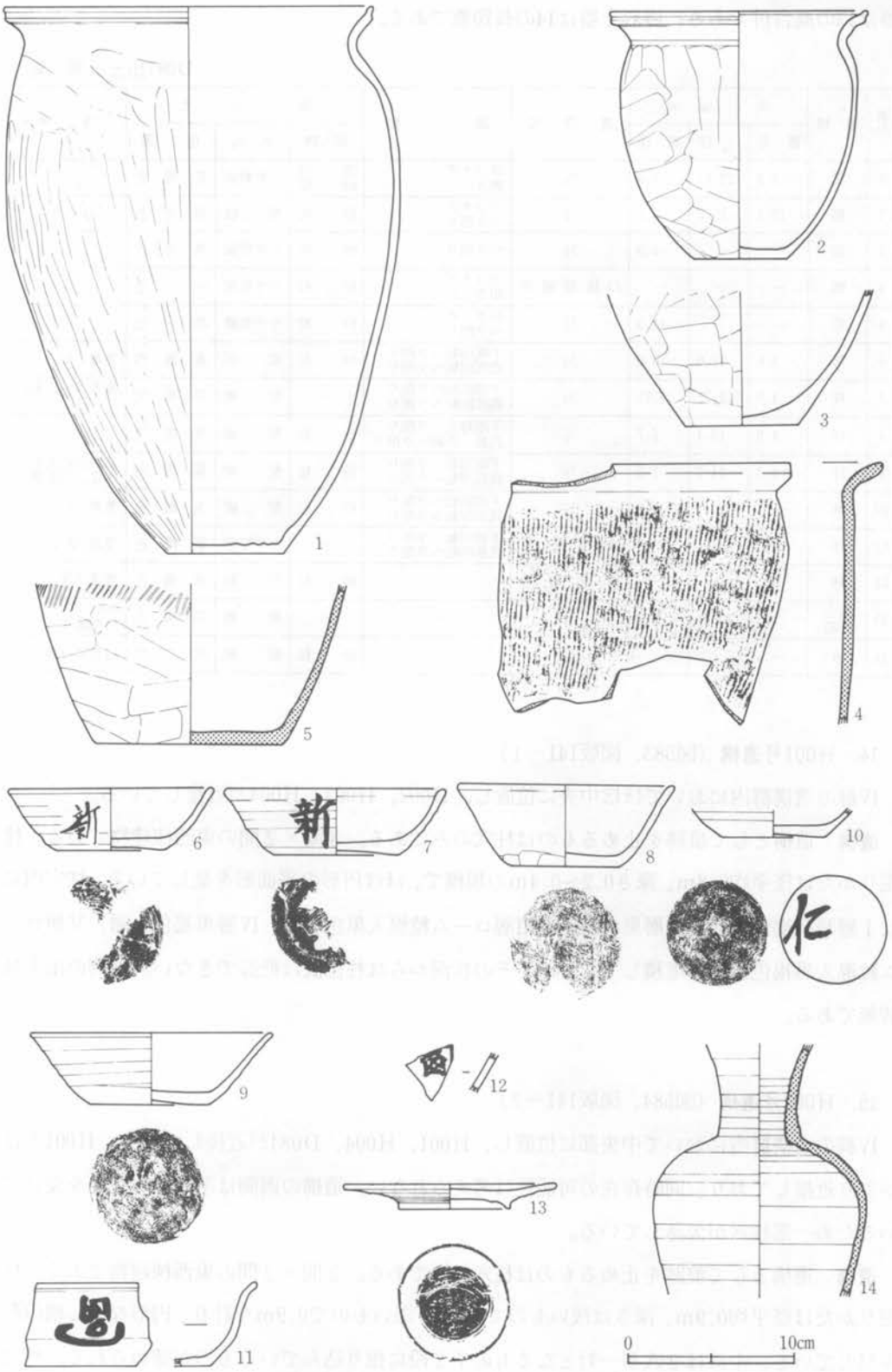


図582 D087号遺構出土遺物実測図

器は13の高台付である。壺形土器は14の長頸瓶である。

D087出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	3.3	(22.6)	7.0	3/3	ヨコナデ 磨き	雲母 砂粒	やや軟弱	茶褐色	
2	甕	15.1	15.8	5.7	1/2	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
3	甕	—	—	6.9	1/4	ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
4	甑	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ 叩きじめ	砂粒	やや堅緻	灰色	
5	甕	—	—	11.3	1/3	叩きじめ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒灰色	
6	坏	3.6	12.6	6.6	2/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	軟弱	茶褐色	墨書「新」
7	坏	4.0	(13.7)	(7.7)	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	墨書「新」、糸切り
8	坏	4.9	13.4	6.7	1/2	下端静止ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
9	坏	4.3	14.7	7.2	2/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	二次的に火を受ける、内面磨き
10	坏	—	—	6.3	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「仁」
11	坏	—	—	—	体部破片	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	—	やや堅緻	茶褐色	墨書「冨」、内黒
12	坏	—	—	—	体部破片	—	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「冨」
13	高台付皿	1.5	(13.2)	6.9	1/2	—	—	堅緻	茶褐色	糸切り 内面磨き
14	壺	—	—	—	3/3	—	砂粒	堅緻	灰色	自然釉付着

14. H001号遺構（図583、図版141－1）

IV群の遺構群内においてほぼ中央に位置し、H002、H003、H004が近接している。

遺構　遺構として痕跡を止めるものは柱穴のみである。3間×2間の東西棟建物である。柱掘りかたは径平均0.8m、深さ0.2～0.4mの規模で、ほぼ円形の平面形を呈している。柱穴内にはI層暗茶褐色土層、II層黒色土層、III層ローム粒混入黒色土層、IV層黒褐色土層、V層ローム粒混入黒褐色土層が堆積しているが、その状況からは柱位置は把握できない。遺物の出土は皆無である。

15. H002号遺構（図584、図版141－2）

IV群の遺構群内において中央部に位置し、H001、H004、D084が近接している。H001とはかなり近接しており、同時存在の可能性は考えられない。遺構の西側は芋穴状の攪乱を受けているため一部柱穴が欠落している。

遺構　遺構として痕跡を止めるものは柱穴のみである。2間×2間の東西棟建物である。柱掘りかたは径平均0.9m、深さは浅いもので0.2m、深いもので0.9mを計り、円形ないし楕円形を呈している。中には2穴が一対となるものや2段に掘り込んでいるものが認められる。柱穴内にはI層暗茶褐色土層、II層黒褐色土層、III層黒色土層、IV層ローム粒混入黒褐色土層、V

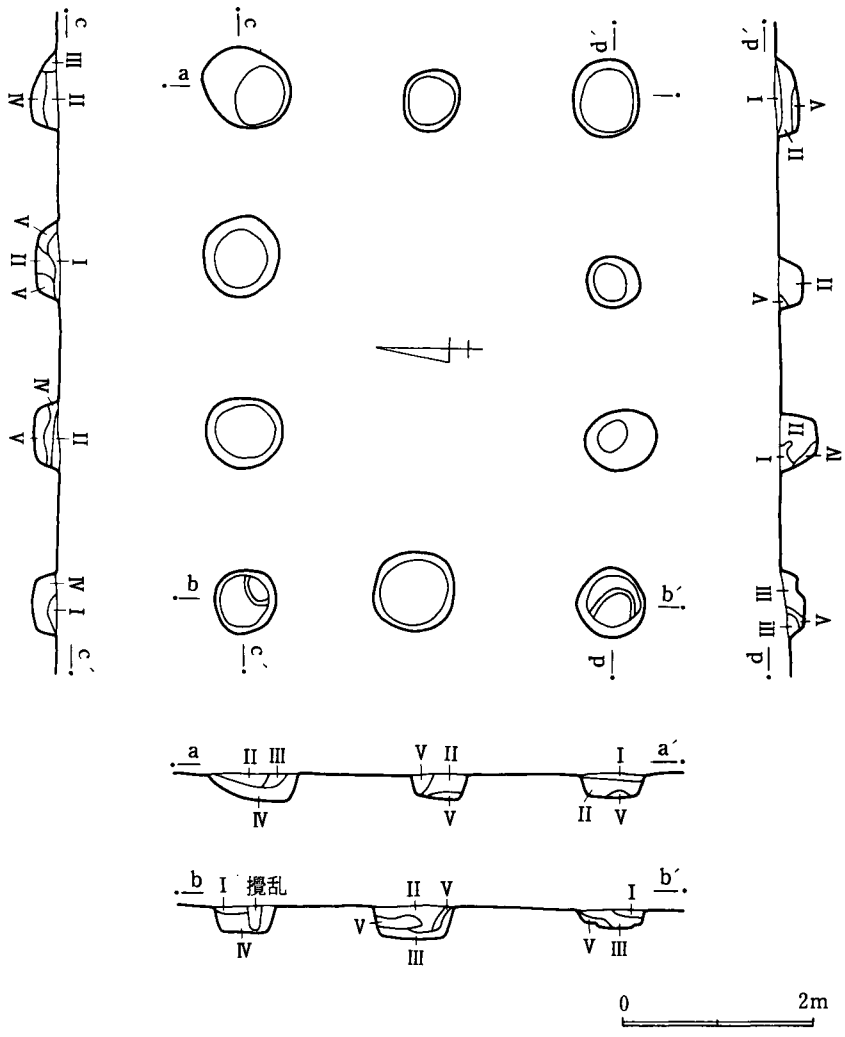


図583 H001号遺構実測図

層ローム粒混入黒色土層が堆積しているが、その状況からは柱位置は把握できない。出土遺物は皆無である。

16. **H003号遺構**（図585、図版141－3）

IV群の遺構群内において中央部の西側に位置し、H001、H008、D073が近接している。遺構の南東部分は芋穴状の攪乱を受けているため一部柱穴が欠落している。

遺構　遺構として痕跡を止めるものは柱穴のみである。3間×2間の東西棟建物である。柱掘りかたは径0.73m～1m、深さ0.27m～0.48mの規模で、楕円形を呈している。柱穴内にはI層黒褐色土層、II層黒色土層、III層ローム粒混入黒色土層、IV層ローム粒混入黒褐色土層が堆積しているが、その状況からは柱位置は把握できない。出土遺物は皆無である。

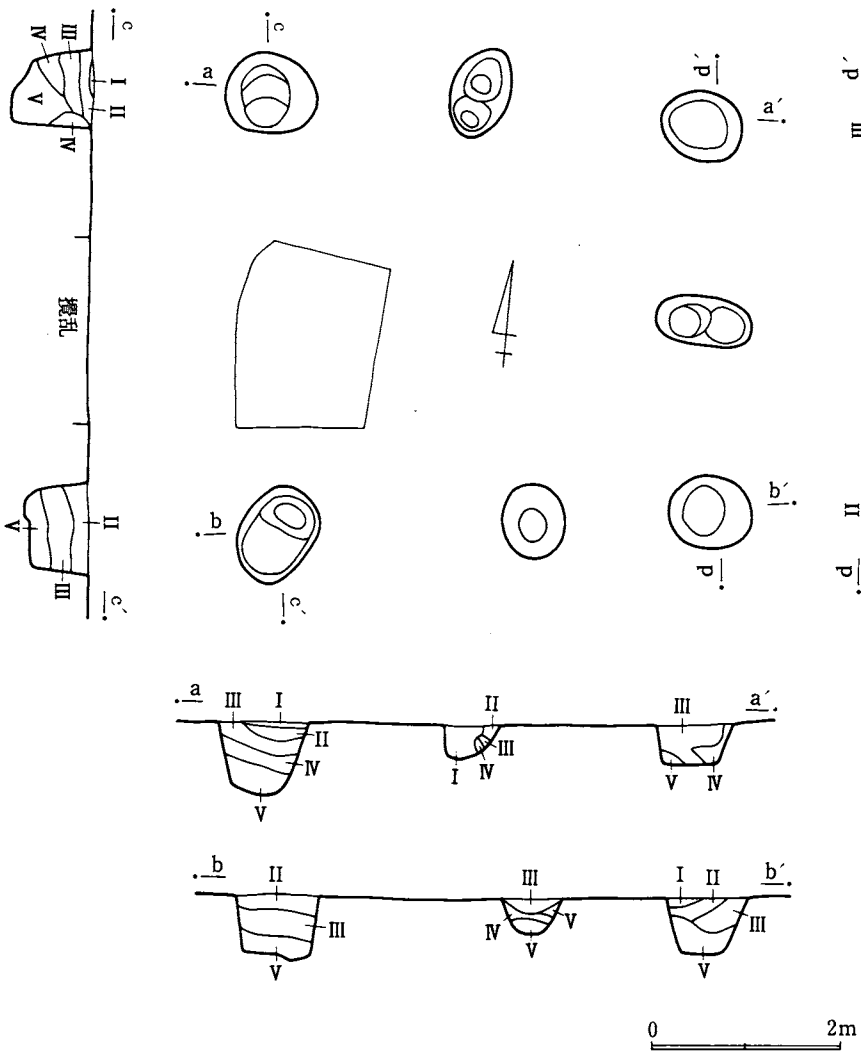


図584 H002号遺構実測図

17. H004号遺構（図586、図版142）

IV群の遺構群内においてほぼ中央部に位置し、H002、H006、D084が近接している。いずれもかなり近接しているため同時存在は考えにくい。

遺構　遺構として痕跡を止めるものは柱穴のみである。2間×2間の東西棟建物である。柱掘りかたは径0.9m、深さ0.5mの規模で、楕円形に近い状況を呈している。据かたを検出できた柱穴もある。柱穴内にはI層黒褐色土層、II層黒色土層、III層ローム粒混入黒色土層が堆積している。出土遺物は皆無である。

18. H005号遺構（図587、図版142 2）

IV群の遺構群内において南側に位置し、D084が近接している。

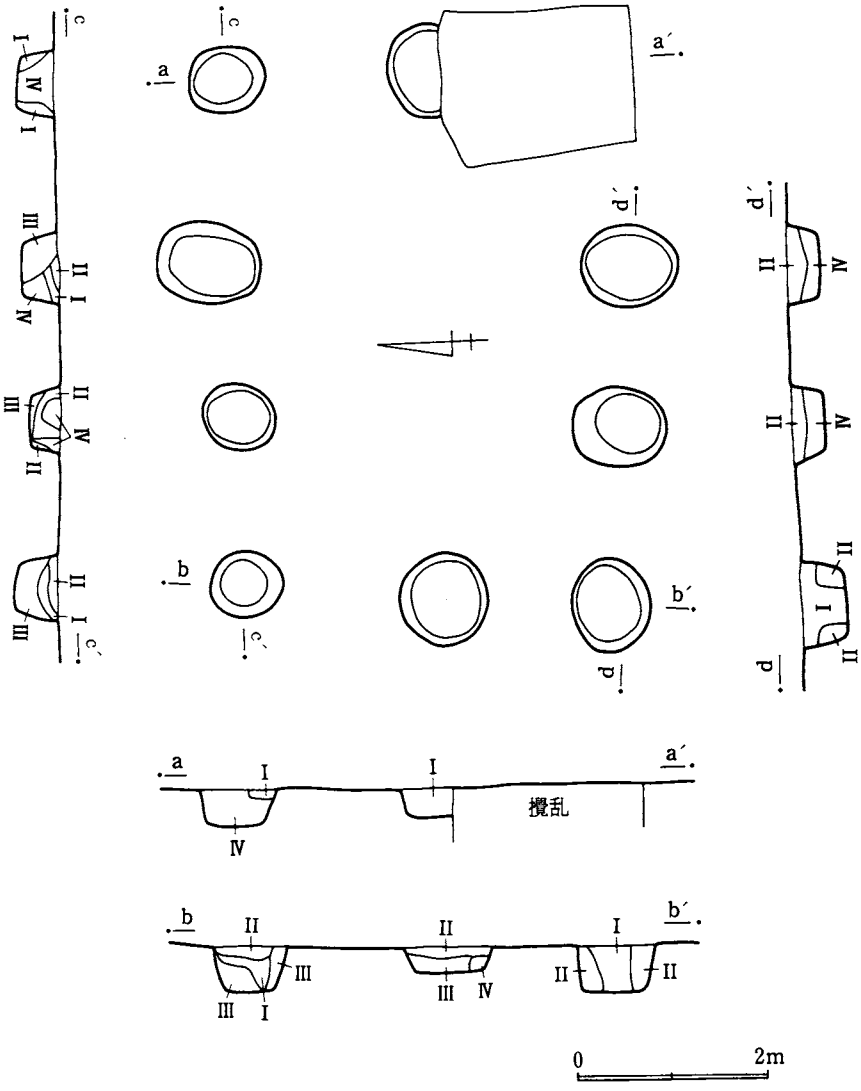


図585 H003号遺構実測図

遺構 遺構として痕跡を止めるものは柱穴のみである。2間×2間の南北棟建物である。柱掘りかたは径0.7m、深さ0.3mを平均とする規模で、円形ないし楕円形を呈している。全体に掘り込みが深く堅牢でないが、中には据かたが認められる柱穴もある。柱穴内にはI層ローム粒混入黒褐色土層、II層褐色土層が堆積している。出土遺物は皆無である。

19. H006号遺構（図588・589、図版142—3、148）

IV群の遺構群内においてほぼ中央部に位置し、H004、D072、D082が近接している。いずれもかなり近接しているため同時存在は考えにくい。

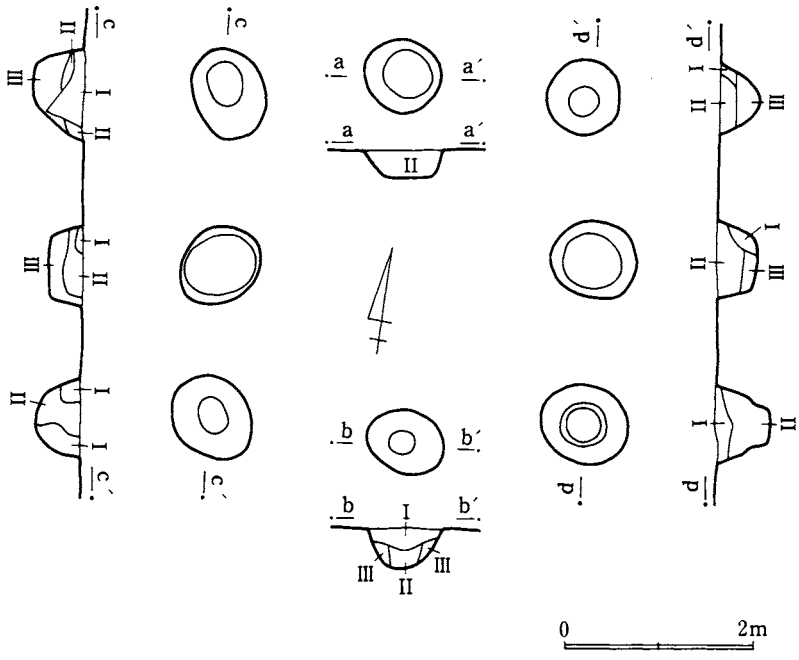


図586 H004号遺構実測図

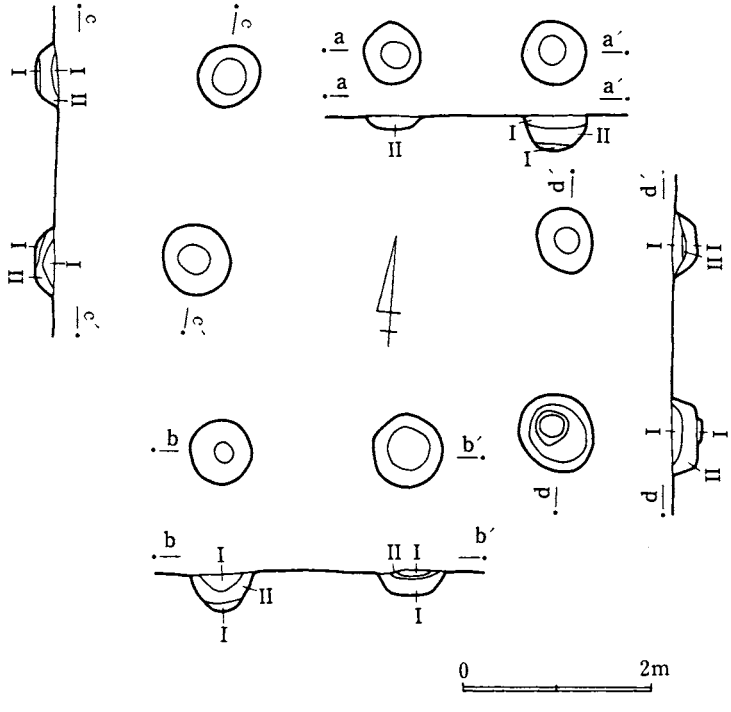


図587 H005号遺構実測図

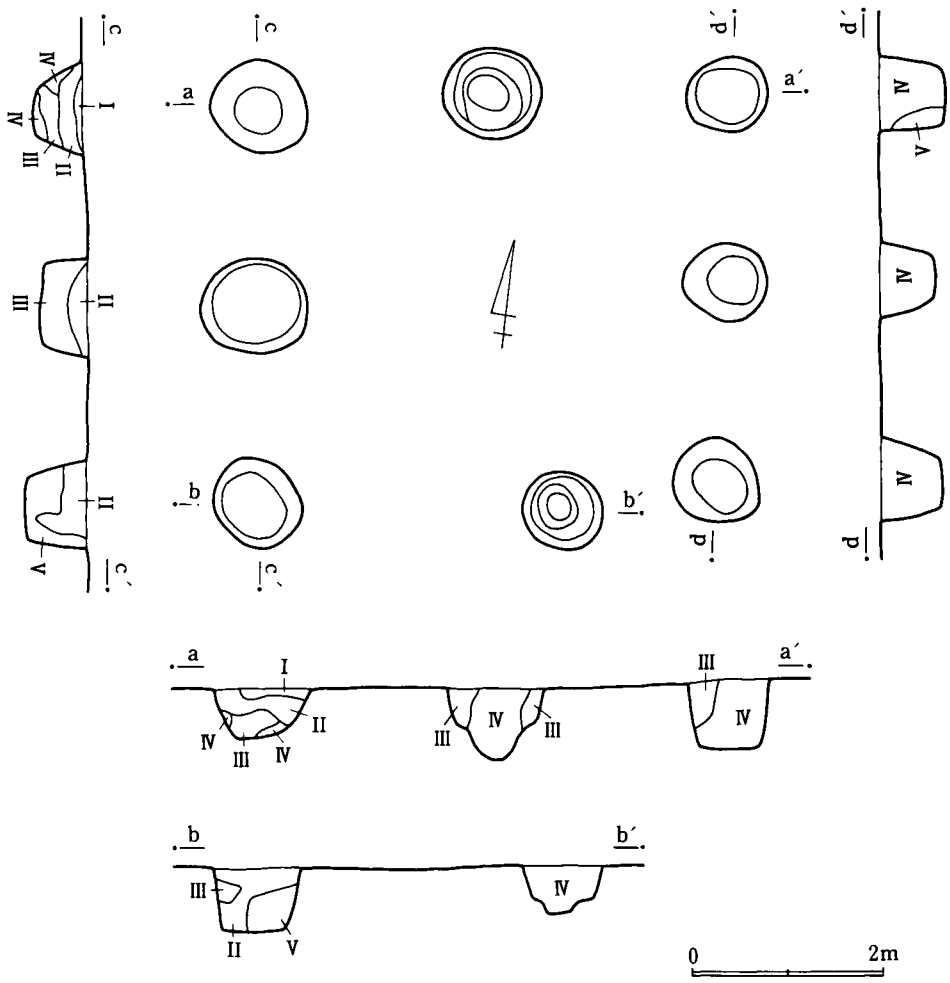


図588 H006号遺構実測図

遺構　遺構として痕跡を止めるものは柱穴のみである。2間×2間の東西棟建物でH002と規模的に同じである。柱掘りかたは径1m、深さ0.8mを平均とする規模で、円形を呈している。据かたが認められる柱穴もあるが、ほとんどは認められない。柱穴内にはI層暗茶褐色土層、II層黒色土層、III層黒褐色土層、IV層ローム粒混入黒色土層、V層ローム粒混入黒褐色土層が堆積しているが、単一層の柱穴もある。

出土遺物　遺物は稀少で、図示できるのは鉄鏃1点のみである。角棒状の身で先端は三角形に作出されている。

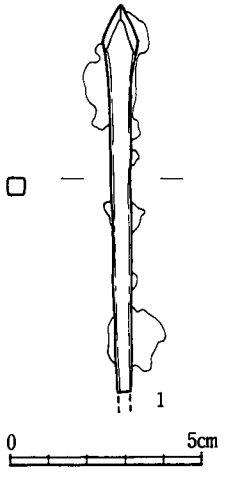


図589 H006号遺構出土遺物実測図

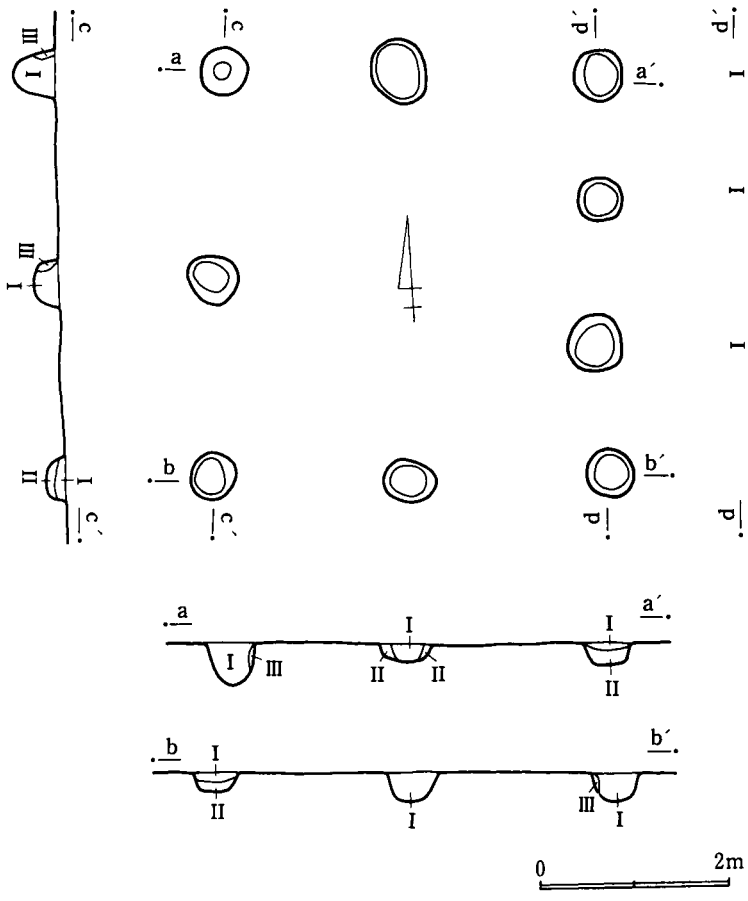


図590 H007号遺構実測図

20. H007号遺構（図590、図版143—1）

IV群の遺構群内において西側に位置し、D073、H008が近接している。

遺構　遺構として痕跡を止めるものは柱穴のみである。東側柱は4柱穴であるが2間×2間の南北棟建物と考えて良いであろう。柱掘りかたは径0.5m、深さ0.3mと群内では最少規模で、ほぼ円形を呈している。柱穴内にはI層黒色土層、II層ローム粒混入黒色土層、III層黄褐色土層が堆積しているが、そ

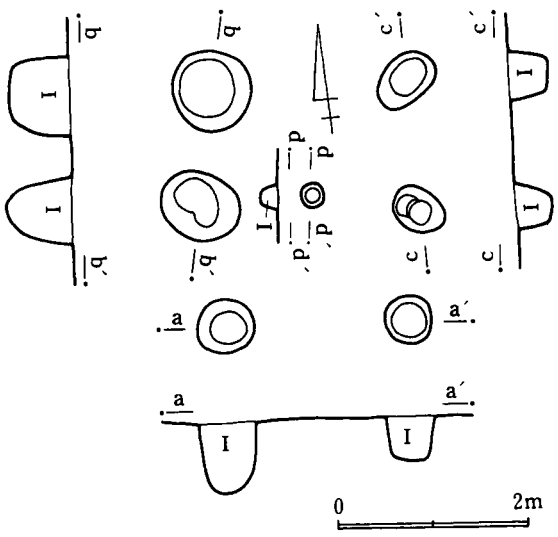


図591 H008号遺構実測図

の状況からは柱位置は把握できない。出土遺物は皆無である。

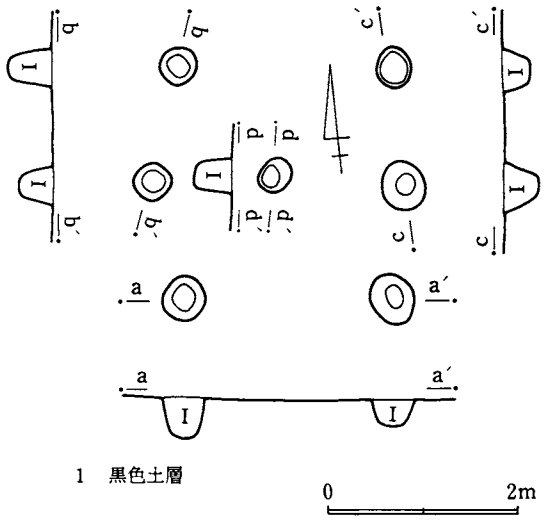


図592 H009号遺構実測図

21. H008号遺構（図591、図版143－2）

IV群の遺構群内において南西部分に位置し、H007、H009、D082が近接している。

遺構 遺構として痕跡を止めるものは柱穴のみである。2間×1間の南北棟建物で、中央部に小柱穴が認められる。柱掘りかたは径0.5m～0.82m、深さ0.4m～0.78mの規模で、円形ないし楕円形を呈している。柱穴内には黒色土層のみが堆積する単一層であり、柱位置については把握できない。出土遺物は皆無である。

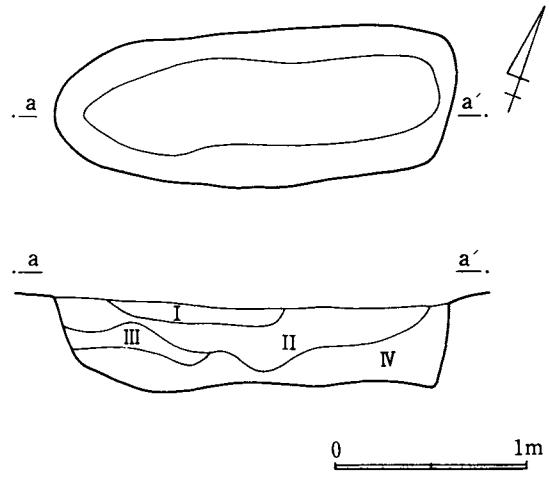


図593 P007号遺構実測図

22. H009号遺構（図592、図版143－3）

IV群の遺構群内において南西部分に位置し、H008、D072が近接している。H008と同規模の構造である。

遺構 遺構として痕跡を止めるものは柱穴のみである。2間×1間の南北棟建物で、中央部に小柱穴が認められる。柱掘りかたは径0.48m、深さ0.4mを平均とする規模で、円形を呈している。全体的に柱の通りは悪く、規格的に構築された状況は捉えにくい。柱穴内には黒色土層のみが堆積する単一層であり、柱位置については把握できない。出土遺物は皆無である。

23. P007号遺構（図593）

IV群の遺構群内において東南部分に位置し、D085、D086が近接している。

遺構 長径2.1m、短径0.8mを計る長楕円形の平面形を呈する遺構である。壁は若干の傾斜

を呈するものの、0.42m掘り込んで底面に達する。底面は若干の起状を呈しており、特に踏み固められたような状況は認められない。

遺構内にはⅠ層ローム粒混入暗褐色土層、Ⅱ層暗褐色土層、Ⅲ層ロームブロック混入茶褐色土層、Ⅳ層茶褐色土層が堆積しているが、遺物を包含しておらず、よって図示できる遺物は皆無である。

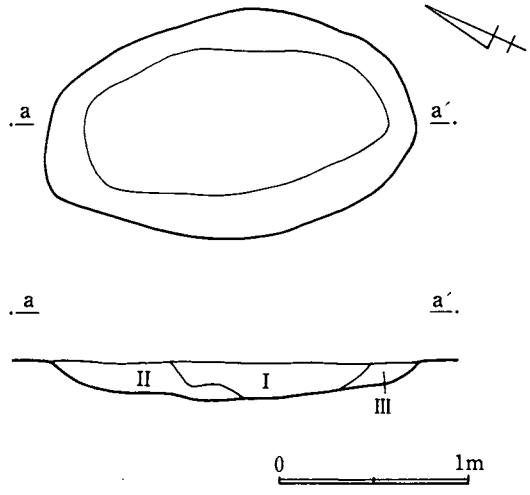


図594 P008号遺構実測図

24. P008号遺構（図594）

Ⅳ群の遺構群内において東南部分に突出して位置し、P009が近接している。他の遺構とは約20mの距離を有している。

遺構　長径2m、短径1.2mを計る楕円形の平面形を呈する遺構である。壁は緩傾斜を呈し0.18m掘り込んで底面に達している。底面は若干の起状を呈しており、踏み固められたような状況は認められない。

遺構内にはⅠ層暗褐色土層、Ⅱ層茶褐色土層、Ⅲ層ロームブロック混入暗褐色土層が堆積しているが、遺物を包含しておらず、よって図示できる遺物は皆無である。

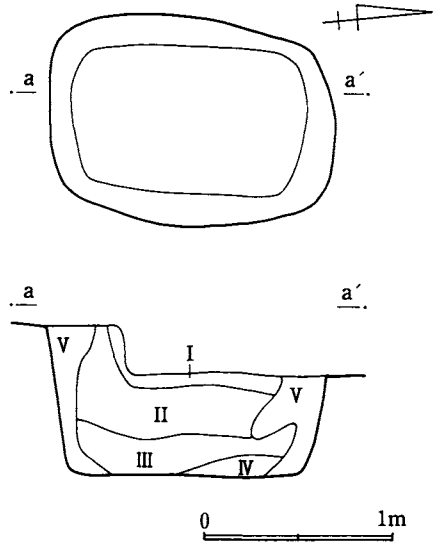


図595 P009号遺構実測図

25. P009号遺構（図595）

Ⅳ群の遺構群内において東南部分に突出して位置し、P008が近接している。他の遺構とは約20mの距離を有している。

遺構　長辺1.5m、短辺1.05mを計る方形の平面形を呈する遺構である。壁は若干の傾斜を呈し、0.75m掘り込んで底面に達している。底面は平坦であるが、踏み固められたような状況を呈していない。

遺構内にはⅠ層ローム粒混入暗褐色土層、Ⅱ層暗褐色土層、Ⅲ層黒色土混入暗褐色土層、Ⅳ層ロームブロック混入暗褐色土層、Ⅴ層ロームブロック層が堆積しているが、遺物を包含しておらず、よって図示できる遺物は皆無である。

第6節　第Ⅴ群の遺構と遺物

歴史時代の第Ⅴ群は、竪穴住居跡6軒で構成される群で、Q－5、R－5地域において検出した。

第Ⅴ群は、標高11mの段丘上に立地している。6軒の住居を群として捉えることが可能であるが多少疑問な点がある。重複する2軒の住居が存在することは少なくとも6軒すべてが同時存在を示すものではなく、長い時間の経過のうえで形成したものであることが窺える。しかし、面的な調査の結果からは、第Ⅵ群、第Ⅶ群と近接する位置的な関係は認められるものの、これらの群との間には遺構のまったく存在しない部分があり、さらに農道を狭んだ北側には新川方面より入り込む須久茂谷津が迫っており、群としての纏りは完結していると考えて良いであろう。

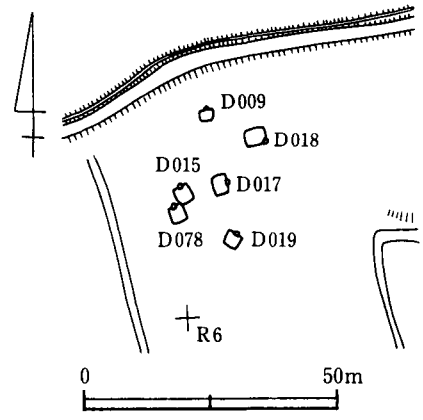


図596 歴史時代第Ⅴ群遺構分布状況図

他群において指摘できたように、本群においても掘立柱建物跡は検出することができなかった。

既に指摘したように須久茂谷津の沖積地が迫っており、沖積地を意識して立地していると言って良いであろう（図596）。

1．D009号遺構（図597～600、図版150－1、151－1、155）

Ⅴ群の住居群内において最も北側に位置し、D015、D017、D018、D019、D078と纏りを呈する遺構である。

遺構　北壁2.38m、東壁2.34mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はやや傾斜を呈し、0.30m掘り込んで床面に達している。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴、壁溝は検出できなかった。

カマド　北壁と北東壁コーナー部において検出した。旧時のカマドBは修改築時に取り毀しており、壁の掘り込み部分と火床部が遺存する程度で、全体は充分把握することはできない。

D009出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	長頸瓶	22.4	7.4	5.4	完形	—	砂粒	堅緻	灰色	糸切り
2	坏	4.4	13.4	8.1	完形	底部一方向ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	灰色	ヘラ切り

住居廃絶時まで使用していたカマドAは、北東壁コーナー部分を利用し、壁を0.24m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙道部まで一体化しており、火床部は掘り込み中に位置している。煙道部は急激な傾斜を呈している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層褐色土層が堆積する。遺物はI層およびII層上面を中心とし、床面上出土はほとんどない。1の長頸瓶は遺構確認調査時に出土したものである。

出土遺物　遺物は、長頸瓶、坏形土器と石製品がある。長頸瓶は1で、胴部と頸部がともに細い形状を呈し、口縁部は小さく外反する。坏形土器は2で体部は直線的に開く形状を呈す。石製品は3～5で、3、4は滑石製の双孔円板である。5は加工途中の滑石の大きな剝片で、小孔があく。

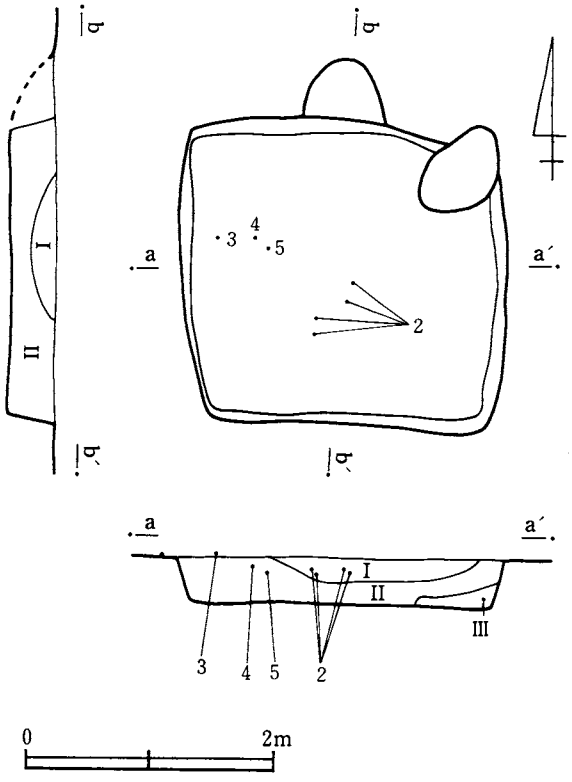


図597　D009号遺構実測図

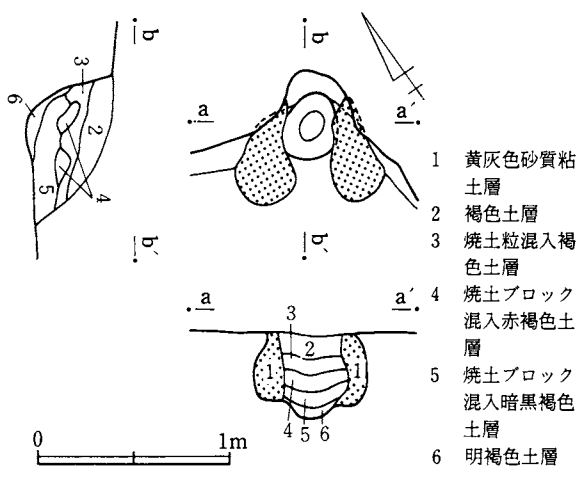


図598　D009号遺構Aカマド実測図

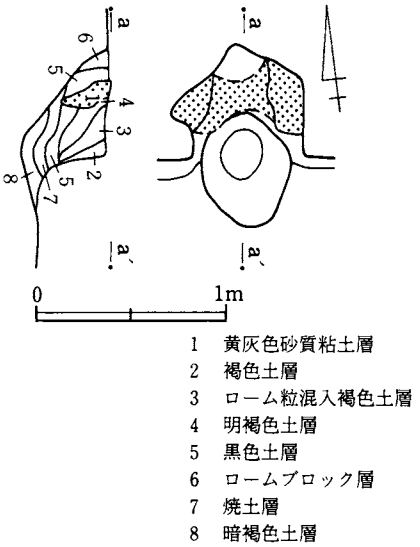


図599　D009号遺構Bカマド実測図

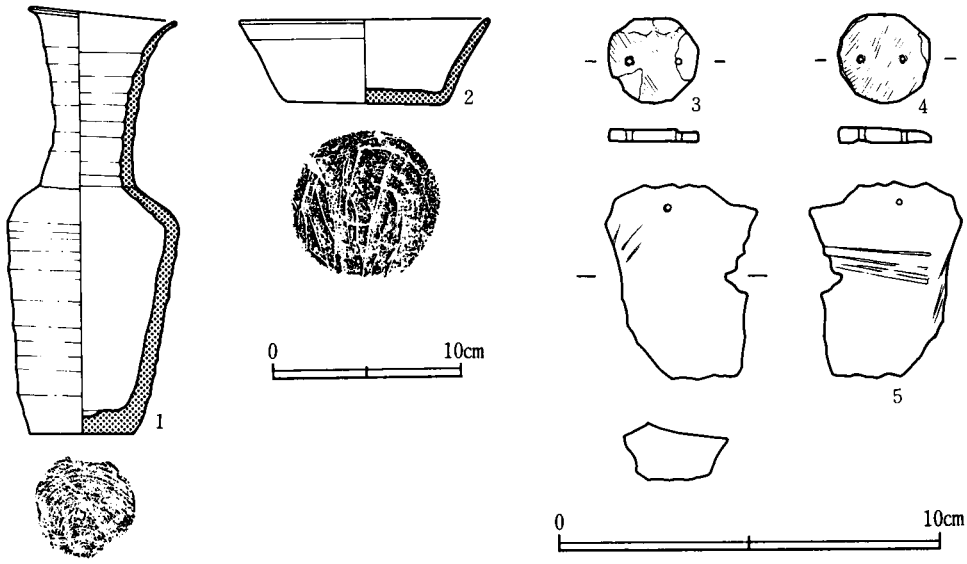


図600 D009号遺構出土遺物実測図

2．D015号遺構（図601～604、図版151－2・3、154－3、155）

V群の住居群内においてほぼ中央部に位置し、D019、D017、D018、D019、D078と纏りを呈する遺構である。D078の北東壁コーナー部分を重複切断して構築している。床面上に炭化物、焼土塊が検出できたので焼失住居と考えて良いであろう。

遺構　北壁3.09m、東壁3.20mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.57m掘り込んでおり、直下に幅0.23m、深さ0.05mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は検出できなかったが、南壁ほぼ中央に近接して

D015出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	14.5	(15.4)	6.9	3/3	ヨコナデ ヘラ削り	—	やや軟弱	黒褐色	
2	甕	—	(20.2)	—	口縁部～胴部1/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
3	甕	—	—	(13.6)	胴部 1/3	叩きじめ	砂粒	やや軟弱	黒褐色	
4	坏	3.45	(13.4)	7.3	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	茶褐色	
5	坏	4.2	13.4	6.4	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
6	坏	—	—	(6.75)	底部 1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	—	堅緻	赤褐色	
7	坏	—	13.8	—	1/3	—	小石	堅緻	灰色	
8	高台付皿	3.5	14.2	7.0	完形	—	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「冨」 内面磨き

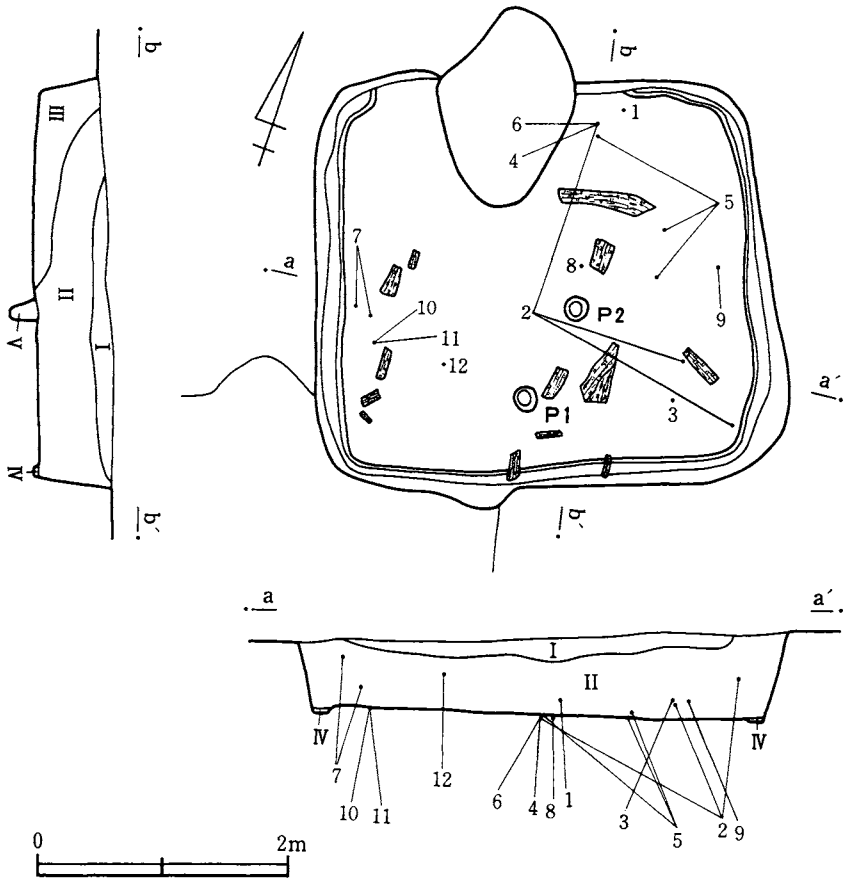


図601 D015号遺構実測図

径0.18mを計るP₁、住居中央部に径0.18mを計るP₂を検出した。

カマド 北壁中央部を0.50m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。一部攪乱を受けるものの、粘土の貼り込みは袖部から煙道部まで一体化しており、天井部が遺存している。火床部は深さ0.08mの掘り込みを呈し、煙道部は急激な傾斜を呈している。

遺物出土状況 I層黒色土

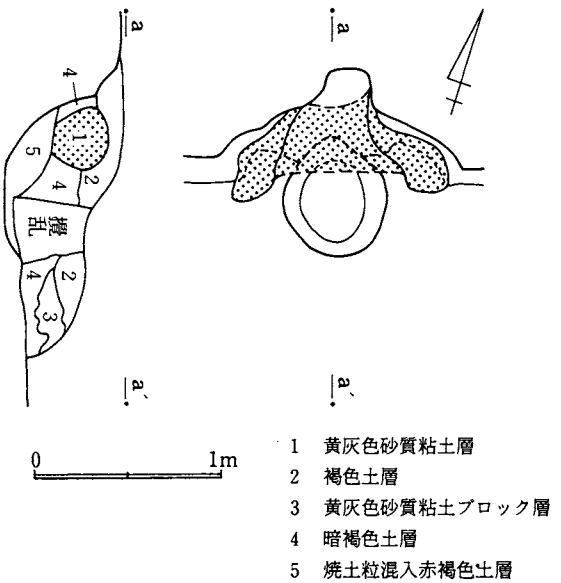


図602 D015号遺構カマド実測図

層、II層黒褐色土層、III層ローム粒混入黒褐色土層、IV層茶褐色土層、V層暗茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上を中心として出土し、カマド内出土も認められる。

出土遺物　遺物は、甕、坏、皿形土器と石製品、鉄製品がある。甕形土器は1～3で、1、2は口唇部に特徴のある口縁を呈している。3は叩き目が見られる広口甕の肩部下半である。坏形土器は4～7で、4は体部が直線的に大きく開く。5は若干外反ぎみに開く形状を呈す。7は若干内彎ぎみに開く形状を呈している。6は底部破片である。皿形土器は8で高台を有する。石製品は9の勾玉で頭部に数条の刻線を有している。鉄製品は10～13で、10、11は鎌、12は刀子残片、13は角棒状を呈するが用途不明品である。

図603　D015号遺構出土遺物実測図(1)

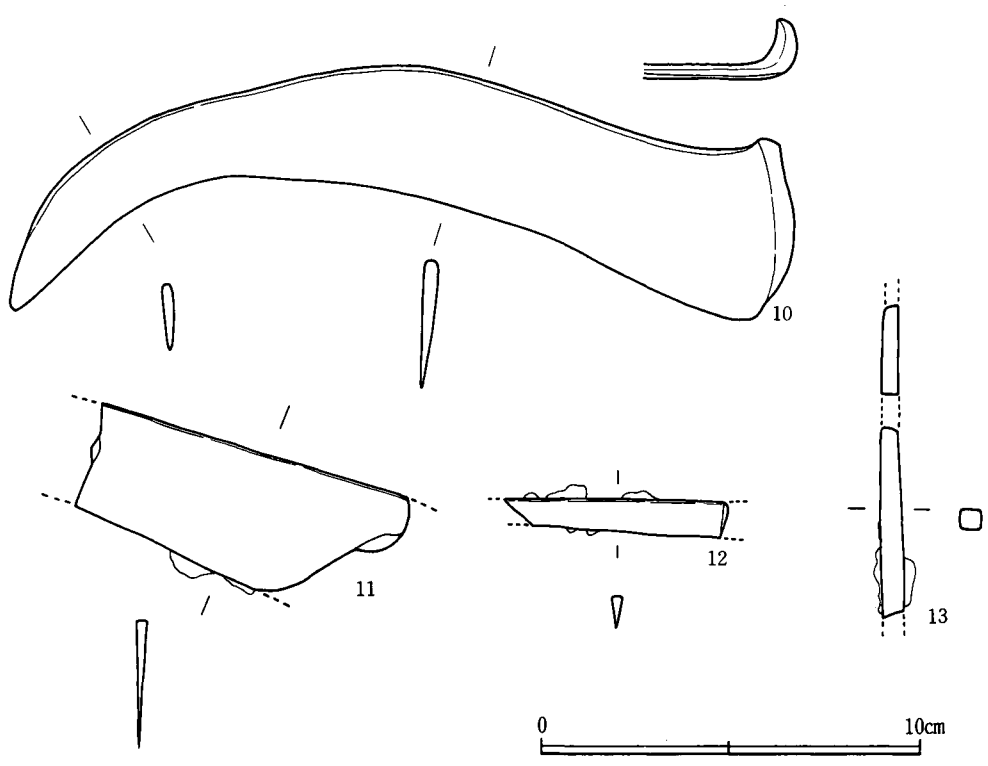


図604 D015号遺構出土遺物実測図(2)

3．D017号遺構（図605～607、図版152－1・2）

V群の住居群内において、ほぼ中央部に位置し、D007、D015、D018、D019、D078と纏りを呈する遺構である。

遺構　東壁3.11m、南壁2.75mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.41m掘り込んで床面に達している。床面は中央部が堅緻な状況を呈している以外、やや軟弱な状況を呈している。柱穴、壁溝は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を0.17m掘り込んでおり、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは左袖部分に認められるのみである。火床部は深さ0.12mの掘り込みを呈し、煙道部は急激な傾斜を呈している。

D017出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	坏	4.2	(14.0)	7.5	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	
2	坏	－	(13.2)	－	¼	－	雲母	堅緻	灰色	
3	高台付坏	－	－	8.9	底部のみ	－	－	堅緻	灰色	

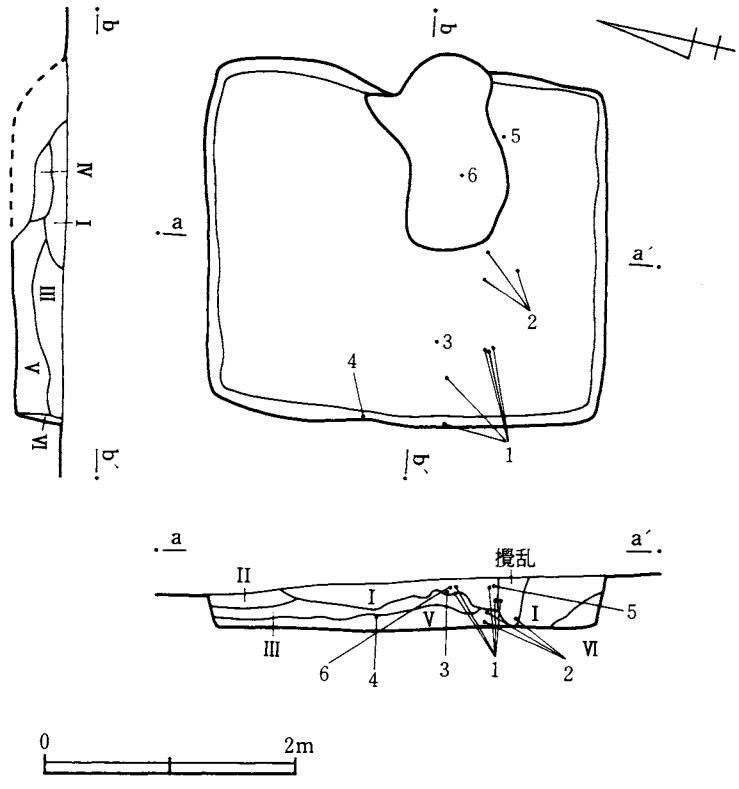


図605 D017号遺構実測図

遺物出土状況　I層黒色土層、II層ロームブロック混入黒褐色土層、III層黒褐色土層、IV層ロームブロック混入黒色土層、V層茶褐色土層、VI層褐色土層が堆積する。遺物は各層より出土するが、床面上出土はほとんどない。

出土遺物　遺物は、坏形土器と鉄製品、石製品がある。坏形土器は1～3で、1、2は直線的に開く体部を呈している。3は高台を有する底部破片である。鉄製品は4の角棒状のもので用途は不明である。石製品は5、6で、いずれも滑石製である。5は臼玉未成品、6は臼玉である。

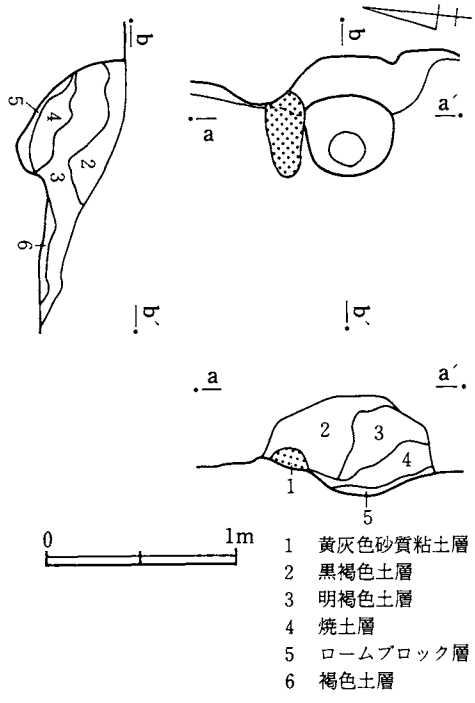


図606 D017号遺構カマド実測図

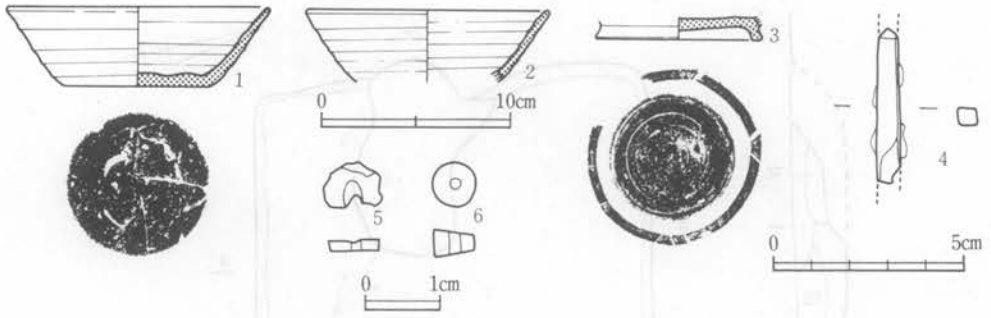


図607 D017号遺構出土遺物実測図

4．D018号遺構（図608～611、図版153 3、152－1・2）

V群の住居群内において北東部分に位置し、D009、D015、D017、D019、D078と纏りを呈する遺構である。

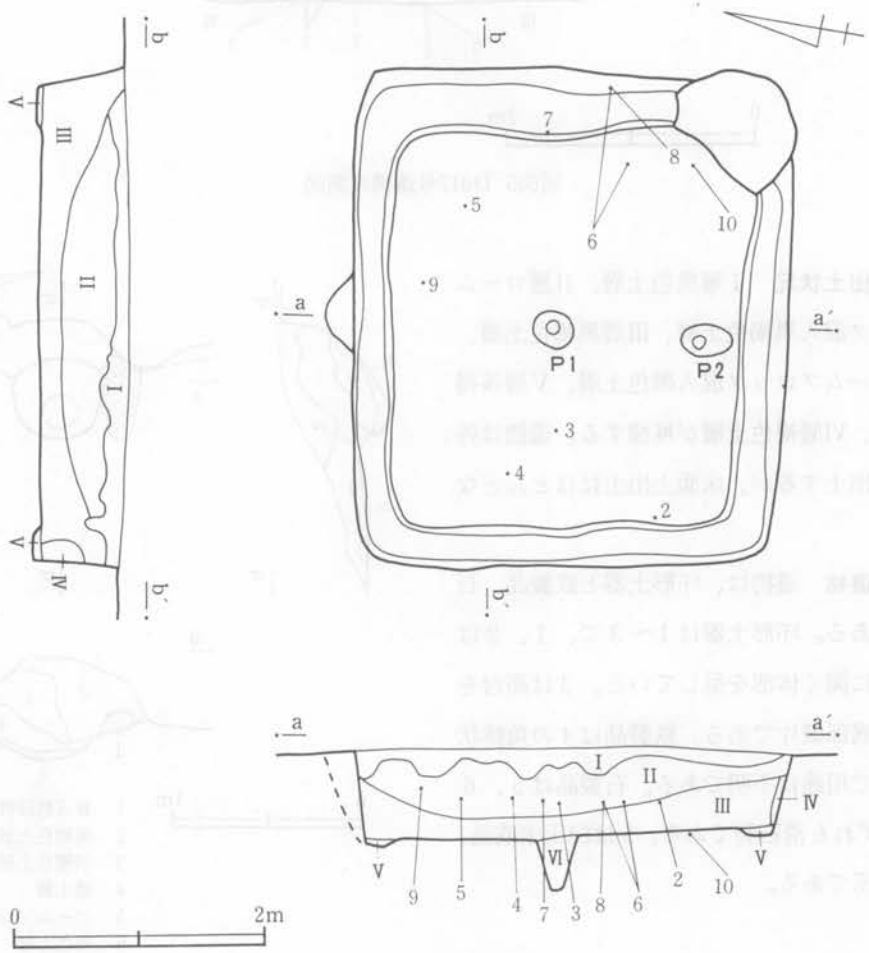


図608 D018号遺構実測図

遺物　北壁3.90m、西壁3.28mで方形の平面形を呈する壁穴住居跡である。壁は垂直に0.66m掘り込んでおり、直下に幅0.30m、深さ0.08mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は検出できなかったが、中央部に径0.30m、深さ0.46mを計るP₁、南壁中央部に近接して径0.25m、深さ0.24mを計るP₂を検出した。

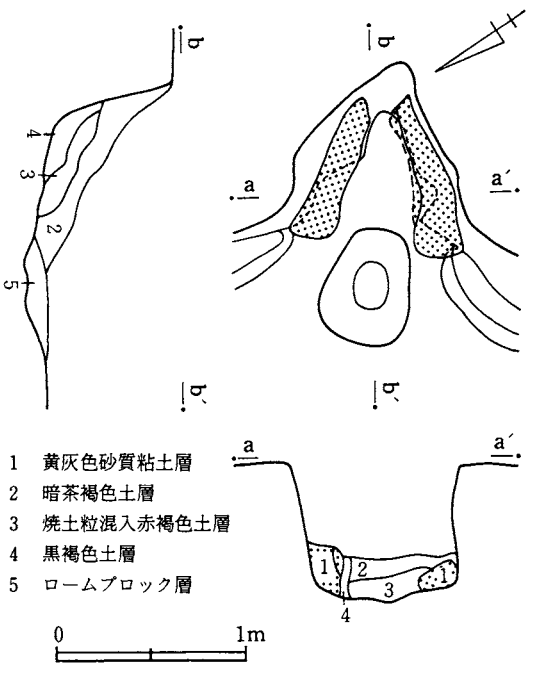
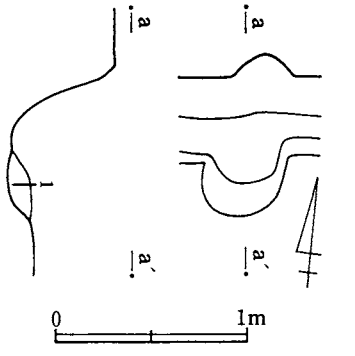


図609　D018号遺構Aカマド実測図

カマド　北壁と南東壁コーナー部の2か所で検出した。旧時のカマドBは、北壁中央部に位置するが、修改築に伴って取り毀しているため、掘り込みの一部と火床の一部が遺存する程度である。住居廃絶時まで使用されていたカマドAは、南東壁コーナー部分を0.5m掘り込んで、黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙出し部まで一体化しているが、天井部は遺存していない。火袋に相当する袖は一部焼土化している。火床部は深さ0.10mの掘り込みを呈している。



1　ロームブロック混入赤褐色土層

図610　D018号遺構Bカマド実測図

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層ローム粒混入黒褐色土層、IV層褐色土層、V層茶褐色土層、VI層暗茶褐色土層が堆積する。遺物はII層を中心として出土しており、床面上出土はほとんどない。1はカ

D018出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	—	(21.8)	—	口縁～胴部¼	ヨコナデ	小石 砂粒	やや軟弱	茶褐色	
2	甕	—	—	—	胴部のみ	ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	黒褐色	
3	甕	—	—	9.6	底部 ⅔	磨き	小石	堅緻	赤黒褐色	木葉痕
4	坏	—	—	6.3	底部 ½	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
5	坏	—	—	5.45	½	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	

マド内出土である。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器と石製品がある。甕形土器は1～3で、1は口唇部に特徴のある口縁部破片である。2はヘラ削り調整が施される胴部破片である。3は1の底部となるようなもので木葉痕が認められる。坏形土器は4～8で完形はなくいずれも底部破片である。石製品は9の多孔質安山岩製の石皿である。部分的に窪が認められる。10は滑石製の臼玉未成品である。

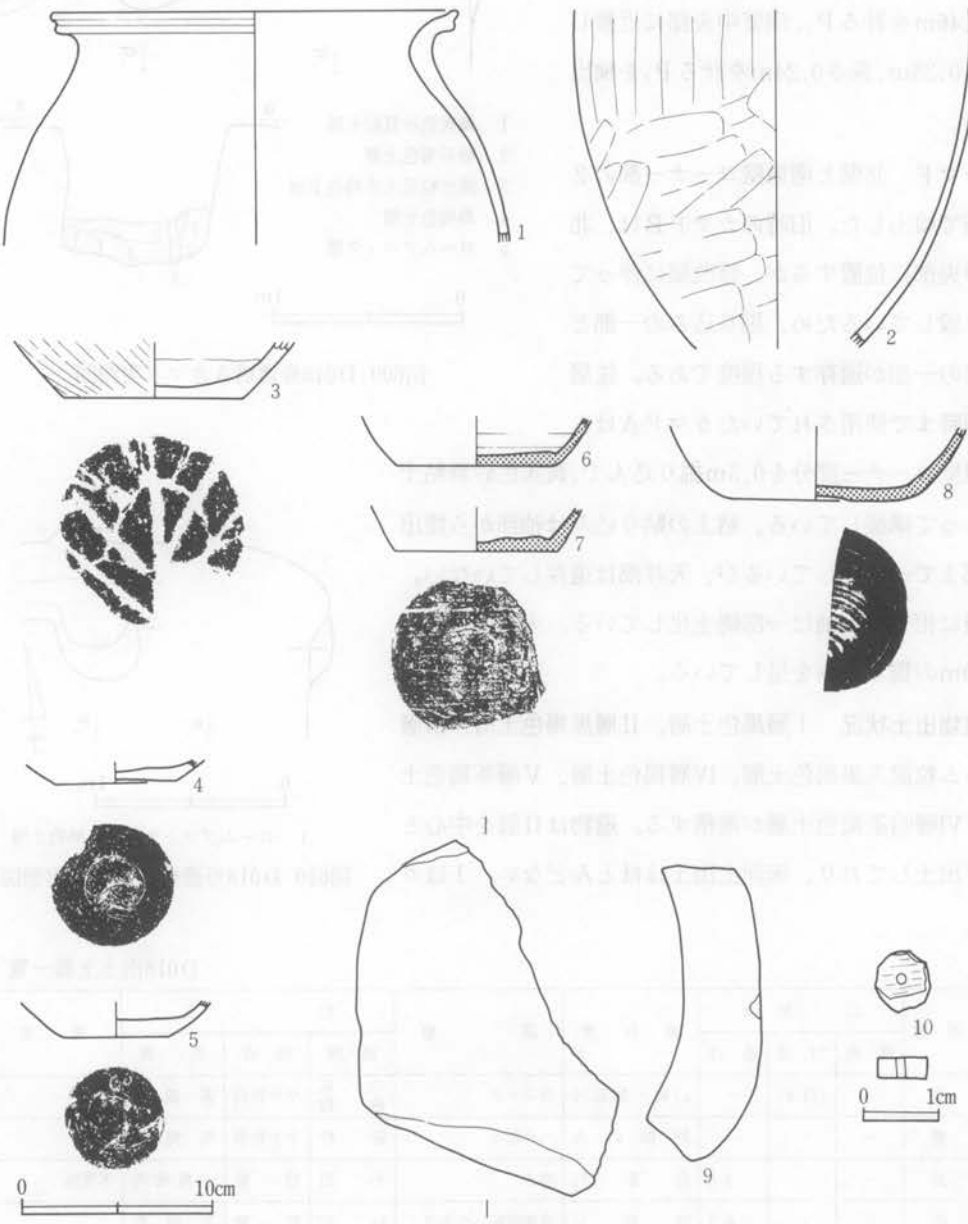


図611　D018号遺構出土遺物実測図

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
6	坏	—	—	8.4	¼	底部一方向ヘラ削り	小石 雲母	堅緻	灰色	
7	坏	—	—	8.75	½	—	小石	堅緻	灰色	
8	坏	—	—	8.6	⅓	底部回転ヘラ削り	—	堅緻	灰色	糸切り、転用硯

5．D019号遺構（図612～614、図版153—3、155）

V群の住居群内に最も南に位置し、D015、D017、D018、D078と纏りを呈する遺構である。

遺構　北壁2.50m、東壁3.14mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.34m掘り込んで床面に達する。床面は軟弱な状況を呈している。柱穴、壁溝は検出できなかった。

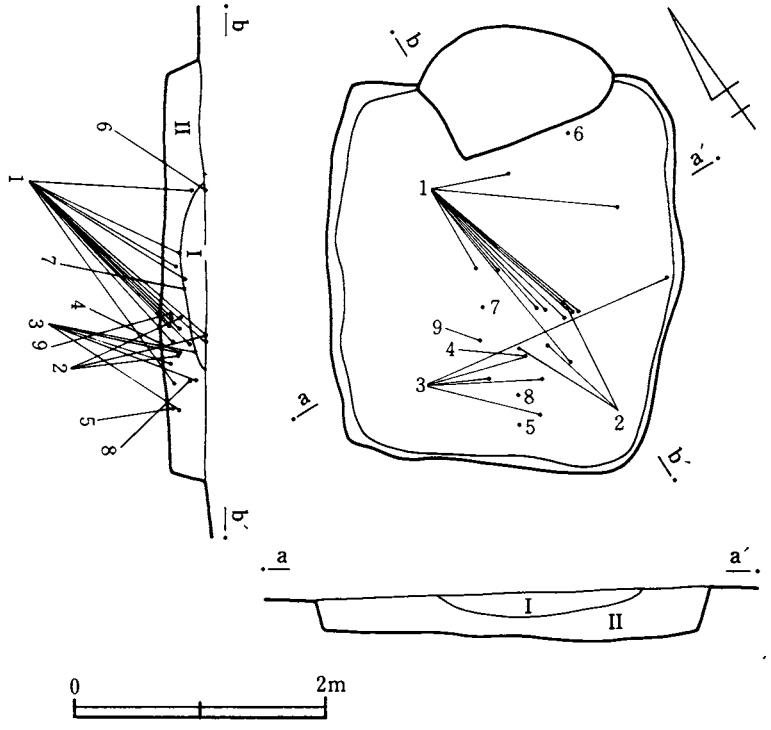


図612　D019号遺構実測図

D019出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	29.6	22.3	8.0	完形	ヨコナデ 磨き	砂粒 雲母	やや軟弱	茶褐色	木葉痕
2	甕	—	(23.8)	—	口縁部～頸部⅓	ヨコナデ	小石 雲母	堅緻	茶褐色	
3	甕	—	(22.4)	—	口縁部～胴部¼	ヨコナデ	小石 雲母	やや軟弱	茶褐色	

カマド　北壁中央部を三角形に0.39m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築しているが、攪乱を受けているため遺存状態は悪い。粘土の貼り込みは袖部から煙道部に認められる。火床部は深さ0.07mの浅い窪みが認められ、煙道部は緩やかな傾斜を呈している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒

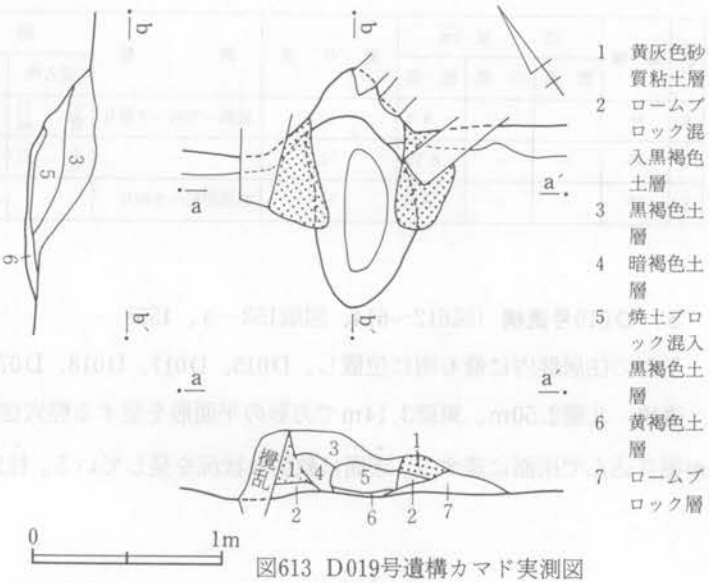


図613　D019号遺構カマド実測図

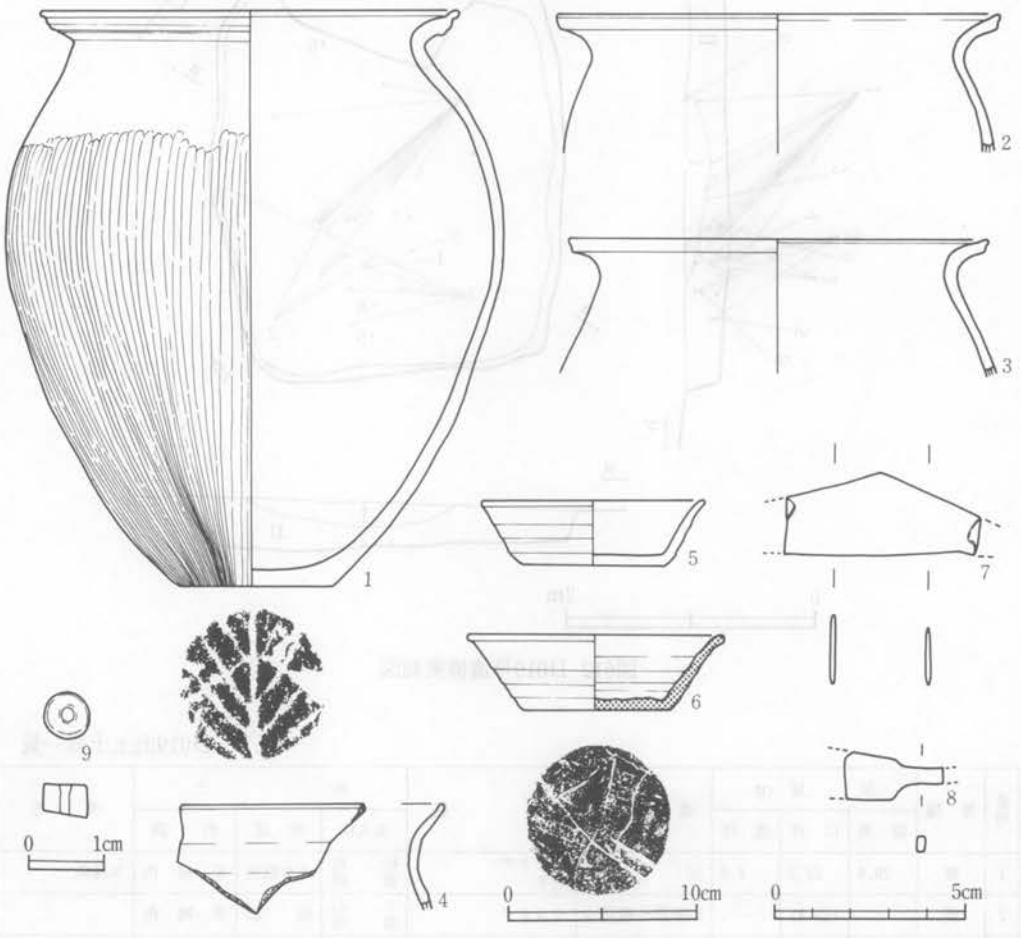


図614　D019号遺構出土遺物実測図

色土層、II層黒褐色土層が堆積する。遺物は床面より若干上方からの出土が中心である。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器と鉄製品、石製品がある。甕形土器は1～4で、1～3は口唇部に特徴のあるものである。4は逆「コ」の字状に外反する口縁部破片である。坏形土器は5、6で同じ形状を呈しているが、6は須恵器である。鉄製品は7、8で7は用途不明である。8は刀子で関部分の破片である。石製品は9で滑石製の臼玉である。

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
4	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	
5	坏	3.3	(12.0)	(7.6)	¼	底部一方向ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	
6	坏	3.9	13.8	7.8	⅔	底部一方向ヘラ削り	—	堅緻	灰色	

6．D078号遺構（図615～617、図版154—2・3、155）

V群の住居群内において西側に位置し、D017、D018、D019と纏りを呈する遺構であるが、D015によって遺構北東部分を重複切断されているため、遺存状況は悪い。

遺構　西壁3.60m、南壁3.67mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.35m掘り込んでおり、直下に幅0.20m、深さ0.03mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈しているが、特に中央部において顕著である。柱穴は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を三角形に0.30m掘り込んで構築しているが、D015との重複関係による攪乱を受けているため右袖の一部を遺存する程度である。火袋に相当する部分では焼土化が著しく、煙道部は緩やかな傾斜を呈している。

D078出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	21.0	—	口縁部～胴部⅔	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒 雲母	やや堅緻	茶褐色	
2	甕	—	20.3	—	口縁部～頸部⅓	ヨコナデ ヘラ削り	雲母	堅緻	茶褐色	
3	甕	—	(22.7)	—	口縁部～胴部⅓	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒 雲母	堅緻	茶褐色	
4	甕	—	14.75	—	口縁部～頸部⅓	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒色	
5	甑	—	—	13.7	胴部～底部⅓	叩きじめ ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	
6	坏	3.85	14.0	8.5	¾	底部一方向ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	灰褐色	ヘラ切り
7	坏	4.15	(15.1)	(9.6)	⅓	底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	
8	坏	4.65	(15.6)	7.9	½	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	赤褐色	内面磨き
9	坏	4.0	(13.5)	7.5	⅓	底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	線刻判読不明

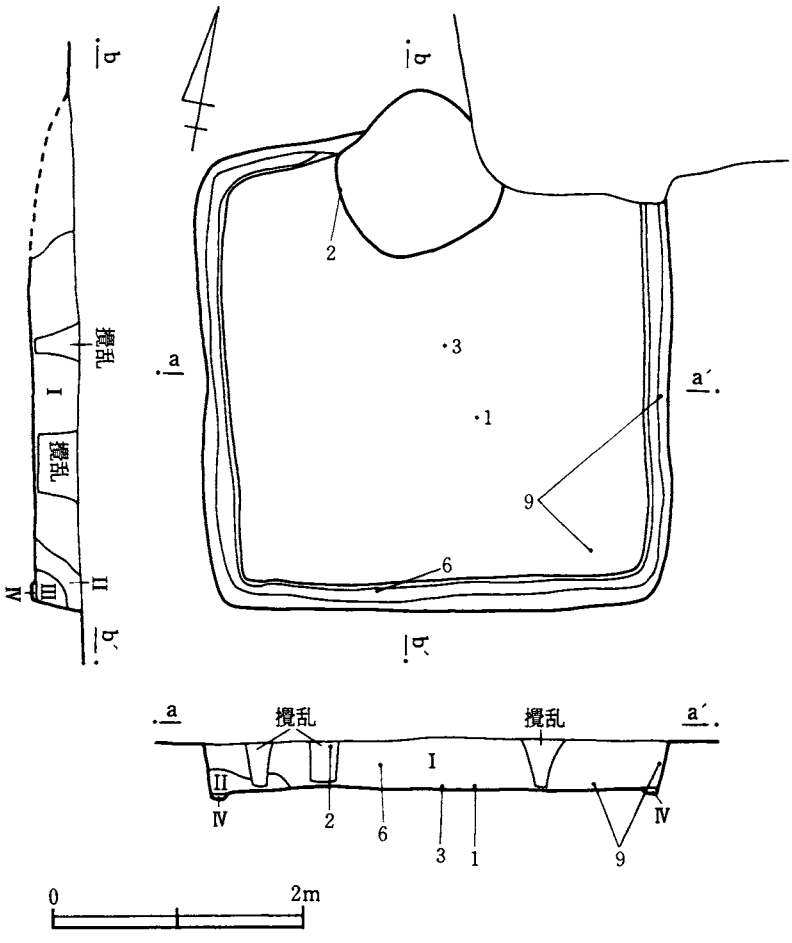
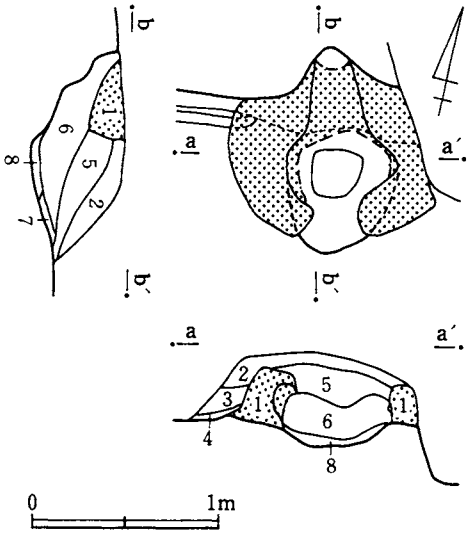


図615 D078号遺構実測図

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層ローム粒混入黒褐色土層、III層褐色土層、IV層茶褐色土層が堆積する。遺物は稀少であるが、床面上を中心に出土している。カマド内出土もある。

出土遺物　遺物は、甕、甑、坏形土器がある。甕形土器は1～4で、1、2は「く」字状に外反する口縁部を呈している。3は水平に近い屈曲で外反する口縁部を呈している。4は口唇



1　黄灰色砂質粘土層
2　茶褐色土層
3　黒褐色土層
4　ロームブロック混入茶褐色土層
5　焼土粒混入黒褐色土層
6　焼土層
7　ロームブロック混入黒褐色土層
8　ロームブロック層

図616 D078号遺構カマド実測図

部に特徴のある口縁部破片である。甑形土器は5で叩き目がある。坏形土器は6～9で、体部は直線的に大きく開く形状を呈している。

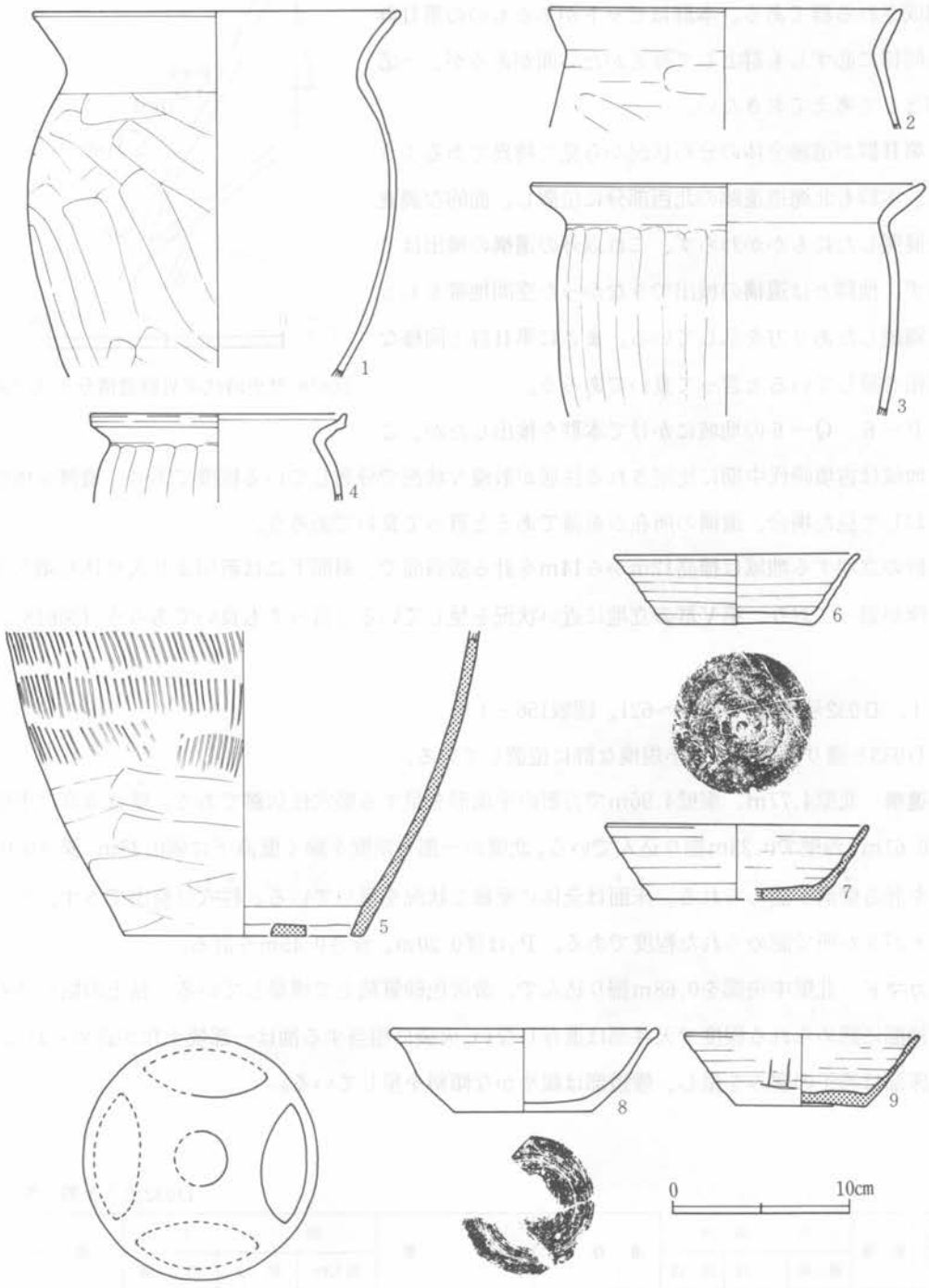


図617 D078号遺構出土遺物実測図

第７節　第VI群の遺構と遺物

歴史時代の第VI群は、竪穴住居跡１軒とピット２基で構成される群である。本群はピットがあるものの第II群と同様に必ずしも群として捉えがたい面があるが、一応群として考えておきたい。

第II群が遺跡全体の分布状況から見て特異であるように、本群も北海道遺跡の北西部分に位置し、面的な調査を展開したにもかかわらず、これ以外の遺構の検出はできず、他群とは遺構の検出できなかった空間地帯をもって隔絶したあり方を示している。まさに第II群と同様な様相を呈していると言って良いであろう。

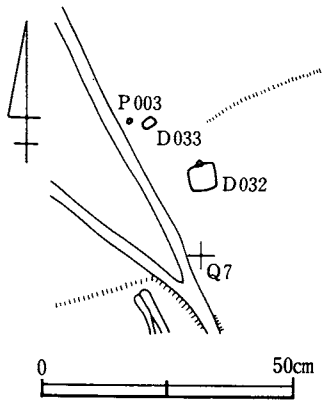


図618 歴史時代第VI群遺構分布状況図

Ｐ－６、Ｑ－６の地域にかけて本群を検出したが、この地域は古墳時代中期に比定される住居が散漫な状況で分布している程度であり、遺跡全体をとおして見た場合、遺構の所在が希薄であると言って良いであろう。

群の立地する地域は標高12mから14mを計る緩斜面で、斜面下には新川より入り込む須久茂谷津が迫っており、第Ｖ群の立地に近い状況を呈していると言っても良いであろう（図618）。

１．D032号遺構（図619～621、図版156－１）

D033と纏りを呈すごく小規模な群に位置している。

遺構　北壁4.77m、東壁4.96mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に東壁で0.61m、西壁で0.23m掘り込んでいる。北壁の一部と南壁を除く壁直下に幅0.23m、深さ0.05mを計る壁溝が認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は検出できず、小ピットが３か所で認められた程度である。P_1は径0.20m、深さ0.45mを計る。

カマド　北壁中央部を0.68m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖部に認められる程度で天井部は遺存しない。火袋に相当する袖は一部焼土化が認められる。火床部は若干の窪みを呈し、煙道部は緩やかな傾斜を呈している。

D032出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	鉢	8.4	10.8	7.7	2/3	—	砂粒	やや軟弱	黒褐色	
2	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	

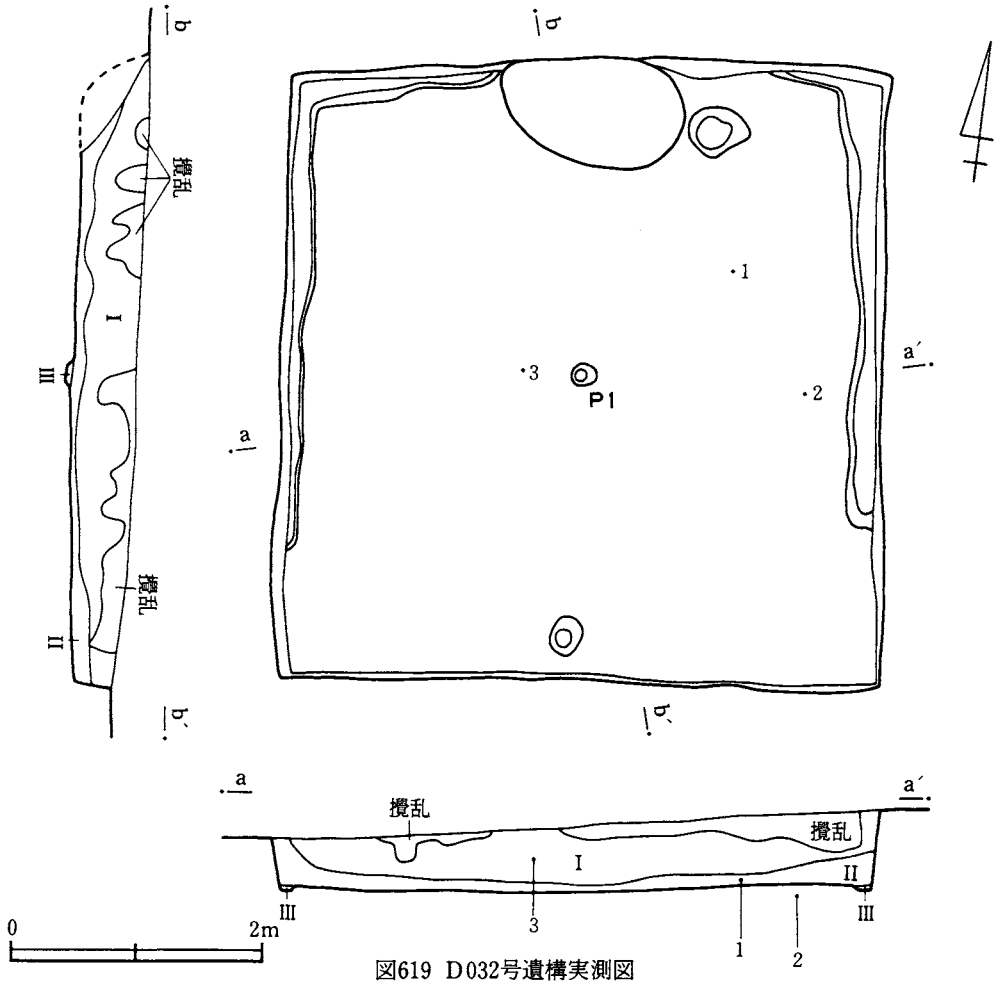


図619 D032号遺構実測図

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上を中心とするが稀少である。

出土遺物　遺物は、鉢、甕形土器と石製品がある。鉢形土器は1で内彎ぎみに開く体部を呈し、小形である。甕形土器は2の口縁部破片である。石製品は3の砂岩製の磨石である。

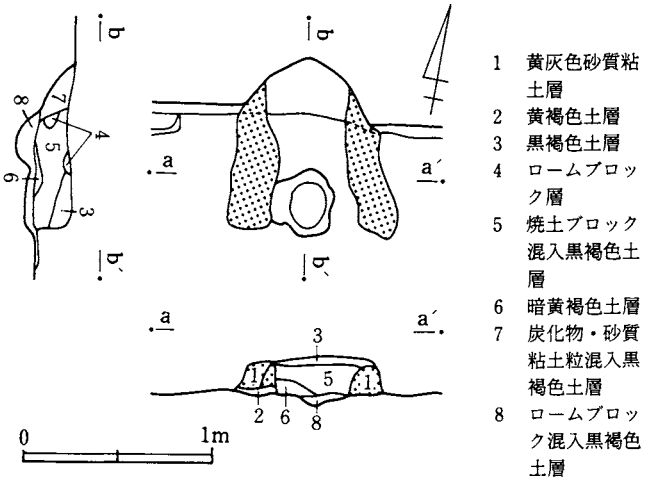


図620 D032号遺構カマド実測図

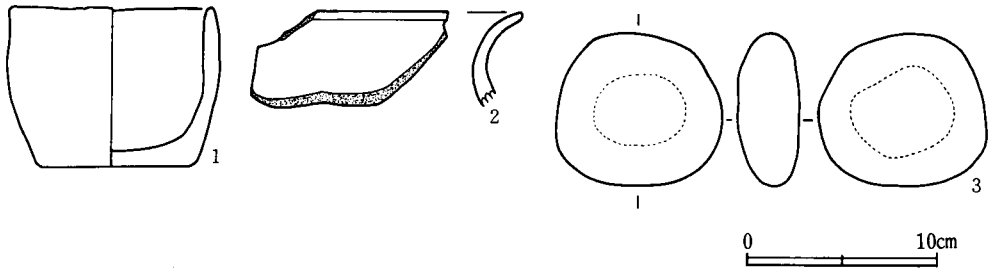


図621 D032号遺構出土遺物実測図

2．D033号遺構（図622・623、図版156－2）

D032と纏りを呈すごく小規模な群に位置している。「D」の呼称を与えているが調査の結果竪穴住居跡でないことが判明した。

遺構　長辺2.53m、短辺2.03mで隅丸長方形の平面形を呈する土壙である。壁は傾斜を呈して0.26m掘り込んで、底面に達する。底面は平滑でなく、全体に踏み固められた状況は認められないが堅緻である。

遺物出土状況　覆土は黒褐色土の単一層である。遺物は底面から若干出土している程度である。

出土遺物　遺物は稀少で、図示できるものは1点だけである。1は胴部に叩き目が認められる甕形土器の底部近くの破片である。

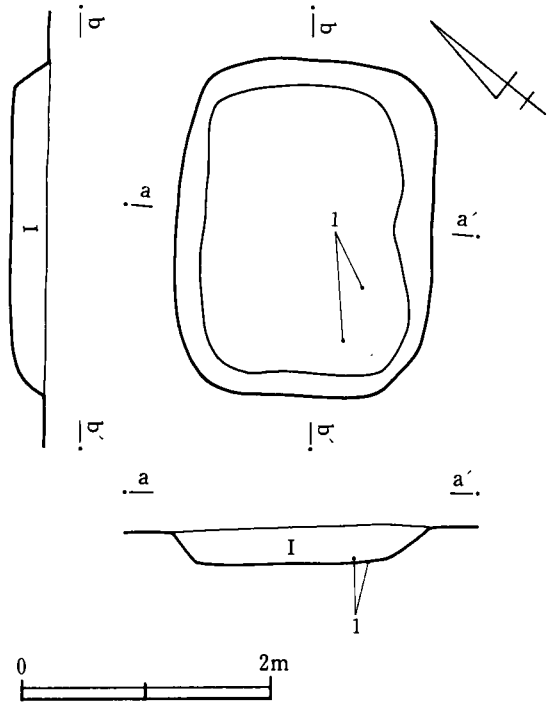


図622 D033号遺構実測図

D033出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	14.1	胴部～底部½	叩きじめ	小石	堅緻	灰色	

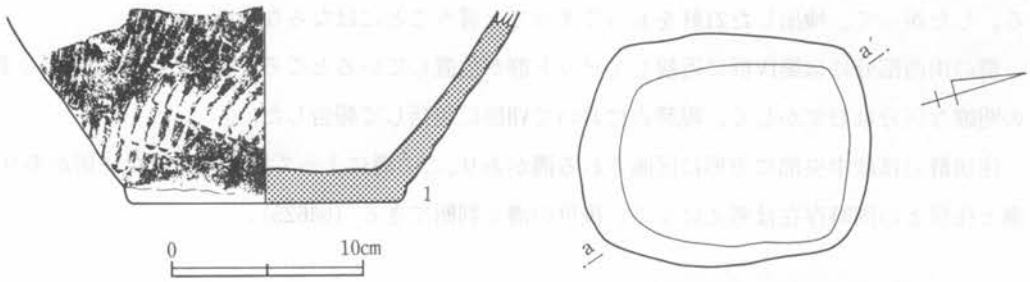


図623 D033号遺構出土遺物実測図

図624 P003号遺構実測図

3．P003号遺構（図624、図版156－3）

VI群の遺構群内において北西部に位置し、D033が近接している。

遺構 長径1.5m、短径1.23mでほぼ楕円形の平面形を呈する遺構である。壁は傾斜を呈して0.3m掘り込んで底面に達している。底面は多少の凹凸を生じているがほぼ平坦で、踏み固められた状況を呈していない。底面にはピット等の施設は認められない。

遺構内にはI層黒灰色土層、II層ロームブロック層、III層黒色土層、IV層ローム粒混入黒灰色土層が堆積している。遺物の出土は皆無であり、遺構の性格については不明である。

第8節 第VII群の遺構と遺物

歴史時代の第VII群は、竪穴住居跡21軒とピット6基で構成される群で、S－5、T－5、R－6、S－6、T－6の地域において検出した群である。

第VII群は、標高14mの段丘上に立地しており、住居群はかなり散漫な分布状況を呈している。群の立地する北側には約1,000m²にわたり土取りのために地山が削平されている部分があり、遺構が所在していた可能性が充分考えられ

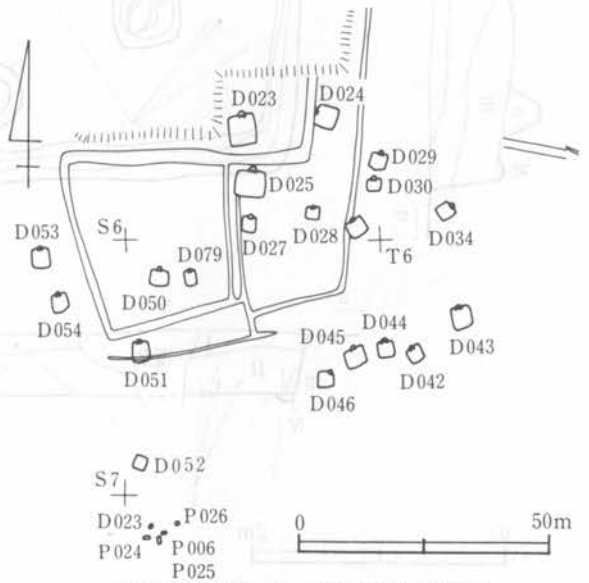


図625 歴史時代第VII群遺構分布状況図

る。したがって、検出した21軒をもってすべてと言うことにはならない。

群の南西部分には第IV群に近接してピット群が位置しているところであるが、このピット群の明瞭な区分はむずかしく、現時点においてVII群に包括して報告したい。

住居群のほぼ中央部に方形に区画される溝があり、この溝によって攪乱を受けた住居があり、溝と住居との同時存在は考えにくく、後世の溝と判断できる（図625）。

1．D023号遺構（図626～628、図版157～1・2、172）

VII群の住居群内において北側に位置し、D025が近接している。攪乱を受けてるものの床面お

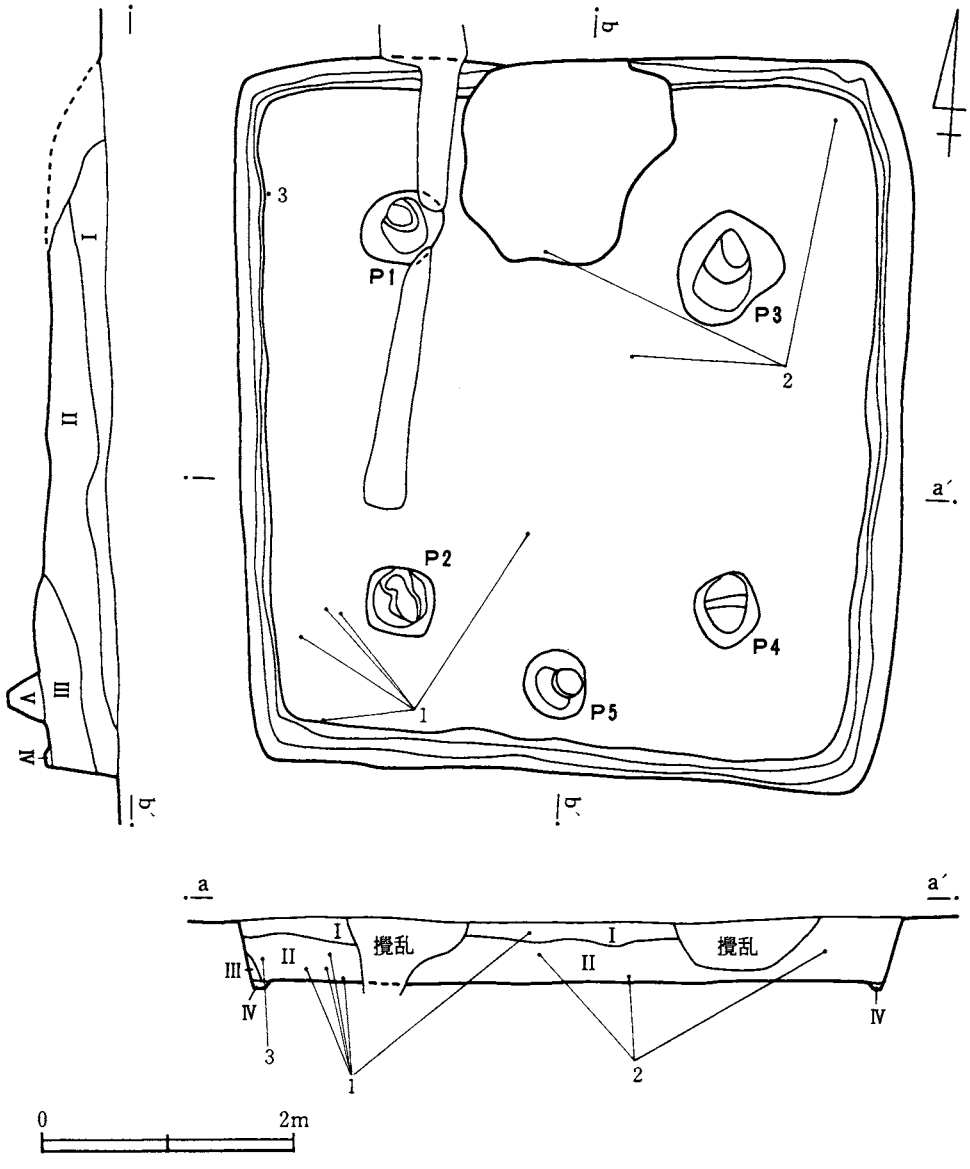
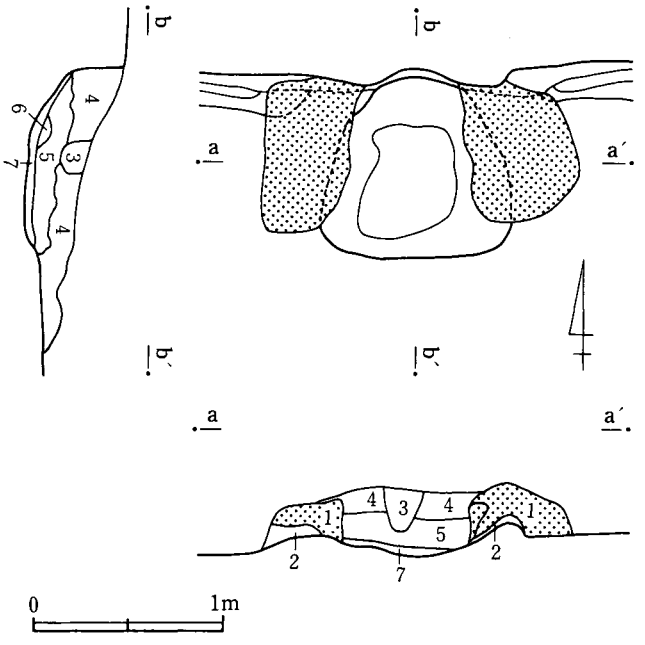


図626 D023号遺構実測図

よび壁に達するのは一部であり、全体は把握できる。

遺構　北壁5.08m、東壁5.66mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.54m掘り込んでおり、直下には幅0.20m、深さ0.14mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は対角線上に配置するP₁～P₄を検出した。いずれも2段に掘り込まれている。総じて1段目は径0.56m～0.70m、2段目は径0.24m～0.34m、深さ0.47m～0.75mを計る。その他、南壁中央部に近接して1段目は径0.56m～0.70m、23mを計るP₅を検出した。



1　黄灰色砂質粘土層
2　ロームブロック混入砂質粘土層
3　黒褐色土層
4　明褐色土層
5　焼土ブロック混入黒褐色土層
6　赤褐色土層
7　褐色土層

図627　D023号遺構カマド実測図

カマド　北壁中央部に黄灰色砂質粘土をもって構築している。壁への掘り込みがほとんどないため、粘土の貼り込みは主として袖部に行われている。火袋に相当する袖は焼土化が認められ、火床部は深さ0.08mの楕円形で、煙道部は急激な傾斜を呈している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層褐色土層、IV層茶褐色土層、V層暗褐色土層が堆積する。遺物は小破片で各層より出土する。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器と鉄製品がある。甕形土器は1で短い口縁が大きく開く形状を呈するものである。坏形土器は2、3で、2は丸底と思われる体部破片で、3は直線的に開く体部を呈するもので、須恵器である。鉄製品は4で用途不明であるがピンセット状を呈し、挟み込む道具と思われる。

D023出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	(20.1)	—	口縁部～胴部¼	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
2	坏	—	(15.3)	—	体部¼	—	砂粒	堅緻	茶褐色	
3	坏	3.35	(11.8)	6.8	⅓	底部一方向ヘラ削り	小石	堅緻	灰色	

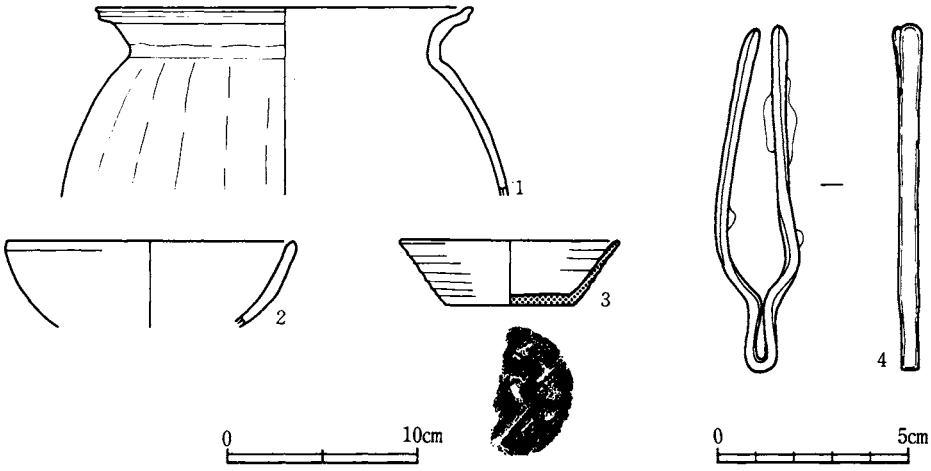


図628 D023号遺構出土遺物実測図

2．D024号遺構（図629～631、図版157－3、158－6）

Ⅶ群の住居群内において北側に位置し、D023が近接している。

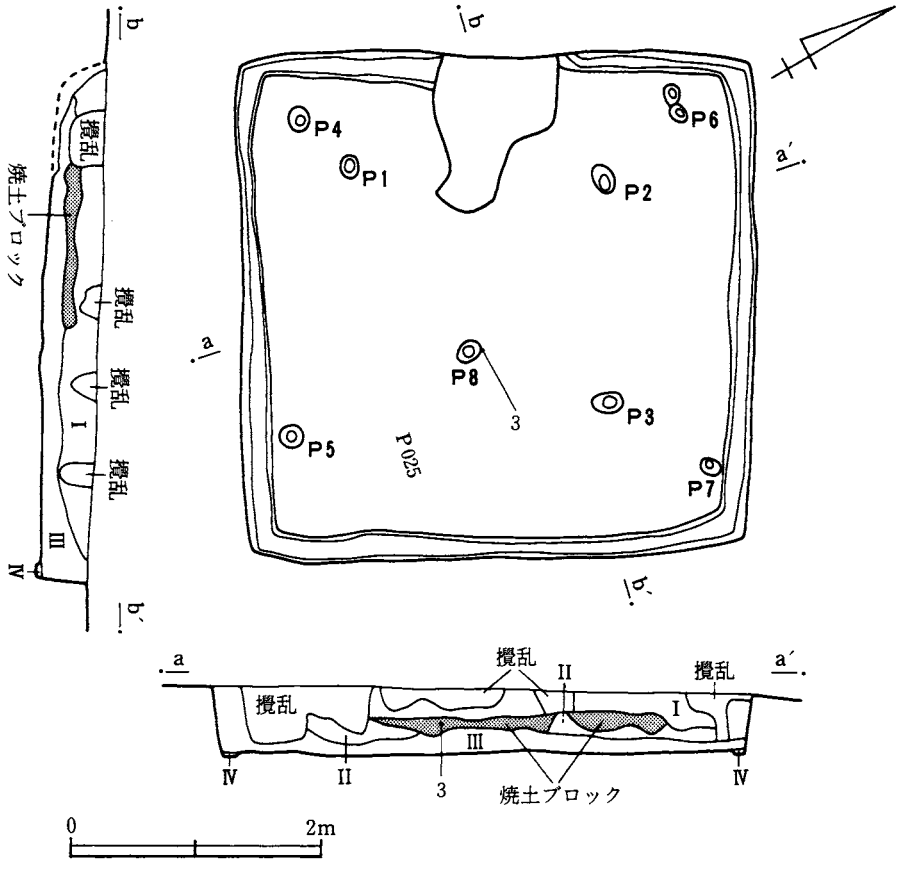
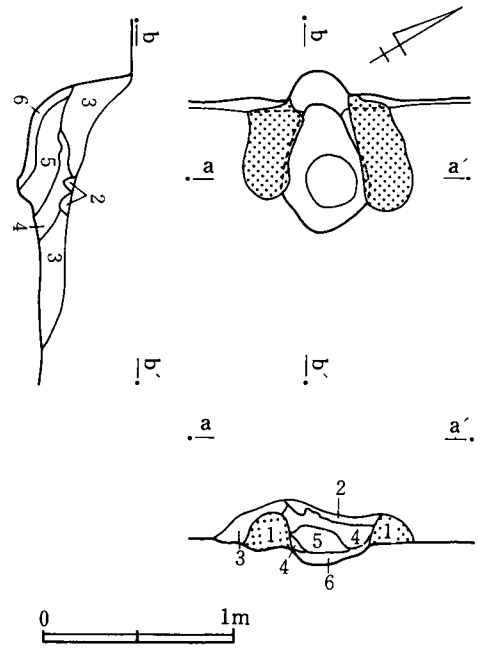


図629 D024号遺構実測図

遺構　西壁4.10m、北壁3.92mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.38m掘り込んでおり、直下には幅0.20m、深さ0.06mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体な状況を呈する。柱穴は住居中央部に寄ってP₁～P₃を、壁際に近くP₄～P₅を検出したが、中央部に寄るP₁～P₃は南東部分の柱穴を欠落しており柱穴として捉えて良いか疑問である。いずれも径0.17m、深さ0.17m～0.15mを計る。

カマド　北壁中央部を0.14m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖部分まで行われ、煙道部は貼り込みがなく掘り込みのままである。火床部は深さ0.08mで擂鉢状を呈している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層焼土粒混入黒褐色土層、Ⅲ層黒褐色土層、Ⅳ層茶褐色土層が堆積する。また、Ⅲ層上面には多量に投棄された焼土塊が堆積している。遺物は稀少でしかも小破片が各層より出土している。カマド内出土もある。



1　黄灰色砂質粘土層　　4　焼土ブロック混入赤褐色土層
2　明褐色土層　　5　焼土ブロック混入褐色土層
3　焼土粒混入褐色土層　　6　褐色土層

図630　D024号遺構カマド実測図

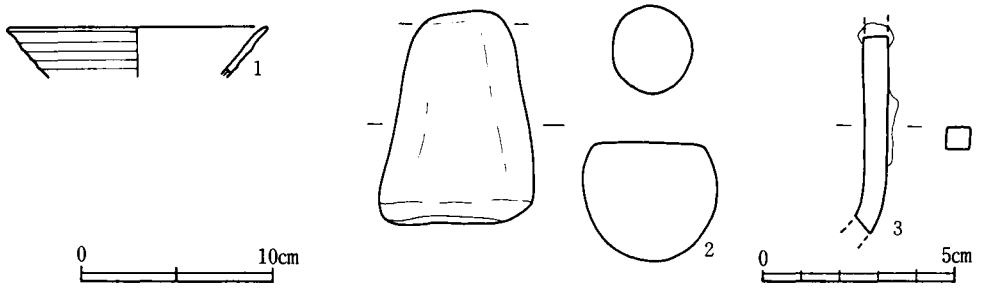


図631　D024号遺構出土遺物実測図

D024出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	坏	—	13.8	—	体部 ¼	—	砂粒	堅緻	茶褐色	

出土遺物　遺物は、坏形土器と土製品、それに鉄製品がある。坏形土器は1で体部の破片である。土製品は2の支脚である。鉄製品は3で一端が若干屈曲する角棒状の用途不明なものである。

3．D025号遺構（図632～634、図版158－2、169、172）

Ⅶ群の住居群内において北側に位置し、D023、D027が近接している。修改築を行ったことがカマドの状況から推測できる。

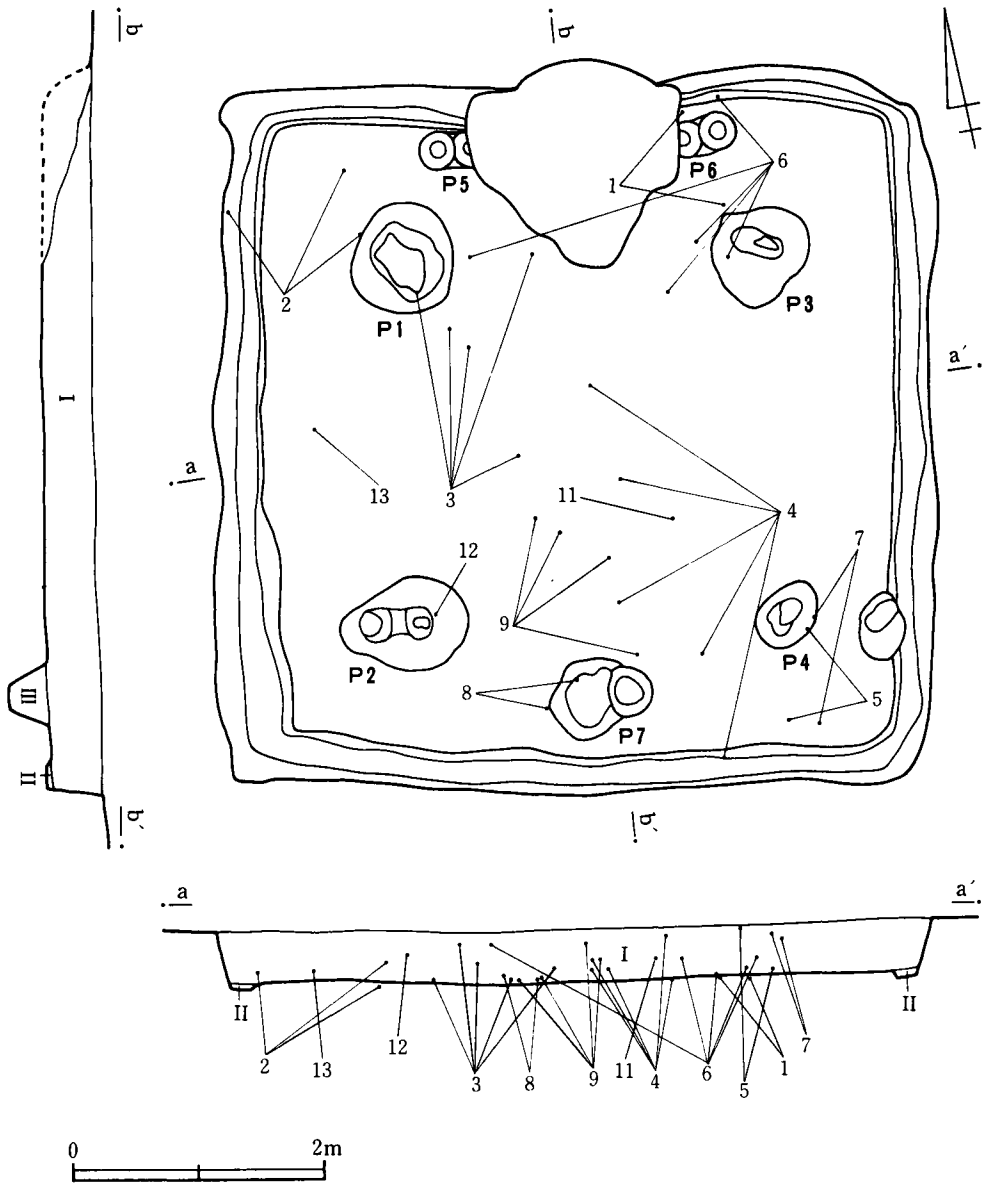


図632　D025号遺構実測図

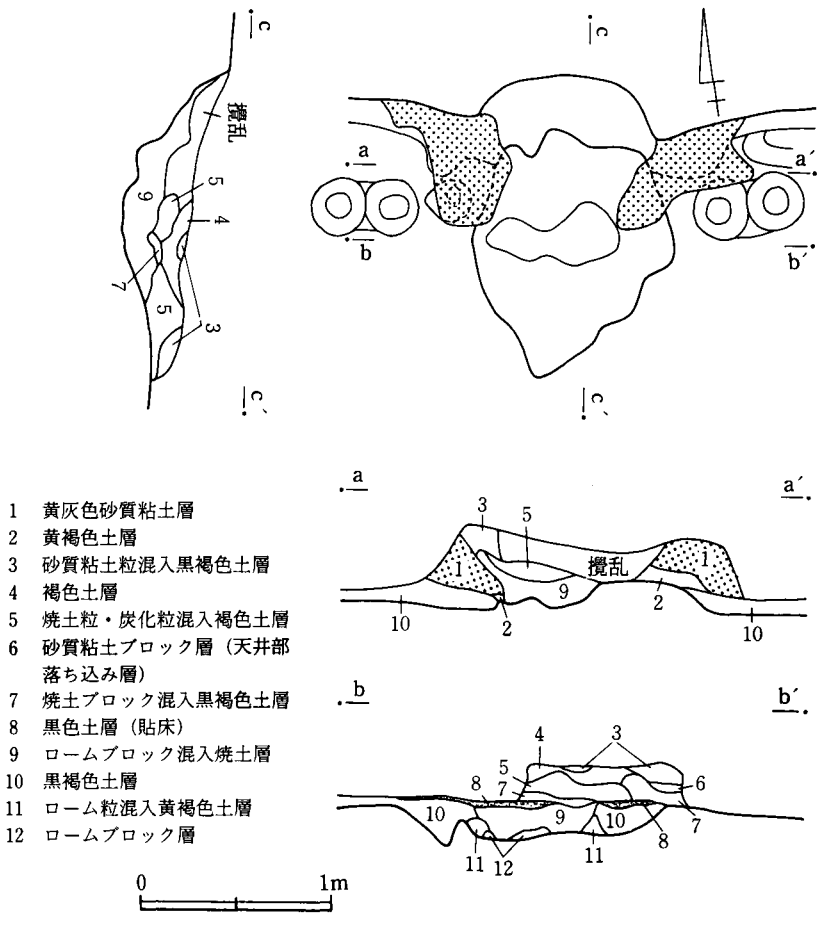


図633 D025号遺構カマド実測図

遺構　北壁5.51m、東壁5.60mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.40m掘り込んでおり、直下には幅0.28m、深さ0.07mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は中央部を中心に堅緻な状況を呈している。柱穴は対角線に配置するP_1～P_4を検出した。いずれも2段に掘り込んでおり、径平均0.78m、深さ平均0.66mを計る。カマドの両側に径平均0.30m、深さ0.15m～0.28mの小ピットを4か所検出した。また南壁中央部に近接して径0.60m、深さ0.30mを計るP_7を検出した。

カマド　北壁中央部を0.23m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土は10層上に袖部に相当する部分を貼り込んでいるが煙道部には認められない。火床は不整な楕円形を呈し、煙道部は緩やかな傾斜を呈している。このカマドの下方には修改築前のカマドが位置しているが、ほとんどが削平されているため全体は把握できないが、現位置より東であったことが推測される。現カマド両脇に認められる小ピットはカマド修改築に伴う所産と考えて良く、現カマドに伴うピットはそれぞれ西側に位置するものと考えられる。

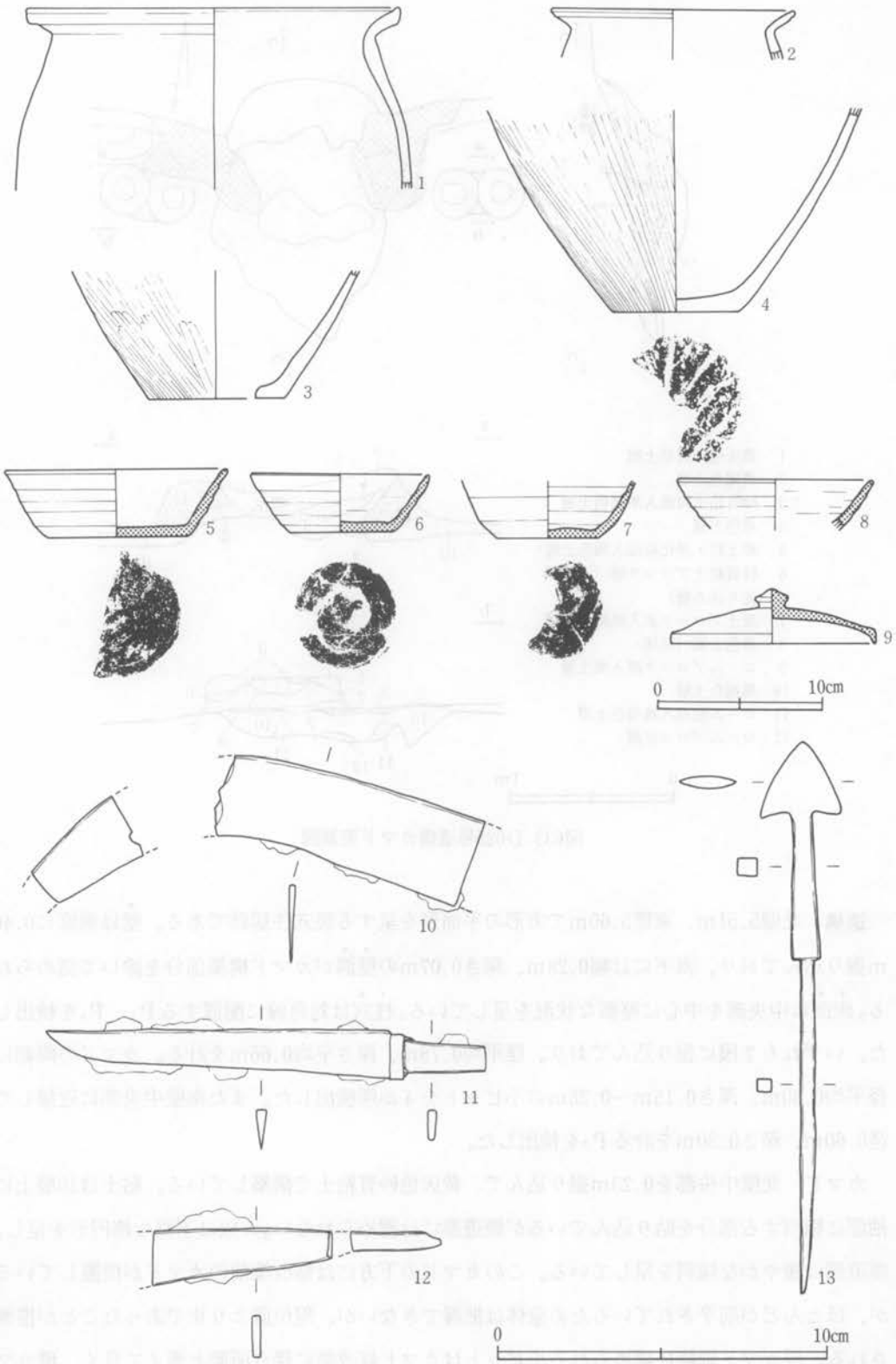


図634 D025号遺構出土遺物実測図

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層茶褐色土層が堆積する。床面上を中心として住居全域から出土する。カマド内出土もある。

出土遺物　遺物は、甕、坏、蓋形土器と鉄製品がある。甕形土器は1～4で大小の差はあるが条痕状の磨きが施されるものと思われる。坏形土器は5～8で、いずれも須恵器である。蓋形土器は9で擬宝珠状のつまみが付く。鉄製品は10～13で、10は鎌、11、12は刀子、13は鏃である。

D025出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	23.0	—	口縁部～胴部1/3	ヨコナデ	小石 雲母	やや軟弱	茶褐色	
2	甕	—	(15.0)	—	口縁部のみ	ヨコナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	
3	甕	—	—	8.2	胴部 1/2	磨き	砂粒	堅緻	黒褐色	
4	甕	—	—	7.65	胴部～底部1/3	磨き	砂粒	堅緻	黒褐色	木葉痕
5	坏	4.0	13.7	8.5	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	
6	坏	3.4	11.0	6.5	2/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	
7	坏	—	—	6.3	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	
8	坏	—	(12.1)	—	1/4	—	砂粒	堅緻	灰色	
9	蓋	3.2	(12.5)	—	1/2	天井部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	

4．D027号遺構（図635～637、図版158－3、159－1、169）

VII群の住居群内においてほぼ中央に位置し、D023、D025が近接している。

遺構　北壁3.46m、東壁3.51mで隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は若干傾斜を呈して0.28m掘り込んでおり、直下には幅0.17m、深さ0.10mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は対角線上に配置したP_1～P_4を検出した。いずれも径平均0.37m、深さ平均0.28mを計る。その他、カマド両脇にP_5、P_6、南壁中央に近接してP_7、壁溝中にP_8を検出した。

D027出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	23.1	—	2/3	ヨコナデ 磨き	小石	やや軟弱	茶褐色	
2	甕	—	20.5	9.0	1/2	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	赤褐色	
3	甕	—	(19.2)	—	口縁部～胴部1/4	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
4	甕	10.6	11.9	4.9	完形	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	赤褐色	
5	甕	—	(11.6)	—	口縁部～胴部1/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	

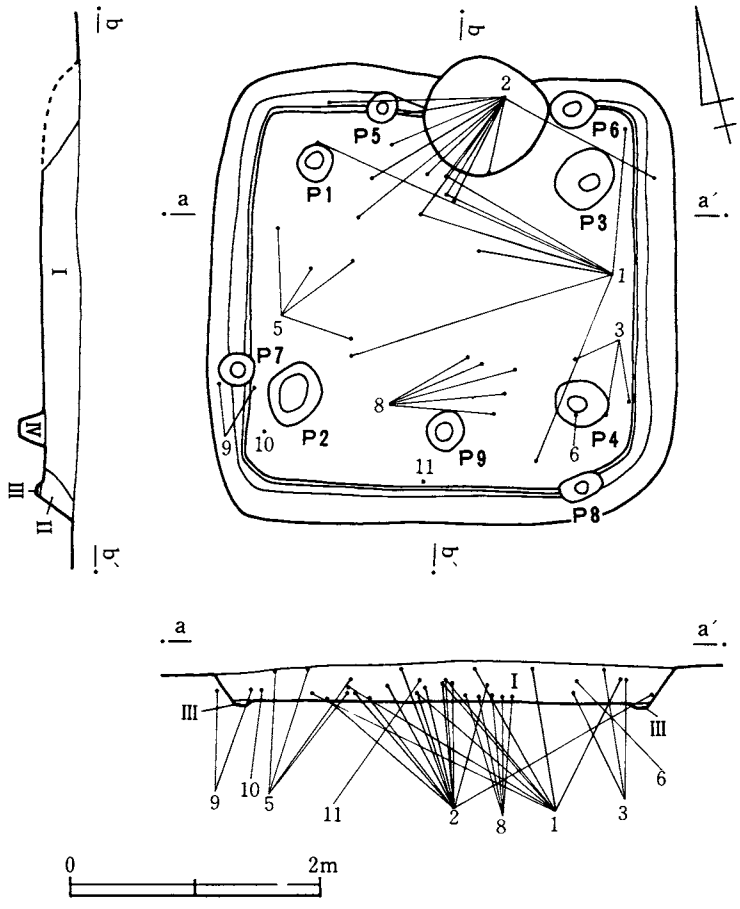
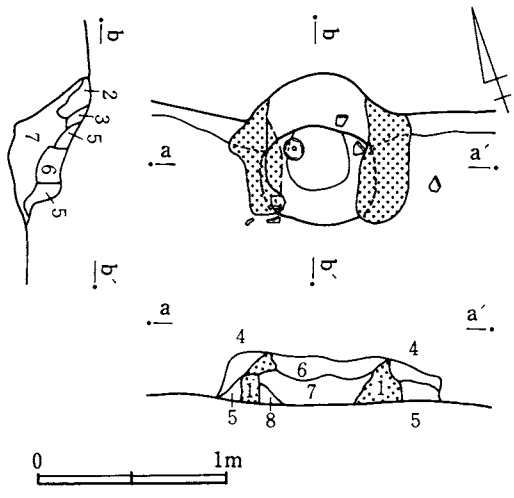


図635 D027号遺構実測図

カマド　北壁中央よりやや東に寄った壁を0.23m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙道部まで一体化している。火床部は深さ0.11mの擂鉢状の掘り込みを呈し、煙道部は急激な傾斜を呈している。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層ローム粒混入黒褐色土層、III層茶褐色土層、IV



1　黄灰色砂質粘土層
2　黒褐色土層
3　黄灰色砂質粘土ブロック層
4　焼土粒・炭化粒混入暗褐色土層
5　暗褐色土層
6　焼土粒混入暗褐色土層
7　焼土粒混入褐色土層
8　炭化物混入暗褐色土層

図636 D027号遺構カマド実測図

層暗茶褐色土層が堆積する。遺物はカマド内およびその周辺部の床面上を中心として出土している。

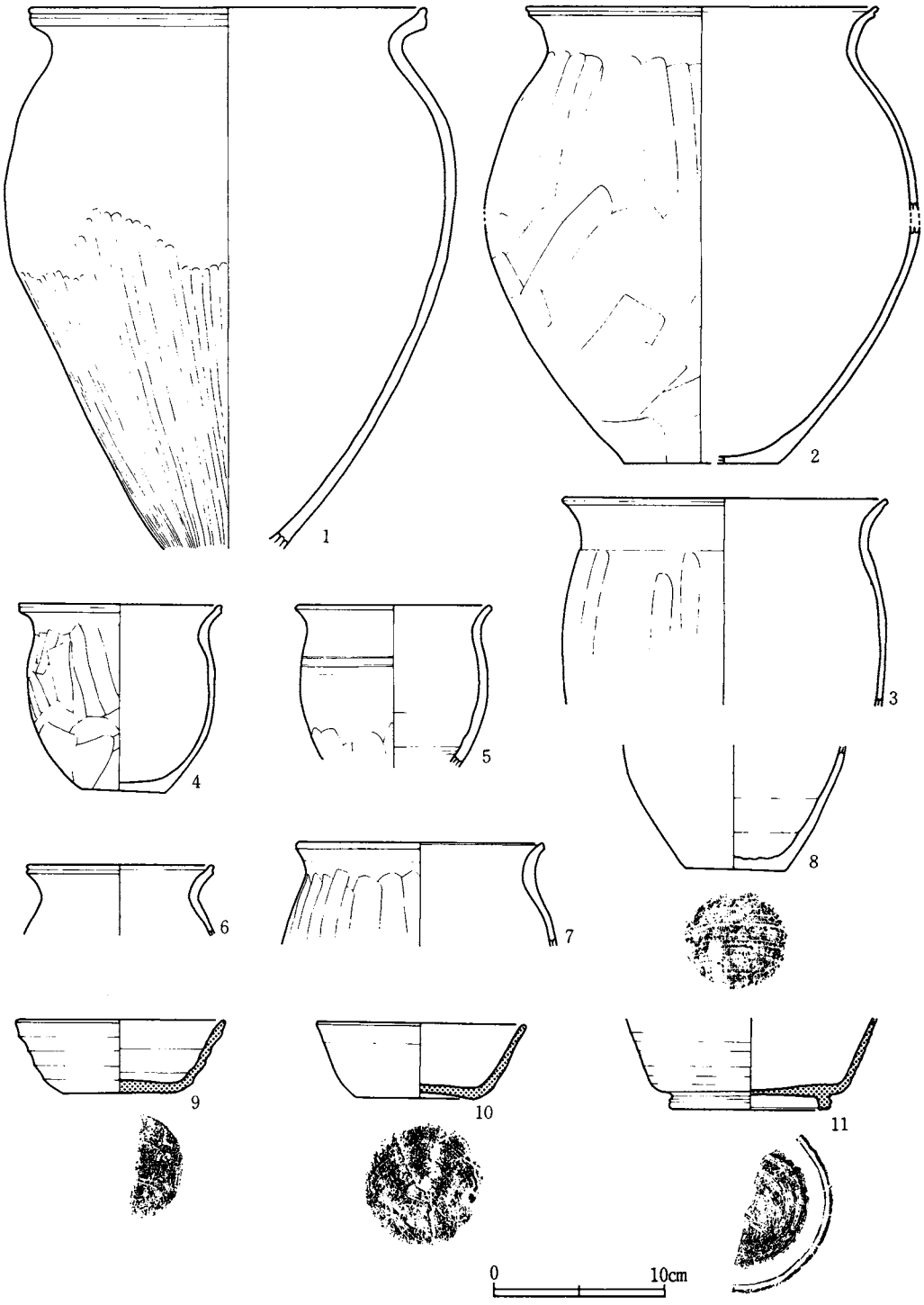


図637 D027号遺構出土遺物実測図

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器がある。甕形土器は1～8で、1は口唇部に特徴があり、胴部に条痕状の磨きが認められる。2は口縁部が緩やかに外反する。3、7は口縁部が短かく若干外反する。4、5は3、7を小形にしたような土器である。6は1と同じ特徴を有する口縁部破片である。8は胴部下半の破片である。坏形土器は9～11で9、10はほぼ同じ形状を呈す。11は高台が認められるものである。

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
6	甕	—	(11.0)	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	
7	甕	—	(14.6)	—	口縁部～胴部¼	ヨコナデ ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	
8	甕	—	—	5.8	胴部～底部⅔	—	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
9	坏	4.2	12.4	6.6	½	底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	
10	坏	4.3	12.4	7.2	¾	底部回転ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	黒灰褐色	
11	坏	—	—	9.5	底部⅓ —	—	砂粒	堅緻	黒灰色	

5．D028号遺構（図638～640、図版159－2・3）

Ⅶ群の住居群内においてほぼ中央部に位置し、D029、D030、D031が近接している。

遺構　北壁2.42m、東壁2.55mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.18m掘り込んで床面に達する。床面は全体に軟弱な状況を呈するが、中央部においてはやや堅緻である。住居中央部に径0.22m、深さ0.15mを計るP₁を検出した。柱穴、壁溝は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を0.35m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙出し部まで一体化しているが袖部への貼り込みは少ない。火袋部に相当する袖は焼土化が著しく、火床部は深さ0.06mの掘り込みを呈している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層褐色土層、Ⅳ層茶褐

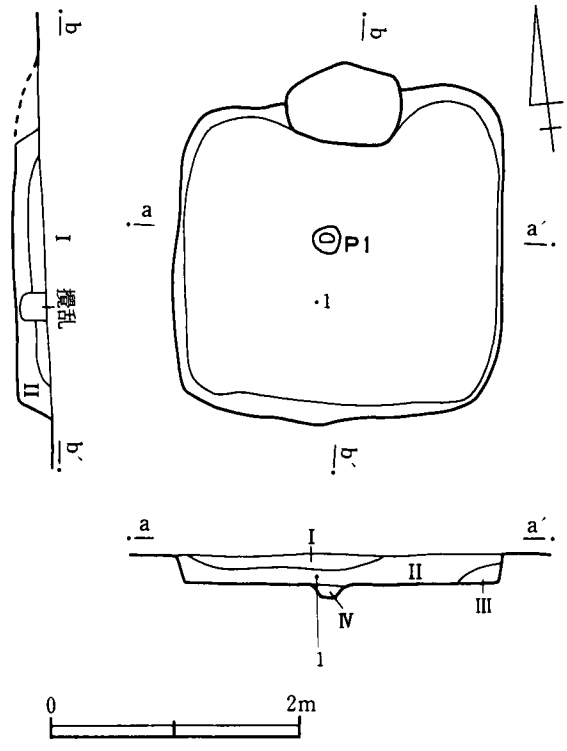
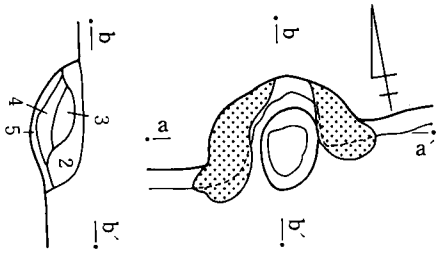


図638　D028号遺構実測図



1　黄灰色砂質粘土層
2　焼土ブロック混入暗褐色土層
3　明褐色土層
4　焼土粒混入褐色土層
5　ロームブロック混入
　褐色土層

図639　D028号遺構カマド実測図

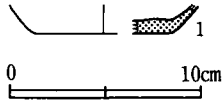


図640　D028号遺構出土遺物実測図

色土層が堆積する。遺物は稀少である。

出土遺物　遺物は稀少で図示できたのは1のみである。坏形土器の体部下半から底部にかけての破片である。

D028出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	坏	—	—	(7.1)	底部 1/4	底部一方向ヘラ削り	雲母	堅緻	灰色	

6．D029号遺構（図641～643、図版160－1、172）

Ⅶ群の住居群内において北東側に位置し、D028、D030、D031が近接している。

遺構　北壁3.33m、東壁3.08mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.26m掘り込んでおり、直下には幅0.15m、深さ0.04mの壁溝がカマド構築部分と北東部分と北東壁コーナー部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は検出できなかったが小ピットを5か所検出し

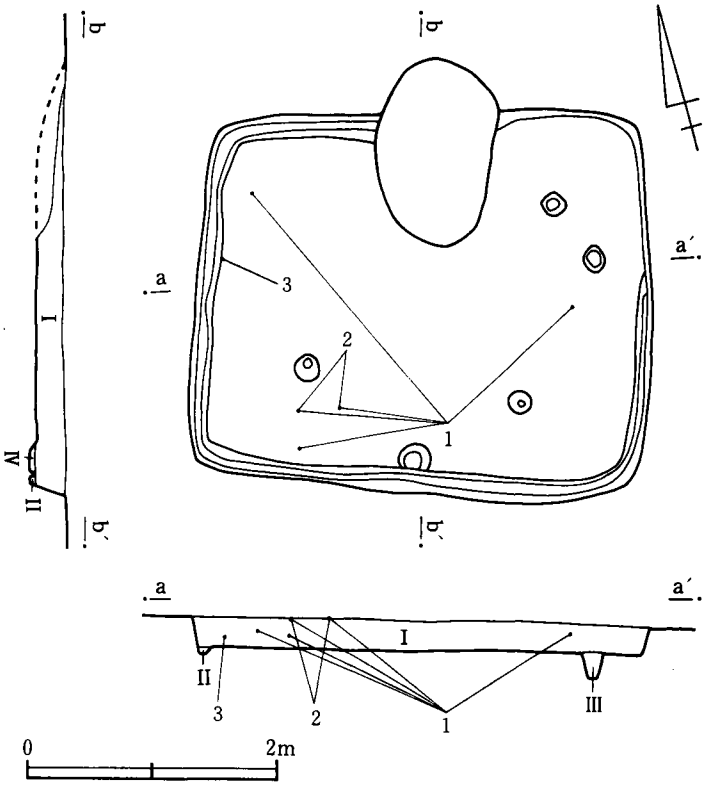
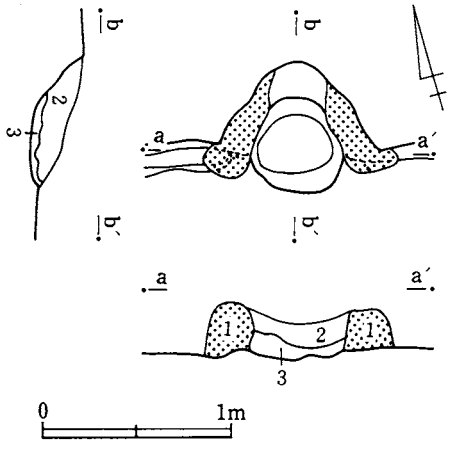
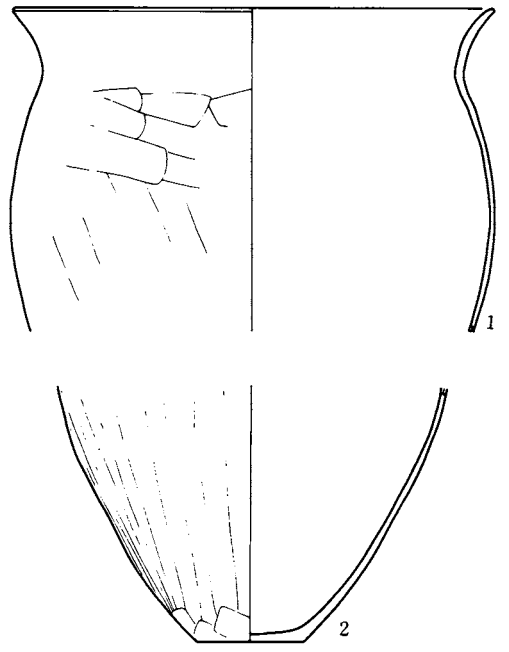


図641　D029号遺構実測図



1　黄灰色砂質粘土層
2　焼土粒混入褐色土層
3　ローム粒・焼土粒混入褐色土層

図642　D029号遺構カマド実測図



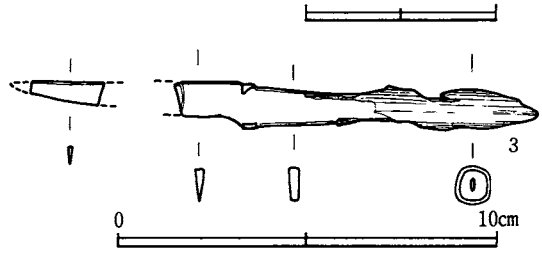


図643　D029号遺構出土遺物実測図

た。いずれも深さ0.15m前後である。

カマド　北壁中央部を0.45m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙出し部まで一体化している。火床部は掘り込み内に位置し、深さ0.04mの浅い掘り込みを呈している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層茶褐色土層、Ⅲ層暗茶褐色土層、Ⅳ層ローム粒混入暗茶褐色土層が堆積する。遺物は稀少である。

出土遺物　遺物は、甕形土器と鉄製品がある。甕形土器は1、2で、1は「く」字状に外反する薄手のものである。2はヘラ削り調整される胴部下半である。鉄製品は3の刀子である。柄の部分に木質が付着している。

D029出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	(25.8)	—	口縁部～胴部¼	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
2	甕	—	—	5.7	胴部～底部½	ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	黒褐色	

7．D030号遺構（図644～646、図版160－2・3、169）

Ⅶ群の住居群内において北東側に位置し、D028、D029、D031が近接している。

遺構　北壁2.36m、東壁2.71mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.48m掘り込んで床面に達する。床面は中央部を中心としてきわめて堅緻な状況を呈するが、東壁および西壁に接近する部分でやや軟弱である。南壁中央部に近接して長径0.3m、深さ0.12mを計るP_1を検出した。その他、2か所でピットを検出した。柱穴、壁溝は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を三角形に0.31m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙出し部まで一体化している。火袋部に相当する袖は焼土化が著しく、火床部は浅い擂鉢状の窪みが認められ、煙道部は急激な傾斜を呈している。

遺物出土状況　Ⅰ層ロームブロック混入褐色土層、Ⅱ層褐色土層、Ⅲ層黒褐色土層、Ⅳ層暗茶褐色土層が堆積する。遺物はⅠ層から稀少であるが、出土している。

出土遺物　遺物は、甕、坏、壺形土器がある。甕形土器は1で「く」字状に外反する口縁部破片である。坏形土器は2～4で、いずれも須恵器である。体部は直線的に開き、口径と底径の差があまりないものである。壺形土器は5で小形長頸壺の口縁部破片である。

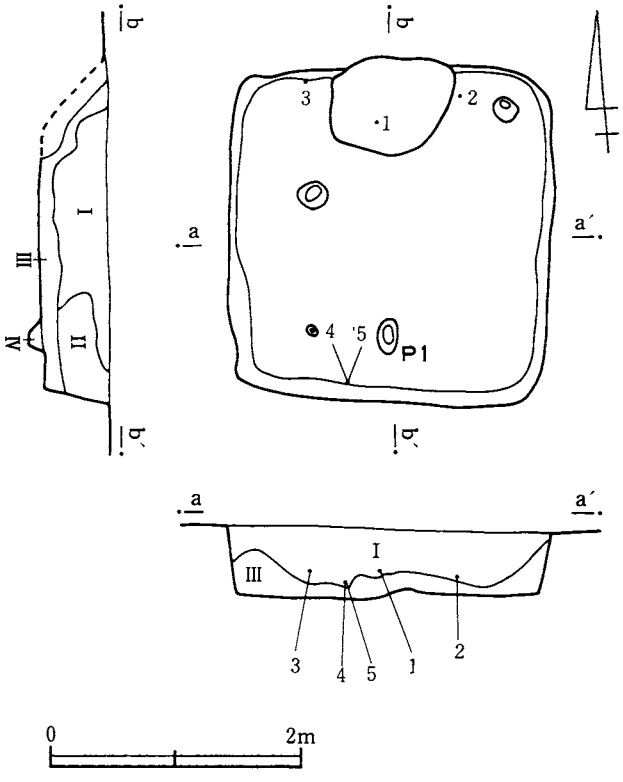
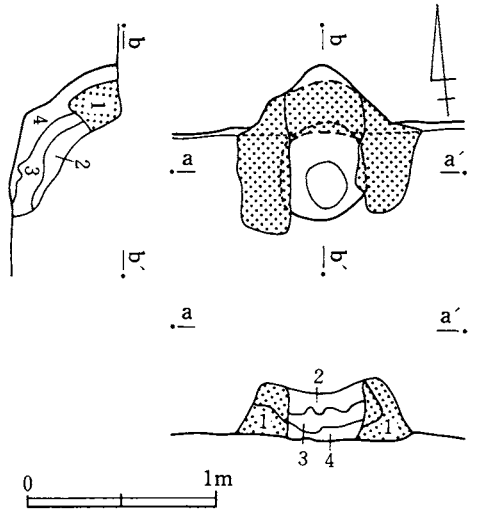


図644　D030号遺構実測図



1　黄灰色砂質粘土層
2　ローム粒混入褐色土層
3　焼土粒混入暗褐色土層
4　炭化粒・焼土粒混入褐色土層

図645　D030号遺構カマド実測図

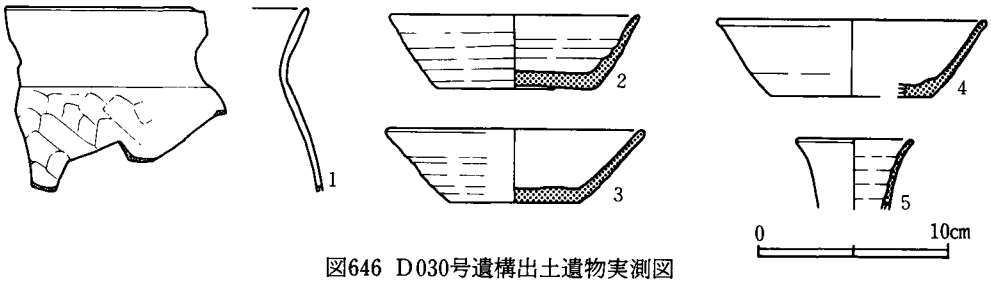


図646 D030号遺構出土遺物実測図

D030出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
2	坏	3.9	13.4	8.2	3/3	底部一方向ヘラ削り	雲母	堅緻	灰色	ヘラ切り
3	坏	3.8	(14.0)	7.0	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	灰色	
4	坏	4.05	(14.4)	8.5	1/3	—	砂粒	堅緻	黒褐色	
5	壺	—	6.3	—	口縁部のみ	—	—	堅緻	灰色	

8．D031号遺構（図647～649、図版161—1・2、169）

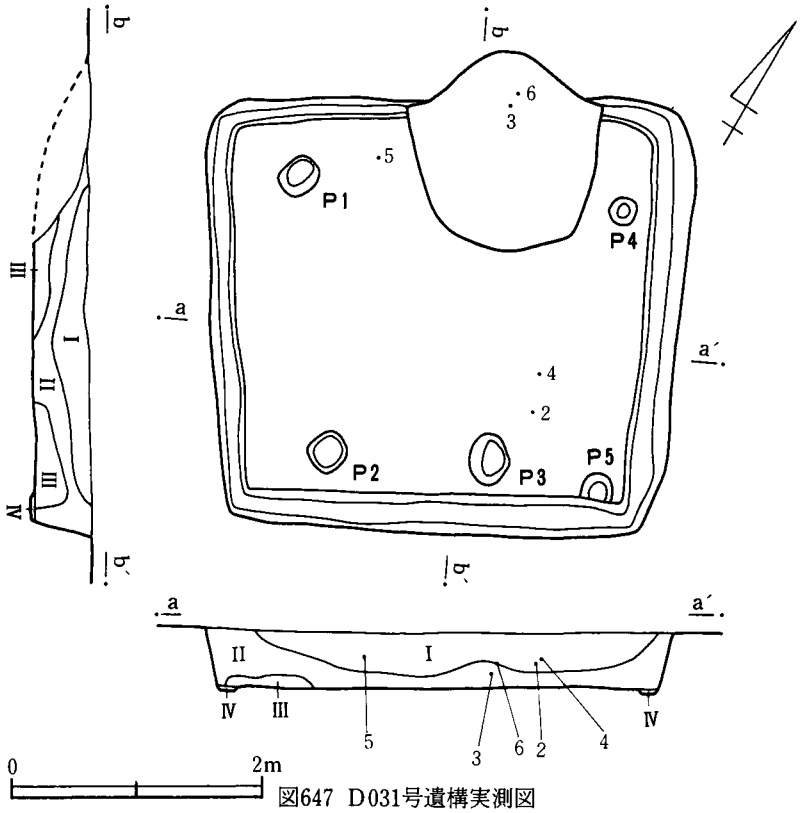
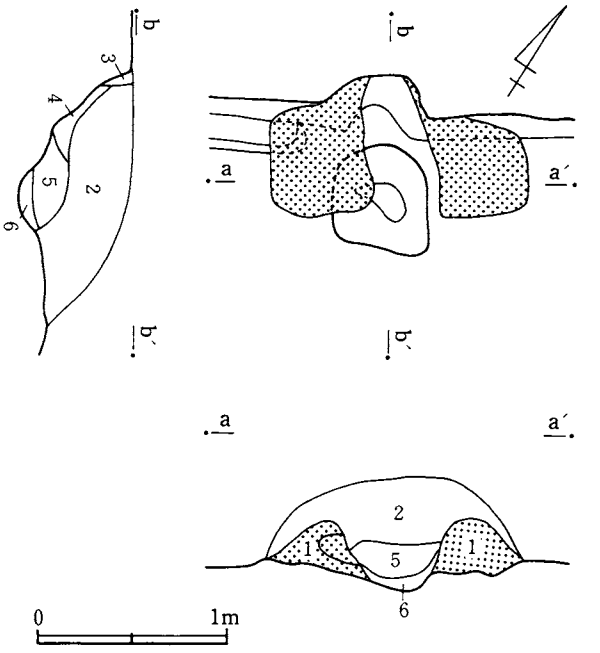


図647 D031号遺構実測図

Ⅶ群の住居群内において中央部より東側に位置し、D028、D029、D030が近接している。

遺構　北壁3.77m、東壁3.40mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.42m掘り込んでおり、直下には幅0.20m、深さ0.06mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は中央部を中心として壁緻な状況を呈しているが、壁の周辺はやや軟弱である。柱穴は、ほぼ対角線上に配置したP_1～P_4を検出した。規模の面で柱穴であるか疑問がもたれるが、いずれも径0.3m、深さ0.2mを計る。南壁中央部に近接して長径0.3m、深さ0.26mのP_5を検出した。



1　黄灰色砂質粘土層
2　ローム粒混入黒褐色土層
3　黄褐色土層
4　焼土粒混入黄褐色土層
5　炭化物混入焼土層
6　焼土粒混入ロームブロック層

図648　D031号遺構カマド実測図

カマド　北壁中央部を0.10m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙道部まで一体化している。火袋に相当する袖は焼土化が認められ、火床部は深さ

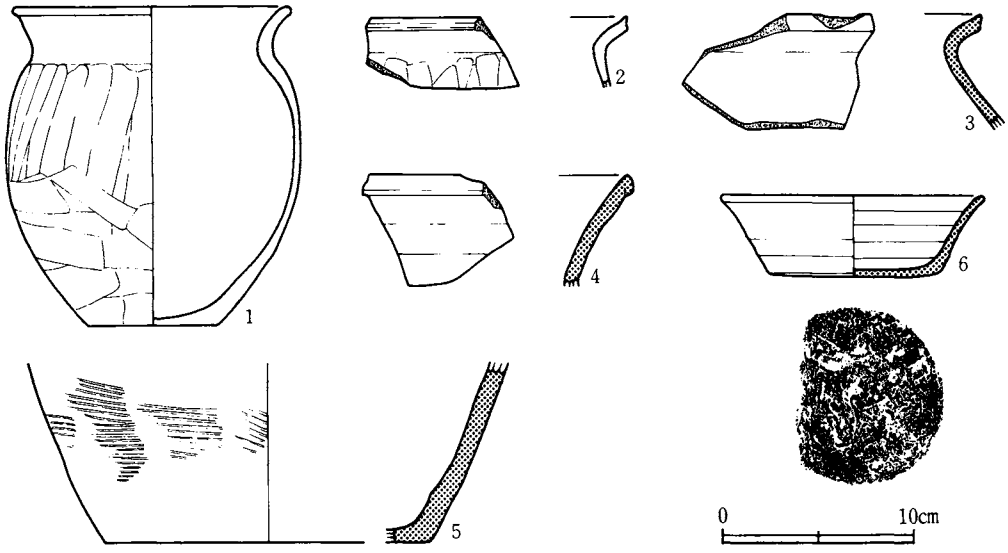


図649　D031号遺構出土遺物実測図

0.07mで擂鉢状の掘り込みを呈し、煙道部はやや急激な傾斜を呈している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層ローム粒混入黒褐色土層、Ⅳ層茶褐色土層が堆積する。遺物はⅠ層を中心として出土するが稀少である。カマド内出土もある。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器のみである。甕形土器は1～5で、1は口縁部が緩やかに外反する小形のものである。2～4は口縁部の破片、5は叩き目のある広口甕の底部破片である。坏形土器は6で体部は外反しながら開く形状を呈す。

D031出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	16.4	(14.7)	6.8	½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	赤褐色	
2	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
3	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ	砂粒 雲母	堅緻	茶褐色	
4	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ	砂粒 雲母	堅緻	灰色	
5	甕	—	—	(17.3)	破片	叩きじめ	砂粒	堅緻	灰色	
6	坏	4.15	14.0	8.9	½	底部一方向ヘラ削り	小石	やや軟弱	灰色	

9．D034号遺構（図650～652、図版161－3）

Ⅶ群の住居群内において最も東側に位置し、D029、D030が近接している。

遺構　北東壁3.09m、南東壁3.25mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.25m掘り込んでおり、直下には幅0.24m、深さ0.04mの壁溝がカマド構築部分と南東壁コーナー部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は対角線上より若干ずれて位置し、径平均0.25m、深さ

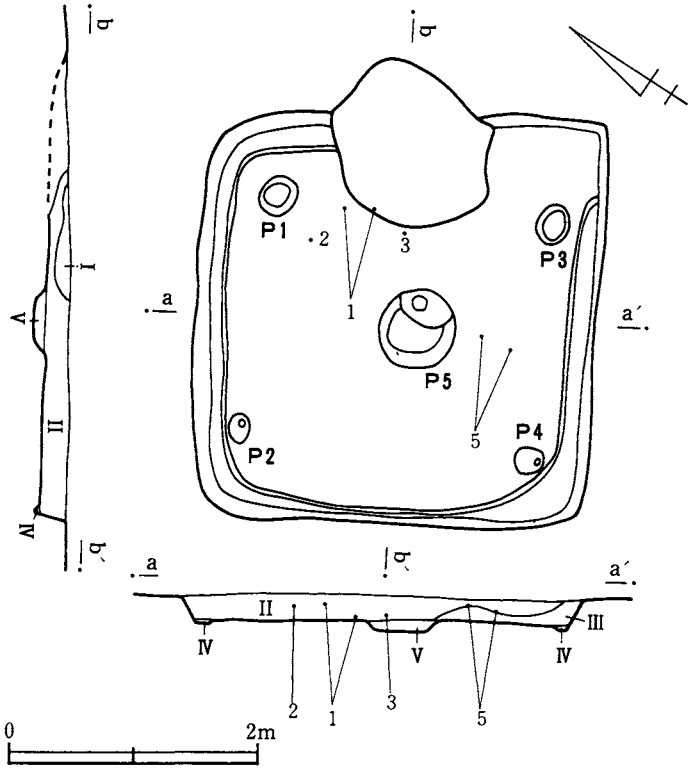
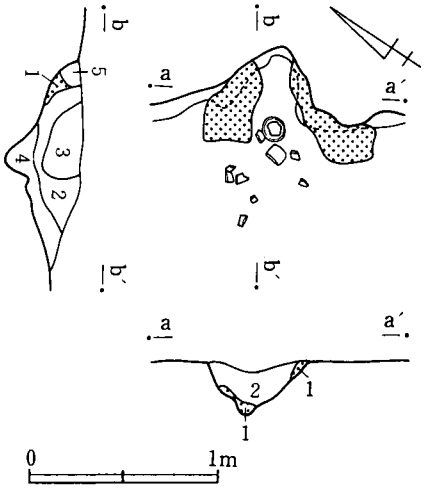


図650　D034号遺構実測図

平均0.30mを計るP₁～P₄を検出した。その他、中央部に径0.72m、深さ0.14mで2段に掘り込まれているP₅を検出した。

カマド　北東壁中央部を三角形に0.27m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖の一部と煙道部の一部に認められる程度で、天井部は遺存していない。火床部は深さ0.20mで擂鉢状の掘り込みを呈し、煙道部は緩やかな傾斜を呈している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層褐色土層、Ⅳ層茶褐色土層、Ⅴ層暗茶褐色土層が堆積する。遺物は各層より出土するが、床面上出土は少ない。小破片が多くカマド内出土もある。



1　黄灰色砂質粘土層　　4　ローム粒混入暗黒灰色土層
2　暗赤褐色土層
3　焼土ブロック混入赤褐色土層　　5　炭化物混入暗褐色土層

図651　D034号遺構カマド実測図

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器がある。甕形土器は1～3で、1は「く」字状に外反する口縁部破片、2は短かく外反する口縁部破片、3は胴部に叩き目がある胴部下半の破片である。坏形土器は4、5で、4は外反ぎみに開く体部を呈する須恵器、5は高台を有する坏で、内面は黒色処理される。

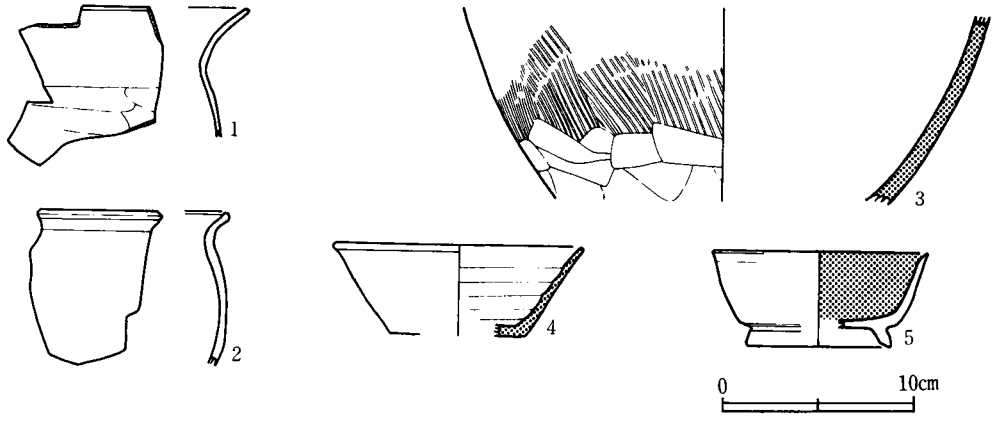


図652　D034号遺構出土遺物実測図

D034出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒 雲母	堅緻	茶褐色	

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
2	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ	—	堅緻	黒褐色	
3	甕	—	—	—	胴部 1/3	叩きじめ ヨコナデ	砂粒	やや堅緻	(内)灰色 (外)黒色	
4	坏	4.6	(13.3)	7.15	1/4	—	雲母 砂粒	やや堅緻	灰色	
5	坏	4.85	(11.5)	—	1/6	—	砂粒	堅緻	茶褐色	内黒

10. D042号遺構（図653～655、図版162—1・2、169、172）

IV群の住居群内において南東側に位置し、D043、D044、D045、D046が近接している。

遺構　北壁3.77m、東壁4.26mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.60

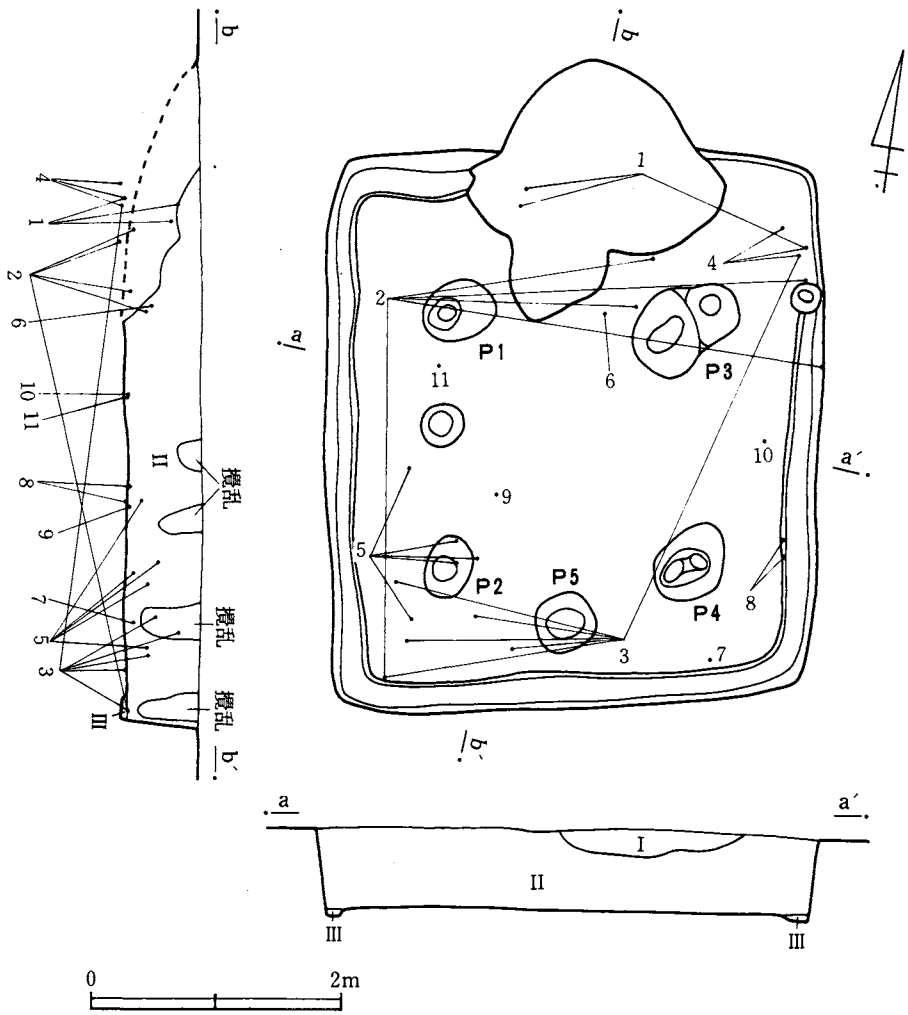
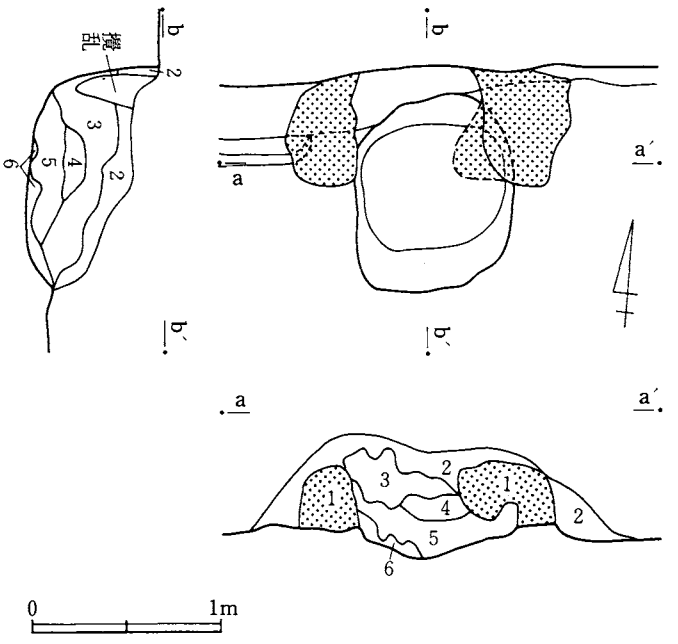


図653 D042号遺構実測図

m掘り込んで、直下には幅0.25m、深さ0.06mの壁溝がカマド構築部分とカマド右脇部分を除いて認められる。床面は全体にきわめて堅緻な状況を呈している。柱穴は対角線上にP_1～P_4を検出した。P_1、P_2は、2段に掘り込んでおり、P_1は径0.60m、深さ0.61m、P_2は径0.48m、深さ0.51mを計る。P_3、P_4は2穴一対となっておりP_3は径0.90m、深さ0.27m、0.61m、P_4は径0.58m、深さ0.48m、0.50mを計る。



1 黄灰色砂質粘土層
2 砂質粘土・焼土ブロック混入明褐色土層
3 焼土粒混入褐色土層
4 焼土粒混入明褐色土層
5 焼土ブロック混入赤褐色土層
6 焼土粒混入黒褐色土層

図654 D042号遺構カマド実測図

カマド 北壁中央部を0.05m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。掘り込みが浅いため粘土の貼り込みは袖部に認められるのみである。火床部は深さ0.12mで擂鉢状の掘り込みを呈している。

遺物出土状況 I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層茶褐色土層が堆積する。遺物は比較的多く、各層より出土している。

出土遺物 遺物は、甕、坏形土器と鉄製品がある。甕形土器は1～5で、1～4は「く」字状に外反する薄手の口縁部破片である。5はこれらの底部と考えられるものである。坏形土器は6～9で体部は直線的に大きく開く形状を呈している。鉄製品は10、11で、10は手斧、11は大形な鉸具である。

D042出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	—	21.4	—	口縁部～胴部¾	ヨコナデ ヘラ削り	雲母	堅緻	茶褐色	
2	甕	—	(22.7)	—	口縁部¼	ヨコナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	
3	甕	—	20.5	—	口縁部～胴部½	ヨコナデ ヘラ削り	雲母	堅緻	茶褐色	
4	甕	—	(21.0)	—	口縁部～頸部⅓	ヨコナデ ヘラ削り	雲母	堅緻	茶褐色	
5	甕	—	—	(4.1)	胴部～底部½	ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
6	坏	—	—	(7.5)	底部 1/3	底部多方向ヘラ削り	雲母	堅緻	茶褐色	
7	坏	—	—	6.85	底部 1/2	底部多方向ヘラ削り	雲母	堅緻	黒灰色	
8	坏	3.9	14.1	6.7	2/3	底部一方向ヘラ削り	雲母 砂粒	軟弱	灰褐色	ヘラ切り
9	坏	—	—	8.0	底部 1/2	底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	

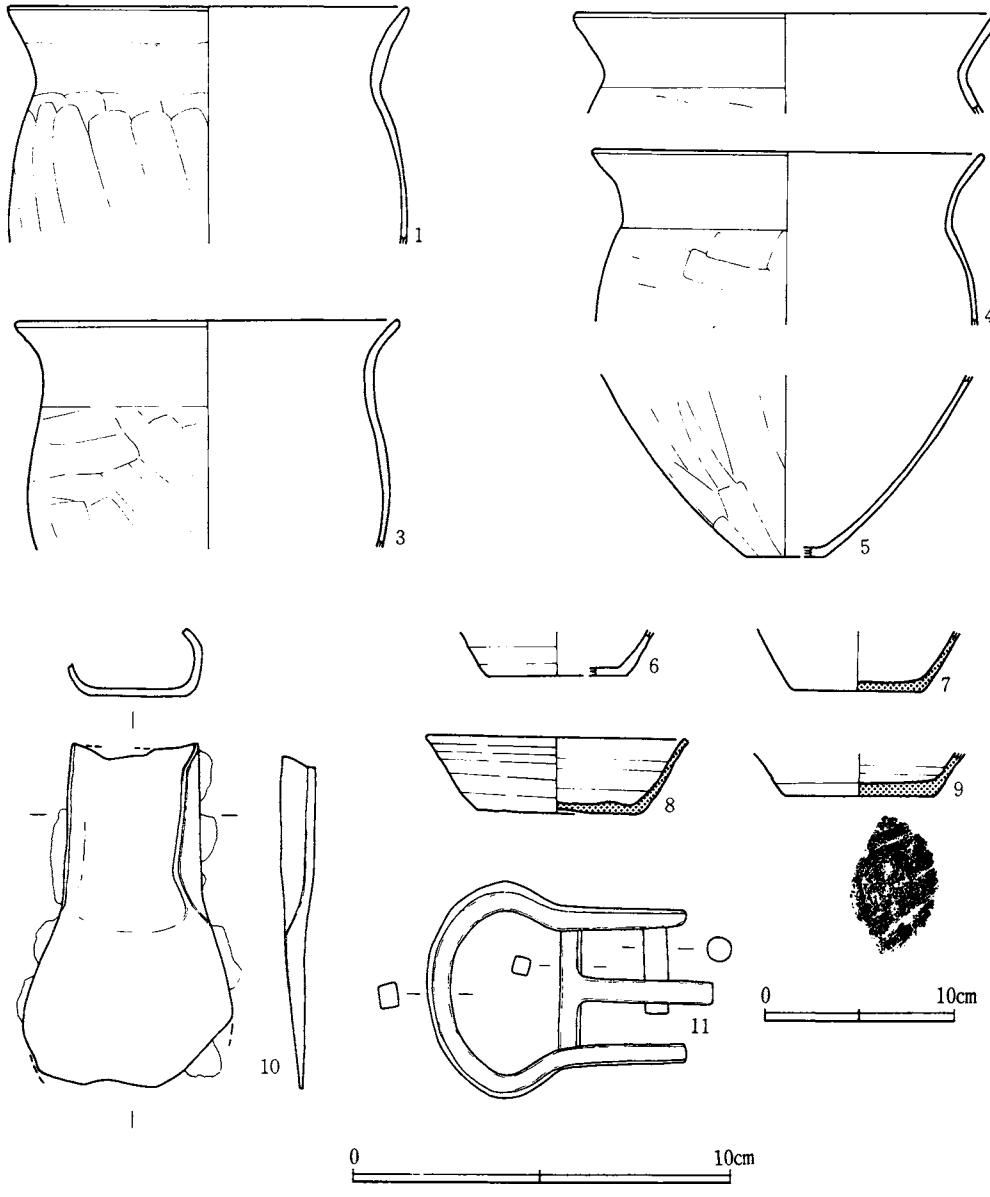


図655 D042号遺構出土遺物実測図

11. **D043号遺構**（図656～659、図版162－3、163－1）

Ⅶ群の住居群内において南東側に位置し、D042、D044、D045、D046が近接している。

遺構　北壁2.97m、東壁3.42mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.40m掘り込んでおり、直下には幅0.10m、深さ0.07mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は中央部を中心として堅緻な状況を呈している。柱穴はP1～P5で、P2、P3は重複しており、カマドの造り変えと対応している。いずれも径0.3m、深さ0.3mを計る。その他、P6～P8を検出したが、新旧の組み合せを考慮しても不規則な配置である。

カマド　西壁と北壁の2か所に検出した。旧時のカマドBは、西壁中央より若干右側に位置するが、取り毀しているため掘り込みの一部が認められるのみである。住居廃絶時まで使用し

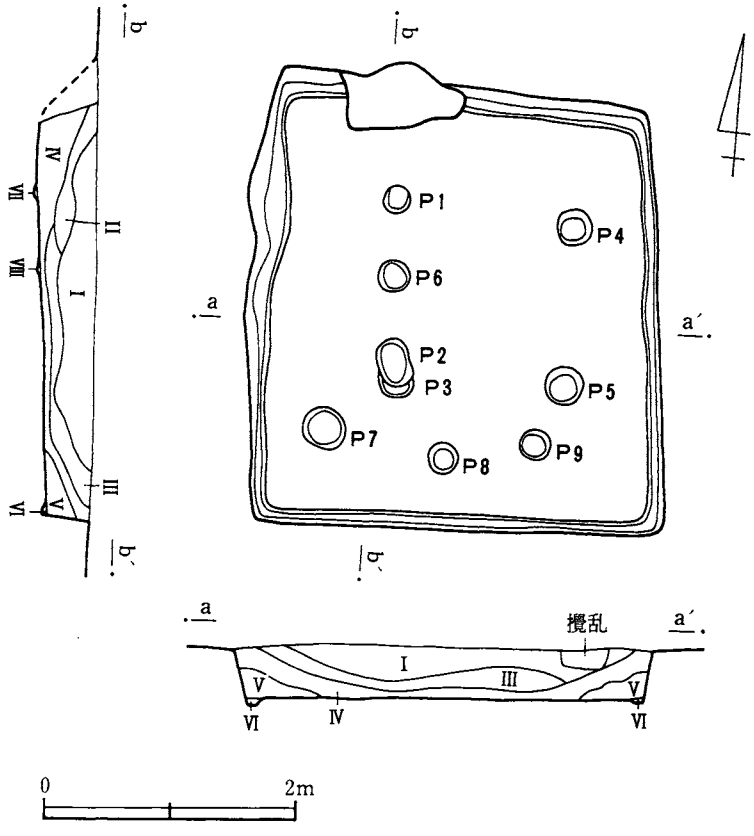


図656　D043号遺構実測図

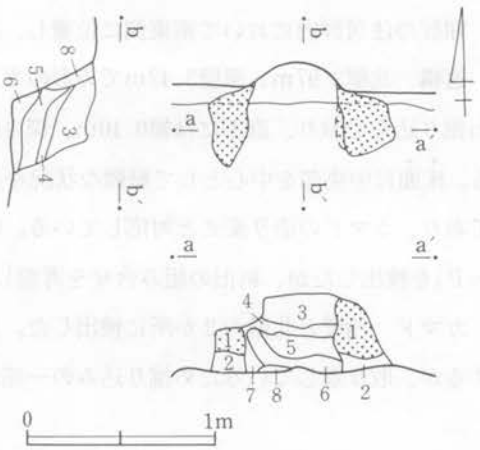
D043出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	坏	4.3	13.2	7.2	½	底部一方向ヘラ削り	小石	堅緻	灰色	
2	坏	6.7	(12.9)	3.8	⅓	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	

ていたカマドAは、北壁中央部より左に寄って位置し、壁を0.14m掘り込んで黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖部のみに行われており、煙道部には認められない。火床部の窪は認められず、煙道部は急激な傾斜を呈している。

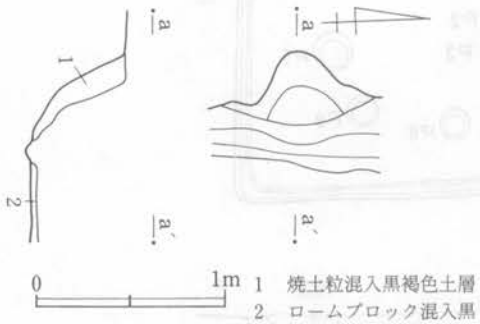
遺物出土状況　I層黒色土層、II層焼土粒粘土粒混入黒色土層、III層黒褐色土層、IV層暗褐色土層、V層褐色土層、VI層茶褐色土層、VII層暗茶褐色土層、VIII層ローム粒混入暗茶褐色土層が堆積する。遺物は各層より出土するが稀少である。

出土遺物　遺物は、坏形土器のみでしかも少ない。1、2とも須恵器で、体部は直線的に開く形状を呈す。口径と底径の差の小さいものである。



1　黄灰色砂質粘土層
2　ロームブロック混入黒褐色土層
3　黒灰色土層
4　黒褐色土層
5　焼土粒混入赤褐色土層
6　焼土粒混入黒褐色土層
7　砂質粘土粒混入黒褐色土層
8　黄褐色土層

図657　D043号遺構Aカマド実測図



1　焼土粒混入黒褐色土層
2　ロームブロック混入黒褐色土層（貼床）

図658　D043号遺構Bカマド実測図

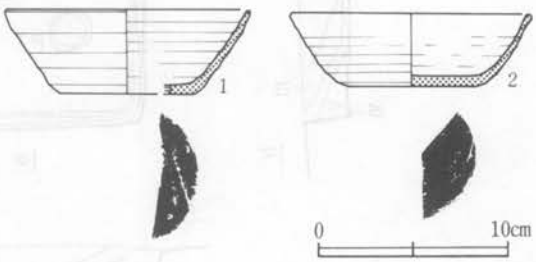


図659　D043号遺構出土遺物実測図

12. **D044号遺構**（図660～662、図版163－2、170）

VII群の住居群内において南東側に位置し、D042、D043、D045、D046が近接している。

遺構　北壁3.35m、東壁3.16mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はやや傾斜を呈して0.47m掘り込んでおり、直下には幅0.16m、深さ0.05mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は中央部を中心として堅緻な状況を呈している。小ピットを南壁中央部に近接して位置する径0.30m、深さ0.14mを計るP_1を検出したのみで柱穴は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を0.69m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込み

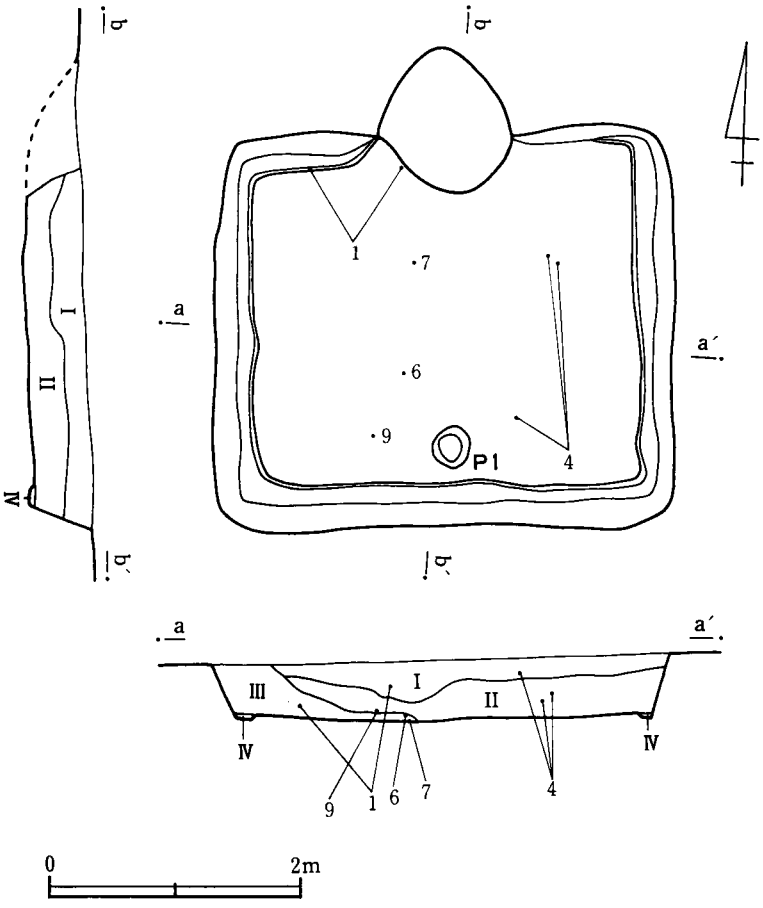
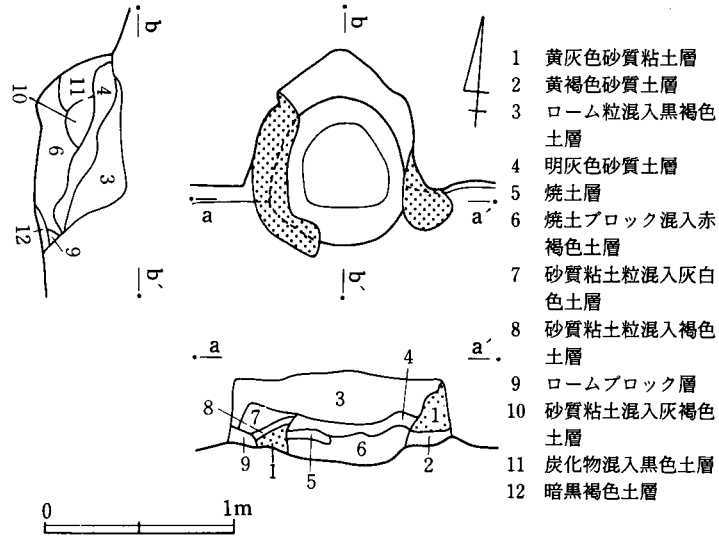


図660 D044号遺構実測図

は2層の上に袖部から一部煙道部まで認められるが良好な状況を呈していない。火床部はほぼ掘り込み中に位置し、0.05mの深さを計る。煙道部は急激な傾斜を呈している。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層褐色土層、III層ローム粒混入黒褐色土層、IV層茶褐色土層が



1　黄灰色砂質粘土層
2　黄褐色砂質土層
3　ローム粒混入黒褐色土層
4　明灰色砂質土層
5　焼土層
6　焼土ブロック混入赤褐色土層
7　砂質粘土粒混入灰白色土層
8　砂質粘土粒混入褐色土層
9　ロームブロック層
10　砂質粘土混入灰褐色土層
11　炭化物混入黒色土層
12　暗黒褐色土層

図661 D044号遺構カマド実測図

堆積する。遺物は床面上を中心として各層より出土する。またカマド内出土も認められる。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器がある。甕形土器は1、2で、1は条痕状の磨きが施される胴部下半の破片である。2は口縁部破片である。坏形土器は3～9で、口径約11cm前後の3、4、と12cm前後の5～8がある。9は高台を有する須恵器である。

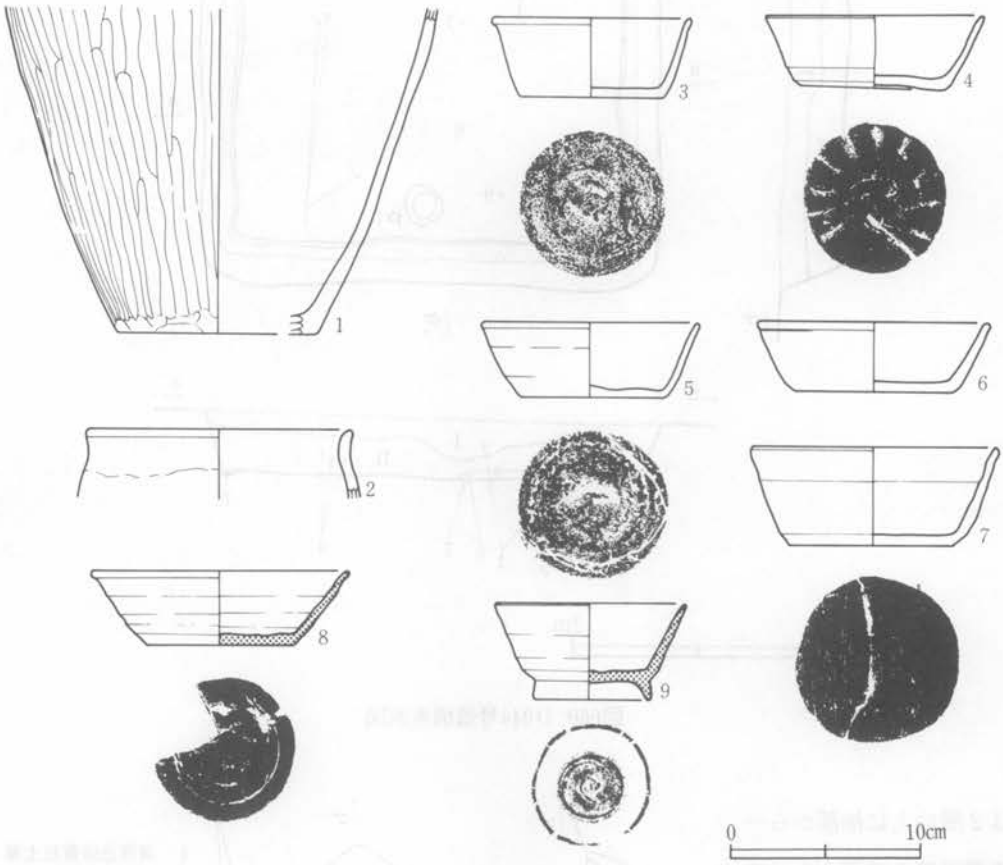


図662　D044号遺構出土遺物実測図

D044出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	(10.3)	胴部～底部½	磨き	雲母 小石	やや堅緻	茶褐色	
2	甕	—	(14.2)	—	口縁部¼	ヨコナデ	—	堅緻	茶褐色	
3	坏	4.2	10.7	7.7	完形	—	砂粒	やや軟弱	赤褐色	ヘラ切り
4	坏	3.8	11.7	7.7	完形	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	ヘラ切り
5	坏	3.9	11.7	7.65	¾	底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	赤褐色	ヘラ切り
6	坏	3.5	(12.3)	8.4	½	—	砂粒	やや堅緻	赤褐色	ヘラ切り

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
7	坏	5.1	13.2	8.7	完形	底部多方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰褐色	
8	坏	3.7	(13.7)	7.8	½	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	
9	高台付坏	4.9	10.3	6.3	完形	—	雲母	堅緻	灰色	

13. **D045号遺構**（図663～665、図版163－3、170）

Ⅶ群の住居群内において南側に位置し、D042、D043、D044、D046が近接している。

遺構　北壁3.92m、東壁3.72mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.53m掘り込んでおり、直下には幅0.24m、深さ0.10m前後の壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は対角線上に配置するP₁～P₄を検出した。いずれも2段に掘り込まれており、径0.58m、深さ平均0.52mを計る。

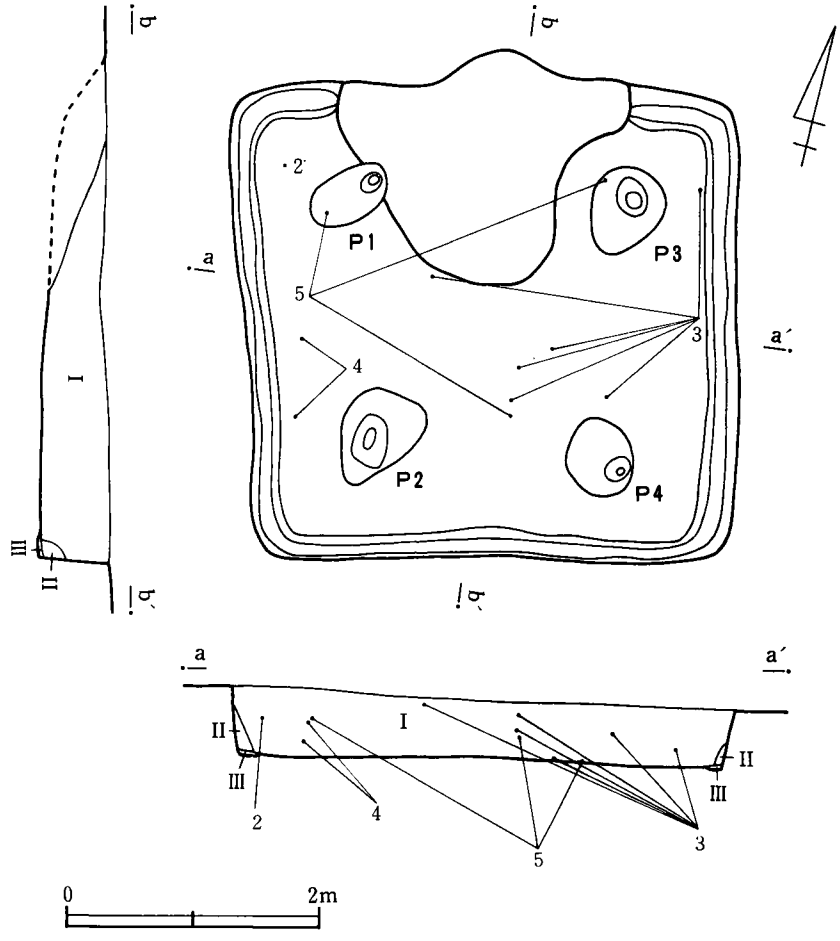


図663 D045号遺構実測図

カマド　北壁中央部を0.30m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土は2層上に貼り込まれ、袖部から煙道部まで一体化している。火床部は深さ0.13mの掘り込みを呈し、煙道部はやや急激な傾斜を呈している。一部天井部が遺存するものの状況は良くない。

遺物出土状況　Ⅰ層黒褐色土層、Ⅱ層褐色土層、Ⅲ層茶褐色土層が堆積する。遺物は覆土上層部より出土している。

出土遺物　遺物は、坏、台付甕形土器と鉄製品がある。坏形土器は1～4で、1は高台を有する底部破片、2～4は体部がほぼ直線的に開く形状を呈している。台付甕形土器は5の台部破片である。鉄製品は6の鏃で身の途中より欠損している。

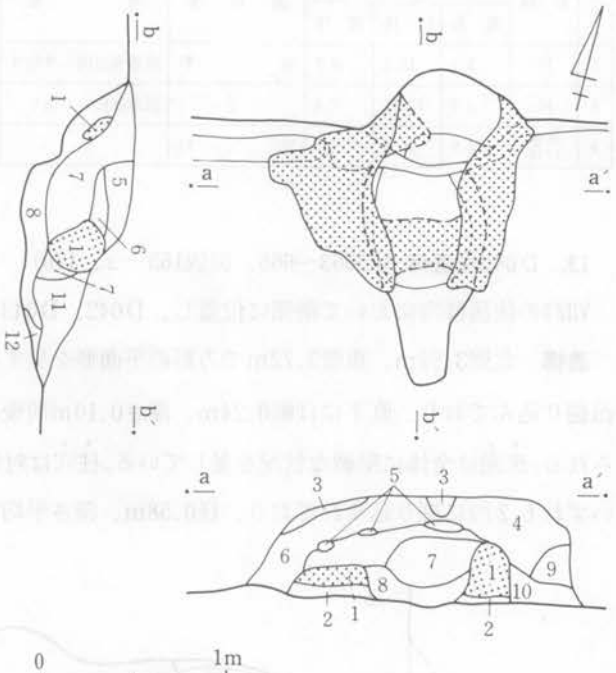


図664　D045号遺構カマド実測図

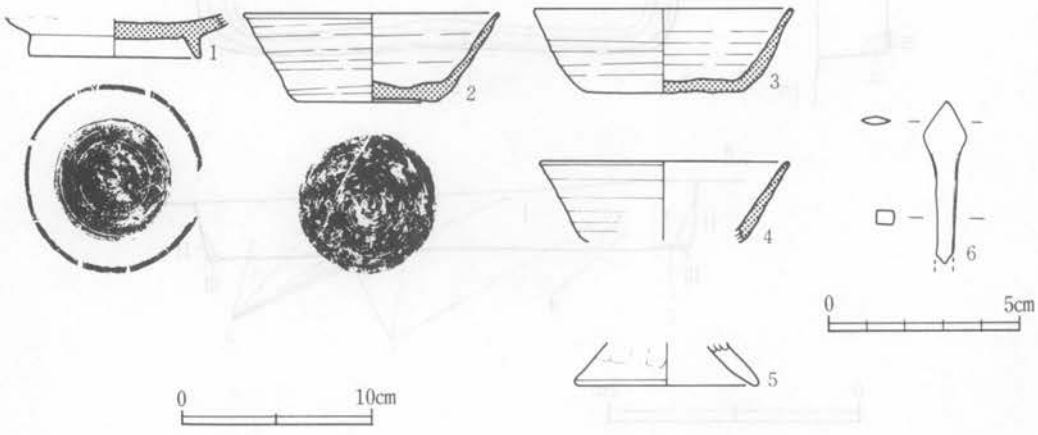


図665　D045号遺構出土遺物実測図

D045出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	高台付坏	—	—	9.3	高台部のみ	—	砂粒	堅緻	灰色	転用硯
2	坏	4.5	13.7	7.4	⅔	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	
3	坏	4.3	13.9	8.15	½	底部多方向ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	灰色	ヘラ切り
4	坏	—	13.4	—	⅓	—	砂粒	堅緻	灰色	
5	台付甕	—	—	9.8	脚部のみ	ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	

14. D046号遺構（図666～669、図版164－1・2、170）

Ⅶ群の住居群内において南に位置し、D042、D043、D044、D045が近接している。

遺構　北壁3.34m、東壁3.14mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はやや傾斜を呈して0.54m掘り込んでおり、直下には幅0.16m、深さ0.06mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に平坦で堅緻な状況を呈している。南西壁コーナー部分に径0.23m～0.32m、深さ0.18m～0.21mを計るピットを4か所検出したが、いずれも性格は不明である。

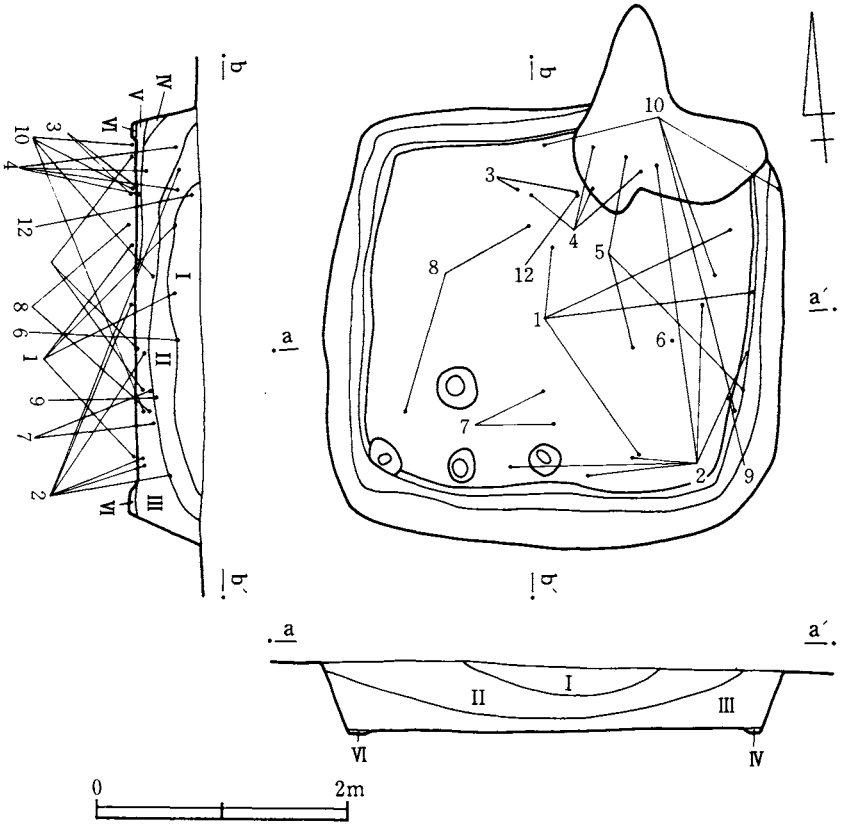
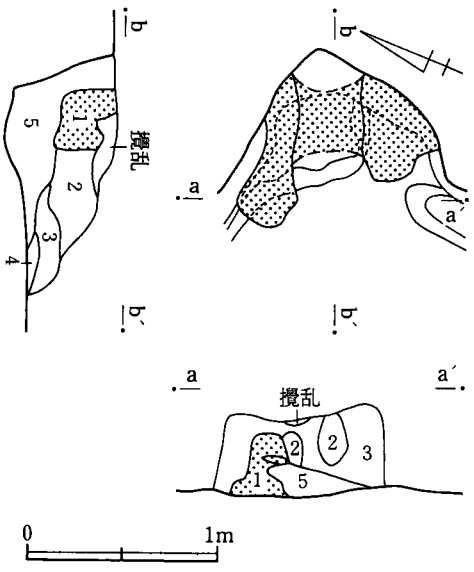
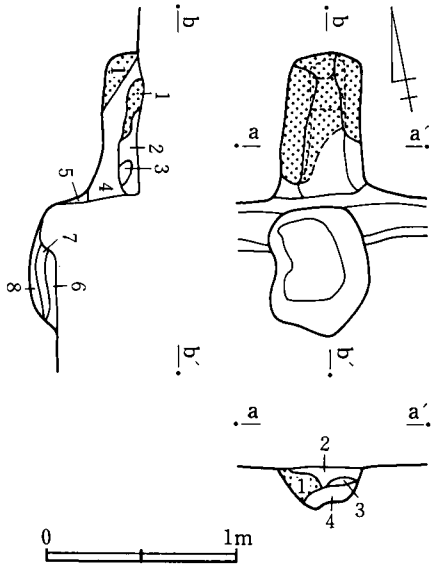


図666 D046号遺構実測図



1 黄灰色砂質粘土層
2 粘土ブロック混入褐色土層
3 焼土ブロック混入褐色土層
4 黒褐色土層
5 焼土粒混入黒褐色土層

図667 D046号遺構Aカマド実測図



1 黄灰色砂質粘土層
2 黒色土層
3 灰白色粘土ブロック層（天井部の落ち込み層）
4 黒褐色土層
5 灰褐色砂質土層
6 黒褐色粘質土層
7 焼土層
8 暗黄褐色土層

図668 D046号遺構Bカマド実測図

柱穴は検出できなかった。

カマド　北壁と北東壁コーナー部において検出した。旧時のカマドBは北壁中央部より右に寄って位置し、壁を最長0.74m掘り込んで、黄灰色砂質粘土をもって構築している。修改築に伴って取り毀されているため、煙道部が遺存する程度であるが、粘土の貼り込みは良好で、煙出し近くには天井部が遺存している。住居廃絶時まで使用されていたカマドAは北東壁コーナー部に位置している。壁への掘り込みは認められず、黄灰色砂質粘土を貼り込んで袖部から煙道部を形成している。火床部は深さ0.11mの擂鉢状で、煙道部は急激な傾斜を呈している。天井は一部認められる。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層ローム粒混入黒褐色土層、IV層暗茶褐色土層、V層褐色土層、IV層茶褐色土層が堆積する。遺物はカマド周辺部の床面上を中心として多量に出土している。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器と石製品、土製品がある。甕形土器は1～3で、1、2は緩やかに外反し、3は水平近くに外反する口縁部を呈している。坏形土器は4～10で、いずれも体部は直線的に開き、しかも口径と底径の差が小さい。石製品は11の凝灰岩製の砥石で一端に小孔があく。土製品は12の土玉で径3.50mを計り、中央に0.7cmの孔があく。胎土、焼成は良好で、色調は茶褐色を呈す。

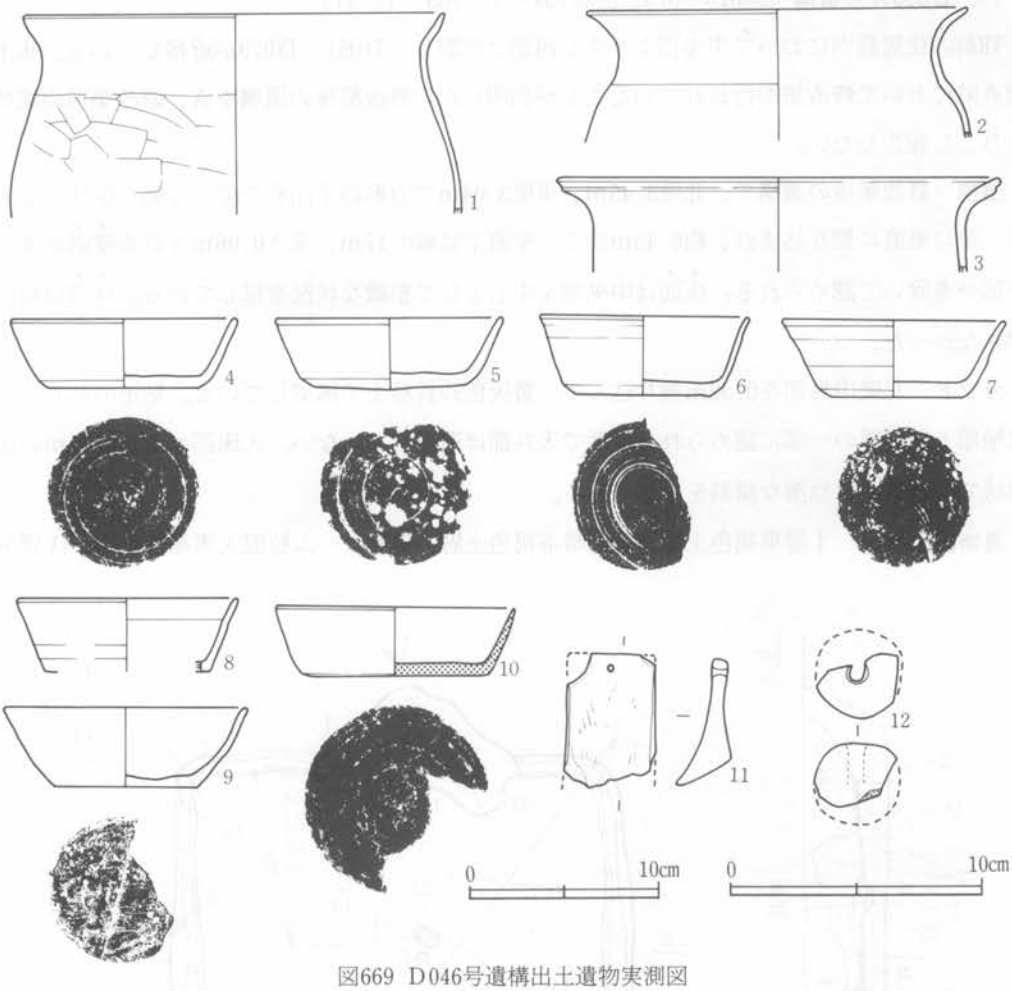


図669 D046号遺構出土遺物実測図

D046出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	(22.4)	—	口縁部～胴部1/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
2	甕	—	(22.5)	—	口縁部～頸部1/4	ヨコナデ	砂粒 雲母	堅緻	茶褐色	
3	甕	—	(23.6)	—	口縁部1/3	ヨコナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	
4	坏	3.5	12.0	8.0	3/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
5	坏	3.7	12.2	8.0	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
6	坏	4.1	11.2	7.0	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
7	坏	4.0	(12.8)	6.9	3/4	底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
8	坏	3.8	(11.8)	(8.65)	1/4	—	砂粒	堅緻	茶褐色	
9	坏	4.15	(13.0)	7.65	3/4	底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	赤褐色	
10	坏	3.5	12.8	8.3	1/2	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	糸切り

15. D050A号遺構（図670～673、図版164－3、165－1、171）

Ⅶ群の住居群内において中央部より少し西側に位置し、D051、D079が近接している。床下調査時において修改築が行われていたことが判明した。修改築後の遺構をA、修改築前の遺構をBとし報告したい。

遺構　修改築後の遺構で、北壁3.45m、東壁3.04mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に掘り込まれ、約0.45m計る。壁直下に幅0.17m、深さ0.06mを計る壁溝がカマド部分を除いて認められる。床面は中央部を中心として堅緻な状況を呈している。柱穴は検出できなかった。

カマド　北壁中央部を0.52m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖部と煙道部の一部に認められる程度で天井部は遺存していない。火床部は深さ0.05mの擂鉢状で、煙道部は急激な傾斜を呈している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒褐色土層、Ⅱ層暗茶褐色土層、Ⅲ層ローム粒混入黒褐色土層、Ⅳ層茶

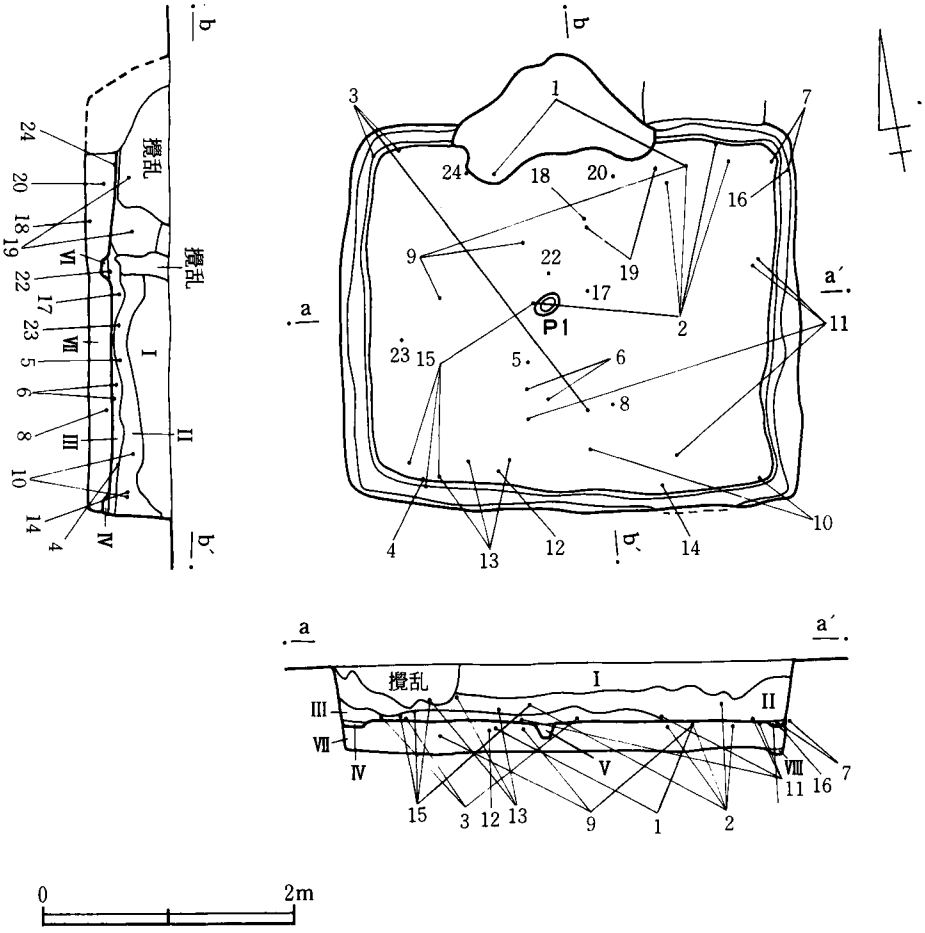
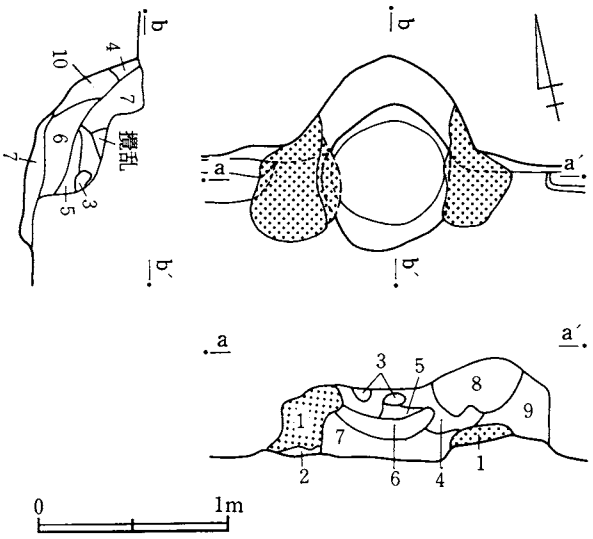


図670　D050A号遺構実測図

褐色土層、V層ローム粒混入暗茶褐色土層、VI層ローム粒混入茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上を中心として出土している。

出土遺物　遺物は、甕、甑、坏、皿、鉢形土器と鉄製品がある。甕形土器は1～5で、1、2は形状の近い小形の甕である。3は口唇部に特徴を有す口縁部である。4、5は底部破片である。甑形土器は6で、胴部に叩き目が認められるものである。坏形土器は7～18で、口径12cm前後の7～14と、口径15cm前後の15がある。16、17は墨書がある体部破片である。18は底部破片である。皿形土器は19～21でいずれも高台を有するものである。鉢形土器は22、23で直線的に開く体部を呈するものである。鉄製品は24の鎌である。先端部分が特に研ぎべりを生じている。



1　黄灰色砂質粘土層
2　ロームブロック混入黒褐色土層
3　黄灰色砂質粘土ブロック層
4　炭化粒・焼土粒混入黒褐色土層
5　褐色土層
6　焼土層
7　黄褐色土層
8　砂質粘土粒混入灰褐色土層
9　焼土粒混入褐色土層
10　黒褐色土層

図671　D050A号遺構カマド実測図

D050A出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	12.5	13.2	6.1	3/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
2	甕	—	16.5	—	口縁部胴部3/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
3	甕	—	15.7	—	口縁部～胴部1/2	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	黒褐色	
4	甕	—	—	6.25	胴部～底部3/3	ヘラ削り	砂粒	堅緻	(内)茶褐色 (外)黒褐色	
5	甕	—	—	(14.9)	底部のみ	ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
6	甑	—	—	(14.7)	胴部～底部1/3	叩きじめ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
7	坏	4.25	12.6	5.2	3/3	下端静止ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	墨書「善」 糸切り
8	坏	4.2	12.4	6.1	3/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
9	坏	3.4	12.56	6.0	3/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
10	坏	3.9	12.3	5.7	3/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
11	坏	4.0	13.0	6.8	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「尼」 糸切り
12	坏	3.9	(12.7)	5.75	1/3	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
13	坏	3.8	12.3	6.1	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	
14	坏	4.2	14.0	7.8	1/2	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	墨書「万」

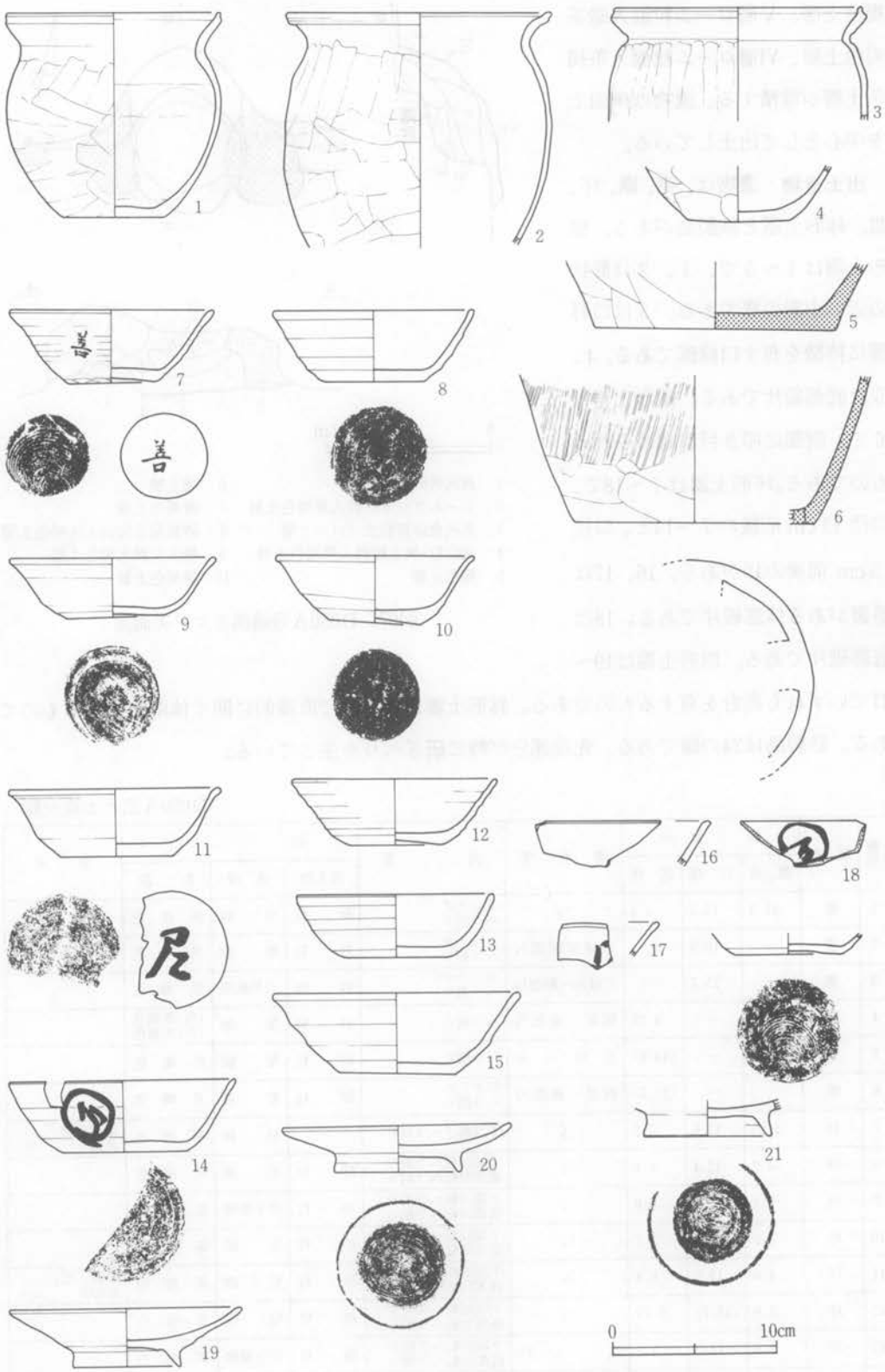


図672　D050A号遺構出土遺物実測図(1)

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
15	坏	4.8	15.4	7.3	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	黒褐色	内面磨き
16	坏	—	—	—	破片	—	—	堅緻	茶褐色	墨書「万」
17	坏	—	—	—	破片	—	—	堅緻	茶褐色	墨書判読不明
18	坏	—	—	6.5	底部 ¼	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
19	高台付皿	3.4	14.2	6.6	½	—	—	堅緻	茶褐色	内面磨き
20	高台付皿	2.8	14.2	8.0	¾	—	—	堅緻	茶褐色	内面磨き 糸切り
21	高台付皿	—	—	7.8	高台部のみ	—	砂粒	堅緻	茶褐色	内面磨き 糸切り
22	鉢	10.6	23.0	11.8	½	体部ヘラ削り	—	堅緻	茶褐色	
23	鉢	—	—	(9.55)	底部 ⅓	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書判読不明

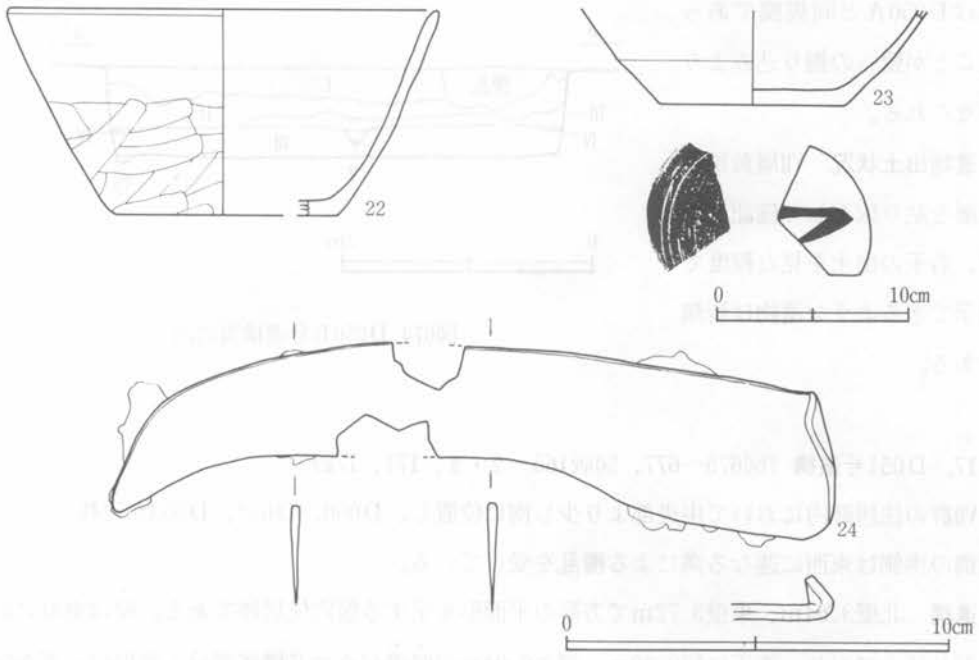


図673 D050A号遺構出土遺物実測図(2)

16. D050B号遺構（図674、図版172）

D050Aの床下調査時において検出したものであり、D050Aの修改築前の遺構である。平面形や規模などは大差が認められない。

遺構 北壁3.45m、東壁3.04mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁の掘り込みは0.63mで、床面はD050Aの床面より0.18m下方に位置している。東壁直下に幅0.18m、深さ0.04mを計る壁溝が認められるが、他壁には認められない。床面は全体に堅緻な状況を呈している。

南壁中央部に近接して小ピットを3か所に検出した。3か所のピットは重複せず位置しており、いずれも径0.25m、深さ0.12mを計る。柱穴は検出できなかった。

カマド　北壁中央部に黄灰色砂質粘土をもって構築しているが、本体は修改築に伴って取り毀されているため充分把握することができないが、ほぼD050Aと同規模であったことが壁への掘り込みより察せられる。

遺物出土状況　Ⅶ層黄褐色土層を貼り床として確認したが、若干の出土を見た程度で図示できるような遺物は皆無である。

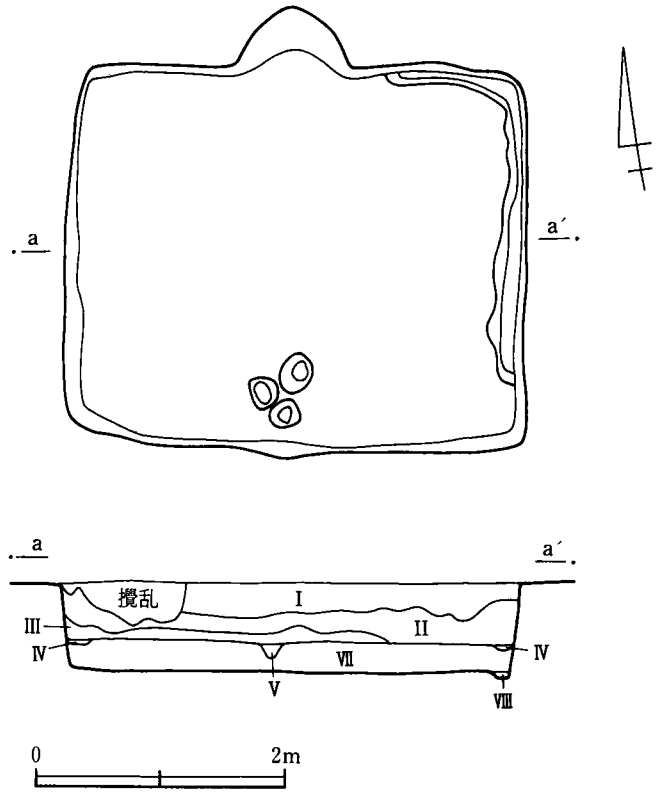


図674　D050B号遺構実測図

17. D051号遺構（図675～677、図版165－2・3、171、172）

Ⅶ群の住居群内において中央部より少し南に位置し、D050、D052、D053が近接している。遺構の南側は東西に連なる溝による攪乱を受けている。

遺構　北壁3.64m、東壁3.72mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.60m掘り込んでおり、直下に幅0.30m、深さ0.04mの壁溝がカマド構築部分と東壁の一部を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は対角線上に2段に掘り込んで配置するP_1～P_4を検出した。径平均0.50m、深さ平均0.60mを計る。その他、南壁中央部に近接

D051出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	12.0	13.4	7.15	½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
2	甕	—	(12.1)	—	口縁部 ⅓	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
3	壺	—	—	9.6	高台部のみ	—	—	堅緻	灰色	

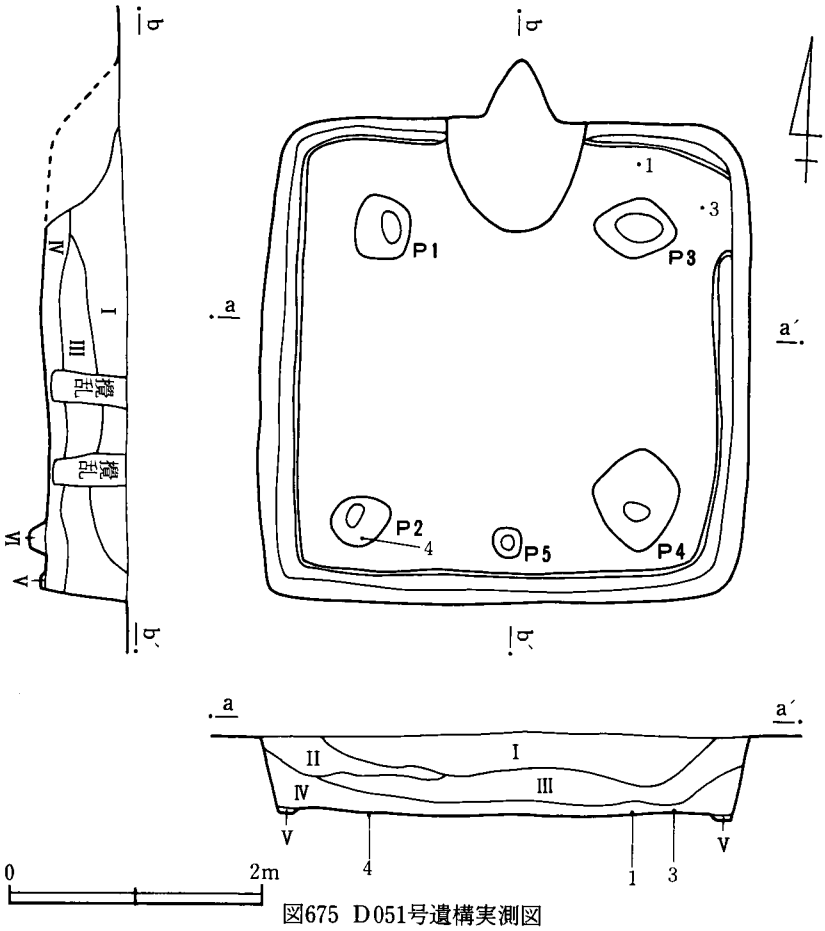
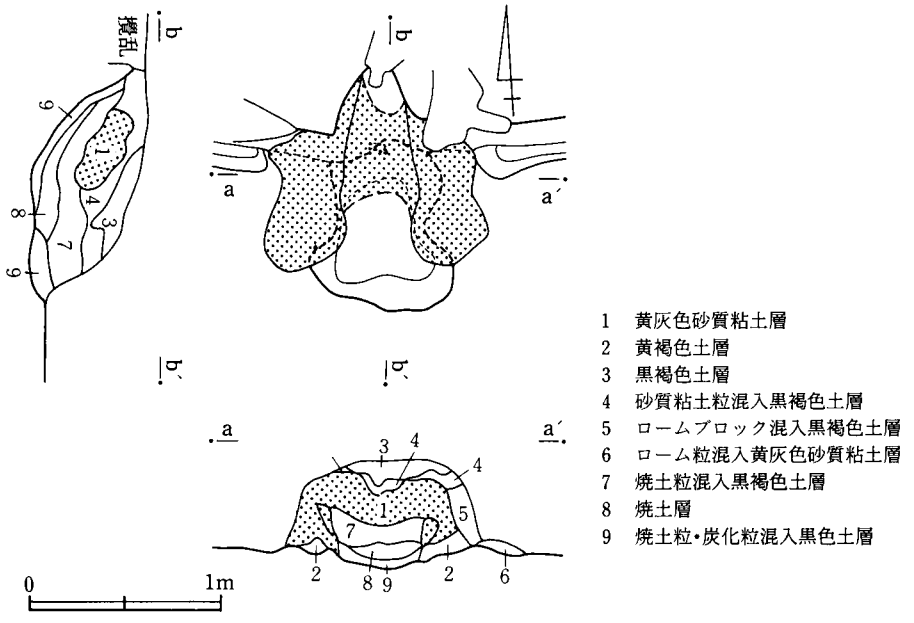


図675 D051号遺構実測図



1 黄灰色砂質粘土層
2 黄褐色土層
3 黒褐色土層
4 砂質粘土粒混入黒褐色土層
5 ロームブロック混入黒褐色土層
6 ローム粒混入黄灰色砂質粘土層
7 焼土粒混入黒褐色土層
8 焼土層
9 焼土粒・炭化粒混入黒色土層

図676 D051号遺構カマド実測図

して径0.22m、深さ0.16mを計るP₅を検出した。

カマド　北壁中央部を0.38m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土は袖部において2層上に貼り込まれ、煙出し部まで一体化しており、火袋部に続く煙道部はかなり幅の狭い構造を呈している。火床部は深さ0.08mの窪みを呈し、煙道部はやや急激な傾斜を呈している。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層ローム粒混入黒褐色土層、III層黒色土層、IV層暗褐色土層、V層茶褐色土層、VI層暗茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上を中心として出土しているが量的に少ない。

出土遺物　遺物は、甕、壺形土器と鉄製品がある。甕形土器は1、2で、1は口縁部が肩部から著しく屈曲を呈する小形なものである。2は短口縁の破片である。壺形土器は3で、高台を有する底部破片である。鉄製品は4の鎌でほぼ完形である。先端部分に研ぎべりを生じている。

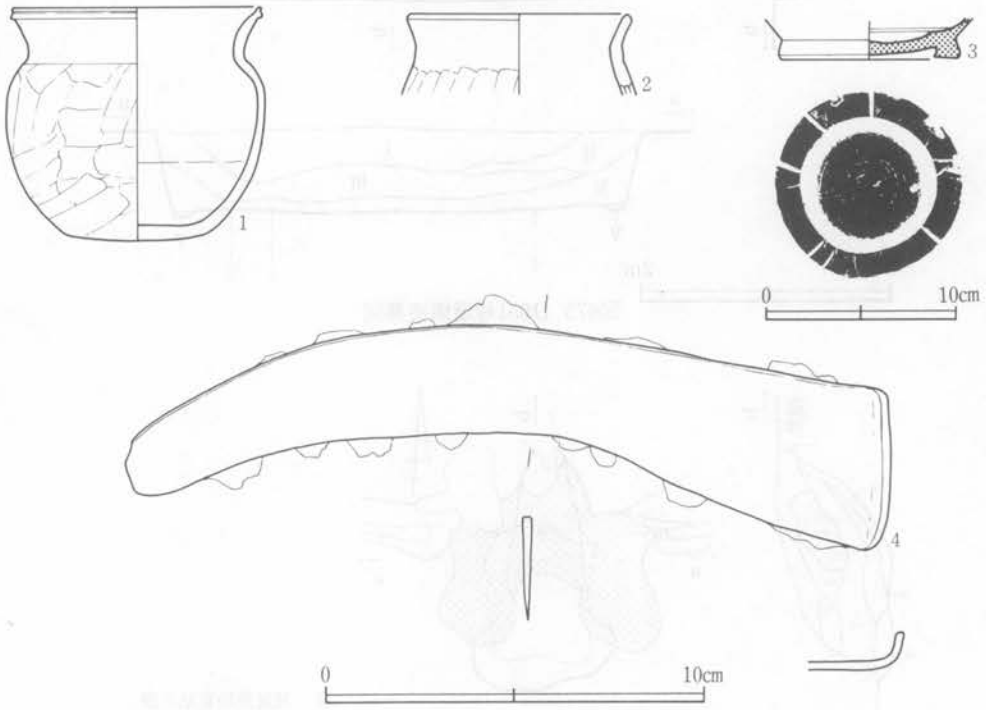


図677　D051号遺構出土遺物実測図

18. D052号遺構（図678、図版160－1）

VII群の住居群内において最も南側に位置している。最も近く位置するD051とは約15mの距離を有している。

遺構　北壁2.64m、東壁3.06mで歪を生じている平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はや

や傾斜を呈し、0.26m掘り込んで床面に達する。床面は平坦であるが、全体に軟弱な状況を呈している。カマド、炉、柱穴、壁溝等は検出できず、住居の機能を有していたか疑問である。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層が堆積する。遺物は稀少で、しかも小破片が覆土中より出土している程度であり、図示し得るものはない。

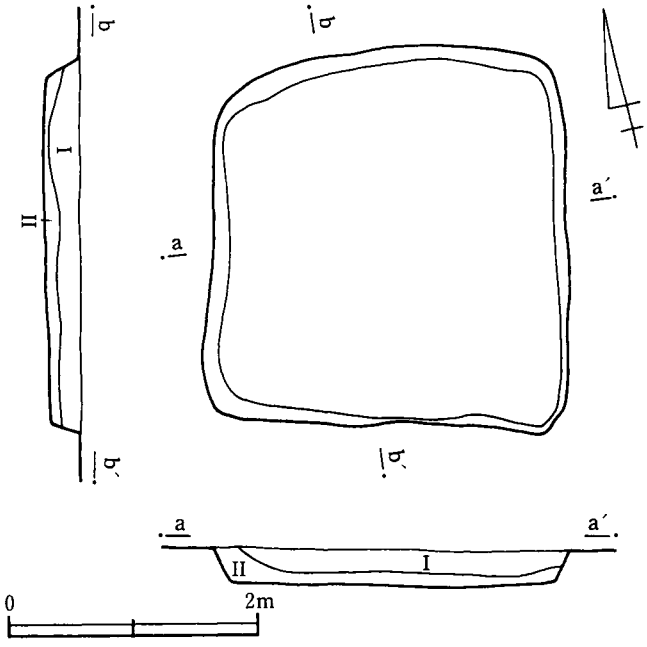


図678 D052号遺構実測図

19. D053号遺構（図679～681、図版166－2・3）

VII群の住居群内において最も西側に位置し、D054が近接している。

遺構　北壁3.6m、東壁3.6mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は若干の傾斜を呈し、0.5m掘り込んでおり、直下には幅0.12m、深さ0.06mを計る壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は対角線上に配置したP_1～P_4を検出した。径0.5m～0.62mで、深さ0.56m～0.68mを計る。その他、小ピットを2か所にわたり検出した。南壁中央に近く位置するP_5は径0.24m、深さ0.27mを計る。

カマド　北壁中央部を0.2m掘り込んで黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙出し部まで一体化している。火床部は擂鉢状の窪みを呈し煙道部に続く。天井部は遺存しない。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層焼土ブロック混入黄褐色土層、III層黄褐色土層、IV層ローム粒混入黄褐色土層、V層茶褐色土層、IV層暗茶褐色土層が堆積しており、遺物はIII層中

D053出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	(12.0)	—	口縁部のみ	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	(内)黒褐色 (外)茶褐色	
2	坏	4.1	14.0	8.5	1/3	底部回転ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	灰色	
3	蓋	2.55	19.3	—	1/3	天井部回転ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	黒褐色	

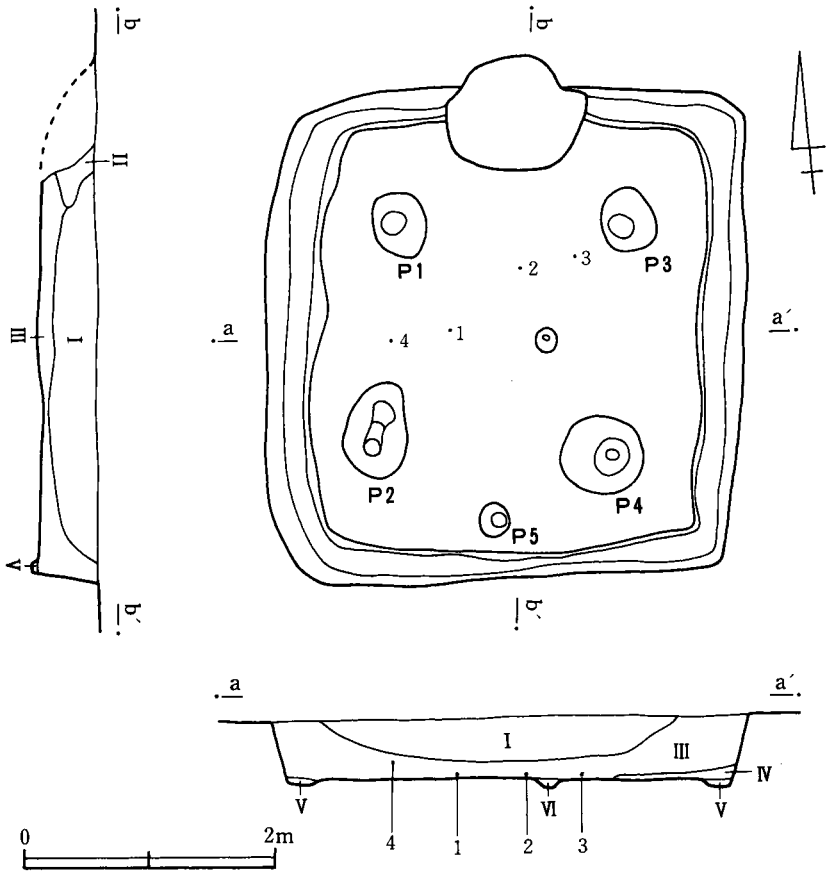


図679 D053号遺構実測図

より出土している。

出土遺物　遺物は、甕、坏、蓋形土器と鉄製品、石製品がある。甕形土器は1の口縁部破片である。坏形土器は2で体部が直線的に開き、口径と底径の差が少ない。蓋形土器は3で、身受けの作出はない。鉄製品は4の刀子で刃先が欠損している。石製品は滑石製品でかなり大きな孔があるが貫通はしていない。

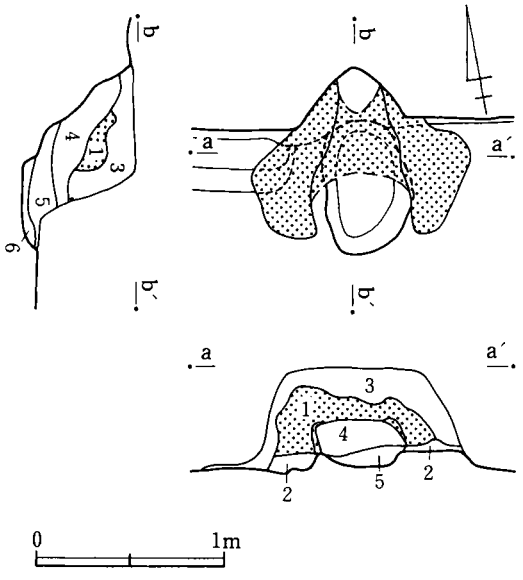


図680 D053号遺構カマド実測図

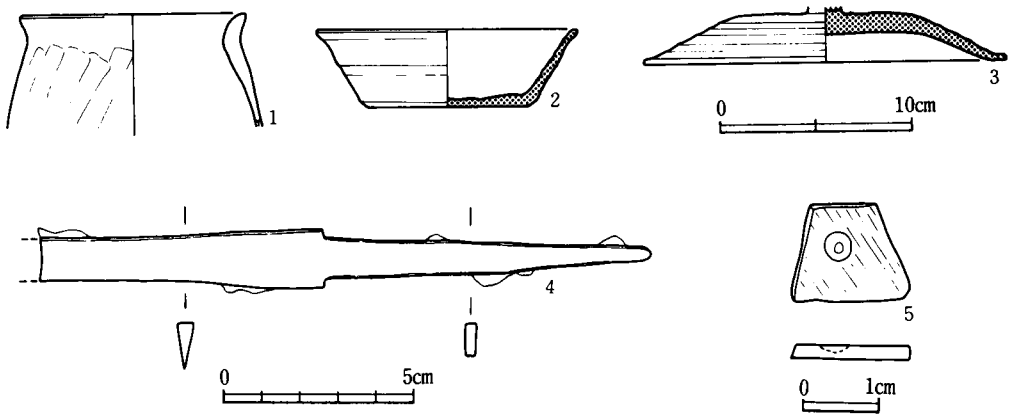


図681 D053号遺構出土遺物実測図

20. **D054号遺構**（図682～684、図版167－1、171、172）

Ⅶ群の住居群内において最も西側に位置し、D053が近接している。

遺構 北壁2.72m、東壁3.00mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.37m掘り込んでおり、直下に幅0.26m、深さ0.07mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は中央部を中心として堅緻な状況を呈しているが、周囲はやや軟弱である。柱穴は検出できなかった。

カマド 北壁中央部を0.23m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙出し部まで一体化しており、煙道部分には天井部が遺存している。火床部は深さ0.11mの擂鉢状で、煙道部は急激な傾斜を呈している。

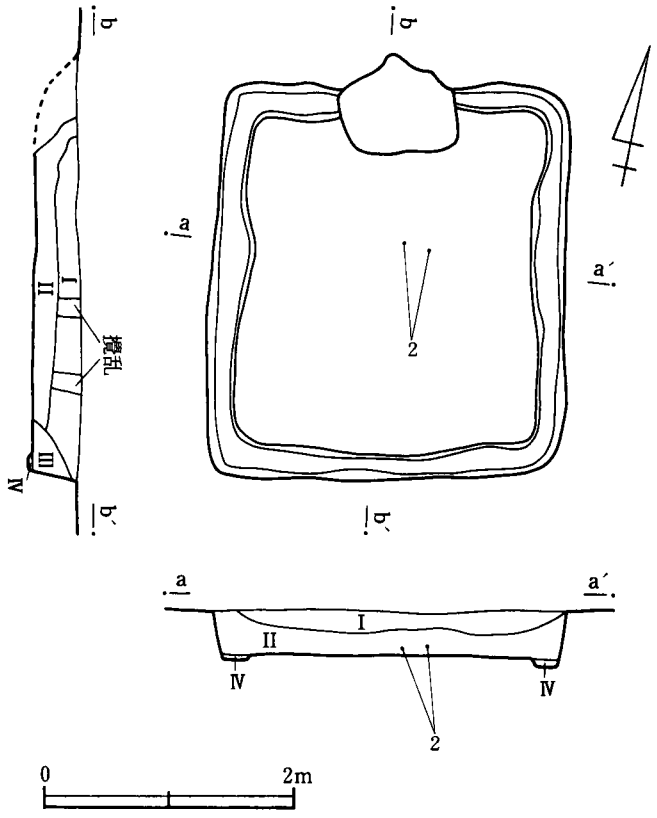
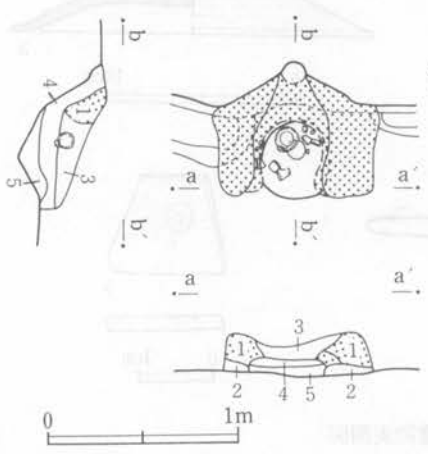


図682 D054号遺構実測図



1　黄灰色砂質粘土層
2　黄褐色土層
3　黒褐色土層
4　焼土粒混入黒褐色土層
5　焼土層

図683　D054号遺構カマド実測図

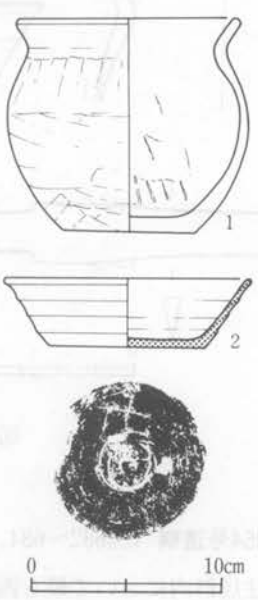


図684　D054号遺構出土遺物実測図

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層暗褐色土層、Ⅳ層茶褐色土層が堆積する。遺物は各層より出土するが、いずれも小破片で量的に少ない。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器の2点だけである。甕形土器は1で「く」字状に外反する口縁部を呈する小形な甕である。坏形土器は2で体部が直線的に開く形状を呈し、口径と底径の差の小さい土器である。

D054出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	11.25	12.0	7.0	3/4	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	やや軟弱	茶褐色	
2	坏	3.65	13.15	8.3	3/4	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	線刻判読不明

21. **D079号遺構**（図685・686、図版167－2・3）

Ⅶ群の住居群内においてほぼ中央に位置し、D050、D051が近接している。一部溝による攪乱を受けている。

遺構　北壁2.56m、東壁2.42mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.28m掘り込んでおり、直下には幅0.22m、深さ0.05mの壁溝がカマドを構築している北壁を除いて認められる。床面は全体に軟弱な状況を呈しているが部分的に堅緻なところもある。小ピットを3か所で検出したが性格は不明である。柱穴は検出できなかった。

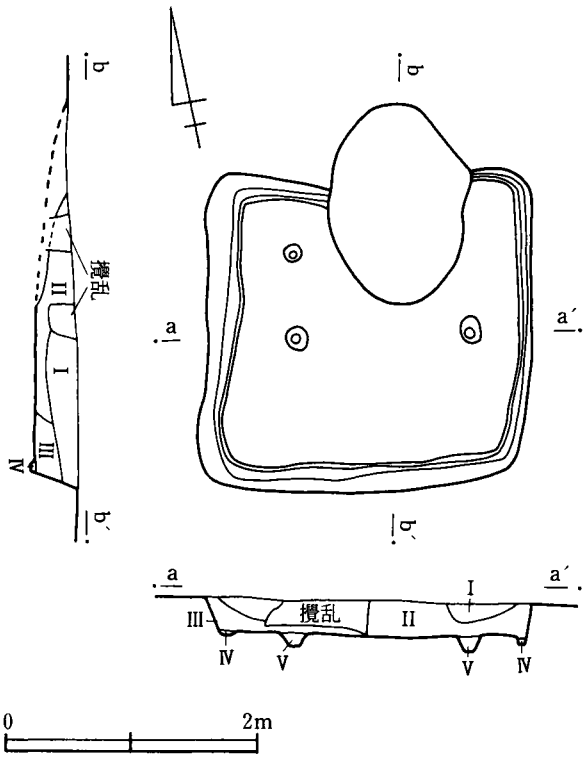


図685 D079号遺構実測図

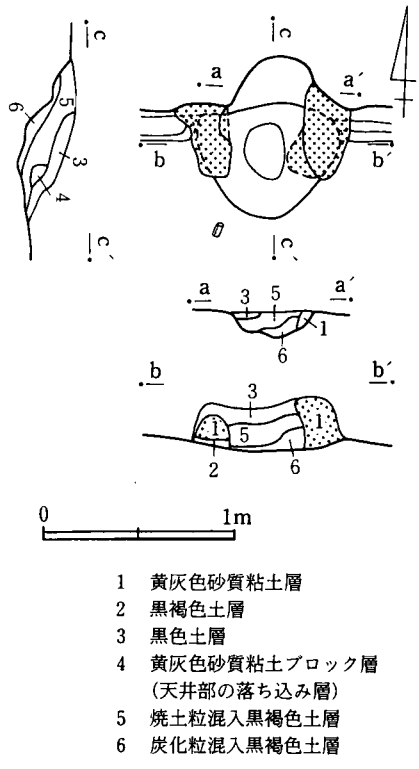


図686 D079号遺構カマド実測図

カマド　北壁中央部を0.26m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙道部まで行われている。火床部は深さ0.07mの浅い擂鉢状で、煙道部は緩やかな傾斜を呈している。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層褐色土層、IV層暗茶褐色土層、V層茶褐色土層が堆積する。出土遺物は皆無である。

22. P005号遺構（図687）

VII群の遺構群内において最も東側に位置し、D043が近接している。

遺構　長径推定2.5m、短径1.5mを計る楕円形の平面形を呈する遺構である。壁の掘り込みは遺存する部分より推察すれば、箱薬研状を呈している。深さ約2.6mをもって底面に達する。底面は長辺1.2m、短辺0.4mの長方形を呈している。

遺構内にはI層褐色土層、II層黒褐色土層、III層ローム粒混入黒褐色土層、IV層ロームブロック混入暗褐色土層、V層ロームブロック混入黒褐色土層、IV層ローム粒混入褐色土層、VII層灰褐色土層、VIII層ロームブロック混入黄褐色土層、IX層ロームブロック混入褐色土層、X層ロームブロック層、XI層ロームブロック混入青灰色粘土層、XII層青灰色粘土層が堆積している。

遺物を包含する層はない。

23. P006号遺構（図688、図版168－1）

Ⅶ群の遺構群内において南西部分に位置するピット群中に位置する。D052が近接している。

遺構　長辺1.07m、短辺0.5mを計る長方形の平面形を呈する遺構である。壁はかなりの傾斜を呈し0.06m掘り込んで底面に達する。底面は若干の起伏を呈し、踏み固められたような状況は呈していない。

遺構内には暗褐色土層が堆積しているが、遺物を包含していない。

24. P023号遺構（図689、図版168－2）

Ⅶ群の遺構群内において南西部分に位置するピット群中に位置する。D052が近接している。

遺構　長辺1.35m、短辺0.76mを計り、歪を生じている長方形の平面形を呈する遺構である。壁の掘り込みは若干の傾斜を呈して0.2m掘り込んで底面に達している。底面は若干の起伏を呈し、全体に踏み固められたような状況を呈していない。

遺構内にはⅠ層黒褐色土層、Ⅱ層ローム

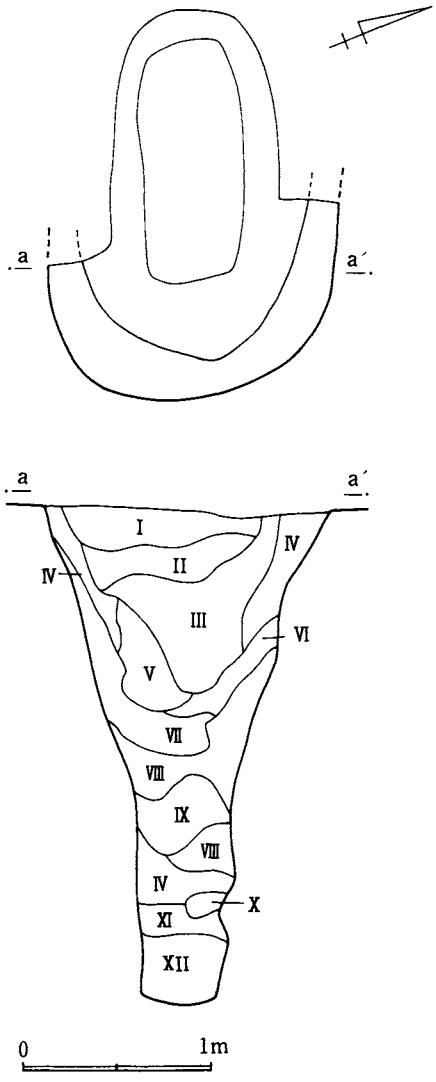


図687　P005号遺構実測図

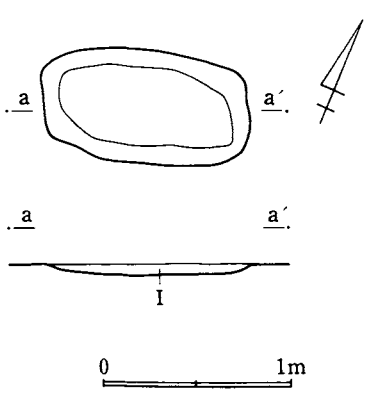


図688　P006号遺構実測図

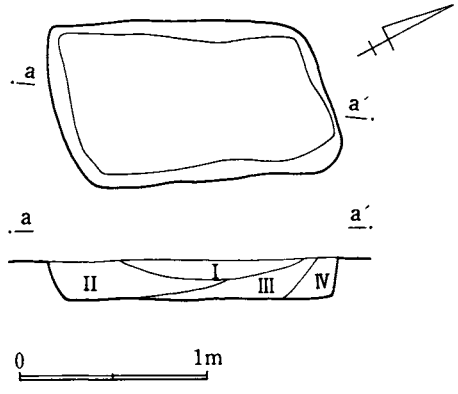


図689　P023号遺構実測図

ック混入黒褐色土層、III層暗茶褐色土層、IV層ロームブロック層が堆積しているが、いずれの層も遺物を包含していない。

25. P024号遺構（図690）

VII群の遺構群内において南西部分に位置するピット群中に位置する。D052が近接している。

遺構　長辺1.7m、短辺0.7mを計る長方形の平面形を呈す遺構である。壁は傾斜を呈して0.3m掘り込んで底面に達する。底面は平坦であるが、全体に踏み固められたような状況ではない。

遺構内にはI層茶褐色土層、II層暗褐色土層、III層ローム粒混入暗褐色土層が堆積しているが、いずれの層も遺物を包含していない。

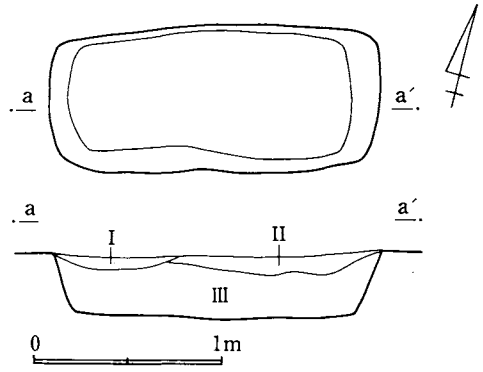


図690　P024号遺構実測図

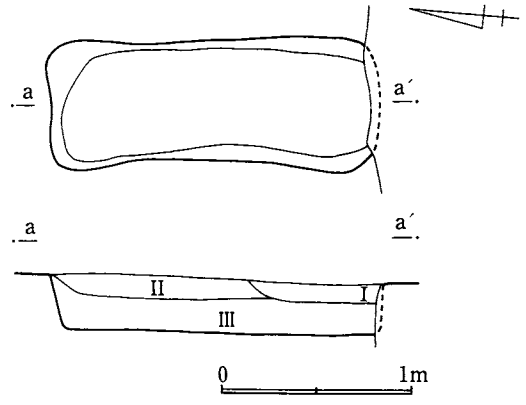


図691　P025号遺構実測図

26. P025号遺構（図691、図版168—3）

VII群の遺構群内において南西部分に位置するピット群中に位置する。D052が近接している。遺構の南側には芋穴状の攪乱を受けている。

遺構　長辺推定1.73m、短辺0.7mを計る長方形の平面形を呈する遺構である。壁は若干の傾斜を呈し0.3m掘り込んで底面に達する。底面は平坦であるが踏み固められたような状況は呈していない。

遺構内にはI層暗褐色土層、II層ロームブロック混入暗褐色土層、III層黒褐色土層が堆積しているが、いずれの層も遺物を包含していない。

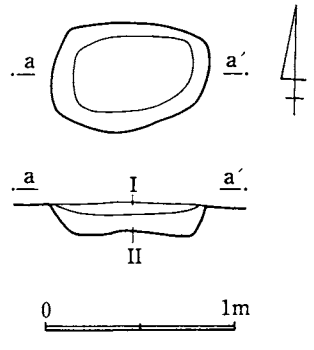


図692　P026号遺構実測図

27. P026号遺構（図692）

VII群の遺構群内において南西部分に位置するピット群中に位置する。ピット群中では最小の

規模である。D052が近接している。

遺構　長径0.83m、短径0.58mを計る楕円形の平面形を呈する遺構である。壁はかなり傾斜をもって0.16m掘り込んで底面に達している。底面は起伏があり、踏み固められたような状況は呈していない。

遺構内にはⅠ層黒褐色土層、Ⅱ層黄褐色土層が堆積しているが、いずれの層も遺物を包含していない。

第9節　第Ⅷ群の遺構と遺物

歴史時代の第Ⅷ群は、竪穴住居跡8軒で構成される群で、T－4、5、U－4～6の地域において検出した。

第Ⅷ群は、標高11mの段丘上に立地しており、遺跡内で北東部分に位置している。北海道遺跡の東側は未調査地区や調査対象地区外も位置するため、群はこれらの地域にも広がっている可能性が充分にある。

群はかなり南北に細長い分布を呈しているが、北側に纏りの中心があるようであるが、南側に1軒これとは隔絶したかの状況で位置している。東側地域の状況によっては第Ⅱ群、第Ⅵ群と同様な群に広がる可能性があることを付け加えておく必要があろう。

先にも指摘したように標高11mの地域に立地しているのは最も低位置であり、丁度千葉第1段丘から第2段丘に移行する地域でもあるため、集落立地としては他群に見られない状況を呈していると言って良いであろう。北側には新川方面より入り込む須久茂谷津が迫っているが、その比高差は約2mである（図693）。

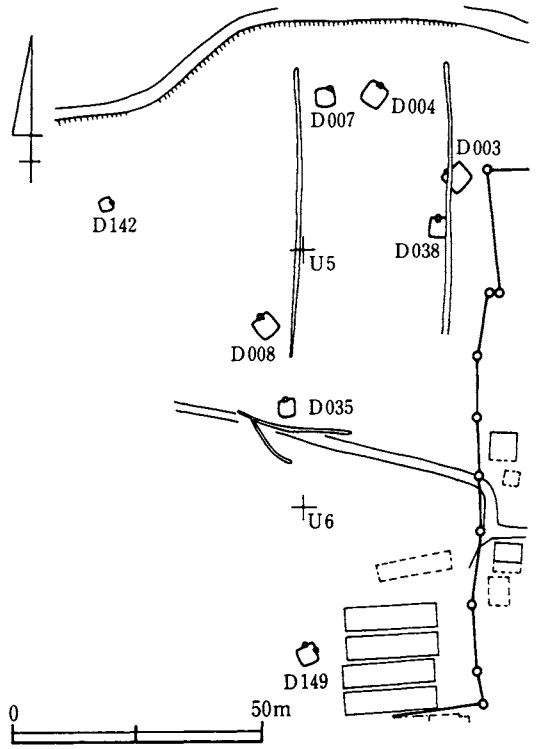


図693 歴史時代第Ⅷ群遺構分布状況図

1．D003号遺構（図694～696、図版173－1・2、178）

Ⅷ群の住居群内において北側に位置し、地区界に近接している。古墳時代中期Ⅳ群に属する

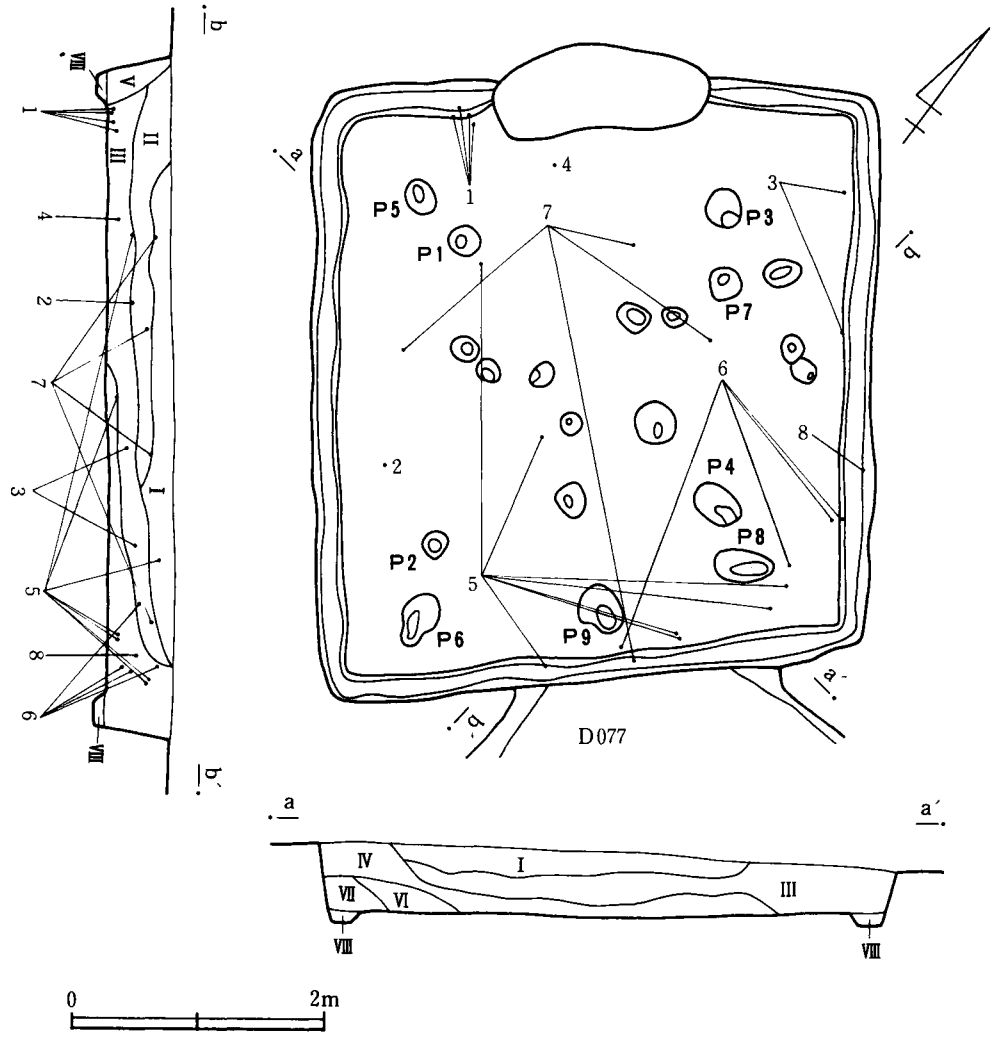


図694 D003号遺構実測図

D077を重複切断して構築している。緩斜面に構築している関係で壁高は一定していない。

遺構 北壁4.41m、東壁4.37mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に北壁では0.39m、南壁では0.57mを掘り込んでいる。壁の直下には幅0.22m、深さ0.10mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。床面には小ピットが20か所認められるが、位置、規模等から柱穴と考えられるのはP_1～P_4である。径0.25m、深さ0.58mを計る。径0.24m、深さ0.35mを計るP_5～P_8がP_1～P_4に接近して位置しており、柱穴に付属するものと考えられる。南壁中央部に近接して径0.34m、深さ0.26mを計るP_9を検出した。その他の小ピットについては性格は不明である。

カマド 北壁中央部を若干掘り込んで、黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土の貼り込みは2層上に行われ主として袖部を形成するものであり、煙道部などについては明確でない。

天井部は遺存しない。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層ローム粒混入黒色土層、Ⅲ層ローム粒混入黒褐色土層、Ⅳ層暗茶褐色土層、Ⅴ層褐色土層、Ⅵ層黒褐色土層、Ⅶ層ローム粒混入暗茶褐色土層、Ⅷ層茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上出土は少なく、各層から小破片の状態で出土している。

出土遺物　遺物は、甕、甑、坏、高坏形土器と石製品がある。甕形土器は1～3である。1は口縁が緩やかにしかも水平近く外反する口縁部破片である。2は口唇部に特徴のある口縁部破片である。3は底部破片である。甑形土器は4の底部破片で、単孔である。坏形土器は5、6で、いずれも須恵器である。高坏形土器は7の脚部破片で赤彩される。石製品は8の礫片である。熱を受けたため表面の剝落した部分が認められる。用途は不明、安山岩である。

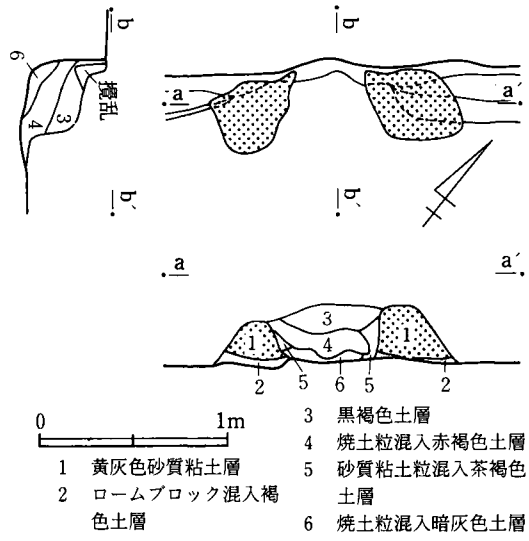


図695 D003号遺構カマド実測図

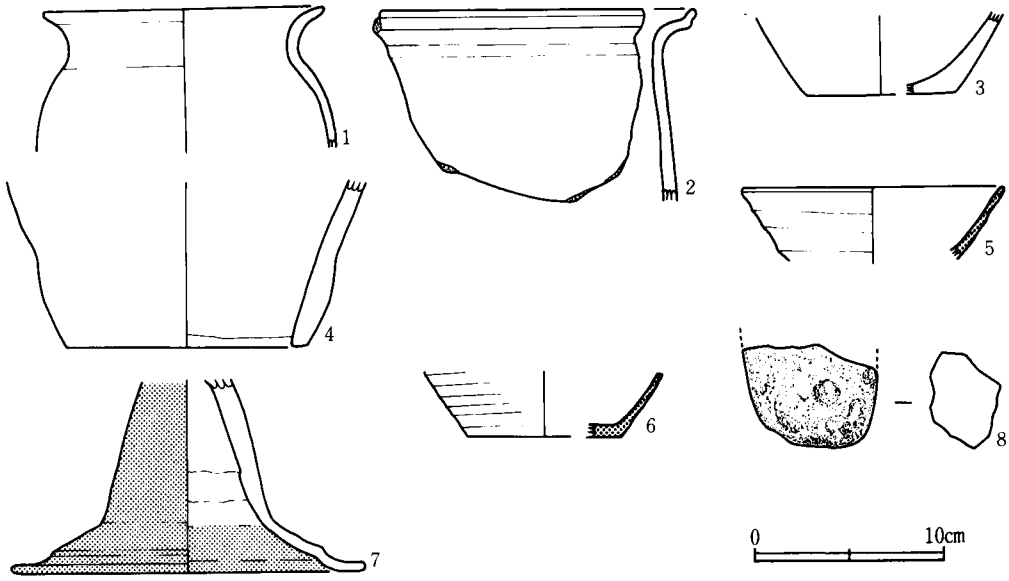


図696 D003号遺構出土遺物実測図

D003出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	(15.0)	—	口縁部～胴部½	ヨコナデ	—	やや堅緻	黒褐色	

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
2	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ	砂粒 雲母	堅緻	茶褐色	
3	甕	—	—	(7.9)	胴部～底部1/3	—	砂粒	堅緻	(内)茶褐色 (外)黒褐色	
4	甑	—	—	12.8	胴部 1/4	—	小石 雲母	堅緻	黒褐色	
5	坏	—	14.0	—	1/4	—	砂粒	やや堅緻	灰色	
6	坏	—	—	(8.25)	底部 1/4	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	灰色	
7	高坏	—	—	18.8	脚部 1/2	磨き	砂粒	堅緻	茶褐色	赤彩

2．D004号遺構（図697～699、図版174－1・2）

Ⅷ群の住居群内において北側に位置し、D007が近接している。

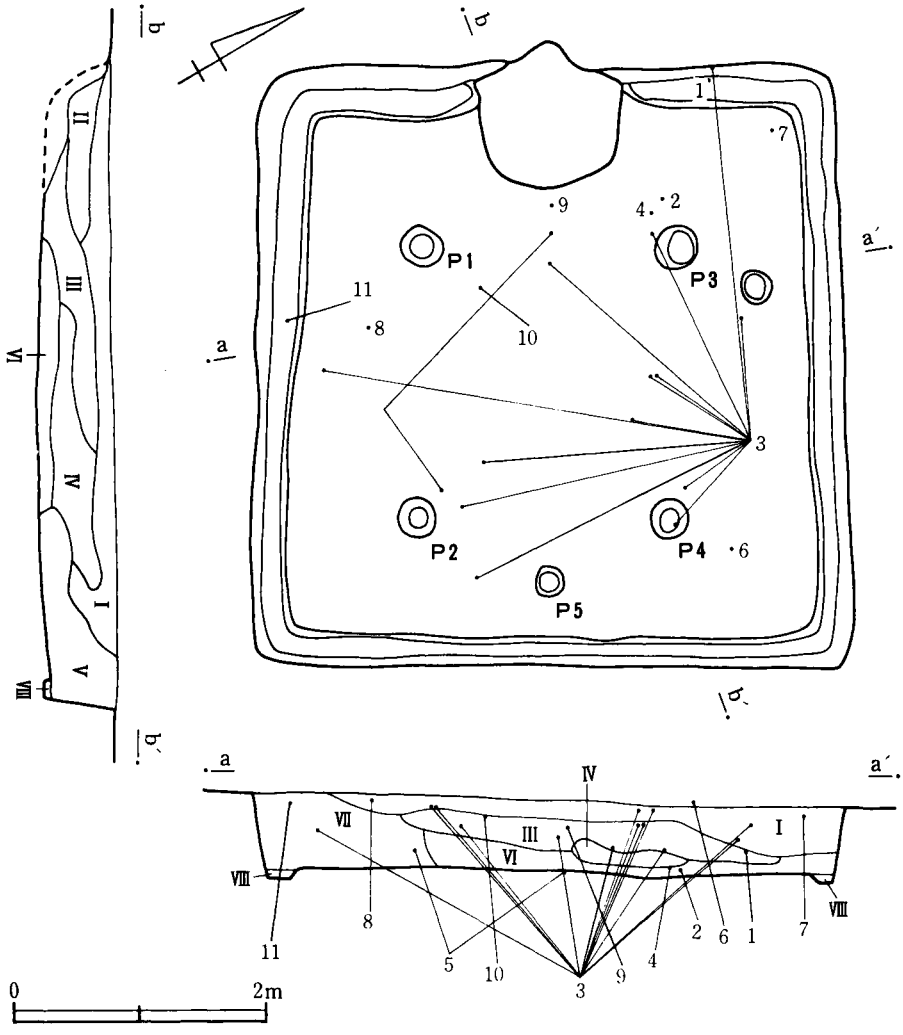
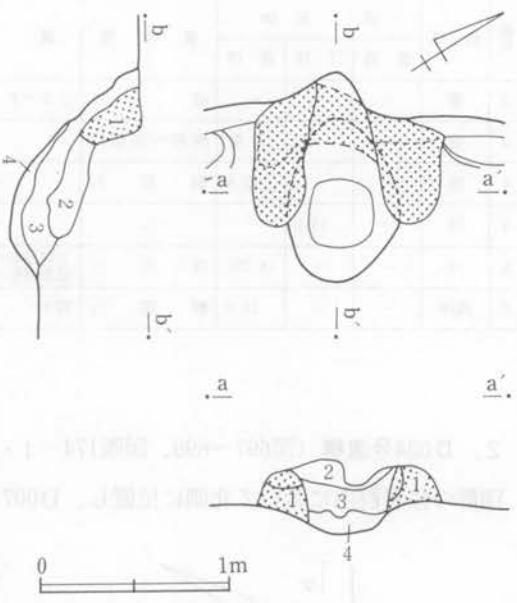


図697 D004号遺構実測図

遺構　西壁4.35m、北壁4.59mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.59m掘り込んでおり、直下に幅0.28m、深さ0.10mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は対角線上に配置するP₁～P₄を検出した。いずれも2段に掘り込んでおり、径平均0.30m、深さ平均0.58mを計る。東壁中央部に近接して、径0.22m、深さ0.25mを計るP₅を検出した。

カマド　西壁中央部を三角形に0.20m掘り込んで、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土は袖部から煙出し部まで一体化して貼り込んでおり、天井部も遺存している。火袋に相当する袖は焼土化が著しく、火床部は深さ0.15mの擂鉢状で、煙道部はやや緩やかな傾斜を呈している。



1　黄灰色砂質粘土層
2　黒褐色土層
3　褐色土層
4　若干の炭化粒混入褐色土層

図698　D004号遺構カマド実測図

遺物出土状況　I層黒色土層、II層ローム粒混入黒褐色土層、III層ローム粒混入黒褐色土層、

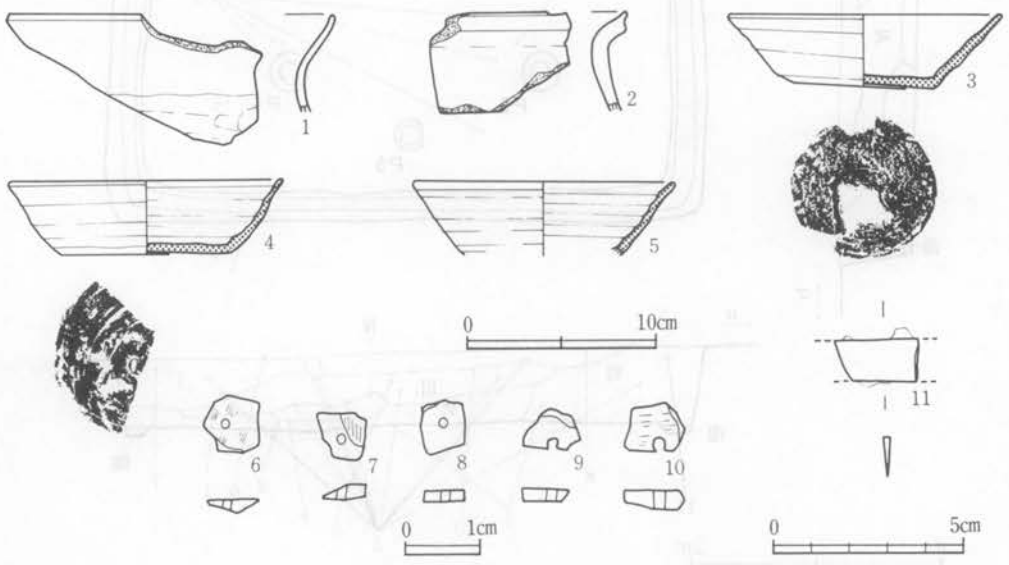


図699　D004号遺構出土遺物実測図

IV層黒褐色土層、V層暗茶褐色土層、VI層ローム粒混入暗茶褐色土層、VII層褐色土層、VIII層茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上出土は少なく、各層より小破片の状態で出土している。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器と石製品、鉄製品がある。甕形土器は1、2でいずれも口縁部の破片である。坏形土器は3～5で、体部が大きく開く形状を呈す。石製品は6～10で、いずれも滑石製の臼玉未成品である。鉄製品は11の刀子の残片である。

D004出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ	雲母	堅緻	茶褐色	
2	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ	小石	堅緻	茶褐色	
3	坏	3.7	(14.5)	7.6	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	小石	やや堅緻	灰色	
4	坏	3.8	(14.5)	8.95	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	小石	堅緻	灰色	
5	坏	—	14.1	—	½	—	小石	堅緻	灰色	

3．D007号遺構（図700、701、図版174－3、178）

VIII群の住居群内において最も北側に位置し、D004が近接している。北海道遺跡において最も低標高に位置する。

遺構　北壁3.22m、東壁3.25mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜をもって0.16m掘り込んで床面に達している。床面は全体に軟弱な状況を呈する。壁溝、柱穴等の施設は検出できなかった。

北壁東寄りの位置にカマド状の焼土が若干認められたが、調査の結果壁への掘り込みや粘土の貼り込みが検出できなかったため、カマドでないことが判明した。よって本住居にはカマドはない。

遺物出土状況　I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層茶褐色土層が堆積している。遺物は各層より出土しているが、床面上出土は少なく、また小破片がほとんどである。

出土遺物　遺物は、甕、蓋形土器と鉄製品、石製品がある。甕形土器は1で木葉痕のある底部破片である。蓋形土器は2で擬宝珠状のつまみが付く。鉄製品は3、4で3は手斧、4は用途不明の鉄製品である。5は滑石製の剣形品で小孔があく。

D007出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	6.1	胴部～底部½	—	砂粒	堅緻	茶褐色	木葉痕
2	蓋	—	(18.8)	4.3	⅔	天井部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	硯に使用

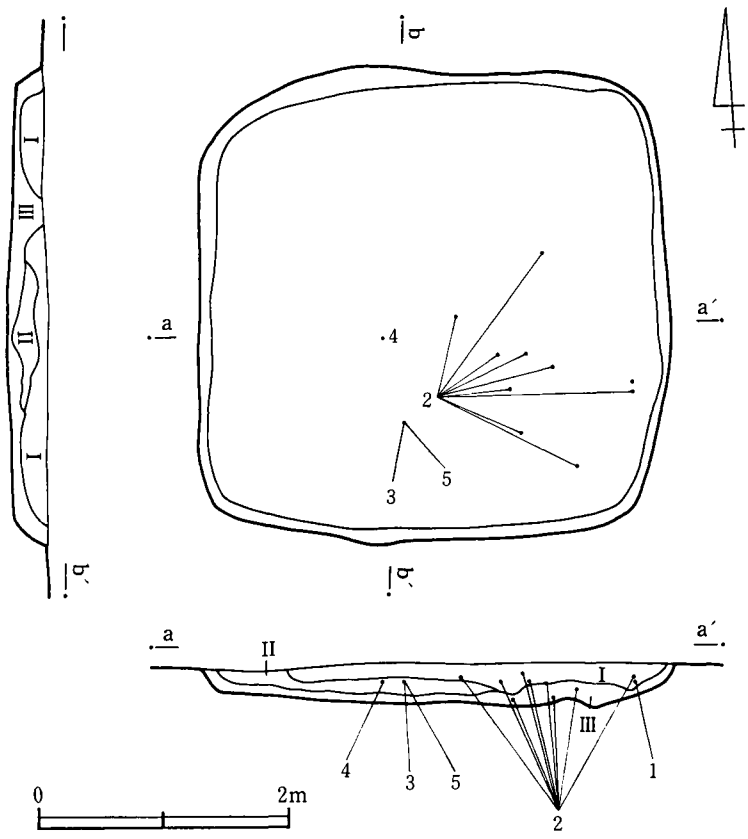


図700 D007号遺構実測図

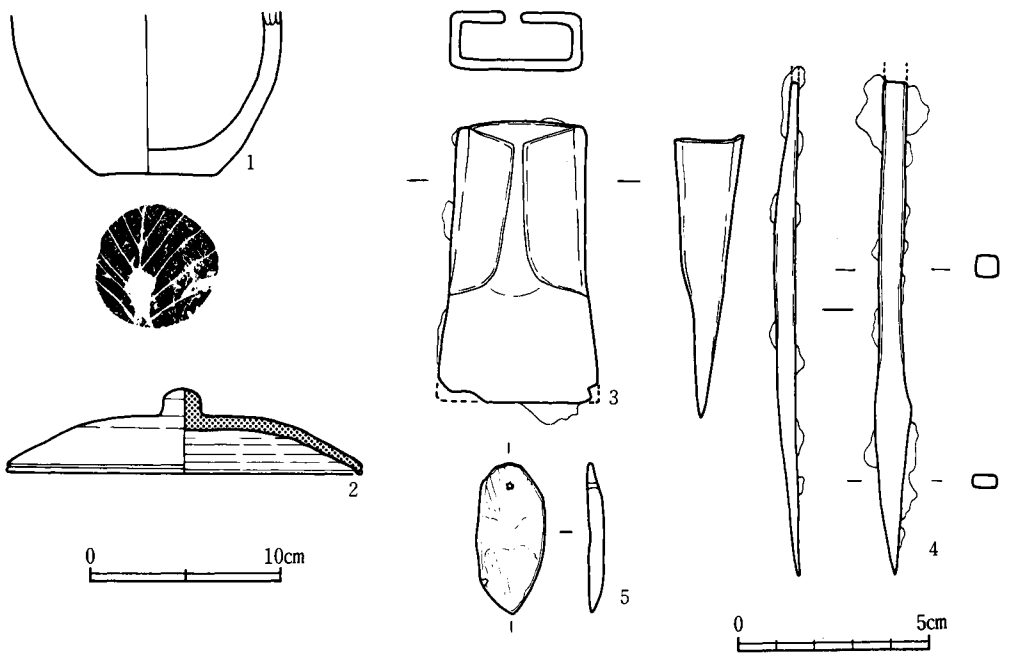


図701 D007号遺構出土遺物実測図

4．D008号遺構（図702～704、図版175－1・2）

Ⅷ群の住居群内においてほぼ西側に位置し、D035が近接するものの約13mの距離を有している。

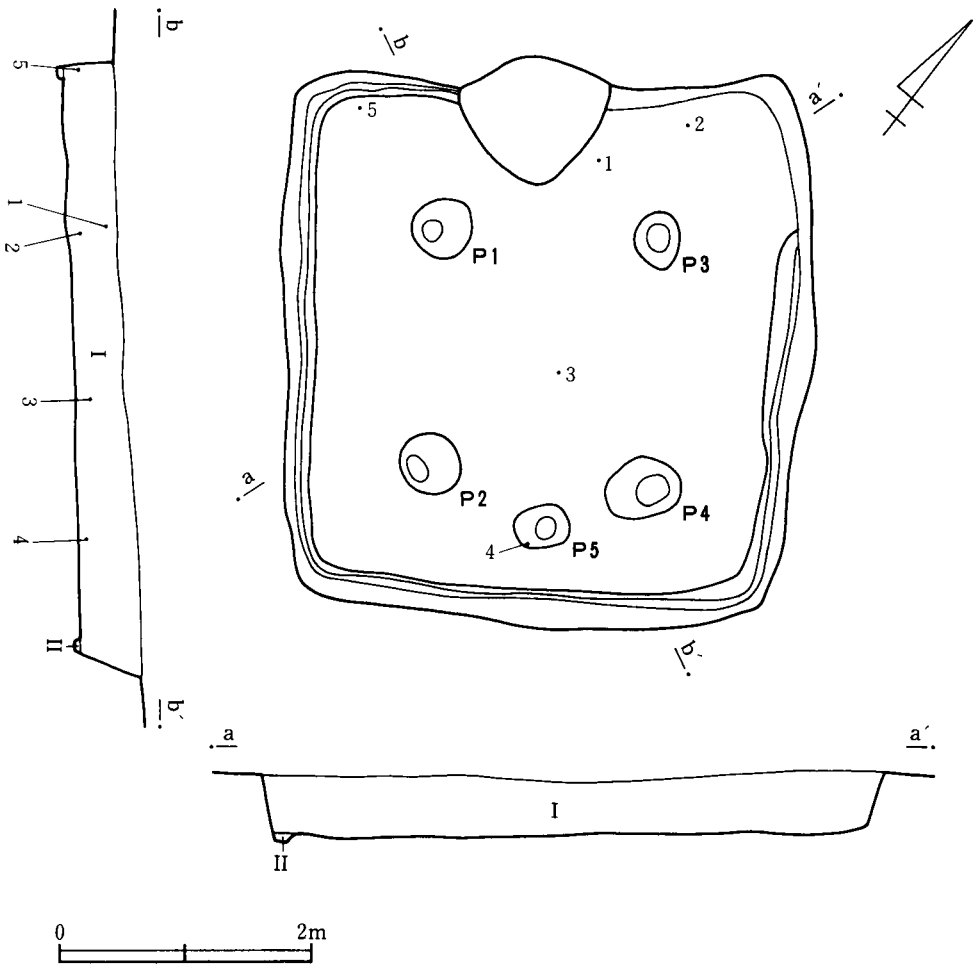
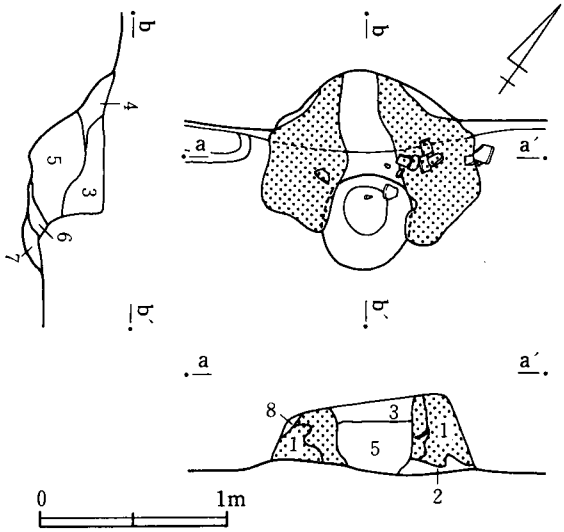


図702 D008号遺構実測図

D008出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	7.15	(11.8)	12.5	½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	木葉痕
2	甕	—	(20.4)	—	口縁部のみ	ヨコナデ	雲母	堅緻	赤褐色	
3	甕	—	—	(15.8)	底部 ⅓	—	小石 雲母	堅緻	灰色	
4	甕	—	—	5.3	底部 ½	—	—	堅緻	(内)茶褐色 (外)黒褐色	
5	坏	3.45	(14.6)	8.7	⅓	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰色	

遺構　北壁3.80m、東壁4.10mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はやや傾斜を呈し0.48m掘り込んでいる。住居南側の壁直下には幅0.17m、深さ0.06mの壁溝が認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は対角線上にP_1～P_4を検出した。径平均0.48m、深さ平均0.46mを計る。また、南壁中央に近接して径0.33m、深さ0.26mを計るP_5を検出した。



1　黄灰色砂質粘土層　　5　焼土粒混入黄褐色土層
2　砂質粘土粒混入褐色土層　6　赤褐色土層
3　黒褐色砂質土層　　7　ロームブロック層
4　焼土粒混入黒褐色土層　8　黒色土層

図703　D008号遺構カマド実測図

カマド　北壁中央部を三角形に0.30m掘り込んで、黄灰色砂質粘土をもって構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙道部まで一体化している。火袋に相当する袖は焼土化が著しく、火床部は深さ0.10mの擂鉢状で、煙道部は急激な傾斜を呈している。天井部は遺存していない。

遺物出土状況　I層黒褐色土層、II層茶褐色土層が堆積している。いずれも床面より上方から出土しているが稀少である。

出土遺物　遺物は、甕、坏形土器がある。甕形土器は1～4で1は木葉痕のある小形なものである。2は「く」字状に外反する口縁部破片である。3は広口甕の底部と思われる。4は小形なものであるが俄かに甕と断じがたい。坏形土器は5の須恵器の体部破片である。

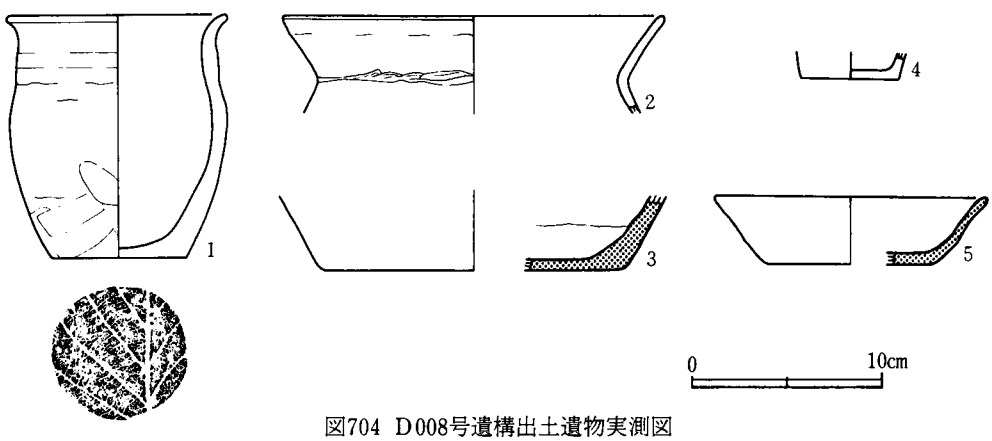


図704　D008号遺構出土遺物実測図

5．D035号遺構（図705～707、図版175－3）

Ⅷ群の住居群内においてほぼ中央部に位置し、D008が近接している。古墳時代中期Ⅳ群に属するD036を重複切断して構築している。遺構の南側は覆土全体の25%に相当する部分が攪乱を受けており、したがって南壁側の遺存状況は悪い。

遺構　北壁2.77m、東壁3.64mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はやや傾斜を呈し0.18m掘り込んでおり、直下に幅0.20m、深さ0.04mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。床面は北側を中心として堅緻な状況を呈している。柱穴は検出できなかった。

カマド　北壁中央部よりやや東寄りの壁を0.25m掘り込んで構築するが、明瞭な粘土の貼り込みは検出できなかった。

遺物出土状況　Ⅰ層黒褐色土層、Ⅱ層茶褐色土層が堆積する。遺物は稀少であるが、床面上を中心として出土している。またカマド内出土もある。

出土遺物　遺物は、鉢、坏形土器がある。鉢形土器は1で、体部が直線的に大きく開く形状を呈し、底部には高台が付けられるものの磨滅が著しい。

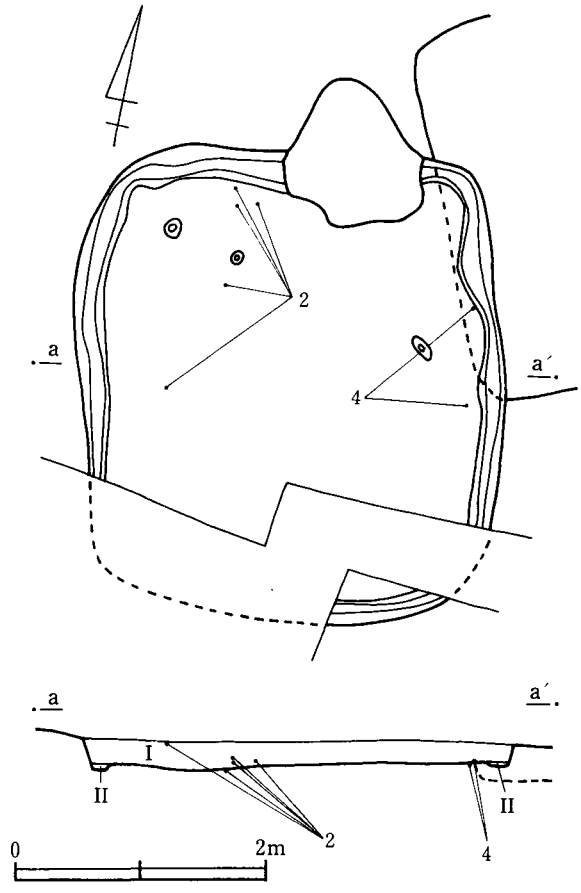


図705　D035号遺構実測図

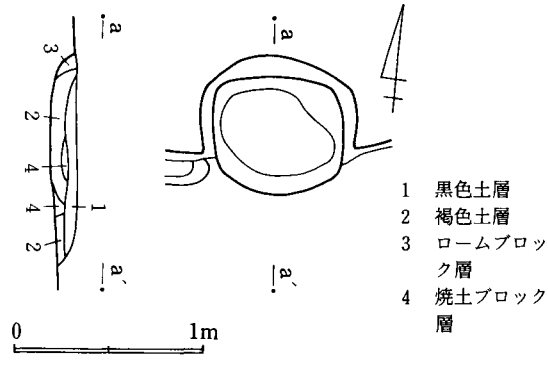


図706　D035号遺構カマド実測図

D035出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	鉢	12.6	(27.0)	—	¼	体部ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	内黒

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
2	坏	2.75	11.0	5.1	½	—	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
3	坏	2.75	11.0	5.0	½	—	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
4	高台付坏	—	—	8.5	高台部のみ	—	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り

坏形土器は2～4で、2、3は小形の薄手のもので、4は「ハ」字状に大きく開く高台を有するものである。

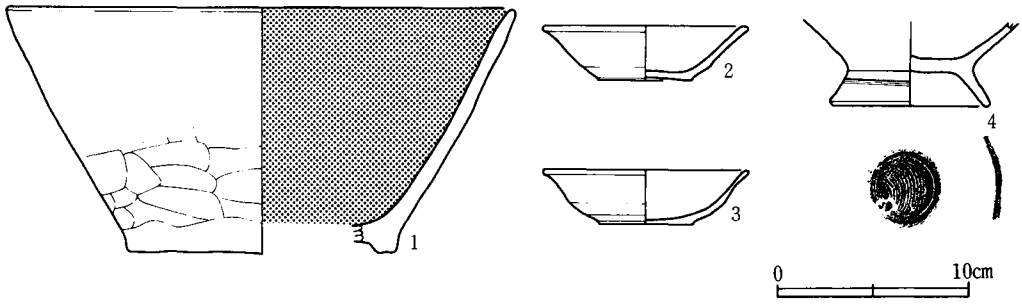


図707 D035号遺構出土遺物実測図

6．D038号遺構（図708～710、図版176－1・2、178）

Ⅷ群の住居群内において北側に位置し、D003が近接している。遺構の東側は溝により攪乱を受けているものの床面までは達していないため規模等は充分に把握できる。

遺構 北壁3.87m、東壁4.10mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.62m掘り込んでおり、直下に幅0.17m、深さ0.03mの壁溝がカマド構築部分を除いて認められる。

D038出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	29.5	22.5	5.6	完形	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒 雲母	堅緻	黒褐色	
2	甕	—	22.0	—	½	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒 雲母	やや堅緻	赤褐色	
3	甑	—	(24.9)	—	⅓	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
4	坏	—	(14.0)	—	¼	—	砂粒	堅緻	茶褐色	
5	坏	—	—	(8.05)	底部 ¼	底部回転ヘラ削り	小石	堅緻	灰色	
6	鉢	2.8	7.6	6.8	ほぼ完形	—	砂粒	堅緻	茶褐色	手捏
7	高坏	—	—	—	接合部のみ	ヘラナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	

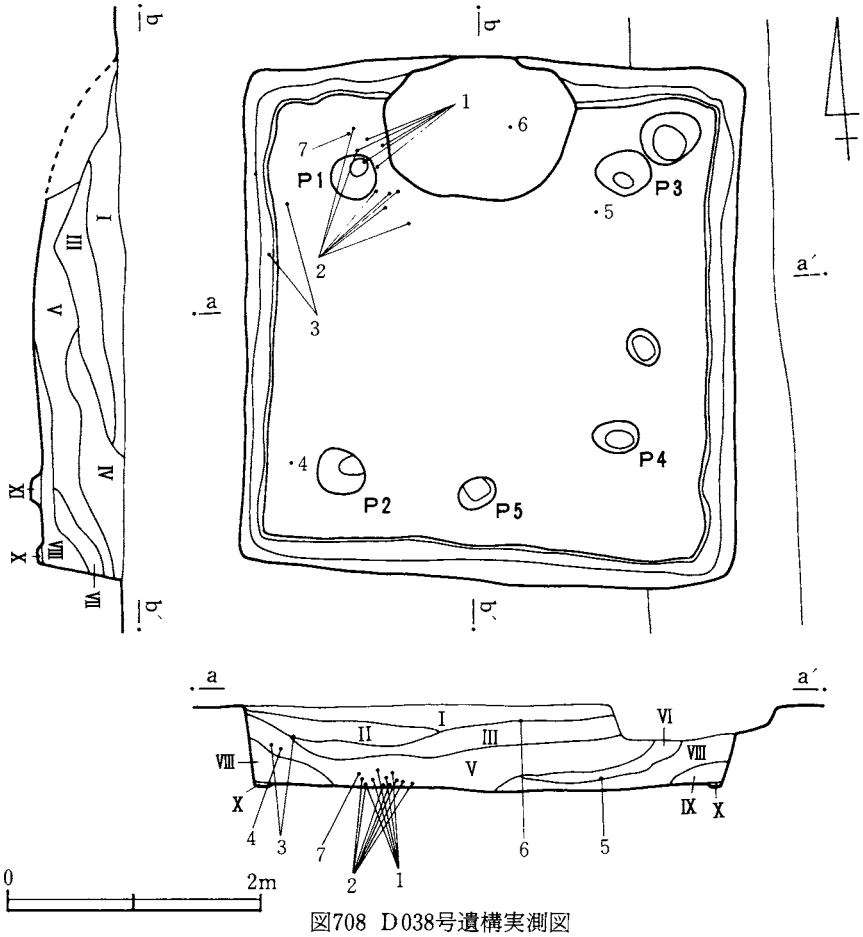


図708 D038号遺構実測図

床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上にP_1～P_4を検出した。径平均0.36m、深さ平均0.45mを計る。南壁中央部に近接して径0.23m、深さ0.22mを計るP_5を検出した。その他、2か所にピットを検出したが、性格は不明である。

カマド　北壁中央部を0.33m掘り込んで、黄灰

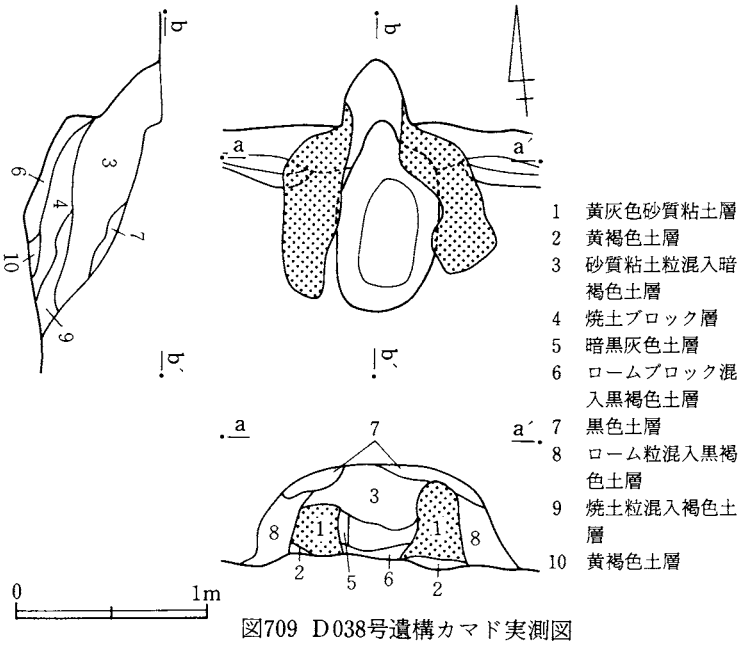


図709 D038号遺構カマド実測図

色砂質粘土で構築している。粘土の貼り込みは袖部から煙道部まで行われている。火床部は深さ0.09mの掘り込みで、煙道部はやや急激な傾斜を呈している。

遺物出土状況　Ⅰ層ローム粒混入黒色土層、Ⅱ層ロームブロック混入褐色土層、Ⅲ層黒色土層、Ⅳ層黒褐色土層、Ⅴ層褐色土層、Ⅵ層ローム粒混入褐色土層、Ⅶ層ロームブロック混入黒色土層、Ⅷ層ローム粒混入黒褐色土層、Ⅸ層ロームブロック混入黒褐色土層、Ⅹ層茶褐色土層、Ⅺ層暗茶褐色土層が堆積する。遺物は稀少であるが、カマド周辺部を中心とする床面上から出土しており、カマド内出土も認められる。

出土遺物　遺物は、甕、甑、坏、鉢、高坏形土器がある。甕形土器は1、2で口縁部が「く」字状に外反するもので胴部はヘラ削りされる。甑形土器は3で、口縁部は短かく胴部は直線的である。坏形土器は4、5でいずれも体部は直線的である。鉢形土器は6で手捏になるものである。高坏形土器は7で脚部破片である。

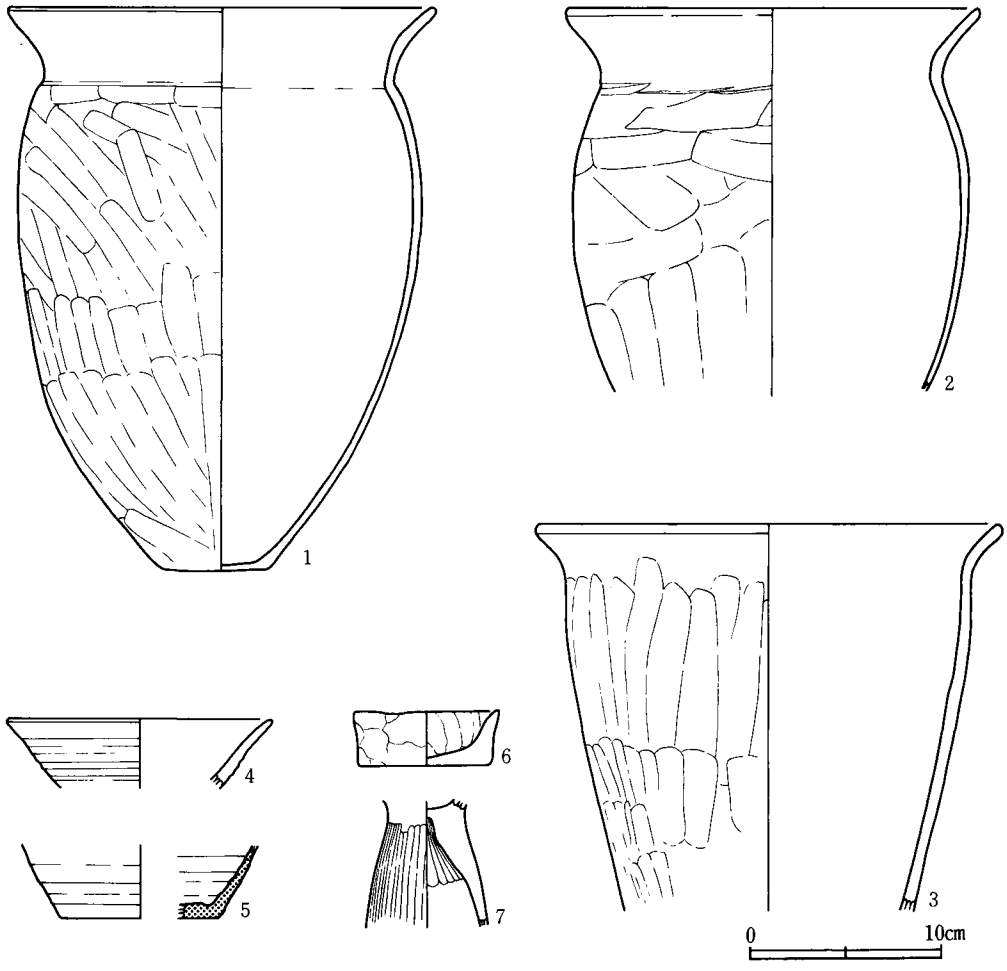


図710　D038号遺構出土遺物実測図

7．D142号遺構（図711～713、図版176－3、178）

Ⅷ群の住居群内において最も西側に位置している。D008が最も近接するが約37mの距離を有している。遺構はかなり激しく攪乱を受けているが床面に達することはない。

遺構　北壁2.56m、東壁2.89mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.28m掘り込んでおり、直下に幅0.10m、深さ0.06mの壁溝が北壁部分を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は検出できなかったが、床面中央部に径0.20m、深さ0.17mを計るP1を、南東コーナー部に近接して径0.55m、深さ0.12mのP2、P3を検出した。床面の中央部より東側に炭化物を多量に検出でき、また北東壁コーナー部分では多量の焼土が検出できたため、本住居は焼失したものと考えられる。

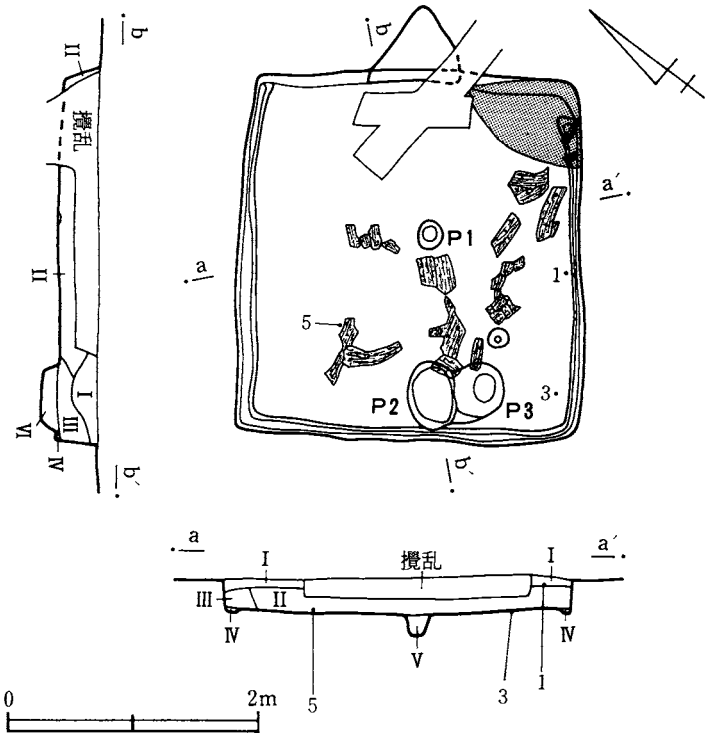
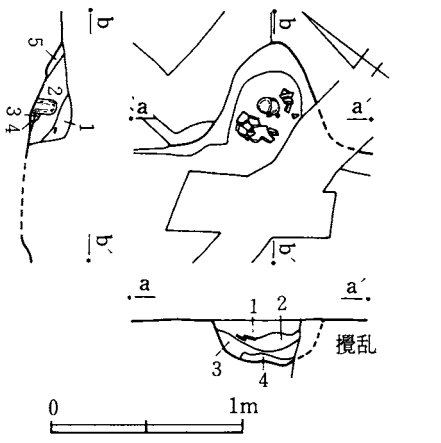


図711 D142号遺構実測図

カマド　北壁中央部を0.56m掘り込んで構築していたものと考えられるが攪乱のため、袖、天井部等は遺存せず、充分把握することはできない。



1　黒色土層　　3　焼土層
2　焼土粒・炭化粒混入黒褐色土層　　4　炭化粒混入黒褐色土層
5　黒褐色土層

図712 D142号遺構カマド実測図

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層ローム粒混入黒褐色土層、Ⅳ層茶褐色土層、Ⅴ層暗茶褐色土層、Ⅳ層ローム粒混入暗茶褐色土層が堆積するが攪乱が激しいため、遺物出土量は少なく、Ⅰ層と床面上、あるいはカマド内より少量出土した程度である。

出土遺物　遺物は、坏形土器と石製品、鉄製品がある。坏形土器は1、2で、1は大きく開く体部を

呈している。2は体部破片である。石製品は3、4で、3は流文岩製の砥石である。4は滑石製の双孔円板で径 3.30 cm を計り、0.15 cm の小孔が2か所にあく。鉄製品は5の角棒状を呈するもので用途は不明である。

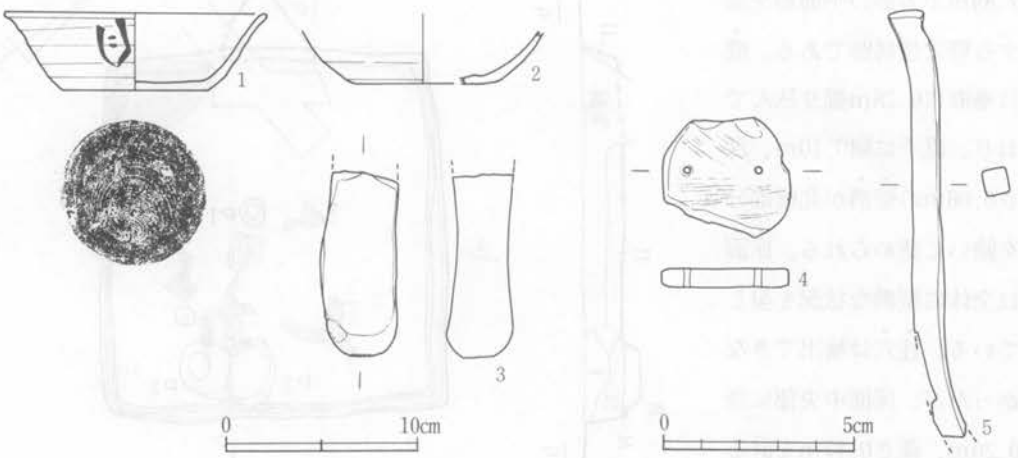


図713 D142号遺構出土遺物実測図

D142出土土器一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	坏	4.05	13.8	7.6	完形	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	やや堅緻	茶褐色	墨書判読不明 糸切り
2	坏	—	—	(8.2)	¼	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り

8．D149号遺構（図714～717、図版177－1・2、178）

Ⅷ群の住居群内において南側に位置し、最も近接するD035とは45mの距離を有している。遺構の東南部分は溝による攪乱を受けているため遺存していない。修改築が行われたことが2か所のカマドより推察できる。

遺構　東壁3.34m、南壁3.40mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.36m掘り込んでおり、直下に幅0.26m、深さ0.05mの壁溝が認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈しており、中央部に粘土塊を検出した。柱穴と考えられるピットは検出できなかったが、カマドA脇に径0.20m、深さ0.20mを計るP₁、西壁中央部に近接して径0.45m、深さ0.12mを計るP₂を検出した。また東南コーナー部分には径0.50mを計る浅い擂鉢状の掘り込みを呈するP₃を検出した。

カマド　東壁と北壁の2か所に検出した。旧時のカマドBは北壁中央部を三角形に掘り込んで構築しているが、修改築に伴って取り毀されているが、部分的に粘土の貼り込みが認められ

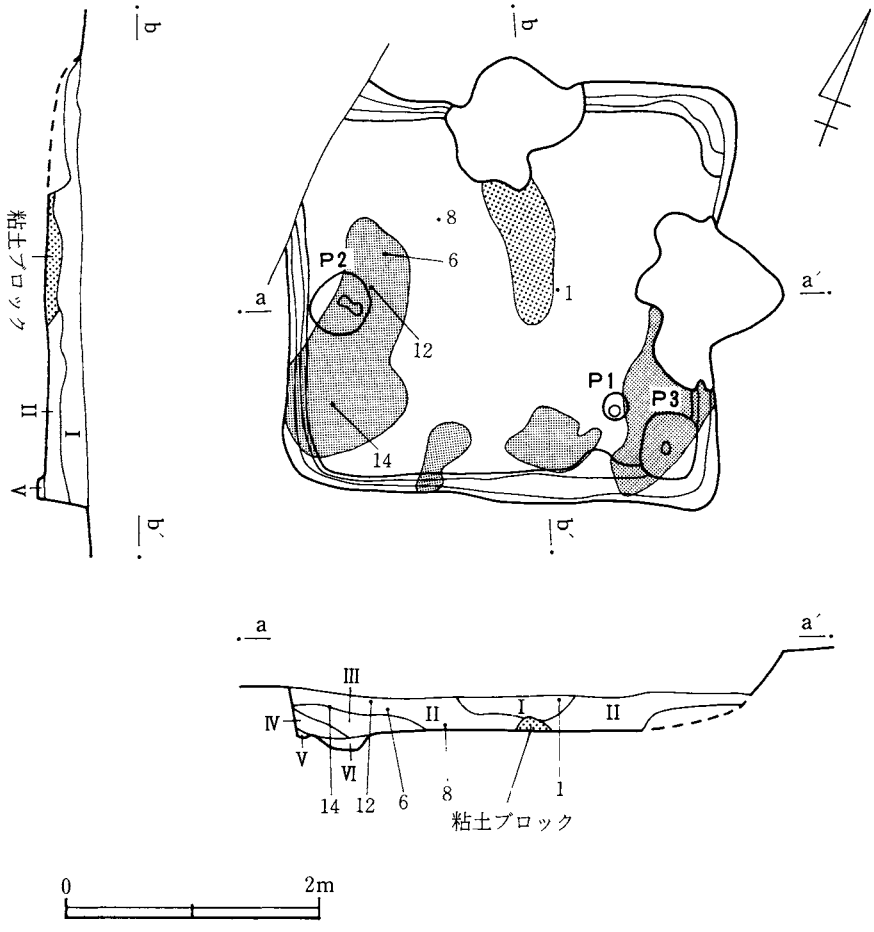


図714 D149号遺構実測図

る。掘り込みが大きく残っていたためか、廃絶後住居内にカマド構築材が流れ込んでいる。住居廃絶時まで使用していたカマドAは東壁中央部を三角形に0.43m掘り込んで、黄灰色砂質粘土をもって構築しているが、粘土の貼り込みは袖部の一部に認められるのみで、良好な状況を呈していない。火床部は深さ0.15mを計る

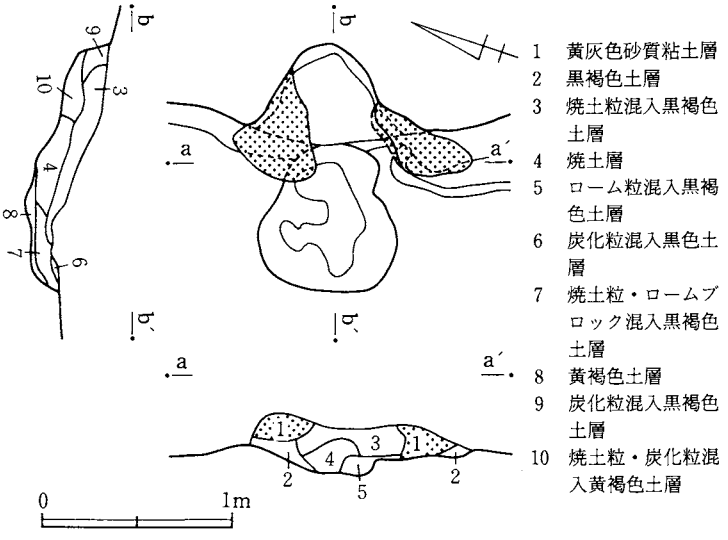
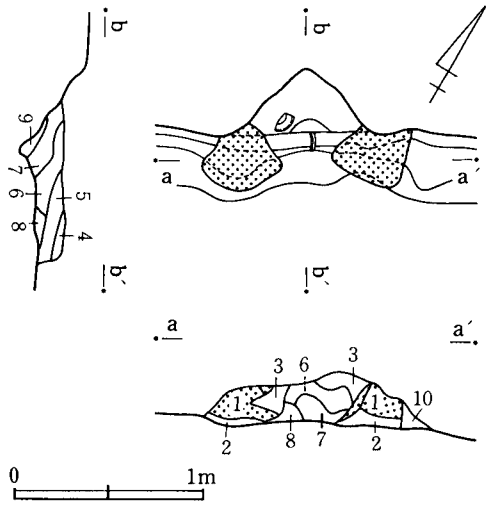


図715 D149号遺構Aカマド実測図

楕円形の掘り込みを呈している。

遺物出土状況　Ⅰ層黒色土層、Ⅱ層黒褐色土層、Ⅲ層ローム粒混入黒褐色土層、Ⅳ層褐色土層、Ⅴ層茶褐色土層、Ⅵ層暗茶褐色土層が堆積する。遺物は各層から小破片の状態で出土している。またカマド内の出土も認められる。

出土遺物　遺物は、甕、坏、皿形土器と石製品、鉄製品がある。甕形土器は1、2で、口唇部に特徴のある口縁部破片である。坏形土器は3～15で、口径12.5cm前後を計り、体部は大きく開く形状を呈す。11、12は須恵器、13～15は墨書のある破片である。皿形土器は16の高台を有する底部の破片である。石製品は17の凝灰岩製の砥石残片である。鉄製品は18の手鎌である。右端



1　黄灰色砂質粘土層
2　黒褐色土層
3　焼土粒混入黒褐色土層
4　砂質粘土粒混入黒褐色土層
5　焼土粒・炭化粒混入黒褐色土層
6　焼土層
7　焼土粒混入黄褐色土層
8　黄褐色土層
9　炭化粒・ローム粒混入黒褐色土層
10　炭化粒混入黒褐色土層

図716　D149号遺構Bカマド実測図

D149出土土器一覧

番号	器種	法量 cm 器高	口径	底径	遺存度	調整	胎土 混入物	焼成	色調	備考
1	甕	—	(19.6)	—	破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	
2	甕	—	(16.6)	—	破片	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
3	坏	4.0	12.15	7.6	¾	下端静止ヘラ削り 底部多方向ヘラ削り	雲母	堅緻	茶褐色	
4	坏	4.1	(12.2)	6.9	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
5	坏	4.1	(12.8)	(7.4)	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
6	坏	4.2	12.45	5.25	½	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	雲母	堅緻	(内)黒褐色 (外)茶褐色	糸切り
7	坏	4.0	(12.6)	(7.0)	⅓	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
8	坏	—	(13.2)	—	¼	—	砂粒	堅緻	黒褐色	
9	坏	3.9	(14.4)	(7.8)	¼	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
10	坏	3.3	(12.8)	(6.6)	¼	下端静止ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
11	坏	—	—	(8.2)	⅓	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	灰褐色	
12	坏	3.9	(12.2)	6.2	¼	下端静止ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
13	坏	—	—	6.2	底部のみ	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「冨」
14	坏	—	—	(9.2)	破片	下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書判読不明 内面磨き
15	坏	—	—	—	破片	—	—	堅緻	茶褐色	墨書判読不明
16	高台付皿	—	—	—	高台部のみ	—	砂粒	やや堅緻	黒褐色	糸切り、内面磨き

の一部は欠損するものの遺存状況は良好である。左端には木質が付着している。

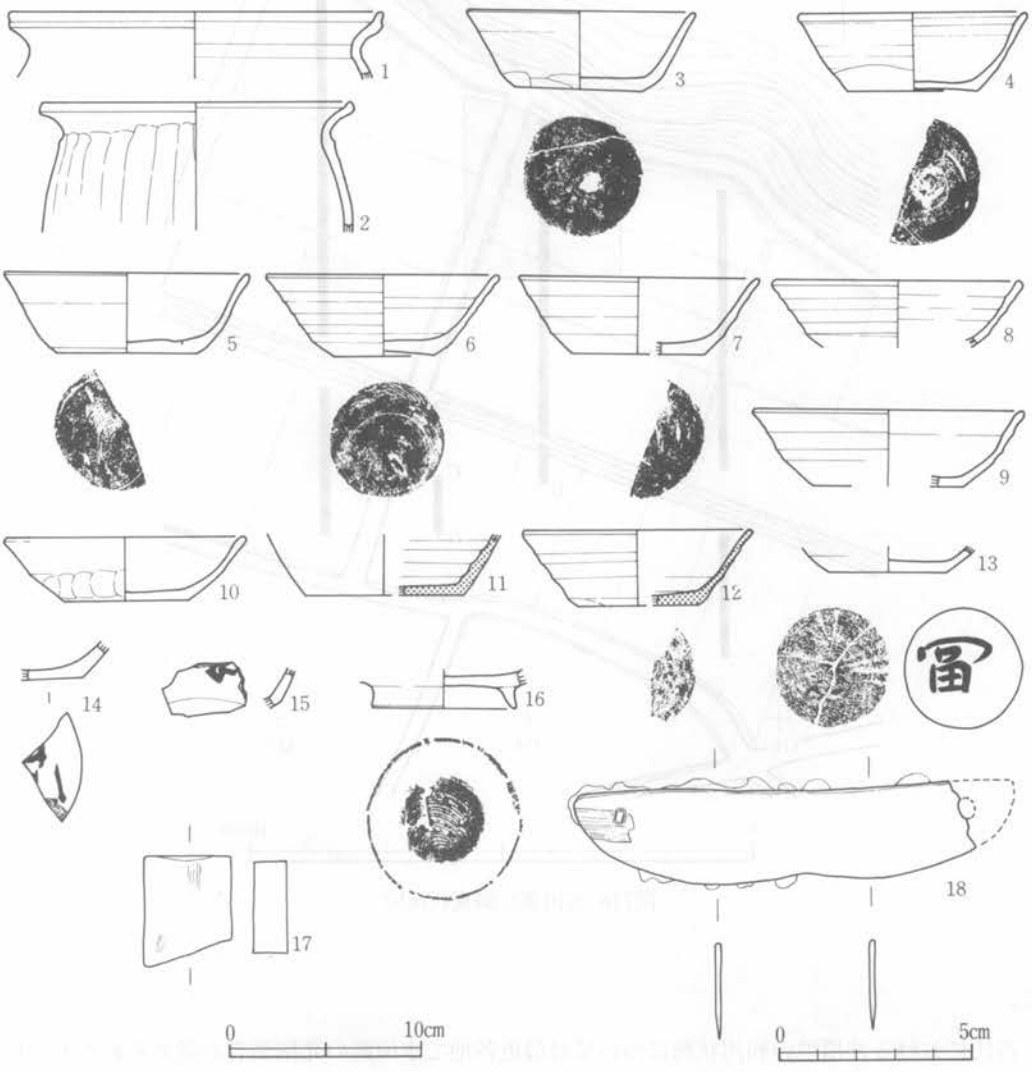


図717　D149号遺構出土遺物実測図

第10節　その他の遺構と遺物

その他の遺構と遺物としてとりあげるのは、権現後遺跡と北海道遺跡を分離するような形で新川方面より入り込む須久茂谷津の開口部近くの調査についてである。

権現後遺跡や北海道遺跡においては、弥生時代から奈良、平安時代に至るまでの集落が台地上に展開しているところであり、かなり集落構造については資料的に豊富になりつつある状況であるが、実際の集落を推持するうえで当然なこととして経済基盤の実態が問われることにな

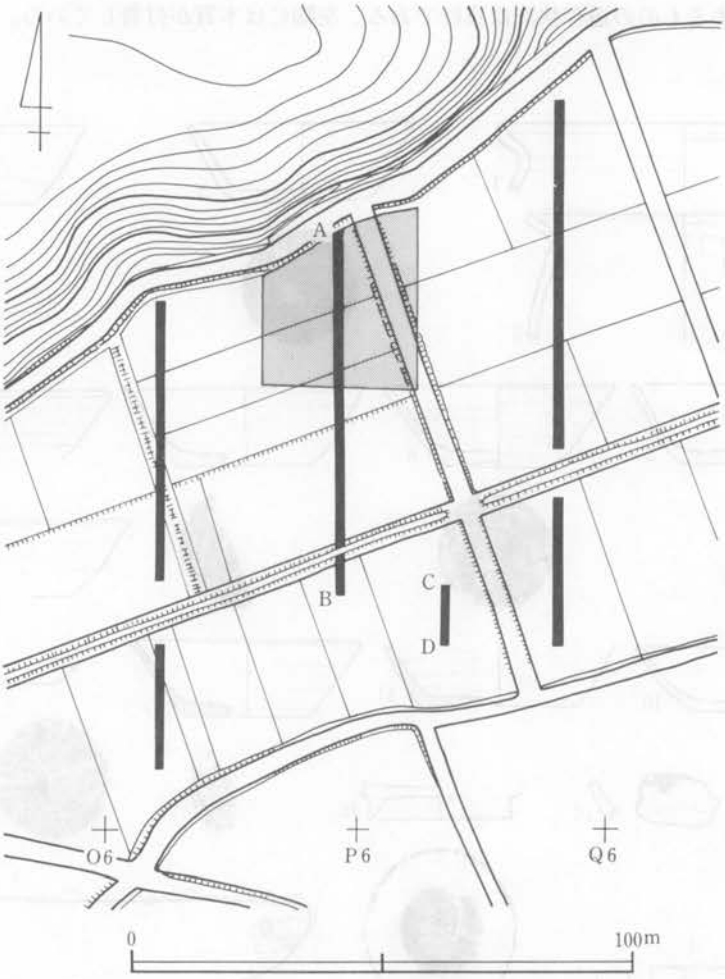


図718 水田部分調査状況図

る。

古代における沖積地の利用状況については最近各地で水田跡の発掘調査が進められたり、自然科学的手法によるアプローチが実施されている。萱田地区における水田部分の発掘調査も沖積地の利用状況について把握するために実施したものである。

発掘調査（図718、図版179）

発掘調査は、トレンチ手法に基づいて主とし土層断面を観察することとし、座標軸に並行させて南北方向に3か所のトレンチを設定し発掘調査を実施した。

調査部分は本来水田として利用に共されていたが、現状では休耕地となっており、部分的に畑地として利用されている部分もある。かって水田耕作されていた時に機能していた水路がほぼ中央部と南側、即ち北海道遺跡が位置する千葉第1段丘の縁辺に認められ、かなり豊富な水量を有して新川方面に流れている。

トレンチ調査の結果、中央部トレンチにおいて歴史時代に比定できる遺物を検出したため、この部分を中心に拡張し、面的な調査を展開させた。しかしながら遺構と判断できるものは検出できず、遺物もトレンチ調査で検出した以外は、いずれも細片で、時代を特定でき得るだけのものは皆無であった。

層序（図719・720、図版179）

かなり水位が高く、湧水による調査上の支障をきたしたが、IV層上面まで掘り下げることができた。

Ⅰ層　表土層　耕作土である。

II層　灰褐色土層　層上部は酸化鉄の帯を形成する。

III層　小白色粘土ブロック混入暗灰褐色土層　酸化鉄の縦方向の流れが認められる。

IV層　小白色粘土ブロック混入灰褐色土層　酸化鉄の縦方向の流れが認められる。

Ⅴ層　小粘土ブロック混入黒褐色土層　マンガン粒の分布が認められる。

VI層　灰色粘土ブロック混入黒褐色土層

VII層　黒灰色土層　グライ化する山砂の小ブロックの分布が認められる。

VIII層　青色土層　グライ化する山砂の小ブロックの分布が認められる。

IX層　小粘土ブロック混入黒色腐植土層　層上部より遺物が出土する。

Ⅹ層　黒褐色土層

XⅠ層　灰黒色土層

XII層　灰青色土層

XIII層　灰色粘土ブロック混入灰褐色土層　層上部は酸化鉄の帯を形成する。

XIV層　小灰色粘土ブロック混入灰黒褐色土層　酸化鉄の分布が認められる。

XV層　小白色粘土ブロック混入灰褐色土層

XVI層　白灰色土層

XVII層　小白色粘土ブロック混入灰褐色土層　酸化鉄の分布が認められる。

XVIII層　小白色粘土ブロック混入暗灰色土層　酸化鉄の分布が認められる。

XIX層　小白色粘土ブロック混入灰黒色土層　酸化鉄の分布が認められる。

XX層　灰褐色土層

以上の20層に識別することができた。ポイントA～A_1附近では最下層として黄褐色山砂土が確認できた。またC～D附近においても認められる点から、沖積地の基底部に相当する層と判断して差し支えないようである。沖積地の中央部分の状況が把握できないが、ほぼ擂鉢状の形状を呈し、しかもかなりの深度を呈するものと思われる。

各層は酸化鉄やマンガン粒の分布が認められるが、最近まで利用されていた水田の土壌と重複するため、明確に把握することはできなかった。しかし、土層断面で明らかなように、かな

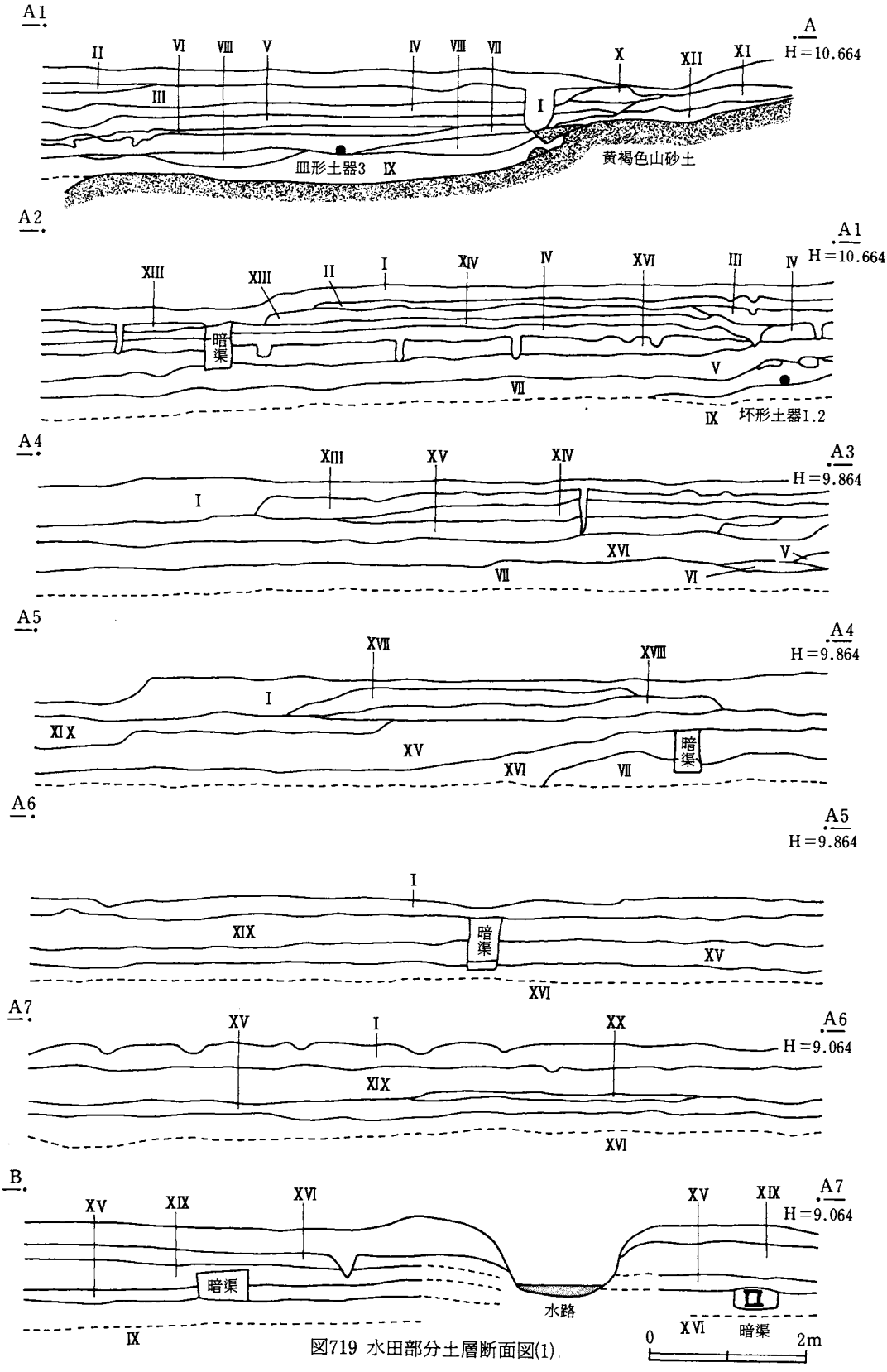


図719 水田部分土層断面図(1)

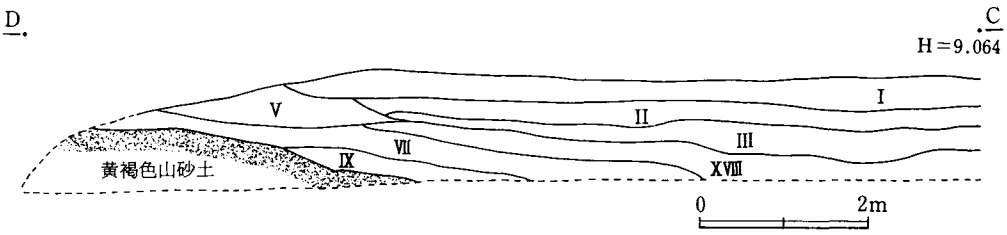


図720 水田部分土層断面図(2)

り深い部分から浅い部分までの間に暗渠排水施設が設置されており、著しい湿田の状況を良く伝えていると言って良いであろう。

さて、古代における沖積地の利用状況については残念ながら今回の調査において明らかにすることはできなかったが、IX層上面から歴史時代に比定できる坏形土器と皿形土器を検出しており、少なくとも土器の示す9世紀の段階では、台地縁辺部分はIX層が最上層であったと判断して良いであろう。仮りに沖積地の利用があったとすれば、VII、VIII層が耕地として考えられる。

VII層の広がりは北方台地（権現後遺跡）縁辺部分より南に約30.7mの範囲で認めることができ、耕地として充分機能するものと考えられる。

出土遺物（図721）

形状が識別できる遺物は少なく、図示できるのは3点のみである。1、2は坏形土器で、1は口径13.5cm、底径6.6cm、器高3.5cmのほぼ完形品である。糸切りにより切り離され、体部下端と底部は静止ヘラ削り調整される。色調はグライ化しており青褐色を呈し、焼成は堅緻である。2は体部を欠損するものであるが、糸切りによって切り離されており、体部下端は回転ヘラ削り調整される。3は皿形土器で底部は高台風を呈している。糸切りによる切り離しである。体部の内面と外面に「入」の墨書が認められる。胎土、焼成は良好で、グライ化するため色調は青褐色を呈している。

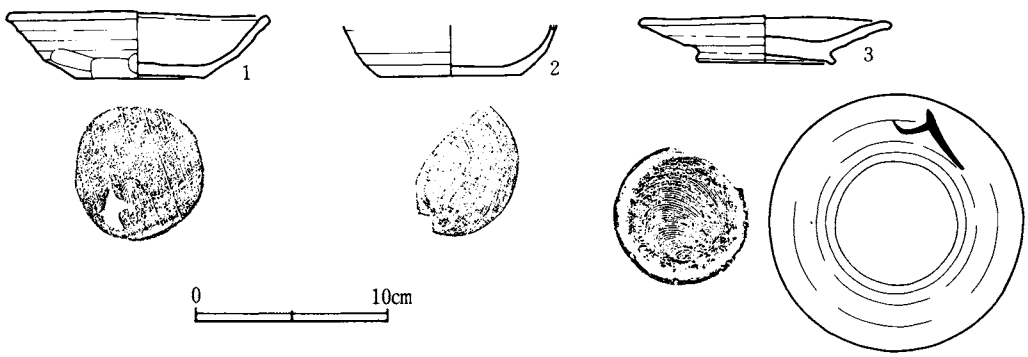


図721 水田部分出土遺物実測図

遺跡表面採集遺物一覧

番号	器種	法量 cm			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	22.2	19.0	7.8	2/3	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
2	坏	4.6	11.3	5.6	完形	ヨコナデ ヘラ削り	砂粒	堅緻	黒褐色	
3	坏	4.0	13.7	6.0	1/4	回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
4	坏	3.7	11.5	4.8	1/2	下端静止ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
5	坏	3.7	12.0	7.2	1/2	下端静止ヘラ削り 底部一方向ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
6	坏	3.7	12.0	6.6	1/4	底部回転ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	糸切り
7	坏	—	—	—	底部破片	—	砂粒	堅緻	茶褐色	墨書「尼」
8	坏	—	—	—	底部破片	—	砂粒	堅緻	茶褐色	内面磨き 墨書「冨」

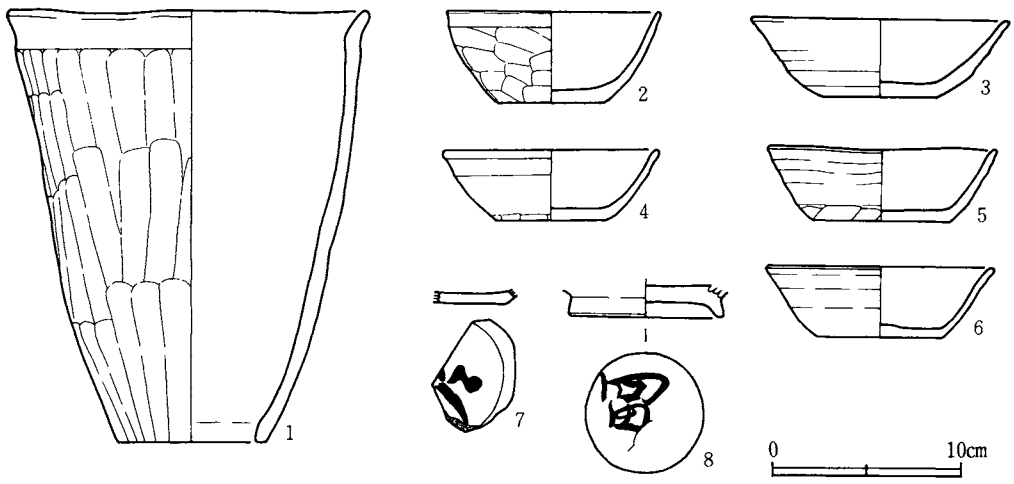


図722 遺跡表面採集遺物

第3章　ま　　と　　め

第1節　遺構について

1．竪穴住居跡

歴史時代の竪穴住居跡は、第Ⅰ群8軒、第Ⅱ群7軒、第Ⅲ群56軒、第Ⅳ群13軒、第Ⅴ群6軒、第Ⅵ群1軒、第Ⅶ群21軒、第Ⅷ群8軒の計114軒である。

既に指摘したように114軒をもって歴史時代の集落全体を検出したわけではなく、未調査地区、調査対象外区域に第Ⅳ群、あるいは第Ⅶ群と有機的な関係を有する遺構の所在が充分考えられる。しかしながら、他の6群は面的な調査の結果からすれば、検出した遺構数をもって群としての纏を有していると考えて良いであろう。

群として捉えた遺構群の纏りは、長い時間の経過の中で形成されたものであり、同時期にすべての遺構が存在したことを意味するものではないが、各群は遺構が存在しない空白部分を取り込んで北海道遺跡を生活の場として広く展開しており、群としての纏りは集落形成のうえで大きな意味が求められるところである。

群を構成する主体は、言うまでもなく竪穴住居であり、これに付随するかのように掘立柱建物や土壙が位置している。竪穴住居跡の平面形は、方形を基調としながら個々の住居に変化を見せている。また、規模も大小の差を生じており規格的に住居が構築されてはいないと言うことが窺える。このようなことは内部施設においても認めることができ、かなりの個体差を生じている。その相違はA～Eまでの5の形状に識別できる。

A　カマド、壁溝だけが設備される住居。

B　カマド、壁溝、それに小ピットが設備される住居。

C　カマド、壁溝、柱穴が設備される住居。

D　カマド、壁溝、柱穴、それに小ピットが設備される住居。

E　カマドのみの住居。

A～Eまでの形状では、カマド、壁溝、柱穴、小ピットが内部設備される平均的な様相を様式と捉えるならば、様式の範囲内において考えることができる形に相当するものであろう。しかし、形と一口に言っても実際の住居構築にあたっては、施工する側の土木技術、建築技術等の習熟度が重要な意味を持っていると同時に集落の一構成員として集落内において機能する社会的な位置づけがなされるものであり、住居構築の背景には種々の用件もまた具備されていなければならなかったであろう。資材の調達、運搬等についても各個における経済状況のあり方も充分に考慮する必要があろう。ここで各群におけるA～Eまでの形状がどのように採用され

るか、その状況について瞥見したい。

第Ⅰ群

A．D118、D120、D121の合計3軒である。

B．D119、D136の合計2軒である。

C．この形状は皆無である。

D．この形状は皆無である。

E．D117、D139、D140の合計3軒である。

第Ⅰ群においては、A、B、Eの形状を採用して住居を構築しており、比較的単純な様相を呈していると言って良いであろう。A、B、Eは、いずれも内部施設において柱穴を欠落する点が共通している。さらに全体的に整った住居が少なく、小形で掘り込みも残いため堅牢な状況は認めることはできない。

遺構の分布状況は、かなり散漫なあり方を呈しているが、詳細に観察すれば、2軒が近接して位置しており、Ⅰ群を構成する最少単位としての性格を有するものと考えられる。最少単位を小グループとすると、D117とD139、D120とD121、D119とD136が相当すると考えて良いであろう。小グループにあっては同一の形状を採用している。換言すれば、隣り合せに近接する住居は同一形状を採用して構築されていることが窺える。その中でD118とD140は小グループを構成するとは言い難く、3グループとは若干離れた状況を呈して位置している。さらに、他の住居が北壁、ないし北壁に相当する堅にカマドを構築しているのに対して、D118は東壁部分に、D140は西壁部分に構築されている点からも理解できよう。

Ⅰ群が占める全体面積はD117とD119を結ぶ線分を直径とした場合約4,400㎡となり、住居1軒当りの群内における占有面積は約550㎡となる。実際の住居の規模は2.9㎡から10.6㎡の範囲に求められ、平均的には7.2㎡であり、約70倍近い面積を占有していることになる。ただしこの数値は概数であり、集落の実態を示すものでないこと付け加えておく必要があろう。

第Ⅱ群

第Ⅱ群は住居1軒の単独なあり方を呈しているため比較検討することはできない。形状的には第Ⅰ群で3軒認められたAの範疇で捉えることができる。該期の住居におけるカマドは北壁に構築される例が一般的であるが、D130は東壁に構築されており、第Ⅰ群のD118と同様な状況を呈していると言って良いであろう。

第Ⅲ群

A　D061、D062、D064、D069、D070、D076、D088、D089、D092、D100、D107、D111、D123、D124、D128、D135の合計6軒で、内D069、D135は修改築が認められ、さらにD069は焼失した住居である。

B　D090、D096、D098、D102、D108、D109、D110、D112、D113、D114、D115、D

125、D126、D127、D129、D132、D133、D138、D143、D146の合計20軒で、内D129は修改築が認められる。

C　D099の1軒である。

D　D063、D065、D091、D093、D095、D097、D103、D106、D116、D134、D137、D141、D144、D145、D147、D148の合計16軒で、内D145は修改築が認められ、D141とD147は焼失した住居である。

E　D067、D101の合計2軒である。

第III群においては、5つの形状すべてが認められる。5つの形状の内C、Eについては1軒ないし2軒と少ない。最も多く採用されている形状はBであり、次いでA、Dが同数となっている。A～Eの形状はIII群内において分散した状況で見られ、形状別に集中して位置するような様相は呈していない。また、第I群で指摘できたような近接する住居間の形状が同一であると言う傾向は呈していない。ただし、細部を観察すれば同様な点が指摘できないわけではないが、群全体を通して見れば部分的な傾向であると言えよう。

群内に位置する住居の分布状況は、第I群でも指摘したように小グループを構成している状況を呈していると言えるであろう。第I群では遺構数が少ないことと、かなり分布のうえで散漫な状況を呈している点から小グループを捉え易かったが、III群においては基本的に2軒程度を一グループとして構成していたと考えられるが、各小グループが第I群より密集する傾向があるため単純には把握しきれない。この点は出土遺物の検討を経たうえで考えるならば、かなり明瞭に把握することが可能と思われる。

住居の規模は2.6㎡から22.6㎡の範囲に求められるが、平均的には10㎡前後が主流を占めている。これは、第I群の平均値を上回ものであり、内部施設の面から見ても柱穴を有するDの採用から見てもIII群が第I群のような単純な様相を呈していないことを示しているようである。

III群が北海道遺跡において占める全体面積は、最も北側に位置するD076と最も南側に位置するD126と結ぶ線分を長径とした場合、80,096㎡となり、住居1軒当たりの群内における占有面積は358㎡となる。この数値を単純に第I群と比較すれば、第I群よりIII群の方が住居の分布密度が高いことを示している。さらに実際の住居の規模は10㎡前後であるから約35倍に近い面積を占有していたことになり、第I群の割合より低い数値を示している点からも明かであろう。ただし、この数値については56軒が同時に存在したと仮定した場合のことであり、実際には第I群に近いものであったと思われる。

56軒の内D069、D129、D135、D145の4軒は修改築に伴ってカマドの構築位置を変更している。D069は東壁から北壁に、D129は北壁中央部から北東壁コーナー部に、D135は3か所にカマドが認められ、少なくとも2回以上の修改築が行われたことを示している。構築当初は東壁で、次いで北壁に、そして西壁に構築している。D145は北壁から西壁に移動している。D069

は焼失した住居を物語るように多量の遺物を出土しており器種構成を理解するうえで貴重な資料となる。D069以外にD141、D147も焼失した住居で、合計3軒認められる。D141、D147の2軒はD069と比較すると遺物の出土量は少ない。特にD141においては甕形土器の破片1点が図示し得ただけである。

第IV群

A　D084の1軒である。

B　D071、D073、D074、D081、D083、D087の合計6軒で、内D074は焼失住居である。

C　D048の1軒である。

D　D072、D075、D082、D085の合計4軒である。

E　D086の1軒である。

第IV群においては、5つの形状すべてが認められる。5つの形状の内、A、C、Eについては各1軒の検出であり、主流を占めるのは、B、Dとなる。B、Dは既に触れたように、柱穴が配置されるかされていないかが大きな区分になるものであり、内部施設の面から見れば大きな違いを呈しているものである。この両者は、Bが2軒多く検出できたものの数のうえではDとさほど違いが認められるものではない。

IV群は、事実記載中で指摘した通り、他群では認められなかった多数の掘立柱建物跡を検出している。住居は、この掘立柱建物を取巻くように環状形に分布しており、分布状況からは小グループを構成していることが窺われる。

住居の規模は3.7m²から24.6m²の範囲に求められるが、平均的には12m²前後の住居が主流を占めている。この数値は第Ⅰ、Ⅲ群の平均値を上回ものである。このことは、IV群においてはB、Dを採用する住居が多いのに対し、第Ⅰ、Ⅲ群においてはAの形状を採用する住居の割合が高いことに原因するものであると考えられる。

IV群が北海道遺跡において占める全体面積は、最も西側に位置するD083と、最も東側に位置するD085を結ぶ線分を直径とした場合3,629m²となり、住居1軒当たりの群内における占有面積は279m²となる。この数値を第Ⅰ、Ⅲ群と比較すればIV群の方が住居の分布密度が高いことを示している。さらに実際の住居の規模は12m²前後であるから約23倍に近い面積を占有していたことになり、第Ⅰ、Ⅲ群より低い数値を示している。さらにIV群においては掘立柱建物跡が9棟位置しており、これを加えて考えれば、1軒当たり164m²となりさらに密集度が高い傾向を示すようになる。しかし実際の分布状況を見れば第Ⅰ群よりは密であるものの第Ⅲ群と比較すればほぼ同様な状況を呈していることが窺われる。この点については、各群の占有面積を機械的に求めたことに関係するものであり、補正の必要が生じよう。

13軒の住居はまったく修改築が認められない。したがってカマドは住居構築当初のものである。13軒の内D074が焼失した住居であり、多量の遺物を出土している。また、D071、D087は

重複関係を呈しているため同時存在は考え難く、時期比定によってかなり単純な小グループをもって構成される群となろう。この点は住居間のみならず、掘立柱建物跡についても指摘できたところで、D084とH004はかなり接近して位置しており当然新旧関係を有しているところである。

第V群

A　D015、D078の2軒で、内D015は焼失住居である。

B　D018の1軒で、修改築が認められる。

Ç　この形状は皆無である。

D　この形状は皆無である。

E　D009、D017、D019の3軒で、内D009は修改築が認められる。

第V群においては、C、Dを除く3つの形状が認められる。群を構成する住居の数そのものが少ないため検討に堪えない面があるがEが3軒と最も多い。Eの採用比率は他群では低く、第I群が辛じて認められる程度である。V群のあり方はEの採用比率も然ることながら他の採用形状においても柱穴を特たないA、Bを共通して存在している。

群内に位置する住居の分布状況は小グループを構成することが窺われるが、カマドの指向する方位は統一的でなく、違いを生じている。北壁に位置する例が多いものの、東壁や南東壁コーナー部等に構築される例がある。

住居の規模は5.5m²から13.2m²の範囲に求められるが、平均的には9.5m²前後が主流である。これは第I群と第III群の中間に位置する数値である。

V群が北海道遺跡において占める全体面積は、最も北に位置するD009と、最も南に位置するD019を結ぶ線分を直径とした場合754m²となり、住居1軒当たりの群内における占有面積は125m²となる。この数値は今までのところ最少面積である。さらに実際の住居の規模は9.5m²前後であるから約13倍に近い面積を占有していたことになる。ただし、群の占有面積を求める際に、最も離れて位置する住居間を直径として円を描いた場合の結果であり、これを他群、ここではVII群と重複しない範囲で円を描けば第IV群程度の面積になる。しかしながら、既に指摘したように、V群の北側には須久茂谷津の沖積地が迫っており、園宅地の範囲として考えることはできず、むしろ水田経営との関係が生じてくるところであり、本来的な群の占有面積は754m²を大きく増減することはないと思われる。

6軒の住居の内D009とD018の2軒は修改築に伴ってカマドの構築位置を変更している。D009は北壁から北東壁コーナー部分に、D018は北壁から南東壁コーナー部分に移動している。D009、D018は修改築に伴ってD017の影響を多分に受けたのではないかと思われる。

第VI群

第VI群は住居1軒とピット2基によって構成される群で、住居1軒の検出は第II群と同様な

状況を呈している。このため比較検討することは難しいが、形状的にはBを採用して住居を構築している。カマドは北壁に構築されており、該期における一般的なあり方を呈している。

第Ⅶ群

A　D028、D050A、D054、D079の合計4軒である。

B　D029、D030、D044、D046、D050Bの合計5軒で、内D046は修改築が認められる。

C　D024、D034、D045の3軒である。

D　D023、D025、D027、D031、D042、D045、D051、D052の合計8軒で内D043は修改築が認められる。

E　この形状は皆無である。

第Ⅶ群においては、Eを除く4つの形状が認められる。数のうえで多少の違いはあるものの他群に比して平均的なあり方を呈していると言えるであろう。ただしA～Eに帰属しないD052はカマドが構築されておらず、住居として機能した遺構であるか確かでないが、仮りにカマドを有していたとするならばEとなるものである。

群内における住居は分散した状況で分布しており、形状別に集中して位置すると言うような傾向は認められないが、少なくとも隣り合って近接する住居間においては同一形状を採用している率が高いことが指摘できる。この隣接して位置する住居は群を構成する小グループとなるものと考えられるが第Ⅰ群のように単純なあり方を示しておらず把握しにくい様相を呈している。

住居の規模は6.1㎡から30.8㎡の範囲に求められるが、平均的には12㎡前後の住居が主流を占めている。この数値は隣接する第Ⅳ群と同様である。ただし、第Ⅳ群においてはB、Dの形状が主流であるのに対し、Ⅶ群では先にも触れたようにA～Dまでほぼ均等に採用されている点が相違する。

Ⅶ群が北海道遺跡において占める全体面積は、最も西側に位置するD053と、最も東側に位置するD043を結ぶ線分を直径とした場合約6,000㎡となり、住居1軒当たりの群内における占有面積は285㎡となる。この数値は第Ⅳ群に近いものであり、両群は近似した内容を呈していると言って良いであろう。さらに住居の規模は12㎡前後であるから約23倍に近い面積を占有していたことになる。

21軒の住居の内、D043とD046は修改築に伴ってカマドの構築位置を変更している。D043は西壁から北壁に、D014は北壁から北東壁コーナー部に移動している。焼失住居は1軒も存在していない。

第Ⅷ群

A　D035の1軒である。

B　D142、D149の2軒で、D142は焼失住居、D149は修改築が認められる。

C　この形状は皆無である。

D　D003、D004、D008、D038の合計4軒である。

E　この形状は皆無である。

第Ⅷ群においてはC、Eを除く3つの形状が認められる。数量的には遺構総数の半分であるDが最も多い。主柱穴を有し、かなり堅牢に構築された住居である。8軒の内D007はA～Eに帰属しないカマドを持たない住居であり、住居として構築した遺構であるが確かでない。仮りにカマドが設置されていたとするならばEとなるものである。

群内における住居は、かなり散漫な状況で分布しており他群には認められない状況を呈していると言える。既に事実記載において触れたようにⅧ群の位置する地域は、未調査地区や調査対象地以外の地域が隣接するため、群として捉え難い面があり、今後の調査によっては群が補足されるべき性格を有する群である。したがって小グループの構成については明瞭に把握することはできない。

住居の規模は7.3㎡から19.9㎡の範囲において求められるが、平均的には10㎡以上の住居が主流を占めている。平均値は13㎡である。この13㎡は他群に見られない数値であり、Ⅷ群がかなり大形の住居で、しかもDを採用して構築している関係と思われる。

Ⅷ群が北海道遺跡において占める全体面積は、最も北に位置するD007と、最も南に位置するD149を結ぶ線分を直径とした場合9,840㎡となり、住居1軒当たりの群内における占有面積は1,230㎡となる。この数値は他群とは比較にならぬものであり、Ⅷ群の特異性として捉えておく必要があろう。

8軒の住居の内D149は修改築に伴ってカマドの構築位置を変更している。D149は当初北壁に位置したものを東壁に移動している。また、D142は焼失した住居であり床面上に炭化物を多量に検出したが、他群に認められるように遺物は多量には検出できなかった。

2．掘立柱建物跡

竪穴住居跡は、遺構の主要部分が土中深く位置している関係で豊富な情報を提供するが、掘立柱建物跡は、遺構として痕跡を止めるのが柱穴のみであり、上部構造はまったく遺存しないため、柱穴が唯一の遺構として調査、研究の対象となっている。そのため情報量は極端に少なく時期を決定するうえにおいても明確に把握できない面もあり、集落跡において住居との関係を考えるうえでも支障を期たすことも生じている。また、検出した柱穴についてもソフトローム層以下の部分であり構築面の状況については知る手懸を失っている。掘立柱建物跡については種々の問題を含んでいるところであるが、遺構の性格上、柱穴がなんと言っても調査、研究の対象であることに変りはない。

北海道遺跡においては、この掘立柱建物跡は少なく、全部で10棟検出しただけであり、萱田

地区における他の遺跡と比較して極端に少ない状況を呈していると言えるであろう。さらに、10棟は一群に集中すると言う極端なあり方を呈しており、北海道遺跡における掘立柱建物跡は特異な様相を呈していると言えよう。

掘立柱建物跡は、第III群1棟、第IV群で9棟の合計10棟である。10棟の建物は、規模、棟方向に違いが認められる。

規模は2間×1間を最小とし、3間×2間が最大である。2間×1間の建物跡はH008、H009の2棟である。いずれも南北棟で中央部に束柱種か否か不明であるが柱穴が認められる構造を呈している。しかし、側柱の通りは非常に悪い。次いで2間×2間の建物がある。H002、H004、H005、H006、H007の5棟で最も多く数えられる構造である。H005とH007が南北棟である以外は東西棟の建物である。H007は西側柱が3柱穴であるが、東側柱は4柱穴であり、東側が出入口に相当する施設が設けられていたと考えられる。次いで3間×2間の建物がある。H001、H003、H010の3棟である。H010が南北棟以外は東西棟の建物である。

桁行の1間は柱穴の芯々間で約2.0m、梁間は1.8mが平均であるが2間×1間の建物の桁行は1.2m、梁間2mを有するものもある。全体的に柱の通りが良好でないため、歪を生じている建物も存在しており、規格的に構築されていないことを物語っている。

柱の掘りかたについても規格性は認められず、円形を呈していたり楕円形を呈していたり様々である。建物によっては円形と楕円形の掘りかたの柱穴も認められる状況を呈している。

北海道遺跡においては掘立柱建物跡はきわめて少なく、しかも検出した多くは第IV群に10棟の内9棟までが位置しており、環状形に分布する住居群の中央部に密集して位置しており、特異な傾向として見ることができる。このような状況からは、住居跡と掘立柱建物跡との分布上の関係については把握することが困難である。

第2節　遺物について

1．搬入土器について

北海道遺跡における歴史時代の出土遺物の中で須恵器の出土が認められる[註1]。須恵器は、登り窯を用いて大量生産されたものであり、集落内で簡単に焼成できる土器ではないことは改めて言うまでもない。したがって集落内より出土する須恵器についてはすべて搬入品として捉えることが可能である。そこで実際に集落に搬入された須恵器がどのようなあり方を呈しているか分析する必要が生じてこよう。究極的には各個の生産地比定まで言究できれば生産地と消費地との有機的関係が把握でき、古代における物流の実態が理解できるところである。しかしながら今日の段階においては窯業遺跡そのものの実態が充分把握されていない面があるため短絡的な作業になってしまう恐れがあるので、ここでは出土遺物の分析に視点をおき記述したいと考

えている。

出土した須恵器は、坏形土器が他の須恵器を凌駕して出土している。他には盤、蓋、高坏、長頸壺が認められるが、ここでは坏形土器を中心に取り扱いたい。

(1) 坏形土器（無高台）

坏形土器は大きく6つに分類できる。

A　口径が13cm前後、底径が8.5cm程度でその差が小さく、身は浅く、体部は短かくしかも小さく開くもの（D072—15、D092—9）。

B　口径が14cm前後、底径が7.5cm程度で、身は浅く、体部は直線的に大きく開くもの（D004—3、D042—8）。

C　口径が12cm前後、底径が7.5cm程度で、身は多少深く、体部は直線的に開くもの（D091—11、D147—5）。

D　口径が14cm前後、底径が7cm程度で、身は深く、体部は曲線的に大きく開くもの（D103—28、D118—14）。

E　口径が12.5cm前後、底径が6.5cm前後で比較的身は浅く、体部は若干内彎ぎみに開くもの（D043—2、D091—12）。

F　口径が15cm前後、底径が7.5cm程度の大形で、身は深く、体部は若干内彎ぎみに開くもの（D115—6）。

A～Fは、いずれもロクロによって成形されたものであるが、切り離しの技法、あるいは二次調整、さらに胎土中の混和材に違いが認められる。

Aは、糸切りにより切り離され、底部周辺を回転ヘラ削りを施している。この削りによって中心部分に僅かに糸切り痕が残っているものもある。削りがさらに中心部分までにおよんでいれば当然糸切り痕は削り取られ認めることは不可能になる。胎土中には砂粒が混和材として認められる。

Bは、二次調整によって明瞭に切り離しの技法が把握できないが、D065—7やD095—9の例ではヘラ切り痕が認めることができる。ほぼヘラ切りにより切り離しになるものと考えて良いであろう。二次調整は、体部下端については静止ヘラ削りの例が認められるが主流は回転ヘラ削りを施し、底部は、一方向のヘラ削りと回転ヘラ削りが認められる。回転ヘラ削りは底部中心部分までおよんでおり切り離しは明瞭に把握できない。胎土中には砂粒を混入するものと雲母を混入するものとが認められ、底部の二次調整において一方向の削りが施される例に雲母粒が混和される例が多い。

Cは、二次調整によって明瞭に切り離しの技法が把握できないが、D147—5の例ではヘラ切り痕が認めることができる。一方糸切り痕は認めることができないため、ほぼヘラ切りによる切り離しになるものと考えて言いであろう。二次調整は、体部下端については静止ヘラ削りが

認められるものと回転ヘラ削りが認められる例がある。また明瞭に識別できない例も存在する。底部は、回転ヘラ削りも認められるが、一方向のヘラ削りが主流を占めるようである。混和材は小石を含め砂粒が大半を占めるが、雲母粒を混入するものも認められる。

Dは、二次調整によって明瞭に切り離しの技法が把握できないが、D103—28やD133—14の例ではヘラ切り痕が認めることができる。一方糸切り痕は認めることができないため、ほぼヘラ切りによる切り離しになるものと考えて良いであろう。二次調整は、体部下端については静止ヘラ削りが認められるものの、回転ヘラ削りされるものが認められるが実際には明瞭に識別し難い例が多い。底部は一方向のヘラ削りが主流を占めている。混和材は、小石を含め砂粒が圧倒的で、雲母を混入する例は認められない。

Eは、一部二次調整によって切り離し技法が明らかでないが、ほぼ回転糸切りによる切り離しが主流を占めていると見て良いであろう。体部下端は回転ヘラ削りのみであり、底部周辺についても回転ヘラ削り調整が施されるものもあり、また糸切り離しのまま無調整の例も存在する。胎土中の混和材は、砂粒が大半を占めるが、一部雲母が混入される例も認められる。

Fは、出土点数が少ないため充分な検討に甚えない面があるが、切り離し技法については糸切りが認められる。二次調整は体部下端と底部周辺部は回転ヘラ削り調整を施している。胎土中の混和材は砂粒が認められる。

(2) 坏形土器（有高台）

高台付の坏形土器は大きく3つに分散できる。

A　口径が 10 cm 前後で、身が若干深いもの（D044—9）。

B　口径が 12 cm 前後で、身が若干浅いもの（D072—18）。

C　口径が 15 cm 前後の大形なもので、身は比較的深いもの（D027—11）。

A～Cまで切り離し技法は高台の作出、取り付け等で二次調整されているため明らかでない。また体部下端の調整についても明瞭に把握できるものはない。

(3) 盤形土器（有高台）

盤形土器は出土量が少なく、僅か2点のみであるため資料的な検討が難しい。口径 20 cm 大で身は浅く、高い高台を有する（D096—6）。

盤形土器は出土量が少なく全体について明らかでない部分が多い。底部の切り離し等については明らかでないが、二次調整と考えられる回転ヘラ削りが認められる。胎土中の混和材は砂粒が認められる。

(4) 蓋形土器

蓋形土器は大きく3つに分類できる。

A　口径 12 cm 前後で、身受けが若干突出するもの（D025—9）。

B　口径 19 cm 前後で、身受けが若干突出するもの（D007—2）。

C　口径 15 cm 前後で、体部が直後的に開くもの（D095—13）。

A～Cは、いずれも天井部が回転ヘラ削り調整され、鈕が取り付けられている。胎土中の混和材は砂粒が多く、中には雲母が混入される例も認められる。A、Bは坏蓋で、Cは短頸壺の蓋である。

(5)　高坏形土器

高坏形土器は出土量が少なく、しかも完形品がないため全体が把握できない面がある。

坏部の口径は 18 cm 前後で、かなり高い脚部が付くが、下端部分が欠損するため明らかでない（D075—19）。

坏部と脚部の接合部分の器壁はかなり肥厚している。胎土中の混和材は砂粒と雲母が認められる。

(6)　長頸壺

長頸壺は出土量が少ないため充分な検討に甚えない面があるが、大きく 3 つに分類できる。

A　細身の長胴で、口縁部は大きく外反して開くもの（D009—1）。

B　球形より若干長胴を呈し、頸部は短かく直立し、口縁部が僅かに外反するもの（D148—7）。

C　頸部は外反ぎみに立ちあがり、口縁部は大きく外反し、口唇部は突出し、側面からは面と見られるもので（D111— 5）、胴部は欠損するため明らかでないが肩部の張る長胴を呈するものと思われるものである。

A、Bは、形状的な違いはあるものの、切り離しについては糸切りが認められる。Bは胴部下端を静止ヘラ削り調整し底部から胴部の立ちあがり部分を整ている。Cについては明らかでないが、場合によっては高台が付くと思われる。

須恵器の中で大量に集落へ搬入されたのは坏形土器である点については既に指摘したとおりであるが、この坏が他の器種の須恵器とどのような伴出関係が認めるかを考えなければならない所であるが、器種別、形状別に分類した中にはかなり破片に近いものまで含んでいるため必ずしも伴出の実態を示しているとは言い難い面がある。特に坏形土器においては各個それぞれ何らかの形において伴出している状況であり、高台付坏、盤、蓋、高坏、長頸壺については出土量が少ないため若干の伴出関係が求められる程度である。しかしながら全体をとおして見た傾向としては、坏形土器Aはかなり多くの器種、形状と伴出関係が認められるが、B、C、Dの 3 者は限定的な伴出傾向が認められる。

坏形土器Bは、坏C、高台は坏A～B、蓋A、B、高坏が伴出しているのが認められる。坏形土器Cは、坏E、高台付坏B、C、蓋B、盤が伴出している。坏形土器Dは、坏C、E、F、高台付坏C、長頸壺Aが伴出している。坏形土器E、Fは出土量の問題もあろうが主体的な出土傾向は顕著でない状況が認められる。しかし同一形状内における伴出は認めなければならな

い。この点はA～Dまでにも指摘できるものである。

次に、実際に集落に搬入された状況を見てみると以下のようになる。

第Ⅰ群　坏D

第Ⅱ群　搬入なし

第Ⅲ群　坏A～F、高台付坏B、C、盤、蓋A、C、長頸壺B、C

第Ⅳ群　坏A～D、F、高台付坏A～C、蓋、高坏

第Ⅴ群　坏B、D、長頸壺A

第Ⅵ群　搬入なし

第Ⅶ群　坏A～E、高台付坏A、C、蓋A、B

第Ⅷ群　坏B、D、蓋B

このように第Ⅲ群が最も搬入状況が良好で、次いで第Ⅳ群、Ⅵ群となっている。この搬入状況は第Ⅲ群が最も遺構が多いため、その影響が現われていると思われる。同様に第Ⅳ、Ⅵ群においても認められるところであるが、坏形土器を見る限り第Ⅲ群に劣ぬ状況を呈していると言って良いであろう。

さて、これら搬入土器の生産地を求めなければならないところであるが、既に述べたように生産地比定には今日の段階では窯業遺跡の実態そのものが充分把握されていない状況である[註2]が、その中において坏形土器Aとしたものには、市原市永田、不入[註3]窯の生産になるものが認められる程度であり、他の坏形土器については明らかでないが、坏形土器Bには切り離し技法にヘラ切りが認められる例があり、常陸地域における須恵器と類似性が認められる[註4]。いずれにしても今後における窯業遺跡の実態把握が望まれるところである。

2．土師器について

搬入された須恵器に対して土師器の出土量はかなり大量に出土しており、坏、甕、皿、蓋などの器種が認められ、ところであるが、坏形土器を中心に取り扱いたい。

(1)　坏形土器

坏形土器は大きく9つに分離できる。

A　口径が11 cm前後で、器面全体がヘラ削り調整され、体部が内彎ぎみに開くもの(D118－6)。

B　口径が11.5 cm前後で、体部が底部より90度近くの屈曲をもって直線的に開くもの（D118－12)。

C　口径 12 cm 前後で、体部が大きく直線的に開き、口径と底径の差が大きいもの（D118－11)。

D　口径が13 cm前後で、体部が大きく直線的に開き、口径と底径の差が小さいもの(D090

—3)。

E　口径が 12 cm 前後で、体部が内彎ぎみに開くもの（D121—6)。

F　口径が 13 cm 前後で、体部がやや大きく外反するもの（D069—27)。

G　口径が 12 cm 前後で、体部が内彎ぎみに大きく開くもの（D069—12)。

H　口径が 14 cm 前後と大形で、体部が内彎ぎみに大きく開き、内面が黒色処理されるものも含む（D098—7)。

I　口径が 11 cm 前後で、体部が内彎ぎみに大きく開き、口径と底径の差が著じるしいもの（D067—3)。

Aは、体部がヘラ削り調整されるのが特徴の一つとなっている。底部の調整は一方向のヘラ削り調整が施されている。中には丸底に近い形状のものも認められるが、大半は平底に調整される。

Bは、糸切りによって切り離され、底部周辺を回転ヘラ削り調整を施している。このヘラ削りによって中心部分まで及んでいる例もあり、明瞭に糸切り痕が観察できない例もある。また、静止糸切りによって切り離された例も認められる。

Cは、一部ヘラ切りによる切り離しが認められるが、大半は糸切りによる切り離しが認められる。底部の周辺は回転ヘラ削り調整され、中には中心部まで及ぶものも認められる。また一方向のヘラ削りも認められるが数は少ない。

Dは、糸切りによる切り離しと、ヘラ切りによる切り離しが約半数ずつ認められる。糸切りによる場合は、底部周辺は回転ヘラ削り調整され、ヘラ切りの場合は、一方向、あるいは多方向のヘラ削りによって底部を調整している。

Eは、一部ヘラ切りによる切り離しが認められるが、大半は糸切りによる切り離しで、底部の周辺は回転ヘラ削り調整される。ヘラ削り調整である。また、一方向のヘラ削りも2例ほど認めることができるが、大半は先にも述べたように、糸切り後回転ヘラ削り調整になるものである。

Fは、一部ヘラ切りによる切り離し技法が認められるが、大半は糸切りによる切り離しで、底部の周辺は回転ヘラ削り調整が施される。体部下端は回転ヘラ削り調整されるものが多いが、静止ヘラ削り調整されるものも認められる。

Gは、糸切りにより切り離され、底部周辺は回転ヘラ削り調整される。中には中心部分まで及んでいるため糸切りの痕跡を止めないものもある。ヘラ切りによる切り離しは認められないが、多方向のヘラ削り調整が施される底部の例が認められる。

Hは、糸切りによる切り離しが認められ、周辺部分は回転ヘラ削り調整が施される。

Iは、いずれも糸切りによる切り離しで、二次的な調整はまったく認められない。

以上のように坏形土器においてはA～Iまでの9つに分類できた。分類の基準は形態的な内

容によるものであり、製作技法や調整技法については副次的に取り扱った。したがってDにおいて認められたような切り離し技法が、糸切りの場合とヘラ切りの場合が半数ずつ存在した結果も生じている。このことに関しては、製作、調整技法をも取り込んで検討を加えれば2分割が可能になる側面を有していることは否めない。しかし、製作、調整技法上の相違が、形態的な相違として顕現すると言う保証もないところである。

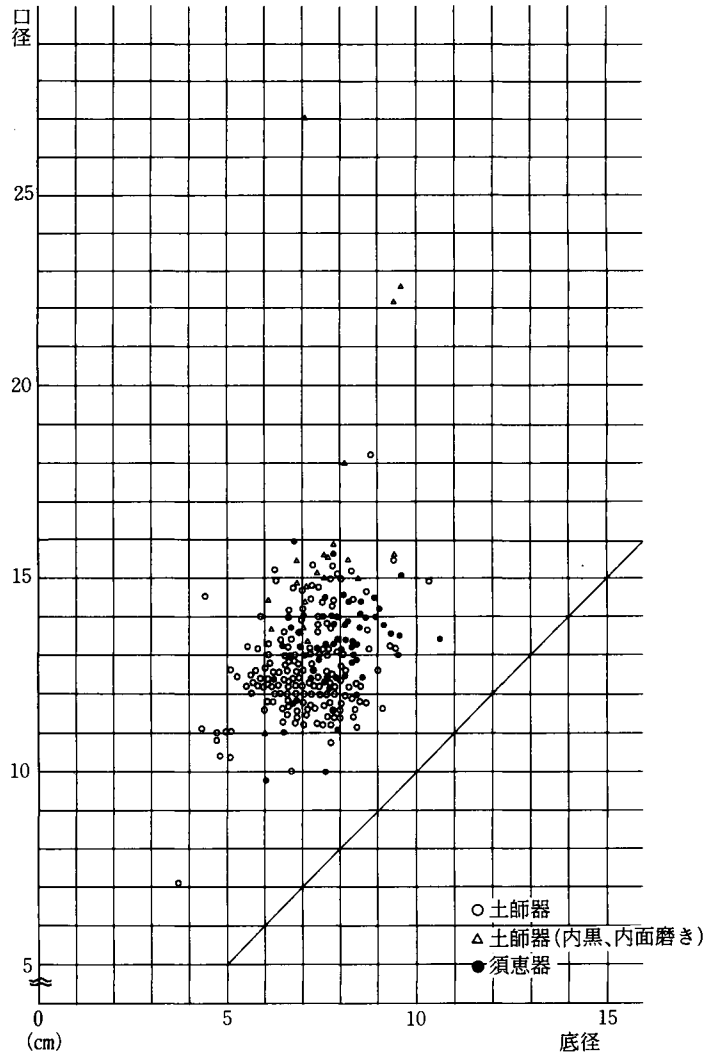


図723 北海道遺跡出土の坏形土器計測値分布図

既に述べたように、A～Iまで分類できたわけであるが、法量的に見ると平均的な口径は12cm前後のものが多い。中には内面を黒色処理されるものに大形のものを散見できるが、この間の状況は計測値分布図が物語っている（図723）。

計測値分布図では土師器と内面を黒色処理した土師器(内黒、内面磨きの坏)、さらに須恵器について図示したものであるが、土師器は口径10cmから18cmの範囲に分布し、中心が11cmから13cmに有ることが窺える。また、内面を黒色処理した土器は口径12cmから22cmの範囲に分布し、中心は13cmから16cmに求められる。さらに須恵器は10cmから16cmの範囲に分布し、中心が12cmから14cmに有ることが窺える。しかし、三者ともに分布の上では重なり合っており、分布上における個々の特徴が明瞭に捉えることができない。このことは、供膳形態としての坏形土器の未分化を示しているものであると言って良いであろう。そこで、既報告の権現後遺跡における坏形土器について、同様に分布図を作成して対比して見る

と明らかなように両遺跡間での相違が認められる（図724）。

権現後遺跡においては土師器は分布の中心が11cmから13cmにあり、北海道遺跡の場合と同様であるが、内面を黒色処理した土器の中心は14cmから16cmに求められ若干大形であることが窺える。さらに底径について見てみると北海道遺跡における土師器は5cmから9cmに求められるのに対して権現後遺跡では5cmから7.5cmとかなり小さくなっており、明らかに権現後遺跡においては大、小の区分が認められるが、北海道遺跡では分離できない状況を呈していると言って良いであろう。このような両遺跡での相違は集落の展開時期が異なるために生じた現象であると言えよう。

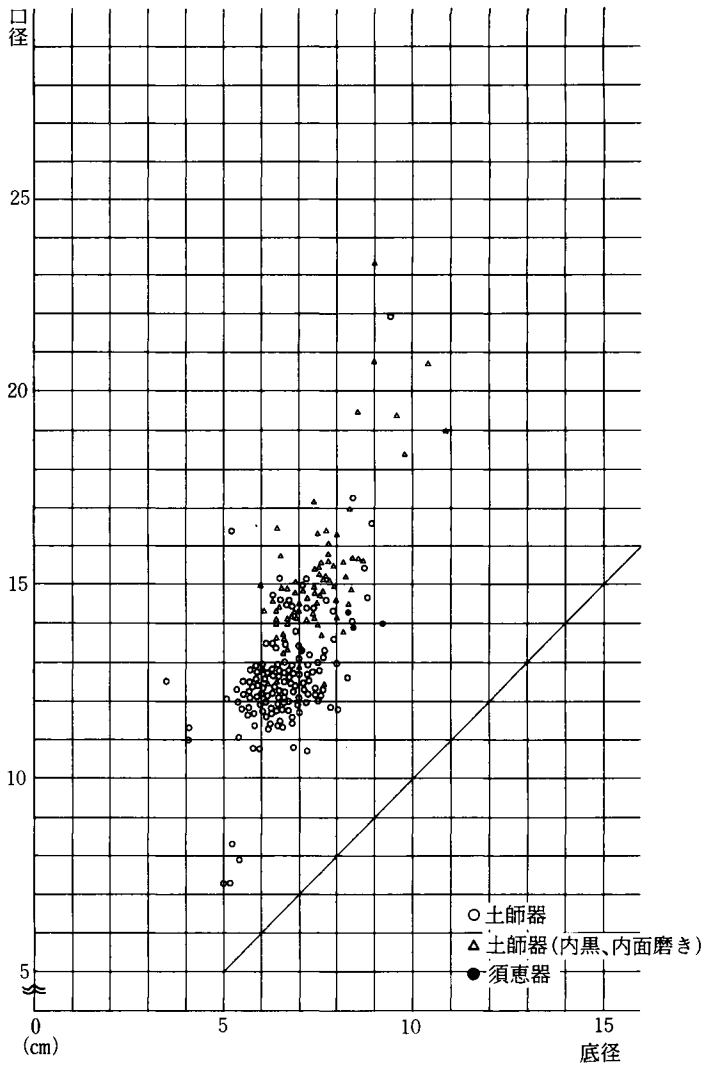


図724 権現後遺跡出土の坏形土器計測分布図

3．墨書土器について

北海道遺跡における墨書土器の出土は歴史時代の住居跡114軒の内48軒である。墨書は判読可能なもの29字、判読不可能なもの7字、記号と考えられるもの2例が認められる。

第VI群において墨書土器が認められない他は、点数の多少はあるが認められるところである。

実際に墨書された書体の内、最も多くの住居跡より出土した例が「冨」で18軒を数える。分布状況は第Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅷ群に認めることができ、ほぼ全群に近い状況を呈している。第Ⅰ群では2軒、第Ⅲ群では8軒、第Ⅳ群では5軒、第Ⅴ、Ⅶ、Ⅷ群ではそれぞれ1軒ずつに

認めることができる。次いで「㊀」で14軒から出土している。分布状況は第Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅶ群で認められる。第Ⅰ群では1軒、第Ⅱ群では1軒、第Ⅲ群では「冨」と同数の8軒、第Ⅳ群では2軒、第Ⅶ群では1軒の住居跡から出土している。次いで「へ」で9軒から出土している。分布状況は第Ⅲ、Ⅳ群で認められ、第Ⅲ群では5軒、第Ⅳ群では3軒からそれぞれ出土している。

それでは出土量も多く、また広範囲に分布する3書体を中心に他の墨書体とのかかわりを有しているがその共伴関係について見てみたい。

第Ⅰ群では「冨」と「㊀」である。第Ⅱ群では共伴関係は認められない。第Ⅲ群では「冨」は「㊀」、「成」、「井」、「善」、「丁」、「へ」、「磯」、「朝日」、「村囲囝」である。「㊀」は、「仁」、「大井」、「継」、「主」、「へ」、「木」である。「へ」は独自に共伴関係はなく、「冨」、「㊀」と共通する。第Ⅳ群では「冨」は「へ」、「新」、「隆」、「経」、「山」、「仁」がある。「㊀」は、「へ」、「承和五年二月十」、「比」、「仁」、「新」がある。「へ」は「盛」と共伴している。第Ⅴ群では「冨」は「天」と共伴が認められる。第Ⅶ群では「冨」、「㊀」、「善」、「尼」の墨書体と共伴が認められる。第Ⅷ群では共伴関係は認められない。

それでは3書体以外の墨書体で独自に有する共伴関係を見ていると、「成」は「丈部乙刀自女形代」と、「へ」は「盛」と、「勝先表」は「大田」、「井大」と、「廓」は「豊」と、「大」は記号と共伴関係があり、一書体単独の墨書体は「入」、「生」、「万」と記号、それに判読不明の一書体がある。墨書の多くは、「冨」、「㊀」、「へ」の3書体との関係が認められるところである。

北海道遺跡において墨書が出現するのは8世紀の第4四半期で、「成」、「廓」、「豊」それに「丈部乙刀自女形代」が認められる。「冨」、「へ」は9世紀前半より後半まで認められ、北海道遺跡において主体をなした墨書体と言うことができよう。一方、多くの住居跡より出土した「㊀」は実際は9世紀の第2四半期から9世紀後半まで続くものでそれ以前にはまったく認めることはできない。その他の墨書体で特徴的なのは、「大」が9世紀の第1四半期から第3四半期まで、「新」と「仁」は9世紀の第4四半期に至って出現すると言う状況を呈している。

墨書体の内、「大」、「主」、「生」、「継」、「成」、「盛」、「山」、「豊」については権現後遺跡出土の墨書と共通するものであり、両遺跡の関係が窺えるところである。これらの墨書体の内「大」は両遺跡において出現時期も存続期間もほぼ同様であり両遺跡における墨書土器を考える上で注目できる資料と考えられる。

註

1　ここで言う須恵器とは還元焔焼成されたもので、色調が灰色ないし青灰色に焼きあがり色調を呈するものである。

2　千葉県広報協会　『千葉県埋蔵文化財分布地図』　昭和53年によれば13か所を数えるが、調査され

た例は註3の例を含め数例である。

3　千葉県教育委員会　『千葉県市原市永田、不入須恵窯跡調査報告書』　昭和51年

4　常陸木葉下窯に切り離し技法が類似する例が認められる。茨城県教育財団　『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書』　6　昭和58年

終　　章

第1節　旧石器時代の総括

北海道遺跡では、大きく捉えると3期の石器群の流れがあり、この内、I期とII期とは互いに位置を異にして、住みわけがあったことが窺われた。各ブロックの性格は、多様であることが予想されたが、全体として、礫群と石器群のまとまりの二者が存在したにすぎず、具体的なブロック内での作業行為を石器組成、母岩別資料、接合資料の分析により把握することはできなかった。

一方、各ブロック間のつながりは、I期ではほとんどなく、各ブロックは自己完結である。II期では、大規模なブロック群を構成することが母岩別資料や接合資料より明らかとなり、概して、相互補完的なブロックであることが想定できる。

遺構は礫群がある他、住居跡、土壙等の落ち込みは検出できず、その存在は不明であった。礫群はいずれも受熱によって破砕されており、接合して完形礫に復元し得た例は全くなかった。

最後に遺跡内の遺物の出土状況を総体的にまとめあげてみることにする。

①ブロックの大きさは 5m×4m 程度を中心にしており、最大で 12.3m×5.5m（第21ブロック）、最小で 2m×0.6m（第30ブロック）となっており、ブロック内の石器群の密度は散漫で均一な例、中心部に密で、周辺部になるにしたがい漸減する例、の2種が基本となっている。

②レベル差は最大で 100cm、最小で 10cm と幅広いが、多くの場合 30～50cm 程度の幅におさまっている。

③石器群はナイフ形石器を主体としているが、第I期に関しては、ピエス・エスキーユを中心としたブロックも多く見られる。

④ブロックの性格は、大きく礫群と石器群の集積の二つに区分されるが、後者は剥片生産の段階が主体で石器調整を反映したブロックは全くない。

第2節　弥生時代の総括

北海道遺跡における弥生時代の遺構は、D049の1軒だけであり、しかも出土遺物が細片であるため明確な時期比定も難しい。遺構の一部は溝によって切断されているため遺構自体も全容が充分把握できるものでないので、きわめて情報量が少ない。

時期決定については、遺構の平面形や、内部施設等から見て弥生時代と判断したが確たる証拠はない。

北海道遺跡と須久茂谷津を挟んで対峙する権現後遺跡においては弥生時代後期の集落跡を検出しており、特に弥生終末期から古墳時代前期に推移する集落の変遷の状況が明瞭に把握できたことに対して対称的なあり方を呈していると言って良いであろう。

遺構の規模等から察すれば権現後遺跡の例からも後期に比定して差し支えないと考えられるものである。権現後遺跡の多くの例は、住居の南壁近くに小ピットが認められるものが多く、小ピットがない住居としてはD002、D019が認められる程度であり、D049はこの2軒と類似すると言って良いであろう。

権現後遺跡において大きく展開した集落に対して北海道遺跡の1軒だけの検出という状況はあまりにも特異な状況を呈していると言わざるを得ない。

このような対称的なあり方が何に原因するかについては明確な判断材料がないため深く言究できる状況でないが、北海道遺跡における立地条件が問題であったのではないかと考えられる。

第3節　古墳時代の総括

古墳時代の遺構は、中期、後期に比定できるもので、いずれの集落も段丘上に形成する状況を呈しており、立地の上からは共通する点が窺われる。

中期の遺構群は、第Ⅰ群から第Ⅵ群までの6群で構成されており、既に述べたように滑石製模造品の工房跡を包括して集落を形成している。工房跡は10軒あり、いずれも第Ⅲ群に集中している。第Ⅲ群は13軒で構成される群であり、群内の遺構がほとんど工房跡であると言う特徴を有している。

工房跡出土の石製品は、臼玉、勾玉、剣形品、有孔円板、双孔円板、円板状石製品、滕などがあり、数多くの品目を生産していたことが認められる。石製品の中で最も多く出土しているのは臼玉であり、臼玉の観察結果からは技術的特徴が2通りあることが看取できた。一つは権現後遺跡において認められた製作技術と同様なもので、両面研磨を施した素材を利用するものである。一方、今一つは北海道において初見となった製作技術で、剝片に両面研磨を施すことなく利用したものである。

この異なる特徴が北海道遺跡において認められたことは石製模造品の生産体制の一端を窺うことができるものであり、特にD014においては両者の技術的特徴が認められるなど、少なくとも権現後遺跡との相関関係の中で成立した技術的特徴として考えられよう。

後期の遺構群は、第Ⅰ群から第Ⅲ群までの3群で構成されており、集落の立地から見れば遺跡の北東部分に形成されている。この地域は千葉第1段丘から第2段丘に移行する部分に相当し、調査対象地外や未調査部分もあるため集落の全容は充分把握しきれないが、集落全体としては更に新川に突出する北東地域への広がりを考えなければならないであろう。

3群7軒の住居の中に中期の遺構群中で認められた滑石製模造品の工房跡が認められた。工房跡として認められた住居跡はD037で方約7.3mを計る後期の住居跡群で最大規模を呈するものであり、臼玉、剣形品、双孔円板等の品目が出土している。最も出土量が多いのは臼玉であり、しかも細部の観察結果からは権現後遺跡において認められた製作技術と同様なもので、中期のD014と類似するものであることが判明した。

後期における工房跡においてかかる製作技術が認められたことは、北海道遺跡における滑石製模造品の製作技術が権現後遺跡から継承されD014を中核として生産が開始され、量産体制を執る必要性から北海道遺跡独自の製作技術の盛行を見せ、後期に至って量産体制の不必要から再び権現後遺跡で認められる製作技術による体制へと転化したと考えて良く、少なくとも萱田地区内における滑石模造品の製作技術は権現後遺跡と北海道遺跡とは有機的関係において成立したものであり、中期から後期へと絶続して技術が継承したことが窺える。このあり方は、集落の展開についても指摘できるものであり、両遺跡ともに独自のあり方を呈すものの、全体の流れとしては権現後遺跡から北海道遺跡へと大きな展開を示していると言って良いであろう。

第4節　歴史時代の総括

歴史時代の集落群は、第Ⅰ群から第Ⅷ群までの8つの群で構成されており、住居数も114軒と北海道遺跡において最も多く検出することができた集落である。

8群はそれぞれ立地条件に相違を見せて分布しているが、北海道遺跡の特徴として、掘立柱建物跡の棟数が少ないことと、検出した群には集中して位置していることが指摘できよう。特に第Ⅳ群のあり方は10棟中9棟が位置しており異状な傾向を呈していると言って良いであろう。この点は権現後遺跡での掘立柱建物跡群とは対称的なあり方を示している。

さて、各群における竪穴住居からは大量の遺物が出土しており、新たな知見を我々に供提している。D048出土の紀年銘と人面が墨書された土器は、古代における呪術を考える上で貴重な資料になることは言うまでもないが、土師器の実年代を知る大きな手懸となるものであり、土器の型式学的編年研究に今後大きな役割を演じることになると考えられるところである。また、D146出土の人名墨書土器出土も権現後遺跡出土の墨書人面土器とともに当該地域における氏姓について考えるうえで貴重な資料となるであろう。

これらの墨書土器以外についても多くの墨書土器が出土しており、中には権現後遺跡において認められた例も存在しており、墨書土器が単なる墨書土器としてではなく、古代における集落の実態を考える上で大きな視点となるであろう。

北海道遺跡と権現後遺跡を区分するような形で、新川方面より入り込む須久茂谷津の調査成果では、具体的な沖積地利用について明確に把握することができなかったが、トレンチ調査に

よって歴史時代の土器が出土しており、沖積地利用の一端を示唆するものであろう。特に出土遺物中に「入」の墨書される土器があり、これと同じ墨書は、第III群D106に認められることができる。「入」の墨書は権現後遺跡においては認めることができなかった書体であり、沖積地が北海道遺跡と有機的な関係を有していたことが指摘できるところであり、今後各地域における沖積地調査が望まれるところである。

第5節　結　　言

北海道遺跡は、昭和53年度の確認調査に始まり、昭和54年度に遺構の調査、そして昭和55年度に旧石器の調査を実施した。

遺跡内には諸般の事由で一部未調査部分が残っていたり、調査対象地外に遺跡の広がりが考えられるなど、必ずしも遺跡の全容を検出したわけではないが、検出した遺構および遺物は膨大な量に達している。一方、実際の発掘作業において実測した図面をはじめ写真、遺物台帳、発掘調査日誌などの記録類も膨大な量に達している。

報告書の作成にあたっては、これら膨大な資料を整理し、分類、分析し作業を進めてきたわけであるが、整理の過程において作成した様々な台帳類をはじめとするバックデータについては全て報告書に掲載することは不可能であるため、極力記述することでその欠を補うよう考慮したが意に反して充分なものであったか危惧されるところである。したがって、報告書掲載の資料を活用するにあたっては記録類をはじめ実際の遺物も併せて活用いただければと考えている。

北海道遺跡において検出した遺構、遺物は我らに新知見を多く提供したと言って良いであろう。旧石器時代にあっては、面的な発掘調査をとおして検出したブロックは標高13.5mを境に低位置にII期、高位置にI期と時期の違いによるブロックの立地条件の相違が把握できた。弥生時代にあっては、沖積地を挟んで位置する権現後遺跡とは対称的に住居跡1軒のみの検出に止まったため多くを記述できないが、立地条件の相違が集落構成の上で大きな影響を持っていたことが推測できた。古墳時代にあっては、滑石製模造品工房跡群を検出でき、専業的生産集団の一端を明らかにすることができたと同時に、大量生産にかかる技術的側面が窺われた。歴史時代にあっては、紀年銘を墨書する坏形土器があり、歴史時代の土器の実年代を考える上で貴重な資料を得ることができた。

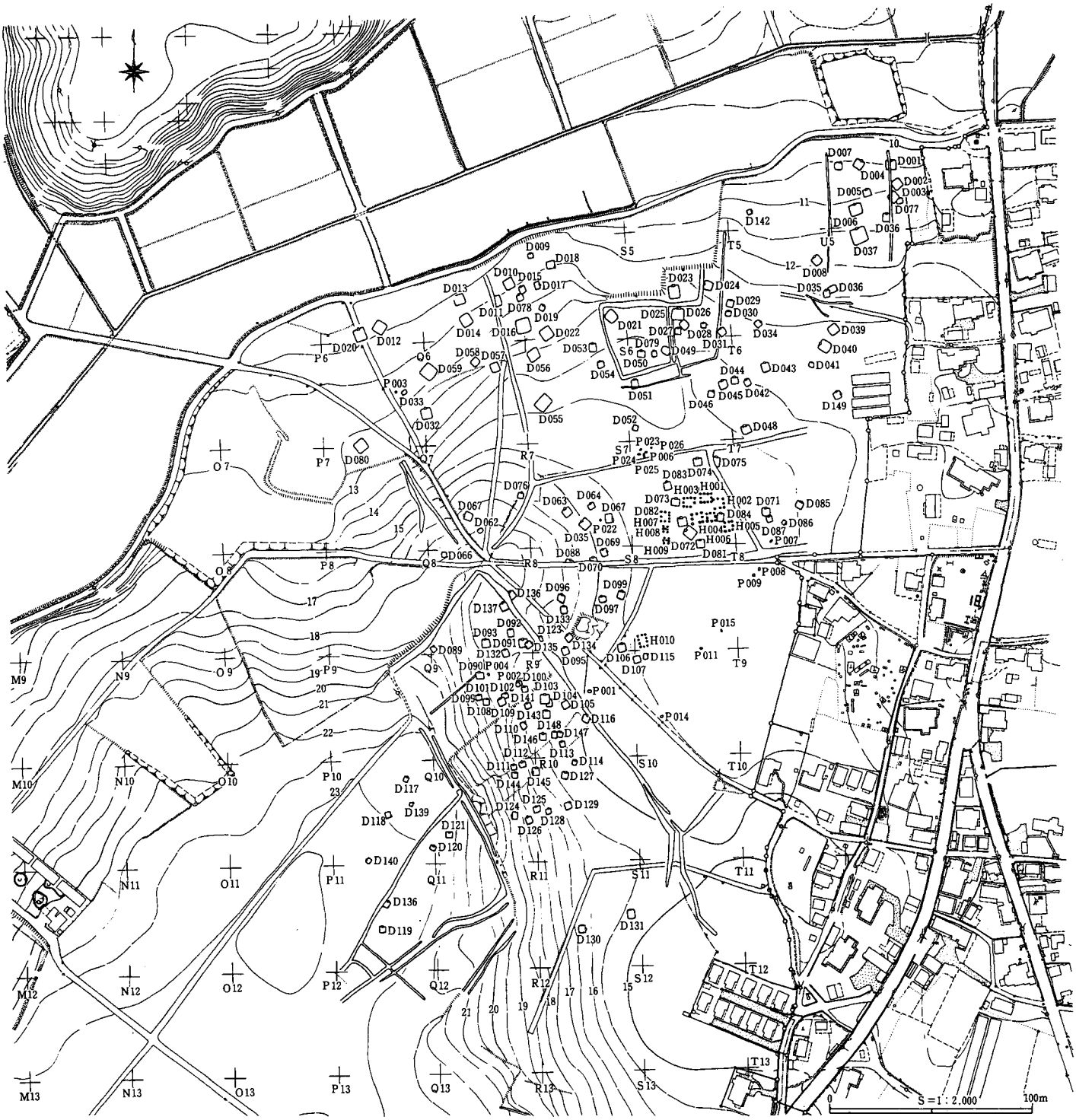
北海道遺跡における成果については各章各節において記載したとおりであるが、既に刊行している『八千代市権現後遺跡』との対比や、今後刊行される萱田地区遺跡群の調査報告書をとおして萱田地区の遺跡群が理解いただければ誠に幸甚である。

北海道遺跡方眼杭成果一覧

杭名 (測点)	X	Y	H (杭標高)
U 5	−29,700.000	25,000.000	12.099
Q 6	−29,750.000	24,800.000	12.616
S 6	−29,750.000	24,900.000	13.736
U 6	−29,750.000	25,000.000	13.202
Q 7	−29,800.000	24,800.000	13.402
S 7	−29,800.000	24,900.000	14.456
T 7	−29,800.000	24,950.000	14.260
Q 8	−29,850.000	24,800.000	16.954
S 8	−29,850.000	24,900.000	14.760
T 8	−29,850.000	24,950.000	14.435
Q 9	−29,900.000	24,800.000	19.590
S 9	−29,900.000	24,900.000	14.685
T 9	−29,900.000	24,950.000	14.483
R 10	−29,950.000	24,850.000	16.154
T 10	−29,950.000	24,950.000	14.550
Q 11	−30,000.000	24,800.000	23.211
R 11	−30,000.000	24,850.000	18.097
T 11	−30,000.000	24,950.000	15.320
Q 12	−30,000.000	24,800.000	22.646
R 12	−30,050.000	24,850.000	18.414
S 12	−30,050.000	24,900.000	15.046

北海道遺跡の成果は、権現後遺跡の成果より、Xが＋方向（北方向）に2.227m、Yが＋方向（東方向）に13.455mの座標差がある。

測量は日経コンサルタント株式会社に委託したものである。



図A 遺構配置図

昭和60年３月21日　印刷
昭和60年３月30日　発行

八千代市北海道遺跡

発行　住宅・都市整備公団 首都圏都市開発本部
東京都新宿区新宿４丁目３番17号
財団法人　千葉県文化財センター
千葉県千葉市葛城２丁目10番１号

印刷　株式会社　弘　　文　　社
千葉県市川市市川南２丁目７番２号

八千代市北海道遺跡

—萱田地区埋蔵文化財調査報告書II—

1985

住宅・都市整備公団　首都圏都市開発本部
財団法人　千葉県文化財センター

八千代市北海道遺跡

—萱田地区埋蔵文化財調査報告書II—

図　版　編

1985

住宅・都市整備公団　首都圏都市開発本部
財団法人　千葉県文化財センター

写　真　図　版

遺跡

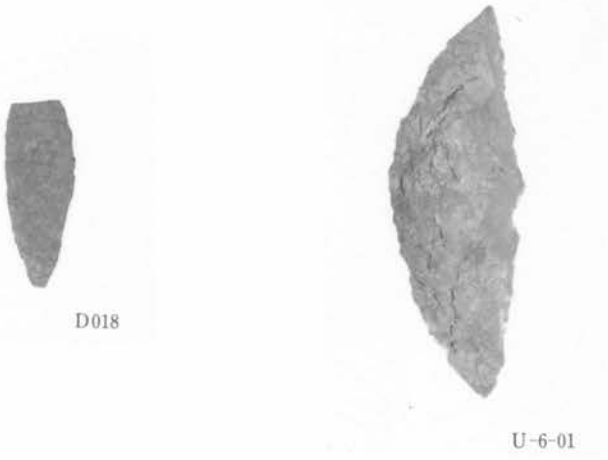
北海道遺跡と周辺の空中写真

遺跡

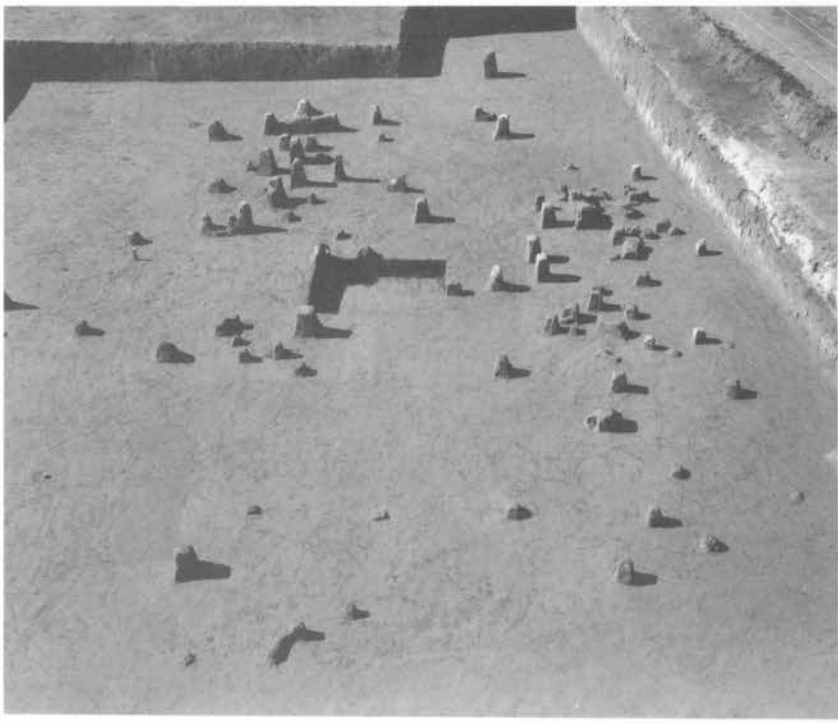
北海道遺跡全景（北東より）

1．北海道遺跡南側地域

2．北海道遺跡北側地域



1．第１文化層出土石器



2．第２文化層第２・６ブロック石器出土状況

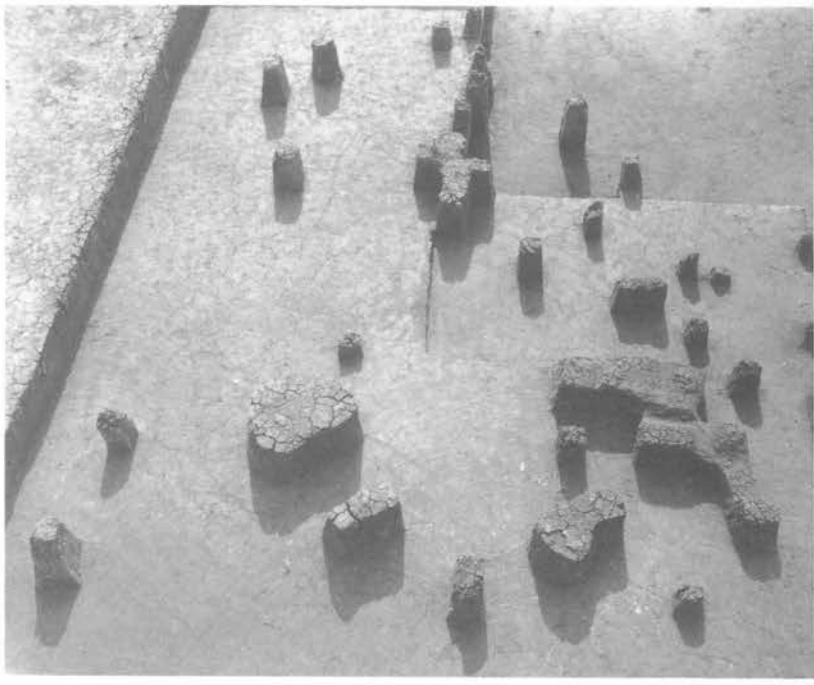
3．第２文化層第12ブロック石器出土状況

1．第２文化層第13･18ブロック石器出土状況

2．第２文化層第15ブロック石器出土状況

3．第２文化層第16ブロック石器出土状況

1．第２文化層第12～16，18
ブロック石器出土状況



2．第２文化層第17ブロック
石器出土状況

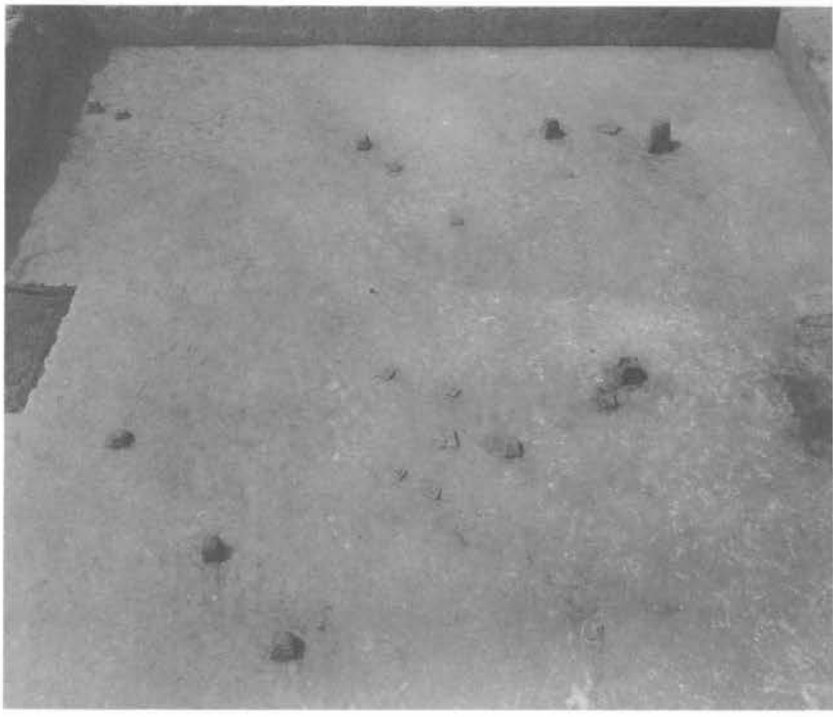
3．第２文化層第17ブロック
石器出土状況

1．第２文化層第18ブロック
石器出土状況

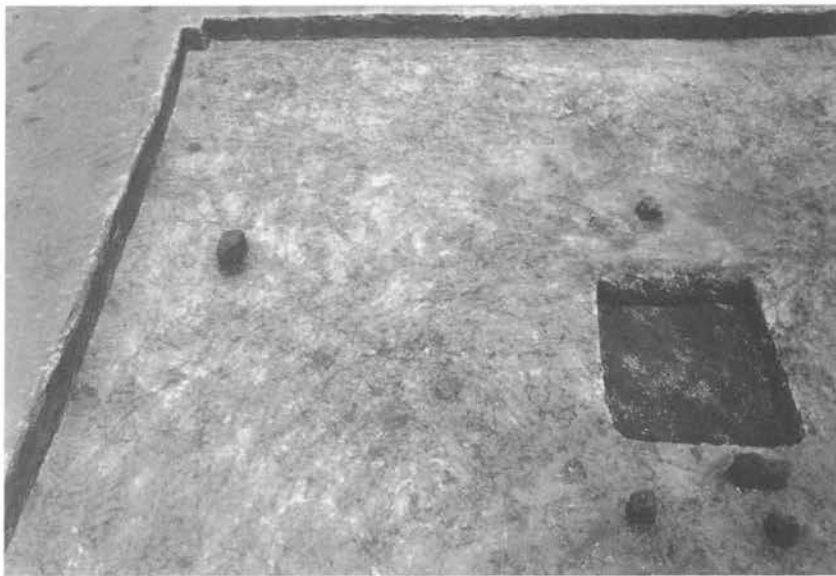
2．第２文化層第18ブロック
石器出土状況

3．第２文化層第25ブロック
石器土出状況

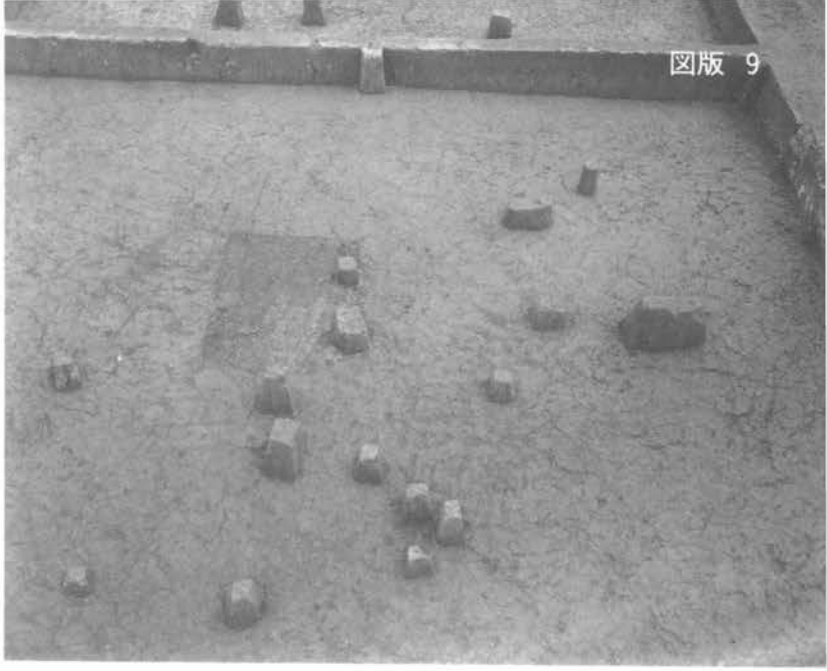
1．第２文化層第26ブロック
石器出土状況



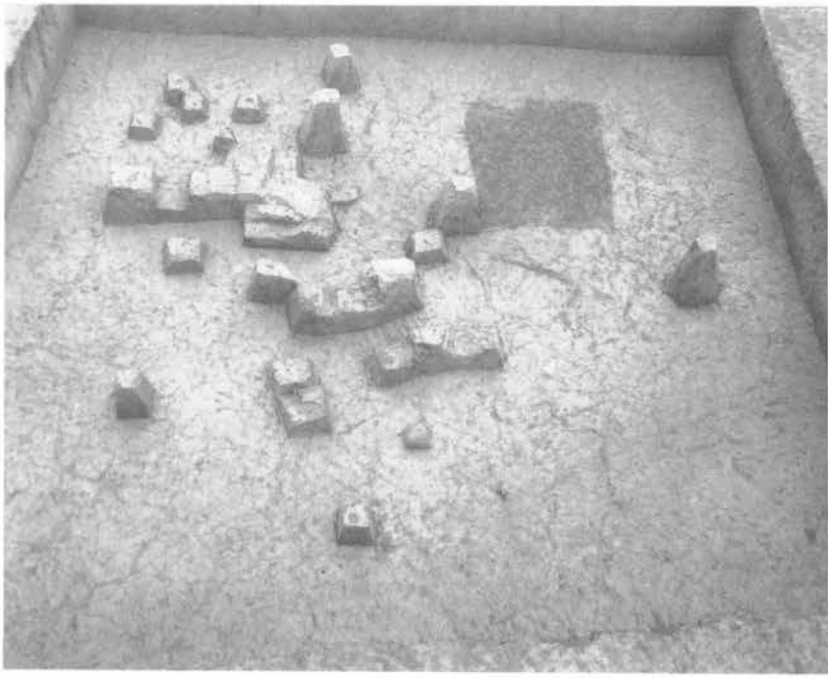
2．第２文化層第27ブロック
石器出土状況



3．第２文化層第29ブロック
石器出土状況



1．第２文化層第38ブロック
石器出土状況



2．第２文化層第43ブロック
石器出土状況

3．第２文化層第45ブロック
石器出土状況

1．第２文化層第55ブロック
石器出土状況

2．第２文化層第62ブロック
石器出土状況

3．第２文化層ブロック外
石器出土状況

S-1,1

S-1,2a

S-1,2b

S-1,2c

S-2,1

S-2,2

S-2,3

S-2,4

S-2,5

S-2,6

S-2,7

S-2,8b

S-3,1

S-3,2

S-3,3d

S-4,1

S-4,2

S-4,3

S-4,4

S-5,1

S-5,2

S-5,3

S-5,4

S-6,1

S-7,1

S-8,1

S-8,2

S-10,1

S-10,2

S-11,1

S-11,2

S-11,3

S-11,4

S-11,5

S-11,6

S-11,7

S-11,8

S-11,9

S-11,10

S-11,11

S-11,12

S-11,13

S-11,14

S-11,15b

S-11,15c

S-11,15d

S-11,15f

S-12,1

S-12,2

S-12,3

S-12,4

S-12,5

S-12,6a

S-12,6b

S-12,6c

S-12,6d

S-12,6e

S-12,6f

S-12,7a

S-12,7c

旧石器時代第2文化層遺物

S-13,1

S-13,2

S-13,3

S-13,4

S-13,5

S-13,6

S-13,7

S-13,8

S-13,9

S-13,10

S-13,11c

S-13,12a

S-13,11a

S-13,11b

S-13,12c

S-13,12d

S-13,12e

S-13,12f

S-13,12g

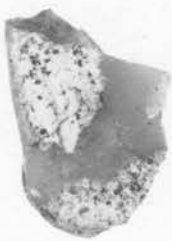
S-13,13

S-14,4a

S-14,4b

S-14,4c

S-15,1


S-15,2

S-16,1

S-16,2

S-18,1

S-18,2

S-18,3

旧石器時代第2文化層遺物

S-18,4

S-18,5

S-18,6

S-18,7

S-18,8

S-18,9

S-19,2

S-19,1

S-19,3

S-19,5

S-19,4

S-19,6

S-19,7

S-19,9

S-19,8

S-19,10

S-20,1

S-20,2

S-21,1

S-21,2

S-21,3

S-21,4

S-21,5b

S-21,5a

S-22,1

S-23,1

S-23,2

旧石器時代第2文化層遺物

S-23,3

S-23,4

S-23,5

S-23,6

S-24,1

S-24,2

S-24,3a

S-25,4a

S-25,4c

S-25,4b

S-25,5a

S-25,5b

S-25,5d

S-25,3b

S-25,1

S-25,2

S-27,1

S-28,1

S-29,1

S-38,1

S-38,2

S-39,1

S-39,3

S-39,2

S-39,4

S-39,5

S-43,1

S-43,2

S-43,3

S-43,4

S-45,1

S-45,2

S-45,3

S-51,1

S-55,1

S-55,3

S-55,2

S-62,1

S-62,3

S-62,2

ブロック外1

ブロック外2

ブロック外3

ブロック外4

ブロック外5

ブロック外6

ブロック外7

ブロック外8

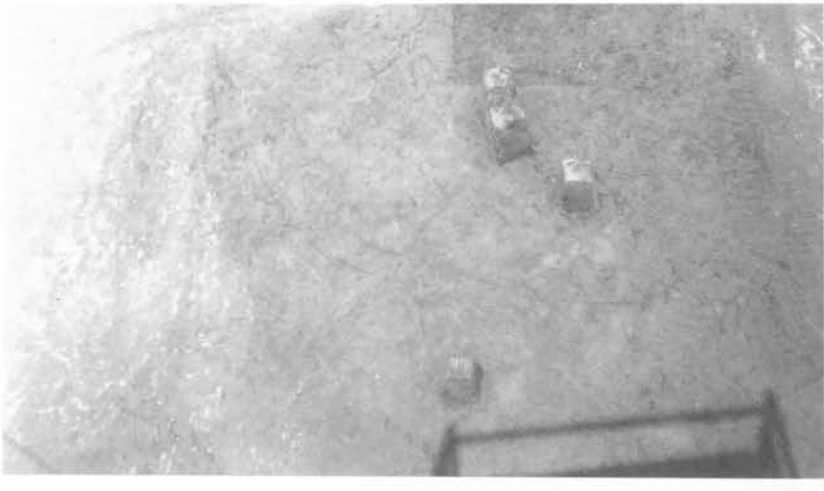
ブロック外9

ブロック外10

旧石器時代第2文化層遺物

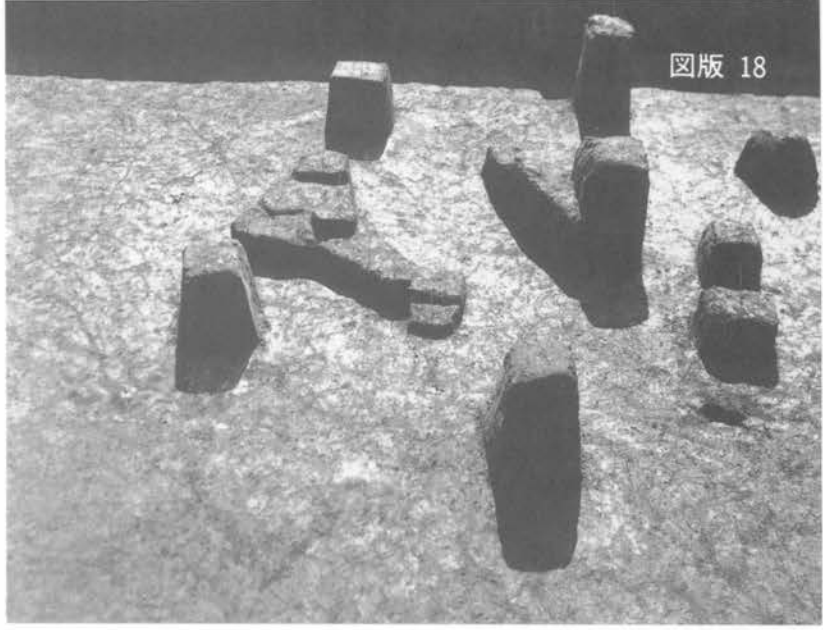
ブロック外11

ブロック外12



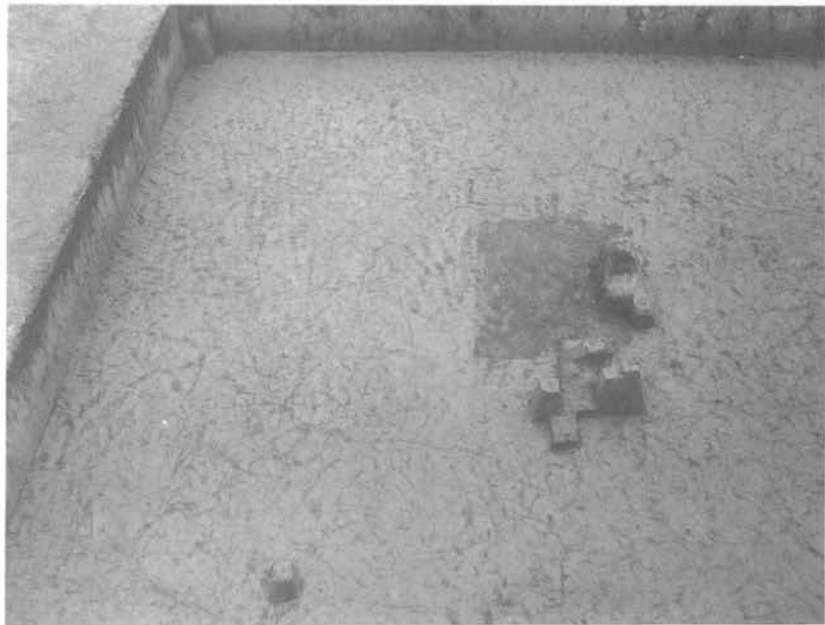
1．第３文化層第30ブロック
石器出土状況

2．第３文化層第31ブロック
石器出土状況



1．第３文化層第31ブロック
石器出土状況

2．第３文化層第32ブロック
石器出土状況



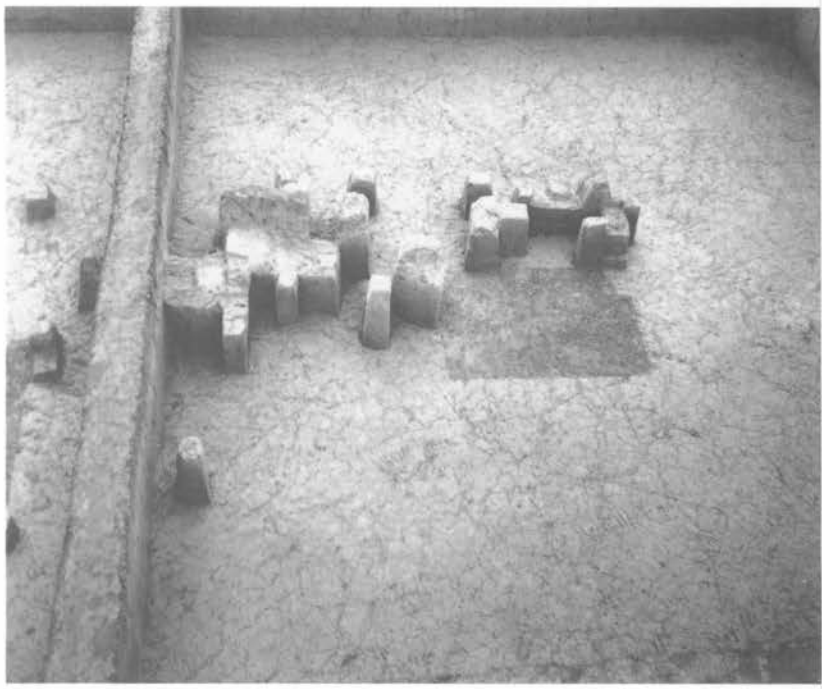
3．第３文化層第35ブロック
石器出土状況

1．第３文化層第36ブロック
石器出土状況

2．第３文化層第37ブロック
石器出土状況

3．第３文化層第37ブロック
石器出土状況

1．第３文化層第37ブロック
石器出土状況



2．第３文化層第40ブロック
石器出土状況

3．第３文化層第41ブロック
石器出土状況

1．第３文化層第42ブロック
石器出土状況

2．第３文化層第44ブロック
石器出土状況

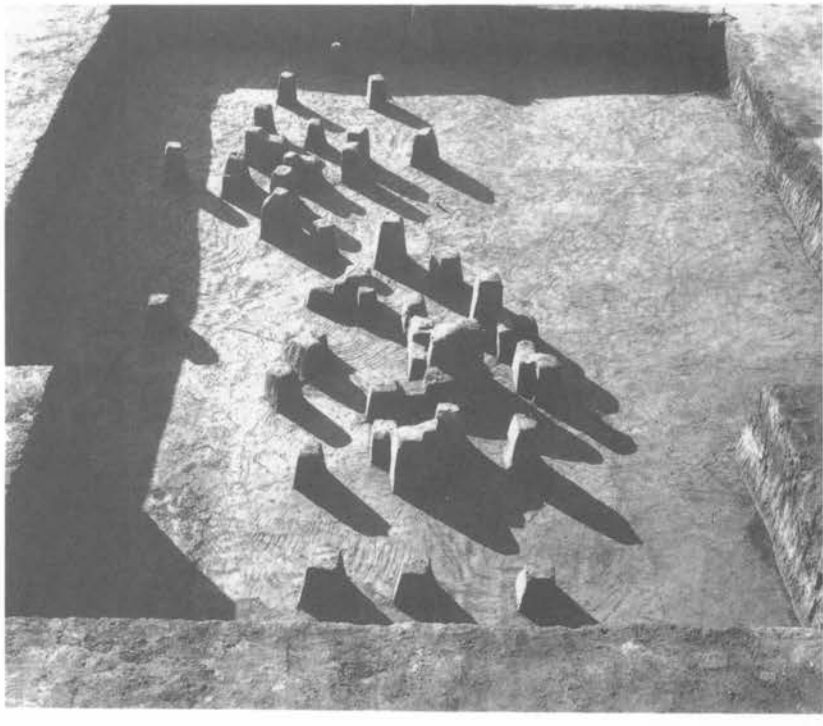
3．第３文化層第47ブロック
石器出土状況

1．第３文化層第49ブロック
石器出土状況

2．第３文化層第50ブロック
石器出土状況

3．第３文化層第53ブロック
石器出土状況

1．第３文化層第53ブロック
石器出土状況



2．第３文化層第54ブロック
石器出土状況

3．第３文化層第56ブロック
石器出土状況

1．第３文化層第57ブロック
石器出土状況

2．第３文化層第58ブロック
石器出土状況

3．第３文化層第59ブロック
石器出土状況

S-30,1

S-31,1

S-31,2

S-31,4

S-32,1

S-32,2

S-32,3

S-33,1

S-33,2

S-34,1

S-35,1

S-35,2

S-36,1

S-36,2

S-36,3

S-36,4

S-36,5

S-37,1

S-40,1

S-40,2a

S-40,3

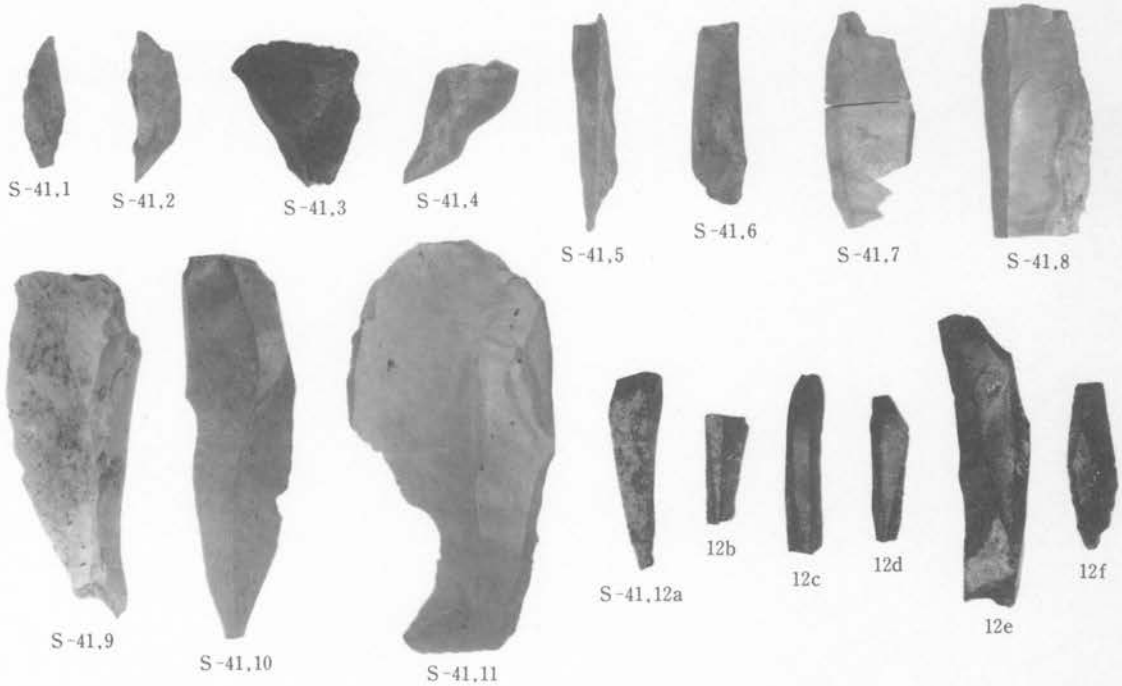
S-37,2

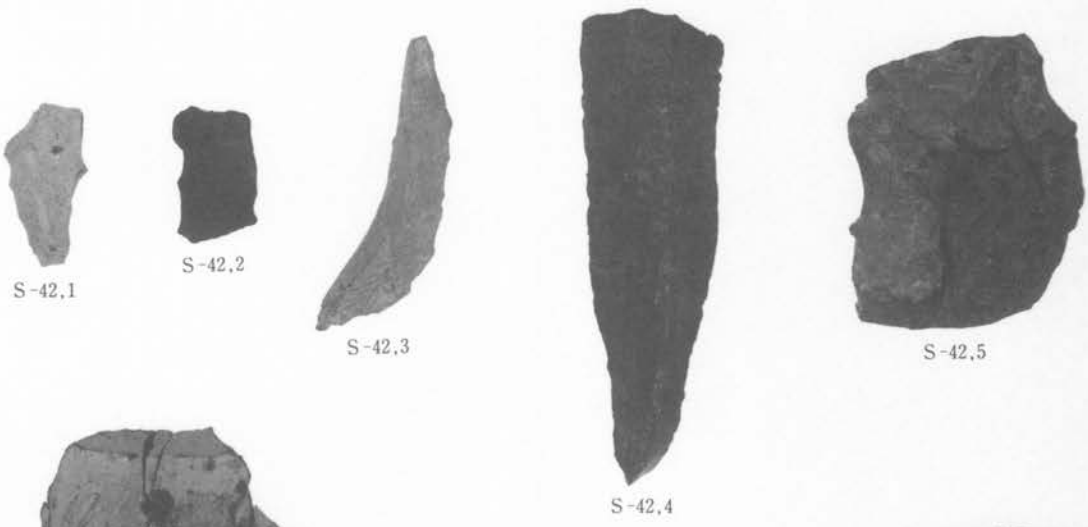
S-40,2b

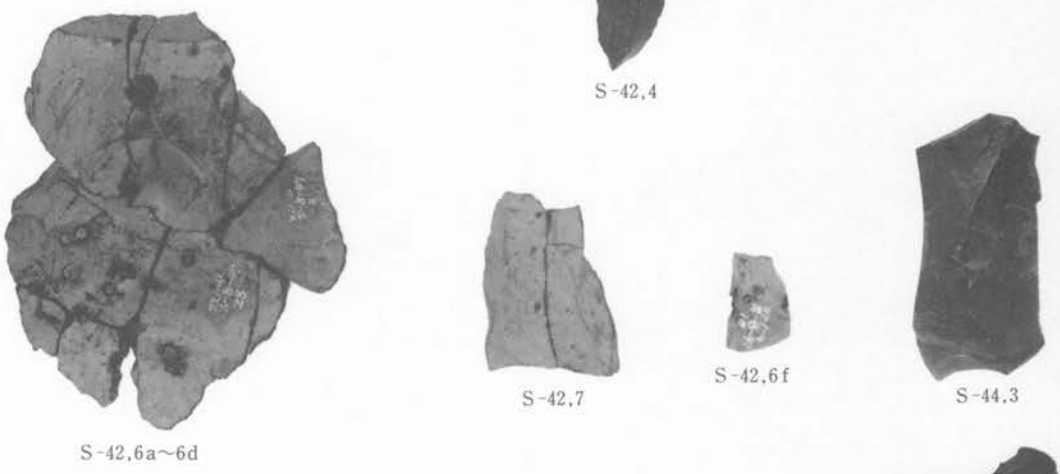
S-40,4

S-40,5

旧石器時代第3文化層遺物


S-41,1
S-41,2
S-41,3
S-41,4
S-41,5
S-41,6
S-41,7
S-41,8
S-41,9
S-41,10
S-41,11
S-41,12a
12b
12c
12d
12e
12f


S-42,1
S-42,2
S-42,3
S-42,4
S-42,5


S-42,6a～6d
S-42,7
S-42,6f
S-44,3

S-44,1
S-44,2
S-44,6a
S-44,6d
S-44,6e
S-44,4

S-44,5a

S-44,6b

S-44,6f

S-46,1

S-47,1

S-47,2

S-47,3a

S-47,3b

S-47,4

S-47,6a

S-47,6e

S-47,7c

S-48,1

S-48,2

S-49,1

S-49,2

S-49,3

S-49,4

S-49,5

S-49,6a

S-49,7

S-49,6b

S-50,1

S-50,2

S-50,3

S-50,4

S-50,5

S-50,7

S-50,6

S-50,8

S-50,9

S-52,1

S-52,2

S-52,4b

S-52,3

S-52,4a

S-53,1

S-54,5

S-54,1

S-54,2

S-54,4

S-54,6a

S-54,6d

S-54,6c

S-54,3

S-54,6c

S-54,6b

S-57,2

S-57,1

S-56,1

S-54,6f

旧石器時代第3文化層遺物

S-58,1

S-59,1

S-59,2

S-60,3

S-60,4

S-60,1

S-60,2

S-61,1

S-61,2

S-61,3

S-61,4

S-61,5

S-61,6

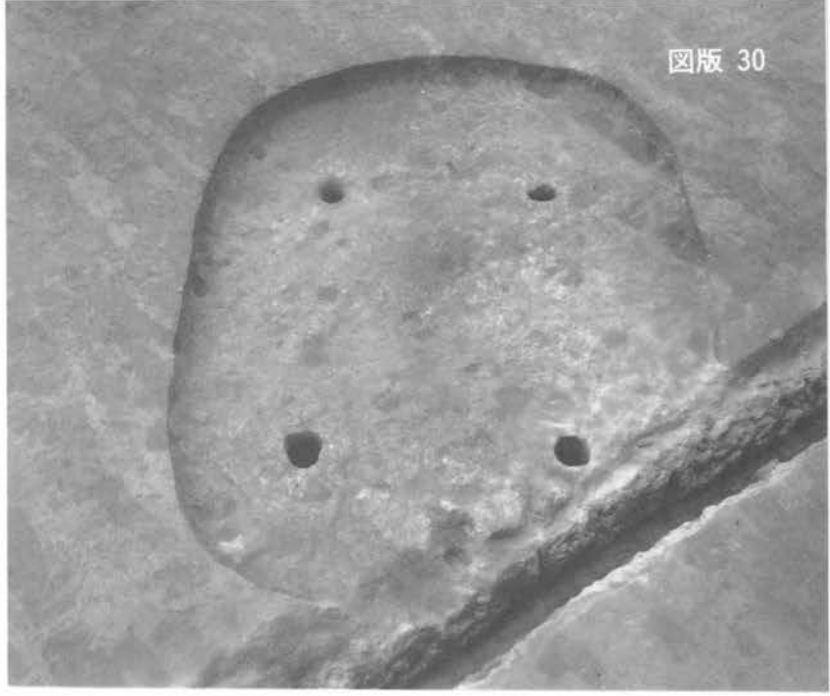
表採 1

表採 5

表採 2

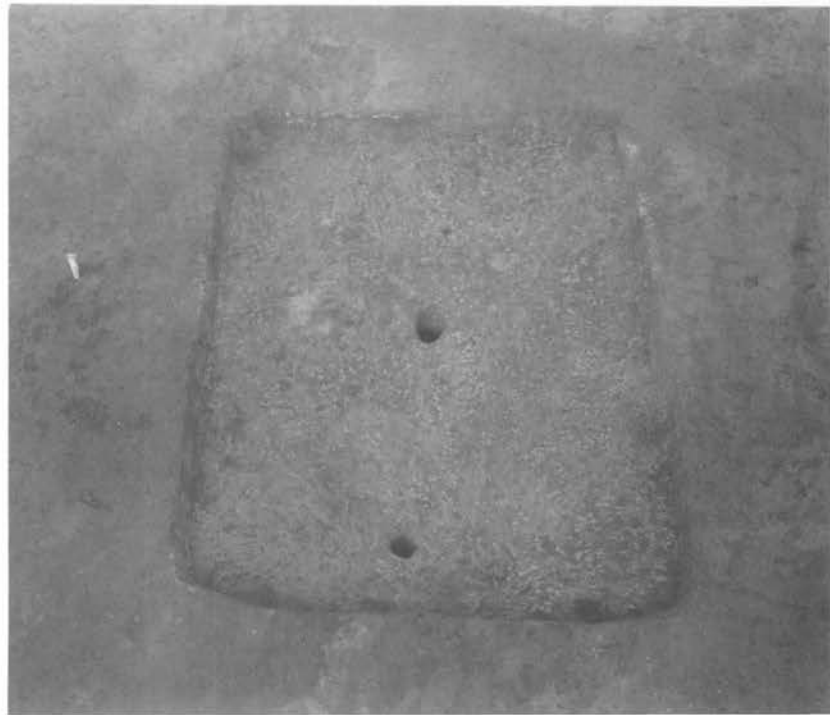
表採 3

表採 4



1．D049号遺構全景

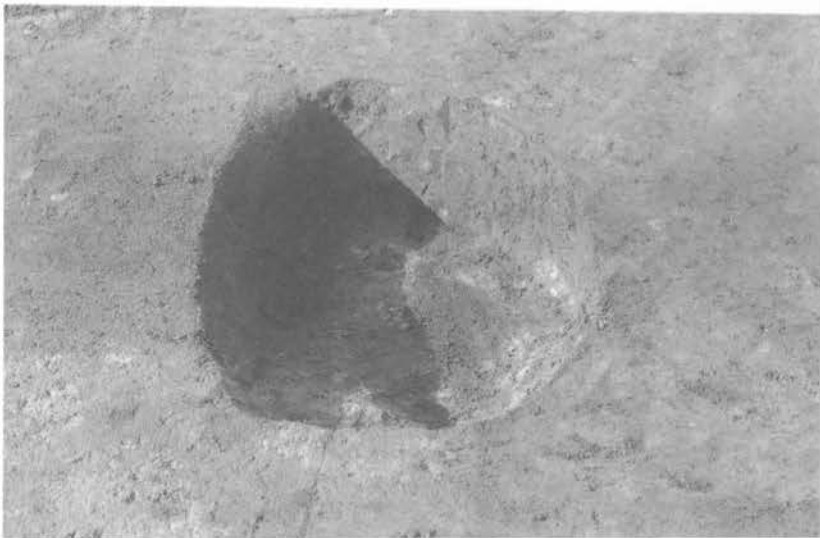
2．D049号遺構炉検出状況



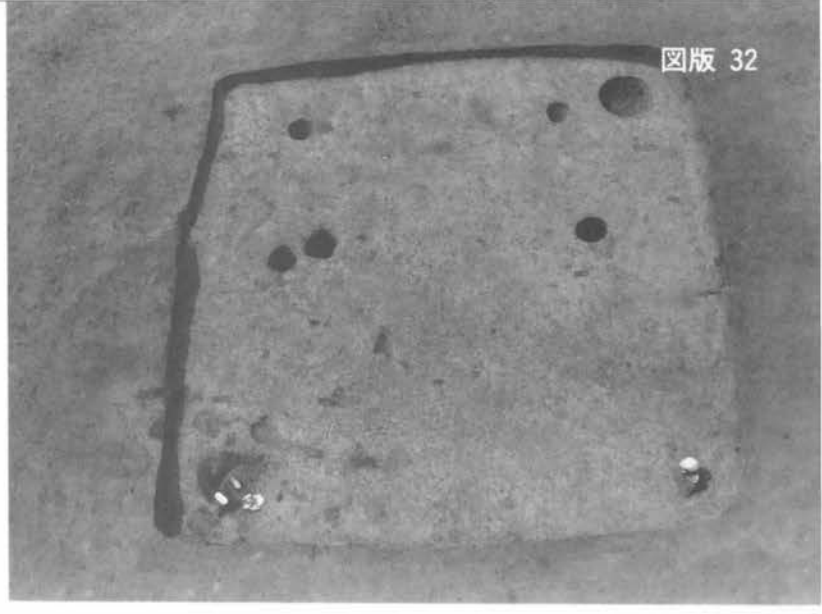
3．D131号遺構全景

1．D104号遺構全景

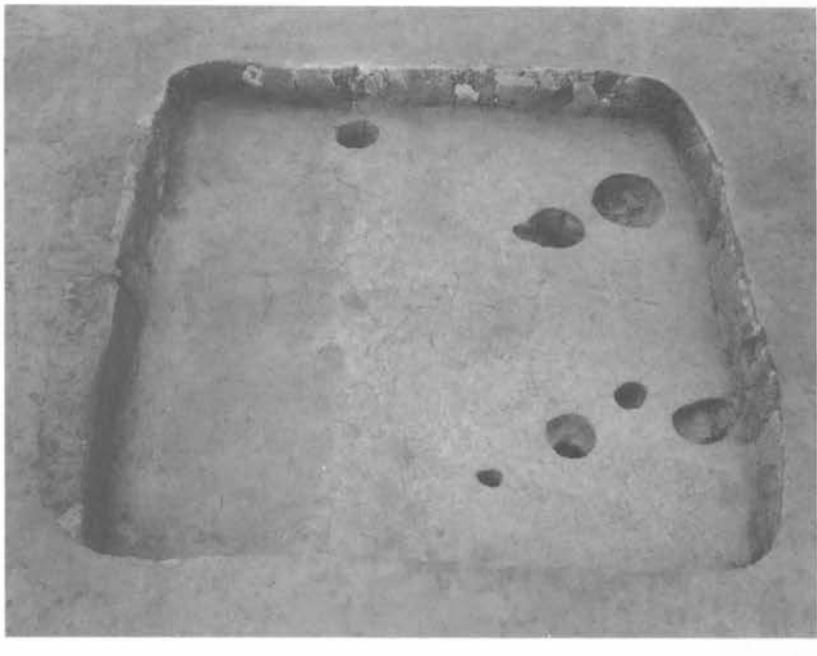
2．D105号遺構全景



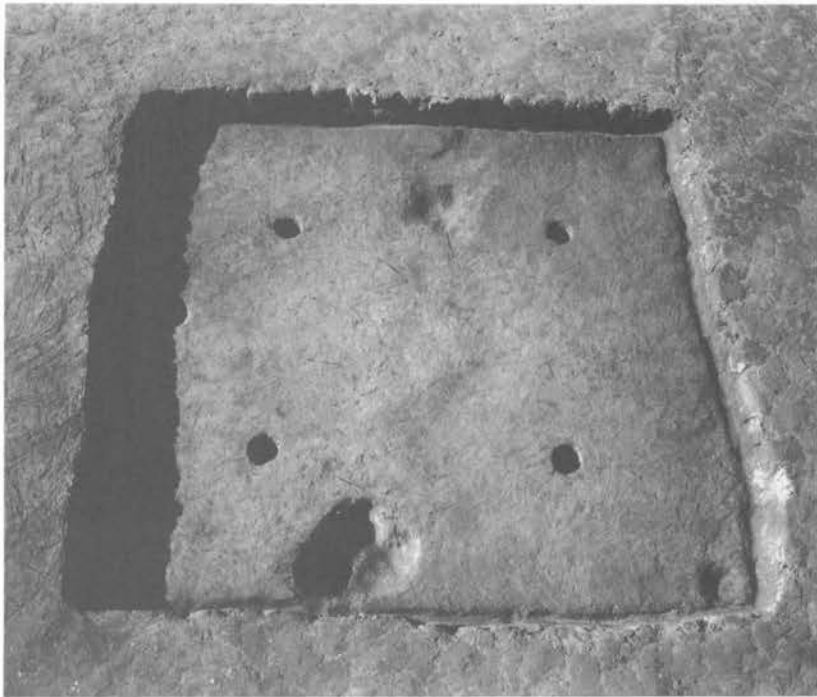
3．D105号遺構炉検出状況



1．D010号遺構全景



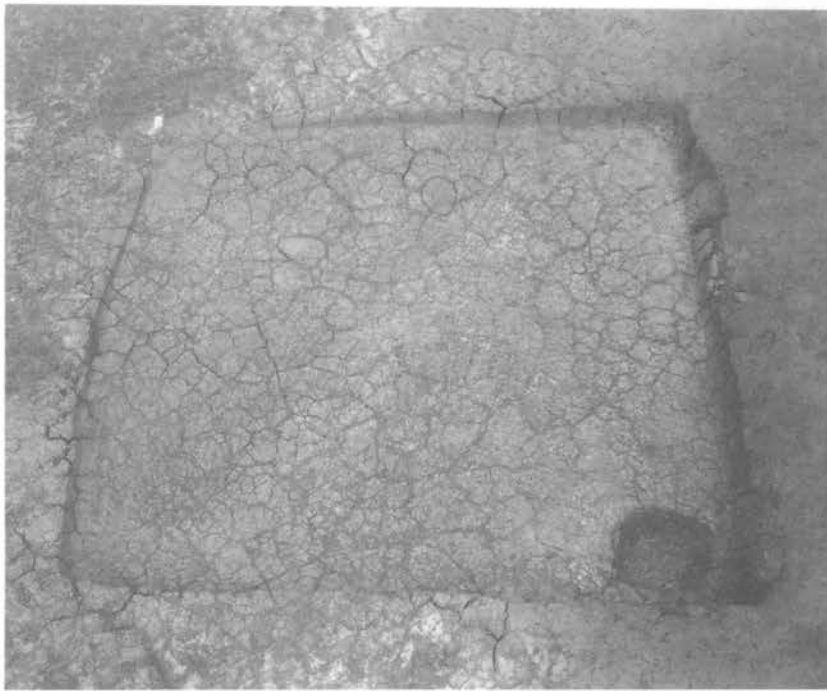
2．D011号遺構全景



3．D012号遺構全景

1．D013号遺構全景

2．D013号遺構ピット
検出状況

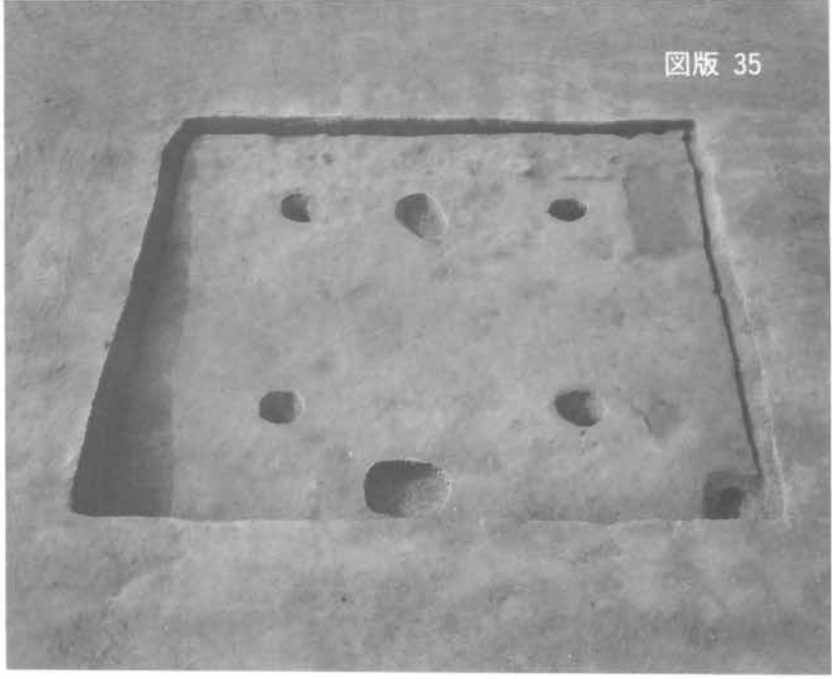


3．D014号遺構全景

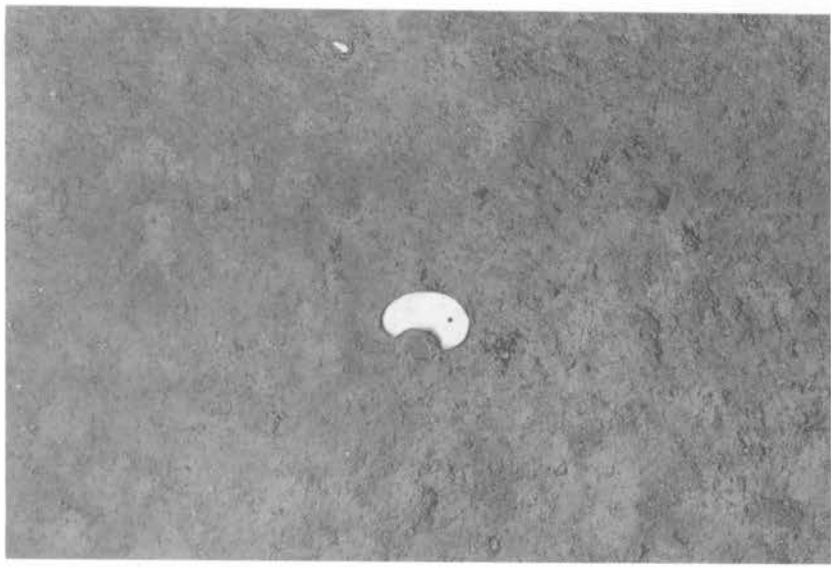
1．D014号遺構遺物出土状況

2．D014号遺構遺物出土状況

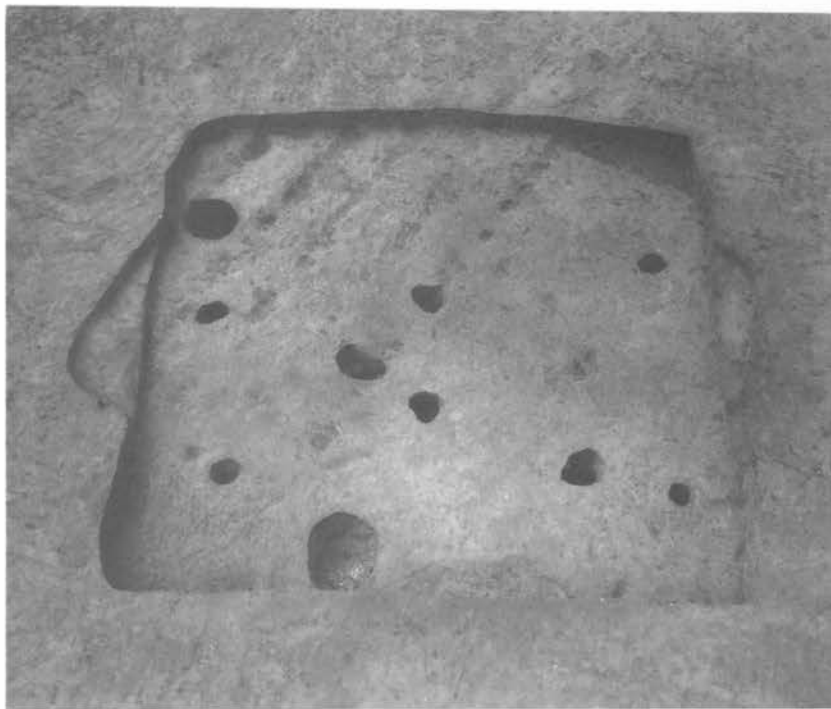
3．D014号遺構遺物出土状況



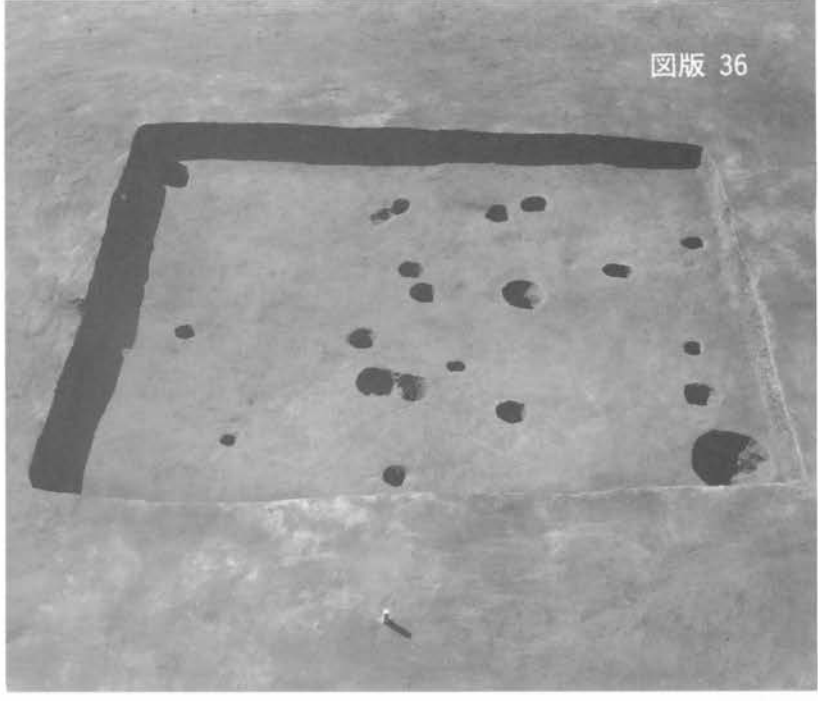
1．D016号遺構全景



2．D016号遺構遺物出土状況

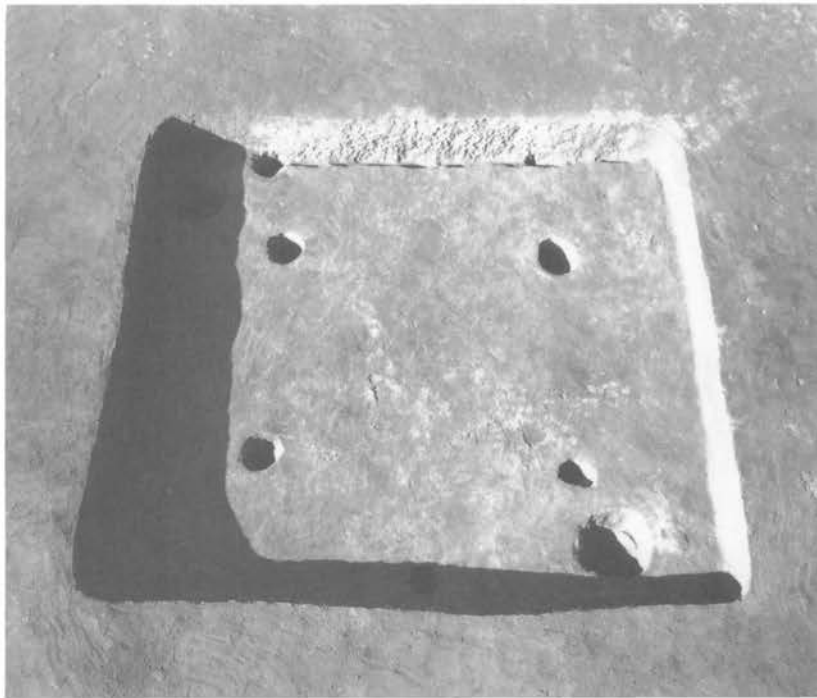


3．D022号遺構全景



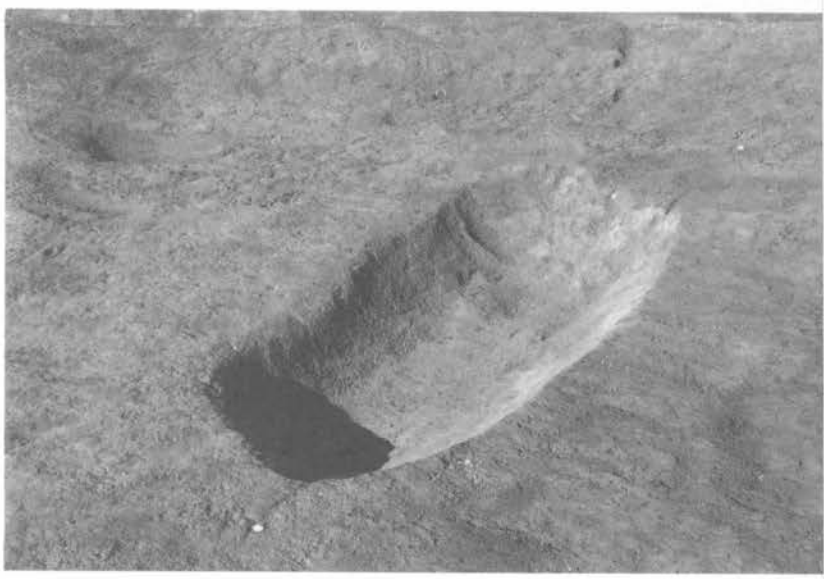
1．D055号遺構全景

2．D055号遺構炉検出状況

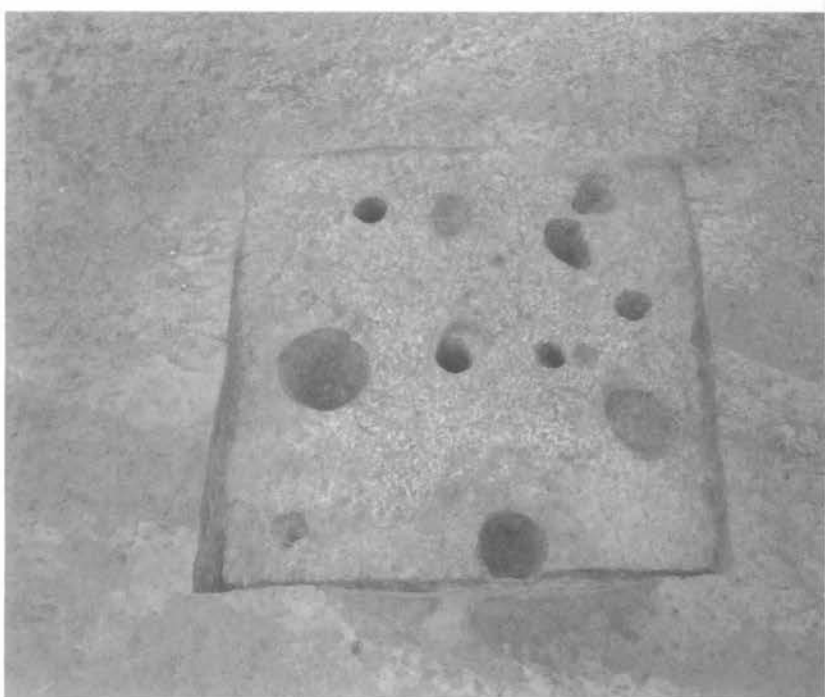


3．D056号遺構全景

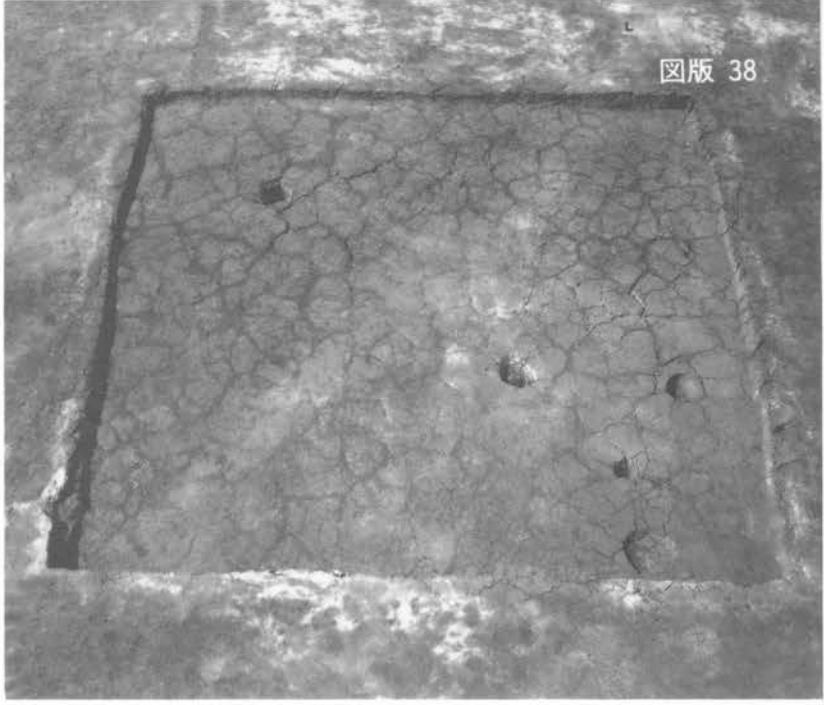
1．D057号遺構全景



2．D057号遺構炉検出状況



3．D058号遺構全景



1．D059号遺構全景

2．D059号遺構炉検出状況

3．D080号遺構全景

D010,1(⅓)

D010,9(½)

D010,10(½)

D010,11(½)

D010,68(½)

D010,13(½)

D011,28

D011,29

D013,5(½)

D012,82(⅔)

D012,83(⅔)

古墳時代中期第Ⅲ群遺物

D013,3(½)

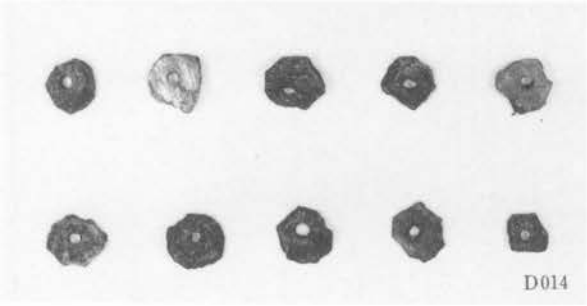
D013,4(½)

D013,30(½)

D013,29(⅔)

D014,49

D014,46



D014

D016,4(½)

D016,39

D016,37

D016,5(½)

D016,44(⅔)

D016,43(⅔)

古墳時代中期第Ⅲ群遺物

D022,1(½)

D022,28

D022,29

D022,30

D022,2(½)

D022,31

D022,32

D055,3(⅓)

D055,19(⅓)

D055,16(½)

D055,18(½)

古墳時代中期第Ⅲ群遺物

D055,10(½)

D055,2(⅓)

D055,14(½)

D056,1(⅓)

D056,2(⅓)

D058,4(½)

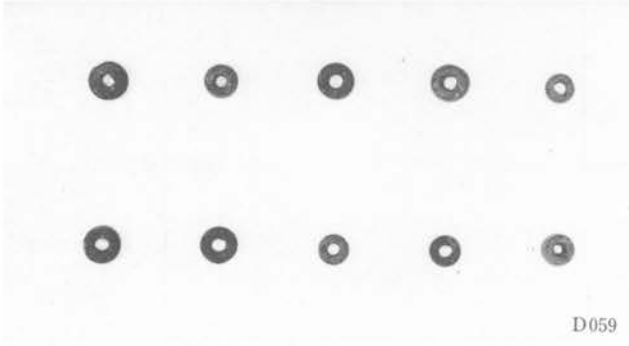
D057,4(½)

D059,50

D059,48

D059,47

古墳時代中期第Ⅲ群遺物



D059

D059,51

D059,45

D080,1(⅓)

D080,2(⅓)

古墳時代中期第Ⅲ群遺物、第Ⅳ群遺構

1．D036号遺構全景

1．D039号遺構全景

2．D039号遺構遺物出土状況

D036,3(½)

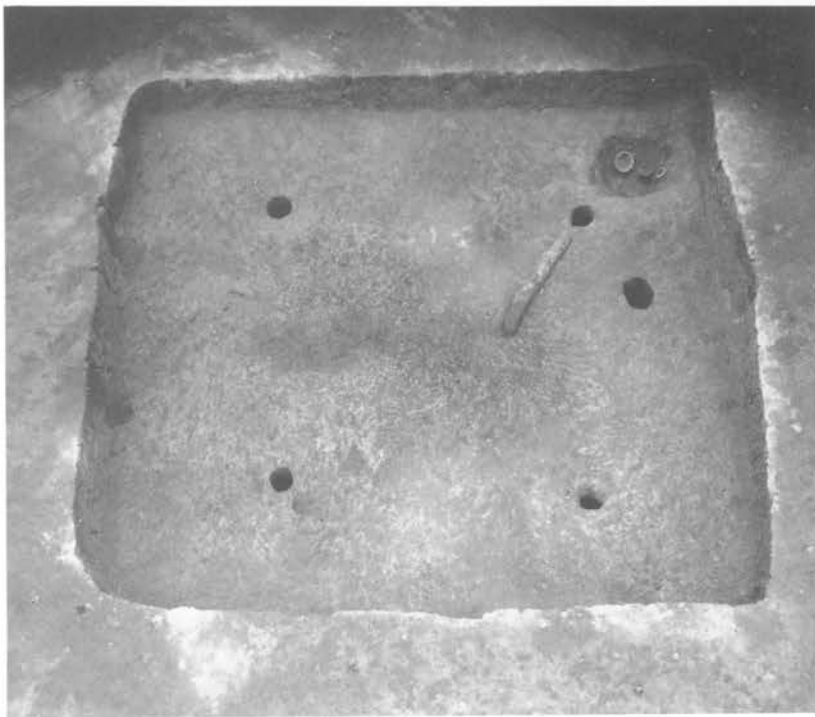
D039,2(⅓)

D039,1(⅓)

D039,14(⅕)

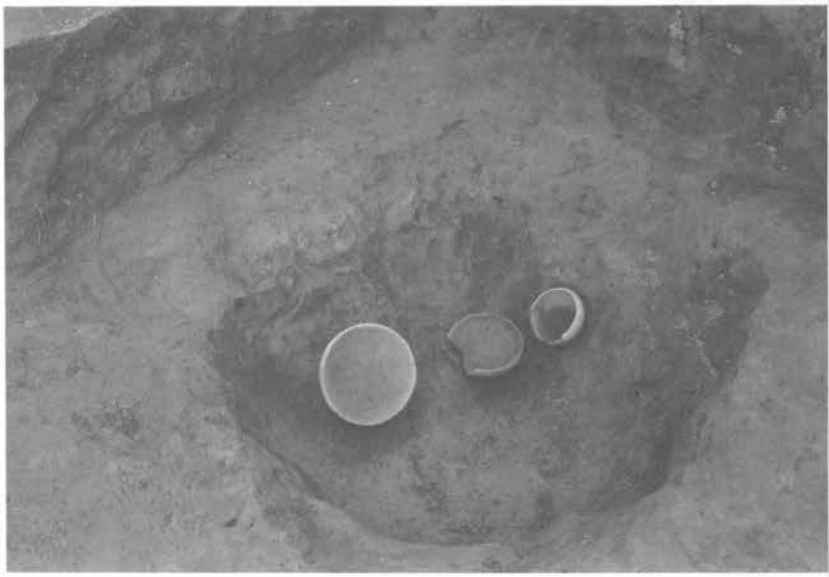
D039,22(½)

D039,17(⅓)



1．D002号遺構全景

1．D002号遺構遺物出土状況



2．D002号遺構遺物出土状況

3．D077号遺構全景

1．D077号遺構遺物出土状況

D002,9(½)

D002,7(⅓)

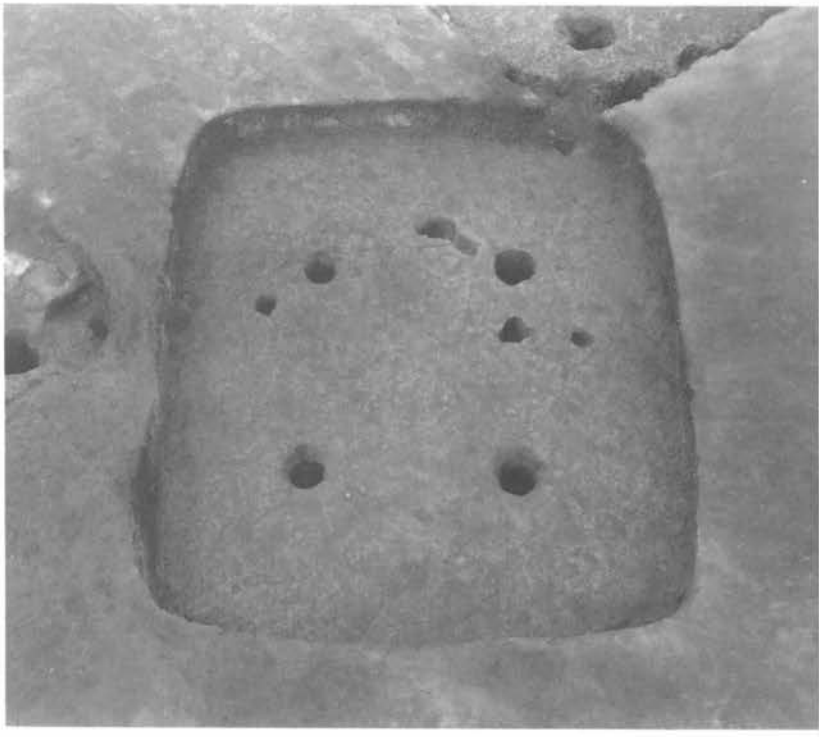
D002,11(½)

D002,13(½)

D077,2(⅓)

D002,12(⅓)

1．D021号遺構全景

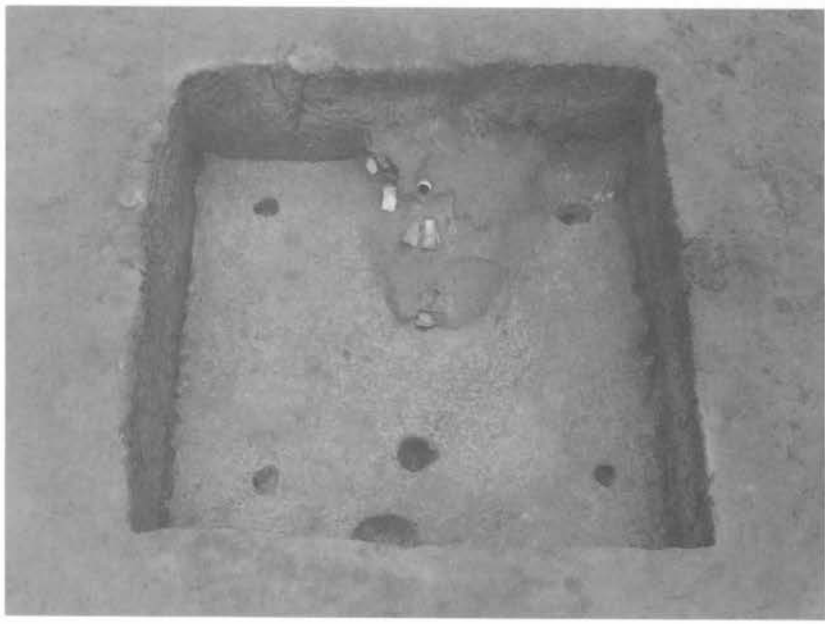


2．D026号遺構全景

D021,6(½)

D021,7(½)

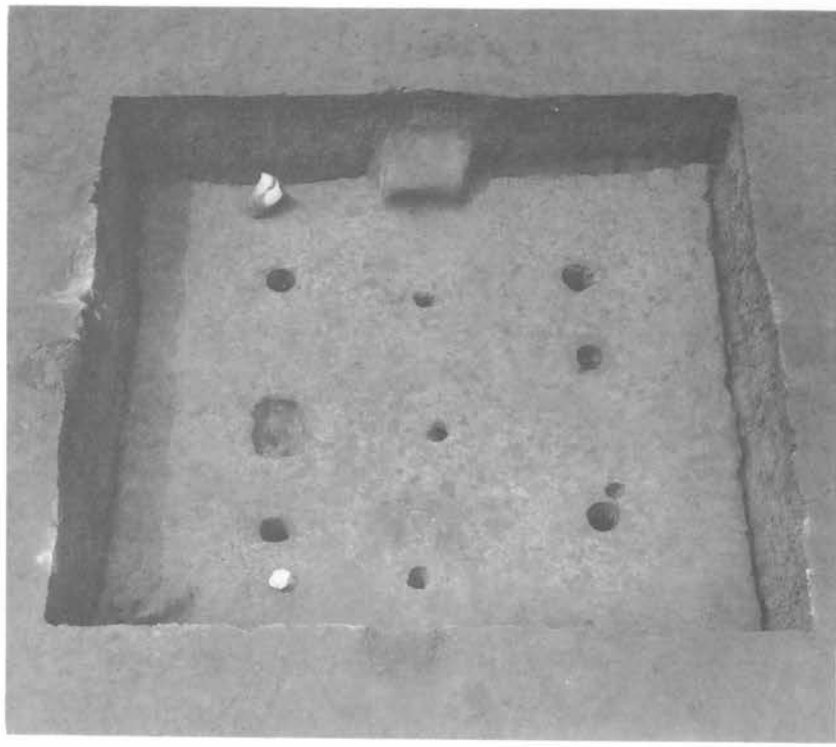
1．D001号遺構全景



2．D005号遺構全景

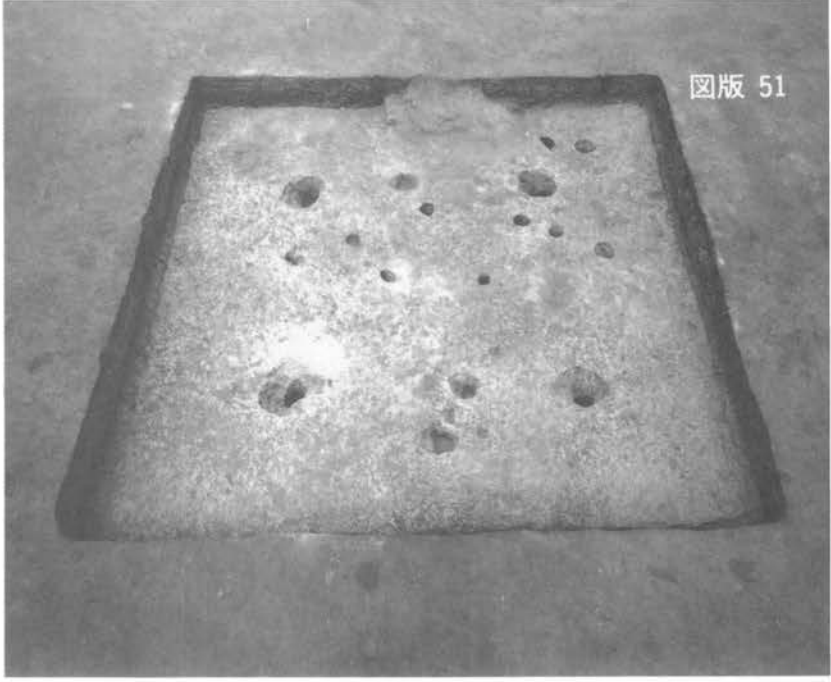
3．D005号遺構遺物出土状況

1．D005号遺構カマド
検出状況



2．D006号遺構全景

3．D006号遺構カマド
検出状況



1．D037号遺構全景

2．D037号遺構カマド
検出状況

D001,5(½)

D001,6(½)

D001,4(½)

D001,10(½)

D001,9(½)

D001,7(½)

D001,8(½)

D001,3(½)

D005,18(½)

D005,2(⅓)

D005,19(½)

D005,15(½)

D005,13(½)

D005,14(½)

古墳時代後期第Ⅰ群遺物

D005,12(½)

D005,10(½)

D005,7(⅓)

D005,3(⅓)

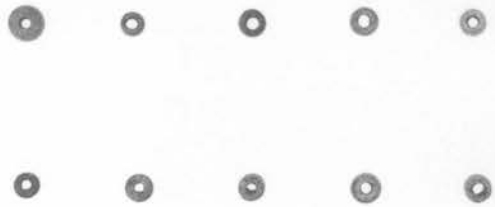
D005,6(⅓)

D005,5(½)

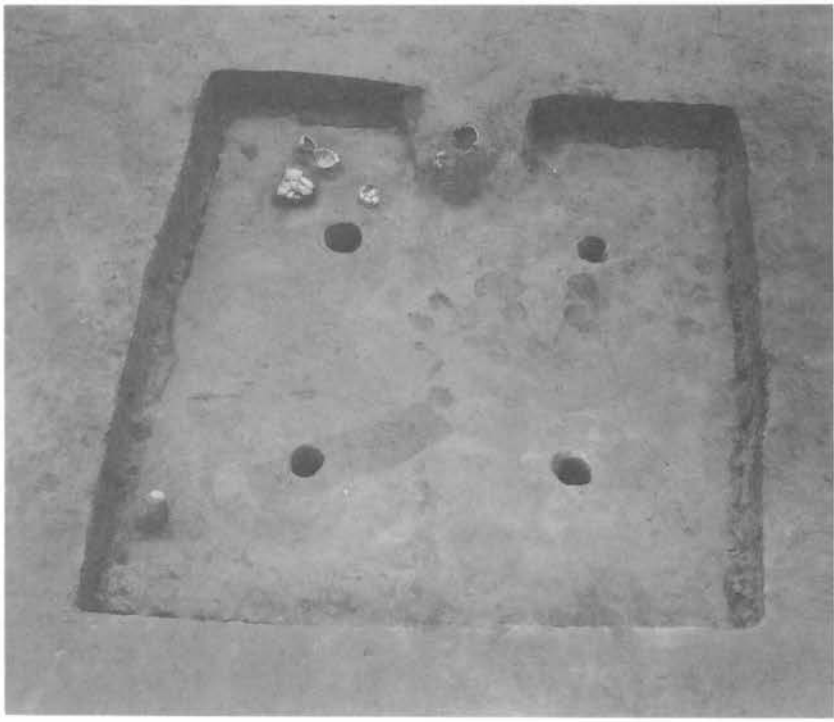
D006,1(½)

D037,1(½)

D037,5(½)

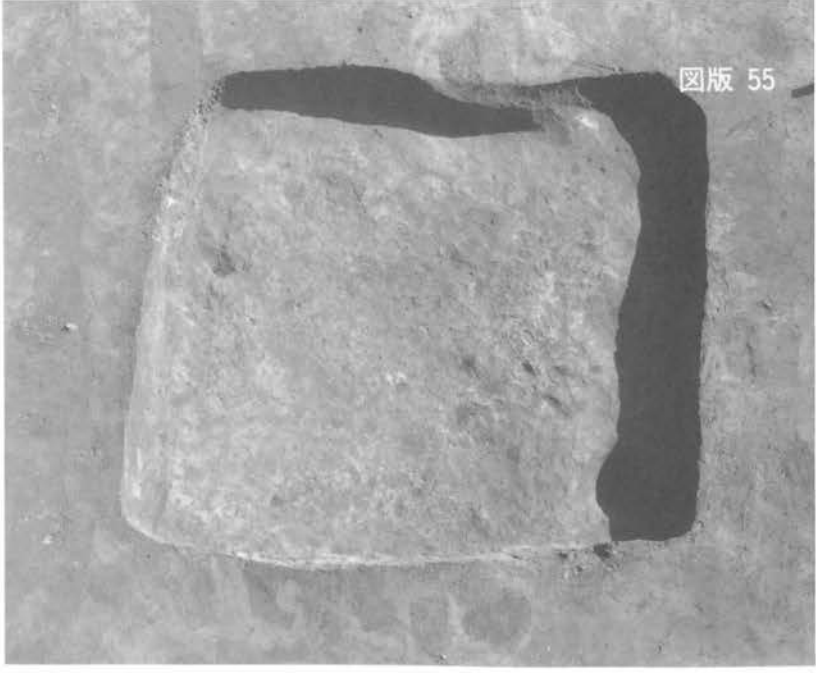


D037



1．D040号遺構全景

2．D040号遺構カマド
検出状況



1．D041号遺構全景

D040,1(⅓)

D040,5(½)

D040,4(½)

D041,1(½)

1．D020号遺構全景

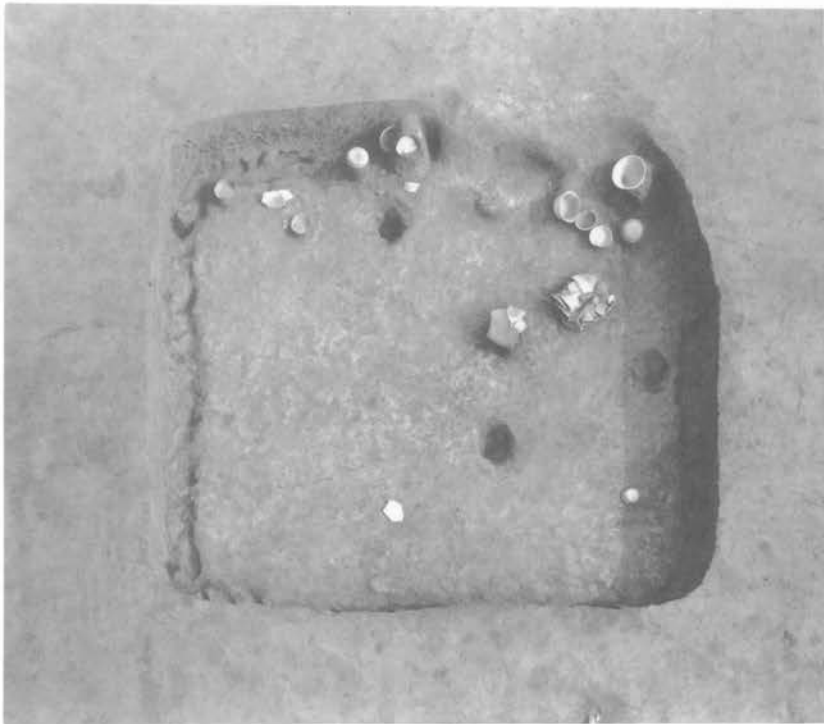
2．D020号遺構カマド
検出状況

D020,1(¼)

D020,3(⅓)

1．D117号遺構全景

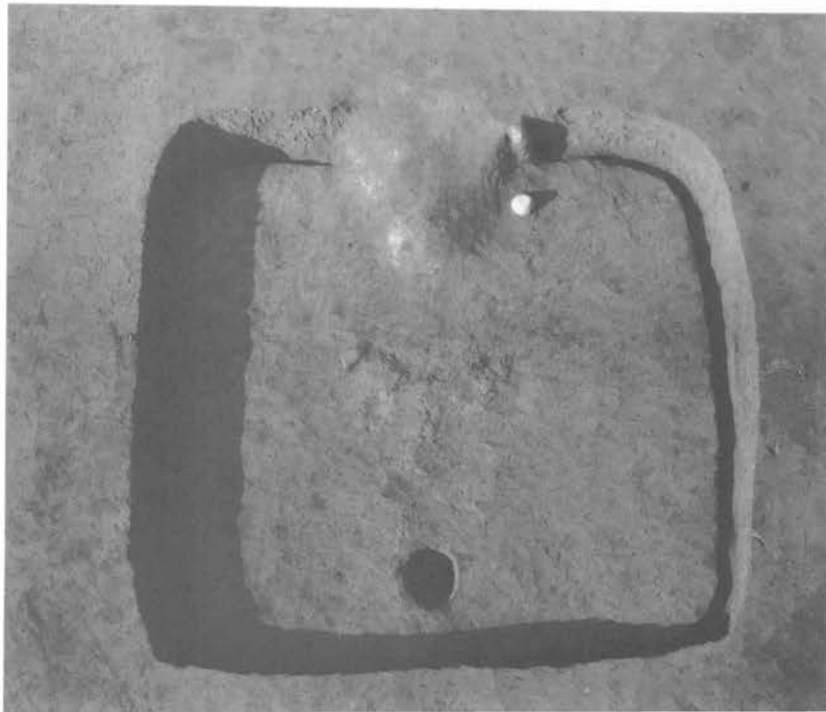
2．D117号遺構カマド
検出状況



3．D118号遺構全景

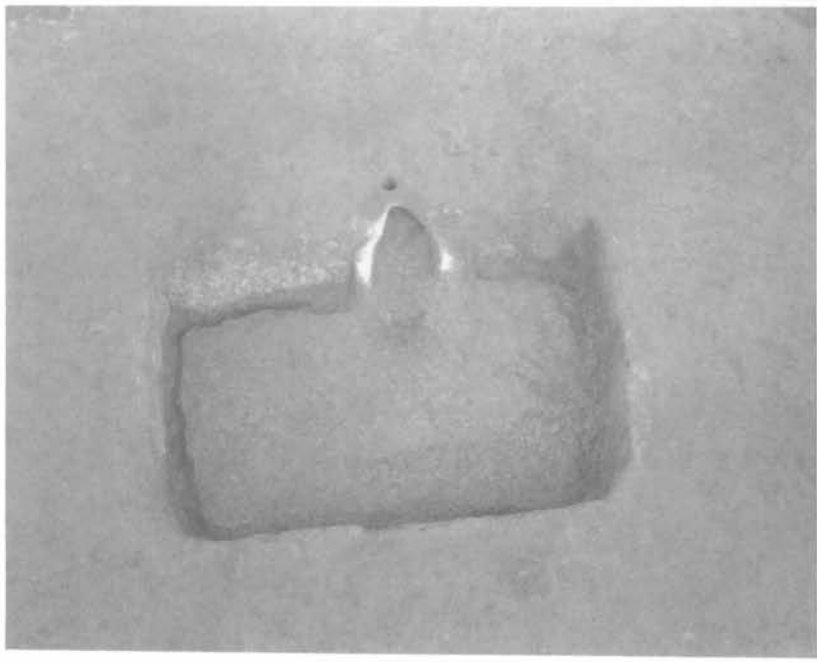
1．D118号遺構遺物出土状況

2．D118号遺構カマド
検出状況



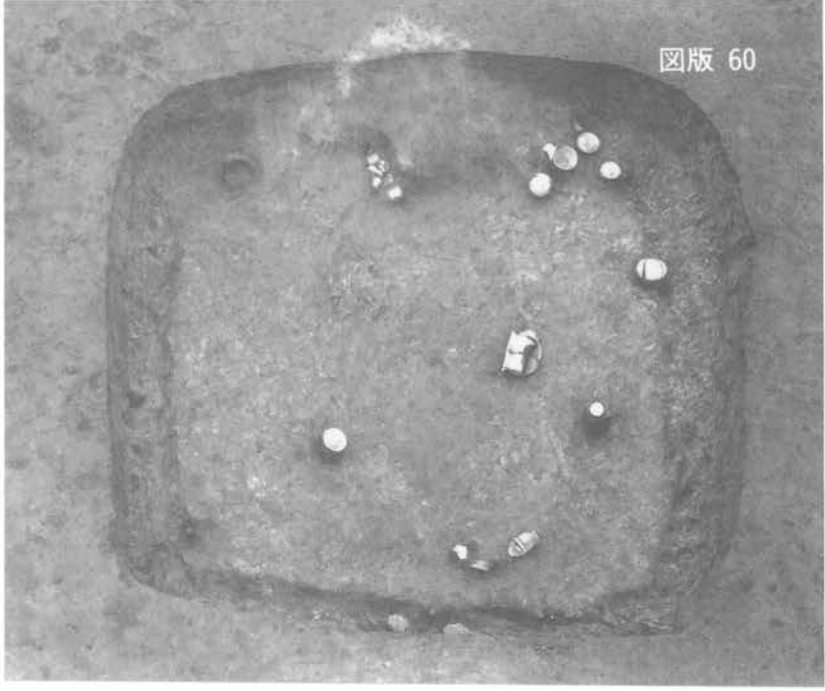
3．D119号遺構全景

1．D119号遺構カマド
掘りかた



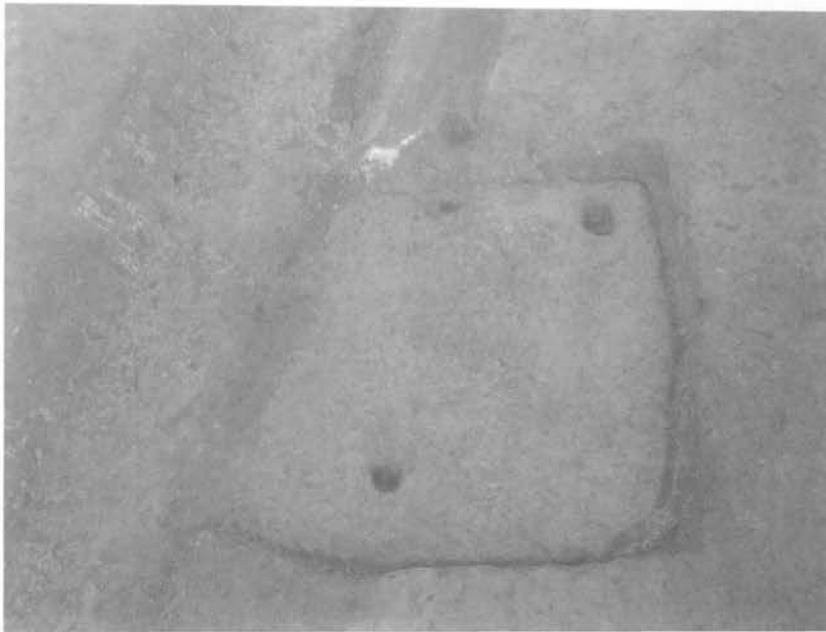
2．D120号遺構全景

3．D120号遺構カマド
検出状況



1．D121号遺構全景

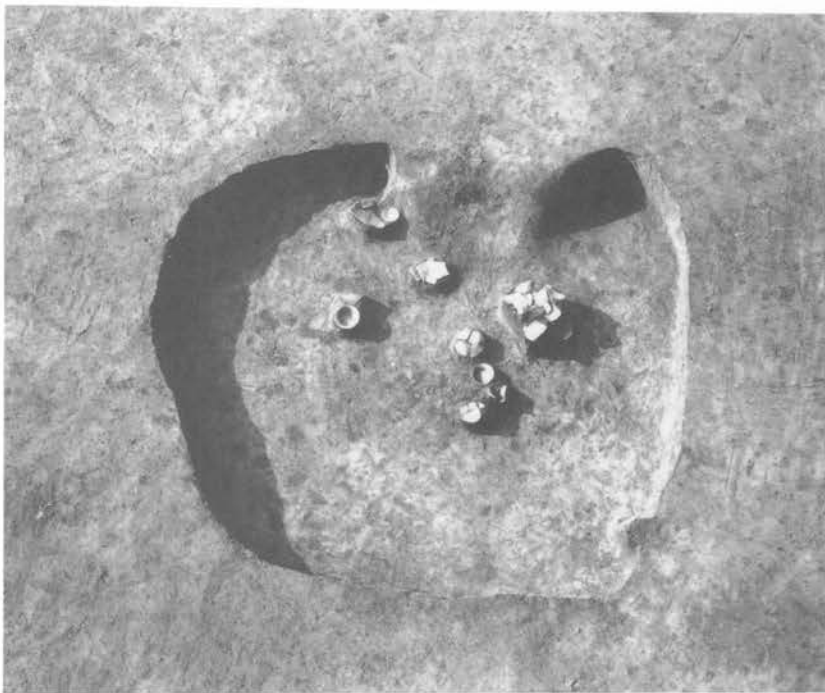
2．D121号遺構カマド
検出状況



3．D136号遺構全景

1．D139号遺構全景

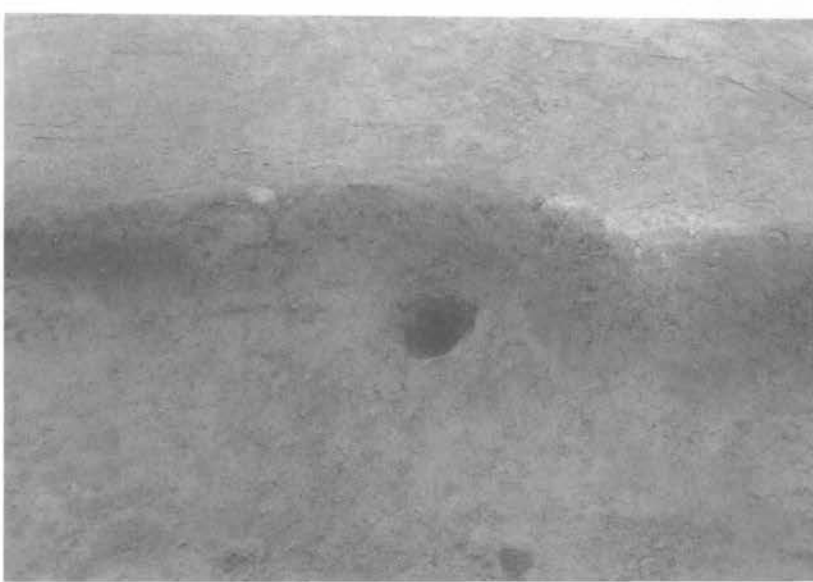
2．D139号遺構カマド
検出状況



3．D140号遺構遺物出土状況

1．D140号遺構全景

2．D140号遺構遺物出土状況



3．D140号遺構カマド
掘りかた

D117,1(⅓)

D117,2(½)

D117,3(½)

D118,1(¼)

D118,4(½)

D118,5(½)

D118,2(¼)

D118,6(½)

D118,7(½)

D118,8(½)

D118,9(½)

D118,10(½)

D118,12(½)

D118,13(½)

D118,14(½)

D118,15(⅓)

D118,16(½)

D120,2(½)

D121,6(⅓)

D121,1(⅓)

D120,1(⅓)

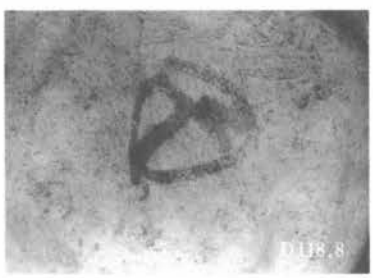
D139,1(¼)

D121,7(½)

D140,3(½)

D121,8(½)

D140,2(½)

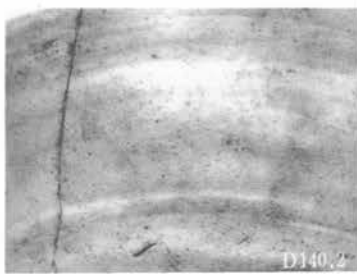


D118,8

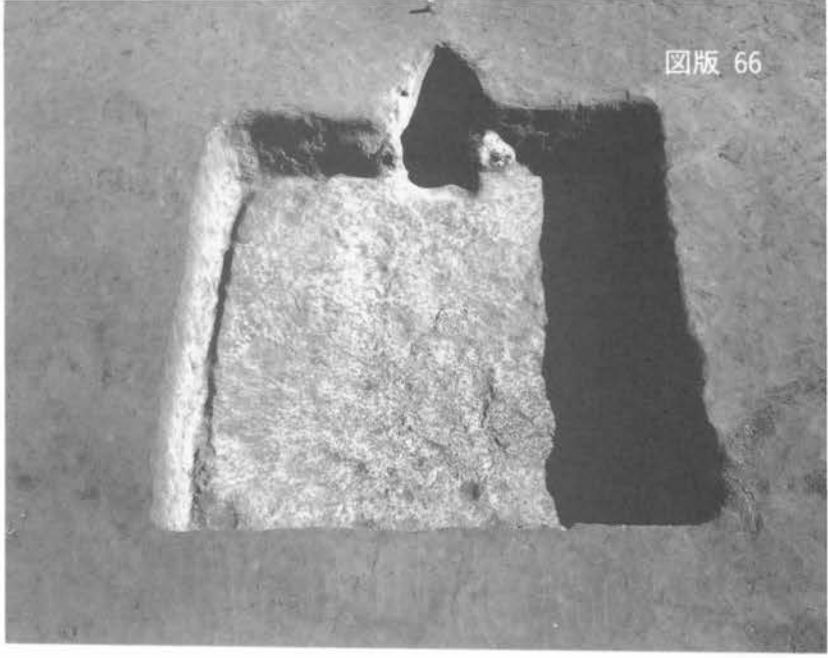
D121,6

D140,3

D140,4

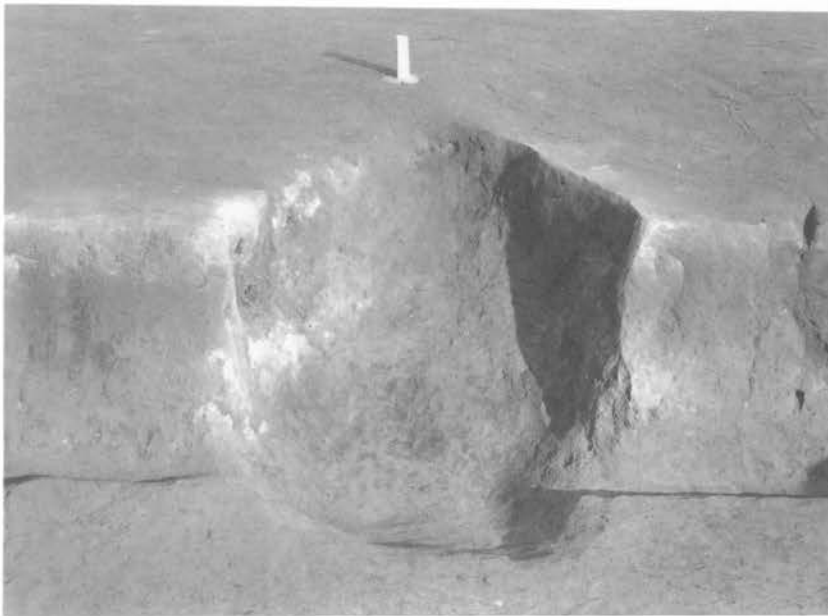


D140,2



1．D130号遺構全景

2．D130号遺構カマド
検出状況



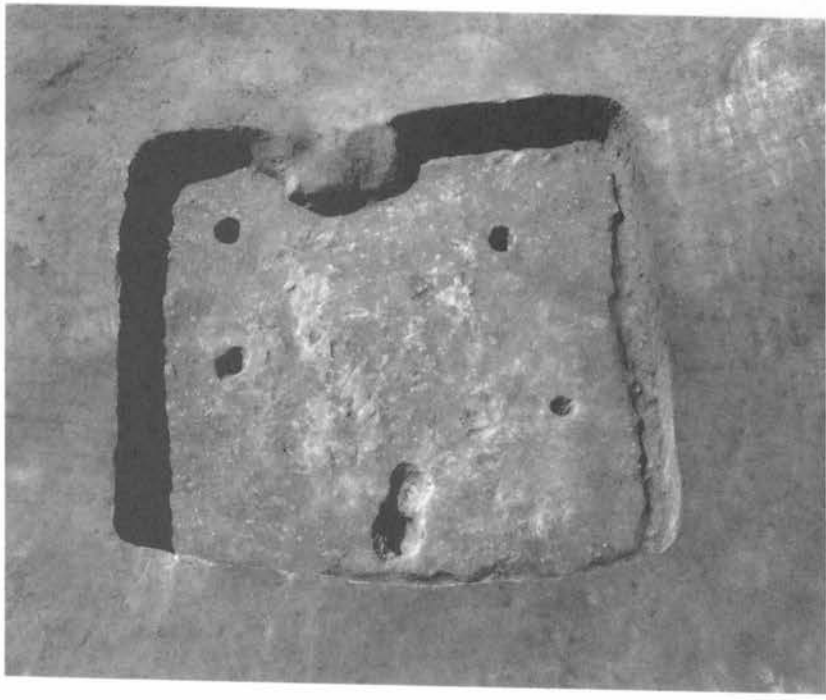
3．D130号遺構カマド
掘りかた

D130,5(½)

D130,6(½)

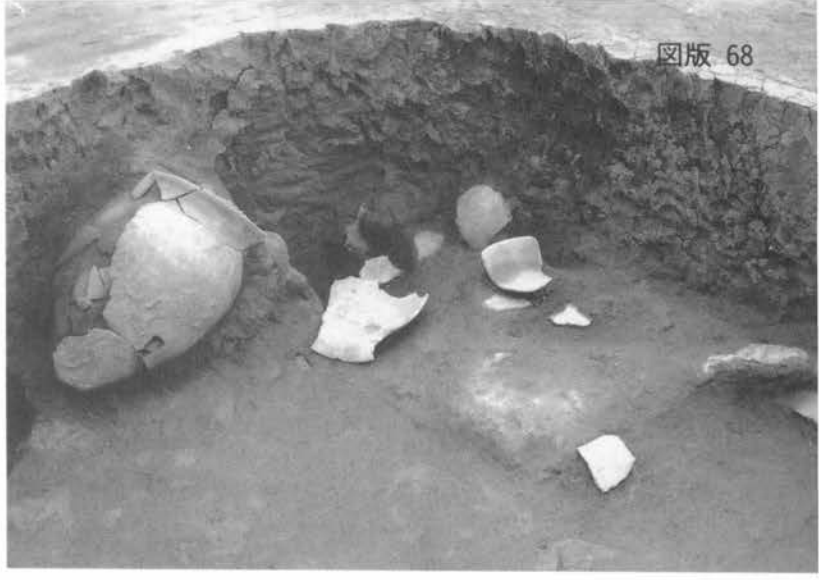
D130,7(½)

D130,8



1．D061号遺構全景

2．D061号遺構遺物出土状況



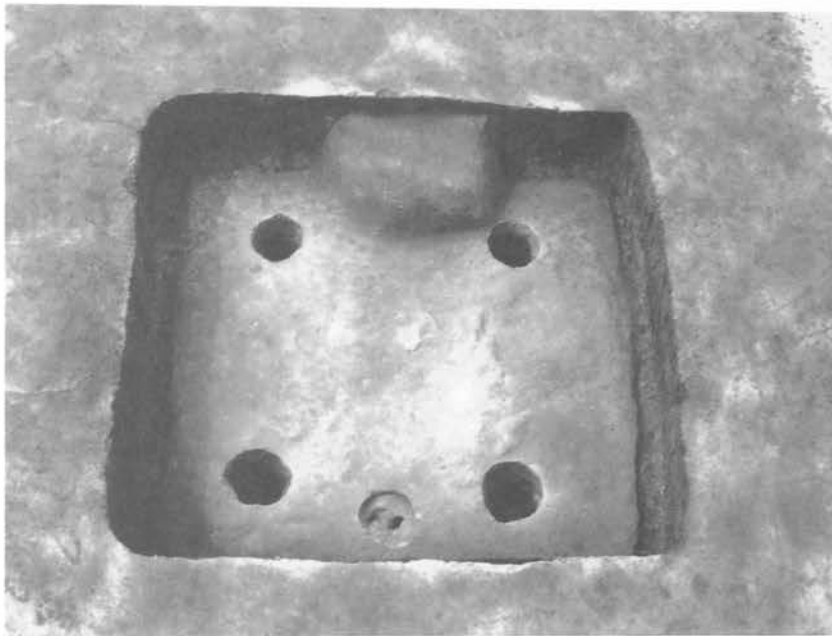
1．D061号遺構遺物出土状況

2．D061号遺構遺物出土状況

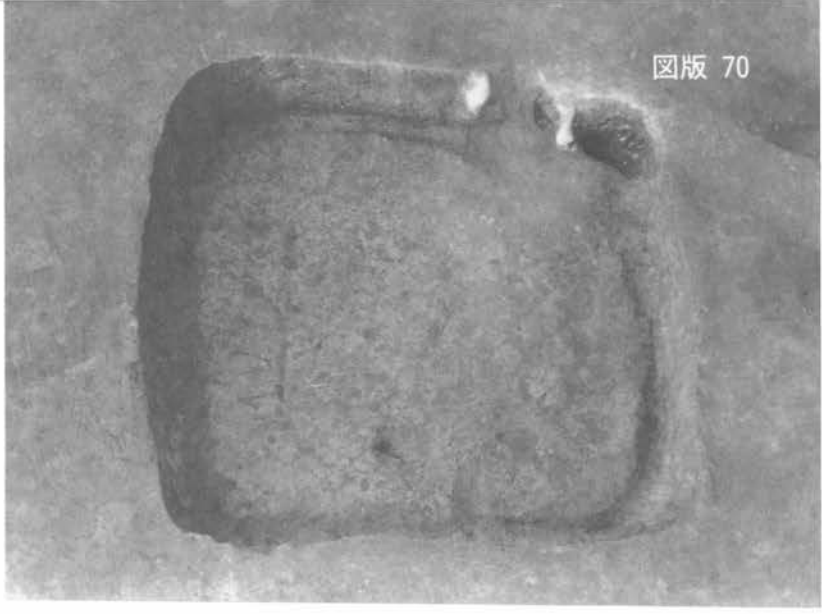
3．D061号遺構カマド
検出状況

1．D062号遺構全景

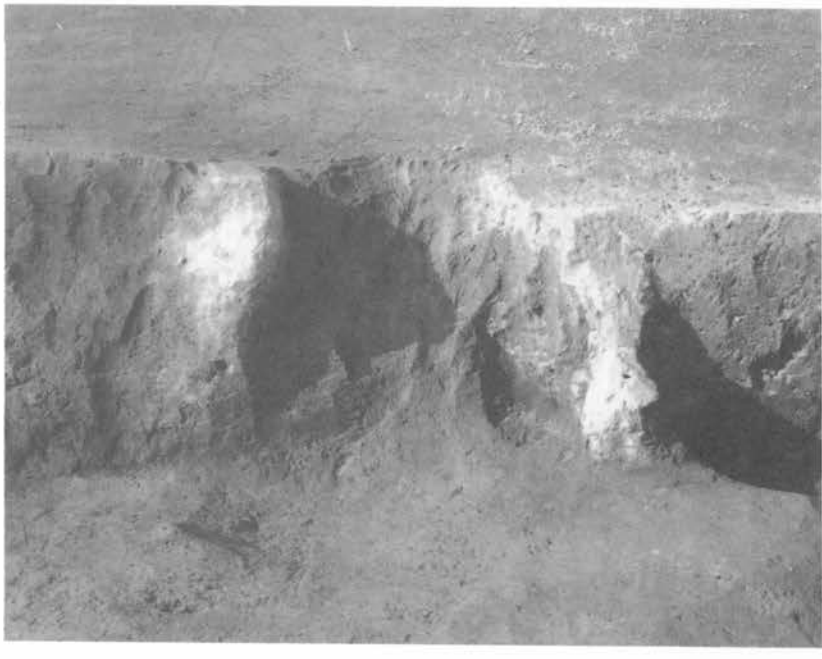
2．D062号遺構カマド
検出状況



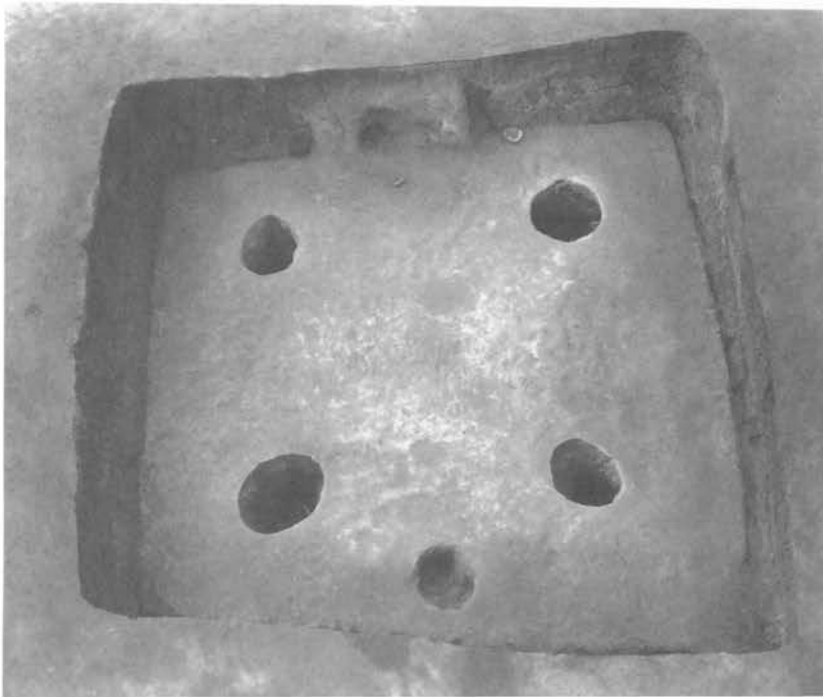
3．D063号遺構全景



1．D064号遺構全景

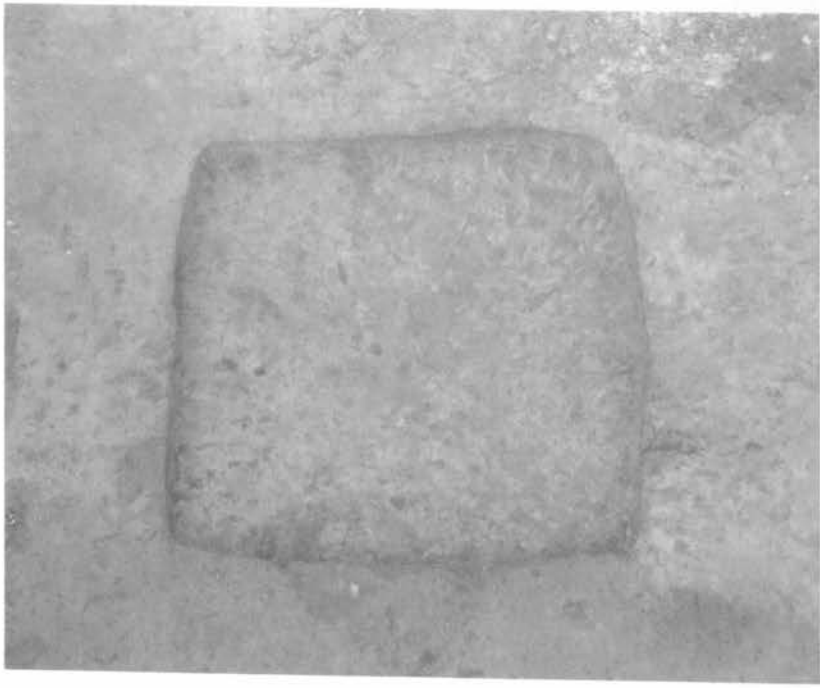


2．D064号遺構カマド
検出状況

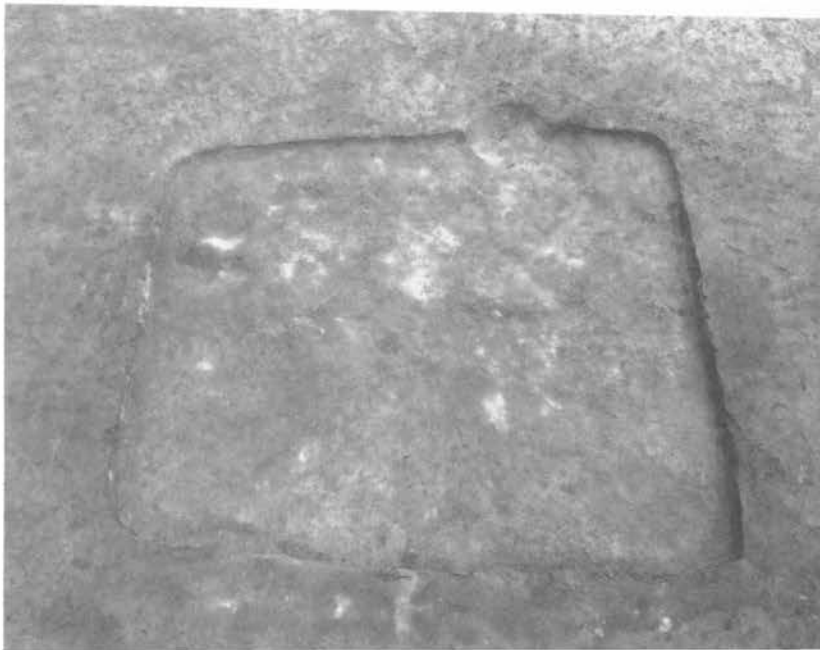


3．D065号遺構全景

1．D065号遺構カマド
検出状況

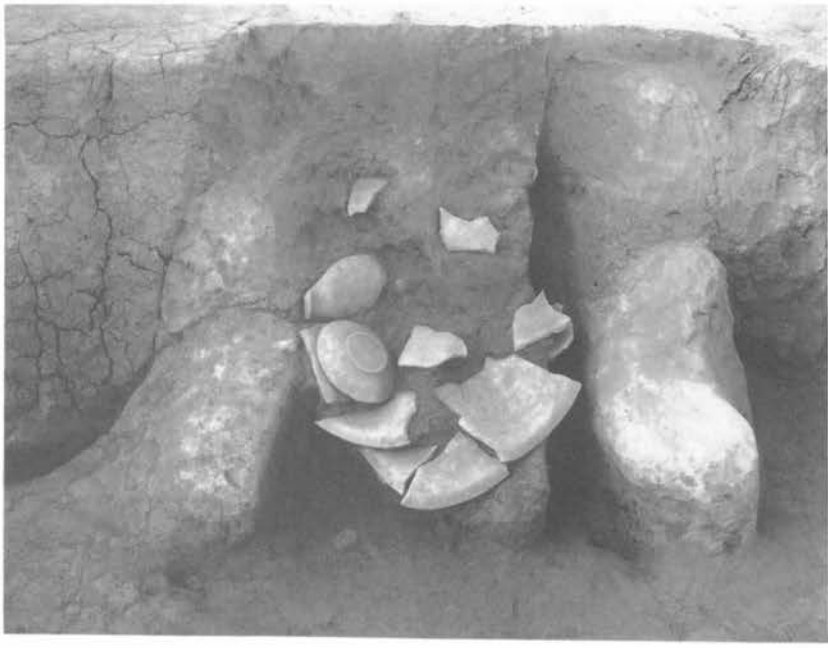


2．D066号遺構全景



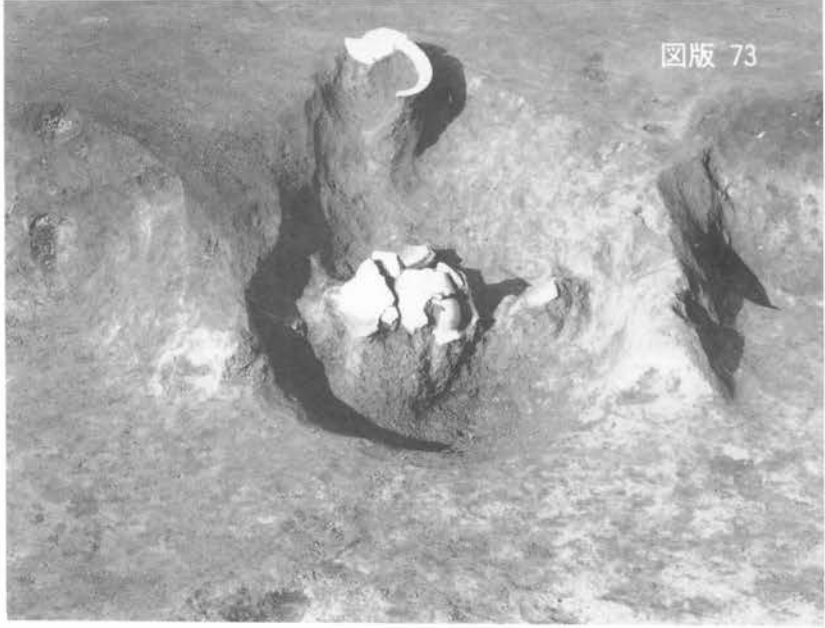
3．D067号遺構全景

1．D069号遺構全景

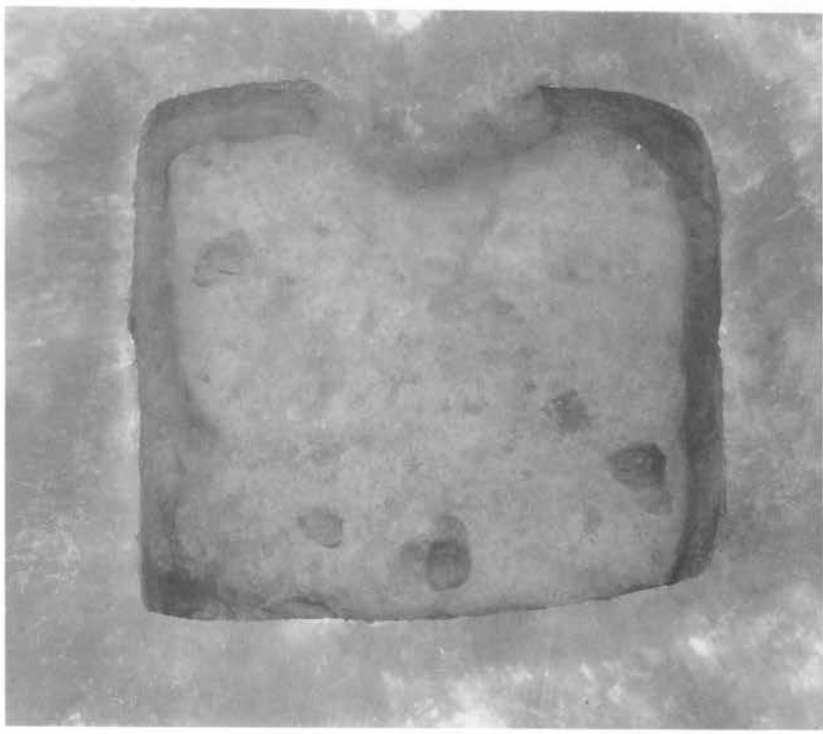


2．D069号遺構カマド
検出状況

3．D070号遺構全景

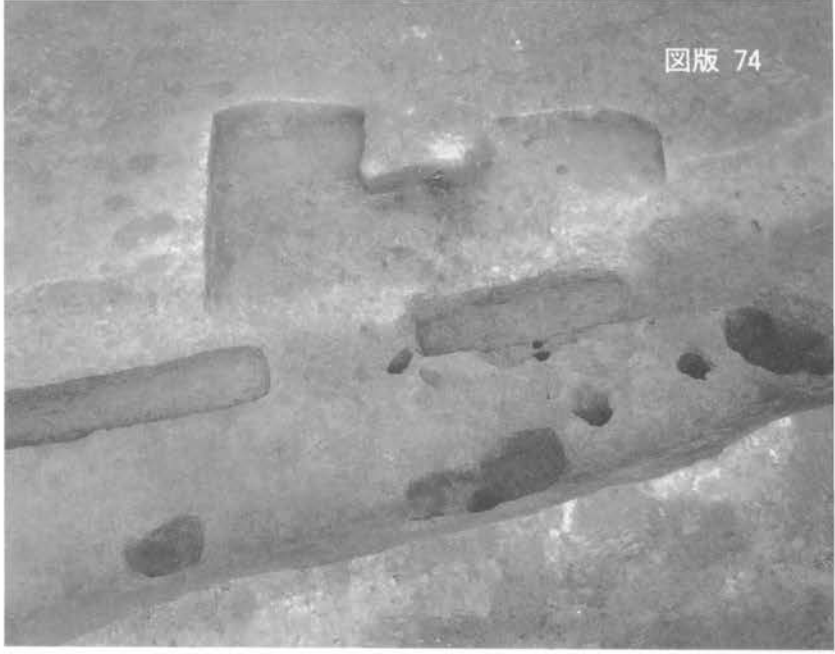


1．D070号遺構カマド
検出状況



2．D076号遺構全景

3．D076号遺構カマド
掘りかた

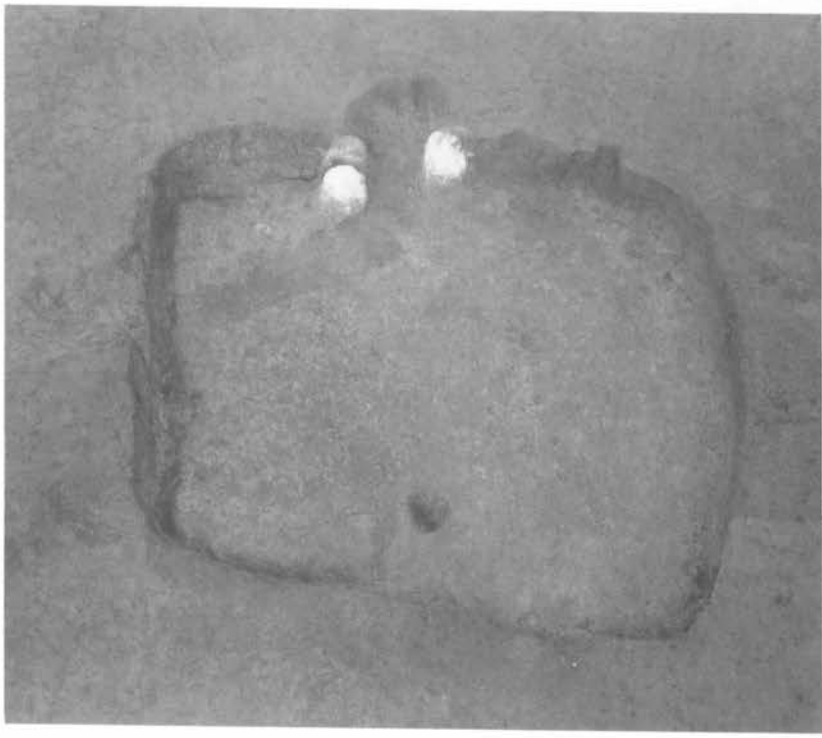


1．D088号遺構全景

2．D088号遺構カマド
検出状況

3．D089号遺構全景

1．D089号遺構カマド
検出状況



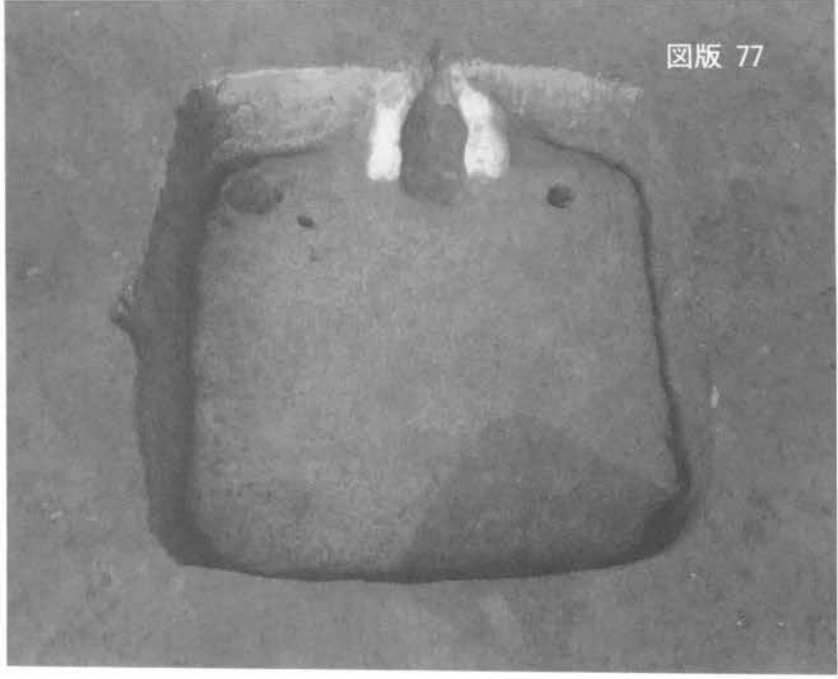
2．D090号遺構全景

3．D090号遺構カマド
検出状況

1．D091号遺構全景

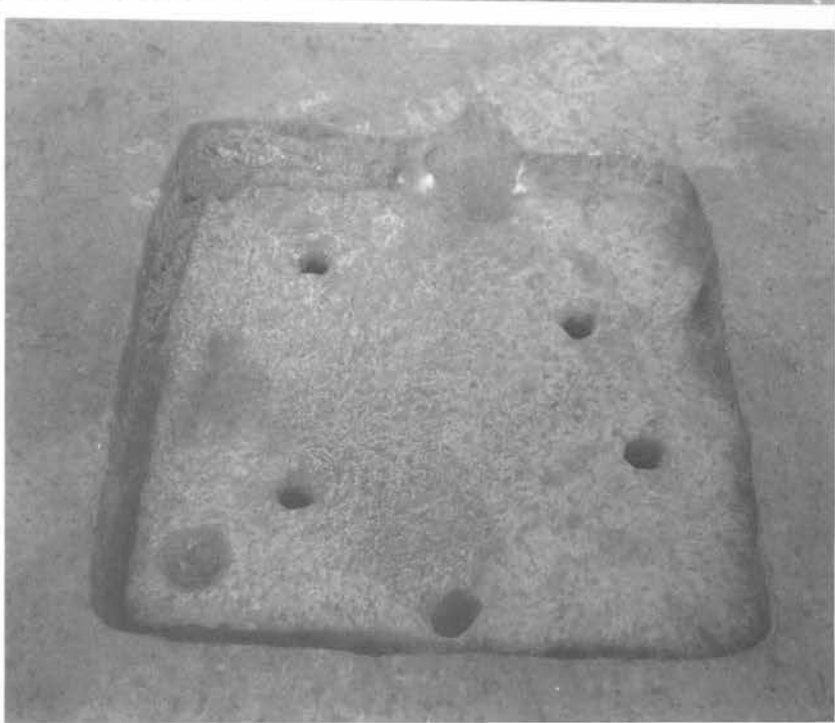
2．D091号遺構カマド
検出状況

3．D091，D135号遺構
検出状況



1．D092号遺構全景

2．D092号遺構カマド
検出状況



3．D093号遺構全景

1．D093号遺構カマド
検出状況

2．D095号遺構全景

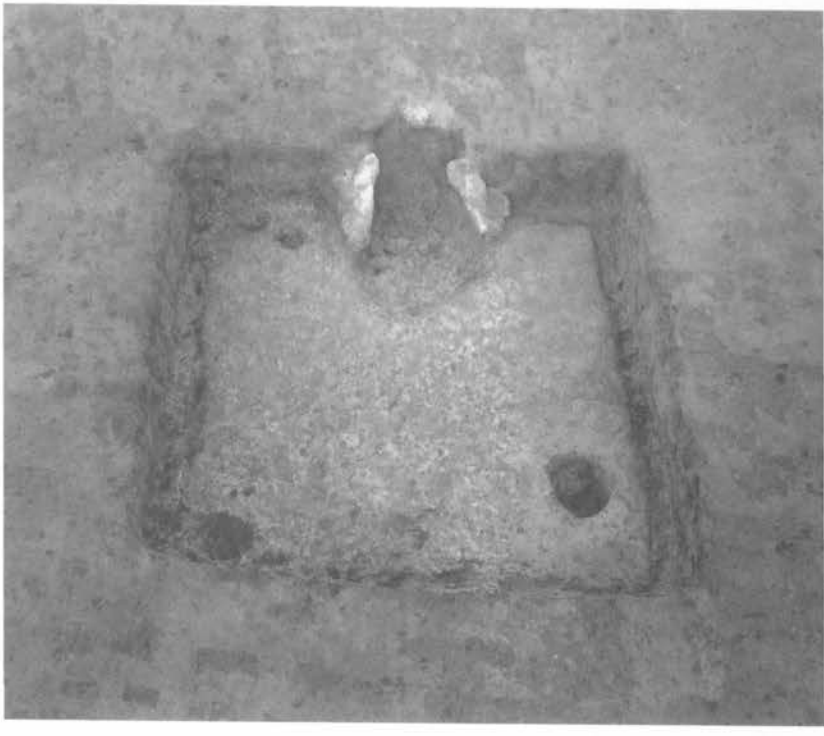
3．D095号遺構カマド
検出状況

1．D096号遺構全景

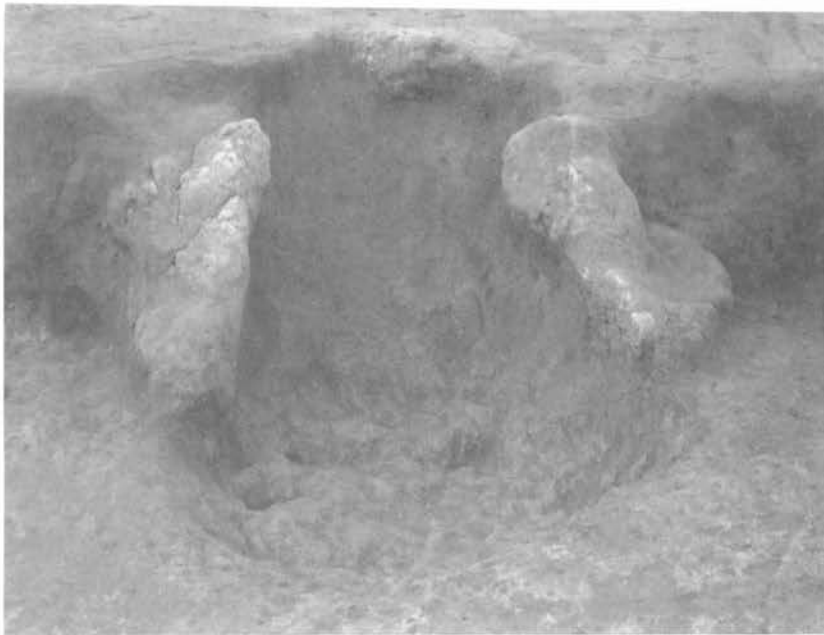
2．D096号遺構カマド
検出状況

3．D097号遺構全景

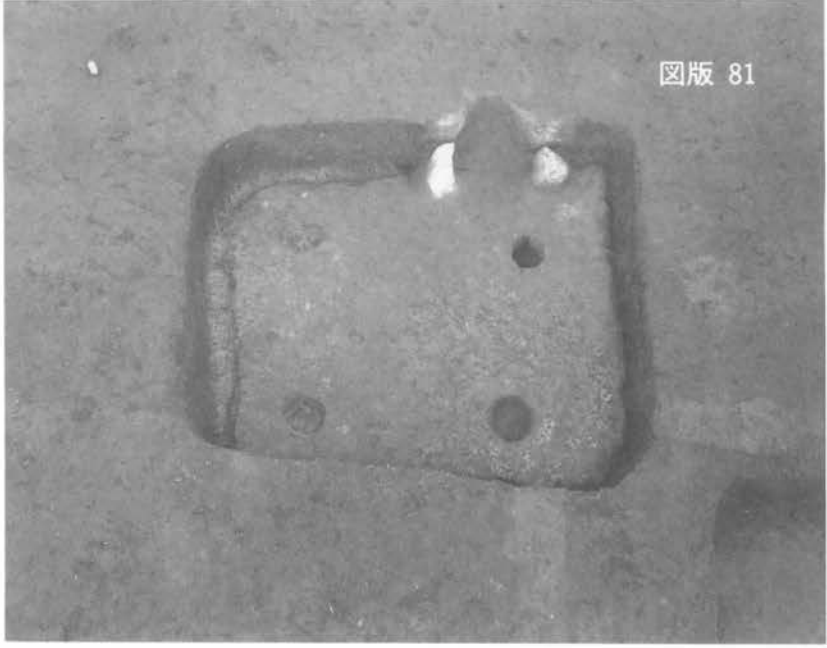
1．D097号遺構カマド
検出状況



2．D098号遺構全景



3．D098号遺構カマド
検出状況



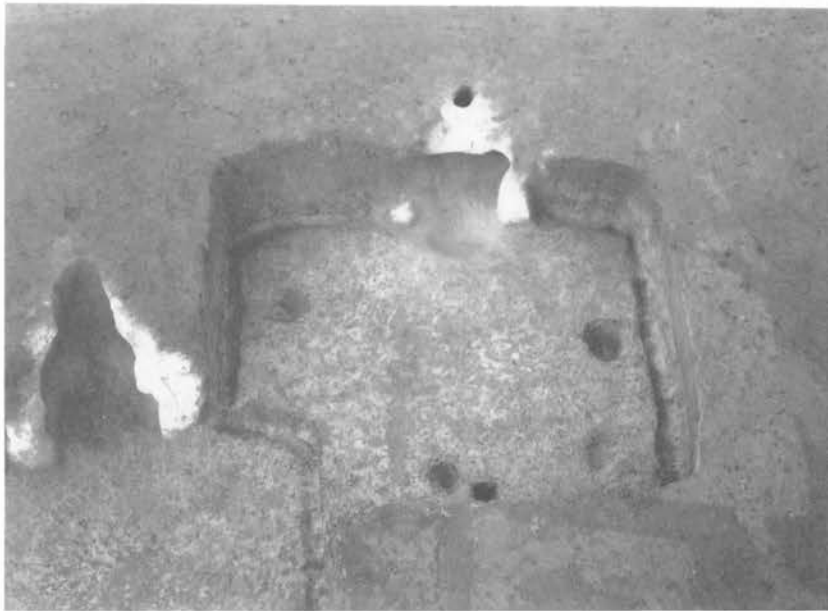
1．D099号遺構全景

2．D099号遺構カマド
検出状況

3．D100号遺構全景

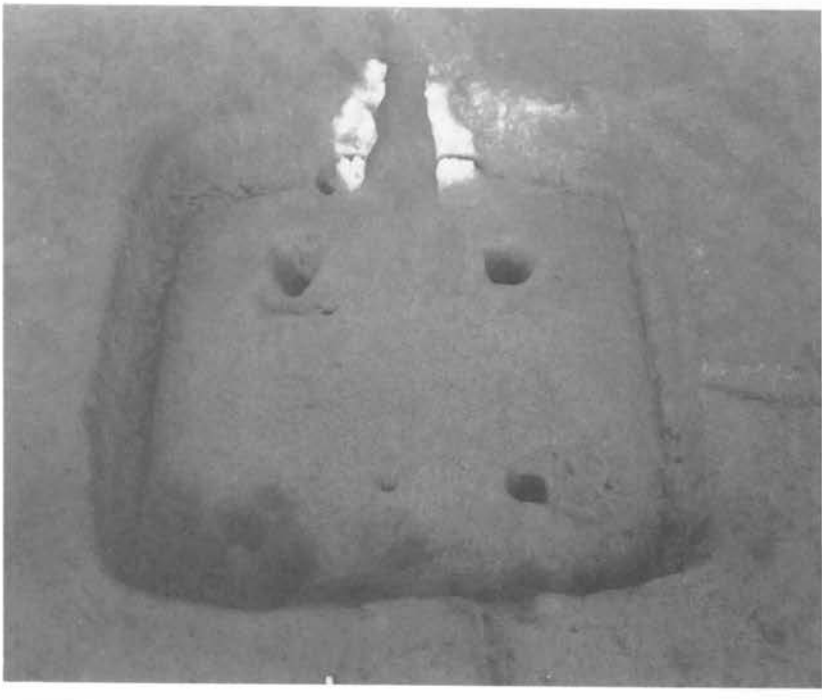
1．D101号遺構全景

2．D101号遺構カマド
検出状況



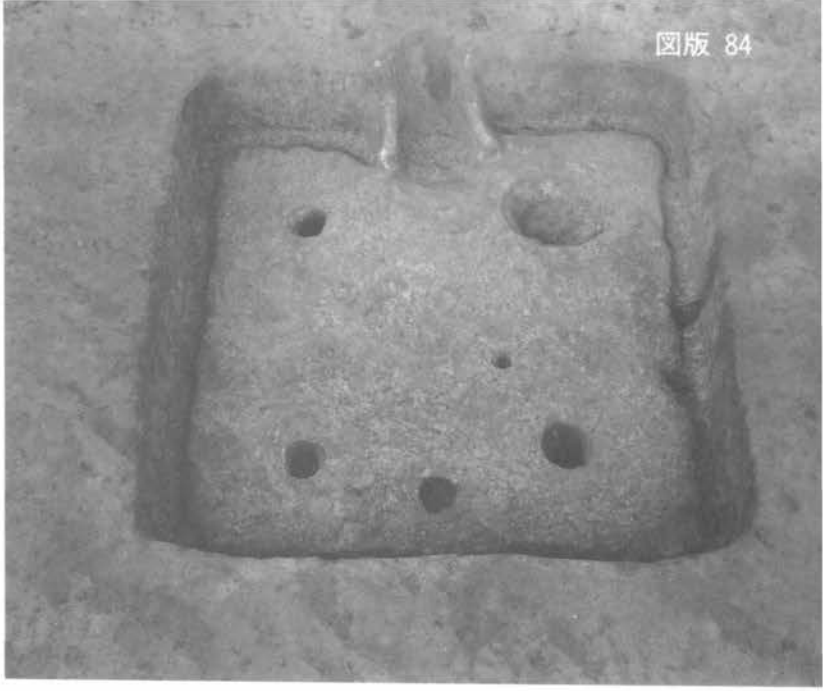
3．D102号遺構全景

1．D102号遺構カマド
検出状況



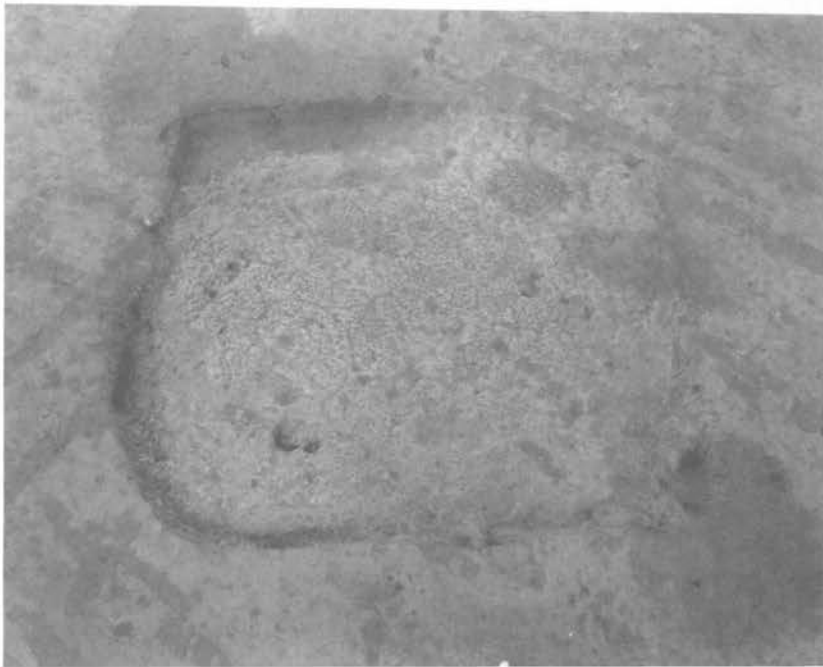
2．D103号遺構全景

2．D103，D104号遺構全景



1．D106号遺構全景

2．D106号遺構カマド
検出状況

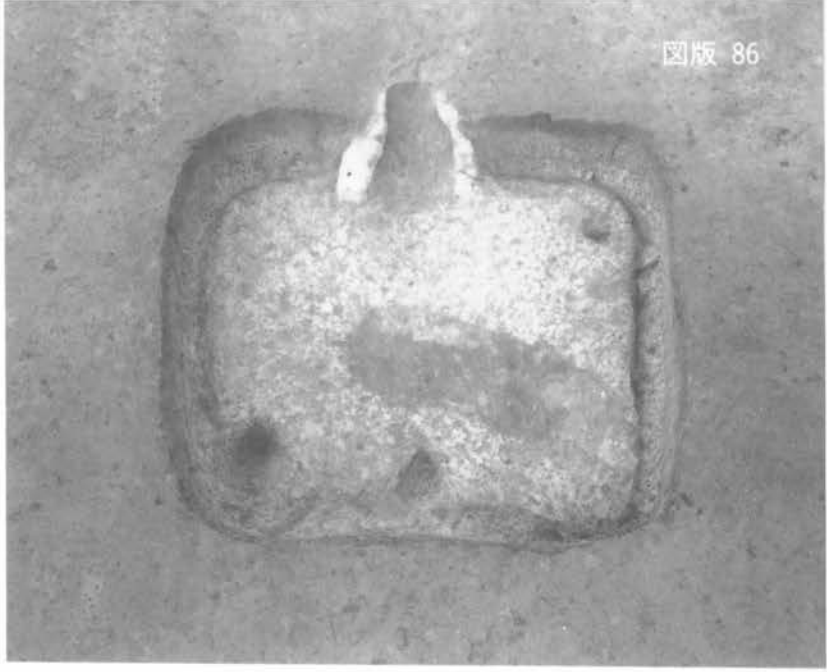


3．D107号遺構全景

1．D108号遺構全景

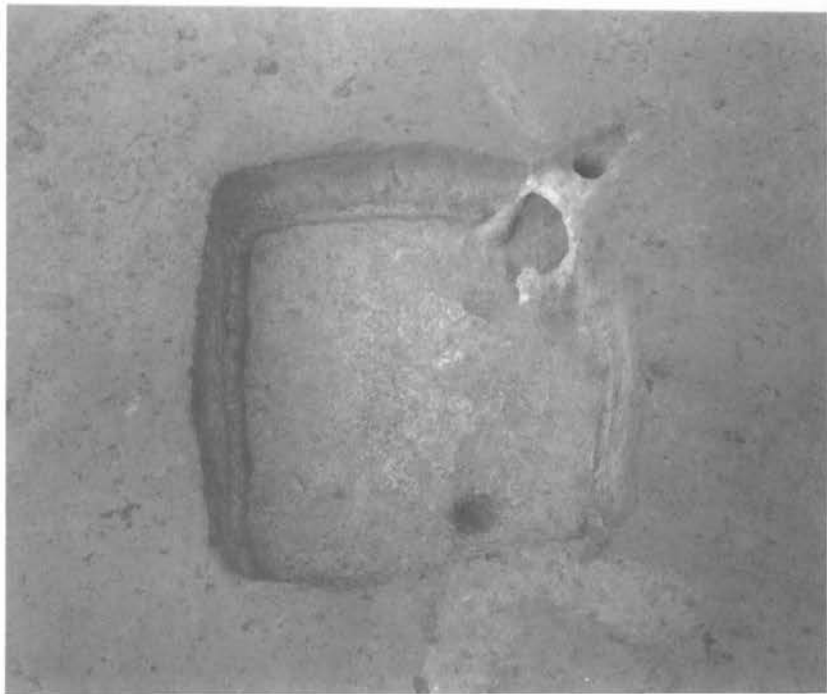
2．D108号遺構カマド
掘りかた

3．D102，D108号遺構
重複関係全景



1．D109号遺構全景

2．D109号遺構カマド
検出状況



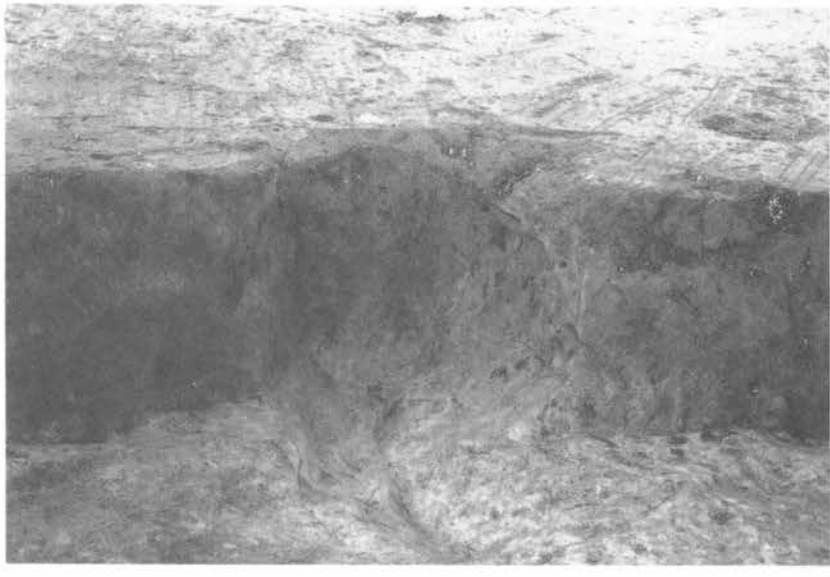
3．D110号遺構全景

1．D110号遺構カマド
検出状況

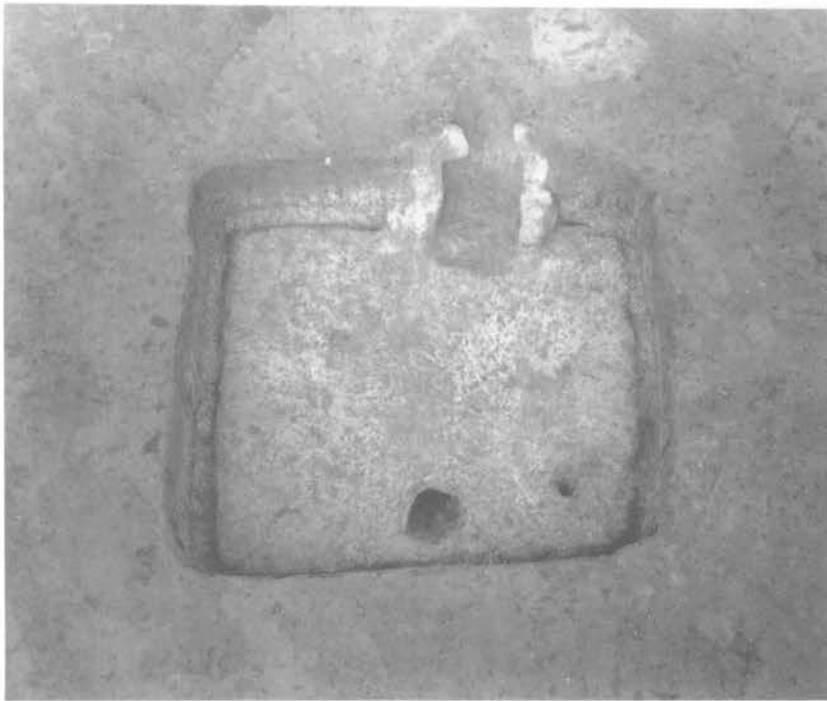
2．D111号遺構全景

3．D111号遺構カマド
検出状況

1．D112号遺構全景

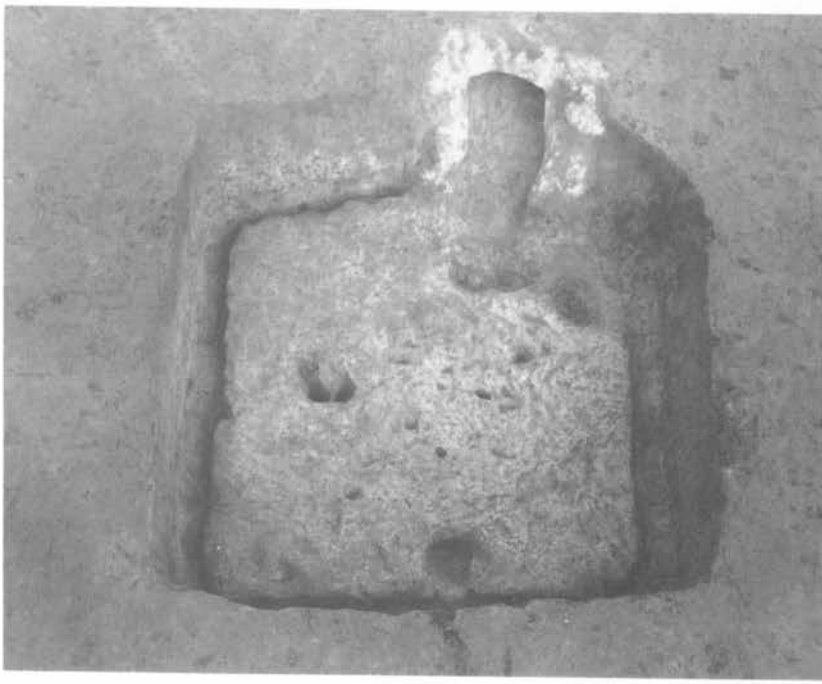


2．D112号遺構カマド
掘りかた



3．D113号遺構全景

1．D113号遺構カマド
検出状況



2．D114号遺構全景

3．D114号遺構カマド
検出状況

1．D115号遺構全景

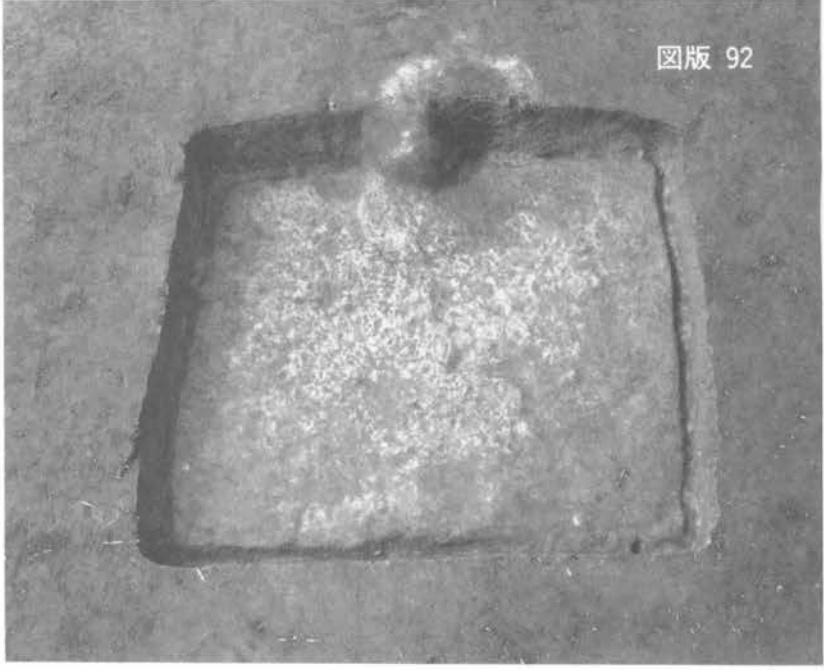
2．D115号遺構カマド
掘りかた

3．D116号遺構全景

1．D116号遺構カマド
検出状況

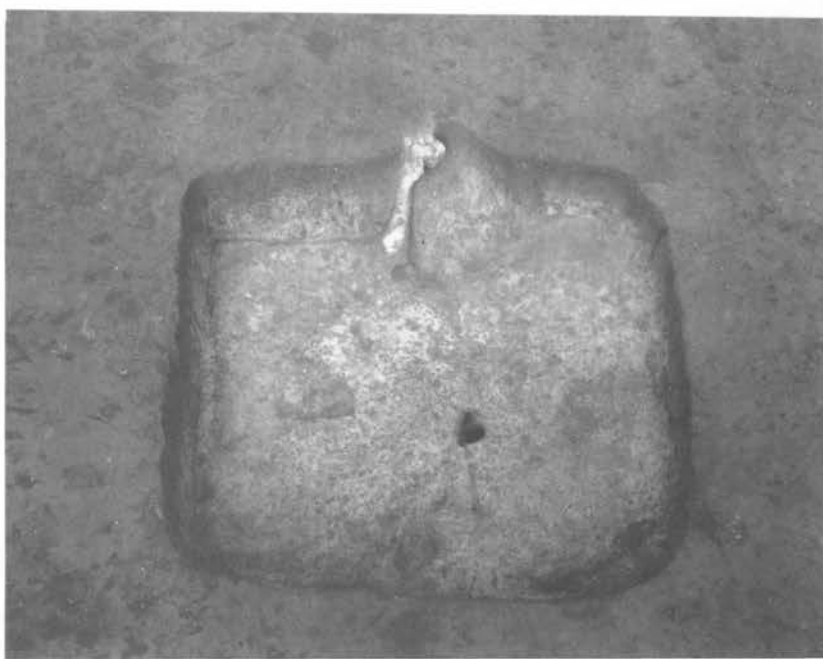
2．D123号遺構全景

3．D123号遺構カマド
検出状況



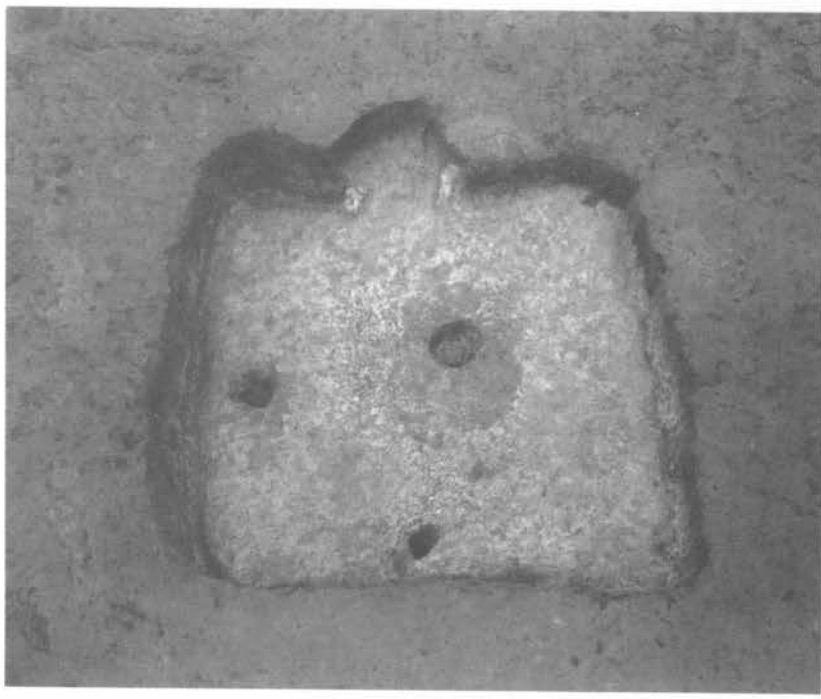
1．D124号遺構全景

2．D124号遺構カマド
検出状況



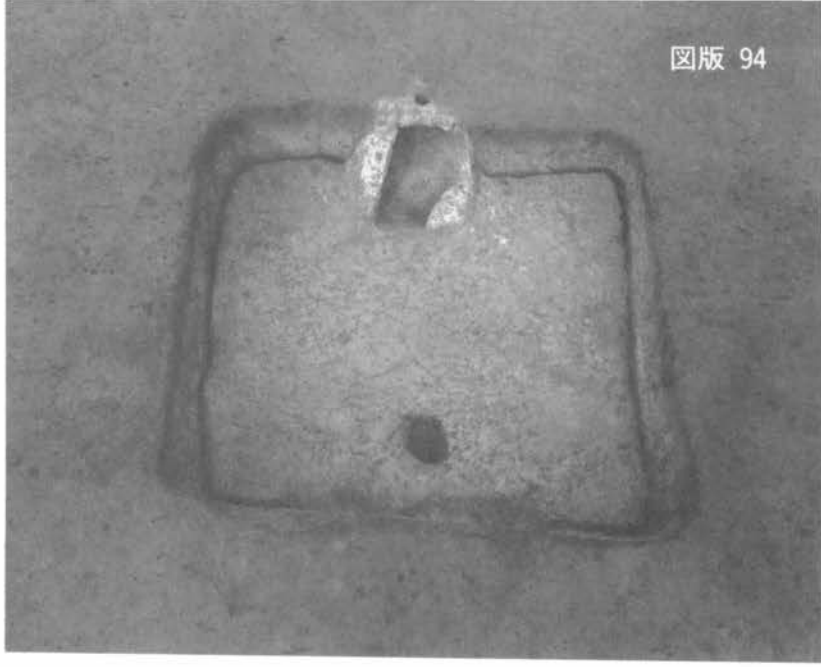
3．D125号遺構全景

1．D125号遺構カマド
検出状況



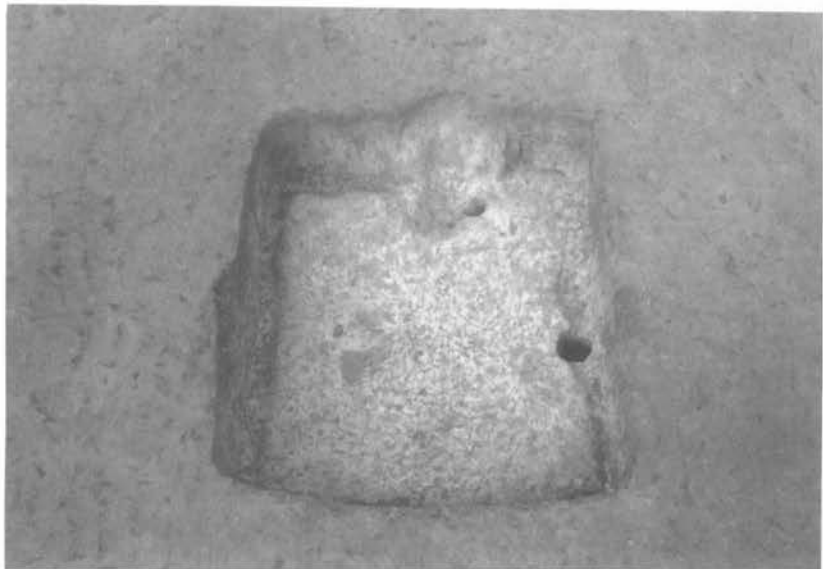
2．D126号遺構全景

3．D126号遺構カマド
検出状況

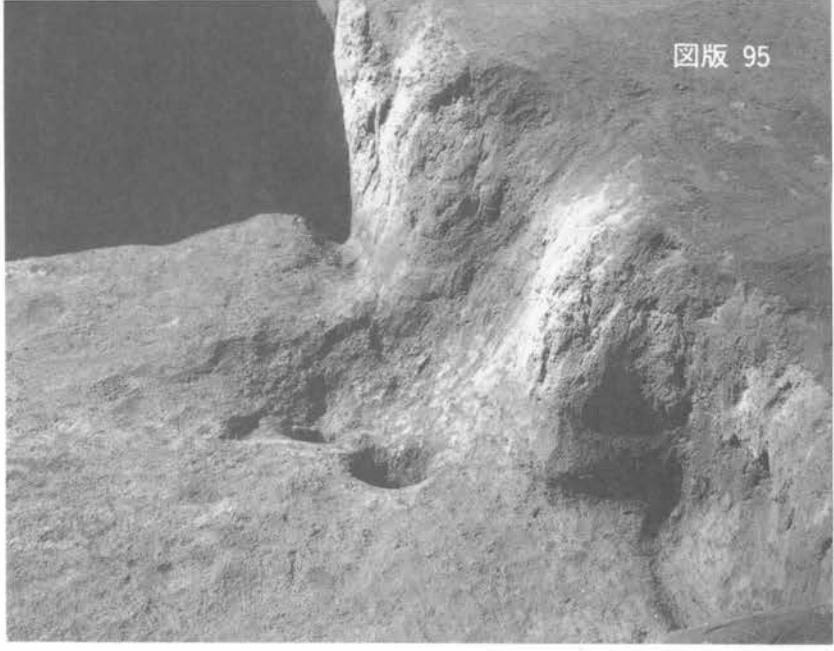


1．D127号遺構全景

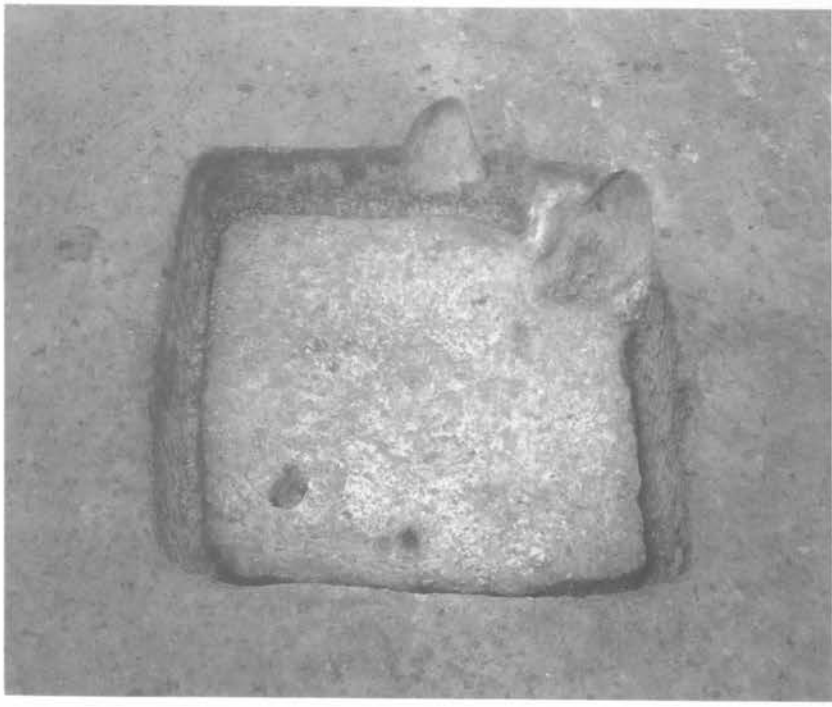
2．D127号遺構カマド
検出状況



3．D128号遺構全景



1．D128号遺構カマド
検出状況

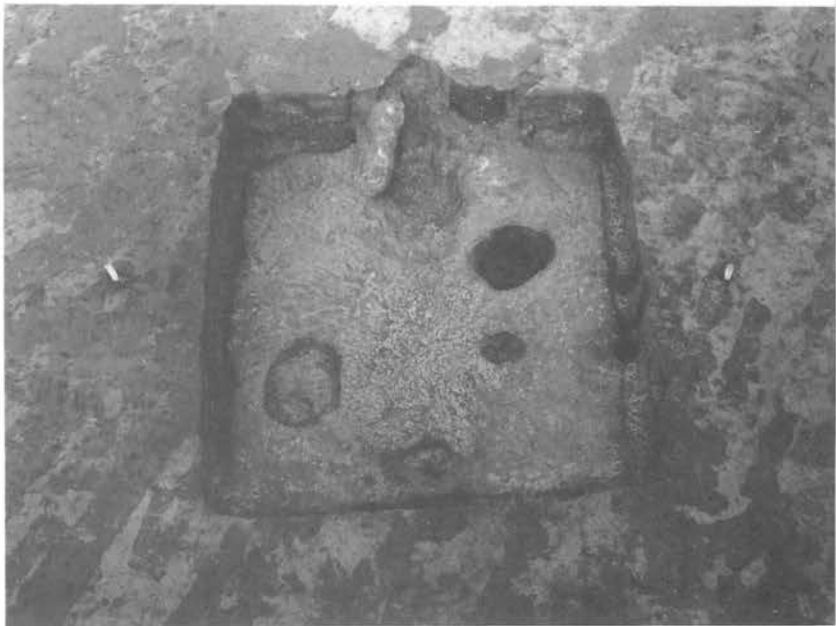


2．D129号遺構全景

3．D129号遺構カマド
検出状況

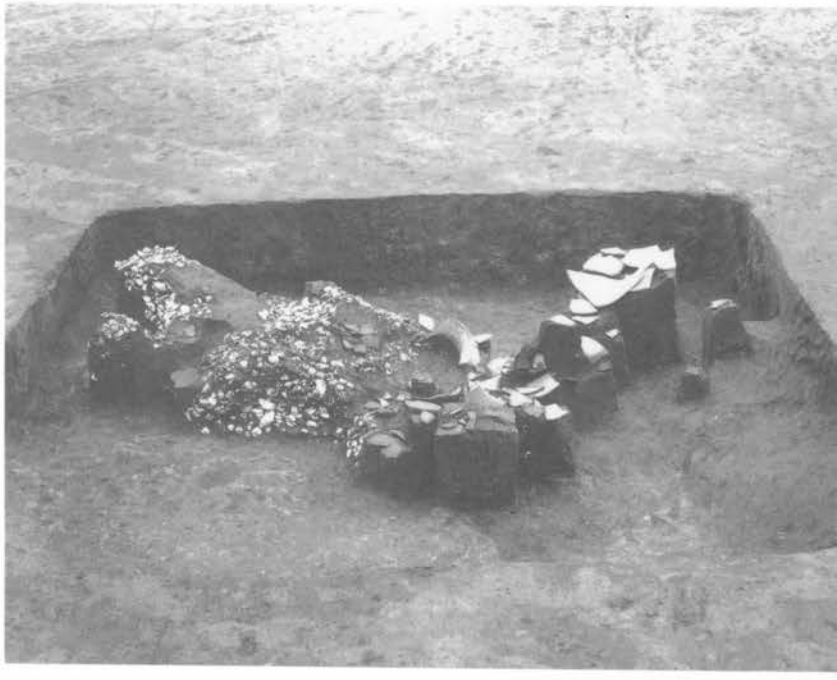
1．D132号遺構全景

2．D132号遺構カマド
検出状況



3．D133号遺構全景

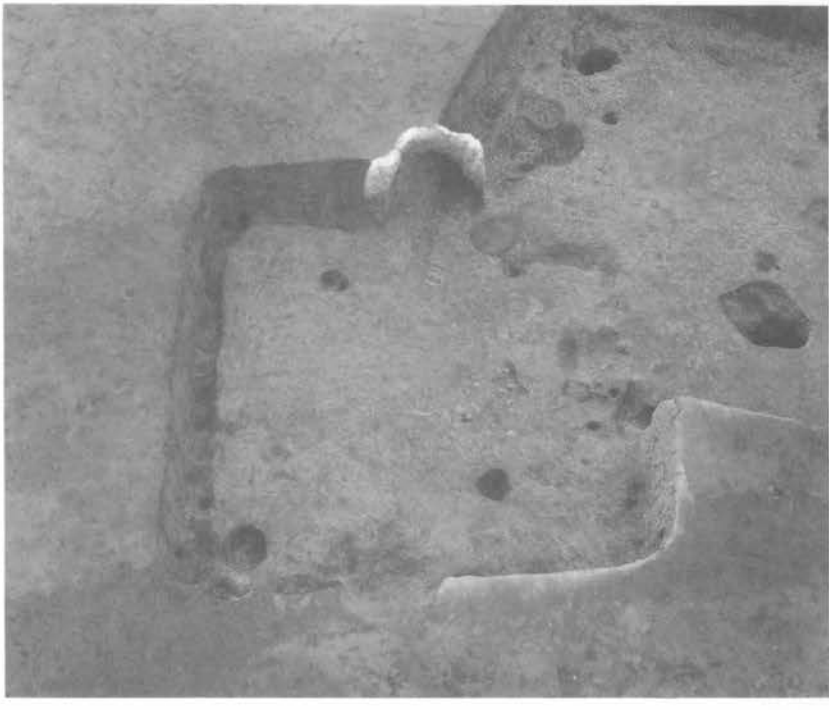
1．D133号遺構遺物出土状況



2．D133号遺構遺物出土状況

3．D133号遺構カマド
検出状況

1．D134号遺構全景

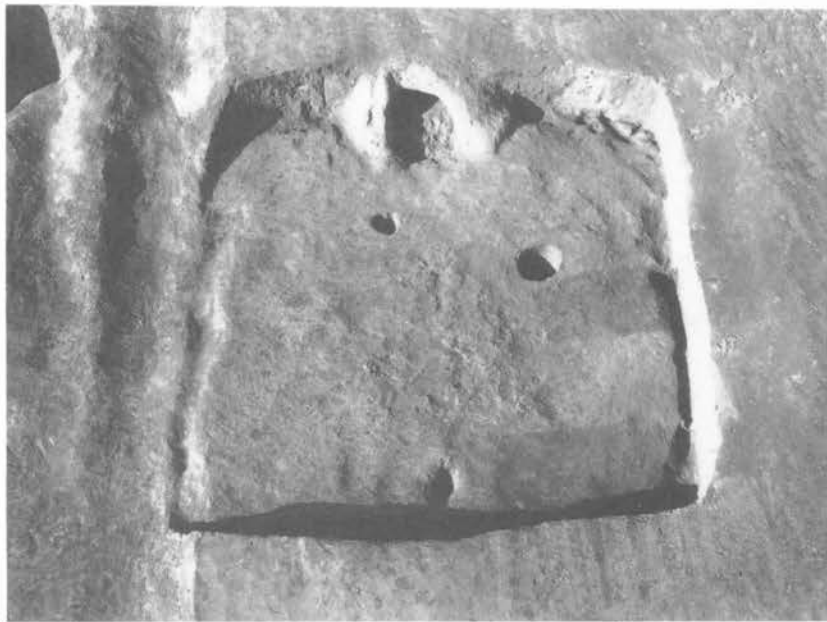


2．D135号遺構全景

3．D135号遺構カマド
検出状況

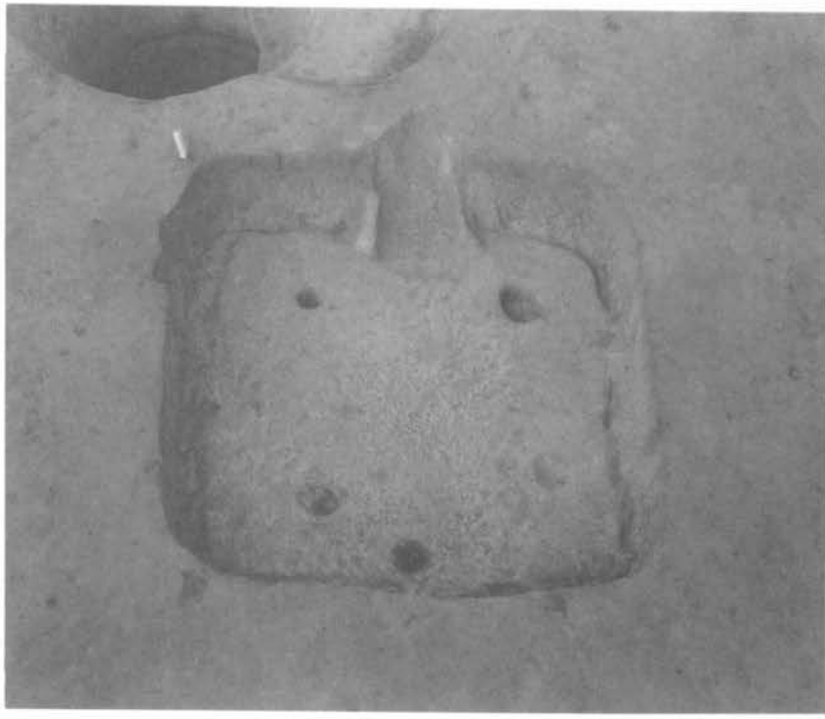
1．D137号遺構全景

2．D137号遺構カマド
検出状況



3．D138号遺構全景

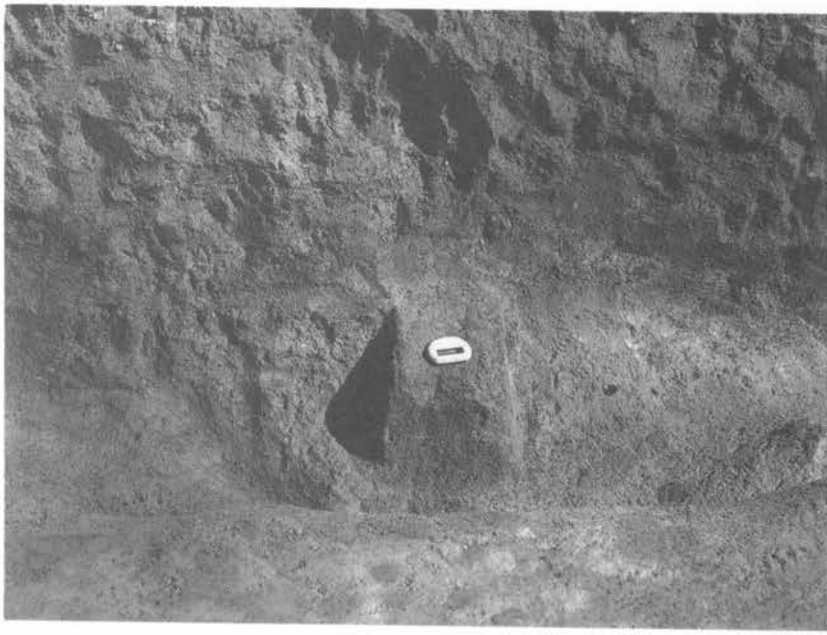
1．D138号遺構カマド
検出状況



2．D141号遺構全景

3．D141号遺構カマド
検出状況

1．D143号遺構全景

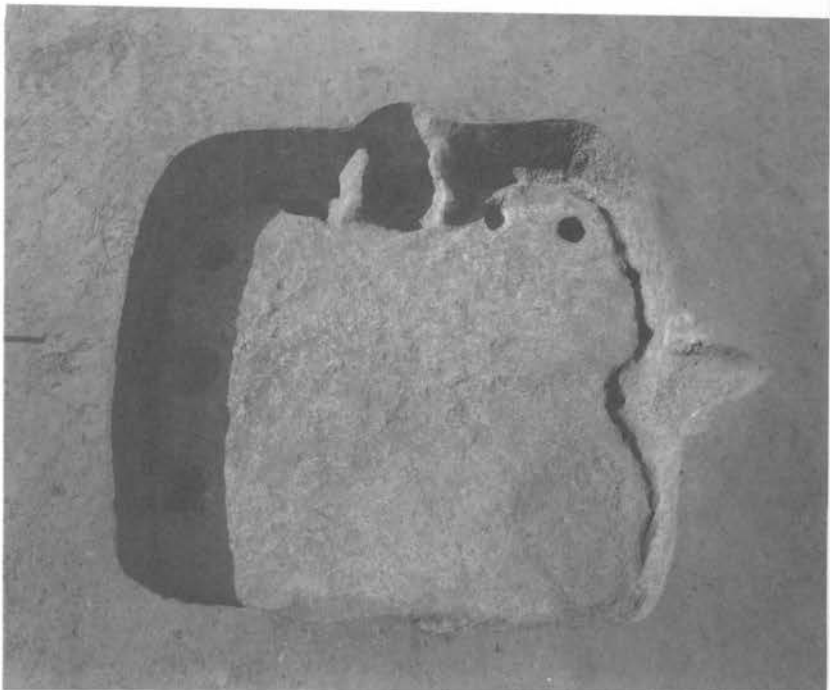


2．D143号遺構遺物出土状況

3．D143号遺構カマド
検出状況

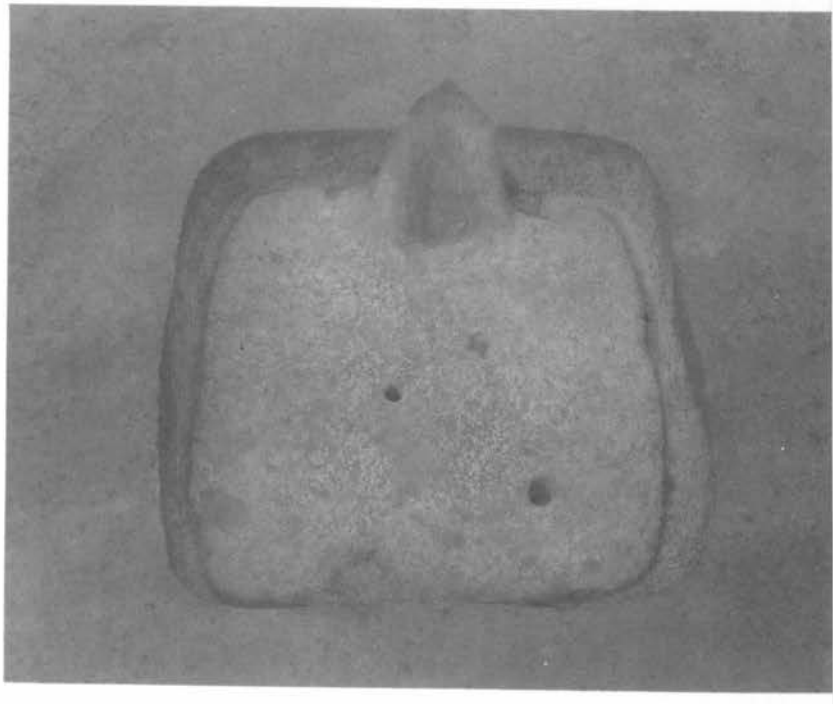
1．D144号遺構全景

2．D144号遺構カマド
検出状況



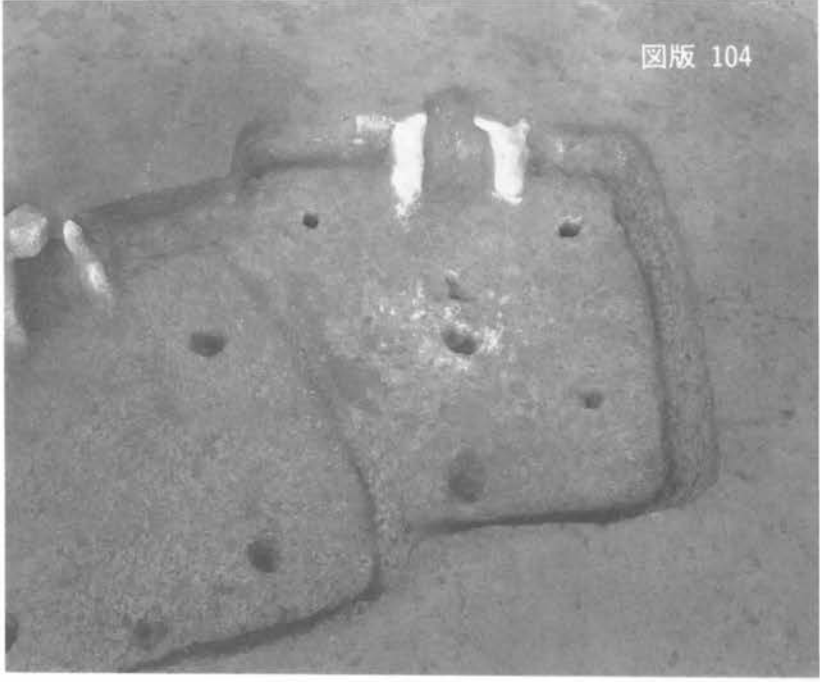
3．D145号遺構全景

1．D145号遺構カマド
検出状況



2．D146号遺構全景

3．D146号遺構カマド
検出状況



1．D147号遺構全景

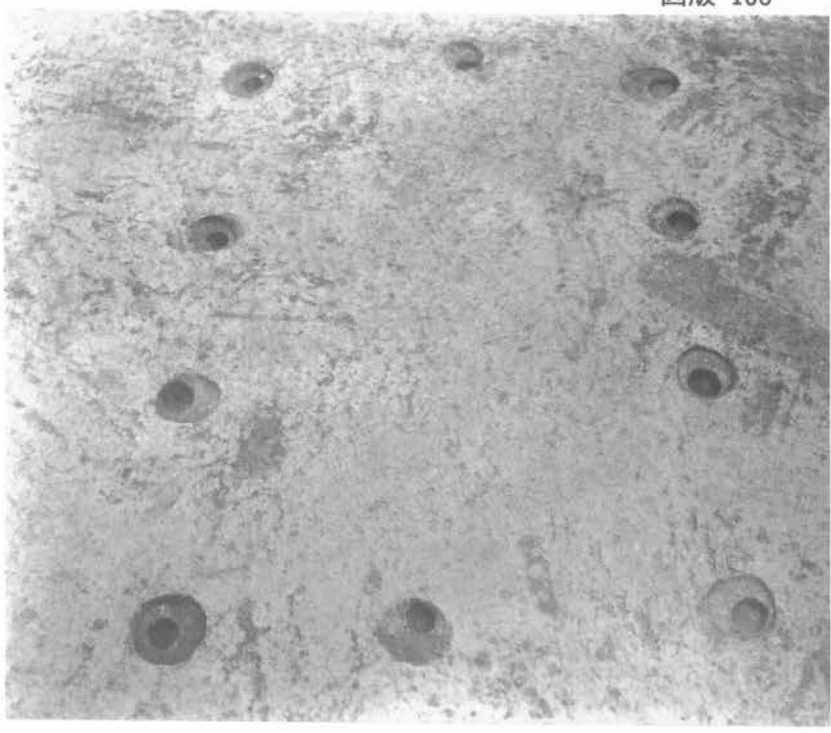
2．D147号遺構カマド
検出状況

3．D147号遺構カマド
掘りかた

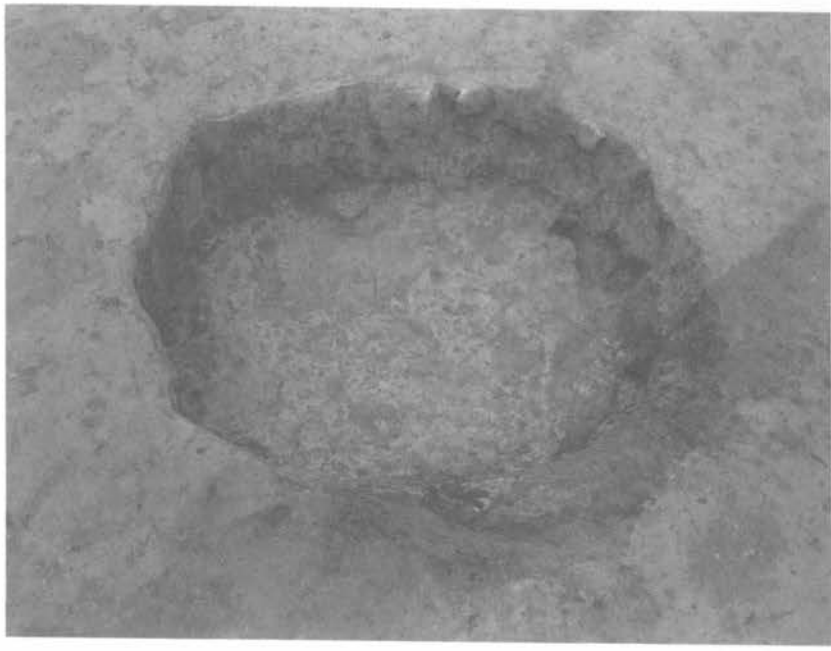
1．D148号遺構カマド
検出状況

2．D148号遺構カマド
掘りかた

3．D147，D148号遺構
重複関係全景



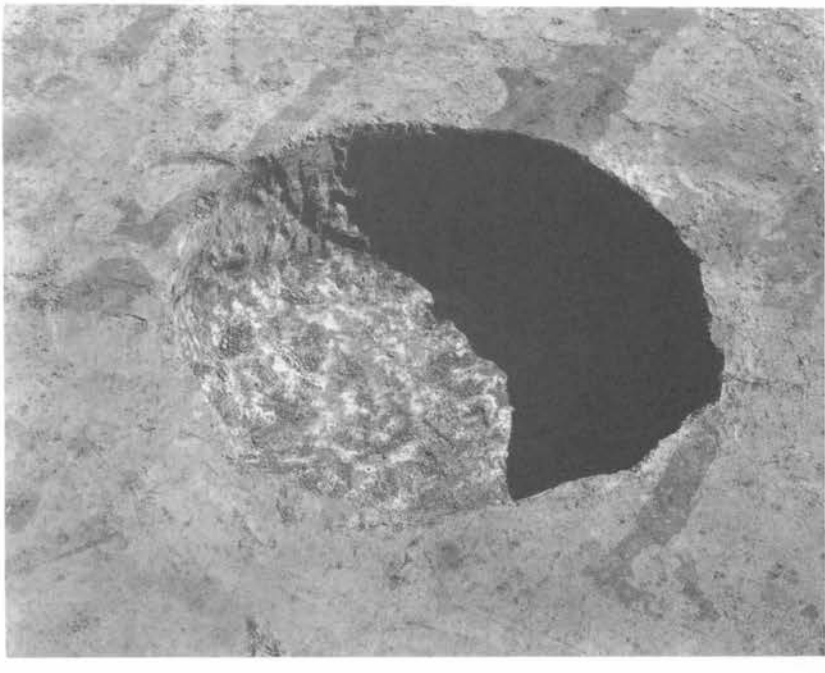
1．H010号遺構全景



2．P001号遺構全景

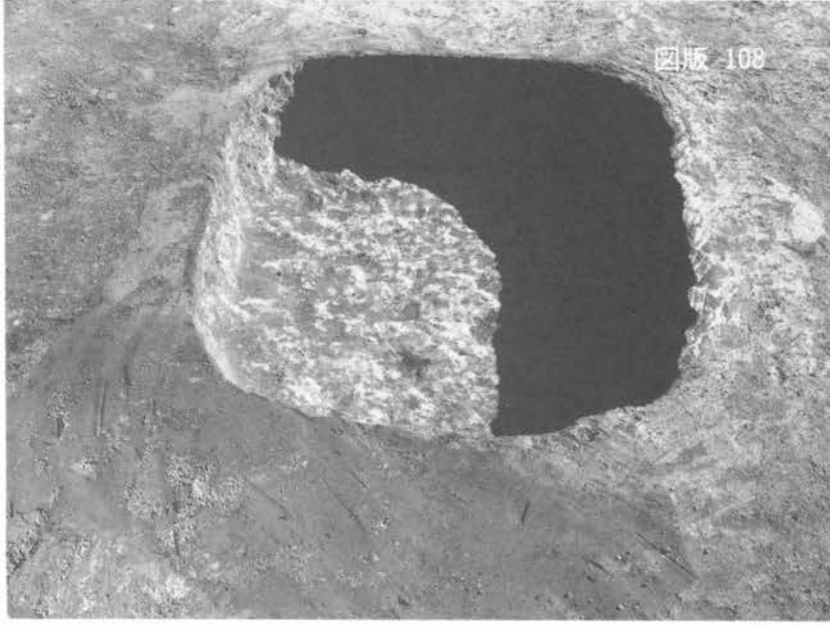
3．P002号遺構全景

1．P004号遺構全景



2．P011号遺構全景

3．P013号遺構全景



1．P014号遺構全景

2．P015号遺構全景

3．P022号遺構全景

D061,1(⅓)

D061,3(⅓)

D061,4(¼)

D061,5(⅓)

D061,8(⅓)

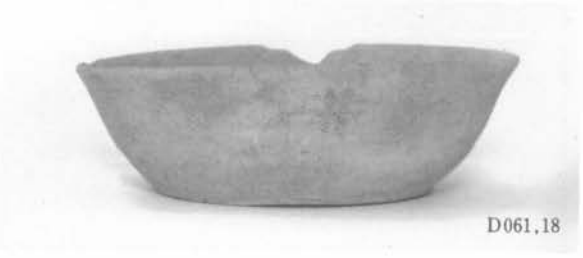
D061,30(½)

D061,14(½)

D061,16(½)

D061,17(½)

D061,19(½)


D061,18

D061,23(½)

D061,20(½)

D061,25(½)

D061,24(½)

D061,28(½)

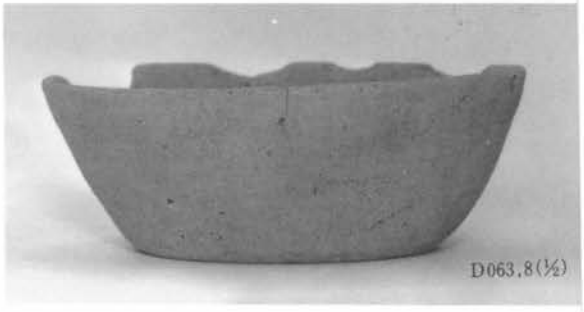
D061,26(½)

D061,31(½)

D061,29(½)

D063,1(⅓)

D063,9(½)



D063,8(½)

D065,6(½)

D065,5(½)

D065,7(½)

D065,8(½)

D069,17(½)

D067,2(½)

D069,33(½)

D069,27(½)

歴史時代第Ⅲ群遺物

D069,11(½)

D069,1(¼)

D069,12(½)

D069,8(½)

D069,7(⅓)

D069,9(½)

D069,13(½)

D069,19(½)

D069,21(½)

D069,38(½)

D069,22(½)

D069,15(½)

D069,26(½)

D069,34(½)

D069,25(½)

D070,2(⅓)

D069,28(½)

D069,47(½)

D076,1(⅓)

D076,2(⅓)

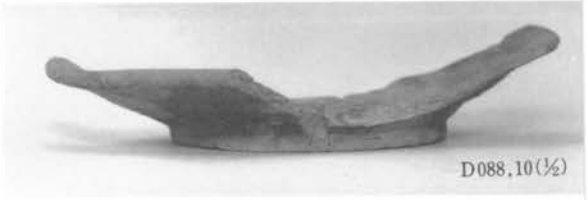
D076,6(½)

D088,3(⅓)

D088,4(½)

D088,5(½)

D088,6(½)


D088,10(½)

D089,1(½)

D089,2(½)

D089,5(½)

D089,6(½)

D089,7(½)

D089,8(½)

D090,2(½)

D091,7(½)

D091,9(½)

D091,10(½)

D091,13(½)

D092,5(½)

D092,3(⅓)

D092,10(½)

D092,9(½)

D092,12(⅓)

D095,8(½)

D095,13(½)

D095,6(½)

D095,9(½)

D099,4(½)

D096,3(½)

D099,5(½)

D096,4(½)

D099,7(½)

D097,7(½)

D100,3(½)

D098,16(½)

D100,4(½)

D098,8(½)

D101,3(½)

D098,7(½)

D101,1(⅓)

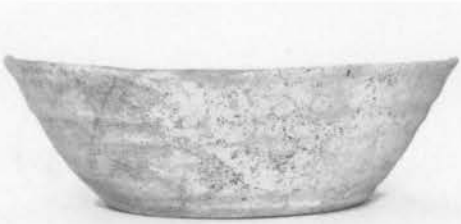
歴史時代第Ⅲ群遺物

D102,3(½)

D103,11(½)

D103,12(½)

D103,13(½)


D103,16(½)

D103,15(½)

D103,23(½)

D103,24(½)

D104,2(½)

D103,27(½)

D106,8(½)

D104,5(½)

D106,1(⅓)

D106,10(½)

歴史時代第Ⅲ群遺物

D106,5(¼)

D108,1(⅓)

D108,6(½)

D108,7(½)

D108,8(½)

D108,10(½)

D108,12(½)

D108,11(½)

D108,13(½)

D109,5(½)

D109,4(¼)

D109,6(½)

D111,3(½)

D112,8(½)

D112,5(⅓)

D112,9(½)

D112,10(½)

D112,13(½)

D112,11(½)

D112,14(½)

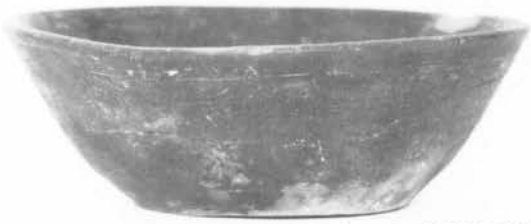
D112,15(½)

D112,17(½)

D112,18(½)

D112,19(½)

D112,25(½)


D112,26(½)

D112,35(½)

D112,34(½)

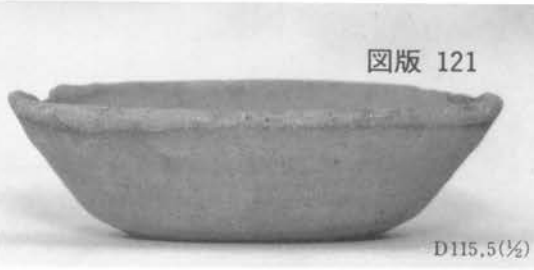
D113,1(⅓)

D113,4(¼)

D113,6(½)

D114,6(½)

D115,1(½)


D115,5(½)

D115,6(½)

D123,2(½)

D116,8(½)

D124,3(½)

D125,7(½)

D124,6(½)

D125,6(½)

D124,8(½)

D125,8(½)

D124,10(⅓)

D128,5(½)

D125,5(¼)

D128,1(⅓)

D129,12(½)

D129,10(⅓)

D129,13(½)

D133,7(½)

D133,3(½)

D134,1(⅓)

D133,14(½)

D134,5(½)

D137,1(½)

D138,4(½)

D138,5(½)

D138,9(½)

D143,3(¼)

D143,6(½)

D143,1(⅓)

D143,2(⅓)

D143,7(½)

D143,8(½)

D143,16(½)

D143,12(½)

D144,3(½)

D144,1(¼)

D144,4(½)

D145,2(¼)

D145,1(¼)

D145,7(⅓)

D145,9(½)

D145,10(½)

D145,11(½)

D145,12(½)

D145,13(½)

D145,14(½)

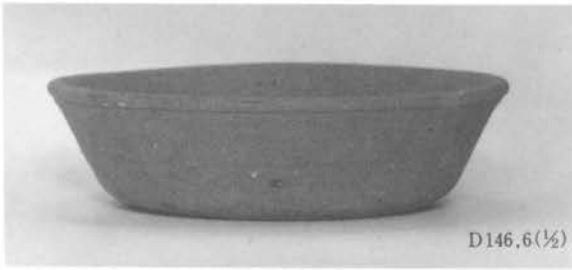
D146,1(⅓)

D146,3(½)

D146,5(½)

D146,4(½)

D146,7(½)


D146,6(½)

D146,9(½)

D146,8(½)

D146,11(½)

D146,10(½)

D147,2(⅓)

D147,3(½)

D148,2(½)

D147,5(½)

D148,3(½)

D148,4(½)

D148,7(½)

D148,5(½)

D103,40(½)

D145,20(½)

D095,14(½)

D129,15(½)

D108,15(½)

D145,19(½)

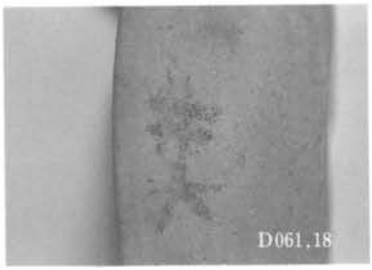
D134,7(½)

D103,41(½)

D103,39(1/1)

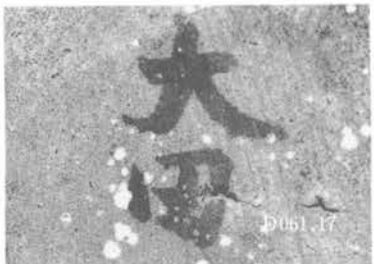
D143,18(1/1)

D061,17



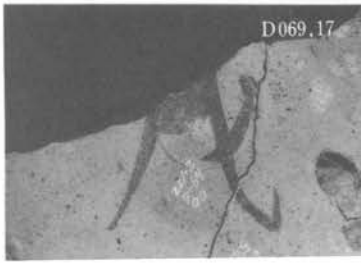
D061,18

D063,8



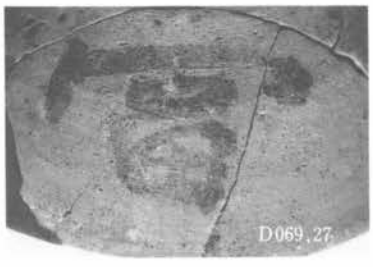
D061,17

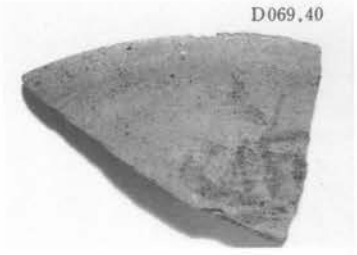
D069,17

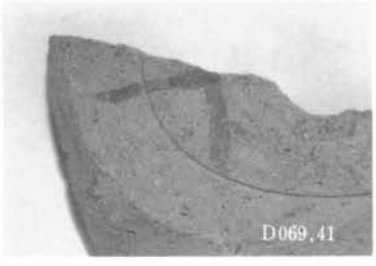


D069,17

D069,27

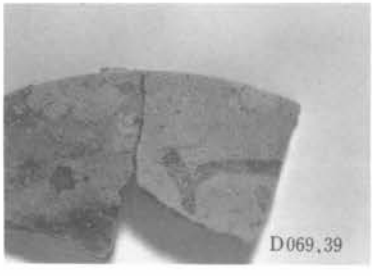

D069,27


D069,40


D069,41

D069,42

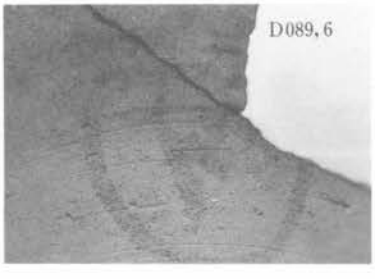
D069,46


D069,39

D088,9

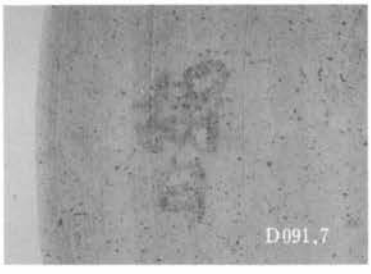
D088,10

D089,5

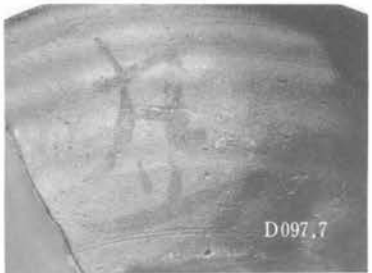

D089,6

D090,2

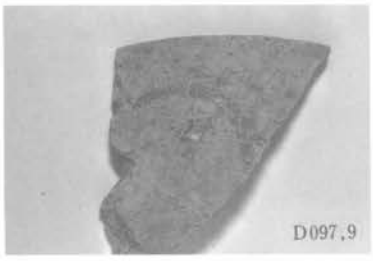
D092,8


D091,7

D097,6


D097,7

D097,8


D097,9

D098,9

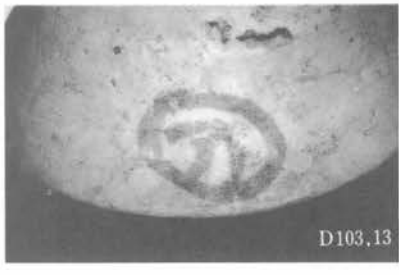
D098,8

D098,10

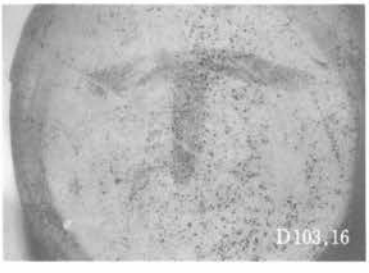
D098,12

D098,16

D101,9

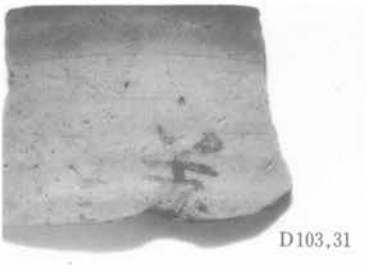

D103,13

D103,15

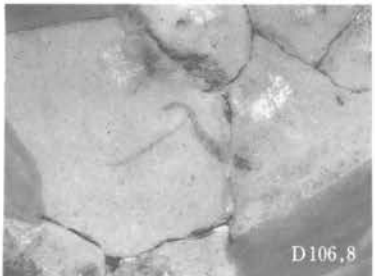

D103,16

D103,23

D103,30

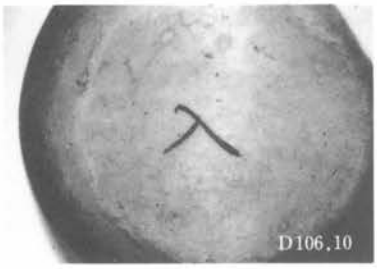

D103,31

D103,32

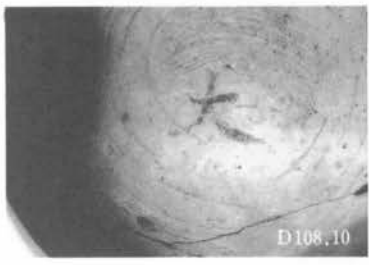

D106,8

D106,10

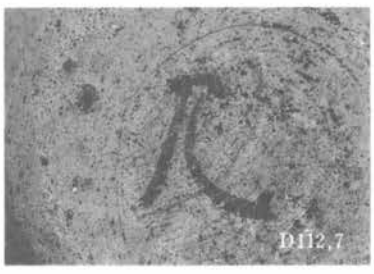
D106,10


D106,10

D108,7


D108,10

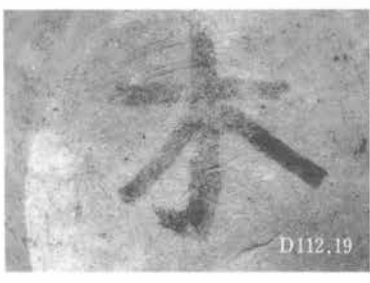
D109,8


D112,7

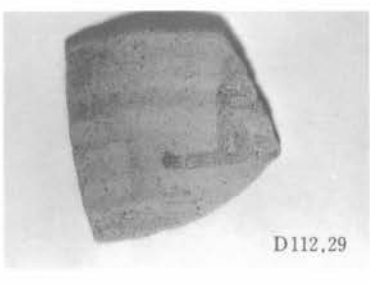
D112,13

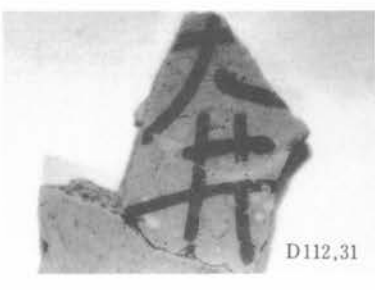
D112,14

D112,14

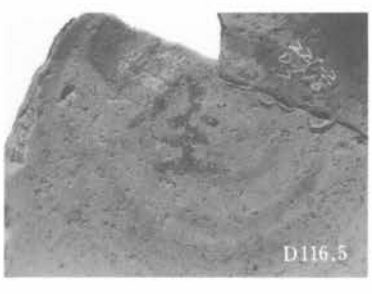

D112,19

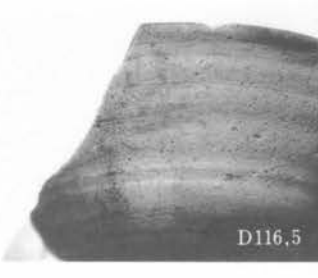
D112,19


D112,29


D112,31

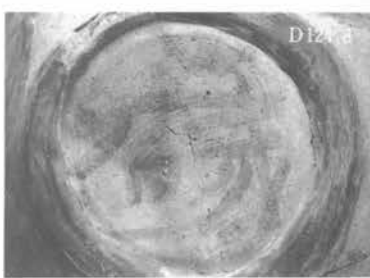
D112,35


D116,5


D116,5

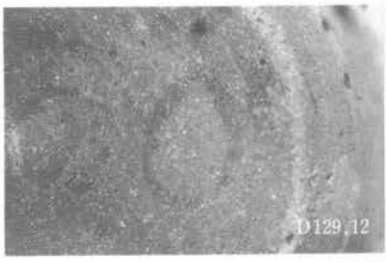
D124,6

D124,6


D124,6

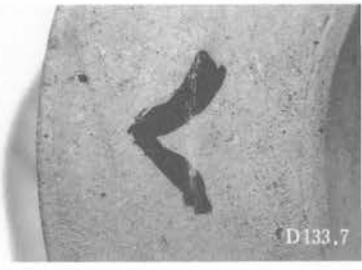
D124,8

D125,8


D129,12

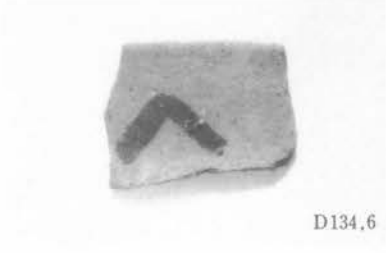
D129,14

D132,3

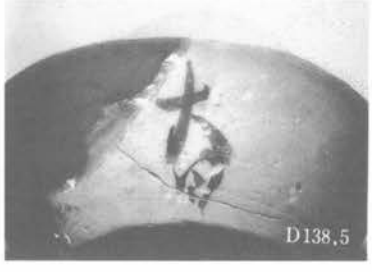

D133,7

D133,7

D133,10


D134,6

D138,5


D138,5

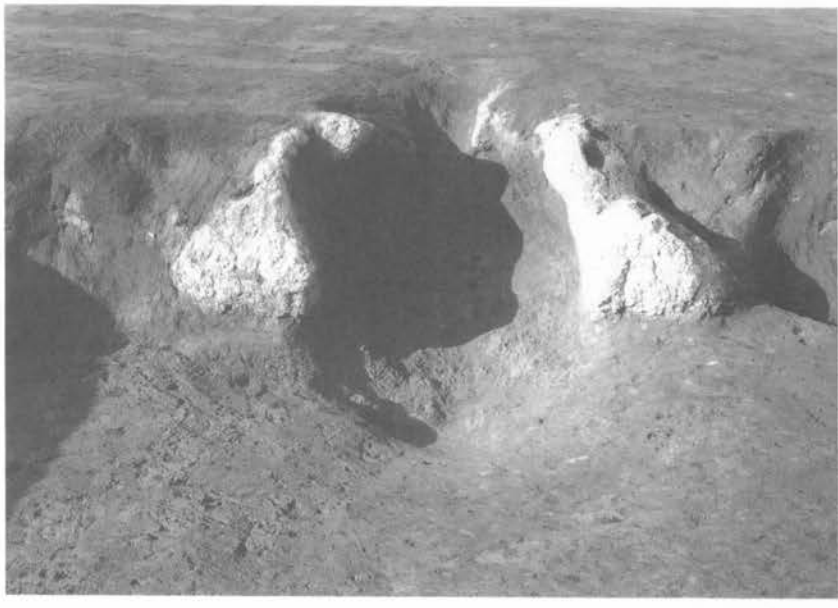
D143,6

D145,11

D146,5

歴史時代第Ⅲ群墨書土器

1．D048号遺構全景

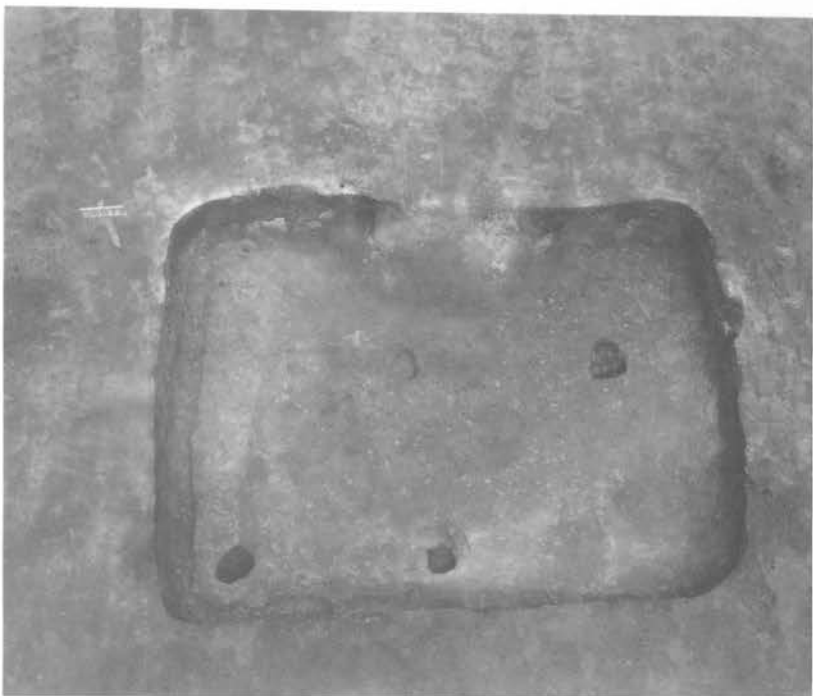


2．D048号遺構カマド
検出状況

3．D071号遺構全景

1．D071号遺構カマド
検出状況

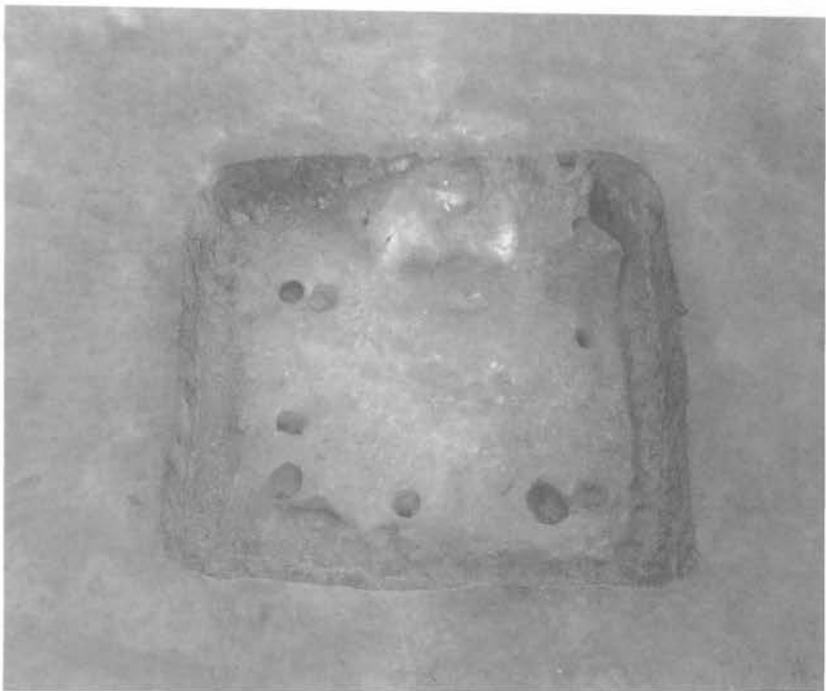
2．D072号遺構全景



3．D073号遺構全景

1．D073号遺構遺物出土状況

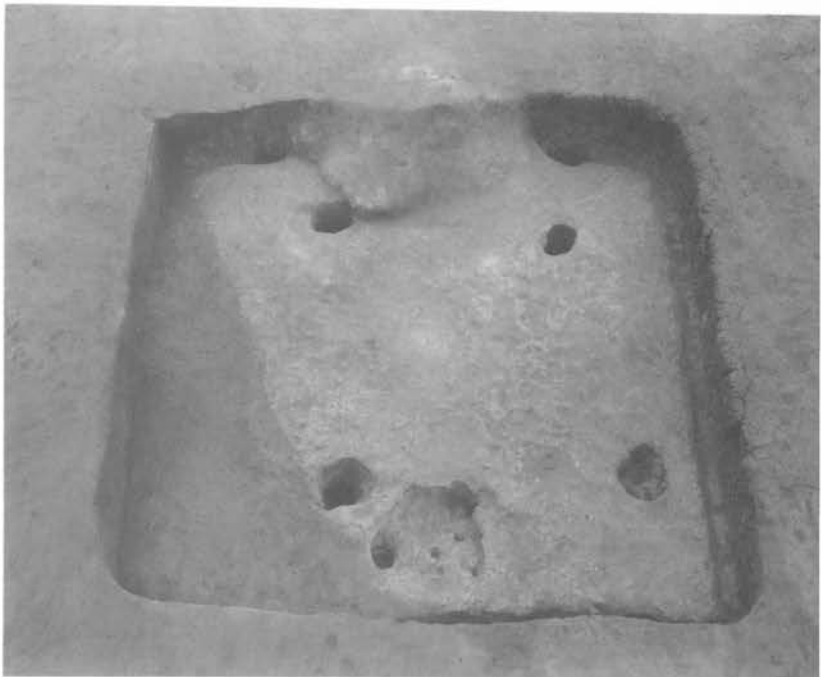
2．D073号遺構カマド
検出状況



3．D074号遺構全景

1．D074号遺構遺物出土状況

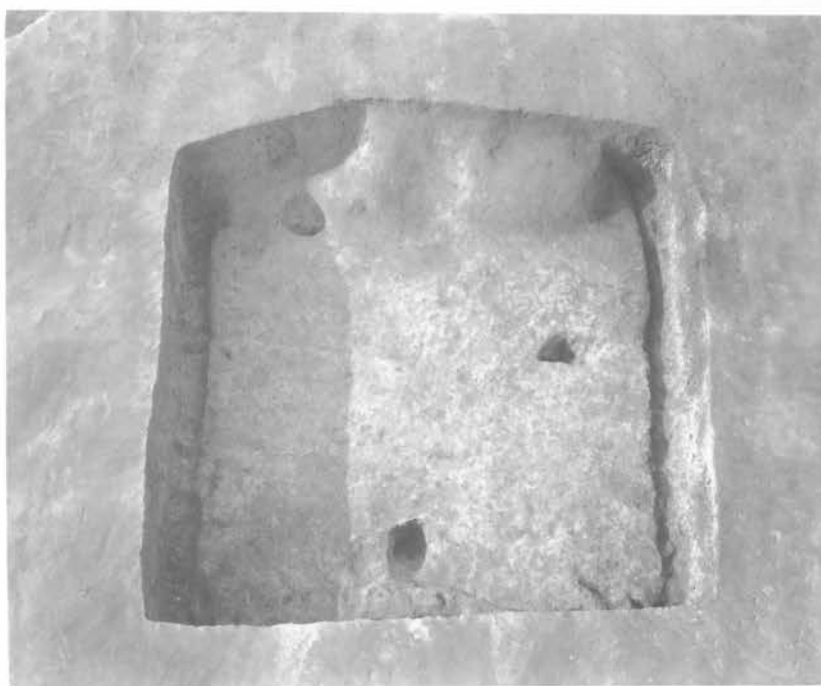
2．D074号遺構カマド
検出状況



3．D075号遺構全景

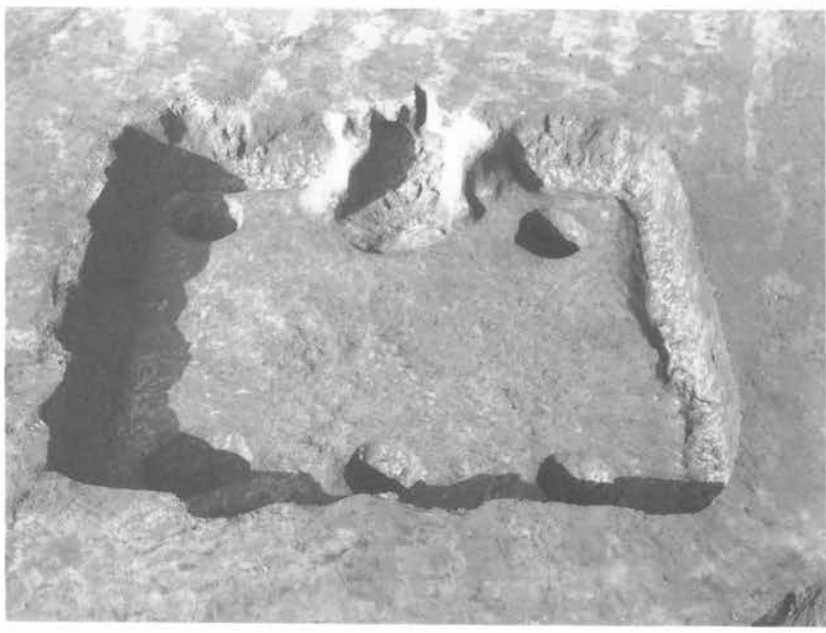
1．D075号遺構全景

2．D075号遺構カマド
検出状況

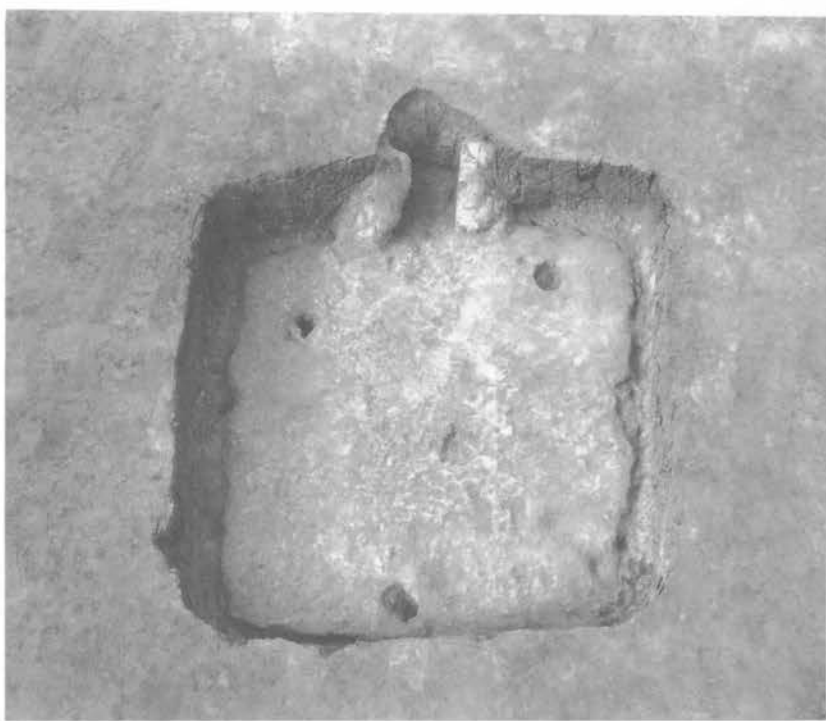


3．D081号遺構全景

1．D081号遺構カマド
検出状況

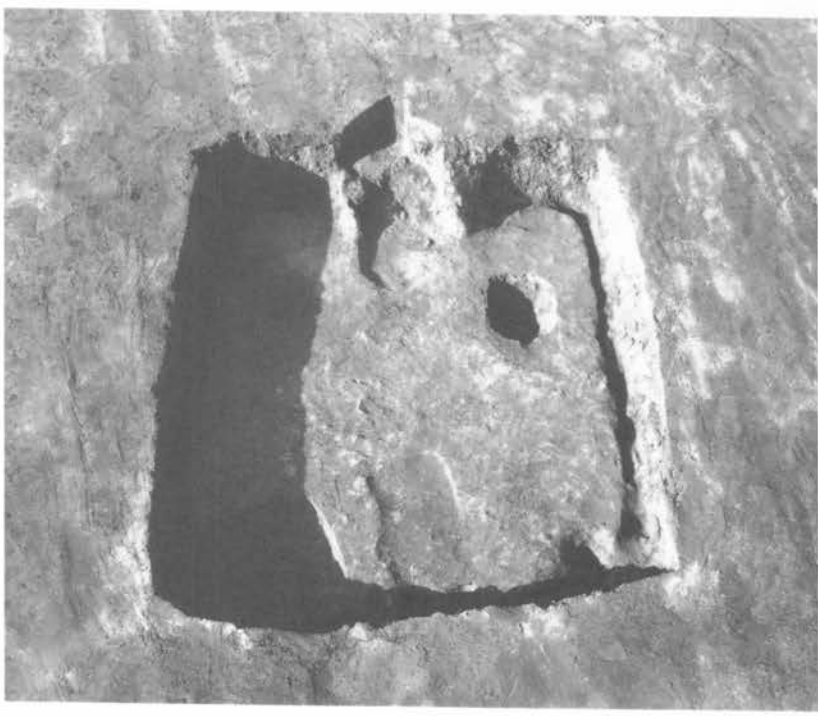


2．D082号遺構全景



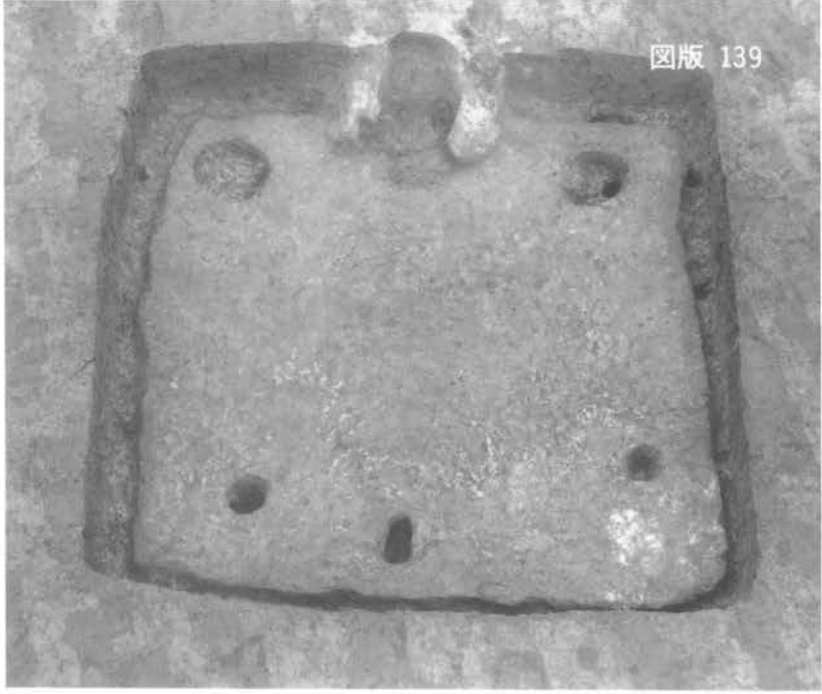
3．D083号遺構全景

1．D083号遺構カマド
検出状況



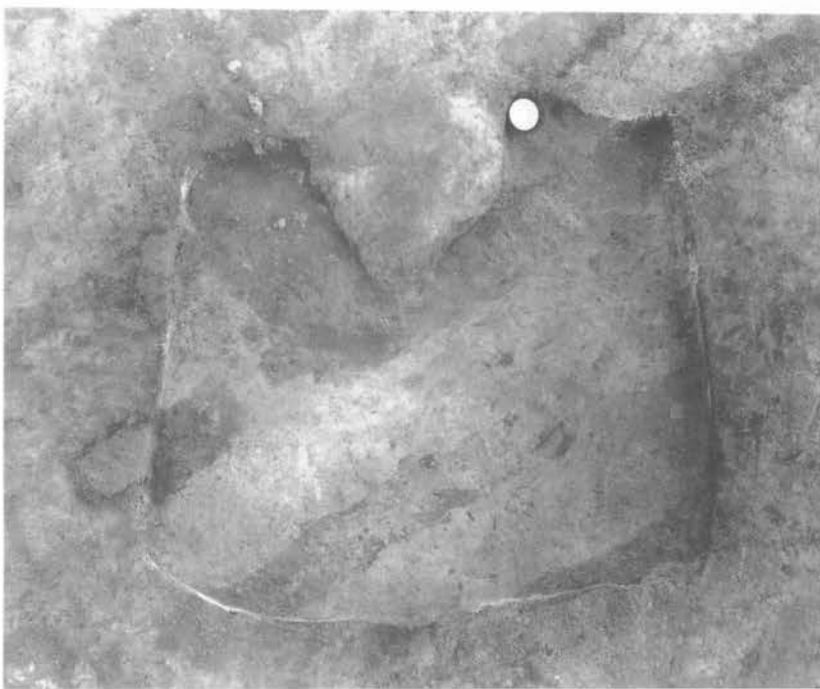
2．D084号遺構全景

3．D084号遺構カマド
検出状況



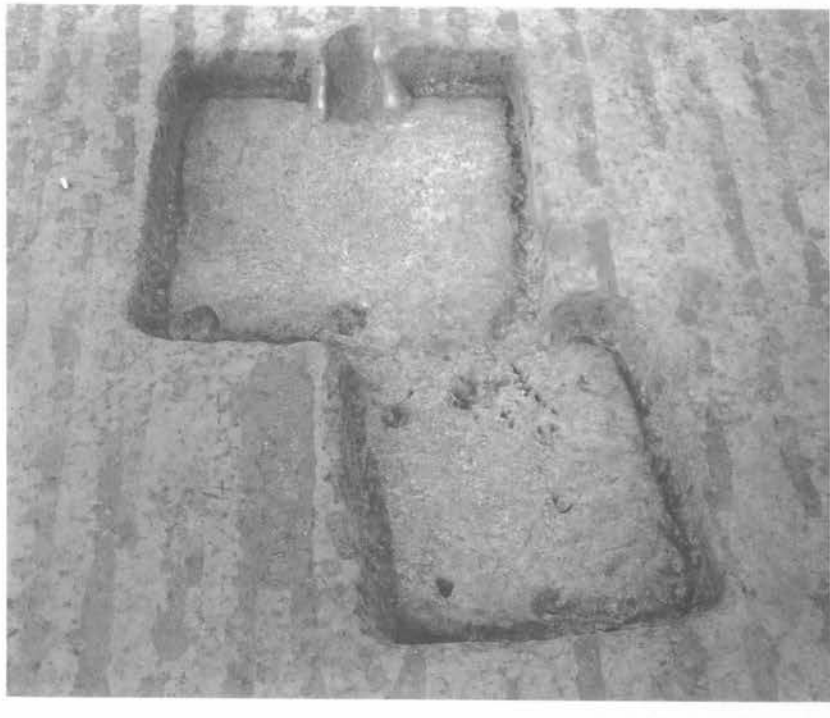
1．D085号遺構全景

2．D085号遺構カマド
検出状況



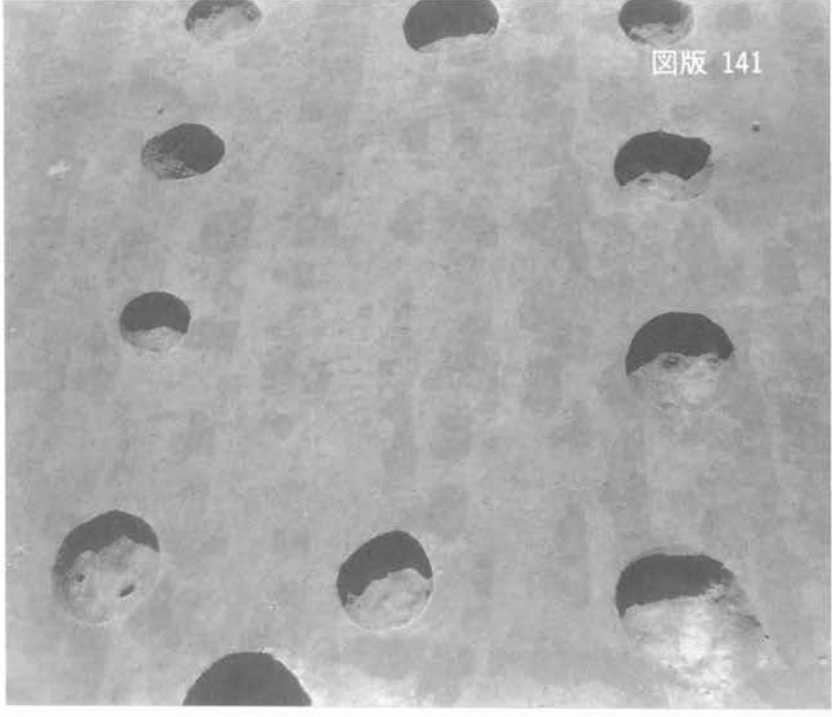
3．D086号遺構全景

1．D087号遺構全景



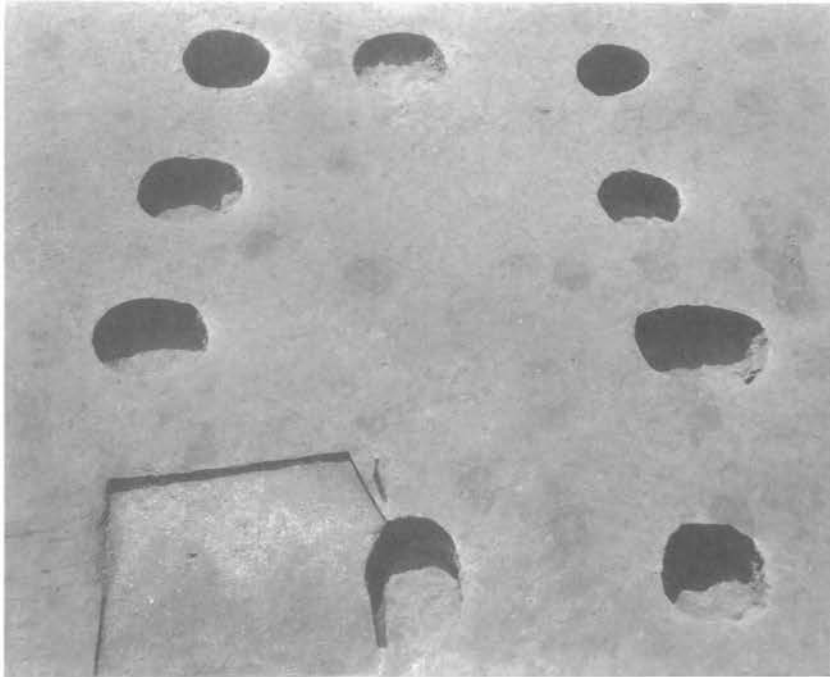
2．D087，D071号遺構
重複関係全景

3．D087号遺構カマド
検出状況

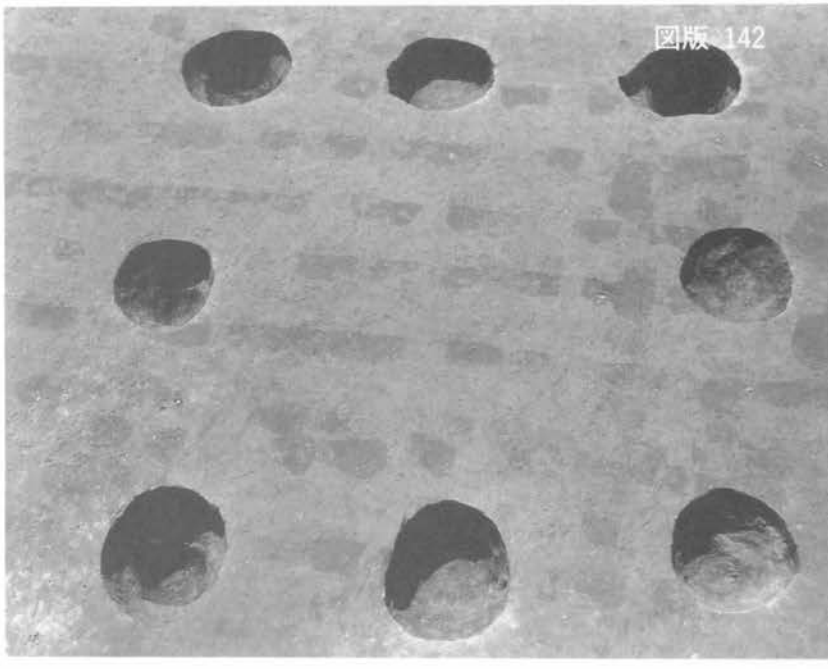


1．H001号遺構全景

2．H002号遺構全景

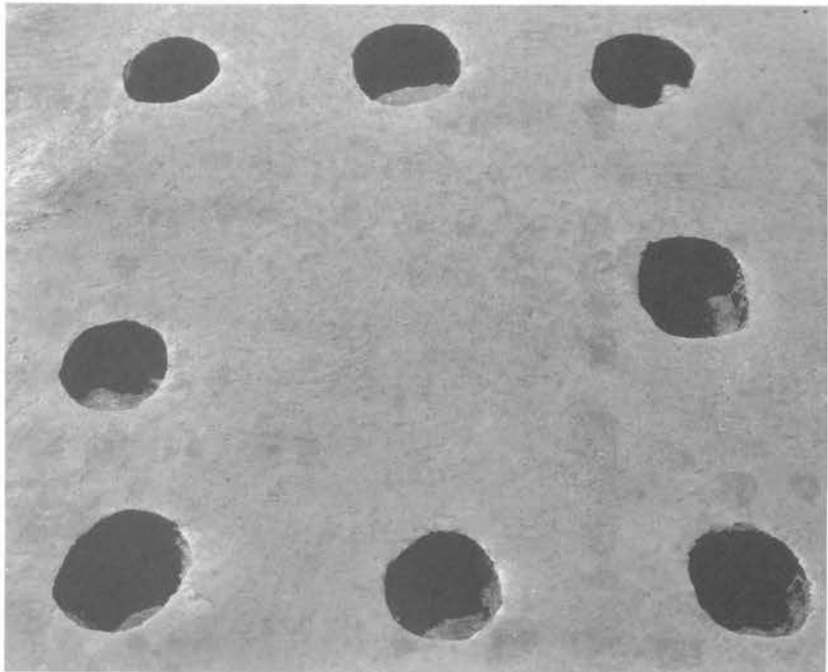


3．H003号遺構全景

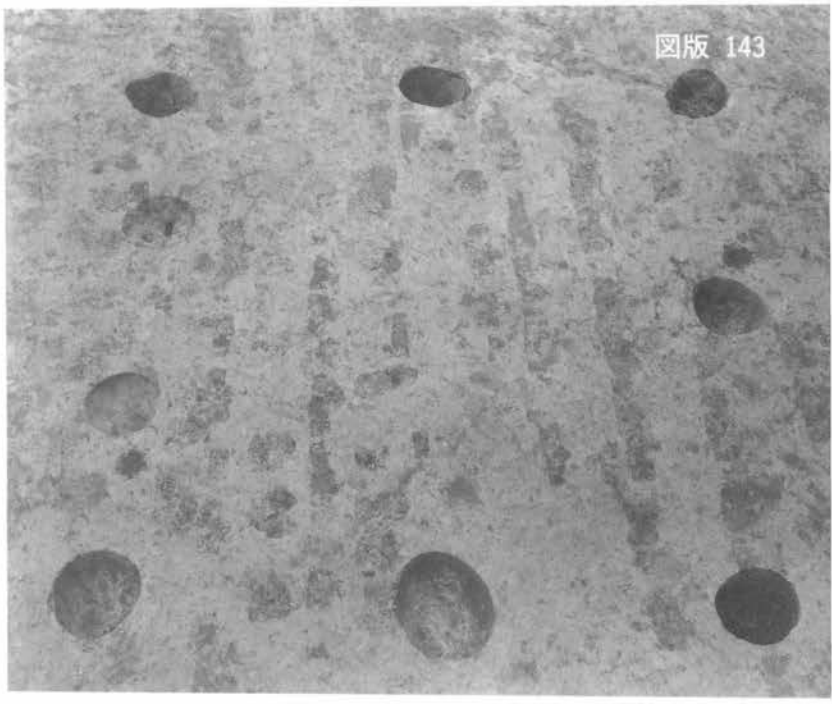


1．H004号遺構全景

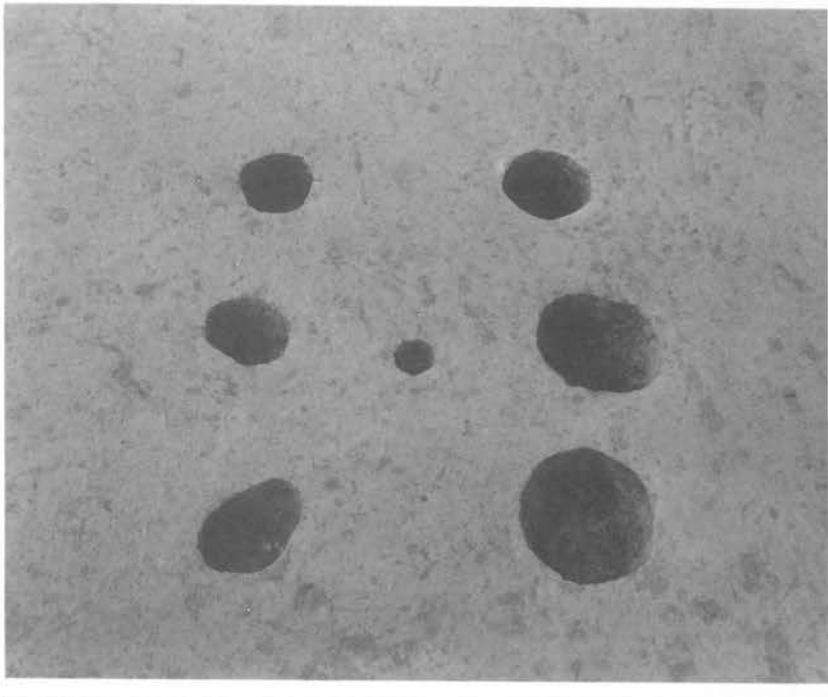
2．H005号遺構全景



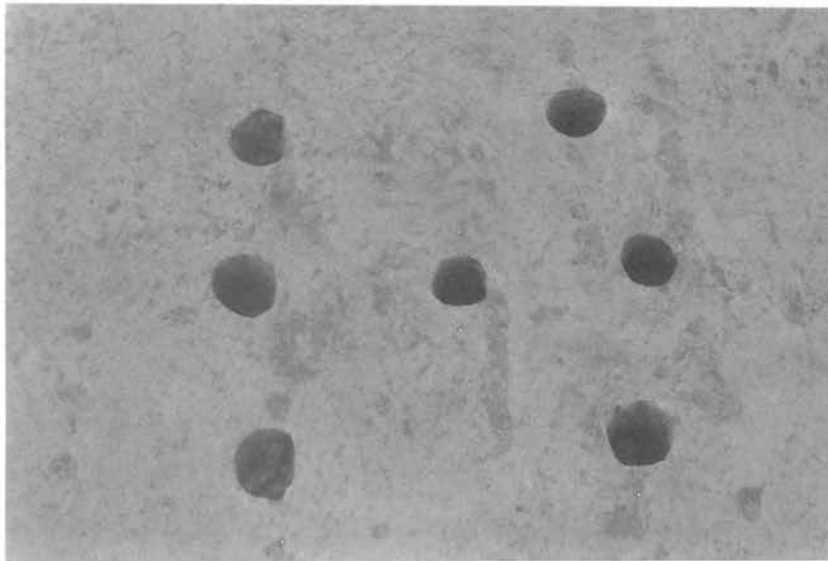
3．H006号遺構全景



1．H007号遺構全景



2．H008号遺構全景



3．H009号遺構全景

D048,8(½)

D048,9(½)

D048,16(½)

D048,15(½)

D072,11(½)

D074,1(⅓)

D073,6(⅓)

D073,7(½)

D073,8(½)

D074,11(½)

D074,8(½)

D074,14(½)

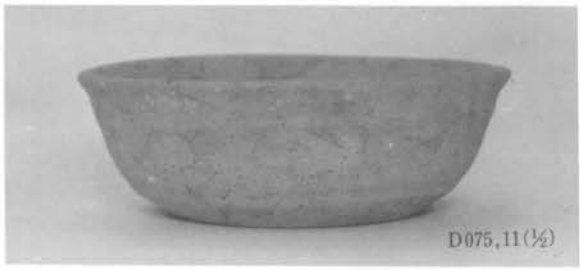
D074,20(½)

D075,4(½)

D075,5(½)

D075,6(½)

D075,7(½)


D075,11(½)

D075,16(½)

D075,18(½)

D081,6(½)

D081,7(½)

D081,11(½)

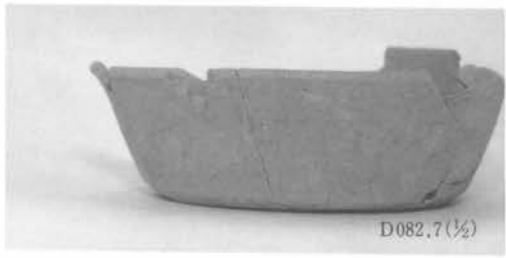
D081,22(½)

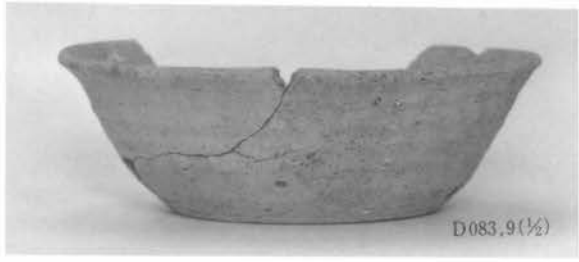
D081,23(½)

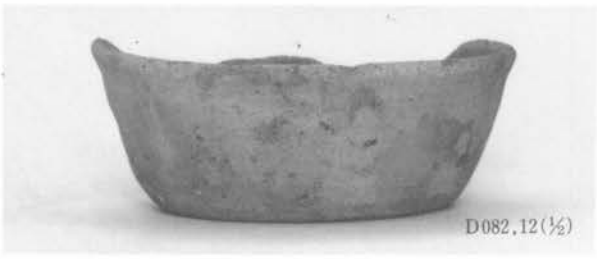
D081,25(½)

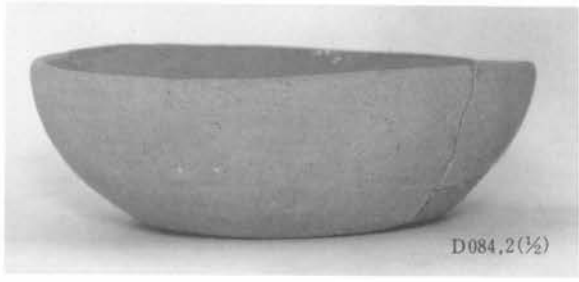
D082,4(¼)

D082,6(½)


D082,7(½)


D083,9(½)


D082,12(½)


D084,2(½)

D083,11(½)

D084,11(½)

D084,4(½)

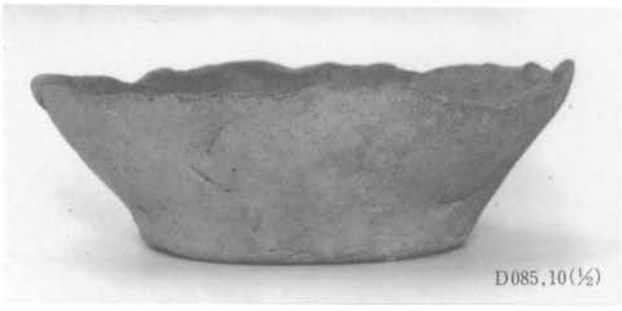
D085,5(½)

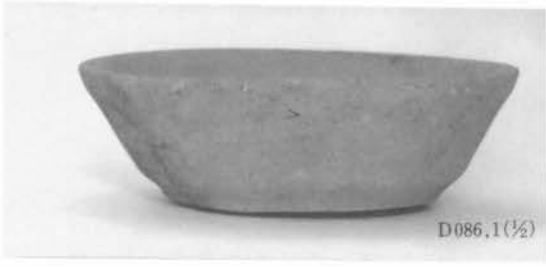
D084,13(½)

D085,7(½)

D085,9(½)

D085,8(½)


D085,10(½)


D086,1(½)

D087,1(¼)

D087,2(⅓)

D087,6(½)

D087,8(½)

D087,14(⅓)

D087,9(½)

D072,23(½)

D074,31(½)

D072,27(½)

D074,30(½)

H006,1(½)

D082,20(⅔)

D074,33(⅔)

D075,21(⅔)

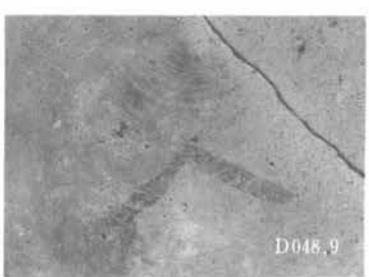
D074,34(⅔)

D085,12(⅔)

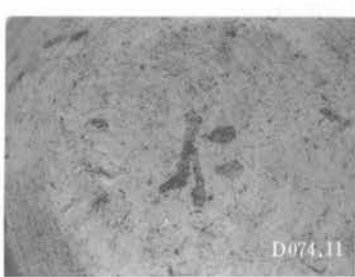
D048,8

D048,8

D048,6

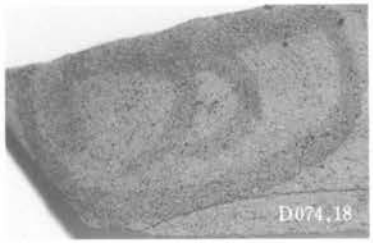


D048,9

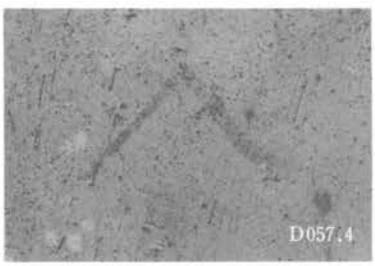


D074,11

D074.11


D074.18

D074.19


D057.4

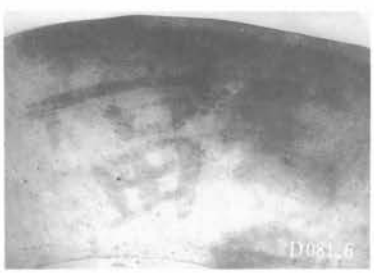
D075.4

D075.10

D081.11

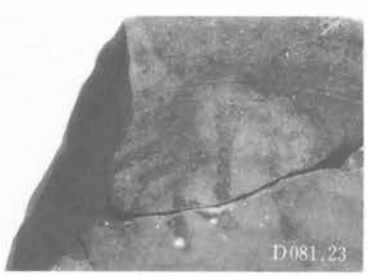
D081.14

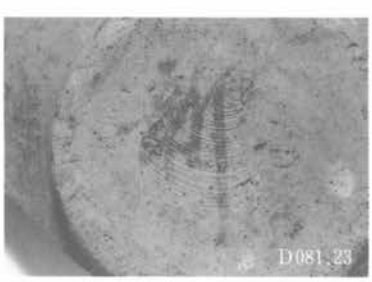
D081.13


D081.6

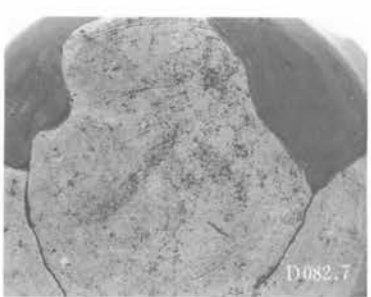
D081.19

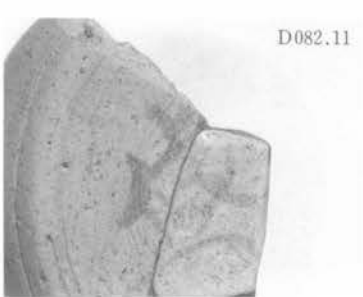
D081.22


D081.23


D081.23

D081.24

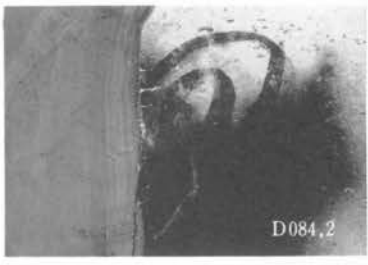

D082.7


D082.11

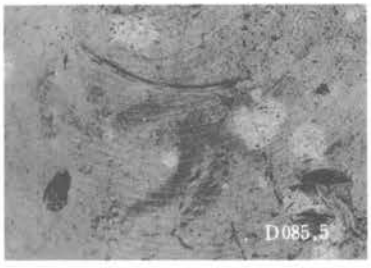
D083.8

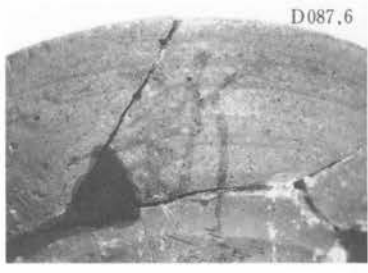
D083,8

D083,13


D084,2

D084,6

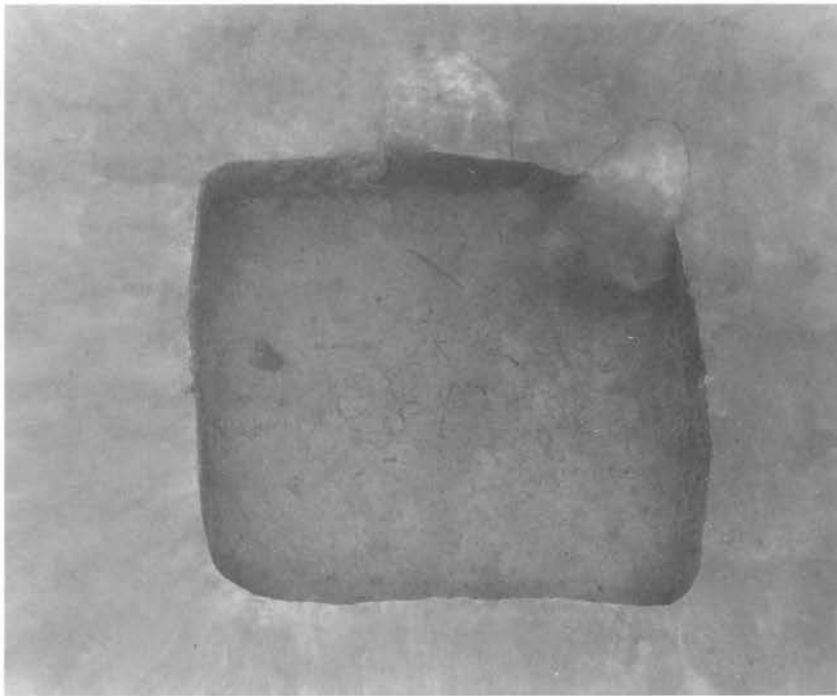

D085,5


D087,6

D087,7

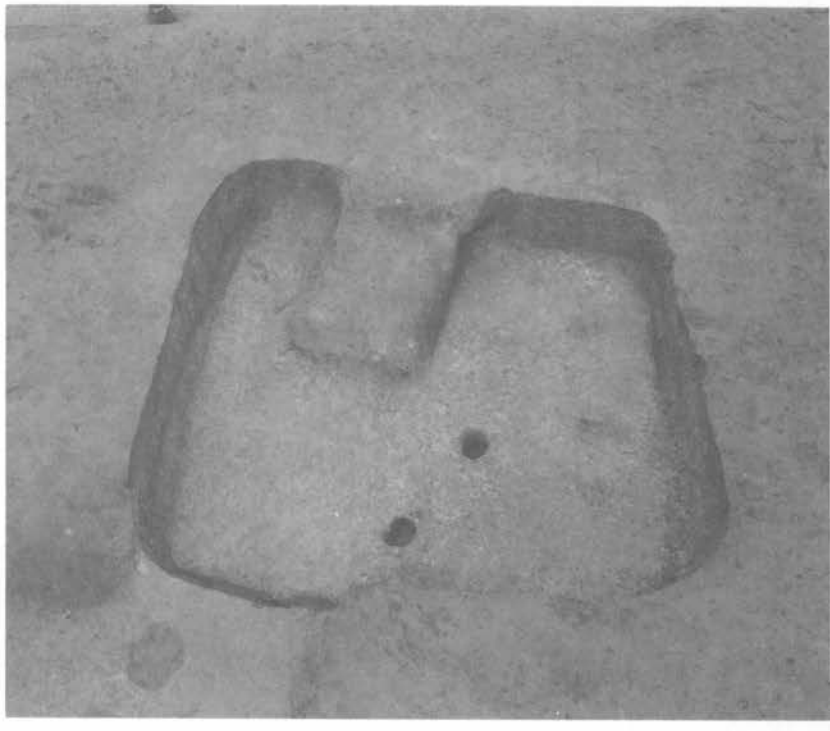
D087,10

D087,11



歴史時代第Ⅳ群墨書土器、第Ⅴ群遺構　1．D009号遺構全景

1．D009号遺構カマド
検出状況

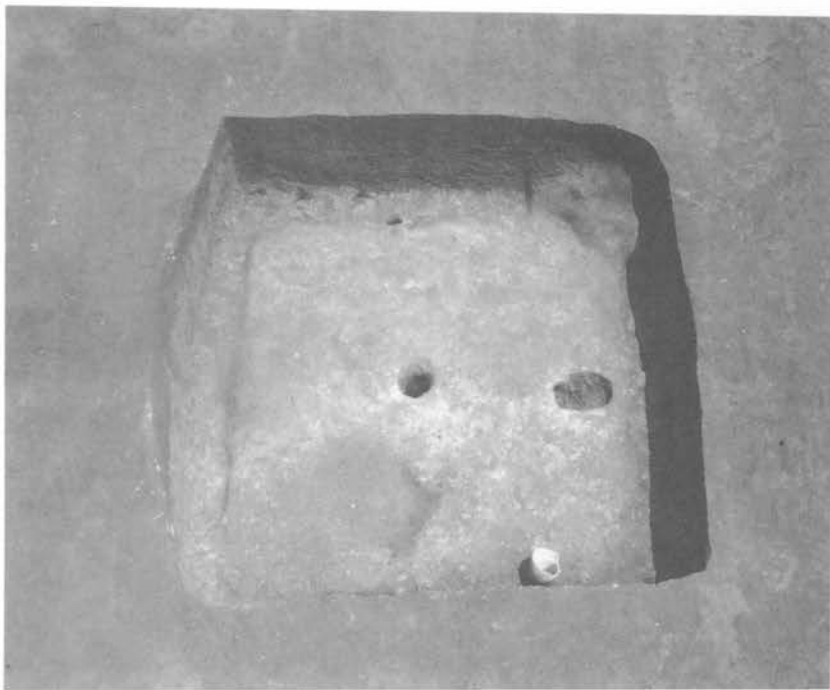


2．D015号遺構全景

3．D015号遺構カマド
検出状況

1．D017号遺構全景

2．D017号遺構カマド
掘りかた



3．D018号遺構全景

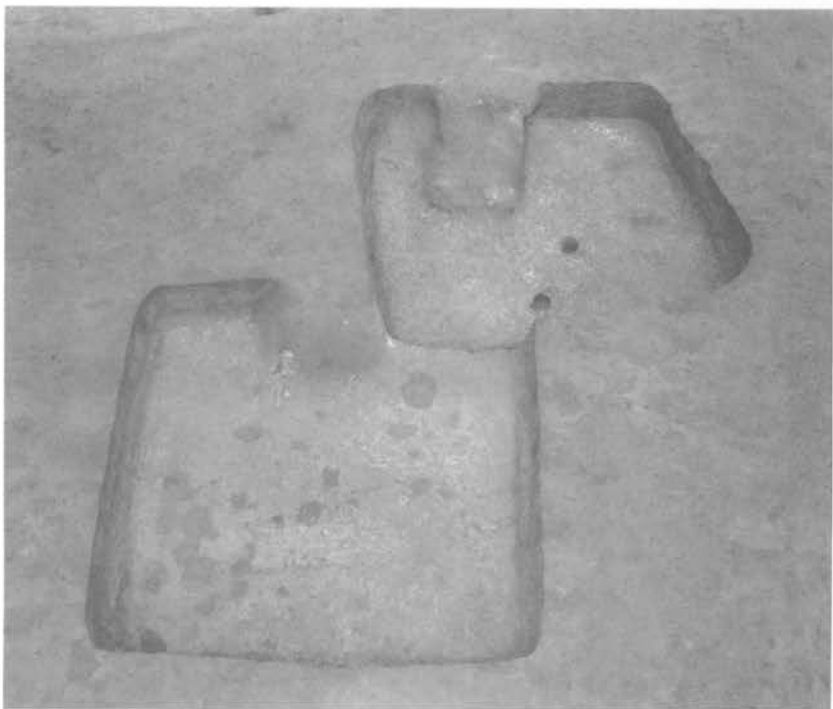
1．D018号遺構カマドA
検出状況

2．D018号遺構カマドB
検出状況

3．D019号遺構全景

1．D078号遺構全景

2．D078号遺構カマド
検出状況



3．D015，D078号遺構
重複関係全景

D009,1(½)

D015,5(½)

D015,8(½)

D017,1(½)

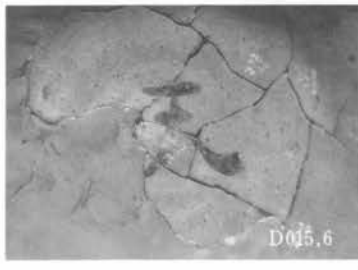
D019,1(¼)

D019,6(½)

D078,6(½)

D078,1(⅓)

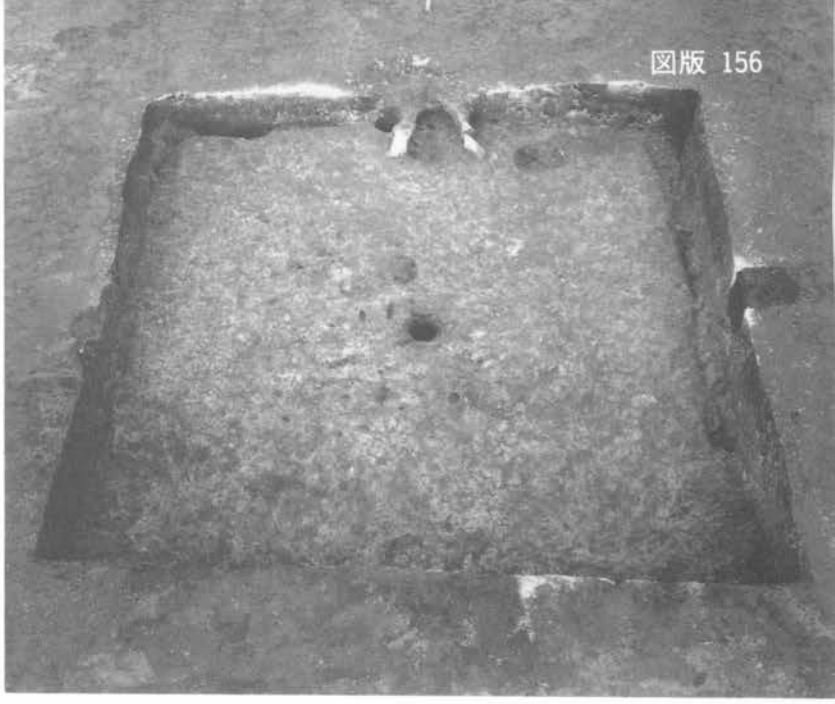
D019,2


D015,6

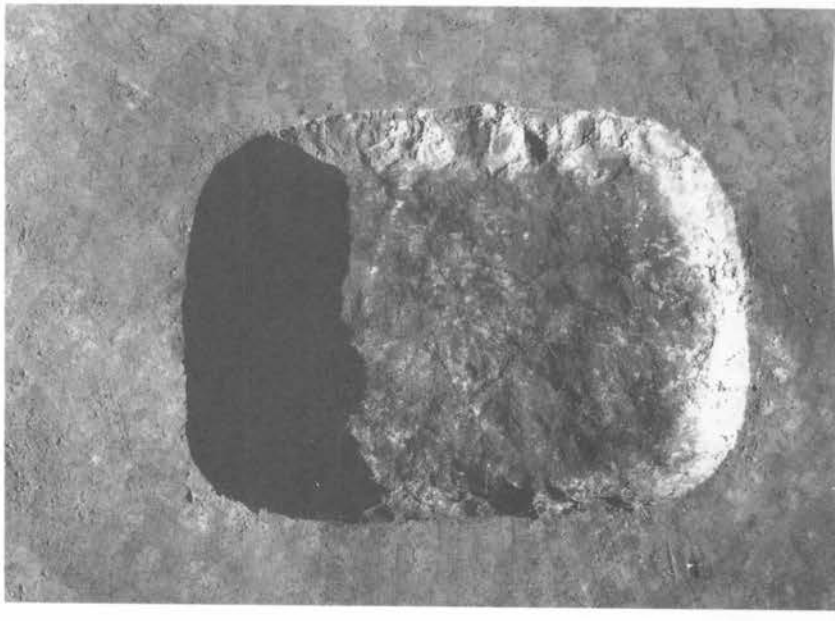
D015,9

D015,8

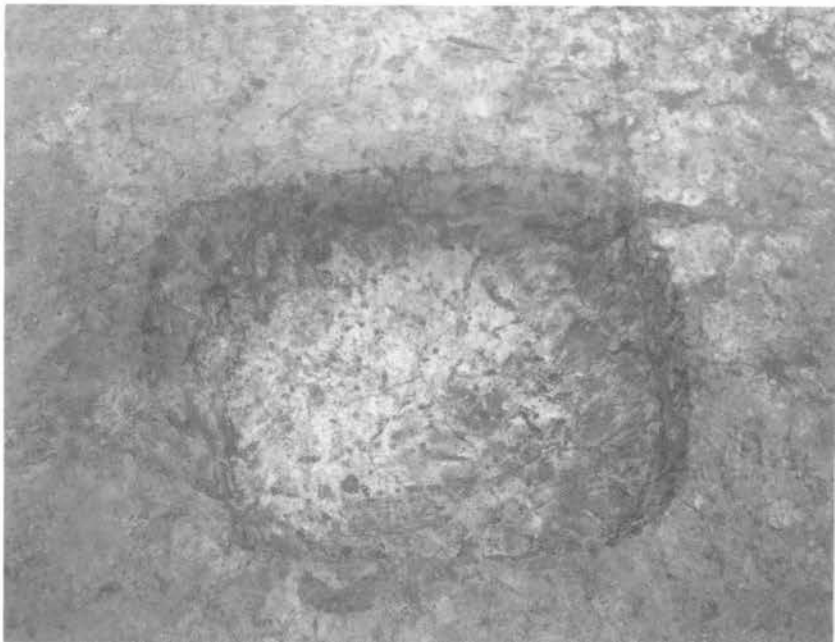
歴史時代第Ⅴ群遺物



1．D032号遺構全景



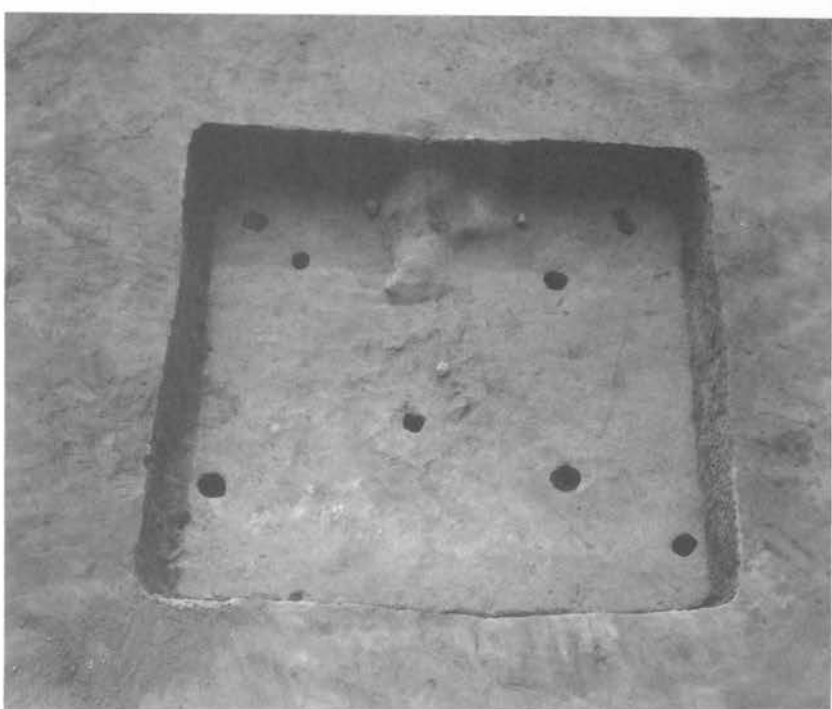
2．D033号遺構全景



3．P003号遺構全景

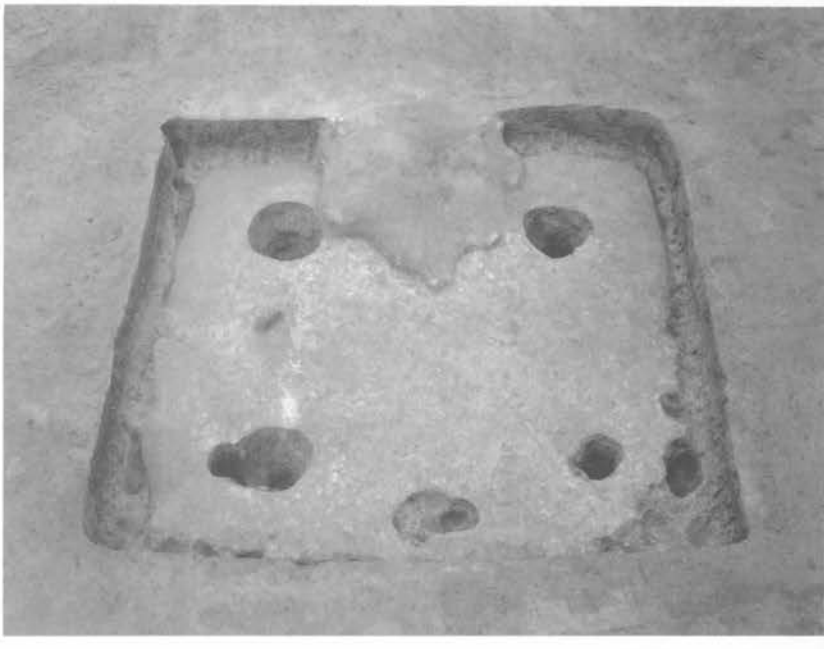
1．D023号遺構全景

2．D023号遺構カマド
検出状況

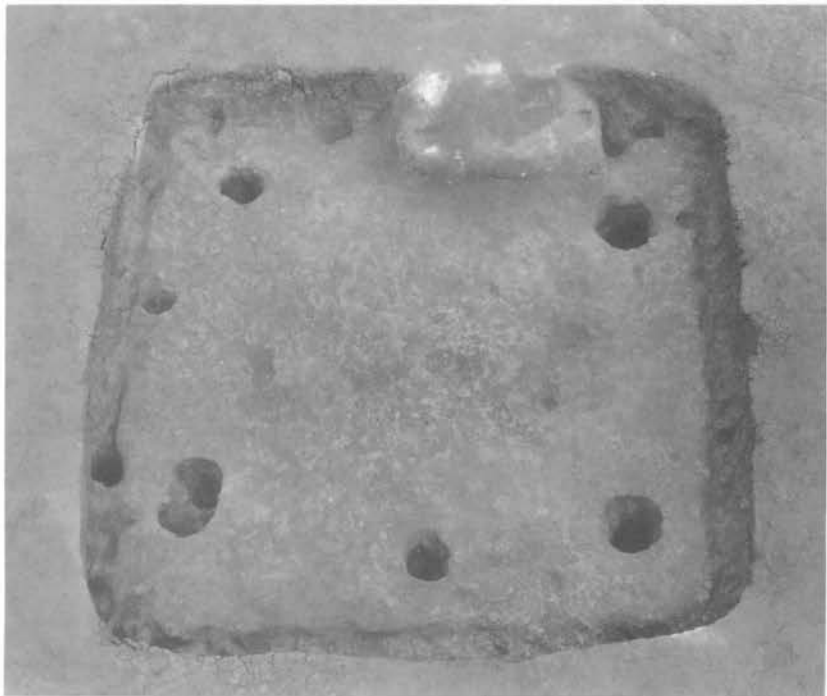


3．D024号遺構全景

1．D024号遺構カマド
検出状況

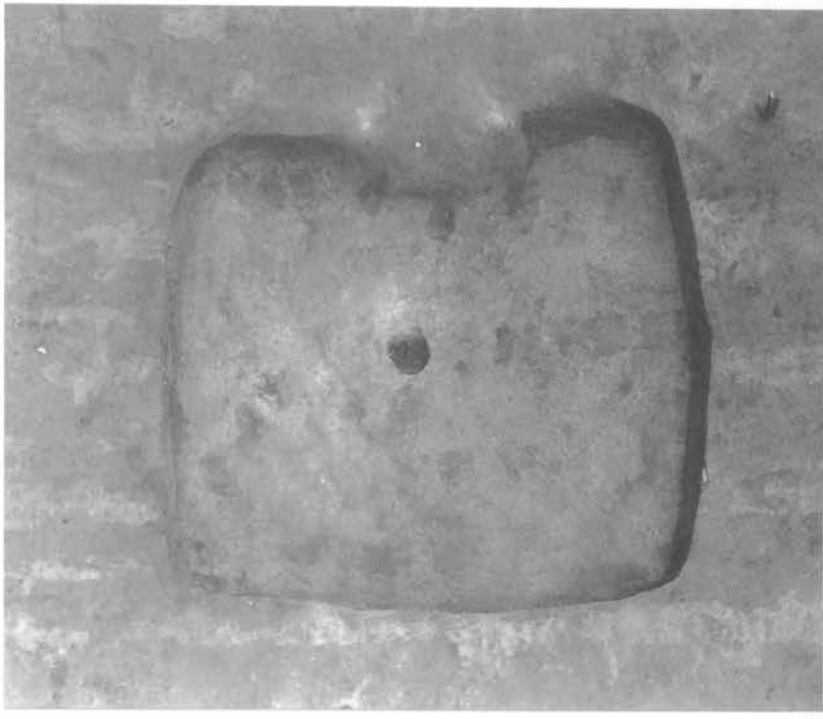


2．D025号遺構全景



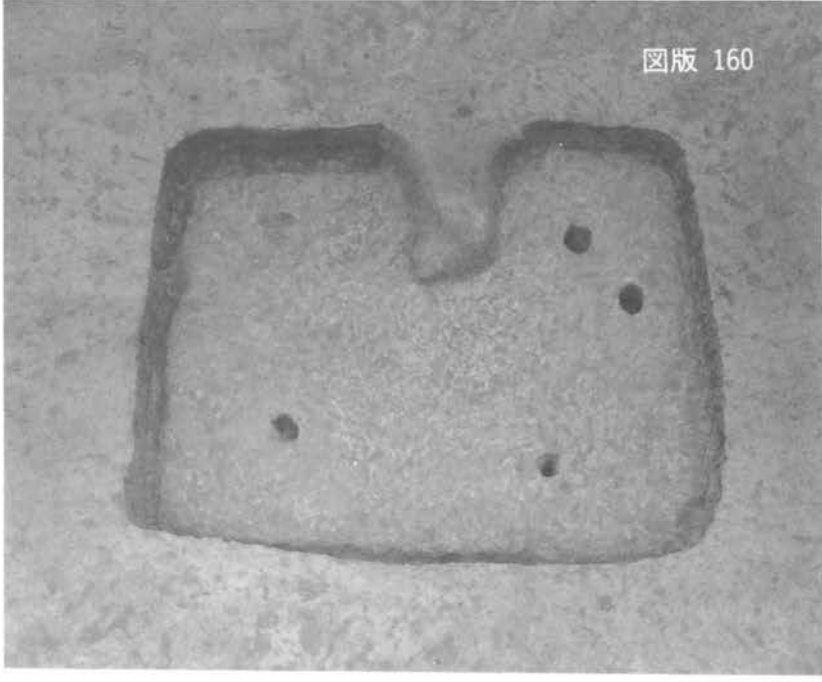
3．D027号遺構全景

1．D027号遺構カマド
検出状況

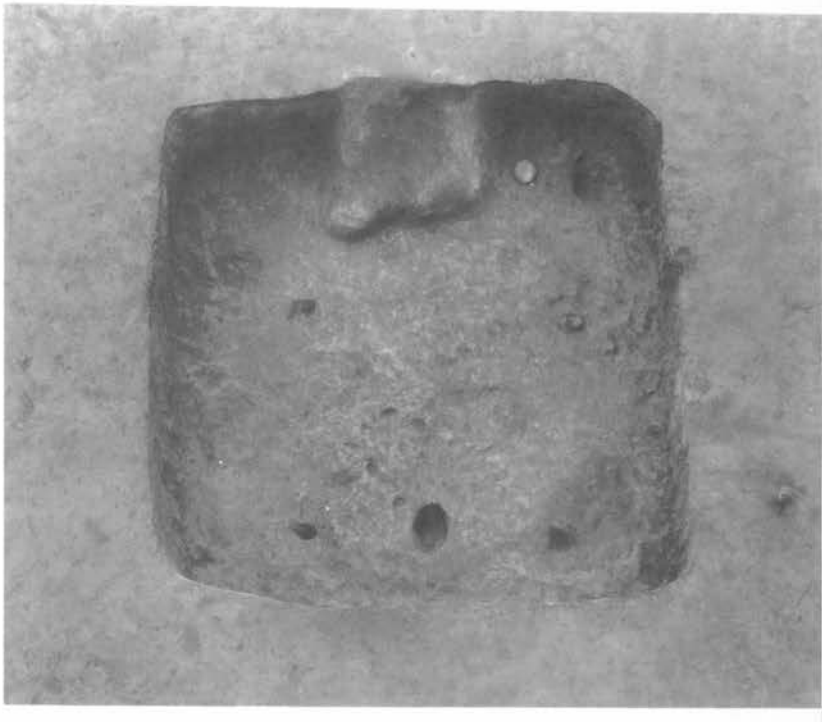


2．D028号遺構全景

3．D028号遺構カマド
検出状況



1．D029号遺構全景

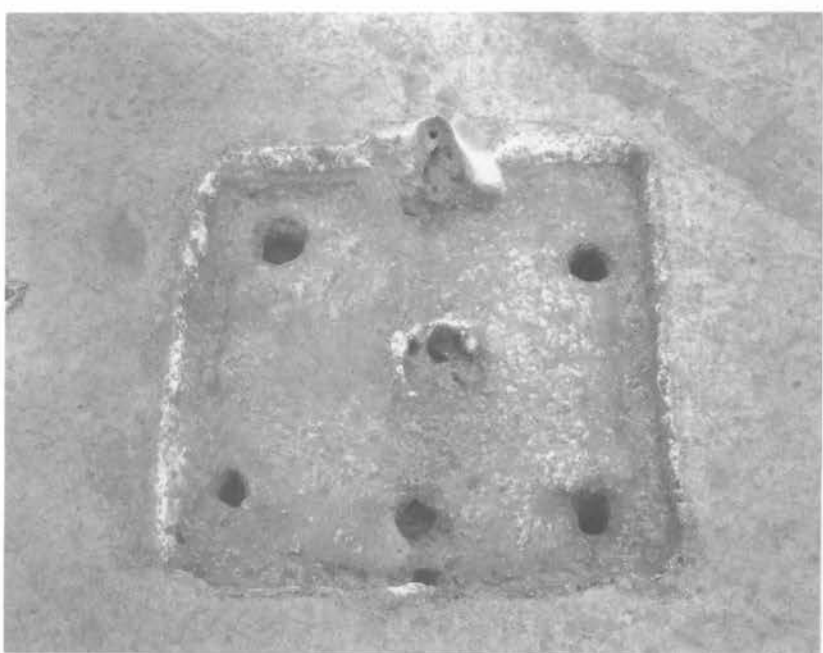


2．D030号遺構全景

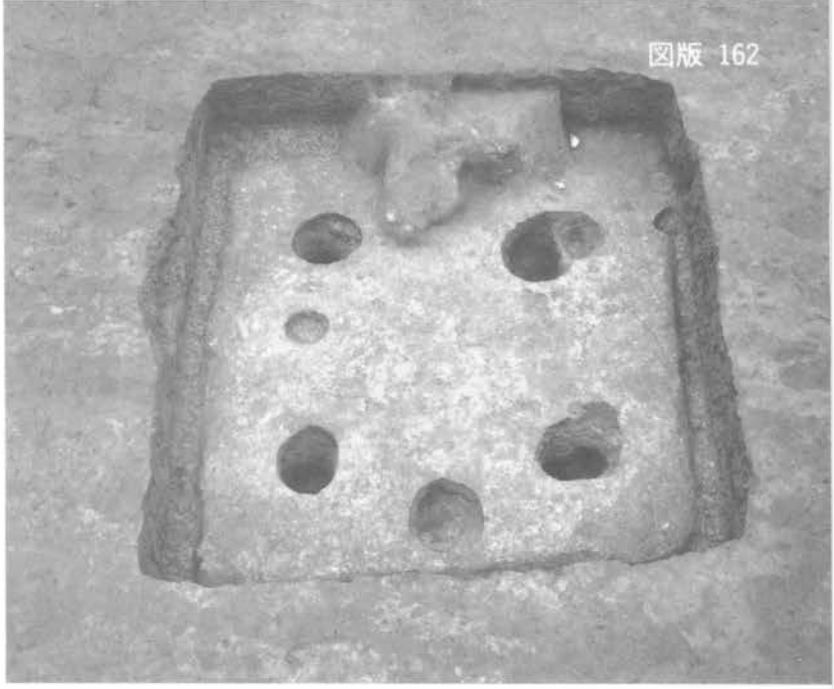
3．D030号遺構カマド
検出状況

1．D031号遺構全景

2．D031号遺構カマド
検出状況

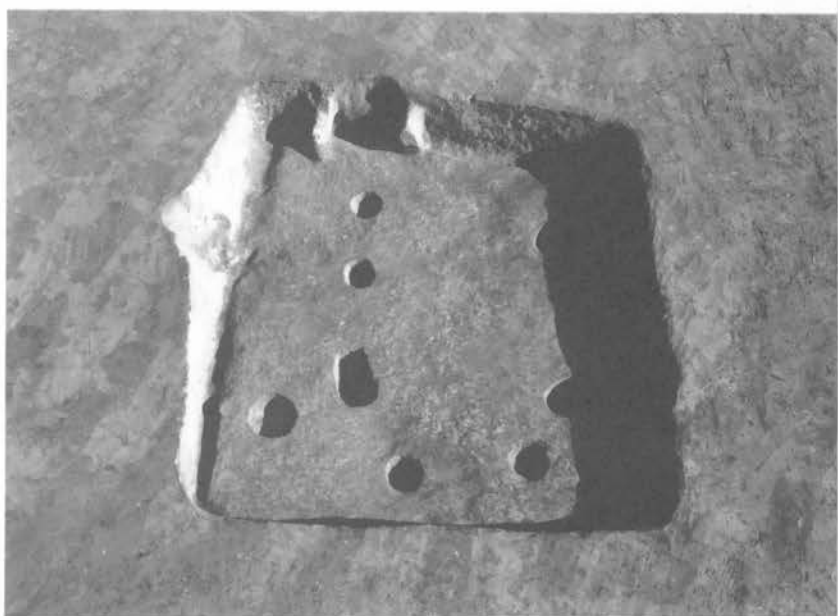


3．D034号遺構全景



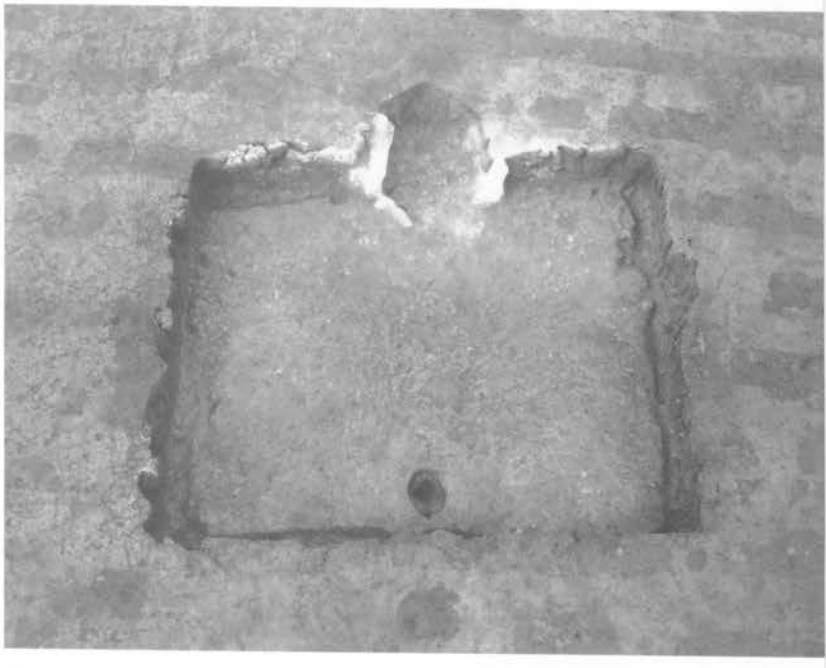
1．D042号遺構全景

2．D042号遺構カマド
検出状況

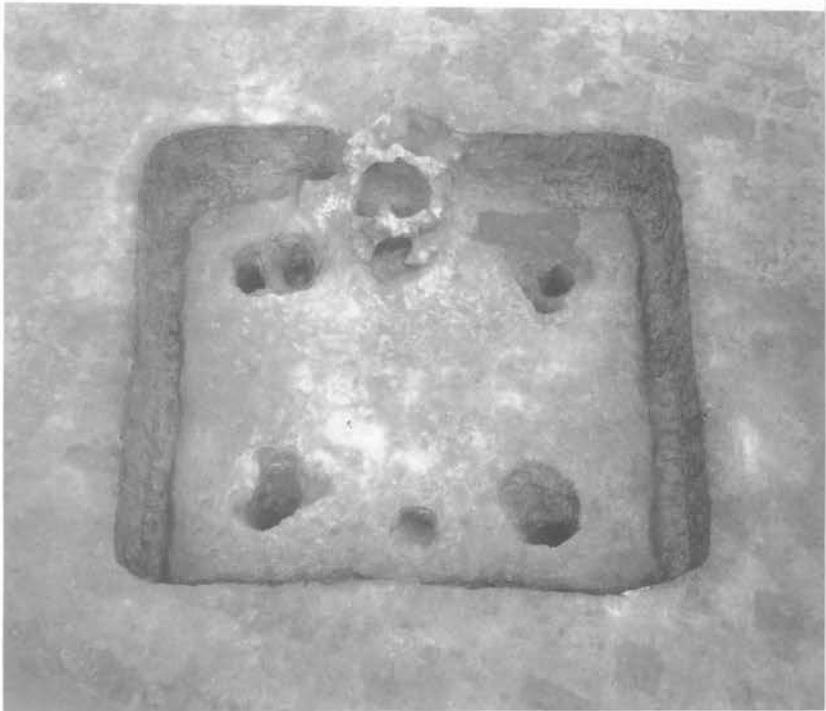


3．D043号遺構全景

1．D043号遺構カマドB
検出状況



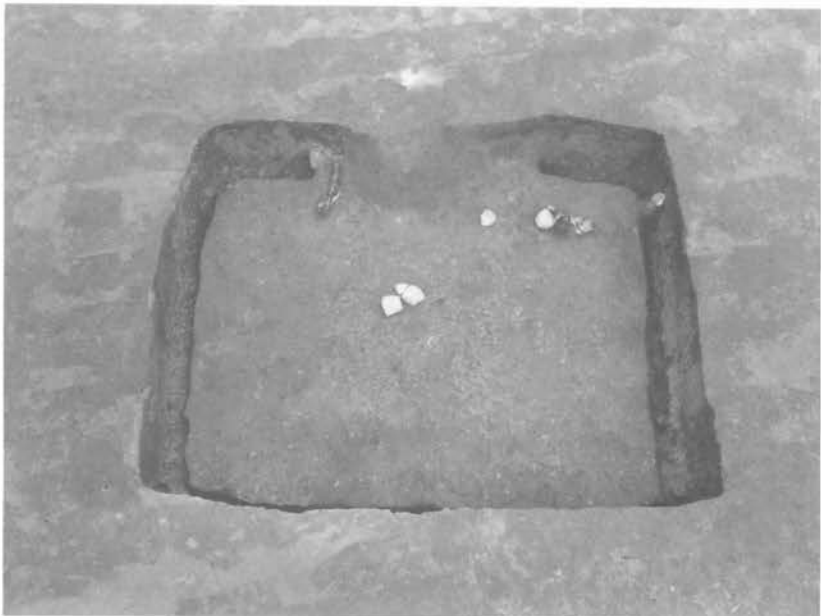
2．D044号遺構全景



3．D045号遺構全景

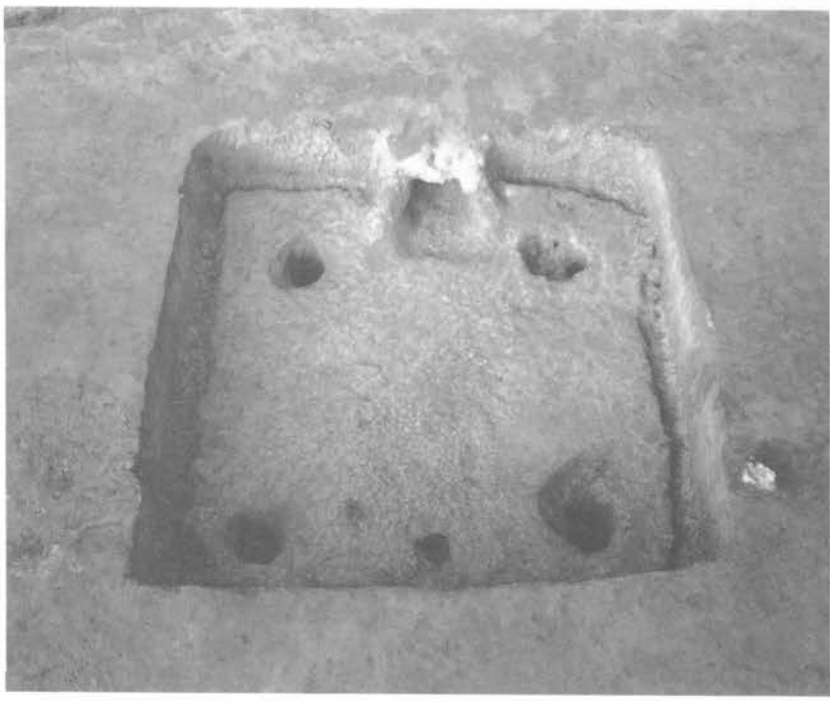
1．D046号遺構全景

2．D046号遺構カマド
A，B検出状況



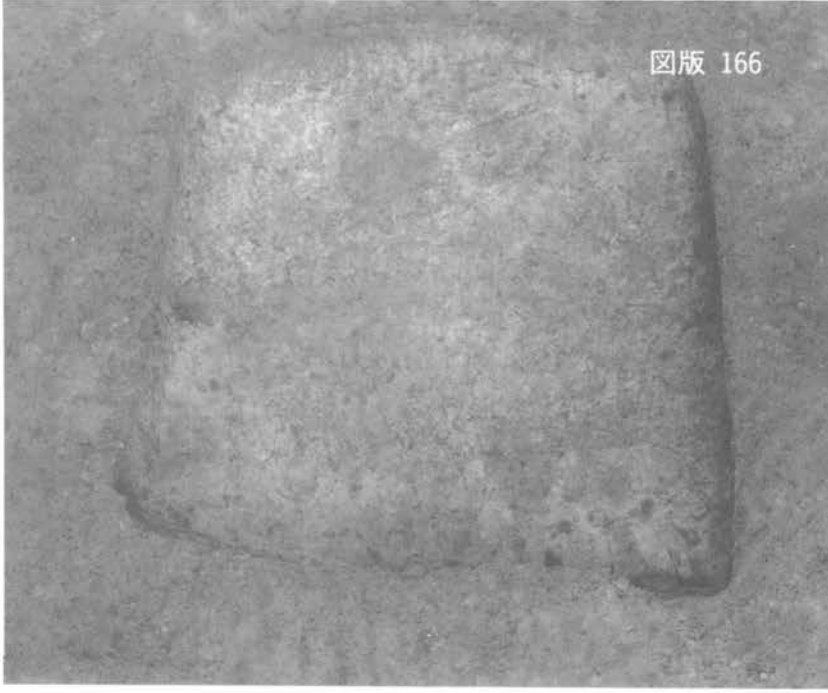
3．D050号遺構全景

1．D050号遺構遺物出土状況

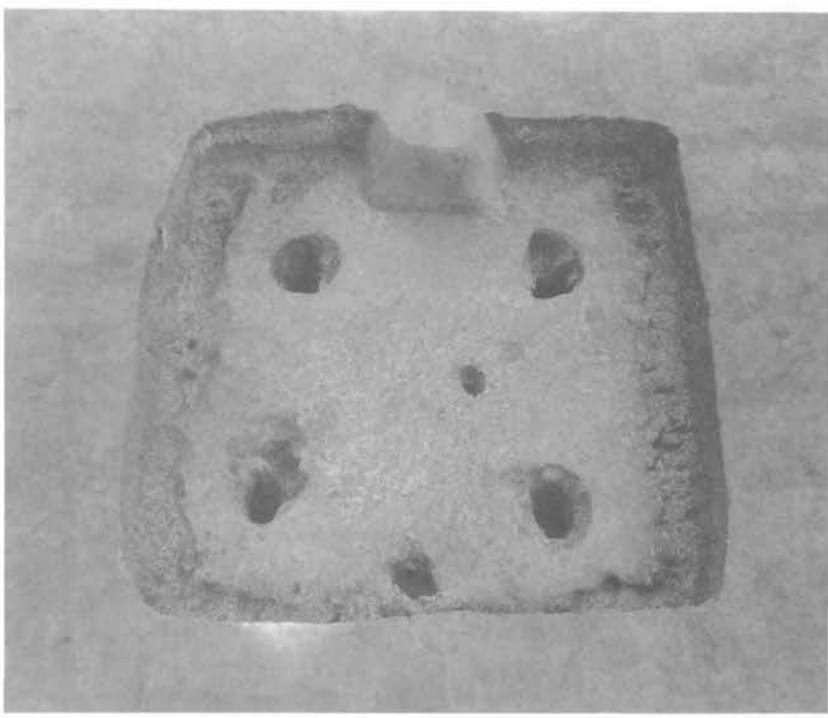


2．D051号遺構全景

3．D051号遺構カマド
検出状況

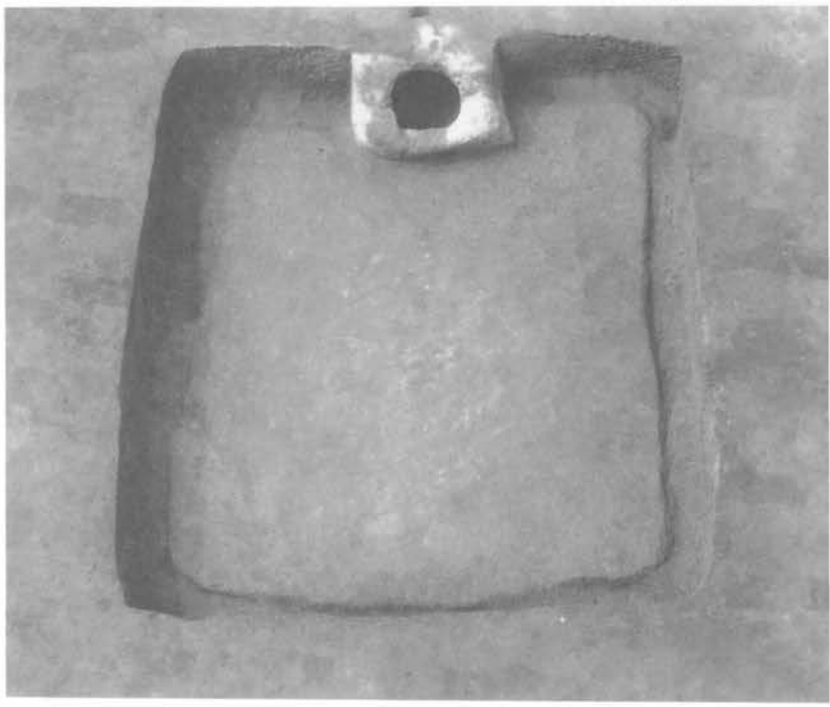


1．D052号遺構全景

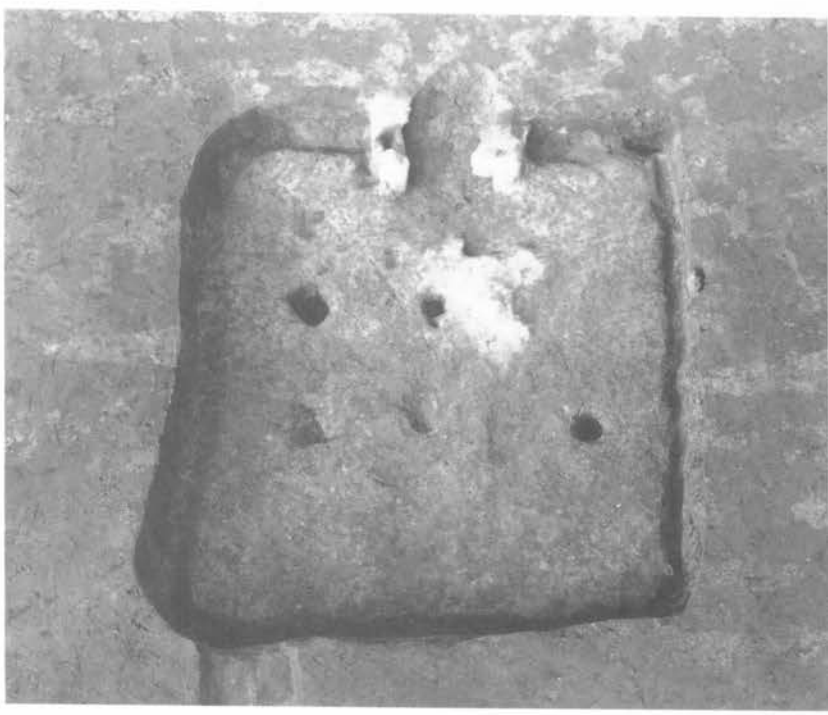


2．D053号遺構全景

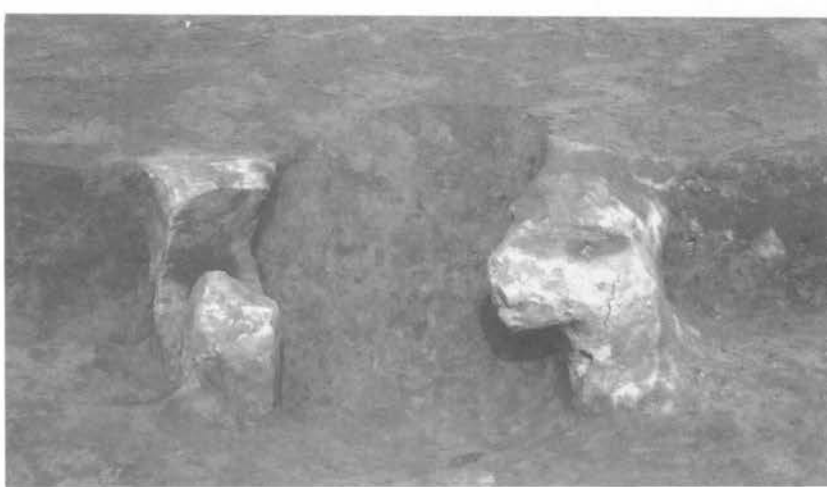
3．D053号遺構カマド
検出状況



1．D054号遺構全景



2．D079号遺構全景



3．D079号遺構カマド
検出状況

1．P006号遺構全景

2．P023号遺構全景

3．P025号遺構全景

D025,6(½)

D025,9(½)

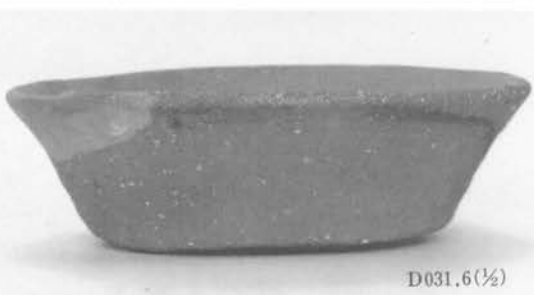
D027,1(¼)

D027,4(⅓)

D027,8(½)

D027,10(½)

D030,2(½)



D031,6(½)

D031,1(⅓)

D042,8(½)

歴史時代第Ⅶ群遺物

D044,3(½)

D044,4(½)

D044,5(½)

D044,7(½)

D044,8(½)

D044,9(½)

D045,2(½)

D045,3(½)

D046,4(½)

D046,5(½)

D046,7(½)

D046,10(½)

D050,1(⅓)

D050,2(⅓)

D050.7(½)

D050,8(½)

D050,9(½)

D050,11(½)

D050,15(½)

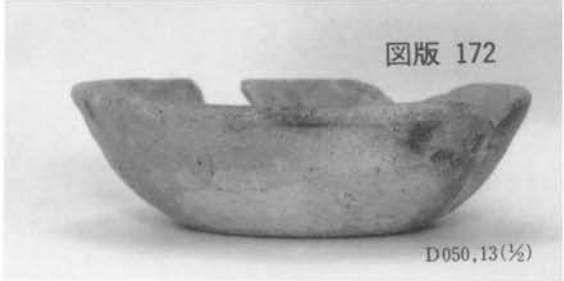
D051,1(⅓)

D050,20(½)

D050,22(½)

D054,1(⅓)

D054,2(½)



D050,13(½)

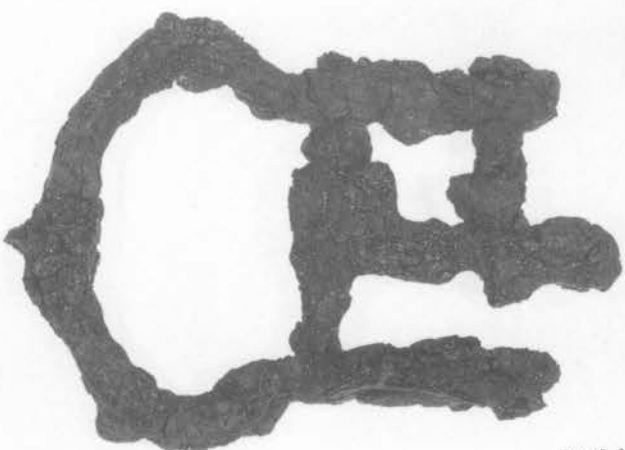
D023,4(½)

D025,11(½)

D029,3(½)

D025,13(½)

D042,10(½)

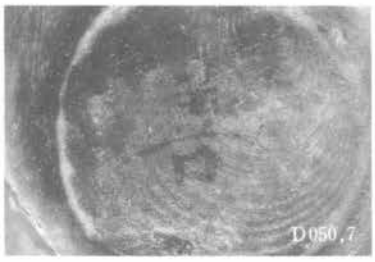


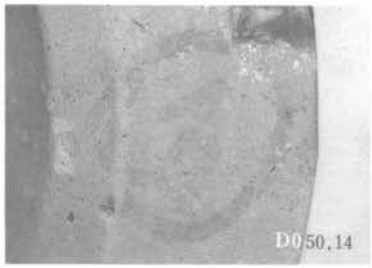
D042,11(⅓)

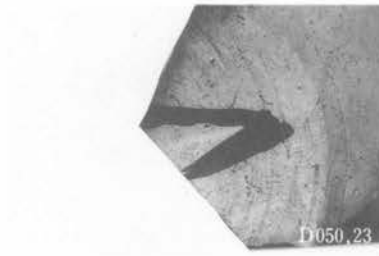
歴史時代第Ⅶ群遺物

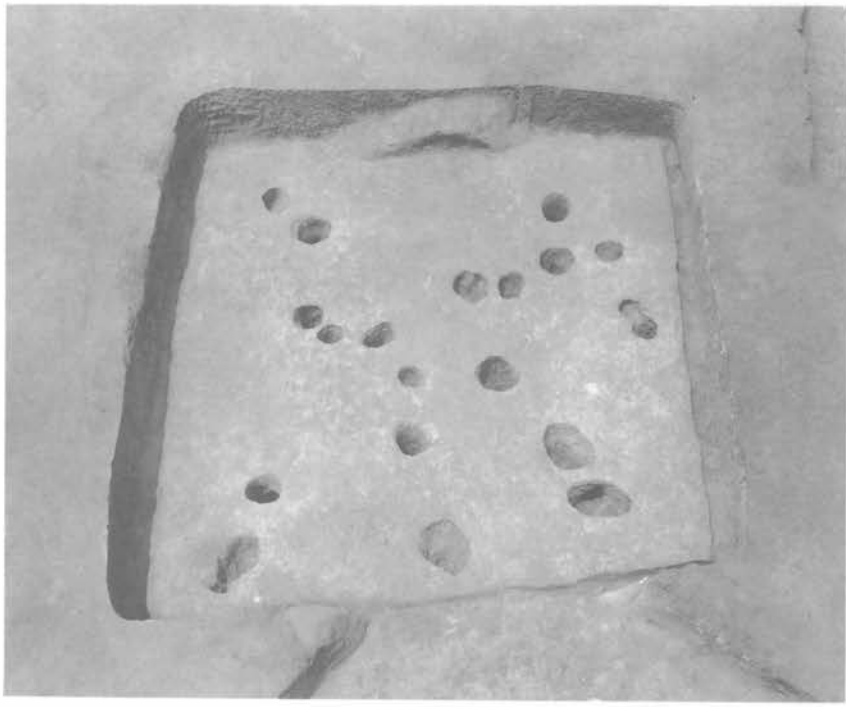
D050,24(⅓)

D051,4(⅓)







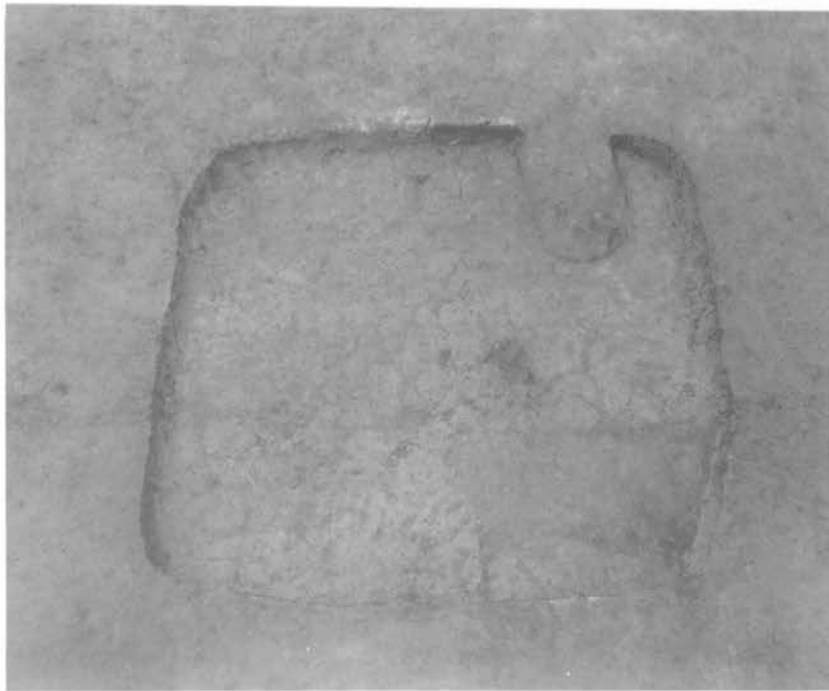


1．D003号遺構全景

2．D003号遺構カマド
検出状況

1．D004号遺構全景

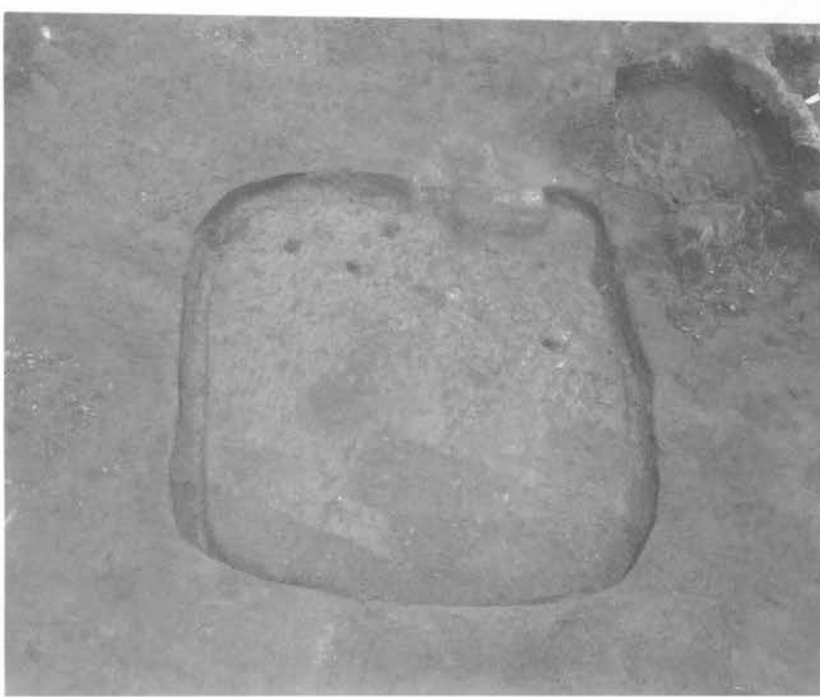
2．D004号遺構カマド
検出状況



3．D007号遺構全景

1．D008号遺構全景

2．D008号遺構カマド
検出状況



3．D035号遺構全景

1．D038号遺構全景

2．D038号遺構カマド
検出状況

3．D142号遺構全景

1．D149号遺構全景

2．D149号遺構カマド
検出状況

3．D149号遺構カマド
掘りかた

D038,1(¼)

D003,5(½)

D142,1(½)

D149,3(½)

D007,2(½)

D007,3(½)

D007,4(½)

D149,18(½)

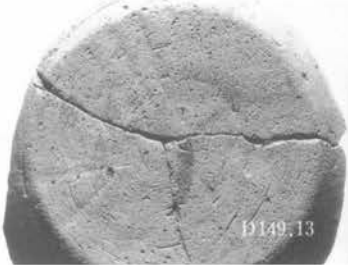
D142,4(⅔)

D007,5(⅔)

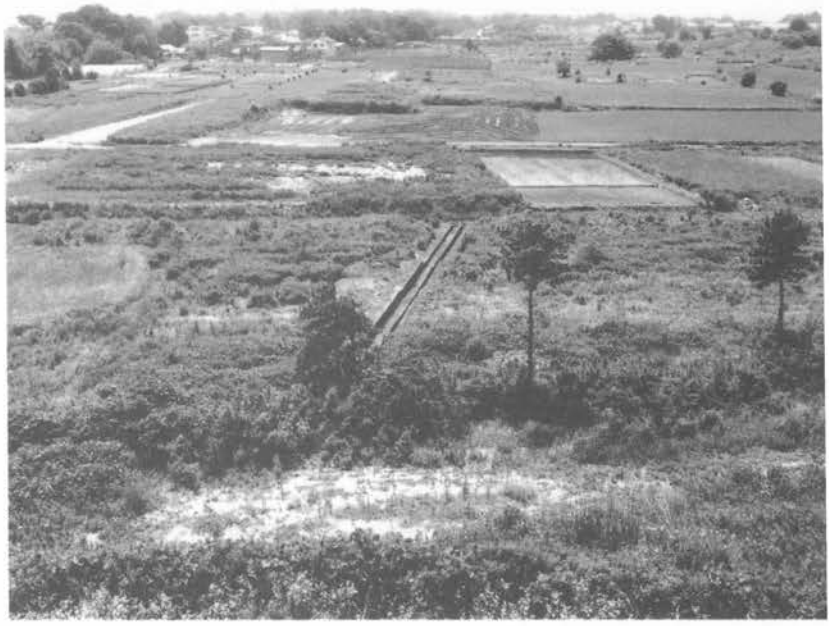
D142,3(½)

D142,1

D149,14



D149,13



1．水田部調査状況
（北より）

2．水田部土層断面

3．水田部遺物出土状況